



しょうほっけだいもくしょう
唱法華題目抄

ぶんおう
文応元年五月 三十九

歳御作

かまくらなこえ
於鎌倉名越

あ 有る人 予に問うて云く世間の道俗させる法華經の文義を并へ

ずとも一部一卷・四要品自我偈一句等を受持し・或は自らもよみ

かき若しは人をしてもよみかかせ・或は我とよみかかざれども經

に向い奉り合掌礼拝をなし香華を供養し・或は上の如く行ず

る事なき人も他の行ずるを見てわづかに随喜の心を・をこし

くにじゅう 國中に此の經の弘まれる事を悦ばん、是体の僅かの事によりて

せけん 世間の罪にも引かれず彼の功德に引かれて小乗の初果の聖人

たびたびにんてん の度度人天に生れて而も惡道に墮ちざるがごとく常に人天の生

ついで 受け終に法華經を心得るものと成つて十方淨土にも往生し又

此の土に於ても即身成仏する事有るべきや委細に之を聞かん、
答えて云くさせる文義を弁えたる身にはあらざれども法華經・
涅槃經並に天台・妙樂の釈の心をもて推し量るにかりそめにも
法華經を信じて聊も謗を生ぜざらん人は余の惡にひかれて惡道
に墮つべしとはおぼえず、但し惡知識と申してわづかに權教を
知れる人・智者の由をして法華經を我等が機に叶い難き由を和げ
申さんを誠と思ひて法華經を隨喜せし心を打ち捨て余教へうつり
はてて一生さて法華經へ歸り入らざらん人は惡道に墮つべき事も
有りなん、仰せに付いて疑はしき事侍り実にてや侍るらん法華經
に説かれて候とて智者の語らせ給いしは昔三千塵点劫の当初・
大通智勝仏と申す仏います其の仏の凡夫にていましける時十六人
の王子をはします、彼の父の王仏にならせ給ひて一代聖教を

と
説き給いき十六人の王子も亦出家して其の仏の御弟子とならせ
たまひ
給いけり、大通智勝仏・法華經を説き畢らせ給いて定に入らせ
たまひ
給いしかば十六人の王子の沙弥其の前にしてかはるがはる法華經
を講じ給いけり、其の所説を聴聞せし人・幾千万といふ事をし
らず当座に悟をえし人は不退の位に入り、又法華經をおろか
こころう
に心得る結縁の衆もあり其の人人・当座中間に不退の位に入ら
さんぜんじんてんこう
ずして三千塵点劫をへたり、其の間又つぶさに六道・四生に輪廻
こんにち
し今日・釈迦如来の法華經を説き給うに不退の位に入る所謂・
しやりほつ
舍利弗・目連・迦葉・阿難等是なり猶猶信心薄き者は當時も覺ら
みらいむしゅこう
ずして未来無數劫を経べきか知らず我等も大通智勝仏の十六人の
けちえん
結縁の衆にも・あるらん此の結縁の衆をば天台・妙樂は名字
かんぎよう
觀行の位にかなひたる人なりと定め給へり名字觀行の位は

いちねんさんぜん 一念佛三千の義理を弁へ十法 成乗 の觀を擬し能義理を弁えたる

いちねんずいき 人なり一念隨喜・五十展轉と申すも天台・妙樂の釈のごときは

みなかんぎようごぼん 皆觀行五品の初隨喜の位と定め給へり博地の凡夫の事にはあら

しかわれら ず然るに我等は末代の一字・一句等の結縁の衆一分の義理をも知

あにむりよう らざらんは豈無量の世界の塵点劫を経ざらんや是れ偏えに

りじんげみ 理深解微の故に教は至つて深く機は實に浅きがいたす処なり只

みだ みようこう 弥陀の名号を唱えて順次生に西方極樂世界に往生し西方極樂

せかい 世界に永く不退の無生忍を得て阿弥陀如来・觀音・勢至等の

ほけきよう 法華經を説き給わん時間いて悟を得んには如かじ然るに弥陀の

ほんがん 本願は有智・無智・善人・惡人・持戒・破戒等をも扱はず只一念

とな りんじゆう 唱うれば臨終に必ず弥陀如来・本願の故に來迎し給ふ是を以て

ほけきよう 思うに此の土にして法華經の結縁を捨て浄土に往生せんと・を

もふは億千世界の慶点を經ずして疾法華經を悟るがためなり

法華經の根機にあたはざる人の此の穢土にて法華經にいとまをい

れて一向に念仏を申さざるは法華經の証は取り難く極樂の業は定

まらず中間になりて中中法華經をおろそかにする人にてやおは

しますらんと申し侍るは如何に、其の上只今承り候へば僅に

法華經の結縁計ならば三惡道に墮ちざる計にてこそ候へ六道の

生死を出るにはあらず、念仏の法門はなにと義理を知らざれども

弥陀の名号を唱え奉れば淨土に往生する由を申すは遙かに

法華經よりも弥陀の名号はいみじくこそ聞え侍れ、答えて云く

誠に仰せめでたき上智者の御物語にも侍るなればさこそと存じ

候へども但し若し御物語のごとく侍らばすこし不審なる事侍り、

大通結縁の者をあらあらうちあてがい申すには名字觀行の者と

は釈しゃくせられて侍はべれども正まさしく名字みょうじ即そくの位の者と定められ侍はべる上うへたいだいしゅしょう

退大取小の者として法華經ほけきょうをすてて權教ごんきょうにうつり後あとには惡道あくどうに

墮おちたりと見えたる上まさ正まさしく法華經ほけきょうを誹謗ひぼうして之これを捨てし者ものな

り、設たとえ義理ぎりを知るようなる者なりとも謗法ぼうぼうの人にあらん上うへは

三千塵点無量塵点も經ふべく侍はべるか、五十展轉ごじゅうてんでん一念隨喜いちねんずいきの人人ひとびとを

觀行初隨喜くわんぎょうしゅずいきの位の者と釈しゃくせられたるは末代まつだいの我等われらが隨喜ずいき等は彼

の隨喜ずいきの中には入べる可べからずと仰おおせ候そうろうか、是これを天台てんだい・妙樂みょうらく・

初隨喜しゅずいきの位ゐと釈しゃくせられたりと申もうさるるほどにては又名字みょうじ即そくと釈しゃくせ

られて侍はべる釈しゃくはすてらるべきか、所詮しよせん仰おおせの御義おんぎを委くわく案あんずれば

をそれにては候そうらへども謗法ぼうぼうの一分いちぶんにやあらんずらん其そのの故ゆゑは

法華經ほけきょうを我等われら末代まつだいの機かなに叶がた難よしき由よしを仰おおせ候そうらは末代まつだいの一切衆生いっさいしゅじょう

は穢土えどにして法華經ほけきょうを行ほじて詮無せんなきことき事ことなりと仰おおせらるるにや、

若し^もしさやうに侍らば^{はべ}末代^{まつだい}の一切衆生^{いっさいしゅじょう}の中に此^この御詞^{ごことば}を聞きて
既に^{すで}法華經^{ほけきょう}を信ずる者も打ち捨て^い未だ^{いま}行ぜざる者も行ぜんと
思ふべからず^{ずいき}隨喜^{ほうぼう}の心も留め侍らば^{はべ}謗法^{ほうぼう}の分にやあるべかるらん、
若し^も謗法^{ほうぼう}の者に一切衆生^{いっさいしゅじょう}なるならば・いかに念仏^{ねんぶつ}を申させ給う^{もうたま}
とも御往生^{おうじょう}は不定^{ふじょう}にこそ侍らんずらめ又^{また}弥陀^{みだ}の名号^{みょうごう}を唱へ極樂^{ごくらく}
世界^{せかい}に往生^{おうじょう}をとぐべきよしを仰せられ侍るは何^{いか}なる經論^{きょうろん}を証拠^{しょうこ}
として此^この心はつき給いけるやらん正^{ただし}くつよき証文^{しょうもん}侯^{そうろう}か若しな
くば其^その義^ぎたのもしからず、前に申し候^{もう}いつるがごとく法華經^{ほけきょう}を
信じ侍る^{はべ}はさせる解^げなけれども三惡道^{さんあくどう}には墮^だすべからず侯^{ろう}六道^{ろくどう}を
出る事^{いちぶん}は一分のさとりなからん人は有り難^{かた}く侍るか、但し^{ただ}惡知識^{あくちしき}
に値^あつて法華經^{ほけきょう}隨喜^{ずいき}の心を云^いいやぶられて侯^{そうら}はんは力及^{およ}ばざるか
又^{おほ}仰^{おほ}せに付いて驚^{おどろ}き覺^{おほ}え侍り其^{その}の故^{ゆえ}は法華經^{ほけきょう}は末代^{まつだい}の凡夫^{ぼんぷ}の機

に叶い難き由を智者申されしかばさかと思ひ侍る処に只今の
仰せの如くならば弥陀の名号を唱うとも法華經をいゐうとむる
とがによりて往生をも遂げざる上惡道に墮つべきよし承るは
ゆゆしき大事にこそ侍れ、抑大通結縁の者は謗法の故に六道に
回るも又名字即の淺位の者なり又一念隨喜五十展轉の者も又名字
觀行即の位と申す釈は何の処に候やらん委く承り候はばや、又
義理をも知らざる者僅かに法華經を信じ侍るが惡智識の教によて
法華經を捨て權教に移るより外の世間の惡業に引かれては惡道
に墮つべからざる由申さるるは証拠あるか、又無智の者の念仏
申して往生するとかに見えてあるやらんと申し給うこそよに事
あたらしく侍れ、雙觀經等の淨土の三部經・善導和尚等の
經釈に明かに見えて侍らん上はなにとか疑い給うべき、答えて

いわ だいとうけちえん
曰く大通結縁の者を退大取小の謗法・名字即の者と申すは私の
義にあらず天台大師の文句第三の巻に云く「法を聞いて未だ度せ
ず而して世世に相い値うて今に声聞地に住する者有り即ち彼の
時の結縁の衆なり」と釈し給いて侍るを、妙楽大師の疏記第三
に重ねて此の釈の心を述べ給いて云く「但全く未だ品に入らず、
俱に結縁と名づくるが故に」文・文の心は大通結縁の者は名字即の
者となり、又天台大師の玄義の第六に大通結縁の者を釈して云く
「若しは信若しは謗因つて倒れ因つて起く喜根を謗ずと雖も後
要らず度を得るが如し」文・文の心は大通結縁の者の三千塵点を
経るは謗法の者なり例せば勝意比丘が喜根菩薩を謗ぜしが如しと
釈す五十展転の人は五品の初めの初随喜の位と申す釈もあり、又
初随喜の位の先の名字即と申す釈もあり疏記第十に云く「初めに

法会にして聞く是れ初品なるべし第五十人は必ず随喜の位の初めに在る人なり」文・文の心は初会聞法の人は必ず初随喜の位の内第五十人は初随喜の位の先の名字即と申す釈なり。

其の上五種法師にも受持・読・誦・書写の四人は自行の人・

大經の九人の先の四人は解無き者なり解説は化他後の五人は解

有る人と証し給へり、疏記第十に五種法師を釈するには「・或は

全く未だ品に入らず」又云く「一向未だ凡位に入らず」文・文の

心は五種法師は觀行五品と釈すれども又五品已前の名字即の位

とも釈するなり、此等の釈の如くんば義理を知らざる名字即の

凡夫が随喜等の功德も經文の一偈・一句・一念随喜の者

五十展転等の内に入るかと覚え候、何に況や此の經を信ぜざる

謗法の者の罪業は譬喩品に委くとかれたり持經者を謗する罪は

法師品ほうしほんにとかれたり、此の経を信ずる者の功德くどくは分別功德品ぶんべつくどく隨喜ずいき功德品くどくに説くどくけり謗法ほうぼうと申すは違背いはいの義ぎなり隨喜ずいきと申すは隨順ずいじゆんの義ぎなりさせる義理ぎりを知らざれども一念いちねんも貴とうとき由申すは違背隨順いはいずいじゆんの中うちには何れいすれにか取られ候べき、又末代無智まつだいむちの者のわづかの供養くよう隨喜ずいきの功德くどくは經文きやうもんには載せられざるか如何いかん、其の上天台そてんだい・妙樂みやうらくの釈しゃくの心は他の人師にんしありて法華經ほけきやうの乃至童子戲ないしどうしげ・一偈いちげ・一句いっく五十展轉ごじゆうてんでんの者を爾前にぜんの諸經しよきやうのごとく上聖じやうしやうの行儀ぎやうぎと釈しゃくせられたるをば謗法ほうぼうの者と定め給へり、然るに我が釈しゃくを作る時機ときを高く取りて末代造惡まつだいぞうあくの凡夫ほんぶを迷まよはし給わんは自語相違じごそういにあらずや故ゆえに妙樂大師五十展轉みやうらくだいしごじゆうてんでんの人を釈しゃくして云く「恐らくは人謬あやまりて解げせる者初心しよしんの功德くどくの大なる事を測はからず而して功こうを上位うゑに推り此の初心しよしんを蔑あなどる故に今彼の行浅く功深き事を示して以て經力きやうりきを顯あらわす」文

・文の心は謬あやまつて法華經を説かん人の此の經は利智精進りちしやうじん・上根じやうちん

・上智の人のためといはん事を仏をそれて下根げこん・下智げち・末代まつだいの

無智むちの者のわづかに浅き随喜ずいきの功德くどくを四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきやうの大人だいにん

上聖じやうしやうの功德くどくに勝すぐれたる事を顕あらわさんとして五十展転ごじゅうてんでんの随喜ずいきは説

かれたり、故ゆえに天台てんだいの釈げどうには外道しやうじやう・小乘ごんだいじやう・權大乘くわんだいじやうまでたくら

べ来て法華經ほけきやうの最下さいかの功德くどくが勝すぐれたる由よしを釈しゃくせり、所以ゆえに阿竭多あがた

仙人せんじんは十二年ごうがが間恒河とどの水を耳ぎとに留せんじんめ耆毘仙人きびせんじんは一日いちにちの中に大海たいかい

の水をすいほす此かくの如ごとき得通とくずうの仙人せんじんは小乘しやうじやう・阿含經あこんきやうの三賢さんけんの

浅位せんいの一通いっとうもなき凡夫ぼんぷには百千万倍ひやくせんまんばいおと劣さみれり、三明六通さんみりくつうを得たり

し小乘しやうじやうの舍利弗しゃりほつ・目連等もくれんは華嚴けこん・方等ほうとう・般若等はんによの諸大乗經しよだいじやうきやうの

未断三惑みだんさんかくの一通いっとうもなき一偈いちげ・一句いっくの凡夫ぼんぷには百千万倍ひやくせんまんばいおと劣さみれり

華嚴けこん・方等ほうとう・般若經はんによを習ならい極とうかくめたる等覺とうかくの大菩薩ほさつは法華經ほけきやうを

僅か^{けちえん}に結縁^{むす}をなせる未断^{みだん}三惑^{さんかく}・無惡^{むあく}不造^{ふぞう}の末代^{まつだい}の凡夫^{ほんぶ}には
ひやくせんまんばいおと
百千万倍^{ひやくせんまんばい}劣れる由釈^{しやく}の文顯^{けん}然也^{なんなり}、而^{しか}るを当世^{とうせ}の念仏^{ねんぶつ}宗等^{しゅうとう}の人・
我が身^{こんきよう}の權教^{ごんきよう}の機^きにて実經^{じつきよう}を信ぜざる者は方等^{ほうとう}・般若^{はんにや}の時の
にじよう
二乗^{にじよう}のごとく自身^{こしん}をはぢしめてあるべき処^{ところ}に敢^あえて其^その義^ぎなし、
あまつさへ世間^{せけん}の道俗^{どうそく}の中に僅か^{わず}に觀音^{かんのん}品^{ひん}自我^{じが}憫^げなんどを読み
またまふ
適^{たまたま}父母^{ふぼ}孝養^{こうよう}なんどのために一日^{いちにち}經等^{きんとう}を書く事^{こと}あればいゝさま
た^{いわ}げて云^いく善導^{ぜんどう}和尚^{わじよう}は念仏^{ねんぶつ}に法華^{ほけき}經^{きよう}をまじうるを雜行^{そうぎよう}と申し百
の時は希^{まれ}に一二^{にふた}を得千^{とくせん}の時は希^{まれ}に三五^{さんご}を得ん乃^{ない}至千中^{せんちゆう}無^む一^{いつ}と仰^{おお}せ
られたり、何^{いか}に況^{いわ}んや智慧^{ちえ}第一^{だいいち}の法然^{ほうねん}上人^{しょうにん}は法華^{ほけき}經^{きよう}等^{とう}を行^{おこな}ずる者^{もの}
をば祖父^{そふ}の履^{くつ}・或^{ある}は群賊^{ぐんそく}等^{とう}にたとへられたりなんどいゝうとめ
侍^{はべ}るは是^{かく}くの如^{ごと}く申^{もう}す師^{でし}も弟子^{あび}も阿鼻^{ほのお}の焰^{えん}をや招^{まね}かんずらんと
申^{もう}す。

問うて云く何なるすがた並に語を以てか法華經を世間にい

うとむる者には侍るやよにおそろしくこそおぼえ候へ、答えて

云く始めに智者の申され候と御物語候いつるこそ法華經をい

うとむる悪知識の語にて侍れ、末代に法華經を失うべき者は心

には一代聖教を知りたりと思いて而も心には権実二經を弁へず

身には三衣一鉢を帶し・或は阿練若に身をかくし・或は世間の人

にいみじき智者と思はれて而も法華經をよくよく知る由を人に知

られなんとして世間の道俗には三明六通の阿羅漢の如く貴ばれ

て法華經を失うべしと見えて候。

問うて云く其の証拠如何、答えて云く法華經勸持品に云く

「諸の無智の人悪口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆

當に忍ぶべし」文・妙樂大師・此の文の心を釈して云く「初め

の一行は通じて邪人を明す、即ち俗衆なり」文・文の心は此の一行は在家の俗男・俗女が権教の比丘等にかたらはれて敵をすべしとなり、經に云く「惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為得たりと謂い我慢の心充滿せん」文妙樂大師・此の文の心を釈して云く「次の一行は道門増上慢の者を明す」文・文の心は惡世末法の権教の諸の比丘我れ法を得たりと慢じて法華經を行ずるものの敵となるべしといふ事なり、經に云く「・或は阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣のためとに法を説き世に恭敬せらるる事六通の羅漢の如くならん是の人惡心を懷き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮りて好んで我等が過を出さん而も是くの如き言を作さん此の諸の比丘等は利養を

貪るむさぼを為もつての故ゆえに外道げどうの論義ろんぎを説とき自ら此みづかの經典きやうてんを作りて
世間せけんの人を誑惑おおわくす名聞みやうもんを求むるを為もつての故ゆえに分別ぶんべつして是この經
を説くと、常に大衆たいしゆうの中に在りて我等われらを毀そしらんと欲ほするが故ゆえに
國王こくおう・大臣だいじん・婆羅門ばらもん・居士こじおよ及び余あまの比丘衆びくに向つて誹謗ひぼうして我が
惡を説いて是れ邪見じやくけんの人外道げどうの論議を説くと謂いわん」已上みやうらく妙樂
大師だいし・此の文を釈しゃくして云く「三に七行は僭聖せんしやう増上慢ぞうじやうまんの者を明す」
文・經並しやくに釈あくせの心は惡世あくせの中に多くの比丘びく有つて身には三衣さんね一鉢いちぼつを
帶たいし阿練若あれんにやに居こして行儀ぎやうぎは大迦葉等かしやうの三明さんみ六通りくつうの羅漢らかんのごとく
在家ざいけの諸人しよにんにあふがれて一言を吐はけば如來にやらいの金言ごんごうのごとくをもは
れて法華經ほけきやうを行ずる人をいゝるやぶらんがために國王こくおう・大臣だいじん等に向
ひ奉たてまつて此の人じやくけんは邪見じやくけんの者なり法門ほうもんは邪法じやほうなりなんといゝうとむ
るなり。

かみ
上の三人の中に第一の俗衆の毀よりも第二の邪智の比丘の

そしり
なほ

毀は猶しのびがたし又第二の比丘よりも第三の大衣の阿練若の

はなはだ

僧は甚し、此の三人は当世の権教を手本とする文字の法師並

しよきよう

に諸経論の言語道断の文を信ずる暗禪の法師並に彼等を信ずる

ざいぞく

よんじゅうよねん

しよきよう

ほけきよう

こんじつ

もんぎ

わきまえ

ゆえ

在俗等四十余年の諸経と法華経との権実の文義を并へざる故に、

けこん

ほうとう

はんによ

しゅじよう

そくしんぜぶつ

そくおうじゅつぼう

ほうとう

華嚴・方等・般若等の心仏衆生・即心是仏・即往十方西方等の

ほけきよう

しよほうじつそうそくおうじゅつぼうさいほう

ことば

もつ

文と法華経の諸法実相即往十方西方の文と語の同じきを以て

ぎり

ある

しよきよう

こんごうだん

しんぎようしよめつ

義理のかはれるを知らず・或は諸経の言語道断・心行所滅の文

いちだいしよきよう

にょらい

じつじ

のべ

の

を見て一代聖教には如来の实事をば宣べられざりけりなんどの

ゆえ

あつき

まっだい

しよにん

こくど

邪念をおこす、故に悪鬼此の三人に入つて末代の諸人を損じ国土

やぶ

ゆえ

きようもん

じよつこうあくせ

もろもろくふ

ふ

をも破るなり故に経文に云く「濁劫悪世の中には多く諸の恐怖

あつきそ

めり

きにく

ないし

ほうべんずいぎ

有らん悪鬼其の身に入つて我を罵詈し毀辱せん乃至仏の方便随宜

所説しよせつの法を知らず」文文の心は濁惡世の時比丘我が信ずる所の教
は仏ほうの方便べんづいぎ隨宜ほうもんの法門ほうもんともしらずして權實ごんじつを并なへたる人出来しゅつたいす
れば詈のり破はしなんどすべし、是偏ひとえに惡鬼あくきの身に入りたるをしらず
と云うなり、されば末代まつだいの愚人ぐにんの恐るべき事は刀杖とうじょう・虎狼こうろう・
十惡じゅうあく・五逆ごぎやく等よりも三衣さんねい一鉢いちぱつを帶せる暗禪あんぜんの比丘びくと並に權經ごんきやうの
比丘びくを貴とおとしと見て實經じつきやうの人をにくまん俗侶そくりよ等なり。

故ゆえに涅槃經ねはんきやう二十二にに云く「惡象あくぞう等に於おいては心に恐怖くふする事無ことなか
れ惡知識あくちしきに於おいては怖畏ふいの心を生ぜよ何を以もつての故ゆえに是惡象あくぞう等は唯ただ
能よく身を壞やぶりて心を破やぶること能あたわず惡知識あくちしきは二俱つたつともに壞やぶるが故ゆえに
乃至ないし惡象あくぞうの為ために殺ころされては三趣さんしゅに至いたらず惡友あくゆうの為ために殺ころされては必
ず三趣さんしゅに至いたらん」文 此文このもんの心を章しょう安大師宣あんだいのべべて云く「諸もろの惡象あくちしき
等は但是これ惡緣あくえんにして人に惡心あくしんを生ぜしむる事能あたわず惡知識あくちしきは甘かん

談詐媚巧さんさ びこう げんれいしよく 言令色げんれいしよく もて人を牽ひいて惡を作なさしむ惡を作なすを以もつての
故ゆえに人の善心ぜんしんを破やぶる之これを名づけて殺なと為すす即ち地獄すなわ じごくに墮だす」文、
文の心は惡知識あくちしきと申もうすは甘くかたらひ詐り媚び言を巧たくみにして愚癡ぐち
の人の心を取ぜんしんつて善心やぶを破るといふ事なり、総じて涅槃經ねはんぎようの心は
十惡・五逆じゅうあく ごぎやくの者ほうほうよりも謗法闡提せんたいのものをおそるべしと誡いましめたり
闡提せんたいの人と申もうすは法華經・涅槃經ねはんぎようを云いうとむる者と見えたり、
当世とうせの念佛者等ねんぶつ・法華經ほけきようを知り極きわめたる由よしをいふに因緣譬喻いんねん ひゆをも
て釈しゃくしよくよく知る由よしを人にしられて然しかして後には此の經のいみ
じき故ゆえに末代まつだいの機きのおろかなる者おほ及およばざる由よしをのべ強つよき弓重き
鎧よろいかひなき人の用にたたざる由よしを申せば無智むちの道俗どうぞくさもと思おもい
て実には叶こうまじき權教ごんきように心こころを移うつして僅わずかに法華經ほけきように結縁けちえんしぬ
るをも翻ひるがえし又人の法華經ほけきようを行おこなずるをも隨喜ずいきせざる故ゆえに師弟俱していとも

ほうぼう
謗法の者となる。

こ
之れに依つて謗法の衆生・国中に充滿して適仏事をいと

ほけきよう
なみ法華經を供養し追善を修するにも念仏等を行ずる謗法の邪師

ほけきよう
の僧来て法華經は末代の機に叶い難き由を示す、故に施主も其の

とわ
説を實と信じてある間訪るる過去の父母夫婦兄弟等は弥地獄

こうし
の苦を増し孝子は不孝謗法の者となり聴聞の諸人は邪法を隨喜

あくま
し悪魔の眷属となる、

しよにん
日本国中の諸人は仏法を行ずるに似て仏法を行ぜず適・仏法を

ちしや
知る智者は国の人に捨てられ守護の善神は法味をなめざる故に

うしなひりしやう
威光を失ひ利生を止此の国をすて他方に去り給い、悪鬼は便り

くにじゅう
を得て国中に入り替り大地を動かし悪風を興し一天を悩し五穀

けかちしゅつたい
を損ず故に飢渴出来し人の五根には鬼神入つて精氣を奪ふ是を

えきびょう

なず

いっさい

しよにんぜんしんなく

たぶん

あくどう

お

疫病と名く一切の諸人善心無く多分は悪道に墮つることひとへ

あくちしき

に悪知識の教を信ずる故なり、

仁王經に云く

「諸の悪比丘多く

名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国

みょうり

こくおう

おうじ

おい

みずか

はぶつぼう

いんねん

はくに

の因縁を説かん其の王別えずして此の語を信聴し横に法制を作

いんねん

そ

わきま

はぶつ

はくに

いんねん

な

文、文の心は

りて仏戒に依らず是れを破仏・破国の因縁と為す」

文、文の心は

ぶつかい

よ

こ

はぶつ

はくに

いんねん

な

文、文の心は

りて仏戒に依らず是れを破仏・破国の因縁と為す」

文、文の心は

まつぼう

もろもろあくびくこくおう

だいじん

おんまえ

にして國を安穩ならしむる様

にして終に國を損じ仏法を弘むる様にして還つて仏法を失うべ

し、國王・大臣此の由を深く知し食さずして此の言を信受する

故に國を破り仏教を失うと云う文なり。此の時・日月度を失ひ時

節もたがひて夏はさむく冬はあたたかに秋は悪風吹き赤き日月

出で望朔にあらずして日月蝕し・或は二つ三つ等の日出来せん

たいか・たいふう

すいせい

ききん

えきびょう

等あらんと見えたり、國を

えきびょう

なず

いっさい

しよにんぜんしんなく

たぶん

あくどう

お

疫病と名く一切の諸人善心無く多分は悪道に墮つることひとへ

に悪知識の教を信ずる故なり、

仁王經に云く「諸の悪比丘多く

えきびょう

なず

いっさい

しよにんぜんしんなく

たぶん

あくどう

お

疫病と名く一切の諸人善心無く多分は悪道に墮つることひとへ

に悪知識の教を信ずる故なり、

仁王經に云く「諸の悪比丘多く

えきびょう

なず

いっさい

しよにんぜんしんなく

たぶん

あくどう

お

疫病と名く一切の諸人善心無く多分は悪道に墮つることひとへ

に悪知識の教を信ずる故なり、

仁王經に云く「諸の悪比丘多く

えきびょう

なず

いっさい

しよにんぜんしんなく

たぶん

あくどう

お

疫病と名く一切の諸人善心無く多分は悪道に墮つることひとへ

に悪知識の教を信ずる故なり、

仁王經に云く「諸の悪比丘多く

えきびょう

なず

いっさい

しよにんぜんしんなく

たぶん

あくどう

お

疫病と名く一切の諸人善心無く多分は悪道に墮つることひとへ

に悪知識の教を信ずる故なり、

仁王經に云く「諸の悪比丘多く

えきびょう

なず

いっさい

しよにんぜんしんなく

たぶん

あくどう

お

疫病と名く一切の諸人善心無く多分は悪道に墮つることひとへ

に悪知識の教を信ずる故なり、

仁王經に云く「諸の悪比丘多く

損じ人を悪道にをとす者は悪知識に過ぎたる事なきか。

問うて云く始めに智者の御物語とて申しつるは所詮後世の事

の疑わしき故に善悪を申して承らんとためなり、彼の義等は恐る

しき事にあるにこそ侍るなれ一文不通の我等が如くなる者はいか

にしてか法華經に信をとり候べき又心ねをば何様に思い定め侍ら

ん、答えて云く此の身の申す事をも一定とおぼしめさるまじきに

や其の故はかやうに申すも天魔・波旬・惡鬼等の身に入つて人の

善き法門を破りやすらんとおぼしめされ候はん一切は賢きが

智者にて侍るにや。

問うて云く若しかやうに疑い候はば我身は愚者にて侍り万の

智者の御語をば疑いさて信ずる方も無くして空く一期過し侍る

べきにや、答えて云く仏の遺言に依法不依人と説かせ給いて候へ

ば經の如くに説かざるをば何にいみじき人なりとも御信用あるべ

からず候か、又依了義經不依了義經と説かれて候へば愚癡の

身にして一代聖教の前後淺深を弁えざらん程は了義經に付か

せ給い候へ、了義經不了義經も多く候阿含・小乗經は

不了義經・華嚴・方等・般若・浄土の觀經等は了義經、又

四十余年の諸經を法華經に對すれば不了義經・法華經は

了義經、涅槃經を法華經に對すれば法華經は了義經・涅槃經は

不了義經、大日經を法華經に對すれば大日經は不了義經法華經

は了義經なり、故に四十余年の諸經並に涅槃經を打ち捨てさせ

給いて法華經を師匠と御憑み候へ法華經をば國王・父母・日月・

大海・須弥山・天地の如くおぼしめせ、諸經をば閼白・大臣・

公卿乃至万民・衆星・江河・諸山・草木等の如くおぼしめすべ

し、我等が身は末代造悪の愚者・鈍者・非法器の者、国王は臣下

よりも人をたすくる人父母は他人よりも子をあはれむ者日月は

衆星より暗を照らす者・法華経は機に叶わずんば況や余経は助

け難しとおぼしめせ、又釈迦如来と阿弥陀如来・薬師如来・多宝

仏・観音・勢至・普賢・文殊等の一切の諸仏・菩薩は我等が慈悲

の父母・此の仏菩薩の衆生を教化する慈悲の極理は唯法華経に

のみとどまれりとおぼしめせ、諸経は悪人・愚者・鈍者・女人

・根欠等の者を救ふ秘術をば未だ説き顕わさずとおぼしめせ

法華経の一切経に勝れ候故は但此の事に侍り、而るを当世の

学者・法華経をば一切経に勝れたりと讃めて、而も末代の機に

叶わずと申すを皆信ずる事豈謗法の人に侍らずや、只一口におぼ

しめし切らせ給い候へ所詮法華経の文字を破りさきなんとせんに

は法華經ほけきようの心やぶるべからず、又世間の惡業せけんあくごうに對して云いいうとむ
るとも人人用ひとびともちゆべからず只相似ただあいにたる權經ごんきようの義理ぎりを以もつて云いいうと
むるにこそ人はたばらかさるれとおぼしめすべし。

問いうて云わく・或智者あるちしやの申もうされ候こうしは四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきようと八箇年はちかねん
の法華經ほけきようとは成仏じようぶつの方こそ爾前にぜんは難行道なんぎようどう・法華經ほけきようは易行道いぎようどうにて
候こうへ、往生おうじようの方にては同事どうじにして易行道いぎようどうに侍はべり法華經ほけきようを書き讀よみ
みても十方じゅうぽうの淨土阿彌陀佛じようどあみだぶつの国へも生るべし觀經かんきよう等の諸經しよきようの
付みいて彌陀みだの名号みようごうを唱となえん人も往生おうじようを遂おぐべし只機縁ただきえんの有無うむに
随したがつて何をも諍あらそふべからず、但ただし彌陀みだの名号みようごうは人ごとに行いじ
易やすしと思おもいて日本国中にほんこくじゅうに行いじつけたる事なれば法華經ほけきよう等の余行よぎようよ
りも易やすきにこそと申もうされしは如何いかん、答こたえて云いく仰おほせの法門ほうもんはさも
侍はべるらん又世間せけんの人も多くは道理どうりと思おもいたりげに侍はべり但ただし身には

此の義に不審あり、其の故は前に申せしが如く末代の凡夫は智者

と云うともたのみなし世こぞりて上代の智者には及ぶべからざる

が故に愚者と申すともいやしむべからず經論の証文顯然ならん

には抑無量義經は法華經を説くが為の序分なり、然るに始め

寂滅道場より今の常在靈山の無量義經に至るまで其の

年月日数を委く計へ挙げれば四十余年なり、其の間の所説の經を

挙るに華嚴・阿含・方等・般若なり所談の法門は三乘・五乘・

所習の法門な

り修行の時節を定むるには宣説菩薩歷劫修行と云ひ隨自意・

隨他意を分つには是を隨他意と宣べ四十余年の諸經と八箇年の

所説との語同じく義替れる事を定めるには文辞一と雖ど

義各異るととけり成仏の方は別にして往生の方は一つなるべ

しともおぼえず華嚴・方等・般若・究竟最上の大乘經・頓悟

・漸悟の法門・皆未顯真實と説かれたり此の大部の諸經すら

未顯真實なり何に況や浄土の三部經等の往生極樂ばかり未顯

真實の内にもれんや其の上・經經ばかりを出すのみにあらず

既に年月日数を出すをや、然れば華嚴・方等・般若等の弥陀

往生已に未顯真實なる事疑い無し、觀經の弥陀往生に限つて

豈多留難故の内に入らざらんや、若し隨自意の法華經の往生

極樂を隨他意の觀經の往生極樂に同じて易行道と定めて而も

易行の中に取つても猶觀經の念仏往生は易行なりと之を立てら

れば樞實雜亂の失大謗法たる上一滴の水漸漸に流れて大海となり

一塵積つて須弥山となるが如く漸く權經の人も實經にすすまず

實經の人も權經におち權經の人・次第に國中に充滿せば

ほけきようずいき とどま くにじゅう

ごと たましい うしな

法華經隨喜の心も留り國中に王なきが如く人の神を失えるが
ごと ほつけ しんごん もろもろ しよてん ぜんじん りゅうじん いっさい
如く法華・真言の諸の山寺荒れて諸天善神・竜神等・一切の
しょうにん あつきたより みだ あくふう ごこく

聖人国を捨てて去らば悪鬼便りを得て乱れ入り悪風吹いて五穀
みの えきびよりゅうこう じんみん ほろほ あくふう ごこく

も成らしめず疫病流行して人民をや亡さんずらん、此の七八年
おうじょう ぜんどう わじょう せんちゅうむいつ

が前までは諸行は永く往生すべからず善導和尚の千中無一と定
しよぎよう せんちやく ながう ぐんそく

めさせ給いたる上選択には諸行を抛てよ行ずる者は群賊と見え
たまひ せんちやく せんちやく しゅう

たりなんど放語を申し立てしが、又此の四五年の後は選択集の
ほうご もう しんちやく しゅう

如く人を勧めん者は謗法の罪によって師檀共に無間地獄に墮つべ
ごと すす ほうぼう しだん むげん じごく お

しと経に見えたりと申す法門出来したりげに有りしを、始めは
もう ほうもん しゅったい

念仏者こそりて不思議の思いをなす上念仏を申す者無間地獄に
ねんぶつ ふしぎ ねんぶつ もう むげん じごく

墮つべしと申す悪人外道ありなんどののしり候しが念仏者・無間
お もう あくにんげどう ねんぶつ むげん

地獄に墮つべしと申す語に智慧つきて各選択集を委く披見する
じごく お もう ちえ せんちやく しゅう くわし ひけん

程にげにも謗法の書とや見なしけん千中無一の悪義を留めて

諸行往生の由を念仏者毎に之を立つ、然りと雖も唯口にのみゆ

るして心の中は猶本の千中無一の思いなり在家の愚人は内心の

謗法なるをばしらずして諸行往生の口にばかされて念仏者は

法華經をば謗ぜざりけるを法華經を謗ずる由を聖道門の人の

申されしは僻事なりと思へるにや、一向諸行は千中無一と申す

人よりも謗法の心はまさりて候なり失なき由を人に知らせ而も

念仏計りを亦弘めんとたばかりなり偏に天魔の計りごとなり。

問うて云く天台宗の中の人立つる事あり天台大師爾前と

法華と相對して爾前を嫌うに二義あり、一には約部四十余年の部

と法華經の部と相對して爾前は・なり法華は妙なりと之を立つ二

には約教・教に☆妙を立て華嚴・方等・般若等の円頓速疾の

ほうもん 法門をば妙と歎じ華嚴・方等・般若等の三乗歴別の修行の法門
ぜんさんきよう をば前三教と名づけて・なりと嫌へり円頓速疾の方をば嫌わず
ほけきよう 法華經に同じて一味の法門とせりと申すは如何、答えて云く此の
ふしん 事は不審にもする事侍るらん然る可しと・をばゆ天台・妙樂よ
いらい り已来今に論有る事に侍り天台の三大部六十卷総じて五大部の
しょうじよ 章疏の中にも約教の時は爾前の円を嫌ふ文無し、只約部の時は
にぜん かり爾前の円を押ふさねて嫌へり、日本に二義あり園城寺には智
だいし 証大師の釈より起つて爾前の円を嫌ふと云い山門には嫌はずと云
たがい う互に文釈あり俱に料簡あり然れども今に事ゆかず、但し予が
ふしん 流の義には不審晴れておぼえ候、其の故は天台大師四教を立て
たま 給うに四の筋目あり、一には爾前の經に四教を立つ二には法華經
にぜん と爾前と相對して爾前の円を法華の円に同じて前三教を嫌う事

あり、三には爾前の円をば別教に摂して前三教と嫌ひ法華の円をば純円と立つ四には爾前の円をば法華に同ずれども但法華經の二妙の中の相待妙に同じて絶待妙には同ぜず、此の四の道理を相對して六十卷をかんがうれば狐疑の氷解けたり一一の証文は且つは秘し且つは繁き故に之を載せず、又法華經の本門にしては爾前の円と迹門の円と・を嫌う事不審なき者なり、爾前の円をば別教に摂して約教の時は前三為☆後一為妙と云うなり此の時は爾前の円は無量義經の歴劫修行の内に入りぬ、又伝教大師の註釈の中に爾前の八教を挙げて四十余年・未顕真実の内に入れ・或は前三教をば迂回と立て爾前の円をば直道と云い無量義經をば大直道と云う委細に見る可し。

問うて云く法華經を信ぜん人は本尊並に行儀並に常の所行は

いか
何にてか候べき、答えて云く第一に本尊は法華經八卷・一卷・一

品・或は題目を書いて本尊と定む可しと法師品並に神力品に見え

たり、又たへたらん人は釈迦如来・多宝仏を書いても造つても

法華經の左右に之を立て奉るべし、又たへたらんは十方の諸仏

普賢菩薩等をもつくり

かきたてまつるべし、行儀は本尊の御前にして必ず坐立行なるべ

し道場を出でては行住坐臥をえらぶべからず、常の所行は題

目を南無妙法蓮華經と唱うべし、たへたらん人は一偈・一句を

も読み奉る可し助縁には南無釈迦牟尼仏・多宝仏・十方諸仏・

一切の諸菩薩・二乗・天人・竜神・八部等心に随うべし愚者多

き世となれば一念三千の觀を先とせず其の志あらん人は必ず

習学して之を觀ずべし。

十卷の心は一念三千・百界・千如・三千世間・心仏衆生・三無

差別と立て給う、一切の諸仏菩薩・十界の因果十方の草木・

瓦礫等・妙法の二字にあらざと云う事なし、華嚴・阿含等の

四十余年の経経・小乗経の題目には大乘経の功德を収め

ず又大乗経にも往生を説く経の題目には成仏の功德をおさめ

ず又王にては有れども王中の王にて無き経も有り仏も又経に

随つて他仏の功德をおさめず平等意趣をもつて他仏・自仏と・

をなじといひ・或は法身平等をもて自仏他仏同じといふ、実に

は一仏に一切仏の功德をおさめず今法華経は四十余年の諸経を

一經に収めて十方世界の三身円満の諸仏をあつめて釈迦一仏の

分身の諸仏と談ずる故に一仏・一切仏にして妙法の二字に諸仏

皆収まれり、故に妙法蓮華経の五字を唱うる功德莫大なり諸仏

・諸經しよきようの題目だいもくは法華經ほけきようの所開しよかいなり妙法みようほうは能開もうかいなりとしりて
法華經ほけきようの題目だいもくを唱となうべし。

問いうて云いく此この法門ほうもんを承うけたまわつて又智者ちしやに尋たずね申もうし候さえば法華經ほけきよう
のいみじき事は左右さうに及およばず候ただ但し器量きりようならん人は唯我ただが身計ばかり
は然しかる可べし、末代まつだいの凡夫ほんぶに向むかつてただちに機きをも知らず爾前にぜんの教
を云いいうとめ法華經ほけきようを行おこなぜよと申もうすはとしごろの念仏ねんぶつなどをば
打ち捨て又法華經ほけきようには未だ功いまも入れず有あにも無なにもつかぬように
てあらんずらん、又機きも知らず法華經ほけきようを説たまかせ給たまはば信しんずる者は
左右さうに及およばず若もし謗ぼうずる者あらば定じやうめて地獄じごくに墮おち候そうらはんずら
ん、其そのの上うへ仙せんも四十余年よんじゅうよねんの間・法華經ほけきようを説たまき給たまはざる事は
若も但ただ讚さん仙せん乘じやう・衆生しゆじやう没ぼつ在ざい苦くの故ゆゑなりと在ざい世せの機きすら猶なほ然しかなり
何いかに況いはんや末代まつだいの凡夫ほんぶをや、されば譬喻ひゆほん品ぽんには「仙しやう・舍利弗しやりほつに告つげ

て言わく無智の人の中に此の経を説くことなかれ」云云此等の
道理を申すは如何が候べき、答えて云く智者の御物語と仰せ
承り候へば所詮末代の凡夫には機をかがみて説け左右なく説いて
人に謗ぜさする事なかれとこそ候なれ、彼人さやうに申され候は
ば御返事候べきやうは抑若但讚仏乘・乃至無智人中等の文を
出し給はば又一経の内に凡有所見・我深敬汝等等と説いて不輕
菩薩の杖木瓦石をもつて・うちはられさせ給いしをば顧みさせ
給はざりしは如何と申させ給へ。

問うて云く一経の内に相違の候なる事こそよに得心がたく侍れ
ばくわしく承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此
の経を説くべしと見え不輕品には謗ずとも唯強いて之を説くべし
と見え侍り一経の前後水火の如し、然るを天台大師会して云く「本

すでに善有るは釈迦小を以て之を將護し本未だ善有らざるは不輕大
もつ ことをしょうこ
を以て之を強毒す」文・文の心は本と善根ありて今生の内に
とくげ ため ただち ほけきよう
得解すべき者の為には直に法華經を説くべし、然るに其の中に猶
聞いて謗すべき機あらば暫く權經をもてこしらえて後に法華經
しばら こんきよう
を説くべし、本と大の善根もなく今も法華經を信ずべからずなに
あくどう お
となくとも惡道に墮ちぬべき故に但押して法華經を説いて之を
ほけきよう
謗ぜしめて逆縁ともなせと会する文なり、此の釈の如きは末代
ぎやくえん
には善無き者は多く善有る者は少し故に惡道に墮ちんこと疑い無
ほけきよう と
し、同くは法華經を強いて説き聞かせて毒鼓の縁と成す可きか
ほけきよう
然らば法華經を説いて謗縁を結ぶべき時節なる事諍い無き者を
ほけきよう ほうえん
や、法華經の方便品に五千の上慢あり略開三頭一を聞いて
ほうべん じせつ
こうかいさんけんいつ りやくかいさんけんいつ
広開三頭一の時・仏の御力をもて座をたたしめ給ふ後に涅槃經
おんちから たま ねはんきよう

並に四依の辺にして今生に悟を得せしめ給うと、諸法無行經に
喜根菩薩・勝意比丘に向つて大乘の法門を強いて説ききかせて
謗ぜさせしと、此の二の相違をば天台大師会して云く「如来は悲
を以ての故に發遣し喜根は慈を以ての故に強説す」文・文の心は
仏は悲の故に後のたのしみをば闇いて当時・法華經を謗じて地獄
にをちて苦にあうべきを悲み給いて座をたたしめ給いき、譬え
母の子に病あると知れども当時の苦を悲んで左右なく灸を加へ
ざるが如し、喜根菩薩は慈の故に当時の苦をばかへりみず後の樂
を思いて強いて之を説き聞かしむ、譬えば父は慈の故に子に病あ
るを見て当時の苦をかへりみず後を思ふ故に灸を加うるが如し、
又仏在世には仏・法華經を秘し給いしかば四十余年の間等覺不退
の菩薩名をしらず、其の上寿量品は法華經八箇年の内にも名を

秘し給いて最後にきかしめ給いき末代の凡夫には左右なく如何が
きかしむべきとおぼゆる処を妙樂大師釈して云く「仏世は当機
の故に簡ぶ末代は結縁の故に聞かしむ」と釈し給へり文の心は仏
在世には仏一期の間多くの人不退の位にのぼりぬべき故に法華經
の名義を出して謗ぜしめず機をこしらへて之を説く仏滅後には
当機の衆は少く結縁の衆多きが故に多分に就いて左右なく法華經
を説くべしと云う釈なり是体の多くの品あり又末代の師は多くは
機を知らず機を知らざらんには強いて但実經を説くべきかされ
ば天台大師の釈に云く「等しく是れ見ざれば但大を説くに咎無し」
文・文の心は機をも知らざれば大を説くに失なしと云う文なり又
時の機を見て説法する方もあり皆國中の諸人・権經を信じて
実經を謗し強に用いざれば彈呵の心をもて説くべきか時に依つ

て用否ようひあるべし。

問うて云くいわ唐土もろこしの人師にんしの中に一分一向いちぶんいっこうに権大乘ごんだいじょうに留とどまつて実經じつぎょう

に入らざる者はいかなる故か候、答えて云くいわ仏世に出でましまし

て先よんじゅうよねんず四十余年ごんだいじょうの権大乘・小乗しょうじょうの經を説とき後には法華經ほけきょうを説

いて言のたまわく「若にやくい以小乗しょうじょう化か・乃至ないし於一人おいちにん・我則墮慳貪がそくだ けんどん・

此事しじいふか為不可」文・文の心は仏ほとけただにぜん但爾前ばかの經許ほけきょうりを説いて法華經ほけきょうを

説とき給たまはずば仏慳貪けんどんの失とがありと説かれたり、後に属累品そくろいほんにいたり

て仏右みての御手をのべて三たび諫いさめをなして三千大千世界さんぜんだいせんせかいの外・八

方・四百万億那由他なゆたの国土こくどの諸菩薩しよほさつの頂いただきをなでて未来みらいには必ず

法華經ほけきょうを説くべし、若もし機はげきたへずば余じんぼうの深法よんじゅうよねんの四十余年よんじゅうよねんの經を説

いて機はげきをこしらへて法華經ほけきょうを説くべしと見えたり、後に涅槃經ねはんぎょうに

重かさねて此の事を説いて仏滅後ぶつめつに四依しえの菩薩ほさつありて法を説くに又法

の四し依えあり実じつ経きやうをついに弘ひろめずんば天魔てんまとしるべきよしを説せか
れたり故ゆえに如に來よらいの滅めつ後ご・後のの五ご百ひゃく年ねん・九く百ひゃく年ねんの間にい出でて給たまいし
りゅうじゅぼさつ てんじんぼさつ あまねくによらい しょうきやう ひろ たま てんじんぼさつ
竜りゅう樹じゅ菩ぼ薩さつ・天てん親じん菩ぼ薩さつ等どう☆く如に來よらいの 聖しょう教きやうを弘ひろめ給たまうに天てん親じん菩ぼ薩さつ
は先にしょうじやう小しょう乘じやうの説いっさい一切いっさい有う部ぶの人にん・俱ぐ舍しゃ論ろんを造ぞうつて阿あ含こん十二じふに年ねんの經
の心のこころを宣のたまへて一向いっかうに大だい乘じやうの義ぎ理りを明あかさず次あに十じゅう地ち論ろん・攝せつ大だい乘じやう論ろん
・釈しゃく論ろん等どうを造ぞうつて四よん十じゅう余よ年ねんの権こん大だい乘じやうの心のこころを宣のたまへ後にのちに仏ぶつ性じやう論ろん・
法ほつ華け論ろん等どうを造ぞうりて粗そ実じつ大だい乘じやうの義ぎを宣のたまへたり竜りゅう樹じゅ菩ぼ薩さつ亦また然しかなり
天てん台だい大だい師し・唐もろこし土この人にん師しとして一いち代だいを分わかつに大だい小しょう・権こん実じつ顯けん然ねんなり
余よの人にん師しは僅わずかに義ぎ理りを説せけども分ぶん明めいならず又また証しょう文もんたしかなら
ず但ただし末まつの論ろん師し並ならに訳やく者しゃ・唐もろこし土この人にん師しの中なかに大だい小しょうをば分わかつて
大だいにををいて権こん実じつを分わかたず・或あるは語ことばには分わかつといへども心こころは
権こん大だい乘じやうのをもむきを出いでず此これ等らは不ふ退たい諸しよ菩ぼ薩さつ・其こ数すう如ごう恒しや沙しや・

またまたふのうち
亦復不能知とおぼえて候なり。

疑つて云く唐土の人師の中に慈恩大師は十一面観音の化身牙
り光を放つ、善導和尚は弥陀の化身口より仏をいだすこの外の
人師通を現じ徳をほどこし三昧を発得する人・世に多しなんぞ
権実二経を弁へて法華経を詮とせざるや、答えて云く阿竭多仙人
外道は十二年の間・耳の中に恒河の水をとどむ婆藪仙人は自在天
となりて三目を現ず、唐土の道士の中にも張階は霧をいだし
鸞巴は雲をはく第六天の魔王は仏滅後に比丘・比丘尼・優婆塞・
優婆夷・阿羅漢・辟支仏の形を現じて四十余年の経を説くべしと
見えたり通力をもて智者愚者をばしるべからざるか、唯仏の遺言
の如く一向に権教を弘めて実経をつるに弘めざる人師は権教
に宿習ありて実経に入らざらん者は・或は魔にたばらかされ

て通を現げんずるか、但ただし法門ほうもんをもて邪正じゃせいをただすべし利根りこんと通力つうりきと
にはよるべからず。

文応元年ぶんおうがねん太歳庚申五月二十八日

日蓮にちれん

花押かおう

鎌倉名越かまくらなごえに於おいて書き畢おわんぬ

◆二 立正安国論

ぶんおうがんねん

文応元年七月 三十九歳御作 与

北条時頼書 於鎌倉 一七p

旅客来りて嘆いて曰く近年より近日に至るまで天変地天・
飢饉疫癘・遍く天下に満ち広く地上に迸る牛馬巷に斃れ骸骨路
に充てり死を招くの輩既に大半に超え悲まざるの族敢て一人
も無し、然る間・或は利剣即是の文を専にして西土教主の名を
唱え・或は衆病悉除の願を持ちて東方如来の経を誦し、或は
病即消滅・不老不死の詞を仰いで法華真実の妙文を崇め・或
は七難即滅・七福即生の句を信じて百座百講の儀を調え有るは
秘密真言の経に因て五瓶の水を灑ぎ有るは坐禅入定の儀を全し
て空観の月を澄し、若くは七鬼神の号を書して千門に押し若くは

五大力の形を図して万戸に懸け若くは天神地祇を拜して四角四堺の祭祀を企て若くは万民百姓を哀んで国主・国宰の徳政を行う、然りと雖も唯肝胆を摧くのみにして弥飢疫に逼られ乞客目にあふれしにんまなこ溢れ死人眼に満てり、臥せる屍を觀と為し並べる戸を橋と作す、觀れば夫れ二離壁を合せ五緯珠を連ぬ三宝も世に在し百王未だ窮まらざるに此の世早く衰え其の法何ぞ廢れたる是れ何なる禍に依り是れ何なる誤りに由るや。

主人の曰く独り此の事を愁いて胸臆に憤☆す客来つて共に嘆く屢談話を致さん、夫れ出家して道に入る者は法に依つて仏を期するなり而るに今神術も協わす仏威も験しなし、具に当世の体を觀るに愚にして後生の疑を發す、然れば則ち円覆を仰いで恨を呑み方載に俯して慮を深くす、倩ら微管を傾け聊か

経文を披きたるに世皆正に背き・人悉く惡に歸す、故に善神は
國を捨てて相去り聖人は所を辞して還りたまわず、是れを以て
魔來り鬼來り災起り難起る言わずんばある可からず恐れずんばあ
る可からず。

客の曰く天下の災・國中の難・余独り嘆くのみに非ず
衆皆悲む、今蘭室に入つて初めて芳詞を承るに神聖去り辞し
災難並び起るとは何れの經に出でたるや其の証拠を聞かん。

主人の曰く其の文繁多にして其の証弘博なり。

金光明經に云く「其の国土に於て此の經有りと雖も未だ嘗て
流布せしめず捨離の心を生じて聴聞せん事を樂わず亦供養し
尊重し讚歎せず四部の衆・持經の人を見て亦復た尊重し乃至
供養すること能わず、遂に我れ等及び余の眷屬無量の諸天をして

此の甚深の妙法を聞くことを得ざらしめ甘露の味に背き正法の
流を失い威光及び勢力有ること無からしむ、惡趣を増長し
人天を損滅し生死の河に墜ちて涅槃の路に乖かん、世尊・我等四
王並びに諸の眷属及び藥叉等斯くの如き事を見て其の国土を捨て
て擁護の心無けん、但だ我等のみ是の王を捨棄するに非ず必ず
無量の国土を守護する諸天善神有らんも皆悉く捨去せん、既に
捨離し已りなば其の国当に種種の災禍有つて国位を喪失すべし、
一切の人衆皆善心無く唯繫縛殺害瞋諍のみ有つて互に相讒諂し
枉げて辜無きに及ばん、疫病流行し彗星数ば出で兩日並び現
じ薄蝕恒無く黑白の二虹不祥の相を表わし星流れ地動き井の内
に声を發し暴雨・惡風・時節に依らず常に飢饉に遭つて苗実成ら
ず、多く他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦惱を受け

とちしやらく ところあ
土地所樂の処有ること無けん」已上。

大集經に云く いわ 「仏法実に隱没せば鬚髮爪皆長く諸法も亦忘失

せん、その 当の時虚空の中に大なる声有つて地を震い一切皆遍く動か

んこと猶水上輪の如くならん城壁破れ落ち下り屋宇悉く・れ なほ こと じょうへき わ おくう ことごと やぶれ

圻け樹林の根・枝・葉・華・葉・菓・菓尽きん唯淨居天を除いて さけ じゅりん つ ただじやういてん

欲界の一切処の七味・三精氣損減して余り有ること無けん、解脱 よっかい いっさいしよ しょうけそんげん あ げだつ

の諸の善論当の時一切尽きん、所生の華菓の味い希少にして亦 もろもろぜんろんその いっさいつ しよしょう けか きしやう また

美からず、諸有の井泉池・一切尽く枯涸し土地悉く鹹鹵し☆裂し うまか しょう せいせんち いっさいことごとこかく とちことごとかんろ てきれつ

て丘澗と成らん、諸山皆☆燃して天竜雨を降さず苗稼も皆枯 きゆうかん しょうざんみなしやうねん てんりゅうあめ みょうけ みなから

死し生ずる者皆死し尽き余草更に生ぜず、土を雨らし皆昏闇に しな つ よそう ふ みなこんあん

日月も明を現ぜず四方皆亢旱して数ば諸惡瑞を現じ、十不善業の にちがつ げん しほうみなこうかん しばししよあくずい げん ふぜんこう

道・貪・瞋・癡倍增して衆生父母に於ける之を觀ること・鹿の とん・じん・ちばいそう しゅじやうふ ほ これ み しやうろく

如くならん、衆生及び寿命・色力・威榮滅じ人天の樂を遠離し
みなことごとくあくどう
皆悉く惡道に墮せん、是くの如き不善業の惡王・惡比丘我が
しょうほう
正法を毀壞し天人の道を損滅し、諸天善神王の衆生を悲愍する
者・此の濁惡の國を棄てて皆悉く余方に向わん」已上。

仁王經に云く「國土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るが

故に万民乱る賊來つて國を却かし百姓亡喪し臣・君・太子・

王子・百官共に是非を生ぜん、天地怪異し二十八宿・星道・日月

時を失い度を失い多く賊起ること有らん」と、亦云く「我今五眼

をもつて明に三世を見るに一切の國王は皆過去の世に五百の仏に

侍えるに由つて帝王主と為ることを得たり、是を為つて一切の

聖人羅漢而も為に彼の國土の中に來生して大利益を作さん、

若し王の福尽きん時は一切の聖人皆為に捨て去らん、若し一切

の聖人しょうにん去らん時は七難ひちなん必ず起らんおこ」已上。

薬師経やくしに云くいわ「若し刹帝利せつていり・灌頂王等かんちやうおうの災難さいなん起らん時所謂いわゆる

人衆疾疫にんしゅうしつえきの難なん・他国侵逼たこくしんびつの難なん・自界叛逆じかいほんぎやくの難なん・星宿変怪せいしゆくへんげの難なん・

日月薄蝕にちがつはくしよくの難なん・非時風雨ひじふううの難なん・過時不雨かじふうの難なんあらん」已上。

仁王經にんのうきやうに云くいわ「大王吾が今化する所の百億の須弥しゆみ・百億の

日月にちがつ・一一の須弥しゆみに四天下してんげ有り、其その南閻浮提えんぶだいに十六の大国五百

の中国十千しやうこくの小国しやうこく有り其その国土こくどの中に七つの畏る可おそべき難なん有り

一切いっさいの国王是こくおうこれを難なんと為すが故ゆえに、云何いかなるを難なんと為す日月度にちがつどを

失うしない・時節じせつ返逆ほんぎやくし・或あるは赤日出せきじついで・黒日出こくじついで・二三四五の日

出いで・或あるは日蝕にっしよくして光無なくく・或あるは日輪にちりん一重いちじゆうりん・二三四五重輪にじゆうりん

現げんずるを一の難なんと為すなり、二十八宿度にじはちしやくどを失うしない金星きんせい・彗星すいせい・輪星りんせい

・鬼星きせい・火星かせい・水星すいせい・風星ふうせい・☆星ちやうせい・南斗なんと・北斗ほくと・五鎮ごちんの大星だいせい・

いっさい 一切の国主星・三公星・百官星・是くの如き諸星・各各・変現
するを二の難と為すなり、大火国を焼き万姓焼尽せん・或は
鬼火・竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火あらん是くの
如く変怪するを三の難と為すなり、大水百姓を・没し時節返逆
して・冬雨ふり・夏雪ふり・冬時に雷電霹・し・六月に氷霜雹
を雨らし・赤水・黒水・青水を雨らし・土山・石山を雨らし
沙礫石を雨らす江河逆に流れ山を浮べ石を流す是くの如く変ずる
時を四の難と為すなり、大風・万姓を吹殺し国土・山河・樹木
・一時に滅没し、非時の大風・黒風・赤風・青風・
天風・地風・火風・水風あらん是くの如く変ずるを五の難と為す
なり、天地・国土・亢陽し炎火洞燃として・百草亢旱し・五穀
登らず・土地赫燃と万姓滅尽せん是くの如く変ずる時を六の難

と為すなり、四方の賊来つて国を侵し内外の賊起り、
火賊・水賊・風賊・鬼賊ありて百姓荒乱し・刀兵却起らん・
是くの如く怪する時を七の難と為すなり」大集経に云く
「若し国王有つて無量世に於て施戒慧を修すとも我が法の滅せん
を見て捨てて擁護せずんば是くの如く種ゆる所の無量の善根悉く
皆滅失して其の国当に三の不祥の事有るべし、一には穀貴・二に
は兵革・三には疫病なり、一切の善神悉く之を捨離せば其の
王教令すとも人随従せず常に隣国の侵☆する所と為らん、
暴火横に起り悪風雨多く暴水増長して人民を吹・し内外の親戚
其れ共に謀叛せん、其の王久しからずして当に重病に遇い
寿終の後・大地獄の中に生ずべし、乃至王の如く夫人・太子・
大臣・城主・柱師・郡守・宰官も亦復た是くの如くならん」已上。

そ 夫れ四経の文朗かなり万人誰か疑わん、而るに盲瞽の輩迷惑
みだり じゃせつ せいきよう わきま ゆえ てんが しょうぶつ
の人妄に邪説を信じて正教を弁えず、故に天下世上・諸仏・
しゅうきよう おい しやり おうご こころざし
衆経に於て捨離の心を生じて擁護の志無し、仍て善神聖人
国を捨て所を去る、是を以て悪鬼外道災を成し難を致す。

きやくいろ な いわ ごかん みんてい こんじん はくば
客色を作して曰く後漢の明帝は金人の夢を悟つて白馬の教を

得、上宮太子は守屋の逆を誅して寺塔の構を成す、爾しより来
じようぐう たいし もりや ちゅう じとう しか
た上一人より下万民に至るまで仏像を崇め経巻を専にす、然れ

すなわ えいざん なんと おんじよう とうじ しかい 一州・五畿・七道・
ば則ち叡山・南都・園城・東寺・四海・一州・五畿・七道・

ぶきよう 仏経は星の如く羅なり堂宇雲の如く布けり、子の族は則ち
じゅうとう かん かくろく たくい またけいそく 誰か一代の教を

鷺頭の月を觀じ鶴勒の流は亦鷄足の風を伝う、誰か一代の教を

きみ さんぼう あと はい いわん も そ 編し三宝の跡を廃すと謂んや若し其の証有らば委しく其の故を聞

かん。

主人さと諭いわして曰いく仏閣いらか薨きようを連ね経藏きやうぞう軒のきを並べ僧ちくは竹葦この如ごとく侶らは稻麻とうまに似たり崇重すうちゆう年ふ旧きり尊貴そんき・日に新あらたなり、但ただし法師ほっしはてんごく諂曲てんくくにして人倫じんりんを迷惑めいわくし王臣おうしんは不覺ふかくにして邪正じゃせいを弁べんずること無なし、仁王にんのう經きやうに云いく「諸もろの惡比丘あくびく多く名利みやうりを求め國王こくおう・太子たいし・王子みこの前に於おいて自ら破仏みずか法の因縁はぶつぽう・破國いんねんの因縁はくにを説いんねんかん、其その王別わきまえずして此ことの語ことばを信聴しんちやうし横よこに法制しほうを作せいつて仏戒ぶつかいに依よらず是これを破は仏ぶつ・破國はくにの因縁いんねんと為なす」已上。

涅槃經ねはんぎやうに云いく「菩薩ぼさつ惡象あくぞう等に於おいては心こころに恐怖くふすること無なかれ惡知識あくちしきに於おいては怖畏ふいの心こころを生おこぜよ・惡象あくぞうの為ために殺ころされては三趣さんしゆに至いたらず惡友あくゆうの為ために殺ころされては必ず三趣さんしゆに至いたる」已上。

法華經ほけきやうに云いく「惡世あくせの中の比丘びくは邪智じゃちにして心こころ諂曲てんくくに未いまだ得えざるを為これ得えたりと謂おもい我慢がまんの心こころ充満じゆうまんせん、・或あるは阿練若あれんにやに納衣のうえ

にして空閑くうげんに在り自ら真みづかの道を行ずと謂おもいて人間にんげんを輕賤きやうせんする者
有らん、利養りやうに貪とんじやく著ちやくするが故ゆえに白衣びやくえの与よめに法ほふを説たいしいて世よに
恭敬きやうけいせらるること六通ろくつうの羅漢らかんの如ごとくならん、乃至ないし常じやうに大衆たいしゆうの中
に在あつて我等われらを毀そしらんと欲ほするが故ゆえに國王こくおう・大臣だいじん婆羅門ばらもん・居士こじ
及び余およの比丘びく衆しゆに向むかつて誹謗ひぼうして我が惡あくを説こいて是これ邪見じゃけんの人
外道げどうの論議ろんぎを説いくと謂いわん、濁劫じよつこく惡世あくせの中には多おほく諸もろの恐怖くふ有
らん惡鬼あくき其その身みに入いつて我われを罵詈めり罵ののし毀辱きにくせん、濁世じよくせの惡あく比丘びくは仏
の方便ほうべん隨宜ずいぎ所説しよせつの法ほふを知らず惡口あくくして顰蹙ひんじゆくし数数しばしば擯出ひんずいせられん」
已上。

涅槃經ねはんぎやうに云いく「我われ涅槃ねはんの後のち・無量むりやう百歲ひやくさい四道しやうにんの聖人ことごと悉またく復またた
涅槃ねはんせん、正法しやうほう滅めつして後のち・像法そうほうの中のちに於おて当まさに比丘びく有あるべし、
持律じりつに似像じざうして少ちく經きやうを讀誦どくじゆし飲食おんじきを貪嗜とんしして其その身みを長養ちやうやうし

袈裟けさを著じゃくすと雖いえども猶なおり獵師りょうしの細こめに視みて徐しずかに行くいくが如ごとく猫ねずみの鼠ねずみを
伺うかがうが如ごとし、常とこに是この言ことを唱となえん我羅漢らかんを得えたりと外ほかには賢善けんぜんを
現げんし内うちには貪嫉とんしつを懷いだく啞法あほうを受うけたる婆羅門ばらもん等の如ごとし、実じつには
沙門しゃもんに非あらずして沙門しゃもんの像かたちを現げんじ邪見熾盛じゃけんしじようにして正法しょうほうを誹謗ひぼうせ
ん」已上。

文ぶんに就ついて世よを見るみるに誠まことに以もつて然しかなり惡侶あくりよを誡いましめずんば豈善事あにぜんじ
を成なさんや。

客猶なおいきどおり憤いりて曰いわく、明王みんおうは天地てんちに因よつて化けを成なし聖人しょうにんは理非りひ

を察さつして世よを治おさむ、世上せじようの僧侶そうりよは天下てんがの歸かへりする所ところなり、惡侶あくりよに

於おいては明王みんおう信しんず可べからず聖人しょうにんに非あらずんば賢哲けんてつ仰あおぐ可べからず、今

賢聖けんせいの尊重そんちようせるを以もつて則すなわち竜象りゆうそうの輕かろからざるを知しんぬ、何なんぞ

妄言もうげんを吐はないて強あながちに誹謗ひぼうを成なし誰人だれびとを以もつて惡比丘あくびくと謂おもうや委細いさいに

聞かんと欲す。

主人の曰く、後鳥羽院の御宇に法然と云うもの有り 選択集

をつくすなわ いちだいの 聖教を破し ☆く十方の衆生を迷わす、其の

せんぢやく いわ どうしゆくぜん 選択に云く道 綽禪師・聖道浄土の二門を立て 聖道を捨てて

まさ じようど 正しく浄土に帰するの文、初に聖道門とは之に就いて二有り

ないし じゆん これ 乃至之に準じ之を思うに応に密大及び実大をも存すべし、然れ

すなわ ば則ち今の真言仏心・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論・

これら はつけ 此等の八家の意正しく此に在るなり、曇鸞法師往生論の注に

いわ つつし 云く謹んで 竜樹菩薩の 十住 毘婆沙を案ずるに云く菩薩阿毘

ばつち 跋致を求むるに二種の道有り一には難行道二には易行道なり、

なんぎようどう 此の中難行道とは即ち是れ 聖道門なり 易行道とは即ち是れ

じようどもん 浄土門なり、 浄土宗の学者先ず須らく此の旨を知るべし 設い先よ

り聖道門しょうどうもんを学ぶ人なりと雖も若し浄土門じょうどもんに於て其の志こころざし有ら
ん者すべからずは須らく聖道しょうどうを棄てて浄土じょうどに帰すべし又云く善導ぜんどう和尚わじょう正雜しょうざうの
二行そうぎやうを立て雜行そうぎやうを捨てて正行しょうぎやうに歸するの文、第一だいいちに読誦どくじゆ雜行そうぎやう
とは上かみの觀經かんきやう等の往生おうじやう浄土じょうどの經を除いて已外いげ・大小乘しょうじやう・顯密けんみつ
の諸經しよきやうに於て受持じゆじ・讀・誦ずするを悉く読誦どくじゆ雜行そうぎやうと名く、第三に
礼拝らいはい雜行そうぎやうとは上かみの弥陀みだを礼拝らいはいするを除いて已外いげ一切いっさいの諸仏しよぶつ・
菩薩等ぼさつ及び諸およの世天等もろもろに於て礼拝らいはいし恭敬きやうけいするを悉く礼拝らいはい雜行そうぎやうと
名く、私ひそかに云く此の文を見るに須く雜すべからずを捨てて專せんを修しゆすべし豈あに
ひやくそくひやくしやうせんしゆうしやうぎやう百即しゆう百生ぎやうじやよの專修せんしゆう正行しょうぎやうを捨てて堅く千中無一の雜修せんちゆうむいつ雜行そうしゆうそうぎやうを
執しゆうせんや行者ぎやうじやよ能く之これを思量しりやうせよ、又云く貞元ていげん入藏錄にゆうそうろくの中に始め
大般若經はんんにやきやう六百卷より法常ほうじやう住經じゆうきやうに終るまで顯密けんみつの大乗だいじやう經きやう總そうじ
て六百三十七部二千八百八十三卷なり、皆須く読誦どくじゆ大乘だいじやうの一句いっく

に撰すべし、せつ當に知るべし隨他の前には暫く定散の門を開くと
雖も隨自の後には還て定散の門を閉ず、いえどずいじ一たび開いて以後永く
閉じざるは唯是れ念仏の一門なりと、ただ又云く念仏の行者必ず三
心を具足す可きの文、ぐそく觀無量壽經に云く

同經の疏に云く問うて曰く若し解行の不同・邪雜の人等有つて
外邪異見の難を防がん・げじやいけん或は行くこと一分二分にして群賊等喚廻
すとは即ち別解・別行・惡見の人等に喩う、すなわ私に云く又此の中に
一切の別解・別行・異學・異見等と言ふは是れ聖道門を指す已
上、さいごけつ又最後結句の文に云く「夫れ速かに生死を離れんと欲せば二
種の勝法の中に且く聖道門を闔きて選んで淨土門に入れ、
淨土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且く諸の雜行を抛ちて
選んで應に正行に歸すべし」已上。

之に就いて之を見るに曇鸞・道綽・善導の謬釈を引いて

しょうどう 浄土・難行・易行の旨を建て法華・真言惣じて一代の

だいじょう 大乗六百三十七部二千八百八十三卷・一切の諸仏・菩薩及び

諸の世天等を以て皆聖道・難行・雜行等に摂して、或は捨

て・或は閉じ・或は闇き・或は抛つ此の四字を以て多く一切を迷

わし、剩 え三国の聖僧十方の仏弟を以て皆群賊と号し併せて

罵詈せしむ、近くは所依の浄土の三部經の唯除五逆誹謗正法の

誓文に背き、遠くは一代五時の肝心たる法華經の第二の「若し人

信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人命終つて阿鼻獄に入ら

ん」の誠文に迷う者なり、是に於て代末代に及び人聖人に非ず

各冥衢に容つて並びに直道を忘る悲いかな瞳瞭を☆たず痛いか

な徒に邪信を催す、故に上国王より下土民に至るまで皆經は浄土

三部の外に経なく無く仏みだは弥陀さんそんの三尊ほかの外おもの仏無しと謂おもえり。

仍よつて伝でんぎよう教・義真ぎしん・慈覚じかく・智証等ちしよう・或あるは万里ばんりの波濤はとうを涉わたつて

渡わたせし所しょうきようの聖教ある・或あるは一朝いつちようの山川さんせんを廻りて崇あがむる所ぶつそうの仏像

若もしくは高山こうざんの巔いただきに華界けかいを建てて以て安置もつあんちし若しくは深谷しんこくの底

に蓮宮れんぐうを起もつて以て崇重すうちようす、釈迦しゃか・薬師やくしの光を並ぶるや威を

現げんとう当ほどこに施こくうし虚空地蔵じそうの化を成すや益を生後せいこに被こうむらしむ、故ゆえに国王こくおう

は郡郷ぐんこうを寄せて以て灯燭とうしよくを明あきらにし地頭じとうは田園でんえんを充あてて以て供養もつくよう

に備そなう。

而しかるを法然ほうねんの選択せんちやくに依よつて則すなわち教主きようしゆを忘れて西土さいどの仏駄ぶつだを貴

び付属ふぞくを抛なげうつて東方とうほうの如来にようらいを閣おき唯ただ四卷きようてん・三部きようてんの教典きようてんを専もつにし

て空むなしく一代いちだい五時の妙典みようてんを抛なげうつ是これを以て弥陀みだの堂あに非あらざれば皆みな

供くぶつ仏こころざしの志とどを止め念仏ねんぶつの者あらに非あらざれば早く施僧せそうの懐おもいを忘る、

ゆえ 故に 仏閣零落して 瓦松の煙老い 僧房荒廃して 庭草の露深し、
しか 然りと雖も 各護惜の心を捨てて 並びに 建立の思を廃す、是を
も 以て 住持の聖僧行いて 歸らず 守護の善神去つて 来ること無し、
こ 是れ 偏に 法然の選択に 依るなり、悲しいかな 数十年の間・百千
万の人・魔縁に 蕩かされて 多く 仏教に 迷えり、傍を 好んで 正を
忘る 善神怒を 為さざらんや 円を 捨てて 偏を 好む 惡鬼便りを 得ざ
らんや、如かず 彼の 万祈を 修せんよりは 此の 一凶を 禁ぜんには。
客殊に 色を作して 曰く、我が 本師 釈迦文 浄土の 三部經を 説きた
まいて 以来、曇鸞法師は 四論の 講説を 捨てて 一向に 浄土に 歸し、
道 綽禪師は 涅槃の 広業を 閣きて 偏に 西方の 行を 弘め、善導和尚
は 雜行を 抛つて 專修を立て、慧心僧都は 諸經の 要文を集めて
念仏の 一行を 宗とす、弥陀を 貴重すること 誠に 以て 然なり 又

おうじょう

往生の人其れ幾ばくぞや、就中法然聖人は幼少にして天台

山に昇り十七にして六十巻に涉り並びに八宗を究め具に大意を

得たり、其の外一切の経論・七遍反覆し章疏伝記究め看ざるこ

となく智は日月に齊しく徳は先師に越えたり、然りと雖も猶出離

の趣に迷いて涅槃の旨を弁えず、故に・く覲悉く鑑み深く思い遠

く慮り遂に諸経を抛ちて専ら念仏を修す、其の上一夢の靈応を

蒙り四裔の親疎に弘む、故に・或は勢至の化身と号し・或は善導

の再誕と仰ぐ、然れば則ち十方の貴賤頭を低れ一朝の男女歩

を運ぶ、爾しより来た春秋推移り星霜相積れり、而るに忝く

も釈尊の教を疎にして恣に弥陀の文を譏る何ぞ近年の災を以て

聖代の時に課せ強ちに先師を毀り更に聖人を罵るや、毛を吹い

て疵を求め皮を剪つて血を出す昔より今に至るまで此くの如き

あくげんいま 悪言未だ見ず惶る可く慎む可し、罪業至つて重し科条争か遁れん
たいざなおもつ 対座猶以て恐れ有り杖に携われて則ち帰らんと欲す。

しゅじんえ 主人咲み止めて曰く辛きことを夢の葉に習い臭きことを溷廁に

ぜんげん 忘る善言を聞いて悪言と思い謗者を指して聖人と謂い正師を疑

あくりよ つて悪侶に擬す、其の迷誠に深く其の罪浅からず、事の起りを

くわ 聞け委しく其の趣を談ぜん、釈尊説法の内一代五時の間に先後

ごんじつ を立てて権実を弁ず、而るに曇鸞道綽善導既に権に就いて実を

よ 忘れ先に依つて後を捨つ未だ仏教の淵底を探らざる者なり、

なかんずくほうねん 就中法然は其の流を酌むと雖も其の源を知らず、所以は何ん

だいじょうきよう 大乘經の六百三十七部二千八百八十三卷並びに一切の諸仏・

ぼさつおよ 菩薩及び諸の世天等を以て捨閉閣抛の字を置いて一切衆生の心

かろ を薄んず、是れ偏に私曲の詞を展べて全く仏經の説を見ず、妄語

の至り悪口あつくの科言とがうても比無し責めても余り有り人皆みな其の妄語もうごを
信ことごとじ悉く彼の選せん択ちやくを貴とうとぶ、故ゆえに浄土じやうどの三經あがめを崇しやうきやうめて衆經しゆきやうを
抛なげうち極樂ごくらくの一仏あおを仰あおいで諸仏しよぶつを忘る、誠こに是れ諸仏しよぶつ・諸經しよきやうの
怨敵おんてき聖僧せいそう衆人しゆうじんの讎敵しゆうてきなり、此じの邪教じやくやう広はつこく八荒ひやうに弘ひろまり周あまねく
十方じゆつぱうに遍へんす、抑そも近年きんねんの災難さいなんを以もつて往代なんを難あながずるの由強あながちに
之これを恐る、聊いささか先例せんれいを引なんじいて汝なんじが迷べを悟し可べし、止觀しかん第二しきに史記しき
を引いいて云いく「周の末ひはつに被髮たんしん・袒身れいど・礼度よに依よらざる者有いり」
弘決ぐけつの第二いに此の文しやくを釈さするに左伝さでんを引いいて曰いく「初め平王へいおうの東
に遷うつりしに伊川いせんに髪かを被かぶる者おの野おに於おて祭しるを見る、識者しきしやの
曰いく、百年お年に及おばじ其その礼先げんず亡いつざいびぬ」と、爰こに知しんぬ徵前しるしに
顯あらわれ災わざわい後あに致おることを、又阮藉げんせきが逸才いつざいなりしに蓬頭散帶ほうとうさんたいす後あに
公卿くぎやうの子孫しそん皆みな之なに教ならいて奴苟相辱どこうあいはずかしむる者まさを方まに自然じねんに達たすと

い
云い ☆節兢持する者を呼んで田舎と為す是を司馬氏の滅する相と
な
為す已上。

又慈覚大師の入唐巡礼記を案ずるに云く、「唐の武宗皇帝・

えしようがんねん
会昌元年勅して章敬寺の鏡霜法師をして諸寺に於て弥陀念仏の

教を伝え令む寺毎に三日巡輪すること絶えず、同二年回鶻国の

ぐんびよう
軍兵等唐の堺を侵す、同三年河北の節度使忽ち乱を起す、其の

だいばんこくま
後大蕃国更た命を拒み回鶻国重ねて地を奪う、凡そ兵乱秦項の

代に同じく災火邑里の際に起る、何に況んや武宗大に仏法を破し

多く寺塔を滅す乱を撥ること能わずして遂に以て事有り」取意

此れを以て之を惟うに法然は後鳥羽院の御宇・建仁年中の者な

り、彼の院の御事既に眼前に在り、然れば則ち大唐に例を残し

吾が朝に証を顕す、汝疑うこと莫かれ汝怪むこと莫かれ唯

すべから
須く凶を捨てて善に歸し源を塞ぎ根を截べし。

客聊いささかか和いわぎて日いまく未えんだ淵底きわを究めざるに数しばしば其の趣そを知る但ただし

華洛からくより柳營りゅうえいに至いたるまで釈門しゃくもんに枢すうけん☆在ぶつけり仏家とうりように棟梁とうりよう在ありり、

然しかるに未いまだ勘状かんじようを進まいらせず上じようそう奏およに及およばず汝なんじ賤身いやしみを以もつて輒たやすく

莠言ゆうげんを吐そく其の義余そり有ありり其の理い謂われ無なしし。

主人しゅじんの曰いわく、予少量な為なりと雖いえども忝かたじけなくも大乘だいじようを学まなぶ蒼蠅驥尾そうようきびに

附ふして万里ばんりを渡わたり碧蘿松頭へきらしようとうに懸かりて千尋せんじんを延のぶ、弟子でし一仏の子と

生しよきようれて諸経しよきようの王に事なんう、何ぞ仏法の衰微ぶつぽうを見て心情すいびの哀惜しんじようを起あいせき

さざらんや。

其その上涅槃經ねはんぎように云いわく「若もし善比丘ぜんびくあつて法を壊やぶる者を見て置

いて呵責かしやくし駈遣くけんし挙処こしよせずんば当まさに知るべし是この人は仏法の中の

怨あだなり、若もし能よく駈遣くけんし呵責かしやくし挙処こしよせば是れ我が弟子でし眞の声聞しやうもん

なり」と、余善比丘の身為らずと雖も「仏法中怨」の責を遁れ
んが為に唯大綱を撮つて粗一端を示す。

其の上る元仁年中に延暦・興福の両寺より度々奏聞を經・
勅宣御教書を申し下して、法然の選択の印板を大講堂に取り上
げ三世の仏恩を報ぜんが為に之を焼失せしむ、法然の墓所に於て
は感神院の犬神人に仰せ付けて破却せしむ其の門弟・隆觀・
聖光・成覚・薩生等は遠国に配流せらる、其の後未だ御勘氣を
許されず豈未だ勘状を進らせずと云わんや。

客則ち和ぎて曰く、經を下し僧を謗すること一人には論じ難し、
然れども大乘經六百三十七部二千八百八十三卷並びに一切の
諸仏・菩薩及び諸の世天等を以て捨閉閣抛の四字に載す其の詞
勿論なり、其の文顯然なり、此の瑕瑾を守つて其の誹謗を成せど

も迷うて言うか覺りて語るか、賢愚并ぜず是非定め難し、但し
災難の起りは選択に因るの由、其の詞を盛に弥よ其の旨を談ず、
所詮天下泰平・国土安穩は君臣の樂う所土民の思ふ所なり、夫れ
国は法に依つて昌え法は人に因つて貴し国亡び人滅せば仏を誰か
崇む可き法を誰か信ず可きや、先ず国家を祈りて須く仏法を立つ
べし若し災を消し難を止むるの術有らば聞かんと欲す。

主人の曰く、余は是れ頑愚にして敢て賢を存せず唯經文に
就いて聊か所存を述べん、抑も治術の旨内外の間其の文幾多ぞ
や具に挙ぐ可きこと難し、但し仏道に入つて數ば愚案を廻すに
謗法の人を禁めて正道の侶を重んぜば國中安穩にして天下泰平
ならん。

すなわねはんぎよう
即ち涅槃經に云く「仏の言く唯だ一人を除いて余の一切に施さ

ば皆讚歎す可し、純陀問うて言く云何なるをか名けて唯除一人と
為す、仏の言く此の経の中に説く所の如きは破戒なり、純陀復た
言く、我今未だ解せず唯願くば之を説きたまえ、仏純陀に語つて
言く、破戒とは謂く一闍提なり其の余の在所一切に布施すれば皆
讚歎すべく大果法を獲ん、純陀復た問いたてまつる、一闍提とは
其の義何ん、仏言わく、純陀若し比丘及び比丘尼・優婆塞・
優婆夷有つてそ惡の言を發し正法を誹謗し是の重業を造つて永
く改悔せず心に懺悔無らん、是くの如き等の人を名けて一闍提の
道に趣向すと為す、若し四重を犯し五逆罪を作り自ら定めて是く
の如き重事を犯すと知れども而も心に初めより怖畏懺悔無く肯て
發露せず彼の正法に於て永く護惜建立の心無く毀訾輕賤して
言に過咎多からん、是くの如き等の人を亦た一闍提の道に趣向す

と名く、唯此くの如き一闍提の輩を除いて其の余に施さば一切讃歎せん」と。

又云く「我れ往昔を念うに閻浮提に於て大国の王と作れり名を仙予と曰いき、大乘經典を愛念し敬重し其の心純善に・悪嫉・有ること無し、善男子我爾の時に於て心に大乘を重んず婆羅門の方等を誹謗するを聞き聞き已つて即時に其の命根を断ず、善男子是の因縁を以て是より已来地獄に墮せず」と、又云く「如来昔国王と為りて菩薩の道を行ぜし時爾所の婆羅門の命を断絶す」と、又云く「殺に三有り謂く下中上なり、下とは蟻子乃至一切の畜生なり唯だ菩薩の示現生の者を除く、下殺の因縁を以て地獄・畜生・餓鬼に墮して具に下の苦を受く、何を以ての故に是の諸の畜生に微善根有り是の故に殺す者は具に罪報を

受く、中殺とは凡夫の人より阿那含に至るまでは是を名けて中と
為す、是の業因を以て地獄・畜生・餓鬼に墮して具に中の苦を
受く上・殺とは父母乃至阿羅漢・辟支仏・畢定の菩薩なり阿鼻
大地獄の中に墮す、善男子若し能く一闍提を殺すこと有らん者は
則ち此の三種の殺の中に墮せず、善男子彼の諸の婆羅門等は一切
皆は一闍提なり」已上。

仁王經に云く「仏波斯匿王に告げたまわく是の故に諸の国王
に付属して比丘・比丘尼に付属せず何を以ての故に王のごとき
威力無ければなり」已上。

涅槃經に云く「今無上の正法を以て諸王大臣宰相及び
四部の衆に付属す、正法を毀る者をば大臣四部の衆當に苦治す
べし」と。

又云く「仏の言く、迦葉能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得たり善男子正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せず心に刀剣・弓箭・鉞槊を持すべし」と、又云く「若し五戒を受持せん者有らば名けて大乘の人と為す事を得ず、五戒を受けざれども正法を護るを為て乃ち大乘と名く、正法を護る者は当に刀剣器仗を執持すべし刀杖を持すと雖も我是等を説きて名けて持戒と曰わん」と。

又云く「善男子過去の世に此の拘尸那城に於て仏の世に出でたまふこと有りき歡喜増益如来と号したてまつる、仏涅槃の後正法世に住すること無量億歳なり余の四十年・仏法の末、爾の時に一の持戒の比丘有り名を覺徳と曰う、爾の時に多く破戒の比丘有り是の説を作すを聞きて皆惡心を生じ刀杖を執持し是の

法師を逼む、是の時の国王名けて有徳と曰う是の事を聞き已つて護法の為の故に即便ち説法者の所に往至して是の破戒の諸の悪比丘と極めて共に戦闘す、爾の時に説法者厄害を免ることを得たり王爾の時に於て身に刀剣鉾槊の瘡を被り体に完き処は芥子の如き許りも無し、爾の時に覚徳尋いで王を讃めて言く、善きかな善きかな王今真に是れ正法を護る者なり当来の世に此の身当に無量の法器と為るべし、王是の時に於て法を聞くことを得已つて心大に歡喜し尋いで即ち命終して阿☆仏の国に生ず而も彼の仏の為に第一の弟子と作る、其の王の將從・人民・眷属・戦闘有りし者・歡喜有りし者一切菩提の心を退せず命終して悉く阿☆仏の国に生ず、覚徳比丘却つて後寿終つて亦阿☆仏の国に往生することを得て彼の仏の為に声聞衆中の第二の弟子

と作る、若し正法尽きんと欲すること有らん時当に是くの如く
受持し擁護すべし、迦葉爾の時の王とは即ち我が身是なり、説法
の比丘は迦葉仏是なり、迦葉正法を護る者は是くの如き等の
無量の果報を得ん、是の因縁を以て我今日に於て種種の相を得て
以て自ら莊嚴し法身不可壞の身を成す、仏迦葉菩薩に告げたまわ
く、是の故に法を護らん優婆塞等は応に刀杖を執持して擁護す
ることは是くの如くなるべし、善男子我涅槃の後濁惡の世に国土
荒乱し互に相抄掠し人民飢餓せん、爾の時に多く飢餓の為の
故に發心出家するもの有らん是くの如きの人を名けて禿人と
為す、是の禿人の輩正法を護持するを見て驅逐して出さしめ
若くは殺し若くは害せん、是の故に我今持戒の人諸の白衣の
刀杖を持つ者に依つて以て伴侶と為すことを聴す、刀杖を持す

と雖も我是等を説いて名けて持戒と曰わん、刀杖を持すと雖も命を断ずべからず」と。

法華經に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば即ち一切世間の仏種を断ぜん、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」已上。

夫れ經文顯然なり私の詞何ぞ加えん、凡そ法華經の如くんば大乘經典を謗する者は無量の五逆に勝れたり、故に阿鼻大城に墮して永く出る期無けん、涅槃經の如くんば設い五逆の供を許すとも謗法の施を許さず、蟻子を殺す者は必ず三惡道に落つ、謗法を禁ずる者は不退の位に登る、所謂覺徳とは是れ迦葉仏なり、有徳とは則ち釈迦文なり。

法華・涅槃の經教は一代五時の肝心なり其の禁・実に重し誰

か歸仰せざらんや、而るに謗法の族・正道を忘るの人・剩え
法然の選択に依つて弥よ愚癡の盲瞽を増す、是を以て・或は彼
の遺体を忍びて木画の像に露し・或は其の妄説を信じて莠言を
模に彫り之を海内に弘め之を☆外に翫ぶ、仰ぐ所は則ち其の
家風施す所は則ち其の門弟なり、然る間・或は釈迦の手指を切つ
て弥陀の印相に結び・或は東方如来の鴈宇を改めて西土教主の
鵝王を居え、或は四百余回の如法經を止めて西方淨土の
三部經と成し・或は天台大師の講を停めて善導講と為す、此くの
如き群類其れ誠に尽くし難し是破仏に非ずや是・破法に非ずや是
・破僧に非ずや、此の邪義則ち選択に依るなり。
嗟呼悲しいかな、如来誠諦の禁言に背くこと、哀なるかな
愚侶迷惑の☆語に随うこと、早く天下の静謐を思わば須く國中

の謗法を断つべし。

客の曰く、若し謗法の輩を断じ若し仏禁の違を絶せんには彼の経文の如く斬罪に行う可きか、若し然らば殺害相加つて罪業何んが為んや。

則ち大集經に云く「頭を剃り袈裟を著せば持戒及び毀戒をも、天人彼を供養す可し、則ち我を供養するに為りぬ、是れ我が子なり若し彼を☆打する事有れば則ち我が子を打つに為りぬ、若し彼を罵辱せば則ち我を毀辱するに為りぬ」料り知んぬ善惡を論ぜず是非を択ぶこと無く僧侶為らんに於ては供養を展ぶ可し、何ぞ其の子を打辱して忝くも其の父を悲哀せしめん、彼の竹杖の目連尊者を害せしや永く無間の底に沈み、提婆達多の蓮華比丘尼を殺せしや久しく阿鼻の焰に咽ぶ、先証斯れ明かなり後毘最も

恐あり、ほうぼう 謗法を誡いましむるには似たれども既に禁言きんげんを破やぶる此の事信じ難がたし如何いかにが意得こころうんや。

主人しゅじんの云いわく、客明あきらに經文きやうもんを見て猶斯なほこの言を成す心の及およばざる

か理の通ぜざるか、全くぶつし仏子を禁いましむるには非あらず唯偏ただひとえに謗法ほうぼうを惡にくむむ

なり、夫それ釈迦しゃかの以前ぶつぎやう仏教は其の罪を斬いへどると雖も能忍のうにんの以後いご

經説きやうせつは則すなわち其の施を止そむ、然しかれば則すなわち四海万邦一切しかいばんほういっさいの四衆ししゅう其の

惡ほどこに施ほどこさず皆みな此の善に歸せば何いかなる難なんか並び起いり何いかなる災さいか競きそい

来きらん。

客則すなわち席を避えりけ襟つくるを刷いいて日いく、仏教ぶつぎやう斯まち区まちにして旨趣ししゆ窮きわめ

難かたく不審多端ふしんたたんにして理非明りひならず、但ただし法然ほうねん聖人しょうにんの選せん択ちやく現げん在ざいな

り諸しよ仏ぶつ・諸しよ經きやう・諸しよ菩ぼ薩さつ・諸しよ天てん等を以もつて捨しゃ閑へい閣かく抛ほうと載のす、其その文

顯然けんねんなり、茲これに因よつて聖人しょうにん國を去せんじんり善神所ぜんじんを捨てんてて天下てんが飢渴けかち

せじようえきびよう

しゅじん

きようもん

あきら

りひ

し世上疫病すと、今主人しゅじん広く経文きようもんを引いて明かに理非りひを示す、

ゆえ もうしゅうす

ひるが

じもくしばしばあきら

しよせんこくどたいへい

てんが

故に妄執もうしゅうす既に翻ひるがえり耳目じもく数朗じもくしばしばあきらかなり、所詮しよせん国土泰平・天下てんが

あんのん

安穩あんのんは一人より万民ばんみんに至いたるまで好む所なり楽ねがう所なり、早く

いっせんだい

とど

しゅうそうに

ぶっかい

はくろう

おさ

ほうざん

一聞提いっせんだいの施とどを止め永く衆僧尼しゅうそうにの供を致ぶっかいし仏海の白浪はくろうを収おさめ法山ほうざんの

りよくりん

き

ぎのう

とうぐ

な

しか

緑林りよくりんを截きらば世は義農ぎのうの世と成り国は唐虞とうぐの国と為ならん、然しかし

ほっすい

せんじん

しんしやく

ぶっけ

とうりよう

すうちよう

て後法水ほっすいの浅深せんじんを斟酌しんしやくし仏家ぶっけの棟梁とうりようを崇重すうちようせん。

しゅじんよろこ

いわ

はとけ

たか

な

すずめ

はまぐり

な

悦

主人しゅじん悦よろこんで日いわく、鳩化はとけして鷹たかと為なり雀変すずめじて蛤はまぐりと為なる、悦な

しきかな 汝蘭室なんじらんしつの友に交りて麻畝まほの性と成る、誠そに其なんの難なんを

かえり

もっぱ

顧みて専もっぱら此の言を信やわぜば風和やわらぎ浪静かなみしずかにして不日ふじつに豊年ほうねんな

らん、

ただ

但し人の心は時に随したがつて移り物の性は境に依よつて改まる、

譬たとえば

なお

猶水中の月の波に動き陳前じんぜんの軍の剣に靡なびくくがごとし、汝なんじ

とうざ

いえど

当座とうざに信いえどずと雖も後定めて永く忘れん、若もし先ず国土こくどを安んじて

せ

ん

じ

ん

を

あ

ん

じ

て

を

せ

ん

じ

ん

を

あ

ん

じ

て

を

せ

ん

じ

ん

を

あ

ん

じ

て

を

せ

ん

じ

ん

を

あ

ん

じ

て

を

せ

ん

じ

ん

を

あ

ん

じ

て

を

現当を祈らんと欲せば速に情慮を回らし☆で対治を加えよ、

所以は何ん、薬師経の七難の内五難忽に起り二難猶残れり、所以

他国侵逼の難・自界叛逆の難なり、大集経の三災の内二災早く

顕れ一災未だ起らず所以兵革の災なり、金光明経の内の種種

の災禍一一起ると雖も他方の怨賊国内を侵掠する此の災未だ

露れず此の難未だ来らず、仁王経の七難の内六難今盛にして一

難未だ現ぜず所以四方の賊来つて国を侵すの難なり加之国土

乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るが故に万民乱ると、今・此の

文に就いて具さに事の情を案ずるに百鬼早く乱れ万民多く亡ぶ

先難是れ明かなり後災何ぞ疑わん若し残る所の難悪法の科に依つ

て並び起り競い来らば其の時何んが為んや、帝王は国家を基とし

て天下を治め人臣は田園を領して世上を保つ、而るに他方の賊来

つて其の国を侵逼し自界叛逆して其の地を掠領せば豈驚かざ

らんや豈騒がざらんや、国を失い家を滅せば何れの所にか世を

遁れん汝須く一身の安堵を思わば先ず四表の静謐を☆らん者か、

就中人の世に在るや各後生を恐る、是を以て・或は邪教を信じ

・或は謗法を貴ぶ各是非に迷うことを惡むと雖も而も猶仏法に帰

することを哀しむ、何ぞ同じく信心の力を以て妄りに邪義の詞

を崇めんや、若し執心翻らず亦曲意猶存せば早く有為の郷を

辞して必ず無間の獄に堕ちなん、所以は何ん、大集経に云く

「若し国王有つて無量世に於て施戒慧を修すとも我が法の滅せん

を見て捨てて擁護せずんば是くの如く種ゆる所の無量の善根悉く

皆滅失し、乃至其の王久しからずして当に重病に遇い寿終の

後大地獄に生ずべし王の如く夫人・太子・大臣・城主・

柱師・郡主・宰官も亦復是くの如くならん」と。

にんのうきよう

いわ

ぶつきよう

やぶ

また

こうしなく

ろくしんふわ

仁王経に云く「人・仏教を壊らば復た孝子無く六親不和にし

てんりゅう

たす

しつえきあつき

しんがい

さいげしゅび

れんかじゅうおう

て天竜も祐けず疾疫悪鬼日に来つて侵害し災怪首尾し連禍縦横

し死して地獄・餓鬼・畜生に入らん、若し出て人と為らば兵奴

がき

ちくしょう

も

な

ひようぬ

の果報ならん、響の如く影の如く人の夜書くに火は滅すれども

かほう

ひびき

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

字は存するが如く、三界の果報も亦復是くの如し」と。

そん

こと

さんがい

かほう

またまたかく

こと

こと

こと

こと

こと

こと

法華經の第二に云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば乃至

ほけきよう

いわ

も

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

其の人命終して阿鼻獄に入らんと、同第七の卷不輕品に云く

その

みようじゅう

あびごく

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

「千劫阿鼻地獄に於て大苦悩を受く」と、涅槃經に云く「善友を

せんこう

あびごく

おい

くのう

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

遠離し正法を聞かず惡法に住せば是の因縁の故に沈没して阿鼻

おんり

しょうほう

あくほう

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

地獄に在つて、受くる所の身形・縦横八万四千由延ならん」と。

じごく

あ

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

広く衆経を披きたるに専ら謗法を重んず、悲いかな皆正法

しゅうきよう

ひらき

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

法華經の第二に云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば乃至

ほけきよう

いわ

も

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

こと

の門を出でて深く邪法の獄に入る、愚なるかな各悪教の綱に
懸つて鎮に、謗教の網に纏る、此の朦霧の迷彼の盛焰の底に
沈む豈愁えざらんや、汝早く信仰の寸心を改め
て速に実乗の一善に帰せよ、然れば則ち三界は皆仏国なり
其れ衰んや十方は悉く宝土なり宝土何ぞ壞れんや、国に衰微
無く土に破壊無んば身は是れ安全・心は是れ禅定ならん、此の
詞此の言信ず可く崇む可し。

客の曰く、今生後生誰か慎まざらん誰か和わざらん、此の
經文を披いて具に仏語を承るに誹法の科至つて重く毀法の罪
・誠に深し、我一仏を信じて諸仏を抛ち三部經を仰いで諸經を
闇きしは、是れ私曲の思に非ず則ち先達の詞に随いしなり、
十方の諸人も亦復是くの如くなるべし、今の世には性心を勞し

来生らいしょうには阿鼻あびに墮だせんこと文明あきらかに理詳つまびらかなり疑う可べからず、
弥いよ貴公きこうの慈誨じかを仰あおぎ益愚客ぐきやくの癡心ちしんを開ひらけり、速すみに対治やかたいを回めぐして
早たいへいく泰平たいへいを致いたし先せいぜんず生前やすんを安やすじて更ほつこに没後たすを扶たけん、唯我ただが信たず
るのみに非あらず又他の誤あやまりをも誠いましめんのみ。

◆三 立正安国論奥書りっしょうあんこくろん おくがき 文応元年ぶんおうがんねん太歳庚申これ之かんがを勘しょうかう正嘉より
之これを始め文応元年ぶんおうがんねんに勘かんがえ畢おわる。

去いぬる正嘉元年しょうかがんねん太歳丁巳ひのとも八月二十三いぬい日戌亥こくの尅だいじしんの大地震だいいじしんを見て
之これを勘かんがう、其その後文応元年ぶんおうがんねん太歳庚申きのかね七月十六もつやどや日を以もつて宿屋ぜんもん・禅門ぜんもんに
付さいみょうじにゆうどうして故最明寺さいみょうじにゆうどう入道たてま殿に奉それり、其その後文永元年ぶんえいがんねん太歳甲子きのえね七月五ぶんえい
日だいみょうじよう大明星だいめいようの時いよいよ弥いよいよ此の災こんげんの根源こんげんを知る、文応元年ぶんおうがんねん太歳庚申きのかねより文永ぶんえい
五年さいほう太歳戊辰もうこ後の正月十八日さいほうに至いたるまで九ヶ年さいほうを経て西方大蒙古国さいほう

自り我が朝を襲う可きの由牒状之を渡す、又同六年重ねて
牒状之を渡す、既に勘文之に叶う、之に準じて之を思うに未来
亦然る可きか、此の書は徴有る文なり是れ偏に日蓮が力に非ず
法華經の真文の感応の至す所か。

文永六年太歳己巳十二月八日之を写す。

◆ 安国論御勘由来

正嘉元年丁巳八月廿三日戌亥の時・前代に超え大に地振す、同
二年戊午八月一日大風・同三年己未大飢饉・正元元年己未大疫病同二
年庚申四季に亘つて大疫已まず万民既に大半に超えて死を招き
了んぬ、而る間国主之に驚き内外典に仰せ付けて種種の御祈
有り、爾りと雖も一分の験も無く還つて飢疫等を増長す。

にちれんせけん 日蓮世間の体を見て粗一切経を勘うるに御祈請驗無く還つて

きようあく そうちよう

凶惡を増長するの由道理・文証之を得了んぬ、終に止むこと

なく かんもん

無く勘文一通を造り作して其の名を立正安国論と号す、文応

がんねん

元年申七月十六日時屋戸野入道に付けて古最明寺入道殿に奏進

もう おわ こ

申し了んぬ此れ偏に国土の恩を報ぜんが為なり、其勘文の意は

にほんこく

日本国・天神七代・地神五代

百王百代人王第卅代欽明天皇の御宇に始めて百済国より仏法此の

国に渡り桓武天皇の御宇に至つて其の中間五十余代・二百六十

わた かんむてんのう

余年なり、其の間・一切経並びに六宗之れ有りと雖も天台・

しんこん

真言の二宗未だ之れ有らず、桓武の御宇に山階寺の行表僧正

おんでし

の御弟子に最澄と云う小僧有り師と号す、已前に渡る所の六宗並

ぜんしゅうこれ

に禅宗之を極むと雖も未だ我が意に叶わず、聖武天皇の御宇に

きわ いえど いま

に禅宗之を極むと雖も未だ我が意に叶わず、聖武天皇の御宇に

だいたう 大唐の鑒真和尚渡す所の天台の章疏四十余年を経て已後始めて
さいちようこれ ひけん ほぼぶつぼう げんじ さと おわ さいちよう てんちようちきゅう
最澄之を披見し粗仏法の玄旨を覚り了んぬ、最澄・天長地久
ため えんりやく えいざん こんりゅう かんむこうていこれ あがめ てんしほんめい
の為に延暦四年叡山を建立す桓武皇帝之を崇め天子本命の
どうじよう ろくしゅう ごきえ いっこう てんたいえんしゅう きふく たま
道場と号し六宗の御帰依を捨て一向に天台円宗に帰伏し給う。
えんりやく
同延暦十三年に長岡の京を遷して平安城を建つ、同延暦廿
一年正月十九日高雄寺に於て南都・七大寺の六宗の碩学・
ごんそう ちようよう
勤操・長耀等の十四人を召し合せ勝負を決談す、六宗の明匠
もんどう およ
・一問答にも及ばず口を閉ずること鼻の如し華嚴宗の五教・
ほうそうしゅう さんろん
法相宗の三時・三論宗の二藏・三時の所立を破し了んぬ但自宗
を破らるるのみに非ず皆謗法の者為ることを知る、同じき廿九日
こうてい ちよくせん くだ これ なじ しゃひよう
皇帝勅宣を下して之を詰る、十四人謝表を作つて皇帝に捧げ
たてまつ そ
奉る、其の後代代の皇帝叡山の御帰依は孝子の父母に仕うるに

こ 超え 黎民の王威を恐るるに勝れり、・或御時は宣明を捧げ・或
おんとき 御時は非を以て理に処す等云云、殊に清和天皇は叡山の惠亮和尚
ほうい の法威に依つて位に即き帝王の外祖父・九条右丞相は誓状を
えいざん 叡山に捧げ、源の右將軍は清和の末葉なり鎌倉の御成敗是非を
えいざん 論ぜず叡山に違背す天命恐れ有る者か。

しか 然るに後鳥羽院の御宇・建仁年中に法然・大日とて二人の

そうじょうまん 増上慢の者有り悪鬼其の身に入つて国中の上下を誑惑し代を

あ 挙げて念仏者と成り人毎に禪宗に趣く、存の外に山門の御帰依

せんぼく 浅薄なり国中の法華・真言の学者棄て置かれ了んぬ、故に叡山

しゅご 守護の天照太神・正八幡宮・山王七社・国中守護の諸大善神

ほうみ 法味を☆わずして威光を失い国土を捨て去り了んぬ、悪鬼便り

さいなん を得て災難を致し結句他国より此の国を破る可き先相勘うる所な

り、又其の後文永元年ふんえいがんねん 甲子のえね七月五日彗星東方に出で余光大体一
こくと
国土に及ぶ、此れ又世始まりてより已来無き所の凶瑞きようずいなり
ないげてんがくしゃも其の凶瑞の根源を知らず、予弥よ悲歎を増長す、
内外典の学者も其の凶瑞の根源を知らず、予弥よ悲歎を増長す、
しかかんもんささに勘文を捧げて已後九ヶ年を経て今年後の正月大蒙古国の国
而るに勘文を捧げて已後九ヶ年を経て今年後の正月大蒙古国の国
書を見るに日蓮が勘文に相叶うこと宛かも符契の如し、仏記して
いわ云く「我が滅度の後・一百余年を経て阿育大王出世し我が舍利を
ひろ弘めん」と、周の第四昭王の御宇・大史蘇由が記に云く「一千
年の外声教此の土に被らしめん」と、聖徳太子の記に云く「我が
めつと滅度の後二百余年を経て山城の国に平安城を立つ可し」と、
てんだいだいし天台大師の記に云く「我が滅後二百余年の已後東国に生れて我が
しょうほうしょうほう
正法を弘めん」等云云、皆果して記文の如し。

日蓮正嘉の大地震同じく大風同じく飢饉・正元元年の大疫等を
にちれんしょうかだいじしんたいふうききんがんねんだいえき

見て記しるして云いわく他国たこくより此の国を破やぶる可べき先相せんそうなりと、自讃じさんに似たりと雖いえどもも若し此の国土こくどを毀壞きえせば復た仏法ぶつぽうの破滅はめつ疑い無き者なり。

而しかに当世とうせの高僧等こうそう謗法ぼうぼうの者と同意どういの者なり復た自宗また じしゅうの玄底げんていを知らざる者なり、定めて勅ちよくせんみきようしよ宣御教書たまひを給いて此の凶惡きようあくを祈請きしようするか、仏神ぶつしん弥いよ瞋恚しんにを作し国土こくどを破壊はえせん事疑い無き者なり。

日蓮復にちれんまたこれ之を対治たいじするの方これ之を知る叡山えいざんを除いて日本国にほんこくには但一人ひとなり、臂たとええば日月にちがつの二つ無きが如く聖人しょうにん肩を並べざるが故なり、若もし此の事妄言もうげんならば日蓮にちれんが持つ所の法華經守護ほけきようしゆごの十羅刹じゅうらせつの治罰ちばつ之を蒙こうむらん、但偏ひとえに国の為・法の為・人の為ためにして身の為ために之を申もうさず、復また禪門ぜんもんに對面たいめんを遂とぐ故に之を告こぐ之を用もちいざれば定めて後悔こうかいあ有る可し、恐恐きようきよう謹言きんげん。

ぶんえい
文永五年太歳戊辰四月五日

ほうがんごぼう
法鑑御房
にちれんかおう
日蓮花押

あんこくろん
安国論別状

りっしょうあんこくろん

立正安国論の正本、

ときどの
富木殿に候、

かきて給ひ候はん、ときど

のか、又。五月廿六日

にちれんかおう
日蓮花押

◆六

守護国家論

正元元年

三十八歳御作

36P

夫れ以んみれば偶 十方微塵の三惡の身を脱れて希に閻浮
 日本にほんの爪上そうじょうの生を受け亦閻浮日域またえんぶにちいき・爪上そうじょうの生を捨てて十方
 微塵・三惡の身を受けんこと疑い無き者なり、然るに生を捨てて
 惡趣に墮つるの縁・一に非ず・或妻子・眷属の哀憐に依り・或は
 殺生惡逆の重業に依り・或は国主と成つて民衆の歎きを知ら
 ざるに依り・或は法の邪正を知らざるに依り・或は惡師を信ずる
 に依る、此の中に於ても世間の善惡は眼前に在り愚人も之を弁う
 べし仏法の邪正・師の善惡に於ては証果の聖人・尚之を知らず
 況や末代の凡夫に於ておや。

しかのみならず仏・日・西山に隠れ余光・東域を照してより

已来・四依の慧灯は日に滅じ三蔵の法流は月に濁る実教に迷

える論師は真理の月に雲を副え権経に執する訳者は実経の珠を

砕きて権教の石と成す、何に況や震旦の人師の宗義其の誤り無

からんや何に況や日本辺土の末学誤りは多く実は少き者か、随つ

て其の教を学する人数は

竜鱗よりも多く得道の者は鱗角よりも希なり、或は権教に

依るが故に・或は時機不相応の教に依るが故に・或は凡聖の教を

弁えざるが故に・或は権実二教を弁えざるが故に・或は権経を

実教と謂うに依るが故に・或は位の高下を知らざるが故に、

凡夫の習い仏法に就て生死の業を増すこと其の縁・一に非ず。

中昔・邪智の上有つて末代の愚人の為に一切の宗義を

破はしてせんちやくしゅう 選択集 一卷を造る、名を鸞・綽・導の三師に倣いちだいつて一代

を二門に分ち実教じつきょうを録ろくして権経ごんきょうに入れ法華ほっけ・真言しんごんの直道じきどうを閉じ

て浄土三部じょうどの隘路あいろを開く、亦浄土三部またじょうどの義にも順ぜずして権実ごんじつの

謗法ほうぼうを成し永く四聖ししやうの種を断じて阿鼻あびの底に沈しずむ可べき僻見びやくけんなり、

而しかるに世人したが之に順たうこと譬たとえば大風たいふうの小樹しょうじゆの枝を吹くが如ごとく

門弟もんてい此の人を重もんずること天衆てんしゅうの帝釈たいしやくを敬うやまうに似たり。

此あくぎの悪義あくぎを破たらんが為ために亦また多くの書有いり所謂い・浄土決義鈔じやうどけつぎしやう・

彈だん選択せんたく・摧邪輪さいじやりん等いなり、此の書みなせきとくを造る人・皆碩徳いの名い一天いつてんに弥はる

と雖いも恐おそくは未いまだせんちやくしゅう 選択集 謗法こんげんの根源あらを顕ゆわさず故かに還かつて悪法あくほう

の流布るふを増たす、譬たとえば盛さかなる早はやばつの時に小雨しょううを降ふせば草木そうもく弥い

枯かられ兵者つわものを打うつ刻じやくに弱兵じやくへいを先さきんずれば強敵かうてき倍ばい力りきを得えるが如ごとし。

予よ此の事なげを歎なげく間・一卷の書せんちやくしゅうを造ほうつて 選択集 謗法えんぎの縁起えんぎを

願わし名づけて守護国家論と号す、願わくば一切の道俗一時の
世事を止めて永劫の善苗を種えよ、今経論を以て邪正を直す
信謗は仏説に任せ敢て自義を存する事無かれ。

分ちて七門と為す、一には如来の経教に於て権実二教を定む
ることを明し、二には正像末の興廢を明し、三には選択集の
謗法の縁起を明し、四には謗法の者を対治すべき証文を出すこ
とを明し、五には善知識並に真実の法には値い難きことを明し、
六には法華・涅槃に依る行者の用心を明し、七には問に随つて
答うることを明す。

大文の第一に如来の経教に於て権実二教を定むることを明す
とは此れに於て四有り、一には大部の経の次第を出して流類を
撮することを明し、二には諸経の浅深を明し、三には大小乗

を定むることを明し、四には且らく権を捨てて実に就くべきことを明す。

第一に大部の經の次第を出して流類を撰ずることを明さば、問うて云く仏・最初に何なる經を説きたまうや、答えて云く華嚴經なり、問うて云く其の証如何、答えて云く六十華嚴經の離世間淨眼品に云く「是の如く我聞く一時・仏・摩竭提國・寂滅道場に在つて始めて正覺を成ず」と、法華經の序品に放光瑞の時・弥勒菩薩・十方世界の諸仏の五時の次第を見る時・文殊師利菩薩に問うて云く、「又諸仏聖主師子の經典の微妙第一なることを演説し給うに其の声清淨に柔軟の音を出して諸の菩薩を教え給うこと無數億万なることを觀る」亦方便品に仏、自ら初成道の時を説いて云く「我始め道場に坐し樹を觀じ・亦

經行す、乃至・爾の時に諸の梵王及び諸天帝釈・護世四天王
および大自在天並に余の諸の天衆・眷屬百千萬・恭敬合掌し礼
して我に轉法輪を請ずと」此等の説は法華經に華嚴經の時を指
す文なり、故に華嚴經の第一に云く毘沙門天王略月天子略日天子
略釈提桓因略大梵略摩醯首羅等略已上。

涅槃經に華嚴經の時を説いて云く「既に成道し已つて梵天
勸請すらく唯願わくば如来當に衆生の為に広く甘露の門を開き

給うべし、乃至・梵王復言く世尊・一切衆生に凡そ三種有り

所謂・利根・中根・鈍根なり利根は能く受く唯願わくば為に説き

給え、仏言く梵王諦に聴け我今當に一切衆生の為に甘露の門を

開くべし」亦三十三に華嚴經の時を説いて云く「十二部經・

修多羅の中の微細の義を我先に已に諸の菩薩の為に説くが如し」。

此くの如き等の文は皆諸仏・世に出で給いて一切經の初めに
は必ず華嚴經を説き給いし証文なり。

問うて云く無量義經に云く「初めに四諦を説き、乃至・次に
方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く」此くの如き文は
般若經の後に華嚴經を説くと相違如何、答えて云く淺深の次第
なるか・或は後分の華嚴經なるか、法華經の方便品に一代の次第
淺深を列ねて云く「余乗有ること無し若は二若は三」と此の意な
り。

問うて云く華嚴經の次に何の經を説き給うや、答えて云く
阿含經を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて
云く法華經の序品に華嚴經の次の經を説いて云く「若し人・苦に
遭うて老病死を厭うには為に涅槃を説く」方便品に云く「即・

波羅奈に趣き、乃至・五比丘の爲に説く」涅槃經に華嚴經の次の

經を定めて云く「即・波羅奈國に於て正法輪を轉じて中道を

宣説す」此等の經文は華嚴經より後に阿含經を説くなり。

問うて云く阿含經の後に何の經を説き給うや、答えて云く方等

經なり、問うて云く何を以てのを知るや、答えて云く無量義經に

云く「初に四諦を説き乃至・次に方等十二部經を説く」涅槃經に

云く「修多羅より方等を出す」

問うて云く方等とは天竺の語・此には大乘と云う華嚴・般若

・法華・涅槃等は皆方等なり何ぞ独り方等部に限り方等の名を立

つるや、答えて云く實には華嚴・般若・法華等皆方等なり然りと

雖も今方等部に於て別して方等の名を立つことは私の義に非ず

無量義經・涅槃經の文に顯然たり、阿含の証果は一向小乘なり

だいじょう

ほうとう

いごみなだいじょう

いえど だいじょう

次に大乘を説く方等より已後皆大乘と云うと雖も大乘の始なるが故に初に従つて方等部を方等と云うなり、例せば十八界の十半は色なりと雖も初に従つて色境の名を立つるが如し。

いわ

ほうとうぶ

しよきよう

いずれ

たま

問うて云く方等部の諸経の後に何の経を説き給うや、答えて

いわ

ほうとうぶ

しよきよう

いずれ

たま

云く般若経なり、問うて云く何を以て之を知るや答えて云く

ねはんぎよう

いわ

ほうとう

いわ

もつこれ

いわ

涅槃経に云く「方等より般若を出す」

いわ

ほうとう

いわ

いずれ

たま

問うて云く般若経の後には何の経を説き給うや、答えて云く

いわ

ほうとう

いわ

いずれ

たま

無量義経なり、問うて云く何を以て之を知るや答えて云く

むりようぎきよう

いわ

ほうとう

いわ

いずれ

たま

仁王経に云く「二十九年中」無量義経に云く「四十余年」問う

いわ

むりようぎきよう

いわ

いずれ

たま

いわ

て云く無量義経には般若経の後に華嚴経を列ね涅槃経には

ねはんぎよう

いわ

ほうとう

いわ

いずれ

たま

般若経の後に涅槃経を列ぬ、今の所立の次第は般若経の後に

むりようぎきよう

いわ

ほうとう

いわ

いずれ

たま

無量義経を列ぬる相違如何、答えて云く涅槃経第十四の文を見る

に涅槃經ねはんぎょう已前いぜんの諸經しよきょうを列ねはんぎょうねて涅槃經ねはんぎょうに對たいして勝劣しょうれつを論ろんじ而しかも

法華經ほけきょうを挙げあげず、第九くわいの卷まきに於おて法華經ほけきょうは涅槃經ねはんぎょうより已前いぜんなりと

之これを定め給たまう、法華經ほけきょうの序文じょぶんを見るむるに無量義經むりやうぎきょうは法華經ほけきょうの序文じょぶんな

り、無量義經むりやうぎきょうには般若はんの次つぎに華嚴經けこんきょうを列つらぬれども華嚴經けこんきょうを初時しよじに

遣やれば般若經はんの後のちは無量義經むりやうぎきょうなり。

問いうて云いく無量義經むりやうぎきょうの後のちに何いづれの經きやうを説とき給たまうや、答こたえて云いく

法華經ほけきょうを説とき給たまうなり、問いうて云いく何を以もて之これを知るや、答こたえて

云いく法華經ほけきょうの序文じょぶんに云いく「諸もろもろの菩薩ぼさつの爲ために大乘經だいじやうきやうの無量義經むりやうぎきょう・

菩薩法ぼさつぽう・仏ぶつ所護念しよごねんと名なずくるを説とき給たまう、仏ぶつ・此この經きやうを説とき已おほつ

て結跏趺坐けゆかふざし無量義處むりやうぎしよさんまい三昧さんまいに入る」

問いうて云いく法華經ほけきょうの後のちに何いづれの經きやうを説とき給たまうや、答こたえて云いく普賢ふげん

經きやうを説とき給たまうなり、問いうて云いく何を以もて之これを知るや、答こたえて云いく

普賢經に云く「卻て後・三月・我当に般涅槃すべし、乃至・如来
昔・耆闍崛山及び余の住处に於て已に広く一実の道を分別し今
も此の処に於てす」

問うて云く普賢經の後に何の經を説き給うや、答えて云く
涅槃經を説き給うなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて
云く普賢經に云く「卻て後・三月・我当に般涅槃すべし」涅槃經
三十に云く「如来何が故ぞ二月に涅槃し給うや、亦・如来は初生
・出家・成道・転法輪皆八日を以てす何ぞ仏の涅槃独り十五日
なるやと云う」と大部の經・大概是くの如し此より已外諸の大
小乗經は次第不定なり、或は阿含經より已後に華嚴經を
説き法華經より已後に方等・般若を説く皆義類を以て之を収めて
一処に置くべし。

第二に諸經の淺深を明さば、無量義經に云く「初に四諦を説き

次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説き菩薩の歷劫修行

を宣説す」亦云く「四十余年には未だ眞實を顕わさず」又云く

「無量義經は尊く過上無し」此等の文の如くんば四十余年の諸經

は無量義經に劣ること疑い無き者なり。

問うて云く密嚴經に云く「一切經の中に勝れたり」大雲經

に云く「諸經の轉輪聖王なり」金光明經に云く「諸經の中

の王なり」と此等の文を見るに諸大乘經の常の習なり何ぞ一文

を瞻て無量義經は四十余年の諸經に勝ると云うや、答えて云く

教主釈尊若し諸經に於て互に勝劣を説かずんば・大小乗の

差別・権實の不同有るべからず、若し實に差別無きに互に差別

淺深等を説かば諍論の根源・惡業・起罪の因縁なり、爾前の

しよきよう 諸經の第一は縁に随つて不定なり・或は小乗の諸經に對して
だいいち 第一と・或は報身の壽を説くに諸經の第一なり・或は俗諦・
しんたい 真諦・中諦等を説くに第一なりと一切の第一に非ず、今の
むりようぎきよう 無量義經の如きは四十余年の諸經に對して第一なり。
ごこ

いわ 問うて云く法華經と無量義經と何れが勝れたるや、答えて云く
ほけきようすぐ 法華經勝れたり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く
むりようぎきよう 無量義經には未だ二乗作仏と久遠実成とを明さず故に法華經に
くら 嫌われて今説の中に入るなり。

いわ 問うて云く法華經と涅槃經と何れが勝れたるや、答えて云く
ほけきようまさ 法華經勝るるなり、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く
ねはんぎよう 涅槃經に自ら如法華中等と説き更無所作と云う、法華經に当説を
なんげ 指して難信難解と云わざるが故なり。

問うて云く涅槃經の文を見るに涅槃經已前をば皆邪見なりと云

う如何、答えて云く法華經は如来出世の本懐なる故に

「今者已満足・今正是其時・然善男子・我実成仏已来」等と説く、

但し諸經の勝劣に於ては仏、自ら「我所説經典無量千万億」

なりと挙げ了つて「已説・今説・当説」等と説く時、多宝仏・地

より涌現して皆是真実と定め分身の諸仏は舌相を梵天に付け給う

是くの如く諸經と法華經との勝劣を定め了んぬ、此の外・釈迦

一仏の所説なれば先後の諸經に對して法華經の勝劣を論ずべき

に非ざるなり、故に涅槃經に諸經を嫌う中に法華經を入れず

法華經は諸經に勝る由・之を踰わす故なり、但し邪見の文に

至つては法華經を覺知せざる一類の人・涅槃經を聞いて悟を得る

故に迦葉童子・自身並に所引を指して涅槃經より已前を邪見等と

云うなり經の勝劣を論ずるには非ず。

第三に 大小乗

を定むることを明さば、問うて云く 大小乗の

差別如何、答えて云く 常途の説の如くんば 阿含部の諸經は

小乗なり 華嚴・方等・般若・法華・涅槃等は 大乘なり、或

は 六界を明すは 小乗・十界を明すは 大乘なり、其の外・

法華經に對して 實義を論ずる時・法華經より外の四十余年の諸

大乘經は皆 小乗にして 法華經は 大乘なり。

問うて云く 諸宗に亘て 我所擧の經を 實大乘と謂い 余宗所擧の

經を 權大乘と云うこと 常の習いなり 末學に於ては 是非定め難し、

未だ 聞知せず 法華經に對して 諸大乘經を 小乗と稱する 証文

如何、答えて云く 宗宗の 立義互に 是非を論ず 就中 末法に於て

世間 出世に就て 非を先とし 是を後とす 自らは 非を知らず 愚者の

歎くべき所なり、但し且く我等が智を以て四十余年の現文を觀るに此の言を破する文無ければ人の是非を信用すべからざるなり、其の上・法華經に対して諸大乘經を小乗と称することは自答を存すべきに非ず、法華經の方便品に云く「仏は自ら大乘に住し給えり、乃至・自ら無上道大乘平等の法を証しき若し小乗を以て化すること乃至一人に於てせば我即ち慳貪に墮せん、此の事は為て不可なり」此の文の意は法華經より外の諸經を皆小乗と説けるなり、亦寿量品に云く「小法を樂う」と此等の文は法華經より外の四十余年の諸經を皆小乗と説けるなり、天台・妙樂の釈に於て四十余年の諸經を小乗なりと釈すとも他師之を許すべからず故に但經文を出すなり。

第四に且らく權教を閣いて実經に就くことを明さば、問うて

いわく しょうもん いかん 云く 証文 如何、 答えて 云く 十の 証文 有り 法華經 に 云く 「但

だいじょうきようてん

大乘經典 を受持することを樂て乃至余經の一偈をも受けざれ」 是

ねはんぎよう

涅槃經 に 云く 「了義經 に 依つて 不了義經 に 依らざれ」、 是二法華經

い

に 云く 「此の經は 持ち難し 若し 暫くも 持つ者は 我即ち 歡喜す 諸仏

またしか

も 亦然なり 是の如き人は 諸仏の 歎めたもう所なり、 是れ則ち 勇猛

こ

なり 是れ則ち 精進なり 是を戒を 持ち頭陀を行ずる者と名く」

まつだい

末代に於て四十余年の持戒無し、 三涅槃經 に 云く 「乘に 緩なる者

おい

に於ては乃ち名けて 緩と為す 戒緩の者に於ては名けて 緩と為さず

ぼさつ まかさつ

菩薩摩訶薩・此の 大乘 に於て 心懈怠せずんば 是を奉戒と名づく

しょうほう

正法を護らんが為に 大乘の水を以て而も自ら 澡浴す 是の故に

ぼさつ

菩薩・破戒を現ずと 雖も名づけて 緩と為さず」

此の文は法華經の 戒を流通する文なり 是四法華經第四に 云く 「妙法華經・乃至・

かいぜしんじつ
皆是眞実」の証 明なり法華經第八普賢菩薩の誓に云く「如来の
めつこ おい えんぶだい
滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん」
ほけきよう
法華經第七に云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に
おい だんぜつ
於て断絶せしむること無けん」釈迦如来の誓なり法華經第四に
たほう じゅつぼうしよぶつらいじゅう
多宝並に十方諸仏来集の意趣を説いて云く「法をして久しく住
せしめんが故に此に来至し給えり」是八法華經第七に法華經を行
ずる者の住处を説いて云く「如来の滅後に於て応に一心に受持
・ 読・誦・解説・書写して説の如く修行すべし所在の国土に
ないし もし きようかんしよじゅう
乃至・若は經卷所住の処若は園の中に於ても若は林の中に
おい もし
於ても若は樹の下に於ても若は僧坊に於ても若は白衣の舎にても
もし
若は殿堂に在つても若は山谷曠野にても是の中に皆塔を起て供養
すべし所以は何ん当に知るべし是の処は即ち是れ道場なり諸仏

此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得給う」是九法華經の流通たる
涅槃經の第九に云く「我涅槃の後正法未だ滅せず余の八十年・
爾時には是の經閻浮提に於て当に広く流布すべし是の時当に諸の
惡比丘有るべし是の經を抄掠して分つて多分と作し能く正法
の色香美味を滅す是の諸の惡人復是の如き經典を讀誦すと雖も
如来深密の要義を滅除して世間莊嚴の文を安置し無義の語を飾
り前を抄て後に著け後を抄て前に著け前後を中に著け中を前後に
著けん当に知るべし是くの如き諸の惡比丘は是・魔の伴侶なり、
乃至・譬えば牧牛女の多く水を乳に加うるが如く諸の惡比丘も
亦復是の如し雜るに世語を以てし錯りて是の經を定む多くの
衆生をして正説・正写・正取・尊重・讚歎・供養・恭敬する
ことを得ざらしむ是の惡比丘は利養の爲の故に是の經を広宣

流布すること能わず分流すべき所少く言うに足らず彼の牧牛の
貧窮の女人展転して乳を売るに乃至糜と成して乳味無きが如し、
是の大乗經典・大涅槃經も亦復是の如く展転薄淡にして氣味
有ること無し氣味無しと雖も猶余經に勝る是れ一千倍なること彼
の乳味の諸の苦味に於て千倍勝る
と為すが如し何を以ての故に是の大乗經典・大涅槃經は聲聞
の經に於て最上首為り」是十。

問うて云く不了義經を捨てて了義經に就くとは、大円覺
修多羅了義經・大仏頂如来密因修証了義經是の如き諸
大乘經は皆了義經なり依用と為す可きや、答えて云く了義・
不了義は所対に随つて不同なり二乗・菩薩等の所説の不了義に對
すれば一代の仏説皆了義なり仏説に就て小乗經は不了義・

だいじょうきよう 大乘経は了義なり 大乘に就て又四十余年の諸経は不了義経・
ほつけ 法華・涅槃・大日経等は了義経なり而るに円覚・大仏頂等の
しよきよう 諸経は小乗及び歴劫修行の不了義経に対すれば了義経なり
ほけきよう 法華経の如きは非ざるなり。

問うて云く華嚴・法相・三論等の天台・真言より已外の諸宗
こうそ の高祖・各其の依憑の経経に依つて其の経経の深義を極めた
おも りと欲えり是れ爾る可しや如何、答えて云く華嚴宗の如きは
けこんきよう 華嚴経に依つて諸経を判じて華嚴経の方便と為すなり、法相宗
の如きは阿含・般若等を卑しめ華嚴・法華・涅槃を以て深密経に
同じ同じく中道教と立つると雖も亦法華・涅槃は一類の一乗を説
くが故に不了義経なり深密経には五性各別を論ずるが故に
りようきよう 了義経と立つるなり、三論宗の如きは二蔵を立てて一代を摂し

だいじょう 大乘に於て浅深を論ぜず而も般若經を以て依憑と為す、此等の
しよしゅう 諸宗の高祖・多分は四依の菩薩なるか定めて所存有らん是非に
およ 及ばず。

しか 然りと雖も自身の疑を晴らさんが為に且らく人師の異解を
さしお 閣いて諸宗の依憑の經經を開き見るに華嚴經は旧訳は五十・
しんやく 六十・新訳は八十・四十・其の中に法華・涅槃の如く一代聖教
ほうべん を集めて方便と為すの文無し、四乗を説くと雖も其の中の仏乗
おい に於て十界互具・久遠実成を説かず但し人師に至つては五教を
じゅつかいこく 立てて先の四教に諸經を収めて華嚴經の方便と為す、法相宗の
しきよう 如きは三時教を立つる時・法華等を以て深密經に同ずと雖も深密
さんじきよう 經五卷を開き見るに全く法華等を以て中道の内に入れず。

さんろんしゅう 三論宗の如きは二蔵を立つる時・菩薩蔵に於て華嚴・法華等

を収め般若經に同ずと雖も新古の大般若經を開き見るに全く大
般若を以て法華・涅槃に同ずるの文無し華嚴は頓教・法華は
漸教等とは人師の意樂にして仏說に非ざるなり。

法華經の如きは序分・無量義經に慥に四十余年の年限を挙げ
華嚴・方等・般若等の大部の諸經の題名を呼んで未顕真実と定
め正宗の法華經に至つて一代の勝劣を定むる時・我が所說の
經典・無量千万億・已說・今說・當說の金言を吐いて、而も
其の中に於て此の法華經は最も難信難解なりと説き給う時・
多宝仏・地より湧出し妙法蓮華經皆是真実と証誠し分身の諸仏
・十方より悉く一処に集つて舌を梵天に付け給う。

今・此の義を以て余推察を加うるに唐土・日本に渡れる所の五
千・七千余卷の諸經・以外の天竺・竜宮・四王・天・過去の七

仙等の諸経並に阿難の未結集の經・十方世界の塵に同ずる
諸経の勝劣・浅深・難易・掌中に在り無量千万億の中に豈
釈迦如来の所説の諸経を漏らす可けんや已説・今説・当説の
年限に入らざる諸経之れ有るべきや願わくば末代の諸人且らく
諸宗の高祖の弱文無義を閣きて釈迦・多宝・十方諸仏の
強文有義を信ず可し、何に況や諸宗の末学・偏執を先と為し
末代の愚者人師を本と為して經論を抛つ者に依憑すべきや、
故に法華の流通たる雙林最後の涅槃經に仏・迦葉童子菩薩に遺言
して言く「法に依つて人に依らざれ義に依つて語に依らざれ智
に依つて識に依らざれ了義經に依つて不了義經に依らざれ」と
云云。

予世間を見聞するに自宗の人師を以て三昧発得智慧第一と称す

れども無徳の凡夫として実経に依つて法門を信ぜしめず不了義
の観経等を以て時機相応の教と称し了義の法華・涅槃を闇いて
譏つて理深解微の失を付け如来の「遺言に背いて」「人に依つて法
に依らざれ・語に依つて義に依らざれ・識に依つて智に依らざ
れ・不了義経に依つて了義経に依らざれ」と談ずるに非ずや、
請い願わくば心有らん人は思惟を加えよ如来の入滅は既に二千
二百余の星霜を送れり文殊・迦葉・阿難・経を結集して已後・
四依の菩薩重ねて出世し論を造り経の意を申ぶ末の論師に至つて
漸く誤り出来す亦訳者に於ても梵漢未達の者・権教宿習の人
有つて実の経論の義を曲げて権の経論の義を存せり、之に就て
亦唐土の人師・過去の権教の宿習の故に権の経論心に叶う間
・実経の義を用いず・或は少し白義に違う文有れば理を曲げて

会通えつうを構もえ以もつて自身じしんの義ぎに叶かなわしむ、設たい後いに道理どうりと念おもうと雖いえども
・或あるは名利みょうりに依より・或あるは檀那だんなの歸依きえに依よつて權宗ごんしゅうを捨すてて実宗じつしゅう
に入いらず、世間せけんの道俗どうぞく亦また無智むちの故ゆえに理非りひを弁わきま
法よに依たらず設たい惡法あくほうたりと雖いえども多人いへんの邪義じやぎに随したがつて一人ひとりの実說じつせつに
依よらず、而しかるに衆生しゅじやうの機多おほくは流轉るてんに随したがう設たい出離しゅつりを求もとむとも
亦多またた分ぶん

は權教ごんきやうに依よる、但恨うらむらくは惡業あくごうの身・善ぜんに付つけ惡あくに付つけ生死しやうじ
を離がれ難がたきのみ、然しかりと雖いえども今いまの世よの一切いっさいの凡夫ぼんぷ設たい今生こんじやうを損そん
すいへどと雖いえども上うへに出いす所ところの涅槃經ねはんきやう第九くわうの文ぶんに依よつて且しからく法華ほつけ・涅槃ねはん
を信しんぜよ其そのの故ゆえは世間せけんの淺事せんじすら展轉てんでん多おほくき時ときは虚こは多おほく實じつは少すくし
況いはんややぶつぽう佛法ぶつぽうの深義じんぎに於おいてをや、如來にやらいの滅後めつご二千余年ふたにせんねんの間・佛法ぶつぽうに
邪義じやぎを副そえ來きり万まんに一いちにも正義せいぎ無なきか一代いちだいの聖教しやうきやう多おほく分ぶんは誤あやり

有るか、所以に心地觀經の法爾無漏の種子・正法華經の属累の
経末・婆沙論の一十六字・撰論の識の八九・法華論と妙法華經
との相違・涅槃論の法華煩惱所汚の文法相宗の定性無性の不
成仏・撰論宗の法華經の一名南無の別時意趣・此等は皆訳者
人師の誤りなり、此の外に亦四十余年の経經に於て多くの誤り
有るか設け法華・涅槃に於て誤有るも誤無きも四十余年の
諸經を捨てて法華・涅槃に隨う可し其の証・上に出し了んぬ
況や誤り有る諸經に於て信心を致す者・生死を離るべきや。

大文の第二に正像末に就て仏法の興廢有ることを明すとは、
之に就て二有り、一には爾前四十余年の内の諸經と浄土の
三部經と末法に於て久住・不久住を明す、二には法華・涅槃と
浄土の三部經並に諸經との久住・不久住を明す。

第一に爾前四十余年の内の諸経と浄土の三部経と末法に於て

久住・不久住を明すとは、問うて云く如来の教法は大小・浅深

・勝劣を論ぜず但時機に依つて之を行ぜば定めて利益有るべき

なり、然るに賢劫・大術・大集等の諸経を見るに仏滅後・二千

余年已後は仏法皆滅して但・教のみ有つて行証有るべからず、

随つて伝教大師の末法灯明記を開くに我延暦二十年辛巳一千七

百五十歳（二説なり）延暦二十年より已後亦四百五十余歳なり既に

末法に入れり、設い教法有りと雖も行証無けん、然るに於て

は仏法を行ずる者・万が一も得道有り難きか、然るに雙觀經の

「当来の世・経道滅尽せんに我慈悲哀愍を以て特り此の経を

留め止住せんこと百歳ならん其れ衆生の斯の経に値うこと有ら

ん者は意の所願に随つて皆得道す可し」等の文を見るに釈迦如来

いちだい しょうきょう みなめつじん
一代の聖教 皆滅尽の後・唯特り雙觀教の念仏のみを留めて
しゅじょう やく べ おわ
衆生を利益す可しと見え了んぬ。

いしゅ よ
此の意趣に依つて粗浄土家の諸師の釈を勘うるに其の意無きに
あら ぞうしゅく ぜん こうこん まつぼう こ こじよくあくせ ただじょうど
非ず、道綽禪師は「当今末法は是れ五濁惡世なり唯浄土の一門

のみ通入すべき路なり」と書し、善導和尚は「万年に三宝滅して
ぜんどう わじょう さんぼう

此の経のみ住すること百年なり」と宣べ、慈恩大師は「末法万年
よきよう ことごと みだ りもつ ひとえ のべ じおん だいし まつぼう
に余経悉く滅し弥陀の一教利物偏に増さん」と定め、日本国の

叡山の先徳慧心僧都是一代聖教の要文を集めて末代の指南を教
えいざん せんとく えしん そうず いちだい しやうきよう ようぶん まつだい しなん
ゆる往生要集の序に云く「夫れ往生極樂の教行は濁世末代

の目足なり道俗貴賤誰か帰せざる者あらん但し顕密の教法は
もくそく どうそく きせん いわ そ おうじやうごくらく きやうぎよう じよくせ まつだい
其の文一に非ず事理の業因其の行惟れ多し利智精進の人は未だ

難しと為す予が如き頑魯の者豈敢てせんや」乃至・次下に云く
がた せ こと がんろ あに あえて ないし つぎしも いわ

難しと為す予が如き頑魯の者豈敢てせんや」乃至・次下に云く

「就中念仏の数は多く末代経道滅尽の後の濁悪の衆生を利す

る計りなり」と、総じて諸宗の学者も此の旨を存す可し殊に天台

一宗の学者誰か此の義に背く可けんや如何、答えて云く爾前

四十余年の経経は各時機に随つて而も興廃有るが故に多分は

浄土の三部経より已前に滅尽有る可きか、諸経に於ては多く

三乘現身の得道を説く故に末代に於ては現身得道の者之少きな

り十方の往生浄土は多くは末代の機に蒙らしむ、之に就て西方

極楽は娑婆隣近なるが故に最下の浄土なるが故に日輪東に出で西

に没するが故に諸経に多く之を勧む、随つて浄土の祖師のみ

独り此の義を勧むるのみに非ず天台・妙楽等も亦爾前の経に

依るの日は且らく此の筋あり、亦独り人師のみに非ず竜樹・

天親も此の意有り、是れ一義なり、亦仁王経等の如きは浄土の

三部經より尚久く末法万年の後・八千年住す可しとなり、故に
爾前の諸經に於ては一定すべからず。

第二に法華・涅槃と浄土の三部經との久住・不久住とを明さ
ば、問うて云く法華・涅槃と浄土の三部經と何れが先に滅すべき
や、答えて云く法華・涅槃より已前に浄土の三部經は滅す可きな
り、問うて云く何を以て之を知るや、答えて云く無量義經に
四十余年の大部の諸經を挙げ了つて未顕真実と云う故に雙觀經
等の「特り此の經を留む」の言は皆・方便なり虚妄なり、華嚴・
方等・般若・觀經等の速疾歴劫の往生成仏は無量義經の実義
を以て之を檢うるに無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐれども終に
無上菩提を成ずることを得ず、乃至・陰き逕を行くに留難多きが
故にと云う經なり、往生成仏俱に別時意趣なり、大集・雙觀經

等の住滅じゅうめつの先後せんごは皆隨宜みなずいきの一説なり、法華經ほけきょうに來らざる已前いぜんは

彼の外道げどうの説に同じ、譬たとえば江河こうかの大海たいかいに趣おもむかず民臣みんしんの大王だいおうに

随したがわざるが如ごとし、身を苦くるしめ行ぎやうを作すとも法華ほっけ・涅槃ねはんに至いたらずん

ば一分いちぶんの利益りやく無なくく有ゆう因無果いんむかの外道げどうなり、在世滅後ざいせめつごと俱ともに教有ぎやうつて人

無なくく・行有ぎやうつて証無しやうきなり諸木しよもくは枯からるると雖いえども松しょう柏はくは萎しほまず

衆草しゅうそうは散ると雖いえども鞠竹くわくちやくは変かはぜず法華經ほけきょうも亦復またまた是かくくの如ごとし釈尊しやくそんの

三説たほう・多宝しやうみやうの証明しよぶつ・諸仏ぜつそうの舌相偏しやうひとえりに令法久住りやうぼうくじゅうに在あるが故なり。

問いうて云いく諸經滅尽しよきやうめつじんの後特ひとり法華經ほけきょうのみ留べる可しやうもんき証文い如何いかん、

答いえて云いく法華經ほけきょうの法師品ほうしほんに釈尊しやくそん自みら流通りつづせしめて云いく「我が

所説しよせつの經典きやうてん無量千萬億きやうてんむりやうせんまん已すに説とき今説とき當まさに説しかかん而そも其いの中に

於おいて此この法華經ほけきやう最もも為なれ難信難解なんしんなんげなり」と云云、文の意いちだいは一代五

十年いこんとうの已今當いこんとうの三説さいだいに於いて最第一さいだいの經なり、八万聖教はちまんしやうきやうの中に

殊に未来に留めんと欲して説き給えるなり、故に次の品に多宝
如来は地より涌出し分身の諸仏は十方より一処に來集し釈迦
如来は諸仏を御使として八方・四百万億那由他の世界に充滿せ
る菩薩・二乘・人天・八部等を責めて多宝如来並に十方の諸仏
・涌出來集の意趣は偏に令法久住の爲なり、各三説の諸經
滅尽の後・慥に未來五濁難信の世界に於て此の經を弘めんと
誓言を立てよと云える時に二万の菩薩・八十万億那由他の菩薩・
各誓狀を立てて云く「我身命を愛せず但無上道を惜む」と、千
世界の微塵の菩薩・文殊等皆誓つて云く「我等・仏の滅後に於て、
乃至・當に広く此の經を説くべし」と云云、其の後・仏十喻を
挙げ給う、其の第一の喩は川流江河を以て四十余年の諸經に
譬え法華經を以て大海に誓う、末代濁惡の無慚無愧の大早・の

時・四味の川流江河は渴ると雖も法華經の大海は減少せず等と
説き了つて、次下に正しく説いて云く「我滅度の後・後の五百歳
の中に広宣流布し閻浮提に於て断絶せしむること無けん」と定め
了んぬ。

つらつら

倩文の次第を案ずるに我滅度後の次の後の字は四十余年の

しよきようめつじん

諸經滅尽の後の後の字なり、故に法華經の流通たる涅槃經に

いわ

云く「応に無上の仏法を以て諸の菩薩に付すべし諸の菩薩は善能

もんどう

く問答するを以てなり是くの如き法宝は則ち久住することを得・

むりよう

無量千世にも増益熾盛にして衆生を利安すべし」已上此の如き等

ほっけ

の文は法華・涅槃は無量百歳にも絶ゆ可からざる經なり、此の義

ねはん

を知らざる世間の学者・大集権門の五五百歳の文を以て此の經に

じようど

同じ浄土の三部經より已前に滅尽す可しと存ずる立義は一經の

せんごきじん
先後起尽を忘れたるなり。

問うて云く上に挙ぐる所の曇鸞・道綽・善導・慧心等の諸師
みなほつけ
は皆法華・真言等の諸經に於て末代不相応の釈を作る之に依つ
げんくう
て源空並に所化の弟子・法華・真言等を以て雜行と立て難行道
うと
と疎み、行者をば群賊・惡衆・惡見の人等と罵り、或は祖父
くつ
が履に類しの語・或は絃歌等にも劣ると云うの語其の意趣を
たず
尋ぬれば偏に時機不相応の義を存するが故なり、此等の人師の釈
ひとえ
をば如何に之を会すべきや、答えて云く釈迦如来一代五十年の
せつきよう
説教・一仏の金言に於て権実二教を分ち權經を捨てて実經に
ぶつごけんねん
入らしむる仏語顯然たり、此に於て若但讚仏乘・衆生没在苦
どうり
の道理を恐れ且らく四十二年の權經を説くと雖も若以小乘化
ないしおいちにん
・乃至於一人・我則墮慳貪の失を脱れんが為に入大乘為本の義
がそくだけんどん
とが
まぬか
ため
だいじよういほん

を存し本意を遂げ法華經を説き給う。

然るに涅槃經に至つて我滅度せば必ず四依を出して權實二教を

弘通せしめんと約束し了んぬ、故に竜樹菩薩は如來の滅後八百

年に出世して十住毘婆沙等の權論を造りて華嚴・方等・般若等

の意を宣べ大論を造りて若法華の差別を分ち、天親菩薩は如來

の滅後・九百年に出世して俱舍論を造りて小乘の意を宣べ

唯識論を造りて方等部の意を宣べ最後に仏性論を造りて法華・

涅槃の意を宣べ了教不了教を分ちて敢て仏の遺言に違わず、

末の論師並に訳者の時に至つては一向に權經に執するが故に

實經を會して權經に入れ權實雜亂の失・出来せり、亦人師の

時に至つては各依憑の經を以て本と為すが故に余經を以て權經

と為す是より彌仏意に背く。

而るに浄土の三師に於ては鸞・綽の二師は十住毘婆沙論に
依つて難易・聖浄の二道を立つ若し本論に違して法華真言等を
以て難易の内に入れば信用に及ばじ、随つて浄土論註並に安樂
集を見るに多分は本論の意に違わず、善導和尚は亦浄土の三部經
に依つて弥陀称名等の一行一願の往生を立つる時・梁・陳・
隋・唐の四代の撰論師総じて一代聖教を以て別時意趣と定む、
善導和尚の存念に違するが故に撰論師を破する時・彼の人を
群賊等に誓う順次生の功德を賊するが故に其の所行を難行と
称することは必ず万行を以て往生の素懷を遂ぐる故に此の人を
責むる時に千中無一と嫌えり、是の故に善導和尚も雜行の言の
中に敢えて法華・真言等を入れず。

日本国の源信僧都は亦叡山第十八代の座主・慈悲大師の御弟子

なり多くの書を造れることは皆法華を弘めんが為なり、而るに
往生要集を造る意は爾前四十余年の諸經に於て往生・成仏
の二義有り成仏の難行に對して往生易行の義を存し往生の業
の中に於て菩提心觀念の念仏を以て最上と為す、故に大文第十
の問答料簡の中・第七の諸行勝劣門に於ては念仏を以て最勝
と為し次下に爾前最勝の念仏を以て法華經の一念信解の功德に
對して勝劣を判ずる時・一念信解の功德は念仏三昧より勝るる
百千万倍なりと定め給えり、當に知るべし往生要集の意は
爾前最上の念仏を以て法華最下の功德に對して人をして法華經
に入らしめんが為に造る所の書なり、故に往生要集の後に
一乗要決を造つて自身の内証を述ぶる時・法華經を以て本意と
為すなり。

而るに源空並に所化の衆・此の義を知らざるが故に法華・真言
を以て三師並に源信所破の難聖雜並に往生要集の序の顕密の中
に入れて三師並に源信を法華・真言の謗法の人と為す、其の上・
日本国の一切の道俗を化して法華・真言に於て時機不相応の旨を
習わしめ在家・出家の諸人に於て法華・真言の結縁を留む豈仏の
記し給う所の「惡世中比丘邪智心諂曲」の人に非ずや、亦則ち
一切世間の仏種を斷ずの失を免る可けんや。

其上・山門・寺門・東寺・天台並に日本国中に法華・真言を
習う諸人を群賊・惡衆・惡見の人等に誓うる源空が重罪何れの
劫にか其の苦果を経尽す可きや、法華經の法師品に持經者を
罵る罪を説いて云く「若し惡人有つて不善の心を以て一劫の中に
於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せん其の罪尚輕し若し人・一つ

の悪言を以て在家・出家の法華經を讀誦する者を毀☆せん其の罪
はなほだ

甚だ重し

經文

一人の持者

を罵る罪

すら尚是くの如し

況や書を

造り日本國の諸人に罵らしむる罪をや、

何に況や此の經を

千中無一と定めて法華經を行ずる人に疑を生ぜしむる罪をや、

何に況や此の經を捨てて觀經等の權經に遷らしむる謗法の罪をや、

願わくば一切の源空が所化の四衆頓に選択集の邪法を捨て

て忽に法華經に遷り今度阿鼻の炎を脱れよ。

問うて云く正しく源空が法華經を誹謗する証文如何、

答えて云く法華經の第二に云く「若し人信ぜずして斯の經を毀謗せば則

一切世間の仏種を断ぜん」經文不信の相貌は人をして法華經を

捨てしむればなり、故に天親菩薩の仏性論の第一に此の文を

釈して云く「若し大乘に憎背する者・此は是れ一闡提の因なり

云く法華經の第二に云く「若し人信ぜずして斯の經を毀謗せば則

一切世間の仏種を断ぜん」

經文

不信の相貌

は人をして法華經を

捨てしむればなり、故に天親菩薩の仏性論の第一に此の文を

釈して云く「若し大乘に憎背する者・此は是れ一闡提の因なり

云く法華經の第二に云く「若し人信ぜずして斯の經を毀謗せば則

一切世間の仏種を断ぜん」

經文

不信の相貌

は人をして法華經を

捨てしむればなり、故に天親菩薩の仏性論の第一に此の文を

釈して云く「若し大乘に憎背する者・此は是れ一闡提の因なり

云く法華經の第二に云く「若し人信ぜずして斯の經を毀謗せば則

一切世間の仏種を断ぜん」

經文

不信の相貌

は人をして法華經を

捨てしむればなり、故に天親菩薩の仏性論の第一に此の文を

釈して云く「若し大乘に憎背する者・此は是れ一闡提の因なり

しゅじょう

衆生をして此の法を捨てしむるを為の故に」論文謗法の相貌は

此の法を捨てしむるが故なり、選択集は人をして法華經を捨て

しむる書に非ずや閣拋の二字は仏性論の憎背の二字に非ずや、

またほけきようひほう そうみよう よんじゅうよねん しよきよう ごと しようぜんじようぶつ
亦法華經誹謗の相貌は四十余年の諸經の如く小善成仏を以て

べつじいしゅ 別時意趣と定むる等なり。

ゆえ てんだい 故に天台の釈に云く「若し小善成仏を信ぜずんば則世間の

ぶつしゅ 仏種を断ずるなり」妙樂重ねて此の義を宣べて云く「此の經は

あまねくろくどう 遍く六道の仏種を開す若し此の經を謗せば義・断に当るなり」

しやか たほう 釈迦・多宝・十方の諸仏・天親・天台・妙樂の意の如くんば

げんくう 源空は謗法の者なり所詮選択集の意は人をして法華・真言を捨

てしめんと定めて書き了んぬ謗法の義疑い無き者なり。

せんちやくしゅうほう 大文の第三に 選択集 謗法の縁起を出さば、問うて云く何れの

証拠を以て源空を謗法の者と称するや、答えて云く、せんちやくしゅう選択集の

現文を見るに一代聖教を以て二つに分つ一には聖道・難行・

難行・二には浄土・易行・正行なり、其の中に聖・難・雑と

云うは華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃・大日経等なり、取意浄

・易・正とは浄土の三部経の称名、念仏等なり、取意聖・難・雑の

失を判ずるには末代の凡夫之行ぜば百の時に希に一二を得・千

の時に希に三五を得ん・或は千が中に一も無し・或は群賊・

悪衆・邪見・悪見・邪雑の人等と定むるなり、浄・易・正の得

を判ずるには末代の凡夫之行ぜば十は即十生し百は即百生

せん等なり、謗法の邪義是なり。

問うて云く一代聖教を聖道・浄土・難行・易行・正行・

難行と分ち其の中に難・聖・雑を以て時機不相応と称すること

源空一人の新義に非ず曇鸞・道綽・善導の三師の義なり、此亦
此等の大師の私の案に非ず其の源は竜樹菩薩の十住
毘婆沙論より出でたり、若し源空を謗法の者と称せば竜樹菩薩
並に三師を謗法の者と称するに非ずや、答えて云く竜樹菩薩並
に三師の意は法華已前の四十余年の経経に於て難易等の義を
存す、而るに源空より已来竜樹並に三師の難行等の語を借り
て法華・真言等を以て難・雜等の内に入れぬ、所化の弟子・師の
失を知らずして此の邪義を以て正義と存じ此の国に流布せしむる
が故に國中の万民悉く法華・真言に於て時機不相応の想を
作す、其の上世間を貧る天台・真言の学者世の情に随わんが為に
法華・真言に於て時機不相応の悪言を吐いて選択集の邪義を
扶け、一旦の欲心に依つて釈迦・多宝並に十方諸仏の御評定の

「**令法久住・於閻浮提広宣流布**」の誠言を壊り一切衆生をして

さんぜじゅつぽう

三世十方の諸仏の舌を切る罪を得せしむ、偏に是れ惡世の中の

比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為得たりと謂い、乃至・

あつきそ

惡鬼其の身に入り仏の方便隨宜所説の法を知らざる故なり。

問うて云く竜樹菩薩並に三師は法華・真言等を以て難・聖・

いわ

雜の中に入れざりしを源空私に之を入れるとは何を以て之を知る

や、答えて云く遠く余処に証拠を尋ぬ可きに非ず即選択集に

これ之を見たり、問うて云く其の証文如何、答えて云く選択集の

だいいち

第一篇に云く道綽禪師・聖道・浄土の二門を立て而して聖道

を捨てて正しく浄土に帰するの文と約束し了つて、次下に安樂集

を引いて私の料簡の段に云く「初に聖道門とは之に就て二有り

まい

・一には大乘・二には小乗なり大乘の中に就て顕密・権実等

だいいち

・二には小乗なり大乘の中に就て顕密・権実等

だいいち

・二には小乗なり大乘の中に就て顕密・権実等

だいいち

・二には小乗なり大乘の中に就て顕密・権実等

の不同有りふどうと雖もいえど今・此の集の意は唯ただ頭大及おほ以ごんびだい権大そんを存ゆえす故に
歴劫りやつこう迂回うえの行に当る之に準じゆんじて之を思これうに応まさに密大みつだい及おほ以じつびだい実大
をも存そんすべし」已上せんちやくしゅう選せん択ちやく集の文なり、此の文の意は道どう綽しゆく禪ぜん師の
安樂集あんらくの意は法華ほつけい已前いぜんの大小乘だいしやうじやう經に於おいて聖道しやうどう・淨土じやうどの二門を
分わかつと雖も我私いえどに法華ひそか・真言ほつけ等しんこんの実大じつだい・密大みつだいを以もつて四十余年よんじゅうよねんの
権大乘ごんだいじやうに同じて聖道門しやうどうもんと称しょうす「準之思之」の四字これ是なり、此の
意に依よるが故ゆえに亦また曇鸞どんらんの難易なんいの二道にどうを引く時亦私またひそかに法華ほつけ・真言しんこんを
以もつて難行道なんぎやうどうの中に入れ善導ぜんどう和尚わじやうの正しやう雜ぞう二行わかを分わかつ時またひそかも亦私に
法華ほつけ・真言しんこんを以もつて雜行ぞうぎやうの内に入る總せんちやくしゅうじて選せん択ちやく集の十六段に
亘わたつて無量むりやうの謗法ほうほうを作なす根源こんげんは偏ひとえに此の四字より起おこる誤あやまりれるか
な畏おそろししきかな。

爰ここに源空げんくうの門弟もんてい・師じの邪義じゃぎを救いつて云いわく諸宗しよしゆうの常ならの習たいとい設い

きょうろん

しょうもん

いえど ぎらい

あつ

いっしょ

しか

経論の証文無しと雖も義類の同じきを聚めて一処に置く而も

せんちやくしゅう

ほつけ

しんごん

そつぎよう

しょうぎよう

しょうぎよう

選択集の意は法華・真言等を集めて雑行の内に入れ正行に

これ

ひとえ

ほつたい

きり

あら

ふうせい

対して之を捨つ偏に經の法体を嫌うに非ず但風勢無き末代の

しゅじよう

じようぼつ

ほんぶ

ほつたい

きり

あら

ふうせい

衆生を常没の凡夫と定め此の機に易行の法を撰ぶ時・称名の

ねんぶつ

もつそ

あたり

いぎよう

もつ しぎよう

まさ

ごんじつ

念仏を以て其の機に当て易行の法を以て諸教に勝ると立つ権実

せんじん

しょうれつ

せん

あら

そつぎよう

きり

あら

ごんじつ

浅深の勝劣を詮ずるに非ず、雑行と云うも嫌つて雑と云うに

あら

ふじゆん

そ

もろもろきょうろん

しよし

しよし

非ず雑と云うは不純を雑と云う其の上諸の経論並に諸師も此の

あら

ゆえ

えいざん

せんごく

おうじようしゅう

ひとえ

こ

こ

意無きに非ず故に叡山の先徳の往生要集の意偏に是の義なり。

ゆえん

おうじようしゅう

ついで

いわ

けんみつ

きようほう

そ

あら

所以に往生要集の序に云く「顕密の教法は其の文一に非ず

じり

ごういんそ

こ

りち

しょうじん

いま

がた

せ

事理の業因其の行惟れ多し利智精進の人は未だ難しと為す予が

ごと

がんろ

あにあえて

かく

ゆえ

ねんぶつ

よ

と云云、

如き頑魯の者豈敢てせんや是の故に念仏の一門に依る」と云云、

えしん

せんごく

ほつけ

しんごん

さ

あら

あら

ひとえ

われら

此の序の意は慧心先徳も法華・真言等を破するに非ず但偏に我等

頑魯がんろの者の機けに當あたつて法華ほっけ・真言しんこんは聞き難かたく行いじ難がたきが故ゆえに

我身鈍根がしんどんこんなるが故ゆえなり敢あえてて法体ほつたいを嫌きらうに非あらず、其その上序じやうしゆより已い外げ

しょうしゅう

正宗しやうしゅうに至いたるまで十門じゅうもん有り大文だいぶん第八だいぱちの門もんに述いべて云いく「今いま念仏ねんぶつを

すす

勸すすむることこ是これ余よの種種しゆじゆの妙行めうぎやうを遮しやするに非あらず只是ただこれ男女なんよ・貴賤きせん

ぎやうじゆうざが

・行住坐臥ぎやうじゆうざがを簡えらばず時処じしよしよえん諸縁しよえんを論ろんぜず之これを修しゆするに難なんからず乃ないし至いた

りんじゆう

・臨終りんじゆうには往生おうじやうを願求がんぐするに其その便宣びんせんを得えること念仏ねんぶつには如しか

ず」已上これら此等この文ぶんを見るに源空げんくうの選せん集ちやくしゆうと源信げんしんの往生要集おうじやうしゆうと

一卷いつけん・三卷さんけんの不同ふどう有ありと雖いえども一代いちだい聖教しやうきやうの中なには易行いぎやうを撰えんで

末代まつだいの愚人ぐにんを救きうわんと欲ほする意趣いしゆは但ただ同じ事おななじなり、源空げんくう上人しやうにん・

ほつけ

法華ほっけ・真言しんこんを難行なんぎやうと立てて惡道あくどうに墮だせば慧心えしん先徳せんとくも亦また此この失とがを

まぬら

免まぬるべからず如何いかん、答こたえて云いく汝なんじ・師しの謗法ほうぼうの失とがを救きうわんが

ため

為ために事を源信げんしんの往生要集おうじやうしゆうに寄よせて謗法ほうぼうの上に弥いよいよ重罪じゆうざいを招まねく

者なり其の故は釈迦如来五十年の説教に総じて先き四十二年の

意を無量義經に定めて云く「險逕を行くに留難多き故に」と

無量義經の已後を定めて云く「大直道を行くに留難無きが故に」

と仏、自ら難易・勝劣の二道を分ちたまえり、仏より外等覺已

下末代の凡師に至るまで自義を以て難易の二道を分ち此の義に

背く者は外道魔王の説に同じきか、随つて四依の大士・竜樹

菩薩の十住毘婆沙論には法華已前に於て難易の二道を分ち敢て

四十余年已後の經に於て難行の義を存せず、其の上若し修し

易きを以て易行と定めば法華經の五十展轉の行は称名念仏より

行じ易きこと百千万億倍なり、若し亦勝を以て易行と定めば分別

功德品に爾前四十余年の八十万億劫の間の檀・戒・忍・進・念仏

三昧等先きの五波羅蜜の功德を以て法華經の一念信解の功德に比

するに一念信解の功德は念仏三昧等の先きの五波羅蜜に勝る事
百千万億倍なり、難易・勝劣と云い行浅功深と云い觀經等の
念仏三昧を法華經に比するに難行の中の極難行・劣が中の極劣
なり。

其の上惡人・愚人を扶くこと亦教の淺深に依る阿含十二年の
戒門には現身に四重五逆の者に得道を許さず、華嚴・方等・般若
雙觀經等の諸經は阿含經より教深き故に勸門の時は重罪の者
を摂すと雖も猶戒門の日は七逆の者に現身の受戒を許さず、然り
と雖も決定性の二乗・無性の闡提に於て誠勸共に之を許さず、
法華・涅槃等には唯五逆・七逆謗法の者を摂するのみに非ず亦
定性・無性をも摂す、就中末法に於ては常没の闡提之多し豈
觀經等の四十余年の諸經に於て之を扶く可けんや無性の常没

・決定性けつじょうの二乗にじょうは但法華ほっけ・涅槃ねはん等に限り、四十余年よんじゅうよねんの經に依よる人師にんしは彼の經の機と取る此この人は未いまだ教相きょうそうを知らざる故なり。

但ただし往生要集おうじょうようしゅうは一往序分いちおうじぶんを見る時は法華ほっけ・真言等しんごんを以もつて顯密けんみつの内に於おいて殆ほとんど末代まつだいの機に叶かなわずと書しるすと雖いえども文に入いつて委細いさいに一部三卷しまつの始末しまつを見るに、第十の問答料簡もんどうりょうけんの下に正まさしく諸行しよぎようの勝劣しょうれつを定さだむる時・觀かん仏三昧ぶつさんまい・般舟三昧はんじゆさんまい・十住毘婆沙論じゅうじゅうびばしやろん・寶積ほうしやく・大集等だいしつの爾前にぜんの經論きやうろんを引ひいて一切いっさいの万行まんぎように對たいして念仏ねんぶつ三昧さんまいを以もつて王三昧さんまいと立て了おわぬ、最後さいごに一つの問答もんどう有あり爾前にぜんの禪定ぜんじよう・念仏三昧ねんぶつさんまいを以もつて法華經ほけきやうの一念信解いちねんしんげに對たいするに百千万億倍せんまん劣せうると定さだむ、復問またを通とほずる時念仏三昧ねんぶつさんまいを万行まんぎように勝まさると云いうは爾前にぜんの当分とうぶんなりと云云、当まさに知るべし慧心えしんの意は往生要集おうじょうようしゅうを造

つて末代の愚機を調べて法華經に入れんが爲なり、例せば仏の
よんじゅうよねん もつごんき とこの ほけきよう
四十余年の経を以て権機を調べ法華經に入れ給うが如し。

故に最後に一乗要決を造る其の序に云く「諸宗の権実は

古来の諍いなり俱に經論に拠て互いに是非を執す、余・皆・

方便の歳冬十月病中に歎いて云く仏法に遇うと雖も仏意を了せ

ず若し終に手を空うせば後悔何ぞ追わん、爰に經論の文義・

賢哲の章疏・或は人をして尋ねしめ・或は自ら思忖し全く自宗

・他宗の偏党を捨つる時・専ら権智実智の深奥を深ぐるに終に

一乗は真実の理・五乗は方便の説を得る者なり、既に今生の

蒙を開く何ぞ夕死の恨を残さんや」已上此の序の意は偏に慧心の

本意を顯すなり、自宗他宗の偏党を捨つるの時浄土の法門を捨て

ざらんや一乗は真実の理と得る時専ら法華經に依るに非ずや、

げんしんそうず えいかん きのえさる おうじょうようしゅう
源信僧都は永観二年甲申の冬十一月往生要集を造り寛弘二年

ひのえうま いちじょうようけつ つくそ ちゅうげん

丙午の冬十月の比・一乗要決を作る其の中間二十余年なり権

を先にし実を後にする宛も仏の如く亦竜樹・天親・天台等の

ごと なんじおうじょうようしゅう たより

如し、汝往生要集を便りとして師の謗法の失を救わんと欲す

れども敢えて其の義類に似ず義類の同じきを以て一処に聚むとな

らば何等の義類同なるや、華嚴經の如きは二乗界を隔つるが故に

じゅつかいごく ほうとう はんによ しよきよう またじゅつかいごく ゆる かんきよう

十界互具無し方等・般若の諸經は亦十界互具を許さず觀經等の

おうじょうごくらく またほうべん おうじょう じょうぶつ おうじょうとも ほうききよう ごと

往生極樂も亦方便の往生なり成仏往生俱に法華經の如き

おうじょう みなべつじいしゅ おうじょうじょうぶつ

往生に非ず皆別時意趣の往生成仏なり。

其の上源信僧都の意は四威儀に行じ易き故に念仏を以て易行と

云い四威儀に行じ難きが故に法華を以て難行と称せば天台・

みょうらく 妙樂の釈を破する人なり所以に妙樂大師の末代の鈍者無智の者

は 妙樂の釈を破する人なり所以に妙樂大師の末代の鈍者無智の者

妙樂の釈を破する人なり所以に妙樂大師の末代の鈍者無智の者

妙樂の釈を破する人なり所以に妙樂大師の末代の鈍者無智の者

妙樂の釈を破する人なり所以に妙樂大師の末代の鈍者無智の者

妙樂の釈を破する人なり所以に妙樂大師の末代の鈍者無智の者

妙樂の釈を破する人なり所以に妙樂大師の末代の鈍者無智の者

等の法華經を行ずるに普賢菩薩並に多宝・十方の諸仏を見奉る
を易行と定めて云く「散心に法華を誦し禪三昧に入らず坐立行
・一心に法華の文字を念ぜよ」已上此の釈の意趣は末代の愚者を
摂せんが為なり散心とは定心に対する語なり誦法華とは八卷・
一卷・一字・一句一偈・題目一心一念隨喜の者五十展轉等なり
坐立行とは四威儀を嫌わざるなり一心とは定の一心に非ず理の
一心に非ず散心の中の一心なり念法華文字とは此の經は諸經の
文字に似ず一字を誦すと雖も八万宝蔵の文字を含み一切諸仏の
功德を納むるなり天台大師玄義の八に云く「手に巻を執らざれど
も常に是の經を読み口に言声・無けれども☆く衆典を誦し仏・
說法せざれども恒に梵音を聞き心に思惟せざれども普く法界を照
す」已上此の文の意は手に法華經一部八巻を執らざれども是の經

を信ずる人は昼夜十二時の持経者なり口に読経の声を出さざれども法華経を信ずる者は日日・時時・念念に一切経を読む者なり。

仏の入滅は既に二千余年を経たり然りと雖も法華経を信ずる

者の許に仏の音声を留めて時時・刻刻・念念に我死せざる由を

聞かしむ心に一念三千を觀ぜざれども・く十方法界を照す者な

り此等の徳は偏に法華経を行ずる者に備わるなり、是の故に

法華経を信ずる者は設い臨終の時・心に仏を念ぜず口に経を誦

せず道場に入らざれども心無くして法界を照し音無くして

一切経を誦し巻軸を取らずして法華経八巻を拳る徳之有り是れ

豈權教の念仏者の臨終・正念を期して・十念の念仏を唱えんと

欲する者に・百千万倍勝るる易行に非ずや、故に天台大師文句

の十に云く「都て諸教に勝るが故に随喜功德品と云う」妙楽みょうらく

大師だいしの法華經ほけきようは諸經しよきようより淺機あさきを取る而るを人師し此にんしの義ぎを弁わえざ

る故ゆえに法華經ほけきようの機きを深く取る事を破はして云く「恐らくは人謬あやまつて

解げする者初心しよしんの功德くどくの大なることを測はからずして

功こうを上位ゆずに推り此しよしんの初心あなどを蔑ゆえる故に今彼の行は淺く功は深きこと

を示して以て經力を顯あらわす」已上いけんきようりき以顯經力の釈しゃくの意趣いしゆは法華經ほけきようは

觀經等かんきようの權經ごんきように勝れたるが故ゆえに行は淺く功は深し淺機あさきを摂おさむる

故なり、若し慧心えしんの先德せんとく・法華經ほけきようを以て念仏ねんぶつより難行なんぎようと定め

愚者頑魯ぐしやがんろの者を摂せつせずと云わば恐らくは逆路伽耶陀ぎやくろがやだの罪つみを招まねかざ

らんや、恐人謬解くにんみようげの内に入らざらんや。

総じて天台てんだい・妙樂みょうらくの三大部たいぶの本末ほんまつの意には華經けきようは諸經しよきように漏もれ

たる愚者ぐしや・惡人あくにん・女人にょにん・常没闍提等じようぼつせんたいを摂せつし給たまう他師たし・仏意ぶつゐを

覺らざる故に法華經を諸經に同じ・或は地住の機を取り・或は
凡夫に於ても別時意趣の義を存す、此等の邪義を破して人天四惡
を以て法華經の機と定む、種類相對を以て過去の善惡を收む人天
に生ずる人豈過去の五戒・十善無からんや等と定め了んぬ、
若し慧心此の義に背かば豈天台宗を知れる人ならんや、而るを
源空深く此の義に迷うが故に往生要集に於て僻見を起し自ら
失ち他をも誤る者なり、適宿善有つて実教に入りながら
一切衆生を化して權教に還らしめ剩え実教を破せしむ豈
惡師に非ずや、彼の久遠下種・大通結縁の者の如き五百・三千の
塵劫を経るが如きは法華の大教を捨てて爾前の權小に遷るが
故に後に權經を捨てて六道を回りぬ不輕輕毀の衆は千劫阿鼻
地獄に墮つ、權師を信じ実經を弘むる者に誹謗を作したるが故

なり。

而るに源空我が身唯実経を捨てて権経に入るのみに非ず人を

勧めて実経を捨てて権経に入らしめ亦権人をして実経に入ら

しめず 剩え実経の行者を罵るの罪永劫にも浮び難からんか。

問うて云く十住毘婆沙論は一代の通論なり難易の二道の内に

何ぞ法華・真言・涅槃を入れざるや、答えて云く一代の諸

大乘経に於て華嚴経の如きは初頓後分有り初頓の華嚴は二乗の

成・不成を論ぜず方等部の諸経には一向に二乗・無性闡提の

成仏を斥う般若部の諸経も之に同じ総じて四十余年の諸

大乘経の意は法華・涅槃・大日経等の如くには二乗・無性の

成仏を許さず、此等を以て之を・うるに爾前・法華の相違は

水火の如し滅後の論師・竜樹・天親も亦俱に千部の論師なり

所造しよぞうの論ろんに通別つうべつの二論にろん有り通論つうろんに於おいても亦また二有ふたり四十余年よんじゅうよねんの通論つうろん
と一代いちだい五十年ごじゅうねんの通論つうろんとなり、其その差別さべつを分わかつに決定けつじよう性の二乘にじよう・
無性むしよせん闡提えんたいの成じよう・不成ふじようを以もつて論ろんの權實ごんじつを定さだむるなり、而しかるに大論だいろんは
りゅうじゆぼさつ
竜樹りゅうじゆ菩薩ぼさつの造ぞう・羅什らじゆ三藏さんざうの訳やくなり此このの論ろんにも亦また二乘にじよう作さく仏ぶつを許ゆるさ
ず之これを以もつて知しるぬ法華ほつけい已前いぜんの諸大乗しよだいじようきよう經きやうの意いを申のべたる論ろんなるこ
とを。

問いうて云いく十住じゆじゆう毘婆沙論びばしやろんの何処どこに二乘にじよう作さく仏ぶつを許ゆるさざるの文ぶん
出いでたるや、答こたえて云いく十住じゆじゆう毘婆沙論びばしやろんの第五ごに云いく「若もし声聞しやうもん
地おほ及びひやくし辟支びやくし仏ぶつ地に墮だする是これを菩薩ぼさつの死しと名なく則すなわち一切いっさいの利りを失しす
若もし地獄じごくに墮だすとも是かくの如ごとき畏おそれを生なぜじ若もし二乘にじよう地に墮だすれば
則すなわち大怖畏ふいと為なす地獄じごくの中に墮だすとも畢ひつきよう竟きやうして仏ぶつに至いたることを
得も・若もし二乘にじよう地に墮だすれば畢ひつきよう竟きやうして仏道ぶつどうを遮しやす」已上にじよう此この文ぶん二乘にじよう

作さぶつ仏ぶつを許ゆるさず宛あたかも浄じよう名みやう等の「於お仏ぶつ法ぽう中ちゆう以いう如に敗はい種しゆ」の文ぶんの如ごとし。

問もんうて云いく大だい論ろんは般はん若にや經きやうに依よつて二に乘じよう作さぶつ仏ぶつを許ゆるさず法ほ華け經きやうに

依よつて二に乘じよう作さぶつ仏ぶつを許ゆるすの文ぶん如いかん何なん、答こたえて云いく大だい論ろんのい百ひやくに云いく「問

うて云いく更いづれに何なんの法じんじんか甚じん深じんにして般はん若にやに勝すぐれたる者しやあれば而しかも

般はん若にやを以もつて阿あ難なんに属そく累るいし余よ經きやうを以もつて菩ぼ薩さつに属そく累るいするや、答こたえて

云いく般はん若にや波は羅ら蜜みつは秘ひ密みつの法ほに非あらず而しかに法ほ華け等とうの諸しよ經きやうは阿あ羅ら漢かん

の受じゆ決けつ作さぶつ仏ぶつを説ゆえんく所以ほに大だい菩ぼ薩さつ能よくく受うけて持た用とす譬たとえはやく大だい藥やく師しの

能よくく毒どくを以もつて藥なと為なすが如ごとし」と、亦また九く十じう三さんに云いく「阿あ羅ら漢かんの

成じよう仏ぶつは論ろん義ぎ者しやの知ちる所しよに非あらず唯ただ仏ぶつのみ能よくく了りようし給たまう」已こ上じやう此こ等ら

の文ぶんを以もつて之これを思おもうに論ろん師しの權ごん實じつは宛あたかも仏ぶつの權ごん實じつの如ごとし而しかるを

權ごん經きやうに依よる人にん師し猥みりに法ほ華け等とうを以もつて觀かん經きやう等とうの權ごん説せつに同おなじ法ほ華け・

涅ね槃はん等とうの義ぎを仮かりて浄じよう土ど三さん部ぶ經きやうの德とくと作なし決けつ定じやう性じやうの二に乘じよう・無む性じやう

の闡提・常没の往生を許す権実雜亂の失脱れ難し、例せば外典
の儒者・内典を賦みて外典を莊るが如し謗法の失免れ難きか仏、
自ら権実を分ち給う其の詮を探るに決定性の二乗・無性有情の
成・不成是なり、而るに此の義を弁えざる訳者・爾前の經經を
訳する時・二乗の作仏・無性の成仏を許す此の義を知る訳者は
爾前の經を訳する時・二乗の作仏無性の成仏を許さず、之に
依つて仏意を覺らざる人師も亦爾前の經に於て決定性・無性の
成仏を明すと見て法華と爾前と同じき思ひを作し・或は爾前の
經に於て決定無性を嫌う文を見・此の義を以て了義經と為し
法華・涅槃を以て不了義經と為す共に仏意を覺らず権実二經に
迷えり、此等の誤りを出さば但源空一人に限るのみに非ず天竺
の論師並に訳者より唐土の人師に至るまで其の義有り、所謂地論

師・撰論師の一代の別時意趣・善導・懷感の法華經の一名南無
仏の別時意趣・此等は皆権実を弁えざるが故に出来する所の
誤りなり、論を造る菩薩・經を訳する三蔵・三昧発得の人師猶
以て是くの如し況や末代の凡師に於てをや。

問うて云く汝末学の身として何ぞ論師並に訳者人師を破する
や、答えて云く敢えて此の難を致すこと勿れ撰論師並に善導等
の釈は権実二教を弁えずして猥りに法華經を以て別時意趣と立つ
故に天台・妙楽の釈と水火を作す間・且らく人師の相違を闇い
て經論に付て是非を☆うる時・権実の二教は仏説より出でたり
天親・竜樹重ねて之を定む、此の義に順ずる人師をば且らく
之を仰ぎ此の義に順ぜざる人師をば且らく之を用いず敢て自義を
以て是非を定むるに非ず但相違を出す計りなり。

大文の第四に謗法の者を対治すべき証文を出さば、此れに二

有り、一には仏法を以て国王・大臣並に四衆に付属することを

明し、二には正しく謗法の人・王地に処るをば対治す可き証文

を明す、第一に仏法を以て国王・大臣並に四衆に付属することを

明さば、仁王經に云く「仏・波斯匿王に告わく、乃至・是の

故に諸の国王に付属して比丘・比丘尼・清信男・清信女に付属せ

ず何を以ての故に王の威力無きが故に、乃至・此の經の三宝をば

諸の国王・四部の弟子に付属す」已上大集經二十八に云く「若し

国王有つて我が法の滅せんことを見て捨てて擁護せずんば無量世

に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失し其の国に三種の不祥の事を

出さん、乃至・命終して大地獄に生ぜん」已上

仁王經の文の如くならば仏法を以て先ず国王に付属し次に

四衆に及ぼす王位に居る君・国を治むる臣は仏法を以て先と爲し
国を治む可きなり、大集經の文の如くならば王臣等・仏道の
爲に無量劫の間・頭目等の施を施し八万の戒行を持ち無量の
仏法を學ぶと雖も国に流布する所の法の邪正を直さざれば國中
に大風・旱☆・大雨の三災起りて万民を逃脱せしめ王臣定めて
三惡に墮せん、又雙林最後の涅槃經の第三に云く「今正法を
以て諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に付屬
す、乃至・法を護らざる者をば禿居士と名く」又云く「善男子・
正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せずして応に刀劍・
弓箭・鉾槊を持つべし」又云く「五戒を受けざれども正法を
護るを爲て乃ち大乘と名く正法を護る者は応に刀劍・器械を
執持すべし」云云四十余年の内にも梵網等の戒の如くならば

國王・大臣の諸人等も一切刀杖・弓箭・矛斧鬪戰の具を畜たくわう

ことを得ず、若し此を畜たくわうる者は定めて現身に國王の位・比丘・

比丘尼の位を失い後生は三惡道の中に墮おつ可しと定めおわ了んぬ。

而るに今の世は道俗をえら択えらばず弓箭・刀杖を帶せり梵網經の

文の如くならば必ず三惡道に墮だせんこと疑無き者なり、涅槃經

の文無くんば如何にしてか之を救わん亦涅槃經の先後の文の如く

ならば弓箭・刀杖を帶たいして惡法の比丘を治し正法の比丘を

守護せん者は先世の四重五逆を滅して必ず無上道を証せんと定め

給たまう。

亦金光明經の第六に云く「若し人有つて其の国土に於て此の

經有りと雖も未だ嘗て流布せず捨離の心を生じ聴聞せんことを

樂ねがわわず亦供養し尊重し讚歎せず四部の衆の持經の人を見て亦復

尊そんちよう重ないしくようし乃あた至むりよう供養すること能むりようわす、遂われらおよに我等及び余の眷属・無量
の諸しよてん天じんじんをして此の甚深みようほうの妙法を聞くことを得かんろざらしめん甘露の
味そむに背しようほうき正法の流れを失うしない威光及いこう及び勢およ力せいりよくあ有ること無なくく悪趣あくしゅを
増長そうちようし人天にんてんを損滅そんめつし生死しやうじの河に墜おちて涅槃ねはんの路に乖そむかん世尊・
我等四王並われらしおうに諸の眷属及び藥叉等斯くかの如ことき事を見て其の国土こくどを
捨おうちて擁護こころなの心無われらからん但我等のみ是の王を捨棄しゃきするに非あらず亦
無量むりようの国土こくどを守護しゆこする諸大善神有しやだいぜんじんらんも皆悉みなことごとしやこく捨去すでせん既に捨離しゃり
し已おわりりなば其その国当まさに種種しゆじゆの災禍有さいかつて国位こくゐを喪失そうしつすべし一切いっさいの
人衆にんしゆう皆善心無なげんけん唯繫縛殺害瞋諍ただけいばくさつがいにしんじようのみ有たがいつて互あひざんてんしに相讒まげ諂まげし枉まげげ
て辜つみ無およきに及えきびばん、疫病流行えきびようりゆうこうし彗星すいせい数い出いで兩日りようじつ並び現げんじ
薄蝕恒無はくしよくく黑白こくびやくの二虹不祥ふしやうの相を表ほしながわし星流れ地動ちうごき井の内に
声こゑを發はうし暴雨惡風時節ぼううあくふうじせつに依よらず常に飢饉ききんに遭あいて苗實みようじつも成ならず

多く他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦惱を受け土地
所樂の処有る事無けん」已上。

此の經文を見るに世間の安穩を祈るとも而も国に三災起らば
惡法流布する故なりと知る可し而るに当世は随分国土の安穩を祈
ると雖も去る正嘉元年には大地・大に動じ同二年に大雨大風
苗実を失えり定めて国を喪うの惡法此の国に有るかと勘うるな
り、選集の・或る段に云く「第一に読誦雜行とは上の觀經
等の往生淨土の經を除いて已外・大小・顯密の諸經に於て
受持・読・誦する悉く読誦雜行と名く」と書き了つて次に書い
て云く「次に二行の得失を判ぜば法華・真言等の雜行は失・
淨土の三部經は得なり」次下に善導和尚の往生禮讚の十即
十生・百即百生・千中無一の文を書き載せて云く「私に

云く此の文を見るに弥いよいよ雑ざつを捨てて專せんを修しゆすべし豈あにひやくそくひやくしやう百即ひやくしやう百生ひやくしやう

の專修せんしゅう 正行しやうぎやう を捨てて堅く千中無一の雑修せんちゆうむいつ 雑行ざつしゅう を執しゅうせんや

行者ぎやうじや 能く之を思量しりやうせよ」已上、此等の文を見るに世間の道俗どうぞく豈あに

諸経しよぎやう を信べず可べけんや、次下つぎしもに亦書またして法華經等の雑行ざうぎやうと念仏ねんぶつの

正行しやうぎやう と勝劣しやうれつ 難易なんい を定めて云く「一には勝劣しやうれつ の義・二には難易なんい

の義なり初に勝劣しやうれつ の義とは念仏ねんぶつ は是れ勝・余行よぎやう は是れ劣なり次

に難易なんい の義とは念仏ねんぶつ は修しゅうし易やすく諸行しよぎやう は修しゅうし難がたし」と、亦次下またつぎしも

に法華・真言等の失とがを定めて云く「故に知んぬ諸行しよぎやう は機きに非あらず

時を失うしなう念仏ねんぶつ 往生おうじやう のみ機きに当り時を得たり」亦次下またつぎしもに法華・

真言等の雑行ざうぎやう の門を閉じて云く「随他ずいたの前には暫しばらく定散じやうさんの門

を開くと雖も随自ずいじの後には還かえつて定散じやうさんの門を閉ひとたびず一度開いこて以後

永く閉じざるは唯ただ・是れ念仏ねんぶつの一門なり」已上最後の述懐じゆつかいに云く

「夫れ速に生死を離れんと欲せば二種の勝法の中に且らく
聖道門を闇いて撰んで浄土門に入れ浄土門に入らんと欲せば
正雜二行の中に且らく諸の雜行を抛つて撰んで応に正行に歸
すべし」已上門弟此の書を伝えて日本六十余州に充滿するが故に
門人・世間無智の者に語つて云く「上人は智慧第一の身と為て
此の書を造り真実の義と定め法華・真言の門を閉じて後に開くの
文無く抛つて後に還て取るの文無し」等と立つる間世間の道俗一
同に頭を傾け其の義を訪う者には仮字を以て選択の意を宣べ
・或は法然上人の物語を書す間・法華・真言に於て難を付けて
・或は去年の曆・祖父の履に譬え・或は法華經を読むは管絃より
劣ると是くの如き惡書・国中に充滿するが故に法華・真言等国
に在りと雖も聴聞せんことを樂わす偶行ずる人有りと雖も

そんな

尊重を生ぜず一向念仏者・法華經の結縁を作すをば往生の障

と成ると云う故に捨離の意を生ず、此の故に諸天・妙法を聞く

ことを得ず法味を嘗めざれば威光勢力有ること無し四天王並に

眷属・此の国を捨て日本国守護の善神捨離し已るが故に、正嘉

元年に大地大に震い同二年に春の大雨苗を失い夏の大旱☆に草木

を枯し秋の大風に菓実を失い飢渴忽に起りて万民を逃脱せしむる

こと金光明經の文の如し豈選択集の失に非ずや、仏語虚しか

らざる故に惡法の流布有り既に国に三災起れり而も此の惡義を

対治せずんば仏の所説の三惡を脱がる可けんや、而るに近年より

予「我身命を愛せず但無上道を惜む」の文を瞻る間・雪山常啼

の心を起し命を大乘の流布に替え強言を吐いて云く選択集を

信じて後世を願わん人は無間地獄に墮つ可しと、爾時に法然

上人の門弟もんていせんちやくしゅう 選択集せんちやくしゅう に於て上に出す所の惡義を隠し・或は諸行しよぎよう 往生おうじよう を立て・或はある 選択集せんちやくしゅう に於て法華・真言を破らざる由よし をしょう 称し・或は在俗に於てある 選択集せんちやくしゅう の邪義を知らしめざる為に妄語もうご を構かま えて云く日蓮は念仏を称なづ する人は三惡道に墮だ せんと云うと。
問うて云く法然上人の門弟・諸行往生を立つるに失有りやとが
否や、答えて云く法然上人の門弟と称し諸行往生を立つるはい 逆路伽耶陀ぎやくろがやだ の者なり当世も亦諸行往生の義を立つ而も内心にはい 一向に念仏往生ねんぶつおうじよう の義を存し外には諸行不謗しよぎようふぼう の由を聞かしむるないっこう
り、抑此の義を立つる者はそもそも 選択集せんちやくしゅう の法華・真言等に於て失をしやへいかくほう 付け捨閉閣拋しゃへいかくほう ・群賊邪見ぐんぞくじゃけん ・惡見あつけん ・邪そうにん ・雜人せんちゆうむいつ ・千中無一等の語をことば
見ざるや否や。

第二に正しく謗法人の王地に処るを対治す可き証文を出さば、
まさ ほうほう おおち お たいじ べ しょうもん いだ

涅槃經第三に云く「懈怠にして戒を破し正法を毀る者をば王者

・大臣・四部の衆に苦治すべし善男子是の諸の国王及び

四部の衆は当に罪有るべきや不や・不なり・世尊・善男子是の

諸の国王及び四部の衆は尚、罪有ること無し」と、又第十二に云く

「我往昔を念うに閻浮提に於て大国の王と作り名を仙予と曰いき

大乘經典を愛念し敬重し其の心純善にして麁惡嫉妬慳・

有ること無かりき、乃至善男子我爾の時に於て心に大乘を重ん

ず婆羅門の方等を誹謗するを聞き・聞き已つて即時に其の命根

を断ちき善男子是の因縁を以て是より已來地獄に墮せず」已上。

問うて云く梵網經の文を見るに比丘等の四衆を誹謗するは

波羅夷罪なり而るに源空が謗法の失を顕わすは豈阿鼻の業に非ず

や、答えて曰く涅槃經の文に云く「迦葉菩薩・世尊に言さく如來

何^{いかん}が故^{また}ぞ彼^あ当^びに阿鼻地獄^だに墮^{しる}すべしと記^{しる}するや、善男子^{ぜんなんし}・善星^{ぜんしやう}
比丘^{びく}は多く眷属^{けんぞく}有り皆善^{みなぜんしやう}星^こは是^{あら}れ阿羅漢^{あらかん}なり是^これ道果^{どうか}を得^とつと
謂^{おも}えり我^お・彼^{あくじや}が惡邪^{あくじや}の心^{こころ}を壞^{やぶ}らんと欲^ほするが故^{ゆえ}に彼^{ぜんしやう}の善星^{ぜんしやう}は
放逸^{ほういつ}を以^{もつ}ての故^{ゆえ}に地獄^{じごく}に墮^だせりと記^{しる}す」已上^{しやう}此^この文^{ぶん}に放逸^{ほういつ}とは謗法^{ほうぼう}
の名^ななり源空^{げんくう}も亦^{また}彼^{ぜんしやう}の善星^{ぜんしやう}の如^{ごと}く謗法^{ほうぼう}を以^{もつ}ての故^{ゆえ}に無間^{むげん}に墮^だす
べし所化^{しよけ}の衆^{しゆ}此^この邪義^{じやぎ}を知らざるが故^{ゆえ}に源空^{げんくう}を以^{もつ}て一切^{いっさい}智人^{ちじん}と号^{あくじや}
し・或^{ある}は勢至菩薩^{せいしほさつ}・或^{ある}は善導^{ぜんどう}の化身^{けしん}なりと云^いう彼^{あくじや}が惡邪^{あくじや}の心^{こころ}を
壞^{やぶ}らんが為^{ため}の故^{ゆえ}に謗法^{ほうぼう}の根源^{こんげん}を顕^{あら}わす梵網經^{ぼんもうきやう}の説^{ほうぼう}は謗法^{ほうぼう}の者^{もの}の
外^{ほか}の四衆^{ししゆ}なり仏誠^{いまし}めて云^いく「謗法^{ほうぼう}の人^{ひと}を見て其^その失^{とが}を顕^{あら}わさざれ
ば仏弟子^{ぶつでし}に非^{あら}ず」と、故^{ゆえ}に涅槃經^{ねはんきやう}に云^いく「我涅槃^{ねはん}の後^{あと}其^その方面^{ほうめん}に
随^{したが}い持戒^{じかい}の比丘^{びく}有^あつて威儀具足^{いぎぐそく}し正法^{しやうほう}を護持^{ごじ}せば法^やを壞^やぶる者^{もの}
を見て即^{すなわ}ち能^よく驅遣^{くけん}し呵責^{かやく}し徵治^{ちやうじ}せよ当^{まさ}に知^しるべし是^{この}人^{ひと}は福^{ふく}を得^と

んこと無量むりょうにして称計しょうけいす可べからず」亦云く「若もし善比丘ぜんびくあつて法やぶを壊やぶる者を見て呵責かしゃくし駈遣くけんし挙処こしょせずんば当まさに知るべし是この人は仏法ぶつぽうの中の怨あだなり若もし能く駈遣くけんし呵責かしゃくし挙処こしょせば是我弟子真これわがでしのしょうもん
声聞しょうもんなり」已上。

予ぶつでし仏弟子いちぶんの一分に入らんが為ために此の書を造り謗法ぼうぼうの失とがを顕あらわし世間せけんに流布るふす願わくば十方じゅうぽうの仏陀ぶつだ此の書に於て力を副そえ大惡法だいあくほうの流布るふを止め一切衆生の謗法ぼうぼうを救わしめたまえ。

大文だいぶんの第五に善知識ぜんちしき並に眞実しんじつの法に値あい難がたきことを明あかさば之に付いて三有さんり、一には受け難がたき人身じんしん値あい難がたき仏法ぶつぽうなることを明あかし、二には受け難がたき人身じんしんを受け値あい難がたき仏法ぶつぽうに値あうと雖も惡知識いゑどあくちしきに値あうが故ゆゑに三惡道さんあくどうに墮だする

を明あかし、三には正まさく末代凡夫まつだいほんぶの爲ための善知識ぜんちしきを明あかす。

第一に受け難き人身値い難き仏法なることを明さば、涅槃經三

十三に云く「爾の時に世尊・地の少土を取つて之を爪上に置き

迦葉に告げて言く、是の土多きや十方世界の地土多きや、迦葉

菩薩・仏に白して言く、世尊・爪上の土は十方所有の土に比べ

ず善男子・人有り身を捨てて還つて人身を得・三惡の身を捨てて

人身を受くることを得・諸根完く具して中国に生れ正信を具足

して能く道を修習し道を修習し已つて能く正道を修し正道

を修し已つて能く解脱を得・解脱を得已つて能く涅槃に入るは

爪上の土の如く、人身を捨て已つて三惡の身を得・三惡の身を

捨てて三惡の身を得・諸根具せずして辺地に生じ邪倒の信を信じ

邪道を修習し解脱常樂の涅槃を得ざるは十方界の所有の地土

の如し」經文此の文は多く法門を集めて一具と為せり人身を捨て

て還かえつて人身じんしんを受くるは爪上そうじょうの土つちの如ごとし人身じんしんを捨てて三惡道さんあくどうに
おちおち 墮おちるは十方じゅうぽうの土つちの如ごとし三惡さんあくの身みを捨てて人身じんしんを受くるは爪上そうじょうの
土つちの如ごとく三惡さんあくの身みを捨てて三惡さんあくの身みを得るは十方じゅうぽうの土つちの如ごとし
人身じんしんを受くるは十方じゅうぽうの土つちの如ごとく人身じんしんを受けて六根ろくこん欠かけざるは
爪上そうじょうの土つちの如ごとし人身じんしんを受けて六根ろくこんを欠かけざれども辺地へんちに生なずる
は十方じゅうぽうの土つちの如ごとく中国ちゅうごくに生なずるは爪上そうじょうの土つちの如ごとく中国ちゅうごくに生なず
るは十方じゅうぽうの土つちの如ごとく仏法ぶつぽうに値あうは爪上そうじょうの土つちの如ごとく、又また云いく
「一闍提いっせんたいと作つくらず善根ぜんこんを断たんぜず是かくの如ごとき等との涅槃ねはんの經典きやうてんを信しんず
るは爪上そうじょうの土つちの如ごとく乃至ないし・一闍提いっせんたいと作つくりて諸もろもろの善根ぜんこんを断たんじ是この
經きやうを信しんぜざる者は十方界じゅうぽうかい所有しやうの地土ちどの如ごとく」經文きやうもん此この文ぶんの如ごとく
ば法華ほつけ・涅槃ねはんを信しんぜずして一闍提いっせんたいと作つくるは十方じゅうぽうの土つちの如ごとく法華ほつけ
・涅槃ねはんを信しんずるは爪上そうじょうの土つちの如ごとく・此この經文きやうもんを見て 弥い感い涙なみ押おし

え難し今・日本国の諸人を見聞するに多分は權教を行ず設い
身口は實教を行ずと雖も心には亦權教を存ず。

故に天台大師摩訶止觀の五に云く「其の癡鈍なる者は毒氣深く
入つて本心を失う故に既に其れ信ぜざれば則ち手に入らず、乃至

・大罪聚の人なり、乃至・設い世を厭う者も下劣の乗を翫び

枝葉に攀付し狗・作務に狎れ☆猴を敬うて帝釈と為し瓦礫を崇

んで是れ明珠なりとす此黒闇の人豈道を論ず可けんや」已上、源空

並に所化の衆深く三毒の酒に酔うて大通結縁の本心を失う法華・

涅槃に於て不信の思を作し一闡提と作り觀經等の下劣の乘に

依て方便称名の瓦礫を翫び法然房の☆猴を敬うて智慧第一の

帝釈と思ひ法華・涅槃の如意珠を捨てて如来の聖教を徧する

は權實二教を弁えざるが故なり。

故に弘決の第一に云く「此の円頓を聞いて崇重せざる者は

まこときんだいだじよう

なら

そうらん

よ

故に近代大乘を習う者の雑濫に由るが故なり」大乘に於て権実

だいじよう

おい
ごんじつ

二経を弁えざるを雑濫と云うなり、故に末代に於て法華経を信ず

ゆえ
まつだい
おい

ほけきよう

そうらん

る者は爪上の土の如く法華経を信ぜずして権教に墮落する者は

そうじよう

ごんきよう

ほけきよう

ごんきよう

だらく

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

十方の微塵の如し、故に妙楽歎いて云く「像末は情澆く信心

じゆつぽう

みじん

ごん

ゆえ

みようらく

なげ

いわ

そうまつ

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

寡薄にして円頓の教・法蔵に溢れ函に満れども暫くも思惟せず

かはく

えんどん

ほうそう

あふれ

なん

いたま

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

便ち瞑目に至る徒に生じ徒に死す一に何ぞ痛しきや」已上此の釈

すなわ

めいもく

いた

いたずら

いたずら

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

は偏に妙楽大師・権者たるの間・遠く日本国の当代を鑒みて

ひとえ

みようらく

だいし

ごんしゃ

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

記し置く所の未来記なり。

しる

みらい

き

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

問うて云く法然上人の門弟の内にも一切経蔵を安置し法華経

いわ

ほうねん

しょうにん

もんてい

いっさい

きようそう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

を行ずる者有り何ぞ皆謗法の者と称せんや、答えて云く一切経

なん

みなほう

ほう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

を開き見て法華経を読み難行道の由を称し選択集の悪義を

ほけきよう

なんぎ

ようどう

よし

しょう

せんちやく

しゅう

あくぎ

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

を

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

ごんきよう

扶たすけんが為きなり經論きょうろんを開ひらくに付つて 弥い謗い法よほうを増ふすこと例れいせば

善ぜん星しやうの十二部經じふにぶきやう・提婆達多だいばだつたが六万蔵ろくまんざうの如ごとし智者ちしやの由よしを称しょうするは

自身じしんを重しげくし惡法あくほうを扶たすけんが為きなり。

第二だいに受うけ難がたき人じん身しんを受うけ値あい難がたき仏法ぶつぽうに値あうと雖いえども惡知識あくちしきに

値あうが故ゆゑに三惡道さんあくどうに墮だすることを明あかさば仏蔵經ぶつそうきやうに云いく

「大莊嚴だいそうごん仏ぶつの滅後めつごに五比丘びくあり一人ひとりは正道せいどうを知しつて多億たおくの人ひとを度

し四人にんは邪見じゃけんに住す此四人みようじゆう 命終めいじゆうの後のち阿鼻地獄あびじごくに墮おつ仰あおぎ伏ふし伏

に臥ふし左脇さきように臥ふし右脇うきように臥ふすこと各九百万億歳かくくうばんぎさうなり、乃至ないし・若もし

在家ざいけ・出家しゆつけの此この人ひとに親近しんこんせしもの並もろもろに諸しよの檀越だんごつ凡おほそ六百四万億

の人ひとあり此この四師ししと俱ともに生なじ俱ともに死しして大地獄だいじごくに在あつて諸もろもろの

燒煮しょうしやを受うく大劫だいこうも若ごとし尽こころくれば是この四惡人あくにんおほ及び六百四万億ろくしよばんぎさうの人ひと・

此この阿鼻地獄あびじごくより他方たほうの大地獄だいじごくの中に轉生てんしやうす」已上涅槃經ねはんぎやう三十三

に云く「爾時に城中に一の尼乾有り名を苦得と曰う、乃至・善星

・苦得に問う答えて曰く我食吐鬼の身を得・善星諦に聴け、

乃至・爾の時に善星即ち我所に還つて是の如き言を作す世尊・

苦得尼乾は命終の後に三十三天に生ぜんと、乃至・爾時に如来

即ち迦葉と善星の所に往き給う善星比丘遙に我来るを見・見

已つて即ち悪邪の心を生ず悪心を以ての故に生身に陥ち入つて

阿鼻地獄に墮す」已上善星比丘は仏の菩薩たりし時の子なり仏に

随い奉り出家して十二部經を受け欲界の煩惱を壊り四禪定を

獲得せり然りと雖も悪知識たる苦得外道に値い仏法の正義を信ぜ

ざる

に依つて出家の受戒・十二部經の功德を失い生身に阿鼻地獄に

墮す苦岸等の四比丘に親近せし六百四万億の人は四師と俱に

じゅつぼう

あびじく

どうぞく

せんちやくしゅう

とうと

十方の大阿鼻地獄を経るなり、今の世の道俗は 選択集を貴ぶ

ゆえ

げんくう

えいそう

はい

いっさいきょうなんぎょう

じやぎ

にけん

が故に源空の影像を拝して一切経難行の邪義を読む例せば尼乾

しよけ

でし

にけん

いこつ

さんあくどう

だ

こつ

の所化の弟子が尼乾の遺骨を礼して三悪道に墮せしが如く願わく

ば

今の世の道俗

どうぞく

せんちやくしゅう

じやせい

を知つて後に

供養恭敬を致せ

爾らずんば定めて後悔有らん。

しか

後悔有らん。

こうかい

有らん。

故に涅槃經に云く「菩薩摩訶薩悪象等に於て心に怖畏すること

ゆえ

ねはんぎょう

いわ

ぼさつまかさつあくそう

おい

ふい

すること

無く悪知識に於ては怖畏の心を生ぜよ何を以ての故に是の悪象等

なく

あくちしき

おい

ふい

の心を生ぜよ何を以ての故に

ゆえ

こ

あくそう

は唯能く身を壊りて心を壊る能わず悪知識は二俱に壊る故に、

ただよ

やぶ

やぶ

やぶ

あた

あくちしき

は

二俱に

やぶ

ゆえ

是の悪象等は唯一身を壊り悪知識は無量の善身無量の善心を壊る

こ

あくそう

ただ

やぶ

あくちしき

むりょう

の善身

無量の

ぜんしん

の善心

やぶ

是の悪象等は唯能く不浄の臭き身を破壊す悪知識は能く浄身

こ

あくそう

ただよ

ふじょう

の臭き

身を

破壊す

悪知識は

能く

浄身

じょうしん

及及び浄心を壊る是の悪象等は能く肉身を壊り悪知識は法身を

およ

じょうしん

やぶ

こ

あくそう

の悪象

等は

能く

肉身を

壊り

悪知識は

壊る悪象の為に殺されては三趣に至らず悪友の為に殺されては必

やぶ

あくそう

ため

の為に

殺されては

三趣に

至らず

悪友の

為に

殺されては

必

ず三趣さんしゅに至るいた是この惡象等あくそうは但身なの怨あくちしきと為なり惡知識あくちしきは善法ぜんぽうの怨なと為ならん是かくの故ゆえに菩薩ぼさつ常まさに當まさに諸もろもろの惡知識あくちしきを遠離おんりすべし」已上。

請こい願ねがわくば今けの世うの道俗どうぞく設たい此この書しよを邪義じゃぎと思おもうと雖いえども且しばら

く此この念ねんを抛なげつて十住じゅうじゅう毘婆沙びばし論ろんを開ひらき其その難行なんぎようの内うちに法華ほけき經きやう

の入不入にゅうふにゅうを☆かんがえ選集せんぢやくしゅうの準じゆん之思し之しの四字しじを案あんじて後ごに是非ぜひ

を致あやませ謬あやまつて惡知識あくちしきを信しんじ邪法じゃぽうを習ならひ此この生むなを空なうすること

莫なれ。

第三だいさんに正ただしく末代まつだいの凡夫ぼんぶの為ための善知識ぜんちしきを明あかさば、問いうて云いく

善財童子ぜんさいどうじは五十余せんちしきの善知識ぜんちしきに値あいき其その中に普賢ふげん・文殊もんじゆ・觀音かんのん・

弥勒みろく等有じやうたい常じやうたい啼はんそく・班足はんそく・妙莊嚴みやうそうごん・阿闍世あじゃせ等ぜんむかつは曇無竭ふみよく・普明ふみよく・

耆婆ぎば・二子夫人ふじんに値あい奉たてまつりて生死しやうじを離はなれたり此等みなは皆大聖みななり仏ぶつ

・世よを去さつて後ご是この如ごときの師しを得えること難がたしとなす滅後めつごに於おいて亦また

りゅうじゅ

竜樹・天親も去りぬ南岳・天台にも値わず如何が生死を離る

可きや、答えて云く末代に於て真実の善知識有り所謂法華・涅槃

是なり、問うて云く人を以て善知識と為すは常の習いなり法を

以て知識と為すに証有りや、答えて云く人を以て知識と為すは常

の習いなり然りと雖も末代に於て真の知識無ければ法を以て知識

と為すに多くの証有り、摩訶止観に云く「或は知識に従い・或

は経巻に従い上に説く所の一実の菩提を聞く」已上此の文の意は

経巻を以て善知識と為す、法華経に云く「若し法華経を閻浮提

に行じ受持すること有らん者は応に此の念を作すべし皆是れ普賢

威神の力なり」已上此の文の意は末代の凡夫法華経を信ずるは

普賢の善知識の力なり、又云く「若し是の法華経を受持し読誦し

正憶念し修習し書写すること有らん者は当に知るべし是の人は

すなわ しゃかむにぶつ
即ち釈迦牟尼仏を見るなり仏、口より此の經典きやうてんを聞くが如しごと
まさ
当に知るべし是この人は釈迦牟尼仏を供養くやうするなり」已上此の文を
見るに法華經は即ち釈迦牟尼仏なり法華經を信ぜざる人の前には
しゃかむにぶつにゆうめつ
釈迦牟尼仏入滅を取り此の經を信ずる者の前には滅後めつご為りと
いへと
雖も仏の在世ざいせなり。

又云く「若し我成仏じやうぶつして滅度の後十方じゆうぽうの国土こくどに於て法華經を

説く処有らば我が塔とう廟是の經を聴かんが為の故に其の前に涌現ゆうげん

し為に証ため明しょうを為さん」已上此の文の意は我等われら・法華のみやうごう名号を

唱えて多宝如来本願の故に必ず来りたまう、又云く「諸仏の

十方世界に在つて法を説くを尽く還し一処に集めたまう」已上

釈迦・多宝・十方の諸仏・普賢菩薩等是我等が善知識なり若し

此の義に依らば我等は亦宿善・善財・常啼・班足等にも勝れた

り彼は権經の知識に値い我等は実經の知識に値えなり彼は
権經の菩薩に値い我等は実經の仏・菩薩に値い奉ればなり。

涅槃經に云く「法に依つて人に依らざれ智に依つて識に依らざ

れ」已上依法と云うは法華・涅槃の常住の法なり不依人とは

法華・涅槃に依らざる人なり設い仏・菩薩為りと雖も法華・涅槃

に依らざる仏・菩薩は善知識に非ず況や法華・涅槃に依らざる

論師・訳者・人師に於てをや、依智とは仏に依る不依識とは等覺

已下なり、今の世の世間の道俗・源空の謗法の失を隠さんが為に

徳を天下に挙げて権化なりと称す依用すべからず、外道は五通を

得て能く山を傾け海を竭すとも神通無き阿含經の凡夫に及ばず

羅漢を得・六通を現する二乗は華嚴・方等・般若の凡夫に及ばず

華嚴・方等・般若の等覺の菩薩も法華經の名字・觀行の凡夫に

およびおよたといじんつうちえ
及ばずたといじんつうちえ設えい神通智慧有りと雖もいえど權教ごんきょうの善知識ぜんちしきをば用うべからず、
われらじようぼつ いっせんだい ほんぶほけきよう
我等常没ぼつの一闡提いつせんたいの凡夫法華經ほんぶほけきようを信ぜんと欲ほするはぶつしやう仏性ぶつしやうを顯あらわ
さんが為せんびようの先表せんびようなり。

ゆえ みようらくだいし いわ
故に妙樂大師みようらくだいしの云く「内薰ないくんに非あらざるよりは何ぞ能く悟さとを生とぜ
ゆえ さとり
ん故に知んぬ悟さとを生ずる力は真如しんによに在り故に冥薰みようくんを以て外護もつげこと
為すなり」已上法華經ほけきようより外ほかの四十余年よんじゅうよねんの諸經しよきようには十界互具無し
じゅつかいこく
十界互具じゅつかいこくを説かざれば内心ないしんの仏界ぶつがいを知らず内心ないしんの仏界ぶつがいを知らざれ
ほか しょうぶつ あら
ば外ほかの諸仏しょうぶつも顯あらわれず故に四十余年よんじゅうよねんの權行ごんぎやうの者は仏を見ず設たといい
仏を見ると雖も他いえど他たぶつ仏ぶつを見るなり、二乗にじやうは自じぶつ仏ぶつを見ざるが故に
じようぶつ にぜん ぼさつ またじしん じゅつかいこく
成仏じようぶつ無し爾前にぜんの菩薩ぼさつも亦自身またじしんの十界互具じゅつかいこくを見ざれば二乗界にじやうの
じようぶつ ゆえ しじゅうむへんせいがんど
成仏じようぶつを見ず故に衆生しじゅうむへんせいがんど無まんぞく辺誓願度ゆえの願も満足まんぞくせず故に菩薩ぼさつも仏を
ほんぶ またじゅつかいこく
見ず凡夫ほんぶも亦十界互具またじゅつかいこくを知らざるが故に自身ゆえの仏界じしんも顯ぶつがいわれず、

故に阿弥陀如来の来迎も無く諸仏如来の加護も無し譬えば盲人の自身の影を見ざるが如し。

今法華經に至つて九界の仏界を開くが故に四十余年の菩薩・

二乗・六凡始めて自身の仏界を見る此の時・此の人の前に始めて

仏・菩薩・二乗立ち給う此の時に二乗・菩薩始めて成仏し凡夫

も始めて往生す、此の故に在世滅後の一切衆生の誠の善知識は

法華經是なり、常途の天台宗の学者は爾前に於て当分の得道を

許せども自義に於ては猶当分の得道を許さず然りと雖も此の書に

於ては其の義を尽くさず略して之を記すれば追つて之を記すべ

し。

大文の第六に法華・涅槃に依る行者の用心を明さば、一代

教門の勝劣・浅深・難易等に於ては先の段に既に之を出す、此

の一段に於ては一向に後世を念う末代常没の五逆謗法一闡提等の愚人の爲に之を注す、略して三有り、一には在家の諸人正法を護持するを以て生死を離れ惡法を持つに依つて三惡道に墮す可きことを明し、二には但法華經の名字計りを唱えて三惡道を離る可きことを明し、三には涅槃經は法華經の爲の流通と成ることを明す。

第一に在家の諸人正法を護持するを以て生死を離れ惡法を持つに依つて三惡道に墮す可きことを明さば、涅槃經第三に云く「仏・迦葉に告わく能く正法を護持するの因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得たり」と亦云く「時に國王有り名を有徳と曰う、乃至・法を護らんが爲の故に、乃至・是の破戒の諸の惡比丘と極めて共に戰鬪す、乃至・王是の時に於て法を聞く

ことを得え已おつて心大に歡喜し尋で即ち命終して阿☆仏の国に生あしゆくぶつず」已上此の文の如くならば在家の諸人別の智行無しと雖も謗法の者を対治する功德に依つて生死を離る可きなり。

問うて云く在家の諸人、仏法を護持す可き様如何、答えて云く

涅槃經に云く「若し衆生有つて財物に貪著せば我当に財を施し

然して後に是の大涅槃經を以て之を勧め讀ましむべし、乃至・先

に愛語を以て其の意に随い然る後に漸く当に是の大乗大涅槃經

を以て之を勧めて讀ましむべし若し凡庶の者には當に威勢を

以て之に逼りて讀ましむべし若し・慢の者には我當に其れが為に

僕使と作り其の意に随順し其れをして歡喜せしめ然して後に復

當に大涅槃を以て之を教導すべし、若し大乘經を誹謗する者

有らば當に勢力を以て之を摧きて伏せしめ既に摧伏し已つて

然^{しか}して後に勸^{すす}めて大涅槃^{ねはん}を読^よましむべし、若^もし大乘^{だいじょうきよう}經^{きやう}を愛樂^{あいらく}する者^{もの}有^あらば我^{みづか}、躬^{まさ}ら当^ゆに往^きいて恭敬^{きやうけい}し供養^{くよう}し尊重^{そんちよう}し讚歎^{さんたん}すべし」
已^し上^{じやう}。

問^いうて云^いく今^{いま}の世^よの道俗^{どうぞく}偏^{ひとえ}に選^{せん}集^{ちやくしゆう}に執^{しゆう}して法華^{ほつけ}・涅槃^{ねはん}に於^{おい}ては自^じ身^{しん}不^ふ相^{そう}応^{おう}の念^{ねん}を作^なすの間^ま・護^ご惜^{しやく}建^{けん}立^{りつ}の心^{こころ}無^なく偶^{たま}邪^{まじ}義^{やぎ}の由^{よし}を称^{しょう}する人^あ有^あれば念^{ねん}仏^{ぶつ}誹^ひ謗^{ぼう}の者^{もの}と称^{しょう}して惡^{あく}名^{みやう}を天^{てん}下^がに雨^ふらす斯^これ等^らは如^{いかん}何^な、答^{こた}えて云^いく自^じ答^{とう}を存^{そん}す可^べきに非^{あら}ず仏^{ぶつ}、自^{みづか}ら此^この事^{こと}を記^しして云^いく、仁^{にん}王^{おう}經^{きやう}に云^いく「大^{だい}王^{おう}我^{われ}が滅^{めつ}度^どの後^{のち}・未^み来^{らい}世^せの中^{なか}の四^し部^ぶの弟^で子^し諸^{もろ}の小^{せう}国^{こく}の王^{わう}・太^{たい}子^し・王^{わう}子^し乃^{のみ}ち是^{すなわ}れ三^{さん}宝^{ぼう}を住^{じゅう}持^じして護^{まも}る者^{もの}転^う更^たに三^{さん}宝^{ぼう}を滅^{めつ}破^はせんこと師^し子^しの身^み中^{ちゆう}の虫^{ちゆう}の自^{みづか}ら師^し子^しを食^くうが如^{ごと}くならん外^げ道^{どう}には非^{あら}ざるなり多^{おほ}く我^{われ}仏^{ぶつ}法^{ぽう}を壊^{やぶ}り大^{だい}罪^{ざい}過^ごを得^えん正^{しょう}法^{ぽう}衰^{しょう}薄^{はく}し民^{たみ}に正^{しょう}行^{ぎやう}無^なく漸^{よう}く惡^{あく}を為^なすを以^{もつ}て其^その寿^{とし}

日に滅じて百歳に至らん人、仏法を壊りて復孝子無く六親不和に
して天神も祐けず疾疫惡鬼日に来りて侵害し災怪首尾し連禍
縦横して地獄・餓鬼・畜生に入らん」亦次下に云く「大王
未来世の中の諸の小国の王四部の弟子自ら此の罪を作らん破国
の因縁、乃至・諸の惡比丘多く名利を求め国王・太子・王子の前
に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん其の王別えずして
此の語を信聴し、乃至・其の時に當つて正法將に滅せんこと
久しからず」已上。

余 選択集を見るに敢て此の文の未來記に違わず、選択集は
法華・真言等の正法を定めて雜行・難行と云い末代の我等に
於ては時機相應せず之を行ずる者は千が中に一も無く仏、還つて
法華等を説くと雖も法華・真言の諸行の門を閉じて念仏の一門

を開く末代に於て之を行ずる者を群賊等と定め当世の一切の道俗に此の書を信ぜしめ此の義を以て如来の金言と思えり、此の故に世間の道俗に仏法建立の意無く法華・真言の正法の法水忽ちに竭き天人減少して三惡日に増長する偏に選択集の惡法に催されて起る所の邪見なり、此の經文を仏記して「我滅度後」と云えるは正法の末八十年像法の末八百年末法の末八千年なり
選択集の出る時は像法の末・末法の始なれば八百年の内なり
仁王經の記する所の時節に当れり、諸の小國王の王とは日本國の王なり中下品の善は粟散王是なり「如師子身中虫」とは仏弟子の源空是なり諸惡比丘とは所化の衆是なり「說破仏法因縁・破國因縁」とは上に挙る所の選択集の語是なり「其王不別信聽此語」とは今の世の道俗邪義を弁えずして猥りに之を信ずるなり。

請こい願ごわくば道どう俗ぞく法の邪じゃ正せいを分ぶん別べつして其その後しょう正ほう法ほうに就おて後ご生しょう
を願こえ今この度たび人じん身しんを失うしな三さん惡あく道どうに墮だして後こうに後ご悔かいすとも何なんぞ及およば
ん。

第二ほけきように但だい法もく華ば經かの題だい目もく計けいりを唱となえて三さん惡あく道どうを離はなる可べきことを
明あかさば、法ほけきよう華か經きようの第五いに云いく「文もん殊じゆ師し利り是この法ほけきよう華か經きようは無む量りようの国くに中じゅう
に於おいて乃ない至し名な字じをも聞きくことを得うべからず」第八いに云いく「汝なん等じら但
能よく法ほけき華け名なを受じゆ持じする者おを擁お護ごする福は量かる可べからず」提だい婆い品ばに云いく
「妙みよう法ほけき華き經きようの提だい婆い品ばを聞きいて淨じよう心しんに信しん敬けいして疑ぎ惑わくを生なぜざらん
者じこくは地じ獄こく・餓が鬼き・畜ちく生しやうに墮おちず」大だい般はん涅ね槃ぎやう經きよう名な字じ功き徳とく品ひんに云いく
「若もし善ぜん男なん子し・善ぜん女にょ人にん有あつて是この經きの名なを聞きいて惡あく趣しゆに生なずと云
わば是この處こ有あること無なけん」涅ね槃はん經きようは法ほけき華か經きようの流りつ通つうたるが故ゆに引ひけ
るなり。

問うて云く但法華の題目を聞くと雖も解心無くば如何にして三
悪趣あくしゅを脱だれんや、答えて云く法華經流布の国に生れて此の經の
題目だいめいを聞き信を生ずるは宿善しゆくぜんの深厚じんこうなるに依れり設たとい今生こんじょうは
惡人あくにん無智むちなりと雖も必ず過去かこの宿善しゆくぜん有るが故に此の經の名を聞
いて信を致いたす者なるが故に惡道に墮だせず。

問うて云く過去の宿善しゆくぜんとは如何、答えて云く法華經の第二に
云く「若もし此の經法を信受しんじゆすること有らん者は是この人は已すでに會かつ
過去かこの仏を見たてまつり恭敬きやうけいし供養くやうし亦此の法を聞けるなり」
法師品ほうしほんに云く「又如來滅度にやらいめつどの後若もし人有つて妙法華經みやうほけきやうの乃至ないし・
一偈いちげ・一句いっくを聞いて一念いちねんも隨喜ずいきせん者は、乃至ないし・当まさに知るべし
是この諸人等しよにん已すでに會かつて十萬億じゅうまんの仏を供養くやうせしなり」流通りつうたる
涅槃經ねはんぎやうに云く「若もし衆生しゆじやう有つて熙連河沙等きれんがしゃの諸佛しよぶつに於おいて菩提心ぼだい

をおこ發すなわし乃よち能こく是あの惡く世せに於おて是かの如ごとき經き典ようを受じ持ゆして誹ひ謗ぼうを
生おこぜず善ぜん男子なんし若もし能よく一いつ恒こう沙しゃ等らの諸しよ仏ぶつ・世せ尊そんに於おて菩ぼ提だい心しんを發おこす
こと有あつて然しかる後ごに乃すなわち能あく惡く世せの中ちゆうに於おて是この法はふを謗ぼうせず是この
典てんを愛あい敬ぎやうせん」經きやう文ぶん。

此これ等らの文ぶんの如ごとくんば設たい先いに解げ心しん無なくとも此この法はふ華け經きやうを聞きいて
謗ぼうぜざるはだい善ぜんの所しよ生しやうなり、夫それ三さん惡あくの生しやうを受うくること大だい地ち
微み塵じんより多おほく人にん間げんの生しやうを受うくるはそう爪じやう上じやうの土どより少すくし、乃ない至し
四よん十じゆう年ねんの諸しよ經きやうに値あうことは大だい地ち微み塵じんよりも多おほく法はふ華け・涅ね槃はんに
値あうことはそう爪じやう上じやうの土どより少すくし上じやうにある所ところの涅ね槃はん經きやうの三さん十じゆう三さんの
文ぶんを見るみるに設たい一いつ字じ・一いつ句くなりと雖いえども此この經きやうを信しんずる者ものは宿しゆく緣えん
多おほ幸さいなり。

問いうて云いく設たい法はふ華け經きやうを信しんずと雖いえども惡あく緣えんに隨したがわば何なんぞ三さん惡あく道どうに

墮せざらんや、答えて云く解心無き者権教の悪知識に遇うて
じつきよう

実教を退せば悪師を信ずる失に依つて必ず三悪道に墮す可きな
あくし

り、彼の不軽・輕毀の衆は権人なり大通結縁の者の三千塵点を
ふぎよう きようき

経しは法華經を退して権教に遷りしが故なり、法華經を信ずる
ほけきよう ごんきよう うつ

輩は法華經の信を捨てて権人に随わんより外は世間の惡業に
ほけきよう ごんじん したがわ

於ては法華の功德に及ばざる故に三惡道に墮つ可からざるなり。
ほつけ くどく およ ゆえ さんあくどう お

問うて云く日本国は法華・涅槃有縁の地なりや否や、答えて
いわ にほんこく ほつけ ねはんうえん

云く法華經第八に云く「如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布
ほけきよう いわ によらい めつこ おい えんぶだい

せしめ断絶せざらしむ」七の卷に云く「広宣流布して閻浮提に
だんぜつ いわ こうせん ふ えんぶだい

於て断絶せしむること無けん」涅槃經第九に云く「此の
おい だんぜつ ねはんきよう いわ

大乘經典 大涅槃經も亦復是の如し南方の諸の菩薩の為の故に
だいじようきようてん だいねはんきよう またまたかく ごと なんぼう もろもろ ぼさつ もって ゆえ

当に広く流布すべし」經文三千世界広しと雖も仏、自ら法華・涅槃
まさ ふ 已上 さんぜんせかい いえど みずか ほつけ ねはん

を以て南方流布の処と定む、南方の諸国の中に於ては日本国は殊に法華經の流布す可き処なり。

問うて云く其の証如何、答えて云く肇公の法華翻經の後記に云く羅什三藏・須利耶蘇摩三藏に値い奉りて法華經を授かる時の語に云く「仏日西山に隠れ遺耀東北を照す茲の典東北の諸国に縁なり汝慎んで伝弘せよ」上東北とは日本なり西南の天竺より東北の日本を指すなり、故に慧心の一乗要決に云く「日本一州円機純一なり朝野遠近同じく一乗に歸し緇素貴賤悉く成仏を期す」已上願わくば日本国の道俗選択集の久習を捨てて法華・涅槃の現文に依り肇公慧心の日本記を待みて法華修行の安心を企てよ。

問うて云く法華經修行の者何の浄土を期す可きや、答えて

云く法華經二十八品の肝心たる寿量品に云く「我常に此の
娑婆世界に在り」亦云く「我常に此処に住し」亦云く「我が此土
は安穩」文此の文の如くんば本地久成の円仏は此の世界に在り此
の土を捨てて何の土を願う可きや、故に法華經修行の者の所住
の処を淨土と思う可し何ぞ煩しく他処を求めんや、故に
神力品に云く「若は經卷所住の処・若は園中に於ても若は林
中に於ても若は樹下に於ても若は僧坊に於ても若は白衣舎にても
若は殿堂に在つても若は山谷曠野にても、乃至・当に知るべし
是の処は即ち是道場なり」涅槃經に云く「善男子是の大涅槃
微妙の經典流布せらるる処は當に知るべし其の地は即ち是れ
金剛なり此の中の諸人も亦金剛の如し」已上法華・涅槃を信ずる
行者は余処に求む可きに非ず此の經を信ずる人の所在の処は

すなわ じょうど
即ち浄土なり。

問うて云く華嚴・方等・般若・阿含・觀經等の諸經を見るに

兜率・西方・十方の浄土を勧む其の上・法華經の文を見るに亦

兜率・西方・十方の浄土を勧む何ぞ此等の文に違して但此の

瓦礫荊棘の穢土を勧むるや、答えて云く爾前の浄土は久遠実成

の釈迦如来の所現の浄土にして実には皆穢土なり、法華經は亦

方便壽量の二品なり壽量品に至つて実の浄土を定むる時・此の

土は即ち浄土と定め了んぬ、但し兜率・安養・十方の難に至つ

ては爾前の名目を改めずして此の土に於て兜率安養等の名を付

く、例せば此の經に三乗の名有りと雖も三乗有らざるが如し

「不須更指觀經等也」の釈の意是なり、法華經に結縁無き衆生

の当世西方浄土を願うは瓦礫の土を樂う者なり、法華經を信ぜ

ざる衆生しゅじょうは誠に分添ぶんぞんの浄土じょうど無き者なり。

第三に涅槃經ねはんぎょうは法華經流通ほけきょうるつうの爲ために之これを説とき給たまうことを明あかさば、

問いうて云いく光宅こうたくの法雲法師ほううんほつし並どうじょうに道場どうじょうの慧觀えいかん等の碩德せきとくは法華經ほけきょうを

以もつて第四時もつの經きやうと定め無常むじょうの熟蘇味じゆくそみと立つ、天台智者大師てんだいちしやだいしは法華ほつけ

・涅槃同味ねはんどうみと立つと雖いえども亦また・拾くんにゅうの義ぎを存そんす二師にし共に権化こんげなり

互たがいに德行とくぎやうを具そなへり何を正ただとして我等われらの迷心まよいを晴はらす可べきや、答

えて曰いく設たとい論師ろんし訳者やくしや爲なりと雖いえども仏教ぶつぎやうに違たがひて権實こんじつ二教にぎやうを判はぜ

ずんば且しばらく疑うたがひを加くふ可べし何いかに況いわんや唐土たうどの人師にんしたる天台てんだい・南岳なんがく

・光宅こうたく・慧觀えいかん・智儼ちえん・嘉祥かじやう・善導ぜんどう等の釈おひに於おてをや、設たとい末代まつだいの

學者がくしや爲なりと雖いえども依法いふほう不依人ふえにんの義ぎを存そんす本經ほんきやう・本論ほんろんに違たがはずんば

信用しんようを加くふ可べし。

問いうて云いく涅槃經ねはんぎやうの第十四卷しよだいじやうきやうを開ひきたるに五十年ごじゅうねんの諸大乗經しよだいじやうきやう

を^{あげ}挙^{ぜん}て前^し四^み味^たに譬^ねえ涅槃^{はんぎ}經^{よう}を以^もて醍^{だい}醐^ご味^みに譬^たう諸^{しよ}大^{だい}乘^{じよう}經^{きよう}は
ね^ねはんぎ^ぎよう^{よう}
涅槃^ね經^{はん}より劣^りること百^ひ千^{やく}万^{せん}倍^{まん}なりと定^{さだ}め了^{りやう}んぬ、其^その上^か迦^し葉^{やう}
童^{どう}子^じの領^{りよう}解^げに云^いく「我^わ今^{こん}日^{にち}より始^{せい}て正^{せい}見^{けん}を得^えたり此^こよりの前^{まへ}は
わ^われらこ^ことこ^こじや^{けん}けん
我^わ等^{どう}悉^{しつ}く邪^{じゃ}見^{けん}の^な人^{にん}と名^なく」と此^この文^{ぶん}の意^いは涅槃^ね經^{はん}已^い前^{ぜん}の法^ほ華^け等^{どう}の
い^いつ^つさい^{さい}
一^い切^{しつ}の衆^{しゅう}典^{てん}を皆^{みな}邪^{じゃ}見^{けん}と云^いうなり、当^{まさ}に知^しるべし法^ほ華^け經^{きよう}は邪^{じゃ}見^{けん}の
し^しゅう^{てん}
經^{きよう}に^いま^ませ^{せい}い^{けん}の^ぶつ^しし^しょう^しの^あき^き
し^しょ^きよう^{よう}
諸^{しよ}經^{きよう}と涅槃^ね經^{はん}と勝^{しょう}劣^{れつ}を定^{さだ}むる時^{とき}・法^ほ華^け經^{きよう}を以^もて般^{はん}若^{にゃく}經^{きよう}に同^{どう}じて
し^しょ^きよう^{よう}
同^{どう}じく第^{だい}四^し時^じに撰^{せん}したり豈^あに正^{せい}見^{けん}の涅槃^ね經^{はん}經^{きよう}を以^もて邪^{じゃ}見^{けん}の法^ほ華^け經^{きよう}の
る^るつ^つう^う
流^{りゅう}通^{つう}と為^せんや如^い何^{かん}、答^{こた}て云^いく法^ほ華^け經^{きよう}の現^{げん}文^{ぶん}を^{げん}見^{けん}るに仏^{ほん}の本^{ほん}懷^{かい}殘^{ざん}す
こ^こと無^むし、方^{ほう}便^{べん}品^{ひん}に云^いく「今^{いま}正^{せい}しく是^これ其^{その}時^{とき}なり」寿^{じゆ}量^{りやう}品^{ひん}に云^いく
み^みず^{から}こ^こ
「毎^{まい}に自^{みづ}ら^{から}是^この念^{ねん}を^な作^{さく}す何^{なん}を以^もてか衆^{しゅう}生^{じよう}を^{しゅう}して無^む上^{じやう}道^{どう}に^むじ^じよう^{じやう}入^にるこ
と^すを^み得^え・速^{すみ}か^やに仏^{ぶつ}身^{しん}を^じよう^じ成^{じやう}就^{じゆ}するこ^ことを^じ得^えせしめ^めん」と神^{じん}力^{りき}品^{ひん}に

云く「要を以て之を言えば如来の一切の所有の法、乃至・皆此の
經に於て宣示顯説す」已上此等の現文は釈迦如来の内証は皆此の
經に尽くし給う其の上・多宝並に十方の諸仏来集の庭に於て
釈迦如来の已今当の語を証し法華經に如く經無しと定め了んぬ、
而るに多宝諸仏・本土に還るの後に但釈迦一仏のみ異変を存じて
還つて涅槃經を説いて法華經を卑まば誰人か之を信ぜん、深く此
の義を存ぜよ、随つて涅槃經の第九を見るに法華經を流通して説
いて云く「是の經・世に出ること彼の菓實の一切を利益し安樂す
る所多きが如く能く衆生をして仏性を見わさしむ法華の中の八
千の声聞の記☆を授かるを得て大果實を成ずるが如く
秋收冬蔵して更に所作無きが如し」と。

此の文の如くんば法華經邪見ならば涅槃經も豈に邪見に非ず

や、法華經は大収・涅槃經は☆拾なりと見えんぬ、涅槃經は
みずかほけきよう
自ら法華經より劣るの由を称す法華經の当説の文敢て相違無し、
ただかしよう
但し迦葉の領解並に第十四の文は法華經を下す文に非ず迦葉の
じしん
自身並に所化の衆・今始めて法華經の所説の常住・仏性・久遠
じつじよう
実成を覚る故に我が身を指して此より已前は邪見なりと云う、
ほけきよういぜん
法華經已前の無量義經に嫌わるる諸經を涅槃經に重ねて之を
あきら
挙げて嫌うなり法華經を嫌うには非ざるなり、亦涅槃經に至つて
これら
は此等の論は書付くるが如く天親菩薩の造・菩提流支の訳なり
きようもん
經文に違すること之多し涅槃論も亦本經に違す当に知るべし
やくしゃあやま
訳者の誤りなり信用に及ばず。

問うて云く先の教に漏れたる者を後の教に之を承け取つて得道
いわ
せしむるを流通と称せば阿含經は華嚴經の流通と成る可きや、
あこんきよう
あこんきよう
るつう
るつう
これ
う
とくどう

乃至法華經は前四味の流通と成る可きや如何、答えて曰く前四味の諸經は菩薩・人天等の得道を許すと雖も決定性の二乗・無性聞提の成仏を許さず、其の上仏意を探りて実を以て之を☆うるに亦菩薩・人天等の得道も無し十界互具を説かざるが故に久遠実成無きが故に、問うて云く証文如何、答えて云く法華經方便品に云く「若し小乗を以て化すること乃至一人に於てせば我則ち慳貪に墮せん此の事は為て不可なり」已上此の文の意は今選択集の邪義を破せんが為に余事を以て詮と為す故に爾前得道の有無の実義は之を出さず追つて之を☆うべし、但し四十余年の諸經は実に凡夫の得道無きが故に法華經は爾前の流通と為らず法華經に於て十界互具・久遠実成を顕わし了んぬ故に涅槃經は法華經の為に流通と成るなり。

だいぶん 大文の第七に問に随つて答うとは、若し末代の愚人上の六門に

依つて万が一も法華經を信ぜば権宗の諸人・或は自惑に依り

・或は偏執に依つて法華經の行者を破せんが為に多く四十余年

並に涅槃等の諸經を引いて之を難ぜん、而るに権教を信ずる人

は之多く・或は威勢に依り・或は世間の資縁に依り人の意に随つ

て世路を亘らんが為に・或は権教には学者多く実教には智者少

し是非に就て万が一も実教を信ずる者有るべからず、是の故に

此の一段を撰んで権人の邪難を防がん。

問うて云く諸宗の学者難じて云く「華嚴經は報身如来の所説

・七処・八会・皆、頓極頓証の法門なり、法華經は応身如来の

所説・教主既に優劣有り、所説の法門に於て何ぞ浅深無からん

随つて対告衆も法慧・功德林・金剛幢等なり永く一乘を雜えず、

法華經は舍利弗等を以て対告衆と為す」宗難、法相宗の如きは
解深密經を以て依憑と為し難を加えて云く「解深密經は文殊・
觀音等を以て対告衆と為す勝義生菩薩の領解には一代を有・空
・中と詮す其の中の中とは華嚴・法華・涅槃・深密等なり法華經
の信解品の五時の領解は四大声聞なり菩薩と声聞と勝劣天地
なり」、浄土宗の如きは道理を立てて云く「我等は法華等の諸經
を誹謗するに非ず彼等の諸經は正には大人の爲傍には凡夫の
爲にす断惑証理・理深の教にして末代の我等之を行ずるに千人の
中に一人も彼の機に当らず在家の諸人多分は文字を見ず亦華嚴・
法相等の名を聞かず況や其の義を知らんや、浄土宗の意は我等
凡夫は但口に任せて六字の名号を称すれば現在に阿弥陀如来二
十五の菩薩等を遣わし身に影の随う如く百重千重に行者を圍繞

して之これを守り給たまう、故ゆえに現世げんせには七難ひちなんそくめつ即滅ひちふくそくしやう・七福ひちふくそくしやう即生ないしし乃至なり臨終りんじゆうの時は必ず来迎らいごう有つて観音かんのんの蓮台れんだいに乘しじ須臾しゆゆの間に浄土じやうどに至り業えどに随したがつて蓮華れんげ開ほけ法華經ほけきやうを聞きいて実相じつそうを覺さとる何なんぞ煩わずらいしく穢土えどに於おいて余行よぎやうを行いじて何いずれの詮あか有ある但万ばんじ事を抛なげうつて一向いっこうに名号みやうごうを称よせよ」と云云、禅宗ぜんしゆう等の人云いわく「一代いちだいしやうきやう聖教せいぎやうは月を指す指・天地日月等も汝等なんじらが妄心もうしんより出いでたり十方じゆつぽうの浄土じやうども執心しゆうしんの影像えいそうなり釈迦しゃか十方じゆつぽうの仏陀ぶつだは汝なんじが覺心かくしんの所變しよへん・文字もんじに執しゆうする者は株くいぜを守る愚人ぐにんなり我が達磨大師だるまだいしは文字もんじを立てず方便ほうべんを仮からずいちだいしやうきやう一代いちだい聖教せいぎやうの外かしように仏迦葉かしやうに印しんじつして此の法をを伝ほけきやうう法華經等はいまは未いまだ眞実しんじつを宣のべべず」已上。

此等これらの諸宗しよしゆうの難なん一あらに非なんず如何ほけきやうぞ法華經しんじんの信心やぶを壊やぶらざる可べしや、答いて云いく法華經ほけきやうの行者ぎやうじやは心中しんちゆうに「四十余年よんじゆうよねん已今いこん当とう皆是かいぜしんじつ眞実

・依法不依人」等の文を存し而も外に語に之を出さず難に隨て
之を問うべし抑所立の宗義は何の經に依るや、彼、經を引か
ば引くに隨つて亦之を尋ねよ、一代五十年の間の說の中に法華經
より先か後か同時なるか亦先後不定なるかと、若し先と答えば
未顕眞實の文を以て之を責めよ敢えて彼の經の說相を尋ぬること
勿れ、後と答えば當說の文を以て之を責めよ、同時と答えば今說
の文を以て之を責めよ、不定と答えば不定の經は大部の經に非ず
一時一会の說にして亦物の数に非ず其の上、不定の教と雖も三說
を出でず、設い百千万の義を立つと雖も四十余年の文を載せて
虚妄と称せざるより外は用うべからず、仏の遺言に不依不了義經
と云うが故なり。

亦智儼・嘉祥・慈恩・善導等を引いて徳を立て難ずと雖も法華

・涅槃に違する人師に於ては用うべからず依法不依人の金言を
抑ぐが故なり。

亦法華經を信ぜん愚者の為に二種の信心を立つ、一には仏に

就て信を立て二には經に就て信を立つ、仏に就て信を立てとは

權宗の學者来り難じて云わん善導和尚は三昧發得の人師・本地

弥陀の化身なり慈恩大師は十一面觀音の化身亦筆端より舍利を

雨らす此等の諸人は皆彼の經經に依つて皆証有り何ぞ汝彼

の經に依らず亦彼の師の義を用いざるや、答えて云く汝聞け

一切の權宗の大師先德並に舍利弗・目連・普賢・文殊・觀音

乃至阿弥陀・藥師・釈迦如来・我等並に十方の諸人の前に集ま

りて説いて法華經は汝等が機に叶わず念仏等の權經の行を修し

て往生を遂げ後に法華經を覺ると云わん是の如き説を聞くと

雖も敢えて用う可からず、其の故は四十余年の諸の經には法華經
の名字を呼ばず何れの処にか機の堪不堪を論ぜん、法華經に
於ては釈迦・多宝・十方諸仏一処に集りて撰定して云く法をし
て久住せしむ如来の滅後に於て閻浮提の内に広く流布せしめ断絶
せざらしむ、此の外に今・仏出来して法華經を末代不相応と定
めば既に法華經に違す知んぬ此の仏は涅槃經に出す所の滅後の魔
・仏なり之を信用す可からず、其の已下の菩薩・声聞・比丘等
は亦言論するに及ばず此等是不審無し涅槃經に記する所の滅後の
魔の所変の菩薩等なり、其の故は法華經の座は三千大千世界の外
四百万億阿僧祇の世界なり其の中に充滿せる菩薩・二乗・人天
・八部等皆如来の告勅を蒙むり各各所在の国土に法華經を弘む
可きの由之を願いぬ、善導等若し権者ならば何ぞ竜樹・天親等

の如くごと權教ごんきやうを弘ひろめて後に法華經ほけきやうを弘ひろめざるや法華經ほけきやうの告ごう勅ちよくの数すうに入いらざるや何ぞなん仏ぶつの如くごと權教ごんきやうを弘ひろめて後に法華經ほけきやうを弘ひろめざるや、若しも此ぎの義ぎ無なくんば設たいい仏な為なりと雖いえどこれ之これを信べず可べからず今はほけきやう法華經ほけきやうの中ちゆうの仏ぶつを信ゆえず故ゆえに仏おに就おて信しんを立たつと云いうなり。

問いうて云いく釈迦如来しやかによらいの所説しよせつを他た仏ぶつ之これを証しんするを實説じつせつと稱しやうせば何ぞなん阿彌陀經あみだを信あぜざるや、答いえて云いく阿彌陀經あみだに於おては法華經ほけきやうの如ごとき証しやう明みやう無むきが故ゆえに之これを信しんぜず、問いうて云いく阿彌陀經あみだを見みるに釈迦如来しやかによらいの所説しよせつの一日七日いちにちしちにの念ねん仏ぶつを六方りくぽうの諸しよ仏ぶつ舌ぜつを出だし三千さんぜんを覆おうて之これを証しやう明みせり何ぞなん証しやう明み無むしと云いうや、答いえて云いく阿彌陀經あみだに於おては全ぜんく法華經ほけきやうの如ごとき証しやう明み無むく但しや釈迦一いちにちぶつ仏ぶつ、舍利弗しやりふつに向むかつて説いいて言いく我わ、一人ひとり阿彌陀經あみだを説しやうくのみのみに非あらず六方りくぽうの諸しよ仏ぶつ舌ぜつを出だし三千さんぜんを覆おうて阿彌陀經あみだを説しやうくと云いう此等これらは釈迦しやか

いちぶつ 一仏の説なり敢えて諸仏来りたまわず、此等の権文は四十余年の
きようしゅ ごんぶつ 間は教主も権仏の始覚の仏なり、仏、権なるが故に所説も亦権
ゆえ よんじゅうよねん なり故に四十余年の権仏の説は之を信ず可からず、今の法華・
ねはん くおんじつじよう えんぶつ 涅槃は久遠実成の円仏の実説なり十界互具の実言なり亦多宝・
じゅつぽう 十方の諸仏来りて之を証 明し給う故に之を信ずべし阿弥陀經
むりようぎきよう みけんしんじつ の説は無量義經の未顕真實の語に壞れ了ぬ全く釈迦一仏の語に
しよぶつ しようみよう して諸仏の証 明には非ざるなり。

二に經に就て信を立つとは、無量義經に四十余年の諸經を
あ みけんしんじつ 挙げて未顕真實と云う、涅槃經に云く「如来は虚妄の言無しと
いえども しゅじよう こもう 雖も若し衆生・虚妄の説に因つて法利を得と知れば宜しきに
したが ほうべん すなわ ため これ と 随つて方便して則ち為に之を説き給う」又云く「了義經に依つ
ふりようぎきよう よ て不了義經に依らざれ」已上是の如きの文一に非ず皆四十余年の

自説の諸経を虚妄・方便・不了義・魔説と称す是れ皆人をして
其の経を捨てて法華・涅槃に入らしめんが為なり、而るに何の
恃み有つて妄語の経を留めて行儀を企て得道を期するや、今
権教の情執を捨て偏に実経を信ず故に経に就て信を立つと云
うなり。

問うて云く善導和尚も人に就て信を立て行に就て信を立つ何の
差別有らんや、答えて云く彼は阿弥陀経等の三部に依つて之を立
て一代の経に於て了義不了義経を分たずして之を立つ、故に法華
・涅槃の義に対して之を難ずる時は其の義壞れ了んぬ。守護

国家論

◆七

災難対治抄

正元二年 三十九歳御作

78

P

国土に大地震・非時の大風・大飢饉・大疫病・大兵乱等の
 種種の災難の起る根源を知りて対治を加う可きの勘文。

金光明經に云く「若し人王有りて其の国土に於て此の経有り

と雖も未だ嘗て流布せず捨離の心を生じて聴聞せんことを樂わ

ず亦供養し尊重し讚歎せず四部の衆の持經の人を見て亦復尊重

し乃至供養すること能わず遂に我等及び余の眷属無量の諸天をし

て此の甚深の妙法を聞くことを得ず甘露の味に背き正法の流を

失い威光及び勢力有ること無らしむ惡趣を増長し人天を損減

し生死の河に墜ちて涅槃の路に背かん、世尊・我等四王並に諸の

眷属及び藥叉等斯くの如き事を見て其の国土を捨てて擁護の心無
けんぞくおよ やしや か ごと こそ くにど おうご ころな
けん但我等是の王を捨棄するのみに非ず亦無量の国土を守護する
われらこ しゃき あら むりよう こくど しゅご
しよてんぜんじん みなことごとしやこ すで しゃり おわ そ まさ
諸天善神有らんも皆悉く捨去せん既に捨離し已れば其の国に当に
しゅじゅ さいか こくい そうしつ いっさい にんしゅうみなぜんしん
種種の災禍有つて国位を喪失すべし、一切の人衆皆善心無けん
ただけいばく さつがい しんじよう たがい あいざんでんし まげ つみ
唯繫縛・殺害・瞋諍のみ有つて互に相讒諂し枉げて辜無きに
およ えきびよりゆうこう すいせいしばし りようじつなら げん はくしよくつねな
及ばん、疫病流行し彗星数ば出で兩日並び現じ薄蝕恒無く
くくびやく ふしよう ほしなが ちうご
黑白の二虹不祥の相を表わし星流れ地動き井の内に声を發し
ぼうう あくふう じせつ よ ききん あ みようじつ
暴雨・惡風・時節に依らず常に飢饉に遭い苗実も成らず多く
たほう おんぞく こくない しんりやく じんみんもろくろうのう
他方の怨賊有つて国内を侵掠し人民諸の苦惱を受け土地に所樂
ところあ
の処有ること無けん」と。

大集經に云く「若し国王有つて我が法の滅せんを見て擁護せ
だいしつきよう いわ こくおう
ずんば無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失して其の国の中
むりようせ おい せかいえ しゅう こことみなめしつ そ

に三種ふしやうの不祥ふしやうの事ことを出いださん、乃至ないしみやうじゅう命終だいじこくして大地獄だいじこくに生なぜん」と。

にんのうきやう いわ

仁王經にんのうきやうに云いく

大王・国土乱れん時だいおう こくどみだ

は先きじんみだず鬼神乱きじんみだる鬼神乱きじんみだる

るが故ゆえに万民乱ばんみんみだると、亦また云いく大王・

我今五眼だいおうをもつて明あきらかに三世さんぜを

見るに一切いっさいの国王こくおうは皆過去世みなかこぜに五百いっさいの仏つに侍つかうるに由よつて帝王主ていおうしゅ

と為なることを得えたり、是これをもつて一切いっさいの聖人しょうにん羅漢らかん而しかも為ために彼か

国土こくどの中に來生らいしやうして大利益りやくを作なさん若もし王わうの福尽つきん時ときは一切いっさい

の聖人しょうにん皆捨すて去さることを為なさん若もし一切いっさいの聖人しょうにん去さらん時ときは七難ひちなん

必おこず起おこる」と。

仁王經にんのうきやうに云いく

大王吾今化だいおうわれする所の百億ひやくおくの須弥しゆみ・百億ひやくおくの日月にちがつ

・一一しゆみの須弥しゆみに四天下してんげ有そり其その南閻浮提えんぶだいに十六たいこくの大国たいこく五百いっさいの

中国ちゆうごく十千しやうこくの小国せうこく有そり其その国土こくどの中に七おつの畏おそる可べき難なん有いっさいり一切いっさい

の国王こくおう是なんの難もつての為ゆえの故いに、云何いなるを難なんと為なす日月度にちがつを失うしな時じ節せつ

の国王こくおう是なんの難もつての為ゆえの故いに、云何いなるを難なんと為なす日月度にちがつを失うしな時じ節せつ

ほんぎやく 返逆し・或は赤日出で黒日出で二三四五の日出づ・或は日蝕し
ある せきじつい こくじつい
て光無く・或は日輪一重二三四五重輪現ずるを一の難と為すな
なく ある にちりん こじゅうりんげん
り、二十八宿度を失い金星・彗星・輪星・
きせい・かせい・すいせい・ふうせい ちようせい なんと・ほくと ごちん だいせい
鬼星・火星・水星・風星・☆星・南斗・北斗・五鎮の火星・
いっさい こくしゅ さんこうせい ひやつかんせい かく こと しよせい へんげん
一切の国主星・三公星・百官星・是くの如き諸星・各各・変現
するを二の難と為すなり、大火・国を焼き万姓焼尽し・或は
なん な たいか ばんしやうしやうじん ある
鬼火・竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火・是くの如く
きか りゅうか・てんか・さんじんか じんか・じゅもくか そっか かく こと
へんげ 変怪するを三の難と為すなり、大水・百姓を漂没して時節返逆
たいすい ひやくせい ひやうもつ じせつほんぎやく
し冬・雨ふり夏・雪ふり冬・時に雷電霹靂し六月に冰霜雹を
あめ ふきすい・こくすい せいすい ふ どざん・せきざん こおりそうばく
ふ 雨らし赤水・黒水・青水を雨らし・土山・石山を雨らし沙礫石を
せきすい・こくすい せいすい ふ どざん・せきざん ふ されき
ふ 雨らし江河逆まに流れ山を浮かべ石を流す是くの如く変ずる時を
こうか かく こと
四の難と為すなり、大風・万姓を吹殺し国土の山河・樹木・
なん な たいふう ばんしやう ふきころ こくど さんが じゅもく

いちじ 一時に滅没して非時の大風・黒風・赤風・青風・
てんふう・ちふう・かふう すいふう 天風・地風・火風・水風・是くの如く変ずる時を五の難と為すな
てんち り、天地・国土亢陽し炎火洞然として百草亢旱し五穀登らず
とち 土地赫然として万姓滅尽せん是くの如く変ずる時を六の難と
な 為すなり、四方の賊来りて国を侵し内外の賊起り
かそく・すいそく・ふうそく・きそく 火賊・水賊・風賊・鬼賊あつて百姓荒乱し刀兵劫起せん是くの
ごとく 如く怪する時を七の難と為すなり」と。

ほけきよう 法華經に云く「百由旬の内をして諸の衰患無からしめん」と。
ねはんぎよう 涅槃經に云く「是の大涅槃微妙の經典・流布せらるる処は
まさ 当に知るべし其の地は即ち是れ金剛なり是の中の諸人亦金剛の
ごとく 如し」と。

にんのうきよう 仁王經に云く「是の經は常に千の光明を放ちて千里の内をし

て七難ひちなん起らざらしむと、又云く諸の惡比丘おろもろあくびく多く名利みょうりを求め國王こくおう・太子たいし・王子みこの前に於て自ら破仏法の因縁いんねん・破国の因縁いんねんを説く其その王わきま別えずして此の語ことばを信聴しんちようし横ほしに法制ほうせいを作り仏戒ぶつかいに依よらずこれは破仏はぶつ・破国の因縁いんねんと為す」と。

今これ之かんがを勘ほけきうるに法華經ほけきように云く「百由旬ひやくゆじゆんの内諸衰患ないしよすいげんなからしむ」と仁王經にんのうきように云く「千里せんりの内に七難ひちなん不起らしむ」と、涅槃經ねはんぎように云くまさ「当あたに知るべし其その地すなわは即こち是こんごうれ金剛こんごう、是この中の諸人しよにん亦また金剛こんごうの如ごとし」と文。

疑うたがつて云いわく今・此この國土こくどに種種しゆじゆの災難さいなん起おこることを見聞けんもんするに所謂い建長八年八月けんちよう自より正元二年二月せいげんに至いたるまで大地震だいじしん非時ひじの大風たいふう・大飢饉ききん・大疫病えきびよう等種種しゆじゆの災難さいなん連連れんれんとして今に絶えず大體だいたい國土こくどの人数にんずう尽べく可べきに似たり、之に依よつて種種しゆじゆの祈請きしようを致いたす人之

多しいへどと雖も其その驗しるし無きか、正直捨方便・多宝の証しょうみょう明・諸仏しよぶつ出舌しゅつぜの法華經の文の令百由旬内・雙林最後の遺言ゆいごんの涅槃經ねはんぎようの其地金剛の文、仁王經の千里の内に七難不起ひちなんおこらざらむの文皆虛妄に似たり如何いかに。

答えて云く今愚案を以て之を勘うるに上に挙ぐる所の諸

大乗經・国土

に在り而も祈請と成らずして災難起ることは少し

其の故有るか、所謂金光明經に云く其の国土に於て此の經有り

と雖も未だ嘗つて流布せず捨離の心を生じて聴聞せんことを

樂わず我等四王皆悉く捨て去り其の国当に種種の災禍有るべし、

大集經に云く「若し国王有つて我が法の滅せんを見て捨てて

擁護せざれば其の国内三種の不祥を出さん」と、仁王經に云く

「仏戒に依らざる是を破仏・破国の因縁と為す若し一切の聖人

去る時は七難必ず起らん」已上、此等の文を以て之を勸うるに
法華經等の諸大乘經・國中に在りと雖も一切の四衆捨離の心
を生じて聴聞し供養するの志を起さざる故に國中の守護の
善神・一切の聖人・此の国を捨て去り守護の善神聖人等・無き
が故に出来する所の災難なり。

問うて曰く國中の諸人・諸大乘經に於て捨離の心を生じて
供養する志を生ぜざる事は何の故より起るや。

答えて曰く仁王經に曰く「諸の惡比丘多く名利を求め國王・
太子・王子の前に於て自ら破佛法の因縁・破国の因縁を説かん
其の王別えずして此の語を信聴し横に法制を作りて仏戒に依ら
ず」と、法華經に云く「惡世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ
得ざるをこれ得たりと謂い我慢の心充滿せん是の人惡心を懷き

國王・大臣・婆羅門・居士及び余の諸の比丘に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の人・外道の論議を説くと謂わん惡鬼其の身に入る」等と云云。

此等の文を以て之を思うに諸の惡比丘國中に充滿して破國・破仏法の因縁を説く國王並に國中の四衆弁えずして信聴を加うるが故に諸大乘經に於て捨離の心を生ずるなり。

問うて曰く諸の惡比丘等・國中に充滿して破國・破仏戒等の因縁を説くことは仏弟子の中に出来す可きか外道の中に出来す可きか。

答えて曰く仁王經に云く「三宝を護る者にして轉た更に三宝を滅し破らんこと師子の身中の虫の自ら師子を食うが如し外道には非ず」文。

此の文の如くんば仏弟子の中に於て破国・破仏法の者出来す
可きか、問うて曰く諸の悪比丘・正法を壊るに相似の法を以て
之を破らんか当に亦惡法を以て之を破るべしとせんか、答えて
曰く小乗を以て権大乘を破し権大乘を以て実大乘を破し
師弟共に謗法破国の因縁を知らざるが故に破仏戒・破国の因縁を
成して三惡道に墮するなり。

問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く法華經に云く仏の方便・
隨宜所説の法を知らずして惡口して顰蹙し数数擯出せられんと。
涅槃經に云く我涅槃の後当に百千無量の衆生有つて誹謗して
是の大涅槃を信ぜざるべし三乗の人も亦復是くの如く無上の
大涅槃經を憎惡せん已上。

勝意比丘の喜根菩薩を謗じて三惡道に墮ちし尼思仏等の不輕

菩薩を打つて阿鼻の炎を招くも皆大小・権実を弁えざるより之

起れり十悪・五逆は愚者皆罪為ることを知る故に輒く破国・

破仏法の因縁を成ぜず、故に仁王經に云く「其の王別えずして

此の語を信聴す」と、涅槃經に云く「若し四重を犯し五逆罪を

作り自ら定めて是くの如き重事を犯すと知り而も心に初より怖畏

・懺悔無くして肯て發露せず」已上。

此くの如き等の文は謗法の者は自他共に子細を知らざる故に

重罪を成して国を破し仏法を破するなり。

問うて曰く若爾らば此の国土に於て權教を以て人の意を取り

實教を失う者之有るか如何、答えて曰く爾なり、問うて曰く

其の証拠如何、答えて曰く法然上人所造等の選択集是れなり

今其の文を出して上の經文に合せ其の失を露顯せしめん若し

たいじ 対治を加えば くにど 国土を安穩ならしむ可きか、 せんちやくしゅう 選択集に云く

「道 とうしゆくぜん 綽禪師・聖道 しょうどう・浄土の二門を立て しょうどう 聖道を捨てて まさ 正しく

じょうど 浄土に帰するの文初に しょうどうもん 聖道門とは之に就て 二有り一には だいじょう 大乘二

には しょうじょう 小乗なり だいじょう 大乘の中に就いて けんみつ 顕密・権実等の ぶどう 不同有りと

いへど 雖も今・此の集の意は ただけんだい 唯頭大及び こんだい 権大を存す故に うれ 歴劫迂回の

行に当る之に じゆん 準じて之を思うに みつだい 密大及び じつだい 実大を存すべし、 しか 然れ

ば ずなわ 則ち じんごん 今真言・ ぶっしん 仏心・ てんだい 天台・ けこん 華嚴・ さんろん 三論・ ほうそう 法相・ ちろん 地論・ じょうろん 摂論

これら 此等の 八家の意 正しく 此れに在るなり、 どんらん 曇鸞法師の 往生論の注

に いく 云く「 謹んで 竜樹菩薩の 十住 毘婆沙を案ずるに いく 云く菩薩・

あ 阿毘跋致を求むるに 二種の道有り一には 難行道 二には 易行道 な

り、 此の中に 難行道とは 即ち 是れ 聖道門 なり 易行道とは 即ち

是れ 浄土門 なり、 浄土宗の 学者 先ず 須く 此の旨を知るべし 設い 先

しょうどうもん

ず聖道門を学する人と雖も若し浄土門に於て其の志有らん者

すべからしょうどう

は須く聖道を棄てて浄土に帰すべし」文、又云く「善導和尚正雜

そうぎよう

しょうぎよう

二行を立て雜行を捨てて正行に帰するの文、第一に読誦雜行

かみ

かんきよう

おうじようじようど

いげ

だいじようじよう

けんみつ

とは上の觀經等の往生浄土の經を除いて已外・大小乗・顯密

しょうぎよう

おい

じゆじ

じゆ

ことごとくじゆそうぎよう

なす

なす

の諸經に於て受持・読・誦するを悉く読誦雜行と名く、第三に

らいはいそうぎよう

かみ

みだ

らいはい

いげ

いげいっさいしよよ

いげ

礼拝雜行とは上の弥陀を礼拝するを除いて已外一切諸余の仏・

ぼさつ

およ

もろもろせてん

おい

らいはいきようけい

ことこらいはいそうぎよう

いげ

菩薩等及び諸の世天等に於て礼拝恭敬するを悉く礼拝雜行と

なす

名く」

ひそか

いわ

すべから

しゆう

あにひやくそく

私に云く此の文を見るに須く雜を捨てて專を修すべし豈百即

ひやくしよう

せんしゆうしろうぎよう

せんちゆうむいつ

そうしゆうそうぎよう

しゆう

百生の專修正行を捨てて堅く千中無一の雜修雜行を執せ

ぎようじやよ

これ

しりよう

しりよう

しりよう

しりよう

しりよう

しりよう

んや行者能く之を思量せよと。

いわ

じようげん

にゆうそうろく

はんに

やきよう

はんに

はんに

はんに

はんに

又云く貞元入蔵録の中・始め大般若經六百卷より

ほうじょうじゅうきょう

法常住經に終るまで顯密の大乗經総じて六百三十七部二千

八百八十三卷なり皆須く読誦大乘の一句に摂すべし当に知るべ

し隨他の前には暫く定散の門を開くと雖も隨自の後には還つて

定散の門を閉づ一たび開きて以後永く閉じざるは唯是れ念仏の

一門なり文、又最後結句の文に云く「夫れ速に生死を離れんと

欲せば二種の勝法の中に且く聖道門を闍て選んで浄土門に入れ

浄土門に入らんと欲せば正雜二行の中に且く諸の雜行を抛て選

んで正行に歸すべし、」已上選択集の文なり。

今之をるに日本国中の上下万人深く法然上人を信じて此の書

を☆ぶ故に無智の道俗此の書の中の捨閉閣抛等の字を見て浄土

の三部經・阿弥陀仏より外は諸經・諸仏・菩薩・諸天善神等に

於て捨閉閣抛等の思を作し彼の仏經等に於て供養受持等の志

を起さず還かえつて捨離しゃりの心を生ず故ゆえに古いにしえの諸大師等の建立こんりゅうせし所

の鎮護ちんご國家の道場どうじょう零落れいらくせしむと雖いえども護惜ごしやく建立こんりゅうの心無こころなし護惜ごしやく

建立こんりゅうの心無こころなきが故ゆえに亦また読誦どくじゆ供養くやうの音絶しゆごえ守護しゆごの善神ぜんじんも法味ほうみを

嘗なめざるが故ゆえに國を捨てて去り四依しえの聖人しょうにんも来らざるなり、

偏ひとえに金光明こんこうみやう・仁王等にんのうの一切いっさいの聖人しょうにん去る時は七難ひちなん必ず起おこらん我等われら

四王皆悉しおうみなことごとしやこく捨去すてせん既に捨離しゃりし已おわれば其その國当まさに種種しゆじゆの災禍さいかあ有る

べしの文に当れり豈あに諸惡しよあく比丘びく多く名利みょうりを求め、惡世あくせの中の比丘びくは

邪智じゃちにして心諂曲てんこくの人に非あらずや。

疑うたがひつて云いわく國土こくどに於おいて選集せんちやくしゆを流布るふせしむるに依よつて災難さいなん

起おこると云わば此の書無いぜんき已く前は國中くにじゅうに於おいて災難さいなん無かりしか、答

えて曰いわく彼の時またさいなんも亦災難いわ有り云いく五常ごじやうを破ぶつり仏法ぶつぽうを失うしないし者これあ之有

りしが故いなり所謂い周の宇文うぶん・元嵩等げんすう是これなり、難なんじて曰いわく今の世の

さいなんごじょう 災難五常を破りしが故に之起ると云わば何ぞ必ずしも 選択集

るふ とが よ 流布の失に依らんや、答えて曰く 仁王経に云く「大王・未来の

世の中に諸の 小国王・四部の弟子諸の悪比丘横に法制を作りて

ぶっかい よ またまたぶつそう 仏戒に依らず亦復仏像の形・仏塔の形を造作することを聴さず

ひちなん おこ 七難必ず起らん」と、 金光明経に云く「供養し尊重し讃歎せ

ず其の国に当に種種の災禍有るべし」涅槃経に云く「無上の

だいねはんきよう そうお 大涅槃経を憎悪す」等と云云、 豈弥陀より外の諸仏・諸経等を

くよう らいはい 供養し礼拝し讃歎するを悉く雑行と名くると云うに当らざらん

や、難じて云く 仏法已前国に於て災難有るは何ぞ謗法の者の故な

らんや、答えて云く 仏法已前に五常を以て国を治むるは遠く仏誓

を以て国を治むるなり 礼義を破るは仏の出したまえる五戒を破る

なり、問うて云く 其の証拠如何、答えて曰く 金光明経に云く

「一切世間の所有る善論は皆此の經に因る」と、法華經に云く
「若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を説かんと皆正法
に順ず」と普賢經に云く「正法をもつて國を治め人民を邪枉せ
ず是れを第三懺悔を修すと名く」と、涅槃經に云く「一切世間の
外道の經書は皆是れ仏説なり外道の説に非ず」と、止觀に云く
「若し深く世法を識れば即ち是れ佛法なり」と、弘決に云く「礼樂
前に駁せて真道後に啓く」と、広釈に云く「仏三人を遣して
且く震旦を化す五常以て五戒の方を開く昔は太宰・孔子に問うて
云く三皇・五帝は是れ聖人なるか孔子答えて云く聖人に非ず又
問う夫子是れ聖人なるか亦答う非なり又問う若し爾らば誰か
聖人なる、答えて云く吾聞く西方に聖有り釈迦と号く」文。

此等の文を以て之を勘うるに佛法已前の三皇・五帝は五常を

もつ 以て国を治む夏おさの桀かのけつ・殷いんのちゆうの紂しゆう・周しゆうの幽れいぎ等の礼義れいぎを破りて国を喪ほろぼすは遠ぶつせいく仏誓ふつせいの持破じはに当れり。

疑うたがいつて云いわく若もし爾しからば法華ほつけ・真言しんごん等の諸大乗しよだいじようきよう經きやうを信しんずる者

は何なんぞ此なんの難なんに値あえるや、答こたえて曰いわく金光明經こんこうみようきように云いわく「枉まげげて

辜つみ無なきに及およばん」と、法華經ほつけきやうに云いわく「横よこしまに其そのの殃わざわいに羅らる」等と云

云い、此等これらの文もんを以もつて之これを推すいするに法華真言ほつけしんごん等らを行いずる者ものも未いまだ

位深くらいふかからず信心しんじん薄うすく口くちに誦じゆすれども其そのの義ぎを知らず一向名利いっかうみようりの

為ために之これを誦じゆす先せん生の謗法ほうほうの失未とがいまだ尽つきず外ほかに法華等ほつけを行いじて内

に選せん択ちやくの心しんを存ぞんす此この災難さいなんの根源こんげん等らを知らざる者ものは此この難なんを

免まぬれ難がたきか。

疑うたがいつて云いわく若もし爾しからば何なんぞ選せん択ちやく集しゆうを信しんずる謗法ほうほう者ものの中に此

の難なんに値あわざる者もの之これ有ありや、答こたえて曰いわく業力ごうりきふじよう不定ふじようなり順現業じゆんげんごうは

ほけきょう　法華經に云く此の人現世に白癩の病乃至諸の悪重病を得んと、

にんのうきょう

仁王經に云く「人・仏教を壞らば復孝子無く六親不和にして

てんじんたす

天神祐けず疾疫惡鬼日に來りて侵害し災怪首尾し連禍せん」と、

ねはんぎょう

涅槃經に云く「若し是の經典を信ぜざる者有らば若し臨終の時

ある

・或は荒乱に値い刀兵競い起り帝王の暴虐・怨家の讎隙に侵逼

せられん」已上、順次生業は法華經に云く「若し人信ぜずして此

の經を毀謗せば其の人命終して阿鼻獄に入らん」と、仁王經

いわ

に云く「人・仏教を壞らば死して地獄・餓鬼・畜生に入らん」

已上、順後業等は之を略す。

問うて曰く如何にして速かに此の災難を留む可きや、答えて

曰く速に謗法の者を治す可し若し爾らずんば無尽の祈請有りと

いえど

雖も災難を留む可からざるなり、問うて曰く如何が対治す可き、

答えて曰く治方亦經に之有り涅槃經に曰く仏言く唯一人を除いて
余の一切に施せ正法を誹謗して是の重業を造る唯此くの如き
一闡提の輩を除いて其の余の者に施さば一切讚嘆すべし已上、此
の文の如んば施を留めて対治す可しと見えたり此の外にも亦治方
是れ多く具に出すに暇あらず、問うて曰く謗法の者に於て供養を
留め苦治を加うるは罪有りや不や、答えて曰く涅槃經に云く、今
無上の正法を以て諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼に付属す
正法を毀る者は王者・大臣・四部の衆當に苦治すべし尚罪有る
こと無けん已上。

問うて曰く汝僧形を以て比丘の失を顯すは罪業に非ずや、答
えて曰く涅槃經に云く「若し善比丘あつて法を壞る者を見て置い
て呵責し驅遣し拳処せざれば當に知るべし是の人は仏法の中の

怨なり若し能く駈遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子真の声聞なり「已上、予此の文を見るが故に仏法中怨の責を免れんが爲に見聞を憚らずして法然上人並に所化の衆等の阿鼻大城に墮つべき由を称す、此の道理を聞き解く道俗の中に少少は廻心の者有り若し一度高覽を経ん人は上に挙ぐる所の如く之を行ぜずんば大集經の文の若し国王有つて我が法の滅せんを見て捨てて擁護せざれば無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失して其の国内に三種の不祥を出さん乃至命終して大地獄に生ぜんとの記文を免かれ難きか、仁王經に云く「若し王の福尽きん時は七難必ず起らん」と、此の文に云く「無量世に於て施戒慧を修すとも悉く皆滅失す」等と云云、此の文を見るに且く万事を聞いて先ず此の災難の起る由を勘う可きか若し爾からざれば弥亦重ねて

さいなんおこ 災難起る可きか、
おろか 愚勘是くの如し取捨は人の意に任す。

◆八 念仏者追放せしむる宣旨御教書五篇に集列す

かんもん 勘文状 正元元年 三十八歳御作 八六 P

そ おもん 夫れ以みれば仏法流布の砌には天下静謐なり 神明仰崇の界

こくどぶによう

ぶつぼうるふ

みぎり

てんがせいひつ

しんみようぎようすう

じんみん 人民に至るまで此の義改むること無き職として然り。

いた

ぎよう

げんくうほっし

は 云う者あり道俗を欺くが故に

ゆえ

ここ 爰に後鳥羽院の御宇に源空法師と云う者あり道俗を欺くが故に

せんしゅう

おこ

けんみつ

きようり

は

なんよ

たぶら

ゆえ

じやぎ

かま

専修を興して顕密の教理を破し男女を誑かすが故に邪義を構え

ぶっしん

いこう

けんみつ

きようり

は

なんよ

たぶら

ゆえ

じやぎ

かま

て仏神の威光を滅し常に四衆を誘うて云く、浄土三部の外は

しゅうきよう

きち

しやうみよう

ししゅう

いざな

いわ

じようど

じやうど

い

わ

衆経を棄置すべし 唱名 一行の外は余行を廃退すべし 矧んや

神祇冥道の恭敬に於ておや況や孝養報恩の事善に於ておや之を
信ぜざる者は本願を疑うなりと、爰に頑愚の類は甚深の妙典
を輕慢し無智の族は神明の威徳を蔑如す、就中止觀遮那の
学窓に臨む者は出離を抑ゆる癡人なり三論・法相の稽古を励む者
は菩提を塞ぐ証人なりと云云。

之に依つて仏法日に衰え迷執・月に増す然る間・南都北嶺の
明德・奏聞を経て天聴に達するの刻・源空が過咎遁れ難きの間
遠流の宣を蒙り配所の境に赴き畢んぬ、其の後門徒猶勅命を
憚らずして弥專修を興すること殆ど先代に超えたり違勅の
至り責めても余り有り故に重ねて專修を停廢し源空の門徒を
流罪すべきの由・綸言頻に下る又関東の御下知・勅宣に相添う。
門葉等は遁るべきの術を失い・或は山林に流浪し・或は遠國に

とういん 逃隠す、爾しかしてより華夷かい・称名しょうみょうを抛なげうちて男女なんよ・正説せいせつに帰する者

なり然しかるに又近來きんらい先規せんきを弁わえざるの輩やからぶっしん・仙神あがめを崇めざるの類たぐい再び

せんしゅう

専修せんしゅうの行を企くわだて猶な邪惡おじやあくを増はなすこと甚はなし。

にちれん

日蓮にちれん不肖ふしょうなりと雖いえども且かつは天下てんがの安寧あんねいを思おもうが為かつ且かつは佛法ぶつぽうの

はんじょう

繁昌はんじょうを致いたさんが為ために強あなちに先賢せんけんの語ことばを宣説せんぜつし称名しょうみょうの行を停廢ていはい

せんと欲ぐし又愚懷ぐかいの勘文かんもんを添すこぶえ頗じやにんる邪人まんどうの慢幢まんどうを倒たさんとす、

かんちゅう

勘注かんちゅうの文繁しげくして見難がたし知やすり易やすからしめんが為ために要しよを取り諸しよを

省つらき略りやくして五篇ごへんを列いぬ、委細いさいの旨むねは広本ひろくほんに在おくのみ。

そうじょう

奏狀篇そうじょう 詮しんを取りて之これを注くわしす委くわしくは広本ひろくほんに在おり

なんと

南都なんとの奏狀そうじょうに云いく。

一、謗人ほうじん謗法ほうぼうの事

げんくう

右源空げんくう・顕密けんみつの諸宗しよしゅうを輕しなんずること土ことの如ごとく沙すなの如ごとく智行ちぎょうの

高位こういを蔑ないがしろにすること蟻ぎの如ごとく螻ろうの如ごとし、常に自讃じさんして曰いわく広く
いちだいしようきよう

一代いちだい聖教しょうきようを見て知れるは我われなり能よく八宗はっしゅうの精微せいびを解する者は

我われなり我諸しよぎよう行ぎやうを捨すつ況いはんやや余人おひに於おいておやと、愚癡ぐちの道俗どうぞく之これを

仰あおぐこと仏ぶつの如ごとく弟子でしの偏へん執しゅう遙はるかに其その師しに超こえ檀那だんなの邪見じゃけん彌いよいよ

本説ほんせつに倍いし一天いつてん四海しかい漸ようく以もつて☆事ことの奇特きとくを聞きこくに驚おどろかずんば

有ある可べからず其その中殊ことに法華ほっけの修行しゆぎようを以もつて専修せんしゅうの讐敵しゅうてきとなす、

・或あるは此この經きやうを読む者は皆地獄みなじごくに墮だすと云いい・或あるは其その行ぎやうを修しゅうせ

ん者は永しやうじく生死ととに留とどまると云いい・或あるは僅わずかに仏道ぶつどうの結縁けちえんを許ゆるし・或ある

は都すて浄土じやうどの正因しょういんを嫌きらう、然しかる間かん・本八軸十軸ほんはちしよくじしよくの文ぶんを誦じゆし千部せんぶ

万部まんぶの功こうを積ためる者ものも永しやうじく以もつて廃退はいたいし剩あまつさええ前非ぜんびを悔くゆ、捨すつ

る所ところの本行ほんぎやうの宿習しゆくじゅうは実じつに深く企くつる所ところの念仏ねんぶつの薰習くんじゅうは未いまだ積た

まず中途ちゆうとに天あおを仰あおいで歎息たんそくする者多おほし、此この外般若はんにや・華嚴けごんの帰依きえ

まず中途ちゆうとに天あおを仰あおいで歎息たんそくする者多おほし、此この外般若はんにや・華嚴けごんの帰依きえ

真言・止観の結縁十の八九皆棄置す之を略す。

一、靈神を蔑如する事

右・我が朝は本是れ神国なり百王・彼の苗裔を承けて四海
其の加護を仰ぐ、而るに専修の輩永く神明を別えず権化・
実類を論ぜず宗廟・祖社を恐れず若し神明を憑まば魔界に墮す
と云云。

実類の鬼神に於ては置いて論ぜざるか権化の垂迹に至つては
既に是れ大聖なり、上代の高僧皆以て帰伏す行教和尚・宇佐の
宮に参るに釈迦三尊の影月の如くに顕れ仲算大徳・熊野山に
詣ぬるに飛瀧千仞の水・簾の如くに巻く、凡そ行基・護命・
増利・聖宝・空海・最澄・円珍等は皆神社に於て新に靈異を感
ず是くの若きは源空に及ばざるの人か又魔界に墮つ可きの類か

之を略す。

山門の奏状に云く。

一、一向専修の党類神明に向背する不当の事。

右・我が朝は神国なり神道を敬うを以て国の勤めと為す謹んで百神の本を討めるに諸仏の迹に非ること無し、所謂伊勢大神宮・八幡・加茂・日吉・春日等は皆是れ釈迦・薬師・弥陀・観音等の示現なり各宿習の地をトめ専ら有縁の儀を調う乃至其の内証に随いて彼の法施を資け念誦読経神に依つて事異なり世を挙げて信を取り人毎に益を被る、而るに今専修の徒・事を念仏に寄せて永く神明を敬うこと無し、既に国の礼を失い仍神を無するの咎あり、当に知るべし有勢の神祇定めて降伏の眸を回らして睨みたまわん之を略す。

一向専修和漢の例・快からざる事

右・慈覚大師の入唐巡礼記を按ずるに云く唐の武宗皇帝・

会昌元年章敬寺の鏡霜法師に勅令して諸寺に於て弥陀念仏の教

を伝え寺毎に三日巡輪して絶えず同じく二年・廻鶻国の軍兵等

・唐の界を侵す同じく三年河北の節度使・忽ち乱を起す其の後

大蕃国更に命を拒む廻鶻国重ねて地を奪いぬ、凡そ兵乱秦項の

代に同じく災火邑里の際に起る何に況や武宗大に仏法を破し多く

寺塔を滅す撥乱すること能わずして遂に以て事有り已上取意、

是れ則ち恣に浄土の一門を信じて護国の諸教を仰がざるに依つ

てなり而るに吾朝一向専修を弘通してより以来・国衰微に属し

俗多く艱難す已上之を略す、又云く音の哀樂を以て国の盛衰を知る詩

の序に云く治世の音は安んじて以て楽しむ其の政和げばなり

らんせ 乱世の音は怨んで以て怒る其の政・乖けばなり亡国の音は哀れ
もつ もつ 以て思う其の民・困めばなりと云云、近代念仏の曲を聞くに理世
ぶみん 撫民の音に背き已に哀慟の響を成す是れ亡国の音なる可し
そうじよう 四、已上奏状。

さんもん 山門の奏状詮を取る此の如し。

やまと 又大和の莊の法印俊範・宝地房の法印宗源・同坊の永尊豎者
後に僧都と云う げんくう 並に題者なり等源空が門徒を対治せんが為に各各子細を述ぶ其の文・
こうほん こうほん 広本に在り、又諸宗の明德面面に書を作りて選択集を破し
せんしゅう 専修を対治する書籍世に伝う。

せんじ 宣旨篇

なんと 南都北嶺の訴状に依つて専修を対治し行者を流罪す可きの
そじよう たびたび たびたび 由度度の宣旨の内・今は少を載せ多を省く委くは広本に在り。

永尊豎者の状に云く彈選択等上送せられて後・山上に披露す
えいそんけんじや いわ だんせんたく じょうそう
彈選択に於ては人毎に之を翫び顯選択は諸人之を謗ず法然
だんせんたく おい ひとごと これ もてあそ けんせんたく しよにんこれ ぼう ほうねん
しょうにん ほしよ かんじんいん つのめそう これ はきやく
上人の墓所は感神院の犬神人に仰付て之を破卻せしめ畢んぬ
その 墓所 そうもん さいきよ こおむ おわ
其の後奏間に及んで裁許を蒙り畢んぬ、七月の下旬に法勝寺の御
八講の次山門より南都に触れて云く清水寺祇園の辺南都山門の
まつじ まつじ ところ せんしゅう やから
末寺たるの処に専修の輩身を容れし草菴に於ては悉く破卻せ
しめ畢んぬ其の身に於ては使庁に仰せて之を搦め取らるるの間・
れいさん せいさん せいさん せいさん せいさん せいさん せいさん せいさん
礼讃の声・黒衣の色・京洛の中に都て以て止め畢んぬ、張本三
るざい るざい るざい るざい るざい るざい るざい るざい
人流罪に定めらると雖も逐電の間・未だ配所に向わず山門今に訴
え申し候なり。
もう

此の十一日の僉議に云く法然房所造の選択は謗法の書なり
せんぎ いわ ほうねんぼう しょうぞう せんちやく ほうぼう
てんが これ とど べ よ さいさいしよしよ しよじ そ いんばん
天下に之を止め置く可からず仍つて在在所所の所持並に其の印板

を大講堂に取り上げ三世の仏恩を報ぜんが為に焼失すべきの由・
奏聞仕り候い畢んぬ重ねて仰せ下され候か、
恐恐。

嘉禄三年十月十五日

専修念仏の張本 成覚法師讃岐の大手嶋に経回すと云云実否
分明ならず慥に☆知を加えらる可きの由・山門の人人申す相
尋ね申さしめ給う可きの由・殿下の御気色候う所なり仍つて執達
件の如し。

嘉禄三年十月二十日

参議範輔在り判

修理権亮殿

関東より宣旨の御返事

隆寛律師の事、右大弁宰相家の御奉書披露候い畢んぬ、件の

りつし いぬ うずき
律師去る七月の比・下向せしむ鎌倉近辺に経回すると雖も京都
せいふ まか ねんぶつ
の制符に任せ念仏者を追放せらるるの間奥州の方へ流浪せしめ
おわ
畢んぬ云云、早く在所を尋ね搜して仰せ下さるるの旨に任せ対馬
おいやるべ
の嶋に追遣可きなり、此の旨を以て言上せしむ可きの状鎌倉殿
おお よ
の仰せに依つて執達件の如し。

嘉禄三年十月十五日

武蔵守

在り判

相模守

在り判

掃部助殿

修理亮殿

せんしゅう ねんぶつ
専修念仏の事、
ていはい
停廃の宣下重
せんげ ちようじよう
疊の上儼かに尚興行するの条

・更に公家くげの知しめす所しよにあらず偏ひとえに有司ゆうしの怠慢たいまんたり早く先符せんぷに
任まかせて禁遏きんあつせらる可べし、其その上衆徒しゆうとの蜂起ほうきに於おいては宜よろしく制止せいしを加
えしめ給たまうべし天氣てんきに依よつて言上ごんじやう件の如ごとし、信盛のぶもり・頓首とんしゅ恐惶きやうかう
謹言きんげん

嘉祿三年六月二十九日

左衛門権佐

信盛奉のぶもり

進上 天台座主大僧正御房政所てんだいざす そうじやうごぼうまんどころ

右弁官下すべんかん

延暦寺えんりやく

早く僧りゆうかんの隆寛こうさい・幸西こうさい・空阿弥陀仏あみだぶつの度縁どえんを取り進まいらすべき事の

書ごんだいなごん・権大納言源朝臣雅親まなもとのあそんまさちか・勅ちよくを宣奉せんぼうするに件くだんの隆寛等りゆうかんの

坐つみせらるること配流はいりゅう宜よろしく彼の寺おおに仰おほせて度縁どえんを取り進まいらせしむ

可^べし、者^{ていれ}れば宜^{よろし}く承^{しやうち}知^{せん}して宣^よに依^{これ}つて之^{いしつ}を行^べうべし違^い失^{しつ}ある可^べからず。

嘉^か禄^{ろく}三年七月六日

左^さ太^{たい}史^し小^お槻^{つき}宿^{すく}禰^ね

在^あり判^{はん}

左^う少^{しやう}弁^{べん}藤^{ふじ}原^{わら}朝^あ臣^{そん}

在^あり判^{はん}

大^だ政^{じやう}官^{かん}の符^ご・五^ご畿^き内^{ない}の諸^{しよ}国^{こく}司^しま^さに宜^{よろし}く専^{せん}修^{しゆ}念^{ねん}仏^{ぶつ}の興^こ行^{ぎやう}を停^{てい}廢^{はい}し早^りく隆^{りゆう}寬^{かん}・幸^{こう}西^{さい}・空^{くう}阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}等^{どう}の遺^{ゆい}弟^{てい}の留^{とど}ま^る處^{ところ}に禁^{きん}法^{ぽう}を犯^ふす所^{ところ}の輩^{やから}を捉^{とら}え搦^なむべきの事^{こと}。

弘^{こう}仁^{にん}聖^{せい}代^{だい}の格^{かく}条^{じょう}・眼^{がん}に在^あり左^さ大^{だい}臣^{じん}・勅^{せん}を宣^{ぼう}奉^{ほう}し宜^{よろし}く五^ご畿^き・七^{しち}道^{どう}に課^おせて興^{こう}行^{ぎやう}の道^{みち}を停^{てい}廢^{はい}し違^{いはん}犯^{はん}の身^みを捉^{とら}え搦^なむべし、者^{ていれ}れば諸^{しよ}国^{こく}司^し宜^{よろし}く承^{しやうち}知^{せん}して宣^よに依^{これ}つて之^{これ}を行^いえ符^ふ・到^{いた}らば奉^ぶ行^{ぎやう}を

致せ。

嘉禄三年七月十七日

修理右宮城使正四位下行右中弁

藤原朝臣

修理東大寺大仏長官正五位下左大史兼備前権介

小槻宿禰

專修念仏興行の輩停止す可きの由五畿・七道に宣下せられ

候い畢んぬ、且つは御存知有る可く候、者れば綸言此の如し之を

悉にせよ、頼隆・誠恐頓首謹言。

嘉禄三年七月十三日

右中弁頼隆

在り判

進上 天台座主大僧正御房政所

隆寛・対馬の国に改めらる可きの由宣下せられ畢んぬ、其の

由御下知有る可きの旨仰せ下さる所に候なり此の趣を以て申し入
れしめ給う可きの状・件の如し。

右中弁頼隆

在り判

中納言律師御房

隆寛律師專修の張本たるに依つて山門より訴え申すの間、
陸奥に配流せられ畢んぬ而るに衆徒尚申す旨有り仍つて配所を
改めて対馬の嶋に追ひ遣らる可きなり、当時東国の辺に経回す
と云云不日に彼の島に追ひ遣らる可きの由関東に申さる可し、
者れば殿下の御気色に依つて執達件の如し。

嘉禄三年九月二十六日

参議

在り判

修理権亮殿

専修念仏の事、京畿七道に仰せて永く停止せらる可きの由先

日宣下せられ候い畢んぬ、而るに諸国に尚其の聞え有りと云云、

宣旨の状を守りて沙汰致す可きの由・地頭守護所等に仰付けらる

可きの由・山門訴え申し候・御下知有る可く候、此の旨を以て

沙汰申さしめ給う可きの由・殿下の御気色候所なり、仍つて

執達件の如し。

嘉禄三年十月十日

参議

在り判

武蔵守殿

嵯峨に下されし院宣

近頃破戒不善の輩嚴禁に拘わらず猶專修念仏を企つるの由

其の聞え有り、而るに先師法眼存日の時・清涼寺の辺に多く以て

止住すと云云、遺跡を相繼ぎて若し同意有らば彼の寺の執務縦い
相承の理を帶すとも免許の義有る可からざるなり、早く此の旨
を存して禁止せしめ給う可し院宣此くの如し仍つて執達件の
如し。

建保七年二月四日

按察使在

り判

治部卿律師御房

謹んで請う 院宣一紙

右当寺四至の内に破戒不善の専修念仏の輩法に任せて制止あ
る可く候更に以て芳心有る可からず候、若し猶寺家の力に拘わら
ずんば事の由を申し上ぐ可く候、謹んで請くる所件の如し。

建保七年閏二月四日

権律師良曉ごんりつし

左弁官下すべんかん 綱所こうしょ

まさに諸寺の執務人に下知して専修念仏の輩を糾断せしむべき事。

右左大臣勅を宣奉す、専修念仏の行は諸宗衰微の基なり、

仍つて去る建永二年の春・嚴制五箇条の裁許を以てせる官符の

施行先に畢んぬ、傾く者は進んでは憲章を恐れず退いては仏勅

を憚らず・或は梵字を占め・或は聚洛に交わる破戒の沙門党を

道場に結んで偏に今按の佯を以てす仏号を唱えんが為に妄りに

邪音を作し將に蕩して人心を放逸にせんとす、見聞満座の処に

は賢善の形を現すと雖も寂寞破☆の夕には流俗の睡りに異ならず

是れ則ち発心の修善に非ず濫行の奸謀を企つるなり豈仏陀の元

意僧徒の所行と謂わんや。

宜しく有司に仰せて慥に糾断せしむべし若し猶違犯の者は罪
科の趣き一に先符に同じ但し道心修行の人をして以て仏法違越
の者に濫ぜしむること莫れ更に弥陀の教説を忽せにするに非ず只
釈氏の法文を全からしめんとなり、兼ては又諸寺執務の人五保監
行の輩聞知して言わずんば与同罪會つて寛宥せざれ、者れば
宜しく承知して宣旨に依つて之を行ふべし。

建保七年閏二月八日

太史小槻

宿禰在り判

謹んで請く 綱所

宣旨一通載せらるるはまさに諸寺の執務人に下知して専修念仏
の輩を糾断せしむべき事。右宣旨の状に任せ諸寺に告げ触る

可きの状つし謹うんで請くくる所件くだんの如ごとし。

建保七年閏二月二十二日これ之を行う。

頃年けいねん以来無慚いらいむざんの徒・不法ふほうの侶・如如かいぎようの戒行かいぎようを守らず処処しよしよの
嚴制げんせいを恐れず恣ほしいままねんぶつべつしゅうに念仏べつしゅうの別宗べつしゅうを建て猥みだりりに衆僧しゅうそうの勤学きんがくを謗ぼうず、
しかのみならず内には妄執もうしゅうを凝こらして仏意ぶつゐに乖そむき外には哀音あいおんを
引ひいて人心じんしんを蕩とろかす遠近併おんこんしかしながせんしゅうら專修せんしゅうの一行いっぎやうに歸かへり緇素しそ殆いたんど顯密けんみつ
の両教りやうきやうを編さみす仏法ぶつぽうの衰滅すいめつ而も斯よに由よる自由じゆうの奸惡かんあく・誠まことに禁こじても
余あり有あり。

是これを以もつて教雅法師きやうがほつしに於おいては本源ほんげんを温たずねて遠流おんるし此この外ほか・同行どうぎやうの
余党よとう等慥たしかかに其その行ぎやうを帝土ていどの中に停廢ていはいし悉ことごとく其その身みを洛陽らくようの外ほか
に追つい卻きやくせよ但ただし・或あるは自行じぎようの為ため・或あるは化他けたの為ために至心しん專念せんねん如法にょほう
修行しゆぎようの輩やからに於おいては制せいの限かぎりに在あらず。

てんぶく
天福二年六月晦日

ふじわらちゅうなごん
藤原中納言

ごんべんたてまつ
権弁奉る

てんぶく
天福二年文暦と改む四條院の御宇後堀河院の太子なり、
むさし
武蔵前司 入道 殿の

おんとき
御時。

きおん しつこう
祇園の執行に仰せ付けらるる山門の下知状。

たいしゅう
大衆の僉議に云く専修念仏者天下に繁昌す是れ則ち近年

さんもん ぶさ た いた
山門無沙汰の致す所なり、件の族は八宗仏法の怨敵なり円頓

ぎょうじや じゅんま
行者の順魔なり、先ず京都往返の類・在家称名の所に於ては

まか つのめそう おお
例に任せ犬神人に仰せて宜しく停止せしむべし云云、者れば

たいしゅうせんぎ むねか ごと
大衆僉議の旨斯くの如し早く先例に任せ犬神人等に仰せ含めて

せんしゅうねんぶつ ていし たま べ
専修念仏者を停止せしめ給う可し云云、
きょうきょうきんげん
恐恐謹言。

えんおう
延応二年五月十四日
くもんこうとうしんけん
公文勾当審賢

四条院の御宇武蔵前司殿の御時。

謹上

祇園の執行

法眼御房

逐つて申す、去る夜・大衆僉議して先ず此の異名に於て殊に
犬神人に付けて之を責む可きの由仰せ含めぬ仍つて

実名之^{これ}を獻ず、專修念仏の張本^{せんしゅうねんぶつ}の事・唯仏^{ゆいぶつ}・鏡仏^{きやうぶつ}・智願^{ちがん}・
定真^{ていしん}・円真^{えんしん}・正阿弥陀仏^{あみだぶつ}・名阿弥陀仏^{あみだぶつ}・善慧^{ぜんね}・道弁^{どうべん}・真如堂狼藉^{しんにょろうぜき}
の張本^{ちやうほん}なり已上、唐橋油小路並に八条大御堂六波羅の総門^{そうもん}の向
いの堂・已上・当時興行の所なり。

延暦寺 別院 雲居寺 早く一向專修の悪行を禁断す

可き事

右頃年^{けいねん}以来、愚蒙^{ぐもう}の結党^{けつどう}・☆☆の会衆^{えしゅう}を名けて專修^{せんしゅう}と曰い

☆閭^{てんりよ}に旁ねし心に一分^{いちぶん}の慧解^{えげ}無く口に衆罪^{しゅうざい}の悪言^{あくげん}を吐き言を

一念十声^{いちねんじゅうしやう}の悲願^{ひがん}に寄せて敢て三毒五蓋^{さんどくごがい}の重悪^{じゅうあく}を憚^{はば}からず盲暝^{もうみやう}の

輩^{やから}是非^{ぜひ}を弁^{わきま}えず唯情^{ただ}に順ずるを以て多く愚誨^{ぐかい}に信伏^{しんぷく}す、持戒^{じかい}

修善^{しゅうぜん}の人を笑うて之^{これ}を雑行^{そうぎやう}と号し鎮国護王^{ちんこくごおう}の教^{しゆ}を謗^{そし}りて之^{これ}を

魔業^{まぎやう}と称^{しょう}す諸善^{しよぜん}を擯棄^{ひんき}し衆惡^{しゅうあく}を選択^{せんちやく}し罪^{つみ}を山岳^{さんかく}に積み報^{ほう}を泥梨^{ないり}

に招く毒氣深く入つて禁じても改むること無く偏に欲樂を嗜んで
自ら止むこと能わず、猶蒼蠅の唾の為に黏さるるが如く、何ぞ
狂狗の雷を逐うて走るに異ならん、恣ままに三寸の舌を振いて
衆生の眼目を抜き五尺の身を養わんが為に諸仏の肝心を滅す、
併ら只仏法の怨魔と為り専ら緇門の妖怪と謂う可し。

是を以て邪師存生の昔は永く罪条に沈み、滅後の今は亦屍骨

を刎らる其の徒・住蓮と安樂とは死を原野に賜い成覚と薩生

とは刑を遠流に蒙りぬ此の現罰を以て其の後報を察す可し、方に

今且は釈尊の遺法を護らんが為且は衆生の塗炭を救わんが為に

宜く諸国の末寺・莊園・神人・寄人等に仰せて重ねて彼の邪法を

禁断すべし縦い片時と雖も彼の凶類を寄宿せしむ可からず縦い

一言と雖も其の邪説を聴受す可からず、若し又山門所部の内に

せんしゅうこうぎよう　やから
専修興行の輩有らば永く重科に処して寛宥有ること勿れ、
ていれ　さんぜんしゅうと　せんぎ　よ
者れば三千衆徒の僉議に依つて仰す所・件の如し。

えんおう
延応二年

さんもん
山門申状

きんらい　ようかい
近來二つの妖怪有り人の耳目を驚かす所謂達磨の邪法と念仏
あいおん
の哀音となり。

けんみつ　ほうもん
顕密の法門に属せず王臣の祈請を致さず誠に端拱にして世を
あなず　あんしよう
蔑り暗証にして人を軽んず小生の淺識を崇めて見性成仏の仁
な　ぎねん　しゆくろう
と為し耆年の宿老を笑うて螻蟻☆☆の類に擬す論談を致さざれ

ちようたん
ば才の長短を表さず決択に交らざれば智の賢愚を測らず、唯
けつちやく

しょうびやく
牆壁に向うて独り道を得たりと謂い三依纔に紆い七慢専ら盛な
ひと　おも　わすか　まと　もっぱ
り長く舒卷を抛つ附仏法の外道吾が朝に既に出現す、妖怪の至
じよかん　なげう　ふ　ぶつぼう　げどうわ　あした　すで　しゆつげん　ようかい

り慎つつしまずんばあるべからず何なんぞ強あながちに亡国流浪ぼうこくろうの僧そうを撰えらんで伽藍がらん伝持でんじの主なと為さんや。

御式目ごしきもくに云いく右大將家以後代代うだいしやうけいごの將軍並しやうぐんに二位殿にいどのの御時おんときに於おいての事いっこう一向いっかうに御沙汰おさたを改かること無なきか、追加おその状じやうに云いく嘉祿かりく元年がんねんより仁治にちに至いたるまで御成敗ごせいばいの事じやうか正嘉二年二月十日しやうに評定ひやうじやう、右自今いご以後おいに於おては三代さんだいの將軍並しやうぐんに二位家にいけの御成敗ごせいばいに準じゆんじて御沙汰おさたを改かむるに及およばずと云云。

念仏ねんぶつ停廢ていはいの事じ、宣旨せんじ御教書ごきやうしよの趣おもむき南都北嶺なんとほくりやうの状じやう粗ほ此こくことの如ごとし、日蓮にちれん・弱じやく為なりと雖いえども勅ちやく宣並せんに御下知ごけちの旨むねを守まもりて偏ひとえに南北明哲なんぽくめいの賢懷けんかいを述なぶ猶なほ此この義ぎを棄置きちせらるるに非あらずんば綸言りんげん徳政とくせいを故こらる可べきか將はた御下知ごけちを仰おおせらるる可べきか、称名しょうみ念仏ねんぶつの行者ぎやうじや又また賞しょう翫がんせらるるいえどすでいちよくに違か勅かんとうの者ごなり関東かんとうの御勘氣ごかんき未いまだ御免許めんきよを

も蒙こうむらず何なんぞ恣ほしいままに 関東かんとうの近住きんじゅうを企くわだてんや、就なかんずく中武蔵前司殿むさしの

御下知ごけちに至りては三代さんだいの將軍しょうぐん並に二位家いけの御沙汰おさたに準じゅんじて

御沙汰おさたを改あらむること有べる可べからずと云云。

然しかるに今ねんぶつ、念仏者いずれ何いせいの威勢いせいに依よつてか宣旨せんじに背そむくのみに非あらず

御下知ごけちを輕蔑けいべつして重かさねて 称名しょうみょう念仏ねんぶつの專修せんしゅうを結構けつこうせん人に依よつ

て事異じいなりと云う此この謂い在なるか、何なんぞ恣ほしいままに 華夷縱横かいうじゅうおうの経回きょうかいを

致いたさんや。

勘文篇かんもん 念仏者ねんぶつ追放宣旨御教書ついほうせんじみきようしよの事

◆九 念仏無間地獄抄ねんぶつむげんじごく 建長七年けんちちよう 三十四歳御作 9 7

P

念仏ねんぶつは無間地獄むげんじごくの業因ごういんなり法華經ほけきようは成仏得道じやうぶつとくどうの直路じきろなり早く

浄土宗を捨て法華經を持ち生死を離れ菩提を得可き事・法華經第二譬喻品に云く「若人信ぜずして此の經を毀謗せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん、其の人命終して阿鼻獄に入らん、一劫を具足して劫尽きなば更生れん、是くの如く展転して無數劫に至らん」云云此の文の如くんば方便の念仏を信じて眞実の法華を信ぜざらん者は無間地獄に墮つ可きなり念仏者云く我等が機は法華經に及ばざる間・信ぜざる計りなり毀謗する事はなし何の科に地獄に墮つ可きか、法華宗云く信ぜざる条は承伏なるか、次に毀謗と云うは即不信なり信は道の源功德の母と云へり菩薩の五十二位には十信を本と爲し十信の位には信心を始と爲し諸の惡業煩惱は不信を本と爲す云云、然ば譬喻品の十四誹謗も不信を以て體と爲せり今の念仏門は不信と云い誹謗と云い争か入阿鼻獄の句

を遁れんや、其の上浄土宗には現在の父たる教主釈尊を捨て
他人たる阿弥陀仏を信ずる故に五逆罪の咎に依つて必ず無間・
大城に墮つ可きなり、經に今・此の三界は皆是我有なりと説き
給うは主君の義なり其の中の衆生悉く是れ吾子と云うは父子の
義なり而るに今・此の処は諸の患難多し、唯我一人能く救護を
為すと説き給うは師匠の義なり而して釈尊付属の文に此法華經
をば付属有在と云云何れの機か漏る可き誰人か信ぜざらんや、
而るに浄土宗は主師親たる教主釈尊の付属に背き他人たる西方
極樂世界の阿弥陀如来を憑む故に主に背けり八逆罪の凶徒なり
違勅の咎遁れ難し即ち朝敵なり争か咎無けんや、次に父の釈尊
を捨つる故に五逆罪の者なり豈無間地獄に墮ちざる可けんや、次
に師匠の釈尊に背く故に七逆罪の人なり争か惡道に墮ちざらん

や此の如くごと教主きようしゅ釈尊しやくそんは娑婆世界しやばせかいの衆生しゅじようには主師親しゅししんの三徳さんとくを備
て大恩の仏にて御坐す此の仏を捨て他方たほうの仏を信じ弥陀みだやくし薬師・
大日等だいにちを憑たのみ奉る人は二十逆罪ぎやくざいの咎とがに依よつて惡道あくどうに墮おつ可べきな
り、浄土じようどの三部經さんぶきようとは釈尊しやくそん一代五時の説教せつきようの内第三方便部の内
より出いでたり、此の四卷・三部の經は全く釈尊しやくそんの本意ほんいに非あらず
三世諸仏出世さんぜしよぶつしゆつせの本懷ほんかいにも非あらず唯暫ただしばらく衆生誘引しゅじようゆういんの方便ほうべんなり譬たとえば
塔をくむに足代あししろを結ゆふが如ごとし念仏ねんぶつは足代あししろなり法華ほつけは宝塔ほうとうなり法華ほつけ
を説給ほうべんまでの方便ほうべんなり法華の塔を説給ほつけて後は念仏ねんぶつの足代あししろをば切り
捨しべきなり、然しかるに法華經ほけきようを説とき給たまうて後念仏ねんぶつに執しゆうじやく著しやくするは塔
をくみ立て後足代あししろに著じやくして塔を用ござる人の如ごとし豈違背あにいはいの咎とが無なから
んや、然しかれば法華ほつけの序分じよぶん・無量義經むりようぎきようには四十余年未顕真実よんじゆうよねんみけんしんじつと説給
て念仏ねんぶつの法門ほうもんを打破うちやぶり給たまう、正宗しやうしゆう法華經ほけきようには正直捨方便しやうじきしやほうべん・

たんせつむじょうどう のべ 但説無上道と宣べ給て念仏三昧を捨て給う之に依て阿弥陀經の

たいこうしゅうちようろう しやりほつそんじや 対告衆長老・舍利弗尊者・阿弥陀經を打捨て法華經に歸伏して

げこうによらい おわ 華光如来と成り畢んぬ、四十八願付属の阿難尊者も浄土の三部經

なげう ほけきよう を抛て法華經を受持して山海慧自在通王仏と成り畢んぬ、阿弥陀

ちようろうしやりほつ じゆじ 經の長老舍利弗は千二百の羅漢の中に智慧第一の上首の大

しょうもん えんぶだいだい 声聞・閻浮提第一の大智者なり肩を並ぶる人なし、阿難尊者は

たもんだいいち ごくしやうの 多聞第一の極聖・釈尊一代の説法を空に誦せし広学の智人な

り、かかる極位の大阿羅漢すら尚往生成仏の望を遂げず仏在世

そしか こと の祖師此くの如し祖師の跡を踏む可くば三部經を抛ちて法華經を

むじょうほだい じようべ 信じ無上菩提を成ず可き者なり仏の滅後に於ては祖師先徳多しと

いえど だいとうしゅう 雖も大唐楊州の善導和尚にまさる人なし唐土第一の高祖なり云

ようしゅう めいしやう 云、始は楊州の明勝と云える聖人を師と為して法華經を習た

りしが道どう・綽せ禪師ぜんしに値あつて浄土宗じょうどに移り法華經ほけきょうを捨て念仏者ねんぶつと成

れり一代いちだい・聖教しょうきょうに於おいて聖道しょうどう・浄土じょうどの二門にもんを立てたり法華經ほけきょう等の

諸大乗じょだいじょうきよう・經きやうをば聖道門しょうどうもんと名なく自力じりきの行ぎやうと嫌きらえり聖道門しょうどうもんを修行しゆぎやう

して成仏じやうぶつを願ねがはん人は百人ひゃくにんにまれに一人・二人千人にににせんにまれに三

人五人得道とくどうする者ものや有あんずらん乃至千人なにしにせんに一人も得道とくどうなき事ことも

有あるべし觀經かんきやう等の三部經さんぶきやうを浄土門じょうどもんと名なけ此この浄土門じょうどもんを修行しゆぎやうして

他力本願たのりきほんがんを憑たのんで往生おうじやうを願ねがはん者は十即じゅつそく・十生じゆっしやう・百即ひやくそく・百生ひやくしやう

とて十人は十人百人は百人決定けつじやう・往生おうじやうす可べしとすすめたり、

觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうを所依しよえと為なして四卷しよわんの疏じよを作る玄義分げんぎぶん・序分義じよぶんぎ・

定善義ていぜんぎ・散善義さんぜんぎ是これなり、其その外がわ・法事讚ほうじさんじやうげ上下じやうげ・般舟讚はんじゆさん・往生おうじやう

礼讚らいさん・觀念法門經くわんねんほうもん此等これらを九帖じよの疏しよと名なけたり、善導念仏ぜんどうねんぶつし給たまへば

口より仏の出給たまうと云いつて称名念仏しょうみやうねんぶつ一遍いつぺんを作なすに三体さんたいづつ口よ

り出給けりと伝へたり、毎日の所作には阿弥陀經六十卷・念仏・

じゅうまん これ

十萬遍是を欠く事なし、諸の戒品を持つて一戒も破らず三依は

身の皮の如く脱ぐ事なく鉢☆は兩眼の如く身を離さず精進

けっさい によにん

潔斎す女人を見ずして一期生不眠三十年なりと自歎す、凡そ善導

ぎょうぎ ほうそく

の行儀法則を云へば酒肉五辛を制止して口に齧まず手に取らず

みらい もろもろ びく かく

未来の諸の比丘も是くの如く行ずべしと定めたり、一度酒を飲み

肉を食い五辛等を食い念仏申さん者は三百萬劫が間地獄に墮す

べ 可しと禁しめたり、善導が行儀法則は本律の制に過ぎたり、

ほうねん ほう きしやう ぶん かきのせ

法然房が起請文にも書載たり、一天四海善導和尚を以て善知識と

あお きせん じやうげ みなことごと ねんぶつ

仰ぎ貴賤上下皆悉く念仏者と成れり・但し一代聖教の大王・

さんぜ しょうぶつ ほんかい

三世諸仏の本懷たる法華の文には若し法を聞くこと有らん者は

むい っふ じやうぶつ と

無一不成仏と説き給へり、善導は法華經を行ぜん者は千人に一

ぜんどう ほけきやう

無一不成仏と説き給へり、善導は法華經を行ぜん者は千人に一

人も得道の者有る可からずと定む何れの説に付く可きか、
無量義經には念仏をば未顕真実とて実に非ずと言ふ法華經には
正直捨方便・但説無上道とて正直に念仏の觀經を捨て無上道
の法華經を持つ可しと言ふ此の兩説水火なり何れの辺に付く
可きや善導が言を信じて法華經を捨つ可きか法華經を信じて善導
の義を捨つ可きか如何、夫れ一切衆生・皆成仏道の法華經、一
たび法華經を聞かば決定して菩提を成ぜんの妙典善導が一言に
破れて千中無一虚妄の法と成り、無得道教と云はれ平等大慧の
巨益は虚妄と成り多宝如来の皆是真実の証 明の御言妄語と成
るか十方諸仏の上至梵天の広長舌も破られ給ぬ、三世諸仏の大
怨敵と為り十方如来成仏の種子を失う大謗法の科甚重し大
罪報の至り無間・大城の業因なり、之に依つて忽に物狂いにや

成けん所居しやうこの寺の前の柳の木に登りて自ら頸をくくりて身を投げ

死し畢おわんぬ邪法じゃほうのたたり踵きびすを回めぐらさず冥みよう罰爰ばちここに見あらわれたり、最後さいご

りんじゅう

臨終りんじゅうの言いわに云く此の身厭いとう可べし諸苦しよくに責められ暫くも休息しきゅう無し

すなわしやうこ

と即ち所居しやうこの寺の前の柳の木に登り西に向い願いわつて日ひく仏いしんの威神いしん

もつ

以て我を取り観音かんのん・勢至せいし来こつて又我を扶たすけたまえと唱となえ畢おわつて

せいりゅう

青柳の上より身を投なげて自絶じぜつす云云、三月十七日いわくびをくくり

て飛たりける程にくくり縄や切れけん柳の枝や折れけん大旱魃かんぱつの

かたつち

堅土かたつちの上に落おて腰骨こしほねを打折うちおりて、二十四日いたに至るまで七日七夜の間

もんぜつびやくち

・悶絶もんぜつ壁地びやくちしておめきさけびて死し畢おわんぬ、さればにや是程これほどの

こうそ

高祖こうそをば往生おうじやうの人の内には入れざるらんと覚さとゆ此事このこと全く余宗よしゅうの

ひほう

誹謗ひほうに非あらず法華宗ほっけしゅうの妄語もうごにも非あらず善導ぜんどう和尚わじやう自筆じひつの類聚るいじゅ伝でんの文ぶんなり

云云、

而しかも流くを酌しやくむ者は其その源みなもとを忘れず法を行ずる者は其その師

の跡あとを踏ふむ可べし云云浄土門に入いつて師あつの跡あとを踏ふむ可べくば臨終りんじゆうの時とき善導ぜんどうが如ごとく自害じがい有ある可べきか、念仏者ねんぶつとして頸くちをくくらずんば師そに背そむく咎とが有ある可べきか如何いかん。

日本国にほんこくには法然ほうねん上人しやうにん浄土宗じやうじゆうしゆうの高祖かうそなり十七歳いっさいにして一切經いっさいきやうを習ならいきわてんだいい習極しやくめ天台六十卷てんだいに渡わたり、八宗はっしゆうを兼学けんがくして一代いちだい聖教しやうきやうの大意たいいを得えたりとののしり、天下無雙てんがむそうの智者山門第一ちしやさんもんだいの学がく匠しやうなり云云、然しかるに天魔てんまや其その身みに入いにけん広学多聞かうがくたもんの智慧ちえも空むなしく諸宗しよしゆうの頂上ちやうじやうたる天台宗てんだいしゆうを打捨うちすて八宗はっしゆうの外ぐわいなる念仏者ねんぶつの法師ほふしと成なりにけり大臣だいじん・公卿くきやうの身みを捨すて民百姓ひやくせいと成なるが如ごとし、選せん集ちやくと申もうす文ぶんを作しつて一代五時いちだいの聖教しやうきやうを難破なんはし念仏往生ねんぶつおうじやうの一門いっもんを立たてたり、仏説法滅尽經ぶつせつほうめつじんきやうに云いく五濁惡世ごじよくあくせには魔道興盛まどうかうじやうし魔沙門しゃもんと作しつて我が道を壊乱えらんし惡人あくにん轉うた海中かいちゆうの沙いさの如ごとく善人ぜんにん甚はなはだ少すくく

して若^{もし}は一人若^{もし}は二人ならん云云即ち法然房是なりと山門の状に

書かれたり、我が浄土宗の専修の一行をば五種の正行と定め

権実・顕密の諸大乘をば五種の雑行と簡て浄土門の正行をば

善導の如く決定往生と勧めたり、観經等の浄土の三部經の外

・一代顕密の諸大乘經・大般若經を始と為して終り

法常住經に至るまで貞元錄に載する所の六百三十七部・二千

八百八十三卷は皆是千中無一の徒物なり永く得道有る可から

ず、難行・聖道門をば門を閉じ之を抛ち之を閣き之を捨て・

浄土門に入る可しと勧めたり、一天の貴賤首を傾け四海の道俗

掌を合せ・或は勢至の化身と号し・或は善導の再誕と仰ぎ

一天四海になびかぬ木草なし、智慧は日月の如く世間を照して肩

を並ぶる人なし名徳は一天に充ちて善導に超え曇鸞・道綽にも

すぐ勝れたり貴賤・上下・皆選択集を以て仏法の明鏡なりと思ひ
どうぞくなんよここごほうねんぼうもっしょうしんみだあお
道俗・男女悉く法然房を以て生身の弥陀と仰ぐ、然りと雖も
きようけいくよう
恭敬供養する者は愚癡迷惑の在俗の人・帰依渴仰する人は無智
ほういつじゃけんやからごんしやおいこれもちけんてつ
放逸の邪見の輩なり、権者に於ては之を用いず賢哲又之に随う
こと無し。

然る間・斗賀尾の明慧房は天下無雙の智人・広学多間の明匠
なり、摧邪輪三巻を造つて選択の邪義を破し、三井寺の長吏・
じついんそうじようきたいがくしやめいよさいじんじようど
実胤大僧正は希代の学者・名譽の才人なり浄土決疑集三巻を
作つて専修の悪行を難じ、比叡山の住侶・仏頂房・隆真法橋
てんがむそうがくしようさんもんたんだいとうりようだんせんたくじようげ
は天下無雙の学匠・山門探題の棟梁なり彈選択上下を造つて
ほうねんぼうじゃぎせ
法然房が邪義を責む、しかのみならず南都・山門・三井より度
そうもんへほうねんせんちやくじゃぎほうこくもとなむねもう
奏聞を経て法然が選択の邪義亡国の基為るの旨訴え申すに依つ

て人王八十三代・土御門院の御宇・承元元年二月上旬に専修
念仏の張本たる安楽・住蓮等を捕縛え忽ちに頭を刎ねられ
おわ
畢んぬ、法然房源空は遠流の重科に沈み畢んぬ、其の時・摂政
さだいじんいえざね もう このえどの おんこと
左大臣家実と申すは近衛殿の御事なり此の事は皇代記に見えたり
誰か之を疑わん。
これ うたが

しかのみならず法然房死去の後も又重ねて山門より訴え申すに
依つて人皇八十五代・後堀河院の御宇嘉祿三年京都六箇所の本所
より法然房が選択集・並に印版を責め出して大講堂の庭に取り
上げて三千の大衆会合し三世の仏恩を報じ奉るなりとて之れを
焼失せしめ法然房が墓所をば犬神人に仰せ付けて之れを掘り出
して鴨河に流され畢んぬ。
かもがわ おわ

宣旨・院宣・関白殿下の御教書を五畿・七道に成し下されて、

六十六箇国に念仏ねんぶつの行者ぎやうじや・一日片時も之れを置く可からず対馬つしまの島に迫い遣る可やべきの旨諸国の国司に仰せ付けられ畢んぬ、此等これらの次第しだい・兩六波羅ろくはらの注進状ちゆうしんじやう・関東相模守の請文等明鏡なる者なり。

嘉祿三年七月五日に山門さんもんに下さるる宣旨せんじに云く。

専修念仏せんしゆねんぶつの行は諸宗衰微の基なり、茲ここに因よつて代代の御門みかど・

頻しきりに嚴旨げんしを降され殊ことに禁遏きんあつを加うる所なり、而しかるを頃年けいねん又興行こうぎやう

を構さんもんへ山門訴もうえ申さしむるの間・先符せんぷに任せて仰せ下さるること

先に畢おわんぬ、其の上かつ且は仏法の陵夷りやういを禁ぜんが為かつ・且は衆徒しゆとの

鬱訴うつそを優やわらぐるに依よつて其の根本こんぽんと謂おもうを以もつて隆寛りゆうかん・成覚じやうかく・

空阿弥陀仏等其その身を遠流おんるに処しよせしむ可べきの由・不日ふじつに宣下せんげせら

る所なり、余党よとうに於おいては其その在所ざいしよを尋ね搜して帝土ていどを追却ついきやくす

可きなり、此の上は早く愁訴を慰じて蜂起を停止す可きの旨。
時刻を回さず御下知有る可く候、者綸言此の如し頼隆・誠恐
・頓首謹言。

七月五日酉刻

右中弁頼隆奉

わる

進上天台座主大僧正御房政所同七月十三日山門に下さるる
宣旨に云く。

専修念仏興行の輩を停止す可きの由・五畿・七道に宣下せ
られ畢んぬ、且御存知有る可く候綸言此の如く之を悉にす。
頼隆・誠恐・頓首謹言。

七月十三日

右中弁頼隆奉わる

進上天台座主大僧正御房政所殿下御教書

専修念仏の事、五畿・七道に仰せて永く停止せらる可きの由
・先日宣下せられ候い畢んぬ、而るを諸国に尚其の聞え有り云云、
宣旨の状を守つて沙汰致す可きの由・地頭守護所等に仰せ付けら
る可きの旨・山門訴え申し候、御存知有る可く候、此の旨を以て
沙汰申さしめ給う可き由・殿下の御気色 候所 なり、仍て執達
件の如し。

嘉禄三年十月十日

参議範輔在り判

武蔵守殿

永尊賢者の状に云く、此の十一日に大衆僉議して云く法然房
所造の選択は謗法の書なり天下之を止め置く可からず、仍て
在在所所の所持並に其の印板を大講堂に取り上げて三世の仏恩を
報ぜんが為に之を焼失せしめ畢んぬ、又云く法然上人の墓所を

ば感神院の犬神人に仰せ付けて破却せしめ畢んぬ。

かろく

嘉禄三年十月十五日・

りゅうしんほうきようもう

隆真法橋 申して云く

せんしゅうねんぶつ

ぼうこく

の本為る可き旨文理之有りと。

さんもん

うんごじ

山門より雲居寺に送る状に云く、

いわ 邪師源空・

ぞんしょう

存生の間には永

ざいじよう

く罪条に沈み滅後の今は且死骨を刎ねられ、

しこつ は

其の邪類・

じやうい

住蓮・

あんらく

安楽・死を原野に賜い成覚・

じようかく さつしょう

薩生は刑を遠流に蒙る

おんる こおむ

殆ど此の

げんばち

現罰を以て其の後・報を察す可し云云。

もっそ

ほう

べ

云云。

あ あせほう

嗚呼世法の方を云えば違勅の者と成り

ていおう

ちよくかん

勅勘を蒙り今に

しゃめん

御赦免の天氣之れ無し心有る臣下万民・

てんきこ

誰人か彼の宗に於て

だれびと

布施

ふせ

くよう

供養を展ぶ可きや、

ぶつほう

仏法の方を云えば

しょうほうひほう

正法誹謗の罪人為り

むげん

じこく

地獄の業類なり何れの

ごうるい いずれ

輩か

ねんぶつ

念仏門に於て

きようけいらいはい

恭敬礼拝を致す可き

べ

こいねがわ

や、庶幾

くば末代今の

まつだい

浄土宗・

ざいせ

仏在世の祖師・

そし

舍利弗・

しゃりほつ

阿難等

の如く浄土宗を抛つて法華經を持ち菩提の素懷を遂ぐ可き者か。

日蓮 花押

◆一〇 当世念佛者無間地獄事

104P

安房の国・長狭郡・東条花房の郷・蓮華寺に
於て浄円房に對して日蓮阿闍梨之を註るす、
文永元年甲子九月二十二日。

問うて曰く当世の念佛者無間地獄と云う事其の故如何、答えて
云く法然の選択に就いて云うなり、問うて云く其の選択の意
如何、答えて曰く後鳥羽院の治・天下建仁年中に日本国に一の
彗星出でたり名けて源空・法然と曰う選択一卷を記して六十余紙
に及べり、科段を十六に分つ第一段の意は道綽禪師の安樂集に
依つて聖道・浄土の名目を立つ、其の聖道門とは浄土の三部經

等を除いて自余の大小乗の一切経殊には朝家歸依の大日経・
法華経・仁王経・金光明経等の顕密の諸大乘経の名目
阿弥陀仏より已外の諸仏・菩薩・朝家御歸依の真言等の八宗の
名目之を挙げて聖道門と名く、此の諸経諸仏諸宗は正像の機
に値うと雖も末法に入つて之を行ぜん者は一人も生死を離る可
らずと云云、又曇鸞法師の往生論註に依つて難易の二行を立つ
第二段の意は善導和尚の五部九卷の書に依つて正雜二行を立つ、
其の雜行とは道綽の聖道門の料簡の如し、又此の雜行は末法
に入つては往生を得る者の千中に一も無きなり、下の十四段に
は・或は聖道・難行・雜行をば小善根隨他意有上功德等と名
け念仏等を以ては大善根隨自意無上功德等と名けて、念仏に對し
て末代の凡夫此れを捨てよ此の門を閉じよ之を闇けよ之を抛てよ

等の四字を以て之を制止す、而て日本国中の無智の道俗を始めて
たいふう そうもく 大風に草木の従うが如く皆此の義に随つて忽に法華・真言等に
ずいき とど 随喜の意を止め建立の思を廃す、而る間人毎に平形の念珠を
もつ みだ 以て弥陀の名号を唱え・或は毎日三万遍・六万遍・十万遍四十
はちまん 八万遍・百万遍等・唱る間・又他の善根も無く念仏堂を造ること
とうま ちくい 稻麻竹葦の如く、結句は法華真言等の智者とおぼしき人人も皆
ある きえ ・或は帰依を受けんが為に・或は往生極楽の為に皆本宗を捨て
ねんぶつ て念仏者と成り・或は本宗にして念仏の法門を仰げるなり。
いわ 今云く日本国中の四衆の人人は形は異り替ると雖も意根は皆一
にほんこくじゅう ししゅう ひとびと 法を行じて悉く西方の往生を期す、
こことさいほう おうじょう 念仏繁昌の国と見えたる
ところ 処に一の大なる疑を發する事は念仏宗の亀鏡と仰ぐ可き
ちしや ねんぶつしゅう 智者達念仏宗の大檀那と為る大名・小名並びに有徳の者多分は

りんじゅう

臨終思しう如ごとくならざるの由これ之を聞き之を見る、而しかるに善導ぜんどう和尚わじょう

じゅつそくじゅつしやう

十即じゅう十生じゅうしやうと定め十遍じゅうべん乃至ないし一生の間いっしやう念佛者ねんぶつは一人も漏もれず往生おうじやう

を遂とぐ可べしと見えたり人の臨終りんじゅうと善導ぜんどうの釈すいとは水火すいかなり。

こころ ねんぶつ え

爰こころに念佛者ねんぶつ会えして云いわく往生おうじやうに四つ有り、一いには意念いねん往生おうじやう・

はんじゅさんまい

般舟三昧經はんじゅさんまいに出いでたり、二にには正念しょうねん往生おうじやう・阿弥陀經あみだに出いでたり、

むきおうじやうぐんざろん

三さんには無記往生むきおうじやう群疑論ぐんぎろんに出いでたり、四しには狂乱きやうらん往生おうじやう觀經くわんきやうの

げぶんげしやう

下品下生げぶんげしやうに出いでたり、詰なつて曰いわく此の中の意い・正の二は且しかく之を

むきおうじやう

置く無記往生むきおうじやうは何いれの經論きやうろんに依よつて懷感えかん禪師ぜんし・之これを書かけるや、

きやうろん

經論きやうろんに之これ無くば信用しんよう取り難がたし、第四だいの狂乱きやうらん往生おうじやうとは引証いんしやうは

かんきやう

觀經くわんきやうの下品下生げぶんげしやうの文ぶんなり、第一だいに惡人あくにん臨終りんじゅうの時とき妙法みやうほうを覺さとれる

ぜんちしき

善知識ぜんちしきに値あつて覺さとる所の諸法しよほう実相じつそうを説せかしめて之これを聞きく者しやうねん正念しょうねん

かた

存ぞんし難がたく十惡じゅうあく・五逆ごぎやく具諸しよ不善ふぜんの苦くに逼せめ被られて覺さとることを得とぜ

れば善知識実相の初門と為る故に称名して阿弥陀仏を念ぜよと
云うに音を揚げて唱え了んぬ、此れは苦痛に堪え難くして正念
を失う狂乱の者に非るか狂乱の者争か十念を唱う可き、例せば
正念往生の所摂なり全く狂乱の往生には例す可からず、而る
に汝等が本師と仰ぐ所の善導和尚は此の文を受けて転教口称と
は云えども狂乱往生とは云わず、其の上汝等が昼夜十二時に祈
る所の願文に云く願くは弟子等命終の時に臨んで心顛倒せず心
錯乱せず心・失念せず身心諸の苦痛無く身心・快樂・禅定に入る
が如し等云云、此の中に錯乱とは狂乱か而るに十悪・五逆を作
らざる当世の念仏の上人達・並に大檀那等の臨終の悪瘡等の
諸の悪重病並に臨終の狂乱は意を得ざる事なり、而るに善導
和尚の十即十生と定め又・定得往生等の釈の如きは疑無

ところ

おうじょう

いえど

おうじょう

なおふしん

きの処に十人に九人往生すと雖も一人往生せざれば猶不審
おこべ いか いわんやねんぶつしゅう ちようじやな ぜんね りゅうかん せいこう
發る可し、何に況や念仏宗の長者為る善慧・隆觀・聖光・

さつしょうなむ

しんこう みなあくそう

じゅうびよう

りんじゅう

きょうらん

薩生南無・真光等皆惡瘡等の重病を受けて臨終に狂乱して

これ

これ

そ

いか

ねんぶつ

りんじゅう

死するの由之を聞き又之を知る、其の已下の念仏者の臨終の

きょうらんそ

ぜんどうわじょう

じゅつそくじゅつしろう

か

狂乱其の数を知らず、善導和尚の定むる所の十即十生は闕け

きら

せんちゅうむいつ

せんちゅうむいつ

ほつけ

て嫌える所の千中無一と成んぬ、千中無一と定められし法華・

しんこん

ぎょうじや

ほほ りんじゅう

しょうねん

これ

ねんぶつ

ほうもん

真言の行者は粗ぼ臨終の正念なる由之を聞けり、念仏の法門

おい

しょうそうまつ

まつぼう

こと

るふ

べ

りこん

どんこん

に於ては正像末の中には末法に殊に流布す可し、利根・鈍根・

ぜんじん

あくにん

じかい

はかい

どんこんあくにんはかい

こと

おうじょう

善人・悪人・持戒・破戒等の中には鈍根悪人破戒等殊に往生す

べ

ゆえ

どうしゆくぜん

ゆいうじょうといちもん

こと

ぜんどう

可しと見えたり、故に道綽禪師は唯有淨土一門と書かれ、善導

わじょう

じゅつそくじゅつしろう

おうじょうようしゅう

じよくせまつだい

もくそく

和尚は十即十生と定め往生要集には濁世末代の目足と云え

ねんぶつ

じきすで

べ

き

そ

べ

き

き

き

り、念仏は時機已に叶えり行ぜん者・空しかる可からざるの処

ところ

にかく是ことくの如そきの相違そうは大なる疑うたがいなり、若もし之これに依よつて本願ほんがんを

疑うたがわば仏説ぶつせつを疑うたがいうに成なりぬ進退しんたい惟これ谷やれり此うたがいの疑うたがいを以もつて

念ねん仏宗ぶつしゅうの先達せんだつ並びに聖道しょうどうの先達せんだつに之これを尋もとるに一人として答こたうる

人ひと之これれ無し、念ねん仏者ぶつ救きううて云いく、汝なんじは法然ほうねん上人しょうにんの捨しゃ閉へい閣かく抛ほうの四

字ほうを謗法ぼうほうと過おむるか汝なんじが小智せうちの及およばざる所ところなり、故ゆゑに上人しょうにん・此

の四字ひそかを私これに之これを書くと思おもえるか、源曇鸞もんとんらん・道綽どうしやく・善導ぜんどうの三師さんしの

釈これより之これを出だしたり、三師さんしの釈しやく・又私ひそかに非あらず、源みなもと浄土じやうどの三師さんしの

竜樹りゅうじゆ菩薩ぼさつの十住じゅうじゆう毘婆沙論びばしやろんより出でず、

雙觀經そうかんきやうの上卷じやうに云いく設たといい我われ仏ほとけを得え乃ない至し十念等じゅうねんどうと云云、第十九の

願いに云いく設たといい我われ仏ほとけを得え諸もろの功徳こうとくを修しゆめ菩提心ぼだいしんを發おこす等と云云、

下卷いに云いく乃ない至し一念等いちねんどうと云云、第十八の願成就じやうじゆの文ぶんなり、又下

卷いに云いく「其その上うへ・輩者はいしや○一向專念いっかうせんねん・輩者はいしや○一向專念いっかうせんねん其下輩者げはい○

一向専念いっこうせんねん」と云云、此これは十九願成就じゅうじゆの文なり、観無量寿經かんむりようじゆきように

云く「仏阿難あなんに告ぐ汝なんじ好く是ことばの語ことばを持たもて是この語ことばを持もつ者は即すなわち

是これ無量寿むりようじゆぶつ仏の名なを持もつ」等と云云、阿弥陀經あみだに云く小善根ぜんこんを

以もつてす可べからず乃至ないし一日七日等と云云、先そうかんきようず雙觀經そうかんきようの意いは念仏ねんぶつ

往生おうじようし諸しよぎよう行しよぎよう往生しよぎようと説いけども一向専念いっこうせんねんと云いつて諸しよぎよう行しよぎよう往生しよぎようを捨すて

了おんぬ、故ゆえに弥勒みろくの付属ふそくには一向いっこうに念仏ねんぶつを付属ふそくし了おんぬ、

観無量寿經かんむりようじゆきようの十六觀かみも上の十五しよぎようの觀しよぎようは諸しよぎよう行しよぎよう往生しよぎよう、下輩げはい一觀いの

三品ねんぶつは念仏ねんぶつ往生おうじようなり、仏阿難尊者あなんそんじやに念仏ねんぶつを付属ふそくするは諸しよぎよう行しよぎようを捨す

つる意あみだなり、阿弥陀經あみだには雙觀經そうかんきようの諸しよぎよう行しよぎよう觀無量寿經かんむりようじゆきようの前しよぎよう十五

觀たばを束むすねて、小善根ぜんこんと名なけ往生おうじようを得えざるの法おほと定め畢おほんぬ、

雙觀經そうかんきようの念仏ねんぶつをば無上功德むじようくどくと名なけて弥勒みろくに付属ふそくし、觀經かんきよう・念仏ねんぶつ

をば芬陀利華ふんだりけと名なけて阿難あなんに付属ふそくし、阿弥陀經あみだの念仏ねんぶつをば大善根ぜんこん

と名けて舍利弗に付属す、終の付属は一經の肝心を付属するなり又一經の名を付属するなり、三部經には諸の善根多しと雖も其の中に念仏最なり、故に題目には無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經等と云えり、釈摩訶衍論・法華論等の論を以て之れを勘うるに一切經の初には必ず南無の二字有り、梵本を以て之をのたまさんぶきようだいもくなむこ言わば三部經の題目には南無之れ有り、
雙觀經の修諸の二字に念仏より外の八万聖教残る可からず、
觀無量壽經の三福九品等の読誦大乘の一句に一切經残る可からず、阿彌陀經の念仏の大善根に対する小善根の語に法華經等漏る可きや、総じて浄土の三部經の意は行者の意樂に随わんがためしばらくしよぎようあいえど為に暫く諸行を挙げと雖も、再び念仏に対する時は諸行の門を閉じて捨閉閣抛する事顕然なり、例せば法華經を説かんが為に

むりようぎきよう

よんじゅうよねん

ほつけ

無量義經を説くの時四十余年の經を捨てて法華の門を開くが

ごと
りゅうじゅぼさつじゅうじゅうびしゃもんろん

いちだいしゅうきよう

なんい

如し、竜樹菩薩十住毘婆沙論を造つて一代聖教を難易の

にどう

なんぎようどう

さんぶきよう

ほか

しよぎよう

いぎようどう

二道に分てり、難行道とは三部經の外の諸行なり易行道とは

ねんぶつ

きようろんか

ごと

ふんみよう

いえど

しんたん

にんし

念仏なり、經論此くの如く分明なりと雖も震旦の人師此の義を

ただぜんどういっし

ほつとく

ゆえん

そうかんきよう

知らず唯善導一師のみ此の義を発得せり、所以に雙觀經の三輩

かんねんほうもん

いわ

いっさいしゅじようこんじようふどう

じようちゆうげ

を觀念法門に書いて云く「一切衆生根性不同にして上中下有

そ
こんじよう

したが

みなむりようじゅぶつ

せんねん

すす

り其の根性に随つて仏皆無量壽仏の名を專念すること勸む」

ねんぶつ

あ

いぜん

しゅう

しよぎよう

たちまちこれ

等云云、此の文の意は發菩提心修諸功德等の諸行は他力本願の

ねんぶつ

あ

いぜん

しゅう

しよぎよう

ゆる

と云うとも行者用ゆ可からず故に暫く諸行を許すなり、實には

ねんぶつ

きようじやもち

べ

ゆえ

しばら

しよぎよう

ゆゑ

ねんぶつ

しよぎよう

も

おうじよう

と

これな

こ

念仏を離れて諸行を以て往生を遂ぐる者之無しと書きしなり、

かんむりようじゅきよう

ぶつこう

あなん

ぜんどう

じよ

こ

こ

觀無量壽經の仏告阿難等の文を善導の疏の四に之れを受けて

曰く「上来に定散兩門を説くと雖も仏の本願に望めば意・衆生の一向に専ら阿弥陀の名を称するに在り」云云、定散とは八万の権実・顕密の諸經を尽して之を摂して念仏に對して之れを捨つるなり、善導の法事讃に阿弥陀經の大・小善根の故を釈して云く「極樂は無為涅槃界なり隨縁の雜善恐らくは生じ難し故に如来要法を選んで教えて弥陀專修を念ぜしむ」等と云云、諸師の中に三部經の意を得たる人は但導一人のみ、如来の三部經に於ては是くの如く有れども正法・像法の時は根機猶利根の故に諸行往生の機も之有りけるか。

然るに機根衰えて末法と成る間・諸行の機漸く失い念仏の機と成れり、更に阿弥陀如来・善導和尚と生れて震旦に此の義を顕し、和尚日本に生れて初は叡山に入つて修行し後には叡山を

いで一向に専修念仏して三部經の意を顕し給いしなり、汝
捨閉閣拋の四字を謗法と咎むる事未だ導和尚の釈並びに三部經の
文を窺わざるか、狗の雷を齧むが如く地獄の業を増す汝知らず
んば浄土家の智者に問え。

不審して云く上の所立の義を以て法然の捨閉閣拋の謗言を救

うか実に浄土の三師並に竜樹菩薩・仏説により此の三部經の文

を開くに念仏に対して諸行を傍と為す事粗經文に之見えたり、

經文に嫌われし程の諸行念仏に対して之を嫌わんこと過む可き

に非ず、但不審なる処は雙觀經の念仏已外の諸行觀無量壽經

の念仏以外の定散・阿弥陀經の念仏の外の小善根の中に法華・

涅槃・大日經等の極大乘經を入れ念仏に対して不往生の善根

ぞと仏の嫌わせ給いけるを竜樹菩薩三師並に法然之を嫌わば

いづれとが 何の失有らん但三部經の小善根等の句に法華・涅槃・大日經等
は入る可しとも覚えざれば三師並に法然の釈を用いざるなり、
無量義經の如きは四十余年・末顯眞実と説いて法華八箇年を除き
て以前四十二年に説く所の大小・権実の諸經は一字一点も未顯
眞実の語に漏る可しとも覚え、しかのみならず四十二年の間
に説く所の阿含・方等・般若・華嚴の名目之を出だせり、既に
大小の諸經を出して生滅無常を説ける諸の小乘經を阿含の
句に摂し、三にして無差別の法門を説ける諸大乘經を華嚴海空
の句に摂し、十八空等を説ける諸大乘經を般若の句に摂し、
彈呵の意を説ける諸大乘經を方等の句に摂す、是くの如く年限
を指し經の題目を挙げ無量義經に依つて法華經に對して諸經を
嫌い・嫌える所の諸經に依れる諸宗を下すこと天台大師の私に

あら
非ず、汝等が浄土の三部経の中には念仏に對して諸行を嫌う文
これあ
は之有りとも嫌わるる諸行は浄土の三部経よりの外の五十年の
しよきよう
諸経なりと云う現文は之無し、又無量義経の如く阿含・方等・
般若・華嚴等をも挙げず誰か知る三部経には諸の小乗経並に
歴劫修行の諸経等の諸行を仏・小善根と名け給うと云ふ事
を、左右無く念仏よりの外の諸行を小善等と云えるを法華・
涅槃等の一代の教なりと打ち定めて捨閉閣抛の四字を置きては
ぶつゝい
仏意にや乖くらんと不審する計りなり、例せば王の所従には
しよにん
諸人の中諸国の中の凡下等一人も残る可からず民が所従には
しよにん
諸人諸国の主は入る可からざるが如し、誠に浄土の三部経等が
いちだい
一代超過の経ならば五十年の諸経を嫌うも其の謂れ之有り
さんぶきよう
なん三部経の文より事起つて一代を撰す可しとは見え、但一機

・一縁いちえんの小事しょうじなり何ぞ一代なんいちだいを撰せんして之これを嫌きらわん、三師さんし並ならに法然ほうねん此この義ぎを弁わえずして諸行しよぎやうの中に法華ほつげ・涅槃ねはん並ならに一代いちだいを撰せんして末代まつだいに於おて之これを行おせん者は千中せんちゆう無む一いつと定さだむるは近くは依經えきやうに背そむき遠とほくは仏意ぶつゐに違ちがう者なり、但し竜樹ただりゆうじゆの十住じゆうじゆう毘婆沙論びしやもんろんの難行なんぎやうの中に法華ほつげ・真言等しんこんを入いると云いうは論文ろんぶんに分ぶん明みやうに之これ有ありや、設たとい論文ろんぶんに之これ有ありとも慥たしかなる經文きやうもん之これ無なくば不審ふしんの内うちなり、竜樹菩薩りゆうじゆぼさつは権大乘こんだいじやうの論師ろんし為なりし時の論ろんなるか、又訳者やくしやの入いれたるかと思得こころうべし、其そのの故ゆゑは仏は無量義經むりやうぎきやうに四十余年よんじゆうよねんは難行道なんぎやうどう・無量義經むりやうぎきやうは易行道いぎやうどうと定め給たまう事こと・金口きんくの明鏡めいきやうなり、竜樹菩薩りゆうじゆぼさつ・仏の記文きもんに當あつて出世しゆつせして諸經しよきやうの意いを演のぶ豈あに仏說ぶつせつなる難易なんいの二道にどうを破やぶつて私ひそか難易なんいの二道にどうを立てんや、随したがつて十住じゆうじゆう毘婆沙論びしやもんろんの一部いちぶ始中終しちゆうじゆうを開ひらくに全ぜんく法華經ほつげきやうを難行なんぎやうの中うちに入いれたる文ぶん之これ無なく只

けこんきよう じゅうち しゃく
華嚴經の十地を釈するに第二地に至り畢つて宣べず、又此の論に
しよきよう りやっこうしゆぎよう むね あ
諸經の歴劫修行の旨を挙ぐるに菩薩難行道に墮し二乘地に
だ ようふじようぶつ
墮して永不成仏の思を成す由・見えたり法華已前の論なる事疑
りゅうじゆぼさつ
無し、竜樹菩薩の意を知らずして此の論の難行の中に法華・
しんこん
真言を入れたりと料簡するか、浄土の三師に於ては書釈を見る
なんぎよう そうぎよう しょうどう
に難行・雜行・聖道の中に法華經を入れたる意・粗之有り、
しか いえど ほうねん こと ほうげん くれな
然りと雖も法然が如き放言の事之無し、しかのみならず仏法を弘
めん やから
輩は教機時国教法流布の前後を☆む可きか。

によらいざいせ よんじゅうよねん だいしょう
如来在世に前の四十余年には大小を説くと雖も説時至らざる
ゆえ ほんかい の たま き いえど せつじ いた
の故に本懷を演べ給わず、機有りと雖も時無ければ大法を説き
たま りようぜん
給わず、靈山八年の間・誰か円機ならざる時も来る故に本懷を
ごんき じつき
演べたもうに権機移つて実機と成る、法華經の流通並に涅槃經に
ほけきよう るつう ねはんきよう

は実教を前としじつきょう権教を後とすごんきょう可きの由見えたり、在世には実をざいせ
隠してかく権を前にす滅後には実を前としてめつご権を後と為すな可き道理べ どうり
顯然なり、然りと雖もけんねん天竺国には正法いえど てんじくこく一千年の間は外道有り、
一向いっこうしょうじょう小乗の国有り、又一向大乘の国有り、又大だいしょうけんがく小兼学の国有
り、漢土に仏法渡つても又天竺の如し、日本国に於ては外道もかんど ぶつぼうわた てんじく ごと にほんこく おい げどう
無くなく しょうじょう小乗の機も無く唯大乘の機のみ有り、大乘に於ても法華だいじょう おい ほっけ
よりの外の機無し、但しほか き ただ ぶつぼう にほん わた仏法・日本に渡り始めし時・暫くしばら しょうじょう小乗
の三宗ごんだいじょう権大乘の三宗を弘むと雖も桓武の御宇に伝ひろ いえど かんむ ぎょう でんぎようだいし教大師の御時おんとき
ろくしゅうろくしゅう六宗・情を破つて天台宗と成りぬ、俱舎成実・律の三宗の学者くしゃじょうじつ にじょう がくしゃ
も彼の教の如く七賢ごと けん三道を経て見思を断じ二乗と成らんとは思わ
ず、只彼の宗を習つて大乘の初門と為し彼の極を得んとは思わ
ず、権大乘の三宗を習える者も五性各別等の宗義を捨ててごんだいじょう かくべつ しゅうぎ

いちねんさんぜん 一念三千・五輪等の妙観を窺う、大小・権実を知らざる在家の檀那等も一向に法華・真言の学者の教に随つて之を供養する間・日本一洲は印度震旦には似ず一向純円の機なり、恐くは靈山八年の機の如し、之を以て之を思うに浄土の三師は震旦・権大乘の機に超えじ、法然に於ては純円の機純円の教・純円の国を知らず、権大乘の一分為る観經等の念仏、権実をも弁えざる震旦の三師の釈之を以て此の国に流布せしめ実機に権法を授け、純円の国を権教の国と成し醍醐を嘗むる者に蘇味を与うるの失誠に甚だ多し。

◆ 一 題目 弥陀名号 勝劣事

111p

南無妙法蓮華經と申す事は唱えがたく南無阿弥陀仏・南無
薬師如来など申す事は唱えやすく又文字の数の程も大旨は同
れども功德の勝劣は遙に替りて候なり、天竺の習ひ仏出世の前
には二天三仙の名号を唱えて天を願ひけるに仏世に出させ給
ては仏の御名を唱ふ、然るに仏の名号を二天三仙の名号に対
れば天の名は瓦礫のごとし仏の名号は金銀如意宝珠等のごとし、
又諸仏の名号は題目の妙法蓮華經に対すれば瓦礫と如意宝珠の
如くに侍るなり、然るを仏教の中の大小・権実をも弁へざる
人師などが仏教を知りがほにして仏の名号を外道等に対して
如意宝珠に譬へたる経文を見又法華經の題目を如意宝珠に譬へ
たる経文と喩の同きをもつて念仏と法華經とは同じ事と思へる
なり、同じ事と思う故に又世間に貴と思う人の只弥陀の名号計

を唱となうるに随したがつて・皆人一期の間・一日に六万遍・十万遍なん
ど申せども法華經の題目をば一期に一遍も唱へず、或は世間に
智者と思はれたる人人外には智者氣にて内には仏教を弁へざる
が故に念仏と法華經とは只一なり南無阿弥陀仏と唱うれば法華經
を一部よむにて侍るなんと申しあへり是は一代の諸經の中に
一句一字もなき事なり、設ひ大師先徳の釈の中より出たりとも
且は觀心の釈か且はあて事かなんぞ心得べし、法華經の題目は
過去に十万億の生身の仏に値ひ奉つて功德を成就する人初め
て妙法蓮華經の五字の名を聞き始めて信を致すなり、諸仏の
名号は外道・諸天・二乗菩薩の名号にあはすれば瓦礫と
如意宝珠の如くなれども法華經の題目に対すれば又瓦礫と
如意宝珠との如し、当世の学者は法華經の題目と諸仏の名号と

を功德くどくひとしと思ひ又同じ事と思へるは瓦礫かりやくと如意宝珠にょいほうじゆとを同じ
と思ひ一と思ふが如ごとし、止觀しかんの五に云く「設たといい世を厭いとう者も下劣げれつ
の乗もてあそを翫しやうび枝葉はんぶに攀付いぬし狗作務さむに狎なれ・猴みこうを敬たいて帝釈たいしやくと
為なし瓦礫かりやくを崇あがめめて是・明みやうじゆ珠なりとす此の黒闇くろやみの人豈あに道を論ず
可べけんや」等云云、文の心は設たひ世をいとひて出家遁世しゅつげとんせいして山林さんりん
に身をかくし名利名聞みよりみようもんをたちて一向後世いつこうごしやうを祈ひとる人人も法華經ほけきやうの
大乘だいじやうをば修行しゆぎやうせずして權教下劣ごんきやうげれつの乗につきたる名号みやうごう等を唱となう
るを瓦礫かりやくを明みやうじゆ珠なんどと思いたる僻人びやくにんに譬たとへ闇くらき惡道あくどうに行くべ
き者と書はれて侍はべるなり、弘決くけつの一には妙樂大師みやうらくだいし・善住天子經ぜんじじやうてんしきやうを
かたらせ給たまひて法華經ほけきやうの心を顯いはして云く「法を聞いて謗ほうを生じ
地獄じごくに墮だするは恒沙ごうしやの仏を供養くやうする者に勝まさる等」云云、法華經ほけきやうの
名を聞いてそしる罪つみは阿弥陀仏あみだぶつ・釈迦仏しゃかぶつ・藥師仏やくし等の恒河沙ごうがしやの仏

を供養くようし名号みょうごうを唱となうるにも過すぎたりされば当世とうせの念仏者ねんぶつの念仏ねんぶつ
を六万遍ないしじゅうまん乃至十萬遍もう申もうすなんと云へども彼かしこにては終ついに生死しやうじをは
なるべからず、法華經ほけきやうを聞きくをば千中無一せんちゆうむいつ・雜行そうぎやう・
未有一人得者みういちにんとくしやななど名けて・或あるは抛なげうてよ・或あるは門を閉じよななど
申もうす謗法ほうほうこそ設たとひ無間むげん・大城だいじやうに墮おちるとも後に必生死しやうじは離はれ侍はべら
んずれ、同くは今生こんじやうに信をなしたらば・いかによく候なん。

問せけんう世間の念仏者ねんぶつななどの申もうす様は此身ほけきやうにて法華經ほけきやうななどを
破はする事は争いかでか候もうべき念仏ねんぶつを申もうすもとくごく極樂世界ごくらくせかいに参りて
法華經ほけきやうをさとらんが為なり、又・或あるは云いわく法華經ほけきやうは不淨ふじやうの身ふじやうにて
は叶はひがたし恐れもあり念仏ねんぶつは不淨ふじやうをも嫌きらはねばこそ申もうし候へな
んど申もうすはいかん、答こたえて云いわく此の四五年の程は世間せけんの有智うち・
無智むちを嫌きらはず此の義をば・さなんめりと思おもひて過すくる程に日蓮一代にちれんいちだい

しやうきよう

聖教をあらあら引き見るにいまだ此の二義の文を勘へ出さず・

詮せんずるところ近來きんらいの念仏ねんぶつ者並うちに有智めいしやうの明匠ひとびととおぼしき人人の

りんじゅう

臨終の思おもうやうにならざるは是・大謗法ほうぼうの故なり、人ごとに

ねんぶつもう

念仏申まうして浄土じやうどに生れて法華經ほけきやうをさとらんと思おもう故ゆゑに穢土えどにして

ほけきやう

法華經ほけきやうを行おほざる者をあざむき又・行おほざる者もすてて念仏ねんぶつを申まうす心

いできた

は出来いできたるなりと覺おほゆ・謗法ほうぼうの根本こんぽん此の義より出たり、法華經ほけきやうこそ

えど

此の穢土えどより浄土じやうどに生うずる正因しやういんにては侍はべれ念仏ねんぶつ等は未顕みけん眞實しんじつの

ゆゑ

故ゆゑに浄土じやうどの直因ちよくいんにはあらず、然しかるに浄土じやうどの正因しやういんをば極樂ごくらくにして

しゅぎやう

後しゅぎやうに修行しゅぎやうすべき物と思おもひ極樂ごくらくの直因ちよくいんにあらざる念仏ねんぶつをば浄土じやうどの

しやういん

正因しやういんと思おもう事こと僻案びやくあんなり、浄土じやうど門もんは春沙いさしを田まに蒔まいて秋米しゆまいを求もと

てんげつ

め天月てんげつをすてて水に月を求るに似たり人の心に叶かないて法華經ほけきやうを

うしな

失うしなふ大術だいじゆつ此の義にはすぎず、次に不浄ふじやう念仏ねんぶつの事・一切いっさい念仏ねんぶつ者の

師とする善導和尚・法然上人は他事にはいわれなき事多けれど

も此の事にをいてはよくよく禁められたり、善導の観念法門經に

云く酒肉五辛を手に取らざれ口にかまざれ手にとり口にもかみて

念仏を申さば手と口に惡瘡付くべしと禁め法然上人は起請を書

いて云く、酒肉五辛を服して念仏申さば予が門弟にあらずと云云、

不淨にして念仏を申すべしとは当世の念仏者の大妄語なり。

問うて云く善導和尚・法然上人の釈を引くは彼の釈を用るや

否や、答えて云く、しからず念仏者の師たる故に彼がことば己が

祖師に相違するが故に彼の祖師の禁めをもて彼を禁るなり、例せ

ば世間の沙汰の彼が語の彼の文書に相違するを責るが如し、問

うて云く善導和尚・法然上人には何事の失あれば用いざるや、

答えて云く仏の御遺言には我が滅度の後には四依の論師たりとい

へども法華經にたがはば用うべからずと涅槃經に返す返す禁め置
かせ給いて侍るに法華經には我が滅度の後・末法に諸經失せて
後・殊に法華經流布すべき由・一所二所ならずあまたの所に説か
れて侍り、随つて天台・妙樂・伝教・安然等の義に此事分明
なり、然るに善導・法然・法華經の方便の一分たる四十余年の内
の未顕眞實の觀經等に依つて仏も説かせ給はぬ我が依經の讀誦
大乘の内に法華經をまげ入れて還つて我が經の名号に對して
讀誦大乘の一句をすつる時・法華經を抛てよ・門を閉じよ・
千中無一など書いて侍る僻人をば眼あらん人は是をば用うべし
やいなや。

疑つて云く善導和尚は三昧発得の人師・本地・阿弥陀仏の
化身・口より化仏を出せり、法然上人は本地・大勢至菩薩の

化身けしん既に日本にほん国に生れては念ねん仏を弘ひろめて頭こうより光ひかりを現げんぜり争いか
これらこれらを僻びやく人と申もうさんや、又善導ぜんどう和尚わじょう・法然ほうねん上人しょうにんは汝なんじが見る程
此等ほけきを僻よ人と申もうさんや、又善導ぜんどう和尚わじょう・法然ほうねん上人しょうにんは汝なんじが見る程
の法華經ほけき並いっさいに一切經いっさいをば見給たまはざらんや定めて其そのの故ゆゑ是あらん
か、答えて云いわく汝なんじが難なんずる處ところをば世間せけんの人人ひとびと定めて道理どうりと思は
んか、是偏ひとえに法華經ほけき並いっさいに天台てんだい・妙樂みょうらく等の実經じつぎょう・實義じつぎを述べ給へ
る文義もんぎを捨て善導ぜんどう・法然ほうねん等の謗法ほうぼうの者にたばらかされて年久なひさくな
りぬるが故ゆゑに思はする處ところなり、先つうづ通り力ある者を信しんぜば外道げどう
天魔てんまを信しんずべきか・或あるる外道げどうは大海たいかいを吸干すいほし・或あるる外道げどうは恒河こうがを
十二年じふにねんまで耳みみに湛たえたり第六天だいろくてんの魔王まおうは三十二相さんじふにさうを具足ぐそくして仏身ぶつしん
を現げんず、阿難あなん尊者そんじゃ・猶魔なごと仏ぶつとを并なへず善導ぜんどう・法然ほうねんが通つう力りきいみじ
しというとも天魔てんま・外道げどうには勝すぐれず、其その上うへ・仏ぶつの最後さいごの禁いましめしめ
に通とおを本もととすべからずと見えたり、次に善導ぜんどう・法然ほうねんは一切經いっさいぎょう並

に法華經をばおのれよりも見たりなんどの疑ひ是れ又謗法の人
のためには・さもと思ひぬべし、然りといへども如来の滅後には
先の人は多分賢きに似て後の人は大旨は・はかなきに似たれど
も又先の世の人の世に賢き名を取りて・はかなきも是あり、
外典にも三皇・五帝・老子・孔子の五經等を学びて賢き名を取
れる人も後の人に・くつがへされたる例是れ多きか、内典にも又
かくの如し、仏法・漢土に渡りて五百年の間は明匠・国に充滿
せしかども光宅の法雲道場の慧観等には過ぎざりき、
此等の人人は名を天下に流し智水を国中にそそぎしかども天台
智者大師と申せし末の人・彼の義どもの僻事なる由を立て申せし
かば初には用ひず、後には信用を加えし時・始めて五百余年の間
の人師の義どもは僻事と見えしなり、日本国にも仏法渡りて二百

余年の間は異義いぎまちまちにして何れいづれを正義せいぎとも知らざりし程に
伝でん教大師ぎょうだいしと申もうす人に破られて前二百年の間の私義しぎは破られしな
り、其そのの時の人人ひとびとも当時の人の申もうす様に争いかでか前前の人は一切いっさい経
並ほけきように法華經をば見ざるべき、定めて様こそあるらめなんと申もうしあ
ひたりしかども叶きようもんはず經文たがに違ひたりし義どもなれば終ついに破われ
て止みにき、当時とうじも又かくの如ごとし此の五十余年が間は善導ぜんどうの
千中無一せんちゆうむいつ・法然ほうねんが捨しゃ閉へい閣かく抛ほうの四字等は権者ごんしゃの釈しやくなればゆへこそあ
らんと置いてひら信しんじに信じたりし程に日蓮にちれんが法華經ほけきようの・或あるは
惡世末法時あくせまつぽう・或あるは於後末世おごまつせ・或あるは令法久住等りようぼうくじゅうの文を引きむかへ
て相違そういをせむる時・我が師の私義しぎ破れて疑うたがいいあへるなり、
詮せんずるところ後・五百歳の經文きようもんの誠なるべきかの故に念仏者ねんぶつの
念仏ねんぶつをもて法華經を失うしひつるが還かえつて法華經の弘ひろまらせ給たまうべき

かとおぼ^{おほ}、但し御用心の御為に申す世間の悪人は魚鳥鹿等を殺して世路を渡る、此等は罪なれども仏法を失ふ縁とはならず懺悔をなさざれば三悪道にいたる、又魚鳥鹿等を殺して売買をなして善根を修する事もあり、此等は世間には悪と思はれて遠く善となる事もあり、仏教をもつて仏教を失ふこそ失ふ人も失ふとも思はず只善を修すると打ち思うて又そばの人も善と打ち思うてある程に思はざる外に悪道に墮つる事の出来候なり、当世には念佛者なんどの日蓮に責め落されて我が身は謗法の者なりけりと思う者も是あり、聖道の人人の御中にこそ実の謗法の人人は侍れ彼人の仰せらるる事は法華經を毀る念佛者も不思議なり念佛者を毀る日蓮も奇怪なり、念佛と法華とは一体の物なり、されば法華經を読むこそ念佛を申すよ念佛申すこそ法華經を読むにて

は侍れと思ふ事に候なりと、かくの如く仰せらるる人人・聖道
の中にあまた・をはしますと聞ゆ、随つて檀那も此の義を存じて
日蓮並に念仏者をおこがましげに思へるなり、先日蓮が是れ程の
事をしらぬと思へるははかなし。

仏法・漢土に渡り初めし事は後漢の永平なり渡りとどまる事は

唐の玄宗皇帝・開元十八年なり、渡れるところの経・律・論・五

千四十八巻・訳者一百七十六人其の経経の中に南無阿弥陀仏は

即南無妙法蓮華経なりと申す経は一卷・一品もおはしまさざる

事なり、其の上阿弥陀仏の名を仏・説き出し給う事は始め華嚴よ

り終り般若経に至るまで四十二年が間に所所に説かれたり、

但し阿含経をば除く一代聴聞の者は是を知れり、妙法蓮華経と

申す事は仏の御年七十二成道より已来四十二年と申せしに靈山

にましまして無量義処三昧に入り給たまいし時、文殊・弥勒もんじゅの問答に
過去かこの日月燈明仏にちげつとうみょうぶつの例を引いて我・燈明仏とうみょうぶつを見る乃至法華經を
説ほかんと欲せんれいすと先例を引きたりし時こそ南閻浮提えんぶだいの衆生しゅじょうは
法華經の御名みなをば聞き初めたりしか、三の卷の心ならば阿弥陀仏あみだぶつ
等の十六の仏は昔大通智勝仏だいとうちしやうぶつの御時おんとき・十六の王子おうじとして法華經を
習しやうかくつて後に正覺をならせ給たまへりと見えたり、弥陀仏等みだも凡夫ほんぶに
てをはしませし時は妙法蓮華經の五字ごじを習しやうかくつてこそ仏にはなら
せ給たまひて侍はべれ、全く南無阿弥陀仏なむあみだぶつと申もうして正覺しやうかくをならせ給たまいた
りとは見えみえず、妙法蓮華經は能開もうかいなり南無阿弥陀仏なむあみだぶつは所開しよかいなり、
能開所開もうかいしよかいを弁わきまえへずして南無阿弥陀仏なむあみだぶつこそ南無妙法蓮華經よと
物知ものしりりがほに申もうし侍はべるなり、日蓮幼少にちれんようしやうの時・習ならいそこなひの
天台宗・真言宗てんだいしやう しんごんしやうに教へられて此の義を存じて数十年の間ありし

なり、是れ存外そんがいの僻案びやくあんなり但し人師にんしの釈しゃくの中に一体と見えたる
釈しやくどもあまた侍る、彼は観心かんじんの釈しやくか・或は仏あるの所証しよしやうの法門ほうもんにつ
けて述たるを今の人并わきまへずして全体ぜんたい・一なりと思いて人を僻人びやくにん
に思ふなり、御☆迹けいせきあるべきなり、念仏ねんぶつと法華經ほけきやうと一つならば仏
の念仏ねんぶつ説かせ給たまいし觀經かんきやう等こそ如来出世にやらいしゆつせの本懷ほんかいにては侍らめ、
彼をば本懷ほんかいとも・をぼしめさずして法華經ほけきやうを出世しゆつせの本懷ほんかいと説かせ
給たまうは念仏ねんぶつと一体ならざる事明白そなり、其の上多くの眞言宗しんこんしゆう・
天台宗てんだいしゆうの人人ひとびとに値あい奉りて候し時・此の事を申しければ、され
ば僻案びやくあんにて侍りけりと申す人は是れ多し、敢て証文あえてしやうもんに經文きやうもんを書
いて進そうらぜず候はん限りは御用あひ有るべからず、是こそ謗法ほうほうとなる
根本こんぽんにて侍れ、あなかしこ・あなかしこ。

法華浄土問答抄 ほっけじょうどもんどう

117P

穢土 えど

名字即 みょうじそく
観行即 かんぎようそく

三諦の名を聞く さんたい
五品を明す ごほん

法華宗立六即 ほっけしゅうそく

相似即 そうじそく

八十八使の見惑を断ず けんわく
八十一品の思惑を断ず しわく

報土 ほうど

分真即 ぶんしんそく

九品の塵沙を断ず じんじゃ
四十一品の無明を断ず むみょう

究竟即 くきようそく

一品の無明を断ず むみょう

中品戒行世善等 ちゅうほんかいぎよう

穢土 えど

理即 りそく

浄土下品 じょうどげほん

浄土宗の所立 じょうどしゅう しよりゅう

名字即 みょうじそく

觀行即 かんぎょうそく

報土 ほうど

相似即 そうじそく

分真即 ぶんしんそく

究竟即 くきょうそく

弁成べんじょうの立、我が身叶かない難がたきが故ゆえに且しばらしょうどう聖道の行を捨しゃ閉へいし閣かく抛ほうし
し浄土じょうどに歸きし浄土じょうどに往生おうじょうして法華ほっけを聞きいて無生むじょうを悟さとることを
得うべきなり。

日蓮難にちれんなんじて云いわく、我が身叶かない難なんければ穢土えどに於おいて法華經等ほけきやう・

教主きやうしゅ釈尊等しやくそんを捨しゃ閉へいし閣かく抛ほうし浄土じょうどに至いたつて之これを悟さとる可べし等云云、

いづれ きようもん
何れの経文に依つて此くの如き義を立つるや、又天台宗の報土
ぶんしんそく くきようそく
は分真即・究竟即・浄土宗の報土は名字即乃至究竟即等とは
いづれ ろんしやく
何れの経・論釈に出でたるや、又穢土に於ては法華経等・教主
しやくそん
釈尊等を捨閉し閣抛し浄土に至つて法華経を悟る可しとは何れ
きようもん
の経文に出でたるや。

べんじよう
弁成の立に、余の法華等の諸行等を捨閉し閣抛して念仏を
もち かんきよう
用ゆる文は観経に云く「仏・阿難に告ぐ汝好く是の語を持て
ことば すなわこ むりようじゅぶつ
是の語を持つ者は即ち是れ無量寿仏の名を持つ」文、浄土に往生
ほっけ
して法華を聞くと云う事は文に云く「観世音・大勢至・大悲の
おんじよう
音声を以つて其れが為に広く諸法実相・除滅罪法を説く、聞き
おわ かんき
已つて歡喜し時に応じて即・菩提の心を發す」文、余は繁き故に
しばらこれ
且く之を置く。

又日蓮難じて云く、観無量寿経は如来成道四十余年の内なり

ほけきよう

はちかねん

法華経は後八箇年の説なり如何んが已説の観経に兼ねて未説の

ほけきよう

の

しゃへいかくほう

かせつ

な

べ

したが

随つて

「仏告

法華経の名を載せて捨閉閣抛の可説と為す可きや、

の

しゃへいかくほう

かせつ

な

べ

したが

随つて

「仏告

あなん

阿難」等の文に至つては只弥陀念仏を勧進する文なり未だ法華経

いた

ただみだねんぶつ

かんじん

かんじん

かんじん

かんじん

いまだ

ほけきよう

を捨閉し閣抛することを聞かず、

かくほう

いかに

いかに

いかに

いかに

いかに

いかに

ほけきよう

かんが為に先ず四十余年の已説の経経を挙げて未顕真実と定め

ため

よんじゅうよねん

いせつ

きようぎよう

あ

あ

みけんしんじつ

ほけきよう

おわ

あにみけんしんじつ

かんきよう

かんきよう

いけんしんじつ

いけんしんじつ

ほけきよう

あ

ほけきよう

畢んぬ、

あにみけんしんじつ

かんきよう

かんきよう

いけんしんじつ

いけんしんじつ

ほけきよう

あ

ほけきよう

て乃至之を抛てと為す可きや、

ないしこれ

なげう

な

べ

いかに

いかに

いかに

いかに

めて速かに説かず」等云云、

すみや

すで

きようしゆしやくそん

きようしゆしやくそん

きようしゆしやくそん

きようしゆしやくそん

きようしゆしやくそん

きようしゆしやくそん

の名字を説かず何ぞ已説観経の念仏に對して此の法華経を抛た

みようじ

なん

いせつ

かんきよう

ねんぶつ

ねんぶつ

ほけきよう

ほけきよう

んや、

次に

「下品下生・諸法実相・除滅罪法等」云云、

げぶんげしよう

しよほうじつそう

しよほうじつそう

じよめつざいほう

じよめつざいほう

云云、

法華経已前の実相其の数・

ほけきよう

いぜん

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

一に非ず先ず外道の内の長爪の実相

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

法華経已前の実相其の数・

ほけきよう

いぜん

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

一に非ず先ず外道の内の長爪の実相

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

法華経已前の実相其の数・

ほけきよう

いぜん

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

一に非ず先ず外道の内の長爪の実相

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

法華経已前の実相其の数・

ほけきよう

いぜん

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

一に非ず先ず外道の内の長爪の実相

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

法華経已前の実相其の数・

ほけきよう

いぜん

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

一に非ず先ず外道の内の長爪の実相

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

法華経已前の実相其の数・

ほけきよう

いぜん

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

じつそうそ

一に非ず先ず外道の内の長爪の実相

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

ないどう
・内道の内の小乗 乃至爾前の四教皆所詮の理は実相なり、何ぞ
必ずしも已説の觀經に載する所の実相のみ法華經に同じと意得
べきや、今度慥なる証文を出して法然上人の無間の苦を救わ
るべきか。

又弁成の立に、觀經は已説の經なりと雖も未來を面とする

故に未來の衆生は未來に有る所の經卷・之を讀誦して淨土に

往生すべし、既に法華等の諸經・未來流布の故に之を讀誦し

て往生すべきか、其の法華を捨閉閣抛し觀經の持無量壽仏の文

に依つて法然是くの如く行じ給うか、觀經の持無量壽仏の文の

上に諸善を説き一向に無量壽仏を勸持せる故に申せしめ候、実相

に於いても多く有りと云う難、彼は淨土の故に此の難来るべから

ず、法然上人聖道の行機堪え難き故に未來流布の法華を捨閉

かくほう 閣抛す、故に是れ慈悲の至進なれば此の慈悲を以て浄土に往生
し全く地獄に墮すべからざるか。

にちれんなん 日蓮難じて云く、觀經を已説の經なりと云云、已説に於ては

しょうふく 承伏か、觀經の時未だ法華經を説かずと雖も未來を鑒みて捨閉

かくほう かくほう 閣抛すべしと法然上人は意得給うか云云、仏・未來を鑒みて

いせつ 已説の經に未來の經を載せて之を制止すと云わば已説の

しょうじようきよう 小乘經に未説の大乗經を載せて之を制止すべきか、又已説

ごんだいじようきよう の權大乘經に未説の 実大乘經 を載せて未來流布の法華經を

せいし 制止せば、何が故に仏・爾前經に於て法華の名を載せざる由、

これと 之を説きたまうや。

ほうねんしょうにんじひ 法然上人慈悲の事、慈悲の故に法華經と教主釈尊とを抛つ

なげう なりと云わば所詮上に出す所の証文は未だ分明ならず慥なる

しょうもん 証文を出して法然上人の極苦を救わる可きか、上の六品の

しょうようおうじよう

諸行往生を下の三品の念仏に對して諸行を捨つ豈法華を捨つ

かんむりようじゆきよう

るに非ずや等云云、觀無量壽經の上六品の諸行は法華已前の

しょうよう

諸行なり、設い下の三品の念仏に對して上六品の諸行・之を

なげう

抛つとも但法華經は諸行に入らず何ぞ之を闇かんや、又法華の

にぜん

意は爾前の諸行と觀經の念仏と共に之を捨て畢りて如來出世の

ほんかい

本懷を遂げ給うなり、日蓮管見を以て一代聖教並びに法華經の

かんが

文を勘うるに未だ之を見ず、法華經の名を挙げて・或は之を抛ち

あるそ

・或は其の門を閉ずる等と云う事を、若し爾らば法然上人の

たの

憑む所の弥陀本願の誓文並びに法華經の入阿鼻獄の釈尊の誠文

なん

・如何ぞ之を免る可けんや、法然上人・無間獄に墮せば所化の

でし

弟子並びに諸檀那等共に阿鼻大城に墮ちんか、今度分明なる

しょうもん
証文を出して法然上人の阿鼻の炎を消さる可し云云。

ぶんえい
文永九

みずのえさる
年太歳壬申正月十七日

日蓮 花押

べんじょう
弁成

かおう
花押

◆一三 法華真言勝劣事

120P

とうじ
東寺の弘法大師空海の所立に云く法華經は猶華嚴經に劣れり
いかにわんやだいにちきよう
何に況や大日經等に於いてをやと云云、慈覺大師・円仁・智証

だいし えんちん あんねんわじょう
大師・円珍・安然和尚等の云く法華經の理は大日經に同じ印と

しんこん
真言との事に於ては是れ猶劣れるなりと云云 其の所釈は余 空海は

だいにちきよう ほだいしん
大日經・菩提心論等に依つて十住心を立てて顕密の勝劣を判

ず、其その中に第六に他縁大乘・心は法相宗・第七に覺心不生心かくしんふしようしん

は三論宗・第八に如実一道心によじついちどうしんは天台宗・第九に極無自性心むじせいしん

華嚴宗・第十に秘密莊嚴心ひみつそうこんは真言宗しんごんしゅうなり、此この所立しよりゅうの次第しだいは淺

き従より深いたきに至いたる、其その証文しょうもんは大日經だいにちきようの住心品じゅうしんほんと菩提心論ぼだいしんろんと

に出いづと云いえり、然しかるに出いだす所だいにちきようの大日經だいにちきようの住心品じゅうしんほんを見て他縁

大乘・覺心不生・極無自性むじせいを尋たずぬるに名目みょうもくは經文きやうもんに之これあ有り、

然しかりと雖いえども他縁・覺心・極無自性むじせいの三句ほつそうを法相・三論・華嚴けこんに配

する名目みょうもくは之これな無し、其その上かくしんふしよう覺心不生と極無自性むじせいとの中間ちゅうげんに

如実一道によじついちどうの文義もんぎ共に之これな無し、但ただし此この品ほんの初はつに「云何いかなるか菩提

謂おもく如実によじつに自心じしんを知る」等これあの文ぶん之これ有り、此この文ぶんを取とつて此この二句

の中間ちゅうげんに置いて天台宗てんだいしゅうと名なづけ華嚴宗けこんしゅうに劣くわるの由ゆ、之これを存ぞんす、

住心品じゅうしんほんに於おいては全もんぎく文義もんぎ共に之これな無し、有文有義ゆうもんうぎ・無文有義むもんうぎの二

句を虧く信用に及ばず、菩提心論の文に於ても法華・華嚴の
勝劣都て之を見ざる上、此の論は竜猛菩薩の論と云う事上古よ
り諍論之れ有り、此の諍論絶えざる已前に龜鏡に立つる事は
堅義の法に背く、其の上善無畏・金剛智等評定有つて大日經
の疏・義釈を作れり一行阿闍梨の執筆なり、此の疏義釈の中に
諸宗の勝劣を判ずるに法華經と大日經とは広略の異なりと定
め畢んぬ、空海の徳貴しと雖も争か先師の義に背く可きやと云う、
難此れ強し此れ安然の難なり、之に依つて空海の門人之を陳ずるに
旁陳答之有り・或は守護經・或は六波羅蜜經・或は楞伽經
・或は金剛頂經等に見ゆと・多く会通すれども総じて難勢を
免れず、然りと雖も東寺の末学等大師の高徳を恐るるの間・強ち
に会通を加えんとすれども結局会通の術計之無く問答の法に

背そむいて伝でん教大師きょうだいし最澄さいしやうは弘法大師こうぼうだいしの弟子でしなりと云云、又宗論しゅうろんの

甲乙等こうおつ旁かたがた論ろんずる事こと之これ有ありと云云。

日蓮案にちれんじて云いわく、華嚴宗けこんしゅうの杜順とじゆん・智嚴ちこん・法蔵等ほうぞう・法華經ほけきやうの始見しけん

今見こんけんの文ぶんに就ついて法華ほつけ・華嚴けこん・齊等さいとうの義ぎ之これを存ぞんす、其その後澄觀ちやうかん

始今しこんの文ぶんに依よつて齊等さいとうの義ぎを存ぞんすること祖師そしに違たがはず、其その上

一往いちおうの弁べんを加くわえて法華ほつけと華嚴けこんと齊等さいとうなりと云えり、但ただし華嚴けこんは

法華經ほけきやうより先さきなり、華嚴經けこんきやうの時とき・仏最初さいしよに法慧功德林等ほうえくどくの大菩薩だいぼさつ

に對たいして出世しゆつせの本懷ほんかい之これを遂とぐ、然しかれども二乘並にじやうに下賤げせんの凡夫等ほんぶ

根機未熟こんきみじゆくの故ゆゑに之これを用もちいず、阿含あこん・方等ほうとう・般若等はんによの調ちやうじゆく熟よくに依よつ

て還かえつて華嚴經けこんきやうに入いらしむ、此これを今見こんけんの法華經ほけきやうと名なづく、大陣だいじん

を破やぶるに余殘よざん・堅けんからざる等ごの如ごとし、然しかれば實じつに華嚴經けこんきやう・法華經ほけきやう

に勝すぐれたり等と云云、本朝ほんちやうに於おて勤操等きんそうに値あいて此この義ぎを習學しゅうがく

す後に天台・真言を学すと雖も旧執改まらざるが故に此の義を
存するか、何に況や華嚴經・法華經に勝るの由は陳隋より已前・
南三・北七・皆此の義を存す、天台已後も又諸宗此の義を存せ
り但だ弘法一人に非ざるか、但し澄觀・始見今見の文に依つて
華嚴經は法華經より勝ると料簡する才覚に於ては天台智者大師
・涅槃經の「是經出世乃至如法華中」等の文に依つて法華・涅槃
齊等の義を存するのみに非ず、又勝劣の義を存するは此の才覚
を學びて此の義を存するか此の義若し僻案ならば空海の義も又
僻見なる可きなり、天台・真言の書に云く法華經と大日經とは
広略の異なり、略とは法華經なり、大日經と齊等の理なりと
雖も印・真言之を略する故なり、広とは大日經なり、極理を説
くのに非ず印・真言をも説く故なり、又法華經と大日經とに

同劣の二義有り、謂く・理同事劣なり、又二義有り一には大日經だいにちきよう

は五時の撰なり是れ与の義なり、二には大日經だいにちきようは五時の撰しょうに

非ず是れ奪の義なり、又云く法華經は譬えば裸形の猛者の如しごと

大日經は甲冑を帶せる猛者なり等と云云、又云く印・真言無きしんごん

は其の仏を知る可からず等と云云。

日蓮不審して云く、何を以て之を知る、理は法華經と大日經だいにちきよう

と齊等なりと云う事を、答えて云く疏と義釈並に慈覺・智証等のちしょう

所釈に依るなり。

求めて云く此等の三蔵大師等は又何を以て之を知るや・理は

齊等の義なりと、答えて云く三蔵大師等をば疑う可からず等と

云云、難じて云く、此の義・論義の法に非ざる上、仏の遺言に違背いはい

す慥に經文を出す可し、若し經文無くんば義分無かる可し如何、いかん

答ういぎきょう威儀形色經・瑜祇經・觀智儀軌等なり、文は口伝べす可し、問

うて云くい法華經に印・真言しんごんを略すとはきやうけ仏よりか經家よりかやくしや訳者よ

りか、答えて云く・或はある仏と云い・或はある經家と云い・或はある訳者と

云うなり、不審ふしんして云くい仏より真言・印を略して法華經と

大日經と理同事勝の義之有これありといわば此の事何れの經文ぞや、

文証もんしやうの所出しよしゆつを知らず我意がいの浮言うかれごとならば之これを用もちゆ可べからず、

若し經家・訳者きやうけより之これを略すといわばぶつせつ仏説おいに於ては何ぞ理同事勝

の釈しきを作る可べきや、法華經と大日經とはぜんたいさい全躰よ齊よなり能よく能よく

子細しさいを尋たずぬ可べきなり。

私ひそかに日蓮云く、威儀形色經・瑜祇經等の文ごとの如ごとくばぶつせつ仏説おいに於て

は法華經に印・真言しんごんあ有るか、若しも爾しからば經家・訳者やくしや之を略せるが、

六波羅蜜經の如ごときは經家之を略す、旧訳くやくの仁王經にんのうきやうの如ごときはやくしや訳者

これを略せるか、若し爾らば天台・真言の理同事異の釈は經家並に
やくしゃ 訳者の時より法華經・大日經の勝劣なり、全く仏説の勝劣に
あら 非ず此れ天台・真言の極なり、天台宗の義勢才覚の爲に此の義
を難ず、天台・真言の僻見此くの如し、東寺所立の義勢は且く
これを置く僻見眼前の故なり、抑天台・真言宗の所立・
りどうじしよう 理同事勝に二難有り、一には法華經と大日經と理同の義其の文
ぜんここれ 全く之無し、法華經と大日經と先後如何、既に義釈に二經の
前後之を定め畢つて法華經は先き大日經は後なりと云へり、
もしか 若し爾らば大日經は法華經の重説なる流通なり、一法を兩度
これを説くが故なり若し所立の如くば法華經の理を重ねて之を説
だいにちきよう くに大日經と云う、然れば則ち法華經と大日經と敵論の時は
だいにちきよう 大日經の理之を奪つて法華經に付く可し、但し大日經の得分は

但・印しんこん真言計りなり、印契いんけいは身業しんごう・真言しんこんは口業くごうなり身口しんくのみにし

て意なく無くば印・真言しんこん有る可べからず、手口等を奪つて法華經に付け

なば手なく無くして印を結び口なく無くして真言しんこんを誦じゆせば虚空こくうに印・真言しんこん

を誦結じゆけつす可べきか如何いかん、裸形らぎようの猛者もさと甲冑かつちゆうを帶せる猛者もさとの譬たとえの

事、裸形らぎようの猛者もさの進んで大陣だいじんを破ると甲冑かつちゆうを帶せる猛者もさの退しりぞい

て一陣いちじんをも破らざるとは何れいずれが勝るや、又猛者もさは法華經ほけきようなり

甲冑かつちゆうは大日經だいにちきようなり、猛者もさ無くんば甲冑かつちゆう何いずれの詮これあか之有らん此れ

は理同りどうの義なんを難なんずるなり、次に事勝じしようの義なんを難なんぜば法華經ほけきようには印・

真言しんこん無く大日經だいにちきようには印・真言しんこん之有りと云云、印契いんけい真言しんこんの有無うむに

付て二經しいうれつの勝劣しょうれつを定むるに大日經だいにちきように印・真言しんこん有つて法華經ほけきように

之これむきゆえ無き故に劣ると云わば、阿含經あこんきようには世界せかい建立こんりゆう賢聖けんせいの地位こ是れ

分明ぶんみようなり、大日經だいにちきようには之これな無し、彼の經あに有る事が此の經あに無き

を以て勝劣を判ぜば大日經は阿含經より劣るか、雙觀經等には四十八願是れ分明なり大日經には之無し、般若經には十八空是れ分明なり大日經には之無し、此等の諸經に劣ると云う可きか、又印・真言無くんば仏を知る可からず等と云云、今反詰して云く理無くんば仏有る可からず、仏無くんば印契真言一切徒然と成るべし。

彼難じて云く、賢聖並に四十八願等をば印・真言に対す可からず等と云云、今反詰して云く最上の印真言之無くば法華經は大日經等よりも劣るか、若し爾らば法華經には二乗作仏・久遠実成・之有り大日經には之無し印真言と二乗作仏久遠実成とを対論せば天地雲泥なり、諸經に印真言を簡わざるに大日經に之を説いて何の詮か有る可きや、二乗若し灰断の執を改めずんば

印・真言も無用なり、一代の聖教に皆二乗を永不成仏と簡い

したが しんごん むよう いちだい しようきよう みなにじよう ようふじようぶつ きら

随つて大日経にも之を隔つ、皆成仏までこそ無からめ三分が二

これ だいにちきよう これ へだ じようぶつ こそ 無からめ 三分が二 およ

之を捨て百分が六十余分得道せずんば仏の大悲何かせん、凡そ理

さんぜんこれあ じようぶつ とくごう だいひ およ

の三千之有つて成仏すと云う上には何の不足か有る可き成仏に

おい あ じようぶつ ふそく あ べ じようぶつ

於ては☆なる仏・中風の覺者は之有る可からず、之を以て案ずる

しんごん きも しよきよう しじようしやうかく むね

に印・真言は規模無きか、又諸経には始成正覺の旨を談じて

さんじんそうそく むし こぶつ あらわ ほんむこんぬ とがあれ だいにちによらい

三身相即の無始の古仏を顕さず、本無今有の失有れば大日如来は

ゆうめいむじつ じゆりようほん むね あらわ しゃくそん しょうぶつ

有名無実なり、寿量品に此の旨を顕す釈尊は天の一月諸仏・

ぼさつ ほんすい じゆりようほん むね あらわ しゃくそん しょうぶつ

菩薩は万水に浮べる影なりと見えたり、委細の旨は且く之を置く。

しんごんなく きとうあ べ ほんすい さいい むね しばらこれ

又印・真言無くんば祈☆有る可からずと云云、是れ又以ての

ほか びやっけん げんざい しょうぶつ ほんすい じようぶつ べ

外の僻見なり、過去・現在の諸仏・法華経を離れて成仏す可か

ほけきよう も っしやうかく たま ほんすい ぎやうじや べ

らず法華経を以て正覺を成じ給う、法華経の行者を捨て給わば

諸仏しよぶつ還かえつて凡夫ほんぶと成り給たまうべし恩を知らざる故なり、又未来の
諸仏しよぶつの中の二乗にじやうも法華經ほけきやうを離れては永く枯木敗種なり、今は
再生さいしやうの華果けかなり、他經たきやうの行者ぎやうじやと相論そうろんを為なす時は華光如來げかうにやらい・
光明如來等こうみやうにやらいは何れの方に付まく可べきや、華嚴經等の諸經しよきやうの仏・
菩薩ぼさつ・人天乃至四惡趣等の衆しゆは皆法華經みなほけきやうに於おいて一念三千・久遠
實成じつじやうの説を聞いて正覺しやうかくを成じやうず可べし何れの方に付まく可べきや、
真言宗等しんこんしゆうと外道並げどうに小乘しやうじやう・權大乘こんだいじやうの行者等ぎやうじやと敵對相論そうろんを
為なすの時は甲乙かうおつ知り難がたし、法華經ほけきやうの行者ぎやうじやに對する時は竜と虎と
師子ししと兎との闘こいの如ごとく諍論じやうろん分絶ぶんぜつえたる者なり、慧亮腦えりやうを破やぶり
し時しだい・次第位しだいに即すなはち相応加持そうおうかじする時・真濟しんざいの惡靈あくりやう伏あせらるる等
是これなり、一向いっかう・真言しんこんの行者ぎやうじやは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやに劣おとれる証拠しやうこ是なり、
問いうて云いく義釈ぎしやくの意いは法華經ほけきやう・大日經だいにちきやう共に二乗作仏にじやうさぶつ・久遠實成くおんじつじやう

を明あきらかすや如何いかん、答えて云く共に之これを明あきらかす、義釈ぎしゃくに云く「此の經の心この実相じつそうは彼の經の諸法実相しよほうじつそうなり」と云云、又云く「本初ほんじよは是れ壽量じゆりようの義なり」等と云云。

問うて云く華嚴宗けこんしゆうの義いに云く華嚴經けこんきようには二乗作仏にじようさぶつ・久遠実成くおんじつじよう之これを明あきらかす、天台宗てんだいしゆうは之これを許さず、宗論しゅうろんは且く之これを置く人師にんしを捨てて本經ほんきようを存せば華嚴經けこんきように於ては二乗作仏にじようさぶつ・久遠実成くおんじつじようの相似そうじの文これあ之いえど有りと雖も実には之これな無し、之を以て之を思うに義釈ぎしゃくには大日經だいにちきように於て二乗作仏にじようさぶつ・久遠実成くおんじつじようを存すと雖も実には之これむき無きか如何いかん、答えて云く華嚴經けこんきようの如く相似そうじの文これあ之いえど有りと雖も実義じつぎ之これむき無きか、私ひそに云く二乗作仏にじようさぶつ無くば四弘誓願しぐせいがん満足まんぞくす可べからず、四弘誓願しぐせいがん満たみずんば又別願べつがんも満みす可べからず、總別そうべつの二願にがん満みせずんば衆生しゆじようの成仏じやうぶつも有がり難がきか能よく能よく意得いこううべ可べし云云。問うて云く

大日經の疏に云く大日如来は無始無終なり遙に五百塵点到に勝れ
たりと如何、答う毘盧遮那の無始無終なる事・華嚴・浄名・
般若等の諸大乘經に之を説く独り大日經のみに非ず、問うて
云く若し爾らば五百塵点是際限有れば有始有終なり無始無終は
際限無し、然れば則ち法華經は諸經に破せらるるか如何、答え
て云く他宗の人は此の義を存す天台一家に於て此の難を会通する
者有り難きか、今日大日經並に諸大乘經の無始無終は法身の
無始無終なり三身の無始無終に非ず、法華經の五百塵点是諸
大乘經の破せざる伽耶の始成之を破りたる五百塵点なり、
大日經等の諸大乘經には全く此の義無し、宝塔の涌現・地涌
の涌出・弥勒の疑・寿量品の初の三誠四請・弥勒菩薩領解の
文に「仏・希有の法を説きたもう昔より未だ曾つて聞かざる所な

り」等の文これなり、大日經六卷並に供養法の卷金剛頂經・
蘇悉地經等の諸の真言部の經の中に未だ三止四請・三誠四請・
二乗の劫国名号・難信難解等の文を見ず。

問うて云く五乗の真言如何、答う未だ二乗の真言を知らず四諦
・十二因縁の梵語のみ有るなり、又法身平等に会すること有ら
んや。

問うて云く慈覺・智証等理同事勝の義を存す争か此等の大師等
に過ぎんや、答えて云く人を以て人を難ずるは仏の誠なり何ぞ
汝なんじ仏の制誡に違背するや但經文を以て勝劣の義を存す可し、
難じて云く末学の身として祖師の言に背かば之を難ぜざらんや、
答う末学の祖師に違する之を難ぜば何ぞ智証・慈覺の天台・
妙樂に違するを何ぞ之を難ぜざるや、問うて云く相違如何、答

えて云く天台妙樂の意は已今当の三説の中に法華經に勝れたる
經之れ有る可からず、若し法華經に勝れたる經之有りといわば一
宗の宗義之を壞る可きの由之を存す、若し大日經・法華經に
勝るといわば天台・妙樂の宗義忽に破る可きをや。

問うて云く天台・妙樂の已今当の宗義証拠經文に有りや、答

えて云く之れ有り法華經・法師品に云く「我が所説の經典は

無量千万億已に説き今説き当に説かん而も其の中に於て此の

法華經最も為れ難信難解なり」等と云云、此の經文の如くんば

五十余年の釈迦所説の一切經の内には法華經は最第一なり、難

じて云く眞言師の云く法華經は釈迦所説の一切經の中に第一な

り、大日經は大日如来所説の經なりと、答えて云く釈迦如来よ

り外に大日如来閻浮提に於て八相成道して大日經を説けるか

一、六波羅蜜經ろくはらみつぎょうに云いく過去かこ・現在げんざい並ならに釈迦牟尼しやかむに佛ぶつの所說しよせつの諸經しよきよう

を分ちて五藏ごそうと為なし其その中の第五の陀羅尼藏だらにそうは眞言しんごんなりと眞言しんごんの

經しよかによらい・釈迦しよせつ如來あらの所說しよせつに非あらずといわば・經文きやうもんに違いす是こゝ二、が「我所說しよせつ

きやうてん

經典きやうてん」等の文は釈迦如來しよかによらいの正直捨方便しやうじきしやほうべんの說だいにちによらいなり大日如來だいにちによらいの

証しやうみようふんじん明分身しよぶつこうちやうぜつそうの諸佛しよぶつ廣長舌相きやうもんの經文きやうもんなり是三、五佛ごぶつの章しよぶつ盡ことごとしく諸佛しよぶつ

みなほけききようを第一だいいちなりと説とき給たまう是四、もつこれ「要のたまを以もつて之のたまを言にわば如來によらい

皆いっさい法華經しやうを第一だいいちなりと説とき給たまう是四、お「要せんじけんせつを以せんて之しよきようを言だいいちわば如來だいいち

の一切きやうもんの所有ごとの法ほけき乃至しよきよう皆しよきよう此しよきようの經しよきように於おて宣示顯說せんじけんせつす」等と云云、此

の經文きやうもんの如ごとくならば法華經ほけきは釈迦所說しよかにしよせつの諸經しよきようの第一だいいちなるのみに

非あらず、大日如來だいにちによらい・

十方無量諸佛じゆつぽうむりやうしよぶつの諸經しよきようの中に法華經ほけき第一だいいちなり、此いの外いちぶつ一佛い・二佛しよきよう

の所說しよせつの諸經しよきようの中に法華經ほけきに勝すぐれたるの經これあ之しよきよう有しよきようりと云しんわば信用しんよう

す可べからず是五、大日經だいにちきよう等の諸の眞言經しんごんきようの中に法華經ほけきに勝すぐれた

きようもんこ

る由の經文之れ無し是六、仏より外の天竺・震旦日本国の論師・

人師の中に天台大師より外の人師の所釈の中に一念三千の名目

之無し、若し一念三千を立てざれば性惡の義之無し性惡の義

之無くんば仏・菩薩の普現色身・不動愛染等の降伏の形・十界

の曼荼羅・三十七尊等・本無今有の外道の法に同じきか是七。

問うて云く七義の中に一一の難勢之有り然りと雖も六義は且く

之を置く第七の義如何、華嚴の澄觀・真言の一行等皆性惡の義

を存す何ぞ諸宗に此の義無しと云うや、答えて云く華嚴の澄觀

・真言の一行は天台所立の義を盗んで自宗の義と成すか、此の

事余処に勘えたるが如し、問うて云く天台大師の玄義の三に云く

「法華は衆經を總括す乃至舌口中に爛る人情を以て彼の大虚を

局ること莫れ」等と云云、釈籤の三に云く「法華宗極の旨を了

せずして声聞しょうもんに記しるする事相じそうのみ華嚴けこん・般若はんにやの融通無礙ゆうづうむげなるに
如しかずと謂おもう諫かんぎよう 曉さうすれども止まず舌の爛ただれんこと何なんぞ疑うたがわん、
乃ない至しい已今当いこんとうの妙茲ここに於おいて固まよく迷いえり舌爛ただれて止まざるは猶なお為これ
華報かほうなり謗法ほうぼうの罪苦長劫ざいくちようこうに流ながる」等と云云、若もし天台てんだい・妙樂みょうらくの
釈実しやくじつならば南三なんざん・北七ほくひち並に華嚴けこん・法相ほつそう・三論さんろん・東寺とうじの弘法こうぼう等・舌
爛ただれんこと何の疑うたが有あらんや、乃至苦流長劫ないしくりゆうちようこうの者なるか、是は
且しばら之これを置おく慈覺じかく・智証ちしよう等の親まのり此このの宗義しゅうぎを承うけたる者・法華經ほけきよう
は大日經だいにくきようより劣ひとの義存そんす可べし、若もし其そのの義ならば此の人人ひとびとの
「舌爛口中苦流長劫ぜつらんくちゆうくりゆうちようこう」は如何いかん、答こたえて云いく此の義は最上さいじようの難なんの
義くなり口伝くでんに存ぞんり云云。

文永元年甲子七月二十九日ぶんえいがんねんきのえね之これを記しるす。

日蓮にちれん

◆ 一四

真言七重勝劣事 しんごん しやうれつ

文永七年 ぶんえい 四十九歳御作 与富木常忍 ときじょうにん

128P

法華・大日二經の七重勝劣の事。 ほっけ だいにち しやうれつ

尸那・扶桑の人師・一代聖教を判ずるの事。 しな ふそう にんし いちだいしやうきやう

鎮護国家の三部の事。 ちんここつか

内裏に三宝有り内典の三部に当るの事。 だいり さんぽう ないてん

天台宗に帰伏する人人の四句の事。 てんだいしゆう きふく ひとびと

今經の位を人に配するの事。 こんきやう

三塔の事。

日本国仏神の座席の事。 にほんこくぶっしん ざせき

法華・大日二經の七重勝劣の事。 ほっけ だいにち しやうれつ

いこんとうだいいち
已今当第一

ほんもんだいいち
本門第一

ほけきようだいいち
法華經第一

やくおう なんじ
「藥王今汝に告ぐ・諸經の中に於いて最も其の上

に在り」

しゃくもん
迹門第二

ねはんぎよう
涅槃經第二 「是經出世」

むりようぎよう
無量義經第三 「次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説

く・眞実甚深・眞実甚深」

けこんぎよう
華嚴經第四

はんによきよう
般若經第五

そしつちきよう
蘇悉地經第六 上に云く「三部の中に於て此の經を王と為す」、

いわ なおじようじゆ
中に云く「猶成就せずんば当に此の法を作す

けつじよう
べし決定として成就せん、所謂乞食・精勤・

念誦・大恭敬・巡八聖跡・礼拝行道なり、・或は復大

般若經七遍・或は一百遍を転読す、下に云く

「三時に常に大乘般若等の經を讀め」

大日經第七 三国に未だ弘通せざる法門なり。

尸那・扶桑の法師一代聖教を判ずるの事

華嚴經第一

涅槃經第二

三百六十余人光宅を以て長と為す。

法華經第三

般若經第一

法華經第一

涅槃經第二

南北の義 晋・齊等五百余年・

吉蔵の義 梁代の人なり。

南岳の御弟子なり。

天台智者大師の御義 陳隋二代

の人なり。

けこんきよう

華嚴經第三

じんみつ だいいち

深密經第一

ほけきよう

法華經第二

ぎよう

御宇の人なり。

はんによきよう

般若經第三

けこんきよう だいいち

華嚴經第一

ほけきよう

法華經第二

そくてんこうごう

則天皇后の御宇の人なり。

ねはんきよう

涅槃經第三

だいにちきよう だいいち

大日經第一

ほけきよう

法華經第二

みようらく

妙楽等之を用う。

これ

げんじよう

玄奘の義

とう

唐の始め太宗の

ほうぞう

法蔵

ちようかん

澄觀等の義

とう

唐の半ば

ぜんむい

善無畏

ふくう

不空等の義

とう

唐の末

げんそう

玄宗

ぎよう

の御宇の

人なり。

しよきよう

諸経第三

ほけきようだいichi

法華経第一

ねはんぎよう

涅槃経第二

さが

・嵯峨の御代の人、

しよきよう

諸経第三

だいichiちきようだいichi

大日経第一

けこんきよう

華嚴経第二

とうじ こうや

人、東寺・高野等なり。

ほけきよう

法華経第三

だいichiちきようだいichi

大日経第一

ほけきよう

法華経第二

かんかく
感覚の義

ぜんむい
善無畏を以て師と為す、
じんみょう
仁明・

でんぎよう おんぎ

伝教の御義人王五十代桓武の御宇及び平城

かんむ

桓武の御宇及び平城

ぎようおよ

比叡山延暦寺なり。

へいじよう

比叡山延暦寺なり。

ひえいざんえんりやく

比叡山延暦寺なり。

こうぼう

弘法の義

人王五十二代嵯峨・淳和二代の

さが

嵯峨・淳和二代の

じゅんな

淳和二代の

の

文徳・清和の三代、叡山講堂総持院なり。

ふんとく
せいわ
えいざんこうどうそうじいん

諸経第三

智証之に同ず、園城寺なり。

ちしょう
おんじょうじ

鎮護国家の三部の事

法華經

ほけきょう

密嚴經

みつこんきょう

不空三蔵

ふくうさんそう

大曆に法華寺に之を置く、大曆

だいいき

ほつけじ

これ

だいいき

二年護摩寺を改めて法華寺を立つ、中央に法華經・

ごまでら

あらた

ほつけじ

ほけきょう

仁王經

にんのうきょう

脇士に両部の大日なり。

きょうじ

だいにち

法華經・

ほけきょう

浄名經

じょうみょうきょう

聖徳太子

しょうとくたいし

人王三十四代推古天皇の御宇、

すいこてんのう

ぎょう

四天王寺に之を置く摂津の国・難波郡・仏法最初

してんのう

これ

せつつ

なにわぐん

ぶつぽうさいしよ

勝鬘經

しょうまん

の寺なり。

法華經

ほけきょう

金光明經

こんこうみょうきょう

伝教大師

でんきょうだいし

人王五十代桓武天皇の御宇、

かんむてんのう

ぎょう

ひえいざん えんりやく
比叡山延暦寺止観院に之を置く、年分得度者一人は

にんのうきよう

仁王経

しやな
遮那業一人は止観業なり。

だいにちきよう
大日経

こんごう

金剛項経

じかくだいし
慈覚大師

じんみようてんのう
人王五十四代仁明天皇の御宇、

ひえいざん

比叡山東塔の西総持院に之を置かる、御本尊は大日

だいにち

そしつちきよう
蘇悉地経

にやらい
如来、金蘇の二疏十四卷安置せらる。

あんち

だいら
内裏に三宝有り内典の三部に当るの事。

さんぽう

ないてん

しんじ
神璽

しるし
国の手駢なり。

ふせく
宝剣 国敵を禦ぐ財なり、平家の乱の時に海に入りて見え

へいけ らん

ず。

ないじどころ

てんしょうだいじん
内侍所 天照太神影を浮かべ給う神鏡と云う、左馬頭頼茂

たま

め ず よりしげ

しやうしつ
に打たれて焼失す。

てんだいしゅう きふく
天台宗に帰伏する人人の四句の事

一に身心俱に移る

しんしんとも

さんろん かじょうだいし
三論の嘉祥大師

けこん ちようかんほつし
華嚴の澄観法師

しんこん ぜんむい ふくろう
真言の善無畏・不空

二に心移りて身移らず

けこん ほうぞう
華嚴の法蔵

ほっそう じおん
法相の慈恩

三に身移りて心移らず

じかく
慈覚

ちしょうだいし
智証大師

こうほうだいし
弘法大師

四に身心俱に移らず

しんしんとも

こんきよう
今經の位を人に配するの事

せいししょうぐん かまくら
征夷將軍 鎌倉殿

むりようぎきよう
無量義經

せつしょう
摂政

ねはんぎよう
涅槃經

院

天子てんし

迹門しやくもん十四品

本門ほんもん十四品

三塔の事

中堂ちゅうどう

伝でんぎようだいし教大師の御建立こんりゆう

止観しかん・遮那しやなの二業を置く、

御本尊ごほんそんは薬師やくし如来にやらいなり、延暦年中えんりやくの御建立こんりゆう・王城の

丑寅に当る、桓武天皇かんむてんのうの御崇重すうちよう、

天子てんしほんめい本命の道場どうじようと云う。

止観しかん院 本院

天竺てんじくには靈鷲山りようじゆうせんと云い震旦しんたんには

天台てんだい山と云い扶桑ふそうには比叡山ひえいざんと云う、三国伝灯

の仏法ぶつぽう此に極まれり。

講堂こうどう 慈覚大師じかくだいしの建立こんりゆう 総持院そうじいん 鎮護国家ちんここっかの道場どうじようと云う、御本尊ごほんそん

は大日如来だいにちにやらいなり、承和年中じやうわの建立こんりゆう、止観院しかんの西

に真言しんごんの三部を置き是これを東

塔と云うなり、伝教でんぎょうの御弟子第三の座主ざすなり。

西塔

釈迦しゃか堂 宝幢院ほうどういん 円澄えんちようの建立こんりゆう

伝教でんぎょうの御弟子なり。

観音堂かんのん 横川 慈覚じかくの建立こんりゆう

楞嚴院りようこんいん

日本国にほんこく仏神ぶつしんの座席ざせきの事

問う吾わが朝あしたには何れの仏いずれを以て一の座と為し何れの法いずれを以て一の座と為し何れの僧しんごんを以て一の座と為すや、答う観世音菩薩かんぜおんぼさつを以て一の座と為し真言しんごんの法もつを以て一の座と為し東寺とうじの僧もつを以て一の座と為すなり。

問う日本にほんには人王三十代に仏法ぶつぽう渡り始めて後は山寺種種しゅじゅなりと

雖も延暦寺を以て天子本命の道場と定め鎮護国家の道場と定
む、然して日本最初の本尊釈迦を一の座と為す然らずんば延暦
寺の薬師を以て一の座と為すか、又代代の帝王起請を書いて山の
弟子とならんと定め給ふ故に法華經を以て法の一の座と為し
延暦寺の僧を以て一の座と為す可し、何ぞ仏を本尊とせず菩薩を
以て諸仏の一の座と為すや、答う尤も然る可しと雖も慈覺の御時
叡山は真言になる東寺は弘法の真言を建立す故に共に真言師な
り、共に真言師なるが故に東寺を本として真言を崇む真言を崇む
る故に觀音を以て本尊とす真言には菩薩をば仏にまされりと談ず
るなり、故に内裏に毎年正月八日の内道場の法・行わる東寺の
一の長者を召して行わる若し一の長者暇有らざれば二の長者
行うべし三までは及ばす可からず云云、故に仏には觀音・法には

真言・僧には東寺法師なり、比叡山をば鬼門の方とて之を下す
譬えば武士の如しと云うて崇めざるなり故に日本国は亡国となら
んとするなり。

問う神の次第如何、答う天照太神を一の座と為し八幡大菩薩
を第二の座と為す是より已下の神は三千二百三十二社なり。

◆一五 真言天台勝劣事

文永七年四十九歳御作

1

34p

問う何なる経論に依つて真言宗を立つるや、答う大日経・
金剛頂経・蘇悉地経並びに菩提心論此の三経一論に依つて
真言宗を立つるなり、問う大日経と法華経と何れか勝れたるや、

答う法華經は・或は七重・或いは八重の勝なり大日經は七八重

の劣なり、難じて云く驚いて云く古より今に至るまで法華より

真言劣ると云う義都て之無し之に依つて弘法大師は十住心を立

てて法華は真言より三重の劣と釈し給へり覺鑒は法華は真言の

履取に及ばずと釈せり打ち任せては密教勝れ顯教劣るなりと

世挙つて此を許す七重の劣と云う義は甚珍しき者をや、答う

真言は七重の劣と云う事珍しき義なりと驚かるるは理なり、

所以に法師品に云く「已に説き今説き當に説かん而も其の中に

於て此の法華經は最も為れ難信難解なり」云云、又云く「諸經

の中に於て最も其の上に在り」云云、此の文の心は法華は一切經

の中に勝れたり此其の一、次に無量義經に云く「次に方等十二部

經摩訶般若・華嚴海空を説く」云云、又云く「真實甚深甚深甚深

なり」云云、此の文の心は無量義經は諸經の中に勝れて甚深の中にも猶甚深なり然れども法華の序分にして機もいまだなましき故に正説の法華には劣るなり此其二、次に涅槃の九に云く「是の經の世に出ずるは彼の果実の利益する所多く一切を安樂ならしむるが如く能く衆生をして仏性を見せしむ、法華の中の八千の聲聞記☆を得授するが如く大果実を成じ秋收冬蔵して更に所作無きが如し」云云、簸の一に云く「一家の義意謂く二部同味なれども然も涅槃尚劣る」云云、此の文の心は涅槃經も醍醐味・法華經も醍醐味同じ醍醐味なれども涅槃經は尚劣るなり法華經は勝れたりと云へり、涅槃經は既に法華の序分の無量義經よりも劣り醍醐味なるが故に華嚴經には勝たり此其三、次に華嚴經は最初頓説なるが故に般若には勝れ涅槃經の醍醐味にはり此其四、次に

蘇悉地經そしつちきように云く「猶なほ成ぜざらん者は・或あるは復また大般若經はんにゃきようを転読てんどくすること七遍」云云、此の文の心は大般若經はんにゃきようは華嚴經けこんきようには劣りそしつちきよう蘇悉地經そしつちきようには勝ると見えたり此其五、次に蘇悉地經そしつちきように云く「三部の中に於おいて此の經を王と為なす」云云、此の文の心は蘇悉地經そしつちきようは大般若經はんにゃきようには劣り大日經だいにちきよう・金剛頂經こんごうちようきようには勝ると見えたり此其六、此の義を以て大日經だいにちきようは法華經ほけきようより七重の劣とは申もうすなり法華の本門ほんもんに望ほつむれば八重の劣とも申もうすなり。

次に弘法大師こうぼうだいしの十住じゅうじゅう心を立てて法華ほつは三重劣ると云う事は安然あんねんの教時義きようじぎと云う文に十住じゅうじゅう心の立たてを破はして云く五つの失とが有りおもえら謂く一には大日經だいにちきようの義釈ぎしやくに違いする失とが・二には金剛頂經こんごうちようきように違いする失とが・三には守護經しゆごに違いする失とが・四には菩提心論ぼだいしんろんに違いする失とが・五には衆師しゆしに違いする失とがなり、此の五つの失とがを陳ちんずる事無ことなくして

つまり給へり、然る間法華は真言より三重の劣と釈し給へるが大
なる僻事なり謗法に成りぬと覚ゆ、次に覚鑠の法華は真言の
履取に及ばずと舍利講の式に書かれたるは舌に任せたる言なり
証拠無き故に専ら謗法なる可し、次に世を挙げて密教勝れ顕教
劣ると此を許すと云う事は偏に弘法を信じて法を信ぜざるな
り、所以に弘法をば安然和尚五失有りと云うて用いざる時は世間
の人は何様に密教勝ると思ふ可き抑密教勝れ顕教劣るとは
何れの経に説きたるや又証拠無き事を世を挙げて申すなり、猶
難じて云く大日経等は中央大日法身無始無終の如来法界宮
・或は色究竟天他化自在天にして菩薩の為に真言を説き給へり
法華は釈迦応身靈山にして二乗の為に説き給へり・或は釈迦は
大日の化身なりとも云へり、成道の時は大日の印可を蒙て・字

だいにちによらい

の觀を教えられ後夜に仏になるなり大日如来だにもましまさずば

いかでしゃかぶつ

争か釈迦仏も仏に成り給うべき此等の道理を以て案ずるに法華よ

しんこんすぐ

り真言勝れたる事は云うに及ばざるなり、答て云く依法不依人の

ゆえ

はじ

きようせつ

およ

よ

だいにちきよう

しゃか

故にい恥やうにも経説のやうに依る可きなり、大日経は釈迦の

だいにち

と

たま

ゆえ

こんごうみよう

さいしゅうおうきよう

しゃか

大日となつて説き給へる経なり故に金光明と最勝王経との

だいいち

しゃかむに

こんごうちようきよう

だいいち

第一には中央釈迦牟尼と云へり又金剛頂経の第一にも中央

しゃかむにぶつ

だいにち

しゃか

ゆえ

釈迦牟尼仏と云へり大日と釈迦とは一つ中央の仏なるが故に

だいにちきよう

しゃか

だいにち

大日経をば釈迦の説とも云うべし大日の説とも云うべし、又

びるしやな

てんじく

ことばだいにち

ことば

しゃか

毘盧遮那と云うは天竺の語大日と云うは此の土の語なり釈迦

むに

びるしやな

だいにち

しゃか

いみよう

牟尼を毘盧遮那と名づくとも云う時は大日は釈迦の異名なり

しかのみならずくやく

るしやな

しんやく

びるしやな

加之旧訳の経に盧舎那と云うをば新訳の経には毘盧遮那と云

しか

しんやく

びるしやなほっしん

くやく

るしやな

う然る間・新訳の経の毘盧遮那法身と云うは旧訳の経の盧舎那

他受用身なり、故に大日法身と云うは法華經の自受用報身にも
およいわんやほけきよう 及ばず況や法華經の法身如来にはまして及ぶ可からず法華經の
自受用身と法身とは真言には分・絶えて知らざるなり法報不分二
三莫弁と天台宗にもきらはるるなり、随つて華嚴經の新訳には
・或は釈迦と称づけ・或は毘盧遮那と称くと説けり故に大日は只
是釈迦の異名なりなにしに別の仏とは意得可きや、次に法身の
説法と云う事何れの經の説ぞや弘法大師の二教論には楞伽經に
依つて法身の説法を立て給へり、其の楞伽經と云うは釈迦の説
にして未顕眞実の権教なり法華經の自受用身に及ばざれば法身
の説法とはいへどもいみじくもなし此の上に法は定んで説かず報
は二義に通ずるの二身の有るをば一向知らざるなり、故に大日
法身の説法と云うは定んで法華の他受用身に当るなり、次に大日

無始無終と云う事既に「我昔道場に坐して四魔を降伏す」とも
のべ
宣べ又「四魔を降伏し六趣を解脱し一切智智の明を満足す」等云
云、此等の文は大日は始て四魔を降伏して始て仏に成るとこそ見
えたれ全く無始の仏とは見えず、又仏に成りて何程を経ると説か
ざる事は権經の故なり実經にこそ五百塵点等をも説きたれ、次
に法界宮とは色究竟天か又何れの処ぞや色究竟天・或は他化
自在天は法華宗には別教の仏の説処と云うていみじからぬ事に
申すなり又菩薩の為に説くとも高名もなし例せば華嚴經は一向
菩薩の為なれども尚法華の方便とこそ云はるれ、只仏出世の本意
は仏に成り難き二乗の仏に成るを一大事とし給へりされば大論に
は二乗の仏に成るを密教と云ひ二乗作仏を説かざるを顕教と云
へり、此の趣ならば真言の三部經は二乗作仏の旨無きが故に還つ

て顯教けんきょうと云ひ法華ほっけは二乗作仏にじょうさぶつを旨むねとする故ゆえに密教みつぎょうと云う可べきな
り、随したがつて諸仏秘密しよぶつひみつの藏くらひと説しければ子細しさいなし世間せけんの人密教勝みつぎようまさると
云いうはいかやうに意得こころうたるや但ただし「若もし顯教けんきょうに於おいて修行しゆぎようする者
は久くく三大無数劫むしゅこうを經ふ」等と云えるは既すでに三大無数劫むしゅこうと云う故ゆえに
是三藏四阿含經さんぞう あこんきようを指さして顯教けんきょうと云いいて權大乘こんだいじようまでは云いわぬ況いはんやや
法華実大乘ほっけじつだいじようまでは都すべて云いわざるなり。

次に釈迦しゃかは大日だいにちの化身けしん☆字おんじを教しえられてこそ仏ぶつには成なりりたれと
云いう事こと此こは偏ひとえに六波羅蜜經ろくはらみつぎようの説しなり、彼の經きん一部十卷いちぶじゆくわんは是これ釈迦しゃか
の説しなり大日だいにちの説しには非あらず是これ未顯真実みけんしんじつの權教こんきようなり随したがつて成道じようどう
の相さんぞうも三藏教さんぞうの教主きようしゆの相さうなり六年苦行くぎようの後の儀式ぎしなるをや、彼
の經説きんせつの五味てんだいを天台てんだいは盗とみ取とつて己おのれが宗しゆに立たつると云いう無実むじつを
云いい付くけらるるは弘法大師こうぼうだいしの大おほなる僻事ひがごとなり、所以ゆえんに天台てんだいは

涅槃經に依つて立て給へり全く六波羅蜜經には依らず況んや天台
死去の後百九十年あつて貞元四年に渡る經なり何として天台は
見給うべき不実の過弘法大師にあり、凡そ彼の經説は皆未顕
真実なり之を以て法華經を下さん事甚だ荒量なり、猶難じて
云く如何に云うとも印・真言・三摩耶尊形を説く事は大日經程
法華經には之無く事理俱密の談は真言ひとりすぐれたり、其の上
真言の三部經は釈迦一代五時の摂属に非ずされば弘法大師の
宝鑰には釈摩訶衍論を証拠として法華は無明の辺域・戲論の法と
釈し給へり・爰を以て法華劣り真言勝ると申すなり、答う凡そ
印相尊形は是れ權經の說にして実教の談に非ず設い之を説く
とも權実大小の差別淺深有るべし、所以に阿含經等にも印相
有るが故に必ず法華に印相尊形を説くことを得ずして之を説か

ざるに非ずあら説くまじければ是これを説かぬにこそ有あれれ法華は只三世たださんぜじゅつぼう

十方の仏の本意ほんいを説いて其形がとあるかうある

とは云う可べからず、例せば世界建立せかいこんりゅうの相を説かねばとて法華ほっけは

俱舎ぐしゃより劣るとは云う可べからざるが如ごとし、次に事理俱密じりぐみつの事・

法華ほっけは理秘密りひみつ・真言しんごんは事理俱密じりぐみつなれば勝まさるとは何いすれれの經に説ける

や抑そもそも法華ほっけの理秘密りひみつとは何いかよう様の事ぞや、法華ほっけの理とは迹門しやくもん・

開権顯実かいこんけんじつの理そか其の理しんごんは真言しんごんには分絶えて知らざる理なり、法華ほっけ

の事とは又久遠実成くおんじつじょうの事なり此の事又真言しんごんになし真言しんごんに云う所

の事理じりは未開會みかいえの権教こんきょうの事理じりなり何なんぞ法華ほっけに勝まさる可べきや、次に

一代五時の撰属しゅうぞくに非ずと云う事こと是れ往古より諍あらそいなり唐決とうけつには

四教しきょう有あるが故ゆえに方等部ほうとうぶに撰せつすと云へり、教時義きょうじぎには一切智智いっさい・

一味いちみの開會かいえを説くが故ゆえに法華ほっけの撰せつと云へり、二義にぎの中に方等ほうとうの撰

と云うは吉き義なり、所以に一切智智・一味の文を以て法華の撰
と云う事甚だいはれなし彼は法開会の文にして全く人開会なし
争か法華の撰と云わるべき、法開会の文は方等・般若にも盛んに
談ずれども法華に等き事なし彼の大日經の始終を見るに四教の
旨具にあり尤も方等の撰と云う可し、所以に開権顯実の旨有らざ
れば法華と云うまじ一向小乗三蔵の義無ければ阿含の部とも云
う可からず、般若畢竟空を説かねば般若部とも云う可からず、
大小四教の旨を説くが故に方等部と云わずんば何れの部とか云
わん、又一代五時を離れて外に仏法有りと云う可からず若し有ら
ば二仏並出の失あらん、又其の法を釈迦統領の国土にきたし
て弘む可からず、次に弘法大師釈摩訶衍論を証拠と為て法華を
無明の辺域戲論の法と云う事はれ以ての外の事なり、釈摩訶衍論

は竜樹りゅうじゆ菩薩ぼさつの造なり、是は釈迦しゃか如来によらいの御弟子おんでしなり争いかでか弟子でしの論
を以もつて師いちだいいちの一代第一おほと仰おほせられし法華經ほけきようを押下くだして戲論けろんの法等と
云べう可しかきや、而そも論めいぶんに其したがの明文めいぶん無く随したがつて彼の論ほうもんの法門べつきようは別教
の法門ほうもんなり権經こんきようの法門ほうもんなり是これえんきよう円教おほに及およばず又実教じつきように非あらず何いかに
してか法華ほつを下べす可そき、其いくばくの上彼の論ちたいこうぼうだいしに幾いくばくの經しんじをか引くらんされ
ども法華經ほけきようを引く事は都すべこれなて之こんろん無し権論ごんろんの故なり、地体弘法大師ちたいこうぼうだいしの
華嚴けこんより法華ほつを下ほつされたるは遙ぶつに仏意ぶつにはくひ違しんじいたる心地しんじな
り、用もちゆべからず用もちゆべからず。

日蓮

◆一六 真言諸宗違目しんこんしよしゆういもく

文永九年五月五十一歳御作ぶんえい

土木殿等の人人御中
ひとびと おんちゅう

日蓮

空に読み覚えよ老人等は具に聞き奉れ早々に御免を蒙らざる事は之を欺く可からず定めて天之を抑うるか、藤河入道を以て之を知れ去年流罪有らば今年横死に値う可からざるか彼を以て之を惟うに愚者は用いざる事なり、日蓮が御免を蒙らんと欲するの事を色に出す弟子は不孝の者なり、敢て後生を扶く可からず、各各此の旨を知れ。

真言宗は天竺より之無し開元の始に善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等・天台大師已証の一念三千の法門を盗んで大日經に入れて之を立て真言宗と号す、華嚴宗は則天皇后の御宇に

之これを始ちむ、澄ちやうかん觀てんだい等天台の十乗の觀かんぼう法を盗くんで華嚴經けこんきやうに入いれて

之これを立たて華嚴宗けこんしやうと号なづす、法相ほっそう・三論さんろんは言いうに足たりらず、禪宗ぜんしやうは梁

の世だるまに達磨大師楞伽經だいまん等を以もつてす大乘だいじやうの空くうの一分いちぶんなり、其その

學者等がくしや大慢だいまんを成なりして教外別伝きやうげべつでん等と称しょうし一切經いっさいきやうを蔑べつじよ如てんます天魔てんまの

所為しよゐなり、淨土宗じやうとしやうは善導ぜんどう等・觀經かんきやう等を見みて一分いちぶんの慈悲じひを起おこし

攝地二論せつちの人師にんしに向むかつて一向專修いっかうせんしやうの義ぎを立たて畢おわんぬ、日本にほんの

法然ほうねん之これをあやまれり天台てんだい・真言しんこん等を以もつて雜行そつぎやうに入いれ末代まつだい不相ふそう應おう

の思おもひを為なして國中おおくわくを誑惑ごうかくして長夜まよひに迷まよわしむ、之これを明あめし

導師どうしは但にちれん日蓮一人ひとりなるのみ。

涅槃經ねはんきやうに云いく「若もし善比丘ぜんびく法はふを壞やぶる者ものを見みて置おいて呵嘖かしやくし駢遺くけん

し拳処こしよせずんば当まさに知しるべし是この人は佛法ぶつぽうの中ちゆうの怨あだなり」等云云、

漢頂章かんちやうしやう安大師あんだいし云いく「佛法ぶつぽうを壞え乱らんするは佛法ぶつぽうの中ちゆうの怨あだなり慈なく無く

して詐り親しむは即ち是れ彼が怨なり彼が為に惡を除くは即ち
是れ彼が親なり」等云云、法然が捨閑閣抛・禪家等が教外別伝・
若し仏意に叶わずんば日蓮は日本国の人の為には賢父なり聖親な
り導師なり、之を言わざれば一切衆生の為に「無慈詐親即是彼
怨」の重禍脱れ難し、日蓮既に日本国の王臣等の為には「為彼除
惡即是彼親」に当れり此の国既に三逆罪を犯す天豈之を罰せざら
んや、涅槃經に云く「爾の時に世尊・地の少しの土を取って之を
抓の上に置いて迦葉に告げて言わく是の土多きや十方世界の地
土多きや、迦葉菩薩・仏に白して言さく世尊抓の上の土は十方
所有の土の比ならざるなり○四重禁を犯し五逆罪を作つて○
一闍提と作つて諸の善根を断じ是の經を信ぜざるものは十方界
所有の地土の如し○五逆罪を作らず○一闍提と作らず善根を断ぜ

ず是くかくの如き等ごとの涅槃經典ねはんきょうを信ずるは抓つめの上の土つちの如しごと」等云云、
経文きょうもんの如くんば当世とうせ・日本国にほんこくは十方じゅうぽうの地土ちどの如くごと日蓮にちれんは抓つめの上
の土つちの如しごと。

法華經ほけきょうに云くいわ「諸もろもろの無智むちの人ひと有つて惡口罵詈あつくめり」等云云、

法滅尽經ほうめつじんきょうに云くいわ「吾われ・般泥☆はつないおんの後ご・五逆濁世ごぎやくじよくせに魔道興盛まどうこうじょうなり魔

沙門しゃもんと作つて吾わが道を壞乱えらんす○惡人あくにん轉うたた多くして海中かいちゅうの沙すなの

如ごとし劫尽くつじんきんとする時とき・日月にちがつ轉うたた短く善者ぜんしや甚はなはだだ少くして若もしは

一若もしは二人ふにん」等云云、又云くいわ「衆魔しゆまの比丘びく・命終みょうじゅうの後ご・精神せいしん

当まさに無沢地獄むじやくじごくに墮おつべし」等云云、今道隆どうりゅうが一党りやうかん・良觀りやうかんが一党

・聖一せいが一党いっとう・日本国にほんこくの一切いっさいの四衆ししゅう等は是この経文きょうもんに当あたるなり、

法華經ほけきょうに云くいわ「仮使たとい劫燒くしょうに乾かれたる草くさを担にない負おいて中なかつに入いつ

て燒やけざらんも亦未またいまだ難がたしとせず我が滅度めつどの後ごに若もし此この經きやうを持も

持もつて燒やけざらんも亦未またいまだ難がたしとせず我が滅度めつどの後ごに若もし此この經きやうを持も

つて一人の爲にも説かん是れ則ち為れ難し」等云云、日蓮は此の
経文に当れり、「諸の無智の人有つて悪口罵詈等し及び刀杖を
加うる者あらん」等云云、仏陀記して云く後の五百歳に法華經の
行者有つて諸の無智の者の為に必ず悪口罵詈・刀杖瓦礫・流罪
・死罪せられん等云云、日蓮無くば釈迦・多宝・十方の諸仏の
未来記は当に大妄語なるべきなり。

疑つて云く汝当世の諸人に勝ることは一分爾る可し真言・
華嚴・三論・法相等の元祖に勝るとは豈に慢過慢の者に非ずや
過人法とは是なり汝必ず無間・大城に墮つ可し、故に
首楞嚴經に説いて云く「譬えば窮人妄りに帝王と号して自ら
誅滅を取るが如し況んや復法王如何ぞ妄りに竊まん因地直から
ざれば果紆曲を招かん」等云云、涅槃經み云く「云何なる比丘か

過人法に墮する○未だ四沙門果を得ず云何んぞ当に諸の世間の人をして我は已に得たりと謂わしむべき」等云云、答えて云く法華經に云く「又大梵天王の一切衆生の父の如く」又云く「此の經は○諸經の中の主なり最も為れ第一なり能く是の經典を受持すること有らん者は亦復是くの如し一切衆生の中に於て亦為れ第一なり」等云云、伝教大師の秀句に云く「天台法華宗の諸宗に勝れたるは所宗の經に拠るが故なり自讃毀他ならず庶くは有智の君子經を尋ねて宗を定めよ」等云云、星の中に勝れたる月・星月の中に勝れたるは日輪なり、小国の大臣は大国の無官より下る傍例なり、外道の五通を得るより仏弟子の小乗の三賢の者の未だ一通を得ざるは天地猶勝る、法華經の外の諸經の大菩薩は法華の名字即の凡夫より下れり何ぞ汝始めて之を驚かん

や教に依つて人の勝劣を定む先ず經の勝劣を知らずんば何ぞ人の高下を論ぜんや。

問うて云く汝法華經の行者為らば何ぞ天汝を守護せざるや、
答えて云く法華經に云く「惡鬼其の身に入る」等云云、
首楞嚴經に云く「修羅王有り世界を執持して能く梵王及び天の帝釈四天と權を請う此の阿修羅は變化に因つて有り天趣の所持なり」等云云。

能く大梵天王・帝釈・四天と戦う大阿修羅王有りて禪宗・
念仏宗・律宗等の棟梁の心中に付け入つて次第に国主国中に
遷り入つて賢人を失う、是くの如き大惡は梵釈も猶防ぎ難きか
何に況んや日本守護の小神をや但地涌千界の大菩薩・釈迦・多宝
・諸仏の御加護に非ざれば叶い難きか、日月は四天の明鏡なり

諸天定めて日蓮を知りたまうか日月は十方世界の明鏡なり諸仏

も定めて日蓮を知りたまうか、一分も之を疑う可からず、但し

先業未だ尽きざるなり日蓮流罪に当れば教主釈尊衣を以て之を

覆いたまわんか、去年九月十二日の夜中には虎口を脱れたるか「必

ず心の固きに仮りて神の守り即ち強し」等とは是なり、汝等

努努疑うこと勿れ決定して疑い有る可からざる者なり、

恐恐謹言。

五月五日

日蓮

花押

此の書を以て諸人に触れ示して恨を残すこと勿れ。

土木殿

◆一七 真言見聞 しんごんけんもん

文永九年七月五十一歳御作 ぶんえい

与三位房日行 ぼう

142P

問う真言亡国とは証文何なる経論に出ずるや、答う法華誹謗
しんごんぼうこく しょうもんいか きょうろん い
しょうほうこうはい
正法向背の故なり、問う亡国の証文之無くば云何に信ず可きや、
ほうほう もちろん も ほうほう ほうこく しょうもん い い い い
答う謗法の段は勿論なるか若し謗法ならば亡国墮獄疑い無し、
お ほうほう ほうぶつ ほうそう さんぼう こ ねはんぎょう
凡そ謗法とは謗仏・謗僧なり三宝一体なる故なり是れ涅槃經の文
なり ここを も つ ほけき よう すなわ いっさい せけん ぶつしゆ
なり、爰を以て法華經には「即ち一切世間の仏種を断ず」と説く
これ すなわ いっせん だい ねはんぎ よう いと と い さい
是を即ち一闡提と名づく涅槃經の一と十と十一とを委細に見る
べ つみ けいち よう あれ ごく せんじん かま せつ しょう ちゅう とう
可きなり、罪に軽重有れば獄に浅深を構えたり、殺生・偷盜
ない し さんぜん せかい しゅじ よう さつ がい とう かつ ごく じょう
等乃至一大三千世界の衆生を殺害すれども等活黒繩等の上七
だい じ ごく むげん お す べ あ び こう いん
大地獄の因として無間に墮つることは都て無し、阿鼻の業因は

きょうろん

經論の掟は五逆・七逆・因果撥無・正法誹謗の者なり、但し

ごぎやく

五逆の中に一逆を犯す者は無間に墮つと雖も一中劫を経て罪を尽

いつかい

して浮ぶ、一戒をも犯さず道心堅固にして後世を願うと雖も法華

そむ

に背きぬれば無間に墮ちて展転無數劫と見えたり、然れば即ち

ほうほう

謗法は無量の五逆に過ぎたり、是を以て国家を祈らんに天下將に

たいへい

泰平なるべしや、諸法は現量に如かず承久の兵乱の時・関東

そ

には其の用意もなし国主として調伏を企て四十一人の貴僧に

おお

仰せて十五壇の秘法を行はる、其の中に守護經の法を紫宸殿にし

ひほう

て御室始めて行わる七日に満ぜし日・京方負け畢んぬ亡国の

げんしょう

現証に非ずや、是は僅に今生の小事なり權教・邪法に依つて

あら

悪道に墮ちん事浅・かるべし。

あくどう

問う權教邪宗の証文は如何既に真言教の大日覺王の秘法は

そくしんじょうぶつ

おうぞう

ゆえ

じょうげ

こ

てんがことごと

即身成仏の奥蔵なり、故に上下一同に是の法に歸し天下悉く大

法を仰ぐ海内を静め天下を治むる事偏に真言の力なり、権教・

じゃほう

いかん

てんが おさ

ひとえ しんこん

しきようがんぞう ほうべん

邪法と云う事如何、答う権教と云う事・四教含藏帶方便の説な

きようもんけんねん

しか

しよきよう

くおん

かく にじよう

る経文顯然なり、然れば四味の諸教に同じて久遠を隠し二乗を

へだ いわ

じんぎようじゅ

しようじようこんきよう

うたがい

隔つ況んや尽形寿の戒等を述べれば小乗権教なる事疑無

し、爰を以て遣唐の疑問に

ごもん

ぜんりんじ

こうしゅう

こくせいじ

ゆいけん

けつばん

し、爰を以て遣唐の疑問に禅林寺の広修・国清寺の維☆の決判

ふんみよう

ほうとうぶ

せつ

うたがい

いわ

きようもん

こんきよう

分明に方等部の撰と云うなり、疑つて云く経文の権教は

しばらこれ

とうけつ

てんだい

せんとく

えんちんだいしこれ

は

且く之を置く唐決の事は天台の先徳・円珍大師之を破す、

だいにちきよう

ほうけ

ななおよ

いわんや じよ

大日経の指帰に「法華すら尚及ばず況や自余の教をや」云云、

すで

そし

しよはん

そむ

べ

いわ

どうり

既に祖師の所判なり誰か之に背く可きや、決に云く「道理前の

ごと

えほう ふえ

ただ

ちしよう

ふしん

如し」依法不依人の意なり但し此の釈を智証の釈と云う事不審な

り、其の故は

そのゆえ

じゅけつしゅう

いわ

も

ほけ

けこん

ねはん

等の經に望めば是れこ摂引門しやういんもんと云へり、広こうしゅう修維しゅうい☆を破はする時は

ほつけなおおよ

じゅけつしゅう

こ

しやういんもん

法華尚及ばずと書き授決集には是れこ摂引門しやういんもんと云つて二義相違そういせ

えんちん

じゅけつしゅう

ちしゅう

あら

じゅけつしゅう

り指帰が円珍の作ならば授決集は智証の釈に非ず、授決集が実

ちしゅう

ならば指帰は智証の釈に非じ、今・此の事を案ずるに授決集が

ちしゅう

てんが

みなこれ

くげ

につき

智証の釈と云う事天下の人皆之を知る上、公家の日記にも之を

の

これ

くげ

につき

これな

載せたり指帰は人多く之を知らず公家の日記にも之無し、此を以

つて彼を思うに後の人作つて智証の釈と号するが能く能く尋ぬ

ちしゅう

よ

よ

たず

たず

たず

たず

たず

たず

可き事なり、授決集は正しき智証の自筆なり、密家に四句の五

じゅうじゅう

じゅけつしゅう

ちしゅう

じひつ

みつ

につき

蔵を設けて十住心を立て論を引き伝を三国に寄せ家家の日記と

みなこ

もうごくおく

うかれこと

そうこん

こぎ

こぎ

こぎ

号し我が宗を嚴るとも皆是れ妄語胸臆の浮言にして莊嚴己義の

ほうもん

しよせんほけきよう

だいにちきよう

けろん

けろん

けろん

けろん

けろん

けろん

けろん

法門なり、所詮法華經は大日經より三重の劣戲論の法にして

しやくそん

むみようてんぱく

たしか

にやらい

きんげんきようもん

きんげんきようもん

きんげんきようもん

きんげんきようもん

きんげんきようもん

きんげんきようもん

釈尊は無明纏縛の仏と云う事・慥なる如来の金言經文を尋ぬ

可し、証文無くんば何と云うとも法華誹謗の罪過を免れず此の

事・当家の肝心なり返す返す忘失する事勿れ、何れの宗にも

正法誹謗の失之有り対論の時は但此の一段に在り仏法は自他宗

・異ると雖も翫ぶ本意は道俗貴賤共に離苦得樂現当二世の為な

り、謗法に成り伏して惡道に墮つ可くば文殊の智慧・富樓那の

弁説一分も無益なり無間に墮つる程の邪法の行人にて國家を祈☆

せんに將た善事を成す可きや、顯密対判の釈は且らく之を置く

華嚴に法華劣ると云う事能く能く思惟す可きなり、華嚴經の十二

に云く四十華嚴なり「又彼の所修の一切功德六分の一常に王に属す

○是くの如く修及び造を障る不善所有の罪業六分の一還つて王に

属す」文、六波羅蜜經の六に云く「若し王の境内に殺を犯す者有れ

ば其の王便ち第六分の罪を獲ん偷盜・邪行及び妄語も亦復是く

の如し何を以ての故に若しは法も非法も王為れ根本なれば罪に於
いても福に於いても第六の一分は皆王に属するなり」云云、
最勝王経に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に
他方の怨賊来り国人喪乱に遭わん」等云云、大集経に云く
「若し復諸の刹利国王諸の非法を作し世尊の声聞の弟子を悩乱
し若しは以て毀罵し刀杖もて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪
い若しは他の給施に留難を作す者有らば、我等彼をして自然に
卒に他方の怨敵を起さしめ及び自の国土にも亦兵起・疫病・
饑饉・非時風雨・鬭諍言訟せしめ又其の王久しからずして復
当に己が国を亡失すべからしむ」云云、大三界義に云く「爾の時
に諸人共に聚りて衆の内に一の有徳の人を立て名けて田主と為し
て各所収の物六分の一を以て以て田主に貢輸す一人を以て主と

なせいほうもつこれおさ
為し政法を以て之を治む、茲に因つて以後・刹利種を立て大衆
きんごうそつどまた
欽仰して恩率土に流る復・大三末多王と名づく」已上俱舎に依り之を
いだ
出すなり。

けんみつむりようぎきようくどく
顯密の事、無量義經十功德品に云く「第四功德の下」「深く諸仏秘密

の法に入り演説す可き所違無く失為し」と、抑大日の三部を密

説と云ひ法華經を顯教と云う事金言の所出を知らず、所詮真言

を密と云うは是の密は隱密の密なるか微密の密なるか、物を秘す

るに二種有り一には金銀等を蔵に籠むるは微密なり、二には疵・

片輪等を隠すは隱密なり、然れば即ち真言を密と云うは隱密なり

其の故は始成と説く故に長寿を隠し二乗を隔つる故に記小無し、

此の二は教法の心髓・文義の綱骨なり、微密の密は法華なり、

然れば即ち文に云く四の卷法師品に云く「藥王此の經は是れ諸仏

ひよう 秘要の蔵なり」云云、五の卷安樂行品に云く「文殊師利・此の

ほけきよう 法華經は諸仏如来秘密の蔵なり諸經の中に於て最も其の上に在

り」云云、寿量品に云く「如来秘密神通之力」云云、如来神力品

に云く「如来・一切秘要之蔵」云云、しかのみならず真言の高祖

りゅうじゅばつ 竜樹菩薩・法華經を秘密と名づく二乗作仏有るが故にと釈せり、

次に二乗作仏無きを秘密とせずば真言は即ち秘密の法に非ず、

ゆえん 所以は何ん大日經に云く「仏不思議真言相道の法を説いて一切

しょうもん の声聞・縁覚を共にせず亦世尊普く一切衆生の為にするに

非ず」云云、二乗を隔つる事前四味の諸教に同じ、随つて唐決

には方等部の攝と判ず經文には四教含蔵と見えたり、大論第百

卷に云く第九十品を釈す「問うて曰く更に何れの法か甚深にして般若

に勝れたる者有つて般若を以て阿難に囑累し而も余の經をば菩薩

に囑累するや、答えて曰く般若波羅蜜は秘密の法に非ず而も法華
等の諸經に阿羅漢の受決作仏を説いて大菩薩能く受用す譬え
大藥師の能く毒を以て藥と為すが如し」等云云、玄義の六に云く
「譬えば良医の能く毒を変じて藥と為すが如く二乗の根敗反た復
すること能わず之を名づけて毒と為す今經に記を得るは即ち
是れ毒を変じて藥と為す、故に論に云く余經は秘密に非ずとは
法華を秘密と為せばなり、復本地の所説有り諸經に無き所・後
に在つて當に広く明すべし」云云、籤の六に云く「第四に引証
の中論に云く等と言うは大論の文証なり秘密と言うは八經の中
の秘密には非ず但是れ前に未だ説かざる所を秘と為し開し已れば
外無きを密と為す」文、文句の八に云く「方等・般若に実相の蔵
を説くと雖も亦未だ五乗の作仏を説かず亦未だ発迹顕本せず

頓漸とんぜんの諸經しよきやうは皆未だ融會ゆうえせず故に名づけて秘ひと為なす」文、記の八いに云く「大論だいろんに云く法華ほつけは是れ秘密諸こ ひみつの菩薩ぼさつに付すと、今の下の文この如ごときは下方めを召なすに尚本眷属けんぞくを待つあきら驗あきらけし余いまは未だ堪たえざることを」云云、秀句しゅうくの下に竜女りゅうにょの成仏じやうぶつを釈しやくして「身口密しんくなり」と云これらえり云云、此等の經論ろん釈しやくは分明ふんみやうに法華經ほけきやうを諸仏しよぶつは最第一さいだいいちと説とき秘密教ひみつと定め給たまへるを經論きやうろんに文証もんしやうも無もうき妄語もうごを吐ほつき法華ほつを顯教けんきやうと名づけて之これを下くだし之これを謗ほうず豈大謗法あに ほうほうに非あらずや。

抑そもも唐朝とうあしたの善無畏ぜんむい・金剛智等こんかうち・法華經ほけきやうと大日經だいにちきやうの兩經りやうきやうに理同事勝りどうじしやうの釈つくを作るは梵華ほんかりやうこく兩國しやうれつ共に勝劣ほけきやうか、法華經ほけきやうも天竺てんじくには十六里ほうその宝藏あれに有むりやうれば無量あれの事有りゆうしやれども流沙そうれい・葱嶺けんなん等の險難せんなん・五万八千里せんり・十万里じゅうまんの路次ろじ容易よういならざる間しやう・枝葉しやうをば之これを略れつせり、此等これらは併やながら訳者やくしやの意樂いぎやうに随したがつて広ひろを好み略りやくを惡にくむ人も有

り略を好み広を惡む人も有り、然れば即ち玄奘は広を好んで四

十卷の般若經を六百卷と成し、羅什三藏は略を好んで千卷の

大論を百卷に縮めたり、印契・真言の勝ると云う事は以て

弁え難し、羅什所訳の法華經には是を宗とせず不空三藏の法華の

儀軌には印・真言之有り、仁王經も羅什の所訳には印・真言

之無し不空所訳の經には之を副えたり知んぬ是れ訳者の意樂なり

と、其の上法華經には「為説実相印」と説いて合掌の印之有り、

譬喩品には「我が此の法印世間を利益せんと欲するが為の故に説

く」云云、此等の文如何只広略の異なるか、又舌相の言語皆

是れ真言なり、法華經には「治生の産業は皆実相と相違背せず」

と宣べ、亦「是れ前仏經中に説く所なり」と説く此等は如何、真言

こそ有名無実の真言未顕真実の權教なれば成仏得道跡形も無く

始成しじょうを談じて久遠くおん無ければ性徳しょうとく本有ほんぬの仏性ぶつしょうも無し、三乗さんじょうが仏

の出世しゅつせを感じずるに三人に二人を捨て三十人に二十人を除く、

かいいいにゆうぶつどう

「皆令入仏道」の仏の本願満足ほんがんまんぞくす可からず十界互具じゅつかいこくは思いもよ

らずまして非情ひじょうの上の色心しきしんの因果争いんがいかでか説く可きや。

然しからば陳隋ちんずい二代の天台大師てんだいだいしが法華經ほけきょうの文を解りて印契いんけいの上に立

て給たまへる十界互具じゅつかいこく・百界千如ひゃつかいせんによ・一念三千いちねんさんぜんを善無畏ぜんむいは盗み取つて

我が宗の骨目こつもくとせり、彼の三蔵さんぞうは唐の第七玄宗皇帝てんたいの開元四年かいげんに

来る如来にょらいにゆうめつ入滅いづつより一千六百六十四年か、開皇十七年かいこうより百二十

余年なんなり何ぞ百二十余年いぜん已前に天台てんだいの立て給たまへる一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもん

を盗み取つて我が物とするや、而しかるに己が依經えききょうたる大日經だいにちききょうには

衆生しゅじょうの中に機きを簡きらひ前四味ぜんしのみの諸經しよききょうに同じて二乗にじょうを簡きらへり、まし

て草木成仏そうもくじょうぶつは思いもよらずされば理を云う時は盗人ぬすびとなり、又

印契真言何れの經にか之を簡える若し爾れば大日經にを説くと
も規模ならず、一代に簡われ諸經に捨てられたる二乗作仏は
法華に限れり、二乗は無量無辺劫の間・千二百余尊の印契真言を
行ずとも法華經に値わずんば成仏す可からず、印は手の用・
真言は口の用なり其の主が成仏せざれば口と手と別に成仏す
可きや、一代に超過し三説に秀でたる二乗の事をば物とせず事に
依る時は印真言を尊む者・劣謂勝見の外道なり。

無量義經說法品に云く「四十余年・未顕真実」文、一の巻に云く

「世尊は法久くして後要ず当に真実を説きたもうべし」文、又云く

「一大事の因縁の故に世に出現したもう」文、四の巻に云く「葉王

今汝に告ぐ我が所説の諸經あり而も此の經の中に於て法華最も

第一なり」文、又云く「已に説き今説き當に説かん」文、宝塔品

に云く「我仏道を為つて無量の土に於て始より今に至るまで広く
諸經を説く而も其の中に於て此の經第一なり」文、安樂行品に
云く「此の法華經は是れ諸の如来第一の説なり諸經の中に於て
最も為甚深なり」文、又云く「此の法華經は諸仏如来秘密の藏な
り諸經の中に於て最も其の上に在り」文、藥王品に云く「此の
法華經も亦復是くの如し諸經の中に於て最も為其の上なり」文、
又云く「此の經も亦復是くの如し諸經の中に於て最も為其の尊
なり」文、又云く「此の經も亦復是の如し諸經の中の王なり」
文、又云く「此の經も亦復是の如し一切の如来の所説若しは菩薩
の所説若しは声聞の所説諸の經法の中に最為第一なり」等云云、
玄の十に云く「又・已今当の説に最も為難信難解前經は是れ
已説なり」文、秀句の下に云く「謹んで案ずるに法華經・法師品

の偈げに云いわく薬王やくおう今なんじ汝なんじに告つぐ我が所説しよせつの諸經しよきようあり而しかも此の經の中
に於おいて法華ほっけ最も第一だいいちなり」文、又云いわく「当まさに知るべし已説いせつは四時
の經なり」文、文句の八に云いわく「今法華は法を論ずれば」云云、
記の八に云いわく「鋒ほこに当る」云云、秀句の下に云いわく「明あきらかに知んぬ
他宗所依たしゅうしよえの經は是れ王中の王ならず」云云、釈迦しゃか・多宝たほう・十方
の諸仏しよぶつ・天台てんだい・妙樂みょうらく・伝教等でんぎようは法華經は眞実しんじつ・華嚴經は方便ほうべん
り、「未いまだ眞実しんじつを顕あらわさず正しょう直じきに方便ほうべんを捨てて余經よきようの一偈いちげをも受
けざれ」「若もし人信ぜずして乃至ないしそ其の人・命終みょうじゅうして阿鼻獄あびごくに入
らん」と云云。

弘法大師こうぼうだいしは「法華ほっけは戲論けろん・華嚴けこんは眞実しんじつなり」と云云、何れを用
う可べきや、宝鑰ほうやくに云いわく「此かくの如ごとき乗乗じようじようは自乗じじように名を得れども
後に望めば戲論けろんと作る」文、又云いわく「謗人謗法ぼうじんほうほうは定めて阿鼻獄あびごくに

墮^だせん」文、記の五に云^{いわ}く「故^{ゆえ}に

じつそう

実相の外は皆戲論と名づく」文、梵網經の疏に云く「第十に

ほうさんほうかいまた

ほうぼさつかい

い

ある

じゃけん

こ

けはい

こ

けはい

けはい

けはい

けはい

けはい

謗三宝戒亦是謗菩薩戒と云い・或は邪見と云う謗は是れ乖背の名

なり ☆すべこ

て是れ解・理に称わず言は実に当らずして異解して説く者

みな

を皆名づけて謗と為すなり」文、玄の三に云く「文証無き者は

ことごとこ

じやい

げどう

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

な

悉く是れ邪偽・彼の外道に同じ」文、弘の十に云く「今の人・他

しよいん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

の所引の經論を信じて謂いて憑み有りと為して宗の源を尋ねず

あやまりなん

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

はなはだ

謬誤何ぞ甚しき」文、守護章上の中に云く「若し所説の經論

めいぶん

ごんじつ

だいしやう

へんえん

はんまん

かんちやく

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

べ

明文有らば権実・大小・偏円・半満を簡択す可し」文、玄の三

い

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

きようろん

に云く「広く經論を引いて己義を莊嚴す」文。

そもそこうほう

ほけきやう

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

抑弘法の法華經は真言より三重の劣・戲論の法にして尚華嚴

にも劣ると云う事

だい

だい

だい

だい

だい

だい

だい

だい

だい

だい

だい

だい

だい

だい

だい

だい

だい

大日經六卷に供養法の卷を加えて七卷・三十

一品・或は三十六品には何れの品何れの卷に見えたるや、しかの

一品・或は三十六品には何れの品何れの卷に見えたるや、しかの

一品・或は三十六品には何れの品何れの卷に見えたるや、しかの

みならず蘇そ悉しつ地ち經きょう三十四品・金剛頂經こんごうちようきょう三卷・三品・或あるは一卷に

全く見えざる所なり、又大日經だいにちきょう並びに三部の秘經ひきょうには何いづれれの卷

何いづれれの品にか十界互具之有いづつかいごこれありや都すべて無なきなり、法華經ほけきょうには事理共

に有あるなり、所謂久遠実成いわゆるくおんじつじょうは事なり二乗作仏にじようさぶつは理なり、善無畏ぜんむい

等の理同事勝りどうじしょうは臆說おくせつなり信用しんようす可べからざる者なり。

凡およそ真言しんこんの誤あやまり多おほき中

一、十住じゅうじゅう心に第八法華はつぽう・第九華嚴けごん・第十真言しんこん云云何いづれれの經論きょうろん

に出いでたるや。

一、善無畏ぜんむいの四句と弘法こうぼうの十住じゅうじゅう心と眼前違目がんぜんいもくなり何なんぞ師弟敵対してい

するや。

一、五蔵しんこんを立つる時・六波羅蜜經ろくはらみつきょうの陀羅尼蔵だらにぞうを何なんぞ必ず我が家の

真言と云うや。

一、震旦しんたんの人師にんし争つて醍醐だいごを盗むと云う年紀ねんきなん何ぞ相違そういするや、

そのゆえ 其の故は開皇十七年より唐とうの徳宗とくそうの貞元じょうげん四年戊辰の歳いたに至る

まで百九十二年なり何ぞ天台てんだい入滅にゅうめつ百九十二年の後に渡わたれる

ろくはらみつきよう 六波羅蜜經の醍醐だいごを盗み給う可たまきや顕然けんねんの違目いもくなり、若し爾もれ

ば謗人ぼうじん謗法定墮だあびこく阿鼻獄あびこくというは自責じせきなるや。

一、弘法こうぼうの心經しんきようの秘鍵ひけんの五分ごぶんに何ぞ法華ほつけを撰せんするや能よく能よく

尋たずぬ可べき事なり。

真言しんごん七重難な。

一、真言しんごんは法華經ほけきようより外ぐわいに大日だいにとち如来にょらいの所説しよせつなり云云、若もし爾しかれば

大日だいにとちの出世しゅつせ成道じやうどう説法利生せつぽうりしやうは釈尊しやくそんより前ぜんか後ごか如何いかん、対機説法きせつぽうの

仏ぶつは八相さふつ作さ仏ぶつす父母ふぼは誰たれれぞ名字みやうじは如何いかんに娑婆世界しやばせかいの仏ぶつと云はば

世よに二仏ふつ無なく国こくに二主しう無なきは聖教しやうきやうの通判つうはんなり、涅槃經ねはんぎやうの三十五

世よに二佛ふつ無なく国こくに二主しう無なきは聖教しやうきやうの通判つうはんなり、涅槃經ねはんぎやうの三十五

の巻を見る可きなり、若し他土の仏なりと云はば何ぞ我が主師親しやくそん ないがしろの釈尊を蔑しやくそんにして他方・疎縁の仏を崇あがむるや不忠ふちゆうなり不孝ふこうなりぎやくろがやだ逆路伽耶陀ななり、若し一体と云はば何ぞ別べつ仏と云うや若し別べつ仏ななんらば何ぞ我が重恩じゆうおんの仏を捨すつるや、唐堯とうぎやうは老い衰おとろえへたる母を敬うやまひ虞舜ぐしゆんは頑かたくななる父を崇あがむ「是一」、六波羅蜜經ろくはらみつぎやうに云く「所謂いわゆる過去無量・伽沙の諸しよ仏・世尊せそんの所説しよせつの正法しやうほう・我今またまさ亦当かくに是かくの如ごとき説なを作なすべし所謂いわゆる八万四千の諸もろもろの妙法みよほう蘊おんなり○而しかも阿難あなん陀等だの諸大弟子しよだいをして一たび耳に聞いて皆みな悉ことごとくく憶持おくじせしむ」云云、此の中の陀羅尼藏だらにそうを弘法こうほう我が真言しんごんと云える若もし爾しかれば此の陀羅尼藏だらにそうは釈迦しやくかの説せつに非あらざるか此の説いに違ちがはす是二、凡およそ法華經ほけきやうは無量千万億むりやうせんまんの已説いせつ・今説こんせつ・当説とうせつに最も第一だいいちなり、諸しよ仏の所説しよせつ菩薩ぼさつの所説しよせつ声聞しよせんの所説しよせつに此の經第一だいいちなり諸しよ仏の中に大日漏だいにちもる可べきや、

法華經は正直無上道の説・大日等の諸仏長舌を梵天に付けて

眞実と示し給う是三、威儀形色經に「身相黄金色にして常に満月

輪に遊び定慧智拳の印法華經を証誠す」と、又五仏章の仏も

法華經第一と見えたり是四、「要を以て之を云わば如来の一切所有

の法乃至皆此の經に於て宣示顯説す」云云、此等の經文は釈迦

所説の諸經の中に第一なるのみに非ず三世の諸仏の所説の中に

第一なり此の外一仏・二仏の所説の經の中に法華經に勝れたる經

有りと云はば用ゆ可からず法華經は三世不壞の經なる故なり是五、

又大日經等の諸經の中に法華經に勝る經文之無し是六、釈尊

御入滅より已後天竺の論師二十四人の付法蔵其の外大権の垂迹

震旦の人師南三・北七の十師三論・法相の先師の中に天台宗よ

り外に十界互具・百界千如・一念三千と談ずる人之無し、若し

いちねんさんぜん 一念三千を立てざれば 性悪しょうあくの義ぎ之無これなし 性悪しょうあくの義無ぎなくば 仏・菩薩ぼさつ
ふげんしきしんしんこん 普現色身真言 両界の漫荼羅まんだら 五百七百の諸尊しよそんは本無ほんむ今有こんぬの外道げどうの
法ほふに同どうぜんか、若もし十界互具じゅつかいごぐ・百界ひゃつかい・千如せんによを立てば 本經ほんきやう何れいずれの
經きやうにか 十界じゅつかい皆成いけの旨むね之を説いけるや、天台てんだい円宗えんしゆ見聞けんもんの後ご・邪智じゃち
莊嚴そうこんの爲ために盗たうみ取とれる法門ほふもんなり、才芸さいげいを誦じゆし浮言うかれごとを吐はくには
依よる可べからず正ただしき經文きやうもん金言きんげんを尋たずぬ可べきなり是七。

ねはんぎやう 涅槃經の三十五に云く「我処しよしよ処しよしよの經の中に於おいて説いいて言いく一人
しゆつせ 出世すれば多人利益やくす一国土こくどの中に二の轉輪王てんりんおうあり一世界せかいの中に
しゆつせ 二仏出世しゆつせすといわば是この処ことわりあ有あること無し」文、大論だいろんの九いに云く
じゆつぽうごうがしや 十方恒河沙さんぜんだいせんせかいの三千大千世界いちぶつせかいを名づけて一仏世界なと爲なす是この中
よぶつ 更に余よぶつ佛無ふつし実じつには一ひとりの釈迦牟尼佛しやくかむにぶつなり」文、記きの一いちに云く
なく 「世には二佛無ふつく国こくには二主無いちぶつし一佛きやうかいの境界きやうかいには二の尊号そんごう無なし」

文、持地論に云く「世に二仏無く国に二主無く一仏の境界に二の尊号無し」文。

七月日

日蓮

花押

◆一八

蓮盛抄

建長七年 三十四歳御作

150P

禪宗云く涅槃の時・世尊座に登り拈華して衆に示す迦葉・破顔微笑せり、仏の言く吾に正法眼蔵・涅槃の妙心・実相無相・微妙の法門有り文字を立てず教外に別伝し摩訶迦葉に付属するのみと、問うて云く何なる経文ぞや、禪宗答えて云く大梵天王問仏決疑經の文なり、問うて云く件の経何れの三蔵の訳ぞや貞元・開元の録の中に會つて此の経無し如何、禪宗答えて云く

此の経は秘経なり故に文計り天竺より之を渡す云云、問うて云く
いづれの聖人何れの人師の代に渡りしぞや跡形無きなり此の文は
いにしえの
上古の録に載せず中頃より之を載す此の事禅宗の根源なり尤も
ころく
古録に載すべし知んぬ偽文なり、禅宗云く涅槃經の二に云く「我
今所有の無上の正法悉く以て摩訶迦葉に付属す」云云此の文
いかに如何、答えて云く無上の言は大乘に似たりと雖も是れ小乗を
指すなり外道の邪法に對すれば小乗をも正法といはん、例せ
ば大法東漸と云えるを妙樂大師解釈の中に「通じて仏教を指す」
と云いて大小・権実をふさねて大法と云うなり云云、外道に對
すれば小乗も大乘と云われ下臆なれども分には殿と云はれ
じようろう
上臆と云はるるがごとし、涅槃經の三に云く「若し法宝を以て
あなんおよ
阿難及び諸の比丘に付属せば久住を得じ何を以ての故に一切の

しょうもんおよ かしょう ことごとまさ むじょう
声聞及び大迦葉は悉く当に無常なるべし彼の老人の他の寄物を
受くるが如し、こと是の故にかく ゆえ応に無上のまさ むじょう仏法を以て諸の菩薩に付属す
べし諸の菩薩は善能問答するを以て是くもろ もろ ぼさつの如きのもつ もろ もろ ぼさつ法宝則ち久住す
ることを得・無量千世増益熾盛にして衆生を利安せん彼の壮な
る人の他の寄物を受くるが如し是の義を以ての故に諸大菩薩乃ち
能く問うのみ」云云、よ大小の付属其れ別なること分だいしやう明なり、
同経の十に云く「汝等・文殊当に四衆の為にどうきやう広く大法を説くべ
し今・此の経法を以て汝に付属す乃至迦葉・阿難等も来らば復きやうほう
当に是くまさの如きかく正法を付属すべし」云云故に知んぬ文殊迦葉に
大法を付属すべしと云云、仏より付属する処の法はだいほう小乗なり
悟性論に云く「人心をさとする事あれば菩提の道を得る故に仏と名
づく」菩提に五あり何れの菩提ぞや得道又種種なり何れの道ぞや
ごしやうろん いわ じんしん ぼだい いずれ ぼだい とくどう しゆじゆ いずれ

よきよう

余経に明す所は大菩提にあらざ又無上道にあらざ経に云く

よんじゅうよねん みけんしんじつ

「四十余年・未顕真実」云云。

問うて云く法華は貴賤男女何れの菩提の道を得べきや、答えて

いわ ないし いちげ おい かいじよう うたがい

云く「乃至一偈に於ても皆成仏疑い無し」云云、又云く「正直

ほうべん むじようどう

に方便を捨て但無上道を説く」云云、是に知んぬ無上菩提なり

しゆゆゆ これ すなわ あのかほだい くいよう

「須臾も之を聞いて即ち阿耨菩提を究竟することを得るなり」此

の菩提を得ん事須臾も此の法門を聞く功德なり、問うて云く須臾

とは三十須臾を一日一夜と云う「須臾聞之」の須臾は之を指すか

如何、答う件の如し天台止観の二に云く「須臾も廃すること無か

れ」云云、弘決に云く「暫くも廃することを許さざる故に須臾と

云う」故に須臾は刹那なり。

問うて云く本分の田地にもとづくを禅の規模とす、答う本分の

きも

問うて云く本分の田地にもとづくを禅の規模とす、答う本分の

ほんぶん

問うて云く本分の田地にもとづくを禅の規模とす、答う本分の

ほんぶん

問うて云く本分の田地にもとづくを禅の規模とす、答う本分の

ほんぶん

でんち

なにもの

いづれ

ほけきよう

にんてん

田地とは何者ぞや又何れの経に出でたるぞや法華経こそ人天の

ふくでん

旨

にんてん

きようけ

たま

ゆえ

てんにんし

さんぜ

福田なればむねと人天を教化し給ふ故に仏を天人師と号す此の経

を信ずる者は己身の仏を見るのみならず過・現・末の三世の仏を

こしん

げん

さんぜ

見る事・浄頗梨に向ふに色像を見るが如し、経に云く「又

浄明鏡

じようはり

しきそう

ごと

いわ

浄明鏡に悉く諸の色像を見るが如し」云云。

じようみようきよう

ことこもろもろしきそう

ごと

こと

こと

禪宗云く是心即仏・即身是仏と、答えて云く経に云く「心は

ぜんしゅうい

ぜしんそくぶつ

そくしんぜぶつ

そくしんぜぶつ

い

い

い

是れ第一の怨なり此の怨・最も悪と為す此の怨・能く人を縛り送

こ

だいいち

あだ

な

よ

い

つて閻羅の処に到る汝独り地獄に焼かれて悪業の為に養う所の

えんら

ところ

いた

なんじひと

じごく

あくごう

ため

い

い

妻子兄弟等・親属も救うこと能わじ」云云、涅槃経に云く「願

さいしきようだい

しんそく

あ

あ

あ

ねはんぎよう

い

い

つて心の師と作つて心を師とせざれ」云云、愚癡無懺の心を以て

そくしんそくぶつ

あにみとくいとく

みしよういしよう

あ

あ

ぐち

むざん

も

即心即仏と立つ豈未得謂得・未証謂証の人に非ずや。

ほつけしゅう

い

い

き

き

しん

しん

しん

問う法華宗の意如何、答う経文に「具三十二相乃是真実滅」

い

い

い

い

い

い

い

い

問う法華宗の意如何、答う経文に「具三十二相乃是真実滅」

云云、・或は「速成就仏身」云云、禪宗は理性の仏を尊んで

己れ仏に均しと思ひ増上慢に墮つ定めて是れ阿鼻の罪人なり、

故に法華經に云く「増上慢の比丘は將に大坑に墜ちんとす」

禪宗云く毘盧の頂上を・むと、云く毘盧とは何者ぞや若し

周遍法界の法身ならば山川・大地も皆是れ毘盧の身土なり是れ

理性の毘盧なり、此の身土に於ては狗野干の類も之を☆む禪宗

の規模に非ず・若し実に仏の頂を☆まなか梵天も其の頂を見

ずと云えり薄地争でか之を☆む可きや、夫れ仏は一切衆生に於

いて主師親の徳有り若し恩徳広き慈父を☆まは不孝逆罪の大

愚人・悪人なり、孔子の典籍尚以て此の輩を捨つ況んや如来の

正法をや豈此の邪類邪法を讃めて無量の重罪を獲んや云云、

在世の迦葉は頭頂礼敬と云う滅後の閻禪は頂上を☆むと云う恐

る可し。

ぜんしゅういわ

禪宗云く教外別伝・不立文字、答えて云く凡そ世に流布の教

じゅきようこ

に三種を立つ、一には儒教此れに二十七種あり、二には道教此れ

てんだいしゅう

しきようはつきよう

に二十五家あり、三には十二分教天台宗には四教八教を立つる

これら

きようげ

くすし

ほんどう

げきようし

なり此等を教外と立つるか、医師の法には本道の外を外経師と云

にんげん

う人間の言には姓のつづかざるをば外戚と云う仏教には経論に

がいせき

ぶつきよう

きようろん

はなれたるをば外道と云う、涅槃経に云く「若し仏の所説に順わ

げどう

ねはんぎよう

いわ

も

しよせつ

ざる者有らば当に知るべし是の人は是れ魔の眷属なり」云云、九

まさ

こ

こ

けんぞく

に云く「法華已前は猶是れ外道の弟子なり」云云、禪宗云く

いわ

ほっけ いぜん

なおこ

げどう

でし

ぜんしゅういわ

仏祖不伝云云、答えて云く然らば何ぞ西天の二十八祖東土の六祖

ぶつそふでん

いわ

しか

なん

せいてん

とうと

を立つるや、付属摩訶迦葉の立義已に破るか自語相違は如何、

ふぞく まかしょう

りつきすで

やぶ

じごそうい

いかん

ぜんしゅういわ

こうじよう

ぜんしゅうふでん

しか

ぜんしゅう

禪宗云く向上の一路は先聖不伝云云、答う爾らば今の禪宗も

此れに依つて世を度す可し云云、若し爾れば猥に教外別伝と号せんや、次に不伝の言に至つては冷煖二途・唯自覺了と云つて文字に依るか其れも相伝の後の冷煖自知なり是を以て法華に云く「悪知識を捨て善友に親近せよ」文、止観に云く「師に値わざれば邪慧日に増し生死月に甚し稠林に曲木を曳くが如く出づる期有こと無けん」云云、凡そ世間の沙汰尚以て他人に談合す況んや出世の深理寧ろ輒く自己を本分とせんや、故に經に云く「近きを見る可からざること人の睫の如く遠きを見る可からざること空中の鳥の跡の如し」云云、上根・上機の坐禅は且く之を置くとうせ当世の禅宗は瓮を蒙つて壁に向うが如し、經に云く「盲冥にして見る所無し大勢の仏及び断苦の法を求めず深く諸の邪見に入つて苦を以て苦を捨てんと欲す」云云、弘決に云く「世間の顯語

尚なお識しらず況いはんや中ちゅう道どうの遠おん理りをや円えん常じょうの密みつ教きょう寧ようろ当まさに識しる可べけ
んや」云とう云せ、当ぜん世しの禪しゃ者みな皆こ是じれ大じゃ邪けん見やの輩からなり、就な中かん三ず惑く未さん断なく
の凡ぼん夫ぶの語ご録ろくを用もちいて四えん智み円よう明みょうの如に来らいの言げん教きょうを輕へんんずる返きす返き
す過とてうる者か、疾しの前まへに藥ななし機きの前まへに教きょうなし等とう覺かくの菩ぼ薩さつすら尚なお
教きょうを用もちいき底てい下げの愚ぐ人にん何なんぞ經きやうを信しんぜぎる云云云、是これを以もつて漢かん土どに
禪ぜん宗しゅう興おこぜしかば其その国こく忽たちちまに亡はびき本ほん朝ちようの滅めつす可べき瑞ずい相そうに
闍あ証んしょうの禪ぜん師じ充じゅう満まんす、止し觀かんに云いく「此これ則すなち法ほう滅めつの妖よう怪かいなり亦また
是これ時じ代だいの妖よう怪かいなり」云云。

禪ぜん宗しゅう云いく法ほ華け宗しゅうは不ふ立りゅう文もん字じの義ぎを破はす何なに故ゆゑぞ仏ぶつは一いち字じ不ふ説せつと
説とき給たまうや、答こたう汝なん楞じり伽りやう經がきやうの文ぶんを引ひくか本ほん法ぽう自うじ法ほうの二に義ぎを知しら
ざるか学がくばずんば習ならうべし其その上うへ彼かの經きやうに於おいては未み顕けん真しん実じつと破は
られ畢おんぬ何なんぞ指し南なんと為せん。

問うて云くいわ像法決疑經に云くそうほうけつぎきょう「如來の一句にょらい いっくの法を説きたもうを
見ず」云云如何、答う是は常施菩薩の言なりいかな法華經には「菩薩是の
法を聞いて疑網皆已に除く千二百の羅漢悉く亦當に作仏すべし」
と云つて八万はちまんの菩薩も千二百の羅漢も悉く皆列座しぼさつ聴聞隨喜す、
常施一人は見えじょうせず何れの説に依る可き法華の座にいづれ挙ぐる菩薩の
上首の中に常施の名之無し見えずと申すも道理なり、何に況や
次下つぎしもに「然るに諸の衆生しか出沒有るを見て法を説いて人を度す」
云云、何ぞ不説の一句を留めて可説の妙理を失う可き、汝が立義
一一大僻見なりびやつけん執情を改めて法華に歸伏す可し、然らずんば
豈無道心に非ずや。あに どうしん あら

◆十九

八宗違目抄
はつしゅういもく

文永九年二月五十一歳御作

与富木常忍

154P

記の九に云く「若し其れ未だ開せざれば法報は迹に非ず若し

顕本し已れば本迹各三なり」文句の九に云く「仏・三世に於て

等しく三身有り諸教の中に於て之を秘して伝えず」

法身如来

仏
報身如来

衆生

了因仏性

応身如来

縁因仏性

衆生の仏性

小乗経には仏性の有無を論ぜず。

華嚴・方等・般若・大日経等には衆生本より

正因仏性有つて了縁因無し。

法華経には本より三因仏性有り。

文句の十に云く「正因仏性」「法身の性なり」は本當に通互す、

縁了仏性は種子本有なり今に適むるに非ざるなり」

今・此の三界は皆是れ我が有なり

主国王世尊なり

法華經第二に云く
親父なり

其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり

而も今・此の処は諸の患難多し

導師なり

唯我一人のみ能く救護をなす

寿量品に云く我も亦為世の父文
主 国王

親 師

報身如來
法身如來
法身如來

五百問論に云く「若し父の寿の遠を知らずして復父統の邦に
迷わば徒らに才能と謂うとも全く人の子に非ず」又云く「但恐

らくは才一国に当るとも父母の年を識らざらんや」

古今・仏道論衡道宣の作に云く「三皇已前は未だ文字有らず但

其の母を識つて其の父を識らず禽獸に同じなり」等云云、

慧遠法師周の武帝を詰る語なり

俱舍宗 ぐしゃしゅう じょうじつ

成実宗

応身おうじんに限る。

律宗

華嚴宗 けこんしゅう

三論宗

報身ほうしんはは有始無終はうしゅう 応身おうじんはは有始有終しゅうしゅうなり。

法相宗

義ぎにい云いくく大日だい如來にちはは釈迦しゃのの法身ほっしんなり。

真言宗

義ぎにい云いくく大日だい如來にちはは釈迦しゃのの法身ほっしんににはは非あらず。

但ただしだ大日だい經にちににはは大日だい如來にちはは釈迦しゃ牟尼むに仏ぶつなりと見えたり人師にんしよ

りのび僻見やつけんなり。

淨土宗じょうどしゅう一向いっこうに阿彌陀如來あみだにょらいを以て本尊もつほんぞんと為す。

法華宗ほっけしゅうより外ほかの真言等しんごんの七宗並に淨土宗等じょうどしゅうはは釈迦しゃ如來にちを以て

一向いっこうにに釈尊しゃくそんを以て本尊もつほんぞんと為すな爾りしかりと雖もいえど但

釈尊しゃくそんを以て本尊もつほんぞんと為すと雖もいえど法身ほっしんは無始無終むしむしゅう

父と為すことを知らず、例せば三皇已前の人・禽獸に同ずるが

如し鳥の中に 鷦鷯鳥 も鳳凰鳥も父を知らず獸の中には兎も

師子も父を知らず、三皇以前は大王も小民も共に其の父を知らず

天台宗よりの外・真言等の諸宗の大乗宗は師子と鳳凰の如く

小乗宗は鷦鷯と兎等の如く共に父を知らざるなり。

華嚴宗に十界互具・一念三千を立つること澄觀の疏に之有り。

真言宗に十界互具・一念三千を立つること大日經の疏に之を

出す。

天台宗と同異如何、天台宗已前にも十界互具・一念三千を立

つるや、記の三に云く「然るに衆衆を攢むるに既に三乗及び

一乘三一俱に性相等の十有りと許す何すれぞ六道の十を語らざ

るや」三蔵等の法華經に依る者一念三千の名目を立てざるか。

問うて云くいわ華嚴宗は一念三千の義を用いるやいちねんさんぜん後の御宇に之を立つ、

答えて云く澄観いわの疏ちようかん三十三じよ国師清涼に云く「止観いわの第五に十法じよう成乘じようじよう

を明す中の第二に真正發菩提心しんしょうほつぼだいしん○釈しゃくして云く然も此の經の上下じようげ

の發心ほっしんの義は文理淵博にして其の撮略そを見る故に取つて之をゆえ

用い引いて之を証とす」と、二十九に云く「法華經ほけきように云く唯仏い与ゆい仏ぶつ

等と天台云く○便すなわち三千世間を成すと彼の宗には此れを以つて実てんだいいわ

と為す○一家の意理として通ぜざる無し」文。

華嚴經けこんきように云く「覺林菩薩ぼさつ之を説くと、弘決ぐけつには如來にやらい林菩薩ぼさつと引く「心は工なる

画師えしの種種しゆじゆの

五陰ごおんを画くが如く一切世間いっさいせけんの中に法として造らざること無し心の

如くごと仏も亦爾またしかなりごと仏の如く衆生しゆじようも然しかなり心と仏と及び衆生およとしゆじよう

是の三差別さべつ無し若し人三世一切の仏さんぜいっさいを了知りようちせんと欲せば当ほつに是まさくかく

の如く観ずべし心は諸の如来を造ると」

法華經に云く「なり仏の自説なり」「所謂諸法とは如是相・如是性

・如是体・如是力・如是一作・如是一因・如是一縁・如是一果・如是一報

如是本末究竟等」又云く「唯一大事の因縁を以ての故に世に出現

したもう諸仏・世尊は衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」

蓮華三昧經に云く「本覺心法身常に妙法の心蓮台に住して本

より来た三身の徳を具足し三十七尊「七尊なり」心城に住したまえ

るを歸命したてまつる心王大日遍照尊・心数恒沙・諸の如来も

普門塵数諸の三昧因果を遠離して法然として具す無辺の徳海・本

より円満還つて我心の諸仏を頂礼す、仏蔵經に云く「仏・

一切衆生、心中に皆如来有して結跏趺坐すと見そなわす」文。

問うて云く真言宗は一念三千を用いるや、答えて云く大日經

の義ぎ釈しやく智ち不ふ空くう一行いっけうに云いくは伝でん教きやう・弘こう法ぽう之これを見みず智ち証しやう之これを渡わたす「此の經

は是これ法ぽう王おうの秘ひ宝ほうなり妄みだりに卑ひ賤せんの人ひとに示しさざれ釈しやく迦かし出しゅ世つせして

四よん十じゅう余よ年ねんに舍しや利り弗ふつの慇おん懃こんなる三さん請しやうに因しやうりて方まさに為ために略りやくして

妙みやう法ぽう蓮れん華げの義ぎを説ときたまいしが如ごとし、今こん・此この本ほん地ちの身み又また是これ

妙みやう法ぽう蓮れん華げ最さい深しんの秘ひ処しよなるが故ゆゑに、寿じゆ量りやう品ぽんに云いく常じやう在ざい靈りやう鷲じゆ山せん及

余しよ諸じゆ住しよ処しよ乃ない至し我じやう淨じやう土ど不ふ毀く而し衆しやう見じん燒すな尽わと即すなち此この宗しゆの瑜ゆ伽がの意いな

らくのみ又ふ補ふ処しよの菩ぼ薩さつの慇おん懃こんの三さん請しやうに因よつて方まさに為ために之これを説とけ

り」と、又い云わく「又また此この經きやうの宗しゆは横よこに一いつ切しの仏ぶつ教きやうを統すぶ唯ゆい蘊おん無む我が

にして世せ間けんの心しんを出いで蘊おんの中ちゆうに住すと説とくが如ごときは即すなち諸しよ部ぶの

小しやう乘じやう三さん藏ざうを撰せんず、蘊おんの阿あ賴らい耶やを觀かんじて自じ心しんの本ほん不ふ生しやうを覺さると説と

くが如ごときは即すなち諸しよ經きやうの八はち識し・三さん性しやう・無む性しやうの義ぎを撰せんず、

極ごく無む自じ性しやう心しんと十じゅう綠りよく生しやうの句こを説とくが如ごときは即すなち華け嚴こん・般はん若にやの

種種しゅじゆの不思議ふしぎの境界きやうかいを摂せつして皆其みなその中に入る、如実にょじつ知自心ちじしんを
一切いっさい種智しゆちと名づくと言ことくが如ごときは則すなわち仏性ぶつしょう「なり」涅槃經 いちじよう 法華經
如来秘藏にょらいひそう「なり」大日經 みなそ皆其みなその中に入る種種しゅじゆの聖言せいごんに於おいて其の精要すを統すべ
ざること無し、毘盧遮那經びるしゃなの疏じよ「傳教・弘法之を見る」第七の
下に云いわく天台てんだいの誦經じゆは是れ円頓えんどんの数息すそくなりと謂おもう是れ此の意な
り」と。

大宋たうそうの高僧こうそう傳卷の第二十七の含光の伝に云いわく「代宗光を重んず
ること含光ふくこうは不空三藏ふくうさんざうの弟子でしなり不空ふくうを見るが如ごとし勅委ちよくいして五台山に
往ゆいて功德くどくを修しゆせしむ、時に天台てんだいの宗学湛然たんねん「第六妙案の師天台なり」禅觀
を解げり了りようして深く智者ちしや「天台てんだいなり」の膏腴たういを得たりと、嘗たつて江淮かうわいの
僧四十余人と清凉せいりようの境界きやうかいに入る、湛然たんねん・光と相見さいいて西域さいい伝法きでんぼうの
事を問う、光の云いわく一国の僧空宗を体得する有りと問うて智者ちしやの

きようほう
教法に及ぶ梵僧云く曾て聞く此の教邪正を定め偏円を曉り止観
あか
を明して功第一と推す再三光に嘱す・或は因縁あつて重ねて至ら
だいいち
ば為に唐を翻して梵と為して附し来れ某願くは受持せんと
ため
しはしば
屡屡手を握つて叮嘱す、詳かにするに其の南印土には多く竜樹
ひるがえり
ていしよく
つまびら
その
の宗見を行ず故に此の流布を願うこと有るなりと、菩提心義の三
ゆえ
に云く一行和上は元是れ天台一行三昧の禪師なり能く天台円満の
い
宗趣を得たり故に凡そ説く所の文言義理動もすれば天台に合す、
ゆえ
およ
ふくうさんそう
不空三蔵の門人含光天竺に帰るの日天竺の僧問わく伝え聞く彼の
もんじん
てんじく
国に天台の教有りと理致・須ゆ可くば翻訳して此の方に将来せん
てんだい
ま
や云云、此の三蔵の旨も亦天台に合す、今・或る阿闍梨の云く
さんそう
むね
またてんだい
が
真言を学せんと欲せば先ず共に天台を学せよと而して門人皆
しんこん
ほん
てんだい
しこう
もんじんみな
い
瞋る「云云。」

問うて云く華嚴經に一念三千を明すや、答えて云く「心仏及
衆生」等云云、止觀の一に云く「此の一念の心は縦ならず横な
らず不可思議なり但己のみ爾るに非ず仏及び衆生も亦復是くの
如し、華嚴に云く心と仏と及び衆生と是の三差別無しと当に知
るべし己心に一切の法を具することを」文、弘の一に云く「華嚴
の下は引いて理の齊きことを証す、故に華嚴に初住の心を歎じ
て云く心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も然り心と仏と及び
衆生と是の三差別無し諸仏は悉く一切は心に從つて轉ずと了知
したまえり、若し能く是くの如く解すれば彼の人真に仏を見たて
まつる、身亦是れ心に非ず心も亦是れ身に非ず一切の仏事を作す
こと自在にして未曾有なり、人若し・三世一切の仏を知らんと欲
求せば応に是くの如き觀を作すべし心諸の如來を造すと、若し今

家の諸の円文の意無くんば彼の経の偈の旨・理として実に消し難

からん」と。

三蔵教

小乗の四阿含經

心生の六界

心具の六界を

明さず。

大乘

通教

心生の六界

亦心具を明さず。

別教

心生の十界

心具の十界を明さず。

思議の十界

爾前華嚴等の円

円教

不思議の十界互具

法華の円

止の五に云く「華嚴に云く心は工なる画師の種種の五陰を造る

が如く一切世間の中に心より造らざること莫しと種種の五陰とは

前の十法界ほっかいの五陰ごおんの如ごときなり」又云いわく「又十種ごおんの五陰ごおん一一に各十法を具ぐす謂おもえらく如是相よぜそう・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末ほんまつ究竟等くきようなり」文、又云いわく「夫それ一心いっしんに十法界を具ぐす一法界ほっかいに又十法界を具ぐすれば百法界なり一界に三十種の世間を具ぐすれば百法界ほっかいには即すなわち三千種さんぜんの世間せけんを具ぐす此の三千一念さんぜんいちねんの心こに在り」文、弘ぐの五に云いわく「故ゆえに大師だいし覺意三昧かくいさんまい觀心かんじん食法おほ及び誦經じゆきよう法ほう小止觀しよくん等らのもろもろ諸の心觀の文に但ただ自他等じたの觀を以もつて三仮さんかを推すいせり並びならに未いまだ一念三千具足いちねんさんぜんぐそくを云いわず、乃至觀心論ないしかんじんの中に亦また只三十六またただの問を以もつて四心を責せむれども亦一念三千またいちねんさんぜんに涉たらず、唯ただ四念處ねんじよの中に略りやくして觀心の十界じゆっかいを云いうのみ、故ゆえに止觀しかんに正まさしく觀法かんほうを明いたすに至いたつて並びならに三千さんぜんを以もつて指南しなんと為なせり、乃すなわち是れ終窮究竟しゆうぐくきようの極說ごくせつなり、故ゆえに序の中に說せつ己心中こしんちゆう所行法門しよぎようほうもんと云いう良まことに以もつ有ゆるなり請こうう尋たずね

読まん者心に異縁無かれ、止の五に云く「此の十重の觀法は横豎に収束し微妙精巧なり初は則ち境の真偽を簡び中は則ち正助相添い後は則ち安忍無著なり、意円かに法巧みに該括周備して初心に規矩し將に行者を送って彼の薩雲に到らんとすなり閻証の禪師誦文の法師の能く知る所に非ざるなり、蓋し如来積劫の懃求したまえる所・道場の妙悟したまえる所身子の三請する所・法譬の三たび説く所・正しく茲に在るに由るか」、弘の五に云く「四教の一十六門乃至八教の一期の始終に遍せり今皆開顯して束ねて一乗に入れ遍く諸經を括りて一実に備う、若し当分を者尚偏教の教主の知る所に非ず況んや復た世間閻証の者をや○、蓋し如来の下は称歎なり十法は既に是れ法華の所乗なり是の故に還つて法華の文を用いて歎ず迹の説に約せば即ち大通

智勝ちしょう仏の時を指して以て積劫しゃくごうと為し寂滅じやくめつ道場どうじょうを以て妙悟みょうごと
為すな若し本門ほんもんに約せば我本行菩薩道の時を指して以て積劫しゃくごうと
為し本成仏じょうぶつの時を以て妙悟みょうごと為す、本・迹二門只是此の十法
を求悟きいせるなり、身子等とは寂じやく場じょうにして説かんと欲ほするに物の
機未きいだ宜いからず其その苦に墮だせん事を恐れて更に方便ほうべんを施ほどこす
四十余年種種よんじゅうねんしゆじゆに調ちようじゆく 熟ほつし法華の会に至いたつて初めて略して権を開す
るに動執生疑どうしゆうしやうぎして殷懃おんこんに三請しやうす五千起ち去まさつて方に枝葉しやう無し四
一を点示して五仏の章を演のべ上根じやうこんの人に被こうむるを名づけて法説と
為し、中根は未いまだ解げせざれば猶譬喩なおりゆを・う下根げこんは器劣きりやくにして復またた
因縁いんねんを待たいつ、仏意ぶつゐ聯綿れんめんとして茲この十法に在り、故ゆゑに十法の文の末
に皆大車みなに譬たとえたり今の文の憑る所意此こに在り、惑者わくしやは未いまだ見みず
尚な華嚴を指なす唯華嚴ただけこんえん円頓えんどんの名を知しつて而して彼の部の兼帶の説に

味し、全く法華絶待の意を失つて妙教独頭の能を貶挫す、迹本の
二文を驗しるしして五時の説を・うれば円極謬えんごくらず何ぞ須すべらく疑うたがいを
致いたすべけん是の故に結して正しく茲ここに在るかと曰う、又云く「初
に華嚴けこんを引くことを者重かさねて初に引いて境相を示す文を牒ちようす前
に心造と云うは即ち是れ心具しんぐなり故に造の文を引いて以て心具を
証す、彼の經第十八の中に功德林菩薩くどくぼさつの偈げを説いて云うが如く心
は工なる画師えしの種種しゅじゅの五陰ごおんを造るが如く一切世界いっさいせかいの中に法として
造らざること無し心の如く仏ごとも亦爾またしかなり仏の如く衆生しゅじようも然しかなり
心と仏おほと及び衆生しゅじようと是の三差別無さべつし、若し人三世さんぜの一切の仏を
知らんと欲求せば応まさに是くの如く觀ごとずべし心は諸もろもろの如来を造ると
今の文を解げせずんば如何なんぞ偈げの心造一切三無差別を消せん」文、
諸宗しよしゆうの是非ぜひ之を以て之を糾明きゆうめいす可きなり、恐恐きようきよう謹言きんげん。

二月十八日

日蓮 在

御判

◆二〇 早勝問答 もんとう

文永八年 ぶんえい

161P

五十歳御作浄土宗問答。
じょうどしゅうもんとう

問う六字のみようごう名号は善惡ぜんあくの中には何ぞや、答う一義に云く今問
う所の善惡ぜんあくは世出の中には何ぞや、一義に云く云う所の善惡ぜんあくを治
定せば墮獄だごく治定なるか、一義に云く名号みようごう惡と治定せば墮獄だごく治定
なるか、一義に云く念仏ねんぶつ・無間むげん治定して其の上そのに善惡ぜんあくを尋たずぬるか、
一義に云く汝いわが依經えきようは權実ごんじつの中には何れぞや。

問う念仏ねんぶつ・無間むげんと云わば法華ほっけも無間むげんなり、答う一義に云く法華ほっけ

無間とは自義なるか経文なるか、一義に云く念仏・無間をば治
定して法華無間と云うか、一義に云く祖師の謗法を治定して法華
も無間と云うか、一義に云く汝が云う所の法華は超過の法華か
又弥陀成仏の法華か。

問うて云く念仏・無間の証拠二十八品の中には何れぞや、答う

一義に云く二十八品の中に証拠有らば墮獄治定なるか、一義に

云く法華を誹謗するを証拠とするなり、一義に云く法華の文を

尋ぬるは信じて問うか信ぜずして問うか、一義に云く直に

入阿鼻獄の文を出すなり、一義に云く妙法蓮華經其の証拠なり、

一義に云く弥陀の本誓に背く故なり、一義に云く弥陀の命を断つ

故なり、一義に云く有縁の釈尊に背く故なり念仏・無間は三世

諸仏の配立なり。

問う止観しかんの念仏ねんぶつの事、答う一義いに云く法然ほうねん所立しよりゅうの念仏ねんぶつは墮獄だごく治定しちていして止観しかんを問うか、一義いに云く西方さいほうの念仏ねんぶつと一ことなるか異なるか、一義いに云く止観しかんの念仏ねんぶつは法華ほっけを誹謗ひぼうするか、一義いに云く彼に文段ぶんだんを問う可べし、一義いに云く止観しかんに依よつて浄土宗じょうどしゅうを建立こんりゅうするか。問う観經かんきようは法華ほっけ已後いごの事、答う一義いに云く此ゆえの故ほっけに法華ほっけを謗ぼうずるか、一義いに云く已前いぜんならば無間むげんは治定しちていなるか、一義いに云く汝なんじが謗法ぼうぼうは無間むげんをば治定しちていして問うか。

問う観經かんきようと法華ほっけと同時どうじなり、答う一義いに云く同時どうじなる故ゆえに法華ほっけを謗ぼうずるか、さては返かへつて観經かんきようをも謗ぼうずるなり。

問う先師せんしの謗法ぼうぼうは一往いちおうなり且しくの字しを置おく故ゆえなり、答う一義いに云く且しく謗ぼうぜよとは自義じぎか經文きやうもんか、一義いに云く始終しじゅう共に謗ぼうぜば墮獄だごくは治定しちていなるか。

問う未顕眞實は往生に非ず成仏の方なり、答う一義に云く此の故に法華を謗ずるか、一義に云く余経は無得道と云う人は僻事か。

問う法華本・迹の阿弥陀をば如何、答う一義に云く法華の弥陀は法華経を謗せんと誓い給いしか、一義に云く法華の弥陀と三部経と同じきか異なるか、異ならば無間治定なるか。

問う一称南無仏と何んぞ称名を無益と云わんや、答う一義に云く此の故に法華を謗ずるか、一義に云く法華を信じて問うか信ぜずして問うか。

問う法華に「諸の如来に於て」「諸仏を恭敬す」と何ぞ弥陀を捨つるや、答う一義に云く此の故に法華を謗ずるか「大旨上の如し。」

問う「余の深法中に示教利喜す」と何ぞ余経を謗するや、答う
一義に云く此の故に法華を謗するや、一義に云く汝が誹謗は治
定して問うか又自義か経文か「大旨上の如し」。

問う普門品に觀世音の称名功德を挙ぐと見えたり何ぞ余の仏
・菩薩を捨てんや、答う一義に云く此の故に法華を謗するか、一
義に云く此の觀音は法華を謗するか、一義に云く此の品に依つて
念仏を立つるか、私に云く彼が経文釈義を引かん時は先ず文段
を一一問う可し、大段万事の問には誹謗の言を先とす可きなり、

前の当家の義云云。

ぜんしゅうもんどう
禪宗問答。

問う禪天魔の故如何、答う一義に云く仏經に依らざる故なり、
一義に云く一代聖教を誹謗する故なり。

問う禪とは三世諸仏成道の始は坐禅し給へり如何、答う一義に云く汝が坐禅は仏の出世に背かば天魔治定なるか、又坐禅は大小の中には何れぞや、一義に云く仏の端座六年は法華に無益と云うか。

問う禪法には仏説無益なり、答う一義に云く是自義なるか経文なるか、一義に云くやがて是が天魔の所為なり。

問う経文には「是法不可示」と如何、答う一義に云く此の文は法華無益と云う文なるか、一義に云く爾らば法華に依るか、一義に云く文段を以て責む可きなり。

問う竜女は坐禅の成仏なり其の故は経文に「深く禅定に入つて諸法に了達す」と説き給へり、知んぬ法華無益と云うことを、答う一義に云く此の義は自義なるか経文なるか、一義に云く

若しも法華ほつけの成仏じようぶつならば天魔治定てんまなるか、一義いに云く文殊海中もんじゅかいちゆうの教化きやうけは論說みようほう妙法のべと宣べたり如何いかな。

問う常ざぜんに坐禪ざぜんを好み深く禪定ぜんじように入いって常ざぜんに坐禪ざぜんを貴とうとぶとも説けり如何いかな、答う一義いに云く文段いを以もつて責む可べし、一義いに云く此の文いは法華無益ほつけむやくと云う文なるか、一義いに云く此の文いを以もつて禪宗ぜんしゆうを建立こんりゆうするか。

問う唯獨ただひとり自のみ明了ゆえにして余人の見ざる所と云う故に禪宗ぜんしゆうひとり真性しんじやうを見て余人は見ずと云うなり、答う一義いに云く文段いを以もつて責む可べし經文きやうもんを見る可べし、問う像法決疑經ぞうほうけつぎきやうに云く「一字不説いちじふせつ」と爾しからば一代いちだいは未顕真實みけんしんじつと聞きたり真實しんじつは只迦葉ただかしやう一人教にの外べつでんに別伝たまし給へり如何いかな、答う此の文は仏説ぶつせつか若し仏説ぶつせつならば汝なんじ此の文に依よる故に自語相違じごそういなり、一義いに云く言う所の迦葉かしやう

は何なる経にて成仏するや、一義に云く言う所の経文は三説の
中には何れぞや、一義に云く楞伽經は仏説なるか。

問う三大部に觀心之有り何ぞ禪天魔と云うや、答う一義に云く
汝は三大部に宗を立つるか、一義に云く三大部の觀心は汝が
禪と同じきか、一義に云く汝は天台を師とするか、一義に云く
三大部の觀心は諸經を捨つるか。

問う雙非の禪の事如何、答う一義に云く一度は法華に依り一度
は法華無益なり、一義に云く二義共に天魔なり一義に云く此の義
に背かん者は僻事なるか。

問う法華宗は妙法の道理を知るや、答う一義に云く汝は天魔
を治定して問うか、一義に云く汝は法華を信じて問うか、一義
に云く妙法を知つて問うか知らずして問うか、一義に云く汝が

問う所の妙法みょうほうは今経こんきょうに付いて百二十の妙有り其その品しんを問うか、一義いぎに云く汝なんじは此この妙法みょうほうに依よつて禪ぜんを建立こんりゅうするか。

天台宗問答。

問う天台宗てんだいしゅうを無間むげんという証拠しょうこ如何いかに、答う一義いぎに云く法華ほっけを

誹謗ひぼうする故なり、一義いぎに云く経文きょうもんに背そむく故なり。

問う余経無益よきょうむやくと云う事は・を判いずる一往いちおうの意いなり再往さいおうの日は

諸乗しよじょう一仏乗いちぶつじょうと開會かいえす何なんぞ一往いちおうを執しゅうして再往さいおうの義ぎを捨すつるや、答

う一義いぎに云く今言いまう所の開會かいえとは何いづれれの教けうの開會かいえぞや、一義いぎに

云く今経こんきょうに於おいて本・迹おきの十妙じしゅの下したに各二十の開會かいえあり亦また教行人けうぎやうにん

理りの四一開會かいえの中には何いづれれぞや、一義いぎに云く能開所開もうかいしよかいの中には

何いづれれぞや、一義いぎに云く開會かいえの後善惡無ぜんあくしと云うか、一義いぎに云く

天台宗てんだいしゅうは法華ほっけを信ほつずるか、一義いぎに云く開會かいえの後諸宗しよしゅうを簡えらばずと

云わば天台大師僻事なるか其の故は南三・北七云云 伝教大師

ろくしゅう

は六宗と云云、一義に云く天台宗は悪行をも致す可きか性悪

不断と云うが故に自語相違なりと責む可きなり、一義に云く開会

の後に権実を立つる人は僻事なるか爾らば薬王の十喩法師の三説

ごんじつ

超過云云、一義に云く此の故に開会の心を以て慈覚は法華を謗ず

るか、一義に云く汝は慈覚の弟子なるか爾らば謗法治定なるか。

問う善悪不二・邪正一如の故に強ちに善悪を云う可からず元

ぜんあくふに

意の重是なり、答えて云く天台の出世は悪を息めんが為か又悪を

これ

増さんが為か、一義に云く悪事を致せとは法華經二十八品の中に

いわず

は何れの処に見えたるや。

ところ

問う絶待妙の事、答う一義に云く先ず文段を問う可し、一義

ぜったいみよう

に云く何れの教の絶待ぞや、一義に云く此の故に慈覚は法華を

いわず

に云く何れの教の絶待ぞや、一義に云く此の故に慈覚は法華を

謗ぼうずるか。

問う相待はいちおうぜったい一往絶待は再往さいおうと見えたり如何いかに、答う自義じぎなるか

きょうもん

經文きょうもんなるか、一義いに云く相待妙そうたいみょう一往と云うは二十八品の中には

いづれ

何れに見えたるや、一義いに云く相待妙そうたいみょうは法華ほつげに明すか余經よきょうに明

すか若しも法華ほつげに明あかさば法華は一往いちおうなるか。

やつきよう

問う約教・約部の故に約部の日は一往爾前いちおうにぜんの円を嫌きらうなり、

答う一義いに云く言う所の約教やつきようは天台てんだいの判釈はんしゃくの四種よつきようの約教の中

いづれ

には何れぞや、一義いに云く約部やくぶは落居らくこの釈しゃくなるか、一義いに云く

やくぶ

約部やくぶを捨すつ可べきか、一義いに云く約教やつきようの時・爾前にぜんの円えんを嫌きらわば墮だ

ごく

獄ごくは治定ちじやうなるか、一義いに云く約教やつきようの辺へんにて今昔こんじやく円えん同じとは

ほけきよう

法華經ほけきよう二十八品の中何れぞや、一義いに云く玄文げんもんの第一だいいちの施開廢しかいはいの

ゆえ

三重ゆえの故かに開會かいえの後のちも余經よきょうを捨すつると云う文をば知るか知らざる

か。

山門流の真言宗問答

問う法華第一と云うは顯教の門なり真言に対すれば第一とは
云う可からず、答う自義なるか經文なるか爰を以て慈覺大師を
無間と申すなり、一義に云く真言に対して法華第一ならば亡國治
定なるか、一義に云く真言は已今当の中には何れぞや、若し外と
云わば一機・一縁の一往にして秘密とは云わる可からざるなり。
問う法華と真言とは理同事勝の故に真言に対すれば戲論の法と
云うか、答う一義に云くさてこそ汝は無間治定なれ、一義に云く
さては慈覺は真言をも謗ずるなり其の故は理同の法華を謗ずる故
なり。

問う伝教の本理大綱集の文を以て顯密同と云う事、答う一義

に云く此の書は伝教の御作に非ざるなり、一義に云く此の書に依つて法華を慈覺は謗ずるか。東寺流の問答。

問う真言は釈尊の説と云う事其の証拠如何、答う若し真言

しゃくそん

釈尊の説ならば亡国は治定なるか、若し然なりと云わば弘法

だいし

大師五蔵を立つる時・法華を六波羅蜜經の五蔵の第四般若波羅蜜

だらにそう

蔵第五の陀羅尼蔵をば真言と建立し給へり如何。

しんこんしゅう

問う真言宗を末顕真実とは言うべからず其の故は釈迦の説の

こんりゅう

外に建立する故なり如何、答えて云く若し釈尊の説教ならば

ほうこく

亡国は治定なるか、一義に云く六波羅蜜經は釈迦の説なるか大日

も

の説なるか、若し釈迦の説ならば末顕真実は治定なるか、他云く

しゃかしよせつ

釈迦所説の顕教無益なりと。

たず

尋ねて云く六波羅蜜經は顕教・密教の中には何れぞや、他

いわ 云く六波羅蜜經は雜部の真言なり我が家の三部は純説の真言なり、
ろくはらみつきよう 答う助証正証と云う事全く弘法の所判に見えず若し弘法の義
だごく ならば墮獄は治定なるか、他云く真言は速疾の教顯教は迂回
りやつこう 歴劫の教なり云云、自ら云く自義なるか經文なるか、他云く五
ひみつ 秘密教に云く「若し顯教に於て修行する者は久しく三大無數劫
いわ を經」と説け是れ其の証拠なり如何、答う、さて此の經は釈迦の
こ そ 説なるか大日の説なるか若し釈迦の説ならば未顯眞實は治定なる
だいにち か。

ほつけしゆう 問う法華宗は何れの經に依つて仏の印契相好を造るや顯教に
いずれ は無し但真言の印を盗むと覺えたり如何、答う之に依つて法華を
しんこん 謗ずるか、一義に云く汝盜むの義相違せば亡国は治定なるか、
いわ 一義に云く汝法華宗の建立する所の大段の妙法蓮華經をば
なんじ ほうこうく みようほうれんげきよう

本尊ほんぞんと落居こして問うか、一義いぎに云く釈尊しゃくそんを三部よに依つて建立こんりゆうする故ゆえに驢牛ろごの三身さんじんと下すか若し爾しかなりと云わば返つて汝なんじは真言しんごんを誹謗ひぼうする者なりと責む可べし、一義いぎに云く三世さんぜの諸仏しよぶつの印契いんけい相好そうごう実に妙法蓮華經みょうほうれんげきように依つて具足ぐそくするの義落居ほうこくせば亡国ほうこくは治定なるか、又盜人ぬすびとは治定なるか、一義いぎに云く竜女りゆうにょ靈山りやうざんに即身そくしんに印契いんけい相好そうごう具足ぐそくし南方なんほうに成道じやうどうを唱えしは真言しんごんに依つて建立こんりゆうするか若し爾しかなりと云わば直ただちに經文きやうもんを出せと責む可べきなり。

問う亡国ほうこくの証拠しやうこ如何いかん、答う法華ほつけを誹謗ひぼうする故なり云云、一義いぎに云く三徳さんとくの釈尊しゃくそんに背く故なり云云、一義いぎに云く現世安穩げんせあんのん・後生ごしやう善處ぜんしよの妙法蓮華經みょうほうれんげきように背き奉る故に今生こんじやうには亡国後生ほうこくごしやうには無間むげんと云うなり、一義いぎに云く法華經第三の劣きやうもんとは經文きやうもんなるか自義じぎなるか若し爾しからば亡国治定なるか。

他云く密教みつぎょうに対すれば第三の劣なり、答う一義に云く此の義

きようもん

経文きやうもんなるか自義じぎなるか、一義に云く顕教けんきやうの内に法華第一ほつくだいいちなる事

落居らくこするか、若し爾しかなりと云はばさては弘法こうぼうは僻事ひがごとなり顕教けんきやうの

内うちにして法華ほつげを華嚴けこんに対して第二・真言しんごんに対して第三と云う故な

り、一義に云く真言しんごんに対して第一だいいちならば亡国ぼうこくは治定なるか。

他云く印・真言しんごんを説かざるが故に第三の劣と云うなり、答う此

の故ゆえに劣とは経文きやうもんなるか自義じぎなるか、一義に云く若し法華ほつげに説

かば亡国ぼうこくは治定なるか。

他云く大日・釈迦しゃか各別かくべつなり、答う一義に云く此の故ゆえに法華ほつげを

謗ぼうずるか、一義に云く若し一仏いちぶつならば亡国ぼうこくは治定なるか、一義に

云く各別かくべつなれば劣とは経文きやうもんなるか自義じぎなるか。

他云く顕教けんきやうは応身密教おうじんみつぎやうは法身ほっしんの説なり此の故ゆえに法華ほつげは第三の

劣なり、自ら云く応身の説の故に法華劣とは経文なるか自義なるか、一義に云く法華法身の説ならば亡国治定なるか、一義に云く真言は応身の説ならば亡国は治定なるか。

他云く五智五仏の時は北方は釈迦中央は大日と見えたり如何、答う一義に云く中央釈迦ならば亡国治定なるか、一義に云く北方釈迦と云う事は三部の内に無し不空の義なり仏説に非ず。

他云く法華は穢土の説なり真言は三界の外の法界宮の説なり、答う一義に云く真言は三界の内の説ならば亡国治定なるか義釈の文。

他云く顕教の内にて大日・釈迦一体と説くとも密教の内にては二仏各別なり名は同じけれども義異なるなり如何、答う此の故に亡国と云うなり、一義に云く此くの如く云う事直に

経文きょうもんを出すいだ可べきなり。

他い云わく竜女りゅうにょは真言しんごんの成仏じょうぶつ・法華ほっけには三密さんみ闕かくる故ゆゑなり、答こたう

自義じぎなるか経文きょうもんなるか。

他い云わく経文きょうもんなり「陀羅尼だらにを得え・不退転ふたいを得えたり」云云、陀羅尼だらに

は三密さんみの加持かじなり、答こたう、此こゝの陀羅尼だらにを真言しんごんと云いうは自義じぎなるか

経文きょうもんなるか、一義いに云いくさては弘法こうぼうの僻事ひがことなり其そのの故ゆゑは此こゝの

陀羅尼だらにを戲論けろん第三だいさんの劣せつと下くだすなり、一義いに云いく自語じご相違そうゐなり法華ほっけ

に印有ある故ゆゑなり。

他い云わく守護しゆご経の文ぶんに依よれば釈迦しやくかは大日だいにちより三密さんみの法門ほうもんを習ならいて

成仏じょうぶつするなり、答こたう此こゝの故ゆゑに法華ほっけを謗ぼうずるか、一義いに云いく此この

文ぶんは三説さんせつの内うちなるか外ぐわいなるか、一義いに云いく此これに相違そうゐせば亡国ぼうこくは

治定ちぢやうなるか。

他云く法華經には「合掌を以て敬心し具足の道は聞かんと欲す」と云へり何ぞ印・真言を捨つるや、答う此の故に法華を謗ずるか、一義に云く自義なるか經文なるか、一義に云く此の故に真言を捨てずとは經文なるか、一義に云く此の文は真言を持つと云う文なるか、一義に文段を以て責む可し。

他云く弘法大師を無間と云うは經文なるか自義なるか、答う經文なり。

他云く二十八品の中には何れぞや、答う二十八品の中に有らば墮獄治定なるか、他云く爾なり、答う法華を誹謗すること治定なるか若し爾らば經文を出して責む可きなり

◆ 二 宿屋入道への御状

文永五年八月 四十七歳御作

与宿屋光則

於鎌倉

16

9P

其の後は書・絶えて申さず不審極り無く候、抑去る正嘉元年

丁巳八月二十三日戌亥の刻の大地震、日蓮諸経を引いて之を

勘えたるに念仏宗と禅宗等とを御帰依有るが故に日本守護の

諸大善神瞋恚を作して起す所の災なり、若し此れを対治無くんば

他国の為に此の国を破らる可きの由勘文一通之を撰し正元二年庚

申七月十六日御辺に付け奉つて故最明寺入道殿へ之を進覧す、

其の後九箇年を経て今年大蒙古国より牒状之有る由・風聞す等

云云、経文の如くんば彼の国より此の国を責めん事必定なり、

而るに日本国の中には日蓮一人当に彼の西戎を調伏するの人た

る可^べしと兼^{かね}て之^{これ}を知^しり論文^{ろんぶん}に之^{これ}を勸^{かん}う、君^{きみ}の為^{ため}・国^{くに}の為^{ため}・神^{かみ}の為^{ため}
・仏^{ぶつ}の為^{ため}・内奏^{ないそう}を経^へらる可^べきか、委細^{いさい}の旨^{むね}は見参^{けんさん}を遂^とげて申^{もう}す可^べ
く候^{きこう}、恐^{きょう}恐^{きょう}謹言^{きんげん}。

文永五年八月二十一日

日蓮

花押

宿屋左衛門入道殿

◆三三 北条時宗への御状

169P

謹^{つし}んで言^{ごん}上^{じょう}せしめ候^{きこう}、抑^{そも}も正月十八日・西戎大蒙古国^{さいじょうだいまうここく}の
牒^{ちよう}状^{じょう}到来^{らい}すと、日蓮^{にちれん}先年^{しんねん}諸経^{しよきやう}の要文^{ようぶん}を集^あめ之^{これ}を勸^{かん}えたること
立正安国論^{りっしょうあんこくろん}の如^{ごと}く少しも違^{たが}わず普合^{ふごう}しぬ、日蓮^{にちれん}は聖人^{しょうにん}の一分^{いちぶん}に

当れり未萌を知るが故なり、然る間重ねて此の由を驚かし奉る
急ぎ建長寺・寿福寺・極楽寺・多宝寺・浄光明寺・大仏殿等の
御帰依を止めたまえ、然らずんば重ねて又四方より責め来る可き
なり、速かに蒙古国の人を調伏して我が国を安泰ならしめ給え、
彼を調伏せられん事日蓮に非ざれば叶う可からざるなり、諫臣
国に在れば則ち其の国正しく争子家に在れば則ち其の家直し、
国家の安危は政道の直否に在り仏法の邪正は經文の明鏡に
依る。

夫れ此の国は神国なり神は非礼を稟けたまわず天神七代・
地神五代の神神其の外諸天善神等は一乗擁護の神明なり、然も
法華經を以て食と為し正直を以て力と為す、法華經に云く諸仏
救世者・大神通に住して衆生を悦ばしめんが為の故に無量の

神力を現げんずと、一乗棄捨いちじょうきしやの国に於おいては豈善神怒あにぜんじんを成さざらんや、
仁王經にんのうきやうに云いく「一切いっさいの聖人しょうにん去ひちなんる時七難おち必ず起おこる」と、彼の呉王
は伍子胥ごししよが詞ことばを捨て吾わが身を亡なし・桀けつちゆう紂りゆうひは竜比うしなを失うつて国位こくいを
喪ほろぼす、今・日本国にほんこく既に蒙古国もうこに奪あわれんとす豈歎あになげかざらんや豈
驚おどろかざらんや、日蓮にちれんが申もうす事御用もちい無なくくんば定さなわめて後悔こうかい之有ある
可べし、日蓮にちれんは法華經ほけきやうの御使おんつかいなり經いに云いく「則すなわち如來にょらいの使如來にょらいの
所遣しよけんとして如來にょらいの事を行なず」と、三世諸仏さんぜしよぶつの事とは法華經ほけきやうなり、
此あずの由方方かたがたへ之これを驚おどろかし奉たてまつる一所に集めて御評議有あつて御報ごほうに
予あずかる可べく候しよせん、所詮しよせんは万祈ばんきを抛なげうつて諸宗しよしゆうを御前おんまえに召あし合せ仏法ぶつぽう
の邪正じやせいを決たまし給たまえ、澗底かんていの長松ながまつ未いまだ知あらざるは良匠あやまの誤あり闇中あんちゆう
の錦衣きんいを未いまだ見くざるは愚人ぐにんの失とがなり。

三國ぶつぽう仏法ぶんべつの分別おに於いては殿前いに在いり所謂阿闍世いわゆるあじやせ・陳隋ちんずい・桓武かんむ

是なり、敢て日蓮が私曲に非ず只偏に大忠を懷く故に身の為に
之を申さず神の為・君の為・国の為・一切衆生の為に言上せし
むる所なり、恐恐謹言。

文永五年辰十月十一日

日蓮花押

謹上 宿屋入道殿

◆二三 宿屋左衛門光則への御状

170P

先年勘えたるの書安国論に普合せるに就て言上せしめ候い
畢んぬ、抑正月十八日西戎大蒙古国より牒状到来すと、
之を以て之を按ずるに日蓮は聖人の一分に当り候か、然りと
雖も未だ御尋に予らず候の間重ねて諫状を捧ぐ、希くば御帰依の
寺僧を停止せられ宜しく法華経に帰せしむべし、若し然らずんば

後悔何ぞ追わん、此の趣を以て十一所に申せしめ候なり定めて御

評議有る可く候か、偏に貴殿を仰ぎ奉る早く日蓮が本望を遂げし

め給え、十一箇所と申すは平の左衛門尉殿に申せしむる所なり

委悉申し度く候と雖も上書分明なる間省略せしめ候、御氣色を

以て御披露庶幾せしむる所に候、恐恐謹言。

文永五年辰十月十一日日

日蓮 花押

謹上 宿屋入道殿

◆二四 平左衛門尉頼綱への御状

171P

蒙古国の牒状到来に就いて言上せしめ候い畢んぬ、抑先

年日蓮立正安国論に之を勘えたるが如く少しも違わず普合せし

む、然る間重ねて訴状を以て愁鬱を發かんと欲す爰を以て諫旗

を公前に飛ばし争戦を私後に立つ、併ながら貴殿は一天の屋梁

を公前に飛ばし争戦を私後に立つ、併ながら貴殿は一天の屋梁

らんや、早く須く退治を加えて謗法の咎を制すべし。

夫れ以れば一乗・妙法蓮華経は諸仏正覚の極理・諸天善神

の威食なり之を信受するに於ては何ぞ七難来り三災興らんや、

剩え此の事を申す日蓮をば流罪せらる争でか日月・星宿罰を

加えざらんや、聖徳太子は守屋の悪を倒して仏法を興し秀郷は将

門を挫いて名を後代に留む、然らば法華経の強敵為る御帰依の寺

僧を退治して宜く善神の擁護を蒙るべき者なり、御式目を見るに

非抛を制止すること分明なり、争でか日蓮が愁訴に於ては御

叙い無らん豈御起請の文を破るに非ずや、此の趣を以て方方へ

愚状を進らす、所謂鎌倉殿・宿屋入道殿・建長寺・寿福寺・

極楽寺・大仏殿・長楽寺・多宝寺・浄光明寺・弥源太殿並びに

此の状合せ十一箇所なり、各各御評議有つて速かに御報に預るべ

く候、若し爾らば卞和が璞磨いて玉と成り法王髻中の明珠此

の時に顕れんのみ、全く身の為に之を申さず、神の為・君の為・

国の為・一切衆生の為に言上せしむるの処なり件の如し、

きようきようきんげん
恐恐謹言。

ぶんえい
文永五年戊辰十月十一日
にちれん
日蓮
かおう
花押

さえもん
平左衛門尉殿

◆二五
ほうじょうやげんた
北条弥源太への御状
172P

い
去ぬる月、御来臨急ぎ急ぎ御帰宅本意無く存ぜしめ候い畢んぬ、

そもそももうこ
抑蒙古国の牒状到来の事上一人より下万民に至るまで驚動

極きわまり無なし然しかりと雖いえども何いづれの故ゆゑなること人未いまだ之これを知らず、日蓮にちれん
兼かねて存知すなわせしむるの間既すでに一論いちろんを造つくつて之これを進覽しんせんせり徴先達だつ
つて顕あらわれ則すなわち災必かならずず後のちに来きる、去いぬる正嘉元年丁巳八月廿三日
戌亥いぬいの刻ときの大地震だいちしん是併これながら此こゝの瑞あらに非あらずや、法華經ほけきやうに云いく
如に是相よぜと天台大師云てんだいだいしく「蜘蛛下りて喜事来り・鵲かんにやく鳴いて行人
来きる」と、易いに云いく吉凶動きつぎやうに於おいて生おはずと此等これらの本文豈替あにかるべ
んや、所詮しよせん諸宗しよしゆうの帰依きえを止とどめて一乗妙經いちじやうみやうきやうを信受しんじゆせしむべきの
由勘文かんもんを捧ささげ候さう、日本亡国にほんぼうこくの根源こんげんは浄土・真言・禪宗・律宗の
邪法惡法じゃほうあくほうより起おこれり諸宗しよしゆうを召よし合せ諸經しよきやう勝劣しやうれつを分別ぶんべつせしめ
給たまえ、殊ことに貴殿さがみは相模さうどのの守殿しうてんの同姓どうせいなり根本滅こんぽんするに於おいては枝葉しやう
豈あ栄えんや、早く蒙古国もうこを調伏じやうぶくし国土こくどを安穩あんのんならしめ給たまえ、法華ほつけ
を謗ほうずる者は三世諸仏さんぜしよぶつの大怨敵おんてきなり、天照太神・八幡大菩薩等てんしやうだいじん はちまんたいぼさつ

・此の国を放ち給う故・大蒙古国より牒状来るか、自今已後各
各生取と成り他国の奴と成る可し、此の趣き方々へ之れを驚か
し愚状を進ぜしめ候なり、恐恐謹言。

文永五年ぶんえい十月十一日

日蓮 花押かおう

謹上 きんじょう
弥源太入道殿 やげんたにゅうどう

◆二六 建長寺道隆への御状 けんちようじどうりゅう

173P

夫れそ仏閣軒ぶつかくのきを並べ法門屋ほうもんいえに拒いたる仏法ぶつぽうの繁榮はんえいは身毒支那けんどくに超過ちょうかし
僧宝そうぼうの形儀ろくつうは六通ろくつうの羅漢らかんの如ごとし、然しかりと雖いえども一代いちだい諸經しよきように於おいて
未だいま勝劣しょうれつ・淺深せんじんを知らず併さながら禽獸きんじゅうに同じ忽たちまち三徳さんとくの釈迦しやか如来にょらい
を抛なげうつて、他方たほうの仏・菩薩ぼさつを信あず是豈あにぎやくろ逆路伽耶陀がやだの者あらに非あらずや、
念仏ねんぶつは無間地獄むげんじごくの業・禪宗ぜんしゅうは天魔てんまの所為しよい・真言しんごんは亡国ぼうこくの惡法あくほう・
律宗りっしゅうは国賊そくの妄說もうせつと云云、爰こゝに日蓮にちれん去ぬる文応元年ぶんおうがんねんの比勘かんえた
るの書を立正安国論りっしやうあんこくろんと名け宿屋入道やどやにゅうどうを以もつて故最明寺殿さいみやうじに奉たてまつ
ぬ、此の書の所詮しよせんは念仏ねんぶつ・真言しんごん・禪・律等の惡法あくほうを信あずる故ゆゑに
天下てんがに災難さいなん頻しきりに起あまつさえあまつさえ 剽たこくえ他国たこくより此の国責べめらる可べきの由

これ 之を勘えたり、然るに去ぬる正月十八日 牒状 到来すと日蓮が
かんが 勘えたる所に少しも違わず普合せしむ、諸寺・諸山の祈☆威力滅
する故か将又惡法の故なるか鎌倉中の上下万人道隆 聖人をば仏
の如く之を仰ぎ良観 聖人をば羅漢の如く之れを尊む、其の外寿
福寺・多宝寺・浄光明寺・長樂寺・大仏殿の長老等は「我慢の
心充滿し、未だ得ざるを得たりと謂う」の増上慢の大悪人なり、
何ぞ蒙古国の大兵を調伏せしむ可けんや、 剩 え日本国中の
上下万人悉く生取と成る可く今世には国を亡し後世には必ず無間
に墮せん、日蓮が申す事を御用い無くんば後悔之れ有る可し此の
趣鎌倉殿・宿屋入道殿・平の左衛門の尉殿等へ之を進状せしめ
候、一処に寄り集りて御評議有る可く候、敢て日蓮が私曲の義に
非ず只経論の文に任す処なり、具には紙面に載せ難し併ながら

対決の時を期す、書は言を尽さず言は心を尽さず、
恐恐謹言。

文永五年ぶんえい辰十月十一日 日蓮にちれん 花押かおう

進上しんじよう 建長寺道隆証人侍者御中けんちようじどうりゅう おんちゆう

◆二七 極楽寺良観への御状

174

西戎大蒙古国簡牒の事に就て鎌倉殿其の外へ書状を進ぜしめ

候、日蓮去る文応元年の比勘え申せし立正安国論の如く毫末

計りも之に相違せず候、此の事如何、長老忍性速かに嘲哂の心

を翻えし早く日蓮房に帰せしめ給え、若し然らずんば人間を

輕賤する者・白衣の与に法を説くの失脱れ難きか、依法不依人

とは如来の金言なり、良観聖人の住处を法華經に説て云く

「・或は阿練若に有り納衣にして空閑に在り」と、阿練若は無事

と翻はんず争いかでか日蓮にちれんを譏奏ざんそうするの条住処じゅうしょと相違そういせり併ながら三学に
似たる矯賊そくの聖人しょうにんなり、僭聖せんしょう増上慢ぞうじょうまんにして今生こんじょうは国賊こくそく・来世らいせ
は那落だざいに墮在だざいせんこと必定いささかなり、聊いささかかも先非くを悔くいなば日蓮にちれんに歸
す可べし、此の趣おもむき鎌倉殿かまくらを始め奉り建長寺等其の外ひろうへ披露ひろうせしめ
候しよせんほんい、所詮しよせんほんい本意とを遂げんと欲せば対決ほつに如しかず、即ち三蔵すなわ浅近さんそうの法
を以て諸經もつしよきよう中王ほつの法華ほつに向うは江河こうかと大海たいかいと華山ごそんと妙高じあとの
勝劣しょうれつの如ごとくならん、蒙古国調もうこ伏じようぶくの秘法定めて御存知有る可ひほうく候
か、日蓮にちれんは日本第一にほんだいいちの法華經ほけきようの行者ぎようじゃ蒙古国退治もうこの大将な為り「於
一切衆生いっさいしゅじよう中亦為第一またこれだいいち」とは是これなり、文言多端理たたんを尽あたす能あたわず併
ながら省略ぶんえいせしめ候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

文永五年ぶんえい辰十月十一日

日蓮花押にちれんかおう 謹上きんじよう

極楽寺長老良觀聖人・御所ごくらく ちようろうりようかんしょうにん

◆二八

大仏殿別当への御状

174p

いぬ 去る正月十八日西 戎大蒙古国より 牒状 到来し候い畢んぬ、

そ 其の状に云く大蒙古国皇帝日本国王に書を上る大道の行わるる

そ 其の義・たり信を構え睦を修す其の理何ぞ異ならん乃至至元三年

ひのえとち 丙寅正月日と、右此の状の如くんば返牒に依つて日本国を襲う

ベ 可きの由分明なり、日蓮兼ねて勘え申せし立正安国論に少しも

そうい 相違せず急に退治を加え給え、然れば日蓮を放て之を叶う可か

らず、早く我慢を倒して日蓮に帰すべし、今生空しく過ぎなば

こうかいなん 後悔何ぞ追わん委しく之を記すこと能わず、此の趣方方へ申せし

め候、一処に聚集して御調伏有る可く候か。

ぶんえい 文永五年十月十一日

にちれんかおう
日蓮花押

きんじょう
謹上

だいぶつでんべつとうごほう
大仏殿別当御房

◆二九 寿福寺への御状

175P

風聞の如くんば蒙古国の簡牒・去る正月十八日慥に到来候い
畢んぬ、然れば先年日蓮が勘えし書の立正安国論の如く普合せ
しむ、恐くは日蓮は未萌を知る者なるか、之を以て之を按ずるに
念仏・真言・禅・律等の悪法・一天に充滿して上下の師と為る
の故に此の如き他国侵逼の難起れるなり、法華不信の失に依つて
皆一同に後生は無間地獄に墮す可し早く邪見を翻し達磨の法
を捨てて一乗正法に帰せしむ可し、然る間方方へ披露せしめ候
の処なり、早早一処に集りて御評議有る可く候、委くは対決の
時を期す、恐恐謹言。

ぶんえい
文永五年十月十一日

にちれんかおう
日蓮花押

きんじょう
謹上

寿福寺侍司

おんちゅう
御中

◆三〇 浄光明寺への御状

175p

だいまうこくく 大蒙古国の皇帝日本国を奪う可きの由牒状を渡す、此の事先
りっしょうあんこくろん 年立正安国論に勘え申せし如く少しも相違せしめず内内日本
だいいち 第一の勸賞に行わる可きかと存せしめ候の処 剩え御称歎に
こくおう 預らず候、是れ併ながら鎌倉中著・の類律宗・禅宗等が「向
だいいち 国王・大臣誹謗説我悪」の故なり、早く二百五十戒を抛つて日蓮
こくおう に帰して成仏を期す可し、若し然らずんば墮在無間の根源なら
じょうぶつ ん、此の趣き方々へ披露せしめ候い畢んぬ、早く一処に集りて対
おもむ 決を遂げしめ給え日蓮・庶幾せしむる処なり、敢て諸宗を蔑如
たま 決を遂げしめ給え日蓮・庶幾せしむる処なり、敢て諸宗を蔑如
にちれん 決を遂げしめ給え日蓮・庶幾せしむる処なり、敢て諸宗を蔑如
しよき 決を遂げしめ給え日蓮・庶幾せしむる処なり、敢て諸宗を蔑如
ところ 決を遂げしめ給え日蓮・庶幾せしむる処なり、敢て諸宗を蔑如
あえて 決を遂げしめ給え日蓮・庶幾せしむる処なり、敢て諸宗を蔑如
べつじよ 決を遂げしめ給え日蓮・庶幾せしむる処なり、敢て諸宗を蔑如

するに非ざるのみ、法華の大王戒に對して小乗 ☆ ☆ 戒・豈

相對に及ばんや、笑う可し笑う可し。

文永五年十月十一日 日蓮花押

謹上 淨光明寺侍者御中

◆三一 多宝寺への御狀 176p

日蓮・故最明寺殿に奉りたるの書・立正安國論御披見候か
未萌を知つて之を勸え申す処なり、既に去る正月蒙古國の簡牒
到來す何ぞ驚かざらんや、此の事不審千万なり縦い日蓮は悪し
と雖も勸うる所の相當るに於ては何ぞ用いざらんや、早く一所に
集りて御評議有る可し、若し日蓮が申す事を御用い無くんば今世
には國を亡し後世は必ず無間・大城に墮す可し、此の旨方方へ

これ
之を申せしめしなり敢て日蓮が私曲に非ず委しく御報に預る可く

候、言は心を尽さず書は言を尽さず併ながら省略せしめ候、

きようきようきんげん

恐恐 謹言。 Ⅱ

ぶんえい

文永五年十月十一日

にちれん
日蓮

かおう
花押

きんじよう
謹上

たほう
多宝寺侍司

おんちゆう

御中

◆三二 長楽寺への御状

176P

もうこ
蒙古国調 伏の事に就いて方方へ披露せしめ候い畢んぬ、既に

にちれんりっしょうあんこくろん
日蓮立正安国論に勘えたるが如く普合せしむ、早く邪法邪教を

じっぼうじっきよう

捨て実法実教に帰す可し、若し御用い無くんば今生には国を亡

うしな ころし

し身を失い後生には必ず那落に墮す可し、速かに一処に集りて

だんこう

談合を遂げ評議せしめ給え日蓮庶幾せしむる所なり、御報に依つ

て其の旨を存ず可く候の処なり敢て諸宗を蔑如するに非ず但此
の国の安泰を存する計りなり、
恐恐謹言。

文永五年十月十一日
日蓮花押

謹上
長樂寺侍司御中

◆三三 弟子・檀那中への御状

177P

大蒙古国の簡牒到来に就いて十一通の書状を以て方方へ申せ
しめ候、定めて日蓮が弟子・檀那・流罪・死罪一定ならん少しも
之を驚くこと莫れ方方への強言申すに及ばず是併ながら
而強毒之の故なり、日蓮庶幾せしむる所に候、各各用心有る可し
少しも妻子・眷属を憶うこと莫れ權威を恐るること莫れ、今度
生死の縛を切つて仏果を遂げしめ給え、鎌倉殿・宿屋入道・平

の左衛門尉・弥源太・建長寺・寿福寺・極楽寺・多宝寺・

浄光明寺・大仏殿・長樂寺十一箇所仍つて十一通の状を書して

諫訴せしめ候い畢んぬ、定めて子細有る可し、日蓮が所に来りて

書状等披見せしめ給え、恐恐謹言。

文永五年辰十月十一日

日蓮花押

日蓮弟子・檀那中

◆三四 問注得意抄

文永六年五月 四十八歳御作

78p

与富木入道外二人

土木入道殿

日蓮

今日召し合せ御問注の由承り候、各各御所念の如くならば三千

年に一度花さき菓なる優曇華に値えるの身か、西王母の蘭の桃

・九千年に三度之を得たる東方朔が心か一期の幸何事か之に如か

ん、御成敗の甲乙は且らく之を置く前立つて鬱念を開発せんか、

但し兼日御存知有りと雖も駿馬にも鞭うつつの理之有り、今日の御

出仕・公庭に望んでの後は設い知音為りと雖も傍輩に向つて雑言

を止めらる可し両方召し合せの時・御奉行人・訴陳の状之を読む

の尅何事に付けても御奉行人の御尋ね無からんの外一言を出す

可からざるか、設い敵人等悪口を吐くと雖も各各当身の事一二度

までは聞かざるが如くすべし、三度に及ぶの時・顔貌を変ぜず

・言を出さず・語を以て申す可し各各は一处の同輩なり私に於て

は全く遺恨無きの由之を申さる可きか、又御供雑人等に能く能く

禁止を加え喧嘩を出す可からざるか、是くの如き事書札に尽し

難^{がた}し心を以^{もつ}て御斟^{しんしやく}酌^あ有^べる可^べきか、此^{これら}等^らの矯^{きようげん}言^いを出^{いだ}す事恐^{そん}を存^{ぞん}ず
と雖^{いえど}も仏經^{ぶつきよう}と行者^{ぎやうじゃ}と檀那^{だんな}と三事^{さんじ}相^{そう}應^{おう}して一事^{いちじ}を成^たさん^めが為^{ため}に愚^{おろか}
言^いを出^{いだ}す処^{ところ}なり、恐^{きよう}恐^{きよう}謹^{きん}言^{げん}。

五月九日

日蓮^{にちれん}花押^{かおう}

三人御中

◆三五 行敏^{ごへん}御返事^じ 文永^{ぶんえい}八年七月 五十歳御作 与浄土^{じようど}僧行敏

179p

◆三六 行敏初度の難状^{なん}

179p

未^{いま}だ見参^{けんさん}に入らずと雖^{いえど}も事^{こと}の次^{つぎ}を以^{もつ}て申^{もう}し承^{うけたま}る^{わる}は常^{じよう}の習^{しゆ}に候^{こう}
か、抑^{そもそも}風聞^{ふうもん}の如^{ごと}くんば所立^{しよりゆう}の義^ぎ尤^{もつ}も以^{もつ}て不^ふ審^{しん}なり、法華^{ほっけ}の前^{まへ}

に説ける一切の諸経は皆是妄語にして出離の法に非ずと是一、
大小の戒律は世間を誑惑して惡道に墮せしむるの法と是二、
念仏は無間地獄の業為と是三、禪宗は天魔の説若し依つて行ず
る者は惡見を増長すと是四、事若し実ならば仏法の怨敵なり、
仍て対面を遂げて惡見を破らんと欲す、将又其の義無くんば
争でか惡名を痛ませられざらんや、是非に付き委く示し賜わる
可きなり、
恐恐謹言。

七月八日 僧行敏花押

日蓮阿闍梨御房

◆三七 聖人御返事

179P

条条御不審ふしんの事私の問答もんどうは事行き難かたく候か、然しかれば上奏じょうそうを經
られ仰おおせ下さるるの趣おもむきに随したがつて是非ぜひを糾明きゅうめいせらる可べく候か、此
の如ごとく仰おおせを蒙こむり候条尤もつとも庶幾しよきする所に候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

七月十三日

日蓮花押にちれんかおう

行敏御房御返事ごほうごへんじ

◆三八 行敏訴状御会通そじよう

文永八年 五十歳御作 180P

当世とうせ・日本第一にほんだいいちの持戒じかいの僧・良觀りようかん聖人しょうにん並びに法然ほうねん上人しょうにんの孫
弟子でし念阿弥陀仏あみだぶつ・道阿弥陀仏どうあみだぶつ等の諸聖人しよしょうにん等日蓮にちれんを訴訟しよそする状に
云いわく早く日蓮にちれんを召し決けつせられて邪見じゃけんを摧破さいはし正義せいぎを興隆こうりゆうせんと
欲ほする事云云、日蓮にちれん云く邪見じゃけんを摧破さいはし正義せいぎを興隆こうりゆうせば一眼いっげんの龜
の浮木の穴うきまのあなに入るならん、幸甚こうじん幸甚こうじん。

彼の状いに云いわく右八万四千はちまんの教けう乃至ないし一いっを是しよとして諸しよを非ひとする理

豈に然る可けんや云云、道綽禪師云く当今末法は是五濁惡世なり唯淨土の一門のみ有つて路に導入す可し云云、善導和尚云く千中無一云云、法然上人云く捨閉閣拋云云、念阿上人等の云く一を是とし諸を非とす謗法なり云云、本師三人の聖人の御義に相違す豈に逆路伽耶陀の者に非ずや、將又忍性良觀聖人彼等の立義に与力して此を正義と存せらるるか、又云く而るに日蓮偏えに法華一部に執して諸余の大乘を誹謗す云云、無量義經に云く四十余年・未顕真實・法華經に云く要當說真實と・又云く宣示顯說と・多宝仏証明を加えて云く皆是真實と十方の諸仏は舌相至梵天と云う云云、已今當の三說を非毀して法華經一部を讚歎するは釈尊の金言なり諸仏の傍例なり敢て日蓮が自義に非ず、其の上此の難は去る延曆・大同・弘仁の比・南都の徳一

だいに 大師が伝でんぎよう 教大師を難破せし言なり、其その難已なんすでに破われて法華宗を
こんりゅう おわ
建立し畢おわんぬ。

又いわ云く所謂法華前説の諸經しよきようは皆是れ妄語もうごなりと云云此又日蓮にちれん
が私の言に非あらず、無量義經に云く未だ真実しんじつを顯あらわさず妄語未顯真実とはの異名なり
ほけきよう
法華經第二に云く寧ろ虚妄有りや不むしなり云云、第六に云く此の
りよういこもう つみ
良医虚妄の罪を説くや不いなや云云、涅槃經に云く如来虚妄の言無し
いえども しゅじようこもう
と雖も若し衆生虚妄の説に因よると知れば云云、天台云く則ち為すなわ
によらいきこ ことば
如来綺語の語云云、四十余年の經經を妄語と称しょうすること又
にちれん
日蓮が私の言に非あらず、又云く念仏は無間の業と云云法華經第一に
すなわ けんどん だ
云く我れ則ち慳貪に墮だせん此の事為さだめてふか不可なり云云、第二に云く
そ みようじゅう あびこく
其の人命終して阿鼻獄に入らん云云、大覺世尊但觀經・念仏
よんじゅうよねん きようぎよう ほけきよう えんぜつ さんあくどう
等の四十余年の經經を説て法華經を演説したまわずんば三惡道

をまぬか脱がたれ難し云云、何いかに況いわんや末代まつだいの凡夫ぼんぶ・一生の間・但みづか自ねんぶつらも念ねんぶつ仏

の一行とどまに留たにんり他人をも進あにむげんめずんば豈だ無間だに墮だせざらんや、例れいせば

民じんと子ことの王わうと親しんとに随したがわざるが如ごとし、何いかに況いわんや道どう・綽しやく・善ぜん導どう・

法ほう然ねん上人しょうにん等ねんぶつ念ねんぶつ仏ぶつ等を修しゆぎ行ようする輩やから法華經ほけきようの名字みようじを挙あげて念ねんぶつ仏ぶつに

対たい当とうして勝しょう劣れつ難なん易い等を論ろんじ未み有いう一人いちにん得とく者しゃ・十じゆつ即そく十じゆつ生しょう・百ひやく即そく

百ひやく生しょう・千せん中ちゆう無む一いつ等とうと謂おもうは無む間げんの大火たいかを招まねかざらんや、又い云わく

禅宗ぜんしゆうは天魔てんま波旬はじゆんの説てんまと云云、此に又あら日蓮にちれんが私あの言ごに非あらず彼かの宗しゆうの

人ひと人の云いく教外きやうげ別傳べつでんと云云、仏ぶつの遺言ゆいごんに云いく我わがが經きやうの外がわに正しょう法ほう

有ありといわば天魔てんまの説てんまなり云云、教外きやうげ別傳べつでんの言ご豈あに此この科とがを脱まぬかれん

や、又い云わく大小だいしやうの戒律かいりつは世間せけん誑惑おほわくの法はと云云、日蓮にちれんが云いく小乘しやうじやう

戒かいは仏世ぶつぜすら猶な之これを破はす其その上が月氏げつし国こくに三寺さんじ有あり、所い謂わ一向いっかう

小乘しやうじやうの寺じと一向いっかう大乘だいじやうの寺じと大小だいしやう兼行けんぎやうの寺じとなり云云、一向いっかう

小と一向大とは水火の如し將又道路をも分隔せり、日本国に去る

聖武皇帝と孝謙天皇との御宇に小乗の戒壇を三所に建立せり、

其の後桓武の御宇に伝教大師之を責め破りたまひぬ、其の詮は

小乗戒は末代の機に当らずと云云、護命景深の本師等其の

諍論に負くるのみに非ず六宗の碩徳各退状を捧げ伝教大師に

帰依し円頓の戒体を伝受す云云、其の状今に朽ちず汝自ら開き

見よ、而るを良観上人当世・日本国の小乗は昔の科を存せず

という、又云く年来の本尊弥陀・観音等の像を火に入れ水に流す

等云云、此の事慥なる証人を指し出し申す可し若し証拠無くん

ば良観上人等自ら本尊を取り出して火に入れ水に流し科を日蓮

に負せんと欲するか委細は之を糾明せん時其の隠れ無らんか、

但し御尋ね無き間は其の重罪は良観上人等に譲り渡す、二百

五十戒を破失せる因縁此の大妄語に如かず無間・大城の人他処

に求ること勿れ、又云く凶徒を室中に集むと云云、法華經に云く

・或は阿練若に有り等云云、妙樂云く東春云く輔正記云く此等

の經釈等を以て当世・日本国に引き向うるに汝等が挙る所の

建長寺・寿福寺・極樂寺・多宝寺・大仏殿・長樂寺・淨光明寺

等の寺寺は妙樂大師の指す所の第三最甚の惡所なり、東春に

云く即ち是れ出家処に一切の惡人を撰す云云、又云く兩行は公処

に向う等云云、又云く兵杖等云云、涅槃經に云く天台云く

章安云く妙樂云く法華經守護の為の弓箭兵杖は佛法の定め

る法なり例せば国王守護の為に刀杖を集むるが如し、但し良觀

上人等弘通する所の法・日蓮が難脱れ難きの間既に露顯せしむ

可きか、故に彼の邪義を隠さんが為に諸国の守護地頭雜人等を相

語らいて言く日蓮並びに弟子等は阿弥陀仏を火に入れ水に流す
汝等が大怨敵なりと云云、頸を切れ所領を追い出せ等と勸進す
るが故に日蓮の身に疵を被り弟子等を殺害に及ぶこと数百人な
り、此れ偏に良観・念阿・道阿等の上人の大妄語より出たり
心有らん人人は驚く可し怖る可し云云、毘瑠璃王は七万七千の
諸の得道の人を殺す、月氏国の大族王は卒都婆を滅毀し僧伽藍を
廢すること凡そ一千六百余処乃至大地震動して無間地獄に堕ちに
き、毘盧釈迦王は釈種九千九百九十万人を生け取りて並べ従えて
殺戮す積屍葬の如く流血池を成す、弗沙弥多羅王は四兵を興し
て五天を回らし僧侶を殺し寺塔を焼く、説賞迦王は仏法を毀壞す、
訖利多王は僧徒を斥逐し仏法を毀壞す、欽明・敏達・用明の三王
の詔に曰く炳然として宜く仏法を断ずべし云云、二臣自ら寺に

詣で堂塔を斫倒し仏像を毀破し火を縦つて之を焼き所焼の仏像
を取つて難波の堀江に棄て三尼を喚び出して其の法服を奪い並び
に答を加う云云、大唐の武宗は四千六百余処を滅失して僧尼還俗
する者計うるに二十六万五百人なり、去る永保年中には山僧・
園城寺を焼き払う云云、御願は十五所堂院は九十所・塔婆は四基
・鐘樓は六宇・経蔵は二十所神社は十三所・僧坊は八百余宇舎
宅は三千余等云云、去る治承四年十二月二十二日・太政入道浄
海・東大・興福の両寺を焼失して僧尼等を殺す、此等は仏記に
云く此等の悪人は仏法の怨敵には非ず三明六通の羅漢の如き
僧侶等が我が正法を滅失せん、所謂守護経に云く・涅槃經に
云く。

日蓮

◆三八 一昨日御書

ぶんえい
文永八年九月 五十歳御作 与平左衛門尉頼綱 あみ

18

3P

一昨日見参に罷入候の条悦び入り候、抑人の世に在る誰か
後世を思わざらん仏の出世は専ら衆生を救わんが為なり、爰に
日蓮比丘と成りしより、旁法門を開き已に諸仏の本意を覚り早く
出離の大事を得たり、其の要は妙法蓮華經是なり、一乗の崇重
・三国の繁昌の儀・眼前に流る誰か疑網を貽さんや、而るに
専ら正路に背いて偏に邪途を行ず然る間聖人国を捨て善神瞋を
成し七難並びに起つて四海閑かならず、方今世は悉く関東に歸し
人は皆士風を貴ぶ、就中日蓮生を此の土に得て豈吾が国を思わ
ざらんや、仍つて立正安国論を造つて故最明寺入道殿の御時
宿屋の入道を以て見参に入れ畢んぬ、而るに近年の間、多日の

程・犬戎浪を乱し夷敵国を伺う、先年勘え申す所近日符合せし

むる者なり、彼の太公が殷の国に入りしは西伯の礼に依り張良が

秦朝を量りしは漢王の誠を感じればなり、是れ皆時に當つて賞を

得・謀を帷帳の中に回らし勝つことを千里の外に決せし者なり、

夫れ未萌を知る者は六正の聖臣なり法華を弘むる者は諸仏の使者

なり、而るに日蓮忝くも鷲嶺・鶴林の文を開いて鵝王・烏瑟の

志を覚り、剩え将来を勘えたるに粗符合することを得たり先

哲に及ばずと雖も定んで後人には希なる可き者なり、法を知り国

を思うの志尤も賞せらる可きの処・邪法邪教の輩・讒奏

讒言するの間久しく大忠を懷いて而も未だ微望を達せず、剩

え不快の見参に罷り入ること偏に難治の次第を愁うる者なり、伏

して惟みれば泰山に昇らずんば天の高きを知らず深谷に入らずん

ば地の厚きを知らず、仍て御存知の為に立正安国論一卷之を進
覧す、勘え載する所の文は九牛の一毛なり未だ微志を尽さざるの
み、抑貴辺は当時・天下の棟梁なり何ぞ国中の良材を損せん
や、早く賢慮を回らして須く異敵を退くべし世を安じ国を安ずる
を忠と為し孝と為す、是れ偏に身の為に之を述べず君の為仏の為
神の為一切衆生の為に言上せしむる所なり、恐恐謹言。

文永八年九月十二日

日蓮花押

謹上

平左衛門殿

◆三九 強仁状御返事

建治元年十二月

五十四歳御作

与真言僧強仁

184p

強仁上人十月二十五日の御勘状同十二月二十六日に到来す、

此の事余も年来鬱訴する所なり忽に返状を書いて自他の疑氷を

釈ひらかんと欲ほす、但ただし歎たんずるは田舎いなかに於おいて邪正じゃせいを決せば暗中じやんちゆうに錦を服ふくして遊行くわんていし澗底かんていの長松ほんい・匠とを知らざるか、兼かねて又定めて喧嘩けんかう出来しゅつたいの基もとなり、貴坊本意ほんいを遂とげんと欲せば公家くげと関東かんとうとに奏聞そうもんを經へて露点ろうてんを申し下くだし是非ぜひを糾きゆうめい明せば上かみいちにん一人咲さを含み下ばんみん万民を疑うたがいを散ちぜんか、其その上大覺世尊だいかくせそんは佛法ぶつぽうを以もつて王臣おうしんに付属ふそくせり世しゆつせ・出世じやせいの邪正じゃせいを決断けつだんせんこと必ず公場こうじやうなる可べきなり、就なかんずく中当時ちゆうじ・我が朝あしたの体な為なる二難なんを盛さかんにす所謂いわゆる自界叛逆じかいはんぎやく難なんと他国たこく侵逼しんぴつ難なんとなり、此だいなんの大難だいにんを以もつて大藏經だいざうきやうに引き向こえて之これを見るに定めて国家こっかと佛法ぶつぽうとの中大禍ちゆうだい有あるか、仍よつて予正嘉文永二箇年しやうかぶんえいにかねんの大地震だいじしんと大長星だいぢやうせいとに驚おどろいて一切經いっさいきやうを聞き見るに此の国の中に前代ぜんだい未起みきの二難なん有ある可べし所謂いわゆる自他叛逼じたはんひつの兩難なんなり、是これ併ひながら真言しんこん・禪門ぜんもん・念仏ねんぶつ・持齋じさい等ごんしやう・權小けんしやうの邪法じゃほうを以もつて法華真實ほつけしんじつの正法しやうほう

を滅失する故に招き出す所の大災なり、只今他国より我が国を
逼む可き由・兼ねて之を知る故に身命を仏神の宝前に捨棄して
刀剣・武家の責を恐れず昼は国主に奏し夜は弟子等に語る、然り
と雖も真言・禪門・念仏者・律僧等・種種の誑言を構え重重的
讒訴を企つるが故に叙用せられざるの間処処に於て刀杖を加え
られ兩度まで御勘氣を蒙る剩え頭を刎ねんと擬する是の事なり、
夫れ以れば月支漢土の佛法の邪正は且らく之を置く大日本国・
亡国と為る可き由來之を勘うるに真言宗の元祖たる東寺の弘法
・天台山第三の座主慈覚・此の兩大師・法華經と大日經との
勝劣に迷惑し日本第一の聖人なる伝教大師の正義を隠没して
より已來叡山の諸寺は慈覚の邪義に付き神護七大寺は弘法の
僻見に隨う其れより已來王臣邪師を仰ぎ万民僻見に歸す、是く

の如き諂曲既に久しく四百余年を経歴し国漸く衰え王法も亦

がつし

ほつしゆみつたら

はちまん

じとう ほんしやう

尽きんとす彼の月支の弗沙弥多羅王の八万四千の寺塔を焚焼し

むりようぶつし

は

かんど えしやうてんし

無量仏子の頸を刎ねし、此の漢土の会昌天子の寺院四千六百余所

めつしつ

そうにげんそく

これら

あくにんな

いえど

を滅失し九国の僧尼還俗せしめたる此等大悪人爲りと雖も我が

あした

ほうぼう

す

ゆえ

まなこ

いか

にら

朝の大謗法には過ぎず、故に青天は眼を瞋らして我が国を睨み

いきどおり

やや

ようげつ

おこ

こくしゆせいしゆ

黄地は憤を含んで動もすれば天・を發す、国主聖主に非れば

いわ

これ

しよ

じゆけ

これ

かんが

あまつさ

謂れ之を知らず諸臣儒家に非れば事之を勘えず、剩え此の災天を

ため

しんこんし

かつこう

だいなん

しりぞ

ため

じさい

くよう

消さんが爲に真言師を渴仰し大難を卻けんが爲に持斎等を供養

たと

たきぎ

こおり

ごと

あくほう

いよいよ

す、譬えば火に薪を加え冰に水を増すが如く悪法は弥貴まれ

だいなん

ただ

とす。

大難は益々来る只今・此の国滅亡せんとす。

ほほ

しさい

かんが

の間・

しんみよう

しやき

を報ぜん

予粗先ず此の子細を勘うるの間・身命を捨棄し国恩を報ぜん

とす、

しか

ぐにん

なら

遠きを尊び近きを蔑るか将又多人を信じ

あなど

はたまた

を信じ

て一人を捨つるかの故に終に空しく年月を送る、今幸に強仁
上人・御勘状を以て日蓮を曉諭す然る可くは此の次でに天聰

おどろ

たてま

を驚かし奉つて決せん、誠に又・御勘文の体為非を以て先と

為し若し上人黙止して空しく一生を過せば定めて師檀共に泥梨

の大苦を招かん、一期の大慢を以て永劫の迷因を殖ること勿れ

速速天奏を経て疾疾対面を遂げ邪見を翻えし給え、書は言を

尽さず言は心を尽さず悉悉公場を期す、恐恐謹言。

十二月廿六日

日蓮 花押

強仁上人座下

◆四〇 開目抄上 文永九年（1172年）二月五十一歳御作

与門下一同 於佐渡塚原 186p

夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり、所謂主師親これなり、

又しゅうがく習学すべき物三あり、所謂いわゆる儒外内これなり。

儒家じゅけには三皇・五帝・三王・此等これらを天尊と号す諸臣しよの頭目とうもく・

万民ばんみんの橋梁きりょうなり、三皇さんこう已前いぜんは父をしらず人皆禽獸みなきんじゅうに同おなず五帝

已後いごは父母ふぼを并なて孝をいたす、所謂いわゆる重華ちゅうかはかたくなはしき父を頭

うやまひ沛公はいこうは帝となつて大公たいこうを拜す、武王は西伯を木像もくぞうに造りつく

丁蘭ていらんは母の形を彫刻きざめり、此等これらは孝の手本てほんなり、比干ひかんは殷の世の

・ほろぶべきを見て・しめて帝をいさめ頭こつべをはねらる、公胤こういんと

いゐし者は懿公いこうの肝をとつて我が腹をさき肝を入れて死しぬ此等これらは

忠の手本てほんなり、尹寿いんじゅは堯王ぎやうおうの師・務成むせいは舜王しゆんおうの師・大公望たいこうぼうは文

王の師・老子ろうしは孔子こうしの師なり此等これらを四聖ししやうとがうす、天尊てんそん・頭こつべを

かたづけ万民ばんみん・掌たなごころをあわす、此等これらの聖人しやうにんに三墳さんぶん・五典ごてん・三史

等の三千余卷の書あり、其その所詮しよせんは三玄をいはず三玄とは一には

有の玄・周公等此れを立つ、二には無の玄・老子等・三には
亦有亦無等・莊子が玄これなり、玄とは黒なり父母・末生・已前
をたづぬれば、或は元氣よりして生じ、或は貴賤・苦樂・
是非・得失等は皆自然等云云。かくのごとく巧に立つといえども
・いまだ過去・未来を一分もしらず玄とは黒なり幽なりかるがゆ
へに玄という但現在計りしれるにいたり、現在にをひて仁義を制
して身をまほり国を安んず此に相違すれば族をほろぼし家を亡
ぼす等いう、此等の賢聖の人人は聖人なりといえども過去を・
しらざること凡夫の背を見ず・未来を・かがみざること盲人の前
をみざるがごとし、但現在に家を治め孝をいたし堅く五常を行ず
れば傍輩も・うやまい名も国にきこえ賢王もこれを召して・或は
臣となし・或は師とたのみ・或は位をゆづり天も来て守りつか

う、所謂周の武王には五老きたりつかえ後漢の光武には二十八宿
来つで二十八将となりし此なり、而りといえども過去・未来をし
らざれば父母・主君・師匠の後世をもたすけず不知恩の者なり・
まことの賢聖にあらず。孔子が此の土に賢聖なし西方に仏図とい
う者あり此聖人なりといゐて外典を仏法の初門となせしこれな
り、礼楽等を教て内典わたらば戒定慧をしりやすからせんがため
・王臣を教て尊卑をさだめ、父母を教て孝の高きをしらしめ師匠
を教て帰依をしらしむ、妙楽大師云く「佛教の流化実に茲に頼
る礼楽前に馳せて真道後に啓く」等云云、天台云く「金光明經
に云く一切世間所有の善論皆此の經に因る、若し深く世法を識れ
ば即ち是れ仏法なり」等云云、止観に云く「我れ三聖を遣わして
彼の真丹を化す」等云云、弘決に云く「清浄法行經に云く月光

ぼさつかしこ がんかい
菩薩彼に顔回と称し光浄菩薩彼に仲尼と称し迦葉菩薩彼に老子と
しょう てんじく
称す天竺より此の震旦を指して彼と為す」等云云。

二には月氏の外道・三目八臂の摩醯首羅天・毘紐天・此の二天
をば一切衆生の尊父・悲母・又天尊・主君と号す、迦毘羅・
楼僧ぎや・勒姿婆・此の三人をば三仙となづく、此等は仏前八百
年・已前已後の仙人なり、此の三仙の所説を四韋陀と号す六万蔵
あり、乃至・仏・出世に當つて六師外道・此の外経を習伝して
五天竺の王の師となる支流・九十五六等にもなれり、一一に流流
多くして我慢の瞳高きこと非想天にもすぎ執心の心の堅きこ
と金石にも超えたり、其の見の深きこと巧なるさま儒家には・に
るべくもなし、或は過去・二生・三生・乃至七生・八万劫を
しょうけん
照見し又兼て未来・八万劫をしる、其の所説の法門の極理・

・或は因中有果・・或は因中無果・・或は因中亦有果・亦無果
 等云云、此れ外道の極理なり所謂善き外道は五戒・十善戒等を
 持つて有漏の禪定を修し上・色・無色をきわめ上界を涅槃と立
 て屈歩虫のごとく・せめのぼれども非想天より返つて三惡道に
 墮つ一人として天に留るものなし而れども天を極むる者は永くか
 へらずと・をもえり、各各・自師の義をうけて堅く執するゆへに
 ・或は冬寒に一日に三度・恒河に浴し・或は髪をぬき・或は巖
 に身をなげ・或は身を火にあぶり・或は五処をやく・或は裸形
 ・或は馬を多く殺せば福をう・或は草木をやき・或は一切の木を
 礼す、此等の邪義其の数をしらず師を恭敬する事・諸天の帝釈
 をうやまい諸臣の皇帝を拝するがごとし、しかれども外道の法・
 九十五種・善惡につけて一人も生死をはなれず善師につかへて

は二生・三生等に惡道に墮ち惡師につかへては順次生に惡道に墮つ、外道の所詮は内道に入る即最要なり・或外道云く「千年已後・仏出世す」等云云、或外道云く「百年已後・仏出世す」等云云、大涅槃經に云く「一切世間の外道の經書は皆是れ仏說にして外道の說に非ず」等云云、法華經に云く「衆に三毒有りと示し又邪見の相を現ず我が弟子是くの如く方便して衆生を度す」等云云。

三には大覺世尊は、此一切衆生の大導師・大眼目・大橋梁・大船師・大福田等なり、外典・外道の四聖・三仙其の名は聖なりといえども實には三惑未斷の凡夫・其の名は賢なりといえども實に因果を弁えざる事嬰兒のごとし、彼を船として生死の大海をわたるべしや。彼を橋として六道の巷こえがたし。我が大師は

へんにやく 変易・猶を・わたり給へり。況や分段の生死をや元品の無明の

こんぼん 根本猶をかたづけ給へり。況や見思枝葉の麁惑をや、此の仏陀は

じょうどう 三十成道より八十御入滅にいたるまで五十年が間・一代の

しょうきよう 聖教を説き給へり、一字・一句・皆真言なり一文一偈・妄語に

げてん あらず外典・外道の中の聖賢の言すらいふこと、あやまりなし事

あいあ と心と相符へり況や仏陀は無量曠劫よりの不妄語の人・されば

いちだい 一代・五十余年の説教は外典外道に対すれば大乘なり大人の

じつこ 実語なるべし、初成道の始より泥の夕にいたるまで説くところ

しよせつ の所説・皆真実なり。

ただ 但し仏教に入て五十余年の経経・八万法蔵を勘えたるに

しょうじよう 小乗あり大乘あり権経あり実経あり顕教・密教・☆語・

そご 麁語・実語・妄語・正見・邪見等の種種の差別あり、但し法華経

計り教主釈尊の正言なり三世・十方の諸仏の真言なり、大覺

世尊は四十余年の年限を指して其の内の恒河の諸經を未顕真実

・八年の法華は要説眞実と定め給しかば多宝仏大地より出現

して皆是眞実と証明す、分身の諸仏・來集して長舌を梵天に

付く此の赫赫たり明明たり。晴天の日よりも・あきらかに夜中の

満月のごとし仰いで信ぜよ伏して懷うべし。

但し此の經に二箇の大事あり俱舍宗・成実宗・律宗・

法相宗・三論宗等は名をもしらず華嚴宗と眞言宗との二宗は

儼に盗んで自宗の骨目とせり、一念三千の法門は但法華經の本門

・壽量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親・知つてしかも・

いまだ・ひろいいださず但我が天台智者のみこれをいだけり。

一念三千は十界互具よりことはじまれり、法相と三論とは八界

じゅっかい

を立てて十界をしらず況や互具をしるべしや、俱舎・成実・

ぜんしゅう

あこんきょう

ろっかい

あき

禪宗等は阿含経によれり六界を明らかに四界をしらず、「十方

ゆいいういちぶつ

いっぼう

唯有一仏」と云つて一方有仏だにもあかさず、一切有情・悉有

ぶっしゅう

ぶっしゅうなほ

いっさいうじょう

しつう

仏性とこそ・とかざらめ。一人の仏性猶ゆるさず、而るを律宗

じょうじつ

じゅっぼう

ぶっしょう

もう

ぶつめつ

にんし

・成実宗等の十方有仏・有仏性なんと申すは仏滅後の人師等

だいじょう

じしゅう

ぶつこ

げどう

ぶつきょう

げてん

げどう

の大乗の義を自宗に盗み入れたるなるべし、例せば外典・外道

ぶつぜん

げどう

ぶつこ

げどう

ぶつきょう

じしゅう

じしゅう

等は仏前の外道は執見あさし仏後の外道は仏教をききみて自宗

の非をしり巧の心・

しゅつげん

ぶつきょう

ぶつきょう

じしゅう

じしゅう

じゃけん

出現して仏教を盗み取り自宗に入れて邪見

もつとも・ふかし、

ふぶつきょう

がくぶつぼうじょう

これなり、

げてん

また

かくのごとし漢土に仏法いまだ・わたらざりし時の儒家・道家は

か

かんと

ぶつぼう

また

わたらざりし

じゆけ

道家は

いういうとして嬰兒のごとく・はかなかりしが後漢・已後に

いう

えいじ

はかなかり

しが

ごかん

道家は

いご

釈教わたりて対論の後・釈教やうやく流布する程に釈教の

しやつきよう

たいろん

しやつきよう

うやく

るふ

程に

しやつきよう

の

釈教

僧侶・破戒のゆへに・或は還俗して家にかへり・或は俗に心をあ
はせ儒道の内に釈教を盗み入れたり。止観の第五に云く「今世
多く悪魔の比丘有つて、戒を退き家に還り駟策を懼畏して更に
道士に越濟す、復た名利を邀めて莊老を誇談し、仏法の義を以て
偷んで邪典に安き、高を押して下きに就け、尊を摧いて卑しきに
入れ概して平等ならしむし」云云。弘に云く「比丘の身と作つ
て仏法を破滅す。若しは戒を退き家に還るは、衛の元嵩等が如し、
即ち在家の身を以て仏法を破壊す、此の人正教を偷・して邪典
に助添す、『高きを押して』等とは道士の心を以て二教の概と
為し邪正をして等しからしむ。義是の理無し、曾つて仏法に入つ
て正を偷んで邪を助け八万・十二の高きを押して五千二篇の下き
に就け用つて彼の典の邪鄙の教を釈するを推尊入卑と名く」等云

云、此の釈を見るべし次上つぎのかみの心なり。

ぶつきょう

仏教又かくのごとし、後漢ごかんの永平に漢土に仏法わたりて、邪

典やぶれて内典ないてん立つ。内典ないてんに南三・北七の異執いしゅうをこりて蘭菊らんぎくなり

しかども、陳隋ちんずいの智者大師ちしゃだいしにうちやぶられて仏法二ぶつぽうふたたび群類ぐんるいをすく

う。其その後・法相宗ほうそうしゅう・真言宗しんごんしゅう・天竺てんじくよりわたり華嚴宗又出来けごんしゅう しゅつたい

せり、此等これらの宗宗の中に法相宗ほうそうしゅうは一向いっこう・天台宗てんだいしゅうに敵を成す宗・

法門ほうもん水火すいかなり、しかれども玄奘げんじょう三蔵さんそう・慈恩大師じおんだいし・委細いさいに天台てんだいの

御釈ぎしゃくを見ける程に自宗じしゅうの邪見じゃけんひるがへるかのゆへに自宗じしゅうをば・す

てねども其その心天台てんだいに帰伏きふくすと見へたり、華嚴宗けごんしゅうと真言宗しんごんしゅうとは

本は権経ごんきょう・権宗ごんしゅうなり善無畏三蔵ぜんむいさんそう・金剛智三蔵こんごうちさんそう・天台てんだいの一念三千いちねんさんぜん

の義を盗みとつて自宗じしゅうの肝心かんじんとし其その上に印と真言しんごんとを加て超過ちようか

の心を・をこす、其その子細しさいをしらぬ学者等がくしゃは天竺てんじくより大日経だいにちきょうに

いちねんさんぜん ほうもん
一念三千の法門ありけりと・うちをもう、華嚴宗は澄観が時・
けこんきよう しんによく えし
華嚴經の心如工画師の文に天台の一念三千の法門を偷み入れた
り、人これをしらず。

にほん
日本・我朝には華嚴等の六宗・天台・真言已前にわたりけり、
けこん さんろん ほつそう
華嚴・三論・法相・諍論水火なりけり、伝教大師・此の国にい
ろくしゅう じゃけん
でて六宗の邪見をやぶるのみならず真言宗が天台の法華經の理
を盗み取て自宗の極とする事あらはれ・をはんぬ、伝教大師・
にんし いしゅう
宗宗の人師の異執をすてて専ら經文を前として責めさせ給しか
ろくしゅう こうとく
ば六宗の高徳・八人・十二人・十四人・三百余人・並に弘法
だいし
大師等せめをとされて日本国・一人もなく天台宗に帰伏し南都
とうじ にほん
・東寺・日本一州の山寺・皆叡山の末寺となりぬ、又漢土の
しよしゅう がんそ てんだい きふく
諸宗の元祖の天台に帰伏して謗法の失を・まぬかれたる事もあ

らはれぬ、又其その

後やうやく世をとろへ人の智あさく・なるほどに天台てんだいの深義じんぎは

習ならうしないぬ、他宗たしゅうの執心しゅうしんは強盛じやうじやうになるほどにやうやく六宗ろくしゅう

・七宗てんだいしゅうに天台宗をとされて・よわりゆくかの・ゆへに結句けっくは

六宗・七宗等にもをよばず、いうにかいなき禪宗ぜんしゅう・浄土宗じやうどしゅうに

をとされて始めは檀那だんなやうやくかの邪宗じゃしゅうにうつる、結句けっくは

天台宗てんだいしゅうの碩徳せきとくと仰あおがる人人ひとびとみな・をちゆきて彼の邪宗じゃしゅうをたす

く、さるほどに六宗ろくしゅう・八宗はっしゅうの田畠でんばた・所領しよりやうみなたをされ正法しやうほう失

せはてぬ天照太神てんしやうだいじん・正八幡しやうはちまん・山王等さんのおう・諸もろの守護しゆごの諸大善神しやだいぜんじんも

法味ほうみを・なめざるか国中を去り給たまうかの故ゆえに悪鬼あくき・使を得て国す

でに破われなんとす。

此こゝに予愚見ぐけんをもつて前四十余年よんじゆうよねんと後八年はちねんとの相違そういをかんがへみ

るに、其その相違そうい多しといえども先ず世間せけんの学者がくしやもゆるし、我が身

にも・さもやとうちをぼうる事は二乗作仏にじようさぶつ・久遠実成くおんじつじようなるべし。

法華經ほけきようの現文げんぶんを拜見はいけんするに、舍利弗しゃりほつは華光げこう如来にやらい・迦葉かしようは光明こうみよう

如来にやらい・須菩提しゅぼだいは名相みやうそう如来にやらい・迦施延かせんねんは閻浮那えんぶな提金だいきん光こう如来にやらい・目連もくれんは

多摩たま羅跋らば栴檀せんだ香かう仏ぶつ・富楼那ふるなは法明ほうみよう如来にやらい・阿難あなんは

山さん海かい慧自在えじざい通王いつうおう仏ぶつ・羅喉羅らこうらは蹈七宝どうしつほう華げ如来にやらい・五百ごひゃく・七百しちひゃくは普明ふみよう

如来にやらい・学がく・無学むがく二千人にせんにんは宝相ほうそう如来にやらい・摩訶まか波闍はじゃ波提はだい比丘尼びくに・

耶輸多羅比丘尼あしゆたらびくに等は、一切いっさい衆生しゆじよう喜見きけん如来にやらい・具足ぐそく千万せんまん光こう相そう如来にやらい等

なり、此等これらの人人ひとびとは法華經ほけきようを拜見はいけんしたてまつるには尊きやうなれ

ども、爾前にぜんの經經きやうぎようを披見ひけんの時ときは興けをさむる事どもをほし。

其そのの故ゆゑは仏ぶつ・世尊せそんは実語じつごの人ひとなり故ゆゑに聖人しょうにん・大人だいにんと号なづす。外典げてん

・外道げどうの中の賢人けんじん・聖人しょうにん・天仙てんせんなど申もうすは実語じつごにつけたる名

なるべし此等の人人に勝れて第一なる故に世尊をば大人とは・
申すぞかし、此の大人「唯一大事因縁故・出現於世」となのらせ
給いて「未だ真実を顕さず・世尊は法久しうして後・要ず当に
真実を説くべし・正直に方便を捨て」等云云、多宝仏・証明
を加え分身・舌を出す等は舍利弗が未来の華光如来・迦葉が
光明如来等の説をば誰の人が疑網をなすべき。

而れども爾前の諸経も又仏陀の実語なり・大方広仏華嚴經に
云く「如来の知慧・大藥王樹は、唯一処に於て生長して利益を為
作すこと能わず、所謂二乗の無為広大の深坑に墮つると、及び
善根を壞る非器の衆生は大邪見・貧愛の水に溺るるとなり」等
云云、此の經文の心は雪山に大樹あり無尽根となづく。此を大
藥王樹と号す、閻浮提の諸木の中の大王なり此の木の高さは十六

万八千由旬ゆじゆんなり、一閻浮提えんぶだいの一切いっさいの草木そうもくは此の木の根ざし枝葉しやう・
華菓けかの次第しだいに随したがつて華菓けかなるなるべし、此の木をば仏ぶつの仏性ぶつしやうに
譬たとへたり一切衆生いっさいしゆじやうをば一切いっさいの草木そうもくにたとへ、但ただし此の大樹たいじゆは
火坑かきやうと

すいりん

水輪すいりんの中に生長せず、二乗にじやうの心中しんちゆうをば火坑かきやうにたとへ一闍提人いっせんたいの

しんちゆう

心中しんちゆうをば水輪すいりんにたとへたり、此の二類にるいは永く仏になるべからず

もう

と申もうす経文きやうもんなり、大集經だいしききやうに云いわく「二種の人有り、必ず死して活

きず、畢竟ひつきやうして恩を知り恩を報ずること能あたわず。一には声聞しやうもん、

二には縁覺えんかくなり、

譬たとえば人有りて深坑じんこうに墜だつし、是この人自みづから利かし

他たを利かすること能あたわざるが如ごとく、

声聞しやうもん・縁覺えんかくも亦復またまた是この如ごとし、

解脫げだつの坑あなに墮だして自みづから利かし及および他たを利かすること能あたわずし等云

云、

外典げてん三千余卷さんしよせんの所詮しよせんに二つあり所謂いわゆる孝と忠となり忠も又孝の

云、

外典げてん三千余卷さんしよせんの所詮しよせんに二つあり所謂いわゆる孝と忠となり忠も又孝の

家よりいでたり、孝と申すは高なり天高けれども孝よりも高から
ず又孝とは厚なり地あつけれども孝よりは厚からず、聖賢の二類
は孝の家よりいでたり何に況や仏法を学せん人・知恩報恩なかる
べしや、仏弟子は必ず四恩をしつて知恩報恩をいたすべし、其の
上舍利弗・迦葉等の二乗
は二百五十戒三千の威儀・持整して味・浄・無漏の三静慮・
阿含經をきわめ三界の見思を尽せり。知恩報恩の人の手本なるべ
し、然るを不知恩の人なりと世尊定め給ぬ、其の故は父母の家を
出でて出家の身となるは必ず父母を・すくはんがためなり、二乗
は自身は解脱と・をもえども利他の行かけぬ。設い分分の利他あ
りといえども父母等を永不成仏の道に入るれば・かへりて不知恩
の者となる。

維摩經に云く「維摩詰、又文殊師利に問う、何等をか如来の種

と為す、答えて曰く一切塵勞の疇は如来の種と為る、五無間を

以て具すと雖も、猶能く此の大道意を發す」等云云・又云く「譬え

ば族姓の子・高原陸土には青蓮芙蓉の衡華を生ぜず卑湿汚田に

乃ち此の華を生ずるが如し」等云云、又云く「已に阿羅漢を得て

応真と為る者は終に復道意を起して仏法を具すること能わざるな

り、根敗の土・其の五樂に於て複利すること能わざるが如し」等

云云、文の心は貪・瞋・癡等の三毒は仏の種となるべし殺父等の

五逆罪は仏種となるべし高原の陸土には青蓮華生ずべし、二乗は

仏になるべからず、いう心は二乗の諸善と凡夫の惡と相對するに

凡夫の惡は仏になるとも、二乗の善は仏にならじとなり、諸の

小乗經には惡をいましめ善をほむ、此の經には二乗の善をそ

しり凡夫ほんぶの悪をほめたり、かへつてぶきよう仏經とも・をぼへずげどう外道の

法門ほうもんのやうなれども詮せんするところは二乗にじようの永不成仏ようふじようぶつをつよく定め

させ給たまうにや、方等陀羅尼經ほうとうだらにに云く「文殊もんじゆ・舍利弗しゃりほつに語かたらく猶なお

枯樹こじゆの如く更に華を生ずるや不いなや。亦山水またの如く本処ことに還かえるや

不いなや。折石しゃくせき還かえつて合いうや不いなや。焦種芽いれるたねを生ずるや不いなや。舍利弗しゃりほつ

の言いわく不いななり、文殊もんじゆの言いわく若もし得うべからずんば云何なんぞ我われに菩提ぼだいの

記きを得るを問うて、心に歡喜かんきを生ずるや」等云云、文の心は枯かられ

たる木・華さかず山水・山にかへらず破われたる石あはず・いれる

種をいず、二乗にじようまた・かくのごとし仏種ぶつしゆをいれり等となん。

大品般若經だいほんはんによきように云く「諸もろの天子てんし今未いまだ三菩提ぼだいしん心しんを發さずんば

応まさに發おこすべし、若もし声聞しやうもんの正位しやういに入れば是この人能よく三菩提ぼだいしん心しんを

發さざるなり、何を以もつての故ゆえに生死しやうじの爲ために障しやうきやく隔なを作なす故」等云

云、文の心は二乗は菩提心を・をこさざれば我随喜せじ諸天は

菩提心を・をこせば我随喜せん。首楞嚴經に云く「五逆罪の人

・是の首楞嚴三昧を聞いて阿耨菩提心を發せば、還つて仏と

作るを得。世尊・漏尽の阿羅漢は猶破器の如く、永く是の三昧を

受くるに堪忍せず」等云云。淨名經に云く「其れ汝に施す者

は福田と名けず。汝を供養する者は三惡道に墮す」等云云。文

の心は迦葉・舍利弗等の聖僧を供養せん人天等は必ず三惡道に

墮つべしとなり、此等の聖僧は仏陀を除きたてまつりては人天の

眼目・一切衆生の導師とこそ・をもひしに幾許の人天・大会の

中にして・かう度度・仰せられしは本意なかりし事なり只詮する

ところは我が御弟子を安めころさんとにや、此の外牛驢の二乳・

瓦器・金器・螢火・日光等の無量の譬をとつて二乗を呵嘖せさ

せ給き、一言二言ならず一日・二日ならず一月・二月ならず一年

・二年ならず一經二經ならず、四十余年が間・無量・無辺の

經經に無量の大会の諸人に対して一言もゆるし給う事もなく・

そしり給いしかば世尊の不妄語なりと我もしる人もしる天もしる

地もしる、一人・二人ならず百千万人・三界の諸天・竜神・

阿修羅・五天・四洲・六欲・色・無色・十方世界より雲集せる

人天・二乗・大菩薩等皆これをしる又皆これをきく、各各・国

へ還りて娑婆世界の釈尊の説法を彼れ彼れの国国にして一一に

かたるに十方無辺の世界の一切衆生・一人もなく迦葉・舍利弗

等は永不成仏の者・供養しては・あしかりぬべしと・しりぬ。

而るを後八年の法華經に忽ちに悔還して、二乗作仏すべしと

仏陀とかせ給はんに、人天大会・信仰をなすべしや、用ゆべから

ざる上・先後の経経に疑綱をなし、五十余年の説教・皆虚妄

の説となりなん、されば四十余年・未顕真実等の経文はあらま

せしか天変の仏陀と現じて後八年の経をばとかせ給うかと疑綱す

るところに・げにげに・しげに劫国・名号と申して二乗成仏の

国をさだめ、劫をしるし、所化の弟子などを定めさせ給へば、

教主釈尊の御語すでに二言になりぬ。自語相違と申すはこれ

なり。外道が仏陀を大妄語の者と咲いしこと・これなり。人天

大会けをさめて・ありし程に、爾の時に東方・宝浄世界の多宝

如来・高さ五百由旬・広さ二百五十由旬の大七宝塔に乗じて

教主釈尊の人天・大会に自語相違をせめられて・とのべ・かう

のべ、さまざまに宣べさせ給いしかども、不審猶をはるべしとも

・みへず・もてあつかいて・をはせし時・仏前に大地より涌現し

て虚空こくうにのぼり給たまう、例せば暗夜やみよに満月まんげつの東山より出づるがごと
し七宝しつぽうの塔・大虚おおそらにかからせ給たまいて大地たいちにも・つかず大虚おおそらにも付
かせ給たまはず・天中てんちゅうに懸かりて宝塔ほうとうの中より梵音ぼんおんを出して証しょう明みょう
して云いく「爾その時に宝塔ほうとうの中より大音おんを出して歎ほめて云いく、
善よき哉かな善よき哉かな・釈迦牟尼世尊しやかむにせそん・能よく平等びやうどう大慧だいえ・教菩薩きやうぼさつ法ぽう・仏所ぶつしよ
護念ごねんの妙法華經みやうほけきやうを以て大衆たいしゅうの爲ために説ときたもう、是かくくの如ごとし是かくく
の如ごとし、釈迦牟尼世尊しやかむにせそんの所説しよせつの如ごときは皆是みなこれ眞實しんじつなり」等云云、
又云いく「爾その時に世尊せそん・文殊師利等もんじゆしりの無量むりやう百千萬億せんまん・旧住くじゆう娑婆しやば
世界せかいの菩薩ぼさつ・乃至ないし人非人等にんにん・一切いっさいの衆の衆の前に於おいて大神力おんじんりきを現げんじた
もう、広長舌こうちやうぜつを出して上うみ梵世ぼんせいに至いたらしめ一切いっさいの毛孔もうくより乃至ないし
十方世界じゆつぽうせかい・衆の宝樹ほうじゆの下したの師子ししの座の上かみの諸しよ仏ぶつも亦復またまた是かくくの
如ごとく、広長舌こうちやうぜつを出し無量むりやうの光くわうを放はなちたもう」等云云、又云いく

じゅつぽう

もろもろふんじん

ほんど

かえ

「十方より来りたまえる諸の分身の仏をして各本土に還らしめ、

ないしたほうぶつ

な

乃至多宝仏の塔も、還つて故の如くし給うべし」等云云、大覺世尊

な

乃至多宝仏の塔も、還つて故の如くし給うべし」等云云、大覺世尊

な

乃至多宝仏の塔も、還つて故の如くし給うべし」等云云、大覺世尊

な

乃至多宝仏の塔も、還つて故の如くし給うべし」等云云、大覺世尊

な

・初成道の時・諸仏・十方に現じて釈尊を慰諭し給う上・

しよじょうどう

しよぶつ

じゅつぽう

げん

しやくそん

いゆ

たま

しやくそん

いゆ

たま

諸の大菩薩を遣しき、般若經の御時は釈尊・長舌を三千にを

もろもろ

ぼさつ

つかわ

はんにやきよう

おんとき

しやくそん

ちようぜつ

さんぜん

さんぜん

さんぜん

さんぜん

ほひ千仏・十方に現じ給い・金光明經には四方の四仏現せり、

じゅつぽう

げん

たま

こんこうみようきよう

しほう

しほう

しほう

げん

げん

阿弥陀經には六方の諸仏・舌を三千にををう、大集經には十方

あみだ

しよぶつ

しよぶつ

さんぜん

だいしつきよう

だいしつきよう

だいしつきよう

じゅつぽう

じゅつぽう

じゅつぽう

の諸仏・菩薩・大宝坊にあつまれり、此等を法華經に引合せて・

しよぶつ

ぼさつ

ぼさつ

だいほう

これら

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

かんがうるに黄・石と黄金と白雲と白山と白・氷と銀鏡と黒色と青

おうしゃく

おうしゃく

おうしゃく

はくひよう

はくひよう

はくひよう

はくひよう

はくひよう

はくひよう

はくひよう

色とをば翳眼の者・眇目の者・一眼の者・邪眼の者は・みたが

えいがん

えいがん

みようもく

みようもく

みようもく

みようもく

みようもく

みようもく

みようもく

みようもく

へつべし、華嚴經には先後の經なければ仏語相違なしに・つ

けこんきよう

けこんきよう

せんご

せんご

せんご

せんご

せんご

せんご

せんご

せんご

けてか大疑いで来べき、大集經・大品經・金光明經・阿弥陀

だいぎ

だいぎ

だいしつきよう

だいしつきよう

だいしつきよう

だいしつきよう

だいしつきよう

だいしつきよう

だいしつきよう

だいしつきよう

經は諸小・乗經の二乗を彈阿せんがために十方に浄土をとき

しよしやうじやうきよう

しよしやうじやうきよう

しよしやうじやうきよう

しよしやうじやうきよう

しよしやうじやうきよう

しよしやうじやうきよう

しよしやうじやうきよう

しよしやうじやうきよう

しよしやうじやうきよう

しよしやうじやうきよう

凡夫・菩薩を欣慕せしめ二乗を、わずらはす、小乗經と諸
大乘經と一分の相違あるゆえに、或いは・或は十方に仏現
じ給ひ、或は十方より大菩薩をつかはし・或は十方世界にも
此の經をとくよしをしめし、或は十方より諸仏あつまり給う
・或は釈尊、舌を三千に・をほひ・或は諸仏の舌をいだす・よ
しをとかせ給う、此ひとえに諸小乗經の十方世界・唯一仏
と・とかせ給いしをもひを・やぶるなるべし、法華經のごとくに
先後の諸大乘經と相違・出来して舍利弗等の諸の声聞・大
菩薩・人天等に將非魔作仏と・をもはれさせ給う大事にはあら
ず、而るを華嚴・法相・三論・真言・念仏等の翳眼の輩・彼彼
の經經と法華經とは同じと・うちをもへるは・つたなき眼な
るべし。

但在世ざいせは四十余年よんじゅうよねんをすてて法華經ほけきょうにつき候ものもや・ありけ

ん、仏滅後ぶつめつに此この經文きょうもんを開見かいけんして信受しんじゅせんこと・かたかるべし、

先さきず一つには爾前にぜんの經經きょうきょうは多言きょうぎなり法華經ほけきょうは一言いっごなり爾前にぜんの

きょうぎ

經經きょうきょうは多經きょうなり此この經きょうは一經いっぎなり彼彼かれかれの經經きょうきょうは多年きょうぎなり此

の經きょうは八年はちねんなり、仏は大妄語もうごの人・永く信しんずべからず不信ふしんの上に

信しんを立てば爾前にぜんの經經きょうきょうは信しんずる事もありなん法華經ほけきょうは永く信しんず

べからず、当世とうせも法華經ほけきょうをば皆信みなじたるやうなれども法華經ほけきょうにて

は・なきなり、其そのの故ゆえは法華經ほけきょうと大日經だいにちきょうと法華經ほけきょうと華嚴經けこんきょうと

法華經ほけきょうと阿弥陀經あみだと一なるやうを・とく人をば悦よろこんで歸依きえし別別

なるなんど申もうす人をば用もちいずたとい用もちゆれども本意ほんいなき事と・を

もへり。

日蓮にちれん云いく日本にほんに仏法ぶつぽうわたりて・すでに七百余年・但伝でんぎ教大師きょうだいし

・一人計り、法華經をよめりと申すをば諸人これを用いず、但し
法華經に云く「若し須弥を接つて他方の無数の仏土に擲置かんも
亦未だ為難しとせず、乃至若し仏滅後に惡世中に於て能く此の經
を説かん是れ則ち為難しし等云云、日蓮が強義・經文に普合せ
り法華經の流通たる涅槃經に末代濁世に謗法の者は十方の地の
ごとし正法の者は爪上の土のごとしと・とかれて侯は・いかに
がし侯べき、日本の諸人は爪上の土か日蓮は十方の土かよくよ
く思惟あるべし、賢王の世には道理かつべしの世に非道・先をす
べし、聖人の世に法華經の実義顯るべし等と心うべし、此の法門
は迹門と爾前と相對して爾前の強きやうに・をばゆもし爾前つ
よるならば舍利弗等の諸の二乗は永不成仏の者なるべし・いかに
が・なげかせ給うらん。

きようしゅしやくそん

にんじゅう

二には教主釈尊は住劫・第九の減・人壽百歳の時・師子

きようおう

頰王には孫・浄飯王には嫡子・童子悉達太子・一切義成就

ぼさつ

菩薩これなり、御年十九の御出家・三十成道の世尊・始め寂滅

どうじょう

道場にして実報華王の儀式を示現して十玄・六相・法界・円融

とんごくみみょう

・頓極微妙の大法を説き給い十方の諸仏も顕現し一切の菩薩も

うんしゅう

雲集せり、土といひ機といひ諸仏といひ始めといひ何事につけ

だいほう

てか大法を秘し給うべき、されば経文には顕現自在力・演説

えんまん

円満経等云云、一部六十巻は一字一点もなく円満経なり、譬へば

によいほうじゅ

如意宝珠は一珠も無量珠も共に同じ。一珠も万宝を尽して雨し万

たまむりょう

珠も万宝を尽すがごとし、華嚴経は一字も万事も但同事なるべし、

しんぶつぎゅうしゅじょう

心仏及衆生の文は華嚴宗の肝心なるのみならず法相・三論・

しんこん

真言・天台の肝要とこそ申し候へ、此等程いみじき御経に何事を

てんだい

もう

そうら

これら

なにごと

か隠すべき、なれども二乘闡提・不成仏と・とかれしは珠たまのき

ずと・みゆる上三処まで始成正覺と・なのらせ給たまいて久遠実成

の寿量品じゅうりょうぽんを説ときかくさせ給たまいき、珠たまの破われたると月に雲のかか

れると日の蝕ふしぎしたるがごとし不思議なりしことなり、阿含・方等

・般若・大日經等は仏説なれば・いみじき事なれども華嚴經に

たいすれば・いうにかいなし、彼の經に秘せんこと此等の經經

にとかるべからず、されば雜阿含經に云く「初め成道」等云云、

大集經に云く「如来成道始め十六年」等云云、淨名經に云く

「始め仏樹に坐して力めて魔を降くだす」等云云、大日經に云く「我

昔道湯に坐して」等云云、仁王般若經に云く「二十九年」等云

云。

此等は言うにたらず只耳目を・をどろかす事は無量義經・

けこんきよう ゆいしんほっかい ほうとう はんにやきよう こんどう
華嚴經の唯心法界・方等・般若經の海印三昧・混同無二等の

だいほう ある みけんしんじつ ある りやつこうしゆぎよう
大法をかきあげて・或は未顕真実・或は歴劫修行等・下す程

の御經に我先きに道場菩提樹の下に端坐すること六年、

あのかたらさんみやくさんぼだい じよう
阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり」と初成道の華嚴經

しじよう ふしぎ ほけきよう
の始成の文に同せられし不思議と打ち思うところに此は法華經の

じよぶん しょうしゆう ほけきよう しょうしゆう
序分なれば正宗の事をいはずも・あるべし、法華經の正宗・

おんとき ゆいぶつよぶつ ないのうくじんしよほうじつそう せそん
略開三・広開三の御時・唯仏与仏・乃能究尽諸法実相等・世尊

ほうくご しょうじきしやほうべん たほうぶつ しやくもん みな
法久後等・正直捨方便・多宝仏・迹門八品を指して皆是其实と

しょうみよう なにごと くおんじりよう
証明せられしに何事をか隠すべきなれども久遠寿量をば秘せ

たまい どうじよう かん また
させ給いて我始め道場に坐し樹を觀じて亦經行す等云云、

さいだい いち ふしぎ みろく ぼさつ ゆじゅつ ぽん よんじゅう よねん
最第一の大不思議なり、されば弥勒菩薩・涌出品に四十余年の未

こんけん ぼさつ しかな すなわこれ きようけ どうしん
見今見の大菩薩を仏・爾して乃ち之を教化して初めて道心を發さ

しむ等と・とかせ給たまいしを疑うたつて云いく「如来太子にやらいたいし為りし時・
釈しゃくの宮を出いでて伽耶城がやを去ること遠とからず道場どうじやうに坐まして
阿耨多羅三藐三菩提あのかたらのさんみやくさんぼだいを成じやうずることを得たまえり、是より已来このかた始め
て四十余年よんじゅうよねんを過すぎたり世尊せそん・云何なんぞ此の少時おいに於おいて大いに仏事ぶつじを
作なしたまえる」等云云、教主きやうしゆ釈尊しゃくそん此等の疑うたがいを晴はさんがために
じゅうようぼん
寿量品じゆりやうぼんを・とかんとして爾前にぜん・迹門しゃくもんのききを挙あげて云く「一切いっさい
世間せけんの天人てんにんおよび阿修羅あしゆらは皆みな今の釈迦牟尼仏しゃかむにぶつ・釈氏しゃくしの宮を出いでて
伽耶城がやを去ること遠とからず道場どうじやうに坐まして阿耨多羅三藐三菩提あのかたらのさんみやくさんぼだいを
得たまえりと謂おもえり」等と云云、正まさしく此の疑うたがいを答こたえて云く「然
るに善男子ぜんなんし・我実じやうぶつに成仏じやうぶつしてより已来このかた無量無辺むりやうむへん・百千万億せんまん・
那由他劫なゆたなり」等云云。

華嚴・乃至般若・大日經等は二乗作仏を隠すのみならず、
けこん ないしはんにや だいにちきやう にじやうさぶつ

くおんじつじょうと
久遠実成を説きかくさせ給へり、此等の経経に二つの失あり、

一には「行布を存するが故に、仍お未だ権を開せずとて迹門の

いちねんさんぜん

一念三千をかくせり、二には始成を言うが故に尚未だ迹を發せず

ほんもん

とて本門の久遠をかくせり、此等の二つの大法は一代の綱骨・

いっさいきよう

一切経の心髓なり、迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて

にぜん

爾前二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ

ほっしやくけんほん

発迹顕本せざれば・まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も

定まらず、水中の月を見るがごとし・根なし草の波の上に浮べる

似

ににたり、本門にいたりて始成正覺をやぶれば四教の果をやぶ

ほんもん

る、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前・迹門の十界

しきよう

の因果を打ちやぶつて、本門の十界の因果をとき顯す、此即ち

いんが

ほんいん・ほんが

本因・本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九

界に備りて・真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし、か

うて・かへり・みれば華嚴經の台上十方・阿含經の小釈迦・

方等・般若の金光明經の阿弥陀經の大日經等の権仏等は・此

の寿量の仏の天月しばらく影を大小の器にして浮べ給うを・

諸宗の学者等・近くは自宗に迷い遠くは法華經の寿量品をし

らず水中の月に実の月の想いをなし・或は入つて取らんと・をも

ひ・或は繩を・つけて・つなぎとどめんとす、天台云く「天月を

識らず但池月を觀ず」等云云。

日蓮案じて云く二乗作仏すら猶爾前づよにをばゆ。久遠実成

は又になるべくも・なき爾前づりなり、其の故は爾前・法華相對す

るに猶爾前こわき上・爾前のみならず迹門十四品も一向に爾前

に同ず、本門十四品も涌出・寿量の二品を除いては皆始成を存

せり、そりんさいご雙林最後の大般涅槃經・四十卷・其その外ほかの法華・前後ぜんごの

諸大經しよだいに一字・一句いっくもなく法身ほっしんの無始むし・無終むしゅうはとけども応身おうじん・

報身ほうしんの顯本けんぽんはとかれず、いかなこうはくが広博こうはくの爾前にぜん・本・迹・涅槃等ねはんの

諸大乘しよだいじょうきよう經をばすてて但涌出ゆじゅつ・壽量じゅうりようの二品には付くべき。

されば法相宗ほうそうしゅうと申もうす宗は、西天さいてんの仏滅後ぶつめつ・九百年むちやくに無著菩薩ぼさつ

と申もうす大論師ろんしましま有しき、夜とそつは都率とそつの内院ないえんにのぼり、弥勒菩薩みろくぼさつにたいめん対面

して・一代いちだいしろうきよう聖教しょうきょうの不審ふしんをひらき・昼あしゆしやは阿輸舍国あしゆしやにして法相ほっそうの

法門ほうもんを弘ひろめ給たまう。彼の御弟子おんでしは世親せじん・護法ごほう・難陀なんだ・戒賢かいけん等の大

論師ろんしなり。戒日大王かいおう・頭こうべをかたぶけ五天幢ごてんどうを倒こして此これにきえ帰依

す、戸那国しなの玄奘げんじよう三蔵さんそう・月氏がっしにいたりて十七年いんど、印度いんど百三十余

の国しよしゅうを見けんきて、諸宗しよしゅうをばふりすて、此かんどの宗しよしゅうを漢土かんどにわたり

て、太宗皇帝たいそうこうていと申もうす賢王けんおうにさづけ給たまい、肪・尚・光・基でしを弟子と

して大慈恩寺並に三百六十余箇国に弘め給う。日本国には人王三
十七代・孝徳天皇の御宇に道慈・道昭等ならいわたして山階寺に
あがめ給へり、三国第一の宗なるべし、此の宗の云く始め華嚴經
より終り法華・涅槃經にいたるまで無性有情と決定性の二乗は
永く仏になるべからず、仏語に二言なし一度・永不成仏と定め
給いぬる上は日月は地に落ち給うとも、大地は反覆すとも、永く
変改有るべからず。されば法華經・涅槃經の中にも爾前の經經
に嫌いし無性有情・決定性を正しくついさして成仏すとは・と
かれず。まづ眼を閉じて案ぜよ。

法華經・涅槃經に決定性・無性有情・正く仏になるならば
無著・世親ほどの大論師・玄奘・慈恩ほどの三蔵・人師これを
みざるべしや、此をのせざるべしや、これを信じて伝えざるべし

や、みろくぼさつ弥勒菩薩に聞いてたてまつるべしや、なんじ汝は法華經の文に依るよ

やうなれども、てんだい天台・みょうらく妙楽・でんぎよう伝教のびやつけん僻見を信受して其の見をそ

もつてきようもん經文をみるゆえに爾前に法華經は水火なりと見るなり。

けこんしゅう華嚴宗としんこんしゅう真言宗はほつそう法相・さんろん三論にはにぜんにるべくもなきちようか超過の宗なり、

にじようさぶつ二乗作仏・くおんじつじよう久遠実成はほけきよう法華經に限らずけこんきよう華嚴經・だいにちきよう大日經にふんみよう分明

なり、けこんしゅう華嚴宗のとじゆん杜順・ちこん智儼・ほうそう法蔵・ちようかん澄観・しんこんしゅう真言宗のぜんむい善無畏・

こんこうち金剛智・ふくう不空等はてんだい天台・でんぎよう伝教には・にるべくもなきにるべくもなきこうい高位の人な

り、そ其の上ぜんむい善無畏等はだいにちにようい大日如来よりそうじよう系みだれざる相承あり、これら此等

のごんげ権化のい人いかでかあやまりあるべき、したが随つてけこんきよう華嚴經には「・或

はしゃか釈迦・ぶつどう仏道を成じ已つてふかしぎ不可思議劫を経るを見る」等云云、

だいにちきよう大日經には「我れは一切の本初なり」等云云、なん何ぞ但くおんじつじよう久遠実成

・じゆりようぼん寿量品に限らん、たと譬へばせいてい井底のかわず蝦がたいかい大海を見ずやまかつ山左が洛中を

・しらざるがごとし、汝なんじ但じゆりよう寿量の一品けこんを見て華嚴だいにちきよう・大日經しよきよう等の諸經しよきようをしらざるか、其その上月氏がっし・尸那しな・新羅しらぎ・百濟くだら等の一向いっかうに二乗にじよう作仏さぶつ・久遠くおん実成じつじようは法華經ほけきように限ほけきようるといふか。

されば八箇年はちかねんの經は四十余年よんじゅうよねんの經經きようきようには相違さういせりといふとも

先判・後判の中には後判につくべしといふとも、猶爾前なおいぜんづりにこ

そをぼうれ。又、但在世計ざいせばかりならば・さも・あるべきに滅後めつごに居

せる論師ろんし・人師にんし・多おおくは爾前にぜんづりにこそ侯そうらへ、かう法華經ほけきようは信じ

がたき上、世もやうやく末すえになれば聖賢せいけんはやうやく・かくれ迷まよい

者はやうやく多し。世間せけんの浅き事あそすら猶なほあやまりやすし。何いかに況

や出世しゅっせの深法じんぼう・なかるべしや、犢子とくし・方広ほうくわうが聡敏そうびんなりし猶なほを

大小乘だいししやうじよう經にあやまてり、無垢むく☆☆が利根りこんなりし、権実こんじつ・二教にきやうを

弁えず、正法しやうほう一千年の内、在世ざいせも近く月氏がっしの内なりし・すでに

かくのごとし、況や尸那・日本等は国もへだて音もかはれり。人の根も鈍なり、壽命も日あさし貪・瞋・癡も倍增せり、仏世を去つてとし久し、仏経みなあやまれり、誰の智解か直かるべき、仏涅槃經に記して云く「末法には正法の者は爪上の土・謗法の者は十方の土」とみへぬ、法滅尽經に云く「謗法の者は恒河沙・正法の者は一二の小石」と記しをき給う、千年・五百年に一人なんども正法の者ありがたからん、世間の罪に依つて惡道に墮る者は爪上の土・佛法によつて惡道に墮る者は十方の土・俗よりも僧・女より尼多く惡道に墮つべし。

此に日蓮案じて云く、世すでに末代に入つて二百余年・辺土に生をうけ、其の上下賤・其の上貧道の身なり。輪廻六趣の間・人天の大王と生れて、万民をなびかす事・大風の小木の枝を吹く

がごとくせし時も仏にならず、大小乗經の外凡・内凡の大菩薩ほさつと修しゅうしあがり一劫いつこう・二劫にこう・無量劫むりょうこうを経て菩薩ぼさつの行を立て、すでに不退ふたいに入りぬべかりし時も・強盛じやうじやうの惡縁あくえんにおとされて仏にもならず、しらず大通結縁だいつうけちえんの第三類さんるいの在世ざいせをもれたるか久遠くおん五百の退轉たいてんして今に来れるか、法華經ほけきやうを行ぜし程に世間の惡縁あくえん・王難なん・外道げどうの難なん・小乗しょうじやうきやう經の難なんなどは忍しのびし程に權大乘ごんだいじやう・實大乘經じつだいじやうきやうを極きわめたるやうなる道綽どうしゆく・善導ぜんどう・法然等ほうねんがごとくなる惡魔あくまの身に入りたる者・法華經ほけきやうをつよくほめあげ、機きをあながちに下くだし「理深解微りじんげみ」と立て、「未有一人得者みういちにんとくしや」、「千中無一等せんちゆうむいつ」とすかししものに、無量生むりやうが間・恒河沙こうがしやの度すかされて權經ごんきやうに墮おちぬ權教ごんきやうより小乗經しょうじやうきやうに墮おちぬ外道げどう・外典げてんに墮おちぬ結句けっくはあくどう惡道あくどうに墮おちけりと深く此これをしれり、日本国にほんこくに此これをしれる者は

但日蓮一人なり。
にちれん

これを一言も申出すならば父母・兄弟・師匠に国主の王難必ず
いだ ふぼ・きやうだい ししやう こくしゅ なん
来るべし、いはずば・慈悲なきに・にたりと思惟するに法華経・
ねはんぎやう ほけきやう
涅槃経等に此の二辺を合せ見るに・いはずば今生は事なくとも
ごしやう こんじやう
後生は必ず無間地獄に墮べし、いうならば三障四魔必ず競い起る
むげんじこく おつ さんしやうしま きそ おこ
べしと・しりぬ、二辺の中には・いうべし、王難等・出来の時
なん しゆったい
は退転すべくは一度に思ひ止るべしと、且くやすらいし程に
たいてん ひとたび しばら
宝塔品の六難九易これなり、我等程の小力の者・須弥山はなぐと
ほうとうほん なんくい われら しゆみせん
も、我等程の無通の者・乾草を負うて劫火には・やけずとも我等
われら むち きやうぎやう
程の無智の者・恒沙の経経をば・よみをぼうとも、法華経は
いっく いちげ まつだい たも ほけきやう
一句一偈も末代に持ちがたしと・とかるるは・これなるべし、
このたびごうじやう ほだいしん
今度強盛の菩提心を・をこして退転せじと願しぬ。
たいてん

既に二十余年が間・此の法門を申すに日日・月月・年年に難か
さなる、少少の難は・かずしらず大事の難・四度なり二度は・し
ばらく・をく王難すでに二度にをよぶ、今度は・すでに我が
身命に及ぶ其の上弟子といひ檀耶といひ・わづかの聴聞の俗人
なんど来って重科に行わる謀反なんどの者のごとし。

法華經の第四に云く「而も此經は如来の現在にすら猶怨嫉多し、
況や滅度の後をや」等云云、第二に云く「經を讀誦し書持するこ
と有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん」等云云、第五に
云く「一切世間、怨多くして信じ難し」等云云、又云く「諸の無智
の人の惡口罵詈する有らん」等、又云く「国王・大臣・婆羅門・
居士に向つて誹謗し我が惡を説いて、是れ邪見の人なりと謂わん」
と、又云く「数数擯出見れん」等云云、又云く「杖木瓦石もて

これ ちようちやく
之を 打擲 せん」等云云、涅槃經に云く「爾の時に多く無量の外道
有つて、和合して共に摩訶陀の王・阿闍世の所に往き、今は唯一
の大惡人有り瞿曇沙門なり、一切世間の惡人利養の爲の故に其の
所に往集して眷属と爲つて、能く善を修せず、呪術の力の故に
迦葉及び舍利弗・目・連を調伏す」等云云、天台云く「何に
況や未來をや。理化し難きに在るなり」等云云、妙樂云く
「障り未だ除かざる者を怨と爲し、聞くことを喜ばざる者を嫉と
名く」等云云。南三・北七の十師・漢土無量の學者・天台を怨敵
とす、得一云く「咄いかな智公・汝は是れ誰が弟子ぞ。三寸に
足らざる舌根を以て、覆面舌の所説を謗ずる」等云云、東春に云く
「問う在世の時許多の怨嫉あり仏滅度の後此經を説く時・何が故
ぞ亦留難多きや、答えて云く俗に良薬口に苦しと云うが如く、

此經は五乗の異執いしゅうを廢して一極の

玄宗げんそうを立つ、故ゆえに凡しりぞを斥け聖を呵し、大を排い小を破り天魔てんまを銘

づけて毒虫なと為し、外道げどうを説いて惡鬼あつきと為し、執小へんを貶して貧賤ひんせん

と為し、菩薩ぼさつを挫くじきて新學なと為す、故ゆえに天魔てんまは聞くを惡にくみ、外道げどう

は耳に逆にじようい二乗きようけは驚怪きようけし、菩薩ぼさつは怯行こぎようす、此かくの如こときの徒ことごと、悉ことごとく留

雖なを為す多怨嫉おんしつの言、豈あにむな唐あにむなしからんや」等云云、顯ある・或論いに云く

「僧統奏いして曰く、西夏いに鬼井婆羅門ばらもん有り。東土とうどに巧言ぎようげんを吐く

禿頭とくず沙門しゃもんあり、此これ乃もつるち物類冥みようしよく 召せけんして世間おおわくを誑惑せけんす」等云云、

論いじて曰く「昔齊せい朝ちようの光統こうずに聞き今は本朝ほんちようの六統ろくつうに見る、実じな

るかな法華ほつげに何況がきようすつをや」等云云、秀句しゆくくに云く「代ことばを語れば

則すなわち像さうの終り未すなわの始め、地たすを尋ぬれば則すなわち唐とうの東かつ、羯かつの西さ・人じんを

原たすぬれば則すなわち五濁ごじよくの生かうじよう・鬭諍とうじようの時ときなり、經いに云く猶多ゆたおんしつ怨嫉おんしつ・

きようめつとご
況滅度後と。此の言、良に以有るなり」等云云。夫れ小児に灸治
を加れば必ず母をあだむ。重病の者に良薬をあたうれば定ん
で口に苦しとうれう、在世猶をしかり、乃至像末辺土をや、山に
山をかさね波に波をたたみ難に難を加へ非に非をますべし、像法
の中には天台一人・法華經・一切經をよめり。南北これをあだ
みしかども、陳隋・二代の聖主・眼前に是非を明めしかば敵つ
に尽きぬ、像の末に傳教一人・法華經・一切經を仏説のごとく
読み給へり、南都・七大寺蜂起せしかども桓武・乃至嵯峨等の
賢主・我と明らめ給いしかば又事なし、今末法の始め二百余年な
り況滅度後のしるしに鬭諍の序となるべきゆへに非理を前と
して濁世のしるしに召合せられずして流罪乃至寿にも・をよばん
と・するなり、されば日蓮が法華經の智解は天台・傳教には

せんまん いちぶん
千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は・
をそれをも・いだきぬべし、定んで天の御計いにもあづかるべし
と存ずれども、一分のしるしもなし。いよいよ重科に沈む、還つ
て此の事を計りみれば我が身の法華經の行者にあらざるか、又
諸天・善神等の此の国をすてて去り給えるか・かたがた疑はし、
而るに法華經の第五の卷・勸持品の二十行の偈は日蓮だにも此の
国に生れずば・ほとをど世尊は大妄語の人・八十万億那由佗の
菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ちぬべし、經に云く「諸の無智の人あ
つて・悪口罵詈し・刀杖瓦石を加う」等云云、今の世を見るに
日蓮より外の諸僧たれの人か法華經につけて諸人に悪口罵詈られ
刀杖等を加えらるる者ある、日蓮なくば此の一偈の未来記は
妄語となりぬ、「惡世の中の比丘は・邪智にして心諂曲」又云く

びやくえ

きようけい

ろくつう

らかん

「白衣びやくえの与よに法ぽうを説とくいて世よに恭敬きようけいせらるること、六通ろくつうの羅漢らかんの

ごと
これら
きようもん

ねんぶつ

ぜんしゅう

りつしゅう

ほつし

如ごとし」此等これらの經文きようもんは今の世よの念仏者ねんぶつ・禪宗ぜんしゅう・律宗りつしゅう等の法師ほつしな

せそん

もうご

じょうぎたいしゅう

ないし

こくおう

だいじん

くば世尊せそんは又大妄語もうごの人ひと、常在じょうざい大衆たいしゅう中ちゅう・乃至ないし向國王こくおう・大臣だいじん・

ばらもん

こじ

にちれん

ざんそう

るぎい

婆羅門ばらもん・居士等こじ、今の世よの僧等そうどう・日蓮にちれんを讒奏ざんそうして流罪るぎいせずば此この

きようもん

いわ

さくさくけんひんずい

にちれん

ほけきよう

經文きようもんむなし、又云いく「数数見擯出さくさくけんひんずい」等云云、日蓮にちれん・法華經ほけきようのゆ

たびたび

てんだい

へに度た度びながされずば数数たたびの二字ふたごいかながせん、此この二字ふたごは天台てんだい

でんぎよう

たま

まっぽう

・傳教でんぎようもいまだ・よみ給たまはず況またや余人またをや、末法まっぽうの始はつのしるし

くふあくせ

きんげん

にちれん

恐怖くふあくせ惡世あくせ中の金言きんげんの・あふゆへに但に日蓮にちれん一人ひとりこれをよめり、例れいせ

せそん

ふほうそうきよう

しる

いわ

めつご

あそかだいおう

ば世尊せそんが付法藏經ふほうそうきように記しるして云いく「我が滅後めつご・一百年ひゃくねんに阿育大王あそかだいおうと

いう王あるべし

まや

いわ

めつご

六百年りくねんに

りゅうじゅぼさつ

摩耶經まやに云いく「我が滅後めつご・六百年りくねんに竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ

という人・南天竺てんじくに出でずべし

だいひきよう

いわ

めつご

六十年むねねん

に末田地までんたいという者もの・地ちを竜宮りゅうぐうにつくべし」此これ等ら皆みな仏記ぶつぎのごと

に末田地までんたい

りゅうぐう

につくべし

こ

みなぶつき

のごと

くなりき、しからずば誰か仏教を信受すべき、而るに仏・恐怖
悪世・然後末世・末法滅時・後・五百歳など正妙の二本に
正しく時を定め給う、当世・法華の三類の強敵なくば誰か仏説を
信受せん日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん、
南三・北七・七大寺等・猶像法の法華經の敵の内・何に況や当世
の禪・律・念佛者等は脱るべしや、經文に我が身・普合せり
御勘氣をかほれば・いよいよ悦びをますべし、例せば小乗の
菩薩の末断惑なるが「願兼於業」と申して・つくりたくなき罪な
れども父母等の地獄に堕ちて大苦を・うくるを見てかたのごとく
其の業を造つて願つて地獄に堕ちて苦が同じ苦に代れるを悦びと
するがごとし、此れも又かくのごとし当時の責はたうべくも・な
けれども未来の惡道を脱すらんと・をもえば悦びなり。

但し世間の疑といふ、自心の疑と申し、いかでか天扶け
給わざるらん、諸天等の守護神は仏前の御誓言あり法華經の
行者には・さるになりとも法華經の行者とがうして早々に仏前
の御誓言を・とげんとこそをぼすべきに其の義なきは我が身・
法華經の行者にあらざるか、此の疑は此の書の肝心・一期の
大事なれば処処に・これをかく上疑を強くして答をかまうべ
し。

季札といひし者は心のやくそくを・たがへじと、王の重宝たる
剣を徐君が塚にかく・王尹と云いし人は河の水を飲んで金の鷺目
を水に入れ・公胤といひし人は腹をさいて主君の肝を入れる・此等
は賢人なり恩をほうずるなるべし、況や舍利弗迦葉等の大聖は・
二百五十戒三千の威儀・一もかけず見思を断じ三界を離れたる

しょうにん　聖人なり、
ほんたい　梵帝・諸天の導師・一切衆生の眼目なり、而るに

よんじゅうよねん

四十余年が間・永不成仏と嫌いすてはてられて・ありしが法華經

りょうやく

の不死の良薬をなめて・種の生い、破石の合い・枯木の華菓な

いれるたね

お

はしやく

から

けか

んどならんとせるがごとく仏になるべしと許されて・いまだ八相

ゆる

をとなえず・いかでか此の經の重恩をば・ほうぜざらん、若し

じゅうおん

も

ほうぜずば彼彼の賢人にも・をとりて不知恩の畜生なるべし、

かれがれ

けんじん

ふちおん

ちくしょう

毛宝が亀はあをの恩をわすれず昆明池の大魚は命の恩をほうぜん

こんめいち

と明珠を夜中にささげたり、畜生すら猶思をほうず何に況や

みょうじゆ

ちくしょう

なお

いか

いわんや

大聖をや、阿難尊者は斛飯王の次男・羅喉羅尊者は浄飯王の孫

たいせい

あなんそんじや

こくはんのう

らごら

そんじや

じょうばん

なり、人中に家高き上証果の身となつて成仏を・をさへられた

にんちゆう

じょうぶつ

りしに八年の靈山の席にて山海慧・蹈七宝華なんと如来の号を

りょうぜん

どうしつほうげ

にょらい

さづけられ給う、若し法華經ましまさずば・いかに・いえたかく

たま

も

ほけきよう

たいせい 大聖なりとも誰か恭敬きやうけいしたてまつるべき、夏かのけつの桀けつ・殷いんの紂のちゆうと

もう

申すは万乗の主・土民どみんの帰依きえなり、しかれども政あしくして世を

ほろぼせしかば今に・わるきものの手本てほんには桀けつちゆう・紂けつちゆうとこそ

申せ、下賤げせんの者・癩病けつちゆうの者も桀けつちゆう・紂けつちゆうのごとしと・いはれぬればの

られたりと腹たつなり、千二百・無量むりようの声聞しょうもんは法華經ほけきようましまさ

ずば誰か名をも・きくべき其その音こえをも習ならうべき、一千の声聞しょうもん・

一切いっさい經きやうを結けつじゆう集せりとも見る人よもあらじ、まして此等これらの人人ひとびとを

繪像えいざう・木像ぼざうにあらはして本尊ほんぞんと仰あおぐべしや、此これ偏へんに法華經ほけきようの

おんちから御力ごりきによつて一切いっさいの羅漢らかん歸依きえせられさせ給たまうなるべし、諸もろもろの

しょうもん 声聞しょうもん・法華ほっけを・はなれさせ給たまいなば魚の水をはなれ猿の木をは

なれ小兒しょうにの乳をはなれ民の王を・はなれたるが・ごとし、いかで

ほけきよう か法華經ほけきようの行者ぎやうじやをすて給たまうべき、諸もろもろの聲聞しょうもんは爾前にぜんの經經きやうきようにて

は肉眼にくげんの上に天眼てんげん・慧眼えげんをう。法華經ほけきょうにして法眼ほうげん・仏眼ぶつげん備そなわれり。
じゅつぼうせかい
十方世界じゅうほうせかいすら猶照見なうしょうけんし給たまうらん、何いかに況いわんや此この娑婆世界しゃばせかいの中
ほけきょう ぎょうじや ちけん
法華經ほけきょうの行者ぎょうじやを知見ちけんせられざるべしや、設にちれんい日蓮にちれん・惡人あくにんにて一
言・二言・一年・二年・一劫・二劫・乃至百千万億劫・此等これらの
しょうもん あつく めり たてまつとうじょう
声聞しょうもんを惡口・罵詈めりし奉り刀杖たてまつとうじょうを加えまいらする色なりとも
ほけきょう しんこう
法華經ほけきょうをだにも信仰しんこうしたる行者ぎょうじやならばすて給たまうべからず、譬たとへ
ば幼おさなきもの稚ふほの父母ふほをのる父学ふがくこれを・すつるや、梟きょうちよう鳥ちようが母を食う、
母これをすてず・破鏡はけい父をがいす父これにしたがふ、畜生ちくしやうすら
なお たいせい ほけきょう ぎょうじや
猶なほかくのごとし大聖たいせい・法華經ほけきょうの行者ぎょうじやを捨つべしや、されば四大
しょうもん りようげ いわ われら こ しやうもん ぶつどう
声聞しょうもんの領解りようげの文に云く「我等われら今は真こに是これ声聞しょうもんなり仏道ぶつどうの声を
も っ い っ さい
以て一切も っ い っ さいをして聞かしむ我等われら今は真まに阿羅漢あらかんなり諸もろもろの世間せけん天人てんにん・
魔・梵まに於おいて普あまねく其その中に於おいて・応まさに供養くようを受くべし、世尊せそんは大

恩まいます希有けうの事を以て憐愍教化れんみんきやうけして我等われらを利益りやくし給う、無量むりやう億劫いっせきにも、誰か能く報ずる者あらん。手足をもつて供給し頭頂をもつて礼敬し一切をもつて供養くやうすとも伴報ずること能わじ、若しもは以て項戴ちやうだいし兩肩に荷負して恒沙劫こつしやに於て心を尽して恭敬きやうけいし又美膳・無量の宝衣、及び諸の臥具・種種の湯藥を以てし、むりやう牛頭梅檀、及び諸の珍宝を以て塔廟たつぼうを起て宝衣を地に布き斯くごとの如き等の事を以て供養くやうすること恒沙劫こつしやに於てすとも亦報ずること能わじ」等云云。

諸の声聞等は前四味の経經に**いばく**ぞの呵嘖かしやくを蒙り人天にんてん・たいえ大会の中に**して**恥辱がましき事・其の数をしらず、しかれば迦葉かしやう尊者そんじやの淳泣ていきゅうの音は三千をひびかし、須菩提尊者は亡然として手いちばつの一鉢をすつ。舍利弗は餌食しやりほつをはき富樓那は画瓶がびやうに糞を入ると

嫌きらわる。世尊せそん、鹿野苑ろくやおんにしては阿含経あこんきょうを讚歎さんたんし二百五十戒を師と

せよなんと慇懃おんこんにほめさせ給たまいて、今又いまいつのまに我が所説しよせつをば

かうはそしらせ給たまうと二言そいう・相違とがの失もつとも申しぬべし、例せば

世尊せそん・提婆達多だいばだつたを汝愚人なんじぐにん・人の唾つばきを食うと罵詈めりせさせ給しかば

毒箭どくせんの胸に入るがごとく・をもひて・うらみて云いわく「瞿曇くどん

は仏陀ぶつだにはあらず我は斛飯王こくはんのうの嫡子あなん・阿難尊者そんじやが兄くどん・瞿曇いちるいが一類

なり、いかにあしき事ありとも内内きやうくん・教訓きやうくんすべし、此等程これらの人天にんてん

・大会たいえに此程の大禍げんを現げんに向つて申もうすもの大人だいにん・仏陀ぶつだの中にある

べしや、されば先先は妻のかたき、今は一座のかたき、今日きようより

は生生世世しやうじよよよに大怨敵おんてきとなるべし」と誓ちかいしぞかし、此これをもつて

思うに今諸もうもろの大声聞しやうもんは本と外道げどう・婆羅門ばらもんの家より出いでたり、又

諸もうもろの外道ちやうじやの長者しよなりしかば諸王しよに帰依きえせられ諸檀邦しよにたつとま

る、或は種姓・高貴の人もあり・或は富福・充滿のやからも
あり、而るに彼彼の栄官等をうちすて慢心の瞳を倒して俗服を脱
ぎ壞色の糞衣を身にまとひ白払・弓箭等をうちすて一鉢を手
ににぎり貧人・乞丐なんどの・ごとくして世尊につき奉り風雨を
防ぐ宅もなく、身命をつぐ衣食乏少なりし・ありさまなるに五
天・四海・皆外道の弟子・檀那なれば仏すら九横の大難にあひ
給ふ、所謂提婆が大石をとばせし阿闍世王の醉象を放ちし、
阿耆多王の馬麦・婆羅門城のこんづ・せんしや婆羅門女が鉢を腹
にふせし、何に況や所化の弟子の数難申す計りなし、無量の釈子
は波瑠璃王に殺され千万の眷属は醉象にふまれ、華色比丘尼は
提婆にがいせられ迦盧提尊者は馬糞にうづまれ、目・尊者は
竹杖にがいせらる、其の上六師同心して阿闍世・婆斯匿王等に

讒奏ざんそうして云いく「瞿曇くどんは閻浮えんぶ第一だいいちの大惡人あくにんなり、

彼かれがいたる處ところは三災さんさい・七難ひちなんを前まへとす。大海たいかいの衆流しゅうりゅうをあつめ、大

山しゅうぼうくの衆木しゅうぼうくをあつめたるが・ごとし、瞿曇くどんがところには衆惡しゅうあくをあ

つめたり、所謂いわゆる迦葉かしょう・舍利弗しゃりほつ・目連もくれん・須菩提しゆぼだい等らなり、人身じんしんを受け

たる者は忠孝ちゅうこうを先まへとすべし、彼等かれらは瞿曇くどんにすかされて父母ふぼの

教訓きょうくんをも用もちいず、家をいで王法おうほうの宣旨せんじをも・そむいて山林さんりんにい

たる、一國あつこくに跡あとをとどむべき者ものにはあらず、されば天てんには日月にちがつ・

衆星しゅうせい・変へんをなす地ちには衆天しゅうてんさかなりなんと・うつたう、堪かんべ

しとも・おぼえざりしに又またうちそうわざわいと仏陀ぶつだにもうちそい

・がたくて・ありしなり、人天大会にんてんたいえの衆会しゅうえの砌みきりにて時時じじ呵嘖かしやくの

音こえをききしかば・いかにあるべしとも・おぼへず只ただあわつる心こころの

みなり、其その上大だいなんの大難だいにんの第一だいいちなりしは浄名經じやうみやうきやうの「其それ汝なんじに

施す者は福田と名けず汝を供養する者は三惡道に墮す」等云云、
文の心は仏・庵羅苑申すところに・をはせしに梵天・帝釈・
日月・四天・三界諸天・地神・竜神等・無數恒沙の大会の中に
して云く須菩提等の比丘等を供養せん天人は三惡道に墮つべし、
此等をうちきく天人・此等の声聞を供養すべしや、詮ずるとこ
ろは仏の御言を用つて諸の二乗を殺害せさせ給うかと思ゆ、心
あらん人人は仏をも・うとみぬべし、されば此等の人人は仏を
供養したてまつりしついでに・こそ・わづかの身命をも扶けさ
せ給いしか、されば事の心を案ずるに四十余年の経經のみとか
れて、法華八箇年の所説なくて、御入滅ならせ給いたらましか
ば、誰の人か此等の尊者をば供養し奉るべき現身に餓鬼道にこそ
・をはすべけれ。

しか 而るに四十余年の経経をば東春の大日輪・寒氷を消滅する

がごとく無量の草露を大風の零落するがごとく一言一時に未顕

しんじつ 眞実と打ちけし、大風の黒雲をまき大虚に満月の処するがごとく

青天に日輪の懸り給うがごとく「世尊は法久後、要当説眞実と照

させ給いて、華光如来・光明如来等と舍利弗・迦葉等を赫赫た

る日輪・明明たる月輪のごとく鳳文にしるし、亀鏡に浮べられ

て候へばこそ如来滅後の人天の諸檀那等には仏陀のごとくは仰が

れ給しか。水すまば月・影を・をしむべからず風ふかば草木なび

かざるべしや、法華經の行者あるならば此等の聖者は大火の中

をすぎても大石の中を・とをりてもとぶらはせ給うべし、迦葉の

人定もことにこそ・よれ、いかにと・なりぬるぞいぶかしとも

申すばかりなし、「後・五百歳」のあたらざるか「広宣流布」の妄語

となるべきか是が法華經の行者ならざるか、法華經を教内と
くだべつでんしろう
下して別伝と称する大妄語の者をまほり給うべきか、捨閉闍拋と
ほけきよう
定めて法華經の門をとぢよ巻をなげすてよと・ゑりて法華堂を
うしな
失える者を守護し給うべきか、仏前の誓いはありしかども濁世の
だいなん
・大難のはげしさ・をみて諸天下り給わざるか、日月・天にまし
しゅみせん
ます須弥山いまも・くづれず海潮も増減す四季も・かたのごとく
・たがはず・いかに・なりぬるやらんと大疑いよいよ・つもり
侯。

又諸大菩薩・天人等のごときは爾前の經經にして記別を・う
しよだいほさつてんにん
るやうなれども水中の月を取らんと、するがごとく影を体とおも
うがごとく・いろいろかたち・のみあつて実義もなし、又仏の御恩も
せそんしよじようどう
深くて深からず、世尊初成道の時はいまだ説教もなかりしに
せつきよう

・円三教は華嚴經けこんきようの別・円・二教の義趣ぎしゆをいはず、彼の別・円・二教は教主きようしゅ釈尊しやくそんの別・円・二教にはあらず、法慧等ほうえの別円二教なり、此等これらの大菩薩ほさつは人目には仏の御弟子おんでしかとは見ゆれども仏の御師おんしとも・いゝぬべし、世尊せそん・彼の菩薩ほさつの所説しよせつを聴聞ちやうもんして智發ちふはつして後・重ねて方等かうとう・般若はんやの別・円をとけり、色もかわらぬ華嚴經けこんきようの別・円・二教なり、されば此等これらの大菩薩ほさつは釈尊しやくそんの師なり、華嚴經けこんきように此等これらの菩薩ほさつをかずへて善知識ぜんちしきとつかれしはこれなり、善知識ぜんちしきと申すは一向いっかう・師にもあらず一向いっかう・弟子でしにもあらずある事なり、蔵・通・二教は又・別・円の枝流なり別・円・二教をしる人必ず蔵・通・二教をしるべし、人の師と申すは弟子でしのしらぬ事を教えたるが師にては候なり、例せば仏より前の一切いっさいの人天にんてん・外道げどうは二天・三仙の弟子でしなり、九十五種きゆうじゆうごしゆまで流派したりしかど

も三仙の見を出いでず、教主釈尊もかれに習ならい伝えて外道の弟子げどうでしにて・ましませしが苦行・樂行・十二年の時・苦・空・無常・
無我むがの理をさとむり出してこそ外道の弟子の名をば離れさせ給たまいて
無師智とはなのらせ給たまいしか、又人天にんてんも大師だいしとは仰あおぎまいらせし
か、されば前四味の間は教主釈尊・法慧菩薩等の御弟子でしなり、
例せば文殊もんじゆは釈尊九代の御師おんしと申もうすがごとし、つねは諸経しよきように
不説一字と・とかせ給たまうも・これなり。

仏・御年・七十二の年・摩竭提国・靈鷲山りようじゆうせんと申もうす山にして
無量義經むりようぎきようを・とかせ給たまいしに、四十余年よんじゅうよねんの經經きようきようをあげて、杖葉しやうえつ
をば其その中におさめて四十余年よんじゅうよねん・未顕眞実みけんしんじつと打消たふし給たまうは此な
り、此の時こそ諸大菩薩しよだいぼさつ・諸天人等しよてんはあはてて実義じつぎを請しやうせんと
は申せしか、無量義經むりようぎきようにて実義じつぎと・をばしき事一言ありしかども

・ いまだまことなし、譬へば月の出でんとして其の体東山にかく
れて光り西山に及べども諸人月体を見ざるがごとし、法華經・
方便品の略開三顯一の時・仏略して一念三千・心中の本懷を
宣べ給う、始の事なればほととぎすの初音をねをびれたる者の
一音ききたるが・やうに月の山の半を出でたれども薄雲の・をほ
へるが・ごとく・かそかなりしを舍利弗等・驚いて諸天・竜神
・大菩薩等をもよをして諸天・竜神等・其の数恒沙の如し仏を
求むる諸の菩薩大数八万有り・又諸の万億国の転輪聖王の至れ
る合掌して敬心を以て具足の道を聞かんと欲す等とは請ぜしな
り、文の心は四味・三教・四十余年の間いまだ・きかざる法門う
け給はらんと請ぜしなり、この文に具足の道を聞かんと欲すと
申すは大教に云く「薩とは具足の義に名く」等云云、無依無得

だいじょう

大乘四論玄義記に云く「沙とは訳して六と云う胡法に六を以て

ぐそく

具足の義と為すなり」等云云。吉蔵の疏に云く「沙とは翻じて具足

な

と為す」等云云、天台の玄義の八に云く「薩とは梵語、此に妙と

はん

翻ずるなり」等云云、付法蔵の第十三真言・華嚴・諸宗の元祖

ほんち

・本地は法雲自在王如来・迹に竜猛菩薩・初他の大聖の

だいちどろん

大智度論千卷の肝心に云く「薩とは六なり」等云云、妙法蓮華經

もう

と申すは漢語なり、月支には薩達磨分陀利伽蘇多覽と申す、

ぜんむいさんそう

善無畏三蔵の法華經の肝心真言に云く「囊謨三曼陀沒駄南阿暗惡

さるばほだきのう

薩縛勃陀枳攬知娑乞芻毘耶見 ☆ 囊三姿縛空性羅乞叉・相也薩哩

だるまふんだりきや

達磨浮陀哩迦蘇駄覽經惹吽・發喜縛日羅固羅乞叉・護吽無願娑婆詞

決定成就

しんこん

此の真言は南天竺の鉄塔の中の法華經の肝心の真言なり、此の

眞言しんこんの中に薩哩達磨さつりだるまと申もうすは正法しょうほうなり薩さつと申もうすは正なり正は妙
なり妙は正なり正法華しょうほうげ・妙法華みょうほうげ是なり、又妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの上に
南無なむの二字を・をけり南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうこれなり、妙とは具足ぐそく・
六とは六度万行ろくどもんぎよう、諸の菩薩もろもろぼさつの六度万行ろくどもんぎようを具足ぐそくするやうを・きかん
とをもう、具とは十界互具じゅっかいご・足と申もうすは一界じゅっかいに十界あれば当位
に余界よかいあり満足まんぞくの義なり、此の經一部八卷

・二十八品・六万九千三百八十四字・一一に皆妙みなの一字を備えて
三十二相・八十種好しゅこうの仏陀ぶつだなり、十界じゅっかいに皆己界みなこかいの仏界ぶつかいを顕あらわす
妙樂みょうらく云く「尚なお仏果ぶつかを具ぐす、余果またしかも亦然またり」等云云、仏こ此れを答
えて云く、「衆生しゅじょうをして仏知見ぶつちけんを開ひらか令しめんと欲ほす」等云云、
衆生しゅじょうと申もうすは舍利弗しゃりほつ・衆生しゅじょうと申もうすは一闍提いっせんたい・衆生しゅじょうと申もうすは九
法界ほっかい・衆生しゅじょう無辺誓願度むへんせいがんど・此こに満足まんぞくす、「我本誓願ほんぜいを立つ一切いっさいの

衆をして我が如く等しくして異なること無からしめんと欲す我が
昔の願せし所の如き今は已に満足しぬ」等云云。

諸大菩薩・諸天等・此の法門をきひて領解して云く「我等昔よ

り 来数 世尊の説を聞きたてまつれども未だ曾て是の如き深妙

の上法を開かず」等云云、伝 教大師云く「我等昔より 来数

世尊の説を聞く・と謂うは昔法華經の前・華嚴等の大法を説くを

聞けども・となり、未だ曾て是くの如き深妙の上法を開かずと

謂うは未だ法華經の唯一仏乗の教を聞かざるなり」等云云、華嚴

・方等・般若・深密・大日等の恒河沙の諸大乘經はいまだ一代

の肝心たる一念三千の大綱・骨髓たる二乗作仏・久遠実成等を

いまだきかずと領解せり。

◆四一 開目抄下

210P

又、今よりこそ諸大菩薩も梵帝・日月・四天等も教主釈尊の
御弟子にては候へ、されば宝塔品には、此等の大菩薩を仏・我が
御弟子等と・をぼすゆへに諫曉して云く「諸の所大衆に告ぐ我
が滅度の後、誰か能く此の経を護持し読誦する今・仏前に於て
自ら誓言を説け」とは・したたかに仰せ下せしか、又諸大菩薩も
「譬えば大風の小樹の枝を吹くが如し」等と吉祥草の大風に
随い河水の大海へ引くがごとく仏には随いまいらせしか。

而れども靈山日浅くして夢のごとく・うつつならずありしに
証前の宝塔の上に起後の宝塔あつて十方の諸仏・来集せる皆
我が分身なりとなのらせ給い宝塔は虚空に釈迦・多宝坐を並べ
日月の青天に並出せるが如し、人天大会は星をつらね分身の
諸仏は大地の上宝樹の下の師子のゆかにまします、華嚴経の

蓮華藏世界は十方・此土の報仏・各各に国国にして彼の界の仏

・此の土に来て分身とならず此の界の仏・彼の界へゆかず但

法慧等の大菩薩のみ互いに來会せり、大日經・金剛頂經等の

八葉九学三十七尊等・大日如來の化身とはみゆれども其の化身・

三身円満の古仏にあらず、大品經の千仏・阿弥陀經の六方の諸仏

いまだ來集の仏にあらず大集經の來集の仏・又分身ならず、

金光明經の四方の四仏は化身なり、総じて一切經の中に

各修・各行の三身円満の諸仏を集めて我が分身とはとかれず、こ

れ寿命品の遠序なり、始成四十余年の釈尊が一劫・十劫等・

已前の諸仏を集めて分身ととかる・さすが平等意趣にもにず・

をびただしくをどろかし、又始成の仏ならば所化・十方に充滿

すべからざれば分身の徳は備わりたりとも示現して益なし、天台

云く「分身既に多し当に知るべし成仏の久しきことを」等云云、
大会のをどろきし意をかかれたり。

其の上に地涌千界の大菩薩・大地より出来せり釈尊に第一の
御弟子と・をぼしき普賢・文殊等にも・にるべくもなし、華嚴・
方等・般若・法華經の宝塔品に來集する大菩薩・大日經等の
金剛薩・等の十六の大菩薩なんども此の菩薩に對当すれば☆☆の
群る中に帝釈の來り給うが如し、山人に月郷等のまじはるにこ
とならず、補処の弥勒すら猶迷惑せり何に況や其の已下をや、此
の千世界の六菩薩の中に四人の大聖まします所謂・上行・
無逆行・淨行・安立行なり、此の四人は虚空・靈山の諸菩薩
等・眼もあはせ心もをよばず、華嚴經の四菩薩・大日經の四
菩薩・金剛頂經の十六大菩薩等も此の菩薩に對すれば翳眼のも

ののにちりん日輪を見るが如くごと海人が皇帝に向い奉るが如し、たいこう大公等の
四聖の衆中しゅうちゅうにありしに・にたりしやうざん商山の四皓が忠節に仕えしに
ことならず、巍巍堂堂として尊高なり、釈迦・多宝・十方の分身
を除いては一切衆生の善知識いっさいしゆじやうともたのみ奉りぬべし、弥勒菩薩
・心に念言ねんげんすらく、我は仏の太子の御時より三十成道・今の
靈山りやうぜんまで四十二年が間・此の界の菩薩・十方世界より来集せ
し諸大菩薩しやだいぼさつみな皆しりたり、又十方の淨穢土に・或は御使い・或は
我と遊戯ゆうげして其の国国に大菩薩を見聞せり、此の大菩薩の御師な
んどは・いかなる仏にてや・あるらん、よも此の釈迦・多宝・
十方じゅうぽうの分身の仏陀にはにるべくもなき仏にてこそ・をはすらめ、
雨の猛あめを見て竜の大なる事をしり華の大なるを見て池のふかきこ
とは・しんぬべし、此等の大菩薩これらの来る国・又誰と申す仏にあい

たてまつり・いかなる大法をか習修し給うらんと疑いし、あ
まりの不審さに音をも・いだすべくも・なけれども仏力にやあり
けん、弥勒菩薩疑つて云く「無量千万億の大衆の諸の菩薩
は昔より未だ會て見ざる所なり是の諸の大威徳の精進に菩薩衆
は誰か其の為に法を説いて教化して成就せる、誰に従つてか初
めて發心し何れの仏法をか称揚せる、世尊・我昔より来未だ
會つて是の事を見ず、願くは其の所従の国土の名号を説きたま
え、我常に諸国に遊べども未だ會つて是の事を見ず、我れ此の衆
の中に於て乃し一人をも識らず忽然に地より出でたり願くは其の
因縁を説きたまえ」等云云、天台云く「寂場より已降今座已往
十方の大士来会絶えず限る可からずと雖も我補処の智力を以つ
て悉く見悉く知る、而れども此の衆に於て一人をも識らず然るに

我れ十方に遊戲して諸仏に・奉し大衆に快く識知せらる」等云

云、妙樂云く「智人は起を知る蛇は自ら蛇を織る」等云云、經釈

の心・分明なり詮ずるところは初成道より・このかた此の土

十方にて此等の菩薩を見たてまつらず・きかずと申すなり。

仏・此の疑を答えて云く「阿逸多・汝等昔より未だ見ざる

所の者は我是の娑婆世界に於て阿耨多羅三藐三菩提を得已つて

是の諸の菩薩を教化し示導して其の心を調伏して道の意を發こ

さしめたり」等、又云く「我伽耶城菩提樹下に於て坐して最正覺

を成ずることを得て無上の法輪を轉じ爾して乃ち之を教化して初

めて道心を發さしむ今皆不退に任せり、乃至我久遠より來是等

の衆を教化せり」等云云、此に弥勒等の大菩薩大に疑いをもう、

華嚴經の時・法慧等の無量の大菩薩あつまるいかなる人人なるら

んと・をもへば我が善知識なりとをほせられしかば、さもやと・
うちをもひき、其の後の大宝坊・白鷺池等の来会の大菩薩も・し
かのごとし、此の大菩薩は彼等にはにるべくもなき・ふりたりげ
にまします定めて釈尊の御師匠かなんとおぼしきを令初發道心
とて幼稚のものども・なりしを教化して弟子となせりなんと・を
ほせあれば・大なる疑なるべし、日本の聖徳太子は人王第三十
二代・用明天皇の御子なり、御年六歳の時・百濟・高麗・唐土よ
り老人どものわたりたりしを六歳の太子・我が弟子なりと・をほ
せありしかば彼の老人ども又合掌して我が師なり等云云、
不思議なりし事なり、外典に申す・或者道をゆけば路のほとりに
年三十計りなる・わかものが八十計りなる老人を・とらへて打ち
けり、いかなる事ぞと・たとえば此の老翁は我が子なりなんと申す

と・かたるにもにたり、されば弥勒菩薩等疑つて云く「世尊・

によらいたいしな

如来太子為りし時・釈の宮を出で伽耶城を去ること遠からずして

どうじよう

道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得給えり、是

このかた

より已来始めて四十余年を過ぎたり、世尊・云何ぞ此の少時に

於て大いに仏事を作し給える」等云云、一切の菩薩始め華嚴経よ

り四十余年・会会に疑をまうけて一切衆生の疑網をはらす中

よんじゅうよねん

に此の疑・第一の疑なるべし、無量義経の大莊嚴等の八万の

うたがい だいいち うたがい

大士・四十余年と今との歴劫・疾成の疑にも超過せり、

よんじゅうよねん

観無量寿経に韋提希夫人の阿闍世王が提婆にすかされて父の王

かんむりようじゆきよう いだいけふじん あじゃせ

をいましめ母を殺さんとせしが耆婆月光に・をどされて母をはな

ぎば がっこう

ちたりし時・仏を請じたてまつて・まづ第一の間に云く「我れ

しよう

宿し何の罪あつて此の悪子を生む世尊・復た何等の因縁有つて

むか つみ

せそん また なんら いんねん

提婆達多だいばだつたと共に眷属けんぞくとなり給うたま」等云云、此の疑うたがいの中に「世尊復せそんまた

た何等なんらの因縁有つて」等の疑うたがは大なる大事なり、輪王りんおうは敵と共に

生れず帝たいしやく釈は鬼と・ともならず仏は無量劫むりようこつの慈悲じひ者なりいかに

大怨と共にはまします還かえつて仏には・ましまさざるかと疑うたがいうな

るべし、而しかれども仏答え給はたまず、されば觀經かんきようを讀誦どくじゆせん人・

法華經ほけきようの提婆品だいばへ入らずば・いたづらごとなるべし、大涅槃經だينهはんきように

迦葉菩薩かしようぼさつの三十六の問もこれには及およばず、されば仏・此の疑うたがいを

晴たまさせ給はたまずば一代いちだいの聖教しやうきようは泡沫ほうまつにどうじ一切衆生いっさいしゆじようは疑網ぎもうに

かかるべし、寿量じゆりようの一品の大切なるこれなり。

其その後・仏・寿量品じゆりようほんを説いいて云く「一切世間いっさいせけんの天人てんにん及び

阿修羅あしゆらは皆今の釈迦牟尼しやかむにぶつ仏は釈氏しやくしの宮を出いで伽耶城がやを去ること遠

からず道場どうじように坐して阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいを得給たまえりと謂おもえり」

等云云、此の經文きやうもんは始め寂滅じやくめつ道場どうじやうより終り法華經の安樂行品あんらくぎやうほん

にいたるまでの一切いっさいの大菩薩等の所知しよちをあげたるなり、「然しかるに

善男子・我れ實に成仏じやうぶつしてより已來このかた・無量無辺百千萬億那由他むりやうむへんせんまん

劫なり」等云云、此の文は華嚴經の「三処の始成正覺しじやうしやうかく」阿含經あこんきやう

に云く「初成いわ」淨名經じやうみやうきやうの「始坐仏樹だいしつきやう」大集經たいしつきやうに云く「始十六

年だいにちきやう」大日經の「我昔坐道場どうじやう」等・仁王經の「二十九年にんのうきやう」無量義經むりやうぎきやう

の「我先道場どうじやう」法華經の方位品ほけきやうに云く「我始坐道場どうじやう」等を一言

に大虚妄こもうなりと・やぶるもんなり。此の過去常かこつね顯あらわるる時・

諸仏皆釈尊しよぶつみなしやくそんの分身ふんじんなり爾前にぜん・迹門しやくもんの時しよぶつは諸仏しやくそん・釈尊しやくそんに肩を並

べて各修かくしゅう・各行の仏なり、かるがゆへに諸仏しよぶつを本尊ほんそんとする者・

釈尊等しやくそんを下す、今華嚴の台上けこん・方等ほうとう・般若はんにや・大日經等だいにちきやうの諸仏しよぶつは

皆釈尊の眷属けんぞくなり、仏三十成道じやうどうの御時おんときは大梵天王だいほんてんのう・第六天等だいろくてんの

ちぎょう 知行の しゃばせかい 袈婆世界を奪い取り給いき、今爾前・迹門にして十方を

じょうど

浄土と・がうして此の土を穢土ととかれしを打ちかへして此の土

ほんど

じゅつぽう

じょうど

すいじやく

えど

くおん

は本土なり十方の浄土は垂迹の穢土となる、仏は久遠の仏なれ

しゃつけ

たほう

ぼさつ

きようしゅしゃくそん

おんでし

いつさいきよう

ば迹化・他方の大菩薩も教主釈尊の御弟子なり、一切経の中

じゅうりようほん

にちがつ

だいおう

に此の寿量品ましまさずば天に日月の・国に大王

さんが

たま

たましい

の・山河に珠の・人に神のなからんが・ごとくして・あるべき

けこん

しんこん

ごんしゅう

ちしや

ちようかん

かじよう

じおん

を華嚴・真言等の権宗の智者と・をぼしき澄観・嘉祥・慈恩・

こうほう

いちおう

ごんしゅう

ひとびと

かつ

えきよう

さんたん

弘法等の一往・権宗の人人・且は自の依経を讃歎せんために

ある

いわ

けこんきよう

きようしゅ

ほうしん

ほけきよう

おうじん

ある

・或は云く「華嚴経の教主は報身・法華経は応身」と・或は

いわ

ほつけじゅうりようほん

むみよう

へんいき

だいにちきよう

云く「法華寿量品の仏は無明の辺域・大日経の仏は明の分位」

等云云、雲は月をかくし・臣は賢人をかくす人讃すれば黄

石も

ざんしん

けんじん

けんじん

ざん

おうしやく

玉とみへ諛臣も賢人かと・をぼゆ、今濁世の学者等・彼等の語

ゆしん

けんじん

をぼゆ

をぼゆ

じよくせ

がくしや

かれら

ことば

義に隠されてじゅりようぼん寿量品の玉をもてあそ翫あそばず、又天台宗の人人もたほら

かされて金石・一同のをもひを・なせる人人もあり、仏・久成くじように

・ましまさずばしよけ所化の少わすかるべき事を并わきまううべきなり、月は影を

慳おしまざれども水なくば・うつるべからず、仏・衆生しゆじようを化せんと・

をばせども結縁けちえんうすければ八相を現げんぜず、例せば諸の声聞もろもろしやうもんが

初地しよじ・初住しよじゆうには・のぼれども爾前にぜんにして自調自度じちやうじどなりしかば

未来みらいの八相をきやうしゆしやくそんしじようごするなるべし、しかれば教主釈尊始成しじようならば今

・此の世外ほかの梵帝ぼんたい・日月にちがつ・四天等してんは劫初こつしよより此の土を領りやうぜんす

れども四十余年よんじゆうよねんの仏弟子ぶつでしなり、靈山りやうぜん・八年ほっけの法華結縁けちえんの衆今ま

いりの主君しゆくんにくじゆうをもひつかず久住くじゆうの者にへだてらるるがごとし、今

久遠実成くおんじつじようあらはれぬれば東方とうほうの薬師如来やくしにょらいの日光がっこう・月光さいほう・西方さいほう

阿弥陀如来あみだにょらいの觀音かんのん・勢至せいし・乃至ないしじゆつぼうせかい十方世界しよぶつの諸仏しよぶつの御弟子おんでしだい大日だいにち・

金剛頂等の兩部の大日如來の御弟子の諸大菩薩・猶教主釈尊
の御弟子なり、諸仏・釈迦如來の分身たる上は諸仏の所化申すに
をよばず何に況や此の土の劫初より・このかたの日月・衆星等
・教主釈尊の御弟子にあらずや。

而るも天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり、俱舍・成実
りつしゅう

・律宗は三十四心・斷結成道の釈尊を本尊とせり、天尊の

太子が迷惑して我が身は民の子とをもうがごとし、華嚴宗・

真言宗・三論宗・法相宗等の四宗は大乗の宗なり、法相・

三論は勝應身ににたる仏を本尊とす天王の太子・我が父は侍と

・をもうがごとし、華嚴宗・真言宗は釈尊を下げたて慮舍那の大

口等を本尊と定む天子たる父を下げたて種姓もなき者の法王のごと

くなるに・つけり、浄土宗は釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏

とをもちて教主をすてたり、禪宗は下賤の者・一分の徳あつて
父母をさぐるがごとし、仏をさげ經を下す此皆本尊に迷えり、
例せば三皇已前に父をしらず人皆禽獸に同ぜしが如し、壽量品
をしらざる諸宗の者は畜に同じ不知恩の者なり、故に妙樂云く
「一代教の中未だ曾て遠を顧さず、父母の壽知らずんばある可
らず若し父の壽の遠きを知らずんば復父統の邦に迷う、徒に
才能と謂うとも全く人の子に非ず」等云云、妙樂大師は唐の末
・天宝年中の者なり三論・華嚴・法相・真言等の諸宗・並に
依經を深くみ広く勘えて壽量品の仏をしらざる者は父統の邦に
迷える才能ある畜生とかけるなり、徒謂才能とは華嚴宗の法蔵
・澄觀・乃至・真言宗の善無畏三蔵等は才能の人師なれども子
の父を知らざるがごとし、伝教大師は日本顯密の元祖・秀句に

云く「他宗所依の經は一分仏母の義有りと雖も然も但愛のみ有つて嚴の義を闕く、天台法華宗は嚴愛の義を具す一切の賢聖・學・無學及び菩薩心を發せる者の父なり」等云云、眞言・華嚴等の經經には種熱脱の三義・名字すら猶なし何に況や其の義をや、華嚴・眞言經等の一生初地の即身成仏等は經は權經にして過去をかくせり、種をしらざる脱なれば超高が位にのぼり道鏡が王位に居せんとせしがごとし。

宗宗・互に程を諍う予此をあらそはず但經に任すべし、法華經の種に依つて天親菩薩は種子無上を立てたり天台の一念三千これなり、華嚴經・乃至諸大乘經・大日經等の諸尊の種子・皆一念三千なり天台智者大師・一人・此の法門を得給えり、華嚴宗の澄觀・此の義を盗んで華嚴經の心如工画師の文のた神とす、

しんこん だいにかきよう にじようさぶつ くおんじつじよう いちねんさんぜん ほうもん
真言・大日経等には二乗作仏・久遠実成・一念三千の法門これ

なし、善無畏三蔵・震旦に来て後・天台の止観を見て智發し

だいにちきよう じつそう いっさいほんじよ てんだい いちねんさんぜん
大日経の心実相・我一切本初の文の神に天台の一念三千を盗み

入れて真言宗の肝心として其の上に印と真言とをかざり法華経

だいにかきよう しょうれつ りどうじしやう
と大日経との勝劣を判ずる時・理同事勝の釈をつくれり、両界

まんだら にじようさぶつ じゅつかいこく だいにちきよう
の漫荼羅の二乗作仏・十界互具は一定・大日経にありや第一の

おおわく ゆえ でんぎやう だいいしわ すなわ ひつじゆ そうじやう
誑惑なり、故に伝教大師云く「新来の真言家は則ち筆受の相承

を混じ、旧到の華嚴家は則ち影響の規模を隠す」等云云、俘囚の

嶋なんどに・わたて・ほのぼのといううたは・われよみたりなん

もう 夷 跡
ど申すは・えぞていの者はさこそとをもうべし、漢土・日本の

がくしや りやうしやうわじやういわ しんこん ぜんもん けこん さんろん
学者又かくのごとし、良☆和尚云く「真言・禅門・華嚴・三論

ないしも ほつけ
乃至若し法華等に望めば是接引門」等云云、善無畏三蔵の閻魔の

責にあづからせ給しは此の邪見じやけんによる後に心を・ひるがへし

法華經ほけきょうに歸伏きふくしてこそ・このせめをば脱のがれさせ給たまいしか、其その後

善無畏ぜんむい・不空等ふくとう・法華經ほけきょうを両界の中央にきて大王のごとくし

胎藏たいそうの大日經だいにちきょう・金剛こんごうの金剛頂經こんごうちょうきょうをば左右さうの臣下しんかのごとくせし

・これなり、日本にほんの弘法こうぼうも教相きょうそうの時は華嚴宗けこんしゅうに心をよせて

法華經ほけきょうをば第八はちにをきしかども事相じそうの時には実慧じつて・真雅しんが・円澄えんちよう

・光定等みつただの人人ひとびとに伝え給たまいし時・両界の中央かうに上かみのごとく・をか

れたり、例せば三論さんろんの嘉祥かじようは法華ほつけ玄十卷げんじゅうに法華經ほけきょうを第四時・

会二破二えにと定れども天台てんだいに歸伏きふくして七年ななとしつかへ廢講散衆はいこうさんしゅうして身

を肉橋にくきょうとなせり、法相ほっそうの慈恩じおんは法苑林ほうおんりん・七卷しちくわん・十二卷じふにくわんに一乘いちじよう

方便ほうべん・三乘さんじよう真実等しんじつとうの妄言多し、しかれども玄賛げんさんの第四だいには故亦また

兩存等と我が宗を不定じようになせり、言は兩方なれども心は天台てんだいに

きふく 歸伏せり、華嚴の澄観は華嚴の疏を造て華嚴・法華・相對して
ほつけ 法華を方便とかけけるに似れども彼の宗之を以て実と為す此の宗の
りつぎ 立義・理通ぜざることを無し等とかけけるは悔い還すにあらずや、
こうほう 弘法も又かくのごとし、亀鏡なければ我が面をみず敵なければ
我が非をしらず、真言等の諸宗の学者等・我が非をしらざりし
でんぎようだいし 程に伝教大師にあひたてまつて自宗の失をしるなるべし。
しよきよう されば諸經の諸仏・菩薩・人天等は彼彼の經經にして仏に
たま ならせ給うやうなれども実には法華經にして正覺なり給へり
しやかしよぶつ 釈迦諸仏の衆生無辺の総願は皆此の經にをいて満足する今者已
まんぞく 満足の文これなり、予事の由を・をし計るに華嚴・觀經・
だいにちきよう 大日經等をよみ修行する人をば・その經經の仏・菩薩・天等
しゆこ 守護し給らん疑あるべからず、但し大日經・觀經等をよむ

行者等・法華經の行者に敵対をなさば彼の行者をすて
法華經の行者を守護すべし、例せば孝子・慈父の王敵となれば
父をすてて王にまいる孝の至りなり、仏法も又かくのごとし、
法華經の諸仏・菩薩・十羅刹・日蓮を守護し給う上・浄土宗の
六方の諸仏・二十五の菩薩・真言宗の千二百等・七宗の諸尊・
守護の善神・日蓮を守護し給うべし、例せば七宗の守護神・
伝教大師をまほり給いしが如しと・をもう、日蓮案じて云く
法華經の二処三会の座にましましし、日月等の諸天は法華經の
行者出来せば磁石の鉄を吸うがごとく月の水に遷るがごとく
須臾に来て行者に代り仏前の御誓をはたさせ給べしとこそを
ばへ候にいままで日蓮をとぶらひ給はぬは日蓮・法華經の行者
にあらざるか、されば重ねて經文を勘えて我が身にあてて、身

の失^{とが}をしるべし。

疑^{うたがい}て云^{いわ}く当世^{とうせ}の念仏宗^{ねんぶつしゅう}・禅宗^{ぜんしゅう}等をば何^{いか}なる智眼^{ちがん}をもつて

法華經^{ほけきょう}の敵人^{てきじん}・一切衆生^{いっさいしゅじょう}の悪知識^{あくちしき}とはしるべきや、答えて云^{いわ}く

私の言^{こと}を出^{いだ}すべからず經釈^{きょうしゃく}の明鏡^{めいきよう}を出^だして謗法^{ぼうぼう}の醜面^{しゅうめん}をうか

べ其^その失^{とが}をみせしめん生盲^{いきめくら}は力をよばず、法華經^{ほけきょう}の第四宝塔品^{ほうとうぼん}

に云^{いわ}く「爾^その時^{とき}に多宝仏^{たほうぶつ}・宝塔^{ほうとう}の中に於^{おい}て半座^{はんざ}を分ち釈迦牟尼仏^{しゃかむにぶつ}

に与^よう、爾^その時^{とき}に大衆^{たいしゅう}一如來^{にょらい}の七宝^{しつぽう}の塔^たの中の師子^{しし}の座^ざの上に

在^{いまし}して結跏趺坐^{けつかふざ}し給^{たま}うを見^みたてまつる、大音声^{おんじよう}を以^もて普^{あまね}く四衆^{ししゅう}

に告^{たま}げ給^{たま}わく、誰^{たれ}か能^よく此^この娑婆国土^{しゃばこくど}に於^{おい}て広^{ひろ}く妙法華經^{みょうほけきょう}を説^{とく}か

ん、今正^{まさ}しく是^これ時^{とき}なり、如來^{にょらい}久^{ひさ}しからずして当^{まさ}に涅槃^{ねはん}に入るべ

し、仏^{ぶつ}・此^この妙法華經^{みょうほけきょう}を以^もて付屬^{つふぞく}して在^あること有^あらしめんと欲^ほす」

等云云^{だいいち}、第一^{ちよくせん}の勅宣^{ちよくせん}なり。

又云く「爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を説い

て言く、聖主世尊・久しく滅度し給うと雖も宝塔の中に在して尚

法の為に來り給えり、諸人如何ぞ勤めて法に為わざらん、又我が

分身の無量の諸仏・恒沙等の如く來れる法を聴かんと欲す各妙

なる土及び弟子衆・天人・竜神・諸の供養の事を捨てて法をし

て久しく住せしめんが故に此に來至し給えり、譬えば大風の

小樹の枝を吹くが如し、是の方便を以て法をして久しく住せし

む、諸の大衆に告ぐ我が滅度の後誰か能く此の經を護持し誦誦

せん今・仏前に於て自ら誓言を説け、第二の鳳詔なり。

「多宝如來および我が身集むる所の化仏當に此の意を知るべし、

諸の善男子・各諦かに思惟せよ此れは為れ難き事なり、宜しく

大願を發こすべし、諸余の經典數・恒沙の如し此等を説くと

雖も未だ為れ難しとするに足らず、若し須弥を接つて他方無數の
仏土に擲げ置かんも亦未だ為れ難しとせず、若し仏滅後・惡世の
中に於て能く此の經を説かん是則ち為れ難し、假使劫焼に乾れ
たる草を担い負うて中に入つて焼けざらんも亦未だ為れ難しとせ
ず、我が滅度の後に若し此の經を持ちて一人の爲にも説かん是
則ち為れ難し、諸の善男子・我が滅後に於て誰か能く此の經を
護持し読誦せん、今・仏前に於て自ら誓言を説け」等云云、第三
の諫勅なり、第四・第五の二箇の諫曉・提婆品にあり下にかく
べし。

此の經文の心は眼前なり青天に大日輪の懸がごとし白面に鑿
のあるにいたり、而れども生盲の者と邪眼の者と一眼のものと
各謂自師の者・辺執家の者はみがたし万難をすてて道心あらん

者にしるしとどめてみせん、西王母がそのものも・輪王出世の
うどんげ

優曇華よりもあいがたく沛公が項羽と八年・漢土をあらそいし
よりとも むねもり はいこう こうう

頼朝と宗盛が七年・秋津嶋にたたかひし修羅と帝釈と金翅鳥と
りゅうおう あのかち あらそ ここ

竜王と阿耨池に諍えるも此にはすぐべからずとしるべし、
にほんこく

日本国に此の法顕ること二度なり伝教大師と日蓮となりとし
あらわ でんぎようだいし にちれん

れ、無眼のものは疑うべし力及ぶべからず此の経文は日本・
うたがい きようもん にほん

漢土月氏・竜宮・天上・十方世界の一切経の勝劣を釈迦・
かんどがっし りゅうぐう てんじよう じゅうぼうせかい いっさいきよう しょうれつ しやか

多宝・十方の仏・来集して定め給うなるべし。
たほう じゅうぼう らいじゅう たま

問うて云く華嚴経・方等経・般若経・深密経・楞伽経・
いわ けこんきよう ほうとう ほんにやきよう じんみつ りようがきよう

大日経・涅槃経等は九易の内か六難の内か、答えて云く華嚴宗
だいにちきよう ねはんきよう くい ぜん さんそうだいし いわ けこんしゅう

の杜順・智儼・法蔵・澄観等の三蔵大師。読んで云く「華嚴経
とじゆん ちこん ほうそう ちようかん さんそうだいし いわ けこんきよう

と法華経と六難の内・名は二経なれども所説・乃至理これ同じ
ほけきよう なん しょうせつ ないし

しもんかんべつ

けんしんたいどう

ほつそう

げんじょうさんそう

じおんだいし

四門観別・

見真諦同のごとし、

法相の玄奘三蔵・

慈恩大師等

・読んで云く

「深密経と

法華経とは

同く唯識の

法門にして第三時

の教・六難の内なりし

三論の吉蔵等

読んで云く

「般若経と

法華経とは名異体同・

二経一法なり」

善無畏三蔵・金剛智三蔵・

不空三蔵等・

読んで云く

「大日経と法華経とは

理同じ、をなじ

く六難の内の経なり、

日本の弘法・

読んで云く

「大日経は六難

・九易の内にあらず

大日経は釈迦所説の

一切経の外・

法身・

大日如来の所説なり、

又・或る人云く

「華嚴経は報身如来の

所説

にちによらい

・六難・九易の内には

あらずし、此の四宗の

元祖等かやうに

読めば其の流れをくむ

数千の学徒等も又此の

見をいはず、日蓮な

げていて云く上の諸人

の義を左右なく非なり

といはば当地の諸人

おもて

面を向くべからず非に

非をかさね結句は

国王に讒奏して命に及

ぶべし、但し我等が慈父・雙林最後の御遺言に云く「法に依つて人に依らざれ」等云云、不依人等とは初依・二依・三依・第四依・普賢・文殊等の等覺の菩薩が法門を説き給うとも經を手ににぎらざらんをば用ゆべからず、「了義經に依つて不了義經に依らざれ」と定めて經の中にも了義・不了義經を糾明して信受すべきこそ候いぬれ、竜樹菩薩の十住毘婆沙論に云く「修多羅黑論に依らずして修多羅白論に依れ」等云云、天台大師云く「修多羅と合う者は録して之を用いよ文無く義無きは信受すべからず」等云云、伝教大師云く「仏説に依憑して口伝を信ずること其れ」等云云、円珍智証大師云く「文に依つて伝うべし」等云云、上にあぐるところの諸師の釈・皆一分・經論に依つて勝劣を并うやうなれども皆自宗を堅く信受し先師の謬義をたださざる

ゆへに曲会私情の勝劣なり莊嚴己義の法門なり・仏滅後の犢子
・方広・後漢已後の外典は仏法外の外道の見よりも三皇・五帝の
儒書よりも邪見・強盛なり邪法・巧なり、華嚴・法相・真言等
の人師・天台宗の正義を嫉ゆへに実經の文を会して権義に順
ぜしむること強盛なり、しかれども道心あらん人・偏党をすて
自他宗をあらそはず人をあなづる事なかれ。

法華經に云く「已今当」等云云、妙樂云く「縦い經有つて諸經

の王と云うとも已今当說最為第一と云わず」等云云、又云く

「已今当の妙茲に於て固く迷う謗法の罪苦長劫に流る」等云云、

此の經釈にをどろいて一切經・並に人師の疏釈を見るに狐疑

の氷とけぬ今真言の愚者等・印・真言のあるを・たのみて

真言宗は法華經にすぐれたりとをもひ慈覺大師等の真言勝れた

りとはせられぬれば・なんと・をもえるは・いうにかいなき事甲斐なり。

密みつ嚴こんきよう經きやうに云いく「十じゅう地うち華け嚴こん等たうと大たい樹じゆと神じん通つう勝しやう鬘まん及おび余よ經きやうと皆みな此この經きやう從より出いでたり、是かくの如ごときの密みつ嚴こんきやう經きやうは一切いつさい經きやうの中ちゆうに勝すぐれたり」等云云、大だい雲うん經きやうに云いく「是この經きやうは即そく是ぜ諸しよ經きやうの轉てん輪りん聖じやう王おうなり何もを以もつての故ゆえに是この經きやう典てんの中ちゆうに衆しゆ生じやうの實じつ性しやう・仏ぶつ性しやう・常じやう住じゆうの法ほう藏ざうを宣せん說ぜつする故ゆゑなり」等云云、六ろく波は羅ら蜜みつ經きやうに云いく「所い謂わ過か去こ無む量りやうの諸しよ仏ぶつ・所しよ說ぜつの正しやう法ほう及おび我われ今いま說ぜつく所しよの所い謂わ八はち萬まん四し千せんの諸しよの妙みやう法ほう蘊おんなり、攝せつして五ご分ぶんと為なす一いつには索そく咀そ纒らん・二にには毘び奈な耶や・三さんには阿あ毘び達だ磨ま四しには般はん若にや波は羅ら蜜みつ・五ごには陀だ羅ら尼に門もんとなり此この五ご種しゆの藏ざうをもつて有う情じやうを教きやう化くわす、若もし彼かの有う情じやう契けい經きやう調てう伏ふく對たい法ぽう般はん若にやを受じゆ持ぢするこ能あたわす・或あるは復また有う情じやう諸しよの惡あく業ごう・四し重じゆう・八はち重じゆう・

五無間罪方等經を謗ずる一闡提等の種種の重罪を造るに銷滅し
て速疾に解脱し頓に涅槃を悟ることを得せしむ、而も彼が為に
諸の陀羅尼藏を説く、此の五の法藏譬えば乳・酪・生蘇・熟蘇
及び妙なる醍醐の如し、總持門とは譬えば醍醐の如し醍醐の味は
乳・酪・蘇の中に微妙第一にして能く諸の病を除き諸の有情をし
て身心安樂ならしむ、總持門とは契經等の中に最も第一と為す
能く重罪を除く」等云云、解深密經に云く「爾の時に勝義生
菩薩復仏に白して云く世尊・初め一時に於て波羅☆仙人
墮処施鹿林の中に在て唯声聞乗を發趣する者の為に四諦の相を
以て正法輪を轉じ給いき、是甚だ奇にして甚だ此れ希有な
り一切世間の諸の天人等・先より能く法の如く轉ずる者有ること
無しと雖も、而も彼の時に於て轉じ給う所の

ほうりん うじょう うよう こ みりようぎ こ もろもろじようろん
法輪は有上なり有容なり是れ未了義なり是れ諸の諍論安足の
しよし
処所なり、世尊在昔第二時の中に唯発趣して大乘を修する者の
ため いっさい みなむじせい むしよう だいじよう しゅう
為にして一切の法は皆無自性なり無性無滅なり本来寂靜なり
じしよう ねはん よ おんみつ もっしようほうりん たいまい
自性涅槃なるに依る隱密の相を以て正法輪を轉じ給いき、更に
はなはだ はなはだ こ けう いえど おい
甚だ奇にして 甚だ為れ希有なりと雖も、彼の時に於て轉じ
たま ほうりんまたこ うじよう ところあ なおいま りようぎ
給う所の法輪亦是れ有上なり容受する所有り猶未だ了義ならず、
こ もろもろ せいそん おい あまね いっさい
是れ諸の評論安足の処所なり、世尊今第三時の中に於て普く一切
乗を發趣する者の為に一切の法は皆無自性・無生無滅・
ほんらいじやくせい じしよう ねはん むじせい よ けんりよう
本来寂靜・自性涅槃にして無自性の性なるに依り顕了の相を
もっしようほうりん たいまい だいいち はなはだ もっともこれ けう
以て正法輪を轉じ給う、第一甚だ奇にして最も為れ希有なり、
せいそん たいまい ほうりん むじよう こ
今に世尊轉じ給う所の法輪・無上無容にして是れ真の了義なり
もろもろ ひようろんあんそく しよしよ あら はんによきよう いわ ちようもん
諸の評論安息の処所に非ず」等云云、大般若經に云く「聴聞

する所の世・出世しゅっせの法に随したがつて皆能みなよく方便ほうべんして般若はん甚深んにやじんの理趣にに
会入えにゆうし諸もろもろの造作ぞうさくする所の世間せけんの事業またはんも亦般若もつを以もつて法性ほつしやうに会入えにゆう
し一事ほつしやうとして法性いを出いずる者を見ず」等云云、大日經第一だいにちきやうだいいちに
云いわく「秘密主ひみつ大乘行だいじやうあり無縁乘むえんの心を發おこす法に我性わこ無し何を
以もつての故ゆえに彼往昔むかし是かくくの如ごとく修行しゆぎやうせし者の如ごとく蘊おんの阿頼耶あらやを觀
察しして自性幻じしやうの如ごとく知ことる」等云云、又云いわく「秘密主ひみつ彼是かくくの
如ごとく無我むがを捨がて心主自在じざいにして自心じしんの本不生ふしやうを覺さとす」等云云、又
云いわく「所謂いわゆる空性は根境こんきやうを離むそれ無相むそうにして境界きやうかい無なくく諸もろもろの戲論ぎろん
に越こえて虚空こくうに等ないし乃至極無自性むじせい」等云云、又云いわく「大日尊だいにち
秘密主ひみつに告いげて言いく秘密主ひみつ云何いかなるか菩提ぼだい・謂いく実じつの如ごとく自心じしん
知しる」等云云、華嚴經けこんきやうに云いわく「一切世界いっさいせかいの諸もろもろの群生ぐんじやう声同乘しやうどうじやうを求もとめ
んと欲ほすること有あること☆し緣覺すくなしえんかくを求もとむる者うたた・復また少すくし、大乘だいじやう

を求むる者 甚^{はなはだ}だ希有^{けう}なり大乘^{だいじよう}を求むる者猶^{なほ}為^なれ易^{やす}く能^よく是^この
法^こを信^{はなはだ}ずる為^{はなはだ}れ 甚^{はなはだ}だ難^{がた}し、況^{いわんや}や能^よく受持^{じゅじ}し・正憶念^{おくねん}し・説^おの
如^{ごと}く修行^{しゅぎよう}し真実^{しんじつ}に解^げせんをや、若^もし三千大千界^{さんぜんせんがい}を以^{もつ}て項戴^{ちやうだい}する
こと一劫^{いつこ}身動^{いっしんどう}ぜざらんも彼の所作^{しよさいま}未^こだ為^{かた}れ難^{かた}からず是^この法^こを信^こず
るは為^これ 甚^{はなはだ}だ難^{がた}し、大千塵数^{じんじゆ}の衆生^{しゅじよう}の類^{たぐい}に一劫^{いつこ}諸^{もろ}の樂典^{もろ}を
供養^{くよう}するも彼の功德^{くどくいま}未^こだ為^{すぐ}れ勝^{すぐ}れず是^この法^こを信^こずるは為^これ殊勝^{しゆしやう}
なり、若^もし掌^{たなこころ}を以^{もつ}て十仏刹^{ぶつせつ}を持^{こくう}し虚空^{こくう}の中に於^{おい}て住^すすること
一劫^{いつこ}なるも彼の所作^{しよさいま}未^こだ為^{なん}れ難^{なん}からず是^この法^こを信^こずるは為^これ 甚^{はなはだ}
だ難^{がた}し、十仏刹塵^{せつじん}の衆生^{しゅじよう}の類^{たぐい}に
一劫^{いつこ}諸^{もろ}の樂典^{もろ}を供養^{くよう}せんも彼の功德^{くどくいま}未^{すぐ}だ勝^{すぐ}れりと為^なさず是^この法^こを
信^こずるは為^{しゅしやう}れ殊勝^{しゅしやう}なり、十仏刹塵^{せつじん}の諸^{もろ}の如來^{もろ}を以^{いつこ}て一劫^{きやうけい}恭敬^{きやうけい}して
供養^{くよう}せん若^もし能^よく此^この品^{ひん}を受持^{じゅじ}せん者の功德^{くどく}彼^かよりも最勝^{さいしやう}と

な
為す」等云云、涅槃經に云く「是の諸の大乗方等經典復無量の
くどく じょうじゆ いえど こ
功德を成就すと雖も是の經に比せんと欲するに喩を為すを得ざ
ること百倍千倍百千万倍、乃至算数譬喩も及ぶこと能わざる所
なり、善男子譬えば牛従り乳を出し乳従り酪を出し酪従り生蘇を
ぜんなんし たと よ
出し生蘇従り熟蘇を出し熟蘇従り醍醐を出す醍醐は最上なり、
しょうそよ じゆくそよ じゆくそよ だいご だいご さいじょう
若し服すること有る者は衆病皆除き所有の諸薬も悉く其の中に
も あ しゅうびょうみな しょう しょうやく ことごとそ
入るが如し、善男子仏も亦是くの如し仏従り十二部經を出し十二
ごと ぜんなんし またかく ごと よ
部經従り修多羅を出し修多羅従り方等經を出し方等經従り般若
よ しゆたらよ ほうとう ほうとう よ
波羅蜜を出し般若波羅蜜従り大涅槃を出す猶醍醐の如し醍醐と言
はらみつ はんにや はらみつよ ねはん いだ なおだいご ごと だいご
うは仏性に喩う」等云云。
ぶっしょう たと

これら しょうもん ほけきょう いこんとう なんく い そうたい
此等の經文を法華經の已今当・六難九易に相對すれば月に星
をならべ九山に須弥を合せたるにいたり、しかれども華嚴宗の
しゆみ

ちようかん ぼつそう さんろん しんこん じおん かじよう こうほう ぶつげん
澄観・法相・三論・真言等の慈恩・嘉祥・弘法等の仏眼のごと

くなる人・猶此の文にまどへり、何に況や盲眼のごとくなる当世

の学者等・勝劣を弁うべしや、黒白のごとく・あきらかに須弥

・芥子のごとくなる勝劣なを・まどへり・いはんや虚空のごと

くなる理に迷わざるべしや、教の浅深をしらざれば理の浅深を

弁うものなし巻をへだて文前後すれば教門の色弁えがたければ

文を出して愚者を扶けんとをもう、王に小王・大王・一切に少分

・全分・五乳に全喻・分喻を弁うべし、六波羅蜜経は有情の

成仏あつて無性の成仏なし何に況や久遠実成をあかさず、猶

涅槃経の五味にをよばず何に況や法華経の迹門・本門にたいす

べしや、而るに日本の弘法大師・此の経文にまどひ給いて

法華経を第四の熟蘇味に入れ給えり、第五の総持門の醍醐味すら

ねはんぎょう およ 涅槃經に及ばずいかにし給いけるやらん、而るを震旦の人師争つ
だいご てんだい 醍醐を盗むと天台等を盗人とかき給へり惜い哉古賢醍醐を嘗め
じたん ず等と自歎せられたり、此等はさてをく我が一門の者のためにし
たにん るす他人は信ぜざれば逆縁なるべし、一☆をなめて大海のしを
すい ・をしり一華を見て春を推せよ、万里をわたて宋に入らずとも三
へ りょうぜん 箇年を経て靈山にいたらずとも竜樹のごとく竜宮に入らずと
むちやくぼさつ も無著菩薩のごとく弥勒菩薩にあはずとも二所三会に値わらずとも
いちだい しょうれつ 一代の勝劣はこれをしれるなるべし、蛇は七日が内の洪水をし
けんぞく る竜の眷属なるゆへ鳥は年中の吉凶をしれり過去に陰陽師なり
とく しゆへ鳥はとぶ徳人にすぐれたり。

にちれん 日蓮は諸經の勝劣をしること華嚴の澄觀・三論の嘉祥・
ほつそう 法相の慈恩・真言の弘法にすぐれたり、天台・伝教の跡をし
じおん ほんごん しょうぼう てんだい せんぎよう ほと

ぶゆへなり、彼の人人は天台・伝教に帰せさせ給はずば謗法の
とがまぬか
失脱れさせ給うべしや、当世・日本国に第一に富める者は日蓮な
るべし命は法華經にたてまつり名をば後代に留べし、大海の主と
なれば諸の河神・皆したがう須弥山の王に諸の山神したがはざる
べしや、法華經の六難九易を弁うれば一切經よまざるにしたが
うべし。

宝塔品の三箇の勅宣の上に提婆品に二箇の諫曉あり、
提婆達多は一闍提なり天王如来と記せらる、涅槃經四十卷の
現証は此の品にあり、善星・阿闍世等の無量の五逆・謗法の者
の一をあげ頭をあげ万を・をさめ枝をしたがふ、一切の五逆・
七逆・謗法・闍提・天王如来にあらはれ了んぬ毒藥變じて甘露と
なる衆味にすぐれたり、竜女が成仏此れ一人にはあらず一切の

によにん じようぶつ 女人の成仏をあらはす、法華已前の諸のほつけ いぜん もろもろしやうじよう小乗教には女人のによにん成仏じようぶつをゆるさず、諸の大乗経には成仏・往生おつじようをゆるすやうなれども・或は改転ある かいてんの成仏じようぶつにして一念三千いちねんさんぜんの成仏じようぶつにあらざればじようめいむじつ有名無実の成仏じようぶつ往生じようぶつなり、挙一例諸こいちれいしよと申してもう竜女りゆうにょが成仏じようぶつはまつだい末代の女人によにんの成仏じようぶつ往生じようぶつの道をふみあけたるなるべし、儒家じゆけの孝養かうようは今生こんじようにかる未来みらいの父母ふぼを扶たすけざれば外家の聖賢せいけんはゆうめいむじつ有名無実ふつどうなり、外道げどうは過未たすをしれども父母ふぼを扶たすくる道なしふつどう仏道ぶつどうこそ父母ふぼの後世ごしやうを扶たすくれば聖賢せいけんの名はあるべけれ、しかれどもほけきやう いぜん法華経だいしやうじよう已前きやうしゆう等の大小乗きようとうの経宗じしんは自身とくどうの得道なほ猶かなひがたしいか いわんや ふぼ何に況や父母ふぼをや但文たぶんのみあつて義なし、今法華経ほけきやうの時こそ女人によにん成仏じようぶつの時・悲母ひもの成仏じようぶつも顕あらわれ・達多だつたの悪人あくにん成仏じようぶつの時・慈父じふ成仏じようぶつの時・悲母ひもの成仏じようぶつも顕あらわれ・達多だつたの悪人あくにん成仏じようぶつの時・慈父じふの成仏じようぶつも顕あらわるれ、此の経は内典ないてんの孝経かうきやうなり、二箇ふたのいさめ

了んぬ。
おわ

已上五箇の鳳ほうしやう詔にをどろきて勸持品の弘經あり、明鏡めいきやうの經文きやうもんを出して当世とうせの禪・律・念仏者ねんぶつ・並びに諸檀那しよだんなの謗法ほうぽうをしらしめん、日蓮にちれんといゐし者は去年こぞ九月十二日子丑うしの時に頸はねられぬ、此れは魂魄こんぱく・佐土の国にいたりて返年かえるとしの二月・雪中にしるして有縁うえんの弟子でしへをくればをそろしくて・をそろしからず・みんないかに・をぢぬらむ、此れは釈迦しやか・多宝たほう・十方じゆつぽうの諸仏しよぶつの未来みらい日本国にほんこく・当世とうせをうつし給う明鏡めいきやうなりかたみともみるべし。

かんじほん いわ 勸持品に云く「唯願くは慮したもうべからず仏滅度の後恐怖

あくせ

われらまさ

うらおもい

もろもろ

むち

くふ

悪世の中に於て我等当に広く説くべし、諸の無智の人の悪口

めり

およ

われらみなまさ

あくせ

罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆当に忍ぶべし、悪世の

びく

じゃち

こ

おも

中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い

がまん

じゅうまん

あるあれんにや

のうえ

からかん

あ

みずか

我慢の心充滿せん、或阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら

真の道を行ずと謂つて人間を輕賤する者有らん利養に貪著する

いんげん

きようせん

りよう

とんじやく

が故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるることを為ること

びやくえ

ため

きようけい

う

六通の羅漢の如くならん、是の人悪心を懷き常に世俗の事を念い

ろくつう

らかん

ごと

こ

あくしん

いだ

せそく

おも

名を阿練若に仮て好んで我等が過を出さん、常に大衆の中に

あれんにや

あつ

われら

いだ

たいしゅう

う

在つて我等を毀らんと欲するが故に国王・大臣・婆羅門・居士

あ

われら

そし

ほ

こくおう

だいじん

ばらもん

こじ

に

及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が悪を説いて是れ邪見の人

およ

びく

ひほう

う

こ

じゃけん

ふ

げどう

ろんぎ

い

じよつこうあくせ

は

しよ

く

ふ

外道の論議を説くと謂わん、濁劫悪世の中には多く諸の恐怖有

らん悪鬼^{あつき}其身に入つて我を罵詈毀辱^{めりきにく}せん、濁世^{じよくせ}の惡比丘^{あくびく}は仏の
方便^{ほうべん}隨宜^{ずいぎ}の所説^{しよせつ}の法を知らず惡口^{ひんじゆく}し顰蹙^{しんしゆく}し数数^{しうしう}擯出^{ひんしゆく}せられん」
等云云、記の八に云く「文に三初に一行は通じて邪人^{じやにん}を明す即ち
俗衆^{ぞくしゆく}なり、次に一行は道門^{どうもん}増上慢^{ぞうじやうまん}の者を明す、三に七行は僭聖^{せんしやう}
増上慢^{ぞうじやうまん}の者を明す、此の三の中に初は忍ぶ可^べし次の者は前に
過ぎたり第三最も甚^{はなは}だし後後の者は轉識^{うたたしり}り難^{がた}きを以ての故に」等
云云、東春に智度法師^{ちどほつし}云く「初に有諸^{しよ}より下の五行は第一^{だいいち}に一偈^げ
は三業の惡を忍ぶ是れ外惡^この人なり次に惡世^{あくせ}の下の一偈^げは是
上慢^{じやうまん}出家^{しゆつけ}の人なり第三に・或有^{ある}阿練若^{あれんにや}より下の三偈^げは即是^{そくぜ}出家^{しゆつけ}
の處^{ところ}に一切^{いっさい}の惡人^{あくにん}を摂^{せつ}す」等云云、又云く「常在^{じやうざい}大衆^{たいしゆく}より下
の兩行は公處^{こうじよ}に向つて法を毀^{そし}り人を謗^なず」等云云、涅槃經^{ねはんぎやう}の九に
云く「善男子^{ぜんなんし}・一闍提^{いっせんたい}有り羅漢^{らかん}の像^{かたち}を作して空處^{くうじよ}に住^{ほうとう}し方等

だいじょうきようてん

大乘經典を誹謗せん諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢是大菩薩

なりと謂わん」等云云、又云く「爾の時には是の経閻浮提に於て当に

広く流布すべし、是の時に当に諸の悪比丘有つて是の経を抄略し

分ちて多分と作し能く正法の色香美味を滅すべし、是の諸の

悪人復是くの如き經典を讀誦すと雖も如来の深密の要義を滅除

して世間の莊嚴の文飾無義の語を安置す前を抄して後に著け後を

抄して前に著け前後を中に著け中を前後に著く当に知るべし是く

の如きの諸の悪比丘は是れ魔の伴侶なり」等云云、六卷の般泥・

経に云く「阿羅漢に似たる一闍提有つて悪業を行ず、一闍提に似

たる阿羅漢あつて慈心を作さん羅漢に似たる一闍提有りとは是の

諸の衆生方等を誹謗するなり、一闍提に似たる阿羅漢とは声聞

を毀訾し広く方等を説くなり衆生に語つて言く我れ汝等と俱に

こぼさつ
是れ菩薩なり所以は何ん一切皆如来の性有る故に然も彼の衆生
いっせんだい
一闡提なりと謂わん」等云云、涅槃經に云く「我涅槃の後乃至
しょうほう
正法滅して後・像法の中に於て当に比丘有るべし持律に似像し
わず
て少か

に經を讀誦し飲食を貪嗜し其の身を長養す、袈裟を服ると雖も
りようし
猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言
を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現わし内には貪嫉を懷か
あほう
ん啞法を受けたる婆羅門等の如し、実に沙門に非ずして沙門の像
げん
を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云。

そ
夫れ鷲峯・雙林の日月・毘湛・東春の明鏡に当世の諸宗並
じゅうほう
に国中の禪・律念佛者が醜面を浮べたるに一分もくもりなし、
ねんぶつ
妙法華經に云く「於仏滅度後恐怖惡世中」安樂行品に云く「於
みょうほうけきよう
妙法華經に云く「於仏滅度後恐怖惡世中」安樂行品に云く「於

後悪世あくせ」又云いわく「於末世中」又云いわく「於後末世法欲滅時」分別功德

品に云いわく「悪世末法時」藥王品に云いわく「後・五百歳」等云云、正

法華經の勸説品に云いわく「然後末世」又云いわく「然後來末世」等云云、

添品法華經に云いわく等、天台の云いわく「像法の中の南三北七は法華經

の怨敵なり」、伝教の云いわく「像法の末・南都・六宗の学者は法華

の怨敵なり」等云云、彼等の時はいまだ分明ならず、此は教主

釈尊・多宝仏・宝塔の中に日月の並ぶがごとく十方分身の諸仏

・樹下に星を列ねたりし中にして正法一千年・像法一千年・二

千年すぎて末法の始に法華經の怨敵三類あるべしと八十万億

那由佗の諸菩薩の定め給ひし虚妄となるべしや、当世は如来滅後

二千二百余年なり大地は・指ばはづるとも春は・花は・さかずと

も三類の敵人・必ず日本国にあるべし、さるにてはたれたれの

ひとびと さんるい

だれびと ほけきよう ぎようじや

人人か三類の内なるらん又誰人か法華經の行者なりとさされた
るらんをぼつかなし、彼の三類の怨敵に我等入りてやあるらん又

ほけきよう ぎようじや

法華經の行者の内にてやあるらんをぼつかなし、周の第四昭王

ぎよう

の御宇二十四年甲寅・四月八日の夜中に天に五色の光氣・南北

わた

に亘りて昼のごとし、大地・六種に震動し雨ふらずして江河・

せいち

井池の水まさり一切の草木に花さき菓なりたりけり不思議なり

し事なり、昭王・大に驚き大史・蘇由・占つて云く「西方に

しょうにん

聖人生れたり」昭王問て云く「此の国いかん」答えて云く「事

しょうにん

なし一千年の後に彼の聖言此の国にわたつて衆生を利すべし」

彼のわづかの外典の一毫未断・見思の者・しかれども一千年のこ

げてん

とをしる、はたして仏教・一千一十五年と申せし後漢の第二・

ぶつぎよう

明帝の永平十年丁卯の年・仏法・漢土にわたる、此は似るべくも

みんてい

ひのとう

ぶつぽう

かんど

なき釈迦多宝十方分身の仏の御前の諸菩薩の未来記なり、当世

にほんこく

さんるい

ほけきよう

てきじん

・日本国に三類の法華經の敵人なかるべしや、されば仏付法藏經

しる

いわ

めつこ

しようほう

等に記して云く「我が滅後に正法一千年が間・我が正法を弘む

しる

いわ

めつこ

しようほう

ひろ

べき人・二十四人次第に相続すべし」迦葉・阿難等はさてをきぬ

きようきびく

しだい

かしよう

あなん

き

一百年の脇比丘・六百年の馬鳴・七百年の竜樹菩薩等・一分も

きようきびく

めみよう

りゅうじゅぼせつ

き

たがはずすでに出で給いぬ、此の事いかんがむなしかるべき此の

そうい

いっきよう

みなそうい

しよいしやりほつ

みらい

き

事相違せば一經・皆相違すべし、所謂舍利弗が未来の華光如来

かしよう

こうみようによらい

みなもうこ

にぜん

き

・迦葉の光明如来も皆妄語となるべし、爾前返つて一定となつ

ようふじようぶつ

しよしようもん

いぬやかん

あなん

き

て永不成仏の諸声聞なり、犬野干をば供養すとも阿難等をば供

き

しよしようもん

いぬやかん

あなん

き

養すべからずとなん、いかんがせん・いかんがせん。

だいいち

しよむち

きようもん

あくせ

びく

第一の有諸無智人と云うは經文の第二の惡世中比丘と第三の

のうえ

びく

だんな

したが

みようらくだいし

き

き

き

き

き

納衣の比丘の大檀那と見へたり、随つて妙樂大師は「俗衆」等

云云、東春に云く「公処に向う」等云云、第二の法華經の怨敵は經に云く「惡世中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充滿せん」等云云、涅槃經に云く「是の時に當に諸の惡比丘有るべし乃至是の諸の惡人復是くの如き經典を讀誦すと雖も如来深密の要義を滅除せん」等云云、止觀

に

云く「若し信無きは高く聖境に推して己が智分に非ずとす、若し智無きは増上慢を起し己れ仏に均しと謂う」等云云、道綽禪師が云く「二に理深解微なるに由る」等云云、法然云く「諸行は機に非ず時を失う」等云云、記の十に云く「恐くは人謬り解せん者初心の功德の大なることを識らずして功を上位に推り此の初心を蔑にせん故に今彼の行淺く功深きことを示して以て經力を顯す」

等云云、伝でんぎようだいしいわ教大師云く「正像しょうぞう稍過ぎ已て末法太はだ近きに有り

ほつけいちじよう

法華一乗きの機まさ今正しく是そのとき其の時なり何を以て知ることを得る

あんらくぎようぼん いわ まっせほうめつ

安樂行品いに云く末世法滅の時なり」等云云、慧心えしんの云く「日本にほん

えんきじゆんいつ

一州円機純一なり」等云云、道綽どうしやくと伝でんぎよう教と法然ほうねんと慧心えしんといづれ

此を信ずべしや、彼の一切経いっさいきように証文なし此れは正まさしく法華経ほけきように

よれり、其の上・日本国にほんこく・一同いっどうに叡山えいざんの大師だいしは受戒じゆかいの師しなり何ぞ

天魔てんまのつける法然ほうねんに心をよせ我が剃頭の師しをなげすつるや、法然ほうねん

智者ちしやならば何なんぞ此この釈せんをちやく選せん択たくに載せて和会わえせざる人の理りをかく

せる者なり、第二あくせの悪世中比丘びくと指さるるは法然ほうねん等の無戒邪見むかいじゃけんの

者なり、涅槃経ねはんぎように云く「我れ等ことごとじやけん悉く邪見なすの人と名く」

等云云、妙楽みょうらく云く「自ら三教を指して皆邪見みなじゃけんと名く」等云云、止観しかん

に云く「大経だいぎように云く此よりの前は我等皆邪見われらみなじゃけんの人と名くるなり、

- 575 -

邪あに豈ま惡さに非なずや」等云云、弘決くけつに云いく「邪こは即すなはち是これ惡こなり是この故ゆゑに當あたに知しるべし唯ただ円えんを善ぜんと為なす、復また二意に有あり、一ひとには順しゆんを以もつつて善ぜんと為なし背せを以もつつて惡あくと為なす相待さうたいの意いなり、著しやくを以もつつて惡あくと為なし達たつを以もつつて善ぜんと為なす相待さうたい・絶待ぜつたい俱ともに須すく惡あくを離はなるべし円えんに著しやくする尚なお惡あくなり況いはんや復また余あをや」等云云、外道げどうの善惡ぜんあくは小乘しょうじようきよう經きやうに對たいすれば皆みな惡道あくどう小乘しょうじようの善道ぜんどう・乃至な至し四味しむい三教さんきやうは法華經ほけきやうに對たいすれば皆みな邪惡じゃあく但ただ法華ほつげのみ正善しやうぜんなり、爾前にぜんの円えんは相待さうたい妙みやうなり、絶待ぜつたい妙みやうに對たいすれば猶なほ惡あくなり前三教ぜんさんきやうに攝せつすれば猶なほ惡道あくどうなり、爾前にぜんのごとく彼の經きやうの極理ごくりを行おこなはざる猶なほ惡道あくどうなり、況いはんや觀經くあんきやう等の猶華嚴けごん・般若經はんぎやきやう等に及およばざる小法しょうぽうを本ほんとして法華經ほけきやうを觀經くあんきやうに取り入れて還かへつて念仏ねんぶつに對たいして閻拋かくほう閉捨へいしやせるは法然ほうねん並びに所化しよけの弟子でし等檀那だんな等は誹謗ひぼう正法しやうぽうの者ものにあらずや、釈迦しやくか・多寶たほう・十方じふぽうの諸しよ佛ぶつは法ぽうを

して久しく住せしめんが故に此に來至し給えり、法然並に日本國の念仏者等は法華經は末法に念仏より前に滅尽すべしと豈三聖の怨敵にあらずや。

第三は、法華經に云く「・或は阿練若に有り納衣にして空閑に在つて乃至白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるることを爲ること六通の羅漢の如くならん」等云云、六卷の般泥☆經に云く「羅漢に似たる一闍提有つて惡業を行じ一闍提に似たる阿羅漢あつて慈心を作さん、羅漢に似たる一闍提有りととは是諸の衆生の方等を誹謗するなり一闍提に似たる阿羅漢とは聲聞を毀訾して広く方等を説き衆生に語つて言く我汝等と俱に是れ菩薩なり所以は何ん一切皆如來の性有るが故に然かも彼の衆生は一闍提と謂わん」等云云、涅槃經に云く「我れ涅槃の後・像法の中に

まに比丘有るべし持律に似像して少かに經典を讀誦し飲食を貪嗜して其の身を長養せん袈裟を服ると雖も猶獵師の細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如し、常に是の言を唱えん我羅漢を得たりと外には賢善を現し内には貪嫉を懷く啞法を受けたる婆羅門等の如く実には沙門に非ずして沙門の像を現じ邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云、妙樂云く「第三最も甚し後後者轉識り難きを以つての故に」等云云、東春云く「第三に・或有阿練若より下の三偈は即是出家の処に一切の惡人を摂す」等云云、東春に「即是出家の処に一切の惡人を摂する」等とは当世・日本国には何れの処ぞや、叡山か園城か東寺か南都か建仁寺か寿福寺か建長寺か・よくよく・たづぬべし、延暦寺の出家の頭かちちゆうに甲冑をよろうをさすべきか、園城寺の五分法身の膚に鎧杖がいじようを

帶せるか、彼等かれらは經文きやうもんに納衣のうえ在空閑ざいくわんと指すにはいにせ為世所きやうけい恭敬

如六通羅漢ろくつうらんと人をもはず又てんなんしつこ轉難識故からくというべしや華洛まなこには聖一等

・鎌倉かまくらには良觀りやうかん等りやうかんにたり、人をあだむことなかれ眼まなこあらば

經文きやうもんに我が身をああわせよ、止觀しかんの第一だいいちにい云く「止觀しかんの明靜めいじやうなる

ことは前代ぜんだい未だ聞かず」等云云、弘くわうの一いにい云く「漢みんていの明帝めい夜夢やむみ

しよ自り陳朝ちんてうに☆およぶぶまでぜんもん禪門ぜんもんにあ予りあ厠まじわりて衣鉢いはつでんじゆ傳授でんじゆする者」等云云、

補注いにい云く「衣鉢いはつでんじゆ傳授でんじゆとは達磨だるまを指す」等云云、止の五いにい云く「又

一種いの禪人ぜんじん・乃至な盲跛もうはの師徒しと二俱にともに墮落だらくす」等云云、止の七いに

云く「九いの意世間せけんの文字もんじの法師ほふしと共ならず、事相じさうの禪師ぜんしと共なら

ず、一種いの禪師ぜんしは唯觀ただかんじん心しんの一い意いのみ有あり・或あるは浅あく・或あるは偽いつわる余

の九いは全そく此無そし虚言そに非そず後賢けん眼有がんらん者まは当まに証知しやうちすべきな

り、弘くの七いにい云く「文字もんじ法師ほふしとは内かんげに觀解くわんげ無くして唯法ただほつ相さうを構

う事相じそうの禪師ぜんとは境智きょうちを閑ならわず鼻膈びかくに心を止む乃至根本有漏定等
なり、一師いつし唯有觀心ゆういっかんじん一意等とは此は且しばらく与えて論を為す奪えば
則すなわち觀解かんげ俱ともに闕かく、世間せけんの禪人ひと偏ひとえに理觀なほを尚すぶ既に教を諳そらんぜ
ず觀を以つて經を消し八邪八風を数えて丈六の仏と為し五陰三毒さんどく
を合して名けて八邪と為し六入を用いて六通と為し四大を以つて
四諦したいと為す、此かくの如ごとく經を解するは偽ぎの中の偽なり何ぞ淺なんくし
て論べず可べけんや」等云云、止觀しかんの七に云く「昔ぎょうらく☆洛の禪師ぜん名河海かかい
に播しき住するときは四方雲しほうの如ごとくに仰あおぎ去るときは阡陌せんひやく群を成
し隱隱轟轟いんいんこうこう亦何の利益りやくか有る、臨終りんじゅうに皆悔みなくゆ」等云云、弘くの七
に云く「・洛ぎょうらくの禪師ぜんとは☆は相州ぎょうそうしゅうに在り即ち齊魏せいぎの都する所な
り、大おおに仏法ぶつぽうを興おこす禪祖の一・其の地を王化す、時人の意を讓ゆずり
て其の名を出いださず洛は即ち洛陽らくようなり」等云云、六卷の般泥☆經はつないおんに

云く「究竟の処を見ずとは彼の一闡提の輩の究竟の悪業を見ざるなり」等云云、妙楽云く「第三最も甚だし転識り難きが故に」等、無眼の者・一眼の者・邪見の者は末法の始の三類を見るべからず一分の仏眼を得るもの此れをしるべし、向国王・大臣・婆羅門・居士等云云、東春に云く「公処に向い法を毀り人を謗す」等云云、夫れ昔像法の末には護命・修円等・奏状をささげて伝教大師を譏奏す、今末法の始には良観・念阿等偽書を注して將軍家にささぐ・あに三類の怨敵にあらずや。

当世の念佛者等・天台法華宗の檀那の国王・大臣・婆羅門・居士等に向つて云く「法華経は理深我等は解微法は至つて深く機は至つて浅し」等と申しうとむるは高推聖境・非己智分の者にあらずや、禪宗の云く「法華経は月をさす指・禪宗は月なり月

をえて指なにかせん、禪は仏の心・法華經は仏の言なり仏・
ほけきよう いっさいきよう
法華經等の一切經をとかせ給いて後・最後に一ふさの華をもつ
かしよう
て迦葉一人にさづく、其のしるしに仏の御袈裟を迦葉に付属し
ないしふほうそう
乃至付法蔵の二十八・六祖までに伝う」等云云、此等の大妄語国
おうすい
中を誑醉せしめてとしひさし、又天台・真言の高僧等名は其の家
とんよく
にえたれども我が宗にくらし、貪欲は深く公家・武家を・をそれ
しやうふく
て此の義を証伏し讃歎す、昔の多宝・分身の諸仏は法華經の
さんたん
りようぼうくじゆう
令法久住を証明す、今天台宗の碩徳は理深解微を証伏せり、
しやうみよう
かるがゆへに日本国に但法華經の名のみあつて得道の人・一人も
ほけきよう
なし、誰をか法華經の行者とせん、寺塔を焼いて流罪せらるる
ぎようじや
僧侶は・かずをしらず、公家・武家に諛う・てにくまるる高僧こ
そうりよ
れ多し、此等を法華經の行者というべきか。

仏語ぶつごむなしからざれば三類さんるいの怨敵おんてきすでに国中じゅうまんに充滿じゅうまんせり、

金言きんげんのやぶるべきかのゆへに法華經ほけきょうの行者ぎやうじやなし・いかがせん・

いかがせん、抑そもそもたれやの人か衆俗あつくめりに悪口罵詈あくぐちばらせらるる誰の僧か

刀杖とうじょうを加へらるる、誰の僧をか法華經ほけきょうのゆへに公家くげ・武家ぶけに奏

する・誰の僧か数数見擯出さくさくけんひんずいと度度たびたびながさるる、日蓮にちれんより外に

日本国にほんこくに取り出さんとするに人なし、日蓮にちれんは法華經ほけきょうの行者ぎやうじやにあ

らず天てんこれを・すて給たまうゆへに、誰をか当世とうせの法華經ほけきょうの行者ぎやうじやと

して仏語ぶつごを実語じつごとせん、仏ぶつと提婆だいばとは身と影とのごとし生生しんじやうには

なれず聖徳太子しやうとくたいしと守屋もりやとは蓮華れんげの花華け・同時どうじなるがごとし、

法華經ほけきょうの行者ぎやうじやあらば必ず三類さんるいの怨敵おんてきあるべし、三類さんるいは・すでに

あり法華經ほけきょうの行者ぎやうじやは誰なるらむ、求めて師とすべし一眼の龜の

浮木うきに値あうなるべし。

有る人云く当世の三類はほぼ有るにいたり、但し法華經の
行者なし汝を法華經の行者といはんとすれば大なる相違あり、
此の經に云く「天の諸の童子以て給使を為さん、刀杖も加えず、
毒も害すること能わざらん」又云く「若し人惡罵すれば口則閉塞
す」等、又云く「現世には安穩にして後・善處に生れん」等云云、
又「頭破れて七分と作ること阿梨樹の杖の如くならん」又云く
「亦現世に於て其の福報を得ん」等又云く「若し復是の經典を
受持する者を見て其の過惡を出せば若しは實にもあれ若しは不實
にもあれ此の人現世に白癩の病を得ん」等云云、答えて云く汝
が疑い大に吉しついでに不審を晴さん、不輕品に云く「惡口
罵詈」等、又云く「・或は杖木瓦石を以て之を打擲す」等云
云、涅槃經に云く「若しは殺若しは害」等云云、法華經に云く

「而かも此の経は如来の現在すら猶怨嫉多し」等云云、仏は小指だいばを提婆にやぶられ九横の大難に値い給う此は法華経の行者にあらずや、不輕菩薩は一乗の行者といはれまじきか、目連は竹杖ふぎようぼさつ いちじように殺さる法華経記☆の後なり、付法蔵の第十四の提婆菩薩・第二十五の師子尊者の二人は人に殺されぬ、此等は法華経の行者にはあらざるか、竺の道生は蘇山に流されぬ法道は火印を面にやいて江南にうつさる・此等は一乗の持者にあらざるか、外典の者なりしかども白居易北野の天神は遠流せらる賢人にあらざるか、事の心を案ずるに前生に法華経・誹謗の罪なきもの今生にほけきよう法華経を行ずこれを世間の実によせ・或は罪なきをあだすればたちまちげんばち忽に現罰あるか・修羅が帝釈を射る金翅鳥の阿耨池に入る等必ず返つて一時に損するがごとし、天台云く「今・我が疾苦は皆

過去かこに由よる今生こんじょうの修福しゅうふくは報・将来しんじに在あり」等云云、心地觀經しんじかんきょうに曰いはく「過去かこの因いんを知らんと欲ほつせば其その現在げんざいの果みらいを見よ未来みらいの果みらいを知らんと欲ほつせば其その現在げんざいの因いんを見よ」等云云、不輕品ふぎように云いく「其その罪畢つみおわつて已い」等云云、不輕菩薩ふぎようぼさつは過去かこに法華經ほけきようを謗ぼうじ給たまう罪つみ・身あに有あるゆへに瓦石がしやくをかほるとみへたり、又順次生じゆんじしやうに必ず地獄じごくに墮おつべき者は重罪じゅうざいを造つくるとも現罰げんばちなし一闍提人いつせんたいじんこれなり、涅槃經ねはんきように云いく「迦葉菩薩かしょうぼさつ・仏もうに白いわして言いく世尊せそん・仏もうの所說しよせつの如ごとく大涅槃ねはんの光一切衆生いっさいしゆじやうの毛孔もうくに入る」等云云、又云いく「迦葉菩薩かしょうぼさつ・仏もうに曰いはして言いく世尊せそん云何いかんぞ未いまだ菩提ぼだいの心こころを發おこさざる者もの・菩提ぼだいの因いんを得えん」等云云、仏もう・此この問もんを答こたえて云いく「仏迦葉かしょうに告つげたままわく若もし是だいねはんきようの大涅槃經だいねはんきようを聞きくこと有あつて我菩提心わくだいしんを發おこすことを用もちいずと言いつて正法しょうほうを誹謗ひぼうせん、是この人即時そくじに夜夢よむの中に羅刹らせつの像かたちを

見て心中怖畏す羅刹語つて言く咄し善男子汝今若し菩提心を
發さずんば当に汝が命を斷つべし是の人惶怖し寤め已つて即ち
菩提の心を發す当に是の人は大菩薩なりと知るべし」等云云、
いたうの大惡人ならざる者が正法を誹謗すれば即時に夢みて・
ひるがへる心生ず、又云く「枯木・石山」等、又云く「焦種甘雨
に遇うと雖も」等・又「明珠淤泥」等、又云く「人の手に創あ
るに毒藥を捉るが如し」等、又云く「大雨空に住せず」等云云、此等
多くの譬あり、詮ずるところ上品の一闡提人になりぬれば
順次生に必ず無間獄に墮つべきゆへに現罰なし例せば夏の桀・
殷の紂の世には天変なし重科有て必ず世ほろぶべきゆへか、又
守護神此国をすつるゆへに現罰なきか謗法の世をば守護神すて去
り諸天まほるべからずかるがゆへに正法を行ずるものにしるし

なし還かえつて大難だいにんに値あうべし 金光明經こんこうみょうきやうに云いく「善業ぜんごうを修しゆする者は
日すい日に衰減すいげんす」等云云、惡国・惡時これなり具つさには立正安国論りっしやうあんこくろん
にかんがへたるがごとし。

詮せんずるところは天てんもすて給たまえ諸難しよなんにもあえ身命しんみやうを期きとせん、
身子しんしが六十劫ぼそくの菩薩ぼさつの行ぎやうを退たいせし乞眼きがんの婆羅門ばらもんの責たを堪たえざるゆ
へ、久遠大通くおんだいつうの者の三五さんごの塵ちりをふる惡知識あくちしきに値あうゆへなり、善ぜんに
付け惡にほんにつけ法華經ほふけきやうをすつるは地獄じごくの業ごふなるべし、大願だいがんを立てん
日本国にほんこくの位ゐをゆづらむ、法華經ほふけきやうをすて觀經等かんきやうとうについて後生ごしやうを
ごせよ、父母ふぼの頸けいを刎はん念仏ねんぶつ申もうさずば、なんどの種種しゆしゆの大難だいにん・
出来しゆつたすとも智者ちしやに我義がぎやぶられずば用もちいじとなり、其その外ほかの
大難だいにん・風かぜの前の塵ちりなるべし、我日本こまにんの柱はしらとならむ我日本こまにんの眼目がんもくと
ならむ我日本こまにんの大船おほふねとならむ等らうとちかいし願がやぶるべからず。

うたがい
疑つて云くいかにとして汝が流罪・死罪等を過去の宿習

としらむ、答えて云く銅鏡は色形を顕わす秦王・駿偽の鏡は

現在の罪を顕わす仏法の鏡は過去の業因を現ず、般泥☆経に

云く「善男子過去に會て無量の諸罪種種の悪業を作るに是の諸の

罪報は・或は輕易せられ・・或は形状醜陋・衣服足らず・飲食

ソソ・財を求むるに利あらず貧賤の家邪見の家に生れ・或は王難

に遭い・及び余の種種の人間の苦報あらん現世に軽く受るは斯れ

護法の功德力に由るが故なり」云云、此の経文日蓮が身に宛も

符契のごとし狐疑の氷とけぬ千万の難も由なし一の句を我が身

にあわせん、・或被輕易等云云、法華經に云く「輕賤憎嫉」等

云云・二十余年が間の輕慢せらる、・或は形状醜陋・又云く

衣服不足は予が身なり飲食ソソは予が身なり求財不利は予が身な

り生しょう貧ひん賤せん家は予が身なり、・或ある遭あ王おう難なん等とう・此きの經きやうもん文うたが疑うべし

や、法ほけ華きやう經もんに云いく「数しばしば数ひんずい擯しん出しゅせられん」此きの經きやうもん文うたがに云いく「種しゅ種じゆ」

等云云、斯こ由ほう護く法く功く徳く力く故く等くとは摩ま訶か止し觀かんの第だい五ごに云いく「散さん善ぜん微ゐ

弱じやくなるは動どうせしむること能あたわらず今いま止し觀かんを修しゆして健けん病びやう☆ぎれば

生しょう死じの輪りんを動どうず」等云云、又云いく「三さん障しやう四し魔ま紛ふん然ぜんとして競きそい起おこる」

等云云我むれ無む始しより・このかた惡あく王おうと生なれて法ほけ華きやう經もんの行ぎやう者じやの

衣い食しょく・田でん畠ばた等とうを奪うばいとりせしこと・かずしらず、当とう世せ・日に本ほん国こくの

諸しよ人にんの法ほけ華きやう經もんの山さん寺じをたうすがごとし、又また法ほけ華きやう經もんの行ぎやう者じやの頸けいを

勿はねるねる・其その数かずをしらさず此これ等らの重じゆう罪ざいはたせるもあり・いまだ・は

たさざるも・あるらん、果よすも余よ残ざんいまだ・つきず生しょう死じを離はなるる

時ときは必かならずず此これの重じゆう罪ざいをけしはてて出しゅ離りすべし、功く徳とくは淺あ輕けいなり

此これ等らの罪つみは深じん重じゆうなり、權こん經きやうを行ぎぜしには此これの重じゆう罪ざいいまだ・を

こらず鉄くろがねを熱にいたう・きたわざればきず隠れてみえず、度度たびたび

せむれば・きずあらはる、麻子あさのみを・しぼるに・つよくせめざれば

油少きがごとし、今日蓮にちれん・強盛こつじょうに国土こくどの謗法ほうぼうを責せむれば此の

大難だいにんの来るは過去かこの重罪じゅうざいの今生こんじょうの護法ごほうに招き出だせるなるべ

し、鉄くろがねは火に値あわざれば黒し火と合あいぬれば赤し木をもつて

急はや流やきなをかけば波山なみのごとし睡ねむれる師子ししに手をつくれれば大おおに

吼ほゆ。

涅槃ねはんぎよう經ぎやうに曰いわく「譬たとえば貧女ひんによの如ごとし居家救護くこの者有あること無なくく加

うるに復病また苦飢渴けかちに逼せめられて遊行乞丐こうがいす、他の客舎かくしゃに止り一子

を寄生こす是の客舎かくしゃの主駈逐くちくして去らしむ、其その産うみて未いまだ久しか

らず是この児こを☆☆して他国たこくに至いたらんと欲ほし、其その中路ちゅうじろに於おいて

悪風雨あくふううに遇あて寒苦な並び至り多く蚊虻蜂ぶんぼうほうしや☆☆毒虫どくちゅうの☆☆い食すう所とな

る、恒河こつがに☆由けいゆし児を抱いて渡る其の水漂ひょうしつ 疾なれども而しかも放ち
捨てず是おいに於て母子遂に共とも俱に没しぬ、是かくくの如ごとき女人慈念にょにんじねんの
功徳くどく 命終みょうじゅうの後梵天ぼんてんに生ず、文殊師利もんじゆしりも若ぜんなんしし善男子有しやうほうつて正法を
護まもらんと欲ほつせば彼の貧女ひんによの恒河こつがに在あつて子を愛念あいねんするが為ために
身命しんみょうを捨ごとつるが如ごとくせよ、善男子護法の菩薩ぜんなんしごほうぼさつも亦是またかくくの如ごとくな
るべし、寧むしろ身命しんみょうを捨てよ是かくくの如ごときの人解脱げだつを求めずと雖いえども
解脱げだつ自みづから至いたること彼の貧女ひんによの梵天ぼんてんを求めざれども梵天ぼんてん自みづから至いたるが
如ごとし」等云云、此の経文きやうもんは章安大師しやうあんだいし・三障さんしやうをもつて釈しゃくし給たまへ
り、それを見るべし、貧人ひんじんとは法財ほけきやうのなきなり女人にょにんとは一分いちぶんの慈
ある者なり、客舎くちくとは穢土えどなり一子ほけきやうとは法華經しんじんの信心りやういん・了因りやういんの
子こなり舎主くちく驅逐るざいとは流罪そせらる其の産そして未いまだ久しからずとはい
まだ信じて・ひさしからず、惡風あくふうとは流罪るざいの勅宣ちやくせんなり蚊虻ぶんぼう等と

は諸もろもろの無智むちの人有り悪口罵詈あつくめり等なり母子共に没すとは終ついに法華經ほけきょう
の信心しんじんをやぶらずして頸はねを刎はらるるなり、梵天ぼんてんとは仏界ぶつがいに生るる
をいうなり引業いんごうと申もうすは仏界ぶつがいまでかはらず、日本にほん・漢土かんどの万国ばんこくの
諸人しよにんを殺すとも五逆ごぎやく・謗法ぼうぼうなければ無間地獄むげんじごくには墮おちず、余よの
惡道あくどうにして多歳たさいをふべし、色天しきてんに生るること万戒たもを持てども万善ばんぜん
を修しゆすれども散善さんぜんにては生れず、又梵天王ぼんてんとなる事・有漏うろの引業いんごう
の上に慈悲じひを加えて生ずべし、今・此この貧女ひんによが子を念おもうゆへに
梵天ぼんてんに生る常じょうの性相しょうそうには相違そういせり、章安しょうあんの二はあれども詮せんずる
ところところは子を念おもう慈念じねんより外ほかの事なし、念を一境じやうにする、定じやうに似
たり專もつぱら子を思おもう又慈悲じひにも・にたり、かるがゆへに他事たじなけれ
ども天てんに生るるか、又仏ぶつになる道みちは華嚴けこんの唯心法界ゆいしんぽうがい・三論さんろんの八不はつふ
・法相ほっそうの唯識ゆいしき・真言しんごんの五輪親等かなも実じつには叶かなうべしともみへず、但

いちねんさんぜん

ふん

5

ぜん

4

る

५

A

心

世

も

L

二

L

つも同じわかれなるべし、我法華經の信心をやぶらずして靈山にまいりて返てみちびけかし。

疑うたがいつて云いわく念仏者と禪宗等ぜんしゅうを無間むげんと申もうすは諍あらそう心あり

修羅道しゅらどうにや墮おつべかるらむ、又法華經の安樂行品あんらくぎょうほんに云いわく「樂ねがつ

て人おほ及び經典きやうてんの過あやまを説まかざれ亦諸余またしよよの法師ほつしを輕慢きやうまんせざれ」等云

云、汝なんじ此きの經文きやうもんに相違さういするゆへに天にすてられたるか、答て

云いわく止觀しかんに云いわく「夫それ仏りやうせつに両説りやうせつあり一には攝・二には折・安樂

行ぎやうに不稱ちやうたん長短ちやうたんという如ごとき是これ攝の義なり、大經だいきやうに刀杖とうじやうを執持しゅうじ

し乃至ないし首くびを斬れという是これ折の義なり与奪よだつ・途みちを殊ことにすと雖いえども

俱ともに利益りやくせしむ」等云云、弘決くけつに云いわく「夫それ仏りやうせつに両説りやうせつあり等と

は大經だいきやうに刀杖とうじやうを執持しゅうじすとは第三だいさんに云いわく正法しょうほうを護まもる者は五戒ごかいを

受けず威儀いぎを修しゅうせず、乃至ないし下の文せんよこくお仙予國王等せんよこくおうの文、又新医禁じて

云く若し更に為すこと有れば當に其の首を断つべし是くの如き等
の文並びに是れ破法の人を折伏するなり一切の經論此の二を
出でず」等云云、文句に云く「問う大經には国王に親付し弓を
持ち箭を帶し惡人を摧伏せよと明す、此の經は豪勢を遠離し謙下
慈善せよと剛柔碩いに乖く云何ぞ異ならざらん、答う大經には
偏に折伏を論ずれども一子地に住す何ぞ曾て摂受無からん、此
の經には偏に摂受を明せども頭破七分と云う折伏無きに非ず
各一端を挙げて時に適う而已」等云云、涅槃經の疏に云く
「出家在家法を護らんには其の元心の所為を取り事を棄て理を存
して匡に大經を弘む故に護持正法と言うは小節に拘わらず故に
不修威儀と言うなり、昔の時は平にして法弘まる応に戒を持つべ
し杖を持つこと勿れ今の時は嶮にして法翳る応に杖を持つべし戒

を持つこと勿^なれ、今昔俱^{こんじやくとも}に嶮^{けん}ならば俱^{とも}に杖を持つべし今昔俱^{こんじやくとも}に
平^{へい}ならば俱^{とも}に戒を持つべし、取捨宜^{しゆしやよろし}きを得て一向^{いつこう}にす可^べからず」
等云云、汝^{なんじ}が不審^{ふしん}をば世間^{せけん}の学者^{がくしや}・多分^{たぶん}・道理^{どうり}とをもう、いか
に諫^{かんぎよう}曉^{にちれん}すれども日蓮^{でし}が弟子等も此のをもひをすてず一闡提^{いつせんだい}人の
・ごとくなるゆへに先づ天台^{てんだい}・妙楽^{みようらく}等の釈をいだして・かれが
邪難^{じやなん}をふせぐ、夫^それ摂受^{しやうじゆ}・折伏^{しやくぶく}と申す法門^{ほうもん}は水火のごとし火は
水をいとう水は火をにくむ、摂受^{しやうじゆ}の者は折伏^{しやくぶく}をわらう折伏^{しやくぶく}の
者は摂受^{しやうじゆ}をかなしむ、無智^{むち}・悪人^{あくにん}の国土^{こくど}に充満^{じゆうまん}の時は摂受^{しやうじゆ}を
前とす安楽行品^{あんらくぎようぽん}のごとし、邪智^{じやち}・謗法^{ほうほう}の者の多き時は折伏^{しやくぶく}を前
とす常不輕品^{じようふぎようぽん}のごとし、譬^{たと}へば熱き時に寒水^{むち}を用い寒き時に火
をこのむがごとし、草木^{そうもく}は日輪^{にちりん}の眷属^{けんぞく}・寒月に苦をう諸水^{しよすい}は月輪^{いづる}
の所従^{しよじゆう}・熱時に本性^{うしな}を失う、末法^{まつぽう}に摂受^{しやうじゆ}・折伏^{しやくぶく}あるべし所謂^{いわゆる}

悪国・破法の両国あるべきゆへなり、日本国の当世は悪国か
破法の国かと・しるべし。

問うて云く摂受の時・折伏を行ずると折伏の時・摂受を行
ずると利益あるべしや、答えて云く涅槃經に云く「迦葉菩薩・仏
に白して言く如来の法身は金剛不壊なり未だ所因を知ること能わ
ず云何、仏の言く迦葉能く正法を護持する因縁を以ての故に
是の金剛身を成就することを得たり、迦葉我護持正法の国縁に
て今是の金剛身常住不壊を成就することを得たり、善男子
正法を護持する者は五戒を受けず威儀を修せず応に刀剣弓箭を
持つべし、是くの如く種種に法を説くも然も故師子吼を作すこと
能わず非法の悪人を降伏すること能わず、是くの如き比丘自利し
及び衆生を利すること能わず、当に知るべし是の輩は懈怠懶惰

なり能く戒を持ち、淨行を守護すと雖も、当に知るべし、是の人は
能く為す所無からん、乃至時に破戒の者有つて、是の語を聞き
已つて、咸共に瞋恚して、是の法師を害せん、是の説法の者、設い復
命終すとも、故持戒自利、利他と名く、等云云、章安の云く
「取捨宜きを得て、一向にす可からず」等、天台云く「時に適う而已」
等云云、譬へば、秋の終りに種子を下し、田畠をかえさんに、稻米をう
ることかたし、建仁年中に法然・大日の二人・出来して、念仏宗
・禅宗を興行す、法然云く「法華經は末法に入つては
未有一人得者、千中無一」等云云、大日云く「教外別伝」等云云、
此の両義、国土に充滿せり、天台・真言の学者等・念仏・禅の
檀那を・へつらいをづる事、犬の主にを・をふり・ねづみの猫を・
をそるるがごとし、国王・將軍に・みやつかひ、破仏法の因縁・

はこく 破国の因縁を能く説き能くかたるなり、天台・真言の学者等
こんじょう 今生には餓鬼道に堕ち後生には阿鼻を招くべし、設い山林にま
いちなんさんぜん じわつて一念三千の觀をこらすとも空閑にして三密の油をこぼさ
ずとも時機をしらず 摂折の二門を弁へずば・いかでか生死を離
るべき。

問うて云く念仏者・禅宗等を責めて彼等に・あだまれたる・
いかなる利益があるや、答えて云く涅槃經に云く「若し善比丘法
を壊る者を見て置いて呵責し駈遣し拳処せずんば当に知るべし
是の人は仏法の中の怨なり、若し能く駈遣し呵責し拳処せば是れ
我が弟子真の声聞なり」等云云、「仏法を壊乱するは仏法中の
怨なり慈無くして詐り親しむは是れ彼が怨なり能く糾治せんは
是れ護法の声聞真の我が弟子なり彼が為に悪を除くは即ち是れ

彼が親なり能く呵責する者は是れ我が弟子駈遣せざらん者は仏法
中の怨なり」等云云。

夫れ法華經の宝塔品を拜見するに釈迦・多宝・十方分身の
諸仏の来集はなに心ぞ「令法久住・故来至此」等云云、三仏の
未来に法華經を弘めて未来の一切の仏子にあたえんと・おぼしめ
す御心の中をすいするに父母の一子の大苦に値うを見るよりも
強盛にこそみへたるを法然いたはしと・もおもはで末法には
法華經の門を堅く閉じて人を入れじとせき狂児をたばらかして宝
をすてさするやうに法華經を抛させける心こそ無慚に見へ候
へ、我が父母を人の殺さんに父母につげざるべしや、悪子の酔狂
して父母を殺すをせいせざるべしや、悪人寺塔に火を放たんにせ
いせざるべしや、一子の重病を灸せざるべしや、日本の禪と

ねんぶつ

念仏者とをみて制せざる者はかくのごとし「慈無くして詐り親し

むは即ち是れ彼が怨なり」等云云。

にちれん

にほんこく

しよにん

ふほ

いっさいてんだいしゅう

いっさいてんだいしゅう

いっさいてんだいしゅう

いっさいてんだいしゅう

いっさいてんだいしゅう

いっさいてんだいしゅう

日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり一切天台宗の人は彼等

おんてき

ため

すなわこ

すなわこ

すなわこ

すなわこ

すなわこ

すなわこ

すなわこ

すなわこ

が大怨敵なり「彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親」等云云、無

どうしん

しやうじ

きやうしゆしやくそん

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

いっさい

道心の者生死をはなる事はなきなり、教主釈尊の一切の外道

あくにん

めり

たまい

てんだいだいし

なほ

なほ

なほ

なほ

なほ

なほ

なほ

に大悪人と罵詈せられさせ給い天台大師の南北並びに得一に三寸

の舌もつて五尺の身をたつと伝

でんぎやうだいし

でんぎやうだいし

でんぎやうだいし

でんぎやうだいし

でんぎやうだいし

でんぎやうだいし

でんぎやうだいし

でんぎやうだいし

でんぎやうだいし

でんぎやうだいし

未だ唐都を見ず」等といはれさせ給いし皆法華経のゆへなればは

いまだ

とう

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

たまい

ぢならず愚人にほめられたるは第一のはぢなり、日蓮が御勘気を

かほれば天台・真言の法師等悦ばしくやをもうらん・かつはむざ

てんだい

しんごん

ほっし

よろこ

よろこ

よろこ

よろこ

よろこ

よろこ

よろこ

んなり・かつはきくわいなり、夫れ釈尊は娑婆に入り羅什は秦

に入り伝

でんぎやう

しな

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

に入り伝教は尸那に入り提婆師子は身をすつ薬王は臂をやく

でんぎやう

しな

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

に入り伝教は尸那に入り提婆師子は身をすつ薬王は臂をやく

でんぎやう

しな

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

に入り伝教は尸那に入り提婆師子は身をすつ薬王は臂をやく

でんぎやう

しな

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

だいはしし

じょうぐう

上宮は手の皮をはぐ釈迦菩薩は肉をうる樂法は骨を筆とす、

てんだい いわ

天台の云く「適時而已」等云云、仏法は時によるべし日蓮が流罪

こんじょう

は今生の小苦なれば・なげかしからず、後生には大樂をうくべ

おおい よろこ

ければ大に悦ばし。

◆四二 如来滅後五五百歳始 観心本尊抄

(文永十年 五二歳

御作)

本朝沙門 日蓮撰

238p

摩訶止観第五に云く開合の異なり

「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界な

り一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を

具す、比の三千・一念の心に在り若し心無んば而已介爾も心有れ

すなわ さんぜん

ぐ

ないし ゆえ

ふかしぎ

な

ここ

ば即ち三千を具す乃至所以に称して不可思議と為す意此に在り」

問うて云く玄義に一念三千の名目を明かすや、答えて曰く
妙樂云く明かさず、問うて曰く文句に一念三千の名目を明かす
や、答えて曰く妙樂云く明かさず、問うて曰く其の妙樂の釈
如何、答えて曰く未だ一念三千と云わず等云云、問うて曰く止觀
の一二三四等一念三千の名目を明かすや、答えて曰く之れ無
し、問うて曰く其の証如何、答えて曰く妙樂云く「故に止觀に
至って正しく觀法を明かす並び三千を以て指南と為す」等云云、
疑って曰く玄義第二に云く「又一法界に九法界を具すれば百
法界千如是」等云云、文句第一に云く「一入に十法界を具すれ
ば一界又十界なり十界各十如是あれば即ち是れ一千」等云云、
觀音玄に云く「十法界交互なれば即ち百法界有り千種の性相・
冥伏して心に在り現前せずと雖も宛然として具足す」等云云、

問うて曰く止観の前の四に一念三千の名目を明かすや、答えて
曰く妙楽云く明さず、問うて曰く其の釈如何、答う弘決第五に
云く「若し正観に望めば全く未だ行を論ぜず亦二十五法に歴て事
に約して解を生ず方に能く正修の方便と為すに堪えたり是の
故に前の六をば皆解に属す」等云云、又云く「故に止観の正しく
観法を明かすに至って並びに三千を以て指南と為す乃ち是れ終窮
究竟の極説なり故に序の中に「説己心中所行法門」と云う良に
以所有るなり請う尋ね読まん者心に果縁無れ」等云云、夫れ智者
の弘法三十年二十九年の間は玄文等の諸義を説いて五時・八教
・百界・千如を明かし前き五百余年の間の諸非を責め並びに天竺
の論師未だ述べざるを顕す、章安大師云く「天竺の大論尚其の
類に非ず震旦の人師何ぞ勞わしく語るに汲ばん此れ誇耀に非ず

法相ほつそうの然しからしむるのみ」等云云、墓はかないかな天台てんだいの末学まつがく等華嚴けごん・
真言しんこんの元祖がんその盗人ぬすびとに一念三千いちねんさんぜんの重宝じゅうほうを盗み取られて還かへつて彼等かれらが
門家もんかと成りぬ章しょう安大師あんだいし兼ねて此この事を知しつて歎なげいて言いく「斯この
言も若おし墜おちなば将来悲べむ可べし」云云。

問いうて曰いく百界千如ひゃつかいせんによと一念三千いちねんさんぜんと差別さべつ如何いかん、答こたえて白いく
百界千如ひゃつかいせんによは有情界うじょうに限り一念三千いちねんさんぜんは情非情ひじょうに亘わたる、不審ふしんして
云いく非情ひじょうに十如じゅうの是亘ぜわたるならば草木そうもくに心有こころあつて有情うじょうの如ごとく成仏じょうぶつを
為なす可べきや如何いかん、答こたえて白いく此この事難信難解なんしんなんげなり天台てんだいの難信難解なんしんなんげ
に二有きり一いには教門きょうもんの難信難解なんしんなんげ・二にには觀門くあんもんの難信難解なんしんなんげなり、
其その教門きょうもんの難信難解なんしんなんげとは一仏いちぶつの所説しよせつに於おいて爾前にぜんの諸經しよきやうには二乘にじやう
闡提せんたい・未來きやうもんに永なんしんなんげく成仏じょうぶつせず教主きやうしゅ釈尊しやくそん始めて正覺しやうかくを成ほじ法華經ほけきやう
迹本二門じふほんにもんに來至らいしし給たまい彼かれの二説にせつを壊やぶる一仏いちぶつ二言にげん水火すいかなり誰人だれびとか

これ之を信ぜん此れは教門きやうもんの難信難解なんしんなんげなり、觀門かんもんの難信難解なんしんなんげはひやつかいせんによいちなんさんぜん 百界千如・一念三千・非情ひじやうの上の色心しきしんの二法十如じゆのぜこれ是なり、爾しかりといえども木画もくえの二像おひに於ては外典内典共げてんないてんに之これを許ゆるして本尊ほんぞんと為す其なの義そに於ては天台一家てんだいより出いでたり、草木そうもくの上に色心しきしんの因果いんがを置おかずんば木画もくえの像かたちを本尊ほんぞんに待たてまつ奉たてまつること無益むやくなり、疑うたがいつて云いわく草木国土そうもくこくどの上の十如こ是いんがの因果いんがの二法いずれは何れの文に出いでたるや、答いえて曰いわく止觀第五しかんに云いわく「国土世間こくどせけん亦また十種の法いを具ぐす所以ゆえに惡国土こくど・相さう・性しやう・体たい・力りき」等と云云、釈詮第六いに云いく「相さうは唯色ゆいしきに有あり性しやうは唯心ゆいしんに在あり体たい・力りき・作さく・縁えんは義色心しきしんを兼かね因果いんがは唯心ゆいしん・報ほうは唯色ゆいしきにあり」等云云、金☆論こんべいろんに云いく「乃すなわち是これ一草・一木・一礫いちじん・一塵ぶつしやう・各一仏性いんが・各一因果えんりやうあり縁えん了りやうを具足ぐそくす」等云云。

問うて曰く出処既に之を聞く觀心の心如何、答えて曰く觀心と
は我が己心を觀じて十法界を見る是を觀心と云うなり、譬え
他人の六根を見ると雖も未だ自面の六根を見ざれば自具の六根を
知らず明鏡に向うの時始めて自具の六根を見るが如し、設
諸經の中に処処に六道並びに四聖を載すと雖も法華經並びに
天台大師所述の摩訶止觀等の明鏡を見ざれば自具の十界・
百界千如・一念三千を知らざるなり。

問うて云く法華經は何れの文ぞ天台の釈は如何、答えて曰く
法華經第一方便品に云く「衆生をして仏知見を開かしめんと
欲す」等云云是は九界所具の仏界なり、寿命品に云く「是くの
如く我成仏してより已來甚大に久遠なり壽命・無量阿僧祇劫
・常住にして滅せず諸の善男子我本菩薩の道を行じて成ぜし所

の壽命じゅみょう今猶未だ尽つきず復上またの數に倍せり」等云云此の經文きやうもんは
仏界ぶつがい所具しよぐの九界くくがいなり、經に云く「提婆達多だいばだつた乃至ないしてん天王のう如來にょらい」等云云
地獄じごく所具しよぐの仏界ぶつがいなり、經に云く「一いっを藍婆らんばと名け乃至ないし汝等なんじ但
能よく法華ほつけの名を護持ごじする者は福量はくるべからず」等云云、是れ餓鬼がき
界しよぐ所具しよぐの十界じゆっかいなり、經に云く「竜女りゆうにょ乃至ないし成等しやうかく正覺しやうかく」等云云
此れ畜生界ちくしやう所具しよぐの十界じゆっかいなり、經に云く「婆稚ばち阿修羅王あしゅらおう乃至ないし一偈いちげ
・一句いっくを聞いて・阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいを得うべし」等云云修羅界しゅら
所具しよぐの十界じゆっかいなり、經に云く「若もし人・仏もつての爲ゆえの故ないしに乃至みなす皆已すでに
仏道ぶつどうを成じやうず」等云云此れ人界にんがい所具しよぐの十界じゆっかいなり、經に云く
「大梵天王だいぼんてん乃至ないし我等われらも亦是またくごとの如ごとく・必まさず当さふつに作仏さぶつすることを
得うべし」等云云此れ天界しよぐ所具しよぐの十界じゆっかいなり、經に云く「舍利弗しやりほつ
乃至ないし華光如來かうかうにょらい」等云云此れ聲聞界しやうもん所具しよぐの十界じゆっかいなり、經に云く「共

の縁覺えんかくを求むる者・比丘・比丘尼乃至合掌ごうしょうを以て敬心ぐそくし具足ぐそくの道みちを聞きかんと欲ほす」等云云、此これ即すなわち縁覺界所具じよぐの十界じゅっかいなり、經きやうに云いく「地湧千界せんがい乃至真淨大法だいほう」等云云此これ即すなわち菩薩所具ぼさつしよぐの十界じゅっかいなり、經きやうに云いく「・或説己身あるこしん・或説他身ある」等云云即すなわち仏界ぶつかい所具しよぐの十界じゅっかいなり。

問いうて曰いく自他面じためんの六根共ろっこんに之これを見る彼此ひしの十界じゅっかいに於おては未いまだ之これを見いかず如何いかんが之これを信しんぜん、答こたえて曰いく法華經ほけきやう・法師品ほうしほんに云いく「難信難解なんしんなんげ」宝塔品ほうとうぼんに云いく「六難九易なんくゐ」等云云、天台大師てんだいだいし云いく「二門ふたもん悉ことごとく昔むかしと反さかすれば難信難解なんしんなんげなり」章しょう安大師あんだいいし云いく「仏こ此これを將もつて大事だいじと為なす何なんぞ解げし易やすきことを得べ可べけんや」等云云、傳でん教大師きやうだいいし云いく「此この法華經ほけきやうは最もつともも為なれ難信難解なんしんなんげなり隨自意ずいじいの故ゆゑに」等云云、夫それ在世ざいせの正機しやうきは過去かこの宿習しゆくじゅう厚あき上う、教主きやうしゆしやくそん釈尊しやくそん

・多宝仏・十方分身の諸仏・地涌千界・文殊・弥勒等之を扶け
て諫曉せしむるに猶信ぜざる者之れ有り五千・席を去り人天移
さる況や正像をや何に況や末法の初をや汝之を信せば正法に
非じ。

問うて曰く經文並に天台章安等の解釈は疑網無し但し火を
以て水と云い墨を以て白しと云う設い仏説為りと雖も信を取り
難し、今数ば他面を見るに但人界に限って余界を見ず自面も亦復
是くの如し如何が信心を立てんや、答う数ば他面を見るに・或時
は喜び・或時は瞋り・或時は平に・或時は貪り現じ・或時は癡
現じ・或時は諂曲なり、瞋るは地獄・貪るは餓鬼・癡は畜生・
諂曲なるは修羅・喜ぶは天・平かなるは人なり他面の色法に
於ては六道共に之れ有り四聖は冥伏して現れざれども委細に

之これを尋たずねば之これれ有ある可べし。

問いうて白いく六遣ろくどうに於おて分ぶん明みならずと雖いえども粗ほ之これを聞きくに之これを

備そうるに以もたり、四聖ししやうは全いく見みえざるは如い何か、答こえて白いく前まへには

人界にんかいの六道ろくどう之これを疑うたがい、然しかりと雖いえども強しいて之これを言いつて相そう似じの言ごを

出しだせしなり四聖ししやうも又また爾しかるに可べきか試しみに道どう理りを添てん加かして万まか一いつ

之これをの宣のべん所以ゆえに世間せけんの無常むじやうは眼がん前ぜんに有あり豈あに人界にんかいに二乘界にじやう無なか

らんや、無顧むこの惡人あくにん

も猶な妻お子さいを慈愛じあいす菩薩界ぼさつの一分いちぶんなり、但ぶ仏界計ぶつかいり現げんじ難がし九界くを

具ぐするを以もて強しいて之これを信しんじ疑惑ぎわくせしむること勿なかれ、法華經ほけきやうの文ぶん

に人界にんかいを説いいて云いく「衆生しゆじやうをして仏知見ぶつちけんを開ひらかしめんと欲ほす」

涅槃經ねはんきやうに云いく「大乘だいじやうを学まなぶ者は肉眼にくげん有ありと雖いえども名なけて仏眼ぶつげんと

為なす」等云云、末代まつだいの凡夫ぼんぷ出生しゅつしょうして法華經ほけきやうを信しんずるは人界にんかいに

仏界ぶつかいを具足ぐそくする故なり。

問いうて曰いく十界互具じゅつかいごぐの仏語分ぶつごふんみょう明みょうなり然しかりと雖いえども我等われらが劣心れっしんに
仏法界ぶつぼうかいを具ぐすること信しんを取り難がたき者ものなり今時いまとき之これを信しんぜずば必ず
一闡提いつせんたいと成なりらん願ねがくば大慈悲だいじひを起おこして之これを信しんぜしめ阿鼻あびの苦くるを
救護くこしたまえ。

答こたえて曰いく汝既なんじすでに唯一ゆいいちだいじん大事だいじ因縁いんねんの経文きょうもんを見開けんかいして之これを信しんぜざ
れば釈尊しゃくそんより已下いかしえ四依しえの菩薩ぼさつ並びに末代理まつだいり即すくの我等われら如何いかにが汝なんじが
不信ふしんを救護くこせんや、然しかりと雖いえども試いみに之これを云いわん仏ぶつに値あいたてま
つて覚さとらざる者もの・阿難等あなんの辺へんにして得道とくどうする者もの之これ有あればな
り、其それ機きに二有ふたり一ひとには仏ぶつを見みたてまつり法華ほっけにして得道とくどうす二
には仏ぶつを見みたてまつらざれども法華ほっけにて得道とくどうするなり、其その上
仏教ぶつぎょう已前いぜんは漢土かんどの道士月支どうしがっしの外道げどう・儒教じゅぎょう・四韋陀等しゐだを以もつて經きやうと

な
為して正見せいけんに入る者之れ有り、又利根りこんの菩薩ぼさつ・凡夫ぼんぶ等の華嚴けごん・
ほうとう
方等・般若等の諸大乗しよだいじようきよう經聞きし縁を以て大通久遠もっだいしゆくおんの下種げしゆをする
者多々なり例せば独覺どつかくの飛花落葉ひけらくようの如ごとし教外の得道きやうげ是なり、過去かこ
の下種結縁げしゆけちえん無き者の権小こんしやうに執着する者は設ほけきやうい法華經ほけきやうに値あい奉たてまれ
ども小権しやうこんの見を出いでず、自見を以て正義もっせいぎと為なるが故ゆえに通とつて
ほけきやう
法華經を以て・或ある小乘經しよじやうきように同じ・或ある華嚴けごん・大日經等だいにちきやうに同じ
・或ある之を下これらす、此等の諸師しよしは儒家外道の賢聖けんせいより劣おとれる者なり、
此等これらは且しばらく之これを置く、十界互具じゆっかいご之これを立つるは石中の花・木中の
花信なじ難なんけれども縁に値あうて出生しゆっしやうすれば之これを信にんず人界所具にんかいしよぐの
ぶっかい
仏界は水中の火・火中の水最も甚はなはだだ信がたじ難がたし、然しかりと雖いえども竜火りゆうか
は水より出いで竜水りゆうすいは火より生こころえず心得こころえられざれども現証げんしやうあ有れば
これ
之を用もちゆ、既すでに人界にんかいの八界之これを信にんず、仏界何ぞ之これを用もちいざらん

堯ぎょうしゅん 舜等しやうにんの聖人の如きは万民に於て偏頗無し人界の仏界の一分なり、不輕菩薩は所見の人に於て仏身を見る悉達太子は人界よりぶつしん じよう これら げんしやう もつこれ 仏身を成ず此等の現証を以て之を信ず可きなり。

問うて曰くいわ堅固に之を秘す教主釈尊は此れより三惑已斷の仏なり又十方世界の国主

一切の菩薩・二乗・人天等の主君なり行の時は梵天左に在りいっさい ぼさつ にじよう にてん しゆくん みゆき ほんてん

帝釈右に侍り四衆・八部後に従い金剛前に導びき八万法蔵をたいしやく はべ ししゆう はちぶしりえ こんこう みち はちまん ほうぞう

演説して一切衆生を得脱せしむ是くの如き仏陀何を以て我等えんぜつ いっさいしゆくじよう とくだつ かく ごと ぶつだ もつ われら

凡夫の己心に住せしめんや、又迹門・爾前の意を以て之を論ずほんぶ こしん しゃくもん にぜん もつこれ

れば教主釈尊は始成正覺の仏なり、過去の因行を尋ね求ればきようしゆくしくそん しじようしやうかく かこ いんぎやう たず

・或能施太子・或は儒童菩薩・或は戸毘王・或は薩た王子・或はあるのうせたいし ある じゆどうぼさつ ある しびおう ある さつ おうじ ある

三祇・百劫・或は動☆塵劫・或は無量阿僧祇劫・或は初発心時ぎ あり どうゆちり ある むりやうあそぎこう ある しよほっしん

・或は三千塵点等の間七万・五千・六千・七千等の仏を供養し劫ある さんぜんじんてん

を積み行満じて今の教主釈尊きょうしゅしやくそんと成り給う、是たまたまくの如かくき因位いんいの諸しよぎよう行は皆我等が己身所見の菩薩界の功德くどくか、果位を以て之を論もつこれずれば教主釈尊は始成正覺の仏四十年の間四教の色身しきしんを示現じげんし爾前・迹門・涅槃等を演説して一切衆生を利益し給う、所謂いっさいしゅじよう華藏の時・十万台上の虞舍那・阿含經の三十四心・斷結成道のけそ仏、方等・般若の千仏等、大日・金剛頂の千二百余尊、並びにほうとう迹門宝塔品の四士色身しきしん、涅槃經の・或は丈六と見る・或は小身しやくもん大身と現げんじ・或いは虞舍那と見る・或いは身虚空に同じと見る四種なの身乃至八十御入滅舍利を留めて正像末を利益し給う、本門もつこを以て之を疑うたがわば教主釈尊は五百塵点已前の仏なり因位いんいも又かく是くの如ごとし、其れより已来十方世界に分身ふんじんし一代聖教いちだいしやうきやうを演説えんぜつして塵数じんじゆの衆生を教化し給う、本門ほんもんの所化を以て迹門しよけの所化に

ひきょう 比較すれば一たいと大海と一塵と大山とな、本門の一菩薩を
しゃくもんじゅうまんせかい もんじゅ 観音等に対向すれば猴猿を以て帝釈に
迹門 十万世界の文殊・觀音等に対向すれば猴猿を以て帝釈に
比するに尚及ばず、其の外十方世界の断惑証果の二乗並びに
ほんてん 梵天・帝釈・日月・四天・四輪王・乃至無間・大城の大火等比
みな 等は皆我が一念の十界か己身の三千か、仏説為りといえども
これを信ず可からず。

こ 此れを以て之を思うに爾前の諸経は実事なり実語なり、
けこんきよう 華嚴經に云く「究竟して虚妄を離れ染無きこと虚空の如し」と
にんのうきよう 仁王經に云く「源を窮め性を尽して妙智存せり」金剛般若經に
いわ 云く「清淨の善のみ有り」馬鳴菩薩の起信論に云く「如来蔵の
しやうじよう 中に清淨の功德のみ有り」天親菩薩の唯識論に云く「請く余の
うろ 有漏と劣の無漏と種は金剛喻定が現在前する時極円明純淨の

本識を引く彼の依に非ざるが故に皆永く喜捨す」等云云、爾前

の経経きょうぎょうと法華経ほけきょうと之を校量きょうりょうするに彼の経経きょうぎょうは無数なり時説じせつ

既に長し一仏二言彼に付く可し、馬鳴菩薩は律法蔵第十一にして

仏記に之れ有り天親は千部の論師・四依の居士なり、天台大師は

辺鄙の小僧にして一論をも宣べず誰か之を信ぜん、其の上多を捨

て小に付くとも法華経の文分明ならば少し恃怙有らんも法華経

文に何れの所にか十界互具・百界・千如・一念三千の分明なる

証文之れ有りや、随つて経文を開拓するに「断諸法中惡」等云

云、天親菩薩の法華論・堅慧菩薩の宝性論に十界互具之れ無く

漢土南化の諸大師・日本七寺の末師の中にも此の義無し但天台

一人の僻見なり伝教一人の謬伝なり、故に清凉国師の云く

「天台の謬りなり」憲苑法師の云く「然るに天台は小乗を呼

さんぞう

んで三蔵教と為し其の名謬濫するを以て」等云云、了洪が云く

てんだいひと

「天台独り未だ華嚴の意を尽さず」等云云、得一が云く「咄いか

ちこうなんじこ

な智公汝は是れ誰が弟子ぞ、三寸に足らざる舌根を以て覆面説

さんずん

ぜつこん

ふめん

の所説の教時を謗ず」等云云、弘法大師の云く「震旦の人師等諍つ

こうぼうだいし

いわ

しんたん

にんし

あらそ

だいこ

て醍醐を盗んで各自宗に名く」等云云、夫れ一念三千の法門は

じしゅう

なず

そ

いちねんさんぜん

ほうもん

いちだい

ごんじつ

みょうもく

けず

しえ

しよろんし

一代の権実に名目を削り四依の諸論師其の義を載せず漢土日域

にんし

これ

もち

如何が之を信ぜん。

の

これ

を

信ぜん。

答えて曰く此の難最も甚し最も甚し但し諸経と法華との

いわ

なん

はなはだ

はなはだ

ただ

しよきよう

ほつけ

相違は経文より事起つて分明なり未顕と已顕と証明と舌相と

そうい

きようもん

ふんみよう

みけん

いけん

しようみよう

ぜつそう

二乗の成不と始成と久成と等之を顕わす、諸論師の事、天台大師

にじよう

じようふ

しじよう

くじよう

これ

あら

しよろんし

しよろんし

てんだいだいし

云く「天親・竜樹・内鑑冷然たり外には時の宜きに適い各権に

いわ

てんじん

りゅうじゅ

ないがんれいねん

外には時の

よろし

かな

各権に

扱る所あり、而るに人師偏に解し学者苛も執し遂に矢石を興し各

よ

しか

にんしひとえ

げ

がくしやいやしくしゅう

遂に矢石を

興し各

おこ

一辺を保ちて大に聖道に乖けり」等云云、章安大師云く「天竺

の大論尚其の類に非ず真旦の人師何ぞ勞わしく語るに及ばん

此れ誇耀に非ず法相の然らしむるのみ」等云云、天親・竜樹・

馬鳴・堅慧等は内鑑冷然なり然りと雖も時未だ至らざるが故に

之を宣べざるか、人師に於ては天台已前は・或は珠を含み・或は

一向に之を知らず已後の人師・或は初に之を破して後に歸伏する

人有り・或は一向用いざる者も之れ有り但し断諸法中惡の經文

を会す可きなり、彼は法華經に爾前の經文を載するなり往いて

之を見るに經文分明に十界互具之を説く所謂「欲令衆生

開仏知見」等云云、天台此の經文を承けて云く「若し衆生に仏

の知見無んば何ぞ開を論ずる所あらん当に知るべし仏の知見

衆生に蘊在することを」云云、章安大師の云く「衆生に若し

仏の知見無くんば何ぞ開悟する所あらん若し貧女に蔵無んば何ぞ示す所あらんや」等云云。

但し会し難き所は上の教主釈尊等の大難なり、此の事を仏遮会して云く「已今当説最為難信難解」と次下の六難九易是なり、天台大師云く「二門・悉く昔と反すれば、信じ難く解し難し。鉾に当るの難事なり」章安大師の云く「仏此れを將つて大事と為す。何ぞ解し易きことを得可けんや」伝教大師云く「此の法華経は最も為れ難信難解なり。隋自意の故に」等云云。夫れ仏より滅後に至る一千八百余年。三国に経歴して但三人のみ有つて始めて此の正法を覚知せり。所謂月支の釈尊・真旦の智者大師・日域の伝教此の三人は内典の聖人なり、問うて曰く竜樹・天親等は如何、答えて曰く此等の聖人は知つて之を言わざる

仁なり、或は迹門の一分之を宣べて、本門と觀心とを云わず。

・或は機有つて時無きか、或は機と時と共に之れ無きか、天台

・傳教已後は之を知る者多多なり。二聖の智を用ゆるが故なり

所謂三論の嘉祥・南三・北七の百余人・華嚴宗の宝蔵・清涼等

・法相宗の玄奘三蔵・慈恩大師等・真言宗の善無畏三蔵・

金剛智三蔵・不空三蔵等、律宗の道宣等、初には反逆を存し、

後には一向に歸伏せしなり。

但し初の大難を遮せば無量義經に云く「譬えば国王と夫人と新

たに王子を生ぜん若は一日若は二日若は七日に至り若は一月若は

二月若は七月に至り若は一歳若は二歳若は七歳に至り復国事を

領理すること能わずと雖も已に臣民に宗敬せられ諸の大王の子

以て伴侶と為らん、王及び夫人の愛心偏に重くして常に与共に

語らん所以は・何ん稚小なるを以ての故にと云うが如く、善男子
是の持経者も亦復是くの如し、諸仏の国王と是の経の夫人と和合
して共に是の菩薩の子を生ず若し菩薩是の経を聞くことを得て
若しは一句若しは一偈若しは一転若しは二転若しは十若しは百
若しは千若しは万若しは億万恒河沙・無量無數転せば復真理の極
を体すること能わずと雖も、乃至已に一切の四衆・八部に宗仰せ
られ諸の大菩薩を以て眷属と為し乃至常に諸仏に護念せられ慈愛
偏に覆われん新学なるを所ての故なり」等云云、普賢經に云く「此
の大乗經典は諸仏の宝蔵十万三世の諸仏の眼目なり乃至三世
の諸の如来を出生する種なり乃至汝大乘を行じて仏種を断ぜ
ざれ」等云云、又云く「此の方等経は是れ諸仏の眼なり諸仏是
に因つて五眼を具することを得・仏の三種の身は方等従り生ず

是れ大法印にして涅槃海に印す此くの如き海中能く三者の仏の
しやうじやう

清浄 身を生ず此の三種の身は人天の福田なり」等云云。

夫れ以れば・釈迦如来の一代・顕密・大小の二教・華嚴・

真言等の諸宗の依経往いて之を勘うるに・或は十方台葉・

毘盧遮那仏・大集雲集の諸仏如来・般若染浄の千仏示現・大日

・金剛頂等の千二百尊・但其の近因近果を演説して其の遠因果

を顕さず、速疾頓成之を説けども三五の速化を亡失し化導の

始終跡を削りて見えず、華嚴経・大日経等は往之を見るに

別円四蔵等に似たれども再往之を勘うれば蔵通二教に同じて未だ

別円にも及ばず本有の三因之れ無し何を以てか仏の種子を定め

ん、而るに新訳の訳者等漢土に來入するの日・天台の一念三千の

法門を見聞し

て・或は自ら所持の經經ある みずか しよじ きようぎように添加し・或は天竺より受持するの由ある てんじく じゆじ
之を称す、天台の学者等・或は自宗に同ずるを悦び・或は遠きこれ しよう てんだい がくしゃ ある じしゆう よろこ ある
を貴んで近きを蔑みし・或は旧を捨てて新を取り魔心・愚心とうと さげす ある
出来す、然りと雖も詮ずる所は一念三千の仏種に非ずんば有情しゅつたい いえど せん いちねんさんぜん ぶつしゆ あら うじよう
の成仏・木画二像の本尊は有名無実なり。じようぶつ もくえ ほんぞん ゆうめいむじつ

問うて曰く上の大難未だ其の会通を開かず如何。かみ だいなん えつう いかん

答えて曰く無量義經に云く「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずい わ むりようぎきよう い わ ろくはらみつ しゆぎよう
と雖も六波羅蜜自然に在前す」等云云、法華經に云く「具足の道いえど ろくはらみつ じねん ざいぜん ほけきよう い わ ぐそく
を聞かんと欲す」等云云、涅槃經に云く「薩とは具足に名く」云を ねはんぎよう い わ さつ ぐそく なず
云、竜樹菩薩云く「薩とは六なり」等云云、無依無得大乘四論りゆうじゆぼさつ い わ さつ むえむとくだいじよう
・玄義記に云く「沙とは訳して六と云う胡法には六を以て具足のげんぎ い わ さ ことほう ぐそく
義と為すなり」吉蔵疏に云く「沙とは翻じて具足と為す」きちようのじよ い わ さ ほん ぐそく

てんだいだしいわ
天台大師云く「薩とは梵語なり此には妙と翻ず」等云云、私に会通
を加え本文を贖が如し爾りと雖も文の心は釈尊の因行果徳
の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等・此の五字を受持すれ
ば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う、四大声聞の領解に
云く「無上宝聚・不求自得」云云、我等が己心の声聞界なり、
「我が如く等くして異なる事無し我が昔の所願の如き今は已に
満足しぬ一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」・妙覺の釈尊
は我等が血肉なり因果の功徳は骨髓に非ずや、宝塔品に云く
「其れ能く此の經法を護る事有らん者は則ち為れ我及び多宝を
供養するなり、乃至亦復諸の来り給える化仏の諸の世界を莊嚴
し光飾し給う者を供養するなり」等云云、釈迦・多宝・十方の
諸仏は我が仏界なり其の跡を紹繼して其の功徳を受得す「須臾

も之を聞く・即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟するを得ん」とは
これ、あのくたらさんみやくさんぼだい 是なり、じゅりようぼん 寿命品に云く「然るに我実に成仏してより已来、無量
むへん、せんまん 無辺百千万那由佗劫なり」等云云、我等が己心の釈尊は
五百塵点劫乃至所顯の三身にして無始の古仏なり、経に云く「我
本菩薩の道を行じて、成ぜし所の寿命、今猶未だ尽きず・復上
の数に倍せり」等云云、我等が己心の菩薩等なり、地涌千界の菩薩
は己心の釈尊の眷属なり、例せば大公・周公旦等は周武の臣下
・成王幼稚の眷属・武内の大臣は神功皇后の棟梁仁徳王子の
臣下なるが如し、上行・無辺行・浄行・安立行等は我等が
己心の菩薩なり、妙薬大師云く「当に知るべし身土一念の三千な
り故に成道の時・此の本理に称うて一身一念法界に遍し」等云
云。

そ 夫れ始め寂滅道場・華藏世界より沙羅林に終るまで五十余年

の間・華藏・密嚴・三變・四見等の三土四土は皆成劫の上の

無常の土に変化する所の方便・実報・寂光・安養・淨瑠璃・

密嚴等なり能變の教主涅槃に入りぬれば所變の諸仏随つて滅尽

す土も又以て是くの如し。

今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土な

り仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同體なり此れ

即ち己心の三千具足・三種の世間なり迹門十四品には未だ之を

説かず法華經の内に於ても時機未熟の故なるか。

此の本門の肝心南無妙法蓮華經の五字に於ては仏猶文殊・

薬王等にも之を付属し給わず何に況や其の已外をや但地涌千界を

召して八品を説いて之を付属し給う、其の本尊の爲體本師の

袈婆しやばの上に宝塔ほうとう空に居こし塔中たっちゅうの妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの左右さうに釈迦牟尼しやかむに仏ぶつ

たほうぶつ　しやくそん　きようじじようぎよう

・多宝たほう仏ぶつ・釈尊しやくそんの脇士きようじ上行じようぎよう等の四菩薩ぼさつ・文殊もんじゆ・弥勒みろく等は四

菩薩ぼさつの眷属けんぞくとして末座まつざに居こし迹化けた他方だいしやうの大小しよほさつの諸菩薩しよほさつは万民ばんみん

大地だいちに処しよして雲閣うんかく月卿げつけいを見るが如ごとく十方じゆつぽうの諸仏しよぶつは大地だいちの上に

処しよし給たまう迹仏しやくぶつ迹土しやくどを表する故ことなり、是かくくの如ごとき本尊ほんぞんは在世ざいせ五十

余年こに之これ無し八年しやくそんの間にも但八品かしように限る、正像しやうぞう二千年の間は

小乗しやうじようの釈尊しやくそんは迦葉かしよう・阿難あなんを脇士きようじと為なし権大乘こんだいじよう並に涅槃ねはん・

法華經ほけきやうの迹門しやくもん等の釈尊しやくそんは文殊もんじゆ・普賢ふげん等を以もつて脇士きようじと為なす此等これらの

仏ぶつをば正像しやうぞうに造り画えがけども未いまだ寿量じゆりやうの仏ぶつ有ましさず、末法まつぽうに來入まつぽうし

て始めて此ぶつぞうしゆつげんの仏像ぶつぞう出現しゆつげんせしむ可べきか。

問しやうぞうう正像しやうぞう二千余年しえんの間は四依しえの菩薩ぼさつ並ならびに人師にんし等よぶつ余仏よぶつ・

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

小乘しやうじよう・権大乘こんだいじようこ爾前にぜん・迹門しやくもんの釈尊しやくそん等の寺塔じとうを建立こんりやうすれども

本門 寿命品の本尊並びに四大菩薩をば三国の王臣俱に未だ之を
崇重せざる由之を申す、比の事粗之を聞くと雖も前代未聞の
故に耳目を驚動し心意を迷惑す請う重ねて之を説け委細に之を
聞かん。

答えて白く法華經一部八卷・二十八品・進んでは前四味・退い

ては涅槃經等の一代の諸經惣じて之を括るに但一經なり始め

寂滅道場より終り般若經に至るまでは序分なり無量義經・

法華經普賢經の十卷は正宗なり涅槃經等は流通分なり、正宗

十卷の中において亦序正流通有り無量義經並に序品は序文なり、

方便品より分別功德品の十九行の偈に至るまで十五品半は

正宗分なり、分別功德品の現在の四信より普賢經に至るまでの

十一品半と一卷は流通分なり。

又ほけきよう法華經等の十卷に於おいても二經有り各序正流通るつうを具ぐするなり、

無量義經むりようぎきようと序品じよぼんは序分じよぶんなり方便品ほうべんより人記品にんきぼんに至るまでの八品は

しょうしゅうぶん

正宗分しやうしゅうぶんなり、法師品ほうしほんより安樂行品あんらくぎようぼんに至るまでの五品は流通分るつう

なり、其その教主きやうしゆを論ずれば始成しじやう・正覺しやうかくの仏ぶつ・本無今有ほんむこんぬの

ひやつかい・せんによ

百界・千如を説いて已今当いこんとうに超過ちやうかせる隨自意ずいじい・難信難解なんしんなんげの正法しやうほう

なり、過去かこの結縁けちえんを尋れば大通十六の時・仏果ぶつかの下種げしゆを下し進くだん

では華嚴經等けこんききようの前四味ぜんしみを以て助經もつと為して大通だいつうの種子しゆしを覺知かくちせし

む、此これは仏ほんいの本意ほんいに非あらず但毒發等どくほつの一分いちぶんなり、二乗凡夫等にじようほんぶは

前四味ぜんしみを縁なと為し漸漸ぜんぜんに法華ほっけに來至らいしして種子しゆしを顕あらわし開顯とを遂とぐ

るの機き是これなり、又在世ざいせに於おいて始めて八品を聞く人天等にんてん・或あるは一句いっく

一偈等いちげを聞きて下種げしゆとし・或あるは熟あし・或あるは脱あし・或あるは普賢ふげん・涅槃等ねはん

に至り・或あるは正像未等しやうざうに小權等しやうこんを以て顔もつと為なして法華ほっけに入る例

せば在世ざいせいの前四味ぜんしみの者ものの如ごとし。

又本門ほんもん十四品しじゅうほんの一經いつきやうに序正流通るつう有り涌出品ゆじゅつぽんの半品はんぽんを序分じよぶんと為なし寿命品じゆりやうほんと前後ぜんごの二半にはんと此これを正宗しやうしゆと為なす其その余よは流通るつう分ぶんなり、其その教主きやうしゆを論ろんずれば始成しじやう正覺しやうかくの釈尊しやくそんに非あらず所說しよせつの法門ほうもんも亦天地またてんちの如ごとし十界久遠じゆつかいくおんの上に国土世間こくどせけん既に顯あらわれ一念三千いちねんさんぜん殆いたんど竹膜ちくまくを隔へだつ、又迹門しやくもん並びに前四味ぜんしみ・無量義經むりやうぎきやう・涅槃經ねはんぎきやう等の三說さんごとは悉ずいく隨他意ずいたいの易信易解いしんいげ・本門ほんもんは三說さんごとの外ほかの難信難解なんしんなんげ・隨自意ずいじいなり。

又本門ほんもんに於おいて序正流通るつう有り過去大通かこだい仏ぶつの法華經ほけきやうより乃至ないしげんざい現在の華嚴經けこんきやう乃至ないしやくもん迹門しやくもん十四品涅槃經ねはんぎきやう等の一代いちだい五十余年しよきやうの諸經しよきやう・十方じゆつぽう三世諸仏さんぜしよぶつの微塵みじんの經經きやうきやうは皆みな寿命じよぶんの序分じよぶんなり一品二半じよぶんよりの外そは小乘教しやうじやう・邪教じやくきやう・未得道教とくどう・覆相教ふさうと名なく、其その機きを論ろんずれ

ば徳薄垢重・幼稚・貧窮・孤露にして禽獸に同ずるなり、爾前

・迹門の円教尚仏因に非ず何に況や大日経等の諸小乗經を

や何に況や華嚴・真言等の七宗等の論師・人師の宗をや、与えて

之を論ずれば前三教を出でず奪つて之を云えば藏通に同ず、

設い法は甚深と称すとも未だ種熟脱を論ぜず還つて灰断に同じ

化の始終無しとは是なり、皆えば王女たりと雖も畜種を懷妊すれ

ば其の子旃陀羅に劣れるが如し、此等は且く之を閣く迹門十四

品の正宗の八品は二往之を見るに二乗を以て正と為し菩薩・

凡夫を以て傍と為す、再往之を勘うれば凡夫・正像末を以て正

と為す正像末の三時の中にも末法の始を以て正が中の正と為す、

問うて曰く其の証如何ん、答えて曰く法師品に云く「而も此の經

は如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」宝塔品に云く「法

をして久住せしむ乃至來れる所の化仏當に此の意を知るべし」等、
勸持安樂等之を見る可し迹門是くの如し、本門を以て之を論ず
れば一向に末法の初を以て正機と為す所謂一往之を見る時は久種
を以て下種と為し大通前四味迹門を熟と為して本門に至つて
等妙に登らしむ、再往之を見れば迹門には似ず本門は序正流通
俱に末法の始を以て經と為す、在世の本門と末法の始は一同に
純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の
五字なり。

問うて白く其の証文如何、答えて云く涌出品に云く「爾の時
に他方の国土の諸の來れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の數に過ぎたる
大衆の中に於て起立し合掌し礼を作して仏に白して言さく、
世尊若し我等に仏の滅後に於て娑婆世界に在つて勤加精進して

の六釈を作つて之を会し給えり、所詮迹化他方の大菩薩等に我が
ないしょう じゆりようぼん もつ じゆよ

内証の寿量品を以て授与すべからず末法の初は謗法の国にして
き ゆえ これ とど まつぼうのはじめ

悪機なる故に之を止めて地湧千界の大菩薩を召して 寿量品の
かんじん みようほうれんげきよう ごじ もつ えんぶ

肝心たる妙法蓮華經の五字を以て閻浮の
しゅじよう じゆよ たま しやつけ たいしゅう

衆生に授与せしめ給う、又迹化の大衆は釈尊初発心の弟子等
あら じゆよ てんだいだしいわ こ しゃくそんしよほつしん でし

に非ざる故なり、天台大師云く「是れ我が弟子なり応に我が故を
ひろ せかい ふしょうき

弘むべし」妙樂云く「子父の法を弘む世界の益有り」、輔正記
い わ こ くじよう もつ ゆえ くじよう

に云く「法是れ久成の法なるを以ての故に久成の人に付す」等云
云。

云。

又弥勒菩薩疑請して云く經に云く「我等は復仏の髓宜の所説、
みろく ぼさつ ぎしよう いわ われら また ずいぎ しよせつ

仏所出の言未だ曾て虚妄ならず、仏の所知は皆悉く通達し給え
しよしゅつ いま かつ こもう しゃち みなことごとつうだつ たま

りと信ずと雖も、然も諸の新発意の菩薩・仏の滅後に於て、若し
い え ど しか もろもろ しんほうち ぼさつ めつこ おい も

是の語を聞かば、・或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん。唯然り世尊、願わくは為に解説して我等が疑を除き給え及び未来世の諸の善男子此の事を聞き已りならば、亦疑を生ぜじ」云云。文の意は寿量の法門は滅後の為に之を請ずるなり、寿量品に云く「・或は本心を失える・或は失わざる者あり。乃至、心を失わざる者は比の良薬の色香、俱に好きを見て即便之を服するに病尽く・除癒ぬ」等云云、久遠下種大通結縁乃至前四味迹門等の一切の菩薩・二乘人天等の本門に於て得道する是なり、経に云く「余の心を失える者は其の父の来れるを見て亦歡喜し、問訊して病を治せんことを求むと雖も、然も其の薬を与うるに而も肯えて服せず、所以は何ん。毒氣深く入って本心を失えるが故に此の好き色香ある薬に於て美からずと謂えり。乃至、

じんりきほん いわ

神力品に云く「爾の時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より

ゆじゅつ

みなぶつぜん おい いっしん がっしょう

涌出せる者皆仏前に於て一心に合掌し尊顔を胆仰して仏に白し

もう

せそん われら めつこ せそん ふんじん しやざい こくど めつこ

て言さく世尊・我等・仏の滅後・世尊分身の所在の国土・滅度の

ところ おい まさ

処に於て当に広く此の経を説くべし」等云云、天台の云く「但

下方の發誓のみを見たり」等云云、道暹云く「付属とは此の経を

ば唯下方涌出の菩薩に付す何が故に爾る法是れ久成の法なるに

ただ

ゆじゅつ ほさつ ゆえ しか こ くじょう

由るが故に久成の人に付す」等云云、夫れ文殊師利菩薩は東方金

よ ゆえ くじょう

そ もんじゅしりほさつ どうほう

色世界の不動仏の弟子觀音は西方無量壽仏の弟子・藥王菩薩は

せかい

ふどうぶつ でし かん のん さいほうむりようじゅぶつ でし やくおうほさつ

にちがつじょうみょうとくぶつ

日月淨明德仏の弟子・普賢菩薩は宝威仏の弟子なり一往釈尊

の行化を扶けん為に袈裟婆世界に來入す又爾前・迹門の菩薩なり

たす

ため しゃばせかい ほういぶつ でし いちおうしやくそん

本法所持の人に非れば末法の弘法に足らざる者か、經に云く

しよじ

まっぽう こうほう じんりき げん たま こうちようぜつ

「爾の時に世尊乃至一切の衆の前に大神力を現じ給う広長舌を

そ

せそんないし いっさい

一切の衆の前に大神力を現じ給う広長舌を

出して上梵世に至らしめ乃至十方世界衆の宝樹の下師子の座

の上の諸仏も亦復是くの如く広長舌を出し給う」等云云、夫れ

顕密二道・一切の大小乗經の中に釈迦諸仏・並び坐し舌相梵天

に至る文之無し、阿弥陀經の広長舌相三千を覆うは有名無実な

り、般若經の舌相三千光を放って般若を説きしも全く証明に

非ず、此は皆兼帶の故に久遠を覆相する故なり、是くの如く十

神力を現じて地涌の菩薩に妙法の五字を囑累して云く、經に

曰く「爾の時に仏・上行等の菩薩大衆に告げ給わく諸仏の

神力は是くの如く無量無辺不可思議なり若し我れ是の神力を以て

無量無辺百千万億阿僧祇劫に於て囑累の爲の故に此の經の功德を

説くとも猶尽すこと能わじ要を以て之を言わば如来の一切の所有

の法・如来の一切の自在の神力・如来の一切の秘要の蔵・如来の

いっさい 一切の甚深の事・皆此の經に於て宣示顯説す」等云云、天台云く

にじぶつこうじようぎよう

「爾時・仏告上行より下は第三結要付属なり」云云、伝教云く

じんりきほん いわ

「又神力品に云く以要言之・如来・一切所有之法・乃至宣示顯説

己上 あきら

經文明かに知んぬ果分の一切の所有の法・果分の一切の自在の

じんりき

神力・果分の一切の秘要の蔵・果分の一切の甚深の事・皆法華に

おい せんじけんせつ

於て宣示顯説するなり」等云云、此の十神力は妙法蓮華經の五字

も っ じようぎよう

を以て上行・安立行・浄行・無辺行等の四大菩薩に授与し

たま

給うなり前の五神力は在世の為後の五神力は滅後の為なり、爾り

いえど さいおうこれ

と雖も再往之を論ずれば一向に滅後の為なり、故に次下の文に

いわ ほとけめつと

云く「仏滅度の後に能く此の經を持たんを以ての故に諸仏皆歡喜

むりよう じんりき

して無量の神力を現じ給う」等云云。

次下の囑累品に云く「爾の時に釈迦牟尼仏・法座より起つて大

神力を現じ給う右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩で乃至
今以て汝等に付属す」等云云、地涌の菩薩を以て頭と為して
迹化他力乃至・梵釈・四天等に此の経を嘱累し給う・十方より
来る諸の分身の仏各本土に還り給う乃至多宝仏の塔還つて故の
如くし給う可し等云云、藥王品已下乃至涅槃經等は地涌の菩薩去
り了つて迹化の衆他方の菩薩等の為に重ねて之を付属し給う
☆拾遺囑是なり。

疑つて云く正像二千年の間に地涌千界閻浮提に出現して此
の経を流通するや、答えて曰く爾らず、驚いて云く法華經並び
に本門は仏の滅後を以て本と為して先ず地涌に之を授与す何ぞ
正像に出現して此の経を弘通せざるや、答えて云く宜べず、
重ねて問うて云く如何、答う之を宣べず、又重ねて問う如何、答

えていわ曰く之を宣のぶれば一切世間の諸人・威音王仏の末法の如く又
我が弟子の中にも粗之を説かば皆誹謗を為す可し黙止せんのみ、
求めて云く説かずんば汝慳貪に墮せん、答えて曰く進退惟れ
谷きわまれり試みに粗之を説かん、法師品に云く「況んや滅度の後をや」
じゅりようぼん 今留めて此に在く」分別功德品に云く「惡世末法
の時」藥王品に云く「後の五百歲閻浮提に於て広宣流布せん」
ねはんぎよう 涅槃經に云く「譬えば七子あり父母平等ならざるに非ざれども
然れども病者に於て心則ち偏に重きが如し」等云云、已前の明鏡
もつ ぶつ 以て仏意を推知するに仏の出世は靈山八年の諸人の為に非ず
しょうぞうまつ 正像末の人の為なり、又正像二千年の人の為に非ず末法の始め
予が如き者の為なり、然れども病者に於いてと云うは滅後・
ほけきよう ひほう 法華經誹謗の者を指すなり、「今留在此」とは「於此好色香藥

而謂不美」の者を指すなり。

地涌千界正像に出でざることは正法一千年の間は小乗・

こんだいじよう

権大乘なり機時共に之れ無く四依の大士小権を以て縁と為して

きざいせ

在世の下種之を脱せしむ謗多くして熟益を破る可き故に之を説

ざいせ

かず例せば在世の前四味の機根の如し、像法の中末に観音・藥王

なんがく

・南岳・天台等と示現し出現して迹門を以て面と為し本門を

もつ

以て裏と為して百界千如・一念三千其の義を尽せり、但理具を

な

論じて事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊未だ広く

これ

之を行ぜず所詮円機有つて円時無き故なり。

これ

今末法の初小を以て大を打ち権を以て実を破し東西共に之を

まっぼうのはじめ

失し天地顛倒せり迹化の四依は乱れて現前せず諸天其の国を棄て

うしないてんちてんどう

之を守護せず、此の時地湧の菩薩始めて世に出現し但

妙法蓮華經の五字を以て幼稚に服せしむ「因謗墮惡必因得益」

とは是なり、我が弟子之を推え地涌千界は教主釈尊の初発心の

弟子なり寂滅道場に來らず☆林・最後にも訪わず不孝の失之れ

有り迹門の十四品にも來らず本門の六品には座を立つ但人品の

間に來還せり、是くの如き高貴の大菩薩・三仏に約束して之を

受持す末法の初に出で給わざる可きか、當に知るべし此の四菩薩

折伏を現する時は賢王と成つて愚王を誡責し摂受を行ずる時

は僧と成つて正法を弘持す。

問うて曰く仏の記文は云何答えて曰く「後の五百歳閻浮提に

於て広宣流布せん」と、天台大師記して云く「後の五百歳遠く

妙道に沾おわん」妙薬記して云く「末法の初冥利無きにあらず」

伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」等云云、

末法まつぼう太有近の釈は我が時は正時に非ずと云う意なり、伝でんぎようだいし教大師

・日本にほんにして末法まつぼうの始を記して云く「代を語れば像の終り末の初

・地を尋たずぬれば唐とうの東・羯かつの西・人を原たずぬれば則ち五濁ごじよくの生・鬪諍とうじよう

の時なり経に云く猶多怨嫉・況滅度後きやうめつとごと此の言良まことに以有ゆえあるな

り

此の釈に鬪諍とうじようの時と云云、今の自界叛逆じかいほんぎやく・西海侵逼しんびつの二難なんを

指すなり、此の時地涌千界出現じゆせんがいしゆつげんして本門ほんもんの釈尊しゃくそんを脇士きやうじと為す一

閻浮提第一えんぶだいだいいちの本尊ほんそん此の国に立つ可べし月支震旦がっししんたんに未だ此の本尊ほんそん有ましま

ず、日本にほん国こくの上宮じやうぐう・四天王寺してんのうを建立こんりゆうして未だ時来いまらざれば

阿弥陀あみだ・他方たほうを以て本尊ほんそんと為す、聖武天皇しやうむてんのう・東大寺とうだいじを建立こんりゆうす、

華嚴經けこんきやうの教主きやうしゆなり、未だ法華經いまほけきやうの実義じつぎを顕あらわさず、伝でんぎようだいし教大師粗

法華經ほけきやうの実義じつぎを顕示しす然しかりと雖いえども時未いまだ来ゆえらざるの故こうに東方とうほうの

鵝王を建立して本門の四菩薩を顕わさず、所詮地涌千界の為に
此れを譲り与え給う故なり、此の菩薩・仏勅を蒙りて近く大地
の下に在り正像に未だ出現せず末法にも又出で来り給わずば大
妄語の大士なり、三仏の未来記も亦泡沫に同じ。

此れを以て之を惟うに正像に無き大地震・大彗星等出来ず、
此等は金翅鳥・修羅・竜神等の動変に非ず偏に四大菩薩を出現
せしむ可き先兆なるか、天台云く「雨の猛きを見て竜の大なるを
知り花の盛なるを見て池の深きことを知る」等云云、妙楽云く
「智人は起を知り蛇は自ら蛇を識る」等云云、天晴れぬれば地明か
なり法華を識る者は世法を得可きか。

一念三千を識らざる者には仏・大慈悲を起し五字の内に此の珠
を裏み末代幼稚の首に懸けさしめ給う、四大菩薩の此の人を守護

し給^{たま}わんこと大公^{たいこう}・周公^{しゅうこう}の文王^{ぶんおう}を撰^{しゅう}扶^ふし四^し皓^{こう}が恵^{けい}帝^{てい}に侍^じ奉^ぶせしに異^いならざる者^{もの}なり。

文永十年卯月二十五日

日蓮^{にちれん}之^{これ}を註^{しる}す

◆四三 観心本尊抄 送状

かたびら

帷^{かた}一つ・墨^{すみ}三長^{さんちやう}・筆^{ひつ}五官^{ごくわん}給^{たま}び候^{こう}い^い了^{りやう}んぬ、観心^{かんじん}の法門^{ほうもん}少^{せう}

之^{これ}を注^{しる}して大田^{おほの}殿^{どの}・教信^{きやうしん}御房^{ごぼう}等^らに奉^{たてまつ}る、此^この事^{こと}日蓮^{にちれん}身^みに当^{あた}る

大^{だい}事^じなり之^{これ}を秘^ひす、無^む二^にの志^しを見^みば之^{これ}を開^{ひらく}☆せらる可^べきか、

此^この書^{しよ}は難^{なん}多^たく答^{こた}少^{せう}なし未^み聞^{もん}の事^{こと}なれば人^{ひと}耳^{みみ}目^めを驚^{きやうどう}動^{どう}す可^べきか、

設^{たとい}い他^た見^みに及^{およ}ぶとも三^{さん}人^{にん}四^し人^{にん}座^ざを並^{なら}べて之^{これ}を読^よむこと勿^{なか}れ、仏^{ぶつ}滅^{めつ}

後^ご・二^に千^{せん}二^に百^{ひやく}二^に十^{じゅう}余^ご年^{ねん}未^みだ此^この書^{しよ}の心^{こころ}有^あらず、国^{くに}難^{なん}を顧^{かえり}みず五^ご五^ご

百^{ひやく}歳^{さい}を期^きして之^{これ}を演^{えん}説^{ぜつ}す乞^こい願^{がん}くば一^{いっ}見^{けん}を歴^へ来^{らい}の輩^{やから}は師^し弟^{てい}共^{ども}に

りようぜんじようど

靈^{りやう}山^{ざん}淨^{じやう}土^どに詣^{もつ}でて三^{さん}仏^{ぶつ}の顔^{がん}貌^{みやう}を拝^{はい}見^{けん}したてまつらん、恐^{きやう}恐^{きやう}

きんげん
謹言。

ぶんえい
文永十年太齋卯月二十六日

日蓮
花押

ときのごへんじ
富木殿御返事

◆ 四四 撰時抄 建治元年

五十四歳御作 256p

釈子 日蓮述ぶ

そ 夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし、過去の大通

ちしようぶつ しゅつせ たまい 智勝仏は出世し給いて十小劫が間・一経も説き給はず経に云く

い わ 一坐十小劫又云く「仏・時の未だ至らざるを知り請を受けて

もくねん 黙然として坐す」等云云、今の教主釈尊は四十余年の程法華経

と たま を説き給はず経に云く「説く時未だ至らざるが故」と云云、老子

しよ は母の胎に処して八十年、弥勒菩薩は兜率の内院に籠らせ給いて

せんまん 五十六億七千万歳をまち給うべし、彼の時鳥は春を・をくり

けいちょう 鶏 鳥は暁をまつ 畜生すらなをかくのごとし何に況や仏法を
しゅぎよう 修 行せん に時を糾ざるべしや、寂滅道場の砌には十方の

しゅぎよう

たださ

じやくめつどうじよう

みぎり

じゅっぽう

しよぶつじげん 諸仏示現し一切の大菩薩集会し給い梵帝・四天は衣を・ひるがへ

りゅうじん

はちぶ

たなごころ

ほんぶ

こんじよう

し竜神・八部は掌を合せ凡夫大根性の者は耳をそばだて

しようにんとくにん

しよぼさつ

げだつがつ

しよう

たまい

にじよう

生身得忍の諸菩薩・解脱月等請をなし給いしかども世尊は二乗

さぶつ

くおんじつじよう

みようじ

そくしんじようぶつ

いちねんさんぜん

かんじん

作仏・久遠実成をば名字をかくし即身成仏・一念三千の肝心、

さぶつ

くおんじつじよう

みようじ

そくしんじようぶつ

いちねんさんぜん

かんじん

其義を宣べ給はず、此等は偏にこれ機は有りしかども時の来らざ

のべ

たま

これら

ひとえ

き

きた

ればのべさせ給はず経に云く「説く時未だ至らざる故」等云云、

りようぜん

みぎり

えんぶだいいち

ふこう

いまい

いた

えんぶだいいち

靈山会上の砌には閻浮第一の不孝の人たりし阿闍世大王座につ

いちだいほうぼう

だいはだつた

てんのうによらい

あじやせだいう

ごしよう

らなり、一代謗法の提婆達多には天王如来と名をさづけ五障の

りゅうにょ

じやしん

だいはだつた

てんのうによらい

あじやせだいう

ごしよう

いれるたね

竜女は蛇身をあらためずして仏になる、決定性の成仏は焦種

じやしん

だいはだつた

てんのうによらい

あじやせだいう

ごしよう

いれるたね

の花さき果なり久遠実成は百歳の叟・二十五の子となれるかと

くおんじつじよう

おきな

けつじよう

じようぶつ

いれるたね

・うたがふ、一念三千は九界即仏界・仏界即九界と談ず、されば

此の経の一字は如意宝珠なり一句は諸仏の種子となる此等は機の

熟不熟はさてをきぬ時の至れるゆへなり、経に云く「今

正しく是れ其の時なり決定して大乘を説かん」等云云。

問うて云く機にあらざるに大法を授けられば愚人は定めて誹謗

をなして惡道に墮るならば豈説く者の罪にあらずや、答えて云く

人路をつくる路に迷う者あり作る者の罪となるべしや良医・藥

を病人にあたう病人嫌いて服せずして死せば良医の失となるか、

尋ねて云く法華經の第二に云く「無智の人の中に此の経を説くこ

と莫れ」同第四に云く「分布して妄りに人に授与すべからず」同

第五に云く「此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵なり、諸經の中

に於て最も其の上に在り長夜に守護して妄りに宣説せざれ」等云

云、此等の経文は機にあらざば説かざれというか、今反詰して
云く不輕品に云く「而も是の言を作さく我深く汝等を敬う等云
云四衆の中に瞋恚を生じ心不淨なる者有り、惡口罵詈して言く
是の無智の比丘○又云く衆人・或は杖木瓦石を以て之を打擲
す」等云云、勸持品に云く「諸の無智の人の惡口罵詈等し及び
刀杖を加うる者有らん」等云云、此等の経文は惡口罵詈乃至
打擲すれどもとかれて候は説く人の失となりけるか、求めて
云く此の兩説は水火なり・いかに心うべき答えて云く天台
云く「時に適うのみ」章安云く「取捨宜きを得て一向にすべか
らず」等云云、釈の心は・或る時は謗じぬべきにはしばらくとか
ず・或る時は謗ずとも強て説くべし・或る時は一機は信ずべくと
も万機謗べくばとくべからず・或る時は万機一同に謗ずとも強て

説くべし、初成道の時は法慧・功德林・金剛幢・金剛藏・文殊

・普賢・弥勒・解脱月等の大菩薩、梵帝・四天等の凡夫・大

根性の者かずをしらず、鹿野苑の苑には俱鄰等の五人・迦葉等

の二百五十人・舍利弗等の二百五十人・八万の諸天、方等大会の

儀式には世尊の慈父の浄飯大王ねんごろに恋せさせ給いしかば

仏・宮に入らせ給いて觀仏三昧經をとかせ給い、悲母の御ために

☆利天に九十日が間籠らせ給いしには摩耶經をとかせ給う、慈父

悲母などにはいかなる秘法か惜ませ給うべきなれども法華經を

ば説かせ給はずせんずるところ機にはよらず時いたらざれば・い

かにもとかせ給はぬにや。

問うて云くいかなる時にか小乗・權經をときいかなる時に

か法華經を説くべきや、答えて云く十信の菩薩より等覺の大士

にいたるまで時と機とをば相知りがたき事なり何に況や我等は
凡夫なり・いかでか時機をしるべき、求めて云くすこしも知る事
あるべからざるか、答えて云く仏眼をかつて時機をかんがへよ仏
・日を用て国土をてらせ、問うて云く其の心如何、答えて云く
大集經に大覺世尊・月藏菩薩に對して未來の時を定め給えり
所謂我が滅度の後の五百歳の中には解脱堅固・次の五百年には
禪定堅固一千年・次の五百年には読誦多聞堅固・次の五百年には
多造塔寺堅固二千年・次の五百年には我法の中に於て鬪諍言訟し
て白法隱沒せん等云云、此の五の五百歳・二千五百余年に人人
の料簡さまざまなり、漢土の道綽禪師が云く正像二千・四箇
の五百歳には小乗と大乘との白法盛なるべし末法に入つては
彼等の白法皆消滅して浄土の法門・念仏の白法を修行せん人

計り生死をはなるべし、日本国の法然が料簡して云く今・
日本国に流布する法華經・華嚴經並びに大日經諸の小乗經・
天台・真言・律等の諸宗は大集經の記文の正像二千年の白法
なり末法に入つては彼等の白法は皆滅尽すべし設い行ずる人あ
りとも一人も生死をはなるべからず、十住毘婆沙論と曇鸞法師
の難行道道綽の未有一人得者・善導の千中無一これなり、彼等
の白法隱没の次には浄土三部經・弥陀・称名の一行ばかり大
白法として出現すべし、此を行ぜん人人はいかなる惡人・愚人
なりとも十即十生・百即百生唯浄土の一門のみ有つて路に
通入すべしとはこれなり、されば後世を願はん人人は叡山・東寺
・園城・七大寺等の日本一州の諸寺・諸山の御歸依をとどめて
彼の寺山によせをける田畠郡郷をうばいとつて念仏堂につけば

けつじょうおうじょうなむあみだぶつ
決定往生南無阿弥陀仏とすすめければ我が朝一同に其の義に
なりて今に五十余年なり、日蓮此等の悪義を難じやぶる事はこと
ふり候いぬ、彼の大集經の白法隱没の時は第五の五百歳当世な
る事は疑ひなし、但し彼の白法隱没の次には法華經の肝心た
る南無妙法蓮華經の大白法の一閻浮提の内八万の国あり其の国
に八万の王あり王王ごとに臣下並びに万民までも今・日本国に
弥陀称名を四衆の口口に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべ
きなり。

問うて云く其の証文如何、答えて云く法華經の第七に云く「我
が滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て断絶せ
しむること無けん」等云云、經文は大集經の白法隱没の次の
時をとかせ給うに広宣流布と云云、同第六の卷に云く「惡世末法

の時よこ能く是の経を持つ者」等云云又第五の巻に云く「後の末世の

ほうめつ

法滅せんとする時」等又第四の巻に云く「而も此経は如来現在に

なのおんしつ

すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや」又第五の巻に云く「一切世間

あだおお

怨多くして信じ難し」又第七の巻に第五の五百歳・鬬諍堅固の

がた

時を説いて云く「惡魔・魔民諸の天竜・夜叉・鳩槃荼等其の便

だいしつきよう

を得ん」大集経に云く「我が法の中に於て鬬諍言訟せん」等

ほけきよう

云云、法華経の第五に云く「惡世の中の比丘」又云く「・或は

あれんにや

阿蘭若に有り」等云云又云く「惡鬼其身に入る」等云云、文の心

あつき

は第五の五百歳の時惡鬼の身に入る大僧等・国中に充滿せん

そのとき

其時に智人・一人出現せん彼の惡鬼の入る大僧等時の王臣万民

ちじん

等を語て惡口罵詈・杖木瓦礫・流罪・死罪に行はん時釈迦・

かたらい あつく めり

多宝・十方の諸仏・地涌の大菩薩らに仰せつけ大菩薩は梵帝・

たほう

じゅうぽう

しよぶつ

じゆ

ぼさつ

おお

ぼさつ

ぼんたい

にちがつ 日月・四天等に申しくだされ其の時・天変地天盛なるべし、国主

等其のいさめを用いずば鄰国にをほせつけて彼彼の国国の悪王・

悪比丘等をせめらるるならば前代未聞の大闘諍一閻浮提に起る

べし其の時・日月所照の四天下の一切衆生、或は国を・をし

み・或は身を・をしむゆへに一切の仏・菩薩にいのりをかくとも

しるしなくば彼のにくみつる一の小僧を信じて無量の大僧等八万

の大王等、一切の万民皆頭を地につけ掌を合せて一同に南無

妙法蓮華經となうべし、例せば神力品の十神力の時・十方

世界の一切衆生一人もなく娑婆世界に向つて大音声をはなちて

南無釈迦牟尼仏・南無釈迦牟尼仏・南無妙法蓮華經・南無

妙法蓮華經と一同にさけびしがごとし。

問うて曰く經文は分明に候・天台・妙楽・伝教等の未来記

の言はありや、答えて曰く汝が不審逆なり釈を引かん時こそ

きようろん

経論はいかにとは不審せられたれ経文に分明ならば釈を尋ぬ

きようもん ふんみよう

たず

べからず、さて釈の文が経に相違せば経をすてて釈につくべきか

しやく

そうい

如何、彼云く道理至極せり、しかれども凡夫の習・経は遠し釈

いかに いわ どうりしやく

ほんぶ ならい

は近し近き釈・分明ならばいますこし信心をますべし、今云く

ふんみよう

しんじん

いわ

汝が不審ねんごろなれば少少釈をいだすべし天台大師云く

なんじ ふしん

てんだいだいし いわ

「後の五百歳遠く妙道に沾わん」妙楽大師云く「末法の初め冥利

このこひやくさい

みようどう

うるお

みようらくだいし いわ

まつぼうのはじめ

みようり

無きにあらず」伝教大師云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近き

でんぎようだいし いわ

しょうそうややす

おわ

まつぼうはなは

に有り法華一乗の機今正しく是れ其の時なり、何を以て知るこ

ほっけいちじよう

き まさ

このとき

もつ

とを得る、安樂行品に云く末世法滅の時なり」又云く「代を語

あんらくぎようほん

いわ

まつせほうめつ

いわ

ことば

れば則ち像の終り末の初め地を尋ぬれば唐の東・羯の西・人を

すなわ

たず

とう

かつ

原めれば五濁の生・鬭諍の時なり、経に云く猶多怨嫉・

たず

ごじよく

とうじよう

いわ

ゆた おんしつ

きょうめつどじ 況滅度後と此の言良に以有るなり」云云、夫れ釈尊しやくそんの出世しゅつせは住

にんじゅう

劫第九の滅・人壽百歳の時なり百歳と十歳との中間ちゅうげんざいせ在世五十年

めつご

まんねん

そ ちゅうげん

ほけきよう

るふ

滅後二千年と一万年となり、其の中間ちゅうげんに法華經の流布の時・二

度あるべし所謂在世の八年・滅後めつごには末法の始の五百年なり、

而に天台・妙樂・伝教等は進んでは在世法華經の時にも・もれ

しかるにてんだい

みょうらく

でんぎよう

ざいせ ほけきよう

させ給たまいぬ、退しりぞいては滅後末法の時にも生れさせ給たまはず中間ちゅうげんな

たまい

しりぞ

めつご まつぽう

たま

ちゅうげん

る事をなげかせ給たまいて末法の始をこひさせ給たまう御筆なり、例せば

あしだ せんじん

まつぽう

たま

げんせい

阿私陀仙人が悉達太子の生れさせ給たまいしを見て悲んで云く現生げんせいに

は九十にあまれり・太子たいしの成道じょうどうを見るべからず後生ごしやうには無色界むしっかい

に生れて五十年の説法せつぽうの坐にもつらなるべからず正像末しょうぞうまつにも生

るべからずとなげきしがごとし、道心どうしんあらん人人ひとびとは此を見ききて

悦よろこばせ給たまえ正像しょうぞう二千年の大王だいおうよりも後世ごしやうを・をもはん人人ひとびとは

よろこ

たま

しょうぞう

だいおう

ごしやう

ひとびと

は悦よろこばせ給たまえ正像しょうぞう二千年の大王だいおうよりも後世ごしやうを・をもはん人人ひとびとは

悦よろこばせ給たまえ正像しょうぞう二千年の大王だいおうよりも後世ごしやうを・をもはん人人ひとびとは

悦よろこばせ給たまえ正像しょうぞう二千年の大王だいおうよりも後世ごしやうを・をもはん人人ひとびとは

悦よろこばせ給たまえ正像しょうぞう二千年の大王だいおうよりも後世ごしやうを・をもはん人人ひとびとは

悦よろこばせ給たまえ正像しょうぞう二千年の大王だいおうよりも後世ごしやうを・をもはん人人ひとびとは

悦よろこばせ給たまえ正像しょうぞう二千年の大王だいおうよりも後世ごしやうを・をもはん人人ひとびとは

まっぽう 末法の今の民にてこそあるべけれ此を信ぜざらんや、彼の天台の
ざす 座主よりも南無妙法蓮華經と唱うる癩人とはなるべし、梁の
ぶてい 武帝の願に云く「寧ろ提婆達多となて無間地獄には沈むとも
うずらんほつ 鬱頭羅弗とはならじ」と云云。

問うて云く竜樹・天親等の論師の中に此の義ありや、答えて

云く竜樹・天親等は内心には存ぜさせ給うといえども言には此

の義を宣べ給はず、求めて云くいかなる故にか宣給ざるや、答え

て云く多くの故あり一には彼の時にも機なし二には時なし三には

迹化なれば付嘱せられ給はず、求めて云く願くは此の事よくよく

きかんとをもう、答えて云く夫仏の滅後二月十六日よりは正法

の始なり迦葉尊者・仏の付嘱をうけて二十年、次に阿難尊者二十

年・次に商那和修二十年・次に優婆崛多二十年・次に提多迦二十

年、已上一百年が間は但 小乗經の法門をのみ弘通して諸

大乘經は名字もなし何に況や法華經をひろむべしや、次には

彌遮迦・仏陀難提・仏駄密多・脇比丘・富那奢等の四五人、前の

五百余年が間は大乘經の法門少少出来せしかどもとりたてて

弘通し給はず、但 小乗經を面としてやみぬ、已上大集經の先

五百年解脱堅固の時なり、正法の後六百年已後一千年が前其の

中間に馬鳴菩薩・毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・羅・尊者・

僧・難提・僧伽耶奢・鳩摩駄・闍夜那・盤陀・摩奴羅・鶴勒

夜那・師子等の十余人の人人始には外道の家に入り次には

小乗經をきわめ後には諸大乘經をもて諸 小乗經をさんざ

んに破し失ひ給いき此等の大士等は諸大乘經をもつて諸

小乗經をば破せさせ給いしかども諸大乘經と法華經の勝劣

をば分ふん明みょうにかかせ給たまはず、設たい勝しやう劣れつをすこしかかせ給たまいたるや
うなれども本・迹の十妙・二乗作仏・久遠実成・已今当の妙・
ひやつかいせんによ
百界千如

・一念三千の肝要かんようの法門ほうもんは分ふん明みょうならず、但・或あるは指をもつて月
をさすがごとくし・或あるは文にあたりてひとはし計ばかりかかせ給たまいて
化導けどうの始終しじゆう・師弟していの遠近おんこん・得道とくどうの有無うむはすべて一分いちぶんもみへず、
此等これらは正法しょうほうの後の五百年・大集經だいしつきやうの禪定堅固ぜんじやうけんこの時にあたれり、
正法しょうほう一千年の後は月氏がつしに仏法ぶつぽう充滿じゅうまんせしかども・或あるは小をもて大
を破はし・或あるは權經ごんきやうをもつて実經じつきやうを隱没おんもつし仏法ぶつぽうさまざまに乱れし
かば得道とくどうの人やふやくすくなく仏法ぶつぽうにつけて惡道あくどうに墮おちる者かずを
しらず、正法しょうほう一千年の後・像法そうほうに入つて一十五年と申せしに
仏法ぶつぽう東に流れて漢土かんとに入りనికి、像法そうほうの前五百年の内・始の一百

余年が間は漢土の道士と月氏の仏法と諍論していまだ事さだま
らずたとい設しかい定まりたりしかどもぶつぼう仏法を信ずる人の心いまだふかから
ず、しか而るにぶつぼう仏法の中にだいしょう大小・ごんじつ権実・けんみつ顕密をわかつならばしょうきよう聖教
一同ならざる故・うたがい疑をこりてかへりて外典とともなう者もあり
ぬべし、これらのをそれあるかのゆへにまとう摩騰・じくらん竺蘭は自は知つて
而もしか大小を分けずごんじつ権実をいはずしてやみぬ、其その後・魏・晉・
齊・宋・梁の五代が間・ぶつぼう仏法の内にだいしょう大小・ごんじつ権実・けんみつ顕密をあらそ
ひし程にいづれこそ道理ともきこえずして上み一人より下も万民
にいたるまでふしん不審すくなからずなんざん南三・ほくひち北七と申してぶつぼう仏法十流にわ
かれぬいわゆる所謂南には三時・四時・五時・北には五時・半満・四宗・
五宗・六宗、二宗のだいじよう大乘一音等・各各義を立てへんしゅうすいか辺執水火なり、
しかれどもたいこう大綱は一同なりいわゆるいちだいしきようきよう所謂一代聖教の中にはけこんきようだいいち華嚴經第一・

ねはんぎよう

ほけきよう

ほけきよう

あこん

はんにやじようみよう

しやく

涅槃經第二・法華經第三なり法華經は阿含・般若・淨名・思益等

きようぎよう

の經經に對すれば眞実なり了義經・正見なりしかりといへど

ねはんぎよう

も涅槃經に對すれば無常教・不了義經・邪見の經等云云、漢より

ちんずい

もう

こそう

四百余年の末へ五百年に入つて陳隋二代に智☆と申す小僧一人あ

てんだいちしやだいし

じゃぎ

り後には天台智者大師と号したてまつる、南北の邪義をやぶりて

いちだいしきよう

ほけきようだい

ねはんぎよう

けこんきよう

一代聖教の中には法華經第一・涅槃經第二・華嚴經第三なり等

こそうほう

だいしききよう

どくじゆたぶんけんこ

云云、此れ像法の前・五百歳・大集經の読誦多聞堅固の時にあ

そうほう

とう

たいそう

ぎよう

ひあたれり、像法の後・五百歳は唐の始・太宗皇帝の御宇に

げんじようさんそう

がっし

はちまんしきよう

じとう

けんもん

玄奘三蔵・月支に入つて十九年が間、百三十箇国の寺塔を見聞

ろんし

はちまんしきよう

えんでい

して多くの論師に値いたてまつりて八万聖教・十二部經の淵底

なら

そ

いわゆるほうそうしゆう

さんろんしゆう

を習いきわめしに其の中に二宗あり所謂法相宗・三論宗なり、

ほっそう

だいじよう

みろく

むちやく

かいけんろんし

此の二宗の中に法相・大乘は遠くは弥勒・無著近くは戒賢論師

に伝えて漢土にかへりて太宗皇帝にさづけさせ給う、此の宗の心

は仏教は機に随うべし一乗の機のためには三乗方便・一乗

眞実なり所謂法華経等なり、三乗の機のためには三乗眞実・

一乗方便所謂深密経・勝鬘経等此れなり、天台智者等は此の旨

を弁えず等云云、而も太宗は賢王なり当時名を一天にひびかすの

みならず三皇にもこえ五帝にも勝れたるよし四海にひびき漢土を

手ににぎるのみならず高昌・高麗等の一千八百余国をなびかし

内外を極めたる王ときこへし賢王の第一の御帰依の僧なり、

天台宗の学者の中にも頭をさしいだす人・一人もなし、而れば

法華経の実義すでに一国に隠没しぬ、同じき太宗の太子・高宗・

高麗の継母・則天皇后の御宇に法蔵法師といふ者あり法相宗に

天台宗のをそわるところを見て前に天台の御時せめられし

けこんきよう 華嚴經を取出して一代いちだいの中には華嚴第一・法華第二・涅槃第三と

立てけり、太宗・第四代玄宗皇帝の御宇開元四年同八年に西天・

いんど 印度より善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・大日經・金剛

ちようきよう ちようきよう 蘇悉地經を持て渡り真言宗を立つ、此の宗の立義に

頂經・蘇悉地經を持て渡り真言宗を立つ、此の宗の立義に

いわ 云く教に二種あり一には釈迦の顯教所謂華嚴・法華等、二には

だいにち 大日の密教所謂大日經等なり、法華經は顯教の第一なり此の

だいにち 經は大日の密教に対すれば極理は少し同じけれども事相の印契

しんこん と真言とはたえてみへず三密相応せざれば不了義經等云云、已上

ほっそう 法相・華嚴・真言の三宗一同に天台法華宗をやぶれども天台大師

ちじん 程の智人・法華宗の中になかりけるかの間・内内はゆはれなき由

は存じけれども天台のごとく公場にして論ぜられざりければ

かみこくおう 上国王・大臣・下一切の人民にいたるまで皆仏法に迷いて衆生

上国王・大臣・下一切の人民にいたるまで皆仏法に迷いて衆生

の得道とくどうみなとどまりけり、此等これらは像法そうほうの後の五百年の前二百余年

が内なり、像法そうほうに入つて四百余年と申しけるに百濟国くだらより

一切経並びに教主釈尊きようしゅしやくそんの木像・僧尼等日本国にほんこくにわたる、漢土かんど

の梁の末・陳の始にあひあたる、日本にほんには神武天皇より第三十

代欽明きんめい天皇の御宇ぎようなり、欽明きんめいの御子・用明ようめいの太子たいしに上宮王子じようぐうおうじ・

仏法ぶつぽうを弘通ぐつうし給うのみならず並びに法華経ほけきよう・浄名経じようみやうきよう・勝鬘しょうまん経

を鎮護ちんご国家の法と定めさせ給いぬ、其その後・人王第三十七代に孝

徳天皇の御宇ぎように三論宗さんろんしゆう・成実宗じやうじつを觀勒僧正かんろくそうじやう・百濟国くだらよりわた

す、同御代に道昭法師どうしほし・漢土かんどより法相宗ほうそうしゆう・俱舍宗くしやしゆうをわたす、人

王第四十四代元正天皇の御宇ぎように天竺てんじくより大日経だいにちきようをわたして有り

しかども而しかも弘通ぐつうせずして漢土かんどへかへる此の僧をば善無畏三蔵ぜんむいさんそうと

いう、人王第四十五代に聖武天皇しやうむてんのうの御宇ぎように審祥大徳しんじやうだいとく・新羅国しらぎよ

りけごんしゅう華嚴宗をわたして良弁りょうべん僧正そうじょう・聖武天王しょうむにさづけたてまつりて

とどうだいじうだいじ

東大寺の大仏を立てさせ給たまえり同御代に大唐だいたうの鑒真かんじん和尚わじょう天台宗たいだいしゅう

りりっしゅうっしゅう

と律宗をわたす、其その中に律宗をば弘通くわつうし小乗しょうじょうの戒場を

ととうだいじうだいじ

東大寺に建立こんりゅうせしかども法華宗ほっけしゅうの事をば名字みょうじをも申し出いださせ

給たまは

給たまはずして入滅にゅうめつし了んぬ、其後人王第五十代そうほう像法八百年に相当あいあた

つてかんむ桓武天王かんむ

の御宇に最澄ぎようと申もうす小僧出来こそうしゅつたいせり後には伝教でんぎよう

大師だいしと号

したてまつる、始さんろんには三論ほつそう・法相けこん・華嚴くしや・俱舎じようじつ・成実じようじつ

・律ろくしゅうの六宗ろくしゅう並ならびに

・律ろくしゅうの六宗ろくしゅう並ならびにぜんしゅう禪宗等ぜんしゅうを行表ぎようひよう僧正等そうじょうにならい習学ならいせさせ給たまいし

程ちやうに我われと立たて給たまえる

国昌寺こくしょうじ・後には比叡山ひえいざんと号ここす、此ここにして

ろくしゅう

六宗ほんきようの本経ほんろん・本論ほんろんと宗宗にんしの人師にんしの釈しよえとをきようろん引き合きあせて御ごらむあり

しかば彼かの宗宗にんしの人師にんしの釈しよえ・所依きようろんの経論きようろんに

相違そういせる事多ことき上う

僻見びやくけん

多おほ多おほにして信受しんじゆせん人皆みな惡道あくどうに墮おちぬべしとかんがへさせ

給^{たま}う其^その上法華經^{ほけきょう}の実義^{じつぎ}は宗宗^{ひとびと}の人人^{ひとびと}・我^{われ}も得^えたり我^{われ}も得^えたりと
自^じ讃^{さん}ありしかども其^その義^ぎなし、此^これを申^{もう}すならば喧嘩^{しゅったい}出来^いすべ
しもだして申^{もう}さずば仏誓^{ぶつせい}にそむきなんとをもひわづらはせ給^{たま}いし
かども終^{つい}に仏^{いましめ}の誠^{まこと}ををそれて桓武皇帝^{かんむこうてい}に奏^{たま}し給^{たま}いしかば帝^{みかど}・此^この
事^{こと}を・をどろかせ給^{たま}いて六宗^{ろくしゅう}の碩学^{せきがく}に召^よし合^あさせ給^{たま}う、彼^{かれ}の
学^{がく}者^{しや}等^ら始めは慢幢山^{まんどうざん}のごとし惡心^{あくしん}・毒蛇^{どくじゃ}のやうなりしかども終^{つい}に
王^{みまえ}の前^{まえ}にしてせめをとされて六宗^{ろくしゅう}・七寺^{しちじ}一同^{いっどう}に御弟子^{おんでし}となり
ぬ、例^{れい}せば漢土^{かんと}の南北^{なんぼく}の諸師^{しよし}・陳殿^{ちんてん}にして天台大師^{てんだいだいし}にせめおとさ
れて御弟子^{おんでし}となりしがごとし、此^これはこれ円定^{えんねい}・円慧^{えんけ}計^{けい}りなり
其^その上天台大師^{てんだいだいし}のいまだせめ給^{たま}はざりし小乗^{しょうじょう}の別受戒^{べつじゆかい}をせめを
とし六宗^{ろくしゅう}の八大德^{だいたく}に梵網經^{ぼんもうきょう}の大乗^{だいじょう}・別受戒^{べつじゆかい}をさづけ給^{たま}うのみ
ならず法華經^{ほけきょう}の円頓^{えんどん}の別受戒^{べつじゆかい}を叡山^{えいざん}に建立^{こんりゅう}せしかば延暦^{えんりやく}円頓^{えんどん}の

別受戒は日本第一たるのみならず仏の滅後・一千八百余年が間
身毒尸那一閻浮提にいまだなかりし靈山の大戒・日本国に始ま
る、されば伝教大師は其の功を論ずれば竜樹・天親にもこえ
てんだいみょうらく
天台・妙楽にも勝れてをはします聖人なり、されば日本国の
とうせとうじおんじょうななだいじしよこくはつしゅうじょうどぜんしゅうりつしゅう
当世の東寺・園城・七大寺・諸国の八宗・浄土・禪宗・律宗
等の諸僧等誰人か伝教大師の円戒をそむくべき、かの漢土九国
の諸僧等は円定・円慧は天台の弟子ににたれども円頓一同の戒場
は漢土になければ戒にをいては弟子とならぬ者もありけん、この
日本国は伝教大師の御弟子にあらざる者は外道なり悪人なり、
而れども漢土・日本の天台宗と真言の勝劣は大師心中には存
知せさせ給いけれども六宗と天台宗とのごとく公場にして
勝負なかりけるゆへにや、伝教大師已後には東寺・七寺・園城

の諸寺しよ日本にほん一州一同に真言宗しんごんしゅうは天台宗てんだいしゅうに勝すぐれたりと上一人かみいちにんより

ばんにん

下万人にいたるまでをぼしめしをもらひ、しかれば天台法華宗てんだいほっけしゅうは

でんぎようだいし

伝教大師の御時計りにぞありける此の伝教の御時は像法の末・

だいしつきよう

大集経の多造塔寺堅固の時なり、いまだ於我法中・闍諍言訟

びやくほうおんもつ

・白法隠没の時にはあたらず。

まっぼう

今末法に入つて二百余歳・大集経の於我法中・闍諍言訟・

びやくほうおんもつ

白法隠没の時にあたれり仏語まことならば定んで一閻浮提に

とうじょうおこ

闍諍起るべき時節なり、伝え聞く漢土は三百六十箇国・二百六

もうこ

十余州は・すでに蒙古国に打ちやぶられぬ華洛すでにやぶられて

きそう きんそう

徽宗・欽宗の両帝・北蕃にいけどりにせられて韃靼だたんにして終にか

たまい

くれさせ給いぬ、徽宗の孫・高宗皇帝は長安をせめをとされて

いなか

田舎の臨安行在府に落ちさせ給いて今に数年が間京を見ず、高麗

たまい

こま

六百余国も新羅百濟等の諸国等も皆大蒙古国の皇帝に・せめられ

ぬ、今の日本国の壱岐対馬並びに九国のごとし闘諍堅固の仏語

地に墮ちず、あたかもこれ大海のしをの時をたがへざるがごとし、

是をもつて案ずるに大集經の白法隱没の時に次いで法華經の大

白法の日本国並びに一閻浮提に広宣流布せん事も疑うべから

ざるか、彼の大集經は仏說の中の権大乘ぞかし、生死をはなる

る道には法華經の結縁なき者のためには未顕眞実なれども六道・

四生・三世の事を記し給いけるは寸分もたがはざりけるにや、

何に況や法華經は釈尊・要當說眞実となのらせ給い多宝仏は

眞実なり

と御判をそへ十方の諸仏は広長舌を梵天につけて誠諦と指し

示し、釈尊は重ねて無虚妄の舌を色究竟に付けさせ給いて後・

いっさい

ぶつぼう

じようぎようぼざつ

みようほうれんげきよう

ごじ

五百歳に一切の仏法の滅せん時・

上行菩薩に妙法蓮華經の五字

をもたしめて

ほうぼういっせんたい

びやくらい

やから

りようやく

の良薬とせんと梵帝・

にちがつ

してん

りゆうじん

おお

に仰せつけられし

きんげんこもう

金言虚妄なるべしや、

だいぢ

はんぶく

こうぜん

たいらく

大地は反覆すとも高山は頽落すとも春の後に夏は来らずとも日は

東へかへるとも月は地に落つるとも此の事は一定なるべし、此の

事一定ならば鬭諍堅固の時・

とうじようけんこ

にほんこく

おうしん

なら

ばんみん

に万民等が仏

の御使として

おんつかい

なむみようほうれんげきよう

るふ

南無妙法蓮華經を流布せんとするを・或は罵詈し

・或は悪口し・

あるあつく

あるある

るざい

あるある

ちようちやく

でしけんぞく

弟子眷属等を種種の難

にあわする人人い

ひとびと

かでか安穩にては

あんのん

候べき、これをば愚癡の者は

咒詛す

じゆうそ

をもひぬべし、

ほけきよう

法華經をひろむる者は日本国の一切

衆生の父母なり

しゅじよう

ふぼ

しょうあんたいしいわ

章安大師云く「彼が為に

ため

悪を除くは即ち是れ彼

が親なり」等云云、

されば日蓮は

にちれん

当帝の父母・

念仏者・禅衆・

眞言師等が師範なり又主君なり、而るを上一人より下万民にいた
るまであだをなすをば日月いかでか彼等が頂を照し給うべき地
神いかでか彼等の足を戴き給うべき、提婆達多は仏を打ちたたてま
つりしかば大地揺動して火炎いでにき、檀弥羅王は師子尊者の頸
を切りしかば右の手・刀とともに落ちぬ、徽宗皇帝は法道が面に
かなやきをやきて江南にながせしかば半年が内にゑびすの手にか
かり給いき、蒙古のせめも又かくのごとくなるべし、設い五天の
つわものをあつめて鉄圀山を城とせりともかなふべからず必ず
日本国の一切衆生・兵難に値うべし、されば日蓮が法華經の
行者にてあるなきかはこれにても見るべし、教主釈尊記して
云く末代惡世に法華經を弘通するものを惡口罵詈等せん人は我を
一劫が間あだせん者の罪にも百千万億倍すぎたるべしと・とかせ

給^{たま}へり、而^{しか}るを今の日本^{にほん}の国^{こく}主^{しゅ}・万^{ばん}民^{みん}等^ら・雅^や意^いにまかせて父^ふ母^ぼ

・宿^{すく}世^せの敵^{かたき}よりもいたくにくみ謀^{まう}反^{はん}・殺^{さつ}害^{がい}の者^{もの}よりもつよくせ

めぬるは現^{げん}身^{しん}にも大^{だい}地^ちわれて入^いり天^{てん}雷^{らい}も身^みをさかざるは不^ふ審^{しん}な

り、日^に蓮^{ちれん}が法^ほ華^け經^{きよう}の行^ぎ者^{じや}にてあらざるか・もししからばを・を

きになげかし、今^{こん}生^{じよう}には万^{ばん}人^{にん}に・せめられて片^か時^{とき}もやすからず

後^ご生^{じよう}には惡^{あく}道^{どう}に墮^だん事^じあさましも申^{もう}すばかりなし、又^{また}日^に蓮^{ちれん}・

法^ほ華^け經^{きよう}の行^ぎ者^{じや}ならずばいか

なる者^{もの}の一^{いち}乗^{じよう}の持^じ者^{しや}にてはあるべきぞ、法^ほ然^{うねん}が法^ほ華^け經^{きよう}をなげす

てよ善^{ぜん}導^{どう}が千^{せん}中^{ちゆう}無^む一^{いつ}・道^{どう}綽^{しゆく}が未^み有^{いう}一^{いち}人^{にん}得^{とく}者^{しや}と申^{もう}すが法^ほ華^け經^{きよう}の

行^ぎ者^{じや}にて候^{こう}か、又^{また}弘^{こう}法^{ぼう}大^{だい}師^しの云^いく法^ほ華^け經^{きよう}を行^けずるは戲^け論^{ろん}なりと

かかれたるが法^ほ華^け經^{きよう}の行^ぎ者^{じや}なるべきか、經^き文^{ぶん}には能^{のう}持^ぢ是^し經^き・能

説^せ此^こ經^きなんどこそとかれて候^{こう}へよくとくと申^{もう}すはいかなるぞと

もう

しよきよう

もつともそのかみにあり

もう

だいにちきよう

けこんきよう

ねはんぎよう

申すに於諸經中最在其上と申して大日經・華嚴經・涅槃經

はんにやきよう

ほけきよう

もう

きようもん

・般若經等に法華經はすぐれて候なりと申す者をこそ經文には

ほけきよう

ぎようじや

きようもん

法華經の行者とはとかれて候へ、もし經文のごとくならば

にほんこく

ぶつぼう

でんぎようだいし

にちれん

日本国に仏法わたて七百余年、伝教大師と日蓮とが外は一人も

ほけきよう

ぎようじや

法華經の行者はなきぞかし、いかにいかにとをもうところに頭

破作七分口則閉塞のなかりけるは道理にて候いけるなり、此等は

どうり

これら

浅き罰なり但一人・二人等のことなり、日蓮は閻浮第一の法華經

こうそくへいそく

にちれん

えんぶだいichi

ほけきよう

の行者なり此れをそしり此れをあだむ人を結構せん人は閻浮

ぎようじや

こ

こ

けっこう

えんぶ

第一の大難にあうべし、これは日本国をふりゆるがす正嘉の

だいいち

だいいち

にほんこく

しょうか

大地震一天を罰する文永の大彗星等なり、此等をみよ仏滅後の後

だいいち

いってん

ぶんえい

すいせい

これら

ぶつめつ

だいなん

・仏法を行ずる者にあだをなすといへども今のごとくの大難は

ぶつぼう

だいなん

一度もなきなり、南無妙法蓮華經と一切衆生にすすめたる人・

ひとたび

なむみょうほうれんげきよう

いっさいしゆじよう

だいなん

ひとたび

なむみょうほうれんげきよう

いっさいしゆじよう

だいなん

一人もなし、此の徳はたれか一天に眼を合せ四海に肩をならぶべきや。

疑うたがいつて云いわく設たといい正しょう法ほうの時ときは仏ざいの在ざい世せに對たいすれば根こん機き劣れつなり

とも像末に對すれば最上の上機なり、いかでか正しょう法ほうの始しに

法華經ほけきょうをば用もちいざるべき・随したがつて馬鳴めみょう・竜樹りゅうじゅ・提婆だいば・無著むぢやく等も

正しょう法ほう一千年の内にこそ出しゅつ現げんせさせ給へ、天親菩薩てんじんぼさつは千部の論師ろんし

・法華論ほつけれんを造りて諸經しよきやうの中第一だいいちの義ぎを存そんす真諦しんたい三蔵さんそうの相傳そうでんに

云いわく月支がっしに法華經ほけきやうを弘通くつうせる家・五十余家・天親てんじんは其その一也ひとと已

上しょう・正しょう法ほうなり、像法そうほうに入いつては天台大師てんだいだいし・像法そうほうの半なかばに漢土かんとに

出しゅつ現げんして玄げんと文ぶんと止やめんとの三十卷そくを造りて法華經ほけきやうの淵底えんていを極きくめた

り、像法そうほうの末すえに伝でん教大師ぎやうだいし・日本にほんに出しゅつ現げんして天台大師てんだいだいしの円慧えんね・円

定の二法を我が朝あしたに弘通くつうせしむるのみならず円頓えんどんの大戒場だいかいを

叡山に建立して日本一州皆同じく円戒の地になして上一人より

下万民まで延暦寺を師範と仰がせ給う豈に像法の時・法華經の

広宣流布にあらずや、答えて云く如来の教法は必ず機に随うと

いう事は世間の学者の存知なり、しかれども仏教はしからず・

上根・上智の人のために必ず大法を説くならば初成道の時なん

ぞ法華經をとき給はざる正法の先五百年に大乘經を弘通すべ

し、有縁の人に大法を説かせ給うならば浄飯大王・摩耶夫人に

觀仏三昧經・摩耶經をとくべからず、無縁の惡人謗法の者に秘法

をあたえずば覺徳比丘は無量の破戒の者に涅槃經をさづくべから

ず、不輕菩薩は誹謗の四衆に向つていかに法華經をば弘通せさせ

給いしぞ、されば機に随つて法を説くと申すは大なる僻見なり。

問うて云く竜樹・世親等は法華經の実義をば宣べ給わずや、

答えて云く宣べ給はず、問うて云く何なる教をか宣べ給いし、答えて云く華嚴・方等・般若・大日經等の權大乘・顯密の諸經をのべさせ給いて法華經の法門をば宣べさせ給はず、問うて云く何をもつてこれをしるや答えて云く竜樹菩薩の所造の論・三十万偈而れども尽して漢土日本にわたらざれば其の心しりがたしといえども漢土にわたれる十住毘婆娑論・中論・大論等をもつて天竺の論をも比知して此れを知るなり。

疑つて云く天竺に残る論の中にわたれる論よりも勝れたる論やあるらん、答えて云く竜樹菩薩の事は私に申すべからず仏・記し給う我が滅後に竜樹菩薩と申す人・南天竺に出ずべし彼の人の所詮は中論という論に有るべしと仏記し給う、随つて竜樹菩薩の流天竺に七十家あり七十人ともに大論師なり、彼の七十家

ひとびとみな
の人人は皆中論を本とす中論四卷・二十七品の肝心は因縁所生
法の四句の偈なり、此の四句の偈は華嚴・般若等の四教三諦の
法門なりいまだ法華開会の三諦をば宣べ給はず。

うたがい
疑つて云く汝がごとくに料簡せる人ありや、答えて云く

てんだいいわ
天台云く「中論を以て相比すること莫れ」又云く「天親・竜樹

内鑒冷然して外は時の宜きに適う」等云云、妙樂云く「破会を

論ぜば未だ法華に若かざる故に」云云、從義の云く「竜樹・

天親未だ天台に若かず」云云、問うて云く唐の末に不空三蔵一卷

の論をわたす其の名を菩提心論となづく竜猛菩薩の造なり云云、

弘法大師云く「此の論は竜猛千部の中の第一肝心の論」と云云、

答えて云く此の論一部七丁あり竜猛の言ならぬ事处处に多し

ゆえ
故に目録にも・或は竜猛・或は不空と両方にいまだ事定まらず、

其の上此の論文は一代ろんぶん いちだいを括くくれる論にもあらず荒量なる事此れ多
し、先ず唯真言法中の肝心ただしんごん かんじんの文あやまりなり其の故は文証・
現証ある法華經の即身成仏げんしよう ほけきよう そくしんじようぶつをばなきになして文証も現証もあ
とかたもなき真言經しんごんに即身成仏そくしんじようぶつを立て候又唯ただという唯ただの一字は
第一だいいちのあやまりなり、事のていを見るに不空三蔵ふくうさんぞうの私ひそかにつくりて
候を時の人にをもくせさせんがために事を竜猛りゅうもうによせたるか
其の上不空三蔵ふくうさんぞうは誤あやまりる事かずをほし所謂法華經いわゆるほけきよう かんちの觀智ぎきの儀軌ぎきに
じゆりようぼんあみだぶつを阿弥陀仏まなことかけの眼まなこの前の大僻見陀羅尼品びやつけんだらにぼん じんりきぼんを神力品
の次にをける属累品そくるいぼんを経末きようまつに下くだせる此等これらはいうかひなし、さる
かとみれば天台てんだいの大乗戒だいじようかいを盗んで代宗皇帝こうてい せんじに宣旨もうを申し五台山
の五寺しちに立てたり、而も又真言しんごんの教相きようそうには天台宗てんだいしゅうをすべしとい
えりかたがた誑惑おおわくの事どもなり、他人たにんの訳もちならば用ゆる事もあり

なん此の人の訳せる経論きょうろんは信ぜられず、総じて月支がつしより漢土かんどに

きょうろん

経論をわたす人・旧訳くやく・新訳しんやくに一百八十六人なり羅什三蔵一人

を除いてはいづれの人人も・らざるはなし、其その中に不空三蔵ふくうさんそうは

こと あやまり

殊に誤多き上誑惑の心顯なり、疑うたがいつて云く何をもつて知るぞ

らじゅうさんそう

や羅什三蔵より外の人人はあやまりなりとは汝が禪宗ぜんしゅう・念仏ねんぶつ・

しんこん

真言等の七宗を破るのみならず漢土かんど・日本にほんにわたる一切いっさいの訳者やくしゃを

もち

用いざるかいかん、答えて云く此の事は余が第一だいいちの秘事ひじなり委細いさい

には向つて問うべし、但しただすこし申すべし羅什三蔵らじゅうさんそうの云く我漢土かんど

いっさいきよう

の一切経を見るに皆梵語のごとくならずいかでか此の事を顯あらわす

ただ

べき、但し一の大願あり身を不浄ふじょうになして妻を帯すべし舌計ばかり

しようにう

清浄しょうじょうになして仏法ぶつぽうに妄語もうごせじ我死なば必やくべし焼かん時舌焼

けるならば我が経をすてよと常に高座こうざにしてとかせ給しなり、

かみいちにん

上一人より下万民にいたるまで願じて云く願くは羅什三蔵より後

に死せんと、終に死し給う後焼きたてまつりしかば不浄の身は皆

灰となりぬ御舌計り火中に青蓮華生て其の上にある五色の光明

を放ちて夜は昼のごとく昼は日輪の御光をうばい給いき、さてこ

そ一切の訳人の経経は軽くなりて羅什三蔵の訳し給える経経

殊に法華経は漢土にやすやすとひろまり給いしか。

疑つて云く羅什已前はしかるべし已後の善無畏不空・等は

如何、答えて云く已後なりとも訳者の舌の焼けるをば・ありけり

とするべしされば日本国に法相宗のはやりたりしを伝教大師責

めさせ給いしには羅什三蔵は舌焼けず玄奘・慈恩は舌焼けぬと

せめさせ給いしかば桓武天王は道理と・をばして天台法華宗へは

うつらせ給いしなり、涅槃経の第三・第九等を見まいらすれば我

が仏法は月支より他国へわたらん時、多くの謬誤出来して衆生
の得道うすかるべしととかれて候、されば妙楽大師は「並びに
進退は人に在り何ぞ聖旨に關らん」とこそあそばされて候へ、今
の人人いかに經のままに後世をねがうともあやまれる 經經のま
まにねがはば得道も・あるべからず、しかればとて仏の御とがに
はあらじとかかれて候、仏教を習ふ法には大小・権実・顯密は
さてをくこれこそ第一の大事にては候らめ。

疑つて云く正法一千年の論師の内心には法華經の実義の

顯密の諸經に超過してあるよしはしろしめしながら外には宣説

せずして但権大乘計りを宣べさせ給うことはしかるべしとはを

ばへねども其の義はすこしきこえ候いぬ、像法一千年の半に

天台智者大師出現して題目の妙法蓮華經の五字を玄義十卷・一

千枚にかきつくし、文句十卷には始め如是我聞より終り作礼而去
にいたるまで一字・一句に因縁・約教・本・迹・觀心の四の釈
をならべて又一千枚に尽し給う已上玄義・文句の二十卷には
一切經の心を江河として法華經を大海にたとえ十方界の仏法の
露一☆も漏さず妙法蓮華經の大海に入れさせ給いぬ、其の上
天竺の大論の諸義・一点ももらさず漢土・南北の十師の義破すべ
きをばこれをはし取るべきをば此れを用う、其の上止觀十卷を注
して一代の觀門を一念にすべ十界の依正を三千につづめたり、
此の書の文体は遠くは月支・一千年の間の論師にも超え近くは
戸那・五百年の大師の釈にも勝れたり、故に三論宗の吉藏大師
・南北一百余人の先達と長者らをすすめて天台大師の講經を聞
けと勧むる状に云く「千年の興五百の実復今日に在り乃至南岳の

叡えい聖しょう・天台てんだいの明哲めいしつ・昔むかしは三業住持じゅうぢし今は二尊にそんに紹しょう係けいす豈あに

止あに甘呂ただかんろを震旦しんたんに灑そそぐのみならん亦また当まさに法鼓ほふこを天竺てんじくに震ふるうべし、

生知みょうちの妙悟みょうご魏晉いじん以来いらい典籍風謡てんていふうやう実じつに連類れんるい無し乃ない至し禅衆ぜんしゆ一百ひやく余よの僧そうと

共ともに智者大師ちしやだいしを奉請ぶじやうす」等云云、修南山しゅうなんざんの道宣律師どうせんりつし・天台大師てんだいだいし

を讚歎さんたんして云いく「法華ほつけを照しょう了りやうすること高輝こうきの幽谷ゆうこくに臨のぞむが若もしく

摩訶衍まかえんを説まかくこと長風たうふうの太虚たいこに遊あそぶに似たとたり仮令かじやう文字もんじの師し・千羣せんぐん

万衆まんしゆありて彼の妙弁みょうべんを數あつめめ尋たずぬとも能よく窮きわむる者もの無し、乃ない至し義月ぎげつ

を指さすに同おなじ乃ない至し宗一極そういつごくに歸かへす」云云、華嚴宗けこんしゆうの法蔵大師ほうそうだいし・天台てんだい

を讚ほめして云いく「思禪ぜん師智者等しちしやの如ごとき神異じんいに感通かんとして迹しやく登位とうゐに

参まじわる靈山りやうぜんの聴法憶しやうほふい今いまに在あり」等云云、真言宗しんこんしゆうの不空三蔵ふくうさんそう・

含光法師ほくわう等師弟しだい共ともに真言宗しんこんしゆうをすてて天台大師てんだいだいしに歸伏きふくする物語ものがたりに

云いく高僧こうそう伝でんに云いく「不空三蔵ふくうさんそうと親まのたり天竺てんじくに遊あそびたる

に彼に僧有り問うて曰く大唐に天台の迹教有り最も邪正を簡び
偏円を曉むるに堪えたり能く之を訳して將に此土に至らしむ可き
や」等云云、此の物語は含光が妙樂大師にかたり給しなり、
妙樂大師・此の物語を聞いて云く「豈中国に法を失いて之を
四維に求むるに非ずや而も此方識ること有る者少し魯人の如きの
み」等云云、身毒国の中に天台三十卷のごとなる大論あるなら
ば南天の僧いかでか漢土の天台の釈をねがうべき、これあに像法
の中に法華經の実義顕れて南閻浮提に広宣流布するにあらずや、
答えて云く正法一千年・像法の前四百年・已上仏滅後一千四百
余年にいまだ論師の弘通し給はざる一代超過の円定・円慧を漢土
に弘通し給うのみならず其の声月氏までもきこえぬ、法華經の
広宣流布にはにたれどもいまだ円頓の戒壇を立てられず小乗の

威儀いぎをもつて円えんの慧定じやうに切りつけるはすこし便たよりなきにたり、

例せば日輪にちりんの蝕するがごとし月輪のかけたるに似たり、何いかにいわ

うや天台大師てんだいだいしの御時おんときは大集經だいしつきやうの読誦多聞堅固どくじゆたぶんけんこの時にあひあたて

いまだ広宣流布こうせんるふの時にあらず。

問うて云いわく伝でん教大師ぎやうだいしは日本国にほんこくの士かんむなり桓武ぎやうの御宇しゆつせに出世して

欽明きんめいより二百余年が間の邪義じゃぎをなんじやぶり天台大師てんだいだいしの円慧えんね・円

定をせんじ給たまうのみならず、鑒真和尚かんじんわじやうの弘通くつうせし日本にほん小乗しょうじやうの三

処かいだんの戒壇をなんじやぶり叡山えいざんに円頓えんどんの大乗だいじやう別受戒べつじゆかいを建立こんりやうせり、

此だいじの大事ぶつめつは仏滅後ぶつめつ・一千八百年が間の身毒けんどく・尸那しな・扶桑ふそう乃至ないし

閻浮提えんぶだい第一だいいちの奇事ないしやうなり、内証りやうじゆは竜樹てんだい・天台等あるには・或は劣るに

もや・或あるは同じくもやあるらん、仏法ぶつぽうの人をすべて一法となせる

事は竜樹りやうじゆ・天親てんじんにもこえ南岳なんがく・天台てんだいにも・すぐれて見えさせ

給^{たま}うなり、総じては如来御入滅^{によらいにゆうめつ}の後・一千八百年が間・此の二

人こそ法華經^{ほけきよう}の行者^{ぎようじや}にてはをはすれ、故^{ゆえ}に秀句^{しゅうく}に云く「經に

云く若し須弥^{しゆみ}を接つて他方^{たほう}無數の仏土に擲^なげ置かんも亦未だこれ

難^{がた}しとせず乃至^{ないしも}若し仏の滅度惡世^{めつどあくせ}の中に於^{おい}て能く此の經を説かん

是則ちこれ難^{がた}し云云、此經を釈^{しゃく}して云く淺は易く深は難^{がた}しとは

釈迦^{しゃか}の所判^{しよはん}なり淺を去て深に就^つくは丈夫^{じやうぶ}の心なり天台大師は釈^{しゃく}

に信順^{しんじゆん}し法華宗を助けて震旦^{しんたん}に敷揚^{ふよう}し叡山^{えいざん}の一家は天台に相承^{そうじやう}

し法華宗を助けて日本^{にほん}に弘通^{くつう}す」云云、釈^{しゃく}の心は賢劫第九の滅・

人壽百歳の時より如来在世五十年滅後^{めつご}・一千八百余年が中間^{ちゆうげん}に

高さ十六万八千由旬^{ゆじゆん}・六百六十二万里の金山を有人五尺の小身の

手をもつて方一寸・二寸等の瓦礫^{かわらこいし}をにぎりて一丁二丁までなぐ

るがごとく雀鳥^{すずめ}のとぶよりもはやく鉄圍山^{てつちせん}の外へなぐる者はあり

ほけきよう

たまい

まっぽう

とも法華經を仏のとかせ給いしやうに説かん人は末法にはまれな

るべし、天台大師・伝教大師こそ仏説に相似してとかせ給いた

る人にてをはすれとなり、天竺の論師はいまだ法華經へゆきつき

給はず漢土の天台已前の人師は・或はすぎ・或はたらず、慈恩・

法蔵・善無畏等は東を西といふ天を地と申せる人人なり、此等は

伝教大師の自讃にはあらず、去る延暦二十一年正月十九日高雄

山に桓武皇帝行幸なりて六宗七大寺の碩徳たる善議・勝猷・奉

基・寵忍・賢玉・安福・勤操・

修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・観敏等の十有余人、

最澄法師と召し合せられて宗論ありしに・或は一言に舌を巻い

て二言三言に及ばず皆一同に頭をかたづけ手をあざう、三論の

二蔵・三時・三転法輪・法相の三時・五性・華嚴宗の四教・五教

・根本枝末・六相・十玄・皆大綱をやぶらる、例せば大屋の

とうりょう

棟梁のをれたるがごとし十大徳の幔幢も倒れにき、爾の時・

てんのおおい おどろ

天子大に驚かせ給いて同二十九日に弘世・国道の両吏を勅使と

かさ

して重ねて七寺六宗に仰せ下れしかば各各帰伏の状を載せて

いわ ひそかてんだい

云く「竊に天台の玄疏を見れば総じて釈迦一代の教を括つて悉く

そ

其の趣を顕すに通ぜざる所無く独り諸宗に逾え殊に一道を示す

あらわ

其の中の所説甚深の妙理なり七箇の大寺・六宗の学生昔より

いま

未だ聞かざる所曾て未だ見ざる所なり三論・法相久年の諍い渙焉

ごと

として氷の如く釈け照然として既に明かに猶雲霧を披いて三光

と

を見るがごとし聖徳の弘化より以降今に二百余年の間講ずる所の

きょうろんそ

経論其の数多く彼此理を争えども其の疑未だ解けず、而るに

あまた

此の最妙の円宗未だ闡揚せず蓋し以て此の間の羣生未だ円味に

えんしゅういま

せんよう

けだ

もつ

ぐん

いま

かな
応わざるか、伏して惟おもんみれば聖朝久しく如來によらいの付を受け深く純じゅんえん円
の機きを結び一妙ぎりの義理始めて乃すなわち興こう顯けんし六宗ろくしゅうの學者がくしや初めて至しこく極
を悟る此の界の含がんりよう靈りよう今より後ことごとみ悉く妙円みょうえんの船に載り早く彼岸ひがんに
済わたる事を得ると謂いいつべし、乃至ないし善議等ぜんぎ牽ひかれて休運すなわに逢い乃ち奇
詞けみを聞きす深期あに非あらざるよりは何なんぞ聖世たくくに託たくせんや」等云云、彼の
漢土かんどの嘉祥等かじようは百余人をあつめて天台大師てんだいだいしを聖人しょうにんと定めたり、
今日いまにほん本の七寺二百余人は伝でん教大師ぎやうだいしを聖人しょうにんとがうしたてまつる、
仏めつこの滅後めつこ二千余年に及んでりようこく兩國しやうにんに聖人しょうにん・二人出現しゆつげんせり其の上そ
天台大師てんだいだいしの未弘みくの円頓えんどん大戒だいかいを叡山えいざんに建立こんりゆうし給たまう此れ豈あに像法ざうほうの末
に法華經ほけきやう広宣流布こうせんるふするにあらずや、答えて云いわく迦葉かしよう・阿難等あなんの
弘通くつうせざる大法だいほうを馬鳴めみやう・竜樹りゆうじゆ・提婆天親等だいばてんじんの弘通くつうせる事前さきの難なん
にあらわ顯あらわれたり、又竜樹りゆうじゆ・天親等てんじんの流布るふし残し給たまえる大法天台大師だいほうてんだいだいし

の弘通ぐつうし事又難なんにあらはれぬ、又天台智者大師てんだいちしやだいしの弘通ぐつうし給たまはざる
円頓えんどんの大戒だいかいを伝でんぎようだいし 教大師こんりゆうの建立たまたせさせ給たまう事又顯然けんねんなり、但ただし詮
と不審ふしんなる事は仏とは説き尽し給たまえども仏滅後ぶつめつに迦葉かしょう・阿難あなん・馬鳴めみよう
りゆうじゆ 竜樹むちやく・無著てんじんないし・天親てんだい乃至でんぎよう・天台てんたい・伝でんぎよう 教のいまだ弘通ぐつうしましまさ
ぬ最大の深密じんみつの正法しょうほうきようもん 經文げんぜんの面に現前げんぜんなり、此の深法じんぼう・今末法まっぼうの
始五五百歳えんぶだいに一閻浮提こうせんに広宣流布ふすべきやの事不審極ふしんきわまり無きな
り。

問ういかなる秘法ひほうぞ先ず名をきき次に義をきかんとをもう此の
事じつじもし実事じつじならば釈尊しゃくそんの二度世しゅつげんに出現たまたし給たまうか上行菩薩じようぎようぼさつの
重かさねて涌出ゆじゆつせるか・いそぎいそぎ慈悲じひをたれられよ、彼の玄奘げんじよう
さんぞう 三蔵さんぞうは六生へを経て月氏がっしに入りて十九年ほっけいちじよう・法華一乗ほうべんは方便教ほうべん・
しょうじよう 小乗しょうじよう・阿含經あこんきようは真実教しんじつ、不空三蔵ふくうさんぞうは身毒けんどくに返りて寿量品じゆりようほんを

阿弥陀仏あみだぶつとかかれたり、此等これらは東を西という日を月とあやまてり

身を苦めてなにかせん・心に染そめてようなし、幸い我等われら末法まっぼうに生れ

て一步をあゆまずして三祇さんぎをこゑ頭こつべを虎にかわずして無見頂相むけんちようそう

をゑん、答いえて云いく此この法門ほうもんを申もうさん事は経文きやうもんに候へばやすか

るべし但ただし此この法門ほうもんには先だいじ三さんの大事だいじあり大海たいかいは広ひろけれども死骸しがい

をとどめず大地だいちは厚あけれども不孝ふこうの者をば載のせず、仏法ぶつぼうには五逆ごぎやく

をたすけ不孝ふこうをばすくう但ただし誹謗ひぼう一闡提いつせんたいの者持戒じがいにして第一だいいちなる

をばゆるされず、此この三さんのわざはひとは所謂い念ねん仏宗ぶつしゅうと禪宗ぜんしゅうと

真言宗しんこんしゅうとなり、一いには念ねん仏宗ぶつしゅうは日本国にほんこくに充満じゅうまんして四衆ししゅうの口くちあ

そびとす、二にに禪宗ぜんしゅうは三衣一鉢さんねいちぼつの大慢だいまんの比丘びくの四海しかいに充満じゅうまんして

一天いつてんの明導めいどうと・をもへり、三さんに真言宗しんこんしゅうは又彼等かれらの二宗にしゅうにはにる

べくもなし叡山えいざん・東寺とうじ・七寺しちじ・園城おんじやう・或官主あるかんしゅ・或は御室あるおむろ・或は

ちようり

ある

けんぎよう

ないじどころ

☆

☆

みかがみじんかい

長吏・或は検校なりかの内侍所の☆☆神鏡燼灰となりしかども

だいにちによらい

大日如来の宝印を仏鏡とたのみ宝剣・西海に入りしかども五大尊

こくてき

をもつて国敵を切らんと思へり、此等の堅固の信心は設い劫石は

これら

けんこ

しんじん

たとい

うたがい

ひすらぐとも・かたぶくべしとはみへず大地は反覆すとも疑心

だいち

はんぶく

うたがい

てんだいだいし

たまひ

をこりがたし、彼の天台大師の南北をせめ給いし時も此の宗はい

でんぎよう

だいし

ろくしゅう

たまひ

まだわたらず此の伝教大師の六宗をしゑたげ給いし時ももれ

こくてき

だいほう

うしな

ぬ、かたがたの強敵をまぬがれてかへつて大法をかすめ失う、

其の上伝でんぎよう教大師おんでしの御弟子じかく慈覚大師・此の宗をとりたてて叡山えいざんの

てんだいしゅう

いっこう

しんこんしゅう

天台宗をかすめをとして一向・真言宗になししかば此の人には

びやつけん

こうほうだいし

誰の人か敵をなすべき、かかる僻見びやくけんのたよりをえて弘法大師の

じやぎ

あんねんわじょう

こうほう

なん

邪義をもとがむる人もなし、安然和尚あんねんわじょうすこし弘法こうほうを難なんぜんとせし

ただけこんしゅう

ばか

ほけきよう

かども只華嚴宗のところ計りばかとがむるににてかへて法華経ほけきようをば

だいにちきよう

大日経に對して沈めはてぬ、ただ世間のたて入の者のごとし。

問うて云く此の三宗の謬☆如何答えて云く浄土宗は齊の世に

どんらんほつし

もう

みようこいかん

いわ じようとしゅう

りゅうじゅぼさつ じゅうじゅうびしゃろん

曇鸞法師と申す者あり本は三論宗の人竜樹菩薩の十住毘婆娑論

なんぎようどう

を見て難行道・易行道を立てたり、道綽禪師という者あり唐の

もと ねはんぎよう

どらんほつし じようど

世の者本は涅槃經をかうじけるが曇鸞法師が浄土にうつる筆を見

ねはんぎよう

じようど

しようどう

じようど

て涅槃經をすてて浄土にうつて聖道・浄土二門を立てたり、又

どうしゆく

でし ぜんどう

そうぎよう

しようぎよう

にほんこく

道綽が弟子に善導という者あり雜行・正行を立つ、日本国に

まっぽう

ごとばいん ぎよう

ほうねん

だいにかきよう

末法に入つて二百余年・後鳥羽院の御宇に法然というものあり

いっさい どうぞく

いわ ぶっぽう

じき

ほけきよう

だいにちきよう

一切の道俗をすすめて云く仏法は時機を本とす法華經・大日経

てんだい

しんこん

はつしゅう

いちだい

だいしゅう

けんみつ

ごんじつ

・天台・真言等の八宗・九宗一代の大小・顕密・権実等の

しよしゅう

じようこん

じようち

しようそう

き

ためなり、

まっぽう

諸宗等は上根・上智の正像二千年の機のためなり、末法に入

こう

そ

そ

りてはいかに功をなして行ずるとも其の益あるべからず、其の上

・ 弥陀念仏にまじへて行ずるならば念仏も往生すべからず此れ

わたくしに申すにはあらず竜樹菩薩・曇鸞法師は難行道となづ

け、道綽は未有一人得者ときらひ善導は千中無一とさだめたり、

此等是他宗なれば御不審も・あるべし、慧心・先徳にすぎさせ

給へる天台・真言の智者は末代にをはすべきか彼の往生要集に

は顕密の教法は予が死生をはなるべき法にはあらず、又三論の

永観が十因等をみよされば法華・真言等をすて一向に念仏せば

十即 十生・百即 百生とすすめければ、叡山・東寺・園城

・七寺等始めは諍論するやうなれども、往生要集の序の詞・

道理かとみへければ顕真座主落ちさせ給いて法然が弟子となる、

其の上設い法然が弟子とならぬ人々も弥陀念仏は他仏に比べ

もなく口ずさみとし心よせにをもひければ日本国・皆一同に

法然房ほうねんぼうの弟子でしと見へけり、此の五十年が間・一天四海いつてんしかい一人もなく

法然ほうねんが弟子でしとなる法然ほうねんが弟子でしとなりぬれば日本国にほんこく一人もなく謗法ほうぼう

の者となりぬ、譬たとへば千人の子が一同に一人の親を殺害さつがいせば千人

共に五逆ごぎやくの者なり一人阿鼻あびに堕おちなば余人お堕おちざるべしや、結句けっく

は法然ほうねん・流罪るざいをあだみて惡靈あくりょうとなつて我われ並びに弟子等でしをとがせ

し国主山寺こくしゅの僧等が身に入つて・或あるは謀反を・をこし・或あるは惡事

をなして皆閑東みなかんとうにほろぼされぬ、わづかにのこれる叡山えいざん・東寺等とうじ

の諸僧しよそうは俗男そくなん・俗女そくじょにあなづらること猿猴えんこうの人にわら

はれ・俘囚えぞが童子どうじに蔑如べつじょせらるるがごとし、禪宗ぜんしゅうは又此の便たよりを

得て持齋等じさいとなつて人の眼まなこを迷まどわかし・たつとげなる氣色なれば

・いかに・ひがほうもんを・いぬくるへども失とがとも・をぼへず、

禪宗ぜんしゅうと申もうす宗は教外別伝きょううべつでんと申もうして釈尊しゃくそんの一切經いっさいきやうの外かしように迦葉

そんな

尊者にひそかにささやかせ給へり、されば禪宗をしらずして

いっさいきよう

なら

いかずち

一切経を習うものは、犬の雷をかむがごとし、猿の月の影を

とるにいたり云云、此の故に日本国の中に不孝にして父母にすて

ゆえにほんこく

ふこう

ふぼ

られ無礼なる故に、主君にかんどうせられ・あるいは若なる

ゆえ

しゅくん

じゃく

法師等の学文にもものうき遊女のものぐるわしき本性に叶る邪法な

ほっし

かなえじゃほう

るゆへに皆一同に持斎になりて国の百姓をくらう蝗虫となれり、

みな

じさい

ひやくせい

いなむし

しかれば天は天眼をいからかし地神は身をふるう、真言宗と

てんげん

しんこんしゅう

申すは上の二のわざはひには・にるべくもなき大僻見なりあら

もう

かみ

びやつけん

あら此れを申すべし、所謂大唐の玄宗皇帝の御宇に善無畏三蔵・

こ

もう

いわゆるだいとう

げんそうこうてい

ぎょう

ぜんむいさんそう

金剛智三蔵・不空三蔵、大日経・金剛頂経・蘇悉地経を月支

こんこうちさんそう

ふくうさんそう

だいにちきょう

こんこうちようきょう

そしつちきょう

がつし

よりわたす、此の三経の説相分明なり其の極理を尋ぬれば

せつそうふんみょう

そ

ごくり

たず

会二破二の一乗其の相を論ずれば印と真言と計りなり、尚華嚴

えにはに

いちじょうそ

しんこん

ばか

なおけこん

- 700 -

・般若はんによの三一そうたい相對いちじょうの一乗およにも及およばず天台宗てんだいしゅうの爾前にぜんの別円程べつえんもなし但藏通ぞうつう二教おもとを面おもてとするを善無畏ぜんむい三藏さんぞうをもはく此この經文きやうもんをあらわにいみ出いだす程だいじならば華嚴けこん・法相ほっそうにもをこつかれ天台宗てんだいしゅうにもわらはれなん大事だいじとして月支がっしよりは持たち来きりぬ・さてもだせば本意ほんいにあらずとやをもひけん、天台宗てんだいしゅうの中に一行禪師げんぜんといふ僻人びやくにん一人ありこれをかたらひて漢土かんとの法門ほうもんをかたらせけり、一行阿闍梨あじゃりうちぬかれて三論さんろん・法相ほっそう・華嚴等けこんをあらあらかたるのみならず天台宗てんだいしゅうの立てられけるやうを申しければ善無畏ぜんむいをもはく天台宗てんだいしゅうは天竺てんじくにして聞ききしにもなをうちすぐれてかさむべきやうもなかりければ善無畏ぜんむい一行をうちぬひて云いく和僧わそうは漢土かんとにはござかしき者ものにてありけり、天台宗てんだいしゅうは神妙しんめうの宗しゅうなり今真言宗しんごんしゅうの天台宗てんだいしゅうにかさむところは印しんごんと真言しんごんと計ばかりなりといふみければ一行さもやと・

をもひければ善無畏三蔵一行にかたて云く、天台大師の法華經に
疏をつくらせ給へるごとく大日經の疏を造りて真言を弘通せん
とをもう汝かきなんやと・いふければ一行が云くやすう候、
但しいかやうにかき候べきぞ天台宗はにくき宗なり諸宗は我も
我烽にあらそいをなせども一切に叶わざる事一あり、所謂法華經
の序分に無量義經と申す經をもつて前四十余年の經經をば其の
門を打ちふさぎ候いぬ、法華經の法師品・神力品をもつて後の
經經をば又ふせがせぬ肩をならぶ經經をば今説の文をもつて
せめ候大日經をば三説の中にはいづくにかをき候べきと問ひけ
れば爾の時に善無畏三蔵大に巧んで云く大日經に住心品とい
品あり無量義經の四十余年の經經を打ちはらうがごとし、
大日經の入漫陀羅已下の諸品は漢土にては法華經・大日經とて

二本なれども天竺にては一經のごとし、釈迦しゃかは舎利弗しゃりほつ彌勒みろくに

向つて大日經を法華經となづけて印と真言しんごんとをすてて但理計ぼかり

をとけるを羅什三藏此れをわたす天台大師此れをみる、大日如来だいにちによらい

は法華經を大日經となづけて金剛薩☆に向つてとかせ給たまう此れ

を大日經となづく我まのあたり天竺にしてこれを見る、されば

汝なんじがかくべきやうは大日經と法華經とをば水と乳とのやうに

一味となすべし、もししからば大日經は已今当の三説をば皆みな

法華經のごとくうちをとすべし、さて印と真言しんごんとは心法の

一念三千に莊嚴するならば三密相応の秘法なるべし、三密相応す

る程ならば天台宗は意密なり真言は甲なる將軍しょうぐんの甲鎧よろいを帶たいし

て弓きゅうせん箭を横たへ太刀を腰にはけるがごとし、天台宗は意密計いみつばかり

なれば甲なる將軍しょうぐんの赤裸なるがごとくならんといふければ、一

行阿闍梨あじゃりは此のやうにかきけり、漢土かんど三百六十箇国には此の事を

知る人なかりけるかのあひだ始めには勝劣しょうれつを諍論じやうろんしけれども

善無畏等ぜんむいは人からは重てんし天台宗てんだいしゅうの人人は軽ひとびとかりけり、又

天台大師てんだいだいしほどの智ある者もなかりければ但日日しんごんしゅうに真言宗しんごんしゅうになり

てさてやみにけり、年ひさしくなればいよいよ真言しんごんの誑惑おおわくの根ふ

かくかくれて候いけり、日本国にほんこくの伝教大師でんぎようだいし・漢土かんどにわたりて

天台宗てんだいしゅうをわたし給たまうついでに真言宗しんごんしゅうをならべわたす、天台宗てんだいしゅう

を日本にほんの皇帝こうていにさづけ真言宗しんごんしゅうを六宗ろくしゅうの大徳だいとくにならはせ給たまう、

但ただし六宗ろくしゅうと天台宗てんだいしゅうの勝劣しょうれつは入唐にゅうとう已前に定めさせ給たまう、入唐にゅうとう

已後いごには円頓えんどんの戒場を立てう立てじの論ろんの計ばかりなかりけるかのあ

ひだ敵多くしては戒場の一事成りがたしとやをぼしめしけん、又

末法まつぽうにせめさせんとやをぼしけん皇帝こうていの御前おんまえにしても論ぜさせ

給たまはず弟子等でしにもはかばかしくかたらせ給たまはず、但ただし依憑集えびようと

申もうす

一卷の秘書あり七宗の人人ひとびとの天台てんだいに落ちたるやうをかかれて

候文なり、かの文の序に真言宗しんこんしゅうの誑惑おおわく一筆みへて候弘法大師こうぼうだいしは

えんりやく

同じき延暦年中に御入にゅうとう唐青竜寺けいけいの慧果けいに値あい給たまいて真言宗しんこんしゅうを

たま

ならはせ給たまへり、御帰朝きちようの後いちだい・一代しやうれつの勝劣しょうれつを判たまじ給たまいけるに

だいいちしんこん

第一真言・第二・華嚴けこん・第三法華ほっけとかかれて候、此だいしの大師せけんは世間せけん

ひとびと

の人人もつてのほかただに重ぶつぽうずる人なり、但ただし仏法ぶつぽうの事は申もうすにをそ

れあれどももつてのほかしんこんにあらき事どもはんべり、此じそうの事をあら

あら・かんがへたるに漢土かんどにわたらせ給たまいては但真言しんこんの事相じそうの印しんこん

しんこんばか

なら

・真言計り習そいつたえて其ぎりの義理ぎりをばくはしくもさはぐらせ給たまは

にほん

ざりけるほどに日本おおいにわたりて後大せけんに世間しんこんしゅうを見れば天台宗てんだいしゅうもつ

てのほかにかさみたりければ、我が重しんこんしゅうずる真言宗しんこんしゅうひろめがたか

りけるかのゆへに本日本国にほんこくにして習ならいたりし華嚴宗けこんしゅうをとりいだし
て法華經ほけきょうにまされるよしを申しけり、それも常の華嚴宗けこんしゅうに申もうすや
うに申もうすならば人信しんずまじとやをぼしめしけんすこしいろをかえ
て此これは大日經だいにちき 竜猛菩薩りゅうもうぼさつの菩提心論ぼだいしんろん 善無畏等ぜんむいの実義じつぎなりと大
妄語もうごをひきそへたりけれども天台宗てんだいしゅうの人人ひとびといたうとがめ申もうす事
なし。

問いうて云いく弘法大師こうぼうだいしの十住心論じゅうじゅうしんろん・秘藏宝鑰ひそうほうやく二教論にけうろんに云いく
「此かくの如ごとき乗乗じょうじょう 自乗じじょうに名を得れども後に望めば戲論けろんと作なす」
又云いく「無明むみょうの辺域へんいきにして明の分位ぶんゐに非あらず」又云いく「第四熟蘇味じゆくそみ
なり」又云いく「震旦しんたんの人師等にんし諍あらそつて醍醐だいごを盗ぬすんで各自宗じしゅうに名なく」
等云云これら、此等しやうの釈しやくの心如何いかに、答えて云いく予よ此の釈しやくにをどろいて
いっさいきようなら
一切經並だいにちびに大日の三部經等さんぶきようをひらきみるに華嚴經けこんきようと大日經だいにちきようと

に對すれば法華經戲論・六波羅蜜經に對すれば盜人守護經に對す
れば無明の辺域と申す經文は一字・一句も候はず此の事はいと
はかなき事なれども此の三四百余年に日本國のそこばくの智者ど
もの用いさせ給へば定めてゆへあるかともひぬべし、しばらく
いとやすきひが事をあげて余事のはかなき事をしらすべし、
法華經を醍醐味と稱することは陳隋の代なり六波羅蜜經は唐の半
に般若三藏此れをわたす、六波羅蜜經の醍醐は陳隋の世には・わ
たりてあらばこそ天台大師は眞言の醍醐をば盜ませ給はめ、傍例
あり日本の得一が云く天台大師は深密經の三時教をやぶる三寸の
舌をもつて五尺の身をたつべしとののしりしを伝教大師此れを
ただして云く深密經は唐の始玄奘これらをわたす天台は陳隋に人
・智者御入滅の後・數箇年あつて深密經わたれり、死して已後

にわたれる経をば・いかでか破り給うべきとせめさせ給いて候い

しかば得一はつまるのみならず舌八にさけて死し候いぬ、これは

彼にはにるべくもなき悪口なり、華嚴の法蔵三論の嘉祥法相の

玄奘・天台等・乃至南北の諸師・後漢より已下の三蔵・人師を

皆をさえて盗人とかかれて候なり、其の上又法華経を醍醐と称す

ることは天台等の私の言にはあらず、仏涅槃経に法華経を醍醐と

・とかせ給い天親菩薩は法華経・涅槃経を醍醐とかかれて候、

竜樹菩薩は法華経を妙薬となづけさせ給う、されば法華経等を

醍醐と申す人盗人ならば釈迦・多宝・十方の諸仏竜樹・天親等

は盗人にてをはすべきか、弘法の門人等乃至日本の東寺の真言師

如何に自眼の黒白はつたなくして弁へずとも他の鏡をもつて

自禍をしれ、此の外法華経を戯論の法とかかるること大日経・

こんごうちょうきよう
金剛頂經 等にたしかなる經文をいだされよ、設い彼彼の經經

ほけきよう
に法華經を戲論ととかれたりとも訳者の・る事も・あるぞかしよ

こうし
くよく思慮のあるべかりけるか、孔子は九思一言・周公旦は沐

せけん
には三にぎり食には三はかれけり外書のはかなき世間の浅き事を

ちじん
習う人すら智人はかう候ぞかし、いかにかかるあさましき事はあ

びやつけん
りけるやらん、かかる僻見の末へなれば彼の伝法院の本願とが

しょうかくぼう
うする聖覚房が舍利講の式に云く「尊高なる者は不二摩訶衍の

さんじん
仏なり驢牛の三身は車を扶くること能はず秘奥なる者は両部漫陀

くつ
羅の教なり顕乗の四法は履を採るに堪へず」と云云、顕乗の四法

ほうそふ
と申すは法相・三論・華嚴・法華の四人、驢牛の三身と申すは

けこん
法華・華嚴・般若・深密經の教主の四仏、此等の仏僧は真言師

しょうかくこうぼう
に對すれば聖覚弘法の牛飼・履物取者にもたらぬ程の事なりと

かいて候、彼の月氏がっしの大慢婆羅門だいまんばらもんは生知の博学頭密二道胸けんみつにどうにうか

べ内外ないげの典籍てんじやく・掌たなごころににぎる、されば王臣頭おうしんこうへをかたぶけ万

人師範にんしと仰あおぐあまりの慢心まんしんに世間せけんに尊崇する者は大自在天じざいてん・婆藪ばそ

天ならえん・那羅延天だいかくせそん・大覺世尊ししやう此の四聖なり我が座の四足にせんと座の

足につくりて坐して法門ほうもんを申しけり、当時の真言師しんごんしが釈迦しゃかぶつ仏等の

一切いっさいの仏をかきあつめて灌頂かんちやうする時敷まんだらとするがごとし、

禪宗ぜんしゅうの法師等ほっしが云く此の宗は仏の頂いただきをふむ大法なりというが

ごとし、而しかるを賢愛論師けんあいろんしと申せし小僧こそうあり彼をただすべきよし申

せしかども王臣おうしん万民ばんみんこれをもちゐず、結句けっくは大慢だいまんが弟子等でし・檀那だんな

等に申もうしつけて無量の妄語むりやうをかまへて悪口あくく打擲ちやうちやくせしかども・す

こしも命いのちをしますののしりしかば帝王ていおう・賢愛けんあいをにくみてつめさ

せんとし給たまひいしほどにかへりて大慢だいまんがせめられたりしかば、大王だいおう

・天に仰あおぎ地に伏してなげひての給たまはく朕はまのあたり此の事を
きひて邪見じゃけんをはらしぬ先王はいかに此の者にたばらされて阿鼻あび
地獄じごくにをはすらんと賢愛論師けんあいろんしの御足にとりつきて悲涙せさせ給たまい
しかば、賢愛けんあいの御計おんはからいとして大慢だいまんを驢うまにのせて五竺おもてに面をさら
し給たまいければいよいよ悪心盛あくしんになりて現身げんしんに無間地獄むげんじごくに堕おちぬ、
今の世の真言しんこんと禪宗ぜんしゅう等とは此れにかわれりや、漢土かんとの三階さんかい禪師ぜんし
の云いわく教主きょうしゅ釈尊しやくそんの法華經ほけきやうは第一第二階だいいちの正像しょうぞうの法門ほうもんなり末代まつだい
のためには我がつくれる普經ふきやうなり法華經ほけきやうを今の世に行ぜん者は
十方じゅうぽうの大阿鼻獄あびごくに堕おつべし、末代まつだいの根機こんきにあたらざるゆへなり
と申もうして、六時の礼懺らいさん・四時の坐禪ざぜん・生身しょうしん仏のごとくなりしか
ば、人多く尊でみて弟子万余人ありしかどもわづかの小女の法華經ほけきやう
をよみしに・せめられて当坐こえには音を失うしない後には大蛇だいじゃになりてそ

こばくの檀那弟子並びに小女処女等をのみ食いしなり、今の善導

・法然等が千中無一の悪義もこれにて候なり、此等の三大事は・

すでに久くなり候へばいやしむべきにはあらねども申さば信ずる

人もやありなん、これよりも百千万億倍・信じがたき最大の悪事

はんべり、慈覚大師は伝教大師の第三の御弟子なり・しかれど

も上一人より下万民にいたるまで伝教大師には勝れてをはしま

す人なりとをもひり、此の人真言宗と法華宗の実義を極めさせ

給いて候が真言は法華経には勝れたりとかかせ給へり、而るを

叡山三千人の大衆・日本一州の学者等・一同の帰伏の義なり、

弘法の門人等は大師の法華経を華嚴経に劣るとかかせ給えるは、

我がかたながらも少し強きやうなれども、慈覚大師の釈をもつて

をもうに真言宗の法華経に勝れたることは一定なり、日本国に

して真言宗しんこんしゅうを法華經ほけきょうに勝まさると立つるをば叡山えいざんこそ強きかたき

なりぬべかりつるに慈覺じかくをもつて三千人さんぜんの口をふさぎなば

しんこんしゅう

真言宗はをもうごとし、されば東寺第一とうじだいいちのかたうど慈覺大師じかくだいしに

はすぐべからず、例せば浄土宗じょうどしゅう・禅宗ぜんしゅうは余国にてはひろまると

にほんこく

も日本国にしては延暦寺えんりやくじのゆるされなからんには無辺劫むへんはふとも

かな

叶うまじかりしを安然和尚あんねんわじょうと申す叡山第一えいざんだいいちの古徳・教時諍論じょうろんと

もう

申す文に九宗の勝劣しょうれつを立てられたるに第一真言宗だいいちしんこんしゅう・第二禅宗ぜんしゅう

・第三天台法華宗てんだいほつけしゅう・第四華嚴宗等云云、此の大謬みょうしやく 釈につひて

ぜんしゅう

禅宗は日本国にほんこくに充滿じゅうまんして・すでに亡国ぼうこくとならんとはするなり

ほうねん ねんぶつしゅう

法然が念仏宗のはやりて一国を失わんとする因縁いんねんは慧心えしんの往生おうじょう

ようしゅう

要集ようしゅうの序よりはじまれり、師子ししの身の中の虫の師子ししを食くらうと仏

の記しるし給たまうはまことなるかなや。

伝でんぎよう教大師だいいしは日本国にほんこくにして十五年が間・天台てんだい・真言等しんごんを自見せ

させ給たまう生知みようちの妙悟みょうごにて師なくしてさとらせ給たまいしかども、世間せけん

の不審ふしんをはらさんがために漢土かんとに亘わたりて天台てんだい・真言しんごんの二宗を伝へ

給たまいし時漢土かんとの人人ひとびとはやうやうの義ありしかども我が心には法華ほつけ

は真言しんごんにすぐれたりと・をぼしめししゆへに真言宗しんごんしゅうの宗の名字みょうじ

をば削らせ給たまいて天台宗てんだいしゅうの止観しかん・真言等しんごんかかせ給たまう、十二年の

年分得度の者二人を・をかせ給たまい、重ねて止観院しかんに法華經ほけきよう・

金光明經こんこうみょうきよう・仁王經にんのうきようの三部を鎮護国家ちんここっかの三部と定めて宣旨せんじを

申し下くだし永代日本国にほんこくの第一だいいちの重宝じゆうほう・神璽しんじ・宝剣ほうけん・内侍所ないじどころとあがめ

させ給たまいき、叡山第一えいざんだいいちの座主ざす・義真和尚ぎしんわじよう・第二だいにの座主ざす・円澄えんちよう

大師だいいしまでは此の義相違そくいなし、第三だいさんの慈覚大師じかくだいいし・御入唐にゅうとう・漢土かんとに

わたりて十年が間・顕密二道けんみつにどうの勝劣しょうれつを八箇の大徳だいたくにならひつた

う、又天台宗の人人てんだいしゅう広修・惟・等ひとびとこうしゅうにならはせ給ゆいけんいしかども心の

内にをぼしけるは真言宗しんごんしゅうは天台宗てんだいしゅうには勝すぐれたりけり、我が師・

伝でんぎようだいし教大師はいまだ此の事をばくはしく習たませ給わざりけり漢土かんどに

久しくもわたらせ給たまわざりける故に此の法門ほうもんはあらうちに・をは

しけるやと・をぼして日本国にほんこくに帰朝きちようし叡山えいざん東塔止観院しかんの西に

総持院そうじいんと申す大講堂もうを立て御本尊ごほんぞんは金剛界こんこうの大日如来だいにちによらい・此の御前おんまえ

にして大日經だいにちきようの善無畏ぜんむいの疏じよを本として金剛頂經こんこうちようきようの疏七卷じよ・

蘇悉地經そしつちきようの疏七卷じよ・已上十四卷をつくる、此の疏じよの肝心かんじんの釈いに

云く「教に二種有り一は顯示教おもえらせんじよう謂く三乗教さんじようなり世俗せぞくと勝義せきぎと

未だ円融えんゆうせざる故に、二は秘密教ひみつ謂く一乗教いちじようなり世俗せぞくと勝義せきぎと

一体にして融ゆうする故に、秘密教ひみつの中に亦二種有り一には理秘密りひみつの

教諸の華嚴・般若維摩法華・涅槃等ねはんなり但せぞくだ世俗せぞくと勝義との不二

を説いて未だ真言密印の事を説かざる故に、二には事理俱密教
おもえらだいにち こんごうちようきよう そしつちきよう
謂く大日教・金剛頂経・蘇悉地経等なり亦世俗と勝義との不二
を説き亦真言密印の事を説く故に」等云云、釈の心は法華経と
真言の三部との勝劣を定めさせ給うに真言の三部経と法華とは
所詮の理は同じく一念三千の法門なり、しかれども密印と真言等
の事法は法華経かけてをはず法華経は理秘密・真言の三部経は
事理俱密なれば天地雲泥なりとかかれたり、しかも此の筆は私の
釈にはあらず善無畏三蔵の大日経の疏の心なりと・をばせども
なをなを二宗の勝劣不審にやありけん、はた又他人の疑いを
さんぜんとやをばしけん、大師覚の伝に云く「大師二経の疏を
造り功を成し已畢つて心中独り謂らく此の疏仏意に通ずるや否
や若し仏意に通ぜざれば世に流伝せじ仍つて仏像の前に安置し七

日七夜深誠を翹企し祈請を勤修す五日の五更に至つて夢らく正
午に當つて日輪を仰ぎ見弓を以て之を射る其の箭日輪に當つて
日輪即轉動す夢覺めての後深く仏意に通達せりと悟り後世に伝う
べし」等云云、慈覺大師は本朝にしては伝教・弘法の兩家を
習いきわめ異朝にしては八大德並に南天の宝月三蔵等に十年が間
最大事の秘法をきわめさせ給える上二經の疏をつくり了り重ねて
本尊に祈請をなすに智慧の矢すでに中道の日輪にあたりてうち
をどろかせ給い、歡喜のあまりに仁明天王に宣旨を申しそへさ
せ給い天台の座主を真言の官主となし真言の鎮護国家の三部とて
今に四百余年が間・碩学稻麻のごとし渴仰竹葦に同じ、されば
桓武・伝教等の日本国建立の寺塔は一字もなく真言の寺となり
ぬ公家も武家も一同に真言師を召して師匠とあをぎ官をなし寺を

あづけ給ふ、たま 仏事ぶつじの木画もくえの開眼供養かいげんくようは八宗はっしゅう一同どうに大日仏眼だいにちぶつげんの印

・真言しんごんなり。

うたがい

疑うたがいつて云くい法華經ほけきようを真言しんごんに勝まさると申もうす人は此この釈しやくをばいかが

せん用うべきか又すつべきか、答う仏ぶつの未来みらいを定めて云くい「法に

依よつて人に依よらざれ」竜樹菩薩りゅうじゅぼさつの云くい「修多羅しゆたらに依よれるは白論びやくろん

なり修多羅しゆたらに依よらざれば黒論くろろんなり」天台てんだいの云くい「復修多羅またしゆたらと合せ

ば録ろくして之これを用もちゆ文ぶん無なくく義ぎ無なきは信受しんじゆすべからず」伝でん教大師ぎょうだいし

云くい「仏説ぶつせつに依憑えひようして口伝くでんを信しんずること莫なれ」等云云これら、此等これらの

經論きようろん釈しやくのごときんば夢むを本もとにはすべからずただついさして

法華經ほけきようと大日經だいにちきようとの勝劣しょうれつを分明ぶんみように説ときたらん經論きようろんの文ぶんこそた

いせちに候はめ、但印ただし・真言しんごんなくば木画もくえの像ざうの開眼かいげんの事こと・此れ

又をこの事なり真言しんごんのなかりし已前いぜんには木画もくえの開眼かいげんはなかりし

か、てんじく・天竺・漢土・日本には真言宗しんごんしゅう已前の木画もくえの像は・或あるは行き
・或あるは説法せっぽうし・或あるは御物語おんものがたりあり、印・真言しんごんをもて仏くようを供養くようせし
より・このかた利生りしやうもかたがた失うせたるなり、此これは常ろんだんの論談ろんだんの義
なり、此の一事にをひては但ただし日蓮にちれんは分ぶん明みやうの証拠しょうこを余所よそに引く
べからず慈覚じかく大師だいしの御釈あおを仰いで信じて候なり。

問うて云いわく何いかにと信ぜらるるや、答えて云いわく此の夢の根源こんげんは
真言しんごんは法華經ほけきやうに勝まさると造つく定めての御ゆめなり、此の夢吉夢きちむなら
ば慈覚じかく大師だいしの合せさせ給たまうがごとく真言勝しんごんまさるべし、但日輪にちりんを射る
とゆめにみたるは吉夢なりというべきか、内典ないてん五千・七千余卷
外典げてん三千余卷の中に日を射るとゆめに見て吉夢なる証拠しょうこをうけ
給たまわるべし、少少こ此れより出し申もうさん阿闍世王あじやせは天より月落ると
ゆめにみて耆婆きば大臣だいじんに合せさせ給たましかば大臣だいじん合せて云いわく仏の御

にゅうめつ

入滅なり須拔多羅天より日落るとゆめにみる我とあわせて云く

にゅうめつ

仏の御入滅なり、修羅は帝釈と合戦の時まづ日月をいたてまつ

かのけつ

る、夏の桀・殷の紂と申せし悪王は常に日をいて身をほろぼし国

あくおう

まやふじん

をやぶる、摩耶夫人は日をはらむとゆめにみて悉達太子をうませ

しつたたいし

たま

給う、かるがゆへに仏のわらわなをば日種という、日本国と申す

にほんこく

もう

てんしょうだいじん

につてん

は天照太神の日天にてましますゆへなり、されば此のゆめは

てんしょうだいじん

天照太神・伝教大師・釈迦仏・法華経をいたてまつれる矢にて

しゃかぶつ

ほけきよう

じよ

こそ二部の疏は候なれ、日蓮は愚癡の者なれば経論もしらず但

きやうろん

ほけきよう

此の夢をもつて法華経に真言すぐれたりと申す人は今生には

もう

こんじよう

うしないこしよう

国をほろぼし家を失ひ後生にはあび地獄に入るべしとはしりて

じこく

げんしよう

候、今現証あるべし日本国と蒙古との合戦に一切の真言師の

にほんこく

もうこ

いっさい

しんこんし

じようぶく

調伏を行ひ候へば日本かちて候ならば真言はいみじかりけりと

にほん

しんこん

・おもひ候なん、但し承久の合戦にそこばくの真言師のいのり
候しが調伏せられ給し権の大夫殿はかたせ給い、後鳥羽院は
隠岐の国へ御子の天子は佐渡の嶋嶋へ調伏しやりまいらせ候い
ぬ、結句は野干のなきの身にをうなるやうに還著於本人の経文
にすこしもたがはず叡山の三千人かまくらに・せめられて一同に
したがいはてぬ、しかるに今はかまくらの世さかななるゆへに
東寺・天台・園城・七寺の真言師等と並びに自立をわすれたる
法華宗の謗法の人人・関東にをちくだりて頭をかたぶけひざを
かがめやうやうに武士の心をとりにて、諸寺・諸山の別当となり
長吏となりて王位を失いし悪法をとりいだして国土安穩といのれ
ば、將軍家並びに所従の侍已下は国土の安穩なるべき事なんめ
りとうちをもひて有るほどに法華經を失う大禍の僧どもを用いら

るれば国定めてほろびなん、亡国ぼうこくのかなしき亡身のなげかしさに
身命しんみょうをすてて此の事をあらわすべし、国主世こくしゅを持つべきならば

あやしと・おもひてたづぬべきところにただざんげんのことばの

み用もちいてやうやうのあだをなす、而しかるに法華經守護ほけきやうしゅごの梵天ぼんてん・

帝釈たいしゃく・日月いちがつ・四天地神等してんじしんは古の謗法いにしえほうぼうをば不思議ふしぎとはをぼせども

此これをしれる人なければ一子の悪事のごとくうちゆるして、いつ

わりをろかなる時もあり又すこしつみしらする時もあり、今は

謗法ほうぼうを用もちいたるだに不思議ふしぎなるにまれまれ諫かんぎやう曉きやうする人をかへり

てあだをなす、一日・二日・一月・二月・一年・二年ならず数年

に及ぶ、彼の不輕菩薩ふぎようぼさつの杖木じようもくの難なんに値あいしにも・すぐれ覺徳かくとく

比丘びくの殺害さつがいに及びおよしにもこえたり、而しかる間ま・梵釈ぼんしゃくの二王にちがつ・日月いちがつ

・四天してん・衆星しゅうせい・地神等やうやうにいかり度度たびたびいさめらるれども

・いよいよあだをなすゆへに天の御計おんはからいとして隣国りんごくの聖人しょうにんにを
ほせつけられて此これをいましめ大鬼神きじんを国に入れて人の心をたぼ
らかし自界はんぎやく反逆はんぎやくせしむ、吉凶きききようにつけて瑞大きだいなれば難多なんかるべ
きことわりにて仏滅後ぶつめつ・二千二百三十余年が間いまだいでざる大
長星さいのういまだふらざる大地だいちしん出来しゅつたせり、漢土かんと・日本にほんに智慧ちえすぐ
れ才能さいのういみじき聖人しょうにんは度度たびたびありしかどもいまだ日蓮にちれんほど法華經ほけきよう
のかたうどして国土こくどに強敵かうてき多くまうけたる者なきなり、まづ眼前がんぜん
の事をもつて日蓮にちれんは閻浮提第一えんぶだいだいいちの者とするべし、仏法ぶつぽう・日本にほんにわ
たて七百余年一切經は五千・七千宗は八宗・十宗智人ちじんは稻麻とうまの
ごとし弘通くつうは竹葦ちくいにいたり、しかれども仏には阿弥陀仏諸仏あみだぶつしよぶつの
名号みょうごうには弥陀みだの名号みょうごうほどひろまりてをはするは候はず、此の
名号みょうごうを弘通くつうする人は慧心えしんは往生要集おうじようようしゅうをつくる日本国三分が一
名号みょうごうを弘通くつうする人は慧心えしんは往生要集おうじようようしゅうをつくる日本国三分が一

は一同の弥陀念仏者・永観は十因と往生講の式をつくる扶桑三分が二分は一同の念仏者法然せんちやくをつくる本朝一同の念仏者、而れば今の弥陀の名号を唱うる人人は一人が弟子にはあらず、此の念仏と申すは雙観經・觀經・阿弥陀經の題名なりごんだいじようきよう 権大乘經の題目の広宣流布するは実大乘經の題目の流布せんずる序にあらずや、心あらん人は此れをすひしぬべし、権經流布せば実經流布すべしごんきよう 権經の題目流布せば実經の題目も又流布すべし、欽明より当帝にいたるまで七百余年いまだきかずいまだ見ず南無妙法蓮華經と唱えよと他人をすすめ我と唱えたる智人なし、日出でぬれば星かくる賢王来れば愚王ほろぶ実經流布せば権經のとどまり智人南無妙法蓮華經と唱えば愚人の此れにごんきよう 随はんこと影と身と声と響とのごとくならん、日蓮は日本第一

の法華經ほけきょうの行者ぎょうじやなる事あえて疑うたがひなし、これをもつてすいせ
よ漢土月支かんとがっしにも一閻浮提えんぶだいの内にも肩をならぶる者は有あるべから
ず。

問いうて云いく正嘉しょうかの大地だいちしん文永ぶんえいの大慧星すいせいはいかなる事によつて
出来しゅつせるや答こえて云いく天台てんだい云いく「智人ちじんは起おを知り蛇じゃは自みづから蛇じゃを
識しる」等云云、問いて云いく心いかな、答こえて云いく上行菩薩じょうぎょうぼさつの大地だいち
より出現しゅつげんし給たまいたりしをば弥勒菩薩みろくぼさつ・文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつ觀世音菩薩かんぜおんぼさつ
藥王菩薩等やくおうぼさつの四十一品の無明むみょうを断だぜし人人ひとびとも元品がんぼんの無明むみょうを断だぜざ
れば愚人ぐにんといはれて寿量品じゅうりやうほんの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの末法まつぽうに流布るふせん
ずるゆへに、此の菩薩ぼさつを召いだされたるとはしらざりしという事
なり、問いうて云いく日本にほん・漢土月支かんとがっしの中に此の事を知る人あるべし
や、答こえて云いく見思けんじを断尽だんじんし四十一品の無明むみょうを尽せる大菩薩ぼさつだに

も此の事をしらせ給はずいかにいわうや一毫の惑をも断ぜぬ者ども
この此の事を知るべきか、問うて云く智人なくば・いかでか此れ
を対治すべき例せば病の所起を知らぬ人の病人を治すれば人必ず
死す、此の災の根源を知らぬ人人がいのりをなさば国まさに亡び
ん事疑いなきか、あらあさましやあらあさましや、答えて云く
蛇は七日が内の大雨をしり鳥は年中の吉凶をしる此れ則ち大竜
の所従又久学のゆへか、日蓮は凡夫なり、此の事をしるべから
ずといえども汝等にはほこれとさんとさん、彼の周の平王の時・
禿にして裸なる者出現せしを辛有といふし者うらなつて云く百
年が内に世ほろびん同じき幽王の時山川くづれ大地ふるひき白陽
と云う者勘えていはく十二年の内に大王事に値せ給うべし、今の
大地震大長星等は国王・日蓮をにくみて亡国の法たる禅宗と

念ねん仏ぶつ者と真しん言ごん師しをかたふどせらるれば天てんいからせ給たまいていださせ給たまうところの災さい難なんなり。

問いうて云いくなにをもつてか此これを信しんぜん、答こたえて云いく
最さい勝しょう王おう経きやうに云いく「悪あく人にんを愛あい敬きやうし善ぜん人にんを治ち罰ばつするに由よるが故ゆに
星せい宿しゆく及および風ふう雨う皆みな時ときを以もつて行いわれず」等もつ云い云、此この經きやう文もんのごとき
んば此こ国こくに悪あく人にんのあるを王おう臣しん此これを帰き依えすという事こと疑うたがいなし、
又また此この国こくに智ち人じんあり国こく主しゆ此これをにくみてあだすという事ことも又また疑うたが
いなし、又また云いく「三さん十三じふ天てんの衆しゆ咸みな忿ふん怒ぬの心こころを生はじ変へん怪げ流りゅう星せい墮おち二
の日に俱ぐ時ときに出いで他た方ほうの怨おん賊そく来きりて国こく人じん喪そう乱らんに遭あわん」等もつ云い云、す
でに此この国こくに天てん変へんあり地ち天てんあり他た国こくより此これをせむ三さん十三じふ天てんの御ご
いかり有あること又また疑うたがいなきか、仁にん王おう経きやうに云いく「諸もろの惡あく比ひ丘きよ多おほく
名な利りを求もとめ国こく王おう・太たい子し・王み子この前まえに於おいて自みら破は仏ぶつ法ぽうの因いん縁ねん・破は国こく

の因縁いんねんを説く其王別わきまえずして信じて此語ことばを聴く」等云云、又云く

「日月度にちげつどを失うしない時節じせつ反逆はんぎやくし・或あるは赤日出せきじついで・或あるは黒日出こくじついで二三

四五の日出いで・或あるは日蝕にっしょくして光なく無く・或あるは日輪にちりん一重二重四

五重輪ごじゅうりんげん現げんず」等云云、文の心は悪比丘等あくびく・国こくに充満じゅうまんして国王こくおう・

太子たいし・王子等みこをたばらかして破仏法はぶつぽう・破国はこくの因縁いんねんをとかば其その国

の王等わうとう・此の人このひとにたばらかされてをぼすやう、此の法このほふこそ持仏法ちぶつぽう

の因縁いんねん持国の因縁いんねんとをもひ此の言このことばを・をさめてをこなうならば

日月にちがつに変たいふうあり大風だいうと大雨たいかと大火等しゅつたい出来しゅつし次つぎには内賊ぞくと申もうして

親類しんるいより・大兵乱ひようらんおこり我がかたうとしぬべき者をみなば皆打みなち

失うしないて後あとには他国たこくに・せめられて・或あるは自殺じそくし・或あるはいけどりに

せられて・或あるは降人かうじんとなるべし是これ偏ひとえに仏法ぶつぽうをほろぼし国こくをほろ

ぼす故ゆゑなり、守護経しゆごに云いく「彼の釈迦牟尼如来しやくかむににょらいしやう所有きやうほうの教法いっさいは一切

の天魔・外道げどう悪人あくにん五通ごつうの神仙しんせん皆みな乃至ないし少分せうぶんをも破壊はえせず而しかに此この

名相みょうそうの

諸もろもろの

惡沙門しゃもん皆みな悉ことごとく毀滅きめつして

余あり有あること

無なからしむ

須弥山しゆみせんをたといさんぜんかい假使たといさんぜんかい三千界さんせんかいの中の草木そうもくを尽きして薪たきぎと為なし長時ちやうじに焚燒ほんしやうす

とも一毫いちごうも損そんすること無なし若もし劫火ごうか起おこりて火内うちよ従したがり生なじ須臾しゆゆも

燒滅しやうめつせんには灰燼かいじんをも余あす無なきが如ごとし」等云云とんぐんぐん、蓮華れんげ面經めんきやうに云いく

「仏阿難あなんに告つげたまたまへ譬たとえば師子ししの命終みやうじゆうせんもに若もしは空くう若もしは地ち

若もしは水みづ若もしは陸りく所有しやうの衆生しゆじやう敢あえてて師子ししの身みの穴くわを食くらわず唯ただ師子しし

自みづから諸もろもろの虫むしを生なじて自みづから師子ししの穴くわを食くらうが如ごとし阿難あなん我が之これの仏法ぶつぽう

は余あそぎの能よく壞やぶるに非あらず是これ我法わがほうの中の諸もろもろの惡比丘あくびく我が三さん大だい

阿僧祇あそぎ劫こ積か行か勤か苦かし集まむる所ところの仏法ぶつぽうを破やぶらん」等云云とんぐんぐん、經文きやうもんの

心こころは過去かこの迦葉か佛しやう釈迦しや如來にょらいの末法まっぽうの事ことを訖哩きりき枳王しきわうにかたらせ給たまい

釈迦しや如來にょらいの仏法ぶつぽうをばいかなるものかうしなうべき、大族王だいぞくわうの五天ごてん

の堂舎を焼き払い十六大國の僧尼を殺せし漢土の武宗皇帝の九國
の寺塔四千六百余所を消滅せしめ僧尼二十六萬五百人を還俗せ
し等のごとくなる惡人等は釈迦の佛法をば失うべからず、三衣を
身にまとひ一鉢を頸にかけ八萬法藏を胸にうかべ十二部經を口に
ずうせん僧侶が彼の佛法を失うべし、譬へば須彌山は金の山なり
三千大千世界の草木をもつて四天六欲に充滿してつみこめて一
年・二年百千萬億年が間やくとも一分も損ずべからず、而るを
劫火をこらん時須彌の根より豆計りの火いでて須彌山をやくの
みならず三千大千世界をやき失うべし、若し仏記のごとくならば十
宗・八宗・内典の僧等が佛教の須彌山をば焼き払うべきにや、
小乗の俱舍・成実・律僧等が大乗をそねむ胸の瞋恚は炎なり
真言の善無畏禪宗の三階等浄土宗の善導等は佛教の師子の肉

より出来しゅったいせる蝗虫いなむしの比丘びくなり、伝でん教大師きやうだいしは三論さんろん・法相華嚴等ほつそうけこんの
日本にほんの碩徳等せきとくを六虫むしとかかせ給たまへり、日蓮にちれんは真言しんごん・禪宗ぜんしゆう・浄土じやうど
等の元祖がんそを三虫さんしゆとなづく、又天台宗てんだいしゆうの慈覚じかく・安然あんねん・慧心等えしんは
法華經ほけきやう傳でん教大師きやうだいしの師子ししの身みの中の三虫さんしゆなり。

此等これらの大謗法ほうほうの根源こんげんをただす日蓮にちれんにあだをなせば天神てんじんもをしみ
地祇ちぎもいからせ給たまいて災天さいてんも大おおに起おこるなり、されば心うべし一
閻浮提えんぶだい第一だいいちの大事だいじを申もうすゆへに最第一さいだいいちの瑞相ずいそう此れをこれり、あわ
れなるかなや・なげかしきかなや日本国にほんこくの人皆無間みなむげん・大城だいじやうに
墮おちむ事ことよ、悦えつしきかなや・楽たのしかなや不肖ふしやうの身みとして今度心田このたび
に仏種ぶつしゆをうえたる、いまにしもみよ大蒙古国だいもうここく・数万艘の兵船をう
かべて日本にほんをせめば上一人かみいちにんより下万民ばんみんにいたるまで一切いっさいの仏寺
一切いっさいの神寺をばなげすて各各声連合をつるべて南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう・

なむ みようほうれんげきよう とな たなごころ
南無妙法蓮華經と唱え 掌 を合せてたすけ給え、 日蓮の御房

にちれん ごぼう
日蓮の御房とさけび候はんずるにや、 例せば月支のいう大族王は

たなごころ
幻日王に 掌 をあはせ日本の宗盛はかぢわらをうやまう、 大慢

したが
のものは敵に随うという・このことわりなり、 彼の輕毀大慢の

じようもく
比丘等は始めには杖 木をととのへて不輕菩薩を打ちしかども後

たなごころ
には 掌 をあはせて失をくゆ提婆達多是釈尊の御身に血をいだ

りんじゅう
ししかども臨終の時には南無と唱えたりき、 仏とだに申したり

じごく
しかば地獄には墮つべからざりしを業ふかくして但南無とのみと

にほんこく こうそう
なへて仏とはいはず、 今・日本国の高僧等も南無日蓮聖人と

なむ ばか
なえんとすとも南無計りにてやあらんずらんふびんふびん。

いわ みぼう
外典に曰く未萌をしるを聖人という内典に云く三世を知るを

しょうにん
聖人という余に三度のかうみようあり一には去し文応元年庚申七

りっしょうあんこくろん

さいみょうじ

やどや

月十六日に立正安国論を最明寺殿に奏したてまつりし時宿谷の

入道に向つて云く禅宗と念佛宗とを失い給うべしと申させ

給へ此の事を御用いなきならば此の一門より事をこりて他国に・

せめられさせ給うべし、二には去し文永八年九月十二日申の時に

平左衛門尉に向つて云く日蓮は日本国の棟梁なり予を失なうは

日本国の柱礎を倒すなり、只今に自界叛逆難とてどううちして

他国侵逼難とて此の国の人人他国に打ち殺さるのみならず多くい

けどりにせらるべし、建長寺・寿福寺・極楽寺・大仏・長楽寺等

の一切の念佛者・禅僧等が寺塔をばやきはらいて彼等が頸をゆひ

のはまにて切らずば日本国必ずほろぶべしと申し候了ぬ、第三に

は去年十一月四月八日左衛門尉に語つて云く、王地に生れたれば

身をば随えられたてまつるやうなりとも心をば随えられたてまつ

るべからず念仏ねんぶつの無間獄むげんごく禪ぜんの天魔てんまの所為しよゐなる事は疑うたがひいなし、
殊ことに真言宗しんごんしゅうが此この国土こくどの大なるわざはひにては候もうこなり大蒙古だいもこを
調伏じょうぶくせん事真言師しんごんしには仰おほせ付けらるべからず若もし大事だいじを真言師しんごんし
・調伏じょうぶくするならばいよいよいよいよ此この国ほろぶべしと申まうせし
かば頼綱あみ問いうて云いくいつごろよせ候いべき、予言いく経文きやうもんにはいつ
とはみへ候いはねども天みの御氣色おけしきいかりすくなからず・きう急に見いへ
て候いよも今生こんじやうはすぐし候いはじと語かたりたりき、此この三さんつの大事だいじは
日蓮にちれんが申もうしたるにはあらず只偏ただひとえに釈迦しやか如来にやらいの御神たましい・我身わがみに入り
かわせ給たまひいけるにや我が身みながらも悦よろこび身みにあまる法華經ほけきやうの
一念三千いちねんさんぜんと申もうす大事だいじの法門ほうもんはこれなり、經いに云いく所謂いわゆる諸法しよほう如是にやぜそう
と申もうすは何事なにことぞ十如是じふこの始にやぜの相如是だいいちが第一だいじの大事だいじにて候いへば仏ぶつは
世よにいでさせ給たまう、智人ちじんは起おこをしる蛇じゃみづから蛇じゃをしるとはこれ

なり、衆流しゅうるあつまりて大海たいかいとなる微塵みじんつもりて須弥山しゅみせんとなれり、

にちれん ほけきよう

日蓮が法華經を信じ始めしは日本国にほんこくには一いったい・一微塵みじんのごとし、

ほけきよう

法華經を二人・三人・十人・百千万億人・唱え伝うるほどならば

みようかく

妙覺の須弥山しゅみせんともなり大涅槃ねはんの大海たいかいともなるべし仏になる道は

こ

此れよりほかに又もとむる事なかれ。

いわ

問うて云く第二の文永八年九月十二日の御勘氣の時はいかにと

ふんえい

して我をそんなせば自他じたのいくさをこるべしとはしり給うや、答う

だいしつきよう

大集經たいしつきよう十に云く「若し復諸の刹利国王諸の非法なを作し世尊せそんの

しょうもん

声聞しょうもんの弟子でしを悩乱のうらんし若しは以て毀罵きめし刀杖とうじょうをもて打斫ちようしやくし及び

いはつしゆじゆ

衣鉢種種いふくしんしんの資具しぐを奪もい若しは他の給施きゆうせに留難るなんを作す者有らば我等われら

じねん

彼をして自然じねんに卒にわかに他方たほうの怨敵おんてきを起さしめ及び自界およの国土こくどにも亦また

ひようき

兵起り飢疫飢饉きえき ききん非時の風雨ふうう・鬭諍言とうじょうごん訟讖しやうきほう謗ほうせしめ、又其その王を

して久しからずして復当に己れが国を亡失せしむべし」等云云、

夫れ諸経に諸文多しといえども此の経文は身にあたり時にのぞ

んで殊に尊くをぼうるゆへに・これをせんしいだす、此の経文

に我等とは梵王と帝釈と第六天の魔王と日月と四天等の三界の

一切の天竜等なり、此等の上主・仏前に詣して誓つて云く仏の

滅後・正法・像法・末代の中に正法

を行ぜん者を邪法の比丘等が国主にうつたへば王に近きもの王に

心よせなる者・我がたつとしとをもう者のいうことなれば理不尽

に是非を糾さず・彼の智人をさんざんとはぢにをよばせなんどせ

ば、其の故ともなく其の国ににわか・大兵乱・出現し後には

他国に・せめらるべし其の国主もうせ其の国もほろびなんずと

かれて候、いたひとかゆきとはこれなり、予が身には今生には

させる失なし但国をたすけんがため生国の恩をほうぜんと申せし
を御用いもちなからんこそ本意ほんいにあらざるに、あまさへ召し出して
法華經ほけきようの第五の巻を懷かいいちゆう中せるをとりいだしてさんざんとさいな
み、結句けつくはこうぢをわたしなんとせしうば申したりしなり、日月にちがつ
天しよに処たまいし給いながら日蓮にちれんが大難だいにんにあうを今度このたびかわらせ給はずば一
つには日蓮にちれんが法華經ほけきようの行者ぎようじやならざるか忽たちまちに邪見じゃけんをあらたむべし、
若もし日蓮にちれん・法華經ほけきようの行者ぎようじやならば忽たちまちに国にしろしを見せ給へ若もし
しからずば今の日月等にちがつは釈迦しやか・多宝たほう・十方じゆつぽうの仏をたぶらかし
奉たてまつる大妄語もうごの人なり、提婆だいばが虚誑罪こおうざい・俱伽利くぎやりが大妄語もうごにも百千万
億倍しゆつたいすぎさせ給たまへる大妄語もうごの天なりと声をあげて申せしかば忽たちまち
出来しゆつたいせる自界じかい叛逆ほんぎやくなんなり、されば国土こくどいたくみだれば我身わがみはい
うにかひなき凡夫ほんぷなれども御經たもを持ちまいらせ候そうろうぶんざい分齊とうせは当世に

は日本第一の大人なりと申すなり。

問うて云く慢煩惱は七慢・九慢・八慢あり汝が大慢は仏教に

明すところの大慢にも百千万億倍すぐれたり、彼の徳光論師は

弥勒菩薩を礼せず・大慢婆羅門は四聖を座とせり、大天は凡夫に

して阿羅漢とななる無垢論師が五天第一といふし、此等は皆阿鼻

に堕ちぬ無間の罪人なり汝いかでか一閻浮提第一の智人となの

れる地獄に堕ちざるべしやおそろしおそろし、答えて云く汝は

七慢・九慢・八慢等をばしれりや大覺世尊は三界第一となのらせ

給う一切の外道が云く只今天に罰せらるべし大地われて入りなん

と、日本国の七寺・三百余人が云く最澄法師は大天が蘇生か鉄

腹が再誕か等云云、而りといえども天も罰せずかへて左右を守護

し地もわれず金剛のごとし、伝教大師は叡山を立て一切衆生の

眼目がんもくとなる結句けっく七大寺は落ちて弟子でしとなり諸国しよこくは檀那だんなとなる、されば現げんに勝すぐれたるを勝すぐれたりという事は慢くどくににて大功徳なりけるか、伝でん教大師ぎやうだいし云く「天台法華宗てんだいほつけしやうの諸宗しよしやうに勝すぐれたるは所依しよえの經によ擲ゆえるが故ゆえに自讚じさん毀他きたならず」等云云ほけきやう法華經第七ほけきやうに云く「衆山しやうざんの中に須弥山しゆみせんこれ第一だいいちなり此この法華經ほけきやうも亦復またまたかくの如ごとし諸經しよきやうの中に於おいて最もこれ其その上かみなり」等云云、此この經文きやうもんは已說いせつの華嚴けこん・般若はん・大日經等だいにちきやう、今說こんせつの無量義經むりやうぎきやう、當說とうせつの涅槃經等ねはんぎきやうの五千・七千月支竜宮がっしりゆうぐう・四王しおう・天・☆利天日月とうりてんにちがつの中うちの一切經いっさいきやう尽じゆつ十方界じふぱうかいの諸經しよきやうは土山・黒山・小鉄圀山・大鉄圀山てつちせんのごとし日本国にほんこくにわたらせ給たまえる法華經ほけきやうは須弥山しゆみせんのごとし。

又云く「能よく是この經典きやうてんを受持じゆじすること有あらん者ものも、亦復またまた是かくくことの如ごとし、一切衆生いっさいしゆじやうの中に於おいて亦またこれ第一だいいちなり」等云云、此この經文きやうもん

をもつて案ずるに華嚴經けこんきょうを持てる普賢菩薩ふげんぼさつ・解脫月菩薩げだつがつぼさつ等・
竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ・馬鳴菩薩めみょうぼさつ・法藏大師ほうそうだいし・清涼國師せいりょうこくし・則天皇后そくてんこうこう・審祥しんじょう
大德だいとく・良弁りょうべん僧正そうじょう・聖武天皇しょうむてんのう・深密じんみつ・般若經はんんにゃきょうを持てる勝義生しょうぎしやう
菩薩ぼさつ・須菩提尊者しゅぼだいそんじや・嘉祥大師かじやうだいし・玄奘三藏げんじやうさんそう・太宗たいそう・高宗こうそう・觀勒かんろく・
道昭だうしやう・孝德天皇てんのう・真言宗しんこんしゅうの大日經だいにちきやうを持てる金剛薩こんこうさつた・竜猛菩薩りゅうもうぼさつ
・竜智菩薩りゅうちぼさつ・印生王いんせいおう・善無畏三藏ぜんむいさんそう・金剛智三藏こんかうしさんそう・不空三藏ふくうさんそう・玄宗げんそう
・代宗たいそう・慧果けいこ・弘法大師こうぼうだいし・慈覺大師じかくだいし・涅槃經ねはんぎやうを持てる迦葉童子かしやうどうじ
菩薩ぼさつ・五十二類にふににるい・曇無讖三藏どんむさんさんそう・光宅寺こうたくじの法雲南三ほううんなんざん・北七ほくひちの十師等
よりも末代惡世まつだいあくせの凡夫ぼんぷの一戒いっかいも持たず一闡提いっせんたいのごとくに人には思
はれたれども、經文きやうもんのごとく已今当まさにすぐれて法華經ほけきやうより外は
仏になる道なしと強盛かうじやうに信じて而も一分いちぶんの解しかなからん人人ひとびとは、
彼等かれらの大聖たいせいには百千万億倍せんまんのまさりなりと申す經文きやうもんなり、彼の

ひとひと ある 人人は・或は彼の きようぎよう 経経に しばら 且く人を入れて法華経へうつさんがた

めなる人もあり、ある 或は彼の経に著をなして法華経へ入らぬ人も

あり、ある 或は彼の きようぎよう 経経に とどまる 留逗のみならず彼の きようぎよう 経経を深く執す

るゆへに法華経を彼の経に劣るといふ人もあり、されば今法華経

ぎようじや の行者は心うべし、たと 譬えば「一切 いっさい

せんるこうか の川流江河の諸水の中に海これ第一なるが如く法華経を持つ者も

またまたかく 亦復是くごと の如し、又衆星の中に月天子最もこれ第一なるが如く

ほけきよう 法華経を持つ者も亦復是くごと の如し」等と御心えあるべし、当世・

にほんこく 日本国の智人等は衆星のごとし日蓮は満月のごとし。

問うて云く古へかくのごとくいえる人ありや、答えて云く

でんぎようだいし 伝教大師の云く「当に知るべし他宗所依の経は未だ最さい為第一だいな

らず其その能く経を持つ者も亦未だ第一ならず天台法華宗は所持しよじの

むげんじごく 無間地獄に墮ちん事 疑うべしや、法華經の八の卷に云く「若し

後の世に於て是の經典を受持し読誦せん者は乃至諸願虚しから

ず、亦現世に於て其の福報を得ん」又云く「若し之を供養し讚歎

する」と有らん者は当に今世に於て現の果報を得べし」等云云、

此の二つの文の中に亦於現世・得其福報の八字・

まさにこんぜにおいてげんのかほうをえん 当於今世・得現果報の八字・已上一六字の文むなしくして日蓮

こんにょう 今生に大果報なくば如来の金言は提婆が虚言に同じく多宝の

しょうみよう 証明は俱伽利が妄語に異ならじ、謗法の一切衆生も阿鼻地獄

に墮つべからず、三世の諸仏もましまさざるか、されば我が弟子

等心みに法華經のごとく身命もおしまず修行して此の度仏法を

心みよ、南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。

そもそも

抑此の法華經の文に「我身命を愛せず但無上道を惜しむ」

涅槃經に云く「譬えば王使の善能談論して方便に巧なる命を他国

に奉るに寧ろ身命を喪うとも終に王所説の言教を匿さざるが

如し智者も亦爾なり凡夫中に於て身命を惜まずかならず大乘

方等如來の秘藏一切衆生に皆仏性有りと宣説すべし」等云云、

いかやうな事のあるゆへに身命をすつるまでにてあるやらん

委細にうけ給わり候はん、答えて云く予が初心の時の存念は

傳教・弘法・慈覺智証等の勅宣を給いて漢土にわたりし事の

我不愛身命にあたれるか、玄奘三蔵の漢土より月氏に入りしに

六生が間・身命をほろぼししこれ等か、雪山童子の半偈のため

に身をなげ、藥王菩薩の七万二千歳が間・臂をやきし事かなん

をもひしほどに經文のごときんば此等にはあらず、經文に

我不愛身命と申すは上に三類の敵人をあげて彼等がのりせめ

とうじょう 刀杖に及んで身命しんみょうをうばうともみへたり、又涅槃經の文に寧喪ねはんぎょうしんみょう
身命等ととかれて候は次下の經文きょうもんに云く「一闍提いっせんたい有り羅漢らかんの像らかんを作なし空処くうしょに住し方等經典ほうとうきやうてんを誹謗ひぼうす、諸もろもろの凡夫人見ぼんぶ已おわつて皆真みな
の阿羅漢あらかん是れ大菩薩ぼさつなりと謂いわん」等云云、彼の法華經の文に第
三の敵人てきじんを説いて云く「或あるは阿蘭若あれんにやに納衣のうえにして空閑くうげんに在あつて
乃至世ないしに恭敬きやうけいせらるること六通ろくつうの羅漢らかんの如ごとき有らん」等云云、
般泥☆經はんにに云く「羅漢らかんに似たる一闍提いっせんたい有あつて惡業あくごうを行なず」等云云、
此等の經文きやうもんは正法しょうほうの強敵ごうてきと申もうすは惡王惡臣あくおうよりも外道魔王げどうまおうより
も破戒はかいの僧侶そうりよよりも、持戒有智じかいうちの大僧だいそうの中に大謗法ほうぼうの人あるべし、
されば妙樂大師みやうらくだいしかいて云く「第三最はなはだも甚しし後後の者うたたりは轉識うたたりり
難がたきを以もつての故なり」等云云、法華經ほけきやうの第五の卷いわに云く「此の
法華經ほけきやうは諸仏しよぶつ如來にらいの秘密ひみつの藏ひみつなり、諸經しよきやうの中に於おいて最も其の上そ

に在り」等云云、此の經文きやうもんに最在もつともそのかみにあり其上の四文あり、されば此

の經文きやうもんのごときんば法華經ほけきやうを一切經いっさいきやうの頂いただきにありと申すが

法華經ほけきやうの行者ぎやうじやにてはあるべきか、而しかるを又國王こくおうに尊重そんぢやうせらるる

人人ひとびとあまたありて、法華經ほけきやうにまさりてをはする經經きやうぎやうましますと

申す人にせめあひ候はん時そうら、かの人は王臣おうしんに御歸依ごきえあり法華經ほけきやうの

行者ぎやうじやは貧道ひんどうなるゆへに、国くにこそつてこれをいやしみ候はん時そうら、

不輕菩薩ふぎやうぼさつのごとく賢愛論師けんあいろんしがごとく申しつをらば身命しんみやうに及ぶべ

し、此これが第一だいいちの大事だいじなるべしとみへて候此の事は今の日蓮にちれんが身

にあたれり、予が分齊ぶんざいとして弘法大師こうぼうだいし・慈覺大師じかくだいし・善無畏三藏ぜんむいさんそう・

金剛智三藏さんそう・不空三藏ふくうさんそうなどを法華經ほけきやうの強敵かうてきなり經文きやうもんまことな

らば無間地獄むげんじごくは疑うたがいなしなんと申すは裸形あかはだかにて大火たいかに入るはや

すし須弥しゆみを手にとてなげんはやすし大石たいかいを負うて大海たいかいをわたらん

はやすし日本国にして此の法門を立てんは大事なるべし云云。

りようぜんじようど

きようしゆしやくそんほうじようせかい

たほうぶつ

じゅつぼうふんじん

しよぶつ

靈山浄土の教主釈尊宝浄世界の多宝仏・十方分身の諸仏・

じゆせんがい

ぼさつ

ほんしやく

にちがつ

してん

みよう

地涌千界の菩薩等梵釈・日月・四天等・冥に加し顕に助け給は

ずば一時

いちじ

あんのん

なるべしや。

◆四五

報恩抄

日蓮之を撰す

293p

夫れ老狐は塚をあとにせず白亀は毛宝が恩をほうず畜生すら

そろうこ

はくき

もうほう

ちくしやう

かくのごとしいわうや人倫をや、されば古への賢者予譲といゐし

じんりん

いにしえ

けんじやよじやう

者は剣をのみて智伯が恩にあてこう演と申せし臣下は腹をさひて

えい

いこう

きも

ぶつきやう

衛の懿公が肝を入れたり、いかにいわうや仏教をならはん者

ふ

ししやう

父母・師匠国恩をわするべしや、此の大恩をほうぜんには必ず

ぶつぼう

ちしや

かな

たと

仏法をならひきはめ智者とならで叶うべきか、譬へば衆盲をみち

びかん

いきめくら

きやうが

わきま

びかんには生盲の身にては橋河をわたしがたし方風を弁えざら

・華嚴・浄土・禪宗・天台法華宗なり此の十宗を明師として
 いっさいきよう
 一切経の心をしるべし世間の学者等おもえり此の十の鏡はみな
 しょうじき ぶつどう
 正直に仏道の道を照せりと小乗の三宗はしばらくこれを・を
 しょうそく
 く民の消息の是非につけて他国へわたるに用なきがごとし、
 だいじょう
 大乘の七鏡こそ生死の大海をわたりて浄土の岸につく大船なれ
 なら
 ば此を習いほどひて我がみも助け人をもみちびかんと・おもひて
 だいじょう
 習ひみるほどに大乘の七宗いづれもいづれも自讃あり我が宗こ
 いちだい
 そ一代の心はえたれえたれ等云云、所謂華嚴宗の杜順・智儼・
 ほうそう ちようかん
 法蔵・澄観等、法相宗の玄奘慈恩・智周・智昭等、三論宗の
 こうこう かじよう
 興皇・嘉祥等、真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・
 ちしろう ぜんしゅう だるま えの
 智証等、禪宗の達磨・慧可・慧能等、浄土宗の道綽・善導・
 えかん げんくう
 懷感・源空等、此等の宗宗みな本経・本論によりて我も我も

一切經いっさいきょうをさとれり仏意ぶつゐをきはめたりと云云、彼の人人ひとびと云く
一切經いっさいきょうの中には華嚴經けこんきやうだいいち第一だいいちなり法華經ほけきやう・大日經だいにちきやう等は臣下しんかのごと
し、真言宗しんこんしゅうの云く一切經いっさいきょうの中には大日經だいにちきやうだいいち第一だいいちなり余經よきやうは衆星しゅうせい
のごとし、禪宗ぜんしゅうが云く一切經いっさいきょうの中には楞伽經りやうがきやうだいいち第一だいいちなり乃至余宗ないしよししゅう
かくのごとし、而しかも上に挙あぐる諸師しよしは世間せけんの人人ひとびと・各各おもえり
諸天しよてんの帝釈たいしやくをうやまひ衆星しゅうせいの日月にちがつに隨したがうがごとし我等われら凡夫ぼんぶはい
づれの師師ししなりとも信あずるならば不足ふそくあるべからず仰あいでこそ信
ずべけれども日蓮にちれんが愚案ぐあんはれがたし、世間せけんをみるに各各お・我も我
もといへども国主こくしゅは但一人ひとりなり二人ふたりとなれば国土こくどおだやかならず
家に二の主ふたりのしゅあれば其その家必かならずずやぶる一切經いっさいきょうも又かくのごとくや
有あるらん何いずれの經きやうにてもをはせ一經いっさいきょうこそ一切經いっさいきょうの大王だいおうにてはをは
すらめ、而しかるに十宗じしゅう・七宗しちしゅうまで各各お・諍論じやうろんして隨したがはず国くにに七人

・十人の大王ありて万民をだやかならじ・いかんがせんと疑う
ところに一の願を立つ我れ八宗・十宗に随はじ天台大師の専ら
經文を師として一代の勝劣をかんがへしがごとく一切經を開
きみるに涅槃經と申す經に云く「法に依つて人に依らざれ」等云
云依法と申すは一切經・不依人と申すは仏を除き奉りて外の
普賢菩薩・文殊師利菩薩乃至上にあぐるところの諸の人師なり、
此の經に又云く「了義經に依つて不了義經に依らざれ」等云云、
此の經に指すところ了義經と申すは法華經・不了義經と申すは
華嚴經・大日經・涅槃經等の已今当の一切經なり、されば仏の
遺言を信ずるならば専ら法華經を明鏡として一切經の心をばし
るべきか。

したが
随つて法華經の文を開き奉れば「此の法華經は諸經の中に

おい
於て最も其の上そに在り」等云云此の經文きようもんのごとくば須弥山しゅみせんの
いただき
頂ちやうに帝釈たいしゃくの居あるがごとく輪王りんのおうの頂いただきに如意宝珠にょいほうじゆのあるがごとく
しゅうぼく
衆木の頂いただきに月のやどるがごとく諸仏しよぶつの頂いただきに肉髻にくけいの住せるが
ほけきよう
ごとく此の法華經ほけきようは華嚴經けこんきよう・大日經だいにちきよう・涅槃經ねはんきよう等の一切經いっさいきようの
ちやうじよう
頂上ちやうじようの如意宝珠にょいほうじゆなり。

されば専ら論師・人師をすてて經文に依るならば大日經・
華嚴經等に法華經の勝れ給えることは日輪の青天に出現せる時
眼あきらかなる者の天地を見るがごとく高下宛然なり、又
大日經・華嚴經等の一切經をみるに此の經文に相似の經文・
一字・一点もなし、或は小乘經に對して勝劣をとかれ・或
は俗諦に對して真諦をととき・或は諸の空仮に對して中道をほめ
たり、譬へば小国の王が我が国の臣下に對して大王というがご
とし、法華經は諸王に對して大王等と云云、但涅槃經計りこそ
法華經に相似の經文は候へ、されば天台已前の南北の諸師は
迷惑して法華經は涅槃經に劣と云云、されども専ら經文を開き
見るには無量義經のごとく華嚴・阿含・方等・般若等の四十余年
の經經をあげて涅槃經に對して我がみ勝ると・とひて又法華經

に對する時は是の經の出世は乃至法華の中の八千の聲聞に記☆
を授くることを得て大菓實を成ずるが如き秋收冬藏して更に
所作無きが如し等と云云、我れと涅槃經は法華經には劣るととけ
る經文なり、かう經文は分明なれども南北の大智の諸人の迷
うて有りし經文なれば末代の學者能く能く眼をとどむべし、此
の經文は但法華經・涅槃經の勝劣のみならず十方世界の
一切經の勝劣をもしりぬべし、而るを經文にこそ迷うとも
天台・妙樂・伝教大師の御れうけんの後は眼あらん人人はし
りぬべき事ぞかし、然れども天台宗の人たる慈覺・智証すら猶
此の經文にくらし・いわうや余宗の人人をや。

・或る人疑つて云く漢土・日本にわたりたる經經にこそ
法華經に勝たる經はをはずとも月氏・竜宮・四王・日月・

とつりてん とそつ ☆利天・都率天などには恒河沙の経経 ましますなれば其中に

ほけきよう すぐ 法華経に勝れさせ給う御経やましますらん、答て云く一をもつて

うたがい いわ 万を察せよ庭戸を出でずして天下をしるとはこれなり、癡人が

疑つて云く我等は南天を見て東西北の三空を見ず彼の三方の空

に此の日輪より別の日やましますらん、山を隔て煙の立つを見て

火を見ざれば煙は一定なれども火にてやなかるらん・かくのごと

くいはん者は一闡提の人としるべし生盲にことならず、法華経

ほうしほん しゃかによらい きんく の法師品に釈迦如来金口の誠言をもつて五十余年の一切経の

しょうれつ しょうれつ 勝劣を定めて云く「我所説の經典は無量千万億にして已に説き

と まさ 今説き当に説ん而も其の中に於て此法華経は最も為難信難解な

り」等云云、此の経文は但釈迦如来・一仏の説なりとも等覚已下

あお は仰いで信ずべき上・多宝仏・東方より来りて真実なりと証明

じゅつぽう

しよぶつ

しゃかぶつ

こうちようぜつ

ほんてん

し十方の諸仏集りて釈迦仏と同く広長舌を梵天に付け給て後・

各各・国国へ還らせ給いぬ、已今当の三字は五十年並びに十方

さんぜしよぶつ

三世の諸仏えの御経、一字一点ものこさず引き載せて法華經に對

して説せ給いて候を十方の諸仏・此座にして御判形を加えさせ

たまひ

じゅつぽう

しよぶつ

こはんぎよう

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

たまひ

かえ

たまひ

でし

たまひ

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ほけきよう

ざる事は上品じょうぼんの妄語戒もうごの力ぞかし、法華經ほけきょうに勝すぐれたる御經ありと仰おおせある大妄語もうごあるならば恐らくはいまだ壞劫えこうにいたらざるに大地だいちの上にどうとおち候そうらはんか無間むげん・大城だいじょうの最下さいかの堅鉄けんてつにあらずばとどまりがたからんか、大妄語もうごの人は須臾しゅゆも空くうに処しょして四天下してんげを廻り給たまうべからずとせめたてまつるべし、而しかるを華嚴宗けこんしゅうの澄觀ちようかん等真言宗しんごんしゅうの善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・不空ふくう・弘法こうぼう・慈覺じかく・智証ちしよう等の大智さんそうの三藏大師だいし等の華嚴經けこんきよう・大日經だいにちきよう等は法華經ほけきように勝すぐれたりと立て給たまわば我等われらが分齊ぶんざいには及およばぬ事なれども大道理どうりのをすところは豈諸仏あにしょぶつの大怨敵おんてきにあらずや、提婆だいば・瞿伽梨くぎやりも・ものならず大天だいまん・大慢だいまん・外にもとむべからず、かの人人ひとびとを信のりずる輩やからはをそろしをそろし。

問いて云いく華嚴けこんの澄觀ちようかん・三論さんろんの嘉祥かじよう・法相ほっそうの慈恩じおん・真言しんごんの

善無畏乃至・弘法・慈覺・智証等を仏の敵との給うか、答えて
云く此大なる難なり仏法に入りて第一の大事なり愚眼をもつて
經文を見るには法華經に勝れたる經ありといはん人は設いいか
なる人なりとも謗法は免れじと見えて候、而るを經文のごとく
申すならば・いかでか此の諸人仏敵たらざるべき、若し又恐をな
して指し申さずは一切經の勝劣むなしかるべし、又此人人を恐
れて末の人人を仏敵といはんとすれば彼の宗宗の末の人人の云く
法華經に大日經をまさりたりと申すは我れ私の計にはあらず
祖師の御義なり戒行の持破・智慧の勝劣・身の上下はありとも
所学の法門はたがふ事なしと申せば彼人人にとがなし、又日蓮
此れを知りながら人人を恐れて申さずは寧喪身命・不匿教者の
仏陀の諫曉を用いぬ者となりぬ、いかんがせん・いはんとすれ

ば世間せけんをそろし止やめんとすれば仏の諫かんぎょう 曉しんたいのがれがたし進退しんたい此に谷きわまれり、

むべなるかなや、法華經ほけきょうの文いに云く「而しかも此經は如来にょらいの現在げんざいに

すら猶なほ怨嫉おんしつ多し況いんや滅度めつどの後いをや」又云く一切世間いっさいせけん怨多あだくして

信がじ難がたし等云云、釈迦しゃか仏を摩耶夫人まやふじんはらませ給たまいたりければ

第六天だいろくてんの魔王まおう・摩耶夫人まやふじんの御腹みはらをとをし見て我等われらが大怨敵おんてき法華經ほけきょう

と申もうす利剣りけんをはらみたり事の成なりぜぬ先にいかにしてか失うしなうべき、

第六天だいろくてんの魔王まおう・大医おおいと變じて淨飯王宮じょうはんおうぐうに入り御産安穩あんのんの良藥りょうやくを

持候もちそうろう 大医ありとののしりて毒どくを后きさきにまいらせつ、初生しよしやうの時ときは

石をふらし乳に毒をまじへ城いを出でさせ給たまいしには黒き毒蛇どくじやと變

じて道にふさがり乃至提婆瞿伽利波瑠璃王阿闍世王等あきよじんの惡人あくにんの身

に入りて・或あるは大石おおいしをなげて仏の御身おんみより血をいだし・或あるは釈子あきよじん

をころし・或あるは御弟子等おんでしを殺す、此等これらの大難だいなは皆遠くは法華經ほけきょうを

仏・世尊せそんに説かせまいらせじとたばかりし如来現在にょらいげんざい猶多ゆた怨嫉おんしつの

大難だいにんぞかし、此等これらは遠き難なんなり近き難なんには舍利弗しゃりほつ・目連もくれん・諸大

菩薩ぼさつ等も四十余年よんじゅうよねんが間は法華經ほけきょうの大怨敵おんてきの内ぞかし、況滅度後きやうめつごと

申もうして未来みらいの世には又此の大難だいにんよりも・すぐれてをそろしき大難だいにん

あるべしととかれて候、仏だにも忍しのびがたかりける大難だいにんをば凡夫ほんぶ

はいかでか忍しのぶべきいわうや在世ざいせより大なる大難だいにんにてあるべかん

なり、いかなる大難だいにんか提婆だいばが長三丈たけひろさ広一丈六尺じやうろくの大石・阿闍世あじゃせ

王の醉象しやうにはすぐべきとはおもへども彼かしこにもすぐるべく候なれば

小失せうしつなくとも大難だいにんに度度たびたび値う人をこそ滅後めつごの法華經ほけきょうの行者ぎやうじやとは

しり候はめ、付法蔵ふほうぞうの人人ひとびとは四依しえの菩薩ぼさつ・仏の御使おんつかいなり提婆だいば

菩薩ぼさつは外道げどうに殺され師子尊者ししそんじやは檀弥羅王だんみらに頭こうべを刎はねられ仏陀密ぶつだ

多・竜樹菩薩りゅうじゆぼさつ等は赤幡あかきはたを七年十二年さしとをす馬鳴菩薩めみやうぼさつは金錢

三億がかわりとなり如意論師は・おもひじにに死す。

此れ等は正法しょうぼう 一千年の内なり、像法ぞうぼうに入つて五百年・仏滅後

・一千五百年と申せし時漢土かんとどに一人の智人ちじんあり始は智ちぎ・・後には

智者大師ちしゃだいしとがうす、法華經ほけきようの義をありのままに弘通くつうせんと思ひ給

しに天台てんだい已前の百千万の智者ちしゃしなじなに一代いちだいを判ぜしかども詮し

て十流となりぬ所謂南三いわゆるなんざん・北七ほくひちなり十流ありしかども一流をもて

最さいとせり、所謂南三いわゆるの中の第三の光宅寺こうたくの法雲法師ほううんほつしこれなり、此

の人は一代いちだいの仏教ぶつぎようを五にわかつ其その五の中に三經をえらびいだ

す、所謂華嚴經いわゆるけこんきよう・涅槃經ねはんぎよう・法華經ほけきようなり一切經いっさいきようの中には華嚴經けこんきよう

第一だいいち・大王だいおうのごとし涅槃經ねはんぎよう第二・摂政せつしやう関白かんぱくのごとし第三法華經ほけきよう

は公卿等くぎようのごとし此れより已下いかは万民ばんみんのごとし、此の人は本より

智慧ちえかしこき上・慧觀えいかん・慧嚴えいげん・僧柔そにゆう・慧次ちしやなど申せし大智者

り習ひ伝え給るのみならず南北の諸師の義をせめやぶり山林にま
じわりて法華經・涅槃經華嚴經の功をつもりし上・梁の武帝召し
出して内裏の内に寺を立て光宅寺となづけて此の法師をあがめ
給う、法華經をかうぜしかば天より花ふること在世のごとし、
天鑒五年に大旱魃ありしかば此の法雲法師を請じ奉りて法華經
を講ぜさせまいらせしに藥草喻品の其雨普等・四方俱下と申す二
句を講ぜさせ給いし時・天より甘雨下たりしかば天子御感のあま
りに現に僧正になしまいらせて諸天の帝釈につかえ万民の国王
を・をそるるがごとく我とつかへ

給いし上・・或人夢く此人は過去の灯明仏の時より法華經をかう
ぜる人なり、法華經の疏四卷あり此の疏に云く「此經未だ碩然な
らず」亦云く「異の方便」等云云、正く法華經はいまだ仏理をき

わめざる経と書かれて候、此の人の御義おんぎ仏意に相ひ叶たまひひ給たまひいけれ

ばこそ天より花も下り雨もふり候けらめ、かかるいみじき事にて

候しかば漢土かんとの人人ひとびとさては法華経は華嚴経・涅槃経には劣にてこ

そあるなれと思ひし上・新羅しらぎ・百濟くだら・高麗こま日本まで此の疏じよひろま

りて大体だいたい一同の義にて候しに法雲法師御死去ありていくばくなら

ざるに梁りやうの末・陳の始に智ち☆法師ほつしと申す小僧出来せり、南岳なんがく

大師だいしと申せし人の御弟子おんでしなりしかども師の義も不審ふしんにありけるか

のゆへに一切いっさい経蔵に入つて度度御らんありしに華嚴経・涅槃経ねはんぎやう

・法華経ほけきやうの三経に詮じいだし此の三経の中に殊ことに華嚴経を講こうじ

給たまひいき、別して礼文らいもんを造りて日こう日に功をなし給たまひいしかば世間せけんの人

おもわく此人も華嚴経を第一だいいいちとおぼすかと思へしほどに法雲法師ほううんほつし

が一切経の中に華嚴第一・涅槃第二・法華第三と立てたるがあ

まりに不審なりける故にことに華嚴經を御らんありけるなり、か
くて一切經の中に法華第一・涅槃第二・華嚴第三と見定めさせ
給いてなげき給うやうは如来の聖教は漢土にわたれども人を
利益することなししかへりて一切衆生を惡道に導びくこと人師の
あやまり



☆ によれり、例せば国の長とある人東を西といふ天を地といふ

いだしぬれば万民は・かくのごとくに心うべし、後にいやしき者
出来して汝等が西は東汝等が天は地なりといはば・もちうる

ことなき上・我が長の心に叶わんがために今の人をのりうちなん

どすべしいかんがせんとはおぼせしかども・さてもだすべきにあ

らねば光宅寺の法雲法師は謗法によつて地獄に墮ちぬとののしら

れ給う、其の時南北の諸師はちのごとく蜂起し・からすのごとく

烏合せり、智☆法師をば頭をわるべきか国を・をうべきかなん

ど申せし程に陳主ちんしゅ此れをきこしめして南北の数人に召し合せて我
と列座れつざしてきかせ給いき、法雲法師が弟子等の慧栄・法歳・慧曠
・慧えこう☆なんど申せし僧正・僧都・已上の人人百余人なり各各
悪口を先とし眉をあげ眼をいからし手をあげ柏子をたたく、
而れども智ちぎ☆法師は末座に坐して色を変ぜず言を☆らず威儀し
づかにして諸僧の言を一一に牒ちようをとり言ごとにせめかえす、を
しかへして難なんじて云く抑も法雲法師の御義に第一華嚴・第二
涅槃・第三法華と立させ給いける証文は何れの経ぞ慥たしかかに明か
なる証文を出ださせ給えとせめしかば各各頭こうべをうつぶせ色を
失いて一言の返事なし。

重ねてせめて云く無量義經に正しく次説方等十二部經・摩訶
般若・華嚴海空等云云、仏・我と華嚴經の名をよびあげて

無量義經むりょうぎきょうに對して未顕真実みけんしんじつと打ち消し給たまう法華經ほけききょうに劣りて候・

無量義經むりょうぎきょうに華嚴經けこんききょうはせめられて候ぬいかに心えさせ給たまいて華嚴經けこんききょう

をば一代第一いちだいいちとは候けるぞ各各・御師おんしの御かたうとせんと・をば

さば此この經文きやうもんをやぶりて此これに勝すぐれたる經文きやうもんを取り出だして

御師おんしの御義おんぎを助け給たまえとせめたり。

又ねはんぎきょう涅槃經ほけききょうを法華經まさに勝ると候けるは・いかなる經文きやうもんぞ

涅槃經ねはんぎきょうの第十四けごんには華嚴・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんんにやをあげて涅槃經ねはんぎきょうに對

して勝劣しょうれつは説れて候へどもまつたく法華經ほけききょうと涅槃經ねはんぎきょうとの勝劣しょうれつは

みへず、次上つぎのかみの第九の卷ほけききょうに法華經ねはんぎきょうと涅槃經しょうれつふんみきょうの勝劣しょうれつ分明しょうめいなり、

所謂經文いわゆるききょうもんに云く「是この經しゅつせの出世ないしほつは乃至法華しやうもんの中の八千の聲聞・

記き☆を受うくることを得て大菓実かじつを成じやうずるが如ごとき秋收しゅうしゅう冬藏とうそうして更

に所作しよさ無なきが如ごとし」等云云、經文明きやうもんあきらかしよききょうに諸經しよんかをば春夏と説かせ

たまひねはんぎよう ほけきよう
給い涅槃經と法華經とをば菓実の位とは説かれて候へども法華經
しゅうしゅうとうぞう かじつ
をば秋收冬蔵の大菓実の位・涅槃經をば秋の末・冬の始 ☆ 拾
の位と

たまひ
定め給いぬ、此の經文正く法華經には我が身劣ると承伏し給い

ほけきよう
ぬ、法華經の文には已説・今説・当説と申して此の法華經は前と

ならび きようぎよう
並との經經に勝れたるのみならず後に説かん 經經にも勝る

たま
べしと仏定め給う、すでに教主釈尊かく定め給いぬれば疑う

めつこ
べきにあらねども我が滅後はいかんと疑いおぼして東方

ほうじょうせかい たほうぶつ
宝浄世界の多宝仏を証人に立て給いしかば多宝仏大地よりをどり

みようほけきよう かいぜしんじつ
出でて妙法華經・皆是真実と証し十方分身の諸仏重ねてあつま

たまひ こうちようぜつ ほんてん
らせ給い広長舌を大梵天に付け又教主釈尊も付け給う、然し

たほうぶつ ほうじょうせかい じゅつぼう しょうぶつ ほんど
て後・多宝仏は宝浄世界えかへり十方の諸仏各各本土にかへら

せ給^{たま}いて後・多^た宝^{ほう}分身^{ふんじん}の仏^{ぶつ}もおはせざらん^{きようしゆしやくそん}に教主^{きようしゆしやくそん}釈尊^{しやくそん}・涅槃^{ねはん}經^{ぎよう}

をとい^{ほけきよう}て法華^{ほけきよう}經^{きよう}に勝^{まさ}ると仰^{おお}せあらば御弟子^{おんでし}等は信^{しん}ぜさせ給^{たま}うべし

やとせめしかば日月^{にちがつ}の大光明^{こうみよう}の修羅^{しゆら}の眼^{まなこ}を照^{てら}らすがごとく漢王

の劍^{けん}の諸侯^{しよ}の頸^{けい}にかかりしがごとく兩眼^{りようげん}をとぢ一頭^{うなだ}を低^ひれたり、

天^{てん}台^{だい}大師^{だいし}の御氣色^{みけしき}は師子王^{ししき}の狐兔^{こと}の前に吼^ほえたるがごとし鷹鷲^{たか}の

鳩^{はと}雉^{とき}をせめたるにいたり、かくのごとくありしかばさては法華^{ほけきよう}經^{きよう}

は華嚴^{けこん}經^{ぎよう}・涅槃^{ねはん}經^{きよう}にも・すぐれてありけりと震旦^{しんたん}一國^{いつこく}に流布^るする

のみならず・かへりて五天竺^{てんじく}までも聞^がへ月氏^{しだいしやう}大小^{だいしやう}の諸論^{しよ}も智者^{ちしや}

大師^{だいし}の御義^{おんぎ}には勝^{すぐ}れず教主^{きようしゆしやくそん}釈尊^{しやくそん}・兩度^{しゆつげん}出現^{しゆつげん}しますか仏教^{ぶつぎやう}

二度^{にど}あらはれぬとほめられ給^{たま}いしなり。

其^その後^{てん}天^{だい}台^{だい}大師^{だいし}も御入滅^{にゆうめつ}なりぬ陳隋^{ちんずい}の世^{せい}も代わりて唐^{とう}の世^{せい}と

なりぬ章^{しやう}安^{あん}大師^{だいし}も御入滅^{にゆうめつ}なりぬ、天台^{てんだい}の仏法^{ぶつぽう}やうやく習^{なら}い失^なせ

し程に唐の太宗の御宇に玄奘三蔵といふし人・貞観三年に始め
て月氏に入りて同十九年にかへりしが月氏の仏法尋ね尽くして
法相宗と申す宗をわたり、此の宗は天台宗と水火なり而るに
天台の御覧なかりし深密經・瑜伽論・唯識論等をわたりて法華經
は一切經には勝れたれども深密には劣るという、而るを天台は
御覧なかりしかば天台の末学等は智慧の薄きかのゆへにさもやと
おもふ、又太宗は賢王なり玄奘の御帰依あさからず、いうべき
事ありしかどもいつもの事なれば時の威をおそれ申す人なし、
法華經を打ちかへして三乘眞実・一乘方便・五性各別と申せし
事は心うかりし事なり、天竺よりは・わたれども月氏の外道が
漢土にわたれるか法華經は方便・深密經は眞実といふしかば釈迦
・多宝・十方の諸仏の誠言もかへりて虚くなり玄奘・慈恩こそ

時の生身しやうしんの仏にてはありしか。

其後則そくてんこうごう天皇后の御宇ぎょうに天台大師てんだいだいしに・せめられし華嚴經けこんきように又重かさね
て新訳しんやくの華嚴經けこんきようわたりしかば、さきのいきどをりをはたさんがた
めに新訳しんやくの華嚴けこんをもつて天台てんだいに・せめられし旧訳くやくの華嚴經けこんきようを扶たすけ
て華嚴宗けこんしゅうと申もうす宗を法蔵法師ほうそうほっしと申もうす人立てぬ、此の宗は華嚴經けこんきようを
根本こんぽん法輪ほうりん法華經ほけきようをば枝末しまつ法輪ほうりんと申もうすなり、南北なほんは一華嚴けこん・二
涅槃ねはん・三法華ほっけ・天台大師てんだいだいしは一法華ほっけ・二涅槃ねはん・三華嚴けこん・今の華嚴宗けこんしゅう
は一華嚴けこん・二法華ほっけ・三涅槃ねはん等云云。

其その後げんそうこうてい玄宗皇帝の御宇ぎょうに天竺てんじくより善無畏ぜんむい三蔵さんそうは大日經だいにちきよう・
蘇悉地經そしつちきようをわたす、金剛智三蔵こんこうちさんそうは金剛頂經こんこうちようきようをわたす、又金剛智
三蔵さんそうの弟子でしあり不空三蔵ふくうさんそうなり、此の三人は月氏がっしの人・種姓すじようも高貴
なる上・人がらも漢土かんとの僧ほうもんににず法門ほうもんもなにとはしらず後漢ごかんより

今にいたるまでなかりし印と真言しんごんという事をあひそいてゆゆしかりしかば天子てんしかうべをかたぶけ万民ばんみん掌たなごころをあわす、此の人人ひとびとの義にいわく華嚴けこん・深密じんみつ・般若はんや・涅槃ねはん・法華經等の勝劣しょうれつは顕教けんきょうの内・釈迦如来しゃかによらい

の説の分なり、今の大日經等は大日法王の勅言なり彼の經經きょうきょう

は民の万言・此經は天子てんしの一言なり、華嚴經・涅槃經等は

大日經には梯はしごを立ても及ばず但法華經計りこそ大日經には

相似そうじの經なれ、されども彼の經は釈迦如来の説民の正言・此の經

は天子てんしの正言なり言は似れども人から雲泥うんでいなり、譬たとへば濁水の月

と清水の月のごとし月の影は同じけれども水に清濁ありなんと

申しければ、此の由尋ね顕す人もなし諸宗しよしゅう皆落ち伏して真言宗しんごんしゅう

にかたぶきぬ、善無畏ぜんむい・金剛智こんごうち・死去しきよの後・不空三蔵ふくうさんぞう又月氏がっしにか

へりて菩提心論と申す論をわたしいよい真言宗盛りなりけり、

但し妙樂大師といふ人あり天台大師よりは二百余年の後なれど

も智慧かしこき人にて天台の所釈を見明めてありしかば天台の

釈の心は後にわたれる深密經・法相宗又始めて漢土に立てたる

華嚴宗・大日經・真言宗にも法華經は勝れさせ給いたりける

を、或は智のをよばざるか・或は人に畏るるか・或は時の王威

をおづるかの故にいはざりけるか・かくてあるならば天台の正義

すでに失なん、又陳隋已前の南北が邪義にも勝れたりとおぼして

三十卷の末文を造り給う所謂弘決・釈籤・疏記これなり、此の

三十卷の文は本書の重なるをけづり・よわきをたすくるのみな

らず天台大師の御時なかりしかば御責にものがれてあるやうなる

法相宗と華嚴宗と真言宗とを一時にとりひしがれたる書なり。

にほんこく

又日本国には人王第三十代欽明天皇の御宇十三年壬申十月十

くだら

いっさいきよう

しゃかぶつ

ようめいてんのう

三日に百済国より一切経・釈迦仏の像をわたす、又用明天皇の

ぎよう

しょうとくたいしぶつぼう

もう

しんか

かんど

御宇に聖徳太子仏法をよみはじめ和氣の妹子と申す臣下を漢土に

せんしやうしよじ

ほけきやう

たまひ

じきやう

つかはして先生所持の一卷の法華経をとりよせ給いて持経と定

そ

ぎよう

さんろんしゆう

けこんしゆう

め、其の後人王第三十七代孝徳天王の御宇に三論宗・華嚴宗・

ほうそうしゆう

ぐしやしゆうじようじつ

ぎよう

しょうむ

法相宗・俱舎宗成実宗わたる、人王第四十五代に聖武天王の

ぎよう

りっしゆう

ろくしゆう

かんむ

御宇に律宗わたる已上六宗なり、孝徳より人王五十代の桓武

てんのう

てんだい

しんこん

天皇にいたるまでは十四代一百二十余年が間は天台・真言の二宗

かんむ

ぎよう

さいちやう

もう

こそう

やましなでら

ぎようひようそうじよう

なし、桓武の御宇に最澄と申す小僧あり山階寺の行表僧正の

おんでし

ほうそうしゆう

ろくしゆう

なら

しか

御弟子なり、法相宗を始めとして六宗を習いきわめぬ而れども

ぶつぼう

きわ

けこんしゆう

ほうそうほうし

仏法いまだ極めたりともおぼえざりしに華嚴宗の法蔵法師が造り

たまた

てんだいだいし

じよ

たる起信論の疏を見給うに天台大師の釈を引きのせたり此の疏こ

そ子細ありげなれ此の国に渡りたるか又いまだわたらざるかと
不審ありしほどに有人にとひしかば其の人の云く大唐の揚州竜興
寺の僧鑒真和尚は天台の末学道暹律師の弟子天宝の末に日本国に
わたり給いて小乗の戒を弘通せさせ給いしかども天台の御釈
持ち来りながらひろめ給はず人王第四十五代聖武天王の御宇なり
とかたる、其の書を見んと申されしかば取り出だして見せまいら
せしかば一返御らんありて生死の醉をさましつ此の書をもつて
六宗の心を尋ねあきらめしかば一一に邪見なる事あらはれぬ、
忽に願を發て云く日本国の人皆・謗法の者の檀越たるが天下一
乱れなんずとおぼして六宗を難ぜられしかば七大寺・六宗の
碩学蜂起して京中烏合し天下みなさわぐ、七大寺・六宗の諸人
等惡心強盛なり、而るを去ぬる延暦二十一年正月十九日に天王

たかおでら
高雄寺に行幸あつて七寺の碩徳せきとく十四人善議ぜんぎ・勝猷しょうゆう・奉基ぶぎ・寵忍ちやうにん

・賢玉・安福・勤操・

しゅえん・じこう・げんよう・さいこう・どうしょう・こうしょうかんびん
修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・觀敏等の十有余人を召し

合けわす、華嚴・三論・法相等の人人・各各・我宗の元祖がんそが義にた

がはず最澄上人は六宗の人人の所立しよりゅう・一一に牒ちようを取りて

ほんきよう　ほんろん
本經・本論・並に諸經諸論に指し合あわせてせめしかば一言も答

えず口をして鼻のごとくになりぬ、天皇てんのうをどろき給たまいて委細いさいに御

たづねありて重ねて勅宣ちよくせんを下くだして十四人をせめ給たまいしかば承伏しょうふく

の謝表しゃひょうを奉りたり、其書に云く「七箇の大寺・六宗の学匠がくしやう乃至

初して至極しごくを悟る」等云云又云く「聖徳の弘化ぐけより以降このかた今に二百余

年の間、講こうずる所の經論其数多し、彼此理を争うて其の疑うたが未だ

解しかけず而も此の最妙の円宗猶未だ闡揚せんようせず」等云云、又云く

「三論法相・久年のあらそい 諍かんえん 渙焉ほんとして氷のごと 如く解しょうぜん 解しょうぜん 照然しょうぜんとして

既に明かに猶雲霧を披ひらいて三光を見るがごとし」云云、最澄和尚さいちやうわじやう

十四人が義を判じて云く「各一軸を講こうずるに法鼓を深壑しんがくに振い

賓主三乗の路みちに徘徊はいかいし義旗を高峰とばに飛す長幼三有の結さいはを摧破さいはし

て猶未だ歴劫りやうこくの轍てつを改めず白牛を門外あたらたに混ひやくこず、豈善あにく初発あにの位

に昇り阿茶あだを宅内あだに悟らんや」等云云、弘世真綱二人ひろよまずなの臣下しんかいわ云く

「靈山の妙法りやうぜんを南岳みやうほうに聞なんがくき総持みやうこの妙悟みやうこを天台てんだいに闢ひらく一乗いちじやうの

権滯ごんたいを慨なげき三諦さんたいの未顕みけんを悲みしむ」等云云、又十四人の云く「善議ぜんぎ

等ひか牽ひかれて休運きううんに逢おうて乃すなわち奇詞けみを閑けんす深期じんこに非あらざるよりは何ぞ聖世なんに

託たくせんや」等云云、此の十四人は華嚴宗けこんしやうの法蔵ほうぞう・審祥しんじやう・三論宗さんろんしやう

の嘉祥かじやう・觀勒かんろく・法相宗ほうしやうしやうの慈恩じおん・道昭どうしやう・律宗りつしやうの道宣どうせん・鑒真等がんじんの

漢土かんど・日本にほん元祖がんそ等の法門ほうもん瓶びんはかはれども水は一なり、而しかるに十四

人彼の邪義じやぎをすてて伝教でんぎょうの法華經ほけきょうに歸伏きふくしぬる上は誰またの末代まつだいの人か華嚴けこん・般若はんにな・深密經じんみつ等は法華經ほけきょうに超過ちようかせりと申もうすべきや、
小乗しょうじょうの三宗は又彼の人人ひとびとの所学がくなり大乘だいじょうの三宗破われぬる上は
沙汰さたのかぎりにあらず、而しかを今いまに子細しさいを知らざる者もの六宗ろくしゅうはい
まだ破やぶられずと・をもへり、譬たとへば盲目めいしが天てんの日月にちがつを見ず聾人つんぼが
雷いかずちの音こえをきかざるゆへに天てんには日月にちがつなし空そらに声なしとをもうが
ごとし。

真言宗しんこんしゅうと申もうすは日本にほん・人王第四十四代と申せし元正天皇てんのうの
御宇ぎように善無畏三蔵ぜんむいさんそう・大日經だいにちきようをわたくして弘通くつうせずして漢土かんとへかへ
る、又玄げん・等大日經だいにちきようの義釈ぎしゃく十四卷をわたくす又東大寺とうだいじの得清大徳だいとく
わたくす、此等これらを伝教大師御らんありてありしかども大日經だいにちきよう・
法華經ほけきょうの勝劣しょうれついかながとおぼしけるほどにかたがた不審ふしんありし

ゆえ いぬ えんりやく 故に去る延暦二十三年七月御入唐西明寺の道邃和尚・仏滝寺の
行満等に値あい奉りて止観しかん円頓えんどんの大戒だいかいを伝受し靈感寺れいかんじの順じゆんぎ曉和尚きやうわじやう
に値あい奉りて真言しんごんを相伝そうでんし同延暦二十四年六月に帰朝きちやうして桓武かんむ
天王たいめんに御対面せんじ・宣旨くだを下して六宗ろくしゆうの学生しはんに止観しかん・真言しんごんを習はし
め同七大寺ななだいじにをかれぬ、真言しんごん・止観しかんの二宗しやうれつの勝劣かんどは漢土かんどに多く
子細しさいあれども又大日經だいにちきやうの義釈ぎしゃくには理同事勝りどうじしやうとかきたれども伝教でんぎやう
大師だいしは善無畏ぜんむい三蔵さんそうのあやまりなり、大日經だいにちきやうは法華經ほけきやうには劣りた
りと知しろしめして八宗はつしゆうとはせさせ給たまはず真言宗しんごんしゆうの名をけづりて
法華宗ほつけしゆうの内に入れ七宗となし大日經だいにちきやうをば法華天台宗ほつくてんだいしゆうの傍依經ほうえきやうと
なして華嚴けこん・大品だいほん・般若涅槃等はんによねはんの例とせり、而れども大事だいじの円頓えんどん
の大乗別受戒だいじやうべつじゆかいの大戒壇だいかいだんを我が国くにに立たてう立たてじの諍論じやうろんがわずらはし
きに依りてや真言しんごん・天台てんだいの二宗しやうれつの勝劣でしは弟子ふんみやうにも分明ふんみやうにをしえ

給^{たま}わざりけるか、但依憑^{えびよう}集と申^{もつ}す文に正^{まさ}しく真言宗^{しんごんしゅう}は法華^{ほっけ}
てんだいしゅう せいぎ ぬす
天台宗^{てんだいしゅう}の正義^{せいぎ}を偷^{ぬす}みとりて大日經^{だいにちきよう}に入れて理同^{りどう}とせり、されば
彼の宗^{そんごう}は天台宗^{てんだいしゅう}に落ちたる宗なり、いわうや不空三藏^{ふくうさんそう}は善無畏^{ぜんむい}
こんごうちにゅうめつ
・金剛智入滅^{こんごうちにゅうめつ}の後・月氏^{がっし}に入りてありしに竜智菩薩^{りゅうちぼさつ}に値^あい奉^{たてまつ}り
し時^{がっし}・月氏^{がっし}には仏意^{ぶつゐ}をあきらめたる論釈^{ろんしゃく}なし、漢土^{かんど}に天台^{てんだい}とい
う人の釈^{しゃく}こそ邪正^{じゃせい}をえらび偏円^{へんえん}をあきらめたる文にては候なれ、
あなかしこ・あなかしこ・月氏^{がっし}へ渡^{わた}し給^{たま}えとねんごろにあつらへ
し事を不空^{ふくう}の弟子^{でし}含光^{こんこう}といふし者が妙樂大師^{みょうらくだいし}にかたれるを記^きの
十の末に引き載^のせられて候をこの依憑^{えびよう}集に取り載^のせて候、法華經^{ほっけきよう}
だいにちきよう
に大日經^{だいにちきよう}は劣^りるとしろしめす事伝^{でんぎようだいし}教大師^{でんぎようだいし}の御心^{けんねん}顕然^{けんねん}なり、され
しゃかによらい てんだいだいし みようらくだいし でんぎようだいし
ば釈迦如来^{しゃかによらい}・天台大師^{てんだいだいし}・妙樂大師^{みょうらくだいし}・伝教大師^{でんぎようだいし}の御心^{みこころ}は一同^{いっさいきよう}に
だいにちきよう
大日經^{だいにちきよう}等の一切經^{いっさいきよう}の中には法華經^{ほっけきよう}はすぐれたりという事は

分明なり、又真言宗の元祖という竜樹菩薩の御心もかくのごとし、大智度論を能く能く尋ぬるならば此の事分明なるべきを不空があやまれる菩提心論に皆人ばかされて此の事に迷惑せるか。

又石淵の勤操僧正の御弟子に空海と云う人あり後には弘法大師とがうす、去ぬる延暦二十三年五月十二日に御入唐、漢土にわたりては金剛智・善無畏の両三蔵の第三の御弟子慧果和尚といふし人に両界を伝受し大同二年十月二十二日に御帰朝平城天皇の御宇なり、桓武天王は御ほうぎよ平城天王に見参し御用いありて御帰依・他にことなりしかども平城ほどもなく嵯峨に世をとられさせ給いしかば弘法ひき入れてありし程に伝教大師は嵯峨天王の弘仁十三年六月四日御入滅、同じき弘仁十四年より弘法

大師・王の御師となり真言宗を立てて東寺を給真言和尚とがう

はつしゅう

いちだい しゅうれつ

いわ だいいちしんこん

だいにちきよう

し此より八宗始る、一代の勝劣を判じて云く第一真言・大日經

けこん

ほつけ

ねはん

ほけきよう

あこん

ほうとう

はん

第二・華嚴第三は法華・涅槃等云云、法華經は阿含・方等・般若

けこん

ほつけ

ねはん

ほけきよう

あこん

ほうとう

はん

等に対すれば真実の經なれども華嚴經・大日經に望むれば戲論

きようしゅしやくそん

だいにちにやうい

むみよう

けろん

の法なり教主釈尊は仏なれども大日如来に向うれば無明の辺域

もう

こうてい

えびす

ごと

てんだいだいし

ぬすびと

しんこん

だいこ

と申して皇帝と俘囚との如し、天台大師は盜人なり真言の醍醐を

ほけきよう

だいこ

ごと

てんだいだいし

ぬすびと

しんこん

だいこ

盜んで法華經を醍醐というなにかかれしかば法華經はいみじと

ほけきよう

だいこ

ごと

てんだいだいし

ぬすびと

しんこん

だいこ

・をもへども弘法大師にあひぬれば物のかずにもあらず、天竺の

げどう

こうほう

だいし

ほけきよう

ねはん

きぎよう

けこん

きぎよう

てんじく

外道はさて置きぬ漢土の南北が法華經は涅槃經に対すれば邪見の

げどう

かんど

ほけきよう

ねはん

きぎよう

けこん

きぎよう

てんじく

經といぬしにも・すぐれ華嚴宗が法華經は華嚴經に対すれば枝末

げどう

けこん

しゅう

ほけきよう

けこん

きぎよう

てんじく

教と申せしにもこへたり、例ば彼の月氏の大慢婆羅門が自在天

げどう

がっし

だいまん

ばらもん

じざいてん

・那羅延天・婆藪天・教主釈尊の四人を高座の足につくりて

げどう

ばそ

きよう

しゅしやくそん

こうざ

こうざ

こうざ

こうざ

こうざ

其の上にのぼつて邪法を弘めしがごとし、伝教大師御存生ならば一言は出されべかりける事なり、又義真・円澄・慈覚・智証等もいかに御不審はなかりけるやらん天下第一の凶なり、慈覚大師は去ぬる承和五年に御入唐・漢土にして十年が間・天台・真言の二宗をならう、法華・大日経の勝劣を習いしに法全・元政等の八人の真言師には法華経と大日経は理同事勝等云云、天台宗の志遠・広修・維☆等に習いしには大日経は方等部の摂等云云、同じき承和十三年九月十日に御帰朝・嘉祥元年六月十四日に宣旨下、法華・大日経等の勝劣は漢土にしてしりがたかりけるかのゆへに金剛頂経の疏七卷蘇悉地経の疏七卷已上十四卷此疏の心は大日経・金剛頂経・蘇悉地経の義と法華経の義は其の所詮の理は一同なれども事相の印と真言とは真言の

さんぶきよう

三部経す

ぐれたりと云云、

此れは偏に

善無畏・

金剛智・

不空の

つく

造りたる大日経の疏の心のごとし、

然れども

我が心に猶不審や

のこりけん又心にはとけてんけれども

人の不審をはらさんとやお

ぼしけん、此の十四卷の疏を御本尊の御前にさしをきて御祈請あ

りき・かくは造りて候へども仏意計りがたし大日の三部やすぐれ

たる法華経の三部やまされると御祈念有りしかば五日と申す五更

に忽に夢想あり、青天に大日輪かかり給へり矢をもてこれを射け

れば矢飛んで天にのぼり日輪の中に立ちぬ日輪動転して・すでに

地に落んとすとをもひてうちさめぬ、悦んで云く我吉夢あり

法華経に真言勝れたりと造りつるふみは仏意に叶いけりと悦ばせ

給いて宣旨を申し下して日本国に弘通あり、而も宣旨の心に云く

「遂に知んぬ天台の止観と真言の法義とは理冥に符えり」等と云

云、祈請のごときんば大日経に法華経は劣なるやうなり、宣旨
を申し下すには法華経と大日経とは同じ等云云。

智証大師は本朝にしては義真和尚・円澄大師・別当・慈覚等

の弟子なり、顕密の二道は大体此の国にして学し給いけり天台・

真言の二宗の勝劣の御不審に漢土へは渡り給けるか、去仁寿二

年に御入唐漢土にしては真言宗は法全・元政等にならはせ

給い大体・大日経と法華経とは理同事勝・慈覚の義のごとし、

天台宗は良・和尚にならひ給い真言・天台の勝劣・大日経は

華嚴・法華等には及ばず等云云、七年が間・漢土に經て去る

貞觀元年五月十七日に御帰朝、大日経の旨歸に云く「法華尚

及ばず況や自余の教をや」等云云、此釈は法華経は大日経には

劣る等云云、又授決集に云く「真言・禪門乃至若し華嚴・法華

・涅槃等の經に望むれば是れ摂引門」等云云、普賢經の記・論の記に云く同じ等云云、貞觀八年丙戌四月廿九日壬申・勅宣を申し下して云く「聞くならく真言・止觀・兩教の宗同じく醍醐と号し俱に深秘と称す」等云云、又六月三日の勅宣に云く「先師既に兩業を開いて以て我が道と為す代代の座主相承して兼ね伝えざることを莫し在後の輩豈旧迹に乖かんや、聞くならく山上の僧等専ら先師の義に違いて偏執の心を成ず殆んど余風を扇揚し旧業を興隆するを顧みざるに似たり、凡そ厥の師資の道一を闕きても不可なり伝弘の勤め寧ろ兼備せざらんや、今より以後宜く兩教に通達するの人を以て延暦寺の座主と為し立てて恒例と為すべし」云云。

されば慈覺・智証の二人は伝教・義真の御弟子、漢土にわた

りては又天台・真言の明師に値いて有りしかども二宗の勝劣は
思い定めざりけるか・或は真言すぐれ・或は法華すぐれ・或は
理同事勝等云云、宣旨を申し下すには二宗の勝劣を論ぜん人は
違勅の者といましめられたり、此れ等は皆自語相違といふぬべし
他宗の人はよも用いじとみえて候、但二宗齊等とは先師・伝教
大師の御義と宣旨に引き載せられたり、抑も伝教大師いづれ
の書にかかれて候ぞや此の事よくよく尋ぬべし、慈覚・智証と
日蓮とが伝教大師の御事を不審申すは親に値うての年あらそひ
日天に値い奉りての目くらべにては候へども慈覚・智証の御かた
ふどをせさせ給はん人人は分明なる証文をかまへさせ給うべ
し、詮ずるところは信をとらんがためなり、玄奘三蔵は月氏の
婆沙論を見たりし人ぞかし天竺にわたらざりし宝法師に・せめら

れにき、法護三蔵は印度の法華經をば見たれども囑累の先後をば
漢土の人みねども ☆ といひしぞかし、設い慈覚・伝教大師に
値い奉りて習い伝えたりとも智証・義真和尚に口決せりといふと
も伝教・義真の正文に相違せばあに不審を加えざらん、伝教
大師の依憑集と申す文は大師第一の秘書なり、彼の書の序に云く
「新来の真言家は則ち筆授の相承を泯し旧到の華嚴家は則ち
影響の軌範を隠し、沈空の三論宗は彈訶の屈恥を忘れて称心の
酔を覆う、著有の法相は撲揚の帰依を非し青竜の判經を撥う等、
乃至謹んで依憑集の一巻を著わして同我の後哲に贈る某の時興る
こと日本第五十二葉・弘仁の七・丙申の歳なり」云云、次ぎ下
の正宗に云く「天竺の名僧大唐天台の教迹最も邪正を簡ぶに
堪えたりと聞いて渴仰して訪問す」云云、次ぎ下に云く「豈中国

に法を失つて之を四維に求むるに非ずや而かも此の方に識ること
有る者少し魯人の如きのみ」等云云、此の書は法相・三論・華嚴
・真言の四宗をせめて候文なり、天台・真言の二宗同一味ならば
・いかでかせめ候べき、而も不空三蔵等をば魯人のごとしななど
かかれて候、善無畏・金剛智・不空の真言宗いみじくば・いか
でか魯人と悪口あるべき、又天竺の真言が天台宗に同じきも又
勝れたるならば天竺の名僧いかでか不空にあつらへ中国に正法
なしとはいふべき、それはいかにもあれ慈覚・智証の二人は言は
伝教大師の御弟子とはなのらせ給ども心は御弟子にあらず、
其の故は此の書に云く「謹で依憑集一卷を著わして同我の後哲に
贈る」等云云、同我の二字は真言宗は天台宗に劣るとならひて
こそ同我にてはあるべけれ我と申し下さるる宣旨に云く「専ら

先師せんしの義ぎに違へんい偏しゅう執しゅうの心こころを成なりす」等云云、又云いわく「凡およそ厥その師し資し
の道みち一ひとを闕かいても不可ふかなり」等云云、此この宣旨せんじのごとくならば
慈覺じかく・智証ちしようこそ専もつら先師せんしにそむく人にては候へ、かうせめ候もを
それにては候へども此これをせめずば大日經だいにちきよう・法華經ほけきようの勝劣しょうれつやぶ
れなんと存じていのちをまとにかくてせめ候なり、此の二人の
人ひとの弘法大師こうぼうだいしの邪義じやぎをせめ候はざりけるは最も道理どうりにて候いけ
るなり、されば糧米ろうまいをつくし人をわづらはして漢土かんとへわたらせ
給たまはんよりは本師ほんし・伝でん教大師ぎょうだいしの御義おんぎを・よくよく・つくさせ
給たまうばかりけるにや、されば叡山えいざんの仏法ぶつぽうは但ただ伝でん教大師ぎょうだいし・義真ぎしん
和尚わじょう・円澄えんちよう大師だいしの三代計ばかりにてやありけん、天台座主てんだいざすすでに
真言しんこんの座主ざすにうつりぬ名しりょうと所領てんだいとは天台山そ其そのの主しんこんしは真言師しんこんしなり、
されば慈覺大師じかくだいし・智証大師ちしようだいしは已今当いこんとうの經文きやうもんをやぶらせ給たまう人な

り、已今当の經文をやぶらせ給うは・あに釈迦・多宝・十方の

諸仏の怨敵にあらずや、弘法大師こそ第一の謗法の人とおもうに、

しよぶつ おんてき

こうぼうだいし

だいいち

ほうぼう

そのゆえ

すいかてんち

これはそれにはにるべくもなき僻事なり、其の故は水火天地なる

事は僻事なれども人用ゆる事なければ其の僻事成ずる事なし、

弘法大師の御義はあまり僻事なれば弟子等も用ゆる事なし事相

ひがごと

もち

ひがごと

そ

ひがごとじよう

じそう

計りは其の門家なれども其の教相の法門は弘法の義いにくき

ゆへに善無畏・金剛智・不空慈覚・智証の義にてあるなり、慈覚

ちしよう

こんこうち

ふくうじかく

ちしよう

・智証の義こそ真言と天台とは理同なりなんと申せば皆人さもや

とをもう、かうをもうゆへに事勝の印と真言とにつひて天台宗

の人人・画像・木像の開眼の仏事を・ねらはんがために日本一同

ひとびと

かいげん

ぶつじ

にほん

に真言宗におちて天台宗は一人もなきなり、例せば法師と尼と

黒と青とは・まがひぬべければ眼くらき人はあやまつぞかし、

くろきとあおき

てんだいしゆう

まなこ

ほっし

僧と男と白と赤とは目くらき人も迷まよわず、いわうや眼まなこあきらかなる者をや、慈覺じかく・智証ちしょうの義ぎは法師ほっしと尼くろきとあおきと黒と青とがごとくなるゆへに智人ちじんも迷まよい愚人ぐにんもあやまり候て此この四百余年が間は叡山えいざん
おんじょう　とうじ　・園城・東寺・奈良・五畿・七道・日本一州・皆謗法の者となりぬ。

そもそも

ほけきよう

抑も法華經の第五に「文殊師利此この法華經は諸仏如来の秘密ひみつ

しよきよう

藏なり諸經の中に於て最も其その上に在り」云云、此この經文きようもんのご

ほけきよう

だいにちきよう

しゆうきよう

ちようじよう

に住し給う正法しやうほう

とくならば法華經は大日經等の衆經の頂上に住し給う正法しやうほう

ほけきよう

ぜんむい

こんこうち

ふくう

こうほう

慈覺・智証等は

なり、さるにては善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覺・智証等は

きようもん

此の經文をばいかなが会通せさせ給うべき、法華經の第七に

いわ

よ

きようてん

えつう

たま

ほけきよう

法華經の第七に

云く「能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し

いっさいしゆじよう

おい

またこれだい

きようもん

一切衆生の中に於て亦為第一なり」等云云、此の經文のごとく

ならば法華經の行者は川流江河の中の大海・衆山の中の須弥山

しゅうせい

がつてん

だいにち

てんりんおう

たいしやく

しよ

・衆星の中の月天・衆明の中の大日天、転輪王・帝釈・諸王の

ほんのう

でんぎようだいし

しゅうく

もう

いわ

中の大梵王なり、伝教大師の秀句と申す書に云く「此の經も

またまたかく

ごと

ないしもうもろきようほう

もつともこれだいいち

よ

亦復是くの如し乃至諸の經法の中に最も為第一なり能く是の

きようてん

じゅじ

またまたかく

ごと

いつさいしゅじよう

經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の中に

おい またこれだい

きようもん

たまひ

つぎしも

於て亦為第一なり」已上經文なりと引き入れさせ給いて次下に

いわ

てんだいほつけ

いわ

いげもん

たまひ

かみ

云く「天台法華玄に云く」等云云、已上玄文とかかせ給いて上の

しやく

いわ

まさ

たしゅうしよえ

いま

もつともこれ

だいいち

心を釈して云く「当に知るべし他宗所依の經は未だ最も為れ第一

そ

よ

またいま

だいいち

てんだいほつけしゅうしよじ

た

ならず其の能く經を持つ者も亦未だ第一ならず、天台法華宗所持

ほけきよう

もつともこれ

だいいち

ゆえ

よ

ほつけ

またしゅじよう

た

の法華經は最も為れ第一なる故に能く法華を持つ者も亦衆生の

だいいち

すで

ぶつせつ

よ

あにじたん

等云云、

つぎしも

中の第一なり已に仏説に拠る豈自歎ならん哉」等云云、次下に讓

いわ

えびようつぶ

あ

等云云、

えびよう

る釈に云く「委曲の依憑具さに別卷に有るなり」等云云、依憑集

に云く「今吾が天台大師・法華經を説き法華經を釈すること群に
特秀し唐に独歩す明に知んぬ如来の使なり讃る者は福を安明
に積み謗る者は罪を無間に開く」等云云、法華經・天台・妙樂
・伝教の經釈の心の如くならば今・日本国には法華經の行者
は一人もなきぞかし、月氏には教主釈尊・宝塔品にして一切の
仏をあつめさせ給て大地の上に居せしめ大日如来計り宝塔の中の
南の下座にすへ奉りて教主釈尊は北の上座につかせ給う、此の
大日如来は大日經の胎藏界の大日・金剛頂經の金剛界の大日
の主君なり、兩部の大日如来を即從等と定めたる多宝仏の上座
に教主釈尊居せさせ給う此れ即ち法華經の行者なり天竺かく
のごとし、漢土には陳帝の時・天台大師・南北にせめかちて現身
に大師となる「群に特秀し唐に独歩す」というこれなり、日本国

には伝でんぎよう教大師六宗にせめかちて日本の始第一の根本大師となり
給う月氏・漢土・日本に但三人計りこそ於一切衆生中亦為第一
にては候へ、されば秀句に云く「浅きは易く深きは難しとは釈迦
の所判なり浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり天台大師は
釈迦に信順して法華宗を助けて震旦に敷揚し叡山の一家は天台
に相承して法華宗を助けて日本に弘通す」等云云、仏滅後・一
千八百余年が間に法華經の行者漢土に一人・日本に一人已上人
釈尊を加へ奉りて已上三人なり。

外典に云く聖人は一千年に一出で賢人は五百年に一出づ、
黄河は☆渭ながれをわけて五百年には半・河すみ千年には共に
清むと申すは一定にて候けり、然るに日本国は叡山計りに伝教
大師の御時・法華經の行者ましましけり、義真・円澄は第一第

二の座主なり第一の義真計り伝教大師にいたり、第二の円澄は

なかばでんぎようおんでしなかばこうぼうでし

半は伝教の御弟子・半は弘法の弟子なり、第三の慈覚大師は

でんぎようだいしおんでし

始めは伝教大師の御弟子にいたり、御年四十にて漢土にわたり

てより名は伝教の御弟其の跡をばつがせ給えども法門は全く

おんでし

御弟子にはあらず、而れども円頓の戒計りは又御弟子にいたり

へんぶく

蝙蝠鳥のごとし鳥にもあらず・ねずみにもあらず梟鳥禽・破鏡

じゅう

獸のごとし、法華經の父を食らい持者の母をかめるなり日をい

ほけきよう

るとゆめにみしこれなり、されば死去の後は墓なくてやみぬ、

ちしようもんか

智証の門家・園城寺と慈覚の門家・叡山と修羅と悪竜と合戦ひま

おんじようじ

なし園城寺をやき叡山をやく、智証大師の本尊の慈氏菩薩もやけ

じかくだいしほんそん

ぬ慈覚大師の本尊・大講堂もやけぬ現身に無間地獄をかんぜり、

たんちゅう

但中堂計りのこれり、弘法大師も又跡なし弘法大師の云く

ばか

こうぼうだいし

あと

こうぼうだいし

東大寺とうだいじの受戒じゅかいせざらん者をば東寺とうじの長者ちやうじやとすべからず等御いま
しめの状あり、しかれども寛平かんびよう法王ほうおうは仁和寺にんなを建立こんりゆうして東寺とうじの
法師ほっしをうつして我寺えいざんには叡山えんどんの円頓戒えんどんを持ざらん者をば住せしむ
べからずと宣旨せんじ分明ふんみようなり、されば今の東寺とうじの法師ほっしは鑒真がんじんが弟子でし
にもあらず弘法こうほうの弟子でしにもあらず戒は伝でんぎよう教おんでしの御弟子おんでしなり又伝でんぎよう教
の御弟子おんでしにもあらず伝でんぎよう教ほけきようの法華經はしつを破失はしつす、去る承和二年三月いぬ じやうわ
二十一日しきよに死去ありしかば公家くげより遺体いたいをば、ほうぶらせ給う、
其その後おおわく誑惑でしの弟子等集りて御入定にゆうじようと云云、或あるはかみをそりて
まいらするぞといふ、或あるは三鉢さんこをかんどより、なげたりといふ
・或あるは日輪にちりん夜中いに出でたりといふ、或あるは現身げんしんに大日如来だいにちによらいとなりた
りといひ、或あるは伝でんぎよう教だいし大師だいしに十八道を・をしへまいらせ給うとい
ふて、師の徳をあげて智慧ちえにかへ我が師の邪義じゃぎを扶たすけて王臣おうしんを

誑惑おわくするなり、又高野山こうやさんに本寺伝法院でんぼういんといいし二の寺あり本寺は

弘法こうぼうのたてたる大塔おとう・大日如来だいにちにらひなり、伝法院でんぼういんと申もうすは正覚房しょうかくぼうの

立てし金剛界こんこうの大日だいにちなり、此の本末ほんまつの二寺昼夜に合戦あり例せば

叡山えいざん・園城おんじょうのごとし、誑惑おわくのつもりて日本にほんに二の禍しゅつげんの出現しゅつげんせる

か、糞を集めて栴檀せんだとなせども焼く時は但糞の香なり大妄語もうごを集

めて仏とがうすとも但無間むげん・大城だいじょうなり、尼にけん☆が塔は数年が間・

利生りしょう広大なりしかども馬鳴菩薩めみょうぼさつの礼らいをうけて忽たちまちにくづれぬ、鬼弁

婆羅門ばらもんがとばりは多年・人をたばらかせしかども阿あ☆縛ばく☆沙菩薩しゃぼさつ

に・せめられてやぶれぬ、☆留外道くろげどうは石となつて八百年・陳那ちんな

菩薩ぼさつに・せめられて水となりぬ、道士どうしは漢土かんとをたばらかすこと数

百年・摩騰まとう・竺蘭じくらんに・せめられて仙經せんきょうもやけぬ、趙ちよう高こうが国をと

りし王莽が位をうばいしがごとく法華經ほけきょうの位をとて大日經だいにちきょうの

しよりよう
所領とせり、法王すでに国に失せぬ人王あに安穩ならんや、
にほんこく
日本国は慈覚・智証・弘法の流なり一人として謗法ならざる人は
なし。

ただ
但し事の心を案ずるに大莊嚴仏の末・一切明王仏の末法のごと

いおんおうぶつ

まつぼう

かいげ

なかせんこう

あびじこく

お

し、威音王仏の末法には改悔ありしすら猶千劫・阿鼻地獄に墮つ、

いかにいわうや

にほんこく

しんこんし

ぜんしゅう

ねんぶつ

いちぶん

えしん

いかにいわうや日本国の真言師・禪宗・念佛者等是一分の廻心

によてんでん

むしゅこううたがい

なきものか、

ほうぼう

国なれば天

もすてぬ天すつればふるき守護の善神も・ほこらをやひて寂光

の都へかへり給いぬ、

にちれんばか

とどま

こくしゅ

これを

あだみ数百人の民に・或は罵詈・或は悪口・或は杖木・或は

とうけん

ある

ある

ある

あつく

ある

ある

ある

刀剣・或は宅宅ごとにせき・或は家家ごとにをう、それにな

はねば我と手をくだして二度まで流罪あり、去ぬる文永八年九月

はねば我と手をくだして二度まで流罪あり、去ぬる文永八年九月

はねば我と手をくだして二度まで流罪あり、去ぬる文永八年九月

はねば我と手をくだして二度まで流罪あり、去ぬる文永八年九月

はねば我と手をくだして二度まで流罪あり、去ぬる文永八年九月

はねば我と手をくだして二度まで流罪あり、去ぬる文永八年九月

はねば我と手をくだして二度まで流罪あり、去ぬる文永八年九月

はねば我と手をくだして二度まで流罪あり、去ぬる文永八年九月

の十二日に頸を切らんとす、最勝王経に云く「悪人を愛敬し
善人を治罰するに由るが故に他方の怨賊来つて国人喪乱に遭う」
等云云、大集経に云く「若しは復諸の刹利国王有つて諸の非法
を作して世尊の声聞の弟子を悩乱し、若しは以て毀罵し刀杖を
もつて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い、若しは他の給施せん
に留難を作さば我等彼れをして自然に他方の怨敵を卒起せしめん
及び自らの国土も亦兵起り病疫・飢饉し非時の風雨・鬭諍言訟
せしめん、又其の王をして久しからずして復当に己が国を亡失
せしめん」等云云、此等の経文のごときは日蓮この国になくば
仏は大妄語の人・阿鼻地獄はいかで脱給うべき、去ぬる文永八
年九月十二日に平の左衛門並びに数百人に向て云く日蓮は日本国
のはしらなり日蓮を失うほどならば日本国のはしらを・たをすに

なりぬ等云云、此の経文に智人を国主等若は悪僧等がざんげんにより若は諸人の悪口によつて失にあつるならば、にはかに・いくさをこり又大風吹き他国よりせめらるべし等云云、去ぬる文永九年二月のどしいくさ同じき十一年の四月の大風・同じき十月に大蒙古の来りしは偏に日蓮がゆへにあらずや、いわうや前よりこれをかんがへたり誰の人が疑うべき、弘法・慈覚・智証の☆国に年久し其の上禅宗と念仏宗とのわざわい・あいをこりて逆風に大波をこり大地震のかさなれるがごとし、さればやふやく国をとろう太政入道が国をおさへ承久に王位つきはてて世・東にうつりしかども但国中のみだれにて他国のせめはなかりき、彼は謗法の者はあれども又天台の正法も・すこし有り、其の上ささへ顕わす智人なし・かるがゆへになのめなりき、譬へば師子の

ねぶれるは手をつけざれば・ほへず迅流は櫓をささへざれば波

たかからず盗人はとめざればいからず火は薪を加えざればさか

んならず、謗法はあれどもあらわす人なければ王法もしばらくは

たえず国もをだやかなるにいたり、例せば日本国に仏法わたりは

じめて候いしに始はなに事もなかりしかども守屋・仏をやき僧を

いましめ堂塔をやきしかば天より火の雨ふり国にはうさうをこり

兵乱つづきしがごとし、此れはそれにはにるべくもなし、謗法

の人人も国に充滿せり、日蓮が大義も強くせめかかる修羅と

帝釈と仏と魔王との合戦にもをとるべからず、金光明經に

云く「時に鄰国の怨敵是くの如き念を興さん当に四兵を具して彼

の国土を壊るべし」等云云、又云く「時に王見已つて即四兵を嚴い

て彼の国に発向し討罰を為んと欲す我等爾の時に當に眷属無量

むへん 無辺の薬叉諸神と各形を隠して、ために護助を作し、彼の怨敵をして

じねん 自然に降伏せしむべし」等云云、

さいしやうおうきやう

自然に降伏せしむべし」等云云、最勝王經の文又かくのごとし、

だいしきやう

にんのうきやう

これら きやうもん

しやうほう

大集經云云・仁王經云云、此等の經文のごときんば正法を行

ずるものを国主あだみ邪法を行ずる者のかたうどせば大梵天王・

こくしゆ じゃほう

だいぼんてんのう

帝釈・日月・四天等・隣国の賢王の身に入りかわりて其の国を

たいしやく

にちがつ してん

りんこく けんおう

そ

せむべしとみゆ、例せば訖利多王を雪山下王のせめ大族王を幻日

王の失いしがごとし、訖利多王と大族王とは月氏の仏法を失いし

うしな

きりた

だいぞくおう

がっし

ぶつほう

うしな

王ぞかし、漢土にも仏法をほろぼしし王みな賢王に・せめられぬ、

かんど

ぶつほう

けんおう

これは彼にはにるべくもなし仏法のかたうどなるようにて仏法を

かしこ

ぶつほう

ぶつほう

失なう法師を扶くと見えて正法の行者を失うゆへに愚者はすべ

ほっし たす

しやうほう

ぎやうじや

うしな

ぐしや

てしらず智者なんとも常の智人はしりがたし、天も下劣の天人は

ちしや

ちじん

げれつ

てんにん

知らずもやあるらん、されば漢土・月氏のいにしへのみだれより

かんど

がっし

も大きなるべし。

ほうめつじんきよう

法滅尽經に云く

はつないおん

☆の後・

ごぎやくじよくせ

まどうこうじよう

盛し魔

しゃもん

な

沙門と作つて

わ

吾が道を壊

えらん

せん、乃至

ないしあくにんうたのお

かいちゆう

海中の沙の

ごと

ぜんしやはなはだ

如く善者甚だ

も

少しして若しは

も

一若しは二

云云、

涅槃經に云く

ねはんきよう

かく

是くの如き等の涅槃經典を信ずるものは

こ

じゅつぼうかい

十方界の所有の

しyou

地土の如し

等云云、

此の經文は時に

きようもん

當りて貴とく

予が肝に染みぬ、

は我も

ほけきよう

法華經を信じたり

信じたり、

諸人の語のごとき

んば一人

も

ほうほう

謗法の者なし、

此の經文には

しょうほう

正法の者

爪上の土等云云、

經文と世間とは

きようもん

水火なり、

世間の

人云く

いわ

日本国には

にほんこく

日蓮一人計り

謗法の者等云云、

又經文には

きようもん

大地より多からんと云云、

法滅尽經には

ぜんしや

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

ねはんきよう

法滅尽經には

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

善者一二人、

涅槃經に

は信者そうじよう爪上土等云云、經文のごとくならば日本国は但日蓮一人にほんこく にちれん

こそ爪上土一二二人にては候へ、されば心あらん人人は經文をかそうじよう ひとびと きようもん

用ゆべき世間をか用ゆべき。

問て云く涅槃經の文には涅槃經の行者は爪上の土等云云、

汝が義には法華經等云云如何、答えて云く涅槃經に云く「法華なんじ ほけきよう いかん いわ ねはんきよう いわ ほつけ

の中の如し」等云云、妙樂大師云く「大經自ら法華を指して極こと みようらく だいし いわ だいきよう みずか ほつけ

と為す」等云云、大經と申すは涅槃經なり涅槃經には法華經を極な だいきよう もう ねはんきよう ねはんきよう ほけきよう ごく

と指て候なり、而るを涅槃宗の人の涅槃經を法華經に勝ると申せさし し か ねはん ねはんきよう ほけきよう まさ

しは主を所従といひる下郎を上郎といひるし人なり、涅槃經をよむしよじゆう ねはんきよう

と申すは法華經をよむを申すなり、譬へば賢人は国主を重んずるもう ほけきよう もう たと けんじん こくしゆ

者をば我をさぐれども悦ぶなり、涅槃經は法華經を下て我をほむねはんきよう ほけきよう くだし

る人をばあながちに敵とにくませ給う、此の例をもつて知るべしたま

けこんきよう 華嚴經・觀經・大日經等をよむ人も法華經を劣とよむは彼れ彼

れきようぎようの經經の心にはそむくべし、此これをもつて知るべし法華經を

よむ人の此の經をば信ずるようなれども諸經しよきようにても得道とくだうなると

おもうは此の經をよまぬ人なり、例せば嘉祥大師は法華玄ほつげと申もうす

文十卷造りつくて法華經をほめしかども妙樂みようらくかれをせめて云く「毀

其その中に在り何んぞ弘讚ぐさんと成さん」等云云、法華經をやぶる人な

り・されば嘉祥かじようは落ちて天台てんだいにつかひて法華經をよまず我れ經を

よむならば惡道あくどうまぬかれがたしとて七年まで身を橋とし給たまいき、

慈恩大師じおんだいしは玄贊げんさんと申もうして法華經をほむる文十卷あり伝でんぎようだいし教大師せ

めて云くいわ「法華經を讀よむると雖も還いえどて法華の心を死ころす」等云云、

此等これらをもつておもうに法華經をよみ讚歎さんたんする人人ひとびとの中に無間地獄むげんじごく

は多く有あるなり、嘉祥かじよう・慈恩じおんすでに一乘いちじよう誹謗ひぼうの人ぞかし、弘法こうぼう

・慈覺・智証じかく ちしょうあに法華經蔑如ほけきょうべつじよの人にあらずや、嘉祥大師かじょうだいしのごとく

講を廢し衆を散じて身を橋となせしも猶なおいぜん已前の法華經誹謗ほけきょうひぼうの罪つみや

きへざるらん、例せば不輕輕毀ふぎょうききうきの衆は不輕菩薩ふぎょうぼさつに信伏隨從しんぷくずいじゅうせし

かども重罪じゅうざいいまだ・のこりて千劫阿鼻せんごうあびに墮おちぬ、されば弘法こうぼう・

慈覺・智証等じかく ちしょうは設たといい・ひるがへす心ありとも尚なお法華經をよむなら

ば重罪じゅうざいきへがたし・いわうや・ひるがへる心なし、又法華經ほけきょうを

失うしない真言教しんこんきょうを晝夜ちやうばに行おこなひ朝暮でんぼうに伝法でんぼうせしをや、世親菩薩せじんぼさつ・馬鳴めみょう

菩薩ぼさつは小をもつて大を破つみせる罪をば舌を切らんとこそせさせ給たまい

しか、世親菩薩せじんぼさつは仏說ぶつせつなれども阿含經あこんきょうをば・たわふれにも舌の上

にをかじとちかひ、馬鳴菩薩めみょうぼさつは懺悔ざんげのために起信論きしんろんをつくりて

小乗しょうじょうをやぶり給たまき、嘉祥大師かじょうだいしは天台大師てんだいだいしを請しょうじ奉たてまつりて百余人

の智者ちしやの前にして五体を地になげ遍身へんしんにあせをながし紅くれなゐのなん

だをながして今よりは弟子を見じ法華經をかうぜじ弟子の面をま

ほり法華經をよみたてまつれば我力の此の經を知るにいたりとて

・天台よりも高僧老僧にておはせしがわざと人のみるときをひま

いらせて河をこへかうざにちかづきて・せなかにのせまいらせて

高座にのぼせたてまつり結句御臨終の後は隋の皇帝にまいら

せて小児が母にをくれたるがごとくに足ずりをして・なき給いし

なり、嘉祥大師の法華玄を見るにいたう法華經を謗じたる疏には

あらず但法華經と諸大乘經とは門は浅深あれども心は一と・か

きてこそ候へ此れが謗法の根本にて候か。

華嚴の澄觀も真言の善無畏も大日經と法華經とは理は一とこ

そかかれて候へ、嘉祥大師とがあらば善無畏三蔵も脱がたしさ

れば善無畏三蔵は中天の国主なり位をすてて他国にいたり殊勝

しょうだい

・招提の二人にあひて法華經をうけ百千の石の塔を立てしかば

ほけきよう　ぎようじや

だいにちきよう　なら

法華經の行者とこそみへしか、しかれども大日經を習いしより

ほけきよう　だいにちきよう

・このかた法華經を大日經に劣るとやおもひけん、始はいたう

そ

其の義もなかりけるが漢土にわたりて玄宗皇帝の師となりぬ、

げんそうこうてい

てんだいしゅう

天台宗をそねみ思う心つき給いけるかのゆへに、忽に頓死して

たまひ

たちまちとんし

ごくそつ

くろがね

えんまおうきゆう

二人の獄卒に鉄の縄・七すぢつけられて閻魔王宮にいたりぬ、

ごくそつ

くろがね

えんまおうきゆう

命いまだ・つきずと・いゐてかへされしに法華經を謗するとやお

ほけきよう

ぼう

もひけん真言の觀念・印・真言等をば・なげ

しんこん

かんねん

しんこん

ほけきよう

こんしさんがい

とな

すてて法華經の今此三界の文を唱えて縄も切れかへされ給いぬ、

あめ

又雨のいのりをおほせつけられたりしに忽に雨は下たりしかども

たちまちあめ

ふり

たいふう

大風吹きて国をやぶる、結句死し給いてありしには弟子等集りて

けつく

たまひ

でし

りんじゅう

臨終いみじきやうをほめしかども無間・大城に墮ちにき、問う

むげん

だいにじよう

お

て云く何をもつてかこれをする、答えて云く彼の伝を見るに云く
「今畏の遺形を觀るに漸く加縮小し黒皮隱隱として骨其露な
り」等云云、彼の弟子等は死後に地獄の相の顯われたるをしらず
して徳をあぐなどをもへども・かきあらはせる筆は畏が失をかけ
り、死してありければ身やふやくつづまり・ちひさく皮はくろし
骨あらはなり等云云、人死して後・色の黒きは地獄の業と定むる
事は仏陀の金言ぞかし、善無畏三蔵の地獄の業はなに事ぞ幼少
にして位をすてぬ第一の道心なり、月氏・五十余箇国を修行せ
り慈悲の余りに漢土にわたれり、天竺・震旦・日本一閻浮提の内
に真言を伝へ鈴をふる此の人の徳にあらずや、いかにして地獄に
墮ちけると後生をおもはん人人は御尋ねあるべし。

又金剛智三蔵は南天竺の大王の太子なり、金剛頂經を漢土に

わたす^そ其の徳善無畏のごとし、又互いに師となれり、而^{しか}るに

こんごうちさんぞうちよくせん

あめ

あめふ

金剛智三蔵勅宣^{あめ}によて雨の祈りありしかば七日が中に雨下る

てんしおおいよろこ

たちまちたいふう

おうしん

天子大に悦ばせ給^{たま}うほどに忽に大風吹き来る、王臣等けうさめ

たま

たま

とこま

給いき使をつけて追はせ給^{たま}いしかども・とかうのべて留^{とこま}りしな

けつくひめみや

しきよ

おんみ

り、結句は姫宮の御死去ありしに、いのりをなすべしとて御身の

代に殿上の二女七歳になりしを薪^{たきぎ}につみこめて焼き殺せし事こ

むざん

しか

ひめみや

たま

ふくうさんぞう

そ無慚にはおぼゆれ、而れども姫宮もいきかへり給^{たま}はず不空三蔵

こんごうち

がっし

これら

ふしん

ふくうさんぞう

は金剛智と月支より御ともせり、此等の事を不審とやおもひけん

こんごうち

がっし

これら

ふしん

ふくうさんぞう

畏と智と入滅の後・月氏に還りて竜智に値^あい奉り真言を習^{なら}いな

てんだいしゅう

がっし

かえ

たてまつしんこん

なら

をし天台宗に帰伏してありしが心計^{ばか}りは帰えれども身はかへる

てんだいしゅう

きふく

ばか

もつ

あめふ

事なし、雨の御いのりうけ給^{たま}わりたりしが三日と申すに雨下る、

あめ

たま

もつ

あめふ

天子悦ばせ給^{たま}いて我れと御布施ひかせ給^{たま}う、須臾ありしかば大風

てんしよろこ

たま

ふせ

たま

しゅう

たいふう

落ち下りて内裏だいりをも吹きやぶり雲閣うんかく月卿げっけいの宿所一所も・あるべし

ともみへざりしかば天子大に驚おどろきて宣旨せんじなりて風をとどめよと

仰おおせ下さる且しばらくありては又吹き又吹きせしほどに数日が間やむ

ことなし、結句けっくは使をつけて追うてこそ風もやみてありしか、此

の三人の悪風あくふうは漢土かんと・日本にほんの一切いっさいの真言師しんこんしの大風たいふうなり。

さにてあるやらん去いぬる文永十一年四月十二日の大風たいふうは阿弥陀あみだ

堂どうの加賀法印かういん・東寺第一とうじだいいちの智者ちしやの雨あめのいのりに吹きたりし逆風ぎやくふうな

り、善無畏ぜんむい・金剛智こんこうち・不空ふくうの悪法あくほうをすこしもたがへず伝えたりけ

るか・心にくし・心にくし。

弘法大師こうぼうだいしは去いぬる天長元年てんねんの二月大旱魃かんぱつのありしに先には守敏しゅびん

・祈雨きうして七日が内に雨あめを下す但京中にふりて田舎いなかにそそがず、

次に弘法承取こうほううけとりて一七日に雨氣なし二七日に雲なし三七日と申せし

に天子てんしより和氣の真綱あみを使者として御幣めさを神泉苑しんせんおんにまいらせたり
しかば天雨てんうふる下事三日、此れをば弘法大師並に弟子等でし・此の雨あめをう
ばひとり我が雨あめとして今に四百余年・弘法こうぼうの雨あめという、慈覺大師
の夢に日輪にちりんをいしと弘法大師の大妄語もうごに云く弘仁九年こうにんの春・大疫だいえき
をいのりしかば夜中に大日輪出現だいにちりんしゅつげんせりと云云、成劫じょうこつより已来このかた・
住劫の第九の滅・已上二十九劫が間に日輪夜中にちりんに出でしという事
なし、慈覺大師は夢に日輪にちりんをいるという内典ないてん五千・七千・外典げてん
三千余卷に日輪にちりんをいるとゆめにみるは吉夢という事有りやいな
や、修羅しゅらは帝釈たいしやくをあだみて日天ひのかみをいたてまつる其その矢かへりて
我が眼まなこにたつ、殷いんの紂王は日天ひのかみを的にいて身を亡ほろぼす、日本にほんの神
武天皇てんのうの御時おんとき・度美長とみのおさと五瀬命いつせのみことと合戦ありしに命みことの手に矢た
つ、命みことの云く我はこれ日天ひのかみの子孫なり日に向い奉りて弓をひく

ゆへに日天ひのかみのせめをかをほれりと云云、阿闍世王あじゃせは邪見じゃけんをひるが
えして仏に歸しまいらせて内裏だいりに返りて・ぎよしんなりしが、お
どろいて諸臣しよに向て云く日輪いちりん・天より地に落つとゆめにみる諸臣しよ
の云く仏いわの御入滅にゅうめつか云云、須跋陀羅しゅばつがゆめ又かくのごとし、我
国ことは殊にいむべきゆめなり神をば天照てんしょうという国をば日本にほんという、
又教主きょうしゅ釈尊しやくそんをば日種にちしゅと申す摩耶夫人まやふじん日をはらむとゆめにみて・
まうけ給える太子たいしなり、慈覺大師じかくだいしは大日如来だいにちにやらいを叡山えいざんに立て釈迦しやくか仏ぶつ
をすて真言しんごんの三部經さんぶきやうをあがめて法華經ほけきやうの三部の敵となせしゆへに
此の夢出現しゅつげんせり。

例せば漢土かんとの善導ぜんどうが始は密州めいしやうの明勝めいしやうといゐし者に値あうて
法華經ほけきやうをよみたりしが後には道綽どうしやくに値あうて法華經ほけきやうをすて觀經かんきやうに
依りて疏じよをつくり法華經ほけきやうをば千中無一せんちゆうむいつ・念仏ねんぶつをば十即じゅつそく十生じゅつしやう・

ひやくそくひやくしやう

百即 百生 と定めて此の義を成せんがために阿弥陀仏の御前に

して祈誓をなす、仏意に叶うやいなや毎夜夢の中に常に一りの僧

有りて来て指授すと云云、乃至一 經 法の如くせよ乃至觀念

法門經等云云、法華經には「若し法を聞く者有れば一として

成仏せざる無し」と善導は「千の中に一も無し」等云云、法華經

と善導とは水火なり善導は觀經をば十即 十生 ・ 百即 百生

・ 無量義經に云く「觀經は未だ眞實を顕さず」等云云、無量義經

と楊柳房とは天地なり此れを阿弥陀仏の僧と成りて来つて汝が

疏は眞なりと証し給わんは・あに眞事ならんや、抑 阿弥陀は

法華經の座に來りて舌をば出だし給はざりけるか、觀音・勢至は

法華經の座にはなかりけるか、此れをもつて・をもへ慈覺大師の

御夢は・わざわひなり。

問うて云く弘法大師の心經の秘鍵に云く「時に弘仁九年の春
てんがだいえき こん こうていみずか ひったん こんし そうしやう
天下大疫す、爰に皇帝自ら黄金を筆端に染め紺紙を爪 掌に握り
はんになしんきやう しょしや たてまつたま のつと きやうし
て般若心經 一卷を書写し奉り給う予、講読の撰に範りて經旨の
つづ いま ことば やから たた
宗を綴る未だ結願の詞を吐かざるに蘇生の族途にイずむ、夜変
しか かくかく こ ぐしん かいとく あら しんりき しよい
じて而も日光赫赫たり是れ愚身の戒徳に非ず金輪御信力の所為な
ただ もう やから ひけん じゆ たてま じゆぶ せつぼう
り、但し神舎に詣でん輩は此の秘鍵を誦し奉れ、昔予鷲峰說法
むしろ まのあたそ
の筵に陪して親り其の深文を聞きたてまつる豈其の義に達せざ
ら

んや」等云云、又孔雀經の音義に云く「弘法大師帰朝の後真言宗
を立てんと欲し諸宗を朝廷に群集す 即身成仏の義を疑う、
だいしちけん なんぼう そくしんじやうぶつ うたがい
大師智拳の印を結びて南方に向うに面門俄に開いて金色の
びるしやな すなわち げんき そくしんとんしやう
毘盧遮那と成り即便本体に還歸す、入我我入の事・即身頓証の

うたがい

疑い此の日釈然たり、然るに真言瑜伽の宗・秘密曼荼羅の道・

彼の時より建立しぬ、又云く「此の時に諸宗の学徒大師に帰

して始めて真言を得て請益し習学す三論の道昌・法相の源仁

・華嚴の道雄・天台の円澄等皆其の類なり」、弘法大師の伝に

云く「帰朝泛舟の日、発願して云く我が所学の教法若し感応の

地有らば此三鉢其の処に到るべし仍て日本の方に向て三鉢を

抛げ上ぐ遙かに飛んで雲に入る十月に帰朝す」云云、又云く

「高野山の下に入定の所を占む乃至彼の海上の三鉢今新たに

此に在り」等云云、此の大師の徳無量なり其の両三を示すかくの

ごとくの大徳あり・いかなが此の人を信ぜずしてかへりて阿鼻

地獄に墮といはんや、答えて云く予も仰いで信じ奉る事かくのご

とし但古の人人も不可思議の徳ありしかども仏法の邪正は其には

よらず、外道げどうが・或あるは恒河こうがを耳に十二年留め・或あるは大海たいかいをすひほ
し・或あるは日月にちがつを手てににぎり・或あるは釈子ぎゅうようを牛羊ぎゅうようとなしなんとせし
かども・いよいよ大慢だいまんを・をこして生死しょうじの業とこそなりしか、
此これをば天台てんだい云く「名利みょうりを邀め見愛を増す」とこそ釈しゃくせられて候
へ、光宅こうたくが忽たちまちに雨あめを下くだし須臾しゅゆに花をさかせしをも妙楽みょうらくは「感応かんのう
此この如ごとくなれども猶理なほに称かなわず」とこそかかれて候へ、されば
天台大師てんだいだいしの法華經ほけきようをよみて「須臾しゅゆに甘雨かんうを下せ」伝でん教大師ぎょうだいしの三
日にちが内に甘露かんろの雨あめをふらしておはせしも其それをもつて仏意ぶつゐに叶かなうと
はをほせられず、弘法大師こうぼうだいしいかなる徳ましますとも法華經ほけきようを戯論けろん
の法と定め釈迦しゃか仏ぶつを無明むみょうの辺域へんいきとかかせ給たまへる御ふでは智慧ちえかし
こからん人は用もちゆべからず、いかにいわうや上にあげられて候徳
どもは不審ふしんある事なり、「弘仁九年こうにんの春天下大疫てんがだいえき」等云云、春は

九十日・何いづれの月・何いづれの日ぞは一、又弘仁九年には大疫ありけるか

是二、又「夜変じて日光赫赫かくかくたり」と云云、此の事第一だいいちの大事だいじな

り弘仁九年は嵯峨天皇の御宇なり左史右史の記に載のせたりや是

三、設たといのい載せたりとも信じがたき事なり成劫二十劫・住劫九劫

・已上二十九劫が間にいまだ無き天変なり、夜中に日輪にちりんの出現しゅつげん

せる事如何いかに又如來一代によらいいちだいの聖教しょうきょうにもみへず未來みらいに夜中に日輪にちりん出ず

べしとは三皇さんこう・五帝ごていの三墳さんぶん・五典ごてんにも載のせず仏經ぶつきょうのごときんば

壊劫えこうにこそ二の日・三の日乃至ないし・七の日は出ずべしとは見えたれ

どもかれは昼のことぞかし夜日出現しゅつげんせば東西北の三方は如何いかに、

設たといないげい内外の典に記せずとも現げんに弘仁九年こうにんの春何れの月何れの日いづれ

何れの夜の何れの時いづれに日出いずるといふ公家くげ・諸家しよ・叡山等えいざんの日記にっき

あるならばすこし信ずるへんもや、次ぎ下つぎしもに「昔予鷲峰說法じゆぶせつぽうの筵むしろ

まのあたそ

に陪して親り其の深文を聞く」等云云、此の筆を人に信ぜさせし

めんがためにかまへ出だす大妄語か、されば靈山りょうぜんにして法華ほっけは

けろん

だいにちきよう

しんじつ

と

戲論・大日経は真実と仏の説き給けるを阿難・文殊が☆りて

みようほけきよう

しんじつ

妙法華経をば真実とかけるかいかん、いうにかいなき姪女・破戒

ほっし

ふら

あめ

ふら

の法師等が歌をよみて雨す雨を三七日まで下さざりし人はかかる

徳あるべしや是四、孔雀経くじゃくの音義いんぎに云く「大師智拳だいしちけんの印を結んで

なんほう

南方に向うに面門めんもん俄かに開いて金色の毘盧遮那びるしゃなと成る」等云云、

こ

いずれ

いずれ

かんど

にほん

此れ又何れの王何れの年時ぞ漢土かんどには建元を初とし日本には大宝

を初として緇素しその日記大事にっきだいじには必ず年号のあるが、これほどの

だいじ

大事にいかでか王も臣も年号も日時もなきや、又次ぎに云く

さんろん

どうしやう

ほっそう

げんじん

けごん

どうゆう

てんだい

えんちよう

「三論の道昌・法相の源仁・華嚴の道雄・天台の円澄」等云云、

そもそも

えんちよう

じゃつこうだいし

てんだい

ざす

そのときなん

だいいち

抑も円澄は寂光大師・天台第二の座主なり、其の時何ぞ第一

の座主・義真根本の伝でんぎようだいし、教大師をば召さざりけるや、円澄えんちようは天台てんだい

第二の座主ざす伝でんぎようだいし、教大師の御弟子おんでしなれども又弘法大師こうぼうだいしの弟子でしなり、

弟子でしを召さんよりは三論さんろん・法相ほつそう・華嚴けこんよりは天台てんだいの伝でんぎよう、教・義真ぎしん

の二人を召すめべかりけるか、而も此しかの日記にっきに云く「真言しんこん瑜伽ゆいがの宗

・秘密ひみつ曼荼羅まんだら彼の時よりして建立こんりゆうす」等云云、此の筆は伝でんぎよう教・

義真ぎしんの御存生おんしょうかとみゆ、弘法こうぼうは平城天皇へいぜいてんのう・大同二年より弘仁こうにん十

三年までは盛さかんに真言しんこんをひろめし人なり、其の時そのときは此の二人げん現げんにお

はします又義真ぎしんは天長十年までおはせしかば其の時そのときまで弘法こうぼうの

真言しんこんは・ひろまらざりけるか・かたがた不審ふしんあり、孔雀くじやく経きやうの疏じよは

弘法こうぼうの弟子でし・真済しんざいが自記しんざいなり信じがたし、又邪見じゃけん者が公家くげ・諸家しよ

・円澄えんちようの記きをひかるべきか、又道昌どうしやう・源仁げんじん・道雄どうゆうの記きを尋ぬべ

し、「面門にわ俄かに開いて金色きんしきの毘盧遮那びるしやなと成る」等云云、面門と

は口なり口の開けたりけるか眉間みけん開くとかかんとしけるが☆あやまりて

面門だいいしちけんとかけるか、ぼう書をつくるゆへにかかるあやまりあるか、

「大師だいいしちけん智拳の印を結んで南方なんぼうに向うに面門にわ俄かに開いて金色の

毘盧遮那びるしやなと成る」等云云、涅槃ねはんぎよう經の五に云く「迦葉かしよう・仏に白して

言もうさく世尊せそん・我今こ是の四種の人に依よらず何を以もつての故ゆえに瞿師羅くしら經

の中の如ごとき仏・瞿師羅くしらが為ために説きたまわく若もし天魔てんま梵破壊はえせんと

欲ほするが為ために變じて仏の像なと為り三十二相・八十種しゆじう好を具足ぐそくし

莊嚴そうごんし円光えんまん一尋面部円満えんまんなること猶月なほの盛明みんなるが如ごとく眉間みけんの

毫相ごうそう白きこと珂雪かせつに踰こえ乃至ないし左の脇より水を出し右の脇より火を

出いだす」等云云、又六の卷に云く「仏迦葉かしように告つげたまわく我般涅槃はつねはん

して乃至ないし後こ是の魔波旬はじゆん漸ようく当まさに我が正法しょうほうを沮壞そえす乃至ないし化して

阿羅漢あらかんの身及し仏の色身しきしんと作り魔王まおう此の有漏うろの形を以もつて無漏むろの身と

作り我が正法を壊らん」等云云、弘法大師は法華經を華嚴經・
大日經に對して戲論等云云、而も仏身を現ず此れ涅槃經には魔
有漏の形をもつて仏となつて我が正法をやぶらんと記し給う、
涅槃經の正法は法華經なり故に經の次ぎ下の文に云く「久く
已に成仏す」、又云く「法華の中の如し」等云云、釈迦・多宝
・十方の諸仏は一切經に對して「法華經は眞実大日經等の
一切經は不眞実」等云云、弘法大師は仏身を現じて華嚴經・
大日經に對して「法華經は戲論」等云云、仏説まことならば弘法
は天魔にあらずや、又三鈷の事殊に不審なり漢土の人の日本に來
りてほりいだすとも信じがたし、已前に人をや・つかわして・う
ずみけん、いわうや弘法は日本の人・かかる誑乱其の数多し此等
をもつて仏意に叶う人の証拠とはしりがたし。

されば此の真言・しんごん 禪宗・ぜんしゅう 念仏等やうやくかさなり来る程に人

王八十二代・尊成・おき 隱岐の法皇・ほうこう 権の太夫殿を失わんと年ごろは

げませ給いけるゆへに大王たる国主なれば・こくしゅ なにとなくとも師子しし

王の兎を伏するがごとく、鷹の雉を取るやうにこそあるべかりし

上・えいざん 叡山・とうじ 東寺・おんじょう 園城・奈良・ななだいじ 七大寺・てんしやうだいじん 天照太神・かも 加茂・かすが 春日

等に数年が間・ある 或は調伏・じょうぶく 或は神に申させ給いしに二日三日だ

にもささへかねて佐渡国・さど 阿波国・おき 隱岐国等にながし失て終にか

くれさせ給いぬ、調伏の上首御室は但東寺をかへらるるのみな

らず眼のまなこごとくあひせさせ給いし第一の天童・せいたか 勢多伽が頸切ら

れたりしかば調伏のしるし還著於本人のゆへとこそ見へて候へ、

これは・わづかの事なり此の後定んで日本国の諸臣万民一人もな

く乾草を積みて火を放つがごとく大山のくづれて谷をうむるがこ

とく我が国・他国に・せめらるる事出来すべし、此の事日本国

の中に但日蓮にちれん一人計りしれり、いゝいだすならば殷いんのちゆうの紂王ひかんの比干

が胸をさきしがごとく夏の桀王かのけつの竜蓬りゆうほうが頸を切りしがごとく

檀弥羅王だんみらの師子尊者ししそんじやが頸を刎はねしがごとく竺じくの道生どうしやうが流されしが

ごとく法道三蔵ほうどうさんそうのかなやきを・やかれしがごとくならんずらんと

は・かねて知りしかども法華經ほけきやうには「我身命しんみやうを愛せず、但無上道むじやうどう

を惜おししむ」ととかれ涅槃經ねはんぎやうには「寧身命むしろしんみやうを喪うしなうとも教かくを匿かくさざ

れ」といさめ給たまえり、今度命このたびをおしむならばいつの世にか仏にな

るべき、又何いかなる世にか父母ふぼ・師匠ししやうをも・すくひ奉たてまつるべきとひと

へにをもひ切りて申もうし始めしかば案にたがはず・或あるは所をおひ

・或あるはのり・或あるはうたれ・或あるは疵きずをかうふるほどに去いぬる弘長こうちやう

元年辛酉五月十二日に御勘氣をかうふりて伊豆の国・伊東にな

がされぬ、又同じき弘長三年癸亥二月二十二日にゆりぬ。

其その後いよいよほだい 彌いつじょう 菩提心強盛じやうじやうにして申せばいよいよ大難だいなかさなる事

大風たいふうに大波おこの起るがごとし、昔ふぎの不輕菩薩ふぎやうぼさつの杖じやうもく木のせめも我身わがみ

につみしられたり覺徳比丘かくとくびくが歡喜かんき仏の末の大難だいなも此これには及およばじ

と・をぼゆ、日本にほん六十六箇国・嶋二の中に一日片時かたときも何れいずれの所に

すむべきやうもなし、古は二百五十戒たもを持ちて忍辱にんにくなる事・羅云らうん

のごとくなる持戒じかいの聖人しょうにんも富樓那ふるなのごとくなる智者ちしやも日蓮にちれんに

値あいぬれば悪口あくぐちをはく正直しょうじきにして魏徵ぎちやう・忠仁公のごとくなる

賢者けんじや等も日蓮にちれんを見ては理をまげて非とをこなう、いわうや世間せけんの

常ひとびとの人人は犬のさるをみたるがごとく獵師りやうしが鹿をこめたるににた

り、日本国にほんこくの中に一人として故こそあるらめという人なし道理どうりな

り、人ごとに念仏ねんぶつを申す人に向うごとに念仏ねんぶつは無間むげんに墮おつるとい

うゆへに、人ごとに真言しんごんを尊む真言しんごんは国をほろぼす悪法あくほうという、
国主こくしゅは禪宗ぜんしゅうを尊む日蓮にちれんは天魔てんまの所為そいというゆへに我と招けるわ
ざわひなれば・人ののるをも・とがめず・とがむとても一人なら
ず、打つをもいたまず本より存ぜしがゆへに・かう・いよいよ身
もをしまず力にまかせて・せめしかば禅僧ぜんぶつ数百人・念佛者ねんぶつ・数千
人・真言師しんごんし・百千人・或は奉行ぶぎようにつき・或はあるきり人につき・或はある
きり女房にようぼうにつき・或はある後家尼御前等ごけあまござんについて無尽むじんのざんげんを
なせし程に最後さいごには天下第一てんがだいいちの大事だいじ・日本国にほんこくを失わんと咒じゅうそする
法師ほうしなり、故最明寺殿さいみやうじ・極楽寺殿ごくらくくを無間地獄むげんじごくに墮おちたりと申もうす
法師ほうしなり御尋たずねあるまでもなし但須臾しゆゆに頸をめせ弟子等でしをば又頸
を切り・或はある遠国えんこくにつかはし・或はある籠ろうに入れよと尼ごぜんたちい
からせ給たまいしかばそのまま行われけり。

去いぬる文ぶん永えい八年辛かのとひつじ 未九月十二日の夜は相さ模がの国たつの口にて

切らるべかりしが、いかにしてやありけん其その夜はのびて依え智ちと

いうところへつきぬ、又十三日の夜はゆりたりと・どどめきしが

又いかにやありけん・さ佐渡どの国までゆく、今日きょう切るあす切るとい

ひしほどに四箇年というに結け句くは去いぬる文ぶん永えい十一年太歳きのえいぬ甲戌二

月十四日に・ゆりて同じき三月二十六日に鎌倉へ入り同じき四月

八日平さへもんの左衛門の尉に見参してやうやうの事こと申したりし中に今年

は蒙もうこ古は一定よすべしと申もうしぬ、同じき五月の十二日にかまくら

をいでて此の山に入れり、これはひとへに父ふ母ぼの恩ししやう師匠の恩・

三さん宝ぼうの恩・国恩をほうぜんがために身をやぶり命をすつれども

破われざればさでこそ候へ、又賢けんじん人の習ならい三度国をいさむるに用もちい

ずば山さんりん林にまじわれということは定まるれいなり、此の功徳くどくは定

めて上三宝・下梵天・帝釈・日月までもしろしめしぬらん、
父母も故道善房の聖霊も扶かり給うらん、但疑い念うことあり目連尊者は扶けんと・おもいしかども母の青提女は餓鬼道に墜ちぬ、大覺世尊の御子なれども善星比丘は阿鼻地獄へ墜ちぬ、
これは力のまま・すくはんと・をばせども自業自得果のへんはすくひがたし、故道善房はいたう弟子なれば日蓮をばにくしとはをばせざりけるらめどもきわめて臆病なりし上・清澄をはなれじと執せし人なり、地頭景信がおそろしさといふ・提婆・瞿伽利にことならぬ円智・実成が上と下とに居てをどせしをあながちにをそれていとをしとをもうとしごろの弟子等をだにもすてられし人なれば後生はいかんがと疑わし、但一の冥加には景信と円智・実成とが・さきにゆきしこそ一のたすかりとは・をもへども

彼等かれらは法華經ほけきょう十羅刹じゅうらせつのせめをかほりてはやく失ぬ、後にすこし信

ぜられてありしは・いさかひの後のちぎりきなり、ひるのともし

びなにかせん其その上いかなる事あれども子・弟子でしなんという者は

不便ふびんなる者ぞかし、力なき人にもあらざりしが・さどの国までゆ

きしに一度もひとたびとぶらはれざりし事は法華經ほけきょうを信じたるにはあらぬ

ぞかし・それにつけても・あさましかれば彼の

人の御死去しきよときくには火にも入り水にも沈み・はしりたちても・

ゆひて御はかをも・たたいて経をも一卷とくじゅ読誦せんとこそおもへど

も賢人けんじんのならひ心には遁世とんせいとは・おもはねども人は遁世とんせいとこそお

もうらんに・ゆへもなく・はしり出いずるならば末へも・とをらず

と人おもひぬべし、されば・いかにおもひたてまつれども・まい

るべきにあらず、但し各各二人は日蓮にちれんが幼少ようしょうの師匠ししょうにて・おは

します、勤ごんそう操そう僧そう正じょう・行ぎょう表ひょう僧そう正じょうの伝でん教ぎょう大師だいしの御おん師したりしがか
へりて御おん弟子でしとならせ給たまいしがごとし、日に蓮ちれんが景かげ信ぶにあだまれて
清せい澄じやう山さんを出いでしにかくしおきてしのび出いでられたりしは天下てんが第一だいいち
の法ほけき華きやう經きやうの奉ほう公きやうなり後ご生しやうは疑うたがいおぼすべからず。

問いわうて云ほけきく法きやう華きやう經きやう一いち部ぶ八はち卷くわん・二に十じゅう八はち品ひんの中なに何なに物ものか肝かん心じんなる

や、答いえて云いく華け嚴こん經きやうの肝かん心じんは方ほう大だい広くわう仏ぶつ華け嚴こん經きやう・阿あ含こん經きやうの肝かん心じんは

仏ぶつ說せつ中ちゆう阿あ含こん經きやう・大だい集じつ經きやうの肝かん心じんは方ほう大だい等とう・大だい集じつ經きやう・般はん若にやき經きやうの

肝かん心じんは摩ま訶か般はん若にや波は羅ら蜜みつ經きやう・雙そう觀かん經きやうの肝かん心じんは仏ぶつ說せつ無む量りやう壽じゆう經きやう・觀かん經きやう

の肝かん心じんは仏ぶつ說せつ觀かん無む量りやう壽じゆう經きやう・阿あ弥み陀だ經きやうの肝かん心じんは仏ぶつ說せつ阿あ弥み陀だ經きやう・

涅槃ねはん經きやうの肝かん心じんは大だい般はん涅槃ねはん經きやうかかくのごとくの一いっ切さい經きやうは皆みな如に是ぜ我が聞もん

のかみ上だの題だい目もく其その經きやうの肝かん心じんなり、大だいは大だいにつけ小せうは小せうにつけて題だい目もく

をもつて肝かん心じんとす、大だい日にち經きやう・金こん剛ごう頂ちやう經きやう・蘇そ悉しつ地ち經きやう等とう亦また復またか

のごとし、仏も又かくのごとし大日如来・日月燈明仏・燃燈仏
だいつう うんらいおんのうぶつこれら

・大通仏・雲雷音王仏是等の仏も又名の内に其の仏の種種の徳を
そ

そなへたり、今の法華経も亦もつてかくのごとし、如是我聞の上
ほけきよう また

の妙法蓮華経の五字は即一部八巻の肝心、亦復一切経の肝心
みようほうれんげきよう ごじ そく

一切の諸仏・菩薩・二乗・天人・修羅・竜神等の頂上の正法
いっさい しよぶつ ほさつ にじよう てんにん しゆら りゆうじん ちようじよう しょうほう

なり、問うて云く南無妙法蓮華経と心もしらぬ者の唱うると
いわ なむ みようほうれんげきよう

南無大方広仏華嚴経と心もしらぬ者の唱うると齊等なりや浅深の
なむ けこんきよう

功德差別せりや、答えて云く浅深等あり、疑て云く其の心如何、
くどくさべつ いわ せんじん うたがい いわ そ

答えて云く小河は露と涓と井と渠と江とをば収むれども大河
いわ つゆ たまりみず みぞ

を・をさめず大河は露乃至小河を摂むれども大海を・をさめず、
つゆないし おさ

阿含経は井江等露涓を・をさめたる小河のごとし、方等経・
あこんきよう せいこう ろけん

阿弥陀経・大日経・華嚴経等は小河を・をさむる大河なり、
あみだ だいにちきよう けこんきよう

ほけきよう 法華經は露・涓・井・江・小河・大河・天雨等の一切の水を
たまりみず

一てきももらさぬ大海なり、譬えば身の熱者の大寒水の辺にい
たいかい たと あつきもの かんすい

ねつれば・すずしく小水の辺に臥ぬれば苦きがごとし、五逆謗法
ふし ごきやくほうほう

の大きな一闡提人・阿含・華嚴・觀經・大日經等の小水の辺
いっせんたい あこん けこん かんきよう だいにちきよう

にては大罪の大熱さんじがたし、法華經の大雪山の上に臥ぬれば
たいざい ほけきよう せっせん ふし

五逆・誹謗・一闡提等の大熱忽に散ずべし・されば愚者は必ず
ごきやく ひほう いっせんたい たちまち ごしや

法華經を信ずべし、各各經經の題目は易き事同じといへども
ほけきよう きようぎよう だいもく やす

愚者と智者との唱うる功德は天地雲泥なり、譬へば大綱は大力も
ぐしや ちしや とな てんちうんदै たと たいこう

切りがたし小力なれども小刀をもつてたやすくこれをきる、譬へ
かたきいし にぶきかたな たと

ば堅石をば鈍刀をもてば大力も破がたし、利剣をもてば小力
ば堅石をば鈍刀をもてば大力も破がたし、利剣をもてば小力

も破りぬべし、譬へば薬はしらねども服すれば病やみぬ食は服す
たと

れども病やまず、譬へば仙薬は命をのべ凡薬は病をいやせども命
たと

をのべず。

疑うたがいつて云いわく二十八品の中に何か肝心かんじんぞや、答えて云いわく・或あるは

云いわく品みな品みな皆事に随したがいて肝心かんじんなり、・或あるは云いわく方便品・

寿量品かんじん肝心じんなり、・或あるは云いわく方便品ほうべん肝心かんじんなり、・或あるは云いわく

寿量品じゅうりょうぼんかんじん肝心じんなり、・或あるは云いわく開示悟入肝心かいじこにゅうかんじんなり、・或あるは云いわく実相じつそう

肝心かんじんなり。

問いわうて云いわく汝なんじが心如何いかん答なう南無妙法蓮華經肝心なむみょうほうれんげきようかんじんなり、其その証

如何いかん・阿難あなん・文殊等如是我聞等云云、問いわうて云いわく心如何いかん、答こたえて

云いわく阿難あなんと文殊もんじゅとは八年が間・此この法華經ほけきようの無量むりようの義ぎを一句いっく・

一偈いちげ・一字も残さず聴聞ちようもんしてありしが仏ぶつの滅後めつごに結集けつじゅうの時九百

九十九人の阿羅漢あらかんが筆を染めてありしに先づはじめに

妙法蓮華經とかかせ給たまいて如是我聞によぜがもんと唱となえさせ給たまいしは

みょうほうれんげきょう 妙法蓮華經の五字は一部八卷・二十八品の肝心にあらずや、さ

れば過去の燈明仏の時より法華經を講ぜし光宅寺の法雲法師は

「如是とは將に所聞を伝えんとす前題に一部を挙ぐるなり」等云

云、靈山にまのあたり・きこしめしてありし天台大師は「如是

とは所聞の法体なり」等云云章安大師の云く記者釈して曰く「蓋

し序王とは經の玄意を叙し玄意は文心を述す」等云云、此の釈に

文心とは題目は法華經の心なり妙樂大師云く「二代の教法を

収むること法華の文心より出ず」等云云、天竺は七十箇国なり総

名は月氏国・日本は六十箇国・總名は日本国月氏の名の内に七十

箇国乃至人畜・珍宝みなあり、日本と申す名の内に六十六箇国あ

り、出羽の羽も奥州の金も乃至国の珍宝・人畜乃至寺塔も神社

もみな日本と申す二字の名の内に摂れり、天眼をもつては日本

と申す二字を見て六十六国乃至人畜等を見るべし法眼をもつては
人畜等の此に死し彼に生るをもみるべし譬へば人の声をきいて体
をしり跡をみて大小をしる蓮をみて池の大小を計り雨をみて
竜の分齊をかんがう、これはみな一切の有ることわりなり、
阿含經の題目には大旨一切はあるやうなれども但小釈迦・一仏の
みありて他仏なし、華嚴經・觀經・大日經等には又一切有るや
うなれども二乗を仏になすやうと久遠実成の釈迦仏いまさず、
例せば華さいて菓ならず雷なつて雨ふらず鼓あつて音なし眼
あつて物をみず女人あつて子をうまず人あつて命なし又神な
し、大日の真言・薬師の真言・阿弥陀の真言・觀音の真言等又か
くのごとし、彼の經經にしては大王・須弥山日月・良薬・
如意珠・利劍等のやうなれども法華經の題目に対すれば雲泥の

しょうれつ

勝劣なるのみならず皆各当体の自用を失ふ、例せば衆星の光

にちりん

の一の日輪にうばはれ諸の鉄の

もろもろくろがね

鉄の一の磁石に値うて利性のつき大

あ

剣の小火に値て用を失ない牛乳・驢乳等の師子王の乳に値うて水

あい

ろにゆう

しし

あ

となり衆狐が術・一犬に値うて失い、狗犬が小虎に値うて色を変

しゅうこ

あ

うしな

くけん

あ

ずるがごとし、南無妙法蓮華經と申せば南無阿弥陀仏の用も

なむ みょうほうれんげきよう

なむ あみだぶつ

南無大日真言の用も觀世音菩薩の用も一切の諸仏・諸經・諸

なむ だいにしんごん

かんぜおんぼさつ

いっさい しょうぶつ

しよきよう

しよ

菩薩の用皆悉く妙法蓮華經の用に失なはる、彼の經經は

ぼさつ

みなことごと みょうほうれんげきよう

きようぎよう

妙法蓮華經の用を借ずば皆いたづらのものなるべし当時眼前の

みょうほうれんげきよう

とうじ がんぜん

ことはりなり、日蓮が南無妙法蓮華經と弘むれば南無阿弥陀仏

にちれん

なむ みょうほうれんげきよう

ひろ

なむ あみだぶつ

の用は月のかくるがごとく塩のひるがごとく秋冬の草のかるる

しゅうとう

がごとく氷の日天にとくるがごとくなりゆくをみよ。

こおり

にってん

問うて云く此の法実にいみじくばなど迦葉・阿難・竜樹・

いわ

かしよう

あなん

りゅうじゆ

馬鳴・無著・天親・南岳・天台・妙楽・伝教等は善導が南無
阿弥陀仏とすすめて漢土に弘通せしがごとく、慧心・永観・法然
が日本国を皆阿弥陀仏になしたるがごとく・すすめ給はざりける
やらん、答えて云く此の難は古の難なり今はじめたるにはあらず、
馬鳴・竜樹菩薩等は仏の滅後・六百年・七百年等の大論師なり、
此の人人・世にいでて大乘経を弘通せしかば諸諸の小乗の者
疑つて云く迦葉・阿難等は仏の滅後・二十年・四十年住寿し
給いて正法をひろめ給いしは如来一代の肝心をこそ弘通し給い
しか、而るに此の人人は但苦・空・無常・無我の法門をこそ詮と
し給いしに今馬鳴・竜樹等かしこしといふとも迦葉・阿難等に
はすぐべからずは一、迦葉は仏にあひまいらせて解をえたる人な
り、此の人人は仏にあひたてまつらず是二、外道は常楽我淨と

立てしを仏・世に出でさせ給いて苦・空・無常・無我と説かせ
給いき、此のものどもは常楽我淨といへり、されば仏も御入滅
なり又迦葉等もかくれさせ給いぬれば第六天の魔王が此のものど
もが身に入りかはりて仏法をやぶり外道の法となさんとするな
り、されば仏法のあだをば頭をわれ頸をきれ命をたて食を止め
よ国を追へと諸の小乗の人人申せしかども馬鳴・竜樹等は但
・一二人なり昼夜に悪口の声をきき朝暮に杖木をかうふりしな
り、而れども此の二人は仏の御使ぞかし、正く摩耶經には六百
年に馬鳴出で七百年に竜樹出でんと説かれて候、其の上楞伽經
等にも記せられたり又付法藏經には申すにをよばず、されども
諸の小乗のものどもは用いず但めくらぜめにせめしなり、如来
げんざいゆたおんしつ
現在猶多怨嫉・況滅度後の經文は此の時にあたりて少しつみし

られけり、提婆菩薩だいばぼさつの外道げどうにころされ師子尊者しそんじやの頸をきられし此の事をもつておもひやらせ給へたま。

又仏滅後ぶつめつ・一千五百余年にあたりて月氏がつしよりは東に漢土かんとといふ国あり陳隋ちんずいの代に天台大師出世す、此の人の云く如来にょらいの聖教しょうきように大あり小あり顕けんあり密あり権あり実あり、迦葉かしよう・阿難あなん等は一向いっこうに小を弘ひろめ馬鳴めみよう・竜樹りゆうじゆ・無著むちやく・天親てんじん等は権大乘こんだいじようを弘ひろめて実大乘じつだいじようの法華經ほけきようをば、或あるは但指あをさして義をかくし、或あるは經の面をのべしちゆうじゆうて始中終をのべず、・或あるは迹門しやくもんをのべて本門ほんもんをあらはさず、・或あるは本・迹あつて觀心かんじんなしといひしかば、南三なんざん・北七ほくひちの十流が末数千万人ばんにん・時をつくり・どつとわらふ、世の末になるままに不思議ふしぎの法師ほふしも出現しゆつげんせり、時にあたりて我等われらを偏執へんしゆうする者はありとも後漢ごかんの永平十年丁卯ひのとうの歳より今陳隋ちんずいにいたるまでの三蔵さんぞう・

人師・二百六十余人をものもしらずと申す上謗法の者なり惡道に墜つるといふ者出来せり、あまりの・ものくるはしさに法華經を持て来り給へる羅什三蔵をも・ものしらぬ者と申すなり、漢土はさてもをけ月氏の大論師竜樹・天親等の数百人の四依の菩薩もいまだ実義をのべ給はずといふなり、此をころしたらん人は鷹をころしたるものなり鬼をころすにもすぐべしとののしりき、又妙樂大師の時・月氏より法相真言わたり漢土に華嚴宗の始まりたりしを・とかくせめしかばこれも又さはぎしなり。

日本国には伝教大師が仏滅後・一千八百年にあたりていでさせ給い天台の御釈を見て欽明より已来二百六十余年が間の六宗をせめ給いしかば在世の外道・漢土の道士・日本に出現せりと謗ぜし上仏滅後・一千八百年が間・月氏・漢土・日本になかりし

円頓えんどんの大戒だいかいを立てんというのみならず、西国の観音寺かんのんの戒壇かいだん・

とうくしもつけ

東国下野とうだいじの小野寺かいだんの戒壇ちゆうごくやまと中国大和かいだんの国・東大寺かいだんの戒壇かいだんは同く

しょうじょうしゅうふん

小乗しょうじょう臭糞がしやくの戒なり瓦石がしやくのごとし、其それを持つ法師ほっし等は野干やかん・

えんこう

猿猴等えんこうのごとしとありしかばあら不思議ふしぎや法師ほっしににたる大蝗虫国いなむし

しゅつげん

ぶつぎょう

いちじ

に出現しゅつげんせり仏教ぶつぎょうの苗いちじ一時にうせなん、殷いんのちゅうの紂かのけつ・夏ほっしの桀ほっし・法師ほっしと

にほん

なりて日本にほんに生まれたり、後周の宇文うぶん・唐の武宗とう・二たび世に

しゅつげん

ぶつぼう

出現しゅつげんせり仏法ぶつぼうも但今失せぬべし国もほろびなんと大乘だいじょう・小乗しょうじょう

にるい

ほっししゅつげん

しゅうら

たいしやく

こうう

こうそ

の二類にるいの法師ほっし出現しゅつげんせば修羅しゅうらと帝釈たいしやくと項羽こううと高祖こうそと一国に並べる

なるべしと、

しよにん

諸人手しよにんをたたき舌をふるふ、在世ざいせには仏だいはと提婆だいはが二

かいだん

ひとびと

たしゅう

の戒壇かいだんありてそこばくの人人死にき、されば他宗たしゅうにはそむくべし

てんだいだいし

たま

えんどん

かいだん

我が師てんだいだいし・天台大師たまたの立て給たまはざる円頓えんどんの戒壇かいだんを立つべしという

ふしぎ

不思議ふしぎさよ・あらおそろし・おそろしと・ののしりあえりき、さ

れども經文分きょうもんぶんみょう明めいにありしかば叡山えいざんの大乗戒壇だいじょうかいすでに立てさせ

給たまいぬ、されば内証ないしょうは同じけれども法の流布るふは迦葉かしよう・阿難あなんより

も馬鳴めみよう・竜樹等りゅうじゆはすぐれ馬鳴等めみようよりも天台てんだいはすぐれ天台てんだいよりも

伝でん教ぎようは超えさせ給たまいたり、世末ぶつぎようになれば人の智ちはあさく仏教ぶつぎようは

ふかくなる事なり、例せば輕病じゆうびようは凡藥ふつぎよう・重病じゆうびようには仙藥せんぎよう・弱人じやくにんに

は強きかたうど有りて扶たすくるこれなり。

問いうて云いく天台てんだい・伝でん教ぎようの弘通くつうし給たまわざる正法しやうほうありや、答こたえて

云いく有り・求もとめて云いく何物なにものぞや、答こたえて云いく三さんあり、末法まつぽうのため

に仏留とどめ置き給たまう迦葉かしよう・阿難あなん等馬鳴めみよう・竜樹等りゅうじゆ天台てんだい・伝でん教等ぎようの

弘通くつうせさせ給たまはざる正法しやうほうなり、求もとめて云いく其その形ぎよう貌い如何いかん、答こた

えて云いく一いには日本にほん乃至ないし一閻浮提えんぶだい一同いに本門ほんもんの教主きやうしゆしやくそん釈尊ほんぞんを本尊ほんぞん

とすべし、所謂い宝塔ほうとうの内の釈迦しゃか・多宝外たほうほかの諸仏しよぶつ・並じやうぎように上行等じやうぎようの

ほさつきょうじ

四菩薩脇士となるべし、二には本門ほんもんの戒壇かいだん、三には日本にほん乃至ないし・

かんど

がっし

えんぶだい

漢土・月氏・一閻浮提えんぶだいに人ごとにうち有智・無智むちをきらはず一同に

たじ

他事をすてて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となうべし、此の事いまだひろま

えんぶだい

ぶつめつ

らず一閻浮提えんぶだいの内にぶつめつ仏滅後・二千二百二十五年が間・一人も唱となえ

にちれん

ず日蓮一人南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經等と声こゑもをしまず

とな

唱となうるなり、例せば風かぜに随したがつて波なみの大小だいしやうあり薪たきぎによつて火ひの

こうげ

高下あり池いけに随したがつて蓮はちすの大小だいしやうあり雨あめの大小だいしやうは竜りゆうによる根ねふか

みなもととお

ければ枝えだしげし源遠みなもととおければ流ながながしというこれなり、周の代の七

百年は文王の礼孝による秦の世ほどもなし始皇の左道さだちによるな

にちれん

り、日蓮にちれんが慈悲じひ曠大くわうだいならば南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうは万年まんねんの外みらい未来まで

にほんこく

もながるべし、日本にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうの盲目もうもくをひらける功德くどくあり、

むげんじこく

無間地獄むげんじこくの道をふさぎぬ、此の功德くどくは伝でん教天台ぎやうたいにも超りゆうじゆへ竜樹りゆうじゆ

迦葉かしようにも・すぐれたり、極樂ごくらく百年の修行しゆぎようは穢土えどの一日の功德くどくに
およ
及ばず、正像しょうぞう二千年の弘通くつうは末法まつぽうの一時いちじに劣るか、是れひとへ
に日蓮にちれんが智ちのかしこきにはあらず時のしからしむる耳のみ、春は花さ
き秋は菓このみなる夏はあたたかに冬はつめたし時のしからしむるに
有らずや。

「我滅度めつどの後・後の五百歳ごのこひやくさいの中に広宣流布こうせんるふして閻浮提えんぶだいに於て
断絶だんぜつして惡魔あくま・魔民まみん・諸の天竜もろもろてんりゆう・夜叉やしや・鳩槃荼等くぼんだに其の便りそを
得せしむること無けん」等云云、此の經文きやうもん若しむなしくなるな
らば舍利弗しやりほつは華光如来げこうにょらいとならじ迦葉尊者かしようそんじやは光明如来こうみょうにょらいとならじ
目もっけん☆は多摩羅跋耨檀香仏たまらばせんだんこうぶつとならじ阿難あなんは山海慧自在通王仏さんかいえじざいつうおうぶつとなら
じ摩訶波闍波提比丘尼まかはじやはだいびくには一切衆生いっさいしじゅう喜見仏きけんぶつとならじ耶輸陀羅やしゅだら
比丘尼びくには具足千万光相仏ぐそくせんまんこうそうとならじ、三千塵点さんぜんじんてんも戲論けろんとなり五百

塵点じんてんも妄語もうごとなりて恐らくは教主きょうしゅ釈尊しやくそんは無間地獄むげんじごくに堕おち多宝たほう仏ぶつ
は阿鼻あびの炎えんにむせび十方じゅうつぽうの諸仏しよぶつは八大地獄だいいじごくを栖すみとし一切いっさいの菩薩ぼさつ
は一百三十六の苦をうくべし・いかでかその義候そべき、其の義な
くば日本国にほんこくは一同の南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、されば花は根にかへ
り真味は土にとどまる、此の功德くどくは故道善房どうぜんぼうの聖靈しょうりようの御身おんみにあ
つまるべし、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう。

建治二年太歲丙子ひのえね 七月二十一日

之これを記しるす甲州波木井郷身延山より安房あわの国・東条とうじょうの郡・清澄
山・浄顕房じょうけんぼう・義成房ぎせいぼうの許もとに奉送す

◆四六 報恩抄送文ほうおん 330P

御状おわん給り候畢しんそぬ、親疎しんそと無く法門ほうもんと申もうすは心に入れぬ人はい
はぬ事にて候ぞ御心得候へ、御本尊ごほんそん図して進候まいらせそうろう・此の法華經ほけきよう

は仏の在世ざいせいよりも仏の滅後めつご・正法しょうぼうよりも像法そうぼう・像法そうぼうよりも
末法まつぽうの初はつめには次第しだいに怨敵おんてき強くなるべき由よしをだにも御心へあるなら
ば日本国にほんこくに是より外ほかに法華經ほけきようの行者ぎやうじやなし・これを皆人存みなじ候ぬ
べし、道善御房どうぜんごぼうの御死去しきよの由いぬ・去る月粗承ほぼうけたまわり候、自身じしん早々と参
上ごぼうし此の御房をも・やがてつかはすべきにて候しが自身じしんは内心ないしんは
存ぜずといへども人目には遁世とんせいのやうに見えて候へばなにとなく
此の山を出いでず候、此の御房ごぼうは又内内・人の申し候しは宗論しゅうろんや
あらんずらんと申せしゆへに十方じゅうつぽうにわかつて經論きやうろん等を尋ねしゆへ
に国国の寺寺へ人をあまたつかはして候に此の御房ごぼうはするがの国
へ・つかはして当時とうじこそ来て候へ、又此の文は随分大事ずいぶんだいじの大事だいじど
もをかきて候ぞ詮たといなからん人人ひとびとにきかせなばあしかりぬべく候、
又設たといいさなくともあまたになり候はば・ほかさまにもきこえ候な

ば御ため又このため安穩あんのんならず候そうらはんか、御まへと義成房ぎせうぼうと二人

・此この御房ごぼうをよみてとして嵩かさがもりの頂いただきにて二三遍又・故道善どうぜん

御房ごぼうの御はかにて一遍いっぺんよませさせ給たまいては此の御房ごぼうにあづけさせ

給たまいてつねに御聴聞ちようもん候へ、たびたびになり候ならば心づかせ

給たまう事候なむ、恐恐きようきよう謹言きんげん。

七月二十六日

日蓮 花押かおう

清澄御房ほう

◆四七 法華取要抄ほっけ 文永十一年五月ぶんえい

五十三歳御作 与富木常忍ときじょうにん 於身延 331p

扶桑沙門日蓮之を述べ

夫それ以おもんれば月支げつし・西天さいてんより漢土かんど・日本にほんに渡来とらいする所の経論きようろん・

五千・七千余卷なり、其中こちゆうの諸経論しよきようろんの勝劣しやうれつ・浅深せんじん・難易なんい・先後せんご

・ 自見に任せて之を弁うことは其の分に及ばず、人に随い宗に
 依つて之を知る者は其の義紛紜す、所謂華嚴宗の云く「一切經
 の中に此の經第一」と、法相宗の云く「一切經の中に深密經
 第一」と、三論宗の云く「一切經の中に般若經第一」と、真言宗
 の云く「一切經の中に大日の三部經第一」と、禪宗の云く・或
 は云く「教内には楞伽經第一」と、或は云く「首楞嚴經第一」
 と・或は云く「教外別傳の宗なり」と、淨土宗の云く「一切經
 の中に淨土の三部經末法に入りては機教相應して第一なり」と、
 俱舍宗・成実宗・律宗云く「四阿含並に律論は仏説なり華嚴經
 ・法華經等は仏説に非ず外道の經なり」・或は云く・或は云く、
 而に彼れ彼れ宗宗の元祖等・杜順・智儼・法蔵・澄觀・玄奘・
 慈恩・嘉祥・道朗・善無畏・金剛智・不空・道宣・鑒真・曇鸞・

道綽・善導・達磨・慧可等なり、此等の三蔵大師等は皆聖人なり賢人なり智は日月に齊く徳は四海に弥れり、其の上各各に経・律・論に依り更互に証拠有り随つて王臣国を傾け土民之を仰ぐ末世の偏学設い是非を加うとも人信用を致さじ、爾りと雖も宝山に來り登つて瓦石を採取し梅檀に歩み入つて伊蘭を懷き取らば悔恨有らん、故に万人の謗りを捨て猥りに取捨を加う我が門弟委細に之を尋討せよ。

夫れ諸宗の人師等・或は旧訳の経論を見て新訳の聖典を見ず・或は新訳の経論を見て旧訳を捨置き・或は自宗の曲に執著して己義に随い愚見を注し止めて後代に之を加添す、株杭に驚き騒ぎて兎獸を尋ね求め智円扇に発して仰いで天月を見る非を捨て理を取るは智人なり、今末の論師・本の人師の邪義を捨て置い

て専ら本經・本論を引き見るに五十余年の諸經の中に法華經第

四法師品の中の已今当の三字最も第一なり、諸の論師・諸の人師

定めて此經文を見けるか、然りと雖も・或は相似の經文に狂い

・或は本師の邪会に執し・或は王臣等の帰依を恐るるか、所謂

金光明經の「是諸經之王」密嚴經の「一切經中勝」六波羅蜜經

の「總持第二」大日經の「云何菩提」華嚴經の「能信是經・最為難」

般若經の「会入法性・不見一事」大智度論の「般若波羅蜜

最第一」涅槃論の「今者涅槃理」等なり、此等の諸文は法華經の

已今当の三字に相似せる文なり然りと雖も・或は梵帝・四天等の

諸經に對当すれば是れ諸經の王なり・或は小乘經に對對す

れば諸經の中の王なり・或は華嚴・勝鬘等の經に相對すれば

一切經の中に勝れたり全く五十余年の大小・權實・顯密の

しよきよう そうたい

こ しよきよう だいおう

あら しよせんしよたい

諸経に相對して是れ諸経の王の大王なるに非ず所詮所対を見て
きようぎよう

経経の勝劣を并うべきなり、強敵を臥伏するに始て大力を
しけん

知見する是なり、其の上諸経の勝劣は釈尊一仏の浅深なり全
たほう ふんじん

く多宝分身の助言を加うるに非ず私説を以て公事に混ざる事
なかれ

勿れ、諸経は・或は二乗凡夫に對揚して 小乗経を演説し、
ある もんじゆ

・或は文殊・解脱月・金剛薩☆等の弘伝の菩薩に對向して全く
じゆせんがい

地涌千界の上行等には非ず、今法華経と諸経とを相對するに
いちだい

一代に超過すること二十種之有り、其の中最要二有り所謂三五の
ちようか

二法なり三とは三千塵点劫なり諸経は・或は釈尊の因位を明す
さんぜんじんてんこう

こと・或は三祇・・或は動逾塵劫・或は無量劫なり、梵王云く此
ある さんぎ

の土には二十九劫より已來知行の主なり第六天・帝釈・四天王
このかたちぎよう

等も以て是くの如し、釈尊と梵王等と始めて知行の先後之を
しやくそん

諍論す爾りと雖も一指を挙げて之を降伏してより已来梵天・頭
を傾け魔王掌を合せ三界の衆生をして釈尊に歸伏せしむる
是なり、又諸仏の因位と釈尊の因位と之を糾明するに諸仏の
因位は・或は三祇・或は五劫等なり釈尊の因位は既に
三千塵点劫より已来娑婆世界の一切衆生の結縁の大士なり、此
の世界の六道の一切衆生は他土の他の菩薩に有縁の者一人も
之無し、法華經に云く「爾の時に法を聞く者は各諸仏の所に在り」
等云云、天台云く「西方は仏・別に縁異り故に子父の義成せず」
等云云、妙樂云く「弥陀・釈迦二仏既に殊なり況や宿昔の縁別
にして化導同じからざるをや結縁は生の如く成熟は養の如し生
養縁異れば父子成ぜず」等云云、当世・日本国の一切衆生弥陀
の來迎を待つは譬えば牛の子に馬の乳を含め瓦の鏡に天月を浮ぶ

るが如し、又果位を以て之を論ずれば諸仏如来・或は十劫・百劫

・千劫已來の過去の仏なり、教主釈尊は既に五百塵点劫より

已來妙覺果滿の仏なり大日如来・阿弥陀如来・藥師如来等の尽

十方の諸仏は我等が本師教主釈尊の所従等なり、天月の万水

に浮ぶ是なり、華嚴經の十方台上的毘盧遮那・大日經・金剛

頂經・両界の大日如来は宝塔品の多宝如来の左右の脇士なり、

例せば世の王の両臣の如し此の多宝仏も寿命品の教主釈尊の

所従なり、此の土の我等衆生は五百塵点劫より已來教主釈尊

の愛子なり不孝の失に依つて今に覺知せずと雖も他方の衆生に

は似る可からず、有縁の仏と結縁の衆生とは譬えば天月の清水

に浮ぶが如く無縁の仏と衆生とは譬えば聾者の雷の声を聞き盲

者の日月に向うが如し、而るに・或る人師は釈尊を下して大日

如來によらいを仰ぎょうずう崇あし・或あるる人師にんしは世尊せそんは無縁むえんなり阿彌陀あみだは有縁うえんなり、

・或あるる人師にんしの云いく小乘しょうじようの釈尊しゃくそんと・或あるは華嚴經けこんきやうの釈尊しゃくそんと・或あるは

法華經ほけきやう迹門しやくもんの釈尊しゃくそんと此等これらの諸師しよし並びに檀那だんな等しやくそん釈尊しゃくそんを忘れて

諸仏しよぶつを取ることは例せば阿闍世あじゃせたいし太子たうの頻婆沙羅王びんばしやうを殺しやくそんし釈尊しゃくそんに

背そむいて提婆達多だいばだつたに付きしが如ごとし、二月十五日にふは釈尊しゃくそん御入滅にゆうめつの日

乃ないし至さんがい十二月十五日じふごも三界慈父さんがいじふの御遠忌おんきなり、善導ぜんどう・法然ほうねん・永觀等ようかん

の提婆達多だいばだつたに誑たぶらかされされて阿彌陀あみだ仏ぶつの日と定め畢おわんぬ、四月八日は

世尊せそん御誕生おんたうじんの日なり藥師やくし・仏ぶつに取り畢おわんぬ、我が慈父じふの忌日きじつを

他たぶつ仏かに替かるは孝養かうやうの者ものなるか如何いかん、寿量品じゆりやうほんに云いく「我またこも亦またこ為なれ

世てんだいの父だい狂子まいしを治いする為ゆえの故ゆえに」等云云、天台大師てんだいだいし云いく「本此ほんしの仏ぶつ

に従したがつて初めて道心どうしんを發おこす亦また此この仏ぶつに従したがつて不退地ふたいに住す乃ないし至な猶なお

百川ひゃくせんの海かいに潮しほすべきが如ごとく縁ひに牽ひかれて応生おうじやうすること亦復またまた是かくくの

とし」等云云。

問うて云く法華經は誰人の為に之を説くや、答えて曰く方便品
より人記品に至るまでの八品に二意有り上より下に向て次第に
之を読めば第一は菩薩第二は二乗・第三は凡夫なり、安樂行より
勸持・提婆・宝塔・法師と逆次に之を読めば滅後の衆生を以て
本と為す在世の衆生は傍なり滅後を以て之を論ずれば正法一千
年・像法一千年は傍なり、末法を以て正と為す末法の中には日蓮
を以て正と為すなり、問うて曰く其の証拠如何、答えて曰く
況滅度後の文是なり、疑つて云く日蓮を正と為す正文如何、答
えて云く「諸の無智の人有つて・悪口罵詈等し・及び刀杖を加
うる者」等云云、問うて曰く自讃は如何、答えて曰く喜び身に余
るが故に堪え難くして自讃するなり、問うて曰く本門の心如何、

答えて曰く本門に於て二の心有り一には涌出品の略開近顕遠は
前四味並に迹門の諸衆をして脱せしめんが為なり、二には
涌出品の動執生疑より一半並びに寿量品・分別功德品の半品已
上一品二半を広開近顕遠と名く一向に滅後の為なり、問うて曰く
略開近顕遠の心如何、答えて曰く文殊・弥勒等の諸大菩薩・
梵天・帝釈・日月・衆星・竜王等初成道の時より般若經に
至る已来は一人も釈尊の御弟子に非ず此等の菩薩・天人は
初成道の時・仏未だ説法したまわざる已前に不思議解脱に住し
て我と別円二教を演説す釈尊其の後に阿含・方等・般若を宣説
し給う然りと雖も全く此等の諸人の得分に非ず、既に別円二教を
知りぬれば蔵通をも又知れり勝は劣を兼ねる是なり委細に之を論
ぜば・或は釈尊の師匠なるか善知識とは是なり釈尊に隨うに

非あらず、法華經ほけきょうの迹門しやくもんの八品はちしんに來至らいしして始めて未聞みもんの法ほふを聞いて
此等これらの人人ひとびとは弟子でしと成りぬ舍利弗しゃりほつ・目連等もくれんは鹿苑ろくおんより已來このかた初發心しよほつしん
の弟子でしなり、然しかりと雖いえども權法ごんぽうのみを許ゆるせり、今法華經ほけきょうに來至らいしして
實法じつぽうを授与じゅよし法華經本門ほけきょうほんもんの略開近顯遠りやくかいこんけんのんに來至らいしして華嚴けこんよりの大
菩薩ぼさつ・二乘にじよう・大梵天ほんてん・帝釈たいしゃく・日月にちがつ・四天してん・竜王等りゅうおうは位みようかく・妙覺
に隣みようかくり又妙覺みようかくの位みようかくに入るなり、若もし爾しかれば今われら・我等天われらに向つて
之これを見れば生身しょうしんの妙覺みようかくの仏本位こに居しして衆生しゅじようを利益りやくする是これな
り。

問いうて曰いわく誰人だれびとの為ために広開近顯遠こうかいこんけんのんの壽量品じゆりようぼんを演說えんぜつするや、答
えて曰いく壽量品じゆりようぼんの一品二半いは始まつより終いたに至るまで正まさしく滅後衆生めつごしゅじよう
の爲めつごなり滅後めつごの中には末法今時まつぽうの日蓮等にちれんが爲ためなり、疑うたがつて云いく
此ほうもんぜんだいの法門前代いまに未だ之これを聞きかず經文きようもんに之これ有りや、答いえて曰いく

予が智前賢に超えずたといきようもん設い經文を引くと雖も誰人か之を信ぜん
べんかていきゅう下和が啼泣・伍子胥が悲傷是なり、然りと雖も略開近顯遠・
どうしゅうしやうぎどうしゅうしやうぎ動執生疑の文に云く「然も諸の新發意の菩薩・仏の滅後に於て
若し是の語を聞かば・或は信受せずして法を破する罪業の因縁
を起さん」等云云、文の心は壽量品を説かずんば末代の凡夫皆
悪道に墮せん等なり、壽量品に云く「是の好き良藥を今留めて
此に在く」等云云、文の心は上は過去の事を説くに似たる様なれ
ども此の文を以て之を案ずるに滅後を以て本と為す先ず先例を
引くなり、分別功德品に云く「惡世末法の時」等云云、神力品に
云く「仏滅度の後に能く是の經を持たんを以つての故に諸仏皆
歡喜して無量の神力を現じ給う」等云云、藥王品に云く「我が滅度
の後・後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提に於て斷絶せしむる

こと無けん」等云云、又云く「此の経は則ち為れ閻浮提の人の病
りようやく
の良薬なり」等云云、涅槃經に云く「譬えば七子の如し父母平等
ならざるに非ざれども然も病者に於て心則ち偏に重し」等云云、
七子の中の第一第二は一闍提謗法の衆生なり諸病の中には
ほけきよう 法華經を謗するが第一の重病なり、諸薬の中には南無
みようほうれんげきよう 妙法蓮華經は第一の良薬なり、此の一闍浮提は縦 広七千由
ぜんな はちまん 善那八万の国之れ有り正像二千年の間未だ広宣流布せざるに
ほけきようとうせ 法華經当世に當つて流布せしめずんば釈尊は大妄語の仏・
たほうぶつ 多宝仏の証 明は泡沫に同じく十方分身の仏の助舌も芭蕉の
ごとく
如くならん。

うたがい 疑 明・十方の助舌・地涌の涌出此等は
だれびと 誰人の為ぞや、答えて曰く世間の情に云く在世の為と、日蓮云く

舍利弗・目☆等は現在を以て之を論ずれば智慧第一・神通第一の
大聖なり、過去を以て之を論ずれば金竜陀仏・青竜陀仏なり、
未來を以て之を論ずれば華光如來、靈山を以て之を論ずれば
三惑頓尽の大菩薩、本を以て之を論ずれば内秘外現の古菩薩なり、
文殊・弥勒等の大菩薩は過去の古仏・現在の応生なり、梵帝・
日月・四天等は初成已前の大聖なり、其の上・前四味・四教一言
に之を覺りぬ仏の在世には一人に於ても無智の者之れ無し誰人の
疑を晴さんが為に多宝仏の証明を借り諸仏舌を出し地涌の
菩薩を召さんや方方以て謂れ無き事なり、經文に随つて
「況滅度後・令法久住」等云云、此等の經文を以て之を案ずる
に偏に我等が為なり、随つて天台大師当世を指して云く
「後の五百歳遠く妙道に沾わん」伝教大師当世を記して云く

「正像しょうそう稍過しやうくわぎ已おわつて末法まつぽう太はなだ近まきに有あり」等云云、「末法まつぽう太有

近」の五字ごじは我が世よは法華經ほけきやう流布るふの世よに非あらずと云いう釈しやくなり。

問いうて云いく如来滅後にやらいめつご二千余年りゆうじゆ・竜樹てんじん・天親てんだい・天台てんだい・伝教でんぎやうの残

したまえる所の秘法ひぽうは何物なにものぞや、答いえて云いく本門ほんもんの本尊ほんそんと戒壇かいだんと

題目だいもくの五字ごじとなり、問いうて曰いく正像等しょうそうに何なんぞ弘通くつうせざるや、答

えて曰いく正像しょうそうに之これを弘通くつうせば小乘しょうじやう・権大乘こんだいじやう・迹門しゃくもんの法門ほうもん

一時いちじに滅尽めつじんす可べきなり、問いうて曰いく仏法ぶつぽうを滅尽めつじんするの法なん何これぞ之これを

弘通くつうせんや、答いえて曰いく末法まつぽうに於おいては大小だいしやう・権実こんじつ・顕密けんみつ共に教

のみ有とくどうつて得道えんぶだい無みなし一閻浮提えんぼう皆な謗法おわと為なり畢おわんぬ、逆縁ぎやくえんの為ために

は但妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじに限ふぎやうる、例ことせば不輕品ふけいひんの如ごとし我が門弟もんていは

順縁にほんこくなり日本にほんこくは逆縁ぎやくえんなり、疑うたがいつて云いく何なんぞ広略こうりやくを捨くて要いを

取るや、答いえて曰いく玄奘げんじやう三藏さんざうは略りやくを捨くてて広くわうを好こうみ四十卷しじふくわんの

だいほん

らじゅうさんぞう

だいろん

大品經を六百卷と成す羅什三蔵は広を捨て略を好む千卷の大論を
百卷と成せり、日蓮は広略を捨てて肝要を好む所謂上行菩薩
所伝の妙法蓮華經の五字なり、九包淵が馬を相するの法は玄黄
を略して駿逸を取る支道林が經を講ずるには細科を捨てて元意
を取る等云云、仏既に宝塔に入つて二仏座を並べ分身来集し
地涌を召し出し肝要を取つて末代に当てて五字を授与せんこと
とうせいぎあべ
当世異義有る可からず。

うたがい

疑

つて云く今世に此の法を流布せば先相之れ有りや、答えて

疑つて云く今世に此の法を流布せば先相之れ有りや、答えて

曰く法華經に「如是相乃至本末究竟等」云云、天台云く「蜘蛛掛

いほけきよう

曰く法華經に「如是相乃至本末究竟等」云云、天台云く「蜘蛛掛

りて喜び事来たり ☆ 鵲鳴いて客人来る小事猶以て是くの如し

いか いわんやだいじ

☆ 鵲鳴いて客人来る小事猶以て是くの如し

何に況や大事をや」取意、問うて曰く若し爾れば其の相之れ有り

いか いわんやだいじ

や、答えて曰く去ぬる正嘉年中の大地震・文永の大彗星其より

いほ

や、答えて曰く去ぬる正嘉年中の大地震・文永の大彗星其より

いご 已後今に種種の大なる天変・地天此等は此先相なり、仁王經の
ひちなん 七難・二十九難・無量の難、金光明經・大集經・守護經・藥師
しよきよう 經等の諸經に挙ぐる所の諸難皆之有り但し無き所は二三四五の
だいなん 日出る大難なり、而るを今年佐渡の国の土民は口口に云う
さるのとき 今年正月廿三日の申の時西の方に二の日出現す・或は云く三の
しゅつげん 日出現す等云云、二月五日には東方に明星二つ並び出ず其の
さんずんばか 中間は三寸計り等云云、此の大難は日本国先代にも未だ之有ら
さいしやうおうきよう ざるか、最勝王經の王法正論品に云く「変化の流星墮ち二の日
おんそく 俱時にいで他方の怨賊来つて国人喪乱に遭う」等云云、
しゅりようこんきよう 首楞嚴經に云く「・或は二の日を見し・或は兩つの月を見す」
いわ 等、藥師經に云く「日月薄蝕の難」等云云、金光明經に云く
いわ すいせいしばしい 彗星数ば出で兩つの日並び現じ薄蝕恒無し」大集經に云く

「仏法実おんもつに隠没ないしせば乃至にちがつ日月明げんを現げんぜず」仁王經にんのうきように云く「日月度にちげつど

を失うしない時節じせつ返逆ほんぎやくし・或あるは赤日出せきじついで黒日出こくじついで二三四五の日出にちげつどず

・或あるは日蝕にっしょくして光無なくく・或あるは日輪にちりん一重二三四五重輪ごじゅうりんげん現げんぜん」等

云云、此にちがつの日月等なんの難ひちなんは七難二十九難無量なんむりようの諸難しよなんの中に第一だいいちの

大惡難だいあくなんなり、問いうて曰いく此等これらの大中小しよなんの諸難しよなんは何いかに因よつて之これを起

すや、答いえて曰いく「最勝王經さいしやうおうきように曰いく非法ひほうを行まざる者まを見て当まさに

愛敬あいぎようを生おじ善法ぜんぽうを行まざる人おに於おて苦楚くそして治罰ちばつす」等云云、

法華經ほけきように云く涅槃經ねはんきように云く金光明經こんかうみやうきように云く「惡人あくにんを愛敬あいぎようし

善人ぜんにんを治罰ちばつするに由よるが故ゆゑに星宿せいしゆく及び風雨ふうう皆時みなを以もて行まわれず」

等云云、大集經だいしつきように云く「仏法実おんもつに隠没ないしし乃至な是ごとくの如ふき不善業ふぜんごう

の惡王あくおう・惡比丘あくびく我が正法しょうほうを毀壞きえす」等、仁王經にんのうきように云く「聖人しょうにん

去ひる時七難ちなん必おず起おこる」等、又云く「法あに非あず律あに非あず比丘びくを繫縛けいばく

すること獄囚の法の如くす爾の時に當つて法滅せんこと久しからず」等、又云く「諸の惡比丘多く名利を求め國王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説かん其の王別まえざして此の語を信聴せん」等云云、此等の明鏡を齎て當時の日本国を引き向うるに天地を浮ぶること宛も符契の如し眼有らん我が門弟は之を見よ、當に知るべし此の國に惡比丘等有つて天子・王子・將軍等に向つて讒訴を企て聖人を失う世なり、問うて曰く弗舎密多羅王・會昌天子・守屋等は月支・真旦・日本の仏法を滅失し提婆菩薩・師子尊者等を殺害す其の時何ぞ此の大難を出さざるや、答えて曰く災難は人に随つて大小有る可し正像二千年の間惡王・惡比丘等は・或は外道を用い・或は道士を語らい・或は邪神を信ず仏法を滅失すること大なるに似たれど

も其その科尚とがなお浅あきか、今とうせ当世あくおうの惡王あくびく・惡比丘ぶつぼうの仏法めつしつを滅失めつしつするは小
を以もつて大を打ち権もつを以もつて実うしなを失じんしんう人心とがぜんだいを削ちようかて身を失じとうわず寺塔じとうを焼
き尽きさずして自然じねんに之これを喪ほろぼそす其の失前代とがぜんだいに超過ちようかせるなり、我が
門弟もんてい之これを見て法華經ほけきようを信用しんようせよ目を瞋いからして鏡いに向え、天瞋いかるは
人とがあれに失有とがあれればなり、二の日並ならび出るは一国こくおうに二の国王並こくおうぶ相なり、
王と王との鬭諍とうじようなり、星の日月にちがつを犯すは臣王を犯す相なり、日
と日と競きそい出るは四天下してんげ一同じようろんの諍論じようろんなり、明星並ならび出るは太子たいし
と太子たいしとの諍論じようろんなり、是かくくの如ごとく国土こくど乱みだれて後じようぎように上行じようぎよう等の
聖人しょうにん出現しゅつげんし本門ほんもんの三つの法門ほうもん之これを建立こんりゆうし一四天してん・四海しかい一同いどうに
妙法蓮華經みようほうれんげきの広宣流布こうせんる疑ふんえいい無なからん者か。

文永十一年五月

在御判

◆四八 四信五品抄ごほん 建治三年四月十日 五十六歳御作 与

ときじょうにん
富木常忍

338 p

青鳧一結送り給ひ候おわいたんぬ。

今来がくしやの学者一同の御存知ごぞんじに云く「在世滅後異なりと雖もいえど法華を

しゅぎよう

修行するには必ず三学を具ぐす一を欠いても成ぜず」云云。

としころ

余又年来此の義を存ぞんする処一代聖教は且しばらく之を置これく

ほけきよう

法華經に入つて此の義を見聞けんもんするに序正の二段は且しばらく之を置これく

るつう

流通の一段は末法まつぽうの明鏡めいきよう尤も依用えようと為なすべし、而して流通るつうに

おい

於て二有いり一には所謂迹門いわゆるしやくもんの中の法師等ほっしの五品・二には所謂いわゆる

ほんもん

本門ほんもんの中の分別功德ぶんべつくとくの半品より經を終るまで十一品半なり、此の

ごほん

十一品半と五品と合せて十六品半まっぽう此の中に末法まつぽうに入つて法華ほっけを

しゅぎよう

修行しゅぎようする相貌そうみよう分明ふんみようなり是に尚なお事行かずんば普賢經ふげん・涅槃經ねはんぎよう等

を引き来りて之れを糾明せんに其の隠れ無きか、其の中の分別
功徳品の四信と五品とは法華を修行するの大要・在世・滅後の
龜鏡なり。

荊谿の云く「一念信解とは即ち是れ本門立行の首なり」と云
云、其の中に現在の四信の初の一念信解と滅後の五品の第一の
初随喜と此の二処は一同に百界千如・一念三千の宝篋十方
三世の諸仏の出る門なり、天台・妙楽の二の聖賢此の二処の位
を定むるに三の釈有り所謂・或は相似・十信・鉄輪の位・或は
勸行五品の初品の位・未断見思・或は名字即の位なり、止観に
其の不定を会して云く「仏意知り難し機に赴きて異説す此を借つ
て開解せば何ぞ勞しく苦に諍わん」云云等。

予が意に云く、三釈の中名字即は經文に叶うか滅後の五品の

初の一品を説いて云く「而も毀^き些^しせずして隨喜^{ずいき}の心を起す」と
若^もし此^この文相^{そうじ}似^にの五品^{ごほん}に渡^{わた}らば而^に不^ふ毀^き些^しの言^{こと}は便^{たより}ならざるか、
就^な中^な壽量品^{じゆりやうほん}の失心^{しん}不^ふ失心^{しん}等は皆^{みな}名字^{みょうじ}即^{そく}なり、涅槃^{ねはん}經^{ぎやう}に「若^も信^{しん}若^も
不信^{ふしん}乃至^{ないし}熙連^{きれん}」とあり之^{これ}を勘^{かん}えよ、又一^{いち}念^{ねん}信^{しん}解^げの四字^しの中^{ちゆう}の信^{しん}の
一字^{いち}は四信^しの初^{しう}めに居^こし解^げの一字^{いち}は後^ごに奪^{だつ}わるる故^{ゆゑ}なり、若^もし
爾^{しか}らば無^む解^げ有^う信^{しん}は四信^しの初^{しう}位^いに當^{あた}る經^{きやう}に第二^{だいに}信^{しん}を説^いいて云^いく
「略^{りやく}解^げ言^{ごん}趣^{しゆ}」と云^い云^い、記^きの九^くに云^いく「唯^{ただ}初^{しう}信^{しん}を除^{のぞ}く初^{しう}は解^げ無^なきが
故^{ゆゑ}に」隨^{したが}つて次^{つぎ}下^{しも}の隨喜^{ずいき}品^{ひん}に至^{いた}つて上^{かみ}の初^{しう}隨喜^{ずいき}を重^{かさ}ねて之^{これ}を
分^{ぶん}明^{みやう}にす五十^ご人^{にん}是^{みな}皆^{みな}展^{てんでん}轉^{てん}劣^{りやく}なり、第五^ご十^{じう}人^{にん}に至^{いた}つて二^にの釈^{しやく}有^あり
一^{いち}には謂^{いわ}く第五^ご十^{じう}人^{にん}は初^{しう}隨喜^{ずいき}の内^{ない}なり二^にには謂^{いわ}く第五^ご十^{じう}人^{にん}は
初^{しう}隨喜^{ずいき}の外^{がい}なりと云^いうは名字^{みょうじ}即^{そく}なり、教^{きやう}弥^いよ実^{じつ}なれば位^い弥^いよ下^げれ
りと云^いう釈^{しやく}は此^この意^いなり、四^し味^み三^{さん}教^{きやう}よりも円^{えん}教^{きやう}は機^きを摂^{せつ}し爾^に前^{ぜん}

の円教えんきょうよりも法華經ほけきょうは機きを摂せつし迹門しやくもんよりも本門ほんもんは機きを尽きすなり
教いよいよ弥いよいよ実位いよいよ弥いよいよ下の六字心とどを留とどめて案べず可べし。

問まつぼうう末法まつぼうに入いって初心しよしんの行者ぎやうじや必きず円えんの三学さんがくを具ぐするや不いなや、

答いえて曰いく此だいじの義大事ぎだいじたる故ゆえに經文きやうもんを勘かんえ出でして貴辺きへんに送付きへんす、

所謂い五品ごほんの初二三品にには仏正まじしく戒定かいじやうの二法にを制止せいしして一向いっこうに

慧いちぶんの一分いに限かる慧又かんがえ勘かんざれば信もつを以もつて慧いに代かえ・信いの一字いを詮しと

為なす、不信ふしんは一闡いっせん提謗だいぼう法ほうの因いん・信いは慧いの因いん・名字みやうじ即そくの位いなり、

天台てんだい云いく「若もし相似そうじの益えきは隔生きやくすれども忘わすれず名字みやうじ勸行きんぎやうの益えきは

隔生きやくすれば即すなわち忘わする・或あるは忘わすれざるも有あり忘わする者ものも若もし知識ちしきに

値あえば宿善しゆくぜん還かえつて生もず若もし悪友あくゆうに値あえば則すなわち本心ほんしんを失うしなう」云云、

恐おそらくは中古てんだいしゆうの天台宗じかくの慈覺ちしやう・智証ちしやうの兩大師だいいしも天台てんだい・伝教でんぎやうの

善知識ぜんちしきに違背いはいして心・無畏ふくう・不空ふくう等の悪友あくゆうに遷うつれり、末代まつだいの学者がくしや

慧心の往生要集の序に誑惑せられて法華の本心を失い弥陀の
権門に入る退大取小の者なり、過去を以て之を推するに未来
無量劫を経て三惡道に処せん若し惡友に値えば即ち本心を失うと
は是なり。

問うて曰く其の証如何答えて曰く止觀第六に云く「前教に其の
位を高うする所以は方便の説なればなり円教の位下きは眞實の
説なればなり」弘決に云く「前教と云うより下は正く權實を判ず
教弥よ実なれば位弥よ下く教弥よ權なれば位弥よ高き故に」と、
又記の九に云く「位を判ずることをいわば觀境弥よ深く実位弥よ
下きを顯す」と云云、他宗は且らく之を置く天台一門の学者等
何ぞ実位弥下の釈を閣いて慧心僧都の筆を用ゆるや、畏・智・空
と覺証との事は追つて之を習え大事なり大事なり一閻浮提第一

の大事なり心有らん人は聞いて後に我を外め。

問うて云く末代初心の行者何物をか制止するや、答えて曰く

檀戒等の五度を制止して一向に南無妙法蓮華經と称せしむるを

一念信解初随喜の気分と為すなり是れ則ち此の經の本意なり、

疑つて云く此の義未だ見聞せず心を驚かし耳を迷わす明かに

証文を引て請う苦に之を示せ、答えて云く經に云く「須く我が

為に復た塔寺を起て及び僧坊を作り四事を以て衆僧を供養する

ことをもちいざれ」此の經文明かに初心の行者に檀戒等の五度

を制止する文なり、疑つて云く汝が引く所の經文は但寺塔と

衆僧と計りを制止して未だ諸の戒等に及ばざるか、答えて曰く

初を挙げて後を略す、問て曰く何を以て之を知らん、答えて曰く

次下の第四品の經文に云く「況や復人有つて能く是の經を持ち

て兼ねて布施持戒等を行ぜんをや」云云、きょうもんふんみょう經文分明に初二三品

の人には檀戒等の五度を制止しせいし第四品に至つて始めて之を許す後

に許すを以て知んぬ初に制する事を、問うて曰くいわ經文一往相似

たり將た又疏釈有り

や、答えて曰く汝が尋ぬる所の釈とは月氏四依の論か將た又

漢土・日本の人師の書か本を捨て末を尋ね体を離れて影を求め

源を忘れて流を貴ぶ分ふうんみょう明なる經文を闇さしおいて論釈を請い尋ぬ

本經に相違する末釈有らば本經を捨てて末釈に付く可きか然り

と雖も好みに隨て之を示さん、文句の九に云く「初心は縁に紛動

せられて正業を修するを妨げんことを畏る直ちに専ら此の經を持

つ即ち上供養なり事を廢して理を存するは所益弘多なり」と、此

の釈に縁と云うは五度なり初心の者兼ねて五度を行ずれば正業の

信を妨ぐるなり、譬たとえば小船に財を積んで海を渡るに財と俱ともに没するが如ごとし、直專持此經と云うは一經に亘るに非ず専ら題目を持つて余文を雜まじえず尚一經の読誦どくじゆだも許さず何に況や五度をや、「廢事存理」と云うは戒等の事を捨てて題目の理を専らにす云云、所益弘多とは初心しよしんの者諸行と題目と並び行ずれば所益全く失うしなうと云云。

文句もんくに云いわく「問う若爾しからば經を持つは即ち是れ第一義だいいちの戒なり何いかんが故ぞ復能またよく戒を持つ者と云うや、答う此は初品しよほんを明あきらかす後を以て難もつを作すべからず」等云云、当世とうせの学者がくしや・此の釈あやまを見ずして末代まつだいの愚人ぐにんを以て南岳なんがく・天台てんだいの二聖にせいに同あやまず誤りの中の誤りなり、妙樂みょうらく重ねて之を明あかして云く「問う若もし爾しからば若もし事の塔たつ及び色身しきしんの骨おほを須もちいず亦須またすべからく事の戒を持つべからざるべし乃至事ないし

の僧を供養くようすることを須もといざるや」等云云、伝教大師でんぎようだいしの云く「二百五十戒忽たちまちに捨て畢おわんぬ」唯教大師ゆいきようだいし一人に限るに非あらず鑒真がんじんの弟子でし・如宝じよほう・道忠なら並びに七大寺等一同に捨て了おわんぬ、又教大師だいし・未来みらいを誡いましめて云く「末法まつぽうの中に持戒じかいの者有らば是これ怪異けいなり市に虎有るが如ごとし此れ誰か信べず可べき」云云。

問う汝何ぞなんじなん一念三千いちねんさんぜんの觀門かんもんを勸進かんじんせず唯題目許ただだいもくばかりを唱えしむるや、答えて曰く日本にほんの二字に六十六国じんちくの人畜財しやうじんを撰しやうじん尽して一も残さず月氏がつしの兩字に豈あに七十ヶ国無からんや、妙樂みやうらくの云く「略いわして經題きやうだいを挙あぐるに玄はるかに一部を収おさむ」又云く「略いわして界如かいによを挙あぐるに具つぶさに三千さんぜんを撰せつす、文殊師利菩薩もんじゆしりほさつ・阿難尊者あなんそんじや・三会八年の間ぶつここれの仏語ぶつここれ之を挙あげて妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと題つぎしもし次下りようげに領解いして云く「如是我聞によぜがもん」と云云。

問う其の義を知らざる人唯南無妙法蓮華經と唱うるに解義の功徳を具するや否や、答う小兒乳を含むに其の味を知らざれども自然に身を益す耆婆が妙藥誰か弁えて之を服せん水心無けれども火を消し火物を焼く豈覺有らんや竜樹・天台皆此の意なり重ねて示す可し。

問う何が故ぞ題目に万法を含むや、答う章安の云く「蓋し序王とは經の玄意を叙す玄意は文の心を述す文の心は迹本に過ぎたるは莫し」妙樂の云く「法華の文心を出して諸教の所以を弁ず」云云、濁水心無けれども月を得て自ら清めり草木雨を得豈覺有つて花さくならんや妙法蓮華經の五字は經文に非ず其の義に非ず唯一部の意なるのみ、初心の行者其の心を知らざれども而も之を行ずるに自然に意に當るなり。

問う汝が弟子一分の解無くして但一口に南無妙法蓮華經と称する其の位如何、答う此の人は但四味三教の極位並びに爾前の円人に超過するのみに非ず將た又真言等の諸宗の元祖・畏・嚴・恩・藏・宣・摩・導等に勝出すること百千万億倍なり、請う国中の諸人・我が末弟等を軽ずる事勿れ進んで過去を尋ねれば八十万億劫に供養せし大菩薩なり豈熙連一恒の者に非ずや退いて未來を論ずれば八十年の布施に超過して五十の功德を備う可し天子の襁褓に纏れ大竜の始めて生ずるが如し蔑如すること勿れ蔑如すること勿れ、妙樂の云く「若し悩乱する者は頭七分に破れ供養すること有る者は福十号に過ぐ」と、優陀延王は寶頭盧尊者を蔑如して七年の内に身を喪失し相州は日蓮を流罪して百日の内に兵乱に遇えり、經に云く「若し復是の經典を受持する者を見て

其の過惡を出さん若は實にもあれ若は不實にもあれ此の人現世に
びやくらい

白癩の病を得ん乃至諸惡重病あるべし」又云く「当に世世に
ないししよあくじゆうびよう

まなこ

眼無かるべし」等云云、明心と円智とは現に白癩を得・道阿弥
げん びやくらい え どうあみ

は無眼の者と成りぬ、国中の疫病は頭破七分なり罰を以て徳を
えきびよう ずはしちぶん もつ

推するに我が門人等は福過十号 疑い無き者なり。
すい もんじん ふくかじゅうこうたがい い無き者なり。

夫れ人王三十代欽明の御宇に始めて仏法渡りし以来桓武の御宇
そ きんめい ぎよう ぶつぽうわた いらい かんむ ぎよう

に至るまで二十代二百余年の間六宗有りと雖も仏法未だ定らず、
いた にくしゅう いえど ぶつぽういま

爰に延暦年中に一りの聖人有つて此の国に出現せり所謂傳教
ここ えんりやく ひと しょうにん しゅつげん いわゆるでんぎよう

大師是なり、此の人先きより弘通する六宗を糾明し七寺を弟子
だいしこれ ぐつう ろくしゅう きゆうめい でし

と為して終に叡山を建てて本寺と為し諸寺を取つて末寺と為す、
な つい えいざん しょう しまつじ な

日本の仏法唯一門なり王法も二に非ず法定まり国清めり其の功を
にほん ぶつぽうただいちもん あら けんぽう じかく ちしょう こう

論せば源已今当の文より出でたり其の後弘法・慈覚・智証の三
みなもと いこんとう い そ こうぽう じかく ちしょう

大師事だいにしを漢土かんとに寄せて大日だいにちの三部ほけきようは法華經まさに勝ると謂おもい剩あまつさえ教だいいし
大師だいいしの削さくずる所の真言宗しんごんしゅうの宗しゅうの一字これ之そを副はつえて八宗はつしゅうと云云、三
人にほん・一同ちよくせんに勅宣もつを申し下くだして日本にほんに弘通ぐつうし寺毎てらごとに法華經ほけきようの義ぎを
破やぶる是偏ひとえに已今当いこんとうの文を破やぶらんと為なして釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゅつぱうの
諸仏しよぶつの大怨敵おんてきと成なりりぬ、然しかして後ご・仏法漸ぶつぱうようやく廃すたれれ王法次第しだいに衰おとろえ
天照太神てんしやうだいじん・正八幡等しやうはちまんの久住くじゅうの守護神しゆごしんは力うしなを失うしない梵帝ぼんたい・四天してんは国
を去すつて已すでに亡国ぼうこくと成なりらんとす情有なげららん人誰なか傷やみ嗟なげかざらん
や、所詮しよせん三大師だいいしの邪法じゃほうの興おこる所いは所謂い東寺とうじと叡山えいざんの総持院そうじいんと
園城寺おんじやうじとの三所さんしよなり禁止きんしせずんば国土こくどの滅亡めつわうと衆生しゆじやうの惡道あくどうと
疑うたがいい無なき者ものか予粗此よほの旨むねを勸かんえ国主こくしゆに示いすと雖いえども敢あえてて叙用じよよう無なし
悲かなむ可べし悲かなむ可べし。

◆四九 下山御消息しもやま しやうそく

建治三年六月 五十六歳御代作 与

しもやま
下山兵庫光基

3 4 3 P

例時おいに於ては尤も阿弥陀經あみたを読よまる可べきか等云云此このの事は仰おほせ

候はぬ已前いぜんより親父の代官といひ私の計もつと申し此このの四五年が間は

退たい転てん無なし、例時あみたには阿弥陀經あみたを読よみ奉たてまつり候しが去年こぞの春の末へ夏

の始めより阿弥陀經あみたを止とどめて一向いっこうに法華經ほけきようの内・自我じがげ偈どくじゅ誦きとうし候

又同くば一部たてまつを読よみ奉たてまつらむとはげみ候これ又偏ひとえに現当げんとうの御祈きとう☆の

為ななり、但ただし阿弥陀經あみた・念仏ねんぶつを止とどめて候事は此これ日比ひころ・日本国にほんこくに

聞きこへさせ給たまう日蓮にちれん聖人しょうにん去ふんえいる文永十一年の夏の比同じき甲州飯野

・御牧はきり・波木井さとの郷の内身延もつの嶺と申みやます深山いんきよに御隠居おんいんきよせさせ給たまい

候へば、さるべき人ひと・御法門ほうもん承うけたまわる可べきの由候へども御制止せいしあ

りて入れられずおぼろげの強縁あるひとならではかなひがたく候しに有人あるひと

見参みさんの候と申もうし候しかば信じまいらせ候そうらはんれうには参り候は

ず、ものの様をも見候はんために閑所より忍びて参り御庵室の

うしろ　ひとびと

後に隠れ人人の御不審に付きてあらあら御法門とかせ給い候き。

ほけきよう　だいにちきよう

法華經と大日經・華嚴・般若・深密・楞伽・阿弥陀經等の

きようぎよう

經經の勝劣・浅深等を先として説き給いしを承り候へば

ほけきよう

法華經と阿弥陀經等の勝劣は一重二重のみならず天地雲泥に候

けり、

譬ば帝釈と猿猴と鳳凰と烏鵲と大山と微塵と日月と螢炬

こうげしやうれつ

等の高下勝劣なり、彼彼の經文と法華經とを引き合せてたくら

べさせ給いしかば

愚人も弁えつ可し白白なり赤赤なり、されば此

の法門は

大体人も知れり始めておどろくべきにあらず又仏法を

しゆぎよう

修行する法は必ず經經の大小・権実・顕密を弁うべき上よく

よく時を知り機を鑑みて申すべき事なり、而るに当世・日本国は

ひとこと

人毎に阿みだ經並に弥陀の名号等を本として法華經を忽諸し

たてまつせけん ちしや 奉る世間に智者と仰がる人々・我も我も時機を知れり知れりと

存ぜられげに候へども小善しょうぜんを持て大善だいぜんを打ち奉り権経くわんきやうを以て

じつきやう うしな

実経じつきやうを失ふとがは小善しょうぜん還つて大悪だいくとなる薬変じて毒となる親族

かえ

還つて怨敵おんてきと成るが如し難治なんちの次第しだいなり、又仏法ぶつぽうには賢かしこげなる様な

人なれども時に依り機きに依り国こくに依り先後せんごの弘通くわうつうに依る事を

わきまえ

弁わきまえへざれば身心しんしんを苦めて修行しゆぎやうすれども験しるしなき事なり、設たとい一向いっかう

しょうじやう

に小乘しょうじやう流布りふの国には大乘だいじやうをば弘通くわうつうする事はあれども一向いっかう大乘だいじやう

しょうじやうきやう

の国には小乘経しょうじやうきやうをあなたがちにいむ事なり・しゐてこれを弘通くわうつう

すれば国もわづらひ人も悪道あくどうまぬかれがたし、又初心しよしんの人には二

法ぽうを並べて修行しゆぎやうせしむる事をゆるさず月氏がつしの習ならいには一向いっかう

しょうじやう

小乘しょうじやうの寺の者は王路わうろを行かず一向いっかう大乘だいじやうの僧そうは左右さうの路ろをふむ

しょうじやう

事なし井の水・河の水・同じく飲む事なし何いかに況いわんやや一房ぼうに栖すみな

んや、されば法華經に初心の一向大乘の寺を仏説き給うに「但
だいじょうきやうてん ほうけきやう しよしん いっこうだいじやう
大乘經典を受持せんことを樂つて、乃至余經の一偈をも受けざ
れ」又云く「又声聞を求むる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に
しんこん いわ しやもん びく びくに うばそく うばい
親近せざれ」又云く「亦問訊せざれ」等云云、設い親父たれども
いっこうしやうじやう またもんじん たとい
一向小乗の寺に住する比丘・比丘尼をば一向大乘の寺の子息
らいはい しんこん びく びくに いっこうだいじやう しそく
これを礼拝せず親近せず何に況や其法を修行せんや大小兼行
の寺は後心の菩薩なり。
ほさつ

今・日本国は最初に仏法渡りて候し比・大小雜行にて候しが
にほんこく さいしよ ぶつぽうわた ころ だいしやうそうぎやう
人王四十五代聖武天皇の御宇に唐の揚州竜興寺の鑑真和尚と申せ
しんこん しょうむてんのう ぎやう とう しょう ちやうりやうきやう かんじん じやうしやう
し人漢土より我が朝に法華經・天台宗を渡し給いて有りしが
かんど あした ほうけきやう てんだいしやう わた たまい
円機未熟とやおぼしけんの法門をば己心に収めて口にも出だし
えんき みじゆく ほうもん こそん おさ
給はず、大唐の終南山の豐徳寺の道宣律師の小乗戒を日本国の
たま だいとう ぶとく どうせんりつし しょうじやう にほんこく

三所に建立せり此れ偏に法華宗の流布すべき方便なり、大乘だいじょう

しゅつげん

出現の後には肩を並べて行ぜよとはあらず例せば儒家の本師ほんし

こうし

たる孔子・老子等の三聖は仏の御使として漢土に遣されて内典ないてん

おんつかい

かんと

じよもん

の初門に礼楽の文を諸人に教えたりき、止観に経を引いて云く「我いわ

れいがく

しよにん

しかん

みょうらくだいしいわ

いわ

つかわ

三聖を遣して彼の震旦を化す」等云云、妙楽大師云く「礼楽前れいがく

しんたん

れいがく

は

に馳せ真道後に啓く」と云云、仏は大乘の初門に且らく小乗しょうじょう

しんどう

だいじょう

じよもん

しば

戒を説き給いしかども時すぎぬれば禁めて云く涅槃経に云くいわ

と

たまひ

いまし

いわ

いわ

「若し人有つて如来は無常なりと言わんのたま

によらい

むじょう

のたま

云何んぞ是の人舌墮落せざらん」と等云云、其の後人王第五十代そ

いか

だらく

桓武天皇の御宇に伝教大師と申せし聖人出現せり始めにはしやうにんしゅつげん

かんむてんのう

ぎょう

でんぎょう

だいし

しやうにん

しゅつげん

けこん 三論・法相・俱舎・成実・律の六宗を習い極め給うのみきわ

さんろん

ほつそう

ぐしや

じょうじつ

ろくしゅう

なら

きわ

たま

華嚴・三論・法相・俱舎・成実・律の六宗を習い極め給うのみきわ

さんろん

ほつそう

ぐしや

じょうじつ

ろくしゅう

なら

きわ

たま

ならず、達磨宗の淵底を探り究め給ひ剰へいまだ日本国に弘通せぐつう

だるま

えんてい

きわ

あまつさ

にほんこく

ぐつう

ざる天台・真言の二宗をも尋ね顚わして浅深勝劣を心中に究竟

し給へり、去延暦二十一年正月十九日に桓武皇帝・高雄山に行

幸なり給い、南都・七大寺の長者・善議・勤操等の十四人を教

大師に召し合せて六宗と法華宗との勝劣を糾明せられしに

六宗の碩学宗宗毎に我宗は一代超過の由各各に立て申されしか

ども教大師の一言に万事破れ畢んぬ、其の後皇帝重ねて口宣す

和氣弘世を御使として諫責せられしかば七大寺・六宗の碩学一

同に謝表を奉り畢んぬ、一十四人の表に云く「此界の含靈而

今而後悉く妙円の船に載り早く彼岸に済ることを得」云云、教

大師云く「二百五十戒忽ちに捨て畢んぬ」云云、又云く「正像

稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」又云く「一乗の家には都て

権を用いず」又云く「穢食を以て宝器に置くこと無し」又云く「仏

世の大羅漢已に此の呵嘖を被むれり滅後の小蚊虻何ぞ此れに随わ
ざらん」云云、此れ又私の責めにはあらず法華經には「正直に
方便を捨て但無上道を説く」云云涅槃經には「邪見の人」等云云、
邪見方便と申すは華嚴・大日經・般若經・阿弥陀經等の
四十余年の經經なり、捨とは天台の云く「廢るなり」又云く「謗
とは背くなり」正直の初心の行者の法華經を修行する法は上
に挙ぐるところの經經・宗宗を抛つて一向に法華經を行ずるが
眞の正直の行者にては候なり、而るを初心の行者深位の菩薩
の様に彼のの經經と法華經とを並べて行ずれば不正直の者と
なる、世間の法にも賢人は二君に仕へず貞女は両夫に嫁がずと
申す是なり、又私に異議を申すべきにあらず。

如来は未来を鑑みさせ給いて我が滅後・正法一千年・像法一

千年・末法まつぼう一万年まんねんが間我が法門ほうもんを弘通くつうすべき人人並ひとびとに經經きやうぎやうを一

一にきりあてられて候、而しかるに此こゝを背そむく人・世しに出来しゅったいせば設たといい

智者賢王ちしやけんおうなりとも用もちうべからず、所謂いわゆる・我が滅後めつごの次の日より

しょうぼう

正法しょうぼう五百年の間は一向いっこう小乗經しょうじやうきやうを弘通くつうすべし迦葉かしやう・阿難あなん乃至ないし・

ふなしや

富那奢等ふなしやの十余人じゅうにになり、後の五百年ごひゃくねんには権大乘經こんだいじやうきやうの内華嚴けこん・

ほうとうじんみつ

方等深密ほうとうじんみつ・般若はんにな・大日經だいにちきやう・觀經かんきやう・阿みだ經等を弥勒菩薩みろくぼさつ・

文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつ・馬鳴菩薩めみやうぼさつ・竜樹菩薩りゆうじゆぼさつ・無著菩薩むぢやくぼさつ・天親菩薩てんじんぼさつ等の

四依しえの大菩薩等ぼさつの大論師ろんし弘通くつうすべしと云云、此等この大論師ろんしは

ほけきやう

法華經ほけきやうの深義じんぎを知しるしめ食さざるにあらざ然しかも而ほけきやう法華經ほけきやう流布るふの時も来ら

しやくそん

ざる上釈尊しやくそんよりも仰せ付けられざる大法だいほうなれば心には存じて口

に宣のべべ給たまはず・或時あるは粗口ほぼに轉さえずる様なれども実義じつぎをば一向いっこうに隱かくし

て演のべ給たまはず、像法そうほう一千年の内に入りぬれば月氏の仏法がっし漸ぶつぼうく漢土かんど

・日本に渡り来る世尊眼前に藥王菩薩等の迹化他方の大菩薩に
ほけきよう
法華經の半分・迹門十四品を譲り給う、これは又地涌の大菩薩
まっぽうのはじめ
末法の初めに出現せさせ給いて本門壽量品の肝心たる南無
みようほうれんげきよう
妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生に唱えさせ給うべき先
序のためなり、所謂迹門弘通の衆は南岳・天台・妙樂・伝教
これ
等是なり、今の時は世すでに上行菩薩等の御出現の時剋に相当
れり、而るに余愚眼を以てこれを見るに先相すでにあらはれたる
か、而るに諸宗所依の華嚴・大日・阿みだ經等は其の流布の時
を論ずれば正法一千年の内・後の五百年乃至像法の始めの諍論
きようぎよう
の經經なり、而るに人師等經經の浅深勝劣等に迷惑するの
みならず仏の譲り状をもわすれ時機をも勘へず猥りに宗宗を構え
像末の行となせり、例せば白田に種を下だして玄冬に穀をもとめ

下弦に満月を期し夜中に日輪を尋ぬる如し、何に況や律宗なん

ど申す宗は一向小乗なり月氏には正法一千年の前の五百年の

小法又日本国にては像法の中比・法華經・天台宗の流布すべき

前に且らく機を調養せむがためなり、例せば日出でんとて明星

前に立ち雨下らむとて雲先おこるが如し、日出雨下て後の星雲は

なにかせん而るに今は時過ぬ又末法に入りて之を修行せば

重病に輕藥を授け大石を小船に載するが如し修行せば身は苦

く暇は入りて験なく華のみ開きて菓なからん、故に教大師・

像法の末に出現して法華經の迹門の戒定慧の三が内・其の中・

円頓の戒壇を叡山に建立し給いし時二百五十戒忽に捨て畢んぬ、

随つて又鑑真の末の南都・七大寺の一十四人・三百余人も加判し

て大乘の人となり一國挙つて小律儀を捨て畢んぬ、其の授戒の

書を見る可し分明なり。

而るを今邪智の持斎の法師等昔し捨てししょうじょうきよう小乗經を取り出し

て一戒もたもたぬ名計りなる二百五十戒の法師原有つて公家・

武家を誑惑して国師とののしるあまつさえがまん剩我慢を發して大乘戒の人を

破戒・無戒とあなづる、例せばくけん狗犬が師子を吠ええんこう猿猴が帝釈を

あなづるが如し、今の律宗の法師原は世間の人人には持戒実語

の者の様には見ゆれども其の実を論ぜば天下第一の大不実の者な

り、其の故は彼等が本文とする四分律・十誦律等の文は

大小乗の中には一向小乗・小乗の中にも最下の小律なり、

在世には十二年の後・方等大乘へうつる程の且くのやすめ言・

滅後には正法の前の五百年は一向小乗の寺なり此れ亦一向

大乘の寺の毀謗となさんがためなり、されば日本国には像法

半に鑑真和尚大乘の手習とし給う教大師・彼の宗を破し給いて

人をば天台宗へとりことし宗をば失うべしといへども後に事の

由を知らしめんがために我が大乘の弟子を遣してたすけをき

給う、而るに今の学者等は此の由を知らずして六宗は本より

破れずして有りとおもへり墓無し墓無し、又一類の者等天台の才

学を以て見れば我が律宗は幼弱なる故に漸漸に梵網經へうつり

結句は法華經の大戒を我が小律に盗み入れて還つて円頓の行者

を破戒・無戒と咲へば、国主は当時の形貌の貴げなる気色にた

ばらかされ給いて天台宗の寺に寄せたる田畠等を奪い取つて

彼等にあたへ万民は又一向大乘の寺の帰依を抛ちて彼の寺にう

つる、手づから火をつけざれども日本一国の大乘の寺を焼き

失い抜目鳥にあらざれども一切衆生の眼を抜きぬ仏の記し

たま あらかん 給ふ阿羅漢に似たる闡提是なり、涅槃經に云く「我涅槃の後・
むりよう 無量百歳に四道の聖人も悉く復涅槃せん正法滅して後・像法の
中に於いて当に比丘有るべし、持律に似像し少く經を讀誦し飲食
を貪嗜して其の身を長養せん、乃至袈裟を服すと雖も猶獵師の
細視徐行するが如く猫の鼠を伺うが如く外には賢善を現し内に
は貪嫉を懷き啞法を受けたる婆羅門等の如く実に沙門に非ずして
沙門の像を現し邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云云、此の
きようもん 經文に世尊未來を記し置き給う。抑釈尊は我等がためには
けんぷ 賢父たる上明師なり聖主なり、一身に三徳を備へ給へる仏の仏眼
も 以て未來惡世を鑑み給いて記し置き給う記文に云く「我涅槃の
むりよう 後・無量百歳」云云仏滅後・二千年已後と見へぬ、又「四道の
しょうにん 聖人悉く復涅槃せん」云云、付法蔵の二十四人を指すか、

「正法滅後」等云云像末の世と聞えたり、「当に比丘有るべし持律

に似像し」等云云今

まづ

末法の代に比丘の似像を撰び出さば日本国には誰の人をか引き出

して大覺世尊をば不妄語の人とし奉るべき、俗男・俗女・比丘尼

をば此の經文に載たる事なし但比丘計なり比丘は日本国に数を

知らず、然るに其の中に三衣一鉢を身に帶せねば似像と定めがた

し唯持齋の法師計相似たり一切の持齋の中には次下の文に持律

ととけり律宗より外は又脱ぬ、次下の文に「少し經を讀誦す」

云云相州鎌倉の極樂寺の良觀房にあらざれば誰を指し出だし

經文をたすけ奉るべき、次下の文に「猶獵師の細視徐行するが

如く猫の鼠を伺うが如く外には賢善を現し内には貪嫉を懷く」

等云云兩火房にあらざれば誰をか三衣一鉢の獵師伺猫として仏説を

信ず可し、哀れなるかな当時の俗男・俗女・比丘尼等檀那等が山の鹿・家の鼠となりて獵師・猫に似たる両火房に伺われ・たばらかされて今生には守護国土の天照太神・正八幡等にすてられ他国の兵軍にやぶられて猫の鼠を捺え取るが如く獵師の鹿を射死が如し、俗男・武士等は射伏・切伏られ俗女は捺え取られて他国へおもむかん王昭君・楊貴妃が如くになりて後生には無間・大城に一人もなく趣くべし。

而るを余・此の事を見る故に彼が檀那等が大悪心をおそれず強盛にせむる故に両火房・内内諸方に讒言を企てて余が口を塞がんとはげみしなり、又経に云く「汝を供養する者は三惡道に墮つ」等云云、在世の阿羅漢を供養せし人尚三惡道まぬかれがたし、何に況や滅後の誑惑の小律の法師原をや、小戒の大科をば

これを以て知んぬ可し、・或は又驢乳にも譬えたり還つて糞となる、・或は狗犬にも譬えたり大乘の人の糞を食す、・或は☆猴・
・或はは瓦礫と云云、然れば時を弁へず機をしらずして小乗戒
を持たば大乘の障となる、破れば又必ず惡果を招く其の上今の
人人小律の者どもは大乘戒を小乗戒に盗み入れ驢乳は牛乳を
入れて大乘の人をあざむく、大偷盜の者大謗法の者其のとがを
論ずれば提婆達多も肩を並べがたく瞿伽利尊者が足も及ばざる
閻浮第一の大惡人なり帰依せん国土安穩なるべしや、余・此の事
を見るに自身だにも弁へなばさでこそあるべきに日本国に智者と
おぼしき人人・一人も知らず国すでにやぶれなんとす、其の上仏
の諫曉を重んずる上一分の慈悲に・もよをされて国に代りて
身命を捨て申せども国主等彼にたばらかされて用ゆる人・一人

もなし譬へば熱鉄に冷水を投げ睡眠の師子に手を触るが如し、
爰に両火房と申す法師あり身には三衣を皮の如くはなつ事なし、
一鉢は両眼をまほるが如し二百五十戒堅く持ち三千の威儀をと
とのへたり、世間の無智の道俗国主よりはじめて万民にいたるま
で地藏尊者の伽羅陀山より出現せるか迦葉尊者の靈山より下来
するかと疑ふ、余・法華經の第五の卷の勸持品を拝見したてま
つれば末代に入りて法華經の大怨敵三類あるべし其の第三の強敵
は此の者かと思畢んぬ、便宜あらば国敵をせめて彼れが大慢を倒
して仏法の威験をあらはさんと思ふ処に両火房常に高座にして
歎いて云く「日本国の僧尼には二百五十戒・五百戒・男女には
五戒・八斎戒等を一同に持たせんとおもふに、日蓮が此の願の
障りとなる」と云云、余案じて云く「現証に付て事を切らんと

ところ

思う処に、彼常に雨を心に任せて下す由披露あり、古へも又雨

もつとくしつ

を以て得失をあらはす例これ多し、所謂伝教大師と護命と守敏

こつほう

と弘法と等なり、此に両火房上より祈雨の御いのりを仰せ付けら

ほう

ほう

あめ

きう

のり

を

仰

せ

付

け

ら

お

お

お

お

お

お

お

ここ

ここ

ほう

あめ

いぬ

ぶんえい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

れたり」と云云、此に両火房祈雨あり去る文永八年六月十八日よ

ここ

ここ

ほう

あめ

いぬ

ぶんえい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

り二十四日なり、此に使を極楽寺へ遣す年来の御歎きこれなり「七

ここ

ここ

ほう

あめ

いぬ

ぶんえい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

えい

日が間に若一雨も下らば御弟子となりて二百五十戒具さに持たん

もし

いちう

ふら

おん

でし

なり

て

二

百

五

十

戒

具

さ

に

持

た

ん

上

に

念

仏

・無間地獄と申す事ひがよみなりけりと申すべし余だ

ねん

ぶつ

むげん

じごく

もう

し

事

ひ

が

よ

み

な

り

け

り

と

申

す

べ

し

余

だ

にも帰伏し奉らば我弟子等をはじめて日本国大体かたぶき候な

きふく

たてまつ

でし

は

じ

め

て

日

本

国

大

体

か

た

ぶ

き

候

な

ん

と

云

云

、七日が間に三度の使をつかはす、然れどもいかんが

し

た

り

け

む

一

雨

も

下

ら

ざ

る

の

上

、

頽

風

・

☆

風

・

旋

風・暴風等の

い

ちう

ふ

ら

の

上

、

頽

風

・

☆

風

・

旋

風

・

暴

風

等

の

の

の

八風・十二時にやむ事なし 剩二七日まで一雨も下らず風もや

あ

まつ

さ

え

二

七

日

ま

で

一

雨

も

下

ら

ず

風

も

や

む

事

な

し

、されば此の事は何事ぞ和泉式部と云いし色好み・能因

法師ほっしと申せし無戒むかいの者・此は彼の両火房ほうがいむところの
三十一文字みそひともしぞかし、彼の月氏がっしの大盜賊ぞく南・無仏と称せしかば天頭てんず
を得たり、彼の両火房ほう並に諸僧等しよそうの二百五十戒・真言しんこん・法華ほっけの小
法だいほう・大法の数百人の仏法ぶつぽうの靈驗れいけんいかなれば姪女等おうげんの誑言だいか・大盜人
が称仏には劣らんとあやしき事なり、此れを以て彼等かれらが大科をば
しらるべきにさはなくして還かえつて讒言ざんげんをもちゐらるるは実とはお
ぼへず所詮しよせん日本国にほんこく・亡国ぼうこくとなるべき期来ごきたるか、又祈雨きうの事はたと
ひ雨あめ下ふらせりとも雨の形貌すがたを以て祈る者の賢不賢を知る事あり雨
・種種しゆじゆなり・或あるは天雨てんう・・或あるは竜雨りゆうう・・或あるは修羅雨しゆらあめ・・或あるは・
☆雨そ・・或あるは甘雨かんう・・或あるは雷雨等らいうあり、今の祈雨きうは都すべいちうも
下ふらざる上二七日が間前よりはるかに超過ちようかせる大旱魃かんぱつ・大惡風あくふう・
十二時に止む事なし、両火房ほう真の人ならば忽たちまちに邪見じゃけんをもひるがへ

し跡あとをも山林にかくすべきに其その義なくして面を弟子・檀那等

さらす上あまつさえざんげん 剩くわだ 讒言を企て日蓮が頸をきらせまいらせんと申し上もう

・あづかる人の国まで状を申し下して種をたたんとする大悪人あくにんな

り、而しかるを無智の檀那等は恃怙じこして現世げんせには国をやぶり後生ごしやうには

無間地獄むげんじごくに墮おちなん事の不便ふびんさよ、

起世経きせきやうに云いく「諸の衆生有りて放逸ほういつを為し清浄しょうじやうの行を汚す

故ゆえに天雨てんうを下さず」又云いく「不如法あり慳貪けんどん・嫉妬しつと・邪見じゃけん・顛倒てんとう

なる故ゆえに天則すなわち雨を下さず」又経律異相いそうに云いく「五事有て雨無あめし

一二三之これを略す四には雨師姪いんらん乱・五には国王理こくおうをもつて治めず雨

師いか瞋ゆえる故あめに雨ふらず」云云、此等これらの経文の亀鏡ききやうをもて両火房ほうが

身に指し当て見よ少もくもりなからん、一には名は持戒じかいとき・こ

ゆれども実には放逸ほういつなるか二には慳貪けんどんなるか三には嫉妬しつとなるか四

には邪見じゃけんなるか五には姪乱いんらんなるか此の五にはすぐべからず、又此の経は両火房ほう一人には限るべからず昔をかがみ今をもしれ、弘法こうぼう大師だいしの祈雨きうの時二七日の間・一雨も下らざりしもあやしき事なり、而しかるを誑惑おおわくの心強盛じやうじやうなりし人なれば天子てんしの御祈雨きうの雨を盗み取て我が雨あめと云云、善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵の祈雨きうの時も小雨しょううは下たりしかども三師さんし共に大風連連と吹いて勅使をつけてをはれしあさましさと、天台大師・伝教大師の須臾しゆゆと三日が間に帝たいし釈雨しゃくあめを下ふらして小風も吹かざりしもたとくぞおぼゆるおぼゆる。

法華經ほけきやうに云く「・或あるは阿練若あれんにやに納衣のうえにして空閑くうげんに在りて、乃至ないし利養りやうに貪著とんじやくするが故ゆえに白衣びやくえの与ために法を説いて世に恭敬きやうけいせらるること六通ろくつうの羅漢らかんの如きもの有らん」又云く「常に大衆たいしゆうの中に在

て我等を毀らんと欲するが故に国王大臣婆羅門・居士及び余の
比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説き乃至惡鬼其の身に入つて我
を罵詈毀辱せん、又云く「濁世の惡比丘は仏の方便隨宜所説の
法を知らずして惡口して顰蹙し数数擯出せられん」等云云、
涅槃經に云く「一闍提有つて羅漢の像を作し空処に住し方等
大乘經典を誹謗す諸の凡夫人見已つて皆眞の阿羅漢是れ大菩薩
なりと謂えり」等云云、今予法華經と涅槃經との仏鏡をもつて
當時の日本國を浮べて其影をみるに誰の僧か國主に六通の羅漢の
如くたとまれて而も法華經の行者を讒言して頸をきらせんとせ
し、又いづれの僧か万民に大菩薩とあをがれたる、誰の智者か
法華經の故に度々處處を追はれ頸をきられ弟子を殺され兩度まで
流罪せられて最後に頸に及ばんとせし、眼無く耳無きの人は除

まなこ

きようもん

けんもん

ひとびと

ひとごと

く眼有り耳有らん人は経文を見聞せよ、今の人人は人毎ひとごとに

きようもん

経文を我もよむ我も信じたりといふ只ただにくむところは日蓮にちれん計な

きようもん

り経文を信ずるならば慥たしかにのせたる強敵いづてきを取出して経文きようもんを信じ

てよむしるしとせよ、若し爾もしからずんば経文きようもんの如く読誦どくじゆする日蓮にちれん

きようもん

をいかれるは経文きようもんをいかれるにあらずや仏ぶつの使をかるしむるな

ほう

ほけきよう

こつてき

しやくそん

り、今の代の両火房ほうが法華経ほけきようの第三の強敵こつてきとならずば釈尊しやくそんは大

もうこ

たほう

じゅつほう

しよぶつ

ふじつ

しやうみよう

しょう

きようもん

妄語もうこの仏・多宝・十方たほうの諸仏じゅつほうは不実ふじつの証しょう明めいなり、又経文きようもんまこ

こきえ

こくしゆ

げんざい

しゆこ

ぜんじん

すてられ

国は他の

とならば御帰依ごきえの国主こくしゆは現在げんざいには守護しゆこの善神ぜんじんにすてられ国は他の

有となり後生ごしやうには阿鼻地獄あびじごく疑うたがいなし、而しかるに彼等かれらが大悪法だいあくほうを

とうと

ゆえ

りふじん

しゆつたい

こくしゆ

びやつけん

すい

尊とうとまるる故に理不尽りふじんの政道しゆつたい出来す彼の国主こくしゆの僻見びやつけんの心を推すいする

にちれん

あみだぶつ

おんてき

ふぼ

こんりゆう

どうとう

しゆうてき

たとい

に日蓮にちれんは阿弥陀仏あみだぶつの怨敵おんてき・父母ふぼの建立こんりゆうの堂塔どうとうの讎敵しゆうてきなれば仮令たとい

政道をまげたりとも仏意ぶつゐには背かじ天神てんじんもゆるし給たまうべしと・を

もはるるか、はかなしはかなし委細にかたるべけれども此れは
小事なれば申さず心有らん者推して知んぬべし上に書挙るより
雲泥大事なる日本第一の大科此の国に出来して年久くなる間、
此の国既に梵釈・日月・四天・大王等の諸天にも捨てられ守護
の諸大善神も還つて大怨敵となり法華經守護の梵帝等鄰国の
聖人に仰せ付けて日本国を治罰し仏前の誓状を遂げんとおぼし
めす事あり。
(三五二頁)

夫れ正像の古へは世濁世に入るといへども始めなりしかば
国土さしも乱れず聖賢も間間出現し福德の王臣も絶えざりしか
ば政道も曲る事なし万民も直かりし故に小科を対治せんがために
三皇・五帝・三王・三聖等出現して墳典を作りて代を治す、世
しばらく治りたりしかども漸漸にすへになるままに聖賢も出現

せず福德の人もすくなければ三災は多大にして七難・先代に超過

せしかば外典及びがたし、其の時治を代えて内典を用いて世を

治す随つて世且くはおさまるされども又世末になるままに人の悪

は日々に増長し政道は月月に衰減するかの故に又三災・七難先

よりいよいよ増長して小乗戒等の力験なかりしかば其の時治

をかへて小乗の戒等を止めて大乘を用ゆ、大乘又叶わねば

法華經の円頓の大戒壇を叡山に建立して代を治めたり、所謂

伝教大師・日本三所の小乗戒並に華嚴三論・法相の三大乗戒

を破失せし是なり、此の大師は六宗をせめ落させ給うのみなら

ず禪宗をも習い極め剩え日本国にいまだひろまらざりし法華宗

・真言宗をも勘え出して勝劣鏡をかけ顕密の差別黑白なり、

然れども世間の疑を散じがたかりしかば去る延暦年中に御

にゅうとうかんど　ひとびと　たじ　かしこ　ほけきょう　だいにちきょう
入唐漢土の人人も他事には賢かりしかども法華經・大日經・
てんだいしんこん
天台真言の二宗の勝劣・浅深は分明に知らせ給はざりしかば、
きちょう　ごそんじ　ごと　みょうらくだいし
御帰朝の後・本の御存知の如く妙樂大師の記の十の不空三蔵の
かいげ　ごんこう
改悔の言を含光がかたりしを引き載せて天台勝れ真言劣なる明証
えびょう　たま　あまつさしんごんしゅう
を依憑集に定め給う剩え真言宗の宗の一字を削り給う、其の故
ぜんむい　こんこうち　ふくう　あじやり
は善無畏・金剛智・不空の三人・一行阿闍梨をたばらかして本は
だいにちきょう　てんだい　こしやう　いちねんさんぜん　ほうもん
なき大日經に天台の己証の一念三千の法門を盗み入れて人の
ちんぼう　おおわく　こころえたま
珍宝を我が有とせる大誑惑の者なりと心得給へり、例せば澄観
ほつし　てんだいだいし　じやうじやう　かんぼう　けこん　かえ
法師が天台大師の十法成乗の觀法を華嚴に盗み入れて還つて
てんだいしゅう　くだ　ごと　ごそんじ
天台宗を末教と下せしが如しと御存知あて宗の一字を削りて
えいざん　ただ　しか　こうぼうだいし　もう　てんがだいいち
叡山は唯七宗たるべしと云云、而るを弘法大師と申し天下第一の
じさんき　もうご　だいし　にゅうめつ　たいろん　くげ
自讃毀他の大妄語の人、教大師御入滅の後対論なくして公家を

かすめたてまつりて八宗と申し立てぬ、然れども本師の跡を
紹繼する人人は叡山は唯七宗にてこそあるべきに教大師の第三
の弟子・慈覚大師と叡山第一の座主・義真和尚の末弟子・智証
大師と此の二人は漢土に渡り給いし時・日本国にて一国の大事と
諍論せし事なれば天台・真言の碩学等に値い給う毎に勝劣・
浅深を尋ね給う、然るに其の時の明匠等も・或は真言宗勝れ
・或は天台宗勝れ・或は二宗斉等し・或は理同事異といへども
俱に慥の証文をば出さず、二宗の学者等併しながら胸臆の言な
り然るに慈覚大師は学極めずして帰朝して疏十四卷を作れり所謂
金剛頂經の疏七卷・蘇悉地經の疏七卷なり此の疏の体たらくは
法華經と大日經の三部經とは理は同く事は異なり等云云、此の
疏の心は大日經の疏と義釈との心を出すがなを不審あきらめが

たかりけるかの故に本尊の御前に疏を指し置いて此の疏仏意に叶へりやいなやと祈せいせし処に夢に日輪を射ると云云、うちをどろきて吉夢なり真言勝れたる事疑なしと・おもひて宣旨を申し下す日本国に弘通せんとし給いしがほどなく疫病やみて四ヶ月と申せしかば跡もなくうせ給いぬ、而るに智証大師は慈覚の御ためにも御弟子なりしかば、遺言に任せて宣旨を申し下し給う所謂真言・法華齊等なり譬ば鳥の二の翼・人の兩目の如し又叡山もはつしゅう八宗なるべしと云云、此の兩人は身は叡山の雲の上に臥すといへども心は東寺里中の塵にまじはる本師の遺跡を紹繼する様に還つて聖人の正義を忽諸し給へり、法華經の於諸經中最在其上の上の字をうちかへして大日經の下に置き先づ大師の怨敵となるのみならず存外に釈迦・多宝・十方分身・大日

如來等の諸仏の讎敵となり給う、されば慈覺大師の夢に日輪を

射ると見しは是なり仏法の大科此れよりはじまる日本国・亡国と

なるべき先兆なり、棟梁たる法華經既に大日經の椽栂となりぬ、

王法も下剋上して王位も臣下に随うべかりしを其の時又一類の

学者有りて堅く此の法門を諍論せし上・座主も両方を兼ねて事

いまだきれざりしかば世も忽にほろびず有りけるか、例せば外典

に云く「大国には諍臣七人・中国には五人・小国には三人

諍論すれば仮令政道に謬誤出来すれども国破れず乃至家に諫

子あれば不義におちず」と申すが如し仏家も又是くの如し、天台

・真言の勝劣・浅深事きれざりしかば少少の災難は出来せしか

ども青天にも捨てられず黄地にも犯されず一国の内の事にてあり

し程に人王七十七代・後白河の法皇の御宇に当りて天台座主明雲

・伝でんぎようだいし教大師しの止観院しかんの法華經ほけきようの三部三部を捨てて慈覺大師じかくだいしの總持院そうじいん

だいにちきよう

の大日經だいにくきようの三部三部に付き給う、天台山てんだいは名計なけいりにて真言しんこんの山さんにな

ほけきよう

しよりよう

だいにちきよう

てんだい

しんこん

ざす

たいしゅう

り法華經ほけきようの所領しよりようは大日經だいにくきようの地ちとなる天台てんだいと真言しんこんと座主ざすと大衆たいしゅう

と敵対ていだいあるべき序ついでなり、国又王こくまたおうと臣しんと諍論じやうろんして王おうは臣しんに随したがうべ

ついで

みだ

たこく

ついで

しか

したが

き序ついでなり一國みだ乱らんれて他國たこくに破やぶらるべき序ついでなり、然しかれば明雲めいうんは義仲ぎちゆう

に殺ころされて院いんも清盛きよもりにしたがひられ給たまう、然しかれども公家くけも叡山えいざんも

共に此こゝの故ゆゑとしらずして世静せいならずする程ほどに災難さいなん次第しだいに増長ぞうちよう

して人王にんおう八十二代おそき隱岐いんぎの法皇ほうこうの御宇ぎように至いたつて一災ひとわざ起おこれば二災ふたわざ起おこ

もう

ぜんしゅう

ねんぶつしゅう

ぜんどうほう

ほけきよう

まつだい

と申もうして禪宗ぜんしゅう・念仏ねんぶつ宗起しゅうきり合あいぬ、善導ぜんどう房ぼうは法華經ほけきようは末代まつだいには

せんちゅうむいつ

ほうねん

しゃへいかくほう

ぜんしゅう

ほけきよう

千中無せんちゅうむいつ一いつとかき、法然ほうねんは捨すて閉閣へいかく抛ほうと云云うんぐん、禪宗ぜんしゅうは法華經ほけきようを失うしなは

んがために教外別伝きやうげべつでん・不立文字ふりゅうもんじとののしる、此こゝの三さんの大惡だいあく法鼻ほうびを

並ならべて一國しつこくに出現しゆつげんせしが故ゆゑに此こゝの國こくすでに梵釈ぼんしやく・二天ふてん・日月にちがつ・

しおう 四王に捨てられ奉り守護の善神も還つて大怨敵とならせ給う然れ
そうでん ば相伝の所従に責随えられて主上・上皇共に夷島に放たれ給い
しよじゆう 御返りなくしてむなしき島の塵となり給う詮ずる所は実経の
しよりよう 所領を奪い取りて権経たる真言の知行となせし上・日本国の
ばんみん 万民等・禅宗・念仏宗の悪法を用いし故に天下第一・先代未聞
げこくじようしゅつたい の下剋上出来せり而るに相州は謗法の人ならぬ上・文武きはめ
しかな 尽せし人なれば天許し国主となす随つて世且く静なりき、然而又
うしな 先に王法を失いし真言漸く関東に落ち下る存外に崇重せらるる
ゆえ 故に鎌倉又還つて大謗法一闡提の官僧・禅僧・念仏僧の檀那と成
かまくら かりて新寺を建立して旧寺を捨つる故に天神は眼を瞋らして此の
こんりゆう 国を睨め地神は憤を含めて身を震ふ長星は一天に覆ひ地震は
いきどおり 四海を動かす余此等の災天に驚いて粗内典五千・七千・外典
しはい しかい

三千等を引き見るに先代にも希なる天変地天なり、然而儒者の家
には記せざれば知る事なし仏法は自迷なればこころへず此の災
天は常の政道の相違と世間の謬誤より出来せるにあらざ定めて
仏法より事起るかとお勘へなしぬ、先ず大地震に付て去る正嘉元年
に書を一卷注したりしを故最明寺の入道殿に奉る御尋ねもなく
御用いもなかりしかば国主の御用いなき法師なればあやまちたり
とも科あらじとやおもひけん念仏者並に檀那等又さるべき人人も
同意したるとぞ聞へし夜中に日蓮が小庵に数千人押し寄せて
殺害せんとせしかども・いかんがしたりけん其の夜の害もまぬか
れぬ、然れども心を合せたる事なれば寄せたる者も科なくて大事
の政道を破る日蓮が未だ生きたる不思議なりとて伊豆の国へ流し
ぬ、されば人のあまりに・にくきには我がほろぶべきとがをも・

かへりみざるか御式目をも破らるるか御起請文を見るに梵釈・

四天・天照太神・正八幡等を書きのせたてま

つる、余存外の法門を申さば子細を弁えられずば日本国の御帰依

の僧等に召し合せられて其れになを事ゆかずば漢土・月氏までも

尋ねらるべし、其れに叶わずば子細ありなんとて且くまたるべし、

子細も弁えぬ人人が身のほろぶべきを指をきて大事の起請を破ら

るる事心へられず。 三五五頁

自讃には似たれども本文に任せて申す余は日本国の人人には上

は天子より下は万民にいたるまで三の故あり、一には父母なり二

には師匠なり三には主君の御使なり、経に云く「即如来の使な

り」と又云く「眼目なり」と又云く「日月なり」と章安大師の云く

「彼が為に悪を除くは則ち是彼が親なり」等云云、而るに謗法

いっせんだい 一闡提・国敵の法師原が讒言を用いて其義を弁えず左右なく大事

たる政道を曲げらるるは・わざとわざはひをまねかるるか墓無し

墓無し、然るに事しづまりぬれば科なき事は恥かしきかの故にほ

どなく召返されしかども故最明寺の入道殿も又早くかくれさせ

給いぬ、当御時に成りて・或は身に疵をかふり・或は弟子を殺さ

れ・或は所所を追れ・或はやどをせめしかば一日片時も地上に

栖むべき便りなし、是に付けても仏は一切世間・多怨難信と

説き置き給う諸の菩薩は我不愛身命但惜無上道と誓へり、加

刀杖瓦石数数見擯出の文に任せて流罪せられ刀のさきにかかり

なば法華經一部よみまいらせたるにこそと・おもひきりてわざと

不輕菩薩の如く覚徳比丘の様に竜樹菩薩・提婆菩薩・仏陀密多

・師子尊者の如く弥強盛に申しはる、今度・法華經の大怨敵

を見て経文きやうもんの如ごとく父母ふぼ・師匠ししやう・朝敵ちやうてき・宿世すくせの敵てきの如ごとく散散さんさんに責せるならば定めて万人ばんにんもいかり国主こくしゆも讒言ざんげんを収いて流罪りうざいし頸けいにも及およば
んずらん、其時そのとき・仏前ぶつぜんにして誓状せいじやうせし梵釈ぼんしやく・日月四天にちがつしてんの願ねがひをも
はたさせたてまつり法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをあだまんものを須臾しゆゆものが
さじと起請きしやうせしを身みにあてて心こころみん、釈尊しゃくそん・多宝たほう・十方分身じふつぼうふんじんの
諸仏しよぶつの・或あるは共に宿むかし・或あるは衣おほを覆おほはれ・或あるは守護しゆごせんとねんご
ろに説たまひかせ給たまひいしをも実まことか虚言そらごとかと知しんじんつて信心しんじんをも増長そうちやうせんと
退転たいてんなくはげみし程ほどに案あんにたがはず去いぬる文永八年九月十二日ぶんえいはちねんきゅうがつにじふににちに
都すべて一分いちぶんの科とがもなくして佐土さどの国くにへ流罪りうざいせらる、外ほかには遠流おんりうと聞きこ
えしかども内うちには頸けいを切きると定めぬ余か又兼かねて此この事ことを推すいせし故ゆゑに
弟子でしに向むかつて云いく我が願ねがひ既に遂すでぬ悦よろこび身みに余あまれり人身じんしんは受うけがた
くして破われやすし、過か去こ遠おん遠のん劫こより由よしなき事ことには失うしないしかども

ほけきよう

法華經のために命をすてたる事はなし、我頸を刎られて師子尊者

が絶えたる跡を継ぎ天台・伝教の功にも超へ付法蔵の二十五人

に一を加えて二十六人となり不輕菩薩の行にも越えて釈迦・多宝

じゅつぽう

しよぶつ

・十方の諸仏に

い

か

が

せ

ん

と

な

げ

か

せ

まいらせんと思ひし故に言をもおしま

已前にありし事後に有るべき事の様を平の金吾に申し含めぬ此の

いぜん

語しげければ委細にはかかず。

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

抑も日本国の主となりて万事を心に任せ給へり何事も両方を

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

召し合せてこそ勝負を決し御成敗をなす人のいかなれば日蓮一人

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

に限つて諸僧等に召合せずして大科に行わるるらん是れ偏にただ

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

事にあらずたとひ日蓮は大科の者なりとも国は安穩なるべから

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

ず、御式目を見るに五十一箇条を立てて終りに起請文を書載せた

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

り、だいいち第一・第二は神事・仏事ぶつじ乃至五十一等云云、神事・仏事ぶつじの

かんよう

ほけきよう

肝要たる法華經を手ににぎれる者を讒人等ざんにんに召合せられずして

かれら彼等が申すまゝに頸に及ぶ然れば他事たじの中にも此の起請文きしょうぶんに相違そうい

する政道は有るあらめども此これは第一だいいちの大事だいいちなり、日蓮にちれんがにくさに

国をかへ身を失はんとせらるるか魯ろの哀公が忘事わするることの第一だいいちなる事

を記せらるるには移宅わたましに妻をわすると云云、孔子こうしの云く身をわす

る者あり国主こくしゅと成りて政道を曲ぐるなり是云云、将又国主は此

の事を委細いさいには知らせ給はざるか、いかに知らせ給はたまずとのべら

るるとも法華經ほけきようの大怨敵おんてきと成給いぬる重科じゅうかは脱のがるべしや、多宝たほう・

十方じゅうぽうの諸仏しよぶつの御前おんまえにして教主きようしゅ釈尊しやくそんの申す口として末代当世まつだいとうせの

事を説かせ給たまいしかば諸の菩薩記もろもろほさつしるして云く「悪鬼其の身に入つて

我を罵詈めりきにく毀辱きじやくせん、乃至数数擯出ないししほしほひんずいせられん」等云云、又四仏しやくそん釈尊しやくそん

の所説しよせつの最勝王經さいしやうおうきやうに云く「悪人あくにんを愛敬あいぎやうし善人ぜんにんを治罰ちばつするに
由よるが故ゆえに、乃至他方ないしたほうの怨賊おんぞく来つて国人喪乱そうらんに遭あわん」等云云、
たとい日蓮にちれんをば輕賤きやうせんせさせ給たまうとも教主きやうしゆしやくそん釈尊しんこんの金言きんげん・多宝たほう・
じゅつぽう
十方じよぶつの諸仏しよぶつの証しやうみやう明むなしは空かるべからず一切いっさいの真言師しんこんし・禪宗ぜんしゆう・
念仏者等ねんぶつの謗法ほうほうの惡比丘あくびくをば前より御歸依ごきえありしかども其その大科だいか
を知らせ給たまはねば少し天ゆも許ゆるし善神ぜんじんもすてざりけるにや、而しかるを
にちれん
日蓮しゆつげんが出現いっさいして一切いっさいの人を恐れず身命しんみやうを捨てて指もうし申もうさば
賢かしこげなる国主こくしゆならば子細しさいを聞き給たまうべきに聞きもせず用もちいられざる
だにも不思議ふしぎなるに剩あまつさへ頭おほに及およばむとせし事は存外そんがいの次第しだいなり、
然しかれば大惡人あくにんを用もちいる大科正法だいかしやうほうの大善人ぜんにんを耻辱ちじよくする大罪たいざい・二惡
・鼻はなを並ならべて此この国くにに出現しゆつげんせり、譬たとえば修羅しゆらを恭敬きやうけいし日天にってんを射
奉たてまつるが如ごとし故ゆえに前代未聞ぜんだいみもんの大事だいじ・此この国くにに起おこるなり、是又先例せんれいな

きにあらず夏の桀王は竜蓬が頭を刎ね殷の紂王は比干が胸をさ
き二世王は李斯を殺し優陀延王は賓頭盧尊者を蔑如し檀弥羅王は
師子尊者の頸をきる武王は慧遠法師と諍論し憲宗王は白居易を
遠流し徽宗皇帝は法道三蔵の面に火印をさす、此等は皆諫曉を
用いざるのみならず還つて怨を成せし人人現世には国を亡し身を
失ひ後生には惡道に墮つ是れ又人をあなづり讒言を納れて理を尽
さざりし故なり、而るに去る文永十一年二月に佐土の国より召返
されて同四月の八日に平金吾に對面して有りし時・理不尽の
御勘氣の由委細に申し含めぬ、又恨むらくは此の国すでに他國に
破れん事のあさましさと歎き申せしかば金吾が云く何の比か大
蒙古は寄せ候べきと問いしかば經文には分明に年月を指したる
事はなけれども天の御氣色を拝見し奉るに以ての外に此の国を

睨^{にら}みさせ給^{たま}うか今年は一定寄せぬと覺^{おぼ}ふ若^もし寄するならば一人も
面を向う者あるべからず此^これ又天の責なり、日蓮^{にちれん}をばわ^和どのばら
が用^{もち}いぬ者なれば力及^{およ}ばず、 穴賢^{あなかしこあなかしこ}穴賢^{しんこんし}・真言師等に調伏^{じょうぶく}行わ
せ給^{たま}うべからず若^もし行わするほどならいよいよ悪かるべき由申付
けてさて歸りてありしに上下^{じょうげ}共に先の如^{ごと}く用^{もち}いさりげに有^ある上・
本より存知せり国恩を報ぜんがために三度までは諫^{かんぎょう} 曉^{あき}すべし
用^{もち}いずば山林^{さんりん}に身を隠さんと・おもひしなり、又上古^{じょうこ}の本文にも
三度のいさめ用^{もち}いずば去れといふ本文にまかせて且^{しばら}く山中に罷^{まか}り
入りぬ、其^その上は国主^{こくしゅ}の用^{もち}い給^{たま}はざらん^そに其^いれ已^か下に法門^{ほうもん}申して
何かせん申^{もう}したりとも国もたすかるまじ人も又仏になるべしとも
おぼへず。

又念^{ねんぶつ}仏・無間地獄^{むげんじごく}・阿弥陀^{あみだ}經を讀むべからずと申^{もう}す事も私の言

にはあらず、夫れ弥陀念仏と申すは源と釈迦如来の五十余年の
説法の内・前四十余年の内の阿弥陀経等の三部経より出来せり、
然れども如来の金言なれば定めて真実にてこそあるらめと信ずる
処に後八年の法華経の序分たる無量義経に仏・法華経を説かせ
給はんために先づ四十余年の経経並に年紀等を具に数へあげて
未顕真実・乃至・終不得成・無上菩提と若干の経経並に法門を
唯一言に打ち消し給う事譬えば大水の小火をけし大風の衆の草木
の露を落すが如し、然後に正宗の法華経の第一巻に至つて
世尊法久後・要当説真実又云く正直捨方便・但説無上道と説き
給う譬へば闇夜に大月輪の出現し大塔立て後足代を切り捨つる
が如し、然実義を定めて云く「今・此の三界は皆是れ我が有
なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり而も今・此の処は諸の

げんなん 患難多し唯我一人のみ能く救護を為す、復教詔すと雖も而も
しんじゆ 信受せず、乃至経を誦誦し書き持つこと有らん者を見て輕賤
そうしつ 憎嫉して而も結恨を懷かん、其の人命終して阿鼻獄に入らん」
等云云、経文の次第普通の性相の法には似ず常には五逆・七逆
の罪人こそ阿鼻地獄とは定めて候に此れはさにては候はず在世
めつこ 滅後の一切衆生・阿弥陀経等の四十余年の経経を堅く執して
ほけきよう 法華経へうつらざらんとたとひ法華経へ入るとも本執を捨てずし
かれがれ 彼彼の経経を法華経に並て修行せん人と又自執の経経を
ほけきよう 法華経に勝れたりといはん人と法華経を法の如く修行すとも
ほけきよう 法華経の行者を恥辱せん者と此れ等の諸人を指しつめて
ごにんみようじゆうにゆうあびこく 其人命終入阿鼻獄と定めさせ給いしなり、此の事はただ釈迦
いちぶつ 一仏の仰なりとも、外道にあらずば疑うべきにてはあらねども

いこんとう しよきよう

已今当の諸經の説に色をかへて重き事をあらはさんがために

ほうじょうせかい たほうによらい みずから

宝浄世界の多宝如来は自はるばる来給いて証人とならせ給う、

しゃかによらい だいにちきよう あみだ なんぶつ

釈迦如来の先判たる大日經・阿弥陀經・念仏等を堅く執して後

ほけきよう ひとびと にゅうあびこく

の法華經へ入らざらむ人人は入阿鼻獄は一定なりと証明し、又

あみだぶつ じゅつぼう しよぶつ

阿弥陀仏等の十方の諸仏は各各の国を捨てて靈山虚空会に

もう たまい じゅげ ころちやうぜつ

詣で給い宝樹下に坐して広長舌を出し大梵天に付け給うこと

むりようむへん こと

無量無辺の虹の虚空に立ちたらんが如し、心は四十余年の中の

かんきよう あみだ ひけきよう

觀經・阿弥陀經・悲華經等に法蔵比丘の諸菩薩・四十八願等を

おこ ほんぶ じようど らいこう

発して凡夫を九品の浄土へ来迎せんと説く事は且く法華經已前の

やすめ言なり、実には彼れ彼れの經經の文の如く十方西方へ

らいこう まこと きようぎよう

の来迎はあるべからず実とおもふことなかれ釈迦仏の今説き

たま こと まこと

給うが如し実には釈迦・多宝・十方の諸仏寿量品の肝要たる

しゃか たほう じゅつぼう

南無妙法蓮華經の五字を信ぜしめんが為なりと出し給う広長舌
なり、我等と釈迦仏とは同じ程の仏なり釈迦仏は天月の如し我等
は水中の影の月なり釈迦仏の本土は実には娑婆世界なり天月動
き給はずば我等もうつるべからず此の土に居住して法華經の
行者を守護せん事・臣下が主上を仰ぎ奉らんが如く父母の一子
を愛するが如くならんと出し給う舌なり、其の時阿弥陀仏の一二
の弟子・観音・勢至等は阿弥陀仏の塩梅なり雙翼なり左右の臣な
り兩目の如し、然而極樂世界よりはるばると御供し奉りたりしが
無量義經の時・仏の阿弥陀經等の四十八願等は未顕真実・乃至
法華經にて一名阿弥陀と名をあげて此等の法門は真実ならずと
説き給いしかば実とも覺へざりしに阿弥陀仏正く来りて合点し
給いしをうち見てさては我等が念仏者等を九品の浄土へ来迎の

蓮台と合掌の印とは虚しかりけりと聞定めてさては我等も本土

に還りて何かせんとして八万二万の菩薩のうちに入り・或は観音品

に遊於娑婆世界と申して此の土の法華經の行者を守護せんとね

んごろに申せしかば、日本国より近き一閻浮提の内・南方・

補陀落山と申す小所を釈迦仏より給いて宿所と定め給ふ、

阿弥陀仏は左右の臣下たる觀音・勢至に捨てられて西方世界へは

還り給はず此の世界に留りて法華經の行者を守護せんとありし

かば此の世界の内・欲界第四の兜率天・弥勒菩薩の所領の内・

四十九院の一院を給いて阿弥陀院と額を打つておはするとこそう

け給はれ、其の上阿弥陀經には仏・舍利弗に対して凡夫の往生

すべき様を説き給ふ、舍利弗・舍利弗・又舍利弗と二十余処まで

いくばくもなき經によび給いしはかまびすしかりし事ぞかし、

然れども四紙の一巻が内すべて舍利弗等の諸声聞の往生成仏しかりほつ しょうもん おうじょうじょうぶつ
を許さず法華經に來りてこそ始て華光如來・光明如來とは記せゆる ほけきよう えんぶだいいちち げこうによらい こうみょうによらい
られ給いしか一閻浮提第一の大智者たる舍利弗すら淨土の三部經たま い おうじょうじょうぶつ ちしや しょうど さんぶきよう
にて往生成仏の跡をけづる、まして末代の牛羊の如くなるまつだい ざゆうよう こと
男女・彼のの經經にて生死を離れなんや、此の由を弁へざるなんよ かがれ きようぎよう しょうじ ひとびと よし わきまえ
末代の學者等並に法華經を修行する初心の人人かたじけなくまつだい がくしや ほけきよう しゆぎよう しよしん
阿弥陀經を読み念仏を申して・或は法華經に鼻を並べ、或は後あみだ ねんぶつ もう ある ほけきよう ある
に此れを読み法華經の肝心とし功德を阿弥陀經等にあつらへてこ ほけきよう かんじん くとく あみだ
西方へ回向し往生せんと思ふは譬へば飛竜が驢馬を乗物としさいほう えこう おうじょう たと
師子が野干をたのみたるか將又日輪出現の後の衆星の光大雨のしし やかん はたまにちりんしゆつげん しゅうせい だいう
盛 時の小露なり、故に教大師云く「白牛を賜う朝には三車をさかなるとき ゆえ だいしいわ びやくこ たま あした
もち 用いず、家業を得る夕に何ぞ除糞を須いん」、故に經に云く「正直しやうじき

ほうべん
に方便を捨て但無上道を説く」又云く「日出でぬれば星隠れ巧を

見て拙を知る」と云云、法華經出現の後は已今当の諸經の捨て

らるる事は勿論なりたとひ修行すとも法華經の所従にてこそあ

るべきに今の日本国の人人道綽が未有一人得者・善導が

千中無一・慧心が往生要集の序・永觀が十因・法然が捨閉閣抛

等を堅く信じて・或は法華經を抛ちて一向に念仏を申す者もあ

り、或は念仏を本として助けに法華經を持つ者もあり・或は

弥陀念仏と法華經とを鼻を並べて左右に念じて二行と行ずる者も

あり・或は念仏と法華經と一法の二名なりと思いて行ずる者もあ

り、此れ等は皆教主・釈尊の御屋敷の内に居して師主をば指し置

き奉りて阿弥陀堂を釈迦如来の御所領の内に国毎に郷毎に家家

毎に並べ立て・或は一万・二万・或は七万返・或は一生の間・

一向いっこうに修行しゅぎょうして主師親しゅししんをわすれたるだに不思議ふしぎなるに、剩あまつさへ親

父ちちたる教主きょうしゅ釈尊しやくそんの御誕生ごにうめつ後入滅りようじつの両日りようじつを奪うばい取りて、十五日

は阿弥陀あみだ仏ぶつの日・八日は薬師やくし・仏の日等云云、一仏誕生いちぶつ入りの両日りようじつ

を東西二仏の死生の日となせり是豈あにに不孝ふこうの者にあらずや逆路ぎやくろ七

逆さかの者にあらずや、人毎ひとごとに此この重科じゅうか有りてしかも人毎ひとごとに我が身は

科とがなしとおもへり無慚むざん無愧むきの一闡提人いつせんたいなり、法華經ほけきようの第二の巻に

主と親と師との三大事だいじを説き給たまへり一經いつきようの肝心かんじんぞかし、其その

經文きやうもんに云いわく「今・此さんがいの三界みなこは皆是もろもろれ我有ごちゆうなり其中しゅじようの衆生ことごとは悉ことごとく

是これ吾わが子こなり、而しかも今・此ところの処ところは諸もろもろの患難げんなん多し唯我一人ただわれひとりのみ

能よく救護くごを為なす」等云云、又此の經に背そむく者を文に説いわいて云く

「復また教詔きょうしちうすと雖いえども而しかも信受しんじゆせず、乃至其ないしその人命終みようじゆうして阿鼻獄あびごく

に入いれらん」等云云、されば念仏ねんぶつ者が本師ほんしの導公ごちゆうしゅじようは其中衆生の外

ただわれひとり きようもん 経文を破りて千中無一 せんちゆうむいつ といひし故に ゆえ 現身に狂人と

成りて楊柳に登りて身を投げ堅土に落ちて死にかねて十四日より かなぎ

二十七日まで十四日が間顛倒狂死 てんとう し畢んぬ、又真言宗の元祖 おわ

善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等は親父を兼ねたる教主 ぜんむいさんそう

釈尊・法王を立下て大日他仏をあがめし故に善無畏三蔵は しゃくそん

閻魔王のせめにあづかるのみならず又無間地獄に堕ちぬ、汝等 えんまおう

・此の事疑 うたがい あらば眼前に閻魔堂の画を見よ、金剛智・不空の事 がんぜん

はしげればかかず、又禅宗の三階信行禅师は法華経等の一代 ぜんしゅう

聖教 しょうきよう をば別教と下だす我が作れる経をば普経と崇重せし故に べつきよう

四依の居士の如くなりしかども法華経の持者の優婆夷に・せめら しえ

れてこえを失ひ現身に大蛇となり数十人の弟子を呑み食う。 うしないげんしん

今・日本国の人人はたとひ法華経を持ち釈尊を釈尊と崇重 にほんこく

し奉るたてまつとも真言宗しんごんしゅう・禪宗ぜんしゅう・念仏者ねんぶつをあがむるならば無間地獄むげんじごくは

まぬがれがたし、何いかに況いわんやや三宗さんしゅうの者共ものにがを日月にちがつの如ごとく渴仰かつじやうし我が身

にも念仏ねんぶつを事わざとせむ者をや心あらん人人ひとびとは念仏ねんぶつ・阿弥陀あみだ経等をば

父母ふぼ・師君しきん・宿世すくせの敵てきよりもいむべきものなり、例せば逆臣ぎやくしんが旗

をば官兵くわんしは指す事なし寒食かんじきの祭には火をいむぞかし、されば古いにしえへ

の論師ろんし・天親菩薩てんじんぼさつは小乗経しょうじやうきやうを舌の上に置かじと誓ちかひ、賢者けんじやた

りし吉蔵大師きちそうだいしは法華経ほけきやうをだに読み給たまはず、此等これらはもと小乗経しょうじやうきやう

を以もて大乘経だいじやうきやうを破失はしつし法華経ほけきやうを以もて天台大師てんだいだいしを毀謗きぼうし奉りし

謗法ほうほうの重罪じゅうざいを消滅しょうめつせんがためなり、今いま・日本国にほんこくの人人ひとびとは一人も

なく不輕輕毀ふぎやうきやうきの如ごとく苦岸勝意等くがんしやういの如ごとく一国万人いこくにん・皆無間地獄みなむげんじごくに

墮おつべき人人ひとびとぞかし、仏ねはんきやうの涅槃經ねはんきやうに記しるして末法まつぽうには法華経ほけきやう誹謗ひぼうの

者は大地微塵だいぢみじんよりもおほかるべしと記たまし給たまいし是これなり、而しかるにに今

ほけきよう ぎようじやしゆつげん

ばんにん

みなほけきよう

どくじゆ

とど

きちぞう

法華經の行者出現せば一国万人・皆法華經の読誦を止めて吉蔵

だいし てんだいだいし

したが

こと にくきよう

ふぎようきようき かね

大師の天台大師に随うが如く身を肉橋となし不輕輕毀の還つて

ふぎようほさつ しんぶくずいじゅう

不輕菩薩に信伏随従せしが如く仕うるとも、一日・二日・一月

・二月・一年二年・一生二生が間には法華經誹謗の重罪は尚な

じゅうざい なお

をし滅しがたかるべきに其の義はなくして当世の人人は四衆俱に

一慢をおこせり、所謂念仏者は法華經を捨てて念仏を申す日蓮は

いわるねんぶつ ほけきよう

ねんぶつ もう にちれん

法華經を持といへども念仏を持たず我等は念仏を持ち法華經をも

ほけきよう

ねんぶつ

われら

ねんぶつ

ほけきよう

信ず戒をも持ち一切の善を行ず等云云、此等は野兎が跡を隠し

たも いっさい

これら

あと

かく

金鳥が頭を穴に入れ、魯人が孔子をあなづり善星が仏を・を

こんちよう

こうぶ

ろじん

こうし

ぜんしよう

どせしにことならず鹿馬迷いやすく鷹鳩変じがたき者なり、

はかな

はかな

とうじ

まいい

たかはと

ようや

あう

ゆえ

墓無し墓無し、當時は予が古へ申せし事の漸く合かの故に、心中

はかな

はかな

いにしえ

たかはと

ようや

あう

ゆえ

しんちゅう

には如何せんとは思ふらめども年来あまりに法にすぎてそしり

いかに

いかに

とうじ

いにしえ

たかはと

ようや

あう

ゆえ

には如何せんとは思ふらめども年来あまりに法にすぎてそしり

には如何せんとは思ふらめども年来あまりに法にすぎてそしり

には如何せんとは思ふらめども年来あまりに法にすぎてそしり

悪口あつくせし事が忽たちまちに翻ひるがえりがたくて信よずる由よしをせず、而しかも蒙もうこ古こはつ

よりゆく、如何いかにせんと宗盛むねもり・義朝よしともが様になげくなり、あはれ人は

心はあるべきものかな孔子こうしは九思一言・周公旦しゅうこうたんは浴する時は三

度にぎり食する時は三度吐給たまう賢人けんじんは此この如ごとく用意よういをなすなり

世間せけんの法にも・はふにすぎば・あやしめといふぞかし、国くにを治じす

る人などが人の申せばとて委細いさいにも尋ねずして左右さうなく科とがに行

はれしは・あはれくやしかるらんかのけつに夏の桀王かのけつが湯王たうに責められ呉

王わうが越王えつに生けどりにせられし時は賢者けんじゃの諫かんぎよう暁もちを用いざりし事

を悔くひ阿闍世王あじゃせが惡瘡身あくそうに出いで他国たこくに襲はれし時は提婆だいばを眼まなこに

見みじ耳みみに聞かじと誓ちかい、乃至宗盛むねもりがいくさにまけ義経よしつねに生けどら

れて鎌倉かまくらに下されて面をさらせし時は東大寺とうだいじを焼やき払ははせ山王さんかうの

御輿ごよを射奉たてまつりし事を歎なげきしなり、今の世も又いちぶん一分もたがふべから

ず日蓮を賤み諸僧を貴び給う故に自然に法華經の強敵となり給う

事を并へず、政道に背きて行はるる間・梵釈・日月・四天・

竜王等の大怨敵となり給う、法華經守護の釈迦・多宝・十方

分身の諸仏・地涌千界・迹化他方・二聖・二天・十羅刹女・

鬼子母神・他国の賢王の身に入り代りて国主を罰し国をほろぼさ

んとするを知らず、真の天のせめにてだにも・あるならばたとひ

鉄圀山を日本国に引回し須弥山を蓋として十方世界の四天王

を集めて波際に立て並べてふせがするとも法華經の敵となり

教主釈尊より大事なる行者を法華經の第五の巻を以て日蓮が

頭を打ち十卷共に引き散して散散にふみたりし大禍は現当二世

にのがれがたくこそ候はんずらめ日本守護の天照太神・正八幡

等もいかでかかかる国をばたすけ給うべきいそぎいそぎ治罰を加

みずからのとが

えて自

科を脱がれんとこそはげみ給うらめをそく科に行う間

たま

とが

にほんこく

・ 日本国の諸神ども四天大王にいましめられてやあるらん知り

がた

だいしいう

ひそかおもんればほさつ

ほけきよう

難き事なり教大師云く「竊に以れば菩薩は国の宝なること法華經

の だいじよう

まかえん

みてん

ひちなん

だいじようきよう

に載せ大乘の利他は摩訶衍の説なり弥天の七難は大乘經に

あら

もつ

せ

たいさい

ほさつ

あら

非ずんば何を以てか除くことを為ん、未然の大災は菩薩僧に非ず

あに

しか

だいもうこくく

じようぶく

んば豈冥滅することを得んや」等云云、而るを今大蒙古国を調伏

する公家・武家の日記を見るに・或は五大尊・或は七仏薬師・或

くげ

ぶけ

につき

ある

ある

やくし

ある

は仏眼・或は金輪等云云、此れ等の小法は大災を消すべしや

ぶつげん

ある

こ

たいさい

還著於本人と成りて国忽に亡びなんとす、或は日吉の社にして

げんちやくおほんにん

たちまち

ある

ひよし

法華の護摩を行うといへども不空三蔵があやまれる法を本として

ほつけ

まも

ふくうさんぞう

行う間祈☆の儀にあらず、又今の高僧等は・或は東寺の真言・或

きとう

☆

こうそう

ある

とうじ

ある

は天台の真言なり東寺は弘法大師・天台は慈覚・智証なり、此の

てんだい

しんごん

とうじ

こうほうだいし

てんだい

じかく

ちしよう

三人は上に申すが如く大謗法の人人なり、其れより已外の諸僧等
は・或は東大寺の戒壇のある小乗の者なり、叡山の円頓戒は又慈覺
の謗法に曲げられぬ彼の円頓戒も迹門の大戒なれば今の時の機
にあらずかたがたかな旁叶うべき事にはあらず、只今国土やぶれなん後悔さ
きにたたじ不便不便と語り給いしを千万が一を書き付けて参らせ
候。

但し身も下賤に生れ心も愚に候へば此の事は道理かとは承わ
り候へども国主も御用いなきかの故に鎌倉にては如何が候けん
不審に覚え候、返す返すも愚意に存じ候はこれ程の国の大事を
ば・いかに御尋ねもなくして兩度の御勘気には行はれけるやらん
と聞食しほどこせ給はぬ人人の・或は道理とも・或は僻事とも
仰せあるべき事とは覚え候はず、又此の身に阿弥陀経を読み候は

ぬも併しかしながら御ふ為父母ための為ためにて候、只理ただりふじん不尽じんに読よむべき由よしを仰おほせを
蒙こゝむり候はば其そのときの時重かさねて申もうすべく候、いかにも聞きこしめ食くさずしてうし
ろの推すい義ぎをなさん人ひと人の仰おほせをばたとひ身したは随したがう様に候えども心
は一向いっこうに用もちいまいらせ候まじ、又恐おそれにて候へども兼かねてつみし
らせまいらせ候、此この御房ごぼうは唯ただ一人おはします若もしやの御事おんことの
候そうらはん時は御後悔ごうかいや候はんずらん世間せけんの人ひと人の用もちいねばとは一旦いったん
のをろかの事かみなり上かみの御用ごようあらん時は誰人だれひとか用もちいざるべきや、
其そのときの時は又用もちいたりとも何かせん人を信じて法を信ぜず、又世間せけん
の人ひと人の思ひといて候は親には子は是ぜ非ひに随したがうべしと君臣くんしん・師弟していも
此かくの如ごとしと此これ等は外典げてんをも弁わえきず内典ないてんをも知らぬ人ひと人の邪推
なり外典げてんの孝經こうきやうには子父・臣君あらし諍あらそうべき段もあり、内典ないてんには恩
を棄すて無為むゐに入るは真実しんじつに恩を報ずる者なりと仏定たまいめ給たまいぬ、

悉達太子は閻浮第一の孝子なり父の王の命を背きてこそ父母をば
引導し給いしか、比干が親父紂王を諫曉して胸をほられてこそ
賢人の名をば流せしか、賤み給うとも小法師が諫曉を用ひ給は
ずば現当の御歎きなるべし、此れは親の為に読みまいらせ候はぬ
阿弥陀經にて候へば、いかにも當時は叶うべしとはおぼへ候は
ず、恐恐申し上げ候。

建治三年六月日 僧 日永

下山兵庫五郎殿御返事

◆五〇 本尊問答抄 弘安元年九月 五十七歳御作 与浄顕房

日仲 365p

問うて云く末代悪世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや、答
えて云く法華經の題目を以て本尊とすべし、問うて云く何れの

きようもんいずれ

經文何れの人師の釈にか出でたるや、答う法華經の第四法師品

に云く「藥王在在處處に若しは説き若しは読み若しは誦し若しは

書き若しは經卷所住の處には皆応に七宝の塔を起てて極めて

高広嚴飾なら令むべし復舍利を安んずることを須いじ所以は何ん

此の中には已に如来の全身有す」等云云、涅槃經の第四如来性品

に云く「復次に迦葉諸仏の師とする所は所謂法なり是の故に如来

恭敬供養す法常なるを以ての故に諸仏も亦常なり」云云、

天台大師の法華三昧に云く「道場の中に於て好き高座を敷き

法華經一部を安置し亦必ずしも形像舍利並びに余の經典を安く

べからず唯法華經一部を置け」等云云。

疑つて云く天台大師の摩訶止觀の第二の四種三昧の御本尊は

阿弥陀仏なり、不空三蔵の法華經の觀智の儀軌は釈迦・多宝を

もつほけきようほんぞん
以て法華經の本尊とせり、汝何ぞ此等の義に相違するや、答え
て云く是れ私の義にあらず上に出だすところの經文並びに
天台大師の御釈なり、但し摩訶止觀の四種三昧の本尊は阿弥陀仏
とは彼は常坐・常行・非行・非坐の三種の本尊は阿弥陀仏な
り、文殊問經・般若三昧經・請觀音經等による、是れ爾前の
諸經の内・未顕眞実の經なり、半行半坐三昧には二あり、一に
は方等經の七仏・八菩薩等を本尊とす彼の經による、二には
法華經の釈迦・多宝等を引き奉れども法華三昧を以て案ずるに
法華經を本尊とすべし、不空三蔵の法華儀軌は宝塔品の文によれ
り、此れは法華經の教主を本尊とす法華經の正意にはあらず、
上に挙ぐる所の本尊は釈迦・多宝・十方の諸仏の御本尊法華經
の行者の正意なり。

問うて云く日本国に十宗あり所謂俱舍・成実・律・法相・

三論・華嚴・真言・浄土・禪・法華宗なり、此の宗は皆本尊ま

まちなり所謂俱舍・成実・律の三宗は劣応身の小釈迦なり、

法相・三論の二宗は大釈迦仏を本尊とす華嚴宗は台上のるさな

報身の釈迦如来、真言宗は大日如来、浄土宗は阿弥陀仏、禪宗

にも釈迦を用いたり、何ぞ天台宗に独り法華經を本尊とするや、

答う彼等は仏を本尊とするに是は經を本尊とす其の義あるべし、

問う其の義如何仏と經といづれか勝れたるや、答えて云く本尊と

は勝れたるを用うべし、例せば儒家には三皇・五帝を用いて本尊

とするが如く仏家にも又釈迦を以て本尊とすべし。

問うて云く然らば汝云何ぞ釈迦を以て本尊とせずして法華經

の題目を本尊とするや、答う上に挙ぐるところの經釈を見給へ

私の義にはあらず 釈尊しゃくそんと天台てんだいとは法華經ほけきょうを本尊ほんそんと定め給へり、
末代まつだい今の日蓮にちれんも仏ぶつと天台てんだいとの如ごとく法華經ほけきょうを以もつて本尊ほんそんとするなり、
其そのの故ゆえは法華經ほけきょうは釈尊しゃくそんの父母ふぼ・諸仏しよぶつの眼目がんもくなり 釈迦大日しゃかだい・總ちゆうじ
て十方じゆつぱうの諸仏しよぶつは法華經ほけきょうより 出生しゆつしやうし 給たまへり故ゆえに今能生のうしやうを以もつて
本尊ほんそんとするなり、問しやうこう其証いかん拠如何、答ふげんう普賢經いわに云く「此の
大乘經典だいじやうきやうてんは諸仏しよぶつの宝蔵ほうぞうなり 十方三世じゆつぱうさんぜの諸仏しよぶつの眼目がんもくなり 三世さんぜの
諸もろの如來にやらいを 出生しゆつしやうする種しゆつしやうなり」等云云、又云く「此の方等經ほうとうは
是れ諸仏しよぶつの眼まなこなり 諸仏しよぶつは是に因よつて五眼ごがんを具ぐすることを得たま
えり 仏の三種さんしゆの身みは方等ほうとうより生こず 是れ大法印ほうだいいんにして涅槃海ねはんを印しるす
此こくの如ごとき海中かいちゆうより能よく三種さんしゆの仏ぶつの清淨しやうじやうの身みを生なず 此の三種
の身みは人天にんてんの福田ふくでん・応供おうぐの中の最もとなり」等云云、此等これらの經文きやうもん 仏は
所生しよしやう 法華經ほけきょうは能生のうしやう 仏は身みなり 法華經ほけきょうは神たましいなり、然しかれば則すなわち木像

・画像の開眼かいげん供養くようは唯ただ法華經ほけきようにかざるべししか而しかるに今木画もくえの二像を
まうけて大日だいにち仏眼ぶつげんの印しんこんと真言もんとを以もつて開眼供養かいげんくようをなすはもとも逆
なり。

問いわうて云ほけきようく法華經ほんぞんを本尊だいにちによらいとすると大日如来ほんぞんを本尊ほんぞんとするといづ
れか勝まさるや、答こうぼうう弘法大師じかく・慈覚大師ちしよう・智証大師おんぎの御義ごの如ごとくな
らば大日如来だいにちによらいはすぐれ法華經ほけきようは劣るなり、問そう其いかんの義如何、答こうぼうう
弘法大師ひそうの秘藏宝鑰ほうやくじゅうじゅう 十住じゅう 心に云いわく「第八法華ほつけ・第九華嚴けこん・第十
大日經だいにちきよう」等云云是は浅きより深きに入る、慈覚大師じかくの金剛頂經こんこうちようきよう
の疏じよ・蘇悉地經そしつちきようの疏じよ・智証大師ちしようの大日經だいにちきようの旨歸しき等に云いわく
「大日經第一・法華經第二」等云云、問なんじう汝が意如何、答いかんう
釈迦如来しやかによらい・多宝仏たほうぶつ・總じて十方じゅつぽうの諸仏しよぶつの御評定ごひようじように云いわく已今当いこんとうの
一切經いっさいきようの中に法華最為第一ほつけなり云云、問いう今・日本国中の天台てんだい

・真言等の諸僧並びに王臣万民疑つて云く日蓮法師めは弘法・
慈覚・智証大師等に勝るべきか如何、答う日蓮反詰して云く弘法
・慈覚・智証大師等は釈迦・多宝・十方の諸仏に勝るべきか是
一、今日の日本の国王より民までも教主釈尊の御子なり釈尊の最後
の御遺言に云く「法に依つて人に依らざれ」等云云、法華最第一
と申すは法に依るなり、然るに三大師等に勝るべしやとの給ふ
諸僧・王臣・万民乃至所従牛馬等にいたるまで不孝の子にあらず
や是二、問う弘法大師は法華經を見給はずや、答う弘法大師も
一切經を読み給へり、其の中に法華經・華嚴經・大日經の淺深
・勝劣を読み給うに法華經を讀給う様に云く文殊師利・此の
法華經は諸仏如来秘密の蔵なり諸經の中に於て最も其の下に在
り、又讀み給う様に云く藥王今汝に告ぐ我が所説の諸經あり

而も此の經の中に於て法華最第三云云、又慈覺・智証大師の讀み給う様に云く諸經の中に於て最も其の中に在り又最為第二等云云、釈迦如来・多宝仏・大日如来・一切の諸仏・法華經を一切經に相對して説いての給はく法華最第一、又説いて云く法華最も其の上に在り云云、所詮釈迦十方の諸仏と慈覺・弘法等の三大師といづれを本とすべきや、但し事を日蓮によせて釈迦十方の諸仏には永く背きて三大師を本とすべきか如何。

問う弘法大師は讃岐の国の人勤操僧正の弟子なり、三論・法相の六宗を極む、去る延暦二十三年五月桓武天皇の勅宣を帯びて漢土に入り順宗皇帝の勅に依りて青竜寺に入りて慧果和尚に真言の大法を相承し給へり慧果和尚は大日如来よりは七代になり給う人はかはれども法門はをなじ譬えば瓶の水を猶瓶に

うつすがごとし、大日如来と金剛薩☆・竜猛・竜智・金剛智・
不空・慧果・弘法との瓶は異なれども所伝の智水は同じ真言なり
此の大師・彼の真言を習いて三千の波濤をわたりて日本国に付き
給うに平城・嵯峨・淳和の三帝にさづけ奉る、去る弘仁十四年正
月十九日に東寺を建立すべき勅を給いて真言の秘法を弘通し
給う然らば五畿・七道・六十六箇国・二の島にいたるまでも鈴を
とり杵をにぎる人たれかこの末流にあらざるや。

又慈覚大師は下野の国の人・広智菩薩の弟子なり、大同三年御
歳十五にして伝教大師の御弟子となりて叡山に登りて十五年の
間六宗を習い法華・真言の二宗を習い伝え承和五年御入唐・
漢土の会昌天子の御宇なり、法全・元政・義真・法月・宗叡・
志遠等の天台・真言の碩学に値い奉りて顕密の二道を習い極め

給う、其の上殊に真言の秘教は十年の間功を尽し給う大日如来よりは九代なり嘉祥元年仁明天皇の御師なり、仁寿・斉衡に金剛頂経・蘇悉地経の二経の疏を造り叡山に総持院を建立して第三の座主となり給う天台の真言これよりはじまる。

又智証大師は讃岐の国の人天長四年御年十四・叡山に登り義真和尚の御弟子となり給う、日本国にては義真・慈覚・円澄・別当等の諸徳に八宗を習い伝え去る仁寿元年に文徳天皇の勅を給いて漢土に入り宣宗皇帝の大中年中に法全良☆和尚等の諸大師に七年の間顕密の二教習い極め給いて去る天安二年に御帰朝・文徳・清和等の皇帝の御師なり、何れも現の為当の為月の如く日の如く代代の明主・時時の臣民・信仰余り有り帰依怠り無し故に愚癡の一切偏に信ずるばかりなり誠に法に依つて人に依らざ

れの金言きんげんを背そむかざるの外いかには争あらそいか仏ぶつによらずして弘法等こうぼうの人による

べきや、所詮しよせん其の心如何いかに、答こたう夫れ教主きようしゆしやくそん釈尊しやくそんの御入滅にゆうめつ一千年

の間月氏がつしに仏法の弘通くつうせし次第しだいは先五百年は小乗しょうじやう後の五百年は

だいじやう

大乘だいじやう・小大こだい・権実こんじつの諍あらそいはありしかども顕密けんみつの定めはかすかな

そうほう

りき、像法ぞうほうに入りて十五年と申せしに漢土かんどに仏法渡る始はつじは儒道じゆどうと

しやつきやう

釈教しやくきやうと諍論じやうろんして定めがたかりきされども仏法ぶつほうやうやく弘通くつうせ

しかば小大こだい・権実こんじつの諍論じやうろんいできたる、されどもいたくの相違さういも

なかりしに、漢土かんどに仏法渡りて六百年・玄宗皇帝げんそうこうていの御宇ぎやう・善無畏ぜんむゐ

・金剛智こんこうち・不空ふくうの三三蔵さんそう・月氏がつしより入り給たまひいて後真言宗しんこんしやうを立て

しかば、華嚴けこん・法華等ほっけの諸宗しよしゆは以ての外もつにくだされき上一人かみいちにん

自り下万民ばんみんに至るまで真言しんこんには法華經ほけきやうは雲泥うんでいなりと思ひしなり、

そ

其の後・徳宗皇帝とくそうこうていの御宇ぎやうに妙樂大師みやうらくだいしと申す人真言しんこんは法華經ほけきやうにあ

ながちに・をとりたりとおぼしめししかども、いたく立てる事も
なかりしかば法華・真言の勝劣を弁える人なし。

日本国は人王三十代欽明の御時・百済国より仏法始めて渡りた

りしかども始は神と仏との諍論こわくして三十余年はすぎにき、

三十四代推古天皇の御宇に聖徳太子始めて仏法を弘通し給う慧観

観勒の二の上人百済国よりわたりて三論宗を弘め、孝徳の御宇

に道昭・禪宗をわたす文武の御宇に新羅国の智鳳・法相宗をわ

たす第四十四代元正天皇の御宇に善無畏三蔵・大日経をわたす

然而弘まらず、聖武の御宇に審祥大徳・朗弁僧正等・華嚴宗を

わたす人王四十六代孝謙天皇の御宇に唐代の鑒真和尚・律宗と

法華経をわたす律をばひろめ法華をば弘めず、第五十代桓武天皇

の御宇に延暦二十三年七月伝教大師勅宣を給いて漢土に渡り

妙樂大師の御弟子・道邃・行滿に値い奉りて法華宗の定慧を伝

え道宣律師に菩薩戒を伝え順 曉和尚と申せし人に真言の秘教を

習い伝えて日本国に帰り給いて、真言・法華の勝劣は漢土の師

のおしへに依りては定め難しと思食しければ・ここにして

大日經と法華經と彼の釈と此の釈とを引き並べて勝劣を判じ

給いしに大日經は法華經に劣りたるのみならず大日經の疏は

天台の心をとりにて我が宗に入れたりけりと勘え給へり。

其の後弘法大師・真言經を下されける事を遺恨とや思食しけむ

真言宗を立てんとたばかりて法華經は大日經に劣るのみならず

華嚴經に劣れりと云云、あはれ慈覺・智証・叡山・園城にこの

義をゆるさずば弘法大師の僻見は日本国にひろまらざらまし、

彼の兩大師・華嚴・法華の勝劣をばゆるさねど法華・真言の

しょうれつ

勝劣をば永く弘法大師に同心せしかば存外に本の伝教大師の大

おんてき

怨敵となる、其の後日本国の諸碩徳等各智慧高く有るなれども彼

だいし

の三大師にこえざれば今四百余年の間・日本一同に真言は法華經

すぐ

に勝れけりと定め畢んぬ・たまたま天台宗を習へる人人も真言

ほっけ およ

は法華に及ばざるの由存ぜども天台の座主・御室等の高貴におそ

もう

れて申す事なし・あるは又其の義をもわきまへぬかのゆへにから

くして同の義をいへば一向・真言師はさる事おもひもよらずとわ

らふなり。

然らば日本国中に数十万の寺社あり皆真言宗なりたまたま

法華宗を並ぶとも真言は主の如く法華は所従の如くなり若しく

は兼学の人も心中は一同に真言なり、座主長吏・検校・別当・

いっこう

一向に真言たるうへ上に好むところ下皆したがふ事なれば一人も

しんこん

一向に真言たるうへ上に好むところ下皆したがふ事なれば一人も

しんこん

一向に真言たるうへ上に好むところ下皆したがふ事なれば一人も

もれず真言師なり、されば日本国・或は口には法華經最第一とは

よめども心は最第二・最第三なり・或は身口意共に最第二三な

り、三業相応して最第一と読める法華經の行者は四百余年が間

・一人もなしまして能持此經の行者はあるべしともおぼへず、

如来現在・猶多怨嫉・況滅度後の衆生は上一人より下万民にい

たるまで法華經の大怨敵なり。

然るに日蓮は東海道十五箇国の内第十二に相当る安房の国長狭

の郡・東条の郷・片海の海人が子なり、生年十二同じき郷の内

・清澄寺と申す山にまかり登り住しき、遠国なるうへ寺とはなづ

けて候へども修学の人なし然而随分諸国を修行して学問し候い

しほどに我が身は不肖なり人はおしへず十宗の元起勝劣たやす

くわきまへがたきところに、たまたま仏・菩薩に祈請して一切の

きょうろん

かんがえ

ぐしやしゅう

いちぶん

経論を勘て十宗に合せたるに俱舎宗は浅近なれども一分は

しょうじょうきょう

小乗経

に相当するに似たり、

成実宗は

大小兼雜して

謬☆あ

りつしゅう

り律宗は本は

小乗・中比は

しやうじやう

小乗・中比は

權大乘・今は

一向に

大乘宗とお

もへり又伝

教大師の

律宗あり別

に習う事なり、

でんぎやうだいし

教大師の

律宗あり別

に習う事なり、

法相宗は源

ごんだいじやうきやう

ごんだいじやう

ごんだいじやう

ごんだいじやう

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

ごんじつ

正像しょうぞうの機きをば上げ末法まつぽうの機きをば下くだして末法まつぽうの機きに相叶あひあえる念仏ねんぶつ
を取り出して機きを以もつて経きやうを打ち一代いちだいの聖教しょうきやうを失うしないて念仏ねんぶつの一門いちもん
を立てたり譬たとえば心こころかしくくして身みは卑いやしき者が身みを上げて心こころは
かなきものを敬けんじんいて賢人けんじんをうしなふがごとし、禪宗ぜんしゆうと申もうすは
一代いちだい聖教しょうきやうの外ほかに真実しんじつの法ぽう有ありと云云たと譬たとえばをやを殺ころして子こを
用もちい主しゅを殺ころせる所従しよじゆうのしかも其その位ゐにつけるがごとし、真言宗しんこんしゆう
と申もうすは一向いっこうに大妄語もうごにて候さうが深く其その根源こんげんをかくして候さうへば
浅機あさきの人ひとあらはしがたし一向いっこうに誑惑おおわくせられて数年へを経て候さう先さきず
天竺てんじくに真言宗しんこんしゆうと申もうす宗しゆなし然しかれども有ありと云云たと、其その証拠しょうこを
尋たずぬ可べきなり所詮しよせん大日經だいにくにちきやうここにわたれり法華經ほけきやうに引き向むかけて
其その勝劣しようれつを見候み處ところに大日經だいにくにちきやうは法華經ほけきやうより七重下劣しちじゆうげれつの經きやうなり
証拠しょうこ彼の經きやう・此この經きやうに分ぶん明めいなり此こに之これを引ひかずしかるを・或あるは云いく

ほけきよう 法華經に三重の主君・或は二重の主君なりと云云以ての外の大
びやつけん 僻見なり、譬えば劉聡が下劣の身として愍帝に馬の口をとらせ
よこしま 超高が民の身として横に帝位につきしがごとし又彼の天竺の大慢
ばらもん 婆羅門が釈尊を床として坐せしがごとし漢土にも知る人なく
にほん 日本にもあやしめずして・すでに四百余年をおくれり。

かく 是くの如く仏法の邪正乱れしかば王法も漸く尽きぬ結句は此の
たこく 国・他国にやぶられて亡国となるべきなり、此の事日蓮独り勘え
ゆえ 知れる故に仏法のため王法のため諸経の要文を集めて一卷の書
よ 造る仍つて故最明寺入道殿に奉る立正安国論と名けき、其の
もう 書にくはしく申したれども愚人は知り難し、所詮現証を引いて
もう 申すべし抑 人王八十二代隱岐の法王と申す王 有 き去ぬる
じょうきゅう 承久三年太歳辛巳五月十五日伊賀太郎判官光末を打捕まします

鎌倉かまくらの義時よしときをうち給たまはむとての門出かどでなり、やがて五畿ごき・七道しちどうの
つわもの

兵を召よして相州そうしゅう鎌倉かまくらの権けんの太夫よしとき義時よしときを打ち給たまはんとし給たまうと

ころに還かえりて義時よしときにまけ給たまいぬ、結句けっく我が身みは隠岐おきの国くににながさ

れ太子たいし二人ふたりは佐渡さどの国くに・阿波あわの国くににながされ給たまう公卿くぎよう七人ななは忽たちまちに

頸くびをはねられてき、これは・いかにとしてまけ給たまいけるぞ国王こくおうの

身みとして民たみの如ごとくなる義時よしときを打ち給たまはんは鷹たかの雉きじをとり猫ねずみの鼠ねずみ

を食はむにてこそあるべけれこれは猫ねずみのねずみにくらはれ鷹たかの雉きじに

とられたるやうなり、しかのみならず調じようぶく伏力ふつりきを尽つくせり所謂いわゆる天台てんたい

の座主ざす・慈円じえん僧正そうじよう・真言しんごんの長者ちようじゃ・仁和寺にんなの御室おむろ・園城寺おんじようじの長吏ちようり

・総ななだいじじて七大寺ななだいじ・十五大寺じふごだいじ・智慧ちえ戒行かいぎようは日月にちがつの如ごとく、秘法ひほうは

弘法こうほう・慈覚じかく等の三大師だいしの心中しんちゆうの深密じんみつの大法だいほう・十五壇じふごだんの秘法ひほうなり、

五月十九日ごがつじゅうくにちより六月ろくがつの十四日じふしちにちにいたるまであせをながしなづきを

くだきて行いき最後には御室・紫宸殿にして日本国にわたりてい
まだ三度までも行はぬ大法・六月八日始めて之を行う程に・同じ
き十四日に関東の兵軍・宇治勢多をおしわたして洛陽に打ち入り
て三院を生け取り奉りて九重に火を放ちて一時に焼失す、三院
をば三国へ流罪し奉りぬ又公卿七人は忽に頸をきる、しかのみな
らず御室の御所に押し入りて最愛の弟子の小児勢多伽と申せしを
せめいだして終に頸をきりにき御室思いに堪えずして死に給い
畢んぬ母も死す童も死す、すべて此のいのりをたのみし人いく
千万といふ事をしらず死にきたまたまいきたるもかひなし、御室
祈りを始め給いし六月八日より同じき十四日までなかをかぞふれ
ば七日に満じける日なり、此の十五壇の法と申すは一字金輪・
四天王・不動大威徳・転法輪・如意輪・愛染王・仏眼六字・金剛

童子・尊星王・太元守護経等の大法なり此の法の詮は国敵王敵と
なる者を降伏こうふくして命を召し取りて其の魂を密厳浄土へつかはすと
云う法なり、其の行者の人人も又輕からず天台の座主・慈円
東寺御室三井の常住院の僧正等の四十一人並びに伴僧等三百
余人なり云云、法と云ひ行者と云ひ又代も上代なりいかにとし
てまけ給たまいけるぞたとひかつ事こそなくとも即時にまけおはりて
・かかるはぢにあひたりける事、いかなるゆへといふ事を余人い
まだしらず、国主として民を討たん事・鷹の鳥をとらんがごとし
・たとひまけ給たまうとも一年・二年十年二十年もささうべきぞかし
五月十五日におこりて六月十四日にまけ給たまいぬわづかに三十余日
なり、権の大夫殿は此の事を兼てしらねば祈☆もなしかまへもな
し。

然しかるに而に日蓮小智を以て勘もえたるに其そのの故あり所謂いわゆる彼の真言しんごんの邪法じゃほう

の故なり僻事ひがごとは一人なれども万国のわづらひなり一人として行ず

とも一國・二國やぶれぬべし況いはんやや三百余人をや国主こくしゅとともに

法華經の大怨敵となりぬいかでかほろびざらん、かかる大惡法だいあくほうと

しをへてやうやく関東かんとくにおち下りて諸堂しよどうの別当べつどう供僧くそうとなり連連と

行えり本より辺域へんいきの武士ぶしなれば教法きようほうの邪正じゃせいをば知らずただ三宝さんぼう

をばあがむべき事とばかり思ふゆへに自然じねんとしてこれを用もちいきた

りてやうやく年数を経る程に今他國たこくのせめをかうふりて此の國す

でにほろびなんとす、関東八箇國かんとくのみならず叡山えいざん・東寺とうじ・園城おんじよう

・七寺等の座主ざす・別当べつどう・皆関東みなかんとくの御はからひとなりぬるゆへに

隱岐おきの法皇ほうこうのごとく大惡法の檀那だんなと成定まり給たまいぬるなり、国主こくしゅ

となる事は大小皆・梵王ぼんのう・帝釈たいしやく・日月にちがつ・四天してんの御計おんはからいなり、

法華經の怨敵となり定まり給はば忽に治罰すべきよしを誓い給へ
り、随つて人王八十一代安徳天皇に太政入道の一門与力して
兵衛佐頼朝を調伏せんがために、叡山を氏寺と定め山王を氏神
とたのみしかども安徳は西海に沈み明雲は義仲に殺さる一門・皆
一時にほろび畢んぬ、第二度なり今度は第三度にあたるなり。
日蓮がいさめを御用いなくて真言の悪法を以て大蒙古を調伏せ
られれば日本国還つて調伏せられなむ還著於本人と説けりと申す
なり、然らば則ち罰を以て利生を思うに法華經にすぎたる仏にな
る大道はなかるべきなり現世の祈☆は兵衛佐殿・法華經を讀誦
する現証なり。

此の道理を存ぜる事は父母と師匠との御恩なれば父母は・すで
に過去し給い畢んぬ、故道善御房は師匠にて・おはしまししかど

も法華經ほけきょうの故ゆえに地頭じとうにおそれ給たまいて心中しんちゅうには不便ふびんとおぼしつら
めども外ぐわいにはかたきのやうにくみ給たまいぬ、後ごにはすこし信しんじ
給たまいたるやうにきこへしかども臨終りんじゅうにはいかにやおはしけむお
ぼつかなし地獄じごくまではよもおはせじ又生死しやうじをはなる事はあるべ
しともおぼへず中有ちゅううにやただよひましますらむとなげかし、貴辺きへん
は地頭じとうのいかりし時・義城房ぎじょうぼうとともに清澄寺きよすみでらを出いでておはせし人
なれば何となくともこれを法華經ほけきょうの御奉公ごほうこうとおぼしめして生死しやうじを
はなれさせ給たまうべし。

此この御本尊ごほんぞんは世尊せそん説ときおかせ給たまいて後二千二百三十余年が間・
一閻浮提えんぶだいの内うちにいまだひろめたる人候にんこうはず、漢土かんとの天台日本てんだいにほんの
伝教でんぎょうほほしろしめしていささかひろめさせ給たまはず当時とうじこそひろ
まらせ給たまうべき時にあたりて候へ経には上行じやうぎやう・無辺行等むへんぎやうこそ

出でてひろめさせ給うべしと見へて候へどもいまだ見へさせ給は
ず、日蓮にちれんは其その人に候はねどもほぼこころえて候へば地涌じゆの菩薩ぼさつ
の出でさせ給うまでの口ずさみにあらあら申して況滅度後のほこ
さきに当り候なり、願わくは此の功德を以て父母と師匠と一切
衆生に回向し奉らんと祈請仕り候、其の旨をしらせまいらせむ
がために御不審を書きおくりまいらせ候に他事をすてて此の
御本尊の御前にして一向に後世をもいのらせ給い候へ、又これよ
り申さんと存じ候、いかにも御房たちはからい申させ給へ。

日蓮 花押

◆五一 諸宗問答抄 建長七年 三十四歳御作与三位房

日行 375p

問うて云く抑法華宗の法門は天台・妙楽・伝教等の御釈を

ば御用もちい候いや如何いかん、答こたて云いく最も此の御釈共めいきようを明鏡めいきようの助証とし
て立たて申もうす法門ほうもんにて候い、問いて云いく何を明鏡めいきようとして立たてられ候ぞ
や彼の御釈共にぜんこんきようには爾前えら権教えらを簡かんび捨すてらる事候ことはず、随したがつて初
後ぶつて仏ぶつ慧えん・円頓えんどん・或あるは・義齊ぎさいとも・或あるは此妙彼妙しみようひみよう・妙義殊ことなること
無なしとも釈しゃくせられて華嚴けこんと法華ほつけとの仏慧ぶつて同じぶつて仏慧ぶつてにて異なること
無なしと釈しゃくせられ候い、通教つうきよう・別教べつきようの仏慧ぶつても法華ほつけと同じと見えて候
何を以もつて偏ひとえに法華ほつけすぐれたりとは仰おほせられ候いや意得こころうず候い如何いかん、答こたて
云いく天台てんだいの御釈いを引ひかれ候いは定てんて天台宗だいいしゆうにて御坐おわし候いらん、然しかる
に天台てんだいの御釈いには教道そくきようそう・証道ほうもんとて二筋ふたぢを以もつて六十卷そくくないしよくを造つくられて
候い、教道そくきようそうは即教相ほうもんの法門ほうもんにて候い証道そくきようそうは即内証そくくないしよくの悟いの方いにて候い、
只今ただ引ひれ候い釈しゃくの文共ふんどうは教証にどうの二道にどうの中には何れいの文いと御得意い候いて
引ひかれ候いぞや、若もし教門きようもんの御釈いにて候いわば教相きようそうには三種きようそうの教相きようそう

を立て爾前・法華を釈して勝劣を判ぜられ候、先づ三種の教相
と申すは何にて候ぞやと之を尋ぬ可し、若し三種の教相と申す
は一には根性の融不融の相・二には化導の始終不始終の相・三
には師弟の遠近不遠近の相なりと答へばさては只今引かれ候・御
釈は何れの教相の下にて引かれ候やと尋ぬ可きなり、若し根性
の融不融の下にて釈せらるゝと答へば又押し返して問う可し根性
の融不融の下には約教・約部とて二の法門あり何れぞと尋ぬ
可し、若し約教の下と答へば又問う可し約教・約部に付いて
与奪の二の釈候只今の釈は与の釈なるか奪の釈なるかと之を尋ぬ
可し、若し約教・約部をも与奪をも弁えずと云わばさてはさて
は天台宗の法門は堅固に無沙汰にて候けり、尤も天台法華の
法門は教相を以て諸仏の御本意を宣られたり若し教相に闇くし

て法華ほっけの法門ほうもんを云いん者は雖すい讚さん法華經ほけきやうげん還し死ほっけ法華心ほっけとして法華ほっけの心こころを殺ころ
すと云いう事ことにて候さう、其そのの上うへ「若もし余經よきやうを弘ひろむるに教相きやうそうを明あきらめ
ざるも義ぎに於おいて傷やぶること無なし若もし法華ほっけを弘ひろむるに教相きやうそうを明あかさざ
れば文義もんぎ闕かくること有あり」と釈しゃくせられて殊更ことさら教相きやうそうを本もととして
天台てんだいの法門ほうもんは建立こんりゆうせられ候さう、仰おほせられ候さう如ごとく次第しだいも無なく偏円へんえんを
も簡えらばず邪正じゃせいも選せんばず法門ほうもん申もうさん者をば信受しんじゆせざれと天台てんだい堅けんく誠まこと
しめられ候さうなり、是程これほどに知食しろうしめさず候さうけるに中々てんだい天台てんだいの御釈ごしゃくを引ひか
れ候事あさましきおんこと浅あ☆・き御事おんことなりと責せむ可べきなり、但ただし天台てんだいの教相きやうそうを三
種しゆに立てらるる中に根性こんじやうの融不融ゆうふゆうの相さうの下したにて相待妙さうたいみやう・
ぜつたいみやう
絶待妙ぜつたいみやうとして二妙ふつきやうを立て候さうたいみやう、相待妙さうたいみやうの下したにて又約教やつきやう・約部いちだいいの法門ほうもん
を釈しゃくして仏教ぶつぎやうの勝劣しょうれつを判はぜられて候さう、約教やつきやうの時ときは一いち代の教きやうを
蔵通そうつう・別円べつえんの四教しきやうに分わかつて之これに付ついて勝劣しょうれつを判はずる時は前ぜん三

為☆後・一為妙とは判ぜられて蔵通別の三教をば☆教と嫌ひ後の

一教をば妙法と選取せられ候へども此の時もなほ爾前權教の

当分の得道を許し且く華嚴等の仏慧と法華の仏慧とを等から

令めて只今の初後仏慧・円頓・義齊等の与の釈を作られ候なり、

然りと雖も約部の時は一代の教を五時に分つて五味に配し華嚴部

・阿含部・方等部・般若部・法華部と立てられ前四味為☆

後・一為妙と判じて奪の釈を作られ候なり、然れば奪の釈に云く

「細人☆人・二俱犯過・從過辺說俱名☆人」と、此釈の意は華嚴

部にも別円二教を説かれて候へば円の方は仏慧と云わるるなり、

方等部にも蔵通・別円の四教を説れたれば円の方は又仏慧なり

般若部にも通別円の後三教を説いて候へば其れも円の方は仏慧な

り、然りと雖も華嚴は別教と申すえ世物をつれて説れたる間わ

るき物つれたるぶつて仏ぶつて慧なりとてきら簡ほうとうぶわるるなり方等部の円もぜんさんきよう前三教のえせ物をつれたるぶつて仏ぶつて慧なりはんによぶ般若部の円も前二☆のえせ物をつれたるぶつて仏ぶつて慧なり、然しかる間ぶつて仏ぶつて慧の名は同おなじと雖も過の辺に従つて☆・と云われてゐるきえんきよう円教のぶつて仏ぶつて慧と下され候なり、之に依よつてて四教しきようにも真しんじつ実の勝劣しょうれつを判ずる時は一往いちおうは三蔵さんそうを名なずけしやうじようて小乗なと為しさいおう再往は三教を名なずけしやうじようて小乗なと為すしやくと釈しやくして一往いちおうの時は二百五十戒等の阿含三蔵教あこんさんそうの法門ほうもんを総じて小乗しやうじようの法きらと簡きらい捨しやうてらるれども、再往さいおうの釈しやくの時は三蔵教さんそうと大乘だいじようと云いいつる通教つうきようと別教べつきようとの三教みなしやうじよう皆小乗ほんしやくの法ほんちようと本朝ちしやうだいしの智証大師ほっけろんも法華論ほうけろんの記きと申もうす文を作つて判釈はんしやくせられて候なり。

次に絶待妙ぜったいみようと申もうすは開会かいえの法門ほうもんにて候なり、此の時は爾前にぜん権教こんきようとて嫌きらひ捨しやうらるる所の教を皆法華みなほつけの大海たいかいにおさめ入るるな

り、随したがつて法華の大海ほつけ たいかいに入りぬれば爾前にぜんの權教ごんきょうとて嫌きらわるる者
無きなり、皆法華の大海みなほつけ たいかいの不可思議ふかしぎの徳として南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう
と云いう一味いちみにたたきなしつる間・念仏ねんぶつ・戒しんごん・真言しんごん・禪べちとて別べち
名み言ごんを呼よび出いだす可べき道理どうり無きなり、随したがつて釈いに云いく「諸水入海しよすい
・同一鹹味かんみ・諸智入如実智しよち・失本名字みようじ」等と釈しやくして本の名字みようじを一
言よも呼よび顯べかす可べらずと釈しやくせられて候しやくなり、世間せけんの人天台宗てんだいしゆうは
開會かいえの後ごは相待妙そうたいみやうの時とき斥きい捨すてられし所ぜんしの前四味しよきやうの諸經しよきやうの
名み言ごんを唱となうるも又諸仏しよぶつ・諸菩薩しよぼさつの名み言ごんを唱となうるも皆是法華みなほつけの
妙體みやうたいにて有あるなり大海たいかいに入はいらざる程かくべつこそ各別かくべつの思しなりけれ大海たいかい
に入はいつて後ごに見みれば日來ひころよしわるしと嫌きらひ用もちひけるは大僻見びやくけんに
て有ありけり、嫌きらはるる諸流しよも用もちひらるる冷水みなもとも源みなもとはただ大海たいかいよ
り出いでたる一水いにて有ありけり、然しかれば何いずれの水みづと呼よびたりとてもた

だ大海たいかいの一水みづに於おいて別別みょうごんの名言なごんをよびたるにてこそあれ、各別かくべつの物ものと思おもうてよぶにこそ科とがはあれ只大海ただたいかいの一水みづと思おもうて何れいづれをも心こころに任まかせて有縁うゑんに従したがつて唱となえ持もつに苦くるしかる可べからずとて念仏ねんぶつをも真言しんごんをも何れいづれをも心こころに任まかせて持もち唱となうるなり。

今云いまう此この義ぎは与あえて云いう時ときはさも有ある可べきかと覺さとれども奪さつつて云いう時ときは随分ずいぶん墮だ地獄じごくの義ぎにて有あるなり、其そのの故ゆゑは縦たとひ一人ひとり此この如ごとく意得こころう何れいづれをも持もち唱となるとても万人ばんにん・此この心根こころねを得えざる時ときは只例ただの偏見へんけん・偏情へんじやうにて持もち唱となえれば一人ひとり成仏じやうぶつするとも万人ばんにんは皆みな地獄じごくに墮だす可べき邪見じゃけんの悪義あくぎなり、爾前にぜんに立たてる所ところの法門ほうもんの名言なごんと其そのの法門ほうもんの内うちに談だんずる所ところの道理どうりの所詮しよせんとは皆是みな・偏見へんけん・偏情へんじやうによりて入邪見稠林じゃけんちやうりん・若有若無等にやくうの權教ごんきやうなり、然しかれば此等これらの名言なごんを以もつて持もち唱となへ此等これらの所詮しよせんの理りを觀みずれば偏ひとえに心得こころえたるも心得こころえざ

るも皆大地獄に墮つべし、心得たりとて唱へ持ちたらん者は
牛蹄に大海を納めたる者の如し是僻見の者なり、何ぞ三惡道を
免がれん又心得ざる者の唱へ持たんは本迷惑の者なれば邪見
權教の執心によつて無間・大城に入らん事疑い無き者なり、
開会の後も☆教とて嫌い捨てし惡法をば名言をも其の所詮の
極理をも唱へ持つて交ゆべからずと見えて候弘決に云く「相待・
絶待俱に須く惡を離るべし円に著する尚惡なり況や復余をや」云
云、文の心は相待妙の時も絶待妙の時も俱に須く惡法をば離る
べし円に著する尚惡し況や復余の法をやと云う文なり、円と云う
は満足の義なり余と云うは闕減の義なり、円教の十界平等に
成仏する法をすら著したる方を惡ぞと嫌ふ、況や復十界平等
に成仏せざるの惡法の闕たるを以て執著をなして朝夕・受持

・読誦・解説・書写せんをや、設ひ爾前の円を今の法華に開会し
入るるとも爾前の円は法華の一味となる事無し、法華の体内に
開会し入れられても体内の権と云われて実とは云わざるなり、体
内の権を体外に取出して且く於一仏乗分別説三する時・権に
於て円の名を付て三乗の中の円教と云われたるなり、之に依り
て古へも金杖の譬を以て三乗にあてて沙汰する事あり、譬へ
ば金の杖を三に打をりて一づつ三乗の機根に与へて何れも皆金
なり然れば何ぞ同じ金に於て差別の思をなして勝劣を判ぜんや
と談合したり、此はうち聞く所はさもやと覚えたれ

ども悪く学者の得心たるなり、今云う此の義は譬へば法華の体内
の権の金杖を仏・三根にあてて体外に三度うちふり給へる其の
影を機根が見付ずして皆真実の思を成して己が見に任せたるな

り、其の眞実には金杖を打折て三になしたる事が有らばこそ今

たとえ

がつび

金杖を折らずして三度ふり

の譬は合譬とはならめ、仏は権の金杖を折らずして三度ふり

たま

きこん

三に成りたりと執著し得心たる返す返す不

こころえ

給へるを機根ありて三に成りたりと執著し得心たる返す返す不

こころえ

じゃけん

三度振りたるも法華の体内の権の

三度振りたるも法華の体内の権の

得心の大邪見なり大邪見なり、三度振りたるも法華の体内の権の

くどく

たいげ

三度振りたるにこそ有れ、全く

功徳を体外の三根に配して三度振りたるにこそ有れ、全く

功徳を体外の三根に配して三度振りたるにこそ有れ、全く

みようたい

ふしぎ

えんじつ

事無きなり、然れば体外の影の

然れば体外の影の

妙体不思議の円実を振りたる事無きなり、然れば体外の影の

さんじよう

えんじつ

ことな

然れば体外の影の

然れば体外の影の

三乗を体内の本の権の本体へ開会し入るれば本の体内の権と云

さんじよう

えんじつ

ことな

然れば体外の影の

然れば体外の影の

三乗を体内の本の権の本体へ開会し入るれば本の体内の権と云

三乗を体内の本の権の本体へ開会し入るれば本の体内の権と云

さんじよう

えんじつ

ことな

然れば体外の影の

然れば体外の影の

三乗を体内の本の権の本体へ開会し入るれば本の体内の権と云

三乗を体内の本の権の本体へ開会し入るれば本の体内の権と云

さんじよう

えんじつ

ことな

然れば体外の影の

然れば体外の影の

三乗を体内の本の権の本体へ開会し入るれば本の体内の権と云

権実の法門をば得意弁ふべき者なり。

さんじよう

えんじつ

ことな

然れば体外の影の

然れば体外の影の

三乗を体内の本の権の本体へ開会し入るれば本の体内の権と云

次に禪宗の法門は・或は教外別伝・不立文字と云ひ・或は

さんじよう

えんじつ

ことな

然れば体外の影の

然れば体外の影の

三乗を体内の本の権の本体へ開会し入るれば本の体内の権と云

次に禪宗の法門は・或は教外別伝・不立文字と云ひ・或は

さんじよう

えんじつ

ことな

然れば体外の影の

然れば体外の影の

三乗を体内の本の権の本体へ開会し入るれば本の体内の権と云

即身成仏とも云つて文字をも立てず仏祖にも依らず教法をも

修しゅう学がくせず画像・木像をも信用しんようせずと云うなり、反詰はんきつして云いわく
仏祖ぶつそふでん不伝ふでんにて候はば何なんぞ月氏がつしの二十八祖とうど東土とうどの六祖ろくそとて相伝そうでんせら
れ候や、其その上・迦葉かしょう尊者そんじやは何なんぞ一枝いちの花房はなふさを釈尊しゃくそんより授けら
れ微笑びしょうして心の一法いつぽうを靈山りやうぜんにして伝えたりとは自称しやうじゆするや、又
祖師そし無用むようならば何なんぞ達磨だるま大師だいしを本尊ほんそんとするや、又修多羅しゆたらの法無用むよう
ならば何なんぞ朝夕ちやうせきの所作しよさに真言しんこん陀羅尼だらにをよみつるぞや、首楞嚴經しゆりやうこんきやう
・金剛經こんかう・円覺經えんかく等を・或あるは談あるし・或あるは読誦どくじゆするや、又仏・菩薩ぼさつ
を信用しんようせずんば何なんぞ南無なむ三寶さんぼうと行住坐臥ぎやうじゆうざがに唱となうるやと責せむ可べきな
り、次に聞きき知らざる言ことを以もつて種種しゆじゆ申し狂くるはば云べう可べし、凡およそ機き
には上中下じやうちゆうげの三根さんこんあり随したがつて法門ほうもんも三根さんこんに与あへて説事せきじなり、
禪宗ぜんしゆの法門ほうもんにも理致りち・機関きかん・向上こうじやうとして三根さんこんに配あてて法門ほうもんを示しさ
れ候なり、御辺おのへは某それがしが機きをば三根さんこんの中には何いづれれと得意とちて聞知もんちせ

ざる法門ほうもんを仰おほせられ候ぞや、又理致りちの分か機関きかんの分か向上こうじょうの分
に候かと責せむ可べきなり、理致りちと云うは下根げこんに道理どうりを云いいきかせて
禪ぜんの法門ほうもんを知らする名目みょうもくなり、機関きかんとは中根ちゅうこんには何いかなるか本来
の面目めんもくと問へば庭前ていぜんの柏樹子はくじゅしなど答えたる様の言づかひをして
禪法ぜんぽうを示す様なり、向上こうじょうと云うは上根じょうこんの者の事なり此の機きは
祖師そしよりも伝えず仏よりも伝えず我として禪ぜんの法門ほうもんを悟さとる機きな
り、迦葉かし靈山りやうぜん微笑びしょうの花に依よつてて心の一法を得たりと云う時に是これ
尚中根なほちゅうこんの機きなり、所詮しよせん禪ぜんの法門ほうもんと云う事は迦葉かし一枝いちの花房はなふさを得し
より已来このかたしゅつたい出来ほうもんせる法門ほうもんなり、抑そもも伝えし時の花房はなふさは木の花か
草の花か五色いさいの中には何様いかようなる色の花ぞや又花の葉は何重の葉ぞ
や委細いさいに之これを尋たずぬ可べきなり、此の花をありのままに云い出したる
禪宗ぜんしゅう有らば実に心の一法をも一分いちぶん得たる者と知る可べきなり、

設たとひ得とたりとは存知しんじつすとも眞実ぶつゐの仏意かなには叶べう可いからず如何いかんとな
れば法華經ほけきようを信しんぜざるが故ゆゑなり、此この心こころは法華經ほけきようの方便品ほうべんの末長まへちやう
行ぎやうに委くわしく見えたり委くわしくは引ひて拝見はいけんし奉たてまつる可べきなり、次に禪ぜんの法門ほうもん
何なにとしても物ものに著じゃくする所ところを離はなれよと教しやくえたる法門ほうもんにて有あるなり、
さと云いへば其それも情じやうなりかうと云いうも其それも情じやうなりとあなた・こ
なたへ・すべりとどまらぬ法門ほうもんにて候まちなり、夫それを責せむ可べき様やうは
他人たにんの情じやうに著じゃくしたらん計ばかりをば沙汰さたして己おのが情量じやうりやうに著じゃくし封ふうぜらる
所ところをば知らざるなり、云いうべき様やうは御辺ごへんは人の情計じやうけいりをば責せむれ
ども御辺情ごへんじやうを情じやうと執しゆしたる情じやうをばなど離はなれ得えぬぞと反詰はんきつすべきな
り、凡およそ法ほうとして三世諸仏さんぜしよぶつの説ときのこしたる法ほうは無なきなり汝なんじ
仏祖ぶつそふでん不ふ伝でんと云いつて仏祖ぶつそよりも伝でんえずとならばさては禪法ぜんぽうは天魔てんま
の伝でんうる所の法門ほうもんなり如何いかん、然しかる間ま汝斷常なんじだんじやうの二見にけんを出いでず無間むげん

地獄に墮せん事疑無しと云つて何度もかれが云う言にてややもすれば己がつまる語なり、されども非学匠は理につまらずと云つて他人の道理をも自身の道理をも聞き知らざる間暗証の者とは云うなり、都て理におれざるなり譬えば行く水にかずかくが如し。

次に即身即仏とは即身即仏なる道理を立てよと責む可し其の道理を立てずして無理に唯即身即仏と云わば例の天魔の義なりと責む可し但即身即仏と云う名目を聞くに天台法華宗の即身成仏の名目つかひを盗み取て禅宗の家につかふと覚えたり、然れば法華に立つる様なる即身即仏なるか如何とせめよ、若し其の義無く押して名目をつかはばつかはるる語は無障礙の法なり譬えば民の身として国王と名乗ん者の如くなり如何に国王と云うとも言

には障り無し己が舌の和かなるままに云うとも其の身は即土民さわり おの やわらの卑いやしく嫌きらわれたる身なり、又瓦礫を玉と云う者の如ごとし石瓦を玉いと云いたりとも會かつて石は玉にならず、汝なんじが云う所の即身即仏そくしんそくの名みょうもく目めも此かくの如ごとく有名無実ゆうめいむじつなり不便ふびんなり不便ふびんなり。

次に不立文字と云う所詮文字と云う事は何なるものと得心こころえか此こく

の如ごとく立てられ候や、文字もんじは是一切衆生の心法の顯あらわれたる

質すがたなりされば人のかける物を以もつて其の人の心根を知しつて相そうする事

あり、凡およそ心と色法とは不二の法にて有ある間かきたる物を以もつて

其の人の貧福ひんぷくをも相するなり、然しかれば文字もんじは是一切衆生の

色心不二しきしんふにの質すがたなり汝なんじ若もし文字もんじを立てざれば汝なんじが色心しきしんをも立つ

可べからず汝なんじ六根なんじろくこんを離れて禪ぜんの法門ほうもん一句答いっくへよと責せむ可べきなり、

さてと云うもかうと云うも有と無との二見をば離れず無と云わば

無の見なりとせめよと有と云わば有の見なりとせめよ、何れも
いづれ
かな
何れも叶わざる事なり。

次に修多羅の教は月をさす指の如しと云うは月を見て後は

徒者と云う義なるか若其義にて候わば御辺の親も徒者と云う義

か又師匠は弟子の為に徒者か又大地は徒者か又天は徒者か、如何

となれば父母は御辺を出生するまでの用にてこそあれ御辺を

出生して後はなにかせん、人の師は物を習い取るまでこそ用な

れ習い取つて後は無用なり、夫れ天は雨露を下すまでこそあれ雨

ふりて後は天無用なり大地は草木を出生せんが為なり草木を

出生して後は大地無用なりと云わん者の如し、是を世俗の者の

譬に喉過ぬればあつさわすれ病愈えぬれば医師をわすると云う

らん譬に少も違わず相似たり、所詮修多羅と云うも文字なり

もんじ 文字は是れ三世諸仏の氣命なりと天台釈し給へり、天台は震旦・
ぜんしゅう 禪宗の祖師の中に入れたり、何ぞ祖師の言を嫌はん其の上・御
しきしん 辺の色心なり凡そ一切衆生の三世不斷の色心なり、何ぞ汝本来
めんもく の面目を捨て不立文字と云うや、是れ昔し移宅しけるに我が妻を
わためし 忘れたる者の如し、真実の禪法をば何としてか知るべき哀なる禪
ほうもん の法門かなと責む可し。

けこん 次に華嚴・法相・三論・俱舍・成実・律宗等の六宗の法門
ほうもん いかにか花をさかせても申しやすく返事すべき方は能いはせて後
なんと ・南都の歸伏状を唯読みきかす可きなり、既に六宗の祖師が
きふく 歸伏の状をかきて桓武天皇に奏し奉る、仍て彼歸伏状を山門に
おさ 納められぬ其外内裏にも記せられたり諸道の家にも記し留めて
このかた ・華嚴宗等の六宗の法門・末法の今に

いた
至るまで一度も頭をさし出さず何ぞ唯今・事新しく捨られたる所
の権教・無得道の法にをいて真実の思をなし此くの如く仰せら
れ候ぞや心得られずとせむべし。

次に真言宗の法門は先ず真言三部経は大日如来の説か釈迦

如来の説かと尋ね定めて釈迦の説と言はば釈尊・五十年の説教

にをいて已今当の三説を分別せられたり、其の中に大日経等の

三部は何れの分にをさまり候ぞと之を尋ね可し、三説の中にはい

づくにこそおさまりたりと云はば例の法門にてたやすかるべき

問答なり、若法華と同時の説なり義理も法華と同じと云はば法華

は是純円一実の教にて會て方便を交へて説く事なし、大日経等

は四教を含有したる経なり何ぞ時も同じ義理も同じと云わんや

謬りなりとせめよ、次に大日如来の説法と云はば大日如来の父母

と生ぜし所と死せし所を委く沙汰し問うべし、一句一偈も大日の
父母なし説所なし生死の所なし有名無実の大日如来なり然る間
殊に法門せめやすかるべきなり若法門の所詮の理を云はば教主
の有無を定めて説教の得不得をば極む可き事なり、設ひ至極の
理密・事密を沙汰すとも訳者に虚妄有り法華の極理を盗み取て事
密真言とか立てられてあるやらん不審なり、之に依りて法の所談
は教主の有無に随て沙汰有る可きなりと責む可きなり、次に
大日如来は法身と云はば法華よりは未顕真実と嫌い捨てられたる
爾前権教にも法身如来と説たり何ぞ不思議なるべきやと云う
可きなり、若無始無終の由を云て・いみじき由を立て申さば必
大日如来に限らず我等・一切衆生・螻蟻☆☆等に至るまでみな
無始無終の色心なり、衆生に於て有始有終と思ふは外道の僻見

なりなんじげどう汝外道に同いず如何と云べう可きなり。

次に念ねんぶつ仏は是じょうどしゅう浄土宗所用この義なり、此これ又ごんきよう權教の中ごんきようの權教

なりたと譬たとえば夢の中の夢ごとの如ごとし有ゆう名無実めいむじつにして其その実無いきなり一切いっさい

衆しゅじよう生願しよせんて所詮しよせんなし、然しかれば云う所うの仏いも有い為無常むじようの阿弥陀あみだぶつ仏な

り何なんぞ常住じようじゅうふめつ不滅どまりの道理どうりにしかんや、されほんちようば本朝こんほんだいしの根本大師こんぽんだいしの

御釈いわに云うく「有う為いの報ごんかむさ仏は夢中のさんじん權果無作かくぜんの三身じつぶつは覺前じつぶつの実い仏」

と釈しゃくして阿弥陀あみだぶつ仏等の有う為無常いむじようの仏おおいをば大おおいにいましめ捨すてをかれ

候すでなり、既たのに憑あみだぶつむ所の阿弥陀あみだぶつ仏有あみだぶつ名無実いむじつにして名なのみ有そつて其その

体たいなからんには往生おうじようす可べき道理どうりをば委くわしく須弥山しゆみせんの如ごとく高たかく立たて

大海たいかいの如ごとくに深いく云いとも何いの所詮しよせんあ有あるべきや又きようろん經論きようろんに正めいぶんき明文めいぶん

ども有あと云いはば明文めいぶんありとも未み顯けん真しん實じつの文ぶんなり、浄土じようどの三さん部ぶ經きように

限けらず華嚴經けこんきよう等らより初いて何いの經きん・教くわんしやく・論ろん釈しやくにか成じようぶつ仏めいぶんの明文めいぶん無なら

んや、然れどもしか権教ごんきょうの明文めいぶんなる時は汝等なんじが所執しよしゅうの拙つたなきにてこ
そあれきょうろん経論きょうろんに無き僻事ひがごとなり、何れもいずれ法門ほうもんの道理どうりを宣のべべかぎ依えき經きやう
を立てたりとも夢中のごんか権果ごんかにて無用むようの義ぎに成る可べきなり返す返
す。

◆五二 一生成仏抄じやうぶつ

建長七年けんちやう 三十四歳御作 与

富木常忍ときじやうにん

383P

夫れそ無始むしの生死しやうじを留とどめて此この度決たびけつじやう定じやうして無上むじやう菩提ぼだいを証しやうせんと
思はばしすべからく衆生しゆじやう本有ほんぬの妙理みやうりを觀みずべし、衆生しゆじやう本有ほんぬの妙理みやうり
とは妙法蓮華經みやうほうれんげきやう是これなり故ゆえに妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱なへたてまつれば
衆生しゆじやう本有ほんぬの妙理みやうりを觀みずるにてあるなり、文理ぶんり真正しんじやうの經王きやうわうなれば
文字もんじ即実相じくじつしやうなり実相じつしやう即妙法じくみやうほうなり唯所詮ただしよせん一心いっしん法界ほっかいの旨むねを説とき顯あらわす
を妙法みやうほうと名なく故ゆえに此この經きやうを諸仏しよぶつの智慧ちえとは云いうなり、一心いっしん法界ほっかい

むね

じゅっかいさんぜん

えしょうしきしんひじょうそうもくこくうせつど

の旨とは十界三千の依正色心非情草木虚空刹土いづれも除かず

いちねん

おさ

いちねん

ほっかい

へんまん

ちりも残らず一念の心に収めて此の一念の心法界に満するを指

かくち

いっしんほっかい

して万法とは云うなり、此の理を覚知するを一心法界とも云うな

ただ

みようほうれんげきよう

るべし、但し妙法蓮華經と唱へ持つと云うとも若し己心の外に

みようほう

そほう

そほう

こんきよう

法ありと思はば全く妙法にあらざ☆法なり、☆法は今經にあら

こんきよう

ほうべん

ごんもん

ほうべんごんもん

ず今經にあらざれば方便なり権門なり、方便権門の教ならば

じようぶつ

じきどう

じようぶつ

じきどう

ごうてう

しゅぎよう

成仏の直道にあらざ成仏の直道にあらざれば多生曠劫の修行

へ

じようぶつ

ゆえ

じようぶつかな

ゆえ

を経て成仏すべきにあらざる故に一生成仏叶いがたし、故に

みようほう

れんげ

みようほうれんげきよう

妙法と唱へ蓮華と読まん時は我が一念を指して妙法蓮華經と

なず

しんじん

おこ

名くるぞと深く信心を發すべきなり。

すべいちだいはちまん

しょうきようさんぜじゅつほう

しよぶつ

ぼさつ

都て一代八万の聖教三世十方の諸仏・菩薩も我が心の外に

すべいちだいはちまん

しょうきようさんぜじゅつほう

しよぶつ

ぼさつ

有りとはゆめゆめ思ふべからず、然れば仏教を習ふといへども

心性しんしよを觀ぜざれば全く生死しやうじを離るる事なきなり、若し心外に道を求めて万行万善まんぎやうばんぜんを修せんは譬たとえば貧窮びんぐの人日夜に隣の財かそを計へたれども半錢の得分とくふんもなきが如し、然れば天台てんだいの釈しゃくの中には若し心を觀ぜざれば重罪滅じゆうざいせずとて若し心を觀ぜざれば無量の苦行むりやうくぎやうとなると判ぜり、故にかくの如きの人をばぶつぽう佛法ぶつぽうを學がくして外道げどうとなると恥はじしめられたり、爰ここを以て止觀しをには雖すい學がく仙教せんぎやう・還同外見げんどうげけんと釈しゃくせり、然る間・仏の名を唱へ經卷きやうかんをよみ華をちらし香をひねるまでも皆我みなが一念いちねんに納めたる功德善根くどくぜんこんなりと信心しんじんを取るべきなり、之に依よつて淨名經じやうみやうきやうの中には諸仏しよぶつの解脱げだつを衆生しゆじやうの心行しんぎやうに求めば衆生しゆじやう即菩提じよくぼだいなり生死しやうじ即涅槃じよくねはんなりと明あかせり、又衆生しゆじやうの心けがるれば土もけがれ心清ければ土も清しとて淨土じやうどと云ひ穢土えどと云うも土に二の隔へだたりなし只我等ただわれらが心の善惡ぜんあくによると見えたり、

しゅじょう

衆生と云うも仏と云うも亦此くの如し迷う時は衆生と名け悟

る時をば仏と名けたり、譬えば閻鏡も磨きぬれば玉と見ゆるが

如し、只今も一念無明の迷心は磨かざる鏡なり是を磨かば必ず

ほつししょうしんによ

法性真如の明鏡と成るべし、深く信心を發して日夜朝暮に又

おこた

懈らず磨くべし何様にしてか磨くべき只南無妙法蓮華經と唱へ

たてまつるを是をみかくとは云うなり。

そもそも

抑妙とは何と云う心ぞや只我が一念の心不思議なる處を妙

とは云うなり不思議とは心も及ばず語も及ばずと云う事なり、

然ればすなはち起るところの一念の心を尋ね見れば有りと云はん

とすれば色も質もなし又無しと云はんとすれば様様に心起る有と

思ふべきに非ず無と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず

有無の二の心も及ばず有無に非ずして而も有無に☆して中道

いちじつ　みょうたい　ふしぎ
一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり、此の妙なる

心を名けて法とも云うなり、此の法門の不思議をあらはすに譬たとえ

を事法にかたどりて蓮華と名く、一心を妙と知りぬれば亦転じてまた

余心をも妙法と知る処を妙経とは云うなり、然ればすなはちしか

善惡に付いて起り起る処の念心の当体を指して是れ妙法の体と

説き宣べたる経王なれば成仏の直道とは云うなり、此の旨を深むね

く信じて妙法蓮華経と唱へば一生成仏更に疑あるべからず、うたがい

故に経文には「我が滅度の後に於て・応に斯の経を受持すべし

是の人・仏道に於て決定して疑有る事無けん」とのべたり、うたがいあ

努努不審をなすべからず穴賢穴賢、一生成仏の信心南無

妙法蓮華経

・南無妙法蓮華経。

日蓮 にちれん
花押 かおう

◆五三

主師親御書 しゅししんごしょ

建長七年 けんちょう

三十四歳御作

385

P

釈迦しゃか仏ぶつは我等われらが為ためには主なり師なり親なり一人してすくひ護まもる

と説とき給たまへり、阿弥陀あみだ仏ぶつは我等われらが為ためには主ならず親ならず師なら

ず、然しかれば天台大師てんだいだいし是これを釈しゃくして日いわく「西方さいほうは仏・別べつにして縁異えんいな

り仏・別べつなるが故ゆえに隠顕おんけんの義成ぎせいぜず縁異えんいなるが故ゆえに子父こふの義成ぎせいぜ

ず、又此またの経きやうの首末しゆまつに全く此この旨無むし眼まなこを閉ふじて穿鑿せんさくせよ」と

実じつなるかな釈迦しゃか仏ぶつは中天竺てんじくの浄飯大王じやうはんたいおうの太子たいしとして十九の御年

家いを出いで給たまいて檀特山だんとくせんと申もうす山こもに籠こもらせ給たまひ、高峯たかねに登のぼつては

妻木つまぎをとり深谷しんこくに下くだつては水みづを結び難行なんぎやう苦行くぎやうして御年ごねん三十と申

せしに仏ぶつにならせ給たまいて一代いちだい聖教しやうきやうを説とき給たまいしに、上うわには

けごん 華嚴・阿含・方等・般若等の種種の經經を説かせ給へども内心
ほけきよう には法華經を説かばやとおぼしめされしかども衆生の機根まち
まちにして一種ならざる間・仏の御心をば説き給はで人の心に
したがよろず 随ひ万の經を説き給へり、此くの如く四十二年が程は心苦しく
おほしめ 思食しかども今法華經に至つて我が願既に満足しぬ我が如くに
しゅじよう 衆生を仏になさんと説き給へり、久遠より已来・或は鹿となり
ある 或は熊となり・或時は鬼神の為に食われ給へり、此くの如き
くどく 功德をば法華經を信じたらん衆生は是れ真仏子とて是実の我が
ほけきよう 子なり此の功德を此の人に与へんと説き給へり、是れ程に思食し
しゃかぶつ たる親の釈迦仏をばないがしろに思ひなして唯以一大事と説き
たま 給へる法華經を信ぜざらん人は争か仏になるべきや能く能く心を
とど 留めて案ずべし。

二の巻に云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切
世間の仏種を断ず乃至余経の一偈をも受けざれ」と文の心は仏に
ならん為には唯法華經を受持せん事を願つて余経の一偈・一句を
も受けざれと、三の巻に云く「飢国より来つて忽ち大王の膳に遇
うが如し」と文の心は飢えたる国より来つて忽ち大王の膳にあへ
り心は犬野干の心を致すとも迦葉・目連等の小乗の心をば起さ
ざれ破れたる石は合うとも枯木に花はさくとも二乗は仏になるべ
からずと仰せられしかば須菩提は茫然として手の一鉢をなげ迦葉
は涕泣の声大千界を響すと申して歎き悲みしが今法華經に至つ
て迦葉尊者は光明如来の記☆を授かりしかば目連・須菩提・
摩訶迦旃延等は是を見て我等も定めて仏になるべし飢えたる国よ
り来つて忽ち大王の膳にあへるが如しと喜びし文なり、我等

しゅじょう

衆生・無始曠劫より已来妙法蓮華經の如意宝珠を片時も相離れ

むみょう

ざれども無明の酒にたぼらかされて衣の裏にかけたりとしらずし

て少きを得て足りぬと思ひぬ、南無妙法蓮華經とだに唱え奉り

なむみょうほうれんげきょう

とな たてまつ

すみや

たらましかば速に仏に成るべかりし衆生どもの五戒・十善等の

しゅじょう

ごかい じゅうぜん

もつ

ある

ぼんてん

たいしやく

わずかなる戒を以て・或は天に生れて大梵天・帝釈の身と成つ

ある

もろもろこくおう

だいじん

くぎよう

ていみじき事と思ひ・或時は人に生れて諸の国王・大臣・公卿・

しょうにん

殿上人等の身と成つて是れ程のたのしみなしと思ひ少きを得て

こ

足りぬと思ひ悦びあへり、是を仏は夢の中のさかへ・まぼろしの

よろこ

これ

たのしみなり唯法華經を持ち奉り速に仏になるべしと説き給へ

ただほけきょう

たも たてまつ すみや

と たま

り、又四の巻に云く「而も此の經は如来の現在すら猶怨嫉多し

いわ

しか

によらい

げんざい

なおおんしつ

いわんやめつど

況や滅度の後をや」云云。

しゃかぶつ

ししきょうおう

じょうばん

じゅうぜん

釈迦仏は師子頬王の孫・浄飯王には嫡子なり十善の位をす

て五天竺第一なりし美女耶輸多羅女をふりすてて十九の御年出家しゅつけ

して勤め行ひ給いしかば三十の御年・成道し御坐して三十二相つと

・八十種好の御形にて御幸なる時は大梵天王・帝釈左右に立ちしゅこう おんすがた みゆき だいぼんてんのう たいしやくさう

多聞・持国等の四天王・先後圍繞せり、法を説き給ふ御時は四弁たもん してんのう せんごいによう と たま おんとき

・八音の説法は祇園精舎に満ち三智五眼の徳は四海にしけり、せっぽう ぎおんしょうじや

然れば何れの人か仏を惡むべきなれども尚怨嫉するもの多し、ましか いずれ

して滅度の後・一毫の煩惱をも断ぜず少しの罪をも弁へざらんめつと いちこう ぼんのう だん つみ わきまえ

法華經の行者を惡み嫉む者多からん事は雲霞の如くならんほけきよう ぎようじや にく ねた うんか ごと

えたり、然れば則ち末代惡世に此の經を有りのままに説く人にはしか すなわ まっだいあくせ

敵多からんと説かれて候に世間の人人・我も持ちたり我も読みせけん ひとびと たも

奉り行じ候に敵なきは仏の虚言か法華經の実ならざるか、又実のたてまつ そらごと ほけきよう

御經ならば当世の人人・經をよみまいらせ候は虚よみか実のとうせ ひとびと そら

ぎようじや

行者にて・はなきか如何能く能く心得べき事なり明むべき物な

り、四の巻に多宝如来は釈迦牟尼仏御年三十にして仏に成り給ふ

に、初には華嚴經と申す經を十方華王のみぎりにして別円頓大

の法輪・法慧・垢徳林・金剛幢・金剛藏の四菩薩に対して三七日

の間説き給いしにも来り給はず、其の二乗の機根叶はざりしかば

瓔珞細☆の衣をぬぎすて☆弊垢膩の衣を著・波羅奈国・鹿野苑に

趣いて十二年の間・生滅四諦の

法門を説き給ひしに阿若俱鄰等の五人証果し八万の諸天は無生忍

を得たり、次に欲色二界の中間大宝坊の儀式・浄名の御室に

は三万二千の牀を立て般若・白鷺池の辺・十六会の儀式・

染浄虚融の旨をのべ給いしにも来り給はず、法華經にも一の巻

乃至四の巻・人記品までも来り給はず宝塔品に至つて初めて来り

給へり。たま

釈迦しゃかぶつ仏・先四十余年よんじゅうよねんの経を我と虚事そらごとと仰せられしかば人用うる

事なく法華経ほけきょうを真実しんじつなりと説かせ給たまへども仏と云うは無虚妄こもうの人

とて永く虚言そらごとし給はずと聞きしに一日ならず二日ならず一月なら

ず二月ならず一年・二年ならず四十余年よんじゅうよねんの程まで虚言そらごとしたり仰せ

られしかば又此の経を實と説き給たまうも虚言そらごとにやあらんずらんと

不審ふしんなししかば此の不審釈迦ふしんしゃかぶつ仏一人しては舍利弗しゃりほつを始め事はれが

たかりしに此の多宝たほうぶつ仏・宝浄世界ほうじょうせかいよりはるばると来らせ給たまいて

法華経ほけきょうは皆是れ真実しんじつなりと証しょうみょう明し給たまいしに先の四十余年よんじゅうよねんの経を

虚言そらごとと仰せらるる事実の虚言そらごとに定まるなり、又法華経ほけきょうより外ほかの

一切いっさいきょう経を空に浮べて文・文・句句・阿難尊者あなんそんじゃの如く覺さとり富楼那ふるな

の并舌へいことの如くに説くとも其それを難事なんとせず、又須弥山しゆみせんと申もうす山は

十六万八千由旬ゆじゆんの金山にて候を他方世界たほうせかいへつぶてになぐる者あり

とも難事なんには候はじ、仏の滅度めつどの後・当世とうせ・末代まつだい・悪世あくせに法華經ほけきやう

を有りのままに能く説よかん是これを難がたしとすと説かせ給たまへり、五天竺てんじく

・第一だいいちの大力なりし提婆達多だいばだつたも長三丈五尺・広一丈二尺の石をこ

そ仏になげかけて候いしか又漢土かんと第一の大力・楚その項羽こううと申せし

人も九石入きゅうこくいりの釜に水満ち候いしをこそひさげ候いしか其それに是

は須弥山しゆみせんをばなぐる者は有りともし此の經を説ごとの如く読み奉たてまつらん人

は有りがたしと説かれて候に人ごとに此の經をよみ書き説とき候、

經文きやうもんを虚言そらごとに成して当世とうせの人人を皆法華經ほけきやうの行者ぎやうじやと思ふべきか

能く能く御心得ごこころえあ有るべき事なり、五の卷提婆品だいばに云く「若し

善男子ぜんなんし善女人ぜんにょにん有りて妙法華經みやうほけきやうの提婆達多品だいばだつたを聞いて淨心じやうしんに信敬

して疑惑ぎわくを生ぜざらん者は地獄・餓鬼がき・畜生ちくしやうに墮だせずして十方じゆつぱう

の仏前ぶつぜんに生ぜん」と、此の品には二つの大事あり一には提婆達多だいばだつた

と申すは阿難尊者あなんそんじゃには兄・斛飯王こくはんのうには嫡子・師子頰王ししきやうおうには孫・

仏にはいとこにて有りしが仏は一閻浮提第一の道心者えんぶだいだいいち どうしんしゃにてましま

ししに怨あだをなして我は又閻浮提第一の邪見放逸えんぶだいだいいち じゃけんほういつの者とならんと誓

つて万の悪人を語よろず あくにん かたらいて仏に怨あだをなして三逆罪さんぎやくざを作つて現身げんしんに大地だいち

破われて無間むげん・大城だいじやうに墮おちて候いしを天王如来てんのうによらいと申す記☆を授け

らるる品にて候、然しかれば善男子ぜんなんしと申すは男此の経を信じまひらせ

て聴聞ちやうもんするならば提婆達多程だいばだつたの悪人あくにんだにも仏になる、まして

末代まつだいの人ひとはたとひ重罪じゅうざいなりとも多分たぶんは十悪じゅうあくをすぎずまして深く

持ち奉たてまつる人・仏にならざるべきや、二には娑竭羅竜王しゃかくらりゆうおうのむすめ

竜女りゆうにょと申すは八歳のくちなは仏に成りたる品にて候此の事めづ

らしく貴き事とうとにて候、其の故そのゆえは華嚴經けこんきやうには「女人にょにんは地獄じごくの使なり

能くよ仏種子ぶつしゆを断ず外面は菩薩ぼさつに似て内心ないしんは夜叉やしやの如しごとと、文の

心は女人にょにんは地獄じごくの使・よく仏の種をたつ外面は菩薩ぼさつに似たれども

内心ないしんは夜叉やしやの如しごとと云へり、又云くいわ「一度女人ひとたびにょにんを見る者はよく眼まなこ

の功德くどくを失ふうしな設たひ大蛇だいじやをば見るとも女人にょにんを見るべからずいと云い、

又あ有る経には「所有しやうの三千界さんぜんかいの男子もろもろの諸の煩惱ぼんのうを合せ集めて一人

の女人にょにんの業障ごうしょうと為すなと三千大千世界さんぜんせかいにあらゆる男子もろもろの諸の

煩惱ぼんのうを取り集めて女人にょにん・一人の罪つみとすと云へり、・或経あるには

「三世さんぜの諸仏しよぶつの眼まなこは脱ぬげて大地だいちに墮おつとも女人にょにんは仏に成るべから

ず」と説き給たまへり、此の品の意は人畜じんちくをいはば畜生ちくしやうたる竜女りゆうによだ

にも仏に成れりまして我等われらは形のごとく人間の果報かほうなり、彼の

果報かほうにはまされり争いかでか仏にならざるべきやと思食おほしめすべきなり。

中にも三悪道さんあくどうにおちずと説かれて候其その地獄じごくと申すは八寒八熱はちかん

乃至^{ないし}八^{だいじ}大地獄^{じく}の中に初め浅^{とうかつ}き等活^{じく}地獄^{たず}を尋^{たず}ぬれば此^{この}の一閻^{えん}浮提^{ぶだい}の
下一千^{ゆじゆん}由旬^{しゆ}なり、其^{その}の中の罪人^{ざいにん}は互^{たがい}に常に害心^{がいしん}をいだけりもした
またま相見^{りようし}れば獵師^{りようし}が鹿^かにあへるが如^{ごと}し各各^{くろがね}鉄^{てつ}の爪^{つめ}を以^{もつ}て互^{たがい}に
つかみ・さく・血肉^{けつにく}皆^{みな}尽^{つく}きて唯^{ただ}残^{のこ}つて骨^{ほね}のみあり・或^{ある}は獄卒^{ごくそつ}棒^{ぼう}を
以^{もつ}て頭^{こうべ}よりあなう^{いた}らに至^{いた}るまで皆^{みな}打ちくたく身^みも破^われくだけで
猶^{なほ}沙^{さい}の如^{ごと}し、焦熱^{しょうねつ}なんど申^{もう}すは譬^{たと}えん・かたなき苦^{くる}なり鉄城^{てつじやう}
四方^{しほう}に回^{まわ}つて門^{かど}を閉^しじたれば力士^{りきし}も開^{ひら}きがたく猛火^{まうか}高^{たか}くのぼつて
金翅^{こんじ}のつばさもかけ^{かけ}るべからず、餓鬼^{がき}道^{みち}と申^{もう}すは其^{その}の住処^{じゅうしょ}に二
あり一^{ひと}には地^ちの下五百^{ひやくゆじゆん}由旬^{しゆ}の閻魔^{えんま}王宮^{おうきゆう}にあり、二^{ふた}には人天^{にんてん}の中
にもまじはれり其^{その}の相種種^{しやうじゆ}なり・或^{ある}は腹^{はら}は大海^{たいかい}の如^{ごと}くのんどは
鍼^{はり}の如^{ごと}くなれば明^あけても暮^くれても食^くすともあ^あくべからず、まして
五^{ひやくしやう}百生^{ひやくしやう}・七^{ひやくしやう}百生^{ひやくしやう}なんど飲^{おん}食^{じき}の名^なをだにもきかず・或^{ある}は己^{おの}が

頭こうべをくだきて腦を食するもあり・或あるは一夜に五人の子を生んで

夜の内に食するもあり、万菓林に結べり取らんとすれば悉ことごとく劍の

林となり万水ばんすい・大海たいかいに流入りぬ飲んとすれば猛火となる如何いかににし

てか此の苦をまぬがるべき、次に畜生道ちくしようと申もうすは其その住所に二

あり根本こんぽんは大海たいかいに住す枝末しまつは人天にんてんに雑まじわれり短き物は長き物にのま

れ小き物は大きな物に食はれ互たがいに相食はんでしばらくもやすむ事な

し・或あるは鳥ちようじゆう 獸と生れ・或あるは牛馬ぎゆうばと成つても重き物をおほせら

れ西へ行かんと思へば東へやられ東へ行かんとすれば西へやらる

山野に多くある水と草をのみ思いて余は知るところなし、然しかるに

善男子ぜんなんし・善女人ぜんによにん・此の法華經ほけきようを持ち南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつら

ば此の三罪つみを脱のがるべしと説とき給たまへり何事なにことか是にしかん・たのもし

きかな・たのもしきかな、又五の卷いに云く「我れ大乘經だいじようきようを聞ひらい

て苦の衆生しゅじやうを度脱どだつす」と心は・われ大乘だいじやうの教をひらいてと申もうす

は法華經ほけきやうを申す苦の衆生しゅじやうとは何ぞや地獄じごくの衆生しゅじやうにもあらず餓鬼がき

道の衆生しゅじやうにもあらず只女人ただにょにんを指して苦の衆生しゅじやうと名けたり、五障ごしやう

三従もうと申して三つしたがふ事有つて五つの障さわりあり竜女りゆうによ我女人にょにん

の身を受けて女人にょにんの苦をつみしれり然しかれば余をば知るべからず

女人にょにんを導みちびかんと誓ちかへり、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう。

日蓮にちれん 花押かおう

◆五四 一代聖教大意いちだいしやうきやうたいい

正嘉二年二月しやうか 三十七歳御

作 390P

四教しきやうは一には三蔵教さんぞう・二には通教つうきやう・三には別教べつきやう・四には

円教えんきやうなり。

始に三蔵とは阿含經の意なり・此の經の意は六道より外を

明さず但し六道修人天の内の因果の道理を明す、但し正報は

十界を明すなり地・餓・畜・修・人天・声聞・縁覺・菩薩・

仏なり依報が六にて有れば六界と申すなり、此の教の意は六道

より外を明さざれば三界より外に浄土と申す生處ありと言わず又

三世に仏は次第・次第に出世すとは云へども横に十方に並べて

仏有りと云わす、三蔵とは一には經藏二には律藏三には

論藏なり但し經・律・論の定戒慧・戒定慧・慧定戒と云う事

あるなり、戒藏とは五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒

なり・定藏とは味禪定名浄禪・無漏禪なり慧藏とは苦・空・

無常・無我の智慧なり、戒定慧の勝劣と云うは但上の戒計りを

持つ者は三界の内の欲界の人天に生を受くる凡夫なり、但し上の

定計^{ばか}りを修^{しゅう}する人は戒を持たざれども定の力に依^よつ

て上^{かみ}の戒を具^ぐするなり、此の定の内に味禪・淨禪は三界^{さんがい}の内・色

無色界^{むしつかい}へ生ず無漏禪は声聞^{しょうもん}・縁覺^{えんかく}と成つて見思^{けんじ}を断じ尽し

灰身滅智^{けしんめつち}するなり、慧は又苦・空・無常^{むじょう}・無我^{むが}と我が色心^{しきしん}を觀ず

れば上^{かみ}の戒・定を自然^{じねん}に具足^{ぐそく}して声聞^{しょうもん}・縁覺^{えんかく}とも成るなり、

故に戒より定は勝^{すぐ}れ定より慧は勝^{すぐ}れたり、而^{しか}れども此の三藏教^{さんそう}の

意^{こころ}は戒が本体にてあるなり、されば阿含經^{あこんきょう}を總結^{ゆいぎようきよう}する遺教經^{ゆいぎようきよう}

には戒を説けるなり、此の教の意^{こころ}は依報^{えほう}には六界^{ろっかい}・正報^{しょうほう}には

十界^{じゅうかい}を明^{しょう}せども而^{しか}も依報^{えほう}に随^{したが}つて六界^{ろっかい}を明^{しょう}す經と名^なくるなり、

又正報^{しょうほう}に十界^{じゅうかい}を明^{しょう}せども縁覺^{えんかく}・菩薩^{ぼさつ}・仏も声聞^{しょうもん}の悟^すに過ぎざ

れば但^{しやうもん}声聞教^{しょうもん}とも申^{もう}す、されば仏も菩薩^{ぼさつ}も縁覺^{えんかく}も灰身滅智^{けしんめつち}する

教^{しょうもん}なり、声聞^{しょうもん}に付いて七賢七聖の位あり、六道^{ろくどう}は凡夫^{ほんぶ}なり。

三賢 さんけん

一に五停心

二に別想念処 ねんじょ

外凡

三に総想念処 ねんじょ

七賢 智と言う事なり

一に・法

四善根 ぜんこん

二に頂法

内凡

三に忍法

四に世第一法 だいいち

此の七賢の位は六道の凡夫より賢く生死を厭ひ煩惱を具しながら煩惱を發さざる賢人なり、例せば外典の許由巢父が如し。

一に数息息を数えて散乱を治す すそく

二に不浄身の不浄を觀じて貪欲を治す ふじょう かん とんよく

五停心

三に慈悲慈悲を觀じて嫉妬を治す じひじひ かん しつと

四に因縁十二因縁を觀じて愚癡を治す

五に界方便 地水火風空識の六界を觀じて障道を

治す又は念仏と云う

一に身 外道は身を淨と言ひ仏は不淨と説き給う

別想念処 二に受 外道は三界を樂と言ひ仏は苦と説き給う

三に心 外道は心を常と言ひ仏は無常と説き給う

四に法 外道は一切衆生に我有りと云い仏は無我

と説き給う外道は常心樂受我法淨身仏は苦・不淨・無常・無我と

説く総想念処とは先の苦・不淨・無常・無我を訓練して觀ずるな

り ☆法は智慧の火・煩惱の薪を蒸せば煙の立つなり故に・法と

云う、頂法は山の頂に登つて四方を見るに雲無きが如し、世間

出世間の因果の道理を委く知つて闇き事無きに譬えたるなり、始

め五停心より此の頂法に至るまで退位と申して惡縁に値へば惡道に墮つ而れども此の頂法の善根は失せずと習うなり、忍法は此の位に入る人は永く惡道に墮ちず、世第一法は此の位に至る賢人なり但今聖人と成る可きなり。

一に見道

二

随信行

鈍根

隨法行

利根

正と言ふ事なり

信解

鈍根

七聖三

三

見得

利根

二に修道

身証

利鈍に亘る

阿羅漢

二

慧解脱鈍根

三に無學道

俱解脱利根

見・思の煩惱を断ずる者を聖と云う、此の聖人に三道あり、見

道とは見思の内の見惑を断じ尽くす、此の見惑を尽くす人をば
初果しよかの聖者せいじやと申す、此の人は欲界よっかいの人天にんてんには生るれども永く地・
餓・畜・修しゅうの四惡趣しあくしゅには墮おちず、天台云く「見惑けんわくを破やぶるが故ゆえに
四惡趣しあくしゅを離る」文、此の人は未だ思惑しわくを断ぜず貪とん・瞋じん・癡ち有り、
身に貪欲とんよくある故ゆえに妻を帶す、而れども他人たにんの妻を犯さず、瞋恚しんにあ
れども物を殺さず、鋤すきを以て地をすけば虫自然じねんに四寸去る、愚癡ぐち
なる故ゆえに我が身・初果しよかの聖者せいじやと知らず、婆娑論ばしやろんに云く「初果しよかの
聖者せいじやは妻を八十一度ひとたび・一夜に犯すと」取意てんだい天台の解釋げしやくに云く「初果しよか
地を耕すに虫四寸を離るるは道共どうくの力なり」と、第四果の聖者せいじや・
阿羅漢あらかんを無學と云ひ亦または不生ふしやうと云う、永く見思けんじを断じ尽して三界さんがい
六道ろくどうに此の生の尽つきて後生のちしやうずべからず見思けんじの煩惱ぼんのう無きが故なり、
又此の教の意こころは三界六道より外に処ところを明あかさざれば生処有りと知

らず・身に煩惱ぼんのう有りとも知らず又生因けしんめつちなく但灰身滅智もうと申して身

も心もうせ虚空こくうの如く成るべしと習ならう、法華經ほけきようにあらざば永く仏

になるべからずと云うは二乘にじよう是なり、此の教の修行しゆぎようの時節じせつは

しょうもん

声聞しょうもんは三生どんこん鈍根どんこん六十劫利根りこん又一類いちるいの最上利根さいじょうりこんの声聞しょうもん一生の内に

あらかん

阿羅漢あらかんの位に登る事あり、縁覺えんかくは四生鈍根ししようどんこん百劫利根りこん菩薩ぼさつは一向いっこう

ほんぶ

凡夫ほんぶにて見思けんじを断だんぜず而も四弘誓願しかしぐせいがんを發おこし六度万行ろくどまんぎようを修しゅうし三僧さんそう

だいこう

祇・百大劫だいこうを経て三蔵教の仏と成る仏と成る時始めて見思けんじを断だん尽じん

へ

するなり、見惑けんわくとは一には身見みけんと云う二には辺見へんけん常見じょうけんと云う三には

じゃけん
亦撥無見

邪見じゃけんと云う四には見取見けんけん勝見しょうけんと云う五には戒禁取見けいじんけん計道見けいどうけんと云うなり

けんわく

見惑けんわくは八十八有れども此の五が根本こんぽんにて有るなり、思惑しわくとは一に

あれ

は貪・二には瞋・三には癡ち・四には慢まんなり思惑しわくは八十一有れども

こんぽん

此の四が根本こんぽんにて有るなり、此の法門ほうもんは阿含經あこんきよう四十卷・婆沙論ばしゃろん二

百卷・正理論・顯宗論・俱舍論に具に明せり、別して俱舍宗とぐしやしゅう

申す宗有り又諸の大乗に此の法門少少明す事あり・謂く方等部おもえらほうとうぶ

の經・涅槃經等なり但し華嚴・般若・法華には此の法門無し。

次に通教とはだいじょう大乘の始なり又戒定慧の三学あり、此の教の意こころ

のおきて大旨は六道を出でず少分利根なる菩薩六道より外に推しお

出すことあり、声聞・緣覺・菩薩共に一の法門を習い見思を三けんじ

人共に断じ而も声聞・緣覺・灰身滅智の意に入る者もあり入らこころ

ざる者もあり、此の教に十地あり。

一 乾慧地 三賢さんけん

二 性地 四善根 賢人けんじん

三 八人地 見道位聖人しょうにん

四 見地 見惑を断ずけんわく

初果の聖人
しよか
しよ
しょうにん

十地 じゅうち

五 薄地

六 離欲地

思惑を断ず しわく

七 已弁地

阿羅漢 見思を断じ尽す あらかん けんじ

八 辟支仏

地習氣を尽す ひやくしぶつ しゅうけ

九 菩薩地

誓つて習を扶けて生ずるなり ぼさつ たす

十 仏地 見思を断じ尽す けんじ

此通教の法門は別して一經に限らず方等經・般若經・心經・

觀經・阿彌陀經・雙觀經・金剛般若等の經に散在せり、此通教

の修行の時節は動踰塵劫を経て仏に成ると習うなり、又一類の

疾く成ると云う辺もあり・已上・上の藏通二教には六道の凡夫本

より仏性ありとも談ぜず始めて修すれば声聞・縁覺・菩薩・仏

と・おもひおもひに成ると談ずる教なり。

次に別教べつきょう又戒定慧かいじょうえの三字を談だんず此の教は但菩薩ぼさつばか計りにて声聞しょうもん

・縁覺えんかくを雜まじえず、菩薩戒ぼさつとは三聚淨戒じゅじょうかいなり五戒ごかい・八戒ぱくかい・十善戒じゅうぜんかい

・二百五十戒・五百戒ぼんもうぎょう梵網ぼんもうぎょうの五十八の戒・瓔珞ようらくの十無尽戒むじん・

華嚴けごんの十戒・涅槃經ねはんぎょうの自行じぎょうの五支戒・護陀ごだの十戒・大論だいろんの十戒・

是等これらは皆菩薩みなぼさつの三聚淨戒じゅじょうかいの内・攝律儀戒せつりつぎかいなり、攝善法戒せつぜんぼうかいとは

八万四千はちまんの法門ほうもんを攝せつす、饒益にょうやく有情戒じょうじょうとは四弘誓願しぐせいがんなり定とは

觀練熏修かんれんくんじゅうの四種ぜんじょうの禪定ぜんじょうなり慧じゅつかいとは心生しんじゅう十界じゅうかいの法門ほうもんなり、五十

二位にを立つ五十二位じゅうにしんとは一いちに十信じゅうしん・二にに十住じゅうじゅう・三さんに十行じゅうぎょう・四

に十回向えこう・五ごに十地等覺じゅうちとうかく一位妙覺みょうかく二位になり、已上。

十信じゅうしん 退位たいい 凡夫菩薩ぼんぶぼさつ未だ見思けんじを断だんぜず

五十二位 十住じゅうじゅう 不退位ふたい五十二位

十行じゅうぎょう 十回向見思えこうけんじ・塵沙だんを断だんぜる菩薩ぼさつ

十地 じゅうち

無明を断ぜる菩薩 むみょうをだんぜるぼさつ

等覺 とうかく

妙覺 みょうかく

無明を断じ尽せる仏なり むみょうをだんじつせるぶつなり

此の教は大乗なり戒定慧を明す・戒は前の藏通二教に似ず尽 だいじょう

未来際の戒・金剛宝戒なり、此の教の菩薩は三悪道を恐しとせず みらいにじょうこんごう

二乗道を恐る地・餓・畜等の三悪道は仏の種子を断ぜず二乗の道 にじょうにじょう

は仏の種子を断ずればなり、大莊嚴論に云く「恒に地獄に処すと しゆし

雖も大菩提を障えず若し自利の心を起さば是れ大菩提の障なり」 いへどほだいささもじりこほだいさわり

と、此の教の習は眞の悪道とは三無為の火☆なり眞の悪人とは ならいあくどうむいかきようなりあくにん

二乗を云うなり、されば悪を造るとも二乗の戒をば持たじと談ず、 にじょうにじょうだん

故に大般若經に云く「若し菩薩設い恒河沙劫に妙なる五欲を受 ゆえはんによきよういわもぼさつたといごうがしや

くるとも菩薩戒に於ては猶犯と名けずと若し一念二乗の心を起さ ぼさつおいなおもいちねんにじょう

ば即ち名けて犯と為す」文、此の文に妙なる五欲とは色・声・香

・味・触の五欲なり・色欲とは青黛・珂雪・白齒等声欲とは

絲竹管絃・香欲とは沈檀芳薰・味欲とは猪鹿等の味・触欲とは

☆膚等なり、此に恒河沙劫に著すれども菩薩戒は破れず一念の

二乗の心を起すに菩薩戒は破ると云える文なり、太賢の古迹に

云く「貪に汚さると雖も大心尽きざるをもつて無余の犯無し起

せども無犯と名く」文、二乗戒に趣くを菩薩の破戒とは申すなり

華嚴・般若・方等総じて爾前の經にはあながちに二乗をきらうな

り定慧此れを略す、梵網經に云く「戒をば謂いて大地と為し定

をば謂いて室宅と為す智慧は為灯明なり」文、此の菩薩戒は人・

畜・黄門・二形の四種を嫌わず但一種の菩薩戒を授く、此の教の

意は五十二位を一一の位に多俱低劫を経て衆生界を尽して仏に

成るべし一人として一生に仏に成る者無し、又一行を以て仏に成

る事無し一切行を積んで仏と成る微塵を積んで須弥山と成すが

如し、華嚴・方等・般若・梵網・瓔珞等の經に此の旨分明なり、

但し二乘界の此の戒を受くる事を嫌ふ、妙樂の釈に云く「☆

法華已前の諸經を尋ぬるに実に二乗作仏の文無し」文。

次に円教とは此の円教に二有り・一には爾前の円・二には

法華・涅槃の円なり、爾前の円に五十二位・又戒定慧あり、爾前

の円とは華嚴經の法界唯心の法門文に云く「初發心の時便ち

正覺を成ずと」又云く「円滿修多羅」文、淨名經に云く「無我

無造にして受者無けれども善惡の業敗亡せず」文、般若經に云く

「初發心より即ち道場に坐す」

文、觀經に云く「韋提希・時に応じて即ち無生法忍を得」文、

梵網經に云く「衆生・仏戒を受くれば位大覺に同じ即ち諸仏の位に入り真に是れ諸仏の子なり」文、此は皆爾前の円の証文なり、此の教の意は又五十二位を明す名は別教の五十二位の如し但し義はかはれり、其の故は五十二位が互に具して淺深も無く勝劣も無し、凡夫も位を経ずとも仏にもなり又往生するなり、煩惱も断ぜざれども仏に成る障り無く一善一戒を以ても仏に成る少少開会の法門を説く処もあり、所謂淨名經には凡夫を会し煩惱惡法も皆会す但し二乗を会せず、般若經の中には二乗の所の法門をば開会して二乗の人と惡人をば開会せず、觀經等の經に凡夫一毫の煩惱をも断ぜず往生すと説くは皆爾前の円教の意なり、法華經の円經は後に至つて書く可し已上四教。

次に五時、五時とは一には華嚴經 結經 梵網經 別円二教を説く、

二には阿含あこん結經けつきよう遺教經いぎきよう但三藏教さんそうの小乘しょうじょうの法門ほうもんを説く、三に

は方等經ほうとう・宝積經ほうしやくきよう・觀經かんきよう等の説時せつじを知らざるこんだいじきよう權大乘經こんだいじきようなり

けつきようけつきようようらくようらく結經けつきよう・但し藏通そうつう・別円べつえんの四教しきようを皆説くみな、四には般若經はんになききよう

けつきようけつきようにんのうきにんのうきようよう結經けつきよう・仁王經にんおうきよう通教つうきよう・別教べつきよう・円教えんきようの後三教ごさんを説くさんそう三藏教さんそうを説か

ず、華嚴經けこんきようは三七日の間の説・阿含經あこんきようは十二年の説・方等ほうとう・般若はんになききよう

は三十年の説、已上華嚴けこんより般若はんになききように至るいた四十二年なり、山門さんもんの義ぎ

には方等ほうとうは説時せつじ定まらず説處せつしよ定まらず般若經はんになききよう三十年と申すもう、

寺門じもんの義ぎには方等ほうとう十六年・般若はんになききよう十四年と申すもう、秘藏ひそうの大事だいじの義ぎに

は方等ほうとう・般若はんになききようは説時せつじ三十年・但し方等ほうとうは前ぜん・般若はんになききようは後ごと申すもうな

り、仏は十九出家しゅつけ・三十成道じようどうと定むる事は大論だいろんに見えたり、

一代聖教いちだいしきよう五十年と申す事もうは涅槃經ねはんききように見えたり、法華經ほけききよう已前いぜん四十

二年と申す事もうは無量義經むりようぎきように見えたり、法華經ほけききよう八箇年はちかねんと申す事もうは

ねはんぎよう

むりようぎきよう

涅槃經の五十年の文と無量義經の四十二年の文の間を勘うれば

はちかねん

しゅつけ

じようどう

てんほうりん

八箇年なり、已上十九出家・三十成道・五十年の転法輪八十

にゅうめつ

これら

せつきよう

みなほけきよう

入滅と定む可し、此等の四十二年の説教は皆法華經の汲引の

ほうべん

そのゆえ

むりようぎきよう

いわ

「我先に道場菩提樹下に端

どうじようぼだいじゅげ

方便なり、其の故は無量義經に云く「我先に道場菩提樹下に端

ほうべん

あのかたらさんみやくさんぼだい

じよう

坐すること六年阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり○方便

力を以てす、四十余年には未だ真実を顕さず初に四諦を説き

もつ

よんじゅうよねん

いま

しんじつ

あらわ

を説き

阿含經なり次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く」文。

あこんきよう

ほうとう

まか

はんによ

けこんかいこう

を説く」文。

ひそか

いわ

私に云く説の次第に順ずれば華嚴・阿含・方等・般若・法華・

けこん

あこん

ほうとう

はんによ

ほつけ

ねはん

ほうもん

せんじん

しだい

つら

あこん

ほうとう

はんによ

けこん

涅槃なり、法門の浅深の次第を列ぬれば阿含・方等・般若・華嚴

ねはん

ほうもん

せんじん

しだい

つら

あこん

ほうとう

はんによ

けこん

・涅槃・法華と列ぬべし、されば法華經・涅槃經には爾くの如く

ねはん

ほうけきよう

ねはんぎよう

か

ごと

見えたり華嚴宗と申す宗は智嚴法師・法蔵法師・澄觀法師等の

けんし

けこんしゆう

もう

ちこん

ほつし

ほうぞう

ほつし

ちようかん

ほつし

人師・華嚴經に依つて立てたり、俱舍宗・成実宗・律宗は宝

にんし

けこんきよう

よ

くしやしゆう

じようじつ

りつしゆう

は宝

にんし

けこんきよう

よ

くしやしゆう

じようじつ

りつしゆう

は宝

人師・華嚴經に依つて立てたり、俱舍宗・成実宗・律宗は宝

にんし

けこんきよう

よ

くしやしゆう

じようじつ

りつしゆう

は宝

法師・光法師・道宣等の人師・阿含經に依つて立てたり、
法相宗と申す宗は玄奘三藏・慈恩法師等・方等部の内に上生經
・下生經・成仏經・解深密經瑜伽論・唯識論等の經論に依つて
立てたり、三論宗と申す宗は般若經・百論・中論・十二門論・
大論等の經論に依つて吉藏大師立て給へり、華嚴宗と申すは
華嚴と法華・涅槃は同じく円教と立つ余は皆劣と云うなる可し、
法相宗には解深密經と華嚴・般若・法華・涅槃は同じ程の經と
云う、三論宗とは般若經と華嚴・法華・涅槃は同じ程の經なり、
但し法相の依經諸の小乗經は劣なりと立つ、此等は皆法華
已前の諸經に依つて立てたる宗なり、爾前の円を極として立て
たる宗ともなり、宗宗の人人の諍は有れども經經に依つて
勝劣を判ぜん時はいかにも法華經は勝れたるべきなり、人師の

釈を以て勝劣を論ずる事無し。

五には法華經と申すは開經には無量義經一卷法華經八卷結經に
は普賢經一卷上の四教・四時の經論を書き挙ぐる事は此の法華經
を知らん為なり、法華經の習としては前の諸經を習わずしては
永く心を得ること莫きなり、爾前の諸經は一經一經を習うに
又余經を沙汰せざれども苦しからず、故に天台の御釈に云く
「若し余經を弘むるには教相を明さざれども義に於て傷むこと
無し若し法華を弘むるには教相を明さずんば文義闕くること有
り」文、法華經に云く「種種の道を示すと雖も其れ実には仏乘
の為なり」文、種種の道と申すは爾前一切の諸經なり仏乘の為
とは法華經の為に一切の經を説くと申す文なり。

問う諸經の如きは・或は菩薩の為・或は人天の為・或は声聞

・縁覚えんかくの為機ためきに随したがつて法門ほうもんもかわり益もかわる此の経は何なる人

の為ためぞや、答う此の経は相伝そうでんに有らざれば知り難がたし所詮しよせん悪人あくにん・

善人ぜんにん・有智うち・無智むち・有戒むかい・無戒むかい・男子なんし・女子なんし・四趣はちぶ・八部総じて

十界じゅうかいの衆生しゅじやうの為ためなり、所謂いわゆる悪人は提婆達多だいばだつた・妙莊嚴王みやうそうごん・阿闍世あじゃせ

王わう・善人ぜんにんは韋提希等いだいけの人天にんてんの人・有智うちは舍利弗しゃりほつ・無智むちは須利槃特しゆりはんどく

・有戒しやうもんは声聞しやうもん・菩薩ぼさつ・無戒むかいは竜畜にょにんなり女人りゆうによは竜女りゆうによなり、総じて

十界じゅうかいの衆生しゅじやう・円えんの一法ひととせを覚さとるなり此の事を知らざる学者がくしや・

法華経ほけきやうは我等凡夫われらぼんぷの為ためには有らずと申もうす仏意ぶつゐ恐れ有り、此の経に

云く「一切いっさいの菩薩ぼさつの阿耨多羅三藐三菩提あのおくたらさんみやくさんぼだいは皆みな此の経に属せり」文、

此の文の菩薩ぼさつとは九界しゅじやうの衆生ぜんにん・善人あくにん・悪人にょにん・女人なんにん・男子なんし・三蔵さんそう

教しやうもんの声聞しやうもん・縁覚えんかく・菩薩ぼさつ・通教つうきやうの三乗さんじやう・別教べつきやうの菩薩ぼさつ爾前にぜんの

円教えんきやうの菩薩ぼさつ皆此の経の力に有らざれば仏に成るまじと申もうす文な

り、又此の經に云く「藥王多く人有りて在家・出家の菩薩の道を行ぜんに若し是の法華經を見聞し読誦し書持し供養することを得ること能わずんば當に知るべし是の人は未だ善く菩薩の道を行ぜず、若し是の經典を聞くことを得ること有らば乃ち能く菩薩の道を行ずるなり」と文、此の文は顯然に權教の菩薩の三祇・百劫・動踰塵劫・無量阿僧祇劫の間の六度万行・四弘誓願は此の經に至らざれば菩薩の行には有らず善根を修したるにも有らずと云う文なり、又菩薩の行無ければ仏にも成らざる事も顯然なり。

天台・妙樂の末代の凡夫を勧進する文、文句に云く「好堅・地に処して牙已に百困せり頻伽☆に在つて声衆鳥に勝れたり」文、此の文は法華經の五十展轉の第五十の功德を釈する文なり、

仏苦に校量を説き給うに權教の多劫の修行又大聖の功德より

も此の経の須臾・結縁の愚人の随喜の功德百千万億勝れたる事經に見えつれば此の意を大師譬を以て顕し給えり、好堅樹と申す木は一日に百圍にて高くをう、頻伽と申す鳥は幼だも諸の大小の鳥の聲に勝れたり、権教の修行の久きに諸の草木の遅く生長するを譬へ、法華の行の速に仏に成る事を一日に百圍なるに譬へ、権教の大小の聖人をば諸鳥に譬へ法華の凡夫のはかなきを☆の聲の衆鳥に勝るるに譬う、妙樂大師重ねて釈して云く「恐らくば人謬りて解せる者初心の功德の大なることを測らずして功を上位に推り此の初心を蔑る故に今彼の行浅く功深きことを示して以て経力を顕す」文、末代の愚者は法華経は深理にしていみじけれども我等が下機に叶わずと言つて法を挙げ機を下して退する者を釈する文なり。

みょうらくだいしまつだい

又妙樂大師末代に此の法の捨てられん事を歎いて云く「此の

えんどん

すうちよう

まこときんだい

だいじよう

えんどん

円頓を聞きて崇重せざる者は良に近代に大乘を習える者の雑濫

するに由るが故なり、

よ

況や像末に情澆く信心寡薄に円頓の教・

ほうぞう

あふれはこ

みつ

しばら

しゆい

うす

しんじん

かはく

えんどん

法蔵に溢れ函に盈れども暫くも思惟せず便ち目を瞑ぐに至る・

いたずら

いたずら

な

なん

あ

い

わ

ふさ

いた

いた

徒に生じ徒に死す一に何ぞ痛ましきや有る人云く聞いて行ぜずん

ば汝に於て何ぞ預らん此れは未だ深く久遠の益を知らず、

なんじ

おい

なん

こ

いま

くおん

の益を知らず、

善住天子経の如き文殊・舍利弗に告ぐ法を聞き謗を生じて地獄

ぜんじゅうてんしきよう

こと

もんじゆ

しゃりほつ

ほう

ほう

じこく

じこく

に墮つるは恒沙の仏を供養する者に勝れたり地獄に墮つと雖も

お

こうしゃ

くよう

すぐ

じこく

お

い

えと

地獄より出でて還つて法を聞くことを得ると、此れは仏を供し法

じこく

い

かえ

と、此れは仏を供し法

こ

き

よう

を聞かざる者を以て校量と為り聞いて謗を生ずる尚遠種と為す

を聞かざる者を以て校

も

つき

き

よう

な

ほう

な

な

な

況や聞いて思惟し勤めて修習せんをや」と、又云く「一句も神

い

し

つと

し

し

し

い

わ

い

に染ぬれば咸く彼岸を資く思惟修習永く舟航に用いたり随喜

に染ぬれば咸く彼岸を資く思惟修習永く舟航に用いたり随喜

に染ぬれば咸く彼岸を資く思惟修習永く舟航に用いたり随喜

こと

ひ

が

ん

た

し

し

し

し

し

けんもんつね
見聞恒に主伴と為る、若は取・若は捨・耳に経て縁と成り・或は
順・或は違・終に斯れに因つて脱すと」文、私に云く若取・
若捨・或順・或違の文は肝に銘ずるなり。

ほつけほんきよう
法華翻經の後記に云く釈僧肇記「什羅 什三 藏なり姚興王に對して

い
曰く予昔天竺国に在りし時・☆く五竺に遊びて大乘を尋討し

だいししゆりやそま
大師須梨耶蘇摩に従つて理味を餐受するに頂を摩でて此の經を

そく
属累して言く、仏・日西に隠れ遺光東北を照らす茲の典東北諸国

うえん
に有縁なり汝慎んで伝弘せよ」と文、私に云く天竺よりは此の

にほん
日本は東北の州なり慧心の一乗要決に云く「日本一州・円機

じゆんじゆく
純熟・朝野遠近・同じく一乗に歸し緇素貴賤悉く成仏を期す

ただいっし
唯一師等あつて若し信受せず權とや為ん実とや為ん權為らば

せ
責む可し」浄名に云く「衆の魔事を覺知して其行に随わず善力

ほうべん もつ こころ
方便を以て意に随つて度すと実為らば憐む可し」此経に云く
とうらいせ あくにん ぶつせつ いちじよう
「当来世の悪人は仏説の一乗を聞いて迷惑して信受せず法を
は
破して悪道に墮つ」文。

みようほうれんげきよう
妙法蓮華経・妙は天台玄義に云く「言う所の妙とは妙は

ふかしぎ なず
不可思議に名くるなり」と、又云く「秘密の奥蔵を発く之を称し

て妙と為す」と、又云く「妙とは最勝・修多羅・甘露の門なり

ゆえ
故に妙と言うなり」と、法は玄義に云く「言う所の法とは十界

・十如・権実の法なり」、又云く「権実の正軌を示す故に号して

法と為す」と、蓮華は玄義に云く「蓮華とは権実の法に譬うるな

り」、又云く「久遠の本果を指す之を喩うるに蓮を以てし不二の

円道に会す之を譬うるに華を以てす」文、経は又云く「声仏事を

為す之を称して経と為す」文、私に云く法華以前の諸経に小乗

は心生ろっかいずれば六界・心滅こころめつすれば四界なり、通教つうきょう以て是こくの如ごとし、
爾前にぜんの別円べつえんの二教は心生じゅつかいの十界じゅうかいなり小乗しょうじょうの意こころは六道ろくどう・四生ししようの
苦楽しゅじょうは衆生しゅじょうの心より生ならずと習なうなりされば心滅じゅつかいすれば六道ろくどうの
因果いんがは無だきなり、大乘だいじょうの心より十界じゅつかいを生じず、華嚴經けこんきょうに云いく「心
は工たくみなる画師えしの如ごとく種種しゅじゅの五陰ごおんを造いつさいせかい一切世界いっさいせかいの中に法ぶつとして
造つくらざること無し」文、造種種しゅじゅ五陰ごおんとは十界じゅつかいの五陰ごおんなり仏界ぶつを
も心法なをも造つくると習なう心なが過去かこ・現在げんざい・未来みらいの十方じゅつぽうの仏あと顕あらわる
と習なうなり、華嚴經けこんきょうに云いく「若もし人三世さんぜ一切いっさいの仏りようちを了知りようちせんと
欲ほつせば当まさに是かくの如ごとく觀くわんすべし心こころは諸もろの如來もろにを造つくると」法華ほつけ已前いぜん
の經きんのおきては上品じょうぼんの十惡じゅうあくは地獄じごくの引業いんごう・中品ちゅうぼんの十惡じゅうあくは餓鬼がき
の引業いんごう・下品げぼんの十惡じゅうあくは畜生ちくしょうの引業いんごう・五常ごじょうは修羅しゆらの引業いんごう・三歸さんき・
五戒ごかいは人の引業いんごう・三歸さんき・十善じゅうぜんは六欲天りくよくてんの引業いんごうなり、有漏うろの坐禪ざぜん

は色界・無色界の引業・五戒・八戒・十戒・十善戒・二百五十
戒・五百戒の上に苦・空・無常・無我の観は声聞・縁覺の引業
・五戒・八戒乃至三聚淨戒の上に六度四弘の菩提心を發すは
菩薩なり仏界の引業なり、藏通二教には仏性の沙汰なし但菩薩
の發心を仏性と云う、別円二教には衆生に仏性を論ず但し
別教の意は二乗に仏性を論ぜず、爾前の円教は別教に附し
て二乗の仏性の沙汰無し此等は皆☆法なり、今の妙法とは此等
の十界を互に具すと説く時・妙法と申す、十界互具と申す事は
十界の内に一界に余の九界を具し十界互に具すれば百法界な
り、玄の二に云く「又一法界に九法界を具すれば即ち百法界有り」
文、法華經とは別の事無し十界の因果は爾前の經に明す今は
十界の因果互具をおきてたる計りなり、爾前の經意は菩薩をば

仏に成るべししやうもん 声聞は仏に成るまじなんと説けば菩薩は悦びほさつ よろこ 声聞
はなげき人天等にんてんは・おもひもかけずなんとある経もあり、・或はある
二乗にじやうは見思けんじを断じて六道ろくどうを出でんと念おもい菩薩ほさつは・わざと煩惱ぼんのうを
断だんぜず六道ろくどうに生れて衆生しゆじやうを利益りやくせんと念おもふ、・或は菩薩ある ほさつの頓悟とんこ
成仏じやうぶつを見・・或は菩薩ある ほさつの多俱低劫たぐていこの修行しゆぎやうを見・或は凡夫ある ほんぶ往生おうじやう
の旨むねを説けば菩薩ほさつ・声聞しやうもんの為ためには有らずと見て人の不成仏じやうぶつは我
が不成仏じやうぶつ、人の成仏じやうぶつは我が成仏じやうぶつ・凡夫ほんぶの往生おうじやうは我が往生・
聖人しやうにんの見思断けんじは我等凡夫われら ほんぶの見思断けんじとも知らず四十二年をば過すぎ
しなり。

然しかるに今経こんきやうにして十界互具じゆつかいこを談だんずる時・声聞しやうもんの自調自度じちやうじどの身
に菩薩界ぼさつを具ぐすれば六度万行ろくどもんぎやうも修しゆせず多俱低劫たぐていこも経ぬ声聞しやうもんが
諸の菩薩しよのからくして修しゆしたりし無量无边むりやうむへんの難行道なんぎやうどうが声聞しやうもんに

具する間・をもはざる外に声聞が菩薩と云われ人をせむる獄卒

・慳貪なる凡夫も亦菩薩と云はる、仏も又因位に居して菩薩界に

摂せられ妙覺ながら等覺なり、藥草喩品に声聞を説いて云く

「汝等が所行は是れ菩薩の道なり」と、又我等六度をも行ぜざ

るが六度満足の菩薩なる文・經に云く「未だ六波羅蜜を修行す

ることを得ずと雖も六波羅蜜自然に在前しなん」と、我等一戒を

も受けざるが持戒の者と云わるる文・經に云く「是則ち勇猛なり

是則ち精進なり是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く」文。

問うて云く諸經にも悪人が仏に成る華嚴經の調達ちようだつの授記・

普超經の闍王の授記・大集經の婆藪天子の授記・又女人が仏に

成る胎經の釈女の成仏・畜生が仏に成る阿含經の鵠雀こうじゃくの授記

・二乗が仏に成る方等ほうとうだらに經・首楞嚴經等なり、菩薩の成仏

は華嚴經等・具縛の凡夫の往生は觀經の下品下生等・女人の女
身を転ずるは雙觀經の四十八願の中の三十五の願此等は法華經
の二乘・竜女・提婆菩薩の授記に何なるかわりめかある、又
設いかわりめはありとも諸經にても成仏はうたがひなし如何、
答う予の習い伝うる処の法門・此の答に顯るべし此の答に
法華經の諸經に超過し又諸經の成仏を許し許さぬは聞うべし
秘藏の故に顯露に書さず。

問うて曰く妙法を一念三千と言う事如何、答う天台大師・此
の法門を覺り給うて後・玄義十卷・文句十卷・覺意三昧・小止觀
・淨名疏・四念処・次第禪門等の多くの法門を説き給いしかど
も此の一念三千をば談義し給はず、但十界・百界・千如の法門
ばかりにて・おはしませしなり、御年五十七の夏四月の比荊州

の玉泉寺と申す処にて御弟子・章安大師と申す人に説ききかせ
給いし止観十卷あり、上の四帖に猶をしみ給いて但六即・
四種三昧等・計の法門にてありしに五の卷より十境・十乘を立
てて一念三千の法門を書き給へり、此れを妙樂大師末代の人に
勸進して言く「並に三千を以て指南と為す○請うらくは尋ね読ま
ん者心に異縁無かれ」文、六十卷・三千丁の多くの法門も由無し
但此の初の二三行を意得可きなり、止観の五に云く「夫れ一心に
十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十
種の世間を具すれば百法界には即ち三千種の世間を具す此の三千
一念の心に在り」文、妙樂承け釈して云く「当に知るべし身土
一念の三千なり故に成道の時・此の本理に称て一身一念法界に
☆あまねし」文、日本の伝教大師比叡山建立の時・根本中堂の地

を^{たま}引き給^いいし時・地中より舌八つある鑰^{かぎ}を引き出したり、此の鑰^{かぎ}
を^も以て入^に唐^にの時^にに天台大師より第七代妙樂大師の御弟子道^{すい}邃^{すい}
和尚^{わじょう}に値^あい奉^{たてまつ}りて天台の法門^{ほうもん}を伝^たへ給^いいし時、天機^{てんき}秀^{しう}発^{はつ}の人たり
し間道邃和尚悦^{えつ}んで天台の造^{つく}り給^たへる十五の経藏^{きやうぞう}を開^{ひら}き見^みせし
め給^{たま}いしに十四を開^{ひら}いて一の藏^{ぞう}を開^{ひら}かず、其時^{そのとき}伝^{でん}教大師云^いく師
此の一藏^{ぞう}を開^{ひら}き給^{たま}えと請^こい給^{たま}いしに邃和尚云^いく「此の一藏^{ぞう}は開^{ひら}く
可^べき鑰^{かぎ}無^なし天台大師自^{てんだいだいし}ら出^{しゅ}世^せして開^{ひら}き給^{たま}う可^べし」と云云其の時^{そのとき}
伝^{でん}教大師・日本より随^{ずい}身^{しん}の鑰^{かぎ}を以^もて開^{ひら}き給^{たま}いしに此の経藏^{きやうぞう}開^{ひら}け
たりしかば経藏^{きやうぞう}の内より光室に満ちたりき、其^その光の本^{ほん}を尋^{たず}ぬ
れば此の一念三千の文より光を放ちたりしなりありがたき事な
り、其の時^{そのとき}邃和尚は返^{かへ}つて伝^{でん}教大師を礼^{らい}拜^{はい}し給^{たま}いき、天台大師
の後身と云云、依^よつて天台の経藏^{きやうぞう}の所^{しよ}釈^{しゃく}は遺^いり無^なく日本^{にほん}に亘^{わた}り

しなり、天台大師の御自筆の観音經・章安大師の自筆の止観・
今比叡山の根本中堂に収めたり。

一 自性 自力 迦毘羅外道

四性計 二 他性 他力 ☆楼僧伽外道

三 共性 共力 勒娑婆外道

四 無因性 無因力 自然外道

外道に三人あり、一には仏法外の外道九十五種の外道二に附

仏法成の外道 小乗 三には学仏法の外道 大乘の外道なり。今の

法華經は自力も定めて自力にあらず十界の一切衆生を具する自

なる故に我が身に本より自の仏界・一切衆生の他の仏界我が身

に具せり、されば今・仏に成るに新仏にあらず又他力も定めて

他力に非ず他仏も我等凡夫の自具なるが故に又他仏が我等が如く

自に現同げんどうするなり、共と無因は略す。

法華經ほけきょう いぜん已前の諸經しよきょうは十界互具じゅつかいごくを明あかさざれば仏に成らんと願う

には必ず九界を厭いとう九界を仏界に具せざるが故なり、されば必ず

惡を滅ほんのうし煩惱を断じて仏には成ると談だんず凡夫ほんぶの身を仏に具ぐすと云

わざるが故ゆえに、されば人天惡人の身を失うしないて仏に成ると申もうす、

此これをば妙樂大師みょうらくだいしは厭離断九の仏と名なくされば爾前にぜんの經の人人ひとびと

は仏の九界の形を現げんずるをば但ふ仏の不思議ふしぎの神變と思ひ仏の身に

九界が本よりありて現げんずるとは言いわず、されば実を以もつてさぐり

給たまうに法華經ほけきょう いぜん已前には但ごんしや権者の仏のみ有つて実の凡夫ほんぶが仏に成り

たりける事は無きなり、煩惱ぼんのうを断じ九界を厭いとうて仏に成らんと願

うは実には九界を離れたる仏無き故ゆえに往生おうじょうしたる実の凡夫ほんぶも無

し、人界にんかいを離れたる菩薩界ぼさつも無き故ゆえに但法華經の仏の爾前にぜんにして

じゅつかい
十界の形を現して所化^{しよけ}とも能化^{のうけ}とも悪人^{あくにん}とも善人^{ぜんにん}とも外道^{げどう}とも
のたま
言われしなり、実の悪人^{あくにん}・善人^{ぜんにん}・外道^{げどう}・凡夫^{ほんぶ}は方便^{ほうべん}の権^{けん}を行じて
しんじつ
真実の教とうち思いなしてすぎし程に法華經^{ほけきよう}に來つて方便^{ほうべん}にてあ
りけり、實には見思無明^{けんじむみよう}も断ぜざりけり往生^{おうじよう}もせざりけりなん
かくち
と覺知^{かくち}するなり、一念三千^{いちねんさんぜん}は別に委^{くわし}く書^{しる}す可^べし。

此の經には二妙あり釈^{いわ}に云く「此の經は唯^{ただ}二妙を論ず」と一に
そうたいみよう
は相待妙^{そうたいみよう}二には絶待妙^{ぜったいみよう}なり、相待妙^{そうたいみよう}の意^{こころ}は前の四時^{いちだい}の一代^{いちだい}
しようきよう
聖教^{しようきよう}に法華經^{ほけきよう}を對して爾前^{にぜん}と之^{これ}を嫌^{きら}い、爾前^{にぜん}をば当分^{とうぶん}と言^い
ほつけ
法華^{ほつけ}を跨節^{かせつ}と申^{もう}す、絶待妙^{ぜったいみよう}の意^{こころ}は一代^{いちだい}聖教^{しようきよう}は即ち法華經^{ほけきよう}なり
かいえ
と開會^{かいえ}す、又法華經^{ほけきよう}に二事あり一には所開^{しよかい}・二には能開^{もうかい}なり
かいじこにゆう
開示悟入^{かいじこにゆう}の文^{ある}・或^{ある}は皆已^{かい}成^{いい}仏道^{じようぶつ}等の文^{ある}、一部^み・八卷^{もんじ}・二十八品^{もんじ}
・六万九千三百八十四字・一一の字の下に皆妙^{みな}の文字^{もんじ}あるべしこ

れ能開もうかいの妙なり、此ほけきの法華經は知らずして習ならい談だんずる者は但爾前にぜん

の經りやくの利益なり、阿含經開會あこんきようかいえの文は經いわに云く「我が此の九部の法

は衆生しゅじように隨順ずいじゆんして説く大乘だいじように入るに為本いはんなり」と云云、華嚴經けこんきよう

・開會かいえの文は一切世間いっさいせけん・天人てんにん及び阿修羅あしゆらは皆謂みなおもえり今の

釈迦牟尼しゃかむに等の文、般若經開會はんにゃきようかいえの文は安樂行品あんらくぎようほんの十八空の文、

觀經等かんきようの往生安樂・開會かうじようあんらくの文は「此ここに於おいて命終みようじゅうし

て即すなわち安樂世界あんらくせかいに往いく」等の文、散善開會さんぜんかいえの文は「一たび南無仏なむぶつ

と稱みなすせし皆已みなすに仏道ぶつどうを成いじき」の文、一切衆生開會いっさいしゅじようかいえの文は「今

・此さんがいの三界みなこは皆是それ我が有しゅじようなり其の中の衆生しゅじようは悉ことごとこく是われ吾が子

なり」、外典開會げてんかいえの文は「若もし俗間經書治世語そっかんきようしよちせいことば言資生しせいの業等を

説みなしかんも皆正法みなしょうほうに順とそつぜん」文、兜率開會とそつかいえの文・人天所開會にんてんしよかいの文

しげきゆへにいださず。

此の経を意得ざる人は経の文に此の経を読んで人天に生ずと説

く文を見・或は兜率・☆利などにいたる文を見・或は安養に生

ずる文を見て穢土に於て法華經を行ぜば經はいみじけれども

行者不退の地に至らざれば穢土にして流転し久しく五十六億七

千万歳の晨を期し・或は人畜等に生れて隔生する間・自の苦

しみ限り無しなんと云云

或は自力の修行なり難行道なり等云云、此れは恐らくは爾前

・法華の二途を知らずして自ら癡闇に迷うのみに非ず一切衆生

の仏眼を閉ずる人なり、兜率を勧めたる事は小乗經に多し少

しは大乗經にも勧めたり西方を勧めたる事は大乘經に多し

此等は皆所開の文なり、法華經の意は兜率に即して十方仏土中

・西方に即して十方仏土中・人天に即して十方仏土中と云云、

法華經は惡人ほけきょうに對しては十界あくにんの惡を説くは惡人・五眼を具しな
んどすれば惡人じゅっかいのきわまりを救い、女人あくにんに即して十界じゅっかいを談ずれ
ば十界じゅっかい皆女人みなにんなる事を談ず、何なんにも法華円実ほっけえんじつの菩提心ぼだいしんを發さん
人は迷まよひの九界ここうへ業力ごうりきに引かるる事無きなり。

此こころの意を存たまいじ給いけるやらん法然上人ほうねんしやうにんも一向念佛いつこうねんぶつの行者ぎやうじやな
がら選せん択ちやくと申もうす文には雜行難行道そうぎやうなんぎやうどうには法華經・大日經等をば
除ところかれたる處もあり委くわしく見よ又慧心えしんの往生要集おうじやうようしゅうにも法華經を
除えしんきたり、たとい法然上人ほうねんしやうにん・慧心えしん・法華經を雜行・難行道と
して末代まつだいの機きに叶かなわずと書き給うとも日蓮にちれんは全くもちゆべから
ず、一代いちだい聖教しやうきやうのおきてに違たがい三世十方さんぜじゆつぽうの仏陀ぶつだの誠言せいげんに違いする
故ゆえにいわうやそのぎなし、而しかに後の人の消息しやうそくに法華經を
難行道・經はいみじけれども末代まつだいの機きに叶かなわず謗そしらばこそ罪つみに

てもあらめ、浄土に至つて法華經をば覚るべしと云云、日蓮が心
は何にも此の事はひが事と覚ゆるなりかう申すもひが事にや有ら
ん、能く能く智人に習う可し。

しょうか
正嘉二年二月十四日 日蓮撰

◆五六 一念三千理事

しょうか
正嘉二年三十七歳御作

4

06P

十二因縁図、問う流転の十二因縁とは何等ぞや答う一には無明
・俱舎に云く「宿惑の位は無明なり」文、無明とは昔愛欲の煩惱
起りしを云うなり、男は父に瞋を成して母に愛を起す、女は母
に瞋を成して父に愛を起すなり俱舎の第九に見えたり、二には行
・俱舎に云く「宿の諸業を行と名く」と文、昔の造業を行とは
云うなり業に二有り一には牽引の業なり我等が正く生を受く可き

業を云うなり、二には円満えんまんの業なり余の一切いっさいの造業ぞうぎょうなり所謂いわゆる足を折り手を切る先業せんごうを云うなり是は円満えんまんの業なり、三には識ぐしや・俱舍いかわに云く「識まさしとは正く生を結する蘊おんなり」文、正く母の腹の中に入る時の五蘊おんなり、五蘊おんとは色・受・想・行・識またごおんなり亦五陰とも云うなり、四には名色みょうしき・俱舍ぐしやに云く「六処みょうしきの前は名色なり」文、五には六処・俱舍ぐしやに云く「眼等の根を生ずるより三和の前は六処なり」文、六処とは眼・耳鼻・舌・身・意の六根ろっこんしゅつたい出来するを云うなり、六には触そく・俱舍ぐしやに云く「三受の因ことの異なるに於おいて未いまだ了知りょうちせざるを触なずと名く」文、火は熱しとも知らず水は寒しとも知らず刀は人を切る物とも知らざる時なり、七には受・俱舍ぐしやに云く「婬愛いんあいの前いわに在るは受なり」文、寒熱かんねつを知つて未いまだ婬欲いんよくを發おこさざる時なり、八には愛・俱舍ぐしやに云く「資具しきぐと婬むさぼとを貪るは愛なり」

文、女人を愛して姪欲等を發すを云うなり、九には取・俱舎に

云く「諸の境界を得んが為に☆く

馳求するを取と名く」文、今世に有る時世間を営みて他人の物を

貪り取る時を云うなり、十には有・俱舎に云く「有は謂く正しく

能く当有の果を牽く業を造る」文、未来又此くの如く生を受く

可き業を造るを有とは云うなり、十一には生・俱舎に云く「当の

有を結するを生と名く」文、未来に正く生を受けて母の腹に入る

時を云うなり、十二には老死・俱舎に云く「当の受に至るまでは

老死なり」文、生老死を受くるを老死憂悲苦惱とは云うなり。

問う十二因縁を三世兩重に分別する方如何、答う無明と行とは

過去かこの二因いんねんなり識しきと名色みょうしきと六入ろくにゅうと触しょくと受じゆとは現在げんざいの五果ごこなり愛

と取とと有あとは現在げんざいの三因さんいんなり生せいと老死らうしとは未来みらいの兩果らうこなり、私の

略りやく頌じゆに云いく過去かこの二因いんねん無む明行みやうぎやう現在げんざいの五果ごこ識しき名色みょうしき六入ろくにゅう触受しょくじゆ現在げんざいの三因さんいん

愛取あいと有あ未来みらいの兩果らうこ生老死せいらうしと、問う十二因縁流轉りゅうてんの次第しだい如何、答う無明むみやう

は行ぎやうに縁えんたり行ぎやうは識しきに縁えんたり識しきは名色みょうしきに縁えんたり名色みょうしきは六入ろくにゅうに縁

たり六入ろくにゅうは触しょくに縁えんたり触しょくは受じゆに縁えんたり受じゆは愛あいに縁えんたり愛あいは取とに縁

たり取とは有あに縁えんたり有あは生せいに縁えんたり生せいは老死憂悲苦惱らうしゆひくのうに縁えんたり

是これ其その生死しやうじ海かいに流轉りてんする方かなり此この如ごとくして凡夫ほんぷとは成なるな

り、問う還滅げんめつの十二因縁いんねんの様如何答う無明滅むみやうめつすれば則ち行滅ぎやうめつす

行滅ぎやうめつすれば則ち識滅しきめつす識滅しきめつすれば則ち名色滅みょうしきめつす名色滅みょうしきめつすれば

則ち六入滅ろくにゅうめつす六入滅ろくにゅうめつすれば則ち触滅しょくめつす触滅しょくめつすれば則ち受滅じゆめつす

受滅じゅめつすれば則ち愛滅すなわ あいめつす愛滅あいめつすれば則ち取滅すなわ しゅめつす取滅しゅめつすれば則ち有滅すなわ ゆうめつ

す有滅ゆうめつすれば則ち生滅すなわ しょうめつす生滅しょうめつすれば則ち老死憂悲苦惱滅すなわ ろうしゆうひくのうす、

是れ其その還滅げんめつの様なり仏は還かえつて煩惱ぼんのうを失うしなつて行く方なり私ひそかに

云く中有いわ ちゅううの人には十二因縁具いんねんつぶさに之無これなし又天上てんじようにも具つぶさには之無これなくく

又無色界むしっかいにも具つぶさには之無これなし。

一念三千理事いちねんさんぜん 十如是じゆのぜとは如是相によぜそうは身なり可玄二に云く相以て外に抛る竟て別つし文玄二に云く性以て内に抛る自分 如是体によぜたいは身と心と

文、如是性によぜしやうは心なり改玄二に云く性以て内に抛る自分めず文玄二に云く性以て内に抛る自分 如是是によぜたいは身と心と

なり名玄二に云く主質をけて体となす文、如是力によぜりきは身と心となり忍止に云く力は堪を用となす文によぜさ如是作によぜさは身と

心となり止に云く建立 文、如是因によぜいんは心なり因止に云く因とは果を招くをと為なす文、如是縁によぜえん止

に云く縁は縁業を助くるに由よる文、如是果によぜか止いに云く果は剋獲を果なと為なす文、如是報によぜほう因止に云く報は酬と曰いう

文、如是本末究竟等によぜほんまつくきやう 玄二に云く初めの相を本と為なし後ちの報を末と為なす文、三種世間せけんとは五陰世間ごおんせけん

に五陰世間せけんと名なくるなり文、衆生世間しゅじようせけんるを得る故に衆生世間しゅじようせけんと名なくるなり文、

国土世間こくどせけんじて国土世間こくどせけんと称す文、五陰ごおんとは新訳しんやくには五蘊おんと云うなり陰

とは聚集じゅしゅうの義なり一に色陰・五色これ是なり・二に受陰・領納りやうのう是な

り・三に相陰・俱舍ぐしゃに云く想は像を取るを体なと為すと文・四に行

陰・造作そうさく是行なり・五に識陰・了別こ是れ識なり止の五に婆沙を引

いて云く識・先ず了別いし次に受は領納りやうのうし・相は相貌そうみようを取り・行

は違従いじゆうを起し・色は行に由よつて感ずと。

百界・千如・三千世間の事、十界互具即百界と成るなり、地獄じこく

十如是五陰世間ごおんせけん是国土世間こくどせけん下赤鉄、餓鬼がき十如是五陰世間ごおんせけん十如是国土世間こくどせけん

十如是畜生ちくしゅう十如是五陰世間ごおんせけん十如是国土世間こくどせけん水陸空修羅しゅうら十如是五陰世間ごおんせけん十如是

国土世間こくどせけん海畔底、人間にんげん十如是、五陰世間ごおんせけん十如是国土世間こくどせけん弥四州、天てん十如是

五陰世間ごおんせけん十如是国土世間こくどせけん十如是宮殿声聞しょうもん十如是五陰世間ごおんせけん十如是国土世間こくどせけん

同居土、縁覺えんかく十如是五陰世間ごおんせけん十如是国土世間こくどせけん同居土、菩薩ぼさつ十如是五陰世間ごおんせけん

こくとせけん 十如是国土世間 ほうべんじつぼう 方便実報、 衆生世間 仏 十如是五陰世間 十如是国土世間 寂光土。 こくとせけん 十如是

止観しかんの五いに云く「心縁がと合すなわれば則ち三種世間・三千さんぜんの性相しょうそう

皆みな・心おこより起る「文、弘ぐの五いに云く「故ゆえに止観しかんに正まさしく観法かんぼうを明

すに至いたつて並ならびに三千さんぜんを以もつて指南しなと為なす、乃すなわち是これ終窮究竟しゅうぐくきやうの極

説ゆえなり故ゆえに序ゆえの中に説せつ己心中しんちゅう所行しよぎやうの法門ほうもんと云まことう良ゆえあに以もつて有あるなり、

請こうう尋たずねて読よまん者心しんに異縁いえん無なかれ」文、又云く「妙境いねんさんぜんの一念三千いねんさんぜん

を明あかさずんば如何なんぞ一いっさいに一切いっさいを攝しることを識しる可べけん、三千さんぜんは

一念いちねんの無明むみやうを出いでず是かくの故ゆえに唯苦ただ因苦果くかのみ有あり」文、又云く

「一切いっさいの諸業しよ十界じゆつかい・百界ひやつかい・千如せんによ・三千世間さんぜんせけんを出いでざるなり」文、

籤せんの二いに云く「仮すなわは即ち衆生しゆじやう・実すなわは即ち五陰ごおん及び国土こくと・即ち三

世間せけんなり千せんの法みは皆三ゆえなり故ゆえに三千有さんぜん」文、弘ぐの五いに云く「一念いちねん

の心おに於おて十界じゆつかいに約おせざれば事あを収あむること☆からず三諦さんたいに約

せざれば理を摂ること周あまねからず十如を語かたらざれば因果備いんがそなわらず三世間せけん無えんば依正えしよう尽つきず」文、記の一いに云く「若三千さんぜんに非あらざれば摂ること・からず若し円心えんしんに非あらざれば三千を摂せつせず」文、玄の二いに云く「但衆生しゅじょう法は太はなだ広ふつく仏法は太はなだ高たかし初学おひに於おて難なんと為なし心は則すなち易やすしと為なす」文、弘の五ごに云く「初に華嚴けこんを引くことは心の工えなる画師えしの如ごとく種種しゅじゅの五陰ごおんを造いつさいせかい一切世界いっさいせかいの中に法として造らざること無し、心の如ごとく仏も亦爾またしかなり仏の如ごとく衆生しゅじょうも然しかなり心仏しんぶつ及び衆生しゅじょう是の三差別さんさべつ無し若し人三世一切さんぜいっさいの仏を求め知らんと欲ほつせば当まさに是かくの如ごとく觀かんずべし心は諸もろの如來もろもろにやらいを造る」と、金☆論こんべいろんに云く「実相じつそうは必ず諸法しよほう・諸法しよほうは必ず十如・十如は必ずじゅっかい じゅっかい

十界・十界は必ず身土しんとなり」

三身釈さんじんしゃくの事、先ほつず法身ほつしんとは大師大經だいしだいきやうを引いて「一切いっさいの世諦せたいは

も 若し如來に於ては即ち是第一義諦なり衆生顛倒して仏法に非ず
と謂えり」と釈せり、然れば則ち自他・依正・魔界・仏界・染淨
・因果は異なれども悉く皆諸仏の法身に背く事に非ざれば善星
比丘が不信なりしも楞伽王の信心に同じく般若蜜外道が意の
邪見なりしも須達長者が正見に異らず、即ち知んぬ此の法身の本
は衆生の当体なり、十方諸仏の行願は實に法身を証するなり、
次に報身とは大師の云く「法如如の智如如眞實の道に乗じ來つて
妙覺を成ず智如の理に称う理に従つて如と名け智に従つて來と
名く即ち報身如來なり盧舍那と名け此には淨滿と翻ず」と釈せり、
此れは如如法性の智・如如眞實の道に乗じて妙覺究竟の理智・
法界と冥合したる時・理を如と名く智は來なり。

◆五五

十如是事

正嘉二年

三十七歲御作

四一〇頁

我が身が三身即一の本覺の如来にてありける事を今經に説いて云く如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等文、初めに如是相とは我が身の色彩に顕れたる相を云うなり是を応身如来とも又は解脱とも又は仮諦とも云うなり、次に如是性とは我が心性を云うなり是を報身如来とも又は般若とも又は空諦とも云うなり、三に如是体とは我が此の身体なり是を法身如来とも又は中道ともほつしよう法性とも寂滅とも云うなり、されば此の三如是を三身如来とは云うなり此の三如是が三身如来にて・おはしましけるを・よそに思ひへだてつるがはや我が身の上にてありけるなり、かく知りぬるを法華經をさとれる人とは申すなり此の三如是を本として是よ

りのこりの七つの如じゆのぜはいでて十如じゆのぜ是とは成りたるなり、此の
十如じゆのぜ是が百界にも千如さんぜんせけんにも三千世間にも成りたるなり、かくの
ごとく如く多くの法門ほうもんと成りて八万法蔵はちまんほうぞうと云はるれどもすべて只ただ一つの
三諦さんたいの法にて三諦さんたいより外には法門ほうもんなき事なり、其そのの故は百界と云
うは仮諦けたいなり千如と云うは空諦くうたいなり三千と云うは中諦ちゅうたいなり空と
仮と中とを三諦さんたいと云う事なれば百界・千如・三千世間まで多くの
法門ほうもんと成りたりと云へども唯一ただ一つの三諦さんたいにてある事なり、されば
始の三如こ是の三諦さんたいと終の七如こ是の三諦さんたいとは唯一ただ一つの三諦さんたいにて始と
終と我が一身の中の理にて唯一ただ一物に
て不可思議ふかしぎなりければ本と末とは究竟くきようして等しとは説き給へるな
り、是これを如によぜ是本末究竟等とは申もうしたるなり、始の三如によぜ是を本とし
終の七如によぜ是を末として十の如によぜ是にてあるは我が身の中の三諦さんたいにて

あるなり、此の三諦を三身如来とも云へば我が心身より外には
善惡ぜんあくに付けてかみすぢ計りの法もなき物をされば我が身が頓やがて
三身即一の本覺ほんがくの如来によらいにてはありける事なり、是をよそに思うを
衆生しゅじょうとも迷まよいとも凡夫ほんぶとも云うなり、是を我が身の上と知りぬ
るを如来によらいとも覺さとりとも聖人しょうにんとも智者ちしやとも云うなり、かう解さり明あきらか
に觀かんずれば此の身頓やがて今生こんじょうの中に本覺ほんがくの如来によらいを顯あらわはして
即身成仏そくしんじょうぶつとはいはるるなり、譬たとえば春夏しゅんか・田たを作りうへつれば
秋冬しゅうとうは蔵くらに収おさめて心のままに用うるが如ごとし春はるより秋あきをまつ程は
久しき様なれども一年の内に待ち得るが如ごとく此の覺さとりに入つて仏
を顯あらわはす程は久しき様なれども一生の内に顯あらわはして我が身が三身さんじん
即一の仏となりぬるなり。

此の道に入ぬる人にも上中下じょうちゆうげの三根はあれども同じく一生の

内に顕はすなり、上根じょうこんの人は聞く所にて覺さとを極きめて顕はす、中根ちゅうこんの人は若もしは一日・若もしは一月・若もしは一年に顕はすなり、下根げこんの人はのびゆく所なくつてつまりぬれば一生の内に限りたる事なれば臨終りんじゅうの時に至りて諸もろもろのみえつる夢も覺さとてうつつになりぬるが如ごとく只今ただまでみつる所の生死妄想しやうじもうそうの邪思しやひがめの理はあと形もなくなりて本覺ほんがくのうつつの覺さとにかへりて法界ほっかいをみれば皆寂光みなじやうこうの極樂ごくらくにて日來賤ひごろいやしと思ひし我が此の身が三身即一さんじんの本覺ほんがくの如来にょらいにてあるべきなり、秋のいねには早わせと中と晩おくとの三のいね有あれれども一年が内に収おさむるが如ごとく、此これも上中下じやうちゅうげの差別さべつある人なれども同じく一生の内に諸仏如来しよぶつにょらいと一体不二に思い合せてあるべき事なり。

妙法蓮華經みょうほうれんげきようの体のいみじくおはしますは何様いかようなる体にて・お

たず

しんしよ

はちよう

びやくれんげ

はしますぞと尋ね出してみれば我が心性の八葉の白蓮華にてありける事なり、されば我が身の体性を妙法蓮華經とは申しける事

みようほうれんげきよう

もう

なれば經の名にてはあらずして・はや我が身の体にてありけると

知りぬれば我が身頓て法華經にて法華經は我が身の体をよび顯し

やが

ほけきよう

ほけきよう

あらわ

たまひ

みことば

給いける仏の御言にてこそありければやがて我が身三身即一の

ほんがく

によらい

さとり

むし

このかた

本覺の如来にてあるものなり、かく覺ぬれば無始より已来今ま

で思いならわしし・ひが思いの妄想は昨日の夢を思いやるが如く

もうそつ

ごと

・あとかたもなく成りぬる事なり、是を信じて一遍も南無

これ

いっぺん

なむ

妙法蓮華經と申せば法華經を覺て如法に一部をよみ奉るにてあ

みようほうれんげきよう

ほけきよう

さとり

たてまつ

るなり、十遍は十部・百遍は百部・千遍は千部を如法によみ奉る

たてまつ

にてあるべきなり、かく信ずるを如説修行の人とは申すなり、

によせつしゆぎよう

もう

なむみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經。

◆五七

いちねんさんぜんほうもん
一念三千法門

しょうか
正嘉二年

三十七歳御作

412P

ほけきょう 法華經の余經に勝れたる事何事ぞ此の經に一心三觀・一念三千

と云う事あり、薬王菩薩・漢土に出世して天台大師と云われ此の

ほうもん 法門を覚り給いしかども先ず玄義十卷・文句十卷・覺意三昧・小

しかん 止觀・浄名疏・四念処・次第禪門等の多くの法門を説きしかど

も此の一念三千の法門をば談じ給はず百界・千如の法門計りな

り、御年五十七の夏四月の比・荊州玉泉寺と申す処にて御弟子

しょうあん 章安大師に教え給ふ止觀と申す文十卷あり、上四帖に猶秘し

たまい 給いて但六即四種三昧等計りなり、五の卷に至つて十境・十乘・

いちねんさんぜん 一念三千の法門を立て夫れ一心に具す等と云云是より二百年後に

みょうらく 妙樂大師釈して云く「当に知るべし身土一念の三千なり故に

じょうどう 成道の時・此の本理に称て一身一念法界に遍し」と云云、此の

いちねんさんぜん いっしんさんかん 一念三千・一心三觀の法門は法華經の一の卷の十如是より起れ

り、文の心は百界・千如・三千世間云云、さて一心三觀と申すは

余宗は如是とあそばす是れ僻事にて二義かけたり天台・南岳の

御義を知らざる故なり、されば当宗には天台の所釈の如く三遍

読に功德まさる、第一に是相如と相性体力以下の十を如と云ふ如

と云うは空の義なるが故に十法界皆空諦なり是を読み觀ずる時は

我が身即・報身如来なり八万四千又は般若とも申す、第二に

如是相是れ我が身の色形顯れたる相なり是れ皆仮なり相性体力以

下の十なれば十法界皆仮諦と申して仮の義なり是を読み觀ずる時

は我が身即・応身如来なり又は解脱とも申す、第三に相如是と云

うは中道と申して仏の法身の形なり是を読み觀ずる時は我が身

即・法身如来なり又は中道とも法性とも涅槃とも寂滅とも

申す、此の三を法報応の三身とも空仮中の三諦とも法身・般若・解脱の三徳とも申す此の三身如来全く外になし我が身即・三徳究竟の体にて三身即一身の本覺の仏なり、是をしるを如来とも聖人とも悟とも云う知らざるを凡夫とも衆生とも迷とも申す。

十界の衆生・各互に十界を具足す合すれば百界なり百界に

各各十如を具すれば千如なり、此の千如是に衆生世間・国土

世間・五陰世間を具すれば三千なり、百界と顕れたる色相は皆総

て仮の義なれば仮諦の一なり千如は総て空の義なれば空諦の一な

り三千世間は総じて法身の義なれば中道の一なり、法門多しと

雖も但三諦なり此の三諦を三身如来とも三徳究竟とも申すなり始

の三如是は本覺の如来なり、終の七如是と一体にして無二無別な

れば本末究竟等とは申すなり、本と申すは仏性・末と申すは

未^み顕^{けん}の仏・九界の名なり究竟^{くきやう}等と申^{もう}すは妙^み覺^{やう}究竟^{くきやう}の如^に來^よと理^り即^{そく}
の凡^{ほん}夫^ぶなる我^{われ}等^らと差別^{さべつ}無^なきを究竟^{くきやう}等^らとも平^び等^{やう}大^{だい}慧^えの法^ほ華^け經^{きやう}とも
申^{もう}すなり、始^しの三^{さん}如^に是^ぜは本^{ほん}覺^{がく}の如^に來^よなり本^{ほん}覺^{がく}の如^に來^よを悟^わり出^いし
給^{たま}へる妙^み覺^{やう}の仏なれば我^{われ}等^らは妙^み覺^{やう}の父^ふ母^ぼなり仏は我^{われ}等^らが所^{しよ}生^{しやう}
の子なり、止^いの一^いに云^いく「止^{すな}は則^{すな} 仏^{そく}の母^ぼ・觀^くは即^{そく} 仏^{そく}の父^ふなり」
と云^た云^と、譬^{たと}えば人^{ひと}十^{じふ}人^{にん}あらんずるが面^{めん}面^{めん}に藏^{ざう}藏^{ざう}に宝^{ほう}をつみ我^{われ}が藏^{ざう}
に宝^{ほう}のある事^{こと}を知らずかつへ死^ししこごへ死^しす、・或^{ある}は一人^{ひとり}・此^この
中^{ちゆう}にかしこき人^{ひと}ありて悟^わり出^いすが如^{ごと}し九^{きゅう}人^{にん}は終^{つひ}に知^しらず、然^{しか}るに
・或^{ある}は教^{きやう}えられて食^{しょく}し・或^{ある}はくくめられて食^{しょく}するが如^{ごと}し、弘^{くわう}の一^{いつ}
の止^し觀^{くわん}の二^に字^じは正^{まさ}しく聞^{もん}體^{たい}を示^しす聞^{もん}かざる者^{もの}は本^{ほん}末^{まつ}究竟^{くきやう}等^らも徒^{いた}ら
か、子^{けん}なれども親^{じん}にまざる事^{こと}多^{おほ}し重^{ちゆう}華^{かう}はかたくなはしき父^ふを敬^{けい}
て賢^{けん}人^{じん}の名^なを得^えたり、沛^{はい}公^{こう}は帝^{てい}王^{わう}と成^なつて後^ごも其^その父^ふを拜^そす其^その

敬われし父をば全く王といはず敬いし子をば王と仰ぐが如し、
其れ仏は子なれども賢くましまして悟り出し給へり、凡夫は親
なれども愚癡にして未だ悟らず委しき義を知らざる人・毘盧の
頂上をふむなんと悪口す大なる僻事なり。

一心三觀に付いて次第の三觀・不次第の三觀と云う事あり委く
申すに及ばず候、此の三觀を心得すまし成就したる処を華嚴經
に三界唯一心と云云、天台は諸水入海とのぶ、仏と我等と総て
一切衆生・理性一にて・へだてなき

を平等大慧と云うなり、平等と書いてはおしなべてと読む、此
の一心三觀・一念三千の法門・諸經にたえて之無し法華經に
遇わざれば争か成仏す可きや、余經には六界八界より十界を明
せどもさらに具を明かさず、法華經は念念に一心三觀・一念三千

の謂を觀いわれずれば我が身本覺ほんかくの如來にょらいなること悟り出いだされ無明むみょうの雲

晴はつしやうれて法性ほつしやうの月明あきらかに妄想もうそうの夢醒さめて本覺ほんかくの月輪ふぼいさぎよく父母ふぼ

所生しよしやうの肉身・煩惱具縛ぼんのうぐばくの身・即本有常住そくほんぬじやうじゅうの如來にょらいとなるべし、此

を即身成仏そくしんじやうぶつとも煩惱即菩提ぼんのうそくぼだいとも生死即涅槃しやうじそくねはんとも申もうす、此の時

法界ほつかいを照し見れば悉く中道ちゆうどうの一理いちりにて仏も衆生しゆじやうも一なり、され

ば天台てんだいの所釈しよしゃくに「一色一香中道いちしきいつしやうちゆうどうに非あらざることを無なし」と釈しゃくし給たまへ

り、此の時じゆつぼうは十方世界じふぱうせかい皆寂光淨土みなじやつこうじやうどにて何いずれれの処ところをか弥陀みだやくし藥師

等の淨土じやうどとは云いわん、是これを以もつて法華經ほけきやうに「是この法ほうは法位ほういに住しんじして

世間せけんの相常住じやうじゅうなり」と説とき給たまふさては經をよまずとも心地しんじの

觀念かんねん計ばかりにて成仏じやうぶつす可べきかと思おもいたれば一念三千いちねんさんぜんの觀念かんねんも

一心三觀いっしんさんかんの觀法かんぽうも妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじに納おされり、妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの

五字ごじは又我等われらが一いっしん心に納おさりて候あきけり、天台てんだいの所釈しよしゃくに「此の

妙法蓮華經は本地甚深の奥蔵三世の如來の証得したもう所なり」と釈したり、さて此の妙法蓮華經を唱うる時心中の本覺の仏顯る我等が身と心をば蔵に譬へ妙の一字を印に譬へたり、天台の御釈に「秘密の奥蔵を發く之を稱して妙と為す・権實の正軌を示す故に号して法と為す、久遠の本果を指す之を喩うるに蓮を以てす、不二の円道に會す之を譬うるに華を以てす、声仏事を為す之を稱して經と為す」と釈し給う、又「妙とは不可思議の法を褒美するなり又妙とは十界・十如・権實の法なり」と云云、經の題目を唱うると觀念と一なる事心得がたしと愚癡の人は思い給ふべし、されども天台止の二に而於說默と云へり、説とは經・默とは觀念なり、又四教義の一に云く「但功の唐捐ならざるのみに非ず亦能く理に契うの要なるをや」と云云、天台大師と申すは

薬王菩薩なり此の大師の説而観而と釈し給ふ元より天台の所釈

に因縁・約教・本・迹・観心の四種の御釈あり四種の重を知ら

ずして一しなを見たる人・一向本・迹をむねとし一向観心を面と

す、法華經に法譬因縁と云う事あり法説の段に至つて諸仏出世の

本懐・一切衆生・成仏の直道と定む、我のみならず一切衆生

・直至道場の因縁なりと定め給いしは題目なり、されば天台玄

の一に「衆善の小行を会して広大の一乗に歸す」と広大と申す

は残らず引導し給うを申すなり、仮使釈尊一人本懐と宣べ給う

とも等覚以下は仰いで此の經を信ず可し況や諸仏出世の本懐な

り、禪宗は觀心を本懐と仰ぐとあれども其は四種の一面なり、

一念三千・一心三觀等の觀心計りが法華經の肝心なるべくば題目

に十如是を置くべき処に題目に妙法蓮華經と置かれたる上は

子細しさいに及およばず、又当世とうせの禪宗ぜんしゅうは教外別伝きょうげべつでんと云いい給たまうかと思おもへば
又捨すられたる円覚經えんかく等の文ぶんを引ひかるる上じつきようは実經じつぎようの文ぶんに於おいて御綺おいろえ
に及およぶべからず候こう、智者ちしやは読誦どくじゆに觀念かんねんをも並ならぶべし愚者ぐしやは題目だいもく
計ばかりを唱なふとも此この理りに會あう可べし、此この妙法蓮華經みようほうれんげきようとは我等われらが
心性しんしよ・總しよじては一切衆生いっさいしゆじようの心性しんしよ八葉はちようの白蓮華びやくくれんげの名ななり是これを教しよえ
給たまふ仏ぶつの御詞ごことばなり、無始むしより以い来らい・我われが身中しんしよの心性しんしよに迷まよひて生死しやうじ
を流轉るてんせし身今こん・此この經きやうに値あひ奉たてまつて三身さんじん即すなはち一いつの本覺ほんかくの如來にょらいを
唱となうるに顯あらわれて現世げんせに其内証ないしやうじようぶつ成仏じやうぶつするを即身成仏そくしんじやうぶつと申もうす、死
すれば光くわうを放はなつ是これ外用じやうぶつの成仏じやうぶつと申もうす
來世らいせ得作さぶつ仏ぶつとは是これなり、略拳經題りやくくきやうだい・玄収けんしゆ一部いっぺんとて一いつ遍べんは一いつ部ぶ云
云い、妙法蓮華經みようほうれんげきようと唱となうる時しんしよ心性しんしよの如來顯にょらいあらわる耳みみにふれし類たぐいは無量むりよう
阿僧祇劫あそぎこうの罪つみを滅いす一いち念ねんも隨喜ずいきする時そくしんじやうぶつ即身成仏そくしんじやうぶつす縱たとひ信しんぜざれ

ども種と成り熟と成り必ず之に依て成仏す、妙樂大師の云く

「若は取・若は捨・耳に經て縁と成る、或いは順・或いは違

終いに斯れに因つて脱す」と云云、日蓮云く若取・若捨・或

順・或違の文肝に銘ずる詞なり法華經に若有聞法者等と説れ

たるは是か、既に聞く者と説れたり觀念計りにて成仏すべくば

若有觀法者と説かるべし、只天台の御料簡に十如是と云うは

十界なり此の十界は一念より事起り十界の衆生は出来たりけ

り、此の十如是と云は妙法蓮華經にて有けり此の娑婆世界は耳

根得道の国なり以前に申す如く当知身土と云云、一切衆生の身

に百界・千如・三千世間を納むる謂を明が故に是を耳に触るる

一切衆生は功德を得る衆生なり、一切衆生と申すは草木・

瓦礫も一切衆生の内なるか、有情、抑草木は何ぞ金☆論に云く

「一草一木・一礫一塵・各一仏性・各一因果・具足縁了」等と云云、法師品の始に云く「無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩羅伽・人と非人と及び比丘・比丘尼、妙法蓮華經の一偈・一句を聞いて乃至一念も随喜せん者は我皆阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く」と云云、非人とは総じて人界の外一切有情界として心あるものなり況や人界をや、法華經の行者は如説修行せば必ず一生の中に一人も残らず成仏す可し、譬えば春夏田を作るに早晚あれども一年の中には必ず之を納む、法華の行者も上中下根あれども必ず一生の中に証得す、玄の一に云く「上中下根皆記☆を与う」と云云、觀心計りにて成仏せんと思ふ人は一方かけたる人なり、況や教外別伝の坐禪をや、法師品に云く「薬王多く人有て在家・出家の菩薩の道

を行ぜんに若し是の法華經を見聞し読誦し書持し供養すること得
ること能わ^{あた}ずんば当に知るべし是の人は未だ善く菩薩の道を行ぜ
ず、若し是の經典を聞くこと得ること有らば乃ち能善菩薩の道
を行ずるなり」と云云、觀心計りにて成仏すべくんば争か見聞
読誦と云わんや、此の經は専ら聞を以て本と為す凡此の經は惡人
・女人・二乘・闡提を簡^{えら}ばず故に皆成仏道とも云ひ又平等大慧
とも云う、善惡不二・邪正一如と聞く処にやがて内証成仏す
故に即身成仏と申し一生に証得するが故に一生妙覺と云ふ、
義を知らざる人なれども唱ふれば唯仏と仏と悦び給ふ我即歡喜・
諸仏亦然云云、百千合せたる藥も口にのまざれば病愈えず蔵に宝
を持ども開く事をしらずしてかつへ懷に藥を持ても飲まん事をし
らずして死するが如し、如意宝珠と云う玉は五百弟子品の此の經

の徳も又此^かくの如^{ごと}し、観^{かん}心^{じん}を並べて読めば申^{もう}すに及^{およ}ばず観^{かん}念^{ねん}せず
と雖^{いえど}も始^{もと}に申^{もう}しつるごとく所謂^{いわずゆる}諸^{しよ}法^{ほう}如^に是^ぜ相^{そう}如^{じゆ}云^{うん}云^んと読^よむ時^{とき}は如^{ごと}は
空^{くう}の義^ぎなれば我^{われ}が身^みの先^{せん}業^{ごう}にうくる所^{ところ}の相^{さう}性^{じやう}体^{たい}力^{りき}其^その具^ぐする所^{ところ}の
八^{はち}十^{じゆ}八^{はち}使^しの見^{けん}惑^{わく}・八^{はち}十^{じゆ}一^{いつ}品^{ひん}の思^し惑^{わく}・其^その空^{くう}は報^{ほう}身^{しん}如^に来^{らい}なり、所謂^{いわずゆる}
諸^{しよ}法^{ほう}如^に是^ぜ相^{そう}云^{うん}云^んとよめば是^これ仮^かの義^ぎなれば我^{われ}が此^この身^み先^{せん}業^{ごう}に依^よつ
て受^うけたる相^{さう}性^{じやう}体^{たい}力^{りき}云^{うん}云^ん其^その具^ぐしたる塵^{じん}沙^{じゃ}の惑^{わく}悉^{ことごとく}く即^{すく}身^{しん}心^{しん}身^み如^に来^{らい}
なり、所謂^{いわずゆる}諸^{しよ}法^{ほう}如^に是^ぜと読^よむ時^{とき}は是^これ中^{ちゆう}道^{どう}の義^ぎに順^{したが}じて業^{ごう}に依^よつ
て受^うくる所^{ところ}の相^{さう}性^{じやう}等^{とう}云^{うん}云^ん、其^そに随^{したが}いたる無^む明^{みやう}皆^{みな}退^{たい}いて即^{すく}身^{しん}法^{ほう}身^{しん}の
如^に来^{らい}と心^{しん}を開^{ひら}く、此^この十^{じゆ}如^{じゆ}是^ぜ・三^{さん}転^{てん}によまる事^{こと}・三^{さん}身^{しん}即^{すく}一^{いつ}身^{しん}・
一^{いつ}身^{しん}即^{すく}三^{さん}身^{しん}の義^ぎなり三^{さん}に分^わるれども一^{いつ}なり一^{いつ}に定^{さだ}まれども三^{さん}な
り。

◆五八

十法界事

元年

三十八歳御作

417p

にじようさんがい
二乗三界を出でざれば即ち十法界の数量を失う云云、問う

じゅっかいしぐ

ろくどうてん

しやうじ

しゅつり

へんにやく

十界互具を知らざらん者六道流轉の分段の生死を出離して変易

の土に生ず可きや、答う二乗は既に見思を断じ三界の生因無し底

よ

に由つてか界内の土に生る事を得ん是の故に二乗永く六道に生ぜ

ろくどう

ず、故に玄の第二に云く「夫れ変易に生るに則ち三種有り三蔵

ゆえ

にじよう

つうきよう

さんじよう

べつきよう

かく

ごと

みな

の二乗・通教の三乗・別教の三十心」已上此の如き等の人は皆

にじよう

へんにやく

ろくどう

ふじよう

こくど

通惑を断じ変易の土に生ずることを得て界内分段の不浄の国土

に生ぜず。

なん

いわ

しょうじよう

の教は但是れ心生の六道を談じて是れ心具の

ろくどう

こ

しんぐ

難じて云く小乗の教は但是れ心生の六道を談じて是れ心具の

ろっかい

だん

六界を談ずるに非ず、

はの故に二乗は六界を顕さず心具を談ぜず

かく

ゆえ

にじよう

ろっかい

あらわ

しんぐ

なん

ろっかい

けんじ

を断じて六道を出ず可きや、

ろくどう

べ

ゆえ

じゆりようほん

に

云何ぞ但六界の見思を断じて六道を出ず可きや、故に寿量品に

云える一切世間・天人・阿修羅とは爾前・迹門・兩教の二乗・
三教の菩薩並に五時の円人を皆天人・修羅と云う豈に未断見思の
人と云うに非ずや、答う十界互具とは法華の淵底此の宗の冲微な
り四十余年の諸経の中には之を秘して伝えず、但し四十余年の
諸の經教の中に無数の凡夫見思を断じて無漏の果を得能く二種
の涅槃の無為を証し塵数の菩薩・通別の惑を断じ頓に二種の生死
の縛を超ゆ、無量義經の中に四十余年の諸経を挙げて未顕真実
と説くと雖も而も猶爾前・三乗の益を許す、法華の中に於て
正直捨方便と説くと雖も尚見諸菩薩授記作仏と説く此くの如き
等の文爾前の説に於て当分の益を許すに非ずや、但し爾前の
諸経に二事を説かず謂く実の円仏無く又久遠実成を説かず故に
等覺の菩薩に至るまで近成を執する思い有り此の一辺に於て

天人てんにんと同じく能迷のうめいの門かどを挙げあげ生死しやうじ煩惱ぼんのう・一時いちじに斷壞だんねすることをを証しやうせず故ゆゑに唯ただ未顯みけん真実しんじつと説しやうけり、六界ろっかいの互具ごこを明あかさざるが故ゆゑに出いず可べからずとは此なんの難はなはだ甚ふだ不可ふかなり、六界ろっかい互具ごこせば即すなわち十界互具じゆっかいごこす可べし何なんとなれば権果こんかの心生しんじやうとは六凡ろっかいの差別さべつなり心生しんじやうを觀かんずるに何なんぞ四聖ししやうの高下こうげ無なからんや。

第三重の難に云く所立の義誠に道理有るに似たり委く一代
しょうきよう ぜんご かんが ほつけほんもん かんじん ちえ
聖教の前後を☆うるに法華本門並に觀心の智慧を起さざれば
えんぶつ
円仏と成らず、故に実の凡夫にして権果だも得ず所以に彼の外道
てんじく い てんどう によらいしゅつせ てんどう
五天竺に出でて四顛倒を立つ、如來出世して四顛倒を破せんが
ため
為に苦・空等を説く此れ則ち外道の迷情を破せんが為なり、
かく ゆえ げどう すなわ げどう まよい
是の故に外道の我見を破して無我に住するは火を捨てて以て水に
したが ごとく
隨うが如し堅く無我を執して見思を断じ六道を出ずると謂えり、
こ まよい こんほん ゆえ しきしん だいしゅつ きようぎよう
此れ迷の根本なり故に色心俱滅の見に住す大集等の經經に
だんじよう
断常の二見と説くは是れなり、例せば有漏外道の自らは得道す
と念えども無漏智に望むれば未だ三界を出でざるが如し、
あ さんがい い いま さんがい い ところあ ぶつきよう
に値わずして三界を出ずるといわば是の処有ること無し小乘
にじよう またまたかく ごとく ろくおんせしよう げどう しょうじよう
の二乗も亦復是くの如し、鹿苑施小の時外道の我を離れて無我の

見に住す此の情を改めずして四十余年草庵に止宿するの思い暫く
も離るる時無し、又大乗の菩薩に於て心生の十界を談ずと雖も
而も心具の十界を論ぜず、又・或る時は九界の色心を断尽して
仏界の一理に進む是の故に自ら念わく三惑を断尽して変易の生
を離れ寂光に生るべしと、然るに九界を滅すれば是れ則ち断見
なり進んで仏界に昇れば即ち常見と為す九界の色心の常住を滅
すと欲うは豈に九法界に迷惑するに非ずや、又妙楽大師の云く
「但し心を観ずと言わば則ち理に称わす」文、此の釈の意は
小乗の観心は小乗の理に称わざるのみ、又天台の文句第九に
云く「七方便並に究竟の滅に非ず」已上、此の釈は是れ爾前の
前三教の菩薩も実には不成仏と云えるなり、但し未顕真実と説
くと雖も三乗の得道を許し正直捨方便と説くと雖も而も

けんしよぼさつじゆきさぶつ
見諸菩薩授記作仏と云うは、天台宗に於て三種の教相有り第二
けどう しじゆう
の化導の始終の時過去の世に於て法華結縁の輩有り爾前の中に
おい しば ほっけ ため さんじやうとうぶん とくどう ゆる いわゆるしじゆくだつ
於て且らく法華の為に三乘当分の得道を許す所謂種熟脱の中の
じゆくやく
熟益の位なり是は尚迹門の説なり、本門觀心の時は是れ実義に
あら いちおうゆる
非ず一往許すのみ、其の実義を論ずれば如来久遠の本に迷い
いちねんさんぜん
一念三千を知らざれば永く六道の流転を出ず可からず、故に釈に
いわ えんじやう
云く「円乗の外を名けて外道と為す」文、又「諸善男子・樂於
とくはつくじゆう
小法・徳薄垢重者」と説く若し爾れば經釈共に道理必然なり、
なん
答う執難有りと雖も其の義不可なり、所以は如来の説教は機に
そなわ むなし これ もっとん しきやう
備りて虚からず是を以て頓等の四教蔵等の四教八機の為に設くる
とくやく
所にして得益無きに非ず、故に無量義經には「是の故に衆生の
とくどうさべつ
得道差別あり」と説く、誠に知んぬ「終に無上菩提を成ずること

を得ず」と説くと雖も而も三法・四果の益無きに非ず、但是れ
速疾頓成と歴劫迂回との異なるのみ、是れ一向に得道無きに
非ざるなり、是の故に・或は三明六通も有り・或は普現色身の
菩薩も有り縦い一心三觀を修して以て同体の三惑を断ぜずとも
既に析智を以て見思を断ず何ぞ二十五有を出でざらん、是の故に
解釈に云く「若し衆生に遇うて小乗を修せしめば我則ち慳貪
に墮せん此の事不可なりとして祇二十五有を出す」已上、当に知
るべし此の事不可と説くと雖も而も出界有り但是れ不思議の空
を觀ぜざるが故に不思議の空智を顯さずと雖も何ぞ小分の空解を
起さざらん、若し空智を以て見思を断ぜずと云わば開善の無
声聞の義に同ずるに非ずや、況や今の経は正直捨權・純円一実
の説なり諸の爾前の声聞の得益を挙げて「諸漏已に尽きて復

煩悩無し」と説き又「実に阿羅漢を得・此の法を信ぜず是の処
有ること無し」と云い又「三百由旬を過ぎて一城を化作す」と
説く、若し諸の声聞全く凡夫に同ぜば五百由旬一步も行く可
らず。

又云く「自ら所得の功德に於て滅度の想を生じて当に涅槃に入
るべし、我余国に於て作仏して更に異名有らん是の人滅度の想を
生じて涅槃に入ると雖も而も彼の土に於て仏の智慧を求めて是の
経を聞くことを得ん」已上、此の文既に証果の羅漢・法華の座に
来らずして無余涅槃に入り方便土に生じて法華を説くを聞くと見
えたり、若し爾らば既に方便土に生じて何んぞ見思を断ぜざらん
是の故に天台・妙楽も「彼土得聞」と釈す、又爾前の菩薩に於て
「始めて我が身を見我が所説を聞いて即ち皆信受し如来慧に入り

にき」と説く、故に知んぬ爾前の諸の菩薩三惑を断除して仏慧に

入ることを、故に解釈に云く「初後の仏慧円頓の義齊し」已上。

・或は云く「故に始終を挙ぐるに意・仏慧に在り」と若し此等

の説相 經釈 共に非義ならば正直捨権の説・唯以一大事の文・

妙法華經・皆是真実の証 誠皆以て無益なり皆是真実の言は豈一

部八卷に亘るに非ずや、釈迦・多宝・十方分身の舌相・至梵天

の神力・三世諸仏の誠諦・不虛の証 誠・空く泡沫に同ぜん、

但し小乗の断常の二見に至つては且く大乘に対して小乗を

以て外道に同ず小益無きに非ざるなり、又七方便並に究竟の滅に

非ざるの釈・或は復但し心を觀ずと言わば則ち理に称わずとは又

是れ円実の大益に対して七方便の益を下して並に非究竟滅・即不

称理と釈するなり。

第四重の難に云く法華本門の觀心の意を以て一代聖教を
按ずるに菴羅果を取つて掌中に捧ぐるが如し、所以は何ん
迹門の大教起れば爾前の大教亡じ・本門の大教起れば迹門・
爾前亡じ・觀心の大教起れば本・迹爾前共に亡じ此れは是れ如来
所説の聖教・從淺至深して次第に迷を転ずるなり、然れども
如来の説は一人の爲にせず此の大道を説きて迷情除かざれば生死
出で難し、若し爾前の中に八教有りとは頓は則ち華嚴・漸は
則ち三昧・秘密と不定とは前四味に亘る・蔵は則ち阿含・方等に
亘る・通は是れ方等・般若・円・別は是れ則ち前四味の中に鹿苑
の説を除く、此くの如く八機各各不同なれば教説も亦異なり四教
の教主亦是れ不同なれば当教の機根余仏を知らず、故に解釈に
云く「各各仏独り其の前に在すと見る」已上。

人天にんてんの五戒ごかい・十善じゅうぜん・二乗にじょうの四諦しだい・十二じふに・菩薩ぼさつの六度ろくど・三祇さんぎ・

百劫ひやくけつ・或あるは動逾塵劫どうゆじんこう・或あるは無量阿僧祇劫むりようあそぎこう・円教えんきょうの菩薩ぼさつの

初發心時しょほつしん・便成びんじょう正覺しょうかく・明あきらかに知んぬ機根きこん別べつなるが故ゆえに説教せつきょう亦また

別べつなり、教別けうべつなるが故ゆえに行またも亦別またなり行別ぎやうべつなるが故ゆえに得果とくぐわも別べつな

り此これ即すなわち各別かくべつの得益とくやくにして不同ふどうなり。

然しかるに今法華方便品ほつけほうべんに「衆生しゆじやうをして仏知見ぶつちけんを開ひらかしめんと

欲ほす」と説とき給たまう爾その時とき八機はつき並あくし趣しゆじやうの衆生しゆじやう悉ことごとく皆みな同みなじく釈迦しゃか

如よ来らいと成なり互たがいに五眼ごがんを具そし一界いつがいに十界じゅうがいを具そし十界じゅうがいに百界ひやくがいを具そせ

り、是この時とき・爾前にぜんの諸經しよきやうを思惟しゆいするに諸經しよきやうの諸佛しよぶつは自界じよがいの二乗にじやう

を二乗にじやうも又菩薩界ぼさつを具そせず三界さんがいの人天にんてんの如ごときは成仏じやうぶつの望のぞ絶ぜえて

二乗にじやう・菩薩ぼさつの断惑だんわく即すなわち是これ自身じしんの断惑だんわくなりと知らず、三乗さんじやう四乗しじやう

の智慧ちえは四惡趣しあくしゆを脱のがるるに似にたりと雖いえども互たがいに界界かいがいを隔へだつ而しかも皆みな

是れ一体なり、昔の経は二乗は但自界の見思を断除すると思つて
ろっかい けんじ だんじよ
六界の見思を断ずることを知らず菩薩も亦是くの如し自界の三惑
だんじん いえど ろっかいにじよう さんなく
を断尽せんと欲すと雖も六界二乗の三惑を断ずることを知らず、
しんじつ しゅじようそく しゅじよう
真実に証する時は一衆生即十衆生・十衆生即一衆生なり、
も ろっかい けんじ だん にじよう けんじ しゅじようそく しゅじよう
若し六界の見思を断ぜざれば二乗の見思を断ず可からず是くの
ごと いえど しゃくもん あらた じゅっかいこく かく
如く説くと雖も迹門は但九界の情を改め十界互具を明す故に
すなわ えんぶつ にぜんとうぶん きら ゆえ さんがい
即ち円仏と成るなり、爾前当分の益を嫌うこと無きが故に「三界
の諸漏已に尽き三百由旬を過ぎて始めて我身を見る」と説けり
にぜんにゆうめつ にじよう ひやくゆじゆん す わがみ
又爾前入滅の二乗は実には見思を断ぜず故に六界を出でずと
いえど しゃくもん にじようさぶつ ほんかい ゆえ ろっかい
雖も迹門は二乗作仏が本懷なり故に「彼の土に於いて是の経を
聞くことを得」と説く、既に「彼の土に聞くことを得」と云う故に
にぜん しよきよう ほうべん ゆえ じつぼう じようじやつこう
知んぬ爾前の諸経には方便土無し故に実には実報並に常寂光

も無し、菩薩ぼさつの成仏じやうぶつを明ゆえす故にに実報じつぽう・寂光じやくこうを仮立かりゅうす然しかれども
菩薩ぼさつに二乗にじやうを具ぐす二乗にじやう成仏じやうぶつせずんば菩薩ぼさつも成仏じやうぶつす可べからざるな
り、衆生しじやう無辺誓願むへんせい度も満みたせず二乗にじやうの沈空じんくう尽滅じんくわうは即すなわち是これ菩薩ぼさつ
沈空じんくう尽滅じんくわうなり凡夫六道ぼんぶろくどうを出いでざれば二乗にじやうも六道ろくどうを出べず可べからず、
尚下劣なおげれつの方便土ほうべんを明あかさず況いや勝いれたる実報じつぽう・寂光じやくこうを明あかさんや、
実けんに見思けんじを断だんぜば何なんぞ方便ほうべんを明あかさざらん菩薩ぼさつ実じつに実報じつぽう・寂光じやくこうに
至いたらば何なんぞ方便土ほうべんに至いたること無むらん、但断無明むみやうと云ううが故ゆえに仮かり
に実報じつぽう・寂光じやくこうを立いつと雖しかも而かも上かの二土無ゆえきが故ゆえに同居ひやくじゆんの中に
於おいて影現ようげんの実報じつぽう・寂光じやくこうを仮立かりゅうす、然しかるに此この三百ひやく由旬じゆじゆんは実じつには
三さん界がいを出いずること無むし迹門しやくもんには但是これ始覺しかくの十界互具じゆっかいこくを説ときて
未いまだ必ほんず本覺ほんかく本有ほんゆうの十界互具じゆっかいこくを明あかさず故ゆえに所化しよけの大衆能化たいしやうのうけの
円仏えんぶつ皆みな是これ悉ことごとく始覺しかくなり、若もし爾しからば本無ほんむ今有こんゆうの失何とがなんぞ免まぬるこ

とを得んや、まさ当に知るべししきよう四教の四仏すなわ則ちえんぶつ円仏と成るはしばら且く
迹門しやくもんの所談しよだんなり是の故にかく無始ゆえの本仏むしを知らず、故にほんぶつ無始無終ゆえの
義ぎ欠けて具足ぐそくせず又無始・色心常住しきしんじようじゆうの義ぎ無し但し是の法ただは法位ほうい
に住すと説くことはみらいじようじゆう未来常住にして是れ過去常ここに非ざるなり、
本有ほんぬの十界互具じゅつかいごを顕あらわさざれば本有ほんぬの大乗菩薩界だいじようぼさつ無きなり、故に
知んぬ迹門しやくもんの二乗にじようは未だ見思いまを断ぜず迹門しやくもんの菩薩ぼさつは未だ無明いまを
断ぜず六道ろくどうの凡夫ほんぶは本有ほんぬの六界ろっかいに住せざれば有名無実ゆうめいむじつなり。
故にゆえ涌出品ゆじゅつぽんに至いたつて爾前にぜん・迹門しやくもんの断無明むみようの菩薩ぼさつを「五十小劫
・半日の如しと謂おもえり」と説く是れ則ちすなわ寿命品じゆりようほんの久遠くおん円仏えんぶつの非
長非短・不二の義に迷まようが故なり、爾前にぜん・迹門しやくもんの断惑だんなくとは外道げどう
の有漏断うろの退おこすれば起るが如し未だ久遠いまを知らざるを以て惑者もつの
本と為なすなり、故にゆえ四十一品断みろくの弥勒ほんもん・本門立行ほんもんの發起・影響ようこう・

とうき 当機・結縁の地涌千界の衆を知らず、既に一分の無始の無明を断
じゅつかい じて十界の一分の無始の法性を得れば何ぞ等覚の菩薩を知らざ
らん、設い等覚の菩薩を知らざるも争でか当機・結縁の衆を知ら
ざらん乃ち不識一人の文は最も未断三惑の故か、是を以て本門に
いた 至つては則ち爾前・迹門に於て随他意の釈を加え又天人・修羅
せつ に摂し「貪著五欲・妄見網中・為凡夫顛倒」と説き、釈の文に
どうじょう 是「我坐道場不得・一法」と云う蔵通両仏の見思断も別円二仏
むみょう の無明断も並に皆見思無明を断ぜず故に随他意と云う、所化の
しゅじょうさんなく 衆生三惑を断ずと謂えるは是れ実の断に非ず答の文に開善の無
しょうもん 声聞の義に同ずとは汝も亦光宅の有声聞の義に同ずるか、
てんだい 天台は有無共に破し給うなり、開善は爾前に於て無声聞を判じ
こうたく 光宅は法華に於て有声聞を判ず故に有無共に難有り、天台は

「爾前には則ち有り今経には則ち無し所化の執情には則ち有
ちようじや すなわ こんきよう すなわ しよけ しゅうじよう すなわ
り長者の見には則ち無し」此くの如きの破文皆是れ爾前・迹門
そふたい うむ なん あら ただ ほうべん
相對の釈にて有無共に今の難には非ざるなり、「但し七方便並に
くきよう あら ただ
究竟の滅に非ず又但し心を觀ずと云わば則ち理に称わす」との釈
は円益に対し当分の益を下して「並非究竟滅・即不称理」と云う
なりと云うは金 ☆論には「偏に清淨の真如を指す尚小の真を
うな ぶつしやういずく ひとえ しょうじよう しんによ なお
失えり仏性安んぞ在らん」と云う釈をば云何が会す可き、但し
此の尚失小真の釈は常には出だす可からず最も秘藏す可し、
但し「妙法蓮華経皆是真實」の文を以て迹門に於て爾前の得道
ゆる ゆえ にぜんとくどう おい にぜん とくどう
を許すが故に爾前得道の義有りと云うは此れは是れ迹門を爾前
に對して真實と説くか、而も未だ久遠実成を顕さず是れ則ち彼
みけん しんじつ しか いま くおんじつじよう あらわ こ すなわ
の未顕真實の分域なり所以に無量義経に大莊嚴等の菩薩の

四十余年の得益を挙ぐるを仏の答えたもうに未顕真実の言を以て
す、又涌出品の中に弥勒疑つて云く「如来太子為りし時釈の宮
を出でて伽耶城を去ること遠からず、乃至四十余年を過ぐ」已上
仏答えて云く「一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は
釈氏の宮を出で伽耶城を去ること遠からずして三菩提を得たりと
おも
謂えり我実に成仏してより以来」已上、我実成仏とは寿量品已前
を未顕真実と云うに非ずや是の故に記の九に云く「昔七方便より
誠諦に至るまでは七方便の権と言うは且く昔の権に寄す若し果
門に対すれば権実俱に是れ隨他意なり」已上、此の釈は明かに知
んぬ迹門をも尚隨他意と云うなり、寿量品の皆実不虛を天台
釈して云く「円頓の衆生に約すれば迹本二門に於て一実一虚な
り」已上、記の九に云く「故に知んぬ迹の実は本に於て猶虚なり」

已上、迹門しやくもん既に虚なること論に及ぶ可べからず但ただし皆是真実かいぜしんじつとは
も 若し本門ほんもんに望むれば迹こは是れ虚なりと雖も一座の内に於て虚実を
論ゆえず故に本・迹兩門とも俱に真実しんじつと言うなり、例せば迹門しやくもん法説の時
の譬説いんねん因縁の二周も此の一座に於て聞知せざること無し故に名け
て蹟なと為すが如し、記の九に云く「若し方便教は二門とも俱に虚なり
因門おわ開し竟りて果門に望むれば則ち一実一虚なり本門ほんもん蹟あらわれ竟れば
すなわ 則ち二種とも俱に実なり」已上、此の釈しゃくの意は本門ほんもん未だ蹟あらわれざる以前
は本門ほんもんに對すれば尚迹門なを以て名けて虚と為す若し本門ほんもん蹟あらわれ
おわり 已りぬれば迹門しやくもんの仏因ぶつゐんは即ち本門ほんもんの仏果ぶつかなるが故に天月水月
ほんぬ 本有の法と成りて本・迹とも俱に三世常住さんぜじょうじゅうと蹟あらわるるなり、一切
しゅじょう 衆生の始覺しかくを名けて迹門しやくもんの円因いっさいしゅじょうと言いひ一切衆生の本覺ほんかくを名け
て本門ほんもんの円果と為す修しゅう一円因感一円果とは是これなり、是かくくの如ごとく

ほうもん 法門を談ずるの時迹門・爾前は若し本門顕れずんば六道を出で
なん ず何ぞ九界を出でんや。

◆五九 爾前二乗菩薩不作仏事 正元元年三十八歳御作 4

24P

問うて云く二乗永不成仏の教に菩薩の作仏を許す可きや、答え
いわ 云く楞伽經第二に云く「大慧何者が無性乗なる、謂く一闍提
なり・大慧・一闍提とは涅槃の性無し何を以ての故に解脱の中に
おい 於て信心を生ぜず涅槃に入らず、大慧一闍提とは二種あり何等を
か二と為す一には一切の善根を梵焼す、二には一切衆生を憐愍
して一切衆生界を尽さんとの願を作す大慧・云何が一切の善根
を梵焼する謂く菩薩蔵を謗じて是くの如きの言を作す、彼の
修多羅・毘尼・解脱の説に随順するに非ず諸の善根を捨つと

是かくのゆえの故に涅槃ねはんを得ず、大慧だいえ・衆生しゅじょうを憐愍れんみんして衆生界しゅじょうを尽さんと
の願おこを作なす者これ是ほさつを菩薩なと為なす、大慧菩薩だいえぼさつは方便ほうべんして願なを作なす若もし
諸もろの衆生しゅじょうの涅槃ねはんに入またねはんらざる者またねはんあらば我またねはんも亦また涅槃ねはんに入またねはんらずと
是かくのゆえの故に菩薩摩訶薩ぼさつまかさつ涅槃ねはんに入だいえらず、大慧だいえ・是これを二種いっせんだいの一闍提いっせんだい無
涅槃性ねはんと名なく是この義もつを以ゆえての故に決けつじよう定いっせんだいして一闍提いっせんだいの行いっせんだいを取いっせんだいる、
大慧菩薩だいえぼさつ・仏もうに白いわして言いく世尊せそん此いっせんだいの二種いっせんだいの一闍提いっせんだい何等いっせんだいの一闍提いっせんだいか
常ねはんに涅槃ねはんに入いっせんだいらざる、仏だいえ、大慧だいえに告いげたまわく菩薩摩訶薩ぼさつまかさつの
一闍提いっせんだいは常ねはんに涅槃ねはんに入いっせんだいらず何もつを以ゆえての故に能よ善いっさいく一切いっさい諸法しよほう本いっさい来いっさい
涅槃ねはんなりと知もつるを以かくのゆえて是ねはんの故に涅槃ねはんに入いっさいらず一切いっさいの善根ぜんこんを捨ぜんこんつる
闍提せんたいには非あらず、何もつを以ゆえての故に大慧彼いっさいれ一切ぜんこんの善根ぜんこんを捨せんたいつる闍提せんたい
は若もし諸しよぶつ仏ぜんちしき・善知識あ等いっさいに値ぜんこんいたてまつれば菩提心ほだいしんを發おこし諸もろの善根ぜんこん
を生すなわじて便ねはんち涅槃ねはんを証しす」等と云云、此きようもんの經文きようもんに「若もし諸もろの

衆生涅槃しゅじょうねはんに入らざれば我またも亦涅槃ねはんに入らじ」等云云。

前四味の諸經ぜんしみのしよきように二乗作仏にじようさぶつを許さず之これを以て之もつを思うに四味しよきよう諸經しよきようの四教しきようの菩薩ぼさつも作仏さぶつ有り難がたきか、華嚴經けこんきように云く「衆生界しゅじよう尽つきざれば我が願またつも亦尽またつきず」等と云云、一切いっさいの菩薩ぼさつ必ず四弘しぐ誓願せいがんを發おこす可べし其その中の衆生しゅじよう無辺誓願度むへんせいがんどの願これ之みたを滿みせざれば無上菩提誓願証むじようぼだいせいがんの願がた又成これじ難もつし、之これを以て之もつを案あずるに四十余年よんじゅうよねんの文二乗にじように限らば菩薩ぼさつの願がた又成またじ難がたきか。

問いうて云いく二乗にじよう成仏じようぶつ之これ無むければ菩薩ぼさつの成仏じようぶつも之これ無むき正しやうき証文しやうもん如何いかん、答いえて云いく涅槃經ねはんきよう三十六いに云いく「仏性ぶつしやうは是これ衆生しゅじように有ありと信いずと雖いえど一切いっさいに皆みな悉ことく之これ有あらず是かくの故ゆえに名なけて信不具足しんふぐそくと為なす」と三十六本三十二、此この文ぶんの如ごとくんば先四味の諸しよ菩薩ぼさつは皆一闡提みないっせんたいの人にじようなり二乗作仏にじようさぶつを許ゆるさず二乗にじようの作仏さぶつを成なぜざる

のみに非ず、あら將又菩薩はたまたぼさつの作仏さぶつも之これを許さざる者なり、之これを以て

之これを思うに四十余年よんじゅうよねんの文二乗作仏にじようさぶつを許さずんば菩薩ぼさつの成仏じようぶつも又

之これむき無きなり、一乗要決いちじようようけつの中に云く「涅槃經ねはんぎよう三十六に云く仏性は

是れ衆生しゅじように有りと信ずと雖も必ず一切皆悉く之有らず是の故に

名けて信不具足しんふぐそくと為すと三十六本三十二、第三十一に説く一切衆生

及び一闡提いつせんたいに悉く仏性有りと信ずるを菩薩ぼさつの十法の中の第一の

信心具足しんじんぐそくと名くと、三十六本第三十、一切衆生悉有仏性を明すは是れ

少分に非ず、若し猶堅く少分の一切なりと執せば唯經に違するの

みに非ず亦信不具あら またしんふぐなり何に因つてか樂つて一闡提いつせんたいと作るや此れに

由つて全分の有性を許すべし理亦一切の成仏じようぶつを許すべし○」

慈恩じおんの心經玄贊しんきようげんさんに云く「大悲の辺に約すれば常に闡提せんたいと為る

大智の辺に約すれば亦當に作仏すべし、宝公ほうこうの云く大悲闡提だいひせんたい

是れ前經ぜんきょうの所説しよせつなり前説もつを以て後説なんを難べず可べからざるなり諸師しよし
の釈意だいと大途だいと之に同じ」文、金☆の註こんぺいに云く「境いわは謂いわく四諦したいなり百
界三千さんぜんの生死しやうじは即すなわち苦ななり此この生死しやうじ即すなわち是れ涅槃ねはんなりと達たするを
衆生しゆじやう無む辺へん誓願せいがん度どと名なく百界三千さんぜんに三惑さんかくを具足ぐそくす此この煩惱ぼんのう即すなわち
是れ菩提ぼだいなりと達たするを煩惱ぼんのう無む辺へん誓願せいがん断だんと名なく生死しやうじ即すなわち涅槃ねはんと円えんの
仏性ぶつしやうを証すなわするは即すなわち仏道ぶつどう無む上じやう誓願せいがん成じやうなり、惑わく即すなわ菩提ぼだいにして般若はんによ
に非あらざること無なければ即すなわち法門ほうもん無む尽じん誓願せいがん知ちなり、惑わく智ち無む二になれば
生く仏しゆ体たい同どうじ苦集くしゆ唯ゆい心しんなれば四弘しぐ融攝ゆうしやうす一そく即い一切いつさいなりとは斯この言こと
徴しる有あり」文、慈覺大師じかくだいしの速証じやくしやう仏位集ぶつゐしふに云く「第一だいいちに唯ただ今經こんきやうの力ちから
用もち仏ぶつの下化げけ衆生しゆじやうの願がんを満みたす故ゆゑに世よに出いでて之これを説いわく所謂いわゆる諸しよ仏ぶつの
因位いんゐ・四弘しぐの願がん・利生りしやう断惑だんかく・知法ちほふ作さ仏ぶつなり然しかるに因か円果えん満まんなれば
後の三さんの願がんは満みたず、利生りしやうの一願いっがん甚はなはだだ満みたじ難がたしと為なす彼の華嚴けこんの

じゅっかいみなぶつどう

じょう

あた

あこん

ほうとう

はんにや

またしか

力十界皆仏道を成ずること能わす阿含・方等・般若も亦爾なり

後番の五味・皆成仏道の本懐なる事能わす、今・此の妙経は

じゅっかいがいじょうぶつどう

みょうきよう

十界皆成仏道なること分明なり彼の達多・無間に墮するに天

だ

おうぶつ

りゅうによじょうぶつ

じゅうらせつによ

ぶつどう

王仏の記を授け竜女成仏し十羅刹女も仏道を悟り阿修羅も

あしゅら

じょうぶつ

そうき

にんてん

じじょう

ぼさつ

ぶつどう

成仏の総記を受け人天・二乗・三教の菩薩・円妙の仏道に入る、

いわ

しやがん

こと

いますで

まんぞく

いっさいしじょう

ぶつどう

経に云く我が昔の所願の如きは今者已に満足しぬ一切衆生を化

い

みなぶつどう

しじょう

つ

ゆえ

い

して皆仏道に入らしむと云云、衆生界尽きざるが故に未だ仏道

ぶつどう

しゅじょう

いえど

じゅっかい

じょうぶつ

ただ

に入らざる衆生有りと雖も然れども十界皆成仏すること唯

ただ

こんきよう

ゆえ

りしろう

ほんかい

と云云。

今経の力に在り故に利生の本懐なり」と云云。

又云く「第一に妙経の大意を明さば諸仏は唯一大事の因縁を

い

もつ

だいichi

みょうきよう

たいい

あか

しよぶつ

ゆいいちだいじ

いんねん

以ての故に世に出現し一切衆生悉有仏性と説き聞法・観行・

もんぼう

みなまさ

さぶつ

しゅつげん

いっさいしじょうしつうぶつしろう

と

もんぼう

かんぎよう

・

皆当に作仏すべし、抑仏何の因縁を以て十界の衆生悉く三因

いんねん

いんねん

もつ

しゅじょうこととさんいん

いん

仏性有りと言きたもうや、天親菩薩の仏性論縁起分の第一に
云く如来五種の過失を除き五種の功德を生ずるが為に故に一切
衆生・悉有仏性と説きたもう已上謂く五種の過失とは一には下
劣心・二には高慢心・三には虚妄執・四には真法を謗じ・五に
は我執を起すなり、五種の功德とは一には正勤・二には恭敬・
三には般若・四には闍那・五には大悲なり、生ずること無しと
疑うが故に大菩提心を発すること能わざるを下劣心と名け、我に
性有つて能く菩提心を発すと謂えるを高慢と名け、一切の法無我
の中に於て有我的執を作すを虚妄執と名け一切諸法の清淨の
智慧功德を違謗するを謗真法と名け意唯己を存して一切衆生を
憐むことを欲せざるを起我執と名く此の五に翻対して定めて性有
りと知りて菩提心を発す」と。

にちれん
日蓮 花押 かおう

◆六〇

にちれん
日蓮撰 427p
十法界明 因果抄

ぶんおうがんねん
文応元年五月三十九歳御作沙門 しゃもん

にちれん
日蓮撰 427p

八十華嚴經六十九に云く「普賢道に入ることを得て十法界を

了知す」と、法華經第六に云く「地獄声・畜生声・餓鬼声・

阿修羅声比丘声・比丘尼声人道天声天道声聞声辟支仏声・菩薩声

・仏声」と已上十法界名目なり。

第一に地獄界とは觀仏三昧經に云く「五逆罪を造り因果を撥無

し大衆を誹謗し四重禁を犯し虚く信施を食するの者・此の中に

墮す」と獄なり、正法念經に云く「殺盜・婬欲・飲酒・妄語の者

・此の中に墮す」と獄なり、正法念經に云く「昔酒を以て人に与

えて酔わしめ已つて調戲して之を翫び彼をして羞恥せしむるの

者・此の中に墮だす」と獄こなり、正しょう法ほう念ねん經ぎょうに云いく「殺せつ生しょう・偷ちゅう盜とう・

邪じゃ淫いんの者・此の中に墮だす」と衆しゆ合ごう地ち、涅槃ねはん經ぎょうに云いく「殺せつに三種有

り謂おもく下中上なり○下とは蟻ぎ子し乃至一切いっさいの畜ちく生しやう乃至下殺げせつの因いん縁ねん

を以もつて地獄じごくに墮だし乃至具いに下の苦くを受うく」文。

問いうて云いく十惡じゅうあく・五逆ごぎやく等とくを造つくりて地獄じごくに墮だするは世間せけんの道俗どうぞく

皆みな之これを知しれり謗ほう法ぼうに依よつて地獄じごくに墮だするは未いまだ其その相さう貌みようを知ら

ざる如いかん何、答いえて云いく堅慧けんね菩ぼ薩さつの造つく・勒ろく那な摩ま提だいの詔し・究きう竟きやう

一乘いちじやう宝ほう性しやう論ろんに云いく「樂ねがて小法せうぼうを行おじて法ほう及および法師ほうしを謗ほうじ○如に來よ來

の教しを識しらずして説しくこと修多羅しゆたらに背そむいて是これ真しん實じつ義ぎと云いう」文、

此この文ぶんの如ごとくんば小乘しょうじやうを信しんじて真しん實じつ義ぎと云いう大乗だいじやうを知らざる

は是これ謗ほう法ぼうなり、天親てんじん菩ぼ薩さつの説し・真諦しんたい三藏さんざうの詔し・仏ぶつ性しやう論ろんに云いく

「若もし大乗だいじやうに憎そう背はいするは此こは一闍いっせん提だいの因いんなり衆生しゆじやうをして此この

法を捨てしむるを為もつての故ゆえに」文、此の文の如ごとくんば大小流布だいしやうるふの世いっこうに一向しやうじやうに小乗ひろを弘ひろめ自身じしんも大乘だいじやうに背そむき人に於おいても大乘だいじやうを捨てしむる是これを謗法ほうほうと云いうなり、天台大師てんだいだいしの梵網經ぼんもうきやうの疏じよに云いく「謗こは是けはいれ乖背すべてこの名・☆て是れ解・理かなに称なわらず言実いげに当あらず異解いげして説みく者を皆名みなけて謗なと為なすなり己おのが宗そむに背そむくが故ゆえに罪つみを得え」文、法華經ほけきやうの譬喻品ひゆほんに云いく「若もし人信みぜずして此の經を毀謗きぼうせば則すなわち一切世間の仏種ぶつしゆを断だんぜん乃至其の人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入いらん」文、此の文の意こころは小乗しやうじやうの三賢さんけん已前いぜん・大乘だいじやうの十信じゆっしん已前いぜん・末代まつだいの凡夫ほんぶの十惡じゆうあく・五逆ごぎやく・不孝父母ふこうふぼ・女人等にょにんを嫌きらわず此等これら法華經ほけきやうの名字みやうじを聞きいて・或題名あるだいめいを唱となえ一字いっく・一句いっく・四句いっく・一品いっく・一卷・八卷等じゆじを受持じゆじし読誦どくじゆし乃至亦上ないしまたかみの如ごとく行こぜん人を随喜ずいきし讚歎さんたんする人は法華經ほけきやうよりの外ほけきやう、一代いちだいの聖教しやうきやうを深ならく習ぎひ義理ぎりに達たつ

し堅くだいしようじゅう 大小乗だいしようじゅう の戒たもを持てる大菩薩ぼさつの如ごとき者ものより勝すぐれて往生おうじょう

成仏じやうぶつを遂とぐ可べしと説とくを信しんぜずして還かえつて法華經ほけきやうは地住じじゅう已上いじやうの

菩薩ぼさつの為ため・或あるは上根じやうこん・上智じやうちの凡夫ぼんぷの為ためにして愚人ぐにん惡人あくにん・女人にょにん

末代まつだいの凡夫ぼんぷ等の為ためには非あらずと言のたまわん者は即すなわち一切衆生いっさいしゆじやうの成仏じやうぶつの

種しゆほうを斷あびこじて阿鼻獄あびこくに入る可べしと説とける文ぶんなり、涅槃經ねはんきやうに云いく「仏

の正法しやうほうに於おいて永こく護惜ごしやく建立こんりゆうの心こころ無し」文ぶん、此この文ぶんの意いは此この

大涅槃經だいねはんきやうの大法世間だいほうせけんに滅尽めつじんせんを惜おしまざる者は即すなわち是これ誹謗ひぼうの者

なり、天台大師てんだいだいし法華經ほけきやうの怨敵おんてきを定さだめて云いく「聞きく事を喜よろこばざる者

を怨おんと為なす」文ぶん、謗法ほうぼうは多種たふなり大小流布だいしようるふの国くにに生はれて一向いっこうに

小乗しょうじやうの法はくを学がくして身みを治ちめ大乘だいじやうに遷うつらざるは是これ謗法ほうぼうなり、

亦また華嚴けえん・方等ほうとう・般若等はんんにやの諸大乗しよだいじやうきやう經きやうを習しえる人も諸經しよきやうと法華經ほけきやう

と等同どうどうの思しを作なし人ひとをして等同どうどうの義ぎを学まなばしめ法華經ほけきやうに遷うつらざる

こ
は是れ謗法なり、亦偶またたまたまえんきあ円機有る人の法華經を学ぶをも我が法に
付けて世利を貪るが為むさぼためなんじに汝が機は法華經に当らざる由よしを称しょうして
此の經を捨て権經に遷らしむるは是れ大謗法なり、此こくの如ごとき
等は皆地獄の業なり人間に生ずること過去かこの五戒は強く三惡道さんあくどうの
業因は弱きが故に人間に生ずるなり、亦当世またとうせの人も五逆ごぎやくを作る者
は少く十惡は盛に之を犯す亦偶またたまたまごしょう後世を願う人の十惡を犯さず
して善人ぜんにんの如くなるも自然に愚癡ぐちの失に依つて身口は善く意こころは
惡しき師を信ず、但我のみ此の邪法を信ずるに非ず国あらを知行する
人・人民じんみんを聳すすめて我が邪法じゃほうに同ぜしめ妻子さいし・眷属けんそく・所従しよじゆうの人を
以て亦聳もつまたすすめ従え我が行を行ぜしむ、故に正法しやうほうを行ぜしむる人に
於て結縁けちえんを作さず亦民・所従等しよじゆうに於ても隨喜ずいきの心を至さしめず、
故に自他共ゆえじたに謗法の者と成りて修善止惡しゅうぜんの如ごとき人も自然じねんに阿鼻あび

地獄じごくの業まねを招まねくこと末法まっぽうに於おいて多分たぶん之これ有あるか。

阿難あなん尊者そんじやは浄飯王じょうばんの甥むすこ・斛飯王こくはんの太子たいし・提婆達多だいばだつたの舎弟しゃてい・

釈迦しやか如来にらいの從子いとこなり、如来にらいに仕え奉たてまつて二十年かくいさんまい覺意さんまい三昧さんまいを得えて

一代いちだい聖教しやうきやうを覺さとれり、仏入滅にゆうめつの後のち・阿闍世王あじゃせ・阿難あなんを歸依きえし

奉たてまつ、仏めつこの滅後めつこ四十年しやうねんの此阿難尊者このあなんそんじや一の竹林しんりんの中うちに至いたるに一ひとりの

比丘びく有あり一の法句ほふくの偈げを誦じゆして云いく「若もし人生にんじやうじて百歳ひゃくさいなりとも

水みづの潦涸ろうこくを見みずんば生なじて一日いちにちにして之これを觀見くけんすることを得えるに

如しかず」已上いじやう、阿難あなん此この偈げを聞きき比丘びくに語かたつて云いく此これ仏說ぶつせつに

非あらず汝なんじ修行しゆぎやうす可べからず爾時そのときに比丘阿難びくあなんに問いわうて云いく仏說ぶつせつは如何いかん、

阿難あなん答こたえて云いく若人生もしひと生なじて百歳ひゃくさいなりとも生滅しやうめつの法ほふを解げせずんば

生なじて一日いちにちにして之これを解げ了りやうすることを得えんには如しかず已上いじやう此この文ぶん

仏說ぶつせつなり、汝なんじが唱となうる所ところの偈げは此この文ぶんを謬あやまりたるなり、爾その時とき

に比丘・此の偈を得て本師の比丘に語る、本師の云く我汝に教
うる所の偈は眞の仏説なり阿難が唱うる所の偈は仏説に非ず阿難
年老衰して言錯謬多し信ず可らず、此の比丘亦阿難の偈を捨て
て本の謬りたる偈を唱う阿難又竹林に入りて之を聞くに我が教う
る所の偈に非ず重ねて之を語るに比丘信用せざりき等云云、仏の
滅後四十年にさえ既に謬り出来せり何に況んや仏の滅後既に二
千余年を過ぎたり、仏法天竺より唐土に至り唐土より日本に至る
論師三蔵・人師等伝来せり定めて謬り無き法は万が一なるか、
何に況や当世の学者偏執を先と為して我慢を挿み火を水と諍い
之を糾さず偶仏の教の如く教を宣ぶる学者をも之を信用せず
故に謗法ならざる者は万が一なるか。

第二に餓鬼道とは正法念經に云く「昔財を貪りて屠殺せるの

者・此の報むくいを受く」と、亦云く「丈夫じょうぶ自ら美食みずかを☆い妻子くさいしに与

えず・或あるは婦人みづか自ら食して夫子ふしに与えざるは此の報むくいを受く」と、

亦云く「名利みょうりを貪るが為ために不浄ふじょう説法せつぽうする者・此の報むくいを受く」と、

亦云く「昔酒またいわを☆に水うるを加うる者・此の報むくいを受く」と、亦云く

「若もし人わづらわ勞して少すこしく物おおわくを得たるを誑惑これして之もちを取り用いける者・

此の報むくいを受く」と、亦云く「昔行路人またいわの病苦ひしくありて疲極ひしくせるに

其その売うりものを欺あたいき取り直あたを与あたうること薄少うすなりし者・此の報むくいを受

く」と、又云く「昔刑獄けいこくを典つかさどり主・人の飲食おんじきを取りし者・此の報むくい

を受く」と、亦云く「昔陰涼樹おんりょうじゆを伐きり及び衆僧しゅうそうの園林きを伐きりし

者・此の報むくいを受く」と文、法華經ほけきやうに云く「若もし人信もぜずして此

の經きやうを毀謗きぼうせば○常じょうに地獄じこくに処しよすること園觀おんかんに遊あそぶが如ごとく余あの

惡道あくどうに在あること己おのが舍宅しゃたくの如ごとし」文、慳貪けんどん・偷盜ちゆうとう等の罪つみに依よつ

て餓鬼道に墮することは世人知り易し、慳貪等無き諸の善人も
謗法に依り亦謗法の人に親近し自然に其の義を信ずるに依つて
餓鬼道に墮することは智者に非ざれば之を知らず能く能く恐る
べきか。

第三に畜生道とは愚癡無慙にして徒に信施の他物を受けて
之を償わざる者・此の報を受くるなり、法華經に云く「若し人
信ぜずして此の經を毀謗せば○當に畜生に墮すべし」文已上
さんあくどう
三惡道なり。

第四に修羅道とは止觀の一に云く「若し其の心念念に常に彼に
勝らんことを欲し耐えざれば人を下し他を輕しめ己を珍ぶこと
鵄の高く飛びて下視が如し而も外には仁・義・礼・智・信を掲げ
て下品の善心を起し阿修羅の道を行ずるなり」文。

第五に人道とは報恩経に云く「三帰五戒は人に生る」文。

第六に天道とは二有り、欲天には十善を持ちて生れ色無色天には下地は・苦障・上地は静妙離の六行觀を以て生ずるなり。

問うて云く六道の生因は是くの如し抑同時に五戒を持ちて

人界の生を受くるに何ぞ生盲・聾・☆☆☆陋・☆☆☆背偃

・貧窮・多病・瞋恚等無量の差別有りや、答えて云く大論に云く

「若は衆生の眼を破り若は衆生の眼を屈り若は正見の眼を

破り罪福無しと言わん是の人死して地獄に墮し罪畢つて人と為り

生れて従り盲なり、若は復仏塔の中の火珠及び諸の灯明を盗む

是くの如き等の種種の先世の業・因縁をもて眼を失うなり○聾

とは是れ先世の因縁師父の教訓を受けず行ぜず而も反つて瞋恚

す是の罪を以ての故に聾となる、復次に衆生の耳を截り若は

しゅじょう

衆生の耳を破り若は仏塔僧塔諸の善人・福田の中の

☆椎・鈴・貝及び鼓を盗む故に此の罪を得るなり、

先世に他の舌

を截り・或は其の口を塞ぎ・或は惡藥を与えて語ることを得ざら

しめ、或は師の教・父母の教勅を聞き其の語を断つ○世に

生れて人と為り啞にして言うこと能わず○先世に他の坐禪を破り

坐禪の舍を破り諸の咒術を以て人を咒して瞋らし鬭諍し姪欲

せしむ今世に諸の結使厚重なること婆羅門の其の稻田を失い其の

婦復死して即時に狂発し裸形にして走りしが如くならん、先世に

仏・阿羅漢・辟支仏の食及び父母所親の食を奪えば仏世に値うと

雖も猶故飢渴す罪の重きを以ての故なり、○先世に好んで

鞭杖・拷掠・閉繫を行じ種種に悩すが故に今世の病を得るなり○

先世に他の身を破り其の頭を截り其の手足を斬り種種の身分を

破り・或は仏像を壊り仏像の鼻及び諸の賢聖の形像を毀り・或
は父母の形像を破る是の罪を以ての故に形を受くる多く具足せ
ず、復次に不善法の報身を受くること醜陋なり」文、法華經に云く
「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば○若し人と為ることを得て
は諸根闇鈍にして盲・聾・背偃ならん○口の氣常に臭く鬼魅に
著せられん貧窮下賤にして人に使われ多病瘠瘦にして依怙する
所無く○若は他の叛逆し抄劫し竊盜せん是くの如き等の罪横に
其の殃に羅らん」文。

又八の卷に云く「若し復是の經典を受持する者を見て其の
過惡を出さん若は實にもあれ若は不實にもあれ此の人は現世に
白癩の病を得ん若し之を輕笑すること有らん者は当に世世に
牙齒疎欠・醜き脣・平める鼻・手脚繚戾し眼目角☆に身体

臭穢しゅうえにして惡瘡あくそう・膿血のうけつ・水腹すいふく・短氣たんけ諸もろの惡じゅう重病びょうあるべし」文、

問いうて云いく何いかなる業しゅうを修しゅうする者ろくどうが六道ろくどうに生そじて其その中ちゅうの王わうと成なる

や、答こたえて云いく大乗だいじやうの菩薩ぼさつ戒かいを持もして之これを破やぶる者しっかいは色界ぼんのうの梵王ぼんわう

・欲界よっかいの魔王まおう・帝釈たいしやく・四輪王りんわう・禽獸王きんじゅうわう・閻魔王えんまわう等らと成なるなり、

心地觀しんじかんきやう經きやうに云いく「諸王しよわうの受もくる所もろもろの諸しよの福樂ふくらくは往昔むかし會あつて三さんの

淨戒じやうかいを持もして戒德かいとく薰修くんしゅうして招まねき感かんずる所にんてん・人天みやうの妙果王みやうかうわうの身みを獲と

○中品ちゅうぽんに菩薩ぼさつ戒かいを受じゆじ持じすれば福德じざい自在てんりんの轉輪王てんりんわうとして心しよの所作さ

に隨したがつて尽ことごとく皆成むりやうじ無量にんてんの人天ことごと悉じゆんく遵ほう奉ほうす、下じやうの上品ぽんに持じすれ

ば大鬼王だいきわうとして一切いっさいの非人ひにん咸ことごとく率伏りつぷくす戒品かいぽんを受じゆじ持じして欠犯けつぱんすと

雖いえども戒まさの勝まさるるに由よるが故ゆえに王なと為なることを得え・下ちゅうの中品ぽんに

持じすれば禽獸きんじゅうの王わうとして一切いっさいの飛走みな皆歸伏きふくす清淨しやうじやうの戒かいに於おいて

欠犯けつぱん有あるも戒まさの勝まさるるに由よるが故ゆえに王なと為なることを得え、下げの下品ぽん

に持すれば☆魔王として地獄の中に処して常に自在なり禁戒を毀
り惡道に生ずと雖も戒の勝るるに由るが故に王と為る事を得○
若し如来の戒を受けざる事有れば終に野干の身をも得ること能わ
ず何に況んや能く人天の中の最勝の快樂を感じて王位に居せん」
文、安然和尚の広釈に云く「菩薩の大戒は持して法王と成り犯し
て世王と成る而も戒の失せざること譬えば金銀を器と成すに用ゆ
るに貴く器を破りて用いざるも而も宝は失せざるが如し」亦云く
「無量壽觀に云く劫初より已來八万の王有つて其の父を殺害すと
此則ち菩薩戒を受けて国王と作ると雖も今・殺の戒を犯して皆
地獄に墮れども犯戒の力も王と作るなり」大仏頂經に云く「發心
の菩薩罪を犯せども暫く天神・地祇と作る」と、大隨求に云く「天
帝・命尽きて忽ち驢の腹に入れども隨求の力に由つて還つて

天上てんじょうに生なず」と、尊勝そんしょうに云いく「善住天子・死後七返畜生の身ちくしゅうに墮だすべきを尊勝そんしょうの力ちからに由よつて還かえつて天の報むくいを得たり」と、昔國王こくおう有り千車をもて水を運び仏塔ぶつとうの焼くるを救う自ら☆心こころを起おこして阿修羅王あしゅらと作なる、昔・梁の武帝ぶてい五百の袈裟けさを須弥山しゆみせんの五百の羅漢らかんに施ほどこす、誌公しこう云く「往五百に施ほどこすに一りの衆を欠けり罪つみを犯おかして暫しばらく人王と作なる即ち武帝ぶてい是なり、昔國王こくおう有つて民を治おさむること等ひとしからず今・天王と作なれども大鬼王だいきおうと為なる、即ち東南西の三天王さんてんわう是なり拘留孫くわうそんの末に菩薩ぼさつと成りて發誓はつせきし現げんに北方毘沙門びしゃもんと作なる是なり」云云、此等これらの文を以もつて之を思しうに小乗戒しょうじょうを持もつて破やぶる者は六道ろくどうの民と作り大乘戒だいじょうかいを破はする者は六道ろくどうの王と成り持もつる者は仏と成る是なり。

第七に声聞道しょうもんとは此の界の因果いんがをば阿含あこん・小乗しょうじょう・十二年の

經に分明に之を明せり、諸大乘經に於ても大に對せんが爲に

またこれ

亦之をば明せり、声聞に於て四種有り一には優婆塞・俗男なり

ごかい

五戒を持し苦・空・無常・無我の觀を修し自調自度の心強くし

あえて

て敢て化他の意無く見思を斷尽して阿羅漢と成る此くの如くす

じねん

る時自然に髪を剃るに自ら落つ、二には優婆夷・俗女なり五戒を

そ

持し髪を剃るに自ら落つること男の如し三には比丘僧なり二百五

具足

十戒戒なりを持して苦・空・無常・無我の觀を修し見思を斷じて

あらかん

阿羅漢と成る此くの如くするの時・髪を剃らざれども生ぜず、四

びくに

に比丘尼なり五百戒を持す余は比丘の如し、一代諸經に列座せ

しやりほつ

る舍利弗・目連等の如き声聞是なり永く六道に生ぜず亦仏・

ぼさつ

菩薩とも成らず灰身滅智し決定して仏に成らざるなり、小乘

てほん

戒の根本たる尽形壽の戒は一度依身を壞れば永く戒の功德無し、

じょうほん 上品を持すれば二乗と成り中下を持すれば人天に生じて民と
な これ 為る之を破れば三悪道に墮して罪人と成るなり、安然和尚の
こうしゃく 広釈に云く「三善は世戒なり因生して果を感じ業尽きて悪に墮
たとす 譬えば楊葉の秋至れば金に似れども秋去れば地に落つるが
ごとく 如し、二乗の小戒は持する時は果拙く破る時は永く捨つ 譬えば
がき 瓦器の完くして用うるに卑しく若し破れば永く失するが如し」文。
えんかく 第八に縁覚道とは二有り一には部行独覚・仏前に在りて声聞
ごとく の如く小乗の法を習い小乗の戒を持し見思を断じて永不成仏
なり の者と成る、二には鱗喩独覚・無仏の世に在りて飛花落葉を見て
むじょう 苦・空・無常・無我の觀を作し見思を断じて永不成仏の身と成る
またしょうもん 戒も亦声聞の如し此の声聞・縁覚を二乗とは云うなり。

ぼさつ 第九に菩薩界とは六道の凡夫の中に於て自身を輕んじ他人を重
ろくどう ぼんぷ おい じしん たにん

んじ惡を以て己に向け善を以て他に与えんと念う者有り、仏・此
の人の為に諸の大乗經に於て菩薩戒を説きたまえり、此の菩薩
戒に於て三有り一には摂善法戒・所謂八万四千の法門を習い尽さ
んと願す、二には饒益有情戒・一切衆生を度しての後に自ら
成仏せんと欲する是なり、三には摂律儀戒一切の諸戒を尽く持
せんと欲する是なり、華嚴經の心を演ぶる梵網經に云く「仏
諸の仏子に告げて言く十重の波羅提木叉有り若し菩薩戒を受けて
此の戒を誦せざる者は菩薩に非ず仏の種子に非ず我も亦是くの如
く誦す一切の菩薩は已に學し一切の菩薩は當に學し一切の菩薩は
今學す」文、菩薩と言うは二乗を除いて一切の有情なり、小乘
の如きは戒に随つて異なるなり、菩薩戒は爾らず一切の有心に必ず
十重禁等を授く一戒を持するを一分の菩薩と云い具に十分を受

くるを具足ぐそくの菩薩ぼさつと名く、故ゆえに瓔珞經ようらくに云く「一分いちぶんの戒を受くる
こと有あれれば一分いちぶんの菩薩ぼさつと名け乃至なにし二分・三分・四分・十分なるを
具足ぐそくの受戒じゅかいと云う」文。

問うて云く二乗にじようを除くの文い如何いかん、答えて云く梵網經ぼんもうきように菩薩戒ぼさつ
を受くる者を列ねて云く「若し仏戒ぶつを受くる者は國王こくおう・王子おうじ・百
官さいそう・宰相さいそう・比丘びく・比丘尼びくに・十八梵天ぼんてん・六欲天子てんし・庶民しゆじん・黃門わうもん・姪
男めい・姪女めい・奴婢ぬび・八部はちぶ・鬼神きじん・金剛神こんごうじん・畜生ちくしやう・乃至なにし變化人へんかにも
あれ但法師ほつしの語ことばを解するは尽く戒を受得じゅとくすれば皆第一みなだい清淨じやうじやうの
者と名く」文、此の中に於て二乗にじよう無きなり、方等部ほうとうぶの結經けつきやうたる
瓔珞經ようらくにも亦二乗またにじよう無し、問うて云く二乗所持にじようしよじの不殺生戒ふさつしやうかいと菩薩ぼさつ
所持しよじの不殺生戒ふさつしやうかいと差別さべつ如何いかん、答えて云く所持しよじの戒の名は同じと
いふ
雖も持じする様並に心念永く異なるなり、故ゆえに戒の功德くどくも亦淺深またせんじんあり、

問うて云く異なる様如何、答えて云く二乗の不殺生戒は永く六道
に還らんと思わす故に化導の心無し亦仏菩薩と成らんと思わす但
灰身滅智の思を成すなり、譬えば木を焼き灰と為しての後に
一塵も無きが如し故に此の戒をば瓦器に譬う破れて後用うるこ
無きが故なり、菩薩は爾らず饒益有情戒を發して此の戒を持
るが故に機を見て五逆・十惡を造り同く犯せども此の戒は破れ
ず還つて弥勒戒体を全くす、故に璎珞經に云く「犯すこと有れど
も失せず未來際を尽くす」文、故に此の戒をば金銀の器に譬う
完くして持する時も破する時も永く失せざるが故なり、問うて
云く此の戒を持する人は幾劫を経てか成仏するや、答えて云く
璎珞經に云く「未だ住前に上らざる○若は一劫二劫三劫乃至十劫
を経て初住の位の中に入ることを得」文、文の意は凡夫に於て

此の戒を持するを信位の菩薩と云う、然りと雖も一劫二劫乃至十劫の間は六道に沈輪し十劫を経て不退の位に入り永く六道の苦を受けざるを不退の菩薩と云う未だ仏に成らず還つて六道に入れども苦無きなり。

第十に仏界とは菩薩の位に於て四弘誓願を發すを以て戒と為す三僧祇の間・六度万行を修し見思・塵沙・無明の三惑を断尽して仏と成る、故に心地觀經に云く「三僧企耶大劫の中に具に百千の諸の苦行を修し功德圓滿にして法界に遍く十地究竟して三身を証す」文、因位に於て諸の戒を持ち仏果の位に至つて仏身を莊嚴す三十二相・八十種好は即ち是の戒の功德の感ずる所なり、但し仏果の位に至れば戒体失す譬えば華の果と成つて華の形無きが如し、故に天台の梵網經の疏に云く「仏果に至つて乃ち

廃す」文、問うて云く梵網經等の大乘戒は現身に七逆を造れる
と並に決定性の二乗とを許すや、答えて云く梵網經に云く
「若し戒を受けんと欲する時は師・問い言うべし汝現身に七逆
の罪を作らざるやと、菩薩の法師は七逆の人の与に現身に戒を受
けしむることを得ず」文、此の文の如くんば七逆の人は現身に
受戒を許さず、大般若經に云く「若し菩薩設い恒河沙劫に妙の
五欲を受くるとも菩薩戒に於ては猶犯と名けず若し一念二乗の心
を起さば即ち名けて犯と為す」文、大莊嚴論に云く「恒に地獄に
処すと雖も大菩提を障らず若し自利の心を起さば是れ大菩提の障
なり」文、此等の文の如くんば六凡に於ては菩薩戒を授け二乗に
於ては制止を加うる者なり、二乗戒を嫌うは二乗所持の五戒・八
戒・十戒・十善戒・二百五十戒等を嫌うに非ず彼の戒は菩薩も

持す可し但二乗の心を嫌うなり、夫れ以みれば持戒は父母・師
僧・国王・主君の一切衆生・三宝の恩を報ぜんが為なり、父母
は養育の恩深し一切衆生は互に相助くる恩重し国王は正法を
以て世を治むれば自他安穩なり、此に依つて善を修すれば恩・重
し主君も亦彼の恩を蒙りて父母・妻子・眷属・所従・牛馬等を
養う、設い爾らずと雖も一身を顧る等の恩・是重し師は亦邪道を
閉じ正道に趣かしむる等の恩・是深し仏恩は言うに及ばす
是くの如く無量の恩分之有り、而るに二乗は此等の報恩皆欠けた
り故に一念も二乗の心を起すは十悪・五逆に過ぎたり一念も
菩薩の心を起すは一切諸仏の後心の功德を起せるなり、已上
四十余年の間の大小乗の戒なり、法華經の戒と言うは二有り、
一には相待妙の戒二には絶待妙の戒なり、先ず相待妙の戒と

は四十余年の大小乗の戒と法華經の戒と相對して爾前を☆戒と

云い法華經を妙戒と云うて諸經の戒をば未顕眞實の戒・歴劫

修行の戒・決定性の二乗戒と嫌うなり、法華經の戒は眞實の戒

・速疾頓成の戒・二乗の成仏を嫌わざる戒等を相對して☆妙を

論ずるを相對妙の戒と云うなり。

問うて云く梵網經に云く「衆生・仏戒を受くれば即ち諸仏の

位に入る位大覺に同じ已に實に是諸仏の子なり」文。

華嚴經に云く「初發心の時便ち正覺を成ず」文、大品經に云く

「初發心の時即ち道場に坐す」文、此等の文の如くんば四十余年

の大乗戒に於て法華經の如く速疾頓成の戒有り何ぞ但歴劫

修行の戒なりと云うや、答えて云く此れに於て二義有り一義に

云く四十余年の間に於て歴劫修行の戒と速疾頓成の戒と有り

法華經に於ては但一つの速疾頓成の戒のみ有り、其の中に於て
四十余年の間の歴劫修行の戒に於ては法華經の戒に劣ると雖も
四十余年の間の速疾頓成の戒に於ては法華經の戒に同じ、故に
上に出す所の衆生・仏戒を受けば即ち諸仏の位に入る等の文は
法華經の須臾聞之・即得究竟の文に之同じ、但し無量義經に
四十余年の經を挙げて歴劫修行等と云えるは四十余年の内の
歴劫修行の戒計りを嫌うなり速疾頓成の戒をば嫌わざるなり、
一義に云く四十余年の間の戒は一向に歴劫修行の戒・法華經の
戒は速疾頓成の戒なり、但し上に出す所の四十余年の諸經の
速疾頓成の戒に於ては凡夫地より速疾頓成するに非ず凡夫地よ
り無量の行を成じて無量劫を経・最後に於て凡夫地より
即身成仏す、故に最後に從えて速疾頓成とは説くなり、委悉に

これ之を論ぜば歴劫修行の所摂なり、故に無量義經には総て

よんじゅうよねん

四十余年の経を挙げて仏・無量義經の速疾頓成に對して宣説

ぼさつ

りやつこうしゅぎよう

きり

菩薩・歴劫修行と嫌いたまえり、大莊嚴菩薩の此の義を承けて

りようげ

領解して云く「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上

ぼだい

じよう

菩提を成ずることを得ず、何を以ての故に菩提の大直道を知らざ

るが故に

ゆえ

けんぎよう

運を行くに留難多きが故に、

るなん

乃至大直道を行くに

ないし

じきどう

るなん

留難無きが故に」文、若し四十余年の間に無量義經・法華經の

ごと

そくしつとんじよう

成の戒之れ有れば

あ

みだり

四十余年の間に無量義經・法華經の

むりようぎきよう

じつぎ

如く速疾頓成の戒之れ有れば仏猥りに四十余年の実義を隠し

たまた

とがこ

給うの失之れ有り云云、二義の中に後の義を作る者は存知の義な

り、

そつたいみよう

相待妙の戒是なり、次に絶待妙の戒とは法華經に於ては

これ

ぜつたいみよう

法華經に於ては

ほけきよう

べち

別の戒無し、爾前の戒即ち法華經の戒なり其の故は爾前の人天の

ようよう

しようじよう

あこんきよう

にじよう

がき

けこん

ほうとう

はんにな

楊葉戒・小乘・阿含經の二乗の瓦器戒・華嚴・方等・般若・

ようよう

しようじよう

あこんきよう

にじよう

がき

けこん

ほうとう

はんにな

楊葉戒・小乘・阿含經の二乗の瓦器戒・華嚴・方等・般若・

ようよう

しようじよう

あこんきよう

にじよう

がき

けこん

ほうとう

はんにな

観經等の歴劫菩薩の金銀戒の行者・法華經に至つて互に和会
して一同と成る、所以に人天の楊葉戒の人は二乗の瓦器・菩薩の
金銀戒を具し菩薩の金銀戒に人天の楊葉二乗の瓦器を具す余は
もつて知んぬ可し、三惡道の人^{げんしん}は現身に於て戒無し過去に於て人天
に生れし時人天の楊葉・二乗の瓦器菩薩の金銀戒を持ち退して
三惡道に墮す、然りと雖も其の功德未だ失せず之有り三惡道の人
・法華經に入る時其の戒之^{これ}を起す故に三惡道にも亦十界を具す、
故に爾前の十界の人・法華經に來至すれば皆持戒なり、故に
法華經に云く「是を持戒と名く」文、安然和尚の広釈に云く「法華
に云く能く法華を説く是を持戒と名く」文、爾前經の如く師に
随つて、戒を持せず但此の經を信ずるが即ち持戒なり、爾前の經
には十界互具を明さず故に菩薩無量劫を経て修行すれども二乗

・人天等の余戒の功德無く但一界の功德を成ず故に一界の功德を
もつじようぶつと
以て成仏を遂げず、故に一界の功德も亦成ぜず、爾前の人・
法華經に至りぬれば余界の功德を一界に具す、故に爾前の經即ち
法華經なり法華經即ち爾前の經なり、法華經は爾前の經を離れず
にぜん
爾前の經は法華經を離れず是を妙法と言う、此の覺り起りて後
は行者・阿含・小乗經を読むとも即ち一切の大乗經を讀誦
し法華經を読む人なり、故に法華經に云く「声聞の法を決了す
れば是諸經の王なり」文、阿含經即ち法華經と云う文なり、
「一仏乘に於て分別して三と説く」文、華嚴・方等・般若即ち
法華經と云う文なり、「若し俗間の經書・治世の語言・資生の
業等を説かんでも皆正法に順ず」文、一切の外道・老子・孔子等
の經は即ち法華經と云ふ文なり、梵網經等の權大乘の戒と

法華經の戒とに多くの差別有り、一には彼の戒は二乗七逆の者を
許さず二には戒の功德に仏果を具せず三には彼は歴劫修行の戒
なり是くの如き等の多くの失有り、法華經に於ては二乗七逆の者
を許す上・博地の凡夫・一生の中に仏位に入り妙覺至つて因果
の功德を具するなり。

正元二年庚申四月二十一日

日蓮

花押

◆六一 教機時国抄 弘長二年二月十日 四十一歳御作 438

P

本朝沙門日蓮之を註す

一に教とは釈迦如来所説の一切の經・律・論・五千四十八卷・

四百八十帙・天竺に流布すること一千年・仏の滅後・一千一十五年に當つて震旦国に仏經渡る、後漢の孝明皇帝永平十年丁卯より唐の玄宗皇帝・開元十八年庚午に至る六百六十四歳の間に一切經渡り畢んぬ、此の一切の經・律・論の中に小乗・大乘・權經・實經・顯經・密經あり此等を并うべし、此の名目は論師・人師よりも出でず仏說より起る十方世界の一切衆生一人も無く之を用うべし之を用いざる者は外道と知るべきなり、阿含經を小乗と説く事は方等・般若・法華・涅槃等の諸大乘經より出でたり、法華經には一向に小乗を説きて法華經を説かざれば仏慳貪に墮すべしと説きたもう、涅槃經には一向に小乗經を用いて仏を無常なりと云わん人は舌口中に爛るべしと云ふ。

二に機きとはふつきょう 仏教を弘ひろむる人は必ず機根きこんを知るべし舍利弗尊者しゃりほつそんじゃ

は金師ふじょうに不淨觀ふじょうくわんを教え浣衣かんえの者には数息觀すそくくわんを教うる間九十日を

経へて所化しよけの弟子でし仏法ぶつぽうを一分いちぶんも覺さとらずして還かえつて邪見じゃけんを起いっせんし一闍提だいた

と成り畢おわんぬ、仏は金師すそくに数息觀すそくを教え浣衣かんえの者に不淨觀ふじょうくわんを教え

たもう故ゆえに須臾しゆゆの間に覺さとることを得たり、智慧ちえ第一だいいちの舍利弗しゃりほつすら

尚なお機きを知らず何いかに況いわんや末代まつだいの凡師ほんし機きを知り難がたし但ただし機きを知らざる

凡師ほんしは所化しよけの弟子でしに一向いっこうに法華經ほけきやうを教うべし、問いわうて云むく無智むちの

人の中にして此の經を説くこと莫なかれとの文は如何いかに、答いえて云いく機き

を知るは智人ちじんの説法せつぽうする事なり又謗法ほうほうの者に向つては一向いっこうに

法華經ほけきやうを説くべし毒鼓どくこの縁と成さんが為なり、例せば不輕菩薩ふぎやうぼさつの

如ごとし亦また智者ちしやと成る可べき機きと知らば必ず先しやうじやうず小乗しょうじやうを教え次に

権大乘こんだいじやうを教え後に実大乘じつだいじやうを教う可べし、愚者ぐしやと知らば必ず先しやうじやうず

じつだいじょう
実大乘を教う可し信謗共に下種と為ればなり。

三に時とは仏教を弘めん人は必ず時を知るべし、譬えば農人

の秋冬・田を作るに種と地と人の功勞とは違わざれども一分も

益無く還つて損す一段を作る者は少損なり、一町二町等の者は

大損なり、春夏耕作すれば上中下に随つて皆分分に益有るが

如し、仏法も亦復是くの如し、時を知らずして法を弘めば益無き

上還つて惡道に墮するなり、仏出世したもうて必ず法華經を説か

んと欲するに縦い機有れども時・無きが故に四十余年には此の經

を説きたまわず故に經に云く「説時未だ至らざるが故なり」等と

云云、仏の滅後の次の日より正法一千年は持戒の者は多く破戒

の者は少し正法一千年の次の日より像法一千年は破戒の者は多

く無戒の者は少し、像法一千年の次の日より末法一万年は破戒の

者は少く無戒の者は多し、正法には破戒・無戒を捨てて持戒の者を供養すべし像法には無戒を捨てて破戒の者を供養すべし、末法には無戒の者を供養すること仏の如くすべし但し法華經を謗ぜん者をば正像末の三時に亘りて持戒の者をも無戒の者をも破戒の者をも共に供養すべからず、供養せば必ず国に三災・七難起り供養せし者も必ず無間・大城に墮すべきなり、法華經の行者の權經を謗ずるは主君・親・師の所従・子息・弟子等を罰するが如し、權經の行者の法華經を謗ずるは所従・子息・弟子等の主君・親・師を罰するが如し、又当世は末法に入つて二百一十余年なり、權經・念仏等の時か法華經の時か能く能く時刻を勘うべきなり。

四に国とは仏教は必ず国に依つて之を弘むべし国には寒国・

熱国・貧国・富国・中国・辺国・大国・小国・一向儉盗国・

一向殺生国・

一向不孝国等之有り、

又一向小乗の国・

一向

大乘の国・

大小兼学の国も之有り、

而るに日本国は一向に

一向

小乗の国が一向に大乘の国が大小兼学の国なるか能く之を

勘うべし。

五に教法流布の先後とは未だ仏法渡らざる国には未だ仏法を

聴かざる者あり既に仏法渡れる国には仏法を信ずる者あり必ず先

に弘まれる法を知つて後の法を弘むべし先に小乗・権大乘弘

らば後に必ず実大乘を弘むべし先に実大乘弘らば後に小乗

・権大乘を弘むべからず、

瓦礫を捨てて金珠を取るべし金珠を

捨てて瓦礫を取ることを勿れ。

已上の此の五義を知つて仏法を弘めば日本国の国師と成る可き

已上の此の五義を知つて仏法を弘めば日本国の国師と成る可き

已上の此の五義を知つて仏法を弘めば日本国の国師と成る可き

已上の此の五義を知つて仏法を弘めば日本国の国師と成る可き

か所以に法華經は一切經の中の第一の經王なりと知るは是れ教
を知る者なり、但し光宅の法雲・道場の慧觀等は涅槃經は
法華經に勝れたりと、清涼山の澄觀・高野の弘法等は華嚴經・
大日經等は法華經に勝れたりと、嘉祥寺の吉藏・慈恩寺の基
法師等は般若・深密等の二經は法華經に勝れたりと云う、天台
の智者大師只一人のみ一切經の中に法華經を勝れたりと立つ
のみに非ず法華經に勝れたる經之れ有りと云わん者を諫曉せよ
止まずんば現世に舌口中に爛れ後生は阿鼻地獄に墮すべし等と云
云、此等の相違を能く能く之を弁えたる者は教を知れる者なり、
当世の千万の学者等一一に之に迷えるか、若し爾らば教を知れる
者之れ少きか教を知れる者之れ無ければ法華經を読む者之れ無し
法華經を読む者之れ無ければ国師となる者無きなり、国師となる

者無ければ國中の諸人・一切經の大・小・権・実・顯・密の
差別に迷うて一人に於ても生死を離るる者之れ無く、結句は
謗法の者と成り法に依つて阿鼻地獄に墮する者は大地の微塵より
も多く法に依つて生死を離るる者は爪上の土よりも少し、恐る
可し恐る可し、日本国の一切衆生は桓武帝より已来四百余年
一向に法華經の機なり、例せば靈山八箇年の純円の機為るが
如し大師安然和尚慧心等の記に之有り是れ機を知れるなり、而るに当世
の学者の云く日本国は一向に称名念仏の機なり等と云云、例せ
ば舍利弗の機に迷うて所化の衆を一闡提と成せしが如し。

日本国の当世は如来の滅後二千二百一十余年後・五百歳に當つ
て妙法蓮華經広宣流布の時刻なり是れ時を知れるなり、而るに
日本国の当世の学者・或は法華經を抛ちて一向に称名念仏を行

じ・或はある小乗しょうじょうの戒律を教えて叡山の大僧を蔑り・或はある教外きょうげを立てて法華ほっけの正法しょうほうを輕かろしむ此等これらは時に迷まよえる者か、例せば勝意しょうい比丘びくが喜根菩薩きこんぼさつを謗ぼうじ徳光論師とくくわんろんしが弥勒菩薩みろくぼさつを蔑あなずりて阿鼻あびの大苦を招まねきしが如ごとし、日本国にほんこくは一向いっこうに法華經ほけきょうの国なり例せば舍衛国しゃえいこくの一向いっこうに大乘だいじょうなりしが如ごとし、又天竺てんじくには一向いっこうに小乗しょうじょうの国一向いっこうに大乘だいじょうの国・大小兼学だいしょうけんがくの国も之有り、日本国にほんこくは一向いっこう大乘だいじょうの国なり大乘だいじょうの中にも法華經ほけきょうの国為たる可べきなり瑜伽論肇公の記聖徳太子伝教是れ国を知れる者なり、而しかに当世とうせの学者がくしゃ日本国にほんこくの衆生しゅじょうに向つて一向いっこうに小乗しょうじょうの戒律を授け一向いっこうに念仏者等ねんぶつと成すは「譬たとえば宝器たうきに穢食えじきを入れたるが如ごとし」等云云しゆんの守護章しゆごに在り、日本国にほんこくには欽明天皇きんめいてんのうの御宇ぎよに仏法百濟国ぶつぽうくくより渡り始めしより桓武天皇かんむてんのうに至るまで二百四十余年の間・此の国に小乗しょうじょう・權大乘ごんだいじょうのみ弘まり法華經ほけきょう有り

と雖も其の義未だ顕れず、例せば震旦国に法華經渡つて三百余年の間・法華經有りと雖も其の義未だ顕れざりしが如し、桓武天皇の御宇に伝教大師有して小乗・権大乘の義を破して法華經の實義を顕せしより已来又異義無く純一に法華經を信ず、設い華嚴・般若・深密・阿含・大小の六宗を学する者も法華經を以て所詮と為す、況や天台・真言の学者をや何に況や在家の無智の者をや、例せば崑崙山に石無く蓬萊山に毒無きが如し、建仁より已来今に五十余年の間・大日・仏陀・禪宗を弘め、法然・隆寛・浄土宗を興し実大乘を破して権宗に付き一切經を捨てて教外を立つ、譬えば珠を捨てて石を取り地を離れて空に登るが如し此は教法流布の先後を知らざる者なり。

仏誠めて云く「悪象に値うとも悪知識に値わざれ」等と云云、

ほけきよう 法華經の勸持品に後の五百歳二千余年に當つて法華經の敵人・
さんるいあ 三類有る可しと記し置きたまえり当世は後・五百歳に當れり、
にちれん 日蓮・仏語の実否を勘うるに三類の敵人之有り之を隱さば法華經
ぎようじや 行者に非ず之を顯さば身命定めて喪わんか、法華經第四に
いわ 云く「而も此の經は如来の現在にすら猶怨嫉多し況や滅度の後を
や」等と云云、同じく第五に云く「一切世間怨多くして信じ難し」
と、又云く、「我身命を愛せず但無上道を惜む」と、同第六に云く
「自ら身命を惜まず」と云云、涅槃經第九に云く「譬えば王使
の善能談論し方便に巧みなる命を他國に奉け寧ろ身命を喪うと
も終に王の所説の言教を匿さざるが如し、智者も亦爾なり凡夫
の中に於て身命を惜まずして要必大乘方等を宣説すべし」と云
云、章安大師釈して云く「寧喪身命不匿教とは身は軽く法は

重し身を死して法を弘めよ」等と云云、此等の本文を見れば三類
の敵人を顕さずんば法華經の行者に非ず之を顕すは法華經の
行者なり、而れども必ず身命を喪わんか、例せば師子尊者・
提婆菩薩等の如くならん云云。

二月十日

日蓮

花押

◆六二

顯謗法抄

弘長二年

四十一歳御作

443P

本朝

沙門

日蓮撰

第一に八大地獄の因果を明し、第二に無間地獄の因果の輕重
を明し、第三に問答料簡を明し、第四に行者弘經の用心を明す。

第一に八大地獄の因果を明さば、第一に等活地獄とは此の

閻浮提の地の下・一千由旬にあり此の地獄は縱広齊等にして一

ゆじゆん

ざいにん

もし

万由旬なり、此の中の罪人はたがいに害心をいだく若たまた相

さる

くろがね

たがい

見れば犬と☆とのあえるがごとし、各鉄の爪をもて互につかみ

けつにくすで

つ

ある

ごくそつ

さく血肉既に尽きぬれば唯骨のみあり、或は獄卒手に鉄杖を取

こうべ

みな

いさこ

つて頭より足にいたるまで皆打くだく身体くだけで沙のごとし、或は利刀をもつて分分に肉をさく然れども又よみがへり・

ある

しか

よみがへりするなり此の地獄の寿命は人間の昼夜五十年をもつ

じこく

じゆみよう

にんげん

てんにん

じゆみよう

て第一四王・天の一日一夜として四王・天の天人の寿命五百歳

だいいちしおう

しおう

てんにん

じゆみよう

なり、四王・天の五百歳を此れ等活地獄の一日一夜として其の

しおう

こ

とうかつじこく

そ

寿命五百歳なり、此の地獄の業因をいはば・ものの命をたつも

じゆみよう

じこく

ごういん

の此の地獄に墮つ螻蟻蚊☆等の小虫を殺せる者も懺悔なければ必

じこく

お

ろうぎもんもう

じこく

ざんげ

じこく

ず此の地獄に墮つべし、譬へばはりなれども水の上にをけば沈ま

じこく

お

たと

かさ

つみ

ざることなきが如し、又懺悔すれども懺悔の後に重ねて此の罪を

こと

ざんげ

ざんげ

かさ

つみ

つくれば後の懺悔には此の罪きえがたし、譬へばぬすみをして獄に入りぬるもののしばらく経て後に御免を蒙りて獄を出ずれども又重ねて盗をして獄に入りぬれば出ゆるされがたきが如し、されば当世の日本国の人は一一人より下万民に至まで此の地獄をまぬがる人は一人もありがたかるべし、何に持戒のをぼへをとれる持律の僧たりとも蟻虱などを殺さず蚊☆をあやまたざるべきか、況や其外山野の鳥鹿・江海の魚鱗を日に殺すものをや、何に況や牛馬人等を殺す者をや。

第二に黒繩地獄とは等活地獄の下にあり縦広は等活地獄の如し、獄卒・罪人をとらえて熱鉄の地にふせて熱鉄の繩をもつて身にすみうつて熱鉄の斧をもつて繩に随つてきり・さきけづる又鋸を以てひく又左右に大なる鉄の山あり山の上に鉄の幢

を立くろがねて鉄くろがねの繩をはり罪人ざいにんに鉄くろがねの山を・ををせて繩の上よりわたす繩より落ちてくだけ・或あるくろがね鉄くろがねのかなえに墮だし入れて・にらる此かみの苦は上の等活地獄とうかつじごくの苦よりも十倍なり、人間にんげんの一百歳は第二とうりてんの☆利天とうりてんの一日一夜なり其その寿せんさい一千歳なり此の天の寿せんさい一千歳を一日一夜として此の第二じごくの地獄の寿命じゅみょう一千歳なり、殺生せつしょうの上にちゅうとう偷盜ちゅうとうとて・ぬすみをかさねたるもの此の地獄じごくにをつ、当世とうせのちゅうとう偷盜ちゅうとうのもの・ものをぬすむ上・物の主を殺すもの此の地獄じごくにお墮おつべし。

第三に衆合地獄じしよくとは黒繩地獄こくじょうじごくの下にあり縦じゅうこう広かみは上の如ごとし多くの鉄くろがねの山二つづつに相向さうかうへり、牛頭ごず・馬頭めず等の獄卒手ごくそつに棒を取ざいにんつて罪人ざいにんを駈かりて山の間に入らしむ、此の時・両の山迫り来て合しゅじゅせ押す身体くだけで血流れて地にみつ、又種種の苦あり、人間にんげんの

二百歳を第三の夜・摩天の一日一夜として此の天の寿二千歳なり
此の天の寿を一日一夜として此の地獄の寿命二千歳なり、殺生
・偷盗の罪の上に邪淫とて他人のつまを犯す者・此の地獄の中
に墮つべし、而るに当世の僧・尼・士・女・多分は此の罪を犯す
殊に僧にこの罪多し、士女は各互にまほり又人目をつつまざる
故に此の罪を・をかさず僧は一人ある故に淫欲とぼしきところに
若し有身ば父ただされ・あらはれぬべきゆへに独ある女人を・を
かさず、もしや・かくなると他人の妻をうかがひ・ふかく・かく
れんとをもうなり、当世のほか・たうとげなる僧の中にことに此
の罪又多くあるらんと・をぼゆ、されば多分は当世・たうとげな
る僧此の地獄に墮つべし。

第四に叫喚地獄とは衆合の下にあり縦広前に同じ獄卒惡声

出して弓きゅうせん箭をもつて罪人ざいにんをいる、又鉄くろがねの棒を以て頭もつこうべを打つて
熱鉄の地をはしらしむ、・或あるは熱鉄のいりだなにうちかへし・う
ちかへし此の罪人ざいにんをあぶる、・或あるは口を開てわける銅のゆを入
れば五臓やけて下より直ただちに出いず、寿命じゅみょうをいはば人間にんげんの四百歳を
第四の都率天とそつの一日一夜とす、又都率天とそつの四千歳せんさいなり都率天とそつの四
千歳せんさいの寿を一日一夜として此の地獄じごくの寿命じゅみょう四千歳せんさいなり、此の
地獄じごくの業因ごういんをいはば・殺生偷盜せつしようちゅうとう・邪婬じやいんの上に飲酒おんじゆとて酒のむも
の此の地獄じごくに墮おつべし、当世とうせの比丘びく・比丘尼びくに・優婆塞うばそく・優婆夷うばい
四衆ししゅうの大酒なる者・此の地獄じごくの苦免まぬかれがたきか、大論だいろんには酒に三
十六の失とがをいだし梵網經ぼんもうきやうには酒盃さかずきをすすめる者五ひやくしやう百生ひやくしやうに手な
き身と生ると・とかせ給たまう人師にんしの釈にはみみずていの者と・なる
とみへたり、況いわんやや酒をうりて人にあたえたる者をや何いかに況いわんやや酒に

水を入れてうるものをや・当世とうせの在家ざいけの人人ひとびとこの地獄じごくの苦まぬが
れがたし。

第五に大叫きょうかんじごく喚きょうかん地獄とは叫喚きょうかんの下にあり縦じゅうこう広前に同し、其その

苦の相は上かみの四の地獄じごくの諸もろもろの苦に十倍して重しげくこれをうく、

寿命じゅみょうの長短ちやうたんを云わば人間にんげんの八百歳は第五の化楽天けらくてんの一日一夜な

り此の天の寿八千歳せんさいなり此の天の八千歳せんさいを一日一夜として此の

地獄じごくの寿命じゅみょう八千歳せんさいなり、殺生せつしよう・偷盜ちゆうとう・邪淫じゃいん・飲酒おんじゆの重罪じゆうざいの上

に妄語もうごとてそらごとせる者・此の地獄じごくに墮おつべし、当世とうせの諸人しよにんは

設たい賢人けんじん・上人しょうにんなど・いはるる人人ひとびとも妄語もうごせざる時はありと

も妄語もうごをせざる日はあるべからず、設たい日はありとも月はあるべ

からず設たい月はありとも年はあるべからず設たい年いちねんはありとも一期いちき

生・妄語もうごせざる者はあるべからず、若もししからは当世とうせの諸人しよにん・一

人もこの地獄をまぬがれたきか。

第六に焦熱地獄とは大叫喚地獄の下にあり縦広前にをなじ、

此の地獄に種種の苦あり若し此の地獄の豆計りの火を閻浮提にを

けらんに一時にやけ尽きなん況や罪人の身の☆なることわたの

ごとくなるをや、此の地獄の人は前の五つの地獄の火を見る事・

雪の如し、譬へば人間の火の薪の火よりも鉄銅の火の熱きが

如し、寿命の長短は人間の千六百歳を第六の他化天の一日一夜

として此の天の寿千六百歳なり此の天の千六百歳を一日一夜とし

て此の地獄の寿命一千六百歳なり、業因を云わば殺生・偷盗

・邪淫・飲酒・妄語の上・邪見とて因果なしという者・此の中に

墮つべし、邪見とは有人の云く人飢えて死ぬれば天に生るべし等

と云云、総じて因果をしらぬ者を邪見と申すなり世間の法には

慈悲なき者を邪見じゃけんの者という、当世とうせの人人・此の地獄じごくを免まぬれがたきか。

第七に大焦熱だいしょうねつ地獄じごくとは焦熱しょうねつの下にあり縦じゅう広こう前の如ごとし、前の六つの地獄じごくの一切いっさいの諸苦しよくに十倍して重しげく受るなり、其その寿命じゆみようは半中劫はんちゆうけつなり、業因ごういんを云わば殺生せつしやう・偷盜ちゆうとう・邪淫じゃいん・飲酒おんじゆ・妄語もうご・邪見じゃけんの上に淨戒じようかいの比丘びく尼にを・をかせるもの此の中に墮おつべし、又比丘びく・酒をもつて不邪淫戒ふじゃいんかいを持たもてる婦女をたばらかし・或あるは財物さいもつをあたへて犯せるもの此の中に墮おつべし、当世とうせの僧の中に多く此の重罪じゆうざいあるなり、大悲經の文に末代まつだいには士女しにょは多くは天に生そじ僧尼そうには多くは地獄じごくに墮おつべしととかれたるはこれていの事か、心あらん人人ひとびとは・はづべし・はづべし。

総じて上かみの七大地獄だいいじごくの業因ごういんは諸經論しよきようろんをもつて勘かんえ当世とうせ・

にほんこく ししゅう

だいじごく

日本国の四衆にあて見るに此の七大地獄をはなるべき人を見ず又

きかず、涅槃經に云く末代に入りて人間に生ぜん者は爪上の土

の如し三悪道に墮つるものは十方世界の微塵の如しと説かれた

り、若爾らば我等が父母・兄弟等の死ぬる人は皆上の七大地獄に

こそ墮ち給いては候らめあさましともいうばかりなし、竜と蛇と

鬼神と仏・菩薩・聖人をば未だ見ずただをとにのみ・これをき

く当世に上の七大地獄の業を造らざるものをば未だ見ず又・をと

にも・きかず、而るに我が身よりはじめて一切衆生・七大地獄

に墮つべしと・をもえる者・一人もなし、設い言には墮つべきよ

しを・さえづれども心には墮つべしとも・をもわず、又僧尼・

士女・地獄の業をば犯すとは・をもえども・或は地藏菩薩等の

菩薩を信じ・或は阿弥陀仏等の仏を待み・或は種種の善根を修

したる者もあり、皆みなをもはく我はかかる善根ぜんこんをもてれば・なんと
・うちをもひて地獄じごくをもをぢず、・或あるは宗宗を習へる人人ひとびとは各各
の智分ちぶんをたのみて又地獄じごくの因を・をぢず、而しかるに仏菩薩ぼさつを信じた
るも愛子・夫婦などをあいし父母ふぼ・主君しゅくんなどをうやまうには
雲泥うんでいなり、仏・菩薩ぼさつ等をば・かろくをもえるなり、されば当世とうせの
人人ひとびとの仏・菩薩ぼさつを恃たのめれば宗宗を学がくしたれば地獄じごくの苦はまぬがれ
なんなんど・をもえるは僻案びやくあんにや心あらん人人ひとびとはよくよくはか
りをもうべきか。

第八あびに大阿鼻地獄だいしやくとは又は無間地獄むげんじごくと申もうすなり欲界よっかいの最底・
大焦熱地獄だいしやうねつじごくの下にあり此の地獄じごくは縦じゆう八万由旬はちまんゆじゆんなり、外に七重
の鉄くろがねの城あり地獄じごくの極苦ごくくは且しばく之を略しす前の七大地獄だいじごく並びに別
処いっさいの一切の諸苦しよくを以もつて一分として大阿鼻地獄あびじごくの苦一千倍勝すくれた

り、此の地獄じごくの罪人ざいにんは大焦熱地獄だいしょうねつじごくの罪人ざいにんを見る事・他化自在天たけじざいてんの楽らくみの如ごとし、此の地獄じごくの香かのくささを人ひとかくならば四天下してんげ・欲界よくがい・六天ろくにんの天人てんにん皆みなししなん、されども出山しゅっせん・没山もつざんと申もうす山・此の地獄じごくの臭いき氣きを・をさへて人間にんげんへ来きらせざるなり、故ゆえに此の世界せかいの者死しせずと見みへぬ、若もし仏ぶつ・此の地獄じごくの苦くを具つに説せかせ給たまはば人聴きいて血ちをはいて死しすべき故ゆえにくわしく仏説ぶつとき給たまはずとみへたり、此の無間地獄むげんじごくの寿命じゆみょうの長短ちやうたんは一いち中劫ちゆうけつなり一中劫いちぢゆうけつと申もうすは此の人寿にんじゆう無量歳むりやうさいなりしが百年ひゃくねんに一いち寿じうを減へじ又百年またひゃくねんに一いち寿じうを減へずるほどに人寿にんじゆう十歳じうさいの時ときに減へずるを一いち減げんと申もうす、又十歳じうさいより百年ひゃくねんに一いち寿じうを増ふし又百年またひゃくねんに一いち寿じうを増ふする程ほどに八万歳はちまんさいに増ふするを一いち増ぞうと申もうす、此の一増一減いちぞういちげんの程ほどを小劫せうけつとして二十の増減ぞうげんを一いち中劫ちゆうけつとは申もうすなり、此の地獄じごくに墮おちたる者ものこれ程久ひさしく無間地獄むげんじごくに住す

して大苦をうくるなり、業因を云わば五逆罪を造る人・此の地獄
に墮つべし、五逆罪と申すは一に殺父・二に殺母・三に殺阿羅漢
・四に出仏身血・五に破和合僧なり、今の世には仏ましまさず・
しかれば出仏身血あるべからず、和合僧なければ破和合僧なし、
阿羅漢なければ殺阿羅漢これなし、但殺父・殺母の罪のみありぬ
べし、しかれども王法のいましめきびしくあるゆへに此の罪・を
かしがたし、若爾らば当世には阿鼻地獄に墮つべき人すくなし
但し相似の五逆罪これあり木画の仏像・堂塔等をやき・かの仏像
等の寄進の所をうばいとり率兜婆等をきりやき智人を殺しななど
するもの多し、此等は大阿鼻地獄の十六の別処に墮つべし、され
ば当世の衆生十六の別処に墮つるもの多きか又謗法の者この
地獄に墮つべし。

第二に無間地獄の因果の輕重を明さば、問うて云く五逆罪よ

ほか つみ

むげんじごく いんが けいちよう

あか

問うて云く五逆罪よ

り外の罪によりて無間地獄に墮んことあるべしや、答えて云く

ひほうしょうほう

じゅうざい

むげんじごく おち

いわ しょうもん いかん

いわ ほけきよう

誹謗正法の重罪なり、問うて云く証文如何、答えて云く法華經

いわ

も

第二に云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば乃至其の人

きほう ないしそ

命終して阿鼻獄に入らん」等と云云、此の文に謗法は阿鼻地獄

みようじゅう

あびごく

の業と見へたり、問うて云く五逆と謗法と罪の輕重如何、答て

云く大品經に云く「舍利弗・仏に白して言く世尊五逆罪と破法罪

いわ だいほん

いわ

いわ ころやく

ほうほう つみ

けいちよう いかん

はほうざい

と相似するや、仏・舍利弗に告わく相似と言うべからず所以は

そうじ

いなりほつ

つげたま

そうじ

ゆえん

何ん若し般若波羅蜜を破れば即ち十方諸仏の一切智一切種智を

いか も

はんにや はらみつ

わ

すなわ じゅつほうしよぶつ

いっさい いっさい しゅち

破るに為んぬ、仏宝を破るが故に法宝を破るが故に僧宝を破るが

やぶ

なさ

ぶつほう

やぶ

ゆえ

ほうほう

やぶ

ゆえ

やぶ

故に三宝を破るが故に即ち世間の正見を破す世間の正見を破れば

ゆえ

さんほう

やぶ

ゆえ

すなわ

せけん

せいけん

は

せけん

せいけん

わ

則ち無量無辺阿僧祇の罪を得るなり無量無辺阿僧祇の罪を得

すなわ

むりようむへん

あそ

ぎ つみ

むりようむへん

あそ

ぎ

つみ

得

○則ち無量無辺阿僧祇の罪を得るなり無量無辺阿僧祇の罪を得

すなわ

むりようむへん

あそ

ぎ つみ

むりようむへん

あそ

ぎ

つみ

得

○則ち無量無辺阿僧祇の罪を得るなり無量無辺阿僧祇の罪を得

已おわつて則すなわち無量無辺阿僧祇むりようむへんあそぎの憂苦ゆうくを受けるなり」文又い云わく「破法はほうの業・因縁いんねん集あつるが故ゆえに無量百千万億歳むりようせんまんだいじごく大地獄だいじごくの中に墮おつ、此この破法はほう人の輩やから一だいじごく大地獄だいじごくより一だいじごく大地獄だいじごくに至いたる若もし劫火ごうか起おこる時ときは他方たほうの大地獄だいじごくの中に至いたる、是かくのごとくの如ごとく十方じゅうぽうに☆くして彼の間に劫火ごうか起おこる故ゆえに彼より死はほう破法はほうの業・因縁いんねん未いまだ尽つきざるが故ゆえに是この間の大地獄だいじごくの中に還来かんらいす」等と云云、法華經第七ほけきように云いく「四衆ししゅうの中に瞋恚しんにを生ふじ心不淨ふじようなる者有あり惡口罵詈あつくめりして言いく是これ無智むちの比丘びくと、或あるは杖じようもく木瓦石もくがしやくを以もて之これを打擲ちようちやくす乃至千劫阿鼻地獄ないしせんごうあびじごくに於おいて大苦惱くのうを受うく」等と云云、此この經文きやうもんの心こころは法華經ほけきようの行者ぎやうじゃを惡口あつくし及び杖およを以もて打擲うちせるもの其その後に懺悔ざんげせりといえども罪つみいまだ滅せんごうせずして千劫阿鼻地獄あびじごくに墮おちたりと見えぬ、懺悔ざんげせる謗法ほうほうの罪つみすら五逆罪ごぎやくざいに千倍せんごうせり況いや懺悔ざんげせざらん謗法ほうほうにをいては

阿鼻地獄あびじごくを出いずる期かたかるべし、故ゆゑに法華經第二に云いく「經を讀誦どくじゆし書持しよじすること有らん者を見て輕賤きやうせん憎嫉そうしつして結恨けつこんを懷いだかんないしそ乃至其の人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入り一劫いつこくを具足ぐそくして劫尽けつきなば更生またうまれん、是かくのこくの如てんく展轉てんでんして無數劫むしゆこくに至いたらん」等と云云。

第三に問答料簡もんどうりやうけんを明あかさば問うて云いく五逆罪ごぎやくざいと謗法罪ぼうぼうざいとの輕重けいちゆう

はしんぬ謗法ぼうぼうの相貌そうみやう如何いかん、答えて云いく天台智者大師てんだいちしやだいしの梵網經ぼんもうきやうの

疏じよに云いく謗そむとは背そむなり等と云云、法そむに背そむくが謗法ぼうぼうにてはあるか

天親てんじんの仏性論ぶつしやうろんに云いく若もし憎そむは背そむくなり等と云云、この文の心は

正法しやうぼうを人に捨すてさせるが謗法ぼうぼうにてあるなり、問うて云いく委細いさいに

相貌そうみやうをしらんとをもうあらあら・しめすべし、答えて云いく

涅槃經第五ねはんぎやうに云いく「若もし人有にやらいりて如來むじやうは無常むじやうなりと言いわん云何なんぞ

是この人舌墮落だらくせざらん」等云云、此の文の心は仏むじやうを無常むじやうといはん

人は舌墮落すべしと云云、問うて云く諸の小乗經に仏を無常
と説かるる上又所化の衆皆無常と談じき若爾らば仏・並に所化の
衆の舌墮落すべしや、答えて云く小乗經の仏を小乗經の人
が無常ととき談ずるは舌ただれざるか、大乘經に向つて仏を
無常と談じ小乗經に対して大乘經を破するが舌は墮落する
か、此れをもつて・をもうに・をのれが依經には随えども依經よ
りすぐれたる經を破するは破法となるか、若爾らば設い觀經・
華嚴經等の權大乘經の人人・所依の經の文の如く修行すとも
かの經にすぐれたる經經に随はず又すぐれざる由を談ぜば謗法
となるべきか、されば觀經等の經の如く法をえたりとも觀經等
を破せる經の出来したらん時其の經に随わらずば破法となるべき
か、小乗經を以てなぞらえて心うべし。

問うて云くいわ雙觀經等そうかんきように乃至ないし十念そくとくおうじよう・即得往生そくとくおうじようなんととかれて候

が彼のけうの教こつの如く十念そくとく申して往生おうじようすべきを後の經を以て

申しやぶらばほうほう謗法にては候まじきか、答えて云くい仏・觀經等かんきようの

四十余年よんじゅうよねんの經經きようきようを束みけんしんじつて未顯真實みけんしんじつと説かせ給たまいぬれば此きようもんの經文

に随したがつて乃至ないし十念そくとく・即得往生そくとく等は實おには往生おうじようしがたしと申す此

の經文きようもんなくば謗法ほうほうとなるべし、問うて云く・或人ある云くい無量義經むりようぎきよう

の四十余年よんじゅうよねん・未顯真實みけんしんじつの文はあえて四十余年よんじゅうよねんの一切いっさいの經經きようきよう並に

文文・句句みなみけんしんじつを皆未顯真實みけんしんじつと説き給たまいはあらず、但よんじゅうよねん四十余年よんじゅうよねんの

經經きようきように処処しよしよに決定けつじよう性の二乗にじようを永不成仏ようふじようぶつときらはせ給たまい釈迦しゃか

如来にょらいを始成しじよう正覺しじようと説き給たましを其その言ばかりをさして未顯真實みけんしんじつと

は申もうすなりあえて余事よじにはあらず、而しかるをみだりに四十余年よんじゅうよねんの文

を見て觀經等かんきようの凡夫ほんぶのために九品往生おうじようなんぞを説ときたるを妄みだり

に往生おうじょうはなき事なりなんと押し申もうすあに・

をそろしき謗法ほうぼうの者にあらずやなんと申もうすはいかに、答こたえて云いく

此この料簡りょうけんは東土とうどの得とく一いつが料簡りょうけんに似にたり、得とく一いつが云いく未顕真実みけんしんじつと

は決けつ定性じょうぎょうの二乗にじょうを仏にぜん・爾前にぜんの經きやうにして永不成仏ようふじやうぶつととかれしを

未顕真実みけんしんじつとは嫌きらはるるなり前四味ぜんしみの一切いっさいには亘わたるべからずと申もうし

き、伝でん教大師ぎやうだいしは前四味ぜんしみに亘わたりて文文・句句みくくに未顕真実みけんしんじつと立て

給たまいき、さればこの料簡りょうけんは古いにしえの謗法者ほうぼうしやの料簡りょうけんに似にたり、但ただし

且しかく汝等なんじが料簡りょうけんに隨たずて尋あきね明あきらめん、問ほつう法華ほつけ已前いぜんに二乗にじょう作さ仏ぶつ

を嫌きらいけるを今未顕真実みけんしんじつというとならば先けつず決けつ定性じょうぎょうの二乗にじょうを仏に

の永不成仏ようふじやうぶつと説しやうかせ給たまし処しよ処しよの經文きやうもんばかりは未顕真実みけんしんじつの仏にの

妄語もうごなりと承しやう伏ふくせさせ給たまうか、さては仏にの妄語もうごは勿論もちろんなり若もし

爾しからば妄語もうごの人の申もうすことは有無うむ共に用もちいぬ事ことにてあるぞかし、

けつじょう 決定性の二乗・永不成仏の語ばかり妄語となり若し余の菩薩・

凡夫の往生・成仏等は実語となるべきならば信用しがたき事な

り、譬へば東方を西方と妄語し申さん人は西方を東方と申すべし

二乗を永不成仏と説く仏は余の菩薩の成仏をゆるすも又妄語に

あらずや、五乗は但一仏性なり二乗の仏性をかくし菩薩・凡夫

の仏性をあらはすは返つて菩薩・凡夫の仏性をかくすなり。

有人云く四十余年・未顕真実とは成仏の道ばかり未顕真実な

り往生等は未顕真実にはあらず、又難じて云く四十余年が間の

説の成仏を未顕真実と承伏せさせ給はば雙觀經に云う不取

正覺成仏已來凡歷十劫等の文は未顕真実と承伏せさせ給う

か、若し爾らば四十余年の経經にして法蔵比丘の阿弥陀仏にな

り給はずば法蔵比丘の成仏すでに妄語なり、若し成仏妄語なら

ば何いづれの仏ぎようじやか行者むかを迎え給たまうべきや、又かれ此なんの難なんを通して云ん

よんじゅうよねん

じようぶつ

あみだぶつ

じようぶつ

かこ

四十余年が間は成仏じようぶつはなし阿弥陀仏あみだぶつは今の成仏じようぶつにはあらず過去かこ

じようぶつ

の成仏じようぶつなり等と云云、今難なんじて云く今日の四十余年よんじゅうよねんの経経きようぎように

ほんぶ

じようぶつ

ゆる

いわ

きよう

よんじゅうよねん

きようぎよう

して実の凡夫の成仏じようぶつを許されずば過去遠遠劫かこおんのんごうの四十余年よんじゅうよねんの権経こんきよう

じようぶつかな

さんぜ

しよぶつ

せつぽう

みな

き

にても成仏じようぶつ叶かないがたきか、三世の諸仏しよぶつの説法の儀式せつぽう皆みな同きが故

ある

いわ

ふとくしつじよう

むじようぼだい

よんじゅうよねん

き

なり、或は云く不得疾ふとくしつじよう成・無上菩提むじようぼだいととかるれば四十余年の

きようぎよう

経経きんぎんにては疾はやくこそ仏にはならねども遅く

へ

劫を経てはなるか、難なんじて云く次下の大莊嚴菩薩等の領解りようげに云く

ふかしぎむりようむへんあそぎこう

すく

ついで

むじようぼだい

じよう

「不可思議無量無辺阿僧祇劫を過るとも終に無上菩提を成ずるこ

とを得ず」等と云云、此の文の如くならば劫を経てへも爾前にぜんの経

計りにては成仏じようぶつはかたきか。

ばか

あるい

けこんしゆう

りようけん

いわ

よんじゅうよねん

けこんきようばか

有は云う華嚴宗の料簡に云く四十余年の内には華嚴経計りは

入るべからず、華嚴經にすでに往生成仏・此ありなんぞ華嚴經

を行じて往生成仏をとげざらん、答えて云く四十余年の内に

華嚴經入るべからずとは華嚴宗の人師の義なり、無量義經には

正く四十余年の内に華嚴海空と名目を呼び出して四十余年の内

にかずへ入れられたり、人師を本とせば仏に背くになりぬ。

問うて云く法華經をはなれて往生成仏をとげずば仏世に出さ

せ給ては但法華經計をこそ説き給はめ、なんぞわづらはしく

四十余年の經經を説かせ給うや、答えて云く此の難は仏、自ら

答え給えり「若し但仏乘を讃せば衆生苦に没在して法を破して

信ぜざるが故に三惡道に墜ちなん」等の經文これなり、問うて

云くいかなれば爾前の經をば衆生謗せざるや、答えて云く爾前

の經經は万差なれども束ねて此れを論ずれば隨他意と申して

衆生しゅじょう

の心をとかれてはんべり故ゆえに違いする事なし、譬たとへば水に石

を・なぐるに・あらそうことなきがごとし又しなじなの説教せつきょうは

んべれども九界の衆生しゅじょうの心を出いでず衆生しゅじょうの心は皆善みなにつけ悪に

つけて迷まよを本とするゆへに仏にはならざるか、問うて云いく衆生しゅじょう

謗ぼうずべきゆへに仏・最初さいしよに法華經ほけきょうをとき給たまはずして四十余年よんじゅうよねんの後

に法華經ほけきょうをとき給たまはば汝なんじなんぞ当世とうせに権經こんきょうをば・とかずして

左右さうなく法華經ほけきょうをといて人に謗ぼうをなさせて惡道あくどうに墮だすや、答えて

云いく仏在世ざいせには仏・菩提樹ぼだいじゆの下に坐し給たまいて機きをかがみ給たまうに

当時とうじ・法華經ほけきょうを説くならば衆生しゅじょう謗ぼうじて惡道あくどうに墮おちぬべし、

四十余年よんじゅうよねんすぎて後にとかは謗ぼうせずして初住しよじゅう不退ふたい・乃至妙覺ないしみょうかくにの

ぼりぬべしと知見ちけんし・ましましき、末代濁世まつだいじよくせには当機とうきにして

初住しよじゅうの位に入るべき人は万に一人もありがたかるべし、又能化のうけ

の人も仏にあらざれば機をかがみん事もこれかたし、

されば逆縁・順縁のために先ず法華經を説くべしと仏ゆるし

給へり、但し又滅後なりとも当機衆になりぬべきものには先ず

權教をとく事も・あるべし、又悲を先とする人は先ず權經をと

く釈迦仏のごとし慈を先とする人は先ず実經をとくべし不輕

菩薩のごとし、又末代の凡夫はなにとなくとも惡道を免れんこと

はかたかるべし同じく惡道に墮るならば法華經を謗ぜさせて墮す

ならば世間の罪をもて墮ちたるには・にるべからず、聞法生謗

・墮於地獄・勝於供養・恒沙仏者等の文のごとし、此の文の心は

法華經をはうじて地獄に墮ちたるは釈迦仏・阿弥陀仏等の恒河沙

の仏を供養し帰依渴仰する功德には百千万倍すぎたりととかれ

たり。

問うて云く上の義のごとくならば華嚴・法相・三論・真言・
浄土等の祖師はみな謗法に墮すべきか、華嚴宗には華嚴經は
法華經には雲泥超過せり法相・三論もてかくのごとし、真言宗
には日本国に二の流あり東寺の真言は法華經は華嚴經にとれり
何に況や大日經にをいてをや、天台の真言には大日經と法華經
とは理は齊等なり印真言等は超過せりと云云、此等は皆惡道に
墮つべしや、答えて云く宗をたて經經の勝劣を判ずるに二の
義あり、一は似破・二は能破なり一に似破とは他の義は吉とをも
えども此をはすかの正義を分明にあらはさんがためか、二に
能破とは実に他人の義の勝れたるをば弁えずして迷うて我が義
すぐれたりとをもひて心中よりこれを破するをば能破という・
されば彼の宗宗の祖師に似破・能破の二の義あるべし、心中に

ほけきようは法華經は諸經に勝れたりと思えども且く違して法華經の義を

あらわ顯さんとをもひてこれをはする事あり、提婆達多・阿闍世王・

もろもろげどう

諸の外道が仏のかたきとなりて仏徳を顕し後には仏に帰せしがご

とし、又実の凡夫が仏のかたきとなりて惡道に墮つる事これ多し、

されば諸宗の祖師の中に回心の筆をかかずば謗法の者惡道に

墮ちたりとしるべし、三論の嘉祥・華嚴の澄觀・法相の慈恩・

東寺の弘法等は回心の筆これあるか、よくよく尋ねならうべし。

問うて云くまことに今度生死をはなれんと・をもはん・なに

ものをか・いとひなにものをか願うべきや、答う諸の經文には

女人等をいとうべしとみへたれども雙林最後の涅槃經に云く

「菩薩是の身に無量の過患具足充滿すと見ると雖も涅槃經を

受持せんと欲するを為ての故に猶好く將護して乏少ならしめず、

菩薩惡象等に於ては心に恐怖すること無れ惡知識に於ては怖畏の
心を生ぜよ、何を以ての故に是れ惡象等は唯能く身を壞りて心を
壞る事能わず、惡知識は二俱に壞るが故に、惡象の若きは唯一身
を壞る惡知識は無量の身・無量の善心を壞る、惡象の為に殺され
ては三趣に至らず惡友の為に殺されては三趣に至る」等と云云此
の經文の心は後世を願はん人は一切の惡縁を恐るべし一切の
惡縁よりは惡知識を・をそるべしとみえたり。

されば大莊嚴仏の末の四の比丘は自ら惡法を行じて十方の大
阿鼻地獄を経るのみならず、六百億人の檀那等をも十方の地獄
に墮しめ、鴛堀摩羅は摩尼跋陀が教に随つて九百九十九人の指を
きり結句・母・並に仏をがいせんとぎす、善星比丘は仏の御子
・十二部經を受持し四禪定をえ欲界の結を断じたりしかども

苦得外道の法を習うて生身に阿鼻地獄に堕ちぬ、提婆が六万蔵
・八万蔵を暗じたりしかども外道の五法を行じて現に無間に堕ち
にき、阿闍世王の父を殺し母を害せんと擬せし大象を放つて仏を
うしないたてまつらんとせしも悪師・提婆が教なり、俱伽利比丘
が舍利弗・目連をそしりて生身に阿鼻に堕せし、大族王の五竺
の仏法僧をほろぼせし、大族王の舎弟は加☆弥羅国の王となりて
健駄羅国の率都婆・寺塔・一千六百所をうしなひし、金耳国王の
仏法をほろぼせし、波瑠璃王の九千九十万人の人をころして血な
がれて池をなせし、設賞迦王の仏法を滅し菩提樹をきり根をほ
りし、後周の宇文王の四千六百余所の寺院を失ひ二十六万六百余
の僧尼を還俗せしめし、此等は皆悪師を信じ悪鬼其の身に入りし
故なり。

問うて云くいわ天竺てんじく・震旦しんたんは外道げどうが仏法ぶつぽうをほろぼし小乗しょうじょうが大乗だいじょう

をやぶるとみえたり、此この日本国にほんこくもしかるべきか、答えて云くいわ

月支がっし・尸那しなには外道げどうあり小乗しょうじょうあり此この日本国にほんこくには外道げどうなし

しょうじょう

小乗しょうじょうの者なし、紀典博士等これあれども仏法ぶつぽうの敵となるものこ

しょうじょう

れなし、小乗しょうじょうの三宗これあれども彼宗を用て生死しょうじをはなれんと

・をもはず但ただ大乘だいじょうを心うる才覚さいかくとをもらい、

ただ

但し此の国には

だいじょう

大乘の五宗のみこれあり人人皆ひとびとみなをもらく彼の宗宗にして生死しょうじ

をはなるべしとをもう故ゆえにあらそいも多くいできたり、又檀那だんなの

帰依きえも多くあるゆへに利養りようの心もふかし。

第四ぎようじやに行者ぶつぽう・仏法ひろを弘むる用心ようじんを明あかさば、夫それ仏法ぶつぽうをひろめ

んと・をもはんものは必ず五義を存して正法しょうほうをひろむべし、五

義とは一には教・二には機き・三には時・四には国・五には仏法ぶつぽう

るふ ぜんこ だいいち によらいちだいい せつきよう だいしよう
流布の前後なり、第一に教とは如来一代五十年の説教は大小・

権実・顕密の差別あり、華嚴宗には五教を立て一代を・をさめ
いちだいい

其の中には華嚴・法華を最勝とし華嚴・法華の中に華嚴經を以
けこん ほうけ けこん ほうけ けこんきよう

て第一とす、南三・北七並に華嚴宗の祖師日本国の東寺の弘法
だいいち なんざん ほくひち けこんしゅう そしにほんこく とうじ こうぼう

大師・此の義なり、法相宗は三時に一代を・をさめ其の中に
だいし ほうそうしゅう いちだいい そ

深密法華經を一代の聖教にすぐれたりとす、深密・法華の中・
じんみつ ほけきよう いちだいい しょうきよう じんみつ ほけき

法華經は了義經の中の不了義經・深密經は了義經の中の
ほけきよう りようききよう ふりようききよう じんみつ りようききよう

了義經なり、三論宗に又二藏・三時を立つ三時の中の第三中道
りようききよう さんろんしゅう さんろんしゅう ちゅうどう

教とは般若・法華なり、般若・法華の中には般若最第一なり、
ほんにや ほけき ほんにや ほけき ほんにや さいだいいち

真言宗には日本国に二の流あり東寺流は弘法大師十住心を立
しんこんしゅう にほんこく とうじ こうぼう だいいしじゅうじゅう

て第八法華・第九華嚴・第十真言・法華經は大日經に劣るのみ
ほけき けこん けこん しんこん ほけきよう だいにちきよう

ならず猶華嚴經に下るなり、天台の真言は慈覺大師等大日經と
なおけこんきよう おと てんだい しんこん じかくだいいし だいにちきよう

法華經とは広略の異法華經は理秘密・大日經は事理俱密なり、
浄土宗には聖道・浄土・難行・易行難行・正行を立てたり
浄土の三部經より外の法華經等の一切經は難行・聖道・難行
なり、禪宗には二の流あり一流は一切經・一切の宗の深義は
禪宗なり一流は如来一代の聖教は皆言説・如来の口輪の方便
なり禪師は如来の意密言説にをよばず教外の別伝なり、俱舍宗・
成実宗・律宗は小乗宗なり天竺・震旦には小乗宗の者
大乘を破する事これ多し日本国には其の義なし。

問うて云く諸宗の異義区なり一一に其の謂れありて得道をな
るべきか又諸宗皆謗法となりて一宗計り正義となるべきか、答
えて云く異論相違ありといえども皆得道なるか、仏の滅後四百年
にあたりて健駄羅国の迦式色迦王・仏法を貴み一夏・僧を供し

仏法をといしに一一の僧・異義多し此の王不審して云く仏説は定

て一ならんと終に脇尊者に問う、尊者答て云く金杖を折つて

種種の物につくるに形は別なれども金杖は一なり形の異なるを

ば諍うといへども金たる事をあらそはず、門門不同なればいり

かどをば諍えども入理は一なり等と云云、又求那跋摩云く諸論各

異端なれども修行の理は二無し偏執に是非有りととも達者は違諍

無し等と云云、又五百羅漢の真因各異なれども同く聖理をえたり、

大論の四悉檀の中の対治悉檀・摂論の四意趣の中の衆生意樂

意趣・此等は此の善を嫌い此の善をほむ、檀戒進等一一にそしり

一一にほむる皆得道をなる、此等を以てこれを思うに護法・

清弁のあらそい智光・戒賢の空中・南三・北七の頓漸・不定・

一時・二時・三時・四時・五時・四宗・五宗・六宗・天台の五

時・華嚴けこんの五教・真言教しんごんきょうの東寺・天台てんだいの諍・淨土宗じょうどしゅうの聖道・淨土・禪宗ぜんしゅうの教外・教内、入門さべつは差別せりというとも実理に入る事は但一なるべきか。

難なんじて云いわく華嚴けこんの五教・法相ほつそう・三論さんろんの三時・禪宗ぜんしゅうの教外・淨土宗じょうどしゅうの難行・易行いぎよう・南三なんざん・北七ほくひちの五時等・門はことなりといへども入理・一にして皆仏意みなぶつゐに叶かない謗法ほうぼうとならずといはば謗法ほうぼうという事あるべからざるか謗法ほうぼうとは法に背そむくという事なり法に背そむくと申もうすは小乗しょうじょうは小乗經しょうじょうきょうに背そむき大乘だいじょうは大乘經だいじょうきょうに背そむく法に背そむかばあに謗法ほうぼうとならざらん謗法ほうぼうとならばなんぞ苦果くかをまねかざらん、此の道理どうりにそむくこれひとつ、大般若經はんになききょうに云く「般若はんになを謗ほうずる者は十方じゅつぱうの大阿鼻地獄あびじごくに墮おつべし」法華經ほけききょうに云く「若もし人信ぜずして乃至其の人命終みょうじゅうして阿鼻獄あびごくに入らん」と涅槃經ねはんききょうに

云く「世に難治の病三あり一には四重・二には五逆・三には謗

だいじょう

大乘なり」此等の経文あにむなしかるべき、此等は証文なり、

だいじょう

されば無垢論師・大慢婆羅門・熙連禪師・嵩靈法師等は正法を

ぼうじ

謗じて現身に大阿鼻地獄に堕ち舌口中に爛れたりこれは現証な

ぼうじ

り、天親菩薩は小乗の論を作つて諸大乘経・をはしき、後に

てんじんぼさつ

無著菩薩に対して此の罪を懺悔せんがために舌を切らんとくい

むちやくぼさつ

給いき、謗法もし罪とならずんばいかんが千部の論師懺悔をいた

たま

すべき、闡提とは天竺の語此には不信と翻す不信とは一切

せんだい

衆生悉有仏性を信ぜざるは闡提の人と見へたり。

しゅじょうしつうぶつしやう

不信とは謗法の者なり恒河の七種の衆生の第一は一闡提・

ふしん

謗法常没の者なり、第二は五逆・謗法常没等の者なりあに謗法

ほうほうじやうぼつ

を・をそれざらん、答えて云く謗法とは只由なく仏法を謗ずるを

い

ほうぼう 謗法というか我が宗をたてんがために余法を謗ずるは謗法にあら

ざるか、撰論じょうろんの四意趣いしゆの中の衆生意樂意趣しじゅういぎよういしゆとは仮令人たといありて一

生の間・一善いちぜんをも修しゅうせず但惡つゝを作る者しあり而るに小縁しかにあいて

何れいづれの善ぜんにてもあれ一善いちぜんを修しゅうせんと申もうす・これは随喜ずいき讚歎さんたんすべ

し、又善人ぜんにんあり一生の間ただ一善いちぜんを修しゅうす而るを他の善しえ・うつさ

んがためにそのぜんをそしる、一事いの中に於おいて・或あるは呵あし・或あるは

讚さんすというこれなり、大論だいろんの四悉檀ししつだんの中の対治悉檀たいじしつだん又これをなじ、

淨名經じようみようきようの彈呵だんかと申もうすは阿含經あこんきようの時ほめし法をそしるなり、

此等これらを以てをもふに・或あるは衆生しゆじよう多く小乗しようじようの機きあれば大乘だいじようを

謗そしりて小乗經しようじようきように信心しんじんをまし・或あるは衆生しゆじよう多く大乘だいじようの機きなれば

小乗しようじようをそしりて大乘經だいじようきように信心しんじんをあつくす・或あるは衆生しゆじよう・弥陀みだ

仏に縁あれば諸仏しよぶつをそしりて弥陀みだに信心しんじんをまさしめ、・或あるは

衆生多く地藏に縁あれば諸菩薩をそしりて地藏をほむ、・或は衆生多く華嚴經に縁あれば諸經をそしりて華嚴經をほむ、・或は衆生・大般若經に縁あれば諸經をそしりて大般若經をほむ、・或は衆生・法華經・・或は衆生大日經等同く心うべし、機を見て・或は讚め・或は毀る共に謗法とならず而るを機をしらざる者みだりに・或は讚め・或は皆るは謗法となるべきか、例せば華嚴宗・三論・法相・天台・真言・禪・淨土等の諸師の諸經をはして我が宗を立つるは謗法とならざるか。

難じて云く宗を立てんに諸經・諸宗を破し仏・菩薩を讚むるに仏・菩薩を破し他の善根を修せしめんがために・この善根をはする・くるしからずば阿含等の諸の小乗經に華嚴經等の諸

だいじようきよう 大乘經をはしたる文ありや、けこんきよう華嚴經にほつ法華・だいにちきよう大日經等の諸

だいじようきよう

大乘經をはしたる文これありや、い答えて云くあこん阿含・しょうじようきよう小乘經

しょうだいじようきよう

に諸大乘經をはしたる文はなけれどもけこんきよう華嚴經にはにじようだいじよう二乘大乘・

いちじよう

一乘をあげてにじようだいじよう二乘大乘をはしねはんぎよう涅槃經には諸大乘經をあげて

ねはんぎよう

涅槃經に対してこれをはす、みつこんきよう密嚴經には一切經中王ととき

むりようぎきよう

無量義經にはよんじゆうよねん四十余年・みけんしんじつ未顕眞実ととかれあみだ阿弥陀經にはねんぶつ念仏に對

しょうきよう

して諸經をぜんこん小善根ととかる、これらの例一にあらざ故にゆえ又彼の

きようぎよう

經經によるにんしみな人師皆此の義を存せり、これら此等をもつて思うに宗を立

つる方は我が宗に對してしょうきよう諸經を破るはくるしからざるか、なん難じ

い

て云くけこんきよう華嚴經にはしょうじよう小乘・だいじよう大乘・いちじよう一乘とあげみつこんきよう密嚴經には

いっさいきよう

一切經中王ととかれねはんぎよう涅槃經には是諸大乘とあげあみだ阿弥陀經には

ねんぶつ

念仏に對してしょうきよう諸經をぜんこん小善根とはとかれたれどもむりようぎきよう無量義經のごと

く四十余年よんじゅうよねんと年限ねんげんを指して其その間の大部たいぶの諸經しよきよう・阿含あこん・方等ほうとう・般若はんぎや・華嚴けこん等の名をよびあげて勝劣しょうれつをとける事ことこれなし、涅槃經ねはんぎようの是し諸大乘しよだいじようの文計ぶんけいりこそ雙林そうりん最後の經さいごのきやうとして是し諸大乘しよだいじようととかれたれば涅槃經ねはんぎようには一切經いっさいきようは嫌きらはるか・をぼうれども是し諸大乘しよだいじよう經きやうと挙あげて次つぎぎ下に諸大乘しよだいじよう經きやうを列をねたるに十二部じふにぶ・修多羅しゆたら・方等ほうとう・般若等はんぎやとあげたり無量義經むりようぎきやう・法華經ほけきようをば載のせず、但ただし無量義經むりようぎきやうに挙あぐるところは四十余年よんじゅうよねんの阿含あこん・方等ほうとう・般若はんぎや・華嚴經けこんきやうをあげたり、いまだ法華經ほけきよう・涅槃經ねはんぎようの勝劣しょうれつはみへず密嚴みつこんに一切經いっさいきよう中王ちゆうわうとはあげたれども一切經いっさいきようをあぐる中に華嚴けこん・勝鬘等しやうまんの諸經しよきようの名をあげて一切經いっさいきよう中王ちゆうわうととく故ゆえに法華經ほけきよう等とはみへず、阿弥陀經あみだの小善根ぜんこんは時節じせつもなし善根ぜんこんの相貌そうみやうもみへず、たれかしょうじようきようしる小乘經しょうじようきようを小善根ぜんこんというか又人天にんてんの善根ぜんこんを小善根ぜんこんと

いうか又觀經・雙觀經の所説の諸善を小善根といふか
いまだ
いちだい ねんぶつ せんこん
一代を念仏に對して小善根といふとはきこえず。

又大日經・六波羅蜜經等の諸の秘教の中にも一代の一切經を
だいにちきよう ろくはらみつきよう もろもろ いちだい いっさいきよう

嫌うてその經をほめたる文はなし、但し無量義經計りこそ前
きら よんじゅうよねん くら ほけきよういつきよう ただ むりようぎきようばかり

四十余年の諸經を嫌い法華經一經に限りて已説の四十余年・
よんじゅうよねん しょきよう くら ほけきよういつきよう いせつ よんじゅうよねん

今説の無量義經・當説の未來にとくべき涅槃經を嫌うて法華經
こんせつ むりようぎきよう とうせつ みらい ねはんぎきよう くら ほけきよう

計りをほめたり、釈迦如来・過去・現在・未來の三世の諸仏世に
ばかり しゃかによらい かこ げんざい みらい さんぜ しょぶつ

いで給いて各各一切經を説き給うにいづれの仏も法華經第一な
たまひ いっさいきよう と たま ほとけきようだいいち

り、例せば上郎・下郎不定なり田舎にしては百姓・郎従等は侍
ふじよう いなか ひやくせい ろうじゅう

を上郎といふ、洛陽にして源平等已下を下郎といふ三家を上郎
らくよう びようどういか

といふ、又主を王といはば百姓も宅中の王なり地頭・領家等も
ひやくせい じとう

又・村・郷・郡・国の王なり・しかれども大王にはあらず、
だいおう

しょうじょうきょう

小乗経 には無為涅槃の理が王なり 小乗の戒定等に対して

ちえ

智慧は王なり、諸大乘経には中道の理が王なり又華嚴経は

えんゆうそうそく

はんにやきよう

ちゅうどう

だいしつきよう

しゅごしきようほう

やくし

やくしによらい

べつがん

だいにちきよう

しんこん

そうかんきよう

あみだぶつ

薬師経は薬師如来の別願を説く経の中の王・雙観経は阿弥陀仏

の四十八願を説く経の中の王・大日経は印真言を説く経の中の

いちだい

いっさいきよう

ほけきよう

しんたい

そくたい

くうけちゅう

しんこん

むい

の理

十二大願

四十八願

一切諸経の

空仮中印真言・無為の理・十二大願・四十八願・一切諸経の

しよせつ

しよせん

ほうもん

だいおう

これ教をしれる者なり而るを

し

か

所説の所詮の法門の大王なり、これ教をしれる者なり而るを

ぜんむい

こんごうち

ふくう

ほうぞう

ちようかん

じおん

かじよう

なんざん

ほくひち

善無畏・金剛智・不空・法蔵・澄観・慈恩・嘉祥・南三・北七

どんらん

どうしゆく

ぜんどう

だるま

我が所立の依経を一代第一とい

しよりゆう

えきよう

いちだいいい

ち

・曇鸞・道綽・善導・達磨等の我が所立の依経を一代第一とい

えるは教をしらざる者なり、但し一切の人師の中には天台智者

だいし

だ

い

っ

た

い

っ

に

ん

し

大師一人教をしれる人なり、曇鸞・道綽等の聖道・浄土・難行

・易行・正行・雜行は源と十住毘婆沙論に依る彼本論に

いぎよう

しょうぎよう

ぞうぎよう

も

じゅうじゅう

びしゃもんろん

よ

ほんろん

難行の内に法華・真言等を入ると謂は僻案なり、論主の心と

なんぎよう

ほっけ

しんごん

おもえる

びやくあん

論主の心と

論の始中終をしらざる失あり慈恩が深密經の三時に一代を・を

しちゅうじゅう

とが

じおん

じんみつ

いちだい

を

さめたる事、又本經の三時に一切經の摂らざる事をしらざる失

あり、

ほうそ

ちようかん

いちだい

を

をさむる中に法華經・

華嚴經を円教と立て又華嚴經は法華經に勝れたりとをもうるは

けこんきよう

えんきよう

けこんきよう

ほけきよう

すぐ

を

所依の華嚴經に二乗作仏・久遠実成をあかさざるに記小久成あ

しよえ

けこんきよう

にじようさぶつ

くおんじつじよう

くじよう

を

を

りとをもひ華嚴よりも超過の法華經を我經に劣ると謂うは僻見

けこん

ちようか

ほけきよう

おも

びやつけん

を

を

なり、三論の嘉祥の二蔵等又法華經に般若經すぐれたりとをも

さんろん

かじよう

ほけきよう

はんによきよう

すぐ

を

を

を

う事は僻案なり、善無畏等が大日經は法華經に勝れたりという

びやくあん

ぜんむい

だいにちきよう

ほけきよう

すぐ

を

を

を

法華經の心をしらざるのみならず大日經をもしらざる者なり。

ほけきよう

だいによきよう

ほけきよう

すぐ

を

を

を

を

問て云く此等皆謗法ならば惡道に墮ちたるか如何、答て云く

い

わ

これらみなほうぼう

あくどう

お

い

かん

を

を

問て云く此等皆謗法ならば惡道に墮ちたるか如何、答て云く

謗法ほうぼうに上中下じょうちゆうげ雑ざつの謗法ほうぼうあり慈恩じおん・嘉祥かじょう・澄觀ちようかん等らうが謗法ほうぼうは上中の謗法ほうぼうか其上じしん自身かうぼうも謗法ほうぼうとしれるかの間かん・悔還くいかんす筆ふでこれあるか、又他師たしをはするに二あり能破のうは似破じはこれなり教けうはまさりとしれども是非ぜひをあらはさんがために法はふをはす・これは似破じはなり、能破のうはとは実にまされる経きやうを劣りやくとをもつてこれをはす・これは悪能破のうはなり、又現げんに・をとれるをはす・これ善能破のうはなり、但ただし脇尊者そんじやの金杖こんじやうの譬たとえは小乗經しょうじようきやうは多しといえども同じ苦く・空くう・無常むじよう・無我むがの理りなり、諸人しよにん同どうく此この義ぎを存ぞんじて十八部はちぶ・二十部相じようろうんひ諍じやう論ろんあれども但門だもんの諍あらそいにて理りの諍あらそいにはあらず故ゆゑに共に謗法ほうぼうとならず、外道げどうが小乗經しょうじようきやうを破はするは外道げどうの理りは常住じやうじゆうなり、小乗經しょうじようきやうの理りは無常むじようなり空くうなり故ゆゑに外道げどうが小乗經しょうじようきやうをはするは謗法ほうぼうとなる、大乗經だいじようきやうの理りは中道ちゆうどうなり、小乗經しょうじようきやうは空くうなり、小乗經しょうじようきやうの者ものが

だいじようきよう
大乘經をはするは謗法となる大乘經の者が小乗經を・は

するは破法とならず、諸大乘經の中の理は未開会の理いまだ記

小久成これなし法華經の理は開会の理・記小久成これあり、諸

大乘經の者が法華經を・はするは謗法となるべし法華經の者の

諸大乘經を謗するは謗法となるべからず、大日經・真言宗は

未開會・記小久成なくば法華經已前なり開會・記小久成を許さば

涅槃經とをなじ、但し善無畏三藏・金剛智・不空・一行等の

性惡の法門・一念三千の法門は天台智者の法門をぬすめるか、

若し爾らば善無畏等の謗法は似破か又雜謗法か五百羅漢の真因は

小乗十二因縁の事なり無明行等を縁として空理に入ると見へた

り、門は諍えども謗法とならず撰論の四意趣・大論の四悉檀等

は無著菩薩・竜樹菩薩滅後の論師として法華經を以て一切經の

心をえて四悉四意趣等を用いて爾前の経経の意を判ずるなり
未開会の四意趣・四悉檀と開会の四意趣・四悉檀を同ぜば、あに
謗法にあらずや此等をよくよくしるは教をしれる者なり、四句あ
り一に信而不解・二に解而不信・三に亦信亦解・四に非信・非
解、問うて云く信而不解の者は謗法なるか答えて云く法華経に
云く「信を以つて入ることを得」等と云云、涅槃経の九に云く難
じて云く涅槃経三十六に云く我契経の中に於て説く二種の人有
り仏法僧を謗ずと、一には不信にして瞋恚の心あるが故に二には
信ずと雖も義を解せざるが故に善男子若し人信心あつて智慧有る
こと無き是の人は則ち能く無明を増長す若し智慧有つて信心あ
ること無き是の人は則ち能く邪見を増長す善男子・不信の人は
瞋恚の心あるが故に説いて仏法僧宝有ること無しと言わん、信者

は慧なく無てんどうく顛倒して義を解するが故ゆえに法を聞く者をして仏ぶつ法ぽう僧そうを
謗ほうぜしむ等と云云、此の二人の中には信じて解げせざる者を謗ほう法ぽうと
説いく如何い、答えて云く此の信しん而不解にふげの者は涅槃ねはん經ぎようの三十六に恒河こが
の七種の衆生しゆじようの第二の者を説くなり、此の第二の者は涅槃ねはん經ぎようの
一切衆生いっさいしゆじよう悉有ぶつしよう仏性ぶつしようの説を聞いて之これを信いずと雖も又不信ふしんの者な
り。

問うて云く如何なんぞ信いずと雖も不信ふしんなるや、答えて云く一切いっさい
衆生しゆじよう悉有ぶつしよう仏性ぶつしようの説を聞きて之これを信いずと雖も又心を爾前にぜんの經に寄
する一類いちるいの衆生しゆじようをば無ぶつしよう仏性ぶつしようの者と云うなり此これ信ふしん而不信ふしんの者な
り問うて云く証文しやうもん如何い、答えて云く恒河こが第二の衆生しゆじようを説いて
云く經に云く「是いくいの如かくき大涅槃だいねはん經ぎようを聞くことを得て信心しんじんを生ず
是これを名けて出と為なす」と又云く「仏性ぶつしようは是これ衆生しゆじように有りと信いず

と雖もいへど必ずしも一切皆悉く之有らず是いっさいみなことごとこれあの故に名けて信不具足かくのゆえと為すな「文此の文の如くんば口には涅槃ねはんを信ずいへどと雖も心に爾前の義にぜんを存そんする者なり又此の第二の人を説いて云く「信ずる者にして慧い無く顛倒てんとうして義を解するが故に」等と云云、顛倒解義とは実経じつぎようの文を得て権経こんぎようの義を覚さとる者なり。

問うて云く信而不解得・道の文如何、答えて云く涅槃經の三十い二に云くい「是れ菩提ぼだいの因は復無量またむりようなりと雖も若し信心しんじんを説けばい已に摂尽しやうじんす」文九に云く「此の經を聞き已おつて悉く皆菩提いんねんの因縁いんねんと作なる法ほう声しやう光明こうみやう毛孔もうこうに入る者は必定まさして当まさに阿耨多羅三藐三菩提あのおくらさんみやくさんぼだいを得べし」等と云云、法華經に云く「信を以いて入ることを得」等と云云、問うて云く解而不信げにふしんの者は如何、答いう恒河こがの第一だいいちの者なり、問うて云く証文如何、答えて云く涅槃經ねはんぎよう

の三十六に第一だいいちを説いわて云く「人有こりて是この大涅槃經だいはんきやうの如来常住にょらいじやうじゅう

無有へんにやくじやうらくがじやう變易へんぎ常樂じやうらく我淨わじやうを聞きこくとも終ついに畢ひつきやう竟きやうして於おいて涅槃ねはんの一切いっさい

衆生しゅじやう悉有しつじやう仏性ぶつじやうに入いらざるは一闍提いつせんだいの人ひとなり方等經ほうとうきやうを謗ほうじじ五逆罪ごぎやくざい

を作り四重じゅうきん禁きんを犯かすとも必ずまさ当たうに菩提ぼだいの道みちを成じやうずることを

得しべし須陀だ☆の人ひと・斯陀含しゅだこんの人ひと・阿那含あなこんの人ひと・阿羅漢あらかんの人ひと・

辟支仏ひやくしぶつ等ら必ずまさ当たうに阿あ○菩提ぼだいを成じやうずることを得うべし是この語ことばを聞きき

已おつて不信ふしんの心こころを生はず」等と云云。

問いうて云いく此この文ふしん不信ふしんとは見みえたり解げ而不信にふしんとは見みえず如何いかん、

答こえて云いく第一だいいちの結文けつぶんに云いく「若もし智慧ちえ有あつて信心しんじん有あること無なき

是この人は則すなわち能よく邪見じゃけんを増ぞう長ちやうす」文。

◆六三 持妙法華問答抄 弘長三年 四十二歳御作 461p

抑そもも希まれに人身じんしんをうけ適たまたま仏法ぶつぽうをきけり、然しかるに法せんじんに淺深せんじんあり

人に高下ありと云へり何なる法を修行してか速に仏になり候べき願くは其の道を聞かんと思ふ、答えて云く家家に尊勝あり国に高貴あり皆其の君を貴み其の親を崇むといへども豈国王にまざるべきや、爰に知んぬ大小・権実は家家の諍ひなれども一代聖教の中には法華独り勝れたり、是れ頓証菩提の指南・直至道場の車輪なり、疑つて云く人師は経論の心を得て釈を作る者なり然らば則ち宗宗の人師・面面・各各に教門をしつらい釈を作り義を立て証得菩提と志す何ぞ虚しかるべきや、然るに法華独り勝ると候はば心せばくこそ覚え候へ、答えて云く法華独りいみじと申すが心せばく候はば釈尊程心せばき人は世に候はじ何ぞ誤りの甚しきや、且く一経・一流の釈を引いて其の迷をさとらせん、無量義経に云く「種種に

法を説き種種しゅじゆに法を説くこと方便ほうべん力を以てす四十余年未だ眞実しんじつを

あらわ

顯あらわさず」云云、此の文を聞いて大莊嚴等の八万人の菩薩・一同に

「無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過ぐるとも終に無上菩提を成ず

ることを得ず」と領解りやうげし給へり、此の文の心は華嚴・阿含・方等

般若はんにはやの四十余年の經に付いていかに念仏ねんぶつを申し禪宗ぜんしゅうを持ちて

仏道ぶつどうを願ひ無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過ぐるとも無上菩提を

成じやうずる事を得じと云へり、しかのみならず方便品ほうべんには「世尊せそんは法

久くして後要のちかならずまさ當に眞実しんじつを説きたもうべし」ととき、又唯一乘ゆいいういちじやう

法・無二亦無三やくむと説きて此の經ばかりまことなりと云い、又二の

卷には「唯我一人ただわれひとりのみ能く救護くごを為す」と教へ「但樂ねがいて

大乘經典だいじやうきやうてんを受持じゆじして乃至余經ないしよきやうの一偈いちげをも受けず」と説き給へり、

文の心はただわれ一人して・よくすくひ・まもる事をなす、

ほけきょう

法華經をうけたもたん事をねがひて余經の一偈をもうけざれと見

えたり、又云く「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切

世間の仏種を断ぜん乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と云

云、此の文の心は若し人・此の經を信ぜずして此の經にそむかば

則ち一切世間の仏のたねを・たつものなり・その人は命をはらば

無間地獄に入るべしと説き給へり、此等の文をうけて天台は

將非魔作仏の詞正く此の文によれりと判じ給へり、唯人師の釈

計りを憑みて仏説によらずは何ぞ仏法

と云う名を付くべきや言語道断の次第なり、之に依つて智証大師

は經に大小なく理に偏円なしと云つて一切・人によらば仏説

無用なりと釈し給へり、天台は「若し深く所以有り復修多羅と合

せるをば録して之を用ゆ無文無義は信受す可からず」と判じ給へ

り、又云く「文証無きは悉く是れ邪の謂い」とも云へり、いかが心得べきや。

問うて云く人師の釈はさも候べし爾前の諸經に此の經第一とも説き諸經の王とも宣べたり若し爾らば仏説なりとも用うべからず候か如何、答えて云く設い此の經第一とも諸經の王とも申し候へ皆是れ權教なり其の語によるべからず、之に依つて仏は「了義經によりて不了義經によらざれ」と説き妙樂大師は「縦い經有りて諸經の王と云うとも已今当説最為第一と云わざれば兼但对帶其の義知んぬ可し」と釈し給へり、此の釈の心は設ひ經ありて諸經の王とは云うとも前に説きつる經にも後に説かんずる經にも此の經はまされりと云はずば方便の經としれと云う釈なり、されば爾前の經の習として今説く經より後に又經を

説くべき由よしを云はざるなり、唯法華經計りこそ最後の極説なるが
故に已今当いこんとうの中に此の經独り勝れたりと説かれて候へ、されば釈
には「唯法華ただほっけに至つて前教の意を説いて今教の意を顕す」と申し
て法華經ほけきようにて如来の本意ほんいも教化きやうけの儀式も定りたりと見えたり、之
に依つて天台てんだいは「如来成道にょらいじやうどう四十余年未だ眞実しんじつを顕さず法華始め
て眞実しんじつを顕す」と云へり、此の文の心は如来世にょらいに出でさせ給いて
四十余年が間は眞実しんじつの法をば顕さず法華經に始めて仏になる実の
道を顕し給へりと釈し給へり。

問うて云く已今当いこんとうの中に法華經勝れたりと云う事はさも候べ
し、但し有人師にんしの云く四十余年・未顕眞実みけんしんじつと云うは法華經ほけきようにて仏
になる声聞しょうもんの爲なり爾前にぜんの得益とくやくの菩薩ぼさつの爲には未顕眞実みけんしんじつと云う
べからずと云う義をばいかが心得候べきや、答えて云く法華經ほけきようは

にじよう

ぼさつ ため

みけんしんじつ

にじよう

二乗の為なり菩薩の為にあらず、されば未顕真実と云う事二乗に

限る可しと云うは徳一大師の義か此れは法相宗の人なり、此の

事を伝でんぎようだいしは教大師破し給うに「現在の☆食者は偽章数巻を作りて、

法を謗ぼうじじ人を謗ぼうず何ぞ地獄に墮だせざらんや」と破はし給ひしかば徳

一は其その語ことばに責められて舌八にさけてうせ給いき、未顕真実と

は二乗の為なりと云はば最も理を得たり、其の故は如来布教の元

旨むねは元より二乗の為なり一代の化儀・三周の善巧・併しかしながにじようら二乗を

正意とし給たまへり、されば華嚴經には地獄じごくの衆生は仏になるとも

二乗は仏になるべからずと嫌きらい、方等ほうとうには高峯たかねに蓮の生ざるよう

に二乗は仏の種をいりたりと云はれ、般若はんによには五逆罪ごぎやくざいの者は仏に

なるべし二乗は叶かなうべからずと捨てらる、かかるあさましき捨者すてもの

の仏になるを以て如来の本意ほんいとし法華經ほけきようの規模きもとす、之に依よつて

てんだい 天台の云く「華嚴大品も之を治すること能わず唯法華のみ有りて
よ 能く無学をして還つて善根を生じ仏道を成ずることを得せしむ
ゆえん 所以に妙と称す、又闡提は心有り猶作仏す可し二乗は智を滅す心
生ず可からず法華能く治す復稱して妙と為す」と云云、此の文の
心は委く申すに及ばず誠に知んぬ華嚴・方等・大品等の法薬も
二乗の重病をばいやさず又三惡道の罪人をも菩薩ぞと爾前の經
にはゆるせども二乗をばゆるさず、之に依つて妙樂大師は「余趣
を實に会すること諸經に・或は有れども二乗は全く無し故に
菩薩に合して二乗に對し難きに從つて説く」と釈し給えり、しか
のみならず二乗の作仏は一切衆生の成仏を躰すと天台は判じ
給へり、修羅が大海を渡らんをば是れ難しとやせん、嬰兒の力士
を投ん何ぞたやすしとせん、然らば則ち仏性の種あるものは仏

になるべしと爾前にぜんにも説けども未だ焦種しやうしゆの者作仏さぶつすべしとは説かず、かかる重病じゆうびやうをたやすく・いやすは独り法華ほつけの良薬りやうやくなり、ただすべからんじ只須く汝仏にならんと思はば慢のはたほこをたをし忿いかりの杖をすてて偏ひとえに一乗いちじやうに歸すべし、名聞名利みやうもんみやうりは今生こんじやうのかざり我慢がまん偏執へんしゆうは後生のほだしなり、嗚呼恥あづべし恥はづべし恐るべし恐るべし。

問うて云く一を以て万を察する事なればあらあら法華ほつけのいわれを聞くに耳目じもく始めて明あきらかなり、但し法華經ほけきやうをば・いかように心得こころえ候てか速すみやに菩提ぼだいの岸をに到るべきや、伝え聞く一念三千いちねんさんぜんの大虚おおそらには慧え日くもる事なく一心三觀いっしんさんかんの広池こうちには智水ちすいにごる事なき人こそ其その修行しゆぎやうに堪たえたる機きにて候なれ、然しかるに南都なんとの修学しゆうがくに臂ひじをくだく事なかりしかば瑜伽唯識ゆいがゆいしきにもくらし北嶺ほくりやうの学文まなこに眼まなこをさら

さざりしかば止観玄義にも迷へり、天台・法相の両宗はほとぎ
を蒙りて壁に向へるが如し、されば法華の機には既にもれて候に
こそ何んがし候べき、答えて云く利智精進にして観法修行する
のみ法華の機ぞと云つて無智の人を妨ぐるは当世の学者の所行
なり是れ還つて愚癡邪見の至りなり、一切衆生・皆成仏道の教
なれば上根・上機は観念・観法も然るべし下根・下機は唯信心
肝要なり、されば経には「浄心に信敬して疑惑を生ぜざらん者
は地獄・餓鬼・畜生に堕ちずして十方の仏前に生ぜん」と説き
給へり、いかにも信じて次の生の仏前を期すべきなり、譬えば高
き岸の下に人ありて登ることあたはざらんに又岸の上に人ありて
繩をおろして此の繩にとりつかば我れ岸の上に引き登さんと云は
んに引く人の力を疑い繩の弱からん事をあやぶみて手を納めて

是これをとらざらんが如ごとし争いかでか岸の上に登る事をうべき、若もし其その
詞ことばに随したがひて手をのべ是これをとらへ

ば即すなわち登る事をうべし、唯我一人・能為救護の仏の御力を疑うたがい

い以信得入の法華經の教への繩をあやぶみて決定無有疑うたがいの

妙法を唱へ奉らざらんは力及ばず菩提の岸に登る事難かるべし、

不信の者は墮在泥梨の根元なり、されば經には「疑うたがいを生じて信

ぜざらん者は則すなわち當まさに惡道に墮おつべし」と説かれたり、受けがた

き人身じんしんをうけ値あいがたき仏法ぶつぽうにあひて争いかでか虚むなしくて候べきぞ、同じ

く信を取るならば又大小・権実のある中に諸仏出生しよぶつしゆつしやうの本意ほんい・

衆生成仏しゆじやうじやうぶつの直道じきやうの一乗いちじやうをこそ信ところずべけれ、持つ處の御經の

諸經しよきやうに勝すぐれてましますば能よく持つ人も亦諸人またしよにんにまされり、爰ここをを

以て經に云いわく「能よく是この經を持つ者は一切衆生の中に於おいて亦また

これだ
為第一なり」と説き給へり大聖の金言疑ひなし、然るに人・此

の理をしらず見ずして名聞・狐疑・偏執を致せるは墮獄の基な

り、只願くは経を持ち名を十方の仏陀の願海に流し譽れを三世

の菩薩の慈天に施すべし、然れば法華経を持ち奉る人は天竜・

八部・諸大菩薩を以て我が眷属とする者なり、しかのみならず因

身の肉団に果満の仏眼を備へ有為の凡膚に無為の聖衣を著ぬれば

三途に恐れなく八難に憚りなし、七方便の山の頂に登りて九

法界の雲を払ひ無垢地の園に花開け法性の空に月明かならん、

是人於仏道・決定無有疑の文憑あり唯我一人・能為救護の説

疑ひなし、一念信解の功德は五波羅蜜の行に越へ五十展転の

随喜は八十年の布施に勝れたり、頓証菩提の教は遙に群典に

秀で顕本遠寿の説は永く諸乗に絶えたり、爰を以て八歳の竜女

は大海たいかいより来つて経力を刹那せつなに示し本化ほんげの上行じょうぎようは大地だいちより涌出ゆじゅつして仏寿くおんを久遠あらわに顕す言語道断ごんごうだんの経王しんぎようしよめつ心行所滅みようほうの妙法みようほうなり、然しかるに此の理をいるかせにして余経よきようにひとしむるは謗法ほうほうの至り大罪たいざいの至極しごくなり、譬たとえを取るに物なし、仏の神変にても何ぞ是なんを説とき尽つきん菩薩ぼさつの智力にても争いかでか是これを量はかるべき、されば譬喻品ひゆほんに云いわく「若もし其その罪つみを説かば劫を窮むとも尽つきず」と云へり文の心は法華経ほけきようを一度ひとたびもそむける人の罪つみをば劫を窮むとも説とき尽し難がたしと見えたり、然しかる間三世さんぜの諸仏しよぶつの化導けどうにももれ恒沙ごうしゃの如来にょらいの法門ほうもんにも捨てられ冥くらきより冥くらきに入つて阿鼻大城あびだいじようの苦患争くかんいかでか免まぬかれん誰か心あらん人・長劫の悲みを恐れざらんや、爰ここをを以て経いに云く「経を読誦どくじゆし書持しよじすること有らん者を見て輕賤憎嫉きようせんそうしつして結恨けつこんを懷いだかん其その人命終みようじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん」と云云、文の心は

ほけきょう

法華經をよみたもたん者を見てかるしめ・いやしみ・にくみ・そ

ねみ・うらみをむすばん其その人は命をはりて阿鼻大城あびだいじょうに入らん

と云へり、大聖たいせいの金言きんげん誰これか是を恐れざらんや正直捨方便しやうじきしやほうべんの明文めいぶん

あにこれ うたがい

豈是を疑うべきや、然るに人皆經文みなきやうもんに背き世悉く法理に迷まよへ

なんじんなん あくゆう

り汝何ぞ悪友の教へに随したがはんや、されば邪師じやしの法を信じ受くる

者を名けて毒を飲む者なりと天台てんだいは釈しゃくし給たまへり汝能く是これを慎つつしむ

べし是これを慎つつしむべし。

倩つらつらら世間を見るに法をば貴とおとしと申せども其その人をば万人ばんにん是これを

悪む汝能く能く法よの源みなもとに迷まよへり何いかにと云うに一切いっさいの草木そうもくは地

しゅつしよう

より出生しゅつしようせり、是これを以て思うに一切いっさいの仏法ぶつぽうも又人によりて弘ひろま

るべし之に依よつて天台てんだいは仏世なほすら猶人なほを以て法を顕まはす末代まつだいいづ

くんぞ法は貴けれども人は賤しと云はんやとこそ釈しゃくして御坐候おわし

へ、されば持たるる法だに第一だいいちならば持つ人随したがつて第一だいいちなるべし、

然しからば則すなわち其の人を毀そるは其の法を毀そるなり其の子を賤そしむる

は即すなわち其の親を賤そしむなり、爰こゝに知んぬ当世とうせの人は詞ことばと心と総

てあはず孝経こうきやうを以もつて其の親を打うつが如ごとし豈あに冥しやうらんはずの照覽しやうらん恥はづかしから

ざらんや地獄じごくの苦み恐るべし恐るべし慎つつしむべし慎つつしむべし、上根じやうこん

に望めても卑下げこんすべからず下根げこんを捨てざるは本懐ほんかいなり、下根げこんに望

めても☆慢きやうまんならざれ上根じやうこんももる事あり心をいたさざるが故ゆゑに

凡およそ其その里ゆかしけれども道たえ縁なきには通ふ心もをろそかに

其の人恋しけれども憑たのめず契ちぎらぬには待つ思もなをざりなるやう

に彼の月卿雲閣げつけいうんかくに勝すぐれたる靈山りやうぜんじやうど浄土じやうどの行きやすきにも未いまだゆか

ず我が即是父がそくぜふの柔にゆうなん☆の御すがた見奉るべきをも未たてまつだ見奉たてまつらず、

是れ誠こゝろに袂たもとをくだし胸をこがす歎なげきならざらんや、暮行空くれゆくそらの雲の

ありあけがた

色・有明方の月の光までも心をもよほす思なり、事にふれをりに

こしょう

付けても後世を心につけ花の春雪の朝あしたも是これを思ひ風さはぎ村雲

まよふ夕にも忘るる

ひま

隙なかれ、出いずる息は入る息をまたず何いかなる時節じせつありてか毎自

さぜねん

ひがん

いか

むいつふじようぶつ

作是念の悲願を忘れ何いかなる月日ありてか無む一不成仏の御経を持

たざらん、昨日きのうが今日けふになり去年こぞの今年となる事も是これ期ごすする

ところ

処の余命にはあらざるをや、総て過すぎにし方をかぞへて年の積

るをば知るといへども今行末にをいて一日片時かたとぎも誰か命の数に入

るべき、臨終りんじゆう已すでに今にありとは知りながら我慢偏執がまんへんしゅう・名聞みょうもん

りよう

じゃく

みようほう

たてまつ

こころざし

利養に著して妙法を唱へ奉らざらん事は志こころざしの程無下にかひな

し、さこそは皆かいじようぶつどう成仏道の御法とは云いいながら此の人争いかでか仏道ぶつどう

に・ものうからざるべき、色なき人の袖そでにはそぞろに月のやどる

事かは、又命已すでに一念いちねんにすぎざれば仏は一念いちねん隨喜ずいきの功德くどくと説とき

給たまへり、若もし是これ二念三念を期こすすと云はば平等大慧の本誓頓教びやうどうだいえほんぜいといんきやう

いちじようかいじよう

一乘皆成仏の法とは云はるべからず、流布るふの時は末世・法滅ほうめつに

および機きは五逆ごぎやく・謗法ほうほうをも納おさめたり、故ゆえに頓証菩提とんしょうぼだいの心におきて

られて狐疑執こぎしゅうじやく 著じゃけんの邪見まかに身を任まかする事なかれ、生涯しょうがい幾いくくなら

ず思へば一夜のかりの宿を忘れて幾いくくの名利みよりをか得ん、又得たり

とも是これ夢の中の栄へ珍めづしからぬ楽たみなり、只先世ただせんぜの業因ごういんに任まかせ

て営むべし世間せけんの無常むじようをさとらん事は眼まなこに遮さえぎり耳にみてり、雲

とやなり雨あめとやなりけん昔の人は只名ただをのみきく、露つゆとや消え煙

とや登りけん今の友も又みえず、我れいつまでか三笠の雲と思ふ

べき春の花の風に随したがひ秋の紅葉もみじの時雨あめに染まる、是これ皆みなながらへ

ぬ世の中のためしなれば法華經ほけきやうには「世皆牢固みなならざること水沫

ほのお

ごと

泡焰ほのおの如ごとし」とすすめたり「以何令衆生得入無上道」の御心

のそこ順縁逆縁ぎやくえんの御ことのは已すでに本懐ほんかいなれば暫しばらくも持つ者も又

本意ほんいにかなぬ又本意ほんいに叶はば仏の恩を報ずるなり、悲母深重ひもじんじゅう

の経文きょうもん心安ければ唯我一人の御苦みもかつかつやすみ給うらん、

釈迦一仏の悦び給うのみならず諸仏出世の本懐ほんかいなれば十方三世

の諸仏も悦び給うべし「我即歡喜・諸仏亦然」と説かれたれば仏

悦び給うのみならず神も即ち隨喜ずいきし給うなるべし、伝教大師

是を講じ給たまいしかば八幡大菩薩は紫の袈裟けさを布施ふせし、空也上人

是を読み給たまいしかば松尾まつおの大明神は寒風をふせがせ給う、され

ば「七難即滅・七福即生」と祈らんにも此の御経第一だいいちなり現世

安穩あんのんと見えたればなり、他国侵逼たこくしんぴつの難・自界叛逆じかいほんぎやくの難の御祈☆に

も此の妙典みょうてんに過ぎたるはなし、令百由旬内無諸衰患ひやくゆじゆんしよすいげんと説かれた

ればなり。

然るに当世の御祈☆はさかさまなり先代流布の権教なり末代

流布の最上真実の秘法にあらざるなり、譬えば去年の暦を用ゐ

烏を鵜につかはんが如し是れ偏に権教の邪師を貴んで未だ実教

の明師に値わせ給はざる故なり、惜いかな文武の卞和があら玉

何くにか納めけん、嬉しいかな釈尊出世の髻の中の明珠今度

我身に得たる事よ、十方諸仏の証誠として・いるがせならず、

さこそは「一切世間・多怨難信」と知りながら争か一分の疑心

を残して決定無有疑の仏にならざらんや、過去遠遠の苦みは

徒らにのみこそ・うけこしか、などか暫く不変常住の妙因を

うへざらん未来永永の楽みはかつかつ心を養ふともしゐてあなが

ちに電光朝露の名利をば貪るべからず、「三界無安・猶如火宅」

は如来によらいの教へ「所以しよほう諸法・如幻如化」は菩薩ぼさつの詞ことばなり、寂光じやっこうの

都みなならずは何いずくも皆苦みななるべし本覺ほんかくの栖すみかを離なれて何事なにことか楽たのしみみな

るべき、願ねがくは「現世安穩げんせあんのん・後生善処ごしやうぜんしよ」の妙法みやうほうを持もつのみこそ

ただ今ただこんじやう生みやうもんの名聞ごしやう

・後世ごしやうの弄引ろういんなるべけれ須すべからく心こころを一ひとにして南無なむ

妙法蓮華經みやうほうれんげきやう

と我われも唱となへ他たをも勸すすんのみこそ今生こんじやうにんかい人界じんがいの思出しでなる

べき、南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやう・南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやう。

日蓮にちれん 花押かおう

◆六四 木絵二像開眼之事

文永元年

四十三歳御作

468

p

仏いに三十二相い有あす皆色みな法はうなり、最下さいかの千輻輪ぶくりんより終むけんちやうり無見頂相むけんちやうそう

に至いたるまでの三十一相かは可見かけんうたいしき有対色うたいしきなれば書かきつべし作りつべし

梵音声ぼんおんじやうの一相ふかは不可見ふか無対色むたいしきなれば書べかく可べからず作べかる可べからず、

仏滅後ぶつめつは木画もくえの二像あり是れ三十一相にして梵音声ぼんおんじょうかけたり

故に仏ゆえに非ず又心法あらかけたり、生身しょうしんの仏と木画もくえの二像を対する

に天地雲泥てんちうんでいなり、何ぞ涅槃ねはんの後分には生身しょうしんの仏と滅後めつごの木画もくえの

二像と功德くどく齊等さいとうなりといふや又大瓔珞經ようらくには木画もくえの二像は生身しょうしん

の仏にはをとれりととけり、木画もくえの二像の仏の前に經を置けば三

十二相具足ぐそくするなり、但心なければ三十二相を具ぐすれども必ず仏

にあらず人天にんてんも三十二相あるがゆへに、木絵もくえの三十一相の前に

五戒經ごかいを置けば此の仏は輪王りんおうとひとし、十善論ぜんろんと云うを置けば

帝釈たいしゃくとひとし、出欲論しゅつよくろんと云うを置けば梵王ぼんのうとひとし全く仏にあ

らず、又木絵もくえ二像の前に阿含經あこんきやうを置けば声聞しょうもんとひとし、方等ほうとう

般若はんんにやの一時いちじ一会の共般若はんんにやを置けば緣覺えんかくとひとし、華嚴けこん・方等ほうとう

般若はんんにやの別円べつえんを置けば菩薩ぼさつとひとし全く仏に非らず、大日經だいにちきやう・

こんごうちょうきよう
金剛頂経・蘇悉地経等の仏眼・大日の印真言は名は仏眼・大日

といへども其の義は仏眼・大日に非ず、例せば仏も華嚴経は円仏

には非ず名にはよらず三十一相の仏の前に法華経を置きたてまつ

れば必ず純円の仏なり云云、故に普賢経に法華経の仏を説て

云く「仏の三種の身は方等より生ず」文、是の方等は方等部の方等

に非ず法華を方等といふなり、又云く「此の大乗経は是れ諸仏

の眼なり諸仏是に因つて五眼を具することを得る」等云云、

法華経の文字は仏の梵音声の不可見無対色を可見有対色のかた

ちと・あらはしぬれば顕形の二色となれるなり、滅せる梵音声

かへつて形をあらはして文字と成つて衆生を利益するなり、人

の声を出すに二つあり、一には自身は存ぜざれども人をたぶらか

さむがために声をいだす是は隨他意の声、自身の思を声にあらは

す事ありされば意が声とあらはる意は心法・声は色法・心より色
をあらはす、又声を聞いて心を知る色法が心法を顕すなり、
色心不二なるがゆへに而二とあらはれて仏の御意あらはれて法華
の文字となれり、文字變じて又仏の御意となる、されば法華經を
よませ給はむ人は文字と思食事なかれすなわち仏の御意なり、
故に天台の釈に云く「請を受けて説く時は只是れ教の意を説く
教の意は是れ仏意仏意即是れ仏智なり・仏智至て深し是故に
三止四請す、此の如き艱難あり余經に比するに余經は則易し」
文此の釈の中に仏意と申すは色法を・をさへて心法といふ釈な
り、法華經を心法とさだめて三十一相の木絵の像に印すれば木絵
二像の全体・生身の仏なり、草木成仏といへるは是なり、故に
天台は「一色一香無非中道」と云云、妙樂是をうけて釈に「然る

またとも しきこうちゅうどう ゆる むじょうぶつしゅう
に亦俱に色香中道を許せども無情仏性は耳を惑わし心を驚か
す」云云、華嚴の澄観が天台の一念三千をぬすみて華嚴にさし
いれ法華・華嚴ともに一念三千なり、但し華嚴は頓頓・さきなれ
ば法華は漸頓のちなれば華嚴は根本さきをしぬれば法華は枝葉等
といふて我理をえたりとおもへる意・山の如し・然りと雖も
一念三千の肝心・草木成仏を知らざる事を妙楽のわらひ給へる
事なり、今の天台の学者等我一念三千を得たりと思ふ、然りと
雖も法華をもつて・或は華嚴に同じ・或は大日經に同ず其の義
を論ずるに澄観の見を出でず善無畏不空に同ず、詮を以て之を
謂わば今の木絵二像を真言師を以て之を供養すれば実仏に非ずし
て権仏なり権仏にも非ず形は仏に似たれども意は本の非情の草木
なり、又本の非情の草木にも非ず魔なり鬼なり、真言師が邪義・

印真言しんごんと成つて木絵もくえ二像の意と成れるゆへに例せば人の思變じて
石と成り俱留くると黄夫石こうふせきが如しごと、法華ほっけを心得こころえたる人・木絵もくえ二像を
開眼かいげん供養くようせざれば家に主のなきに盗人ぬすびとが入り人の死するに其その身
に鬼神きじん入るが如しごと、今真言しんごんを以て日本にほんの仏を供養くようすれば鬼入つて
人の命をうばふ鬼をば

だつみょうしや

奪命者だつみょうしやといふ魔入くどくつて功德くどくをうばふ魔をば奪功德者くどくといふ、鬼

をあがむるゆへに今生こんじょうには国をほろぼす魔をたとむゆへに後生ごじょう

には無間獄むげんごくに墮だす、人死すれば魂去り其その身に鬼神きじん入り替つて

子孫しそんを亡ぼす、餓鬼がきといふは我をくらふといふ是これなり、智者ちしやあつ

て法華經ほけきょうを讚歎さんたんして骨の魂となせば死人しにんの身は人身じんしん・心は法身ほっしん・

生身得忍しょうしんとくにんといへる法門ほうもん是これなり、華嚴けこん・方等ほうとう・般若はんにやの円をさとれ

る智者ちしやは死人しにんの骨を生身得忍しょうしんとくにんと成す、涅槃經ねはんきやうに身は人身じんしんなりと

雖も心は仏心ぶつしんに同ずといへるは是これなり、生身得忍しょうしんとくにんの現証げんしやうは純陀じゆんだ

なり、法華ほっけを悟れる智者ちしや・死骨しこつを供養くようせば生身しょうしん即法身そくほっしん・是これを

即身そくしんといふ、さりぬる魂を取り返して死骨しこつに入れて彼の魂を変え

て仏意ぶついと成す成仏じやうぶつ是これなり、即身そくしんの二字は色法じやうぶつ・成仏じやうぶつの二字は心

法しにん・死人しにんの色心しきしんを変えて無始むしの妙境みやうぢ・妙智みやうちと成す是これ則すなわち

そくしんじょうぶつ

即身成仏なり、故に法華經に云く「所謂諸法如是相死人の身如是性

によぜたい

同く心如是体同く色心等云云、又云く「深く罪福の相に達して☆く

じゅつぽう

てら

みみょう

ほっしん

つみ

あまねく

十方を照したまう微妙の淨き法身・相を具せること三十二」等

かみ

云云、上の二句は生身得忍・下の二句は即身成仏・即身成仏

てほん

りゅうによこれ

しょうしんとくにん

てほん

じゅんだこれ

そくしんじょうぶつ

そくしんじょうぶつ

の手本は竜女是なり生身得忍の手本は純陀是なり。

◆六五 女人成仏抄

文永二年四十四歳御作

470P

だいは

いわ

提婆品に云く「仏告諸比丘未来世中乃至蓮華化生」等云云、此

だいは

かんぎよう

いわゆるだつた

ぐきようしゃくそん

じようどう

あか

の提婆品に二箇の諫 曉あり所謂達多の弘經釈尊の成道を明し

もんじゅ

りゅうによ

さぶつ

又文殊の通經・竜女の作仏を説く、されば此の品を長安宮に一

とど

品切り留めて二十七品を世に流布する間・秦の代より梁の代に

いた

至るまで七代の間の王は二十七品の經を講読す、其の後満法師と

い

ほけきよう

よし

いだ

ほっし

云いし人・此の品法華經になき由を読み出され候いて後・長安城

より尋ね出し今は二十八品にて弘まらせ給う、さて此の品に

浄心信敬の人のことを云うに

一には三惡道に墮せず二には十方

の仏前に生ぜん三には所生の処には常に此の經を聞かん四には

若し人天の中に生ぜば勝妙の樂を受けん五には若し仏前に在ら

ば蓮華より化生せんとなり、然るに一切衆生は法性眞如の都を

迷い出でて妄想顛倒の里に入りしより已來身口意の三業になす

ところ善根は少く惡業は多し、されば經文には一人・一日の中

に八億四千念あり念念の中に作す所皆是れ三途の業なり等云云、

我等衆生三界二十五有の・ちまたに輪回せし事鳥の林に移るが

如く死しては生じ生じては死し車の場に回るが如く始め終りもな

く死し生ずる惡業深重の衆生なり、爰を以て心地觀經に云く

「有情輪回して六道に生ずること猶車輪の始終無きが如く・或は

うじょうりんね

ろくどう

な

しじゅう

こと

ある

- 1201 -

父母ふぼと為なり男女なんよと為なり生生世世しょうじよよ互たがひいに恩有おんありり」等云云、法華經二

の卷いに云いく「三界さんがいは安やすきこと無し猶火宅なの如ごとく衆苦じゅうまん充滿じゅうまんせり」

云云、涅槃經二十二ねはんぎように云いく「菩薩摩訶薩諸ぼさつの衆生しきこうを觀みずるに色香

味触いんねんの因縁いんねんの為ゆえの故ゆえに昔無量無數劫むりようむしゅこうより以來常いらいに苦惱くのうを受うく、一

一しゅじよういつこうの衆生しゅじよういつこう一劫しゅじよういつこうの中に積たる所の身みの骨ほねは王舍城おうしやじようの毘富羅山びふらの如ごとく

飲いむ所の乳汁にゅうじゅうは四海しかいの水みづの如ごとく身みより出いす所の血けは四海しかいの水みづよ

り多ふく父母ふぼ・兄弟きやうだい・妻子さいし・眷属けんぞくの命終みやうじゅうに涕泣ていじゅうして出いす所の目め

涙なみだは四大海たいかいの水みづより多おほし、地ちの草木そうもくを尽つくして四寸しすんの籌みづとりと為なし

て以もつて父母ふぼを数かずうるに亦また尽つくすこと能あたわじ、無量劫むりようこうより已來このかた・或ある

地獄じごく・畜生ちくしよう・餓鬼がきに在あつて受うくる所の行苦しょうけい稱計しょうけいす可べからず亦また

一切衆生いっさいしゅじようの骸骨がいこつをや」云云、是かくの如ごとくいたづらに命いのちを捨すると

ころの骸骨かばねは毘富羅山びふらよりも多おほし恩愛おんあいあはれみの涙なみだは四大海たいかいの水みづ

よりも多けれども仏法の為には一骨をもなげず、一句一偈を
ちようもん

聴聞して一滴の涙をも・おとさぬゆへに三界の籠樊を出でずし

て二十五

有のちまたに流転する衆生にて候なり、然る間如何として三界

を離るべきと申すに仏法修行の功力に依つて無明のやみはれて

法性真如の覺を開くべく候、さては仏法は何なるをか修行し

て生死を離るべきぞと申すに但一乗・妙法にて有るべく候、さ

れば慧心僧都・七箇日・加茂に参籠して出離生死は何なる教にて

か候べきと祈請申され候いしに明神御託宣に云く「釈迦の説教

は一乗に留まり諸仏の成道は妙法に在り菩薩の六度は蓮華に

在り二乗の得道は此の経に在り」云云、普賢経に云く「此の

大乘經典は諸仏の宝蔵なり十方三世の諸仏の眼目なり三世の

もろもろによらい しゅっしょう

諸の如来を 出生

する種なり」云云、此の経より外はすべて成仏

の期有るべからず候上殊更女人成仏の事は此の経より外は更に

ゆるされず、結句爾前の経にては・をびただしく嫌はれたり、さ

れば華嚴経に云く「女人は地獄の使なり能く仏の種子を断ず外面

は菩薩に似て内心は夜叉の如し」云云、銀色女経に云く「三世の

諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の諸の女人は永く成仏の

期無し」云云、或は又女人には五障三従の罪深しと申す、其れ

は内典には五障を明し外典には三従を教えたり、其の三従とは

少くしては父母に従ひ盛にしては夫に従ひ老いては子に従ふ

一期身を心に任せず、されば榮啓期が三樂を歌ひし中にも女人と

生れざるを以て一樂とす、天台大師云く「他経

には但菩薩に記して二乗に記せず但男に記して女に記せず」とて

全く余経には女人の授記これなしと釈せり、其上釈迦・多宝の二

たつちゅう

仏塔中に並坐し給ひし時・文殊・妙法を弘めん為に海中に入

たまひ

り給いて・仏前に帰り参り給いしかば宝浄世界の多宝仏の御弟子

ちしやくぼさつ

りゅうによいようぶつ

なん

いわ

しゃかにようらい

たほうぶつ

おんでし

・智積菩薩は竜女成仏を難じて云く「我釈迦如来を見たてまつ

むりようこう

おい

なんぎようくぎよう

こう

かさ

ぼさつ

れば無量劫に於て難行苦行し功を積み・徳を累ね・菩薩の道を

いまま

か

さんぜんだいせんせかい

み

求むること未だ曾つて止息したまわず、三千大千世界を觀るに

ないしけし

ごと

ぼか

こ

ぼさつ

しんみよう

を捨てたもう

ところ

あら

乃至芥子の如き許りも是れ菩薩の身命を捨てたもう処に非ざる

あ

しゅじよう

等云云、所謂智積・文殊

いわるちしやく

もんじゆ

こと有ること無し、衆生の為の故なり」等云云、所謂智積・文殊

もんどう

たま

はちまん

ぼさつ

万二千の声聞等何れも

いずれ

・再三問答いたし給う間は八万の菩薩・万二千の声聞等何れも

ちようもんばか

一口の御助言に及ばず、然るに

およ

しか

耳をすまして御聴聞計りにて一口の御助言に及ばず、然るに

ちえ

だいいち

しやりほつ

もんじゆ

なん

智慧第一の舍利弗・文殊の事をば難ずる事なし多くの故を以て

りゅうによ

なん

ゆえん

によん

くえ

こ

ほうき

あら

と

竜女を難ぜらる所以に女人は垢穢にして是れ法器に非ずと

しょうじょうこんきやう

小乗 権教の意を以て難ぜられ候いしかば文殊が竜女成仏の

うむ げんしょう

有無の現証は今・仏前にして見え候べしと仰せられ候いしに、

案にたがはず八歳の竜女蛇身をあらためずして

案にたがはず八歳の竜女蛇身をあらためずして仏前に参詣し

あたいさんぜんだいせんせかい

価直三千大千世界と説かれて候・如意宝珠を仏に奉りしに、仏

よろこ これ うけと たまい

悦んで是を請取り給いしかば此の時智積菩薩も舍利弗も不審を開

き女人成仏の路をふみわけ候、されば女人成仏の手本是より起

き女人成仏の路をふみわけ候、されば女人成仏の手本是より起

つて候・委細は五の巻の經文之を読む可く候、伝教大師の秀句

つて候・委細は五の巻の經文之を読む可く候、伝教大師の秀句

に云く「能化の竜女歴劫の行無く所化の衆生も歴劫の行無し

に云く「能化の竜女歴劫の行無く所化の衆生も歴劫の行無し

能化所化俱に歴劫無し妙法經力・即身成仏す」天台の疏に云く

能化所化俱に歴劫無し妙法經力・即身成仏す」天台の疏に云く

「智積は別教に執して疑いを為し竜女は円を明して疑いを

「智積は別教に執して疑いを為し竜女は円を明して疑いを

釈く身子は三蔵の権を挾んで難ず竜女は一実を以て疑いを除

釈く身子は三蔵の権を挾んで難ず竜女は一実を以て疑いを除

く「海竜王經に云く「竜女作仏し国土を光明国と号し名をば

く「海竜王經に云く「竜女作仏し国土を光明国と号し名をば

むく によらい 無垢証如来と号す」云云、法華已前の諸經の如きは縦い人中・

てんじょう

によん

じようぶつ

た

ごと

たと

にんちゆう

天上の女人なりといふとも成仏の思絶たるべし、然るに竜女

ちくしろう

しじよう

かいかん

あらた

そくしんじようぶつ

・畜生道の衆生として戒緩の姿を改めずして即身成仏せし事

ふしぎ

これ

しやくそん

おぼ

まか

はじや

はだい

は不思議なり、是を始として釈尊の姨母・摩訶波闍波提比丘尼

かんじほん

いっさいしじよう

きけん

じゆき

こおむ

らうら

等・勸持品にして一切衆生喜見如来と授記を被り・羅☆羅の母

やしゅたらによ

けんそく

びくに

ぐそくせんまんこうそうによらい

・耶輸陀羅女も眷属の比丘尼と共に具足千万光相如来と成り、鬼

によん

じゅうらせつによ

じようぶつ

しか

なここと

しんこう

道の女人たる十羅刹女も成仏す、然れば尚殊に女性の御信仰あ

によん

じゅうらせつによ

じようぶつ

しか

なここと

しんこう

るべき御経にて候、抑此の経の一文一句を読み一字一点を書く

なおしゅつりしじようじ

ほだい

いっく

いっく

いっく

いっく

尚出離生死・証大菩提の因なり、然れば彼の字に結縁せし者・尚

えんま

ほだい

いっく

いっく

いっく

いっく

炎魔の庁より帰され六十四字を書し人は其の父を天上へ送る、

いか

いわんやあび

えしろう

ごくしやうの

じしん

しよ

じごく

みなこ

かじ

何に況や阿鼻の依正は極聖の自心に処し地獄・天宮皆是れ果地

いかに

いわんやあび

えしろう

ごくしやうの

じしん

しよ

じごく

みなこ

かじ

の如来なり、毘盧の身土は凡下の一念を逾ず遮那の覚体も衆生

によらい

びる

しんど

ほんげ

いちねん

こえ

しやな

かくたい

しじよう

の迷妄めいもうを出いでず妙文みょうもんは靈山りょうぜん淨土じょうどに増し六万九千の露し點まこんは紫磨金
の輝光きこうを副そえ給たまうべし、殊ことに過去かこ聖靈しょうりょうは御存生おんしんしょうの時ときより御
信心しんじん他ことに異おんことなる御事ごことなりしかば今日こんにち講經こうきやうの功力こうりきに依よつて仏前ぶつぜんに生
を受けぶつか仏果ぼく菩提ぼだいの勝因しょういんに登たり給たまうべし云云、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう、
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう。

◆六六 聖愚問答抄上 上文永二年 四十四歳御作 474P

夫それ生を受けしより死を免まぬれざる理ことりは賢かしこき御門みかどより卑ひき民
に至いたるまで人ひとごとに是これを知るといへども實じつに是これを大事だいじとし是これを
歎なげく者もの千万人ばんにんに一人も有がたし、無常むじやうの現起げんきするを見ては疎すきを
ば恐れ親おやきをば歎なげくといへども先立まゝつははかなく留とどまるは・かしこ
きやうに思おもいて昨日きのうは彼のわざ今日きょうは此この事こととて徒いたずらに世間せけんの五
慾ごにほだされて白駒はくこのかけ過すぎやすく羊ひつの歩あみ近きづく事ことをしらず

して空しく衣食の獄につながれ徒らに名利の穴にをち三途の旧里
に帰り六道のちまたに輪回せん事心有らん人誰か歎かざらん誰か
悲しまざらん。

嗚呼・老少不定は娑婆の習ひ会者定離は浮世のことはりなれば

始めて驚くべきにあらねども正嘉の初め世を早うせし人のあり

さまを見るに・或は幼き子をふりすて・或は老いたる親を留めを

き、いまだ壮年の齡にて黄泉の旅に趣く心の中さこそ悲しかる

らめ行くもかなしみ留るもかなしむ、彼楚王が神女に伴いし情を

一片の朝の雲に残し劉氏が仙客に値し思いを七世の後胤に慰む

予か如き者底に縁つて愁いを休めん、かかる山左のいやしき心な

れば身には思のなかれかしと云いけん人の古事さへ思い出でられ

て末の代のわすれがたみにもとて難波のもしほ草をかきあつめ水

くきのあとを形の如く^{ごと}しるしをくなり。

悲しいかな痛^{いた}しいかな我等無始より已来無明の酒に酔^{ろくどう}て六道・

四生^{ししよう}に輪回^{りんね}して・或^{ある}時は焦熱^{しょうねつ}大焦熱^{だいしょうねつ}の炎にむせび・或^{ある}時は紅蓮^{ぐれん}

・大紅蓮^{だいぐれん}の氷にとぢられ・或^{ある}時は餓鬼飢渴^{がきけかち}の悲みに値^あいて五

百生^{ひやくしよう}の間飲食^{おんじき}の名をも聞かず・或^{ある}時は畜生^{ちくしよう}・残害^{ざんがい}の苦みを

うけて小さきは大きなに・のまれ短きは長きにまかる是^{これ}を残害

の苦と云う・或^{ある}時は修羅^{しゆら}・鬭諍^{とうじやう}の苦をうけ・或^{ある}時は人間^{にんげん}に生

れて八苦をうく生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦

・五盛陰苦等なり・或^{ある}時は天上^{てんじやう}に生れて五衰^{すい}をうく・此^かくの

如^{ごと}く三界^{さんがい}の間を車輪^{ぐるま}のごとく回^{めぐ}り父子^{ふし}の中にも親の親たる子の子

たる事をさとらず夫婦^{あいあえ}の会遇^{あいあえ}るも会遇^{あいあえ}たる事をしらず・迷^{まよ}へる

事は羊目に等しく暗^{ろうがん}き事は狼眼^{ろうがん}に同し・我を生たる母の由来^{ゆうらい}をも

しらず生を受けたる我が身も死の終りをしらず、嗚呼受け難き
人界にんかいの生をうけ値あい難がたき如来にょらいの聖教しょうきょうに値あい奉たてまれり一眼の龜かめの
浮木うきぎの穴にあへるがごとし、今度このたびも若し生死しょうじのきづなをきらず三界さんがい
の籠樊ろうはんを出いでざらん事かなしかるべしかなしかるべし。

爰こゝに・或あるる智人ちじん来りて示いして云いく汝なんじが歎なげく所しょ實じつに爾しかなり此かく

の如ごとく無常むじょうのことほりを思い知り善心ぜんしんを發おこす者は麟角りんかくよりも希まれな

り、此このことはりを覺さとらずして惡心あくしんを發おこす者は牛毛ぎうもうよりも多し、

汝なんじ早しょうじく生死しょうじを離はなれ菩提心ぼだいしんを發おこさんと思はば吾最第一さいだいいちの法はうを知れ

り志こころざし あらば汝なんじが為ために之これを説いいて聞きかしめん、其そのの時とき愚人座ふにんざよ

り起たつて掌たなこころ を合あせて云いく我われは日來外典ひころげてんを學がくし風月ふうげつに心こころをよせ

ていまだ仏教ぶつぎょうと云いう事を委細いさいにしらず願ねがふば上人しょうにん・我われが為ために

是これを説とき給たまへ、其そのの時とき上人しょうにんの云いく汝耳なんじを伶倫れいりんが耳みみに寄よせ目めを

離朱が眼りしゅ まなこにかつて心をしづめて我が教をきけ汝なんじが為ために之これを説か

ん夫それ仏教は八万ぶつきよう はちまんの聖教しょうきよう多けれども諸宗しよしゆうの父母ふぼたる事・戒律

にはしかずされば天竺てんじくには世親馬鳴等の薩☆唐土さつたもちうこしには慧曠・道宣えこう どうせん

と云いいし人これ是を重んず、我が朝あしたには人皇四十五代・聖武天皇しょうむてんのうの

御宇ぎように鑒真和尚此の宗と天台宗と両宗を渡わたして東大寺の戒壇かいだん

之これを立つ爾しかしより已来当世このかたとうせに至るまで崇重すうちよう年旧ふり尊貴そんき・日に新

たなり、就なかんずくこくらく中極楽寺の良觀りようかんしょうにん上人かみいちにんは上一人より下万民ばんみんに至るま

で生身しょうしんの如来によらいと是これを仰あおぎ奉たてまつる彼の行儀ぎようぎを見るに実に以て爾しかなり、

飯嶋の津にて六浦の関米せきまいを取つては諸国しよこくの道を作り七道に木戸を

かまへて人別にんべつの錢を取つては諸河しよに橋を渡わたす慈悲じひは如来によらいに齊ひとしく

徳行とくぎようは先達せんだつに越えたり、汝なんじ早く生死しやうじを離れんと思はば五戒・二

百五十戒たもを持ち慈悲じひをふかくして物の命を殺さずして良觀りようかんしょうにん上人

の如く道を作り橋を渡せ是れ第一の法なり、汝持たんや否や。

愚人弥掌を合せて云く能く能く持ち奉らんと思ふ具に我

が為に是を説き給へ抑五戒・二百五十戒と云う事は我等未だ存

知せず委細に是を示し給へ、智人云く汝は無下に愚かなり五戒

・二百五十戒と云う事をば孩児も是をしる然れども汝が為に

之を説かん、五戒とは一には不殺生戒二には不偷盜戒三には不

妄語戒四には不邪淫戒五には不飲酒戒是なり、二百五十戒の事は

多き間之を略す、其の時に愚人礼拝恭敬して云く我今日より深

く此の法を持ち奉るべし。

爰に予が年来の知音・或所に隱居せる居士一人あり予が

愁歎を訪わん為に来れるが始には往事渺茫として夢に似たる事

をかたり終には行末の冥冥として弁え難き事を談ず鬱を散し思を

のべて後予よに問うて云く抑おさ人の世に有る誰か後生ごしょうを思はざらん、貴辺きへん何なる仏法ぶつぽうをか持ちて出離しゅつりをねがひ又亡者もうじゃの後世ごしょうをもとむら訪とむらい給たまうや、予答えて云く一日いちにち・或る上人しょうにん来つて我が為ために五戒ごかい・二百五十戒を授け給へり実じつに以て心肝しんかんにそみて貴し、我深く良観りょうかん上人しょうにんの如く及ばぬ身にもわろき道を作り深き河には橋をわたさんと思へるなり、其の時居士示して云く汝なんじが道心どうしん貴きに似て愚おろかなり、今談だんずる処ところの法は浅ましき小乗しょうじょうの法なり、されば仏は則ち八種のたとえ喻よを設け文殊もんじゅは又十七種の差別さべつを宣べたり・或は螢火日光けいけのたとえ喻よを取り・或は水精・瑠璃るりのたとえ喻よあり爰ここを以て三国さんごくの人師にんしも其の破文そ一に非ず、次に行者ぎやうじゃの尊重そんぢやうの事必ず人の敬よふに依つて法の貴とうときにあらず・されば仏は依法えほう不依人ふえと定め給たまへり、我伝え聞く上古いにしえの持律せいりつの聖者せいじゃの振舞ふるまいは殺を言い収さへを言う

には知浄の語有り行雲廻雪には死屍の想を作す而るに今の律僧

の振舞を見るに布絹・財宝をたくはへ利銭・借請を業とす

教行既に相違せり誰か是を信受せん、次に道を作り橋を渡す事

還つて人の歎きなり、飯嶋の津にて六浦の関米を取る諸人の歎き

是れ多し諸国七道の木戸・是も旅人のわづらい只此の事に在り

眼前の事なり汝見ざるや否や。

愚人色を作して云く汝が智分をもつて上人を謗し奉り其の法

を誹る事謂れ無し知つて云うか愚にして云うかおそろしおそろ

し、其の時居士笑つて云く嗚呼おろかなりおろかなり彼の宗の

僻見をあらあら申すべし、抑教に大小有り宗に権実を分けて

り鹿苑施小の昔は化城の戸ぼそに導くといへども鷲峯開頭の筵

には其の得益更に之れ無し、其の時愚人茫然として居士に問うて

いわもんしょう　げんしょう　もつ　しか　いか　しょうじ
云く文証・現証実に以て然なり・さて何なる法を持つてか生死
を離れ速に成仏せんや、居士示して云く我れ在俗の身なれども
深く仏道を修行して幼少より多くの人師の語を聞き粗経教
をも聞き見るに末代我等が如くなる無悪不造のためには念仏
往生の教にしくはなし、されば慧心の僧都は「夫れ往生極樂の
教行は濁世末代の目足なり」と云ひ法然上人は諸経の要文を
集めて一向専修の念仏を弘め給ふ中にも弥陀の本願は諸仏超過
の崇高なり始め無三悪趣の願より終り得三法忍の願に至るまで
いづれも悲願目出けれども第十八の願殊に我等が為に殊勝なり、
又十悪・五逆をもきらはず一念・多念をもえらばずされば
上一人より下万民に至るまで此の宗をもてなし給う事他に異なり
又往生の人それ幾ぞや。

其の時愚人の云く実に小を恥じて大を慕ひ浅を去て深に就は

ぶつきよう

仏教の理のみに非ず世間にも是れ法なり我早く彼の宗にうつら

んと思ふ委細に彼の旨を語り給へ、彼の仏の悲願の中に五逆・

じゅうあく

十悪をも簡ばずと云へる五逆とは何等ぞや十悪とは如何、智人

の云く五逆とは父を殺し母を殺し阿羅漢を殺し

仏身の血を出し

和合僧を破す

是を五逆と云うなり、十悪とは身に三・口に四・

意に三なり身に三とは・殺・盗・姪・口に四とは妄語・綺語・

悪口・両舌・意に三とは貪・瞋・癡是を十悪と云うなり、愚人

云く我今解しぬ今日よりは他力往生に憑を懸くべきなり、爰に

愚人又云く以ての外盛に・いみじき密宗の行人あり是も予が歎き

を訪わんが為に來臨して始には狂言綺語のことはりを示し終には

顕密二宗の法門を談じて予に問うて云く抑汝は何なる仏法を

か修行しゅぎょうし何いかなる経論きょうろんをか読誦どくじゆし奉たてまつるや、

予答いわえて云く我われ一日ある・或ある居士こじの教よに依よつて浄土じやうどの三部經さんぶきやうを讀よみ

奉たてまつり西方極樂きやうはくらくの教主きやうしゆに憑たのみを深く懸かくるなり、行者ぎやうじやの云く仏教ぶつぎやう

に二種に有り一いには顯教けんきやう二にには密教みつぎやうなり顯教けんきやうの極理ごくりは密教みつぎやうの

初門じよもんにも及およばずと云云なんじ、汝なんじが執心しゅうしんの法しやかを聞きけば釈迦けんきやうの顯教けんきやうな

り我が所持しよじの法だいにちかくおうは大日覺王ひほうの秘法ひほうなり、實さんがいに三界さんがいの火宅さんがいを恐れ

寂光じやくこうの宝台ほうたいを願ねがはば須すく顯教けんきやうを捨すてて密教みつぎやうにつくべし。

愚人ぐにんおどろ驚おどろいて云く我われいまだ顯密二道けんみつにとうと云う事ことを聞きかず何いかなるを

顯教けんきやうと云いひ何いかなるを密教みつぎやうと云いへるや、行者ぎやうじやの云く予こは是これ

頑愚がんぐにして敢あえてて賢けんを存ぞんぜず然しかりと雖いえども今いま一二の文ぶんを挙あげて汝なんじが

矇昧もうまいを挑たげん、顯教けんきやうとは舍利弗等しやりほつの請しょうに依よつて応身如來おうじんにょらいの説とき

給たまう諸教しよきやうなり密教みつぎやうとは自受法樂じじゆほうらくの為ために法身大日如來ほっしんだいにちにょらいの金剛薩こんこうさつ☆

を所化^{しよけ}として説き給^{たま}う処^{ところ}の大日経^{だいにちきょう}等の三部^{さんぶ}なり、愚人^{ぐにん}の云^{いわ}く実^{じつ}に以^{もつ}て然^{しか}なり先非^{せんひ}を・ひるがへして賢^{かしこ}き教^{きょう}に付き奉^{たてまつ}らんとするなり。

又^{こゝ}爰^{うきくさ}に萍^{しょう}のごとく諸州^{しよしゅう}を回^{めぐ}り蓬^{よもぎ}のごとく県^{えん}県^{けん}に転^{てん}ずる非人^{ひにん}のそれとも知らず来^きり門^{もん}の柱^{ちゆう}に寄^より立^たちて含^{ほく}笑^{そえみ}語^ごる事^{こと}なし、あやしみをなして是^{これ}を問^{もん}うに始^{はじ}めには云^いう事^{こと}なし後^ごに強^{しう}て問^{もん}を立^たつる時^{とき}・彼^いが云^いく月^{げつ}蒼^{そう}蒼^{そう}として風^{ふう}忙^{ぼう}忙^{ぼう}たりと、形^{なり}質^{かたち}常^{じょう}に異^いに言^{ごん}語^ご又^{また}通^とぜず其^その至^し極^{ごく}を尋^{たず}ねば当^{とう}世^せの禅^{ぜん}法^{ぽう}是^{これ}なり、予^よ彼^かの人の有^あ様^{やう}を見^み其^その言^{ごん}語^ごを聞^ききて仏^{ぶつ}道^{どう}の良^{りやう}因^{いん}を問^{もん}う時^{とき}、非人^{ひにん}の云^いく修^{しゆ}多^た羅^らの教^{きょう}は月^{げつ}をさす指^{さし}・教^{きょう}網^{わう}は是^{こゝ}れ言^{ごん}語^ごにとどこほる妄^{わう}事^じなり我^{われ}が心^{しん}の本^{ほん}分^{ぶん}におちつかんと出^い立^{でたつ}法^{ぽう}は其^その名^なを禅^{ぜん}と云^いうなり、愚^ぐ人^{にん}云^いく願^{がん}くは我^{われ}聞^きんと思^{おも}ふ、非人^{ひにん}の云^いく実^{じつ}に其^その志^し深^{こゝろ}くば壁^{かへき}に向^{むか}ひ坐^ざ禅^{ぜん}し

て本心ほんしんの月を澄ましめよ爰ここを以て西天さいてんには二十八祖みだ系しゆ乱れず東土とうど
には六祖そうでんの相伝明白なり、汝なんじ是これを悟らずして教網けうもうにかかる不便ふびん
不便ふびん、是心即仏ぜしんそくぶつ・即心是仏そくしんぜぶつなれば此の身の外に更に何いかにか仏あら
んや。

愚人ぐにん此の語ことばを聞いてつくづく諸法しよほうを觀かんじ閑しずかに義理ぎりを案あんじ
て云いく仏教ぶつぎやう万差ばんさにして理非明りひあきらめ難がたし宜あたなるかな常じやうたい啼なげは東に
請こい善財ぜんざいは南に求め藥王やくおうは臂ひじを燒やき樂法ぎやうほうは皮はを剥はぐ善知識ぜんちしき實に
値あい難がたし、或あるは教内と談だんじ、或あるは教外と云いふ此のことはりを思おも
ふに未いまだ淵底えんていを究きめず・法水ほつすいに臨のぞむ者は深淵しんえんの思おもいを懷いだき人師にんしを
見みる族やからは薄冰うすらいの心を成なりせり、爰ここを以て金言きんげんには依法えほう不依人ふえと定さだ
め又また爪上土そうじようの譬たとえあり若もし仏法ぶつぽうの眞偽しんぎをしる人あらば尋たずねて師しと
すべし求めて崇そべし、夫それ人界にんかいに生を受くるを天上てんじようの糸いとにたと

へ仏法の視聴は浮木の穴の類せり、身を軽くして法を重んずべ
しと思うに依つて衆山に攀歎きに引れて諸寺を回る足に任せて
一つの巖窟に至るに後には青山峨峨として松風・常樂我浄を
奏し前には碧水湯湯として岸うつ波・四徳波羅蜜を響かす深谷
に開敷せる花も中道実相の色を顕し広野に綻ぶる梅も界如三千
の薫を添ふ言語道断・心行所滅せり謂つ可し商山の四皓の
所居とも又知らず古仏経行の迹なるか、景雲朝に立ち靈光夕べ
に現ず嗚呼心を以て計るべからず詞を以て宣ふべからず、予此
の砌に沈吟と

さまよひ彷徨とたちもとをり徙倚とたたずむ、此処に忽然として
一の聖人坐す其の行儀を拜すれば法華読誦の声深く心肝に染み
て閑☆の戸ほそを伺へば玄義の牀に臂をくだす、爰に聖人予が

求法の志こころざしを酌知くみしりて詞ことばを和やわげ予よに問いうて云いく汝なんじなに依よつて
此この深山みやまの窟いわやに至いたれるや、予答いえて云いく生なをかろくして法はをお
もくする者ものなり、聖人しょうにん問いて云いく其その行法い如何いかん、予答いえて云いく本
より我われは俗塵ぞくじんに交まりて未いまだ出離しゅつりをわきま、適たまたま善知識ぜんちしきに値あひて始はに
は律りつ・次つぎには念仏ねんぶつ・真言しんごん並ならに禪ぜん此等これらを聞きくといへども未いまだ真偽しんぎを
わきまわきまず、聖人しょうにん云いく汝なんじが詞ことばを聞きくに実じつに以もつて然しかなり身みをかろく
して法はをおもくするは先聖せんしょうの教きやうへ予よが存ぞんずるところなり、抑おさもそも
上うへは非想ひさうの雲うんの上うへ・下したは那落ならくの底そこまでも生なを受けうけて死しをまぬかる
る者ものやはある、然しかれば外典げてんのいやしきをしえにも朝あしたに紅顔こうげん有あつ
て世路せじに誇こほるとも夕ゆふには白骨はくこつと為なつて郊原こうげんに朽くちぬと云いへり、雲
上うへに交まつて雲うんのびんづらあざやかに廻雪かいせつたもとを・ひるがへすと
も其その樂たのしみみをおもへば夢ゆめの中の夢ゆめなり、山やまのふもと蓬よもぎがもとは

つゐの栖すみかなり玉の台・錦にしきの帳とばりも後世ごしやうの道にはなにかせん、小

野の小町・衣通そこおりひめ姫が花の姿も無常むじやうの風に散り・攀はんかい☆・張良ちやうりやうが武芸

に達とくせしも獄卒ごくそつの杖をかなしむ、されば心ありし古人こじんの云いわくあは

れなり鳥べの山の夕ゆうけむり煙をくる人としてとまるべきかは、末のつゆ

本のしづくや世の中の・をくれさきたつためしなるらん、先亡後

滅めつの理り始めて驚おどろくべきにあらず願ふても願ふべきは仏道ぶつどう求め

ても求むべきは經教きやうきやうなり、抑おさ汝そが云うところの法門ほうもんをきけ

ば・或あるは小乗しょうじやう・或あるは大乗だいじやう・位こうげの高下こうげは且しばらく之これを置く還かえつ

て惡道あくどうの業たるべし。

爰こゝに愚人ぐにんおどろ驚いて云いわく如来にやらいいちだい一代しやうきやうの聖教しやうきやうはいづれも衆生しゆじやうを利いせ

んが為なり、始め七処しちこ・八会はちえんの筵えんより終り跋提河ばつだいがの儀式ぎしきまで何いづれれ

か釈尊しやくそんの所説しよせつならざる設たとひ一分いちぶんの勝劣しやうれつをば判ずとも何なんぞ惡道あくどうの

因と云べきや、しょうにんいわ聖人云く如来一代のしょうきやう聖教に権有り実有り大有り小有り又顕密二道相分ち其の品一に非ず、あら須く其の大途を示して汝が迷を悟らしめん、夫れ三界の教主釈尊は十九歳にして伽耶城を出て檀特山に籠りて難行苦行し三十成道の刻に三惑頓に破し無明の大夜爰に明しかば須く本願に任せて一乗・妙法蓮華經を宣ぶべしといへども機縁万差にして其の機仏乘に堪えず、然れば四十余年に所被の機縁を調べて後八箇年に至つて出世の本懷たる妙法蓮華經を説き給へり、然れば仏の御年七十二歳にして序分・無量義經に説き定めて云く「我先きに道場菩提樹の下に端坐すること六年にして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり、仏眼を以て一切の諸法を觀ずるに宣説す可からず、所以は何ん諸の衆生の性慾不同なるを知れり性慾不同なれ

ば種種しゅじゆに法を説く種種しゅじゆに法を説くこと方便ほうべんの力を以てす四十余年よんじゅうよねん

には未だ真実しんじつを顕あらわさず」文、此の文の意は仏の御年三十にして

じやくめつどうじようほだいじゆ

寂滅道場菩提樹の下に坐して仏眼ぶつげんを以て一切衆生の心根を御

覧ずるに衆生しゅじよう成仏じようぶつの直道じきどうたる法華經ほけきようをば説くべからず、是を

以て空拳くうけんを挙げて嬰兒みどりこをすかすが如く様様のたばかりを以て

四十余年よんじゅうよねんが間はいまだ真実しんじつを顕あらわさずと年紀ねんきをさして青天に日輪にちりん

の出で暗夜やみよに満月まんげつのかかるが如く説き定めさせ給たまへり、此の文を

見て何ぞ同じ信心しんじんを以て仏の虚事そらごとと説かるる法華已前の權教ほんけいぜんに

執著しゅうじやくして、めずらしからぬ三界さんがいの故宅に歸るべきや、されば

法華經の一の卷方便品ほうべんに云く「正直しやうじきに方便ほうべんを捨て但無上道むじやうどうを説

く」文、此の文の意は前四十二年の經經きやうぎやうなんじ汝が語るところの念仏ねんぶつ

・真言・禪・律を正直しやうじきに捨てよとなり、此の文明白なる上重かさね

- 1225 -

ていましめて第二の卷譬喩品に云く「但樂つて大乘經典を受持

ないしよきよう

いちげ

ねんき

じゅじ

し乃至余經の一偈をも受けざれ」文、此の文の意は年紀かれこれ

わずら

しよせんほけきよう

じよ

いちげ

煩はし所詮法華經より自余の經をば一偈をも受くべからずとな

しか

はつしゅう

いぎらんぎく

どうそく

り、然るに八宗の異義蘭菊に道俗形ちを異にすれども一同に

ほけきよう

あが

よし

これら

わきまえ

法華經をば崇むる由を云う、されば此等の文をばいかが弁へたる

しようにき

よきよう

いちげ

いまし

ある

ねんぶつ

ある

正直に捨てよと云つて余經の一偈をも禁むるに・或は念仏・或

しんこん

ある

ある

こ

よきよう

あらずや

今

此の

は眞言・或は禪・或は律・是れ余經にあらずや、今・此の

みようほうれんげきよう

しよぶつしゆつせ

ほんい

しゆじようじようぶつ

じきどう

なり

され

妙法蓮華經とは諸仏出世の本意・衆生成仏の直道なり、され

しやくそん

ふそく

のべ

たほう

しようみよう

と

しよぶつ

ぜつそう

ば釈尊は付属を宣べ多宝は証明を遂げ諸仏は舌相を梵天に付

かいぜしんじつ

のべ

たま

此の經は

一字も

しよぶつ

ほんかい

けて皆是眞実と宣べ給へり、此の經は一字も諸仏の本懐・一点も

多生の助なり

一言一語も

虚妄あるべからず

此の經の禁を用いざる

者

は諸仏の舌をきり

賢聖をあざむく人に非ずや其の罪実

者は諸仏の舌をきり賢聖をあざむく人に非ずや其の罪実に怖るべ

しよぶつ

けんせい

あら

そ

つみ

に怖るべ

し、されば二の巻に云く「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば
すなわ いっさいせけん ぶっしゅ
則ち一切世間の仏種を断ず」文、此の文の意は若人此經の一偈
いっく そむ かこ げんざい みらいさんぜじゅつぽう
・一句をも背かん人は過去・現在・未来三世十方の仏を殺さん
つみ きょうぎよう とうせ
罪と定む、經教の鏡をもつて当世にあてみるに法華經をそむか
ぬ人は実に以て有りがたし、事の心を案ずるに不信の人・尚無間
まぬか いわんやねんぶつ そし ほうねんしようにん ほけきよう ねんぶつ
を免れず況や念仏の祖師・法然上人は法華經をもつて念仏に對
なげう
して抛てよと云云、五千・七千の經教に何れの処にか法華經
なげう
を抛てよと云う文ありや、三昧發得の行者生身の弥陀仏とあが
ぜんどう わじよう こしゅ そうぎよう ほけきよう せんちゅうむいつ
むる善導和尚・五種の雜行を立てて法華經をば千中無一とて千
人持つとも一人も仏になるべからずと立てたり、經文には若有
もんほう むいっふじようぶつ じゅつかい えしろう みなぶつどう
聞法者無一不成仏と談じて此の經を聞けば十界の依正・皆仏道
じよう じこをもつ こぎやく ちようだつ てんのうによらい きべつ
を成ずと見えたり、爰を以て五逆の調達は天王如来の記☆に

あずか ひきごしやう りゆうによ なんぼう とんかくじようどう
予り非器五障の竜女も南方に頓覺成道を唱ふ況や復☆☆の六即
を立てて機を漏らす事なし、善導の言と法華經の文と実に以て
てんちうんदै いずれ
天地雲泥せり何れに付くべきや就中其の道理を思うに諸仏
しゅうきよう おんてきせいそうしゅうじん しゅうてき きようもん ごと
衆經の怨敵聖僧衆人の讎敵なり、經文の如くならば争か無間
まぬら
を免るべきや。

こゝに ぐにん な いわ なんじいやし もつ ほしいままゆうげん
爰に愚人色を作して云く汝賤き身を以て恣に莠言を吐く悟つ
て言うか迷つて言うか理非弁え難し、忝なくも善導和尚は弥陀
ぜんぜい ある せいしほさつ けしん ほうねんしようにん また
善逝の応化・・或は勢至菩薩の化身と云へり、法然上人も亦
然なり善導の後身といへり、上古の先達たる上・行徳秀發了解了
しか ぜんどう じようこ せんだつ しょうにんいわ なんじ
・底を極めたり何ぞ惡道に墮ち給うと云うや、聖人云く汝が言
しか 然なり予も仰いで信を取ること此くの如し但し仏法は強ちに人の
きせん 貴賤には依るべからず只經文を先きとすべし身の賤をもつて
きせん 貴賤には依るべからず只經文を先きとすべし身の賤をもつて

其の法を輕んずる事なかれ、有人樂生惡死・有人樂死惡生の十二
字を唱へし毘摩^{びまたいこく}大國の狐は帝釈^{しやく}の師と崇められ諸^{あがめ}行無常等の十
六字を談ぜし鬼神^{きじん}は雪山童子^{せっせんどうじ}に貴^{とうと}まる是れ必ず狐と鬼神との貴^{とうと}
きに非^{あら}ず只法を重んずる故なり、されば我等^{われら}が慈父^{じふ}・教主^{きようしゅ}釈尊^{しゃくそん}
・雙林最後の御遺言^{そうりんさいご}・涅槃經の第六には依法不依人^{えほうふえ}として普賢^{ふげん}・
文殊^{もんじゆ}等の等覺已還の大薩^{とうかくいかん}☆・法門^{ほうもん}を説き給ふとも經文^{きやうもん}を手に
把らずば用ゐざれとなり、天台大師の云く「修多羅と合する者は
録^{ろく}して之^{これ}を用いよ文無^{なく}く義無^{ぎな}きは信受^{しんじゆ}す可^べからず」文、釈^{しゃく}の意は
經文^{きやうもん}に明^{あきらか}ならんを用いよ文証^{もんしやう}無^なからんをば捨てよとなり、
伝教大師の云く「仏説に依憑^{ぶつせつ}して口伝^{くでん}を信ずること莫^なれ」文、
前の釈^{しゆたら}と同意^{どうい}なり、竜樹菩薩^{りゆうじゆぼさつ}の云く「修多羅白論^{しゆたらびやくろん}に依^よつて
修多羅黒論^{しゆたらくろん}に依^よらざれ」と文、意は經の中にも法華已^{ほつけいぜん}前の權教^{こんきやう}

をすてて此の經につけよとなり、きようもん 經文にも論文にろんぶん

も法華ほっけに對して諸余しよよの經典きやうてんを捨てよと云う事分ふんみやう明なり、然しかるに

かいげん

開元かいげんの錄あぐに挙る所の五千・七千の經卷きやうかんに法華經ほけきやうを捨てよ乃至ないし

なげう

抛てよと嫌ふことも又雜行そうぎやうに摂して之これを捨てよと云う經文きやうもんも全

く無し・されば慥たしかの經文きやうもんを勘へ出して善導ぜんどう・法然ほうねんの無間の苦むげんを

救はるべし、今世の念仏ねんぶつの行者ぎやうじや・俗男そくなん・俗女そくじよ・經文きやうもんに違いするの

みならず又師の教そむにも背けり、五種ごしゆの雜行そうぎやうとて念仏ねんぶつ申さん人の

すつべき日記にっき・善導ぜんどうの釈こ之れ有り、其その雜行そうぎやうとは選せん択ちやくに云いわく

「第一だいいちに読誦どくじゆ雜行そうぎやうとは上かみの觀經等かんきやうの往生淨土おうじやうじようどの經を除いて

已外いげ・大小乘だいしやうじよう・顯密けんみつの諸經しよきやうに於て受持じゆじ・讀じゆ・誦じゆするを悉ことごとく

讀誦どくじゆ雜行そうぎやうと名く乃至第三ないしに禮拜らいはい雜行そうぎやうとは上かみの弥陀みだを禮拜らいはいするを

除いて已外いげ一切諸余いっさいしよよの仏菩薩等ぼさつ及諸もろもろの世天せてんに於て禮拜らいはい恭敬きやうけいする

ことこらはいそぎやう

なす

しやうみやうそぎやう

かみ

みた

みやうこ

を悉く礼拝しやう雜行なすと名く、第四にしやうみやうそぎやう称名かみ雜行みたとは上の弥陀みやうこの名号

を称するを除いて已外いげ自余じよの一切いっさい仏菩薩等ふつぽさつ及諸もろもろの世天等せてんの名号みやうこ

を称するを悉くしやう称名ことこらしやうみやうそぎやう雜行なすと名く、第五にさんたんくやう讚歎供養雜行そぎやうとは

上の弥陀かみ仏を除いて已外いげ一切いっさい諸余しよよの仏菩薩等ふつぽさつ及諸もろもろの世天等せてんに於て

讚歎さんたんし供養くやうするを悉くことこさんたんくやう讚歎供養そぎやう雜行なすと名く」文。

此しやくの釈しやくの意は第一だいいちの読誦どくじゆ雜行そぎやうとは念仏ねんぶつ申さんもう道俗どうぞく男女なんによ読むよべ

き經あり読むまじき經ありと定めたり、読むまじき經は法華經ほけきやう・

仁王經にんのうきやう・藥師經やくし・大集經だいしつきやう・般若心經はんになしんきやう・轉女成仏經じやうぶつ・北斗

壽命經じゆみやうことさらうち任せてまか諸人しよにん読まるる八卷の中の觀音經かんのん此等これら

の諸經しよきやうを一句一偈いっくいちげも読むならばたとひ念仏ねんぶつを志すこころざ行者ぎやうじやなりと

も雜行そぎやうに撰せられてせつ往生おうじやうす可からず云云・予愚眼ぐがんを以て世を見

るに設たとひ念仏ねんぶつ申す人なれども此の經經きやうきやうを讀む人は多くしてい師弟敵対

して七逆罪つみとなりぬ。

又第三の礼拝雜行らいはいそうぎようとは念仏ねんぶつの行者ぎようじゃは弥陀三尊みださんそんより外は上に
挙あぐる所の諸仏菩薩しよぶつぼさつ・諸天善神しよてんぜんじんを礼するをば礼拝雜行らいはいそうぎようと名け又
之これを禁しず、然しかるを日本にほんは神国しんこくとして伊奘諾伊奘册いざなぎいざまみの尊みこと・此の国
を作り天照大神垂迹御坐てんしょうだいじんすいじゃくおわして御裳濯河みもすそかわの流れ久しくして今にた
えず豈あに此の国に生を受けて此の邪義じゃぎを用もちゆべきや、又普天の下に
生れて三光の恩を蒙こもむりながら誠に日月にちがつ・星宿せいしゆくを破はする事尤もつとも恐
れ有り。

又第四の称名しょうみょう雜行そうぎようとは念仏ねんぶつ申さん人は唱となうべき仏菩薩ぼさつの名
あり唱となえまじき仏菩薩ぼさつの名あり、唱となうべき仏・菩薩ぼさつの名とは弥陀みだ
三尊さんそんの名号みようごう、唱となうまじき仏菩薩ぼさつの名号みようごうとは釈迦しゃか・薬師やくし・大日等だいにち
の諸仏しよぶつ、地藏じそう・普賢ふげん・文殊もんじゆ・日月星にちがつ、二所と三嶋と熊野と羽黒と

てんしょうだいじん はちまんだいぼさつ これら いっぺん とな
天照大神と八幡大菩薩と此等の名を一遍も唱えん人は念仏を
じゅうまん

十万遍・百万遍申したりとも此の仏菩薩・日月神等の名を唱う
とが よ むげん おうじょう

る過に依つて無間にはおつとも往生すべからずと云云、我世間
ねんぶつ もう これら しよぶつ ぼさつ しよてんぜんじん

を見るに念仏を申す人も此等の諸仏菩薩・諸天善神の名を唱うる
ゆえ こ そむ

故に是れ又師の教に背けり。

第五の讃歎供養雑行とは念仏申さん人は供養すべき仏は弥陀
さんそん くよう ほか あ ねんぶつ もう ねんぶつ とう

三尊を供養せん外は上に挙ぐる所の仏菩薩・諸天善神に香華のす
そうぎよう せつ これ

こしをも供養せん人は念仏の功は貴とけれども此の過に依つて
雑行に摂すとは是をきらふ、然るに世を見るに社壇に詣ては
へいはく ささ のぞ らいはい いた こ

幣帛を捧げ堂舎に臨みては礼拝を致す是れ又師の教に背けり、
なんじも ふしん せんちやく そ

汝若し不審ならば選択を見よ其の文明白なり、又善導和尚の
かんねん ほうもん いわ しゅにく ごしん ほつがん と

観念法門経に云く「酒肉五辛誓つて発願して手に捉らざれ口に
と

喫まざれ若し此の語に違せば即ち身口俱に惡瘡を著けんと願ぜ
よ」文、此の文の意は念仏申さん男女・尼法師は酒を飲まざれ魚
鳥をも食わざれ其の外にらひる等の五つのからく・くさき物を食
わざれ是を持たざる念仏者は今生には惡瘡身に出で後生には
無間に墮すべしと云云、然るに念仏申す男女・尼法師此の誠をか
へりみず恣に酒をのみ魚鳥を食ふ事・劍を飲む譬にあらずや。
爰に愚人の云く誠に是れ此の法門を聞くに念仏の法門實に
往生すと雖も其の行儀修行し難し況や彼の憑む所の經論は皆
以て權説なり往生す可からざるの条分明なり、但眞言を破する
事は其の謂れ無し夫れ大日經とは大日覺王の秘法なり大日如来
より系も乱れず善無畏・不空之を伝え弘法大師は日本に兩界の
曼陀羅を弘め、尊高三十七尊・秘奥なるものなり然るに顯教の

極理は尚密教の初門にも及ばず爰を以て後唐院は法華尚及ばず
況や自余の教をやと釈し給へり此の事如何が心うべきや。

聖人示して云く予も始は大日に憑を懸けて密宗に志を寄

す然れども彼の宗の最底を見るに其の立義も亦謗法なり汝が云

う所の高野の大師は嵯峨天皇の御宇の人師なり、然るに皇帝より

仏法の浅深を判釈すべき由の宣旨を給いて十住心論十卷之を

造る、此の書広博なる間要を取つて三卷に之を縮め其の名を秘藏

宝鑰と号す始異生羝羊心より終秘密莊嚴心に至るまで十に分別

し、第八法華・第九華嚴・第十真言と立てて法華は華嚴にも劣れ

ば大日経には三重の劣と判じて此くの如きの乗乗は自乗に仏

の名を得れども後に望めば戲論と作ると書いて法華経を狂言綺語

と云い釈尊をば無明に迷へる仏と下せり、仍て伝法院建立せ

し弘法こうぼうの弟子でし正覚房しょうかくぼうは法華經ほけきょうは大日經だいにちきょうのはきものとりおよに及およばず

・釈迦しやくか仏ぶつは大日だいにち如來にょらいの牛飼うし飼いにも足たりらずと書なけり、汝心なんじを静しずめて

聞きけ一代いちだい五千ごせん・七千しちせんの經教きょうぎょう・外典げてん三千余卷さんぜんけんにも法華經ほけきょうは戲論けろん三

重おもの劣け・華嚴經けこんきょうにも劣しやくり釈尊しやくそんは無明むみょうに迷まよへる仏ぶつにて大日如來だいにちにょらいの

牛飼うし飼いにも足たりらずと云いう慥たしかなる文ぶんありや、設たとひさる文ぶん有ありと云いう

とも能よく能よく思案しあんあるべきか。

經教きょうぎょうは西天さいてんより東土とうどに☆おほぼす時とき・訳者やくしゃの意樂いぎやうに随したがつて經論きょうろん

の文ぶん不定ふじやうなり、さて後秦こうしんの羅什らじく三藏さんざうは我漢土わかんどの仏法ぶつぽうを見るみるに多く

梵本ほんほんに違ちがへり我が訳やくする所の經若もし誤あやりなくば我死わしして後・身みは

不淨ふじやうなれば焼やくると云いへども舌計しかり焼やけざらんと常に説法せつぽうし給たまい

しに焼やき奉たてまつる時とき・御身おんみは皆骨みなとなるといへども御舌計おんしかりは青蓮華せいれんげ

の上に光明こうみやうを放はなつて日輪にちりんを映奪えいざつし給たまいき有あり難がたき事ことなり、さて

こそ殊更・彼の三蔵所訳の法華經は唐土にやすやすと弘まらせ
給たまいしか、然しかれば延暦寺の根本大師・諸宗を責め給たまいしには
法華を訳する三蔵は舌の焼けざる驗あり汝等が依經は皆誤れ
りと破し給ふは是なり、涅槃經にも我が仏法は他国へ移らん時
誤り多かるべしと説き給へば經文に設ひ法華經はいたずら事・
釈尊をば無明に迷へる仏なりとありとも權教・實教・大乘
・小乘・説時の前後・訳者能く能く尋ぬべし、所謂老子・孔子
は九思一言・三思一言・周公旦は食するに三度吐き沐するに三
度にぎる外典のあさき猶是くの如し況や内典の深義を習はん人を
や、其の上此の義・經論に迹形もなし人を毀り法を謗じては
惡道に墮つべしとは弘法大師の釈なり必ず地獄に墮んこと疑い
無き者なり。

爰こゝに愚人ぐにん・茫然ぼうぜんとほれ忽然こつねんとなげひて良久やしうして云いわく此の
大師だいしは内外ないげの明鏡めいきよう・衆人しゆうじんの導師どうしたり德行とくぎよう世に勝すぐれ名譽めいよ普あまねく聞
えて・或あるは唐土もうこしより三鉢さんこを八万余里はちまんの海上かいをなぐるに即そく日本にほんに至
り・或あるは心経しんきようの旨むねをつづるに蘇生すいじやくの族やから・途みちに彳たたずむ、然しかれば此の
人ひとただ人ひとにあらず大聖たいせい権化こんげの垂迹すいじやくなり仰あおいで信を取らんにはし
かじ、聖人しょうにん云いく予も始めは然しかなり但ただし仏道ぶつどうに入いつて理非りひを勘かんへ
見るに仏法ぶつぽうの邪正じゃせいは必ず得通とくずう自在じざいにはよらず是これを以もつて仏は依法えぽう
不依人ふえと定め給たまへり前に示こすが如ごとし、彼の阿伽陀仙あかだは恒河こうがを片耳かみみ
にただへて十二年じふにねん・耆兎仙ぎとは一日いちにちの中に大海たいかいをすひほす張階ちやうかいは
霧きりを吐はき樂巴らんぱは雲を吐はく然しかれども未いまだ仏法ぶつぽうの是非ぜひを知らず因果いんがの
道理どうりをも弁わかまへず、異朝いちちようの法雲法師ほううんほつしは講經勤修こうしんしゆうの砌みぎりに須臾しゆゆに天華てんけ
をふらせしかども妙樂みやうらく大師だいしは感応かんのう斯かくの如ごときも猶理なほに称かなわずと

ていまだ仏法をばしらずと破し給う、夫れ此の法華經と申すは
いこんとう
已今当の三説を嫌つて已前の經をば未顕真実と打破り肩を並ぶる
經をば今説の文を以てせめ已後の經をば当説の文を以て破る實に
だい
三説第一の經なり、第四の卷に云く「藥王今汝に告ぐ我所説の
きようてんし
經典而かも此の經の中に於て法華最第一なり」文、此の文の意
りようぜん
は靈山会上に藥王菩薩と申せし菩薩に仏・告げて云く始・華嚴
より終・涅槃經に至るまで無量無辺の經・恒河沙等の数多し其の
ねはんぎよう
中には今の法華經最第一と説かれたり、然るを弘法大師は一の字
ほけきようさいだい
を三と読まれたり、同卷に云く「我仏道の為に無量の土に於て始
い
より今に至るまで広く諸經を説く而も其の中に於て此の經第一
し
なり」と、此の文の意は又釈尊無量の国土にして・或は名字を
しやくそんむりよう
替え・或は年紀を不同になし種種の形を現して説く所の諸經の
ある
ねんき
ふどう
しゆじゆ
しよきよう

中には此ほけきようの法華經だいいちを第一と定められたり、同き第五卷には
もつともそのかみにありのべ だいにちきよう こんごうちよう むりよう
最さい在ざい其さい上じやうと宣のたまべて大日經・金剛頂等の無量の經の頂いただきに此
の經あは有あるべしと説かれたるを弘法大師は最在其下と謂おもへり、
やくそん こうほう ほけきよう ほうやく こうほうだいいし さいざいこげ おも
釈尊やくそんと弘法こうほうと法華經ほけきようと宝鑰ほうやくとは実もつに以もつて相違そういせり釈尊やくそんを捨て
たてま こうほう しゃくそん つきたてまつ
奉たてまつつて弘法こうほうに付くべきか、又弘法こうほうを捨てて釈尊しゃくそんに付奉つきたてまつるべきか、
きようもん そむ にんし
又經文きやうもんに背そむいて人師にんしの言ごんに随したがふべきか人師にんしの言ごんを捨てて金言きんげんを
あお 仰あおぐべきか用捨ようしや・心こころに有あるべし、又第七の卷藥王品やくおうほんに十喻じゅうゆを挙げ
て教たんを歎なげずるに第一だいいちは水の譬たとえなり江河かうかを諸經しよきように譬たとへ大海たいかいを法華ほつけ
に譬たとへたり、然しかるを大日經だいにちきようは勝すぐれたり法華ほつけは劣おとれりと云う人は
そくたいかい
即大海しよは小河まさよりもすくなしと云わん人なり、然しかるに今の世の人
は海の諸河しよに勝まさる事をば知るといへども法華經ほけきようの第一だいいちなる事をば
わきまえ
弁わへず、第二は山の譬たとえなり衆山しゅうざんを諸經しよきように譬たとへ須弥山しゆみせんを法華ほつけに

たと 譬へたり須弥山は上下十六万八千由旬の山なり何れの山か肩を並

ぶべき法華經を大日經に劣ると云う人は富士山は須弥山より大

なりと云わん人なり、第三は星月の譬なり諸經を星に譬へ

法華經を月に譬ふ月と星とは何れ勝りたりと思へるや、乃至

次下には此の經も亦復是くの如し一切の如来の所説若しは菩薩の

所説若しは声聞の所説諸の經法の中に最も為れ第一とて此の

法華經は只釈尊一代の第一と説き給うのみにあらず大日及び

薬師・阿弥陀等の諸仏・普賢・文殊等の菩薩の一切の所説・

諸經の中に此の法華經第一と説けり、されば若し此の經に勝り

たりと云う經有らば外道天魔の説と知るべきなり、其の上・大日

如来と云うは久遠実成の教主釈尊・四十二年・和光同塵して

其の機に応ずる時・三身即一の如来暫く毘盧遮那と示せり、

かくのゆえ
是の故に開顕実相の前には釈迦の応化と見えたり、爰を以て普賢

経には釈迦牟尼仏を毘盧遮那遍一切処と名け其の仏の住処を

常寂光と名くと説けり、今法華経は十界互具・一念三千・三諦

即是・四土不二と談ず其の上に一代聖教の骨髓たる二乗作仏・

久遠実成は今経に限れり、汝語る所の大日経・金剛頂等の

三部の秘経に此等の大事ありや善無畏不空等此等の大事の法門を

盗み取つて己が経の眼目とせり本経・本論には迹形もなき誑惑

なり急ぎ急ぎ是を改むべし。

抑大日経とは四教含蔵して尽形寿戒等を明せり唐土の人師

は天台所立の第三時方等部の経なりと定めたる権教なりあさま

し・あさまし、汝実に道心あらば急いで先非を悔ゆべし夫れ

以れば此の妙法蓮華経は一代の観門を一念にすべ十界の依正を

三千につづめたり。

◆六六一二

聖愚問答抄下

487p

爰ここに愚人聊ぐにんいささか和やわいで云いく經文きやうもんは明鏡めいきやうなり疑慮ぎりよをいたすに及およば

ず但ただし法華經ほけきやうは三說ひいに秀ひいで一代いちだいに超こゆるといへども言說かに拘かはら

ず經文きやうもんに留とどまらざる我等われらが心の本分ほんぶんの禪ぜんの一法いっぽうにはしくべから

ず凡およそ万法ばんぽうを弘遣ほつけんして言語ごんごの及およばざる処ところを禪法ぜんぽうとは名けたり、

されば跋提河ぼつだいがの辺しり沙羅林しゃらりんの下もとにして釈尊しゃくそん・金棺きんくわんより御足ごそくを出

し拈華微笑ねんげびしやうして此この法門ほうもんを迦葉かしょうに付属ふぞくありしより已來このかた・天竺てんじく二十

八祖みだ・系みだ乱みだれず唐土もろこしには六祖しだい次第ぐつうに弘通くつうせり、達磨だるまは西天さいてんにして

は二十八祖とうどの終しゆう・東土とうどにしては六祖しだいの始しゆうなり相伝そうでんをうしなはず教

網とどこおに滞とどこおるべからず、爰ここをもちを以もつて大梵天王だいぼんてんのうもん問もん仏ぶつ決疑經けつぎきやうに云いく「吾わに

正法眼蔵しょうぼうげんそうの涅槃妙心ねはんみやうしん実相じつそう無相むそう微妙みみやうの法門ほうもん有きやうげり教外きやうげに別べつに云いう

もんじ 文字を立てず摩訶迦葉に付属す」とて迦葉に此の禪の一法をば
きようげ 教外に伝ふと見えたり、都て修多羅の經教は月をさす指・月を
見て後は指何かはせん心の本分禪の一理を知つて後は仏教に心
を留むべしや、されば古人の云く十二部經は総て是れ閑文字と云
云、仍つて此の宗の六祖慧能の壇經を披見するに実に以て然なり、
言下に契会して後は教は何かせん此の理如何が弁えんや、聖人
示して云く汝先ず法門を置いて道理を案ぜよ、抑我一代の
大途を伺わず十宗の淵底を究めずして国を諫め人を教ふべきか、
汝が談ずる所の禪は我最前に習い極めて其の至極を見るに甚
だ以て僻事なり、禪に三種あり所謂如来禪と教禪と祖師禪となり、
汝が言う所の祖師禪等の一端之を示さん聞いて其の旨を知れ
若し教を離れて之を伝うといわば教を離れて理なく理を離れて教

無し理全く教・教全く理と云う道理汝之を知らざるや拈華微笑
して迦葉に付属し給うと云うも是れ教なり不立文字と云う四字も
即教なり文字なり此の事・和漢兩國に事旧りぬ今いへば事新き
に似たれども一兩の文を勘えて汝が迷を払はしめん、補註十一
に云く又復若し言説に滞ると謂わば且く娑婆世界には何を將つて
仏事と為るや、禪徒豈言説をもつて人に示さざらんや、文字を離
れて解脱の義を談ずること無し豈に聞かざらんや乃至次ぎ下に
云く豈に達磨西来して直指人心・見性成佛すと而るに華嚴等の
諸大乘經に此の事無からんや、嗚呼世人何ぞ其れ愚かなるや
汝等当に仏の所説を信ずべし諸仏如来は言虚妄無し、此の文の
意は若し教文にとどこほり言説にかかはるとて教の外に修行す
といはば此の娑婆国にはさて如何がして仏事善根を作すべき、さ

ように云うところの禪人も人に教ゆる時は言を以て云はざるべし
や其その上ぶつどう仏道の解了げりようを云う時文字もんじを離れて義なし、又達磨西より
来ただちつて直に人心じんしんを指して仏なりと云う是程これほどの理は華嚴・大集・大
般若等の法華已前の権大乘經ほつけいぜんにも在在処処こんだいじようきように之を談ぜり是をい
みじき事とせんは無下に云いいがひなき事なり嗚呼ああ今世の人何ぞ
甚はなはだひがめるや只中道実相ただちゆうどうじつそうの理に契当けいとうせる妙覺果満みようかくかまんの如来にようらい
誠諦じようたいの言を信すべきなり又妙樂大師の弘決みようらくだいしの一に此の理を釈しゃく
て云くいわ「世人・教を蔑ないがしろにして理觀を尚ぶは誤あやまりれるかな誤あやまりれ
るかな」と、此の文の意は今の世の人人ひとびとは觀心觀法かんじんかんぽうを先として
經教きようきようを尋ね学たずばず還かえつて教をあなづり經をかるしむる是れ誤あやまり
れりと云う文なり、其の上その上とうせ当世の禪人・自宗じしゆうに迷まよへり、続高僧こうそう
伝を披見ひけんするに習禪の初祖達磨大師の伝だるまいしに云く教いわに藉よつて宗を悟

ると、如來一代の聖教の道理を習學し法門の旨・宗宗の沙汰
を知るべきなり、又達磨の弟子・六祖の第二祖慧可の伝に云く
達磨禪師四卷の楞伽を以て可に授けて云く「我漢の地を觀るに唯
此の經のみ有り仁者依行せば自ら世を度する事を得ん」と、此の
文の意は達磨大師天竺より唐土に來つて四卷の楞伽經をもつて
慧可に授けて云く我此の國を見るに是の經殊に勝れたり汝持ち
修行して仏に成れとなり、此等の祖師既に經文を前とす若し之
に依つて經に依ると云はば大乘か小乗か權教か實教か能く
能く弁ふべし、或は經を用いるには禪宗も楞伽經首楞嚴經
・金剛般若經等による是れ皆法華已前の權教・覆藏の説なり、
只諸經に是心即仏・即心是仏等の理の方を説ける一兩の文と句
とに迷いて大小・權實・顯露・覆藏をも尋ねず、只不二を立て

て而^{じに}二を知らず謂^い己^こ均^{きん}仏^{ぶつ}の大^{だい}慢^{まん}を成^{なり}せり、彼の月^が氏^しの大^{だい}慢^{まん}が迹^{あと}を
つぎ此^しの尸^し那^なの三^{さん}階^{かい}禪^{ぜん}師^しが古^こ風^{ふう}を追^おう然^{しか}りと雖^{いえど}も大^{だい}慢^{まん}は生^{いき}ながら
むげん
無^む間^{かん}に入^いり三^{さん}階^{かい}は死^しして大^{だい}蛇^{じゃ}と成^{なり}りぬ・をそろしをそろし、
しゃくそん
釈^{しゃく}尊^{そん}は三^{さん}世^ぜ了^{りょう}達^{たつ}の解^げ了^{りょう}・朗^{あきら}かに妙^{みょう}覺^{がく}果^か滿^{まん}の智^ち月^{げつ}潔^{けつ}くして未^み来^{らい}を
かんが
鑒^{かん}みたまい像^{そう}法^{ほう}決^{けつ}疑^ぎ經^{きやう}に記^{しる}して云^いく「諸^{もろ}の惡^{あく}比^ひ丘^{きう}・或^{ある}は禪^{ぜん}を修^{しゅう}す
る有^あつて經^{きやう}論^{ろん}に依^よらず自^{みづか}ら己^こ見^{けん}を逐^おつて非^{もつ}を以^{もつ}て是^なと為^なし是^な邪^{じや}
是^ぜ正^{しやう}と分^{ぶん}別^{べつ}するこゝ能^{あた}わず☆く道^{だう}俗^{そく}に向^{むか}つて是^{かく}の如^{ごと}き言^{ごん}を作^なさ
く我^よ能^よく是^{これ}を知^しり我^よ能^よく是^{これ}を見^みると当^{まさ}に知^しるべし此^この人は速^{すみ}かに
わがほう
我^わ法^{ほう}を滅^{めつ}す」と、此^この文^{ぶん}の意^いは諸^{しよ}惡^{あく}比^ひ丘^{きう}あつて禪^{ぜん}を信^{しん}仰^{かう}して經^{きやう}論^{ろん}
をも尋^{たず}ねず邪^{じや}見^{けん}を本^{ほん}として法^{ほう}門^{もん}の是^ぜ非^ひをば弁^わえま^きずして而^{しか}も男^{なん}女^よ・
ほつし
尼^に法^{ほう}師^し等^{とう}に向^{むか}つて我^わよく法^{ほう}門^{もん}を知^しれり人^{ひと}はしらずと云^いつて此^この禪^{ぜん}
ひろ
を弘^{ひろ}むべし、当^{まさ}に知^しるべし此^この人は我^わが正^{しやう}法^{ほう}を滅^{めつ}すべしとなり、

此の文をもつて当世とうせを見るに宛も符契ふけいの如し汝慎なんじつしむべし汝畏なんじおそるべし、先に談だんずる所の天竺てんじくに二十八祖有つて此の法門ほうもんを口伝くでんすと云う事そ其の証拠しょうこ何に出でたるや仏法ぶつぽうを相伝そうでんする人・二十四人・或あるは二十三人と見えたり、然しかるを二十八祖と立つる事・所出しよしゅつの翻譯ほんやく何にかある全く見えざるところなり、此の付法蔵ふほうぞうの人の事・私ひそに書くべきにあらず如来にょらいの記文きもん分明ふんみようなり、其その付法蔵ふほうぞう伝でんに云く「復比丘またびく有り名けて師子ししと曰いう☆寶国けいひんこくに於おいて大に仏事ぶつじを作なす、時に彼の国王こくおうをば弥羅掘みらくつと名け邪見熾盛じゃけんしじようにして心に敬信なく無なくく☆寶国けいひんこくに於おいて塔寺たつしを毀壞きえし衆僧しゅうそうを殺害さつがいす、即ち利剣すなわを以て用もちいて師子ししを斬る頸の中血無なくく唯乳ただのみ流出いだす法を相付あひする人是に於おいて便すなわち絶えん」此の文の意は仏・我が入涅槃ねはんの後あとに我が法ほうを相伝そうでんする人・二十四人あるべし其その中に最後さいご・弘通くつうの人に当るを

ば師子比丘と云わん、

☆賓国と云う国にて我が法を弘むべし彼の

国の王をば檀弥羅王と云うべし邪見放逸にして仏法を信ぜず

衆僧を敬はず堂塔を破り失ひ剣をもつて諸僧の頸を切るべし即

師子比丘の頸をきらん時に頸の中に血無く只乳のみ出ずべし、

是の時に仏法を相伝せん人絶ゆべしと定められたり、案の如く仏

の御言違わず師子尊者・頸をきられ給う事实に以て爾なり、王の

かいな共につれて落ち畢んぬ、二十八祖を立つる事甚以て

僻見なり禅の僻事はより興るなるべし、今慧能が壇經に二十八

祖を立つる事は達磨を高祖と定むる時師子と達磨との年紀遙かな

る間・三人の禅師を私に作り入れて天竺より来れる付法蔵・系乱

れずと云うて人に重んぜさせん為の僻事なり此の事異朝にして事

旧りぬ、補註の十一に云く「今家は二十三祖を承用す豈

☆有ら

- 1250 -

んや、若し二十八祖を立つるは未だ所出の翻訳を見ざるなり、
近來更に石に刻み版に鏤め七仏二十八祖を図状し各一偈を以て
伝授相付すること有り嗚呼仮託何ぞ其れ甚だしきや識者力有ら
ば宜しく斯の弊を革むべし」是も二十八祖を立て石にきざみ版に
ちりばめて伝うる事甚だ以て誤れり此の事を知る人あらば此
の誤をあらためなをせとなり、祖師禪甚だ僻事なる事是にあ
り先に引く所の大梵天王問仏決疑經の文を教外別傳の証拠に汝
之を引く既に自語相違せり、其の上此の經は説相權教なり又
開元貞元の再度の目錄にも全く載せず是録外の經なる上・權教
と見えたり、然れば世間の學者用ゐざるところなり証拠とするに
たらず。

抑今の法華經を説かるる時・益をうる輩・迹門界如三千の

時・敗種にじょうの二乗・仏種ぶつしゆを萌きざす四十二年の間は永不成仏ようふじょうぶつと嫌きらはれて

在在しよしよ處處しゆうえの集会しうかいにして罵詈誹謗めりひぼうの音こえをのみ聞きき人天大会にんてんたいえに思おもいう

とまれて既すでに飢え死ぬべかりし人人も今の経きやうに來きつて舍利弗しゃりほつは

華光げこう如來・目連もくれんは多摩羅跋旃檀香如來・阿難あなんは山海慧自在通王さんかいえじざいつうおうぶつ仏

・羅らい☆羅らいは☆七宝華如來しちほうげにやうらい五百の羅漢らかんは普明如來・二千の聲聞しやうもんは

宝相如來ほうそうにやうらいの記き☆に与あずか・顯本遠寿けんぽんおんじゆの日は微塵數じんじゆの菩薩ぼさつ増道損生ぞうどうそんじやうし

て位大覺だいかくに鄰となる、されば天台大師てんだいだいしの釈ひけんを披見たきやうするに他經たきやうには菩薩ぼさつ

は仏になると云つて二乗にじやうの得道とくどうは永く之これ無し、善人ぜんにんは仏になる

と云つて惡人あくにんの成仏じやうぶつを明あかさず男子なんしは仏になると説といて女人にょにんは

地獄じごくの使しと定さだむ人天にんてんは仏になると云つて畜類しよくるいは仏になるといは

ず、然しかるを今の経これらは是等みなが皆みな仏になると説とくたのもしきかな末代まつだい

濁世じよくせに生を受くといへども提婆だいばが如ごとくに五逆ごぎやくをも造つくらず三逆さんぎやくをも

犯さず、而るに提婆猶天王如来の記☆を得たり況や犯さざる我等
が身をや、八歳の竜女既に蛇身を改めずして南方に妙果を証す
いわんやにんかい
況や人界に生を受けたる女人をや、只得難きは人身値い難きは
しょうほう
正法なり汝早く邪を翻えし正に付き凡を転じて聖を証せん
なんじ
と思はば念仏・真言・禅・律を捨てて此の一乗妙典を受持すべ
ねんぶつ しんごん
し、若し爾らば妄染の塵穢を払つて清浄の覺体を証せん事疑
もしか もうぜん じんえ しょうじょう かくたい うたがい
なかるべし。

愛に愚人云く今聖人の教誡を聴聞するに日來の矇昧忽に開け
 ぬ天真發明とも云つべし理非顯然なれば誰か信仰せざらんや、
 但し世上を見るに上一人より下万民に至るまで念佛・真言・禪・
 律を深く信受し御座すさる前には国土に生を受けながら争か王命
 を背かんや、其の上・我が親と云い祖と云い旁念佛等の法理を

信じて他界の雲に交り畢おわんぬ、又日本には上下にほん じょうげの人数にんずう・幾いくばくか
有ある、然しかりと雖いえども權教ごんきょう・權宗ごんしゅうの者は多く此の法門ほうもんを信ずる人は
未いまだ其の名をも聞かず、仍よつて善処ぜんしょ・惡処じゃほつをいはず邪法じやほう・正法しやうほうを
簡えらばず内典ないてん五千・七千の多きも外典げてん三千余卷の広きも只主君ただしゅくんの命
に随したがひ父母の義かなに叶かんじんうが肝心かんじんなり、されば教主きやうしゅ釈尊しやくそんは天竺てんじくにし
て孝養報恩の理を説とき孔子こうしは大唐だいとうにして忠功孝高の道を示す師の
恩を報ずる人は肉をさき身をなぐ主の恩をしる人は弘演こうえんは腹をさ
き予讓よじやうは劍をのむ親の恩を思ひし

人は丁蘭ていらんは木をきざみ伯瑜はくゆは杖になく、儒・外・内・道は異なり
といへども報恩謝徳の教は替かわる事なし然しかれば主師親しゅししんのいまだ信ぜ
ざる法理を我始めて信ぜん事既すでに違背いはいの過とがに沈みなん法門ほうもんの道理どうり
は經文明白なれば疑網ぎもう都て尽きぬ後生ごしやうを願はずば来世らいせ・苦に

沈むべし進退しんたい惟これ谷きれり我い如何かんがせんや、聖人しょうにん云く汝なんじ此の理を知

りながら猶なほ是の語ことばをなす理の通ぜざるか意の及およばざるか我しやく釈尊そん

の遺法をまなび仏法に肩を入れしより已この来知恩かたちおんをもて最とし報恩ほうおん

をもて前とす世に四恩あり之これを知るを人倫じんりんとなづけ知らざるを

畜生ちくしょうとす、予父母ふぼの後世ごしょうを助け国家の恩徳を報ぜんと思うが

故に身命しんみょうを捨つる事敢て他事たじにあらず唯知恩を旨とする計りばかな

り、先ず汝目なんじをふさぎ心を静めて道理を思へ我は善道を知りな

がら親と主との悪道あくどうにかからんを諫めいさざらんや、又愚心ぐしんの狂ひ酔

つて毒を服せんを我知りながら是これをいましめざらんや、其その如くごと

法門ほうもんの道理どうりを存じて火・血・刀の苦を知りながら争いかでか恩を蒙る人こおむ

の悪道あくどうにおちん事を歎なげかざらんや、身をもなげ命をも捨つべし

諫いさめても・あきたらず歎なげきても限りなし、今世に眼まなこを合がっする苦

み猶是を悲む況や悠悠たる冥途の悲み豈に痛まざらんや恐れても

恐るべきは後世慎みても慎むべきは来世なり、而るを是非を論ぜ

ず親の命に随ひ邪正を簡ばず主の仰せに順はんと云う事愚癡の前

には忠孝に似たれども賢人の意には不忠不孝是に過ぐべからず。

されば教主釈尊は転輪聖王の末師子・頼王の孫・浄飯王

の嫡子として五天竺の大王たるべしといへども生死無常の理をさ

とり出離解脱の道を願つて世を厭ひ給しかば浄飯大王是を歎き

四方に四季の色を顕して太子の御意を留め奉らんと巧み給ふ、先

づ東には霞たなびくたえまより・かりがねこしぢに帰り☆の梅の

香・玉簾の中にかよひ・でうでうたる花の色・ももさへづりの

鶯・春の気色を顕はせり、南には泉の色白たへにしてかの玉川

の卯の華信太の森のほととぎす夏のすがたを顕はせり、西には

紅葉・常葉もみじ ときわに交ればさながら錦をおり交え荻あきふく風・閑のどかにして

松の嵐ものすごし過ぎすにし夏のなごりには沢辺にみゆる螢の光・

あまつ空なる星かと誤みあやまり・松虫・鈴虫の声声・涙を催せり、北

には枯野からの色いつしかものうく池の汀なぎさにつららゐて谷の小川も・

をとさびぬ、かかるありさまを造つて御意みこころをなぐさめ給うのみな

らず四門に五百人づつの兵を置いて守護しゅごし給たまいしかども終ついに太子たいし

の御年十九と申せし二月八日の夜半の比・車しゃ匿かくを召して金泥駒こんじくに

鞍置くらかせ伽耶城がやを出て檀特山だんとくせんに入り十二年高山こうざんに薪たきぎをとり深谷しんこく

に水を結んで難行なんぎょう苦行くぎょうし給たまひ三十成道じゅうどうの妙果めうくわを感得かんとくして三界さんがいの

独尊いちだい・一代いちだいの教主きょうしゅと成つて父母ふぼを救ひ群生ぐんじやうを導き給たまいしをばさ

て不孝ふこうの人と申もうすべきか、仏ぶつを不孝ふこうの人と云いいしは九十五種きゅうじゅうごしゆの

外道げどうなり父母ふぼの命めいに背そむいて無為むゐに

入り還かえつて父母ふぼを導くは孝てほんの手本なる事・仏そ其の証しょうこ拠こなるべし、
彼の淨藏・淨眼は父の妙莊嚴王・外道げどうの法じやくに著ぶつぽうして仏法そむに背そむき
給たまいしかども二人の太子たいしは父の命めいに背そむいて雲雷音王うんらいおんのうぶつの御弟子おんでしと
なり終ついに父を導しやうじゆいて沙羅樹王しやらじゆと申もうす仏になし申もうされけるは不孝ふこう
の人と云うべきか、經文きやうもんには棄恩入無為・真しん實報恩者じつほうおんと説いて
今生こんじやうの恩愛をば皆みなすてて仏法ぶつぽうの實の道こに入る是れ實に恩をしれ
る人なりと見えたり、又主君しゆくんの恩の深き事汝なんじよりも能よくしれり
汝なんじも若ちおんし知恩のぞみの望ねいしんあらば深く諫いさめ強しいて奏そうせよ非道いんのちゆうにも主命あくおうに
随したがはんと云う事・佞臣ふちゆうの至り不忠の極きわまりなり、殷いんの紂王ちゆうは惡王あくおう・
比干ひかんは忠臣まつりごとなり政事しやうじ理に違ちがひしを見て強しいて諫いさめしかば即比干そくひかんは
胸さを割さかる紂王ひかんは比干死して後・周の王に打たれぬ、今の世まで
も比干ひかんは忠臣といはれ紂王あくおうは惡王といはる、夏かのけつの桀王いさを諫いさめし

竜蓬は頭をきられぬ・されども桀王は悪王・竜蓬は忠臣とぞ

云う主君を三度諫むるに用ゐずば山林に交れとこそ教へたれ何ぞ

其の非を見ながら黙せんと云うや、古の賢人・世を遁れて山林に

交りし先蹤を集めて聊か汝が愚耳に聞かしめん、殷の代の太

公望は☆溪と云う谷に隠る、周の代の伯夷・叔齊は首陽山と云

う山に籠る、秦の綺里季は商洛山に入り漢の嚴光は孤亭に居し、

晋の介子綏は縣上山に隠れぬ、此等をば不忠と云うべきか愚か

なり汝忠を存ぜば諫むべし孝を思はば言うべきなり。

先ず汝権教・権宗の人は多く此の宗の人は少し何ぞ多を捨

て少に付くと云う事必ず多きが尊くして少きが卑きにあらず、

賢善の人は希に愚悪の者は多し麒麟鸞鳳は禽獸の奇秀なり然れ

ども是は甚だ少し牛羊・烏鴿は畜鳥の拙卑なりされども是は

うたたお

転多し、必ず多きが・たつとくして少きがいやくば麒麟をす

ぎゅうよう

てて牛羊をとり鸞鳳を闇いて烏鴿をとるべきか、摩尼・金剛は

れいい

金石の靈異なり、此の宝は乏しく瓦礫・土石は徒物の至り是は

がりやく

いたずらもの

又巨多なり、汝が言の如くならば玉なんどをば捨てて瓦礫を

もち

なんじ

こと

まれ

がりやく

用ゆべきか・はかなし・はかなし、聖君は希にして千年に一たび

い

出で賢佐は五百年に一たび顕る摩尼は空しく名のみ聞く麟鳳誰か

あらわ

まに

むな

きほう

実を見たるや世間出世・善き者は乏しく悪き者は多き事・眼前な

せけんしゅつせ

よ

がんぜん

り、然れば何ぞ強ちに少きを・おろかにして多きを詮とするや土

しか

なん

あなが

沙は多けれども米穀は希なり木皮は充満すれども布絹は些少な

まれ

じゅうまん

さしょう

り、汝只正理を以て前とすべし別して人の多きを以て本とする

なんじただ

もつ

さき

もつ

ことなかれ。

こと

ぐにん

たもと

爰に愚人席をさり袂をかいつくろいて云く誠に聖教の理を

いわ

しょうきよう

の理を

きくに人身は得難く天上の絲筋の海底の針に貫けるよりも希に
仏法は聞き難くして一眼の亀の浮木に遇うよりも難し、今既に得
難き人界に生をうけ値い難き仏教を見聞しつ今生を・もだして
は又何れの世にか生死を離れ菩提を証すべき、夫れ一劫受生の骨
は山よりも高けれども仏法の為にはいまだ一骨をもすてず多生恩
愛の涙は海よりも深けれども尚後世の為には一滴をも落さず、
拙きが中に拙く愚かなるが中に愚かなり設ひ命をすて身をやぶる
とも生を軽くして仏道に入り父母の菩提を資け愚身が獄縛をも
免るべし能く能く教を示し給へ。

抑法華經を信ずる其の行相如何・五種の行の中には先ず何れ
の行をか修すべき丁寧に尊教を聞かん事を願う、聖人示して
云く汝蘭室の友に交つて麻畝の性と成る誠に禿樹禿に非ず春に

遇つて栄え華さく枯草枯るに非ず夏に入つて鮮かに注ふ、若し先
非を悔いて正理に入らば湛寂の潭に遊泳して無為の宮に優遊せ
ん事疑なかるべし、抑仏法を弘通し群生を利益せんには先ず
教機時国教法流布の前後を弁ふべきものなり、所以は時に
正像末あり法に大小乗あり修行に摂折あり摂受の時・
折伏を行ずるも非なり折伏の時・摂受を行ずるも失なり、
然るに今世は摂受の時か折伏の時か先づ是を知るべし摂受の
行は此の国に法華一純に弘まりて邪法・邪師一人もなしといは
ん、此の時は山林に交つて觀法を修し五種・六種乃至・十種等
を行すべきなり、折伏の時はかくの如くならず經教のおきて
蘭菊に諸宗のおぎろ譽れを擅にし邪正・肩を並べ大小先を争
はん時は万事を闇いて謗法を責むべし是れ折伏の修行なり、此

の旨むねを知らずして、摂折しやうしゃく途に違はば得道とくどうは思もよらず惡道あくどうに墮おつべしと云う事・法華ほっけ・涅槃ねはんに定め置き天台てんだい・妙樂みょうらくの解釈げしやくにも分ぶん明みょうなり是れ仏法ぶつぽう修行しゆぎやうの大事だいじなるべし、譬たとえば文武兩道もんぶりやうだうを以もつて天下てんがを治るに武を先とすべき時もあり文を旨むねとすべき時もあり、天下てんが無為むゐにして国土こくど静かならん時は文を先とすべし東夷・南蛮なんばん・西戎さいじやう・北狄ほくてき・蜂起ほうきして野心をさしはさまんには武を先とすべきなり、文武のよき事計ばかりを心えて時をもしらず万邦ばんぱう・安堵あんどの思をなして世間せけん無為むゐならん時甲冑かつちゆうをよろひ兵ひやうじやう杖じやうをもたん事も非なり、又王敵おこ起らん時戦場にて武具をば閣さしおいて筆硯ひつけんを提ひつさげん事も亦また時に相応そうおうせず摂受しやうじゆ・折伏しゃくぶくの法門ほうもんも亦是またくのことしやうほうの如し正法しやうほうのみ弘ひろまつて邪法じゃほう・邪師じゃし無からん時は深谷しんこくにも入り閑静こにも居して読誦どくじゆ・書写しよしゃをもし觀念かんねん工夫こらをも凝すべし、是れ天下てんがの静なる時筆硯ひつけんを

をくだき又法門を以ても邪義を責めよとなり、取捨其旨を得て
一向に執する事なかれと書けり、今の世を見るに正法一純に
弘まる国か邪法の興盛する国か勘ふべし、然るを浄土宗の法然
は念仏に對して法華經を捨閉閣抛とよみ善導は法華經を雜行と
名け剩へ千中無一とて千人信ずとも一人得道の者あるべからずと
書けり、真言宗の弘法は法華經を華嚴にも劣り大日經には三重
の劣と書き戲論の法と定めたり、正覺房は法華經は大日經のは
きものとりにも及ばずと云ひ釈尊をば大日如来の牛飼にもたら
ずと判せり、禪宗は法華經を・吐たる・つばき・月をさす指・
教網など下す、小乗律等は法華經は邪教・天魔の所説と名
けたり、此等豈謗法にあらずや責めても猶あまりあり禁めても亦
たらず。

愚人ぐにんいわ云く日本にほん六十余州・人替り法異りといへども・或あるは念仏ねんぶつ者

・或あるは真言師しんごんし・或あるは禪ぜん・或あるは律・誠まことに一人として謗法ほうぼうなら

ざる人はなし、然しかりと雖いえども人の上沙汰さたしてなにかせん只ただ我が

心中しんちゅうに深く信受しんじゅして人の誤りあやまをば余所よその事にせんと思ふ、聖人しょうにん

示いして云く汝なんじ言いう所実しよじつにしかなり我そも其そのの義ぎを存ぞんぜし処ところに

経文きやうもんには・或あるは不惜身命おししんみやうとも・或あるは寧喪身命ねいそうしんみやうとも説く、何

故ゆえにかやうには説かるやと存ぞんずるに只人ただひとをはばからず経文きやうもんの

ままに法理くつうを弘通くわうつうせば謗法ほうぼうの者多おほからん世よには必ず三類さんるいの敵人てきじん有

つて命いのちにも及およぶべしと見えたり、其その仏法ぶつぽうの違目いもくを見ながら我われも

せめず国主こくしゅにも訴こへずば教しよへに背そむいて仏弟子ぶつでしにはあらずと説かれ

たり、涅槃經ねはんぎやう第三だいさんに云いく「若もし善比丘ぜんびくあつて法はふを壊やぶらん者ものを見て

置いて呵責かしやくし駈遣くけんし拳処こしよせずんば当まさに知るべし是この人は仏法ぶつぽうの中

の怨あだなり、若もし能よく駈遣くけんし呵責かしやくし拳処こしよせば是これ我が弟子でし真しんの
声聞しょうもんなり」と、此の文の意は仏の正法しょうぼうを弘ひろめん者・經教きやうぎやうの義

を悪く説かんと聞き見ながら我もせめず我が身おの及およばずば国主こくしゅに
申もうし上げても是これを対治たいじせずぶつぼうば佛法ぶつぼうの中の敵もなり、若もし經文きやうもんの
如ごとくに人をもはばからず我もせめ国主こくしゅにも申もうさん人は仏弟子ぶつでしにし
て真の僧なりと説かれて候、されば佛法ぶつぼう中怨ちゆうおんの責まぬかを免れんとて
かやうに諸人しよにんに悪にくまるれども命しやくそんを釈尊ほけきやうと法華經たてまつに奉じり慈悲ひを
一切いっさい衆生しゆじやうに与よへて謗法ほうぼうを責せむるを心えぬ人は口をすくめ眼まなこを
瞋いからす、汝実なんじに後世ごしやうを恐れば身を輕かるしめ法を重おもんぜよ是これを以もつて
章安大師しょうあんだいし云く「寧むしろ身命しんみやうを喪うしなふとも教を匿かくさざれとは身は輕く
法は重し身を死して法を弘ひろめよ」と、此の文の意は身命しんみやうをば・
ほろぼすとも正法しょうぼうをかくさざれ、其そのの故は身はかるく法はおも

し身をばころすとも法をば弘ひろめよとなり、悲いかな生者必滅ひろの
習ならいなれば設たとひ長寿ちようじゆを得たりとも終ついには無常むじようをのがるべからず、

今世は百年の内外の程を思へば夢の中の夢なり、非想の八万歳はちまん

未いまだ無常むじようを免まぬかれず・利の一千年も猶退没なおたいもつの風に破らる、況や人間いわんやにんげん

・閻浮えんぶの習ならいは露つゆよりも・あやうく芭蕉ばしやうよりもろく泡沫ほうまつよりも

あだなり、水中に宿る月のあるかなきかの如ごとく草葉くさにをく露つゆのを

くれ・さきだつ身なり、若もし此の道理どうりを得ば後世ごしやうを一大事いちだいじとせよ

歡喜かんき仏の末の世の覚徳かくとく比丘びく・正法しやうほうを弘ひろめしに無量むりやうの破戒はかい此の

行者ぎやうじやを怨あだみて責めしかば有徳うとく国王こくおう・正法しやうほうを守る故ゆえに謗法ほうほうを責め

て終ついに命終みやうじゆうして阿あ☆仏しゆくぶつの国に生れて彼の仏だいいちの第一でしの弟子とな

る、大乘だいじようを重んじて五百人の婆羅門ばらもんの謗法ほうほうを誡いましめし仙予せんよ国王こくおうは

不退ふたいの位に登る、憑たのみしいかな正法しやうほうの僧しやあくを重んじて邪惡ともの侶を

誠いましむる人かくの如ごとくの徳あり、されば今の世に摂受しやうじゆを行ぜん人は謗人ほうじんと俱ともに惡道あくどうに墮おちん事うたがい疑い無なし、南岳大師なんがくだいしの四安樂行あんらくぎやうに云いく「若もし菩薩ぼさつ有あつて惡人あくにんを將護しょうごし治罰ちばつすること能あたわず乃至ないし其その人みようじゆう命終しよあくにんして諸惡人ともと俱ともに地獄じごくに墮だせん」と、此の文の意は若もし仏法ぶつぼうを行おずる人有あつて謗法ほうぼうの惡人あくにんを治罰ちばつせずして觀念かんねん思惟しゆいを専もつらにして邪正じゃせい權實こんじつをも簡えらばず詐いつわつて慈悲じひの姿げんを現げんぜん人は諸もろもろの惡人あくにんと俱ともに惡道あくどうに墮おつべしと云いう文ぶんなり、今真言しんこん・念仏ねんぶつ・禪ぜん・律りつの謗人ほうじんをたださずいつはつて慈悲じひを現げんずる人・此の文の如ごとくなるべし。

爰こゝに愚人ぐにん意いを竊ひそかにし言ごを頭かにして云いく誠まに君きみを諫いさめて家を正ただしくする事こと先賢せんけんの教しよへ本文ほんぶんに明白めいはくなり外典げてん此この如ごとし内典ないてん是こゝに違ちがうべからず、惡あくを見ていましめず謗ほうを知しつてせめずば經文きやうもんに

背き祖師に違せん其の禁め殊に重し今より信心を至すべし、
但し此経を修行し奉らん事叶いがたし若し其の最要あらば証拠
を聞かんと思ふ、聖人示して云く今汝の道意を見るに鄭重・
慇懃なり、所謂諸仏の誠諦得道の最要は只是れ妙法蓮華經の
五字なり、檀王の宝位を退き竜女が蛇身を改めしも只此の五字
の致す所なり、夫れ以れば今の経は受持の多少をば一偈・一句と
宣べ修行の時刻をば一念隨喜と定めたり、凡そ八万法蔵の広き
も一部八卷の多きも只是の五字を説かんためなり、靈山の雲の
上・鷲峯の霞の中に釈尊要を結び地涌付属を得ることありしも
法体は何事ぞ只此の要法に在り、天台・妙樂の六千張の疏・玉
を連ぬるも道遂行満の数軸の釈・金を並ぶるも併しながら此の
義趣を出でず、誠に生死を恐れ涅槃を欣い信心を運び渴仰を至さ

ば遷滅無常は昨日の夢・菩提の覚悟は今日のうつつなるべし、只ただ南無妙法蓮華經とだにも唱へ奉らば滅せぬ罪つみやあるべき来らぬ福あや有るべき、真実しんじつなり甚深じんじんなり是これを信受しんじゅすべし。

愚人ぐにん たなごころ掌

を合せ膝を折つて云く貴命肝そに染み教訓意きょうくんを動ぜり

然しかりと雖いえども上能兼下の理ことわりなれば広きは狭きを括くくり多は少を兼

ぬ、然しかる処ところに五字は少く文言は多し首題は狭く八軸は広し如

何ぞ功德なん齊等くどくさいとうならんや、聖人しょうにん云く汝愚なんじかなり捨少取多の執・

須弥しゆみよりも高く輕狭重広の情・溟海めいかいよりも深し、今の文の初後は

必ず多きが尊く少きが卑いしきにあらざる事・前さきに示すが如ごとし、

爰こゝに又小が大を兼かね、一が多に勝ると云う事こと之を談ぜん彼の

尼拘類樹にくるじゆの実けしは芥子・三分が一のせいなりされども五百輛ごひやくりやうの車を

隠す徳あり是小が大を含めるにあらずや、又如意宝珠にょいほうじゆは一あれど

も万宝を雨ふらして欠かくるところに 処こ之れ無し是れ又少が多を兼ねたるにあらず

や、世間せけんのことわざにも一は万が母といへり此等これらの道理どうりを知らず

や、所詮しよせん実相じつそうの理の背契はいけいを論ぜよ強ちに多少を執しゅうする事なかれ、

なんじいた

おろ

汝至なんじいたつて愚かなり今一の譬たとえを仮らん、夫れ妙法蓮華經とは

いっさいしゅじょう

ぶつしろう

ぶつしろう

ほつしろう

ほつしろう

ぼだい

一切衆生の仏性なり仏性とは法性なり法性とは菩提なり、

所謂釈迦・多宝・十方の諸仏・上行・無辺行等・普賢・文殊

・舍利弗・目連等、大梵天王・釈提桓因・日月・明星・北斗・

七星・二十八宿・無量の諸星・天衆・地類・竜神・八部・人天

・大会・閻魔法王・上は非想の雲の上・下は那落の炎の底まで

所有一切衆生の備うる所の仏性を妙法蓮華經とは名くるなり、

されば一遍此の首題を唱へ奉れば一切衆生の仏性が皆よばれて

爰に集まる時・我が身の法性の法報応の三身ともに・ひかれて

あらわい 顕れ出ずる是を成仏とは申すなり、例せば籠の内にある鳥の鳴く時空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる是を見て籠の内の鳥も出でんとするが如し。

爰に愚人云く首題の功德・妙法の義趣・今聞く所詳かなり但し此の旨趣正しく経文に是をのせたりや如何、聖人云く其の理詳かならん上は文を尋ぬるに及ばざるか然れども請に随つて之れを示さん法華経第八陀羅尼品に云く「汝等但能く法華の名を受持せん者を擁護せん福量るべからず」此の文の意は仏・鬼子母神・十羅刹女の法華経の行者を守らんと誓い給うを讃むるとして汝等・法華の首題を持つ人を守るべしと誓ふ、其の功德は三世了達の仏の智慧も尚及びがたとしと説かれたり、仏智の及ばぬ事何かあるべきなれども法華の題名受持の功德ばかり

は是これを知らずと宣のべべたり、法華ほつけ一部の功德くどくは只ただ妙法みょうほう等の五ご字の
内に籠こもれり、一部八卷・文文ごことに二十八品・生起たえかはれども首
題ごじの五字は同等たえなり、譬たとえば日本にほんの二字の中に六十余州・島二つ
入らぬ国やあるべき籠こもらぬ郡やあるべき、飛鳥とよべば空をかけ
る者と知り走獸いっさいといへば地をはしる者と心うる一切いっさい名の大切なる
事けだ蓋もつし以て是かくの如ごとし、天台てんだいは名詮じしやう自性・句詮さべつ差別とも名者たいこう大綱
とも判ずる此の謂いわれなり、又名は物をめす徳あり物は名に応ずる
用あり法華ほつけ題名だいいめいの功德くどくも亦また以て此かの如ごとし。

愚人ぐにん云く聖人しょうにんの言ことの如くば実に首題きゆうせんの功莫た大なり但し知ると
知らざるとの不同ふどうあり、我は弓箭きゆうせんに携りたずさわ兵杖ひやうじやうをむねとして
未だいま仏法ぶつぽうの真味しんみを知らず若もし然しかれば得る所の功德くどく何ぞ其それ深から
んや、聖人しょうにん云く円頓えんどんの教理きやうりは初後全く不二にして初位に後位の

徳あり一行・一切行にして功德備わらざるは之れ無し若し汝が
言の如くば功德を知つて植えずんば上は等覺より下は名字に至る
まで得益更にあるべからず、今の經は唯仏与仏と談ずるが故なり、
譬喩品に云く「汝舍利弗尚此の經に於ては信を以て入ることを
得たり況や余の聲聞をや」文の心は大智・舍利弗も法華經には
信を以て入る其の智分の力にはあらず況や自余の聲聞をやとな
り、されば法華經に來つて信ぜしかば永不成仏の名を削りて華光
如來となり嬰兒に乳をふくむるに其の味をしらずといへども自然
に其の身を生長す、醫師が病者に藥を与うるに病者藥の根源をし
らずといへども服すれば任運と病愈ゆ若し藥の源をしらずと云つ
て醫師の与ふる藥を服せずば其の病愈ゆべしや藥を知るも知らざ
るも服すれば病の愈ゆる事以て是れ同じ、既に仏を良医と号し法

を良薬りょうやくに譬たとへ衆生しゅじょうを病人びやうじんに譬たとえふされば如来にょらい一代いちだいの教法きょうほうを

擣とう☆和合しわごうして妙法みょうほう一粒りゅうやくの良薬りょうやくに丸まぜり豈あに知るも知らざるも服わきませ

ん者もの・煩惱ぼんのうの病い愈いえざるべしや病者びやうしやは薬いをもしらず病わきまをも弁まへず

といへども服いすれば必ず愈いゆ、行者ぎやうじやも亦然またしかなり法理はふりをもしらず

煩惱ぼんのうをもしらずといへども只ただ信けんずれば見思けんじ・塵沙じんじや・無明むみょうの三惑さんかくの

病どうじを同時じつぼうに断じやつこうじて実報うてな・寂光じやくこうの台だんぎにのぼり本有三身ほんぬさんじんの膚はだえを磨のうけ

かん事うたがい疑うたがいいあるべからず、されば伝でんぎ教大師きやうだいし云いく「能化のうけ所化しやけ

俱ともに歴劫りやつこう無なくく妙法みょうほう經きやうの力そくしんじやうぶつ即身成仏はけききやうす」と法華はけききやう經きやうの法理はふりを教ともへ

ん師匠ししやうも又習でしはん弟子でしも久ほけきしからずして法華はけききやう經きやうの力はけききやうをもつて俱ともに

仏もんくになるべしと云てんだいう文だいしなり、天台大師ほけききやうも法華ほけききやう經きやうに付げんいて玄義ぎ・

文句もんく・止觀しかんの三十卷みきの釈つを造たまり給たまう、妙樂大師みょうらくだいしは又釈しやく籤せん・疏記じよき

・輔行ふぎやうの三十卷かの末文ほんしやくを重てんねて判釈はんしやくす、天台六十卷これとは是これなり、

玄義げんぎには名体宗用教ごじゅうげんの五重玄ごんりゅうを建立たてまつして妙法蓮華經みょうほうれんげきようの五字ごじの
功能くろうを判釈はんしやくす、五重玄ごじゅうげんを釈しやくする中の宗の釈いわに云く「綱維こういを提ひぐる
目もくとして動かなざるなくこと無く衣ひとすみの一角ひを牽ひくに縷るとして来らざる
無なきが如ごとし」と、意は此みの妙法蓮華經みょうほうれんげきようを信仰しんこうし奉たてまつる一行くどくに功德
として来らざる事なく善根ぜんこんとして動かなざる事なし、譬たとえば網の目
無量むりようなれども一つの大綱たいこうを引くに動かなざる目もなく衣の糸筋あまた巨
多ひとすみなれども一角ひとすみを取るに糸筋として来らざることなきが如ごとしと云
う義ぎなり、さて文句もんくには如是によぜがもん我聞ざらいにこより作礼而去さらいにこまで文・句句に
因縁いんねん・約教やくきよう・本・迹・觀心かんじんの四種の釈ふしぎを設けたり、次に止觀しかんに
は妙解みょうげの上に立てる所の觀不思議境ふしぎの一念三千いちねんさんぜんこ是れ本覺ほんがくの立行・
本具の理心こころなり、今爰こゝに委くわしくせず、悦よろこばしいかな生うを五濁惡世ごじよくあくせ
に受くといへども一乘いちじようの真文しんもんを見聞けんもんする事を得たり、熙連恒沙きれんこうしゃ

の善根を致せる者・此の經にあい奉つて信を取ると見えたり、
汝今一念隨喜の信を致す函蓋相応感応道交疑い無し。

ぐにんこうべ

愚人頭を低れ手を挙げて云く我れ今よりは一実の經王を受持

さんがい

し三界の独尊を本師として今身自り仏身に至るまで此の信心敢て

たいてん

退転無けん、設ひ五逆の雲厚くとも乞ふ提婆達多が成仏を續ぎ

じゅうあく

十惡の波あらくとも願くは王子覆講の結縁に同じからん、聖人

いわ

云く人の心は水の器にしたがふが如く物の性は月の波に動くに似

ゆえ

たり、故に汝当座は信ずといふとも後日は必ず翻へさん

まき

魔来り鬼来るとも騒乱する事なかれ、夫れ天魔は仏法をにくむ

げどう

外道は内道をきらふ、されば猪の金山を摺り衆流の海に入り薪

さか

の火を盛んになし風の求羅をますが如くせば豈好き事にあらず

や。

◆六七

如説修行抄

501p

夫れ以んみれば末法流布の時・生を此の土に受け此の経を信ぜ
 ん人は如来の在世より猶多怨嫉の難甚しかるべしと見えて候な
 り、其の故は在世は能化の主は仏なり弟子又大菩薩阿羅漢なり、
 人天・四衆・八部・人非人等なりといへども調機調養して
 法華経を聞かしめ給ふ猶怨嫉多し、何に況んや末法今の時は教機
 時刻当来すといへども其の師を尋ぬれば凡師なり、弟子又鬭諍
 堅固・白法隱没・三毒強盛の悪人等なり、故に善師をば遠離し
 悪師には親近す、其の上真実の法華経の如説修行の行者の師弟
 檀那とならんには三類の敵人決定せり、されば此の経を聴聞し
 始めん日より思い定むべし況滅度後の大難の三類甚しかるべし
 と、然るに我が弟子等の中にも兼て聴聞せしかども大小の難来

る時は今始めて驚き肝をけして信心を破りぬ、兼て申さざりけるか経文を先として猶多怨嫉・況滅度後・況滅度後と朝夕教へし事は是なり予が・或は所を・をわれ・或は疵を蒙り・・或は兩度の御勘氣を蒙りて遠國に流罪せらるるを見聞くとも今始めて驚くべきにあらざる物をや。

問うて云く如説修行の行者は現世安穩なるべし何が故ぞ三類の強敵盛んならんや、答えて云く釈尊は法華經の御為に今度の九横の大難に値ひ給ふ、過去の不輕菩薩は法華經の故に杖木瓦石を蒙り竺の道生は蘇山に流され法道三蔵は面に火印をあてられ師子尊者は頭をはねられ天台大師は南三・北七にあだまれ伝教大師は六宗にくまれ給へり、此等の仏菩薩・大聖等は法華經の行者として而も大難にあひ給へり、此れ等の人人を

によせつしゆぎよう

によせつしゆぎよう

たず

如説修行の人と云わずんばいづくにか如説修行の人を尋ねん、

然るに今の世は鬪諍堅固・白法隱没なる上・悪国・悪王・悪臣

・悪民のみ有りて正法を背きて邪法・邪師を崇重すれば国土に

悪鬼乱れ入りて三災・七難盛に起れり、かかる時刻に日蓮仏勅

を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ、法王の宣旨背きが

たければ経文に任せて権実二教のいくさを起し忍辱の鎧を着て

妙教の剣を提げ一部八巻の肝心・妙法五字の旗を指上て未顕

真実の弓をはり正直捨権の箭をはげて大白牛車に打乗つて権門

をかつぱと破り・かしこへおしかけここへおしよせ念仏・真言・

禅・律等の八宗・十宗の敵人をせむるに・或はにげ・或はひき

しりぞき・或は生取られし者は我が弟子となる、或はせめ返し

・せめをとしすれどもかたきは多勢なり法王の一人は無勢なり今

に至るまで軍やむ事なし、法華折伏・破権門理の金言なれば
終に権教権門の輩を一人もなくせめをとして法王の家人となし
天下万民諸乗一仏乗と成つて妙法独り繁昌せん時、万民一同
に南無妙法蓮華經と唱え奉らば吹く風枝をならさず雨壤を碎
かず、代は義農の世となりて今生には不祥の災難を払ひ長生の
術を得、人法共に不老不死の理・顕れん時を各各御覽ぜよ現世
安穩の証文疑い有る可からざる者なり。

問うて云く如説修行の行者と申さんは何様に信ずるを申し候
べきや、答えて云く当世・日本国中の諸人・一同に如説修行の
人と申し候は諸乗一仏乗と開会しぬれば何れの法も皆法華經に
して勝劣・浅深ある事なし、念仏を申すも真言を持つも禪を
修行するも総じて一切の諸經並びに仏・菩薩の御名を持ちて唱

みなほけきよう

によせつしゆぎよう

るも皆法華經なりと信ずるが如說修行の人とは云われ候なり等

云云、予が云く然らず所詮仏法を修行せんには人の言を用う

べか

ただあお

可らず只仰いで仏の金言をまほるべきなり我等が本師・釈迦如来

しよじようどう

ほつけ

おほしめ

われら

ほんし

しゃかによらい

は初成道の始より法華を説かんと思食しかども衆生の機根未熟

なりしかば先ず權教たる方便を四十余年が間説きて後に眞実た

こんきよう

ほうべん

よんじゅうよねん

と

しんじつ

る法華經を説かせ給いしなり、此の經の序分・無量義經にして

ほけきよう

たまひ

じよぶん

むりようぎきよう

ほうべん

いかわゆる

權實のはうじを指て方便眞實を分け給へり、所謂以方便力・

こんじつ

さし

ほうべんしんじつ

たま

いかわゆる

ほうべん

いかわゆる

四十余年・未顕眞實是なり、大莊嚴等の八万の居士・施權・開權

よんじゅうよねん

みけんしんじつこれ

そうこん

はちまん

かいこん

かいこん

・廢權等のいはれを心得分け給いて領解して言く法華經已前の

りやつこうしゆぎよう

しよきよう

しゆふとくじよう

むじようぼだい

もう

いかわ

ほけきよういぜん

歴劫修行等の諸經は終不得成・無上菩提と申しきり給ひぬ、

しか

しよきよう

しゆふとくじよう

むじようぼだい

もう

いかわ

ほけきよういぜん

然して後・正宗の法華に至つて世尊・法久後・要當說眞實と

しか

しよきよう

ほつけ

いた

せそん

ほうくこ

ようとうせつしんじつ

い

説き給いしを始めとして無二亦無三除仏方便説正直捨方便乃至

と

たまひ

しよきよう

ほつけ

いた

せそん

ほうくこ

ようとうせつしんじつ

い

説き給いしを始めとして無二亦無三除仏方便説正直捨方便乃至

と

不受余經一偈と禁め給へり、是より已後は唯一仏乗の妙法の

いっさいしゅじょう

み一切衆生を仏になす大法にて法華經より外の諸經は一分の

とくやく

得益も・あるまじきに末法の今の學者何れも如来の説教なれば

みなとくどう

皆得道あるべしと思いて・或は眞言・或は念仏・或は禪宗・

さんろん

三論・法相・俱舍・成実・律等の諸宗諸經を取に信ずるな

ほつそう　ぐしや　じょうじつ　しよしゅうしよきよう　しゅじゅ

り、是くの如き人をば若人不信毀謗・此經即断・一切世間・仏種

かくのこと　な　よくにんふしん　きぼう　しきようそくだん　いっさいせけん　ぶつしゅ

・乃至・其人命終・入阿鼻獄と定め給へり、此等のをきての

ないし　ごにんみょうじゅう　にゅうあびごく　たま　これら

明鏡を本として一分もたがえず唯一乘法と信ずるを

めいきよう　いぶん　ゆい　いちじょう

如説修行の人とは仏は定めさせ給へり。

なん　い　ほうべんこんきよう　しよきようしよぶつ　ほけきよう

難じて云く左様に方便權教たる諸經諸仏を信ずるを法華經と

た　だ　い　い　つ　き　よう　き　よう　もん　ご　ご　し　しゅ　しゅ　ぎ　よう

云はばこそ、只一經に限りて經文の如く五種の修行をこらし

あ　ん　ら　く　ぎ　よう　ほん　ご　ご　し　しゅ　ぎ　よう　に　よ　せ　つ　しゅ　ぎ　よう

安樂行品の如く修行せんは如説修行の者とは云われ候まじき

か如何、いかに答えて云く凡おおよそ仏法ぶつぽうを修行しゅぎょうせん者は摂折しやうしゃく二門を知る
可べきなり一切いっさいの経論きやうろん此の二を出いでざるなり、されば國中しよの諸
学者等がくしや・仏法ぶつぽうをあらあら学すと云へども時刻相応じこくそうおうの道をしらず四
節・四季・取しゅじゆ取に替り、夏は熱く冬はつめたく春は花さき秋は
菓このみなる春種子しゅしを下くだして秋菓このみを取るべし秋種子しゅしを下くだして春菓このみを
取らんに豈あに取らる可べけんや、極寒の時は厚き衣は用なり極熱の夏
はなにかせん、涼風は夏の用なり冬はなにかせん、仏法ぶつぽうも亦復またまた
是かくのことくの如し小乗しやうじやうの流布るふして得益とくやくあるべき時もあり、権大乘こんだいじやうの
流布るふして得益とくやくあるべき時もあり、実教じつきやうの流布るふして仏果ぶつかを得うべき
時もあり、然しかるに正像しやうざう二千年は小乗しやうじやう・権大乘こんだいじやうの流布るふの時なり、
末法まっぽうの始めの五百年には純円一実じゆんえんいちじつの法華經ほけきやうのみ広宣流布こうせんるふの時な
り、此の時は闍諍堅固とうじやうけんこ・白法隱没びやくほうおんもつの時と定めて権実雜乱こんじつそうらんの砌みぎり

なり、敵有る時は刀杖弓箭を持つ可し敵無き時は弓箭杖

何にかせん、今の時は権教即実教の敵と成るなり、一乘流布

の時は権教有つて敵と成りてまぎらはしくば実教より之を責む

可し、是を摂折二門の中には法華經の折伏とは申すなり、

天台云く「法華折伏・破権門理」とまことに故あるかな、然る

に摂受たる四安樂の修行を今の時行ずるならば冬種子を下して

春菓を求める者にあらずや、鶏の曉に鳴くは用なり宵に鳴くは

物怪なり、権実雜乱の時・法華經の御敵を責めずして山林に閉じ

籠り摂受を修行せんは豈法華經修行の時を失う物怪にあらず

や、されば末法今の時・法華經の折伏の修行をば誰か經文の

如く行じ給へしぞ、誰人にても坐せ諸經は無得道墮地獄の根源

法華經独り成仏の法なりと音も惜まずよばはり給いて諸宗の人

法・共に折伏しやくぶくして御覽ごらんぜよ三類さんるいの強敵ごうてき来らん事うたがい疑うたがいい無し。

我等われらが本師ほんし・釈迦しやくかに如来によらいは在世ざいせ八年の間折伏しやくぶくし給たまひ天台大師てんだいだいしは

三十余年さんじゅうねん伝でん教大師きょうだいしは二十余年にじゅうねん今日蓮けふにちれんは二十余年にじゅうねんの間・権理ごんりを

破はす其その間の太難だいなん数を知らず、仏ぶつの九横くおうの難なんに及およぶか及およばざるは

知らず、恐おそらくは天台てんだい・伝でん教きょうも法華經ほけきやうの故ゆゑに日蓮にちれんが如ごとく太難だいなんに

値あい給たまいし事なし、彼は只惡口ただあつく怨嫉おんしつ計ばかりなり、是は兩度ごかんの御勘氣き

遠国えんこくに流罪るざいせられ竜口たつのくちの頸のの座頭ざとうの疵きず等そ其の外惡口あつくせられ弟子でし

等を流罪るざいせられ籠かこに入れられ檀那だんなの所領しりやうを取られ御内ごないを出ださ

れし、是等これらの大難だいなんには竜樹りゆうじゆ・天台てんだい・伝教でんきやうも争いかでか及および給たまうべき、

されば如說修行によせつしゆぎやうの法華經ほけきやうの行者ぎやうじやには三類さんるいの強敵ごうてき打ち定あんで有る

可べしと知り給たまへ、されば釈尊しやくそん御入滅にゆうめつの後二千余年ごうてきが間に

如說修行によせつしゆぎやうの行者ぎやうじやは釈尊しやくそん・天台てんだい・伝教でんきやうの三人はさてをき候もちぬ、

末法まっぽうに入つては日蓮にちれん並びに弟子でし・檀那だんな等これ是なり、我等われらを

によせつしゆぎよう

如説修行によせつしゆぎようの者といはずば釈尊しやくそん・天台てんだい・伝教でんぎよう等の三人も

によせつしゆぎよう

如説修行によせつしゆぎようの人なるべからず、提婆だいば・瞿伽利くぎやり・善星ぜんしやう・弘法こうぼう・慈覺じかく

ちしやう

・智証ぜんどう・善導ほうねん・法然りやうかん・良觀房等すなわは即ち法華經ほけきやうの行者ぎやうじゃと云はれ、

しやくそん

釈尊てんだい・天台でんぎよう・伝教にちれん・日蓮でし並びに弟子だんな・檀那ねんぶつは念仏しんごん・真言しんごん・禪しやくそん・

ぎやうじゃ

律等の行者ほけきやうなるべし、法華經ほうべんごんきやうは方便權教ねんぶつと云はれ念仏等しやくそんの諸經しやくそん

かえ

は還ほけきやうつて法華經ほけきやうとなるべきか、東は西となり西は東となるとも

だいぢ

大地そうもくは持つ所の草木にちがつ共に飛び上りて天となり天の日月せいしゆく・星宿せいしゆくは

共に落ち下りて地となるためしはありとも・いかでか此ことわりの理ことわりあ

るべき。

あわれ

哀あわれなるかな今にほんこく・日本にほんこくの万民ばんみん日蓮にちれん並びに弟子でし・檀那だんな等さんるいが三類さんるいの

いづてき

強敵いづてきに責められ大苦あに値よろこうを見て悦よろこんで笑ふとも昨日きのうは人の上うへ・

きょう 今日にちれんならは身の上なれば日蓮並びに弟子・檀那共に霜露の命の日影を

待つ計りぞかし、只今・仏果に叶いて寂光の本土に居住して

自受法楽せん時、汝等が阿鼻大城の底に沈みて大苦に値わん時

・我等何計無慚と思はんずらん、汝等何計うらやましく思は

んずらん、一期を過ぐる事程も無ければ・いかに強敵重なるとも

ゆめゆめ退する心なかれ恐るる心なかれ、縦ひ頸をば鋸にて引

き切り・どうをばひしほこを以てつつき足にはほだしを打って・

きりを以てもむとも、命のかよはんほどは南無妙法蓮華經・

南無妙法蓮華經と唱えて唱へ死に死するならば釈迦・多宝・十方

の諸仏靈山會上にして御契約なれば須臾の程に飛び来りて手を

とり肩に引懸けて靈山へ・はしり給はば二聖・二天十羅刹女は

受持の者を擁護し諸天善神は天蓋を指し旛を上げて我等を守護し

たしかに寂光の宝刹へ送り給うべきなり、あらうれしや・あらうれしや。

ぶんえい
文永十年癸酉五月日
にちれん
日蓮在御判

おんちゅう
人々御中へ
此の書御身を離さず常に御覧有る可く候

◆六八
けんぶつ
顕仏未来記
しゃもん
沙門
にちれん
日蓮
これを勘う
505p

ほけきよう
法華經の第七に云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提

こうせん
に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云、予一たびは

なげい
歎いて云く仏滅後既に二千二百二十余年を隔つ何なる罪業に依つ

ざいせ
て仏の在世に生れず正法の四依像法の中の天台・伝教等にも値

また
わざるやと、亦一たびは喜んで云く何なる幸あつて後・五百歳に

しんもん
生れて此の真文を拝見することぞや、在世も無益なり前四味の人

いま
は未だ法華經を聞かず正像も又由し無し南三・北七並びに華嚴

・真言等の学者は法華經を信ぜず、天台大師云く「後の五百歳遠

しんこん がくしや ほけきよう みようどう うる

く妙道に沾おわん」等云云広宣流布の時を指すか、伝教大師

いわ しょうそうややす おわ まっぼうはなは ぶん だんぎようだいし

云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り」等云云末法の始

がんぎよう じだい もつ かほう りゆうじゅ てんじん

を願樂するの言なり、時代を以て果報を論ずれば竜樹・天親に

ちようか てんだい でんぎよう まさ

超過し天台・伝教にも勝るるなり。

問うて云く後・五百歳は汝一人に限らず何ぞ殊に之を喜悅せ

い わ なんじ こと これ きえつ

しむるや、答えて云く法華經の第四に云く「如来の現在にすら猶

おんしつ いわんやめつと てんだいだいし いわ げんざい なお

怨嫉多し況や滅度の後をや」文、天台大師云く「何に況や未来を

が た みようらくだいし いわ りざい なんげ

や理化し難きに在り」文、妙樂大師云く「理在難化とは此の理

しこう しゅじよう が た

を明すことは意・衆生の化し難きを知らしむるに在り」文、

ちど ほっし いわ りようやく

智度法師云く「俗に良薬口に苦しと言うが如く此の經は五乗の

いしゅう げんそう ゆえ ほん しり

異執を廢して一極の玄宗を立つ故に凡を斥ぞけ聖を呵し大を排し

小を破る乃至此くの如きの徒悉く留難を為す」等云云、伝教
大師云く「代を語れば則ち像の終り末の始・地を尋れば唐の東
・羯の西・人を原れば則ち五濁の生・鬭諍の時なり、經に云く
猶多怨嫉・況滅度後と此の言良に以有るなり」等云云、此の
傳教大師の筆跡は其の時に當るに似たれども意は當時を指すな
り正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有りの釈は心有るかな、經
に云く「惡魔・魔民・諸天竜・夜叉・鳩槃荼等其の便りを得ん」
云云、言う所の等とは此の經に又云わく「若は夜叉・若は羅刹・
若は餓鬼・若は富單那・若は吉遮・若は毘陀羅・若は☆駄・若は
烏摩勒伽・若は阿跋摩羅・若は夜叉吉遮・若は人吉遮」等云云、
此の文の如きは先生に四味三教・乃至外道人天等の法を持得し
て今生に惡魔・諸天・諸人等の身を受けたる者が円実の行者を

けんもん 見聞して留難を至すべき由を説くなり。

うたがい 疑つて云く正像の二時を末法に相對するに時と機と共に

しょうぞう 正像は殊に勝るなり何ぞ其の時機を捨てて偏に當時を指すや、

いわ 答えて云く仏意測り難し予未だ之を得ず試みに一義を案じ

しょうじょうきよう 小乗經を以て之を勘うるに正法千年は教行証の三つ

つづ 具さに之を備う像法千年には教行のみ有つて証無し末法には教

ぎょうしょう のみ有つて行証無し等云云、法華經を以て之を探るに正法千

ざいせ 年に三事を具するは在世に於て法華經に結縁する者か、其の後

しょうほう 正法に生れて小乗の教行を以て縁と為し小乗の証を得る

そうほう なり、像法に於ては在世の結縁微薄の故に小乗に於て証するこ

なく くと無く此の人権大乘を以て縁と為して十方の浄土に生ず、末法

おい に於ては大小の益共に之無し、小乗には教のみ有つて行証

だいじょう

きようぎょう

みょうけん

これな

そ

しょうぞう

無し大乘には教行のみ有つて冥顕の証之無し、其の上正像

しよりゆう

ごんしょう

ぜんぜんまっぽう

しゅうしんいよいよこうじょう

の時の所立の権小の二宗漸漸末法に入て執心 弥 強盛にして

もつ

もつ

こくど

だいたいほうぼう

じゅうまん

小を以て大を打ち権を以て実を破り国土に大体謗法の者充滿す

ぶつきょう

よ

あくどう

だ

だいちみじん

るなり、仏教に依つて惡道に墮する者は大地微塵よりも多く

しょうほう

ぶつどう

そうじょう

正法を行じて仏道を得る者は爪上の土よりも少きなり、此の時

しよてんぜんじんそ

しゃり

じやてん

じやき

おうしん

に當つて諸天善神其の国を捨離し但邪天・邪鬼等有つて王臣・

びく

びくに

しんしん

にゅうじゅう

ほけきょう

ぎやうじや

めりきに

比丘・比丘尼等の身心に入住し法華經の行者を罵詈毀辱せし

むべき時なり、

しかり

いえど

めつこ

おい

しみさんきょう

じやしゅう

むべき時なり、爾りと雖も仏の滅後に於て四味三教等の邪執を

じつだいじょう

ほけきょう

しよてんぜんじんなら

じゆせんがい

ぼさつ

捨て実大乘の法華經に帰せば諸天善神並びに地涌千界等の菩薩

ほつけ

ぎやうじや

しゅこ

しゅこ

ほんもん

ほんぞん

・法華の行者を守護せん此の人は守護の力を得て本門の本尊・

みょうほうれんげきょう

ごじ

もつ

えんぶ

こうせんるふ

妙法蓮華經の五字を以て閻浮堤に広宣流布せしめんか、例せば

いおんおうぶつ

そうほう

ふぎやうぼさつ

がじんきやう

もつ

威音王仏の像法の時・不輕菩薩・我深敬等の二十四字を以て彼の

土に広宣流布し一国の杖木等の大難を招きしが如し、彼の二十四字と此の五字と其の語殊なりと雖も其の意是れ同じ彼の像法の末と是の末法の初と全く同じ彼の不輕菩薩は初隨喜の人・日蓮は名字の凡夫なり。

疑つて云く何を以て之を知る汝を末法の初の法華經の行者

なりと為すと云うことを、答えて云く法華經に云く「況んや滅度

の後をや」又云く「諸の無智の人有つて惡口罵詈等し及び刀杖

を加うる者あらん」又云く「数数擯出せられん」又云く「一切

世間怨多くして信じ難し」又云く「杖木瓦石をもつて之を打擲

す」又云く「惡魔・魔民・諸天竜・夜叉・鳩槃荼等其の便りを

得ん」等云云、此の明鏡に付いて仏語を信ぜしめんが為に、

日本国中の王臣四衆の面目に引き向えたるに・予よりの外には一

人も之無し、時を論ずれば末法の初め一定なり、然る間若し日蓮これな まつぼうのはじめ無くんば仏語は虚妄と成らん、難じて云く汝は大慢の法師にしなく ぶつこ こもう なん いわ なんじ だいまん ほつして大天に過ぎ四禅比丘にも超えたり如何、答えて云く汝日蓮をす びく こ いかん いわ なんじにちれんべつじよじゅうざい蔑如するの重罪・又提婆達多に過ぎ無垢論師にも超えたり、我が言は大慢に似たれども仏記を扶け如来の実語を顕さんが為なり、然りと雖も日本国中に日蓮を除いては誰人を取り出してしか いえど にほんこくじゅう にちれん だれびとほけきようぎようじや な なんじにちれん そし ぶつき こもう法華經の行者と為さん汝日蓮を謗らんとして仏記を虚妄にす豈あくにん あら大悪人に非ずや。

疑つて云く如来の未来記汝に相当れり、但し五天竺並びにうたがい いわ によらい みらい き なんじ あいあた ただ てんじくなら漢土等にも法華經の行者之有るか如何、答えて云く四天下の中かんど ほけきよう ぎようじや あ いかん いわ してんげに全く二の日無し四海の内豈両主有らんや、疑つて云く何をもつ なんじこれ いわ あに うたがい いわ以て汝之を知る、答えて云く月は西より出でて東を照し日は東

より出でて西を照す仏法も又以て是くの如し正像には西より東
に向い末法には東より西に往く、妙楽大師の云く「豈中国に法
を失いて之を四維に求むるに非ずや」等云云、天竺に仏法無き
証文なり漢土に於て高宗皇帝の時北狄東京を領して今に一百五
十余年・仏法王法共に尽き了んぬ、漢土の大蔵の中に小乗經
は一向之れ無く大乘經は多分之を失す、日本より寂照等少少
之を渡す然りと雖も伝持の人無れば猶木石の衣鉢を帶持せるが
如し、故に遵式の云く「始西より伝う猶月の生ずるが如し今復
東より返る猶日の昇るが如し」等云云、此等の釈の如くんば天竺
漢土に於て仏法を失せること勿論なり、問うて云く月氏・漢土に
於て仏法無きことは之を知れり、東西北の三洲に仏法無き事は何
を以て之を知る、答えて云く法華經の第八に云く「如来の滅後に

於て閻浮提の内に広く流布せしめて断絶せざらしめん」等云云、
内の字は三洲を嫌う文なり、問うて曰く仏記既に此くの如し汝
が未来記如何、答えて曰く仏記に順じて之を勘うるに既に後・五
百歳の始に相当れり仏法必ず東土の日本より出づべきなり、其の
前相必ず正像に超過せる天変地天之れ有るか、所謂仏生の時・
転法輪の時・入涅槃の時・吉瑞凶瑞共に前後に絶えたる大瑞な
り、仏は此れ聖人の本なり 経経の文を見るに仏の御誕生の時
は五色の光氣四方に遍くして夜も昼の如し仏御入滅の時には十
二の白虹・南北に亘り大日輪光り無くして閻夜の如くなりし、
其の後正像二千年の間・内外の聖人・生滅有れども此の大瑞
には如かず、而るに去ぬる正嘉年中
より今年に至るまで・・或は大地震・・或は大天変・宛かも仏陀

の生滅しょうめつの時の如ごとし、当まさに知るべし仏ぶつの如ごとき聖人生しょうにんれたまわんか、
おおそら 大虚わつに亘わたつて大慧ほうきほし 星出しんれつづ誰おうしんの王臣もつを以て之に對せん、当瑞大地とうずいだいち
を傾動けいどうして三たび振裂しんれつす何れいずれの聖賢せいけんを以て之に課もつせん、当まさに知る
べし通途世間つうずせけんの吉凶きつきようの大瑞だいずいには非あらざるべし惟これ偏ひろえに此だいほうの大法
興廢こうはいの大瑞だいずいなり、天台云く雨てんだいいわの猛あめきを見て竜たけの大なるを知り華の
盛なるを見て池の深きを知る」等云云、妙樂みょうらくの云く「智人ちじんは起
を知り蛇じゃは自ら蛇やを識しる」等云云、日蓮此にちれんの道理どうりを存すして既すに
二十一年なり、日来ひころの災・月来なんの難・此の両三年の間の事既すに
死罪しざいに及およばんとす今年・今月万が一も脱がた難がたき身命しんみようなり、世
の人疑うたがいい有いらば委細いさいの事は弟子でしに之これを問え、幸なるかな一生の
内に無始むしの謗法ほうほうを消滅しょうめつせんことを悦よろこばしいかな未いまだ見聞けんもんせざる
教きょう主しゅ釈尊しやくそんに侍つかえ奉たてまつらんことよ、願こくしゆくは我を損こずる国主等こくしゅをば

最初に之を導かん、我を扶くる弟子等をば釈尊に之を申さん、
我を生める父母等には未だ死せざる已前に此の大善を進めん、
但し今・夢の如く宝塔品の心を得たり、此の経に云く「若し須弥
を接つて他方の無数の仏土に擲げ置かんも亦未だ為難しとせず
乃至若し仏の滅後に惡世の中に於て能く此の経を説かん是れ則ち
為難し」等云云、伝教大師云く「浅きは易く深きは難しとは釈迦
の所判なり浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり、天台大師は
釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し叡山の一家は天台に
相承し法華宗を助けて日本に弘通す」等云云、安州の日蓮は恐
くは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す三に一を加えて
さんごくしし ならず 南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經。
三国四師と号く、

文永十年太歲癸酉後・五月十一日 桑門日蓮之を記す

◆六九 当体義抄 日蓮之を勘う 510P

問う妙法蓮華經とは其の体何物ぞや、答う十界の依正即ち

妙法蓮華經の当体なり、問う若爾れば我等が如き一切衆生も

妙法の全体なりと云わる可きか、答う勿論なり經に云く「所謂

諸法乃至本末究竟等」云云、妙樂大師釈して云く「実相は必ず

諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土」と

云云、天台云く「十如十界三千の諸法は今經の正体なるのみ」

云云、南岳大師云く「云何なるを名けて妙法蓮華經と為すや答

う妙とは衆生妙なるが故に法とは即ち是れ衆生法なるが故に」

云云、又天台釈して云く「衆生法妙」と云云。

問う一切衆生の当体即妙法の全体ならば地獄乃至九界の業因

・業果も皆是れ妙法の体なるや、答う法性の妙理に染淨の二

法有り染法は熏くんじて迷まよと成り浄法は熏くんじて悟と成る悟は即すなわち
ぶぶっっかい
仏界ぶつがいなり迷まよは即すなわち衆生しゅじやうなり、此この迷悟めいごの二法二なりと雖いえども然しかも
ほほっっししやうしんによ
法性真如ほつしやうしんによの一理ひとなり、譬たとえば水精すいしやうの玉たまの日輪にちりんに向むかえば火かを取り
月輪げつりんに向むかえば水みづを取る玉たまの体たい一ひとなれども縁えんに随そて其その功こう同どうじから
ざるが如ごとし、真如しんによの妙理みやうりも亦また復また是かくの如ごとし一妙真如しんによの理りなりと
いえどいえどああくあええん
雖すなわも惡縁あくえんに遇まよえば迷まよと成り善縁ぜんえんに遇まよえば悟ごと成る悟ごは即すなわち法性ほつしやう
なり迷まよは即すなわち無明むみやうなり、譬たとえば人夢ひとゆめに種種しゅじゆの善惡ぜんあくの業ごふを見夢覺さめ
て後こに之これを思おもえば我われが一いっ心しんに見る所ところの夢ゆめなるが如ごとし、一心いっしんは
ほほっっししやうしんによ
法性真如ほつしやうしんによの一理ひとなり夢ゆめの善惡ぜんあくは迷悟めいごの無明むみやう法性ほつしやうなり、是かくの如ごと
く意得こころうれば惡迷あくめいの無明むみやうを捨ぜて善悟ぜんごの法性ほつしやうを本もとと為なす可べきなり、
大円覺えんかく・修多羅しゆたら・了義經りやうぎきやうに云いく「一切諸いっさいの衆生しゅじやうの無始むしの幻無明むみやう
みなもろもろによよらいえんかく
は皆諸みなの如來にょらいの円覺えんかくの心こころ従したがひ建た立たす」云云、天台大師てんだいだいしの止觀しかんに

いわく「無明癡惑本是れ法性なり癡迷を以ての故に法性變じて
むみょうな 無明と作る」云云、妙樂大師の釈に云く「理性体無し全く無明
よ 無明と作る」云云、妙樂大師の釈に云く「理性体無し全く無明
ほつしよう 依る無明体無し全く法性に依る」云云、無明は所断の迷・
法性は所証の理なり何ぞ体一なりと云うやと云える不審をば
これら 此等の文義を以て意得可きなり、大論九十五の夢の譬・天台一
家の玉の譬・誠に面白く思うなり、正く無明法性其の体一なり
と云う証拠は法華經に云く「是の法は法位に住して世間の相
じようじゅう 常住なり」云云、大論に云く「明と無明と異無く別無し是くの如
く知るをば是を中道と名く」云云、但真如の妙理に染淨の二法
有りと云う事証文之れ多しと雖も華嚴經に云く「心仏及衆生
さんむさべつ 是三無差別」の文と法華經の諸法実相の文とは過ぐ可からざる
なり南岳大師の云く「心体に染淨の二法を具足して而も異相

無く一味平等なり」云云、又明鏡の譬・真実に一一なり委く

だじようしかん

は大乗止觀の釈の如し又能き釈には籤の六に云く「三千理に在

むみよう

れば同じく無明と名け三千果成すれば咸く常樂と稱す三千改む

むみようそく

ること無ければ無明即明・三千並に常なれば俱体俱用なり」文、

ふんみよう

此の釈分明なり。

いっさいしゆじよう

問う一切衆生・皆悉く妙法蓮華經の当体ならば我等が如き

みなことごとみようほうれんげきよう

とうたい

愚癡闇鈍の凡夫も即ち妙法の当体なりや、答う当世の諸人之れ

いえど

多しと雖も二人を出でず謂ゆる權教の人実教の人なり而も

ごんきようほうべん

權教方便の念仏等を信ずる人は妙法蓮華の当体と云わる可から

じつきよう

ず実教の法華經を信ずる人は即ち当体の蓮華・真如の妙体・

ねはんぎよう

是なり涅槃經に云く「一切衆生大乘を信ずる故に大乘の衆生

なず

と名く」文、南岳大師の四安樂行に云く「大強精進經に云く

なんがくだいし

あんらくぎよう

いわ

だいきようしょうじんきよう

いわ

衆生しゅじょうと如来にょらいと同共ほうしん一法身しやうじやうにして清淨しやうじやう妙無比みやうほげきやうなるを妙法華經みやうほげきやうと
稱しやうす」文、又云いわく「法華經ほげきやうを修行しゆぎやうするは此いっしんの一心いっしん一学しゆがくに衆果しゆがく
普あまねく備そなわる一時いちじに具足ぐそくして次第入しだいに非あらず亦蓮華またれんげの一華しゆがくに衆果しゆがくを
一時いちじに具足ぐそくするが如ごとし是これを一乗いちじやうの衆生しゆじやうの義なすと名なく」文、又云いわく
「二乗にじやう・声聞しやうもん及び鈍根どんこんの菩薩ぼさつは方便道ほうべんの中の次第修しだいしゆう学がくなり利根りこん
の菩薩ぼさつは正直しやうじきに方便ほうべんを捨て次第行しだいしゆうを修しゆうせず若もし法華三昧ほつげさんまいを証しやうす
れば衆果しゆがく悉しよくく具足ぐそく是これを一乗いちじやうの衆生しゆじやうと名なく」文、南岳なんがくの釈しやくの意い
は次第行しだいの三字しやうをば当世とうせの学者がくしやは別教べつきやうなりと料簡りやうけんす、然しかるに此
の釈しやくの意いは法華ほつげの因果具足いんがぐそくの道みちに對して方便道ほうべんを次第行しだいと云いう
故ゆゑに爾前にぜんの円えん・爾前にぜんの諸大乗しよだいじやうきやう經きやう並びに頓漸とんぜん大小だいしやうの諸經しよきやうなり
証しやう拠こは無量義經むりやうぎきやうに云いく「次に方等ほうとう十二部經じふにぶきやう・摩訶般若まかはんにや・華嚴けこん海空かいくう
を説しやういて菩薩ぼさつの歷劫りやく修行しゆうぎやうを宣説せんぜつす」文、利根りこんの菩薩ぼさつは正直しやうじきに

ほうべん 方便を捨てて次第行を修せず若し法華經を証する時は衆果悉く

ぐそく 具足す是を一乗の衆生と名くるなり此等の文の意を案ずるに

さんじょう 三乗・五乗・七方便・九法界・四味三教・一切の凡聖等をば

だいじょう 大乘の衆生妙法蓮華の当体とは名く可からざるなり、設い仏な

いと雖も權教の仏をば仏界の名言を付く可からず權教の三身

は未だ無常を免れざる故に何に況や其の余の界界の名言をや、

故に正像二千年の国王・大臣よりも末法の非人は尊貴なりと

釈するも此の意なり、南岳釈して云く「一切衆生法身の蔵を具足

して仏と一にして異り有ること無し」、是の故に法華經に云く

「父母・所生・清淨・常眼・耳・鼻・舌・身・意亦復如是」

文、又云く「問うて云く仏何れの經の中に眼等の諸根を説いて

名けて如来と為や、答えて云く大強精進經の中に衆生と如来

と同じく共に一法身ほっしんにして清淨しょうじやう妙無比なるを妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと

称すしょう「文たきやう、他經たきやうに有りと雖も下文顯いえどれ已れば通じて引用するこ

とを得るなり、大強精進經だいきやうしやうじんきやうの同共の二字に習ならい相伝そうでんするなり

法華經ほけきやうに同共して信ずる者は妙經みやうきやうの体なり不同共ふどうの念仏者等ねんぶつは

既に仏性法身如来ぶつしやうほっしんにらいに背くが故に妙經ゆえの体みやうきやうに非ざるなり、所詮しよせん

妙法蓮華みやうほうれんげの当体とうたいとは法華經ほけきやうを信ずる日蓮にちれんが弟子でし・檀那等だんなの父母ふぼ

所生しよしやうの肉身こゑ是なり、正直しやうじきに方便ほうべんを捨て但法華經ほけきやうを信じ南無なむ

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと唱となうる人は煩惱ぼんのう・業ごふ・苦の三道さんだう・法身ほっしん・般若はんにや・

解脱げだつの三徳さんとくと転じて三觀さんかん・三諦さんたい即一心そくいっしんに顕あらわれ其その人の所住しよじゆうの

処ところは常寂光土じやうじやうくわうどなり、能居のうこ・所居しやうこ・身土しんど・色心しきしん・俱体俱用くたいくゆう・無作むさ

三身さんじんの本門ほんもん寿量じゆうりやうの当体蓮華とうたいれんげの仏にちれんとは日蓮でしが弟子だんな・檀那等だんなの中の

事ことなり是れ即ち法華すなわの当体自在ほっけ神力とうたいじざいじんりきの顕あらわす所の功能くわのうなり敢てあえて

これ之を疑う可からず之を疑う可からず、問う天台大師・
妙法蓮華の当体・譬喩の二義を釈し給えり爾れば其の当体・譬喩
の蓮華の様は如何、答う譬喩の蓮華とは施開廢の三釈委く之を見
るべし、当体蓮華の釈は玄義第七に云く「蓮華は譬えに非ず当体
に名を得類せば劫初に万物名無し聖人・理を觀じて準則して名
を作るが如し」文、又云く「今蓮華の称は是れ喩を仮るに非ず
乃ち是れ法華の法門なり法華の法門は清淨にして因果微妙なれ
ば此の法門を名けて蓮華と為す即ち是れ法華三昧の当体の名にし
て譬喩に非ざるなり」又云く「問う蓮華定めて是れ法華三昧の
蓮華なりや定めて是れ華草の蓮華なりや、答う定めて是れ法蓮華
なり法蓮華解し難し故に草花を喩と為す利根は名に即して理を
解し譬喩を仮らず但法華の解を作す中下は未だ悟らず譬を須い

すなわ
て乃ち知る易解の蓮華を以て難解の蓮華に喩う、故に三周の説法
有つて上中下根に逗う上根に約すれば是れ法の名・中下に約す
れば是れ譬の名なり三根合論し雙べて法譬を標す是くの如く解
する者は誰とか諍うことを為さんや」云云、此の釈の意は至理は
名無し聖人・理を觀じて万物に名を付くる時・因果俱時・
不思議の一法之れ有り之を名けて妙法蓮華と為す此の妙法蓮華の
一法に十界三千の諸法を具足して闕減無し之を修行する者は
仏因・仏果同時に之を得るなり、聖人・此の法を師と為して
修行覺道し給えば妙因・妙果・俱時に感得し給うが故に妙覺
果満の如来と成り給いしなり、故に伝教大師云く「一心の
妙法蓮華とは因華・果台・俱時に増長す三周各各当体・譬喩有
り、総じて一經に皆当体・譬喩あり別して七譬・三平等・十

むじょう ほうもん

無上の法門有りて皆当体蓮華有るなり、此の理を詮ずる教を名け

みょうほうれんげきよう

て妙法蓮華經と為す」云云、妙樂大師の云く「須く七譬を以て

れんげごんじつ

各蓮華樅実の義に対すべし○何者蓮華は只是れ為實施樅・

かいごんけんじつ

開樅頭実七譬皆然なり」文、又劫初に華草有り聖人・理を見て

れんげ なず

号して蓮華と名く此の華草・因果俱時なること妙法蓮華に似たり

ゆえ

故に此の華草同じく蓮華と名くるなり水中に生ずる赤蓮華・

びやくれんげ

白蓮華等の蓮華是なり、譬喩の蓮華とは此の華草の蓮華なり此の

けそう もつ

華草を以て難解の妙法蓮華を顕す天台大師の妙法は解し難し譬

か あらわ やす

を仮りて顕れ易しと釈するは是の意なり。

こつしよ

問う劫初より已来何人か当体の蓮華を証得せしや、答う釈尊

ごひやくじんでんごう

・五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番に

じようどう

成道を唱え能証・所証の本理を顕し給えり、今日又・中天竺

・摩訶陀国に出世して此の蓮華を顕わさんと欲すに機無く時無し
故に一法の蓮華に於て三の草華を分別し三乗の権法を施し擬宣
誘引せしこと四十余年なり、此の間は衆生の根性万差なれば
種種の草華を施し設けて終に妙法蓮華を施したまわざる故に、
無量義經に云く「我先に道場菩提樹下乃至四十余年未だ真実を
顕さず」文、法華經に至つて四味三教の方便の権教・小乗・
種種の草華を捨てて唯一の妙法蓮華を説き三の華草を開して一の
妙法蓮華を顕す時、四味三教の権人に初住の蓮華を授けしより
始めて開近顕遠の蓮華に至つて二住・三住・乃至・十住・等覺
・妙覺の極果の蓮華を得るなり。

問う法華經は何れの品何れの文にか正しく当体・譬喩の蓮華を
説き分けたるや、答う若し三周の声聞に約して之を論ぜば方便

の一品は皆是当体蓮華を説けるなり、譬喩品・化城喩品には譬喩
れんげと蓮華を説きしなり、但方便品にも譬喩蓮華無きに非ず余品にも
とうたいれんげと当体蓮華無きに非ざるなり、問う若し爾らば正く当体蓮華を説き
し文は何れぞや答う方便品の諸法実相の文是なり、問う何を以て
此の文が当体蓮華なりと云う事を知ることを得るや、答う天台・
妙楽今の文を引て今經の体を釈せし故なり、又伝教大師釈し
て云く「問う法華經は何を以て体と為すや、答う諸法実相を以て
体と為す」文、此の釈分明なり此の文の名を妙法蓮華と曰う義なり、又
現証は宝塔品の三身是れ現証なり、或は涌出の菩薩竜女の
即身成仏是なり、地涌の菩薩を現証と為す事は經文に
如蓮華在水と云う故なり、菩薩の当体と聞たり竜女を証拠と
為す事は靈鷲山に詣で千葉の蓮華の大いさ車輪の如くなるに坐

しと説きたまう故なり、又妙音・観音の三十三・四身なり是を
ば解釈には法華三昧の不思議・自在の業を証得するに非ざるよ
りは安ぞ能く此の三十三身を現せんと云云、或は「世間相
常住」文、此等は皆当世の学者の勘文なり、然りと雖も日蓮は
方便品の文と神力品の如来・一切所有之法等の文となり、此の文
をば天台大師も之を引いて今經の五重玄を釈せしなり、殊更此
の一文正しき証文なり。

問う次上に引く所の文証・現証・殊勝なり何ぞ神力の一文
に執するや、答う此の一文は深意有る故に殊更に吉なり、問う
其の深意如何、答う此の文は釈尊・本眷属地涌の菩薩に結要の
五字の当体を付属すと説きたまえる文なる故なり、久遠実成の
釈迦如来は我が昔の所願の如き今は已に満足す、一切衆生を化

して皆みな仏道ぶつどうに入しら令すむとて御願ご已まんに満足ぞくし、如来にょらいの滅後めつご・後ご・五

百歳中ひゃくせんちゅう・広宣流布こうせんるふの付属ふぞくを説ふかんが為ため地涌じゆの菩薩ぼさつを召しやくし出しゅし本門ほんもん

の当体蓮華とうたいれんげを要もつを以もつて付属ふぞくし給たまえる文ぶんなれば釈尊しやくそん出世しゅつせの本懐ほんかい・

道場どうじやう所得ひほうの秘法みつぽう末法まつぽうの我等われらが現当げんとう二世じふにを成就じやうじゆする当体蓮華とうたいれんげの

誠じやうしやう証しやうは此この文ぶんなり、故ゆゑに末法まつぽう今時けいじに於おいて如来にょらいの御使おんつかいより外ぐわいに

当体蓮華とうたいれんげの証文しやうもんを知しつて出いだす人ひと都すて有ある可べからざるなり真実しんじつ

以もつて秘文ひぶんなり真実しんじつ以もつて大事だいじなり真実しんじつ以もつて尊そんきなり、南無なむ

妙法蓮華經みやうほうれんげきやう・南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやう具足くそくの道みちを聞きこかんと欲ほつす云云うんうん、是こゝなり、問もんう当

流りゆうの法門ほうもんの意いは諸宗しよしゆうの人ひと来きつて当体蓮華とうたいれんげの証文しやうもんを問もんわん時ときは

法華經ほけきやう何なんれの文ぶんを出いだす可べきや、答こたう二十八品にじはちはちしんの始はじめに妙法蓮華經みやうほうれんげきやう

と題だいす此この文ぶんを出いだす可べきなり、問もんう何なんを以もつて品品しんしんの題目だいもくは

当体蓮華とうたいれんげなりと云いう事ことを知しることを得えるや、故ゆゑは天台大師てんだいだいし・

今經の首題を釈する時・蓮華とは譬喩を挙ぐると云つて譬喩
蓮華と釈し給える者をや、答う題目の蓮華は当体・譬喩を合説す
天台の今の釈は譬喩の辺を釈する時の釈なり、玄文第一の本・迹
の六譬は此の意なり同じく第七は当体の辺を釈するなり、故に
天台は題目の蓮華を以て当体・譬喩の両説を釈する故に失無し、
問う何を以て題目の蓮華は当体・譬喩合説すと云う事を知ること
を得んや、南岳大師も妙法蓮華經の五字を釈する時「妙とは
衆生妙なるに故に法とは衆生法なる故に蓮華とは是れ譬喩を借
るなり」文、南岳・天台の釈既に譬喩蓮華なりと釈し給う如何、
答う南岳の釈も天台の釈の如し云云、但当体・譬喩合説すと云う
事經文分明ならずと雖も南岳・天台既に天親・竜樹の論に
依て合説の意を判釈せり、所謂法華論に云く「妙法蓮華とは二

種の義有り一には出水の義、乃至泥水を出るをば諸の声聞・

如来大衆の中に

入つて坐し諸の菩薩の如く蓮華の上に坐して

如来・無上智慧・清浄の境界を説くを聞いて如来の密蔵を証

するを喩うるが故に・二に華開とは諸の衆生・大乘の中に於て

其心怯弱にして信を生ずること能わず故に如来の淨妙法身を

開示して信心を生ぜしめんが故なり」文、諸の菩薩の諸の字は

法華已前の大小の諸菩薩・法華經に來つて仏の蓮華を得ると云

う事・法華論の文分明なり、故に知ぬ菩薩處處得入とは方便な

り、天台此の論の文を釈して云く今論の意を解せば若し衆生を

して淨妙法身を見せしむと言わば此れ妙因の開発するを以つ

て蓮華と為るなり、若し如来大衆に入るに蓮華の上に坐すと

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

言わば此は妙報の国土を以て蓮華と為るなり、又天台が当体・

譬喩合説する様を委細に釈し給う時大集經の我今・仏の蓮華を
敬礼すと云う文と法華論の今の文とを引証して釈して云く
「若し大集に依れば行法の因果を蓮華と為す菩薩上に処すれば
即ち是れ因の華なり仏の蓮華を礼すれば即ち是れ果の華なり、
若し法華論に依れば依報の国土を以て蓮華と為す復菩薩・蓮華の
行を修するに由つて報・蓮華の国土を得・當に知るべし依正因果
悉く是れ蓮華の法なり、何ぞ譬をもつて顯すことをもちいん鈍
人の法性の蓮華を解せざる為の故に世の華を挙げて譬と為す亦
何の妨げかあるべき」文、又云く若し蓮華に非んば何に由つて
遍く上来の諸法を喩えん法譬雙べ弁ずる故に妙法蓮華と称する
なり、次に竜樹菩薩の大論に云く「蓮華とは法譬並びに挙ぐる
なり」文、伝教大師が天親・竜樹の二論の文を釈して云く「論

の文但妙法蓮華經と名くるに二種の義あり唯蓮華に二種の義有

りと謂うには非ず、凡そ法喻とは相い似たるを好しと為す若し相

い似ずんば何を以てか他を解せしめん、是の故に釈論に法喻

並び挙ぐ一心の妙法蓮華は因華・果台・俱時に増長す此の義

解し難し喻を仮れば解し易し此の理教を詮ずるを名けて

妙法蓮華經と為す」文、此等の論文釈義分明なり文に在つて見

る可し包蔵せざるが故に合説の義・極成せり、凡そ法華經の意

は譬喻即法体・法体即譬喻なり、故に伝教大師釈して云く

「今經は譬喻多しと雖も大喻は是れ七喻なり此の七喻は即ち

法体法体は即ち譬喻なり、故に譬喻の外に法体無く法体の外に

譬喻無し、但し法体とは法性の理体なり譬喻とは即ち妙法の

事相の体なり事相即理体なり理体即事相なり故に法譬一体とは云

うなり、是を以て論文山家の釈に皆蓮華を釈するには法譬並べ
挙ぐ」等云云、釈の意分明なる故重ねて云わず。

門う如来の在世に誰か当体の蓮華を証得せるや、答う

しみさんきよう 四味三教の時は三乗・五乗・七方便・九法界・帶権の円の菩薩

並びに教主乃至法華迹門の教主総じて本門寿量の教主を除

くの外は本門の当体蓮華の名をも聞かず何に況んや証得せんを

や、開三顯一の無上菩提の蓮華尚四十余年には之を顕さず、故に

無量義經に終不得成・無上菩提とて迹門開三顯一の蓮華は爾前

に之を説かずと云うなり、何に況んや開近顯遠・本地難思・

境智冥合・本有無作の当体蓮華をば迹化弥勒等之を知る可きや、

問う何を以て爾前の円の菩薩・迹門の円の菩薩は本門の

当体蓮華を証得せずと云う事を知ることを得ん、答う爾前の円

の菩薩は迹門の蓮華を知らず迹門の円の菩薩は本門の蓮華を知らざるなり、天台云く「權教の補処は迹化の衆を知らず迹化の衆は本化の衆を知らず」文、伝教大師云く「是直道なりと雖も直道ならず」云云、或は云く「未だ菩提の大直道を知らざるが故に」云云此の意なり、爾前・迹門の菩薩は一分断惑証理の義分有りと雖も本門に対するの時は当分の断惑にして跨節の断惑に非ず未断惑と云わるるなり、然れば菩薩处处得入と釈すれども二乗を嫌うの時一往得入の名を与うるなり、故に爾前・迹門の大菩薩が仏の蓮華を証得する事は本門の時なり真実の断惑は寿量の一品を聞きし時なり、天台大師涌出品の五十小劫・仏の神力の故に諸の大衆をして半日の如しと謂わしむの文を釈して云く「解者は短に即して長・五十小劫と見る惑者は長に即して短

・半日の如しと謂えり」文、妙樂之を受けて釈して云く「菩薩
已に無明を破す之を称して解と為す大衆仍お賢位に居す之を名
けて惑と為す」文、釈の意分明なり爾前・迹門の菩薩は惑者な
り地涌の菩薩のみ独り解者なりと云う事なり、然るに当世
天台宗の人の中に本・迹の同異を論ずる時異り無しと云つて此
の文を料簡するに解者の中に迹化の衆入りたりと云うは大なる
僻見なり經の文釈の義分明なり何ぞ横計を為す可けんや、文の
如きは地涌の菩薩・五十小劫の間如来を称揚するを靈山迹化の
衆は半日の如く謂えりと説き給えるを天台は解者惑者を出して
迹化の衆は惑者の故に半日と思えり是れ即ち僻見なり、地涌の
菩薩は解者の故に五十小劫と見る是れ即ち正見なりと釈し給える
なり、妙樂之を受けて無明を破する菩薩は解者なり未だ無明を

破せざる菩薩は惑者なりと釈し給いし事文に在つて分明なり、
迹化の菩薩なりとも住上の菩薩は已に無明を破する菩薩なりと云
わん学者は無得道の諸経を有得道と習いし故なり、爾前・迹門
の当分に妙覺の位有りと雖も本門・壽量の真仏に望むる時は惑者
仍お賢位に居ると云わるる者なり、權教の三身未だ無常を免れざ
る故は夢中の虚仏なるが故なり、爾前と迹化の衆とは未だ本門に
至らざる時は未断惑の者と云われ彼に至る時正しく初住に叶う
なり、妙樂の釈に云く「開迹顯本皆初住に入る」文、仍賢位
に居すの釈之を思い合すべし、爾前迹化の衆は惑者未だ無明を破
せざる仏・菩薩なりと云う事眞実なり眞実なり、故に知ぬ本門
壽量の説顯れての後は靈山一会の衆皆悉く当体蓮華を証得せ
しなり、二乘・闡提・定性・女人・惡人等も本仏の蓮華を

しょうとく
証得するなり、伝でん教大師きやうだいし一大事の蓮華れんげを釈しゃくして云く「法華ほっけの
肝心かんじん一大事の因縁いんねんは蓮華れんげの所顯しよけんなり、一とは一実相じつそうなり大とは性
広博こうはくなり事とは法性ほっしやうの事なり一究竟くきやう事は円えんの理教りきやう・智行ちぎやう、円えんの
身み・若に・達たつなり一乘いちじやう・三乘さんじやう・定性じやうしやう・不定性ふじやう・内道ないどう・外道げどう・
阿闍あせん・阿顛あてん・皆悉みなことごとく一切智地いちじちに到ちる是この一大事いちだいじ仏ぶつの知見ちけんを開示かいじし
悟入ごにゆうして一切成仏いっさいじやうぶつす」女人にょにん・闍提せんだい・定性じやうしやう・二乗等にじやうの極惡人ごくあく
りようぜん
靈山りやうぜんに於おいて当体蓮華とうたいれんげを証得しょうとくするを云うなり。

問まっほうう末法まつほう今時誰いまときたれれ人か当体蓮華とうたいれんげを証得しょうとくせるや、答とうせう当世とうせの体
を見るに大阿鼻地獄おびじごくの当体とうたいを証得しょうとくする人ひと之これ多しと雖いえども仏ぶつの
蓮華れんげを証得しょうとくせるの人ひと之これ無し其そのの故ゆえは無得道とくどうの權教ごんきやう方便ほうべんを信仰しんこう
して法華ほっけの当体真実とうたいしんじつの蓮華れんげを毀謗きぼうする故ゆゑなり、仏ぶつ説せついて云く
「若もし人信しんぜずして此この經きやうを毀謗きぼうせば則すなわち一切世間いっさいせけんの仏種ぶつしゆを断だんぜ

ん乃至其の人命終なにしそ みようじゅうして阿鼻獄あびごくに入らん」文、天台云く「此の経

は☆く六道あまね ろくどうの仏種ぶつしゆを開く若此の経を謗せば義・断ずるに当るな

り」文、日蓮云く此の経は是れ十界にちれんいわの仏種ぶつしゆに通ず若し此の経を

謗せば義是れ十界こ じゅっかいの仏種ぶつしゆを断ずるに当る是の人無間むげんに於て決定けつじよう

して墮在なんす何ぞ出ずる期を得んや、然るに日蓮がいちもん一門は正直しやうじきに

権教ごんきようの邪法じゃほう・邪師じゃしの邪義じゃぎを捨てて正直しやうじきに正法しやうほう・正師しやうしの正義せいぎを

信ずる故に当体蓮華うゑ とうたいれんげを証得しやうとくして常寂光じやうじやつこうの当体の妙理みやうりを顕あらわす事

は本門ほんもん寿量じゆりやうの教主きやうしゆの金言きんげんを信じて南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となうるが

故なり、問う南岳なんがく・天台てんだい・伝教等でんきやうの大師だいし・法華經ほけきやうに依よつて一乘いちじやう

円宗えんしゆの教法きやうほうを弘通くつうし給たまうと雖も未だ南無妙法蓮華經いえど いま なむみやうほうれんげきやうと唱となえた

まわざるは如何いかん、若し爾もらば此の大師等だいしは未だ当体蓮華いま とうたいれんげを知らず

又証得しやうとくしたまわずと云うべきや、答う南岳大師なんがくだいしは觀音かんのんの化身けしん・

てんだいだいしやくおうけしん
天台大師は薬王の化身なり等云云、若し爾らば靈山に於て本門
じゆりよう

寿量の説を聞きし時は之を証得すと雖も在生の時は妙法流布
みようほうるふ

の時に非ず、故に妙法の名字を替えて止観と号し一念三・千
あらゆえみようほうみようじ

一心三觀を修し給いしなり、但し此等の大師等も南無
いっしんさんかんしゅうたまいただこれらだいし

妙法蓮華經と唱うる事を自行真實の内証と思食されしなり、
みようほうれんげきようとなじぎようしんじつないししゅうおほしめ

南岳大師の法華懺法に云く「南無妙法蓮華經」文、天台大師の
なんがくだいしほつけせんぼういわなむみようほうれんげきようてんだいだいし

云く「南無平等大慧一乘・妙法蓮華經」文、又云く「稽首
いわなむびようどうだいえいちじようみようほうれんげきよういわけいしゅ

妙法蓮華經」云云、又「歸命妙法蓮華經」云云、伝教大師の
みようほうれんげきよう云云、又「きみようみようほうれんげきようでんぎようだいし

最後臨終の十生願の記に云く「南無妙法蓮華經」云云、問う
さいごりんじゅうじゅっしやういわなむみようほうれんげきよう云云、問う

文証分明なり何ぞ是くの如く弘通したまわざるや、答う此れに
もんしょうぶんみようなんかくのごとぐつういわなむみようほうれんげきよう云云、問う

於て二意有り一には時の至らざるが故に二には付属に非ざるが故
おいおひいたくつうゆえふぞくあら

なり、凡そ妙法の五字は末法流布の大白法なり地涌千界の大士
およみようほうごじまつほうるふびやくほうじゆせんがい

の付属なり是の故に南岳・天台・伝教等は内に鑑みて末法の導師に之を譲りて弘通し給わざりしなり。

◆七〇 当体義抄送状 519P

問う当体の蓮華解し難し故に譬喩を仮りて之を顕すとは経文に証拠有るか、答う経に云く「世間の法に染まらざること蓮華の水に在るが如し地より而も涌出す」云云、地涌の菩薩の当体蓮華なり、譬喩は知るべし以上後日に之を改め書すべし、此の法門は妙経所詮の理にして釈迦如来の御本懷地涌の大士に付属せる末法に弘通せん経の肝心なり、国主信心あらん後始めて之を申す可き秘蔵の法門なり、日蓮最蓮房に伝え畢んぬ。

日蓮 花押

◆七 小乗 大乘分別抄 文永十年 五十二歳御作 与富木常忍

520P

夫れ小大定めなし一寸の物を一尺の物に対しては小と云い五尺

の男に対しては六尺七尺の男を大の男と云う、外道の法に対して

は一切の大小の仏教を皆大乘と云う大法東漸通指仏教以為

大法等と釈する是なり、仏教に入つても鹿苑十二年の説・四

阿含經等の一切の小乗經をば諸大乘經に対して小乗經と

名けたり、又諸大乘經には大乘の中にとりて劣る教を小乗

と云う華嚴の大乘經に其餘樂小法と申す文あり、天台大師は

この小法というは常の小乗經にはあらず十地の大法に対して

十住十行・十回向の大法を下して小法と名くと釈し給へり、又

法華經第一の卷方便品に若以小乗化乃至於一人と申す文あり

てんだい みようらく あこんきよう しょうじよう

天台・妙楽は阿含經を小乗と云うのみにあらず華嚴經の別教

ほうとう はんにや だいじよう

・方等・般若の通別の大乗をも小乗と定め給う、又玄義の

第一に会小歸大・是漸頓混合と申す釈をば智証大師は初め華嚴經

より終り般若經にいたるまで四教八教の權教諸大乘經を

はんにやきよう ぜんとんみんごう もう しきよう はつきよう ごんきよう しょうだいじようきよう

漸頓と釈す混合とは八教を会して一大円教に合すところことは

ぜんとん しゃく みんごう はつきよう え えんきよう がっ

られて候へ、又法華經の壽量品に樂於小法・德薄垢重者と申す

ほけきよう じゆりようぼん ぎようお とくはつくじゅう もう

文あり、天台大師は此經文に小法と云うは小乗經にもあらず

てんだいだいし きようもん しょうじようきよう

又諸大乘經にもあらず久遠実成を説かざる華嚴經の円・乃至

しょうだいじようきよう くおんじつじよう けこんきよう ないし

・方等・般若・法華經の迹門十四品の円頓の大法まで小乗の

ほうとう はんにや ほけきよう しゃくもん えんどん だいほう しょうじよう

法なり、又華嚴經等の諸大乘經の教主の法身・報身・

けこんきよう しょうだいじようきよう きようしゅ ほっしん ほうしん

毘盧遮那・盧舍那・大日如来等をも小仏なりと釈し給ふ、此の心

びるしやな るしやな だいにちにやらい しょうく たま

ならば涅槃經・大日經等の一切の大小・權實・顯密の諸經は

ねはんぎよう だいにちきよう いっさい だいしょう ごんじつ けんみつ しょうきよう

みなしょうじょうきようはつしゅう

皆 小乗經

八宗の中には俱舍宗・成実宗・律宗を

小乗と云

うのみならず華嚴宗・法相宗・三論宗・真言宗等の諸大乘宗

を小乗宗として唯天台の一宗計り実大乘宗なるべし、

彼彼の

大乘宗の所依の經經には絶えて二乗作仏・久遠実成の最大の

法をとかせ給はず、

譬えば一尺二尺の石を持つ者をば大力といは

ず一丈二丈の石を持つを大力と云うが如し、

華嚴經の法界・円融

四十一位・般若經の混同無二・十八空乾慧地等の十地・

瓔珞經

の五十二位・仁王經の五十一位・藥師經の十二の大願・

雙觀經

の四十八願・大日經の真言・印契等此等は

小乗經

に對すれば

大法秘法なり、

法華經の二乗作仏・久遠実成に對すれば

小乗

の法なり、一尺二尺を一丈二丈に對するが如し、

又二乗作仏・

久遠実成は法華經の肝用にして諸經に對すれば奇たりと云へど

も法華經の中にてはいまだ奇妙ならず一念三千と申す法門こそ奇
が中の奇・妙が中の妙にて華嚴・大日經等に分絶たるのみなら
ず、八宗の祖師の中にも真言等の七宗の人師・名をだにもしら
ず天竺の大論師竜樹菩薩・天親菩薩は内には珠を含み外には書
きあらはし給はざりし法門なり、雨衆が三徳・米育が六句の先仏
の教を盗みとれる様に華嚴宗の澄観・真言宗の善無畏等は
天台大師の一念三千の法門を盗み取って我が所依の經の心仏及
衆生の文の心とし心実相と申す文の神とせるなり、かくのご
とく盗み取って我が宗の規模となせるが又還って天台宗を下し
華嚴宗・真言宗には劣れる法なりと申す、此等の人師は世間の
盗人にはあらねども仏法の盗人なるべし、此等をよくよく尋ね
明むべし。

又世間の天台宗の学者並びに諸宗の人人の云く法華經は但

にじようさぶつ

二乗作仏・久遠実成計りなり等云云、今反詰して云く汝等が

承伏に付いて但二乗作仏と久遠実成計り法華經にかぎつて

諸經になくば此れなりとも豈奇が中の奇にあらずや、二乗作仏

・諸經になくば仏の御弟子・頭陀第一の迦葉・智慧第一の

舍利弗・神通第一の目連等の十大弟子千二百の羅漢・万二千の

声聞・無數億の二乗界・過去遠遠劫より未來無數劫にいたるま

で法華經に値いたてまつらずば永く色心俱に滅して永不成仏の者

となるべし豈大なる失にあらずや、又二乗界・仏にならずば迦葉

等を供養せし梵天・帝釈・四衆・八部・比丘・比丘尼等の二界

・八番の衆はいかんがあるべき、又久遠実成が此の經に限らず

んば三世の諸仏・無常遷滅の法に墮しなん、譬えば天に諸星あり

にちがつ

そうもく

だいち

とも日月ましまさずんば・いかんがせん地に草木ありとも大地な

なんじ

くばいかんがせん、是は汝が承伏に付いての義なり実をもつて

かんがもう

にじようさぶつ

しゅじよう

勘へ申さば二乗作仏なきならば九界の衆生・仏になるべからず、

ほけきよう

ほうに

いつさいしゅじよう

じゅっかい

ぐそく

法華經の心は法爾のことはりとして一切衆生に十界を具足せ

り、

たと

譬えば人・一人は必ず四大を以てつくれり一大かけなば人に

あらじ、一切衆生のみならず十界の依正の二法非情の草木一

いっさいしゅじよう

じゅっかい

えしよう

ひじよう

そうもく

微塵にいたるまで皆十界を具足せり、二乗界・仏にならずば

みじん

みなじゅっかい

ぐそく

にじよう

余界の中の二乗界も仏になるべからず又余界の中の二乗界仏にな

よかい

にじよう

よかい

にじよう

らずば余界の八界仏になるべからず、譬えば父母ともに持ちたる

よかい

よかい

たと

ふ

ほ

たも

者兄弟九人あらんか二人は凡下の者と定められば余の七人も必

きようだい

ほんげ

者兄弟九人あらんか二人は凡下の者と定められば余の七人も必

ず凡下の者となるべし、仏と経とは父母の如し九界の衆生は実

ほんげ

ほんげ

ふ

ほ

しゅじよう

子なり声聞・縁覚の二人・永不成仏の者となるならば菩薩・六

しょうもん

えんかく

ようふじようぶつ

ふ

ほ

ぼさつ

子なり声聞・縁覚の二人・永不成仏の者となるならば菩薩・六

えんかく

ようふじようぶつ

ふ

ほ

ぼさつ

子なり声聞・縁覚の二人・永不成仏の者となるならば菩薩・六

えんかく

ようふじようぶつ

ふ

ほ

ぼさつ

凡の七人あに得道とくどうをゆるさるべきや、今・此の三界さんがいは皆是みな我が有あなり其その中しゅじょうの衆生しゅじょうは悉く是ことごと吾子わがこなり乃至ないした唯我一人ただわれひとりのみ能く救護くごを為なすの文をもつて知るべし、又菩薩ぼさつと申もうすは必ず四弘誓願しぐせいがんをおこす第一だいいちしゅじょうむへんせいがん衆生無辺誓願度の願・成就じょうじゅせずば第四の無上菩提誓願むじょうぼだいせいがん証の願も成就じょうじゅすべからず、前四味の諸經ぜんしもしよきょうにては菩薩ぼさつ・凡夫ぼんぶは仏になるべし二乗にじょうは永く仏になるべからず等云云、而しかるをかしこげなる菩薩ぼさつもはかなげなる六凡も共に思へり我等われら・仏になるべし二乗にじょうは仏にならざれば・かしこくして彼の道には入ざりけると思ふ、二乗にじょうはなげきをいたき此の道には入るまじかりし者と恐れかなしみが今法華經ほけききょうにして二乗にじょうを仏になし給たまへる時二乗にじょう・仏になるのみならずかの九界の成仏じょうぶつをも・ときあらはし給たまへり、諸の菩薩・此の法門ほうもんを聞いて思はく我等われらが思ひは・はかなかりけ

り爾前にぜんの經經きようぎようにして二乗・仏にならずば我等われらもなるまじかりける者なり、二乗にじようを永不成仏ようふじようぶつと説き給ふは二乗一人計りばかなげくべきにあらざりけり我等も同じなげきにてありけりと心うるなり。

又壽量品じゆりようぽんの久遠実成くおんじつじようが爾前にぜんの經經きようぎようになき事を以て思ふに

爾前にぜんには久遠実成くおんじつじようなきのみならず仏は天下第一てんがだいいちの大妄語の人な

るべし、爾前にぜんの大乗第一だいじようだいいちたる華嚴經・大日經等に始めて正覺しょうかく

を成じ我昔道場どうじように坐す等云、眞実甚深正直捨方便しんじつじんじんしょうじきしゃほうべんの無量義經むりようぎきよう

と法華經ほけきようの迹門しゃくもんには我先に道場どうじようにして・我始め道場どうじように坐すと

説れたり、此等これらの經文は壽量品じゆりようぽんの然しかるに我実に成仏じようぶつしてより

已来無量無辺このかたむりようむへんなりの文より思い見ればあに大妄語もうごにあらずや、仏

の一身もうごすでに大妄語もうごの身なり一身に備えたる六根ろっこんの諸法しよほうあに実な

るべきや、大氷の上に造れる諸舎しよは春をむかへては破れわざるべし

や水中の満月まんげつは実に体ありや、爾前にぜんの成仏じょうぶつ往生おうじょう等は水中の星月

の如ごとし爾前にぜんの成仏じょうぶつ往生おうじょう等は体に随ふ影かげの如ごとし、本門ほんもん寿量品じゆりやうぼんを

もつて見れば寿量品じゆりやうぼんの智慧ちえをはなれては諸経しよきやうは跨節かせつ当分の得道とうぶん

共に有名無実ゆうめいむじつなり、天台大師てんだいだいし・此この法門ほうもんを道場どうじやうにして独ひとり覺知かくち

し玄義げんぎ十卷しもんく・文句もんく十卷しもんく・止觀しかん十卷等しもんくかきつけ給たまうに諸経しよきやうに二乘にじやう

作さぶつ仏くおん・久遠きうおん実成じつじやう絶たえてなき由よしを書きたまをき給たまふ、是は南北なんぼくの十師しし

が教相きやうそうに迷まよつて三時さんじ・四時しじ・五時ごじ・四宗ししう・五宗ごしう・六宗ろくしう・一音いちおん

・半満はんまん・三教さんきやう・四教等しきやうを立てて教せんじんの浅深せんしん勝劣しょうれつに迷まよいし此等これらの非

義ぎを破たらんが為ためにまず眼前がんぜんたる二乗にじやう作さぶつ仏くおん・久遠きうおん実成じつじやうをもつて

諸経しよきやうの勝劣しょうれつを定め給たまいしなり、然しかりと云いつて余界よがいの得道とくどうをゆる

すにはあらず、其その後け華嚴宗けこんししうの五教ごきやう・法相宗ほうしやうししうの三時さんじ真言宗しんこんししうの

顯密けんみつ五藏じゆうじゆう十住じしう心義ぎしやく釈しやくの四句等なんざんは南三ほくひち・北七ほくひちの十師ししの義ぎよりも尚なお

☆ れる教相なり。

これら たし

此等^{これら}は他師^{たし}の事なればさてをきぬ又自宗^{じしゅう}の学者^{がくしゃ}が天台^{てんだい}・妙楽^{みょうらく}

でんきようだいし

・伝^{でん}教大師^{きょうだいし}の御釈^{ごしやく}に迷^{まよ}うて爾前^{にぜん}の経経^{きようぎよう}には二乗作仏^{にじようさぶつ}・久遠^{くおん}

じつじようばか

実成^{じつじよう}計りこそ無けれども余界^{よかい}の得道^{とくどう}は有りなんと申^{もう}す人人^{ひとびと}・一

にほんこく

人^{ひと}・二人^{ふたり}ならず日本国^{にほんこく}に弘^{ひろ}まれり、他宗^{たしゅう}の人人^{ひとびと}是^{こゝ}に便^{べん}を得^えて弥^{いよいよ}

てんだいしゅう

天台宗^{てんだいしゅう}を失^{うしな}ふ此等^{これら}の学者^{がくしゃ}は譬^{たと}えば野馬^{とんば}の蜘蛛^{ちちゅう}の網^{あみ}にかかり渴^{かわ}る鹿^かの陽炎^{やうえん}をおふよりも・はかなし例^{れい}せば頼朝^{よりとも}の右大将^{うだいしようけ}家は泰衡^{たいけい}を

ため

討^うたんが為^{ため}に泰衡^{たいけい}を誑^{だま}して義経^{よしつね}を討^うたせ、太政入道^{たいうどう}清盛^{きよもり}は源氏^{げんじ}

そう

を喪^{そう}して世^よをとらんが為^{ため}に我が伯父平馬^{へいまのすけ}忠正^{ただまさ}を切る義朝^{よしとも}はたば

じふためよし

らかされて慈父^{じふ}為義^{ためよし}を切るが如^{ごと}し、此等^{これら}は墓^{はか}なき人人^{ひとびと}のためしな

てんだいだいし

り、天台大師^{てんだいだいし}・法華經^{ほけきよう}より外^{ほか}の経経^{きようぎよう}には二乗作仏^{にじようさぶつ}・久遠^{くおん}実成^{じつじよう}

しやくたま

は絶^{さつ}えてなしなんと釈^{しやく}し給^{たま}へば菩薩^{ぼさつ}の作仏^{さぶつ}凡夫^{ほんぶ}の往生^{おうじよう}はあるな

んめりとうち思われらいて我等にじょうは二乗にもあらざれば爾前にぜんの経経きようぎようにて
も得道とくどうなるべし此おもの念しんちゆうい心中おうちゆうにさしはさめり、其その中にも觀經かんきよう
の九品往生おうちゆうはねがひやすき事なれば法華經ほけきようをばなげすて念仏ねんぶつ
申もうして浄土じようどに生れて觀音かんのん・勢至せいし・阿弥陀仏あみだぶつに値あいたてまつて
成仏じようぶつを遂とぐべし云云、当世とうせの天台宗てんだいしゆうの人人ひとびとを始しとして諸宗しよしゆうの
學者がくしやみなか皆此ごとくの如じつぎし実義じつぎをもつて申もうさば一切衆生いっさいしゆじようの成仏じようぶつのみなら
ず六道ろくどうを出いで十方じゆつぱうの浄土じようどに往生おうじようする事はかならず法華經ほけきようの力な
り、例せば日本にほんこくの人・唐土もうこしの内裏だいりに入らん事は必ず日本にほんの国王こくおう
の勅定ちようくじようによるべきが如ごとし穢土えどを離じようどれて浄土じようどに入る事は必ず
法華經ほけきようの力なるべし、例せば民むすめの女ないしかんばく・乃至閼白だいじん・大臣むすめの女むすめに
至いたるまで大王だいおうの種くだを下そせば其その産る子王だいおうとなりぬ、大王だいおうの女むすめな
れども臣下しんかの種かいにんを懷妊そせば其その子王こくおうとならざるが如ごとし、十方じゆつぱうの

浄土じょうどに生るる者は三乘さんじょう人天にんてん・畜生ちくしょう等までも皆王みなの種姓すじょうと成つて

生るべし皆みな仏となるべきが故なり、阿含經あこんきょうは民の女むすめの民を夫と

し華嚴けこん・方等ほうとう・般若等はんによは臣の女むすめの臣を夫とせるが如し、又

華嚴經けこんきょう・方等ほうとう・般若はんによ・大日經等だいにちきょうの円教えんきょうの菩薩等ぼさつは大王の女だいおうの女むすめ

臣下しんかを夫とせるが如し、皆浄土みなじょうどに生るべき法にはあらず、又華嚴けこん

・阿含あこん・方等ほうとう・般若等はんによの經經きょうきょうの間に六道ろくどうを出づる人あり是は

彼彼の經經かれかれ きょうきょうの力には非ず過去あらかこに法華經ほけきょうの種を殖えたりし人現在げんざい

に法華經ほけきょうを待たずして機きすすむ故に爾前にぜんの經經きょうきょうを縁として過去かこ

の法華經ほけきょうの種を發得ほつとくして成仏じょうぶつ往生おうじょうをとぐるなり、例せば縁覺えんかくの

無む仏世ぶつせにして飛花落葉ひけらくようを觀かんじて獨覺どっかくの菩提ぼだいを証し孝養父母こうようふぼの者の

梵天ぼんてんに生るるが如し飛花落葉ひけらくよう孝養父母こうようふぼ等は獨覺どっかくと梵天ぼんてんとの修因しゅういん

にはあらねどもかれを縁として過去かこの修因しゅういんを引きおこし彼の天

に生じ独覺どっかくの菩提ぼだいを証す、而しかるに尚過去なおかこに小乘しょうじょうの三賢さんけん四善根ぜんこんにも入らず有漏うろの禪定ぜんじょうをも修しゅうせざる者は月かんを觀かんじ花かを詠こうじ孝養こうよう父母ふぼの善しゅうを修しゅうすれども獨覺どっかくともならず色天しきてんにも生なぜず、過去かこにほけきよう法華經ほけきようの種うえを殖うえざる人は華嚴經けこんきようの席はべに侍はべりしかども初地しよじ・初住しよじゅうにもものぼらず、鹿苑說教ろくおんせつきようの砌みぎりにても見思けんじをも断だんぜず觀經等かんきようにても九品の往生おうじようをもとげず、但だい大小だいしよくの賢位けんじのみに入いつて聖位せいゐにはのぼらずして法華經ほけきように來きつて始めて仏種ぶつしゆを心田くだに下くだして一生いしやうに初地しよじ・初住等しよじゅうに登のぼる者ものもあり、又涅槃ねはんの座ざへさがり乃至滅後ないしめつこ未來みらいまでゆく人もあり、過去かこに法華經ほけきようの種うえを殖うえたる人人ひとびとは結縁けちえんの厚薄こうはくに随したがつて華嚴經けこんきようを縁えんとして初地しよじ・初住しよじゅうに登のぼる人もあり、阿含經あこんきようを縁えんとして見思けんじを断だんじて二乗にじようと成なる者ものもあり、觀經等かんきようの九品の行業くうぎんを縁えんとして往生おうじようする者ものもあり、方等ほうとう・般若はんにかも此これを

もつて知んぬべし、此等これらは彼彼のかれがれ經經きようぎようの力にはあらず偏ひろえに

法華經ほけきようの力なり譬たとえば民の女むすめに王の種くだを下せるを人しらずして

民の子と思ひ大臣等だいじんの女むすめに王の種くだを下せるを人しらずして臣下しんか

の子と思へども大王だいおうより是これを尋たずぬれば皆王種みなおうしゅとなるべし、爾前にぜんに

して界外いたへ至いたる人ひとを法華經ほけきようより之これを尋たずぬれば皆法華經みなほけきようの得道とくどうなる

べし、又過去かこに法華經ほけきようの種くさねを殖はえたる人の根鈍にぜんにして爾前にぜんの

經經きようぎように發得ほつとくせざる人人ひとびとは法華經ほけきようにいたりて得道とくどうなる、是は爾前にぜん

の經經きようぎようをばめのととしてきさき腹たいしの太子おうじ・王子おうじと云ことうが如ごとくな

るべし、又仏めつこの滅後しょうほうにも正法しやうほう一千年が間は在世ざいせの如ごとくこそなけ

れども過去かこに法華經ほけきようの種くさねを殖はえて法華ほつけ・涅槃經ねはんぎようにて覺さとりをとぐる

者ものもありぬ現在げんざい・在世ざいせにて種くさねを下くだせる人人ひとびとも是多おほし。

又滅後めつこなれども現げんに法華經ほけきようましませば外道げどうの法しやうより小乘經しょうじようきよう

にうつりしょうじょうきょう 小乗經ごんだいじょう より 權大乘ごんだいじょう にうつり 權大乘ごんだいじょう より 法華經ほけきょう にうつる 人人にんずう 数をしらず、竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ・無著菩薩むちやくぼさつ・世親論師等せじんろんし 是なり、そうほう 像法一千年には 正法しょうほう のほどこそ無けれども又過去かこ・現在げんざい にほけきょう 法華經の種を殖えたる 人人ひとびと も少少之有これあ り、而しか を漸漸ぜんぜん にぶつぽう 仏法ぶつぽう になる程に 宗宗へんしゅう も偏執へんしゅう・石の如くかたく我慢山がまん の如く高ごと し、そうほう 像法の末に成りぬれば 仏法ぶつぽう によつて 諍論じょうろん・興盛こうじょう して 仏法ぶつぽう の合戦ごうせん ひまなし、世間の罪つみ よりも 仏法ぶつぽう の失とが に依つて 無間地獄むげんじごく に墮お つる者・数をしらず。

今は又末法まつぽう に入つて 二百余歳ふたひゃとせ・過去かこ・現在げんざい に 法華經ほけきょう の種を殖えたりし 人人ひとびと もやうやくつきはてぬ、又種をうへたる 人人ひとびと は少少あるらめども 世間せけん の大悪人あくにん・出生しゅつしょう の 謗法ほうほう の者数をしらず 国くに にじゅうまん 充滿じゅうまん せり、たと 譬たと えば 大火たいか の中の小水しょうすい・大水たいすい の中の小火たいかい・大海たいかい の中

の水・大地の中の金なんどの如く悪業とのみなりぬ、又過去の善業もなきが如く現在の善業もしるしなし、・或は弥陀の名号をもつて人を狂はし法華經をすてしむれば背上向下のとがあり、
・或は禪宗を立てて教外と称し仏教をば眞の法にあらずと蔑如して増上慢を起し、・或は法相・三論・華嚴宗を立てて法華經を下し、・或は眞言宗・大日宗と称して法華經は釈迦如来の顯教にして眞言宗に及ばず等云云、而るに自然に法門に迷う者もあり、・或は師師に依つて迷う者もあり、・或は元祖・論師・人師の迷法を年久しく眞実の法ぞと伝へ来る者もあり、・或は悪鬼天魔の身に入りかはりて惡法を弘めて正法ぞと思ふ者もあり、・或ははづかの小乗一途の小法をしりて大法を行ずる人はしからずと我慢して我が小法を行ぜんが為に大法秘法の山寺を

おさへとる者もあり、・或は慈悲魔と申す魔身に入つて三衣一鉢
を身に帶したい しょうじょう小乗の一法を行ずるやから・はづかの小法を持ちてたも
国中の棟梁たる比叡山竜象の如くなる智者どもを一分我が教にいちぶん
たがへるを見て邪見の者・悪人なんどうち思へり、此の悪見をもあつけん
つて国主をたばらかし誑惑して正法の御帰依をうすうなししかへこくしゅ おおわく しょうぼう ごきえ
つて破国・破仏の因縁となせるなり、彼の妹己・姐己・褒○と申はこく はぶつ いんねん ばつき・だつき・ほうじ
せし後は心もおだやかに・みめかたちも人にすぐれたりき、きさき
愚王これを愛して国をほろぼす因縁となす、当世の禪師・律師・ぐおう いんねん とうせ ぜん りっし
念仏者なんど申す聖一・道隆・良観・道阿弥・念阿弥なんどねんぶつ もう せいいつ どうりゅう りょうかん どうあみ ねんあい いよいよ
申す法師どもは鳩鴿が糞土を食するが如し西施が呉王をたばらかもう ほっし いえばと ごと
ししに似たり、・或は我が小乗の臭糞・驢乳の戒を持て。ある しょうじょう しゅうふん ろ たも

◆七二 立正観抄 文永十一年 五十三歳御作 法華止観同異決
ぶんえい ほうけしかんどうい

にちれん
日蓮撰 527p

とうせてんだい きょうほう
当世天台の教法を習学するの輩多く観心修行を貴んで法華

本・迹二門を捨つと見えたり、今問う抑観心修行と言うは

てんだいだいし まかしかん せつこしんちゅうしよぎょうほうもん いっしんさんかん いちねんさんぜん
天台大師の摩訶止観の説己心中所行法門の一心三観・一念三千

の観に依るか、将又・世流布の達磨の禅観に依るか、若し達磨の

禅観に依るといわば教禅は未顕真実妄語方便の禅観なり法華経妙

禅の時には正直捨方便と捨てらるる禅なり、祖師達磨禅は教外

別伝の天魔禅なり、共に是れ無得道妄語の禅なり仍て之を用ゆ

べからず、若し天台の止観一心三観に依るとならば止観一部の

廃立・天台の本意に背くべからざるなり、若し止観修行の観心

に依るとならば法華経に背くべからず止観一部は法華経に依つて

建立す一心三観の修行は妙法の不可得なるを感得せんが為な

り、故に知んぬ法華經を捨てて但だ觀を正とするの輩は大謗法
大邪見天魔の所為なることを、其の故は天台の一心三觀とは
法華經に依つて三昧開發するを己心証得の止觀とは云う故なり。
問う天台大師止觀一部並びに一念三千・一心三・觀己心証得
の妙觀は併しながら法華經に依ると云う証擧如何、答う予反詰
して云く法華經に依らずと見えたる証文如何、人之を出して
云く「此の止觀は天台智者己心中所行の法門を説く・或は又
故に止觀に至つて正く觀法を明かす並に三千を以て指南と為す
乃ち是れ終窮究竟の極説なり故に序の中に説己心中所行法門と
云えり良に以有るなり」文、難じて云く此の文は全く法華經に
依らずと云う文に非ず既に説己心中所行の法門と云うが故なり
天台の所行の法門は法華經なるが故に此の意は法華經に依ると

見^{しやうもん}えたる証^{ただ}文^{たしやう}なり但^{もんどうたいこう}し他宗^{そん}に對するの時^べは問答^{しんじゅ}大綱^{しん}を存^べす可^べきなり、所謂^{いわけ}云^べう可^もし若^{てんだい}し天台^{しかん}の止觀^{ほけきやう}・法華經^よに依^よらずといわば速^{すみや}かに捨^べつ可^べきなりと、其^{その}の故^{ゆえ}は天台大師^{てんだいだいしか}兼^かねて約束^{やくそく}して云^{いわ}く「修多羅^{しゆたら}と合^{くわ}せば録^{ろく}して之^{これ}を用^{もち}いよ文^{ぶん}無^なく義^ぎ無^なきは信^{しん}受^{じゆ}す可^べからず」云云^{でんぎやうだいし}、伝^い教大師^{くでん}の云^いく「仏說^{ぶつせつ}に依憑^{えびやう}して口傳^{くでん}を信^{しん}ずること莫^なれ」文^{りゆうじゆ}、竜樹^{だいろん}の大論^いに云^いく「修多羅^{しゆたら}に依^よるは白論^{びやくろん}なり修多羅^{しゆたら}に依^よらざるは黒論^{くわくろん}なり」文^{きやうしゆしやくそん}、教主^{えほう}釈尊^{ふえ}云^いく「依法^{えほう}不依^{ふえ}人^{にん}」文^{てんだい}、天台^{てんだい}は

法華經^{ほけきやう}に依^より竜樹^{りゆうじゆ}を高祖^{こうそ}にしながら經文^{きやうもん}に違^{たが}ひ我が言^{ごん}を翻^かじて外道邪見^{げどうじゃけん}の法^{ぽう}に依^よつて止觀^{しかん}一部^{いぶ}を釈^{しやく}する事^じ全^{ぜん}く有^ある可^べからざるなり、問^まう正^{まさ}しく止觀^{しかん}は法華經^{ほけきやう}に依^よると見^みえたる文^{ぶん}之^{これ}有^ありや、答^{こた}う余^よりに多^{おほ}きが故^{ゆゑ}に少^{すく}少^{すく}之^{これ}を出^いさん止觀^{しかん}に云^いく「漸^{ぜん}と不定^{ふじやう}とは置^おい

て論ぜず今經こんきやうに依よつて更に円頓えんどんを明あきらかさ文、弘決ぐけつに云いわく

「法華經ほけきやうの旨むねを攢あつめて不思議ふしぎ・十乘・十境・待絶・滅絶・寂照じゃくしやうの

行じやうを成じやうず」文、止觀大意しかんたいいに云いわく「今家の教門きやうもんは竜樹りゆうじゆを以もつて始祖

と為なす慧文なは但内觀を列なねて視聽なんがくするのみ南岳てんだい・天台てんだいに及またんで復

法華三昧陀羅尼ほつけさんまいだらにを發おこするに因よつて義門かいたくを開拓かんぼうしゆうびして觀法周備かんぼうしゆうびす、○

若もし法華ほつけを釈しゃくするには弥い須いよく權實本すべからこんじつ・迹ぎを曉きやうりよう了了すべし方まさに行

を立たつ可べし此この經ひと独ひとり妙しやうと稱しやうすることを得まさ・方まさに此こに依よつて以もつて

觀意くわんいを立たつ可べし、五方便ほうべんおよ及び十乘軌行すなわと言えんどんしかんうは即すなわち円頓止觀えんどんしかん全かんく

法華ほつけに依よる円頓止觀えんどんしかんは即すなわち法華三昧ほつけさんまいの異名いみやうなるのみ」文、文句もんくの

記いに云いわく「觀と經と合がつすれば他の宝を数あうるに非あらず方まさに知しんぬ

止觀しかん一部こは是これ法華三昧ほつけさんまいの筌せんてい○なり若もし斯この意てんだいしゆうほうもんたいいを得まされば方まさに經旨きやうし

に會かなう」云云、唐土もろこしの人師にんし・行滿しやくの釈しゃくせる学天台宗てんだいしゆうほうもんたいい法門大意に

云く「摩訶止観まかしかん一部いっぶの大意たいいは法華三昧ほっけさんまいの異名いみょうを出いでず經に依よつて
観かんを修しゅうす」文、此等これらの文証もんしょう分明ぶんめいなり、誰か之これを論ろんぜん、問もんう天台てんだい
四種ししゆの釈しやくを作るつくの時とき観心かんじんの釈しやくに至いたつて本・迹しやくの釈しやくを捨すつと見え
り、又法華經ほけきようは漸機ぜんきの爲ために之これを説とき止観しかんは直達じきたつの機きの爲ために之これを説
くと如何いかん、答こたへう漸機ぜんきの爲ために説とけば劣とんきり頓機とんきの爲ために説とけば勝まさるとな
らば今の天台宗てんだいしゅうの意いは華嚴けこん・真言しんこん等の經きやうは法華經ほけきように勝すぐれたりと
云べう可べきや、今の天台宗てんだいしゅうの淺あさまし☆さは真言しんこんは事理じり俱密くみつの教きやうなる
故ゆゑに法華經ほけきように勝すぐれたりと謂おもへり、故ゆゑに止観しかんは法華ほっけに勝まさると云いえる
も道理どうりなり道理どうりなり。

次に観心かんじんの釈しやくの時とき・本・迹しやくを捨すつと云いう難なんは法華經ほけきよう何れいづれの文
人師にんしの釈しやくを本もとと爲なして仏教ぶつぎやうを捨すてよと見えたるや設たといて天台てんだいの釈しやく
なりとも釈尊しやくそんの金言きんげんに背そむき法華經ほけきように背そむかば全これく之これを用もちゆ可べから

ざるなり、依法不依人の故に竜樹・天台・伝教元よりの御約束
なるが故なり、其上天台の釈の意は迹の大教起れば爾前の大教亡
じ本の大教興れば迹の大教亡じ観心の大教興れば本の大教亡ずと
釈するは本体の本法をば妙法不思議の一法に取り定めての上に
修行を立つるの時、今像法の修行は観心修行を詮と為るに迹
を尋ぬれば迹・広し本を尋ぬれば本・高うして極む可からず、
故に末学機に叶い難し但己心の妙法を観ぜよと云う釈なり、
然りと雖も妙法を捨てよとは釈せざるなり若し妙法を捨てば
何物を己心と為して観ず可きや、如意宝珠を捨て瓦石を取つて宝
と為す可きか、悲しいかな当世天台宗の学者は念仏・真言・
禅宗等に同意するが故に天台の教釈を習い失つて法華經に背き
大謗法の罪を得るなり、若し止観を法華經に勝ると云わば種種の

わざわいこれあ

過之有り止観は天台の道場所得の己証なり、法華経は釈尊の

どうじょう

道場所得の大法なりは一釈尊は妙覺果満の仏なり天台は住前未

みょうじ

かんぎょう

そうじ

すべ

証なれば名字・観行・相似には過ぐ可からず四十二重の劣なり

ほつけ

しゃくそんないししよぶつしゅつせ

ほんかい

しかん

てんだいしゅつせ

こしやう

是二法華は釈尊乃至諸仏出世の本懐なり止観は天台出世の己証な

ほけきやう

たほう

しやうみやう

らいじゅう

ふんじん

こうちやうぜつ

ほんてん

り是三法華経は多宝の証明あり来集の分身は広長舌を大梵天

かいぜしんじつ

びやくほう

しかん

てんだい

せつほう

かくのこと

に付く皆是真実の大白法なり是四止観は天台の説法なり是くの如

しゅじゅ

そういこれあ

な

これ

しかん

てんだい

せつほう

かくのこと

き等の種種の相違之有れども仍お之を略するなり、又一つの問答

いわ

しよひ

き

じやうき

ゆえ

まさ

しかく

たま

しよひ

に云く所被の機・上機なる故に勝ると云わば実を捨てて権を取れ

てんだい

いよいよ

いよいよ

いよいよ

いよいよ

しかく

たま

しよひ

天台云く「教弥弥権なれば位弥弥高し」と釈し給う故なり所被の

き

げれつ

ゆえ

いよいよ

いよいよ

いよいよ

いよいよ

いよいよ

いよいよ

機下劣なる故に劣ると云わば権を捨てて実を取れ、天台の釈には

いよいよ

いよいよ

いよいよ

いよいよ

いよいよ

いよいよ

いよいよ

いよいよ

いよいよ

教弥弥実なれば位弥弥下しと云う故なり、然而して止観は上機の

ため

これ

と

ほつけ

き

ため

これ

しかん

じやうき

ほつけ

為に之を説き法華は下機の為に之を説くと云わば止観は法華に

劣おとれる故ゆえに機きを高く説くと聞えたり実にさも有あるらん、
てんだいだいし りようぜん ちようしゅう
天台大師は靈山の聴衆として如来出世の本懐を宣べたもうと
いえど いた ゆえ みようほう みようじ
雖も時至らざるが故に妙法の名字を替えて止観と号す迹化の衆
なるが故ゆえに本化の付属を弘め給わず正直の妙法を止観と説きま
ぎらかす故ゆえに有のままの妙法ならざれば帶権の法に似たり、
ゆえ てんだいぐつう しよけ き ざいせたいこん えんき ごと ほんげ
故に知んぬ天台弘通の所化の機は在世帶権の円機の如し、本化
ぐつう しよけ き ほつけほんもん き
弘通の所化の機は法華本門の直機なり、止観法華は全く体同尚
にんし もつ ぶつせつ とがはなはだ い いわんやしかん
人師の釈を以て仏説に同ずる失甚重なり、何に況や止観は
ほけきよう まさ じやぎ もう い ほんげ ぐきよう しやつけ
法華經に勝ると云う邪義を申し出すは但是れ本化の弘經と迹化の
ぐつう そうほう まっほう しやくもん ふそく ほんもん ふそく まっほう ぎようじゃ
弘通と像法と末法と迹門の付属と本門の付属とを末法の行者に
い あら ぶつてん おんはから こ とうせてんだいしゅう
云い顕あらわさせん為の仏天の御計いなり、爰こに知んぬ当世天台宗
の中に此の義を云う人は祖師・天台の為には不知恩の人なり豈あに

其の過とがを免まぬれんや、夫それ天台大師てんだいだいしは昔靈山りようぜんに在あては藥王やくおうと名なけ
今漢土かんどに在あては天台てんだいと名なけ日本國にほんこくの中なにては伝でん教ぎょうと名なく三世さんぜの
弘通くつう俱ともに妙法みょうほうと名なく、是かくの如ごとく法華經ほけきようを弘通くつうし給たまう人たみは在世ざいせ
の釈尊しゃくそんより外ほかは三國そに其その名なを聞きかず有あり難かたく御坐おわします大師だいし
を其その末まつ学がく其その教きょう釈しやくを惡わるく習ならうて失とが無なき天台てんだいに失とがを懸かけたてまつ
る豈あに大罪たいざいに非あらずや。

今問てんだいう天台ほんだいの本意ほんいは何法せきがくぞや碩学いわ等の云いく「一心三觀いっしんさんかん是これなり」
今云いく一実円滿いちじつえんまんの一心三觀いっしんさんかんとは誠じんじんに甚深しんじんなるに似にたれども尚なお以もつて
行者ぎようじやしゆぎよう修行しゆぎようの方法さんかんなり三觀さんかんとは因じんの義ぎなるが故ゆゑなり慈覺大師じかくだいしの釈しやく
に云いく「三觀さんかんとは法体ほつたいを得えせしめんが為ための修觀しゅうかんなり」云云、
伝教大師でんぎようだいし云いく「今・止觀しはんしゆぎよう修行しはんしゆぎようとは法華ほつけの妙果じようを成じようぜんが為ためなり」
云云、故ゆゑに知しんぬ一心三觀いっしんさんかんとは果地かじ・果德かとくの法門ほうもんを成じようぜんが為ための

能觀のうかんの心なることを何いかに況いわんや三觀さんかんとは言説いに出でたる法ゆえなる故ゆえに
如來にょらいの果地かじ・果德かとくの妙法みょうほうに對たいすれば可思議しぎの三觀さんかんなり。

問いう一心三觀いっしんさんかんに勝すぐれたる法いかとは何なる法いかぞや、答こたう此の事誠じに
一いち大事だいじの法門ほうもんなり唯ゆい仏ぶつ与よ仏ぶつの境界きょうがいなるが故ゆえに我等われらが言説いに出いだす
可べからざるが故ゆえに是これを申もうす可べらざるなり、是これを以もつて經文きやうもんには「我
が法はは妙めうにして思おもひ難がたし言ごを以もつて宣のぶ可べからず」云云みようかく妙覺めうかく果滿かまん
の仏ぶつすら尚なお不可ふか説せつ・不思議ふしぎの法はと説とき給たまう何いかに況いわんや等覺とうかくの菩薩ぼさつ
已下いかなしい乃なほ至し凡夫ぼんぶをや、問いう名字みょうじを聞きこかずんば何もつを以もつて勝しょう法ほう有うりと
知しることを得えんや、答こたう天台てんだい己証こしやうの法はとは是これなり、当世とうせの学者がくしやは
血脈相承けちみやくそうじやうを習ならひ失うしなう故ゆえに之これを知らざるなり故ゆえに相構あいかまえ相構そうかまえて
秘ひす可べく秘べす可べき法門ほうもんなり、然しかりと雖いえども汝なんじが志こころざし神妙しんめうなれば
其その名なを出いだすなり一言いの法是これなり伝でん教大師ぎやうだいしの一いっしん心三觀さんかん一言いに伝でん

うと書き給う是なり、問う未だ其の法体を聞かず如何、答う所詮
一言とは妙法是なり、問う何を以て妙法は一心三觀に勝れたり
と云う事を知ることを得るや、答う妙法は所詮の功德なり三觀
は行者の觀門なる故なり此の妙法を仏説いて言く「道場所得
法我法妙難思是法非思量不可以言宣」云云、天台の云く「妙は
不可思議言語道斷・心行所滅なり法は十界十如・因果不二の法
なり」と、三諦と云うも三觀と云うも三千と云うも共に不思議法
とは云えども天台の己証天台の御思慮の及ぶ所の法門なり、此の
妙法は諸仏の師なり今の經文の如くならば久遠実成の妙覺
極果の仏の境界にして爾前・迹門の教主諸仏・菩薩の境界に
非ず經に唯仏与仏乃能究尽とは迹門の界如三千の法門をば迹門
の仏が当分究竟の辺を説けるなり、本地難思の境智の妙法は

迹仏等しやくぶつの思慮おもに及ばず何いかに況いわんや菩薩ぼさつ・凡夫ほんぶをや、止観しかんの二字を
ば観名仏知ぶつち・止名仏見ぶつけんと釈しゃくすれども迹門しやくもんの仏智ぶつちん・仏見ぶつけんにして
妙覺極果みょうかくこつかの知見ちけんには非あらざるなり、其そのの故ゆえは止観しかんは天台てんだい己証こしやうの
かいによさんぜんさんたいさんかん
界如三千三諦三觀を正なと為なす迹門しやくもんの正意これ是なり、故ゆえに知んぬ
迹仏しやくぶつの知見ちけんなりと云う事を但止観しかんに絶待不思議ぜつたいふしぎの妙觀みょうかんを明あきらかす
と云えども只一念三千ただいちねんさんぜんの妙觀みょうかんに且しばらく与えて絶待不思議ぜつたいふしぎと名け
るなり。

問う天台大師真実てんだいだいしんじつに此の一言みようほうの妙法しょうとくを証得しょうとくしたまわざるや、
答う内証ないしようしか爾らざるなり、外用おひに於ては之これを弘通ぐつうしたまわざるな
り、所謂内証いわるないしようの辺をば祕して外用さんかんには三觀と号して一念三千いちねんさんぜんの
法門ほうもんを示現じげんし給たまうなり、問う何が故ぞ知り乍ら弘通なぐし給ぐつうわざるや、
答う時至いたらざるが故ゆえに付屬ふそくに非あらざるが故ゆえに迹化しやつけなるが故なり、問

てんだい
う天台此の一言の妙法を証得し給える証拠之有りや、答う此の

てんだい
事天台一家の祕事なり世に流布せる学者之を知らず灌頂玄旨の

けちみやく
血脈とて天台大師自筆の血脈一紙之有り、天台御入滅の後は

これあ
石塔の中に之有り伝教大師御入唐の時八舌の鑰を以て之を開き

どうずいわじよう
道邃和尚より伝受し給う血脈とは是なり、此の書に云く「一言

むね
の妙旨一教の玄義」文、伝教大師の血脈に云く「夫れ一言の

みようほう
妙法とは両眼を開いて五塵の境を見る時は随縁真如なるべし

りようげん
両眼を閉じて無念に住する時は不變真如なるべし、故に此の一

ここ
言を聞くに万法茲に達し一代の修多羅一言に含す」文、此の両

けちみやく
大師の血脈の如くならば天台大師の血脈相承の最要の法は

みようほう
妙法の一言なり、一心三觀とは所詮妙法を成就せん為の修行

さんかん
の方法なり、三觀は因の義妙法は果の義なり但因の処に果有り

果の処ところに因いん有り因果俱時の妙法みょうほうを觀かんずるが故ゆえに是かくの如ごとき功く能のう
を得えるなり、爰こゝに知しんぬ天台至極てんだいしごくの法門ほうもんは法華本ほつげ・迹未分とこの処
に無念しかんの止觀さいひを立てて最祕だいほうの大法だいほうとすと云える邪義じやぎ大なる僻見びやつけん
なりと云う事を四依弘經しえくぎようの大薩さつた☆は既にすでにぶきように依よつて諸論しよを造る
天台何ぞてんだいなん仏說ぶつせつに背そむいて無念しかんの止觀しかんを立てたまわんや、若もし此この
止觀しかん・法華經ほけきように依よらずといわば天台てんだいの止觀しかん教外別伝しかんきようげべつでんの達磨だるまの天魔てんま
の邪法じやほうに同おなぜん都すて然しかる可べからず哀あはれなり哀あはれなり。

伝でん教大師ぎようだいしの云いく「国主こくしゆの制せいに非あらざれば以もつて遵行じゆんぎようする無なくく
法王ほうおうの教きやうに非あらざれば以もつて信受しんじゆすること無なけん」と文い、又云いく「四依しえ
論ろんを造るに権けん有り実じつ有り三乘さんじよう旨むねを述のぶるに三有さんじよう一有いちじつ、所以ゆえん
に天台智てんだいちしや者は三乘さんじようの旨むねに順しきようじて四教しきようの階かいを定め一実いちじつの教きやうに依よつ
て一いち仏乘ぶつじようを建たつ、六度いちぶつじように別べつ有り、戒度かいだう何なんぞ同おなじからん受法じゆほう同おなじ

からず威儀豈同じからんや、是の故に天台の伝法は深く四依に
依り亦また仏經に順う」文、本朝の天台宗の法門は伝教大師より
之を始む若し天台の止觀・法華經に依らずと云わば日本に於ては
傳教の高祖に背き漢土に於ては天台に背く兩大師の伝法既に
法華經に依る豈其の末学之に違せんや、違するを以て知んぬ当世
の天台家の人人其の名を天台山に借ると雖も所学の法門は達磨の
僻見と善無畏の妄語とに依ると云う事、天台・傳教の解釈の
如くんば己心中の秘法は但法の一言に限るなり、然而当世の
天台宗の学者は天台の石塔の血脈を秘し失う故に天台の血脈
相承の秘法を習い失いて我と一心三觀の血脈とて我意に任せて
書を造り錦の袋に入れて頸に懸け箱の底に埋めて高直に売る故に
邪義国中に流布して天台の仏法破失するなり、天台の本意を失い

しゃくそん

みようほう

こ

ひと

だるま

きようくんぜんむい

すすめ

釈尊の妙法を下す是れ偏えに達磨の教訓善無畏の勸なり、

ゆえ しかん

いっしんさんかん

いっしんさんたい

いちねんさんぜん

故に止観をも知らず一心三観・一心三諦をも知らず一念三千の観

をも知らず本・迹二門をも知らず相待

ぜったい

ほっけ

みようかん

きようそう

・絶待の二妙をも知らず法華の妙観をも知らず教相をも知らず

ごんじつ

しきよう

はつきよう

せけ

権実をも知らず四教・八教をも知らず五時・五味の施化をも知

ごんじつ

き

そうおう

もう

およ

じつきよう

らず、教・機・時・国・相応の義は申すに及ばず実教にも似ず

ごんきよう

権教にも似ざるなり道理なり道理なり。

てんだい

でんぎよう

しよでん

ほけきよう

しんこん

おと

なら

ゆえ

天台・伝教の所伝は法華経は禅・真言より劣れりと習う故に

だるま

じやぎ

しんこん

もうこ

ごんきよう

じつきよう

達磨の邪義・真言の妄語と打ち成つて権教にも似ず実教にも似

だるま

せつ

ゆえ

ほうほうつみあらわ

しかん

ほけきよう

まさ

ず二途に摂せざるなり、故に大謗法罪顕れて止観は法華経に勝る

じやぎ

もう

いだ

あやまちな

てんだい

とが

か

ゆえ

と云う邪義を申し出して過無き天台に失を懸けたてまつる故に

こうそ

そむ

ふこう

ほけきよう

そむ

ほうほうざい

高祖に背く不孝の者・法華経に背く大謗法罪の者と成るなり。

そ てんだい かんぼう たず だいそどうじょう おい さんまいかいほつ
夫れ天台の觀法を尋ぬれば大蘇道場に於て三昧開發せしより

このかた

已來目を開いて妙法を思えば隨緣真如なり目を閉じて妙法を思

ふへんしんによ

えば不變真如なり此の兩種の真如は只一言の妙法に有り我妙法

とな

を唱うる時・万法茲に達し一代の修多羅一言に含す、所詮迹門

たず

を尋ぬれば迹広く本門を尋ねぬれば本高し如かじ己心の妙法を

おほしめ

觀ぜんにはと思食されしなり、当世の學者・此の意を得ざるが

ゆえ

故に天台己証の妙法を習い失いて止觀は法華經に勝り禪宗は

しかん

止觀に勝れたりと思いて法華經を捨てて止觀に付き止觀を捨てて

ぜんしゅう

禪宗に付くなり、禪宗の一門云く松に藤懸る松枯れ藤枯れて後

いかに

如何上らずして一枝なんと云える天魔の語を深く信ずる故なり、

しゆたら

修多羅の教主は松の如く其の教法は藤の如し各各に諍論すと

いへど

雖も仏も入滅して教法の威徳も無し爰に知んぬ修多羅の仏教

は月を指す指なり禪の一法のみ独妙なり之を觀ずれば見性得達
するなりと云う大謗法の天魔の所為を信ずる故なり、然而法華經
の仏は壽命無量常住不滅の仏なり、禪宗は滅度の仏と見るが
故に外道の無の見なり、是法住法位世間相常住の金言に背く
僻見なり、禪は法華經の方便無得道の禪なるを眞実常住法と
云うが故に外道の常見なり、若し与えて之を言わば仏の方便三蔵
の分齊なり若し奪つて之を言わば但外道の邪法なり与は当分の義
・奪は法華の義なり法華の奪の義を以ての故に禪は天魔・外道の
法と云うなり、問う禪を天魔の法と云う証拠如何、答う前前に
申すが如し。

◆七三 立正觀抄送狀 文永十二年二月 五十四歳御作 与最蓮

房日淨 534P

このたび おんつかい
今度の御使い誠に御志の程顕れ候い畢んぬ又種種の御志慥に
たびそうら おわ
給候い畢んぬ。

そもそもうけたま
抑承わり候、当世の天台宗等止観は法華經に勝れ禪宗は
しかん まさ
止観に勝る、又観心の大教興る時は本・迹の大教を捨てと云う事
てんだい
先ず天台一宗に於て流流各別なりと雖も慧心檀那の両流を出でず
えしん
候なり、慧心流の義に云く止観の一部は本・迹二門に亘るなり
おもえらしかん
謂く止観の六に云く「観は仏知と名く止は仏見と名く念念の中に
おい しかんげんぜん ないしさんじよう こんしゆう
於て止観現前す乃至三乗の近執を除く」文、弘決の五に云く「十
すで ここ ほつけ しょじよう かくのゆえ かえ ほつけ
法既にはれ法華の所乘なり是の故に還つて法華の文を用いて
たん も しやくせつ すなわ だいつうちしろうぶつ
歎ず、若し迹説に約せば即ち大通智勝仏の時を指して以て積劫
な じゃくめつ どうじよう もつ みようこ な も ほんもん
と為し寂滅道場を以て妙悟と為す、若し本門に約せば
がほんぎようほさつどう
我本行菩薩道の時を指して以て積劫と為し本成仏の時を以て

妙悟みょうごと為なす本・迹た二門ただ只是此ただの十法を求悟す」文、始の一文は
本門ほんもんに限ると見えたり次の文は正まさしく本・迹わたに亘ると見えたり、
止観しかんは本・迹わたに亘ると云う事もんしやうこ文証此に依るなりと云えり、次に
檀那だんな流には止観しかんは迹門しゃくもんに限ると云う証しやうこ拠は弘決ぐけつの三に云く
「還かえつて教味を借かつて以て妙円みやうえんを顯あらわす○故に知んぬ一部の文共
に円成かいこんみやうかんの開権妙観じやうを成ずるを」文、此の文に依らば止観しかんは法華ほつけ
の迹門しゃくもんに限ると云う事文に在りて分明ふんみやうなり両流の異義いぎ替れども
共に本・迹いを出でず当世とうせの天台宗てんだいしゅういず何くより相承そうじやうして止観しかんは
法華經ほけきやうに勝ると云うや、但し予が所存しよぞんは止観しかん法華の勝劣しやうれつは天地てんち
雲泥うんでいなり。

若もし与えて此を論ぜば止観しかんは法華迹門ほつけしゃくもんの分齊ぶんざいに似たり、
其の故は天台大師の己証こしやうとは十徳の中の第一だいいちは自解じげ仏乘ぶつじやう第九は玄

悟ほっけえん法華きようかい円意いなり、靈れい応おう伝でんの第四いに云いく「法華ほっけの行ぎやうを受けて二七日

境界きやうがいす」文ぶん、止し観かんの一いちに云いく「此この止し観かんは天台てんだい智者ちしや己こ心しん中ちゆうに行

ずる所ところの法門ほうもんを説とくく」文ぶん、弘決くけつの五ごに云いく「故ゆえに止し観かんに正まさしく観法かんぼう

を明あきらすに至いたつて並ならびに三千さんぜんを以もつて指南しなんと為なす○故ゆえに序しよの中ちゆうに云いく

己こ心しん中ちゆうに行いずる所ところの法門ほうもんを説とくく」文ぶん、己こ心しん所行しよぎやうの法ほうとは一いち念ねん三さん千せん

・一い心しん三さん観かんなり三諦さんたい三観さんかんの名義なうらくは瓔珞いんらく・仁王にんのうの二經にに有いりと雖いえども

一い心しん三さん観かん・一いち念ねん三さん千せん等とうの己こ心しん所行しよぎやうの法門ほうもんをば迹門しやくもん十如じっそう実相じつそうの文ぶん

を依文いぶんとして釈成しやくせいし給たまい畢おんぬ。

爰こゝに知しんぬ止し観かん一い部ぶは迹門しやくもんの分齊ぶんざいに似にたりと云いう事ことを若もし奪てん

つて之これを論ろんぜば爾前にぜん権大乗こんだいじやう・即そく別教べつきやうの分齊ぶんざいなり其そのの故ゆえは天台てんだい

己証こしやうの止し観かんとは道場どうじやう所得みやうこの妙悟めいごなり所謂いわゆる天台てんだい大師だいし・大蘇だいその普賢ふげん

道場どうじやうに於おいて三昧さんまい開かい發はつし証しよを以もつて師しに白もうす師しの曰いく法華ほっけの前まへ方便ほうべん

道場どうじやうに於おいて三昧さんまい開かい發はつし証しよを以もつて師しに白もうす師しの曰いく法華ほっけの前まへ方便ほうべん

道場どうじやうに於おいて三昧さんまい開かい發はつし証しよを以もつて師しに白もうす師しの曰いく法華ほっけの前まへ方便ほうべん

陀羅尼なりと靈応伝の第四に云く「智☆・師に代つて金字經を講ず一心具足万行の処に至つて・疑有り思・為に釈して曰く汝が疑う所は此乃ち大品次第の意なるのみ未だ是法華円頓の旨にあらざるなり」文、講ずる所の經既に権大乘經なり又次第と云えり故に別教なり、開發せし陀羅尼又法華前方便と云えり故に知んぬ爾前帶權の經・別教の分齊なりと云う事を・己証既に前方便の陀羅尼なり止觀とは己心中所行の法門を説くと云うが故に、明かに知んぬ法華の迹門に及ばずと云う事を何に況や本門をや、若し此の意を得ば檀那流の義尤も吉なり此等の趣を以て止觀は法華に勝ると申す邪義をば問答有る可く候か、委細の旨は別に一卷書き進らせ候なり、又日蓮相承の法門血脈慥に之を註し奉る、恐恐謹言

ぶんえい きのとい
文永十二乙亥二月二十八日

にちれん かおう
日蓮 花押

さいれんぼうごへんじ
最蓮房御返事

◆七四 顕立正意抄 ぶんえい
文永十一年十二月 五十三歳御作 536

P

にちれんいぬ しょうかがんねん ひのとも
日蓮去る正嘉元年太歳丁巳八月二十三日大地震を見て之を勘え

定めて書ける立正安国論に云く「薬師経の七難の内五難忽ちに

起つて二難猶残れり所以他国侵逼の難・自界叛逆の難なり、

だいしつきよう さんさい
大集経の三災の内二災早く顕れ一災未だ起らず、所以兵革の災

なり、 こんこうみようきよう
金光明経 の内の種種の災過一一起ると雖も他方の怨賊

こくない しんりやく
国内を侵掠する此の災未だ露われず此の難未だ来らず、 仁王経

ひちなん さん さかん
の七難の内六難今盛にして一難未だ現ぜず所以四方より賊来つて

おか なん
国を侵すの難なり、 しかのみならず国土乱れん時は先ず鬼神乱る

鬼神きじん乱みだるる故ゆえに万民ばんみん乱みだると、今・此の文に就おて具つさに事の情を案
ずるに百鬼ひやくき早く乱みだれ万民ばんみん多く亡なびぬ先難せんなん是れ明あなり後災こうさい何なんぞ疑うたわ
ん若もし残る所の難なん・悪法あくほうの科とがに依よつて並ならび起きり競きそい来きらば其の時
何てい為おうや、帝王ていおうは国家こっかを基もととして天下てんがを治おさむ、人臣じんしんは田園でんえんを領りやうして
世上せじやうを保たもつ、而しかに他方たほうより賊ぞく来きつて此の国を侵逼しんびつし自界叛逆じかいほんぎやくし
て此の地を掠りやくり領りやうせば豈あ驚おどろかざらんや豈あ騷さうがざらんや、国を
失うい家なを滅めせば何れいずれの所にか世を遁のがれん」等云云りっしょうあんこころん已上 立正安国論

の言なり。

今日蓮重いまにちれんかねて記しるして云いわく大覺世尊だいかくせそん記しるして云いわく「苦得外道くどくげどう七日有
つて死べす可べし死しして後食吐鬼じきどきに生くれん苦得外道くどくげどうの言いわく七日の内に
は死べす可べからず我羅漢らかんを得えて餓鬼道がきだうに生くれじと」等云云、瞻婆城せんばじやう
の長者ちやうじやの婦懷妊かいにんす六師外道げどうの云いわく「女子を生まん」仏記しるして云いわく

「男子を生まん」等云云、仏記して云く「卻て後三月あつて我
当に般涅槃すべし」等云云、一切の外道云く「是れ妄語なり」等
云云、仏の記の如く二月十五日に般涅槃し給う、法華經の第二に
云く「舍利弗汝未來世に於て無量無辺不可思議劫を過て乃至
當に作仏するを得べし号をば華光如来と曰わん」等云云、又第三
の卷に云く「我が此の弟子摩訶迦葉未來世に於て當に三百萬億に
奉觀することを得べし乃至最後身に於て仏と成ることを得ん名を
ば光明如来と曰わん」等云云、又第四の卷に云く「又如来滅度
の後に若し人有つて妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も
隨喜せん者には我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授く」等云云、
此等の經文は仏・未來世の事を記し給う、上に挙ぐる所の苦得
外道等の三事・符合せずんば誰か仏語を信ぜん・設い多宝仏

証明しょうみょうを加くえ分身ふんじんの諸しよ仏ぶつ長舌ちやうぜつを梵天ぼんてんに付つくとも信用しんようし難がたきか、
今またもつ亦もつ以もつて是かくの如ごとし設たといにちれんい日蓮富楼那ふるなの并なを得もくれんて目連もくれんの通げんを現げんずと
も勘かんうる所ころ・当あたららずんば誰たれか之これを信いぜん、去いぬる文永五年ぶんえいに蒙もう古
国ちやうじやうの牒状とくじやう渡来とらいする所ところをば朝あしたに賢人けんじん有あらば之これを怪むあやしむ可べし、
設たといそい其それを信いぬぜずとも去いぬる文永八年九月十二日御勘氣ぶんえいを蒙こおむりし
時とき・吐はく所ところの強言かうげん次の年二月十一日に符合ごうごせしむ、情有こころらん者
は之これを信べず可いかし何いに況いわんや今年既すでに彼の国災兵の上二箇国を奪うばい取
る設たといほくせきい木石きせき為なりと雖いえども設たといきんじゆうい禽獸いんじゆう為なりと雖いえども感いず可べく驚おどろく可べきに
偏ひとえに只事ただに非あらず天魔てんまの国に入いつて醉よめえるが如ごとく狂くるえるが如ごとく
歎なげく可べし哀かなむ可べし恐おそる可べし厭いとう可べし、又立正安国論りっしょうあんこくろんに云いく
「若もし執心しゅうしん翻ひるえらずして亦曲意またこくい猶存いせば早うく有い為いの郷さとを辞じして
必必ず無間むげんの獄ごくに墮だせん」等云云、今・符合がっするを以もつて未み来らいを案あんず

るに日本国の上下・万人阿鼻大城に堕ちんこと大地を的と為す
が如し、此等は且らく之を置く日蓮が弟子等又此の大難脱れ難き
か彼の不輕輕毀の衆は現身に信伏随従の四字を加れども猶先謗
の強きに依つて先ず阿鼻大城に墮して千劫を経歴して大苦惱
を受く、今日蓮が弟子等も亦是くの如し・或は信じ・或は伏し
・或は随い・或は従う但だ名のみ之を仮りて心中に染まざる
信心薄き者は設い千劫をば経ずとも・或は一無間・或は二無間
乃至十百無間・疑無からん者か是を免れんと欲せば各・薬王・
楽法の如く臂を焼き皮を剥ぎ雪山国王等の如く身を投げ心を仕
えよ、若し爾らずんば五体を地に投げ・身に汗を流せ、若し爾ら
ずんば珍宝を以て仏前に積み若し爾らずんば奴婢と為つて持者に
奉えよ若し爾らずんば・等云云、四悉檀を以て時に適うのみ、我

弟子等の中にも信心薄淡き者は臨終の時阿鼻獄の相を現ず可し
其の時・我を恨む可からず等云云。

文永十一年太歳甲戌十二月十五日 日蓮之を記す

◆七五 上行菩薩 結要付属口伝 建治元年 五十四歳御作 於

身延 538p

妙法蓮華經見宝塔品第十一「爾の時に仏前に七宝の塔有り」

と云云、又云く「即時に釈迦牟尼仏神通力を以て諸の大衆を接

して皆虚空に在たもう、大音声を以て普く四衆に告げたまわく

誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説かん今正く是れ時

なり如来久しからずして当に涅槃に入るべし仏・此の妙法華經を

以て付属して在ること有らしめんと欲す」云云、又云く「諸余の

教典数恒沙の如し」と云云、又云く「諸の大衆に告ぐ我滅度の

後に誰か能く斯の經を護持し読誦せん今・仏前に於て自ら誓言を
説け」と又云く「此の經は持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち
歡喜す諸仏も亦然なり是の如きの人は諸仏の歎め給う所なり」と
云云、妙法蓮華經勸持品第十三「爾時藥王菩薩摩訶薩及び大樂
說菩薩摩訶薩二萬の菩薩眷屬と俱に皆仏前に於て是の誓言を作さ
く唯・願くば世尊以て慮したもうべからず我等・仏の滅後に
於て當に此の經典を奉持し読誦し説きたてまつるべし、後の
惡世の衆生は善根轉た少くして増上慢多く利供養を貪り不善根
を増し解脱を遠離せん教化すべきこと難しと雖も我等當に大忍力
を起して此の經を讀誦し持説し書寫し種種に供養して身命を惜
まざるべし、爾の時に衆中の五百の阿羅漢の授記を得たる者・
仏に白して言さく世尊・我れ等亦自ら誓願すらく異の国土に於て

広く此の経を説かんと、復また学無学の八千人の授記じゆきを得たる者有り
座よ従り起たてて合掌がっしょうし仏に向いたてまつりて是せいこん誓言なを作さく世尊せそん・
我等亦当われらまたまさに他の国土こくどに於て広く此の経を説きたてまつるべし・
所以ゆえんは何ん是いかの娑婆国しゃばこくの中は人・弊惡へいあく多く増上慢そうじょうまんを懷いだき功德くどく
浅薄せんぱくに瞋しんじよくてんこく濁諂曲ふじつにして心不実なるが故に」と云云、又云く「爾その
時に世尊せそん・八十万億那由他なゆたの諸の菩薩摩訶薩もろもろぼさつまかさつを視す是の諸の菩薩もろもろぼさつ
は皆是みな阿惟越致あゆいおつちなり、即時そくじに諸の菩薩俱もろもろぼさつともに同く声を發して偈げを説
いて言さく、唯願ただくは慮うらおもいしたもうべからず仏の滅度めつどの後・恐怖くふ
惡世あくせの中に於て我等当われらまさに広く説くべし諸の無智もろもろむちの人の惡口罵詈あつくめり等
し及び刀杖およとうじょうを加うる者有らん我等皆当われらみなまさに忍しのぶべし、惡世あくせの中の
比丘びくは邪智じゃちにして心諂曲てんこくに未だ得ざるをこれ得たりと謂おもい我慢がまんの
心充滿じゅうまんせん、或あるは阿練若あれんにやに納衣のうえにして空閑くうげんに在り自ら眞みずかの道

を行ずと謂おもいて人間にんげんを輕賤きやうせんする者有らん、利養りやうに貪著とんじやくするが故ゆえに白衣びやくえの与ために法を説いて世に恭敬きやうけいせらるること六通ろくつうの羅漢らかんの如ごとくならん是この人惡心あくしんを懷いだき常に世俗せぞくの事を念おもい名を阿練若あれんにやにかへりて好んで我等われらの過を出ださん、濁世じよくせの惡比丘あくびくは仏の方便ほうべん・隨宜ずいぎしよせつ所説しよせつの法を知らずして惡口あくくして顰蹙ひんじゆくし数数しばしば擯出ひんしゆせられん」と云云。

文句もんくの八に云く「初めいに一行は通じて邪人じやにんを明す即ち俗衆すなわそくしゆうなり、次に一行は道門どうもん増上慢ぞうじやうまんの者を明す、三に七行は僭聖せんしやう増上慢ぞうじやうまんの者を明す、故ゆえに此の三の中初めは忍しのぶ可べし次は前に過すぐ第三は最も甚はなはだし」と云云。

涌出品ゆじゆつぽんに云く「爾いの時わに他方たほうの国土こくどの諸もろもろの来れる菩薩摩訶薩ぼさつまかさとつ八はち恒河沙こうがしやの数に過すぎたり、大衆たいしゆうの中に於おいて起立がっしやうし合掌がっしやうし礼なを作し

て仏に白して言いわく、世尊若せそんもし我等われらに仏の滅後めつごに於おいて此の娑婆世界しゃばせかいに在あつて勤加精進ごんかしやうじんし是の經典きやうてんを護持ごじし読誦どくじゆし書寫しやしやし供養くようせんことを聴ゆるしたまわば当まさに此の土に於おいて広く之これを説ときたてまつるべし、爾その時に仏諸の菩薩摩訶薩衆もろもろぼさつまかさつに告く止ぜんなんしみな善男子汝等なんじが此の經を護持ごじせんことを須もちいじ所以ゆえんは何ん我が娑婆世界しゃばせかいに自みづから六万恒河沙等ごうがしやの菩薩摩訶薩有ぼさつまかさつり、一一の菩薩各六万恒河沙ごうがしやの眷属有けんぞくり是の諸人等しよにん能よく我が滅後めつごに於おいて護持ごじし読誦どくじゆし広く此の經を説とかん」と云云五卷畢。

属累品そくるいほんに云いわく「爾その時に釈迦牟尼仏法座しやかむにぶつほうざよ從り起つて大神力じんりきを現げんしたもう右の手を以もつて無量の菩薩摩訶薩むりようぼさつまかさつの頂いただきを摩なでて是の言こを作なしたまわく我無量百千万億むりようせんまん・阿僧祇劫あそぎこうに於おいて是の得難がたきあのかたらさんみやくさんぼだい阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみやくさんぼだいの法しゆうしゆうを修習しゆうしゆうせり今もつ以もつて汝等なんじに付属ふぞくす汝等なんじ

まさ いっしん 当に一心に此の法を流布して広く増益せしむべし、是くの如く三

たび諸の菩薩摩訶薩の頂を摩でて是の言を作したまわく我無量

せんまん 百千万億・阿僧祇劫に於て是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を

しゅうしゅう

修習せり今以て汝等に付属す、汝等当に受持読誦し広く此の

のべ

法を宣べて一切衆生をして普く聞知することを得せしむべし

ゆえん

所以は何ん如来は大慈悲有つて諸の慳☆無く亦畏るる所無く能く

しゅじょう

衆生に仏の智慧・如来の智慧・自然の智慧を与う如来は一切

しゅじょう

衆生の大施主なり汝等亦随つて如来の法を学ぶべし慳☆を生ず

なけれ

ること勿れ」と云云。

もんく

文句の九に云く品下「如来之を止めたもうに凡そ三義有り、汝

みずか

等各各に自ら己が任有り若し此の土に住せば彼の利益を廃せん、

たほう

又他方は此土結縁の事浅し・宣授せんと欲すと雖も必ず巨益無か

らん又若し之を許さば則ち下を召すことを得ず下若し来らずんば
迹を破はすることを得ず遠を顕あらわすことを得ず是を三義もつて如来
之を止めたもうと為す、下方を召して来らしむるに亦三義有り
是れ我が弟子なり我が法を弘むべし縁深広なるを以て能く此の土
に遍へんじて益やくし分身の土に遍へんして益やくし他方の土に遍へんして益やくす、又
開近顕遠かいこんけんのんすることを得是の故に彼を止めて下を召すなり」と云云。
記に云く「問う諸の仏・菩薩は共に未熟みじゆくを熟す何の彼此有らん
分身散影ふんじんさんようして普く十方に遍へんす而るを己任及び廢彼はいひと言いうや、答
う諸の仏・菩薩は實に彼此無し但機きに在無有むし無始むし法爾ほうになり故に
第二の義を以て初の義を顕あらわして結縁事けちえん浅と云う、初め此の仏・
菩薩ぼさつに従つて結縁けちえんし還つて此の仏・菩薩ぼさつに於て成就じょうじゆす」と云云、
又云く「子父の法を弘ひろむるに世界の益有せかいり」と云云、記の八に云く

「因藥王とは本藥王に託し茲に因せて余に告ぐ此れ流通の初なり
先に八万の大士に告ぐとは、大論に云く法華は是秘密なれば諸の
菩薩に付すと、下の文に下方を召すが如きは尚本眷属を待つ 驗
し余は未だ堪えず」云云、問う何が故ぞ他方を止めて本眷属を
召すや、答う私の義有る可らず靈山の聴衆天台の所判に任す
可し、疏に云く「涌出に三と為す一には他方の菩薩弘經を請す
・二には如来許したまわず・三には下方の涌出なり、他方の菩薩
は通經の福の大なることを聞いて咸く願を發し此の土に住して
弘宣んと欲するが故に請ず、之が為に如来之を止めたもう」等
と云云。

結要付属の事

初に称歎付属・爾時仏告 猶不能尽

けつちようかんじ
結要勸持四

けつちようふそくいようごんし
二に結要付属以要言之

せんじけんせつ
宣示顯說

三に正勸付属是故汝等起塔供養
ふそく なんじ くらう

四に釈勸付属所以者何而般涅槃
ふそく ゆえん はつねはん

疏じよの十じふに云いく「爾時にじぶつこうじようぎよう仏告ふつ 上行じやうぎやう の下したは是これ第三だいさんに結要けつちよう付属ふそくなり」

と云云、又云く「結要けつちように四句しきう有り、一切いっさい法ぽうとは一切いっさい皆是みなこれ仏法ぶつぽう

なり此こは一切いっさい皆妙名みなを結するなり一切いっさい力りきとは通達つうだつ無礙むげにして八

自在じざいを具ぐす此これは妙用みやうゆうを結するなり一切いっさい秘藏ひそうとは一切いっさい処しよに遍へんし

て皆みなこ是これ実相じつそうなり・此これは妙体みやうたいを結するなり一切いっさい深事しんじとは因果いんが

は是これ深事しんじなり此こは妙宗みやうそうを結するなり、皆かいおしきようせんじけんぜつ於此こ經宣示顯說きやうしけんせつとは総

じて一經いっきやうを結する唯ただ四しならくのみ其すうへい枢柄しゆへいを撮とつて之これを授与じゆよす」

と云云、記いに云く「結要けつちよう有四句しきうとは本・迹二門ほん・せきにもんに各宗用かくしゆう有り二

門もんの体ことは兩処殊りやうしよならず」と云云ふしやうき輔正記ふしやうきに云く付属ふそくとは此この經きやうは唯ただ

下方涌出ゆじゆつの菩薩ぼさつに付す何を以てもつの故ゆえに爾しかる法こ是れ久成くじようの法なるに
由よるが故ゆえに久成くじようの人に付す云云。

付属ふぞく

一 正く

を釈しゃくす

初に付属ふぞくに三 一 如来にやらいの付属ふぞく 二 付属ふぞく

三 付属ふぞくを

誠いましむ余じんぼうの深しんぼう 法の中の下なり

属累品ぞくるいほんの文段に二有り

二 菩薩ぼさつの領受

三 事畢て唱散す

次に時衆かんきの歡喜かんき 說是語時げだつけんごの下三行

余 第一だいいちの五百歳げだつけんご 解脱堅固

第二の五百歳

ぜんじようけんご
禅定堅固

だいしつきよう
大集経の五箇五百歳とは

第三の五百歳

どくじゆたぶんけんご
読誦多聞堅固

第四の五百歳

たそうとうじけんご
多造塔寺堅固

第五の五百歳

とうじようけんご
闘諍堅固

そ
夫れ仏滅度の後二月十六日より正法なり、迦葉仏の付属を

う
請け次に阿難尊者・次に商那和修・次に優婆☆多・次に提多迦此

の五人各各二十年にして一百年なり、其の間は但小乗経の

ほうもん
法門のみ弘通して諸大乘経は名字もなし何に況や法華経をや、

みしゃか
次に弥遮迦・仏陀難陀・仏駄密多・脇比丘・富那奢等の五人は五

百年の間・大乘の法門少少出来すと雖も取立てて弘通せず但

しょうじようきよう
小乗経を正と為す已上大集経の前の五百年解脱堅固に当れ

しょうほう
り、正法の後の五百年には馬鳴・竜樹乃至師子等の十余人の

ひとびと
人人始には外道げどうの家に入り次には小乗經しょうじょうきょうを極きわめ後には諸しよ
だいじょうきよう
大乘經だいじょうきようを以て散散もつに小乗經しょうじょうきよう等を破失はしつしき、然りしかと雖もいえど
ごんだいじょう
権大乘と法華經ほけきょうとの勝劣しょうれつ未だ分ぶん明みんならず淺深せんじんを書かせ給たまいし
かども本・迹の十妙・二乗作仏・久遠実成・已今当等・
ひやつかいせんによ
百界千如・一念三千の法門ほうもんをば名をも書き給たまわず此大集經だいしつきようの
ぜんじょうけんこ
禪定堅固に当れり、次に像法そうほうに入つては天竺てんじくは皆権実みなごんじつ雜乱そちらんして
じこく
地獄に墮だする者数百人ありき、像法そうほうに入つて一百余年の間は漢土かんと
どうし
の道士と月氏の仏法ぶつぽうと諍論じょうろん未だ事定らざる故に仏法ぶつぽうを信ずる心
いま
未だ深からずまして権実ごんじつを分くる事なし、摩騰竺法蘭まとうじくほうらんは自は知り
しか
て而も大小だいしょうを分たず権実ごんじつまでは思いもよらず、其その後・魏・晋
・宋・齊・梁の五代の間漸く仏法ぶつぽうの中に大小だいしょう・権実ごんじつ・顯密けんみつを
あらそ
諍いいし程に何れをも道理どうりとも聞えず南三・北七の十流・我意がいに

仏法ぶつぽうを弘ひろむ、爾しかれども大おおに分わかつに一切いっさい經きやうの中なかには一いには華嚴けごん・

二にには涅槃ねはん・三さんには法華ほっけと云云、爾しかれども像法ぞうぽうの始はじの四百年しひゃくねんに當あつて天台大師てんだいだいし震旦しんたんに出現しゅつげんして南北なんぼくの邪義じやぎ・一一これに之はを破おし畢おわ

ぬ、此大集經だいしつきやうの多聞堅固たもんけんこの時ときに當あれり、像法ぞうぽうの後の五百年ごひゃくねんには

三論さんろん・法相ほっそう・乃至ないし・真言等しんごんを各三藏さんぞう將來さうほうす、像法ぞうぽうに入いつて四百余しやくそん

年ねんあつて日本国にほんこくへ百済国くだらより一切いっさい經きやう並ならに釈尊しやくそんの木像そうに僧尼等そうにを渡わた

す梁の末きんめいてんのう・陳の始めちんに相當あひあたる日本国にほんこくには神武天皇てんのうより第三十代だい

欽明天皇きんめいてんのうの御宇ぎやうなり、像法ぞうほうの後の五百年ごひゃくねんに三論さんろん・法相等ほっそうの六宗ろくしゆう

面めん面の異義いぎあり爾しかれども各邪義じやぎなり、像法ぞうほう八百年はっぴゃくねんに相當あひあたつて

伝教大師でんきやうだいし・日本にほんに出いでて彼の六宗ろくしゆうの義ぎを皆責みなめ伏たませ給たまえりと云

云、伝教でんきやう已後いごには東寺とうじ・園城寺等おんじやうじの諸寺しよ日本にほん一同いっどうに云いく

「真言宗しんごんしゆうは天台宗てんだいしゆうに勝すぐれたり」と云云、此大集經だいしつきやうの多造塔寺たぞうとうじ

- 1383 -

堅固けんこの時なり今末法まつぽうに入つて仏滅後ぶつめつ・二千二百二十余年に當りて

しょうにんしゅつせ だいしつきよう とうじようこんしやうびやくほうおんもつ

聖人出世しやかす是は大集經の鬪諍言だいいしつきよう 訟白法隱没にんじゆうの時なり云云、

そ しやか しゅつせ

夫れ釈迦の御出世は住劫第九の滅・人壽百歳の時なり百歳と十

ちゆうげん

ざいせ

しやうぞう

まつぽう

まんねん

歳との中間は在世は五十年・滅後は正像二千年と末法一万年と

ちゆうげん

ほけきようるふ

めつこ

あ

べ

いわゆるざいせ

なり、其の中間に法華經流布の時二度之れ有る可し、所謂在世

ちゆうげん

ほけきようるふ

めつこ

あ

べ

いわゆるざいせ

の八年・滅後には末法の始の五百年なり。

めつこ

まつぽう

夫れ佛法を学する法には必ず時を知る可きなり過去の大通

ぶつぽう

しゅつせ

たまい

いちげ

これ

いわ

智勝ちしょう仏は出世しゅつせし給いて十小劫が間一偈も之を説かず經に云く「一

ちしょうぶつ

しゅつせ

たまい

いちげ

これ

いわ

坐十小劫」と云云、又云く「仏・時末いただ至らずと知しめして請

むくねん

いわ

いふ

いた

しる

しやう

を受け默然として坐したまえり」と、今の教主釈尊も四十余年

ほけきよう

と

いわ

いわ

せつじいま

いた

の間は法華經を説きたまわず經に云く「説時末いただ至らざるが故な

ほけきよう

と

いわ

いわ

せつじいま

いた

り」等云云、老子は母の胎に処して八十年・弥勒菩薩は兜率の内

ろうし

ろうし

しよ

しよ

せつじいま

いた

いわ

みろく

とそつ

院にして五十六億七千萬歳せんまんを待ちたもう仏法ぶつぽうを修行しゅぎようする人人ひとひと時ときを知らざらんや、爾しからば末法まっぽうの始はじめには純円じゅんえん一実いちじつの流布るふとは知らざれども經文きようもんに任まかするに「我が滅度めつどの後・後このごの五百歳ひゃくさいの中に閻浮提えんぶだいに広宣流布こうせんるふして断絶だんぜつせしむること無けん」と云云、誠にもつ分ぶん明みょうなり。

◆七六

法華初心成仏抄

建治三年

五十六歳御作

与岡宮

妙法尼

544p

問うて云く八宗・九宗・十宗の中に何か釈迦仏の立て給へる

宗なるや、答えて云く法華宗は釈迦所立の宗なり其の故は已説

・今説・当説の中には法華經第一なりと説き給う是れ釈迦仏の立

て給う処の御語なり、故に法華經をば仏立宗と云い又は

法華宗と云う又天台宗とも云うなり、故に伝教大師の釈に云く

天台所釈の法華の宗は釈迦世尊所立の宗と云へり、法華より

外の經には全く已今当の文なきなり已説とは法華より已前の

四十余年の諸經を云う今説とは無量義經を云う当説とは涅槃經

を云う此の三説の外に法華經計り成仏する宗なりと仏定め給へ

り、余宗は仏涅槃し給いて後・或は菩薩・或は人師達の建立す

る宗なり仏の御定を背きて菩薩・人師の立てたる宗を用ゆべきか
菩薩・人師の語を背きて仏の立て給へる宗を用ゆべきか又何れ
をも思い思いに我が心に任せて志あらん經法を
持つべきかと思う処に仏是を兼て知し召して末法濁惡の世に
眞實の道心あらん人人の持つべき經を定め給へり、經に云く「法
に依つて人に依らざれ・義に依つて語に依らざれ知に依つて識
に依らざれ・了義經に依つて不了義經に依らざれ」文、此の文
の心は菩薩・人師の言には依るべからず仏の御定を用いよ華嚴・
阿含・方等・般若經等の眞言・禪宗・念仏等の法には依らざれ
了義經を持つべし了義經と云うは法華經を持つべしと云う文な
り。

問うて云く今・日本国を見るに当時五濁の障重く鬭諍堅固に

して瞋^{しん}恚^にの心猛^{たけ}く嫉妬^{しつと}の思い甚^{はなはだ}しかかる国かかる時には何^{いずれ}れの
経^{きやう}をか弘^{ひろ}むべきや、答^{こた}えて云^いく法華^{ほけきやう}経^{きやう}を弘^{ひろ}むべき国なり、其^{その}の故^{ゆえ}
は法華^{ほけきやう}経^{きやう}に云^いく「閻浮提^{えんぶだい}の内に広^{ひろ}く流布^{るふ}せしめて断絶^{だんぜつ}せざらしめ
ん」等云云、瑜伽^{ゆいが}論^{ろん}には丑寅^{うしとら}の隅^{すみ}に大乘^{だいじやう}・妙法蓮華^{みやうほうれんげきやう}経^{きやう}の流布^{るふ}
すべき小国^{しょうこく}ありと見えたる

り、安然^{あんねん}和尚^{わじやう}云^いく「我が日本^{にほん}国^{こく}」等云云、天竺^{てんじく}よりは丑寅^{うしとら}の角^{すみ}に
此^この日本^{にほん}国^{こく}は当^{あた}るなり、又慧心^{えしん}僧都^{そうず}の一乗^{いちじやう}要決^{ようけつ}に云^いく「日本^{にほん}
州^{しゅう}円機^{えんぎ}純^{じゆん}一^{いつ}にして朝野^{おんごん}遠近^{えんきん}同^{どう}く一乗^{いちじやう}に帰^{かへ}り緇素^{しそ}貴賤^{きせん}悉^{ことごと}く成仏^{じやうぶつ}
期^ごせん」云云、此^この文^{ぶん}の心^{しん}は日本^{にほん}国^{こく}は京鎌倉^{かまくら}・筑紫^{つくし}・鎮西^{ちんせい}みちを
く・遠^{とほ}きも近^ききも法華^{ほけきやう}一乗^{いちじやう}の機^きのみ有りて上^{かみ}も下^{しも}も貴^{たか}も賤^{ひな}も
持戒^{じがい}も破戒^{はがい}も男^{おとこ}も女^めも皆^{みな}おしなべて法華^{ほけきやう}経^{きやう}にて成仏^{じやうぶつ}すべき国^{くに}な
りと云^いう文^{ぶん}なり、譬^{たと}えば崑崙山^{こんろん}に石^{いし}なく蓬萊山^{ほうらいさん}に毒^{どく}なきが如^{ごと}く

にほんこく

ほけきよう

しか

ほけきよう

たき御

日本国は純に法華經の国なり、而るに法華經は元よりめでたき御經なれば誰か信ぜざると語には云うて而も昼夜朝暮に弥陀念仏

ちやうぼ みだねんぶつ

を申す人は薬はめでたしとほめて朝夕毒を服する者の如し、

ちやうせき

ごと

・或は念仏も法華經も一なりと云はん人は石も玉も上臈も下臈

じやうろう

げろう

も毒も薬も一なりと云わん者の如し、其の上法華經を怨み嫉み

ほけきよう

あだ

ねた

惡み毀り輕しめ賤む族のみ多し、經に云く「一切世間・多怨

にく

そしり

やから

いわ

いっさいせけん

たおん

難信」又云く「如来現在・猶多怨嫉・況滅度後」の經文少しも

なんしん

いわ

にやらいげんざい

ゆたおんしつ

きやうめつとこ

きやうもん

きやうもん

違はず当れり、されば伝教大師の釈に云く「代を語れば則ち像

でんぎやうだいし

いわ

ことば

すなわ

の終り末の初め地を尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原ぬれば則ち

たず

とう

かつ

きやうめつとこ

きやうめつとこ

すなわ

五濁の生・鬭諍の時なり經に云く猶多怨嫉・況滅度後と此の言

ごじよく

とうじよう

いわ

ゆたおんしつ

きやうめつとこ

良に以有るなり」と、此等の文釈をもつて知るべし、日本国に

まことゆえあ

これら

にほんこく

法華經より外の真言・禪・律宗・念仏宗等の經教山山寺寺朝

ほけきよう

ほか

しんこん

禪

りっしゆう

ねんぶつしゆう

きやうぎよう

きやうぎよう

きやうぎよう

野遠近おんこん ひろに弘まるといへども正まさく国に相応そうおうして仏の御本意ごほんいに相叶あひあひ
生死しょうじを離るべき法にはあらざるなり。

問いうて云いく華嚴宗には五教を立て余の一切いっさいの經は劣おとれり華嚴經
は勝まさると云ひ、真言宗しんこんしゅうには十住じゅうじゅう心を立て余の一切いっさい經は顯經
なれば劣るなり真言宗しんこんしゅうは密教みつぎょうなれば勝すぐれたりと云う、禪宗ぜんしゅうに
は余の一切いっさい經をば教内きやうないと簡きいて教外別伝きやうがいべつでん・不立文字ふりゅうもんじと立て壁に
向むいて悟さとれば禪宗ぜんしゅう独ひとりり勝すぐれたりと云う、淨土宗じやうどしゅうには正しやう雜ざ二行にぎやう
を立て法華經等ほけきやうどうの一切いっさい經をば捨しや閉へい閣かく拋ほうし雜行ざうぎやうと簡きひ淨土じやうどの
三部經さんぶきやうを機きに叶あひめでたき正行しやうぎやうなりと云う、各各がが・我慢がまんを立て
互たがひに偏へん執しゅうを作なす何いれずれか釈迦しやか仏ぶつの御本意ごほんいなるや、答こたえて云いく宗宗しゅうしゅう
各別かくべつに我われが經きやうこそすぐれたれ余經よきやうは劣おとれりと云いいて我われが宗しゅう・吉よきと
云いう事は唯ただ是これ人師にんしの言ことにて仏説ぶつせつにあらず、但ただし法華經計ほけきやうばかりこそ

仏五味の譬たとえを説ときて五時の教に当て此の經の勝すぐれたる由よしを説とき、

・或あるは又已今当の三説の中に仏になる道は法華經に及ぶ經なしと

云う事は正しき仏の金言きんげんなり、然しかるに我が經は法華經に勝すぐれたり

我が宗は法華宗に勝すぐれたりと云はん人は下臈げろうが上臈じょうろうを凡下ほんげと

下くだし相伝そうでんの從者が主に敵対して我が下人なりと云わんが如ごとし何なんぞ

大罪たいざいに行なはれざらんや、法華經より余經を下す事は人師にんしの言に

あらず經文きょうもん分明ふんみょうなり、譬たとえば国王こくおうの万人ばんにんに勝すぐれたりと名乗り侍

の凡下ほんげを下臈げろうと云わんに何の禍かあるべきや、此の經は是これ仏の

御本意ごほんいなり天台てんだい・妙樂みょうらくの正意なり。

問うて云く釈迦しゃか一期いちごの説法は皆衆生しゅじょうのためなり衆生の根性こんじょう

万差なれば説法せつぽうも種種しゅじゅなり何れも皆得道みたとくどうなるを本意ほんいとす、然しかれば

我が有縁うえんの經は人の為ためには無縁むえんなり人の有縁うえんの經は我が為ためには

むえん 無縁なり故に余経の念仏によりて得道なるべき者の為には観經

等はめでたし法華經等は無用なり、法華によりて成仏得道なる

べき者の為には余経は無用なり法華經はめでたし、四十余年・

未顕真実と説くも雖示種種道・其実為仏乗と云うも正直捨方便

・但説無上道と云うも法華得道の機の前事なりと云う事・世こ

ぞつてあはれ然るべき道理かななんと思へり如何心うべきや、

若し爾らば大乘・小乗の差別もなく權教・実教の不同もな

きなり何れをか仏の本意と説き何れをか成仏の法と説き給える

や甚・だいぶかし・いぶかし、答えて云く凡そ仏の出世は始め

より妙法を説かんと申し食ししかども

衆生の機縁万差にしてととのをらざりしかば三七日の間思惟し

四十余年の程・こしらへおおせて最後に此の妙法を説き給う、

故に「若し但も 仏乗ぶつじょうを讃しゅじょうせば衆生しゅじょう苦くに没在ぼつざいし是この法はを信しんずること
能あたわらず、法はを破はして信しんぜざるが故ゆえに三惡道さんあくどうに墜おちん」と説とき「世尊せそん
の法はは久くくして後かな要まさらず当しんじつに眞實とを説ときたまうべし」とも云いへり、
此この文ぶんの意いは始はめより此この仏乗ぶつじょうを説とかんと思おもし食くししかども
仏法ぶつぽうの氣分けぶんもなき衆生しゅじょうは信しんぜずして定さだめて謗そしりを至いたさん、故ゆえに
機きをひとしなに誘ととのへ給たまうほどに初はじめに華嚴けごん・阿含あこん・方等ほうとう・般若等はんんにや
の經きやうを四十余年よんじゅうよねんの間まとき最さい後に法華經ほけきやうをとき給たまう時とき、四十余年よんじゅうよねんの
座席ざせきにありし身子しんし・目連等もくれんの万二千まんにせんの声聞しょうもん・文殊もんじゆ・弥勒等みろくの
八万はちまんの菩薩ぼさつ・万億りんのうの輪王等りんおう・梵王ぼんのう・帝釈等たいしゃくの無量むりやうの天人てんにん各爾前にぜん
に聞ききし処ところの法はをば如來にやらいの無量むりやうの知見ちけんを失うしなえりと云いふ、法華經ほけきやう
を聞きいては無上むじやうの宝聚ほうじゆ求もとめざるに自みづから得えたりと悦よろこび給たまふ、されば
「我等われら昔このかたより來しば世尊せそんの説とを聞ききたてまつるに未いまだ曾かつて

かくのごとく是くの如き深妙の上法を聞かず」とも、「仏希有の法を説き給う
昔より未だ曾つて聞かざる所なり」とも説き給う、此等の文の心
は四十余年の程若干の説法を聴聞せしかども法華經の様なる法
をば総てきかず又仏も終に説かせ給はずと法華經を讃たる文なり
四十二年の聴と今經の聴とをばわけたくらぶべからず、然るに
今經をそれ法華經得道の人の為にして爾前得道の者の為には
無用なりと云う事大なる誤りなり、をのづから四十二年の經の内
には一機・一縁の為にしつらう処の方便なれば設い有縁無縁の
沙汰はありとも法華經は爾前の經經の座にして得益しつる機ど
もを押さなて一純に調えて説き給ひし間・有縁無縁の沙汰ある
べからざるなり、悲しいかな大小・権実みだりがわしく仏の
本懷を失いて爾前得道の者のためには法華經無用なりと云へる事

よくよくつし
を能能慎むべし・恐るべし、古の徳一大師と云いし人・此の義を
人にも教へ我が心にも存して・さて法華經を読み給いしを傳教
だいし
大師・此の人を破し給ふ言に「法華經を讀すと雖も還つて法華の
ころ
心を死す」と責め給いしかば徳一大師は舌八にさけて失せ給ひき。
問うて云く天台の釈の中に菩薩処得入と云う文は法華經は
にいよう
但二乗の爲にして菩薩の爲ならず菩薩は爾前の經の中にしても
ため
得道なると見えたり若し爾らば未顕眞実も正直捨方便等も總じ
とくどう
て法華經八卷の内皆以て二乗の爲にして菩薩は一人も有るまじき
ほけきよう
と意うべきか如何、答えて云く法華經は但二乗の爲にして菩薩の
いかん
爲ならずと云う事は天台より已前・唐土に南三・北七と申して十
てんだい
人の学匠の義なり、天台は其の義を破し失て今は弘まらず若し
がくしよう
菩薩なしと云はば菩薩是の法を聞いて疑網皆已に除くと云える豈
ぼさつ
あに

こ
是れ菩薩ぼさつの得益とくやくなしと云わんや、それに尚鈍根なとこんの菩薩ぼさつは二乗にじょうとつ

れて得益とくやくあれども利根りこんの菩薩ぼさつは爾前にぜんの経きやうにて得益とくやくすと云はば

「利根りこん・鈍根どんこん等しく法雨ほううを雨ふす」と説とき「一切いっさいの菩薩ぼさつの

阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみやくさんぼだいは皆みな此經こに属ぞくせり」と説いくは何いかに、此等これらの文

の心こころは利根りこんにてもあれ鈍根どんこんにてもあれ持戒じかいにてもあれ破戒はかいにても

あれ貴たかもあれ賤せんもあれ一切いっさいの菩薩ぼさつ・凡夫ぼんぷ・二乗にじょうは法華經ほけきやうにて

成仏じやうぶつ得道とくどうなるべしと云う文ぶんなるをや、又法華得益ほけきとくやくの菩薩ぼさつは皆みな

鈍根どんこんなりと云はば普賢ふげん・文殊もんじゆ・弥勒みろく・藥王やくおう等の八万はちまんの菩薩ぼさつをば

鈍根どんこんなりと云うべきか、其その外ほかに爾前にぜんの経きやうにて得道とくどうする利根りこんの

菩薩ぼさつと云うは何様いかようなる菩薩ぼさつぞや、抑そも爾前にぜんに菩薩ぼさつの得道とくどうと云うは

法華經ほけきやうの如ごとき得道とくどうにて候さうか、其そのならば法華經ほけきやうの得道とくどうにて爾前にぜんの得

分ぶんにあらず、又法華經ほけきやうより外ほかの得道とくどうならば已今当いこんとうの中には何れぞ

や、いかさまにも法華經ほけきょうならぬ得道とくどうは当分の得道とうぶん とくどうにて真実しんじつの得道とくどうにあらず、故ゆえに無量義經むりょうぎきょうには「是かくのゆえの故しゆじょうに衆生とくどうの得道さべつ差別せりせり」と云いい又「終ついに無上菩提むじょうぼだいを成じょうずることを得じ」と云へり、文の心にぜんは爾前きようぎきょうの經經きょうには得道とくどうの差別さべつを説くと云へども終ついに無上菩提むじょうぼだいの法華經ほけきょうの得道とくどうはなしとこそ仏とは説たまひき給たまひいて候へ。

問いうて云いく当時とうじは釈尊しゃくそん入滅にゅうめつの後・今に二千二百三十余年いっさいききょうなり、一切經いっさいききょうの中に何いずれの經が時そうおうに相応ひろして弘りしやうまり利生あも有るべきや大集經だいしききょうの五箇ごの五百歳ごひゃくさいの中の第五ごの五百歳ごひゃくさいに当時とうじはあたれり、其その第五ごの五百歳ごひゃくさいをば鬪諍堅固とうじやうけんこ・白法びやくほう隱没おんもつと云つて人の心こころたけく腹はらあしく貪欲とんよく・瞋恚しんに・強盛きやうじやうなれば軍合戦ぐんがっせんのみ盛さかんにして仏法ぶつぽうの中に先ひろまき先ひろまき弘ひろりし所の真言しんごん・禪宗ぜんしゆ・念仏持戒等ねんぶつじかいの白法びやくほうはおんもつ隱没おんもつすべしと仏説とき給たまへり、第一だいいちの五百歳・第二だいいちの五百歳・第三

の五百歳・第四の五百歳を見るに成仏じょうぶつの道こそ末顕真実みけんしんじつなれ

せけん

世間の事法は仏の御言みことば一分も違はず是これを以て之これを思うに当時とうじの

とうじょうけんこ

ひやくほうおんもつ

きんげん

しか

まっぼう

鬪諍堅固・白法隱没の金言も違う事あらじ、若爾しからば末法まっぼうには

いずれ

とくやく

いずれ

ぼさつ

りしやう

何の法も得益あるべからず何れの仏・菩薩も利生あるべからずと

いずれ

いかに

いずれ

ぼさつ

いずれ

見えたり如何、さてもだして何の仏菩薩にもつかへ奉らず何の法

いかに

たの

いずれ

ごしやう

いかに

をも行ぜず憑たのむ方なくして候べきか、後世をば如何が思い定め候

いかに

まっぼうとうじ

くおんじつじやう

しかぶつじやうぎやうぼさつ

べきや、答えて云く末法当時は久遠実成の釈迦仏上行菩薩・

むへんぎやうぼさつ

ひろ

たま

ほけきやう

かんじん

なむ

無辺行菩薩等の弘めさせ給うべき法華經二十八品の肝心たる南無

みやうほうれんげきやう

ぼか

ひろ

りしやうとくやく

妙法蓮華經の七字計り此の国に弘まりて利生得益もあり

じやうぎやうぼさつ

りしやうさか

そのゆえ

きやうもん

上行菩薩の御利生盛んなるべき時なり、其の故は經文明白なり

どうしんけんこ

こころざし

くわしこれ

たず

道心堅固にして志あらん人は委く是を尋ね聞くべきなり。

じやうとしゆ

ひとびとまっぼうまんねん

よきやうことごと

みだ

浄土宗の人人末法万年には余經悉く滅し弥陀一教のみと云ひ

又とうこんまっぽう当今末法は是れ五濁ごじよくの惡世あくせ唯淨土ただじょうどの一門いちもんのみ有て通入すべ可き路
なりと云そらごとつて虚言だいつきようして大集經だいしききように云くと引ひけども彼の經すべに都て此文
なし、其その上あるべき様もなし仏の在世ざいせの御言みことばに当今末法五濁とうこんまっぽうごじよく
惡世あくせには但淨土じょうどの一門いちもんのみ入るべき道なりとは説とき給たまうべからざ
る道理どうりけんねん顯然ほんきようなり本經ほんきようには「当来とうらいの世經道滅尽きようどうめつじんし特ひとり此の經を
留とどめて止住する事百歳まっぽうならん」と説まけり、末法一万年まんねんの百歳
とは全く見えず、然しかるに平等覺經とうかく・大阿彌陀經あみだを見るに仏滅後ぶつめつ・
一千年の後の百歳もつとどうりとこそ意こころえられたれ、然しかるに善導ぜんどうが惑たへる釈しを
ば尤もつとも道理どうりと人皆思みなへり是は諸僻案しよびやくあんの者たなり、但し心あらん人
は世間せけんのことはりをもつて推察すいさつせよ、大旱魃かんぱつのあらん時は大海たいかいが
先にひるべきか小河こがが先にひるべきか仏これ是とを説たまき給たまうには法華經ほけききよう
は大海たいかいなり觀經かんきよう・阿彌陀經あみだ等は小河こがなり、されば念仏ねんぶつ等の小河

びやくほう

きようもん

と ためい

の白法こそ先にひるべしと經文にも説き給いて候ひぬれ、

だいしつきよう

びやくほうおんもつ

大集經の五箇の五百歳の中の第五の五百歳・白法隱没と云と

そうかんきよう

きようどうめつじん

まつぼう

雙觀經に經道滅尽と云とは但一つ心なり、されば末法には始め

そうかんきよう

きようどうめつじん

きようどうめつじん

より雙觀經等の經道滅尽すと聞えたり經道滅尽と云は經の

りしろう

きようかんあ

利生の滅すと云う事なり、色の經卷有るにはよるべからず、さ

とうじ

きようどうめつじん

いた

あま

れば當時は經道滅尽の時に至つて二百歳に余れり、此の時は但

ほけきよう

りしろうとくやく

法華經のみ利生得益あるべし。

じゆじ

なむみようほうれんげきよう

とな たてまつ

されば此經を受持して南無妙法蓮華經と唱え奉るべしと見え

やくおうほん

このこひやくさい

えんぶだい

こうせんるふ

だんぜつ

たり藥王品には「後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せ

しむることなけん」と説き給ひ、

と

てんだいだいし

このこひやくさい

天台大師は「後の五百歳遠く

みようどう

うるおわ

しやく

みようらくだいし

すべか

だいきよう

りゆうこう

べ

妙道に沾ん」と釈し、妙樂大師は「且らく大經の流行す可き

よ

しやく

このこひやくさい

ほけきようひろ

そ

時に拠る」と釈して後の五百歳の間に法華經弘まりて其の後は

閻浮提えんぶだいの内に絶え失せる事あ有るべからずと見えたり、安樂行品あんらくぎょうほん

に云いわく「後の末世ほうめつの法滅ほうめつせんと欲ほつせん時に於おいて斯この經典きやうてんを受持じゅじ

し読誦どくじゆせん者」文神力品じんりきほんに云いわく「爾その時に仏・上行じやうぎやう等の菩薩ぼさつ

たいしゅう

大衆たいしゅうに告げたまわく属累ぞくるいの爲ゆゑの故に此の經の功德くどくを説くとも猶なお

尽あすこと能あたわじ、要もつを以もつて之これを云いわば如来にやらいの一切いっさいの所有しやうの法ほう・

如来にやらいの一切いっさいの自在じざいの神力じんりき如来にやらいの一切いっさいの秘要ひやうの蔵ぞう・如来にやらいの一切いっさいの

甚深じんじんの事こと・皆みな此經おのに於おて宣示顯說せんじけんせつす」と云云、此等これらの文の心は

しゃくそんにゆうめつ

釈尊しゃくそん入滅にゆうめつの後第五の五百歳ごひゃくさいと説くも来世らいせと云うも濁惡世じよくあくと説

くも正像しやうざう二千年ふたせんねん過ぎて末法まつぽうの始はつ二百余歳にひゃくじよの今時は唯法華經計ただほけきやうばかり

弘ひろまるべしと云う文なり、其そのの故ゆゑは人既すでにひがみ法ほも実じつにしるし

なく仏神ぶつじんの威験いげんもましますこんじやうこしやう今生こんじやう後生の祈いのりも叶かなはず、かから

ん時はたよりを得てんまて天魔はじゆんみだ・波旬はじゆん乱れ入り国土こくど常に飢渴けかちして天下てんがも

疫癘えきれいし他国たこく侵逼難たしくしんびつなん自界叛逆難じかいほんぎやくなんとて我が国に軍合戦常にありて、後

には他国たこくより兵どもをそひ来りて此の国を責せむべしと見えたり、
此こくの如ごとき鬭諍堅固とうじょうけんこの時は余経よきようの白法びやくほうは驗しるしし失せて法華経ほけきようの
りようやくもつ
大良薬を以て此の大難だいにんをば治すべしと見えたり。

法華経を以て国土を祈らば上一人より下万民ばんみんに至るまで悉ことごとく

悦よろこび栄へ給たまうべき鎮護国家の大白法びやくほうなり、但ただし阿闍世王あじゃせ・阿育あそか

大王だいおうは始めは悪王あくおうなりしかども耆婆大臣ぎばだいじんの語ことばを用ひ夜叉尊者やしやそんじやを

信じ給たまいて後にこそ賢王けんおうの名をば留め給たまいしか、南三なんざん・北七ほくひちを捨

てて知ちぎ☆法師ほっしを用ひ給たまいし陳主ちんしゅ・六宗ろくしゅうの碩徳せきとくを捨てて最澄法師さいちようほっし

を用ひ給たまいし桓武天皇かんむてんのうは今に賢王けんおうの名を留め給たまへり、知☆法師ちぎほっしと

云うは後には天台大師てんだいだいしと号し奉る最澄法師たてまつさいちようほっしは後には伝教大師でんぎようだいしと

云う是これなり、今の国主こくしゅも又是かくのくの如し現世安穩げんせあんのん・後生善処ごしょうぜんしよなるべ

き此の大白法びやくほうを信じて国土こくどに弘ひろめ給たまはば万国ばんこくに其その身を仰あおがれ
後代けんじんに賢人けんじんの名を留とどめ給たまうべし、知らず又無辺行菩薩むへんぎやうぼさつの化身けしんにて
やましますらん、又妙法みやうほうの五字ごじを弘ひろめ給たまはん智者ちしやをば・いかに
賤けんくとも上行菩薩じやうぎやうぼさつの化身けしんか又釈迦如来しゃかにらいの御使おんつかいかと思うべし、又
薬王菩薩やくおうぼさつ・薬上菩薩やくじやうぼさつ・觀音勢至かんのんせいしの菩薩ぼさつは正像しょうぞう二千年にせんねんの御使おんつかいなり
此等これらの菩薩ぼさつ達の御番みばんは早過はやすぎたれば上古じやうこの様に利生りしやう有あるまじきな
り、されば当世とうせの祈いのを御覽ごらんぜよ一切いっさい叶かなはざる者ものなり、末法まっぼう今の世
の番衆ばんしゆは上行じやうぎやう・無辺行等むへんぎやうにてををはしますなり此等これらを能よくよく能よくよく明あきらめ
信しんじてこそ法の驗しるしも仏ぶつ・菩薩ぼさつの利生りしやうも有あるべしとは見えたれ、
譬たとえばよき火打かうちとよき石いしのかごと・よきほくちと此の三寄り合さんよりあひい
て火かを用もちゆるなり、祈いのも又是かくのくの如ごとしよき師しとよき檀那だんなとよき法
と此の三寄り合さんよりあひいて祈いのを成就じやうじゆし国土こくどの大難だいなんをも払はらふべき者ものなり、

よき師とは指したる世間の失無くして聊のへつらうことなく小欲
知足にして慈悲有らん僧の經文に任せて法華經を読み持ちて人
をも勧めて持たせん僧をば仏は一切の僧の中に吉第一の法師なり
と讃められたり、吉檀那とは貴人にも・よらず賤人をも・にくま
ず上にもよらず下をもいやしまず一切・人をば用いずして
一切經の中に法華經を持たん人をば一切の人の中に吉人なりと
仏は説給へり吉法とは此の法華經を最爲第一の法と説かれたり、
已説の經の中にも今説の經の中にも当説の經の中にも此の經第一
と見えて候へば吉法なり、禪宗・真言宗等の經法は第二・第
三なり殊に取り分けて申せば真言の法は第七重の劣なり、然るに
日本国には第二・第三・乃至・第七重の劣の法をもつて御祈
れども未だ其の証拠をみず、最上第一の妙法をもつて御祈

るべきか、是これを正直捨方便・但説無上道・唯ゆい此一事実と云へり

誰か疑うたがいをなすべきや。

問うて云く無智の人来りて生死しやうじを離るべき道を問わん時は何れいずれ

の經の意をか説くべき仏如何いかんが教へ給へるや、答えて云く法華經ほけきやう

を説くべきなり所以ゆえんに法師品に云く「若し人有つて何等なんらの衆生しゆじやう

か未來世みらいせに於て當に作仏さぶつすることを得べきと問わば応まさに示すべ

し、是この諸人等・未來世みらいせに於て必ず作仏さぶつすることを得ん」と云云、

安樂行品に云く「難問なんもんする所有しやうらば小乘しやうじやうの法を以て答えず但

大乘だいじやうを以て而も為に解説げせつせよ」云云、此等これらの文の心は何なるいか

衆生しゆじやうか仏になるべきと問わば法華經ほけきやうを受持じゆじし奉らん人必ず仏に

なるべしと答うべきなり是れ仏この御本意ごほんいなり、之に付て不審ふしんあり

衆生の根性区しゆじやうこんじやうまちまちにして念仏ねんぶつを聞かんと願ふ人もあり法華經ほけきやうを聞

かんと願ふ人もあり、念仏ねんぶつを聞かんと願ふ人に法華經ほけきょうを説いて聞かせんは何の得益とくやくかあるべき、又念仏ねんぶつを聞かんが為ために請しやうじたらん時しにも強ほけきて法華經ほけきを説くべきか、仏の説法せつぽうも機きに随したがいて得益とくやくあるをこそ本意ほんいとし給たまうらんと不審ふしんする人あらば云うべし、元より末法まつぽうの世には無智むちの人に機きに叶ひ叶はざるを顧みず但強しいて法華經ほけきの五字ごじの名号みやうこうを説いて持たすべきなり、其の故そのゆえは釈迦しやか・佛ぶつ・昔ふぎ不輕菩薩ふけいぼさつと云はれて法華經ほけきを弘ひろめ給たまいしには男女なんによ・尼ほつし・法師ほつしがおしなべて用ひざりき、或あるは罵ののしられ毀そしられ・或あるは打あるれ追はれ一しなならず、或あるは怨あだまれ嫉そねまれ給たまいしかども少しもこりもなくして強しいて法華經ほけきを説とき給たまいし故ゆえに今の釈迦しやか・佛ぶつとなり給たまいしなり、不輕菩薩ふぎを罵ののしりまいらせし人は口もゆがまず打ち奉たてまつりしかいなもすくまず、付法蔵ふほうぞうの師子尊ししそんじや者げどうも外道げどうに殺されぬ、又法道三蔵ほうどうさんぞう

も火印を面かなやき かおにあてられて江南に流され給たまいしぞかし、まして末法まっぽう

にかひなき僧ほけきよう ひろの法華經を弘ひろめんにはかかる難なんあるべしと經文きやうもんに

正まさく見えたり、されば人これ是を用ひず機きに叶はずと云へども強しいて

法華經ほけきようの五字ごじの題名だいめいを聞かすべきなり、是これならでは仏になる道は

なきが故なり、又・或人ある ふしん不審して云いわく、機きに叶はざる法華經ほけきようを

強しいて説いて謗ほうぜさせて・惡道あくどうに人を墮ださんよりは、機きに叶へる

念仏ねんぶつを説いて・發心ほっしんせしむべし、利益りやくもなく謗ほうぜさせて返つて

地獄じごくに墮ださんは法華經ほけきようの行者きやうじやにもあらず邪見じゃけんの人にてこそ有ある

らめと不審ふしんせば、云うべし經文きやうもんには何体にもあれ末法まっぽうには強しい

て法華經ほけきようを説くべしと仏の説とき給たまへるをばさていかが心うべく候

や、釈迦しやかぶつ・不輕菩薩ふぎようぼさつ・天台てんだい・妙樂みやうらく・伝教でんきよう等はさて邪見じゃけんの人

外道げどうにて・おはしまし候べきか、又惡道あくどうにも墮おちず三界さんがいの生を離

れたる二乗にじようと云う者をば仏たまたのの給たはく設いぬやかんひ犬野干いぬやかんの心をば発おこすとも二乗にじようの心をもつべからず五逆ごぎやく・十惡じゅうあくを作りて地獄じごくには墮おつとも二乗にじようの心をば・もつべからずなると禁いましめられしぞかし、惡道あくどうにおちざる程りやくの利益いは争いかでか有あるべきなれども其それをば仏おほんの御本意ごほんいとも思おもひ食くさず地獄じごくには墮おつるとも仏ほけきようになる法華經ほけきようを耳みにふれぬれば是これを種ことして必ず仏おになるなり、されば天台てんだい・妙樂みょうらくも此この心を以もつて強しいて法華經ほけきようを説はくべしとは釈しゃくし給たまへり譬たとえば、人の地ちに依よりて倒たふれたる者の返かへつて地ちをおさへて起たつが如ごとし、地獄じごくには墮おつれども疾とく浮うんで仏おになるなり、当世とうせの人・何となくとも法華經ほけきように背そむく失とがに依よりて地獄じごくに墮おちん事うたが疑いなき故ゆえに、とてもかくても法華經ほけきようを強しいて説とき聞きかすべし、信しんぜん人は仏おほんになるべし謗ぼうぜん者は毒鼓どくこの縁えんとなつて仏おほんになるべきなり、何いかにとして

も仏の種は法華經より外になきなり、權教をもつて仏になる由
だにあらば、なにしにか仏は強いて法華經を説いて謗ずるも信ず
るも利益あるべしと説き我不愛身命とは仰せらるべきや、よくよ
く此等を道心ましまさん人は御心得あるべきなり。

問うて云く無智の人も法華經を信じたらば即身成仏すべきか、
又何れの淨土に往生すべきぞや、答えて云く法華經を持つにお
いては深く法華經の心を知り止觀の坐禪をし一念三千・十境・十
乗の觀法をこらさん人は実に即身成仏し解を開く事も・あるべ
し、其の外に法華經の心をもしらず無智にしてひら信心の人は
淨土に必ず生べしと見えたり、されば生十方仏前と説き・或は
即往安樂世界と説き、是の法華經を信ずる者の往生すと云う
明文なり、之に付いて不審あり其の故は我が身は一にして十方

の仏前ぶつぜんに生るべしと云う事心得こころえられず、何れにてもあれ一方いっぽうに限るべし正まさに何れの方いづれをか信じて往生おうじようすべきや、答えて云く一方いっほうにさだめずして十方じゅうぽうと説くは最もいはれあるなり、所以ゆえんに法華經ほけきようを信ずる人の一期終る時には十方世界じゅうつぽうせかいの中に法華經ほけきようを説かん仏のみもとに生るべきなり、余の華嚴阿含・方等・般若經けこん あこん ほうとう はんによきようを説く浄土じょうとへは生るべからず、浄土十方じょうとじゅうつぽうに多くして声聞しょうもんの法を説く浄土じょうともあり辟支仏ひやくしぶつの法を説く浄土じょうともあり・或あるは菩薩ぼさつの法を説く浄土じょうともあり、法華經ほけきようを信ずる者は此等これらの浄土じょうとには一向いっこう生れずして法華經ほけきようを説き給う浄土じょうとへ直ちに往生おうじようして座席ざせきに列りて法華經ほけきようを聴聞ちやうもんしてやがてに仏になるべきなり、然しかるに今世にして法華經ほけきようは機きに叶はずと云いうとめて西方浄土さいほうじょうとにて法華經ほけきようをさとるべしと云はん者は阿弥陀あみだの浄土じょうとにても法華經ほけきよう

をさとるべからず十方の浄土にも生るべからず、法華經に背く
咎重きが故に永く地獄に墮つべしと見えたり、其人命終
入阿鼻獄と云へる是なり。

問うて云く即往安樂世界・阿弥陀仏と云云、此の文の心は

法華經を受持し奉らん女人は阿弥陀仏の浄土に生るべしと説き

給えり念仏を申しても阿弥陀の浄土に生るべしと云ふ、浄土既に

同じ念仏も法華經も等と心え候べきか如何、答えて云く觀經は

權教なり法華經は実教なり全く等しかるべからず其の故は仏世

に出でさせ給いて四十余年の間・多くの法を説き給いしかども

二乗と悪人と女人とをば簡ひ・はてられて成仏すべしとは一言

も仰せられざりしに此の經にこそ敗種の二乗も三逆の調達も

五障の女人も仏になるとは説き給い候つれ、其の旨經文に見え

たり、華嚴經には「女人は地獄の使なり仏の種子を断ず外面は
菩薩に似て内心は夜叉の如し」と云へり、銀色女経には三世の
諸仏の眼は抜けて大地に落つるとも法界の女人は永く仏になる
べからずと見えたり、又経に云く「女人は大鬼神なり能く一切の
人を喰う」と、竜樹菩薩の大論には一度女人を見れば永く地獄
の業を結ぶと見えたり・されば実にてやありけん善導和尚は謗法
なれども女人をみずして一期生と云はれたり、又業平が歌にも
律をいて・あれたるやどのうれたきは・かりにも鬼の・すだく
なりけりと云うも女人をば鬼とよめるにこそ侍れ、又女人には
五障三従と云う事有るが故に罪深しと見えたり、五障とは一には
梵天王・二には帝釈・三には魔王・四には転輪聖王・五には仏
にならずと見えたり、又三従とは女人は幼き時は親に従いて心に

任まかせず、人となりては男に従いて心にまかせず、年よりぬれば子

に従いて心にまかせず加様に幼き時より老耄ろうもうに至るまで三人に従

て心にまかせず思ふ事をもいはず見たき事をもみず聴問したき事

をもきかず是これを三従とは説くなり、されば榮啓期えいけいきが三樂を立てた

るにも女人にょにんの身と生れざるを一の樂みといへり、加様に内典ないてん・

外典げてんにも嫌きらはれたる女人にょにんの身なれども此の經を讀まねどもかかね

ども身と口と意いとにうけ持ちて殊ことに口に南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱へ

奉たてまつる女人にょにんは在世ざいせの竜女りゆうにょ・☆曇弥きようどんみ・耶輸陀羅女やしゆたらにょの如ごとくにやすやす

と仏になるべしと云う經文きやうもんなり、又安樂世界あんらくせかいと云うは一切いっさいの

淨土じやうどをば皆安樂みなあんらくと説くなり、又阿弥陀あみだと云うも觀經かんきやうの阿弥陀あみだに

はあらず、所以ゆえんに觀經かんきやうの阿弥陀あみだ仏ぶつは法蔵比丘ほうぞうびくの阿弥陀あみだ・四十八

願じやうどうの主十劫成道の仏なり、法華經ほけきやうにも迹門しやくもんの阿弥陀あみだは大通だいづう

智勝ちしょう仏ぶつの十六王子おうじの中の第九きゅうの阿弥陀あみだにて法華經大願ほけきようだがんの主ぬしの仏ぶつなり、本門ほんもんの阿弥陀あみだは釈迦分身しゃかふんじんの阿弥陀あみだなり随したがつて釈しゃくにも「須すく更に觀かん經等きやうとうを指さすべからざるなり」と釈しゃくし給たまえり。

問もんうて云いく經きやうに難解難入なんげなんにゆうと云いへり世間せけんの人・此この文ぶんを引ひいて法華經ほけきようは機きに叶あはずと申もうし候こうは道理どうりと覺おほえ候こうは如何いかん、答こたえて云いく謂いれなき事ことなり其そのの故ゆゑは此この經きやうを能よも心こころえぬ人の云いう事ことなり、法華ほつより已前いぜんの經きやうは解とく入いり難がたし法華ほつの座ざに來きりては解とく易やすく入いり易やすしと云いう事ことなり、されば妙樂みょうらく大師だいしの御釈いに云いく「法華ほつ已前いぜんは不ふ了義りやうぎなるが故ゆゑに故ゆゑに難解なんと云いう即すなわち今の教きやうには咸ことごとく皆實みなに入るを指さす故ゆゑに易知えきちと云いう」文ぶん、此この文ぶんの心こころは法華ほつより已前いぜん經きやうにては機きつたなくして解とく難がたく入いり難がたし、今の經きやうに來きりては機き賢かしこく成なりて解とく易やすく入いり易やすしと釈しゃくし給たまへり、其その上うへ難解難入なんげなんにゆうと説とく

かれたる経が機に叶はずば先念仏を捨てさせ給うべきなり、
其の故は雙觀經に「難きが中の難き此の難に過ぎたるは無し」
と説き阿弥陀經には難信の法と云へり、文の心は此の経を受け持
たん事は難きが中の難きなり此れに過ぎたる難きはなし難信の法
なりと見えたり。

問うて云く経文に「四十余年未だ眞實を顕さず」と云い、又
「無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過るとも終に無上菩提を成ずる
ことを得じ」と云へり、此の文は何体の事にて候や、答えて云く
此の文の心は釈迦仏・一期五十年の説法の中に始めの華嚴經にも
眞實をとかず中の方等・般若にも眞實をとかず、此の故に禪宗
・念仏・戒等を行ずる人は無量無辺劫をば過ぐとも仏にならじと
云う文なり、仏四十二年の歳月を経て後・法華經を説き給ふ文に

は「世尊せそんの法は久くして後に要かならず当まさに眞実しんじつを説たまき給たまうべし」と
仰おおせられしかば、舍利弗等しやりほつの千二百の羅漢らかん・万二千の声聞しょうもん・
弥勒等みろくの八万人の菩薩ぼさつ・梵王ぼんのう・帝釈等たいしゃくの万億てんにんの天人あじやせ・阿闍世王
等の無量無辺むりょうむへんの国王こくおう・仏の御言みことばを領解りようげする文には「我等昔われらより
来このかたしばしば世尊せそん
数世尊の説を聞きたてまつるに未いまだ會かつて是かくの如ごとき深妙
の上法を聞かず」と云つて、我等われら・仏に離れ奉らずして四十二年
若干そこばくの説法を聴聞せつぼうしつれども・いまだ是かくの如ごとき貴とうとき法華經ほけきようを
ばきかずと云へる、此等これらの明文めいぶんをば・いかが心えて世間せけんの人は
法華經ほけきようと余經よきようと等しく思ひ剰あまつさきへ機に叶はねば闇の夜の錦・こぞの
曆たまなんど云ひて、適たまたま持つ人を見ては賤いやみ輕かろしめ惡にくみ嫉ねたみ口をす
くめなんどする是これ併しかしながほうほうほうほうら謗法いかでなり争おうじようじようぶつか往生おうじようじようぶつ成なり仏も・あるべき
や、必ず無間地獄むげんじごくに墮おつべき者と見えたり。

問うて云く凡そ仏法を能く心得て仏意に叶へる人をば世間に
是を重んじ一切是を貴む、然るに当世法華經を持つ人人をば世こ
ぞつて惡み嫉み輕しめ賤み・或は所を追ひ出し、・或は流罪し
供養をなすまでは思いもよらず怨敵の様ににくまるるは、いかさ
まにも心わろくして仏意にもかなはずひがさまに法を心得たるな
るべし、經文には如何が説きたるや、答えて云く經文の如くな
らば末法の法華經の行者は人に惡まるる程に持つを實の大乗の
僧とす、又經を弘めて人を利益する法師なり、人に吉と思はれ人
の心に隨いて貴しと思はれん僧をば法華經のかたき世間の惡知識
なりと思うべし、此の人を經文には獵師の目を細めにして鹿を
ねらひ猫の爪を隠して鼠をねらふが如くにして在家の俗男・
俗女の檀那をへつらい・いつわりたばらかすべしと説き給へり、

其の上勸持品には法華經の敵人三類を挙げられたるに、一には
在家の俗男・俗女なり此の俗男・俗女は法華經の行者を憎み
罵り打ちはりきり殺し所を追ひ出だし・或は上へ讒奏して遠流し
なさけなくあだむ者なり、二には出家の人なり此の人は慢心高く
して内心には物も知らざれども智者げにもてなして世間の人に
学匠と思はれて法華經の行者を見ては怨み嫉み輕しめ、賤み
犬野干よりも・わろきようを人に云いようとめ法華經をば我、一人
心得たりと思う者なり、三には阿練若の僧なり此の僧は極めて
貴き相を形に顯し三衣一鉢を帶して山林の閑かなる所に籠り居て
在世の羅漢の如く諸人に貴まれ仏の如く万人に仰がれて法華經を
説の如くに読み持ち奉らん僧を見ては憎み嫉んで云く大愚癡の者
大邪見の者なり総て慈悲なき者・外道の法を説くなんと云わん、

かみいちにん
上一人より仰いで信を取らせ給はば其の已下万人も仏の如くに
くよう
供養をなすべし、法華經を説の如くよみ持たん人は必ず此の三類
てきじん
の敵人に怨まるべきなりと仏説き給へり。

問うて云く仏の名号を持つ様に法華經の名号を取り分けて持
いわ
つべき証拠ありや如何、答えて云く經に云く「仏諸の羅刹女に告
しょうこ
げたまわく善き哉善き哉汝等但能く法華の名を受持する者を
よきかなよきかななんじ
擁護せん福量る可からず」と云云此の文の意は十羅刹の法華の名
おうこ
を持つ人を護らんと誓言を立て給うを大覺世尊讚めて言く善き哉
まも
よきかななんじ
善き哉汝等南無妙法蓮華經と受け持たん人を守らん功德いくら
なむみようほうれんげきよう
程とも計りがたく・めでたき功德なり神妙なりと仰せられたる文
ほか
なり、是れ我等衆生の行住坐臥に南無妙法蓮華經と唱ふべしと
われらしゆじよう
云う文なり。

およ みようほうれんげきよう 凡そ妙法蓮華經とは我等衆生の仏性と梵王・帝釈等の

ぶつしよう しやりほつ もくれん ぶつしよう もんじゅ みろく ぶつしよう さんぜ 仏性と舍利弗・目連等の仏性と文殊・弥勒等の仏性と三世の

しよぶつ みようほう 諸仏の解の妙法と一体不二なる理を妙法蓮華經と名けたるな

ゆえ ひとたびみようほうれんげきよう とな いっさい 故に一度妙法蓮華經と唱うれば一切の仏・一切の法・一切

ぼさつ いっさい しょうもん いっさい ぼんのう たいしやく えんまほうおう にちがつ の菩薩・一切の声聞・一切の梵王・帝釈閻魔法王・日月・

しゅうせい てんじん ないし じごく がき ちくしょう しゅら にんてん いっさい 衆星・天神・地神・乃至・地獄・餓鬼・畜生・修羅人天一切

しゅじよう しんちゅう ぶつしよう ただ こえ よ あらわ たてまつくどく むりようむへん 衆生の心中の仏性を唯一音に喚び顕し奉る功德・無量無辺な

こしん みようほうれんげきよう ほんぞん たてまつ こしんちゅう り、我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて我が己心中の

ぶつしよう なむ みようほうれんげきよう あらわ たま ところ 仏性南無妙法蓮華經とよびよばれて顕れ給う処を仏とは云う

たと かこ なり、譬えば籠の中の鳥なけば空とぶ鳥のよばれて集まるが如し、

かこ い こと みようほう 空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするが如し口に妙法

たてま ぶつしよう ぶつしよう をよび奉れば我が身の仏性もよばれて必ず顕れ給ふ、梵王・

たいしやく ぶつしょう
帝釈の仏性はよばれて我等を守り給ふ、仏・菩薩の仏性はよ
ばれて悦び給ふ、されば「若し暫くも持つ者は我れ則ち歡喜す
しよぶつ またしか
諸仏も亦然なり」と説き給うは此の心なり、されば三世の諸仏も
みようほうれんげきよう
妙法蓮華經の五字を以て仏に成り給いしなり三世の諸仏の出世
ほんかい いっさいしゅじよう
の本懐一切衆生・皆成仏道の妙法と云うは是なり。是等の
おもむ よよ こころえ
趣きを能く能く心得て仏になる道には我慢偏執の心なく南無
みようほうれんげきよう
妙法蓮華經と唱へ奉るべき者なり。日蓮在御判

◆七七 三世諸仏總勘文教相廢立 弘安二年十月 五十八歳御
にちれんこれ
作日蓮之を撰す 558P

そ いちだいしろうきよう
夫れ一代聖教とは総べて五十年の説教なり是を一切經とは
言うなり、此れを分ちて二と為す一には化他・二には自行なり、
けた
一には化他の經とは法華經より前の四十二年の間説き給える諸の
ほけきよう
もろもろ

経教きやうぎやう なり此これをば権教ごんきやうと云いひ亦または方便ほうべんと名なく、此これは四教しきやうの

中には三藏教さんざう・通教つうきやう・別教べつきやうの三教さんきやうなり五時ごじの中には華嚴けこん・阿含あこん

・方等ほうとう・般若はんにやなり法華ほつけより前の四時しじの経教きやうぎやうなり、又十界じゅうかいの中

には前の九法界ほっかいなり又夢うつつと寤うつつとの中には夢中の善惡ぜんあくなり又夢を

ば権いと云うつつひ寤うつつをば実いと云うつつなり、是かくの故ゆえに夢は仮ふへんに有あつて体性

無し故ゆえに名なけて権ごんと云うつつなり、寤うつつは常住じやうじゆうにして不変ふへんの心の体

なるが故ゆえに此これを名なけて実いと為なす、故ゆえに四十二年しにじふにねんの諸もろの経教きやうぎやうは

生死しやうじの夢の中の善惡ぜんあくの事を説いく故ゆえに権教ごんきやうと云うつつひ夢中の衆生しゆじやうを

誘引ゆういんし驚覺きやうかくして法華ほつけ經の寤うつつと成なさんと思食おほしめしての支度方便ほうべんの

経教きやうぎやうなり故ゆえに権教ごんきやうと云うつつひ、斯これに由よつて文字もんじの讀よみを糾ただして

心得こころうべ可べきなり、故ゆえに権をば権と讀よむ權なる事ことの手本てほんには夢を以もつて

本なと為なす又実いをば実と讀よむ実事じつじの手本てほんは寤うつつなり、故ゆえに生死しやうじの夢

は権にして性体無ければ権なる事の手本なり故に妄想と云う、
本覺の寤は實にして生滅を離れたる心なれば眞實の手本なり
故に実相と云う、是を以て権實の二字を糾して一代聖教の化他
の権と自行の實との差別を知る可きなり、故に四教の中には前の
三教と五時の中には前の四時と十法界の中には前の九法界は同じ
く皆夢中の善惡の事を説くなり故に権教と云う、此の教相をば
無量義經に四十余年・未顕眞實と説き給う已上、未顕眞實の
諸經は夢中の権教なり故に釈籤に云く「性・殊なること無し
と雖も必ず幻に藉りて幻の機と幻の感と幻の応と幻の赴とを發す
・能応と所化と並びに権實に非ず」已上、此れ皆夢幻の中の方
便の教なり性雖無殊等とは夢見る心性と寤の時の心性とは只一の
心性にして総て異なること無しと雖も夢の中の虚事と寤の時の

實事と二事一の心法なるを以て見ると思ふも我が心なりと云う釈
なり、故に止觀に云く「前の三教の四弘・能も所も泯す」已上、
四弘とは衆生の無辺なるを度せんと誓願し煩惱の無辺なるを
断ぜんと誓願し・法門の無尽なるを知らんと誓願し無上菩提を証
せんと誓願す此を四弘と云う、能とは如来なり所とは衆生なり
此の四弘は能の仏も所の衆生も前三教は皆夢中の是非なりと
釈し給えるなり、然れば法華以前の四十二年の間の説教たる
諸経は未顕真實の權教なり方便なり、法華に取寄る可き方便な
るが故に真實には非ず、此れは仏、自ら四十二年の間説き集め
給いて後に、今法華經を説かんと欲して先ず序分の開經の
無量義經の時・仏、自ら勘文し給える教相なれば人の語も入る
可からず不審をも生す可からず、故に玄義に云く「九界を權と

為しな仏界ぶつがいを實じつと為す」已上、九法界ほっかいの權けんは四十二年せつきやうの説教せつぎやうなり
仏法界ぶつぽうかいの實じつは八箇年はちかねんの説・法華經ほけきやうこれ是なり、故ゆえに法華經ほけきやうをば仏乘ぶつじやう
と云う九界しやうじの生死しやうじは夢の理りなれば權教けんきやうと云いい仏界ぶつがいの常住じやうじゆは寤うつ
の理りなれば實教じつぎやうと云う、故ゆえに五十年せつきやうの説教せつきやう・一代いちだいの聖教しやうきやう一切いっさい
の諸經しよきやうは化他けたの四十二年ごんきやうの權教けんきやうと自行じぎやうの八箇年はちかねんの實教じつぎやうと合し
て五十年ごんきやうなれば權けんと實じつとの二の文字もんじを以て鏡かに懸くけて陰無くもりなし。
故ゆえに三藏經さんぞうを修行しゆぎやうすること三僧祇さんき・百大劫だいくを歴へて終りに仏に
成らんとせば我が身みより火ひを出でして灰身入滅にゆうめつとて灰はいと成なつて
失うしなせるなり、通教つうきやうを修行しゆぎやうすること七阿僧祇あそぎ・百大劫だいくを満みてて仏
に成らんとせば前の如ごとく同様に灰身入滅にゆうめつして跡形あとかたも無なく失うしなせ
ぬるなり、別教べつぎやうを修行しゆぎやうすること二十二大阿僧祇あそぎ・百千万劫せんまんを
尽つくくして終りに仏に成りぬと思おもへば生死しやうじの夢の中の權教ごんきやうの成じやう仏ぶつ

なれば本覺ほんがくの寤うつの法華經ほけきょうの時には別教べつきょうには実仏じつぶつ無し夢中の果な

り故ゆえに別教べつきょうの教道けうだうには実の仏無しと云うなり、別教べつきょうの証道しやうだうには

初地しよじに始めて一分いちぶんの無明むみょうを断じて一分いちぶんの中道ちゆうだうの理あらわを顯し始めて

之これを見れば別教べつきょうは隔きやくりやく歴不融えきふじゆうの教と知つて円教えんきやうに移り入つて

円人えんじんと成り已つて別教べつきょうには留とどまらざるなり上中下三根じやうちゆうげの不同ふどう

有あるが故ゆえに初地しよじ・二地にち・三地さんち・乃至ないし・等覺とうかくまでも円人えんじんと成る故ゆえに

別教べつきょうの面めんに仏無きなり、故ゆえに有教うきやうむにん無人と云うなり、故ゆえに守護国しゆこ

界章かいしやうに云いく「有為うゐの報ほう仏ぶつは夢中の權果ごんか前ぜん三教さんけうの仏ぶつ無作むさの三身さんじんは覺前かくぜんの

実じつ仏ぶつなり觀心くわんしんの仏ぶつ」又云いく「權教ごんきやうの三身さんじんは未いまだ無常むじやうを免まぬかれず前ぜん三教さんけうの仏ぶつ

実教じつきやうの三身さんじんは俱体くたい俱用くゆうなり觀心くわんしんの佛ぶつ」此この釈しやくを能よく能よく意得こころう可べき

なり、權教ごんきやうは難行なんぎやうくぎやう苦行くぎやうして適たまたま仏ぶつに成りぬと思おもえば夢中の權ごんか

仏ぶつなれば本覺ほんがくの寤うつの時には実じつ仏ぶつ無きなり、極果ごくかの仏ぶつ無ければ

有教無人なり況や教法実ならんや之を取つて修行せんは聖教

に迷えるなり、此の前三教には仏に成らざる証拠を説き置き

給いて末代の衆生に慧解を開かしむるなり九界の衆生は一念の

無明の眠の中に於て生死の夢に溺れて本覺の寤を忘れ夢の是非

に執して冥きより冥きに入る、是の故に如来は我等が生死の夢の

中の入つて

顛倒の衆生に同じて夢中の語を以て夢中の衆生を誘い夢中の

善惡の差別の事を説いて漸漸に誘引し給うに、夢中の善惡の事

重畳して様様に無量無辺なれば先ず善事に付いて上中下を立

つ三乗の法是なり、三三九品なり、此くの如く説き已つて後に

又上・上品の根本善を立て上中下・三三九品の善と云う、皆

悉く九界生死の夢の中の善惡の是非なり今是をば総じて邪見外道

と為すな記要の意、此の上に又上・上品の善心は本覺の寤の理なれば

此れを善の本と云うと説き聞かせ給し時に夢中の善惡の悟の力を

以ての故に寤の本心の実相の理を始めて聞知せられし事なり、

是の時に仏説いて言く夢と寤との二は虚事と実事との二の事な

れども心法は只一なり、眠の縁に値いぬれば夢なり眠去りぬれば

寤の心なり心法は只一なりと開会せらるべき下地を造り置かれ

し方便ほうべんなり此れは別教の中道の理是の故に未だ十界互具・円融相即を顕あらわさざれば

成仏の人無し故に三蔵教より別教に至るまで四十二年の間の

八教は皆悉く方便・夢中の善惡なり、只暫く之を用いて衆生を

誘引ゆういんし給う支度方便なり此の権教の中にも分分に皆悉く方便と

真実と有りて権実の法闕かけざるなり、四教一一に各四門有つて

差別有ること無し語も只同じ語なり文字も異なること無し斯これに

由よつて語ことばに迷まよいて権實ごんじつの差別さべつを分別ぶんべつせざる時ときを仏法滅ぶつぽうすと云いう
是この方便ほうべんの教ただは唯穢土えどに有あつて総じやうどじて浄土じやうどには無なきなり法華經ほけきやうに
云いく「十方じゆつぽうの仏土ぶつどの中には唯一ただいちじやう乗じやうの法ぽうのみ有あつて二無なくく亦また三も
無なし仏ほうの方便ほうべんの説せつをば除よく」已上ゆえ、故ゆえに知しんぬ十方じゆつぽうの仏土ぶつどに無
き方便ほうべんの教おうじやうを取とつて往生なの行じゆつぽうと為なし十方じゆつぽうの浄土じやうどに有ある一乗いちじやうの
法これをば之きらを嫌きらいて取とらずして成仏じやうぶつす可べき道理どうり有ある可べしや否いや
一代いちだいの教主きやうしゆしやか釈迦如来しやくかにやうらい・一切經いっさいきやうを説とき勘文かんもんし給たまいて言いく三世さんぜの
諸仏しよぶつ同様ことばに一つ語ことば一つ心かんもんに勘文たまし給たまえる説法せつぽうの儀式ぎしなれば我も
是かくのこくの如ごとく一言たがも違ちがわざる説教せつきやうの次第しだいなり云云、方便品ほうべんに云いく
「三世さんぜの諸仏しよぶつの説法せつぽうの儀式ぎしの如ごとく我も今亦是またかくのこ事の如ごとく無分別ぶんべつの法ぽう
を説いく」已上い、無分別ぶんべつの法いちじやうとは一乗みじやうの妙法みやうぽうなり善惡ぜんあくを簡えらぶこと
無なくく草木そうもく・樹林じゆりん・山河さんが・大地だいちにも一微塵みじんの中なにも互たがいに各十法界ほっかいの

法を具足す我が心の妙法蓮華經の一乗は十方の淨土に周☆して
闕かくること無し十方の淨土の依報・正報の功德莊嚴は我が心
の中に有つて片時も離れること無き三身即一の本覺の如來にて
是の外には法無し此の一法計り十方の淨土に有りて余法有るこ
と無し故に無分別法と云う是なり、此の一乗・妙法の行をば取
らずして全く淨土には無き方便の教を取つて成仏の行と為さん
は迷いの中の迷いなり、我仏に成りて後に穢土に立ち還りて
穢土の衆生を仏法界に入らしめんが為に次第に誘引して方便の
教を説くを化他の教とは云うなり、故に權教と言ひ又方便とも
云う化他の法門の有様大體略を存して斯くの如し。

二に自行の法とは是れ法華經八箇年の説なり、是の經は寤の
本心を説き給う唯衆生の思い習わせる夢中の心地なるが故に夢

中の言語を借りて寤の本心を訓る故に語は夢中の言語なれども
意は寤の本心を訓ゆ法華經の文と釈との意此くの如し、之を明
め知らずんば經の文と釈の文とに必ず迷う可きなり、但し此の
化他の夢中の法門も寤の本心に備われる徳用の法門なれば夢中
の教を取つて寤の心に摂むるが故に四十二年の夢中の化他方便
の法門も妙法蓮華經の寤の心に摂まりて心の外には法無きなり
此れを法華經の開会とは云うなり、譬えば衆流を大海に納むるが
如きなり仏の心法妙・衆生の心法妙と此の二妙を取つて己心に
摂むるが故に心の外に法無きなり己心と心性と心体との三は己身
の本覺の三身如来なり是を經に説いて云く「如是相 如是性
の如来 如是体 如来」此れを三如是と云う、此の三如是の本覺の如来
は十方法界を身体と爲し十方法界を心性と爲し十方法界を

そうこう な かくのゆえ ほんがくさんじんによらい ほかかい
相好と為す是の故に我が身は本覺三身如來の身体なり、法界に
しゅうへん いちぶつ
周 ☆ して一仏の徳用なれば一切の法は皆是仏法なりと説き給い
そ ぜせき つらな もろもろししゅう はちぶ ちくしゅう げどう
し時其の座席に列りし諸の四衆・八部・畜生・外道等一人も漏
みなことことうそう ひがめひがおもい ほんがく うつつ かえ
れず皆悉く妄想の僻目僻思・立所に散止して本覺の寤に還つて
みなぶつどう じょう うつつ しゅじょう
皆仏道を成ず、仏は寤の人の如く衆生は夢見る人の如し故に
しょうじ こむ さま ほんがく うつつ かえ そくしんじょうぶつ びょうどうだいえ
生死の虚夢を醒して本覺の寤に還るを即身成仏とも平等大慧と
ぶんべつ かいじょうぶつどう ただ ほうもん じゅっぽう
も無分別法とも皆成仏道とも云う只一つの法門なり、十方の仏
まちまちに いえど いちじょう ほうべん ゆえ
土は区に分れたりと雖も通じて法は一乘なり方便無きが故に無
ぶんべつ じゅっかい しゅじょう いえど じっそう
分別法なり、十界の衆生は品品に異りと雖も実相の理は一なる
ゆえ ぶんべつ ひゃっかいせんによ さんぜん せけん ほうもんこと いえど
が故に無分別なり 百界千如・三千世間の法門殊なりと雖も
じゅっかいこく ゆえ ぶんべつ うつつ かくべつ
十界互具するが故に無分別なり、夢と寤と虚と実と各別異なり
いえど いっしん ゆえ ぶんべつ かこ みらい げんざい
と雖も一心の中の法なるが故に無分別なり、過去と未来と現在と

は三なりと雖も一念の心中の理なれば無分別なり、一切経の語
は夢中の語とは譬えば扇と樹との如し法華経の寤の心を顕す言
とは譬えば月と風との如し、故に本覺の寤の心の月輪の光は
無明の闇を照し実相般若の智慧の風は妄想の塵を払う故に夢の
語の扇と樹とを以て寤の心の月と風とを知らしむ是の故に夢の
余波を散じて寤の本心に帰せしむるなり、故に止観に云く「月
・ 重山に隠るれば扇を挙げて之に類し風大虚に息みぬれば樹を動
かして之を訓ゆるが如し」文、弘決に云く「真常性の月・煩惱の
山に隠る煩惱一に非ず故に名けて重と為す円音教の風は化を息
めて寂に帰す寂理無礙なること猶大虚の如し四依の弘教は扇と樹
との如し乃至月と風とを知らしむるなり已上、夢中の煩惱の雲・
重疊せること山の如く其の数八万四千の塵勞にて心性本覺の月

輪を隠す扇と樹との如くなる経論の文字言語の教を以て月と風との如くなる本覺の理を覺知せしむる聖教なり故に文と語とは扇と樹との如し」文、上釈は一往の釈とて実義に非ざるなり月の如くなる妙法の心性の月輪と風の如くなる我が心の般若の慧解とを訓え知らしむるを妙法蓮華經と名く、故に釈籤に云く「声色の近名を尋ねて無相の極理に至る」と已上、声色の近名とは扇と樹との如くなる夢中の一切経論の言説なり無相の極理とは月と風との如くなる寤の我が身の心性の寂光の極樂なり、此の極樂とは十方法界の正報の有情と十方法界の依報の国土と和合して一体・三身即一なり、四土不二にして法身の一仏なり十界を身と為すは法身なり十界を心と為すは報身なり十界を形と為すは応身なり十界の外に仏無し仏の外に十界無くして

依正不二なり身土不二なり一仏の身体なるを以て寂光土と云う
かくのゆえ 是の故に無相の極理とは云うなり、生滅無常の相を離れたるが
故に無相と云うなり法性の淵底玄宗の極地なり故に極理と云う、
此の無相の極理なる寂光の極樂は一切有情の心性の中に有つて
清淨 無漏なり之を名けて妙法の心蓮台とは云うなり是の故に
心外無別法と云う此れを一切法は皆是仏法なりと通達解了すとは
云うなり、生と死と二つの理は生死の夢の理なり妄想なり顛倒
なり本覺の寤を以て我が心性を糾せば生ず可き始めも無きが
故に死す可き終りも無し既に生死を離れたる心法に非ずや、劫火
にも焼けず水災にも朽ちず剣刀にも切られず弓 箭にも射られず
芥子の中に入るれども芥子も広からず心法も縮まらず虚空の中に
満つれども虚空も広からず心法も狭からず善に背くを惡と云い惡

に背くを善と云う、故に心の外に善無く悪無し此の善と悪とを離るるを無記と云うなり、善悪無記☆此の外には心無く心の外には法無きなり故に善悪も浄穢も凡夫・聖人も天地も大小も東西も南北も四維も上下も言語道断し心行所滅す心に分別して思い言あらわい顯す言語なれば心の外には分別も無分別も無し、言と云うは心の思いを響かして声を顯すを云うなり凡夫は我が心に迷うて知らず覺らざるなり、仏は之を悟り顯わして神通と名くるなり神通とは神の一切の法に通じて礙無きなり、此の自在の神通は一切の有情の心にて有るなり故に狐狸も分分に通を現ずること皆・心の神の分分の悟なり此の心の一法より国土世間も出来する事なり、いちだいししょうきよう一代聖教とは此の事を説きたるなり此れを八万四千の法蔵とは云うなり是れ皆悉く一人の身中の法門にて有るなり、然れば八万

四千の法蔵は我身一人の日記文書なり、此の八万法蔵を我が
心中に孕み持ち懷き持ちたり我が身中の心を以て仏と法と淨土
とを我が身より外に思い願ひ求むるを迷いとは云うなり此の心
が善惡の縁に値うて善惡の法をば造り出せるなり、華嚴經に云く
「心は工なる画師の種種の五陰を造るが如く一切世間の中に法
として造らざること無し心の如く仏も亦爾なり仏の如く衆生も
然なり三界唯一心なり心の外に別の法無し心仏及び衆生是の三
差別無し」已上、無量義經に云く「無相・不相の一法より無量義
を出生す」已上、無相・不相の一法とは一切衆生の一念の心
是なり、文句に釈して云く「生滅無常の相無きが故に無相と云
うなり二乗の有余・無余の二つの涅槃の相を離るが故に不相と云
うなり」云云、心の不思議を以て經論の詮要と為すなり、此の

心を悟り知るを名けて如来によらいと云う之これを悟り知つて後は十界じゅっかいは我

が身なり我が心なり我が形なり本覚ほんかくの如来によらいは我が身心しんしんなるが故な

り之これを知らざる時を名けて無明むみょうと為す無明むみょうは明あきらかなること無しと

読むなり、我が心の有様あきらを明さかに覺さらざるなり、之これを悟り知る時

を名けて法性ほっしょうと云う、故ゆえに無明むみょうと法性ほっしょうとは一心いっしんの異名いみょうなり、名

と言とは二なりと雖も心は只ただ一つ心なり斯これに由よつて無明むみょうをば断

ず可べからざるなり夢の心の無明むみょうなるを断だんぜば寤うつの心を失うしなう可べき

が故ゆえに総じて円教えんきょうの意は一毫いちこうの惑ごをも断だんぜず故ゆえに一切いっさいの法みは皆

是れ仏法ぶつぽうなりと云うなり、法華經ほけきょうに云く「如是相にやぜそう本覚おうじんの応おう身しん如来によらい

如是性にやぜしやう本覚ほうしんの報ほう身しん如来によらい如是体にやぜたい本覚ほうしんの法ほう身しん如来によらい」此の三如是にやぜ

より後の七如是にやぜしちしやう出生しゅつじふして合じゆして十如是じゆのぜと成れるなり、此の

十如是じゆのぜは十法界ほっかいなり、此の十法界ほっかいは一人の心より出いで八万四千はちまんの

法門ほうもんと成るなり、一人を手本てほんとして一切衆生平等いっさいしゅじょうびやうどうなること

かくのごと

さんぜ

しよぶつ

かんもん

たしか

おし

正本

是これくの如ごとし、三世さんぜの諸仏しよぶつの總勘文かんもんにして御判慥たしかかに印おしたる正本

ぶんしよ

じつそう

いみよう

の文書ぶんしよなり仏の御判じつそうとは実相じつそうの一印じつそうなり印じつそうとは判じつそうの異名いみようなり、余

いっさい

ぶんしよ

あら

の一切いっさいの經きやうには実相じつそうの印じつそう無ければ正本ほんぽんの文書ぶんしよに非あらず全く実の仏無

ゆえ

ぶんしよ

じやうど

ほっかい

し実の仏無ゆえきが故ゆえに夢中の文書ぶんしよなり浄土じやうどに無じやうどきが故ゆえなり、十法界じふほくがい

じゆのぜ

たと

むりよう

いえど

は十なれども十如じゆのぜ是これは一ひとなり譬たとえば水中の月は無量むりようなりと雖いえども

こくう

じゆのぜ

ほっかい

じゆのぜ

じゆのぜ

なるが

故ゆえに水中の月の如ごとし、九法界くほくがいの十如じゆのぜ是これは夢中の十如じゆのぜ是これなるが

ゆえ

ごと

ぶつぽうかい

じゆのぜ

ほんがく

うつつ

じゆのぜ

なれば

故ゆえに水中の月の如ごとし、仏法界ぶつぽうかいの十如じゆのぜ是これは本覺ほんがくの寤うつつの十如じゆのぜ是これなれば

こくう

じゆのぜ

かくのゆえ

ぶつかい

じゆのぜあらわ

ほっかい

虚空こくうの月の如ごとし、是これの故ゆえに仏界ぶつかいの一つの十如じゆのぜ是これは顕あらわれぬれば九法界くほくがい

こくう

じゆのぜ

かくのゆえ

ぶつかい

じゆのぜあらわ

ほっかい

の十如じゆのぜ是これの水中の月の如ごときも一ひとも闕減けつげん無なく同時どうじに皆みな顕あらわれて体たいと用よう

と一具ひとにして

一体ひとの仏ぶつと成なりる、

十法界じふほくがいを互たがいに具足ぐそくし

平等びやうどうなる

と一具ひとにして

一体ひとの仏ぶつと成なりる、

十法界じふほくがいを互たがいに具足ぐそくし

平等びやうどうなる

と一具ひとにして

一体ひとの仏ぶつと成なりる、

十界じゆっかいの衆生しゅじやうなれば虚空こくうの本月ほんげつも水中の末月まげつも一人の身中みんちゆうに具足ぐそく

じゆっかい

しゅじやう

こくう

ほんげつ

まげつ

みんちゆう

ぐそく

して關かくること無し故ゆえに十如じゆのぜ是本末究竟ほんまつくきやうして等さべつしく差別さべつ無し、
本しゆじやうとは衆生じゆのぜの十如しよぶつ是じゆのぜなり末しよぶつとは諸仏しよぶつの十如しゆじやう是しよぶつなり諸仏しゆじやうは衆生しゆじやうの
一念いちねんの心あらわより顕たまれ給しえば衆生しゆじやうは是これ本しよぶつなり諸仏しよぶつは是これ末しよぶつなり、
然しかるを經いに云わく「今・此さんがいの三界みなこれわがは皆是そ我しが有ななり其その中の衆生しゆじやう
は悉ことごとく是わ吾わが子ななり」と已上じやうじやう、仏成道じやうじやうの後に化他けたの為ゆえの故ゆえに迹しゆじやうの
成道じやうじやうを唱となえて生死しやうじの夢中しやうじにして本覺ほんがくの寤うつつを説とき給たまうなり、智慧ちえ
を父たとに譬ぐちえ愚癡ぐちを子たとに譬たとえて是かくのこの如とく説たまき給たまえるなり、衆生しゆじやう
は本覺ほんがくの十如じゆのぜ是いえどなりと雖むみやうも一念むみやうの無明眠りむみやうの如ごとく心おほを覆おほうて生死しやうじ
の夢みらいに入みらいつて本覺ほんがくの理かこを忘れ髮筋かみすじを切る程かこに過去げんざい・現在げんざい・未来みらいの
三さん世ぜの虚夢こむを見るなり、仏は寤うつつの人の如ごとくなれば生死しやうじの夢しやうじに入しやうじ
つて衆生しゆじやうを驚おどろかし給たまえる智慧ちえは夢ふの中ほにて父母ふほの如ごとく夢ごとの中ごとな
る我等われらは子息しそくの如ごとくなり、此どうりの道理どうりを以しつぜて悉しつぜ是し吾子こしと言たまい給たまうな

り、此の理を思い解けば諸仏と我等とは本の故にも父子なり末の
故にも父子なり父子の天性は本末是れ同じ、斯れに由つて己心と
仏心とは異ならずと観ずるが故に生死の夢を覺まして本覺の寤
に還えるを即身成仏と云うなり、即身成仏は今・我が身の上の
天性地体なり 煩も無く障りも無き衆生の運命なり果報なり
冥加なり、夫れ以れば夢の時の心を迷いに譬え寤の時の心を悟
りに譬う之を以て一代聖教を覺悟するに跡形も無き虚夢を見て
心を苦しめ汗水と成つて驚きぬれば我身も家も臥所も一所にて
異らず夢の虚と寤の実との二事を目にも見・心にも思えども所
は只一所なり身も只一身にて二の虚と実との事有り之を以て知ん
ぬ可し、九界の生死の夢見る我が心も仏界常住の寤の心も異
ならず九界生死の夢見る所が仏界常住の寤の所にて変らず心

法も替かわらず在ざい所しよも差たがわざれども夢は皆みな虚そら事ごとなり寤うつは皆みな実じつ事じなり
止しかん觀いに云いく「昔そう莊しゅう 周ちゅうと云うもの有あり夢ちちゅうに胡こ蝶ちゅうと成おどろつて一ちちゅう百年ちゅうを
經あせみずたり苦おどろは多おどろく樂おどろは少おどろく汗あせみず水おどろと成おどろつて驚おどろきぬれば胡こ蝶ちゅうにも成おどろら
ず百みな年もうをそうも經みなず苦みなも無みなく樂みなも無みなく皆みな虚そら事ごとなり皆みな妄もう想そうなり」取已上意、
弘ぐけつ決いに云いく「無む明みょうは夢ちゅうの蝶ちゅうの如ごとく三さん千せんは百ちちゅう年ちゅうの如ごとく一いち念ねん実ねん無ねんき
は猶な蝶おちように非あらざるが如ごとく三さん千せんも亦やく無むきここと年ちちゅうを積あむに非あらざるが如ごとし」
已ちちゅう上ちゅう、此ちちゅうの釈そくは即そく身しん成じちゅう仏ぶつの証しょう拠こなり夢ちちゅうに蝶ちゅうと成ちちゅうる時ちちゅうも莊ちちゅう周しゅうは異ちちゅう
ならちちゅうず寤ちちゅうに蝶ちゅうと成ちちゅうらずと思ちちゅうう時ちちゅうも別べちの莊ちちゅう周しゅう無ちちゅうし、我ちちゅうが身ちちゅうを
生しょう死じの凡ほん夫ぶなりと思ちちゅうう時ちちゅうは夢ちちゅうに蝶ちゅうと成ちちゅうるが如ちちゅうく僻ひがめ目ひがめ僻ひがめ思おもなり、
我ちちゅうが身ちちゅうは本ほん覺がくの如ちちゅう来らいなりと思ちちゅうう時ちちゅうは本ちちゅうの莊ちちゅう周しゅうなるが如ちちゅうし
即ちちゅう身ちちゅう成ちちゅう仏ぶつなり、蝶ちちゅうの身ちちゅうを以ちちゅうて成ちちゅう仏ぶつすと云ちちゅううに非あらざるなり蝶ちちゅうと
思ちちゅううは虚そら事ごとなれば成ちちゅう仏ぶつの言ちちゅうは無ちちゅうし沙さ汰たの外ほかの事ちちゅうなり、無む明みょうは夢ちちゅう

の蝶ちようの如ごとしと判ずれば我等われらが僻ひがおもい思なは猶昨日なの夢むの如ごとく性体無き
妄想もうそうなり誰たれの人か虚夢こむの生死しやうじを信受しんじゆして疑うたがいを常住じやうじゆう涅槃ねはんの
仏性ぶつしょうに生なぜんや、止観しかんに云いく「無明むみようの癡惑ちわく本もとより是これ法性ほつしょうなり
癡迷ちめいを以もつての故ゆゑに法性ほつしょう變じて無明むみようと作り諸もろもろの顛倒てんどうの善不善ふぜん等を
起おこす寒来りて水を結むすべば變じて堅けん氷ひようと作なるが如ごとく又眠来りて心
を變かずれば種種しゆじゆの夢有あるが如ごとし今当まさに諸もろもろの顛倒てんどうは即すなわち是ほつしょう法性ほつしょうな
り一ひとならず異ならずと体すべし、顛倒てんどう起滅おこえすること旋火輪せんかりんの如ごとし
と雖いえども顛倒てんどうの起滅おこえを信しんぜずして唯此ただの心こゝろ但是こゝろれ法性ほつしょうなりと信しんず、
起おこは是こゝろれ法性ほつしょうの起おこ・滅めつは是こゝろれ法性ほつしょうの滅めつなり其それを体するに実じつに
は起滅おこえせざるを妄みだりに起滅おこえすと謂おもえり只妄想ただもうそうを指さすに悉ことごとく是こゝろれ
法性ほつしょうなり、法性ほつしょうを以もつて法性ほつしょうに繫かけ法性ほつしょうを以もつて法性ほつしょうを念おもはず常
に是こゝろれ法性ほつしょうなり法性ほつしょうならざる時無なし」已上かくのこと、是こゝろの如ごとく法性ほつしょうな

らざる時の隙も無き理の法性に夢の蝶の如く無明に於て実有の
思を生じて之に迷うなり、止観の九に云く「譬えば眠の法・心
を覆うて一念の中に無量世の事を夢みるが如し乃至寂滅真如に
何の次位か有らん、乃至一切衆生即大涅槃なり復滅す可からず
何の次位・高下・大小有らんや、不生不生にして不可説なれど
も因縁有るが故に亦説くことを得可し十因縁の法生の為に因と
作る虚空に画き方便して樹を種るが如し一切の位を説くのみ」已
上、十法界の依報正報は法身の仏・一体・三身の徳なりと知つ
て一切の法は皆是れ仏法なりと通達し解了する是を名字即と為す
名字即の位より即身成仏す故に円頓の教には次位の次第無し・
故に玄義に云く「末代の学者多く経論の方便の断伏を執して
諍闘す水の性の冷かなるが如きも飲まずんば安んぞ知らん」已上、

てんだい 天台の判に云く「次位の綱目は仁王・瓔珞に依り断伏の高下は
だいぼん 大品智論に依る」已上、仁王・瓔珞・大品・大智度論是の経論は
みなほつけいぜん はつきよう きようろん 皆法華已前の八教の経論なり、権教の行は無量劫を経て昇進
する次位なれば位の次第を説けり今法華は八教に超えたる円な
れば速疾頓成にして心と仏と衆生と此の三は我が一念の心中
おさ に摂めて心の外に無しと観ずれば下根の行者すら尚一生の中に
みようかく 妙覚の位に入る・一と多と相即すれば一位に一切の位皆是れ
ぐそく 具足せり故に一生に入るなり、下根すら是くのこと
いかに況や上根をや実相の外に更に別に別の法無し実相には次第
ゆえ 無きが故に位無し、総じて一代の聖教は一人の法なれば我が身
の本体を能く能く知る可し之を悟るを仏と云い之に迷うは衆生
こ なり此れは華嚴經の文の意なり、弘決の六に云く「此の身の中に

為す五官は下の第八の巻に博物誌を引くが如し（ごと）謂く（おも）苟萌等なり、
天に昇つては五雲と曰（い）化して五竜と為る、心を朱雀と為し（な）腎を
玄武と為し（な）肝を青竜と為し（な）肺を白虎と為し（な）脾を勾陳と為す（な）又
云く（い）「五音・五明・六藝・皆此れより起る（おこ）亦復当に内治の法を
識るべし（し）覺心内に大王と為つては百重の内に居り出でては則ち五
官に侍衛せ為る、肺をば司馬と為し（な）肝をば司徒と為し（な）脾をば司空
と為し（な）四支をば民子と為し（な）左をば司命と為し（な）右をば司録と為し（な）
人命を主司す、乃至臍をば太一君等と為すと（な）禪門の中に広く其の
相を明す（しん）已上、人身の本体委く（く）検すれば是く（かく）の如し、然るに此
の金剛不壊の身を以て生滅無常の身なりと思ふ（ひが）僻思は譬え（たと）ば
莊周が夢の蝶の如し（ごと）と釈し給えるなり、五行とは地水火風空な
り五大種とも五蘊とも五戒とも五常とも五方とも五智とも五時と

も云う、只一物・ただ経経きょうぎょうの異説なり内典・ないてん外典名目げてんみょうもくの異名なり、
今経に之を開して一切衆生の心中の五仏性五智の如来の種子こんきょう これ いっさいしゅじょう しんちゅう ぶつしじょう によらい しゅし
と説けり是則ち妙法蓮華經の五字なり、此の五字を以て人身の
体を造るなり本有常住なり本覺の如来なり是を十如是と云う此
を唯仏与仏・乃能究尽と云う、不退の菩薩と極果の二乗と少分も
知らざる法門なり然るを円頓の凡夫は初心より之を知る故に
即身成仏するなり金剛不壞の体なり、是を以て明かに知んぬ
可し天崩れば我が身も崩る可し地裂けば我が身も裂く可し地水火
風滅亡せば我が身も亦滅亡すべし、然るに此の五大種は過去・
現在・未來の三世は替ると雖も五大種は替ること無し、正法と
像法と末法との三時殊なりと雖も五大種は是れ一にして盛衰轉變
無し、葉草喻品の疏には円教の理は大地なり円頓の教は空の雨

なり亦三蔵教・通教・別教の三教は三草と二木となり、其の故

は此の草木は円理の大地より生じて円教の空の雨に養われて五

乗の草木は榮うれども天地に依つて我榮えたりと思知らざるに

由るが故に三教の人天・二乗・菩薩をば草木に譬えて不知恩と説

かれたり、故に草木の名を得・今法華に始めて五乗の草木は円理

の母と円教の父とを知るなり、一地の所生なれば母の恩を知る

が如く一雨の所潤なれば父の恩を知るが如し、藥草喩品の意

はかくの如くなり。

釈迦如来・五百塵点劫の当初凡夫にて御坐せし時・我が身は地

水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき、後に化他の

為に世世番番に出世成道し在在處處に八相作仏し王宮に誕生し

樹下に成道して始めて仏に成る様を衆生に見知らしめ四十余年

ほうべん 方便教を儲け衆生を誘引す、其の後方便の諸の經教を捨て
しょうじき 正直の妙法蓮華經の五智の如來の種子の理を説き顯して其の
ほうべん 中に四十二年の方便の諸經を丸かし納れて一仏乗と丸し人・一
なず 法と名く一人が上の法なり、多人の綺えざる正しき文書を造つ
たしか 慥かな御判の印あり三世諸仏の手繼ぎの文書を釈迦仏より
そうでん 相伝せられし時に三千三百萬億那由佗の国土の上の虚空の中に満
ふさ ち塞がれる若干の菩薩達の頂を摩で尽して時を指して末法近來
われらしゅじょう ため たしか の我等衆生の為に慥かに此の由を説き聞かせて仏の讓状を以
まつだい 末代の衆生に慥かに授与す可しと慇懃に三度まで同じ御語
と たまい に説き給いしかば若干の菩薩達・各数を尽して☆を曲げ頭を
うなだ 低れ三度まで同じ言に各・我も劣らじと事請を申し給いしかば
おほしめ 仏・心安く思食して本覺の都に還えり給う、三世の諸仏の説法の

儀式・作法には只同じ御言に時を指したる末代の讓ただ・狀みことばなれば只また

いっこう

一向に後・五百歳を指して此の妙法蓮華經を以て成仏じようぶつす可き時

なりと讓ゆずりじよう・狀のの面に載せられたる手継ぎ証文じようもんなり。

安樂行品あんらくぎようほんには末法まつぽうに入つて近來このころ・初心しよしんの凡夫ほんぶ・法華經ほけきようを修行しゆぎよう

して成仏じようぶつす可き様を説き置かれしなり、身も安樂行あんらくぎようなり口も

安樂行あんらくぎようなり意も安樂行あんらくぎようなり自行じぎようの三業も誓願せいがん安樂あんらくの化他けたの行も

同じく後の末世おいに於て法の滅せんと欲ほする時と云云、此は近來きんらいの

時なり已上四所に有り藥王品やくおうほんには二所に説かれ勸發品かんぱつほんには三所に

説かれたり、皆近來みなきんらいを指して讓ゆずり置かれたる正しき文書ぶんしょを用いず

して凡夫ほんぶの言に付き愚癡ぐちの心に任せて三世諸仏さんぜしよぶつの讓ゆずり狀のに背きそむ

奉り永く仏法ぶつぽうに背かば三世さんぜの諸仏しよぶつ・何いかに本意ほんい無く口惜くちおししく心憂うく

歎なげき悲しみ思食おほしめすらん、涅槃經ねはんぎように云く「法よに依つて人よに依らざれ」

と云云、痛ましいかな悲しいかな末代の学者・仏法を習学して
かえ ぶつぼう
還つて仏法を滅す、弘決に之を悲しんで曰く「此の円頓を聞いて
すうちよう
崇重せざることは良に近代大乘を習う者の雑濫に由るが故なり
いわんや こころうす
況や像末情澆く信心寡薄・円頓の教・法蔵に溢れ函に盈つれど
しばら しゆい すなわ ふさ いた いたず
も暫くも思惟せず便ち目を瞑ぐに至る徒らに生し徒らに死す一に
なん
何ぞ痛ましき哉」已上、同四に云く「然も円頓の教は本と凡夫に
被むらしむ若し凡を益するに擬せずんば仏・何ぞ自ら法性の土
も ほつしよう
に住して法性の身を以て諸の菩薩の為に此の円頓を説かずして
なん もろもろ ほつしん ぼさつ ため
何ぞ諸の法身の菩薩の与に凡身を示し此の三界に現じ給うことを
も ち ないし いっしん ほん
須いんや、乃至一心凡に在れば即ち修習す可し」已上、所詮己心
ぶつしん
と仏身と一なりと観ずれば速かに仏に成るなり、故に弘決に又
いわ いっさい しょうぶつ こしん ぶつしん
云く「一切の諸仏己心は仏心と異ならずと観し給うに由るが故に

仏に成ることを得る」と已上、此れを觀心と云う実に己心と仏心
と一心なりと悟れば臨終を礙わる可き惡業も有らず生死に留ま
る可き妄念も有らず、一切の法は皆是れ仏法なりと知りぬれば
教訓す可き善知識も入る可らず思うと思ひ言うと言ひ為すと
為し儀いと儀う行住坐臥の四威儀の所作は皆仏の御心と和合し
て一体なれば過も無く障りも無き自在の身と成る此れを自行と云
う、此くの如く自在なる自行の行を捨て跡形も有らざる無明妄想
なる僻思の心に住して三世の諸仏の教訓に背き奉れば冥きより
冥きに入り永く仏法に背くこと悲しむ可く悲しむ可し、
只今打ち返えし思ひ直し悟り返さば即身成仏は我が身の外には
無しと知りぬ、我が心の鏡と仏の心の鏡とは只一鏡なりと雖も
我等は裏に向つて我が性の理を見ず故に無明と云う、如来は面に

向つて我が性の理を見たまえり故に明と無明とは其の体只一なり
鏡は一の鏡なりと雖も向い様に依つて明昧の差別有り鏡に裏有
りと雖も面の障りと成らず只向い様に依つて得失の二つ有り
相即融通して一法の二義なり、化他の法門は鏡の裏に向うが如く
自行の觀心は鏡の面に向うが如し化他の時の鏡も自行の時の鏡
も我が心性の鏡は只一にして替ること無し鏡を即身に譬え面
向うをば成仏に譬え裏に向うをば衆生に譬う鏡に裏有るをば
性惡を断ぜざるに譬え裏に向う時・面の徳無きをば化他の功德
に譬うるなり衆生の仏性の顯れざるに譬うるなり、自行と化他
とは得失の力用なり玄義の一に云く「薩婆悉達・祖王の弓を彎て
満るを名けて力と為す七つの鉄鼓を中り一つの鉄圀山を貫ぬき地
を洞し水輪に徹る如きを名けて用と為す用なり諸の方便教は力用の

微弱なること凡夫の弓箭の如し何となれば昔の縁は化他の二智

を稟けて理を照すこと遍からず信を生ずること深からず疑を除

くこと尽さず化他、今の縁は自行の二智を稟けて仏の境界を極め

法界の信を起し円妙の道を増し根本の惑を断じ變易の生を損す、

但だ生身及び生身得忍の兩種の

菩薩俱に益するのみに非ず法身と法身の後心との兩種の菩薩も亦

以て俱に益す化の功広大に利潤弘深なる蓋し茲の經の力用なり

自行」自行と化他との力用勝劣分明なること勿論なり能く能く

之を見よ一代聖教を鏡に懸たる教相なり、極仏境界とは十如

是の法門なり十界に互に具足して十界・十如の因果・権実の二

智・二境は我が身の中に有つて一人も漏ること無しと通達し

解了し仏語を悟り極むるなり起法界信とは十法界を体と為し十

法界ほっかいを心なと為なし十法界ほっかいを形なと為なしたまえりと本覺ほんかくの如來にょらいは我が身
の中に有りけりと信しんず増ぞう円えん妙道みょうどうとは自行じぎようと化他けたとの二は
相即そうそく円融えんゆうの法ほふなれば珠たまと光くわうと宝ほうとの三德さんとくは只ただ一の珠たまの德とくなるが
如ごとし片時かたときも相離あいはなれず仏法ぶつぽうに不足ふそく無し一生いっしやうの中に仏ぶつに成なるべしと
慶喜きやうきの念ねんを増ぞうすなり、断根だんこん本惑ほんわくとは一念無明いちねんむみやうの眠みを覺さまして本覺ほんかく
の寤うつに還しやうじれば生死しやうじも涅槃ねはんも俱ともに昨日けつじの夢むの如ごとく跡形あとがたも無なきなり、
損變そんへん易生やくしやうとは同居土ごくらくどの極樂ごくらくと方便土ほうべんどの極樂ごくらくと実報土じつぽうどの極樂ごくらくとの
三土さんどに往生おうじやうせる人彼ひとの土どにて菩薩ぼさつの道みちを修行しゆぎやうして仏ぶつに成ならんと
欲ほするの間・因いんは移かり果くわは易かりて次第しだいに進しんみ昇あがり劫數けつすうを経て
成仏じやうぶつの遠へんきを待まちつを變易へんやくの生死しやうじと云いふなり、下位げゐを捨すつるを死し
と云いふ上位かうゐに進しんむをば生なと云いふ是かくのこの如ごとく變易へんやくする生死しやうじは淨土じやうど
の苦惱くのうにて有あるなり、爰こゝに凡夫ぼんぷの我等われらが此こゝの穢土えどに於おいて法華ほつけを

しゅぎよう

じゅっかいご

ほっかい

じょうど

ぼさつ

へんにやく

修行すれば十界互具・法界一如なれば浄土の菩薩の變易の生は

ぶつどう

へんにやく

じょうど

つづ

ぶつどう

損し仏道の行は増して變易の生死を一生の中に促めて仏道を

じょう

ゆえ

しょうしんおよ

しょうしんとくにん

ぼさつ

そうどうそんしょう

成ず故に生身及び生身得忍の兩種の菩薩・増道損生するなり、

ほっしん

ぼさつ

しょうしん

じつぼうど

ぼさつ

ぼさつ

法身の菩薩とは生身を捨てて実報土に居するなり、後心の菩薩

とうかく

ぼさつ

ただ

しゃくもん

しょうしんおよ

しょうしんとくにん

ぼさつ

とは等覺の菩薩なり但し迹門には生身及び生身得忍の菩薩を

りやく

ほんもん

ほっしん

しょうしんおよ

ぼさつ

りやく

ただ

利益するなり本門には法身と後身との菩薩を利益す但し今は

しゃくもん

ほんもん

おさ

みょうぼう

ゆえ

ほんぶ

われら

えど

迹門を開して本門に摂めて一の妙法と成す故に凡夫の我等穢土

しゅぎよう

じょうど

じゅうちとうかく

ぼさつ

りやく

の修行の行の力を以て浄土の十地等覺の菩薩を利益する行なる

ゆえ

化他の、

りになくじん

ぼさつ

りやく

じぎよう

じぎよう

が故に化の功広大なり徳用、利潤弘深とは徳用円頓の行者は自行

けた

も

いちねん

ぐそく

よこしまじゅつぼうほっかい

へん

遍する

と化他と一法をも漏さず一念に具足して横に十方法界に遍する

ゆえ

ひろ

さんぜ

わた

ほっしょう

えんてい

きわ

ゆえ

が故に弘きなり豎には三世に亘つて法性の淵底を極むるが故に

じぎよう

か

こと

けた

しよきよう

じぎよう

深きなり、此の経の自行の力用此くの如し化他の諸経は自行を

具せざれば鳥の片翼を以て空を飛ばざるが如し故に成仏の人も
無し今法華經は自行化他の二行を開会して不足無きが故に鳥の二
翼を以て飛ぶに障り無きが如く成仏滞り無し、藥王品には十喻
を以て自行と化他との力用の勝劣を判ぜり第一の譬に云く
諸經は諸水の如く法華は大海の如し云云取意、実に自行の
法華經の大海には化他の諸經の衆水を入ること昼夜に絶えず
入ると雖も増ぜず減ぜず不可思議の徳用を顕す、諸經の衆水は
片時の程も法華經の大海を納るること無し自行と化他との勝劣
是くの如し一を以て諸を例せよ、上来の譬喩は皆仏の所説なり人
の語を入れず此の旨を意得れば一代聖教鏡に懸けて陰り無し
此の文釈を見て誰の人か迷惑せんや、三世の諸仏の総勘文なり
敢て人の会釈を引き入る可からず三世諸仏の出世の本懷なり一切

しゅじょうじょうぶつ

衆生しゅじょう成仏じょうぶつの直道じきどうなり、四十二年の化他けたの経を以て立る所の宗宗

は華嚴けこん・真言しんごん・達磨だるま・浄土じょうど・法相ほつそう・三論さんろん・律宗りつしゅう・俱舍ぐしゃ・成実等

しよしゅう

の諸宗しよしゅうなり此等これらは皆悉く法華みなことごとほつけより已前いぜんの八教はつきようの中の教なり皆是みな

ほうべん

方便ほうべんなり兼・但・対・帶ほうべんゆういんの方便誘引さんぜしよぶつなり、三世諸仏せつきようの説教せつきようの

しだい

次第しだいなり此の次第ただを糾ほうもんして法門だんを談もず若し次第しだいに違たがわば仏法ぶつぽうに

あら

非いちだいきようしゅざるなり、一代教主しやかによらいの釈迦如来さんぜしよぶつも三世諸仏せつきようの説教しだいの次第しだいを

ただ

糾ただして一字ただも違またわず我も亦是またくの如かくのこととして・経いわに云く「三世諸仏さんぜしよぶつ

せつぽう

の説法せつぽうの儀式ごことの如く我も今亦是またくの如く無分別ぶんべつの法を説く」已上、

も

若し之に違さんぜえば永く三世の諸仏しよぶつの本意ほんいに背そむく他宗たしゅうの祖師そし各・我が

ほつけしゅう

宗を立て法華宗あらそと諍あやまうこと☆りの中の☆り迷いあやまよいの中の迷いまよいな

り。

徵佗学これの決はに之を破いして云くさんかういん 山王院 「凡およそ八万法蔵はちまんほうそうそ其の行相を

統すぶるに四教しきやうを出いでず頭辺ごとうに示しすが如ごとし蔵通そうつう・別円べつえんは即すなわち声聞しょうもん

・縁覺えんかく・菩薩ぼさつ・菩薩ぼさつ・佛乘ぶつじやうなり真言しんごん・禪門ぜんもん・華嚴けごん・三論さんろん・唯識ゆいしき・律業りつぎふ・

成俱じやうぐ

の二論等の能所きやうりの教理争いでか此この四しを過すぎん若もし過すぐると

言いわば豈あにげ外邪げじやに非あらずや若もし出いでずと言のたまわば便すなわち他の所期しきを問とい得え

よの果即ち四乗なり、然しかして後のちに答こたへに随したがつて極理ごくりを推たずね徴せめよ我われが四教しきやうの行ぎやう

相さうを以もつて並ならべ検かんえて決けつ定じやうせよ彼の所期しきの果こに於おいて若もし我われと違たがわ

ば随したがつて即すなわち之これを詰しめめよ、且しかく華嚴けごんの如ごときは五教ごきやうに各各しきに修因しゅういん

向果きやうこ有あり初はつ・中ちゆう・後ごの行ぎやう一いつならず一教一果いつきやういつこ是これ所期しきなるべし若もし

蔵通そうつう・別円べつえんの因いんと果ことに非あらざれば是これ仏教ぶつぎやうならざるのみ、三種さんしゆ

の法輪ほうりん・三時さんじの教等きやうどう・中ちゆうに就おいて定じやうむ可べし汝何者なんじなにもを以もつてか所期しきの

乗なと為なるや若もし仏乘ぶつじやうなりと言のたまわば未いまだ成仏じやうぶつの觀行かんぎやうを見みず若もし

菩薩ぼさつと言のたまわば此これ亦また即離ちゆうりの中道ちゆうどうの異ことなるなり、汝正なんじまさしく何いづれれを

菩薩ぼさつと言のたまわば此これ亦また即離ちゆうりの中道ちゆうどうの異ことなるなり、汝正なんじまさしく何いづれれを

取るや設し離の辺を取らば果として成ず可き無し如し即是を要せば仏に例して之を難ぜよ謬つて真言を誦すとも三觀一心の妙趣を会せずんば恐くは別人に同じて妙理を証せじ所以に他の所期の極を逐うて理に準じて理なり徴べし、因明の道理は外道と対す多くは小乗及び別教に在り若し法華・華嚴・涅槃等の經に望むれば接引門なり権りに機に對して設けたり終に以て引進するなり邪小の徒をして会して真理に至らしむるなり所以に論ずる時は四依擊目の志を存して之を執着すること莫れ又須らく他の義を將つて自義に對検して随つて是非を決すべし執して之を怨むこと莫れ大底他は多く三教に在り先徳大師の所判是の如し、諸宗の所立鏡に懸けて陰り無し末代の學者何ぞ之を見ずして妄りに教門を判ぜんや大綱の三教を能く能く學す可し、頓と漸と円とは三教なり

こ いちだいしようきよう
是れ一代聖教の總の三諦なり頓・漸の二は四十二年の説なり

えんきよう

はちかねん

円教の一は八箇年の説なり合して五十年なり此の外に法無し

いかよ

まよい

しゅじようあ

こ

さんたいい

何に由つてか之に迷わん、衆生に有る時には此れを三諦と云い

ぶっか

じよう

さんじん

いみよう

これと

仏果を成ずる時には此れを三身と云う一物の異名なり之を説き

あらわ

いちだいしようきよう

いこれ

かいえ

ただ

さんたい

じよう

顯すを一代聖教と云い之を開会して只一の總の三諦と成ずる時

じようぶつ

かいえい

じぎよう

さんたい

じよう

に成仏す此を開会と云い此を自行と云う、又他宗所立の宗宗は

じようぶつ

かいえい

じぎよう

たしゅうしよりゆう

えんまん

此の總の三諦を分別して八と為す各各に宗を立つるに依つて円満

さんたい

ぶんべつ

な

よ

えんまん

の理を闕いて成仏の理無し是の故に余宗には実の仏無きなり

ゆえ

これ

ふそく

きら

えんきよう

いっさいしよほう

故に之を嫌う意は不足なりと嫌うなり、円教を取つて一切諸法

ゆえ

これ

ふそく

きら

えんきよう

いっさいしよほう

を觀ずること円融・円満して十五夜の月の如く不足無く満足し

くきよう

ぜんあく

きら

おりふし

じようしよ

ふそくなく

まんそく

究竟すれば善惡をも嫌わず折節をも撰ばず静処をも求めず人品

えら

いっさいしよほう

みなこ

ぶつぽう

しよほう

つうだつ

をも扱ばず一切諸法は皆是れ仏法なりと知りぬれば諸法を通達す

すなわ

ぶつどう

じょう

てんちすいか

こ

即ち非道を行うとも仏道を成ずるが故なり、天地水火風は是れ五

によらい

いっさいしゅじょう

しんしん

じゅうざい

かたとき

智の如来なり一切衆生の身心の中に住在して片時も離ること

ゆえ

せけん

しゅつせ

わごう

しんちゅう

無きが故に世間と出世と和合して心中に有つて心外には全く

べち

ゆえ

これ

すみや

ぶっか

じょう

別の法無きなり故に之を聞く時立所に速かに仏果を成ずること

とどこお

ゆえ

これ

すみや

ぶっか

じょう

滞り無き道理至極なり、総の三諦とは譬えば珠と光と宝との如し

さんとかあ

よ

によいほうじゅ

ゆえ

さんたい

たと

もまた

此の三徳有るに由つて如意宝珠と云う故に総の三諦に譬う若し亦

たま

さんとか

よ

によいほうじゅ

ゆえ

さんたい

たと

もまた

珠の三徳を別別に取り放さば何の用にも叶う可からず隔別の

ほうべん

さんとか

よ

によいほうじゅ

ゆえ

さんたい

たと

もまた

方便教の宗宗も亦是くの如し珠をば法身に譬え光をば報身に譬え

ほうべん

さんとか

よ

によいほうじゅ

ゆえ

さんたい

たと

もまた

宝をば応身に譬う此の総の三徳を分別して宗を立つるを不足と嫌

ほうべん

さんとか

よ

によいほうじゅ

ゆえ

さんたい

たと

もまた

うなり之を丸じて一と為すを総の三諦と云う、此の総の三諦は

さんじん

さんとか

よ

によいほうじゅ

ゆえ

さんたい

たと

もまた

三身即一の本覚の如来なり又寂光をば鏡に譬え同居と方便と

さんじん

さんとか

よ

によいほうじゅ

ゆえ

さんたい

たと

もまた

実報の三土をば鏡に遷る像に譬う四土も一土なり三身も一仏なり

じつぽう

さんとか

よ

によいほうじゅ

ゆえ

さんたい

たと

もまた

今は此の三身さんじんと四土わじうと和合わがくして仏の一体の徳なるを寂光じやくこうの仏と云う寂光じやくこうの仏を以て円教えんきやうの仏と為し円教えんきやうの仏を以て寤うつつの実仏じつぶつと為す余の三土の仏は夢中の権仏ごんぶつなり、此れは三世の諸仏しよぶつの只同ただじ語ことばに勘文かんもんし給える総の教相きやうそうなれば人の語ことばも入らず会釈えしやくも有らず若し之に違たがわば三世の諸仏しよぶつに背そむき奉る大罪たてまつたいざいの人なり天魔てんま・外道げどうなり永く仏法ぶつぽうに背そむくが故に之を秘藏ひそうして他人たにんには見せざれもし秘藏ひそうせずして妄みだりに之を披露ひろうせば仏法ぶつぽうに証理しやうり無く二世にに冥加みやうが無からん謗ぼうずる人出来しゆつたいせば三世の諸仏しよぶつに背そむくが故に二人ふたり乍なら俱ともに惡道あくどうに墮おちんと識しるが故に之を誡いましむるなり、能く能く秘藏ひそうして深く此の理を証し三世の諸仏しよぶつの御本意ごほんいに相あい叶かない二聖二天・十羅刹じゆらせつの擁護おうごを蒙こうむり滯とどこなく上じやうじやう・上品じやうじんの寂光じやくこうの往生おうじやうを遂とげ須臾しゆゆの間に九界生死しやうじの夢の中に還かえり来きつて身を十方じゆつぽう法界ほふかいの国土こくど

れば無心の草木も皆悉く萌え 出生 して華敷き栄えて世に値う氣
色なり秋の時に至りて月光の縁に値いぬれば草木皆悉く実成熟
して一切の有情を養育し壽命を續き長養し終に成仏の徳用を
顯す之を疑い之を信ぜざる人有る可しや無心の草木すら猶以て
是くの如し何に況や人倫に於てをや、我等は迷の凡夫なりと
雖も一分の心も有り解も有り善惡も分別し折節を思知る然るに
宿縁に催されて生を仏法流布の国土に受けたり善知識の縁に
値いなば因果を分別して成仏す可き身を以て善知識に値うと
雖も猶草木にも劣つて身中の三因仏性を顯さずして黙止せる
謂れ有る可きや、此の度必ず必ず生死の夢を覺まし本覺の寤に
還つて生死の繼を切る可し今より已後は夢中の法門を心に懸く
可からざるなり、三世の諸仏と一心と和合して妙法蓮華經を

修行しゅぎようし障さわり無く開悟かいごす可べし自行じぎようと化他けたとの二教さべつの差別さべつは鏡かがみに懸かけて陰くもり無し、三世さんぜの諸仏しよぶつの勘文かんもん是かくの如ごとし秘へす可べし秘へす可べし。

弘安二年己卯十月 日

日蓮にちれん 花押かおう

◆七八 諫曉八幡抄 576P

夫それ馬ばは一歳二歳の時は設たいづがいのび・まろすねに・すねほ

そく・うでのびて候へども病あるべしとも見えず、而しかれども七八

歳さいなんどになりて身もこへ血ふとく上かち下をくれ候へば小船に

大石をつめるがごとく小き木に大なる菓このみのなれるがごとく多く

のやまい出来しゅつたいして人の用にもあわず力もよわく寿いのちもみじかし、

天神等も又かくのごとし成劫じやうこくの始には先せん生の果報かほういみじき

衆生しゅじやう生れ来る上・人の悪も候はねば身の光もあざやかに心もい

さぎよく日月のごとくあざやかに師子象しししやうのいさみをなして候いし

じょうこう

てんじん

程に成劫やうやくすぎて住劫になるままに前の天神等は年か
なりて下旬の月のごとし今生れ来れる天神は果報衰減し下劣の
衆生多分は出来す、然る間・一天に三災やうやくをこり四海に
七難粗出現せしかば一切衆生始めて苦と楽とを・をもい知る。
ひちなんほほしゅつげん いっさいしゅじょう

しゅつげん

ぶつきょう

もう

此の時・仏出現し給いて仏教と申す薬を天と人と神とにあた

たまひ

ともしび

ろうじん

てんじん

へ給いしかば燈に油をそへ老人に杖をあたへたるがごとく天神

かえ

いこう

せいりよく

そうちよう

じょうこう

ぶつきょう

等還つて威光をまし勢力を増長せし事・成劫のごとし仏教に

かえ

いこう

せいりよく

そうちよう

じょうこう

ぶつきょう

又五味のあぢわひ分れたり在世の衆生は成劫ほどこそなかりし

かほう

ざいせ

しゅじょう

じょうこう

いずれ

かども果報いたう・をとろへぬ衆生なれば五味の中に何の味を

かほう

いこう

せいりよく

しゅじょう

ほとけめつど

しょうそう

もなめて威光勢力をもまし候き、仏滅度の後正像二千年過て

まっほう

いこう

せいりよく

しゅじょう

しょうそう

末法になりぬれば本の天も神も阿修羅大竜等も年もかさなりて身

まっほう

いこう

せいりよく

しゅじょう

しょうそう

もつかれ心もよはくなり又今生れ来る天人・修羅等は・或は小

てんにん

しゅら

ある

果報・或は悪天人等なり、小乗・権大乘等の乳・酪・生蘇・
熟蘇味を服すれども老人に☆食をあたへ高人に麦飯等を奉るがご
とし、而るを当世此を弁えざる学人等古にならいて日本国の一切
の諸神等の御前にして阿含經方等・般若・華嚴・大日經等を法
樂し俱舍・成実・律・法相・三論華嚴・淨土・禅等の僧を護持
の僧とし給える唯老人に☆食を与へ小兒に強飯をくくめるがご
とし、何に況や今の小乗經と小乗宗と大乘經と大乘宗と
は古の小大乘の經宗にはあらず、天竺より仏法漢土へわたり
し時小大の經經は金言に私言まじはれり、宗宗は又天竺・漢土
の論師・人師・或は小を大とあらそい・或は大を小という・或は
小に大をかきまじへ・或は大に小を入れ・或は先きの經を後とあ
らそい・或は後を先とし・或は先を後につけ・或は顯經を密經

といひ密みつ経きやうを頭けん経きやうという譬たとへば乳に水を入れ薬に毒を加うるが

ごとし、涅槃ねはん経きやうに仏みらい・未来しるを記しるして云く「爾その時に諸もろの賊もろ・醍醐だいご

を以ての故ゆえに之に加うるに水を以てす・水を以てする事多きが

故ゆえに乳にゅう・酪らく・醍醐だいご一切俱いっさいともに失なす」等云云、阿含あこん・小乘しょうじやう経きやうは乳味にゅうみの

ごとし方等ほうとう・大集だいしつ経きやう・阿弥陀あみだ経きやう・深密じんみつ経きやう・楞伽りやうが経きやう・大日だいにち経きやう等

は酪味らくみのごとし、般若はん経きやう等は生蘇しょうそ味みの如ごとく華嚴けこん経きやう等は熟蘇じゆくそ味みの

如ごとく法華ほつけ・涅槃ねはん経きやう等は醍醐だいご味みの如ごとく、設たといししょうじやうききやうの乳味にゅうみなり

とも仏説ぶつせつの如ごとくならば争いかでか一分いちぶんの薬とならざるべき、況いや諸もろの

大乘だいじやう経きやうをや何いかに況いや法華ほつけ経きやうをや。

然しかるに月氏がつしより漢土かんとに経きやうを渡わたせる訳人わけは一百八十七人なり其その

中ちゅうに羅什らじき三蔵さんざう一人を除ぞくきて前後ぜんごの一百八十六人は純乳じゆんに水を加くへ

薬やくに毒を入いたる人人ひとびとなり、此この理りを并わへまへまざる一切いっさいの人師にんし・末学まつがく等

たといいつさいきよう

設い一切経を讀誦し十二分経を胸に浮べたる様なりとも生死を

離る事かたし又現在に一分のしるしある様なりとも天地の知る程

の祈とは成る可からず魔王・魔民等守護を加えて法に験の有様

なりとも終には其の身も檀那も安穩なる可からず譬ば旧医の藥

に毒を雜へて・さしをけるを旧医の弟子等・・或は盗み取り・或

は自然に取りて人の病を治せんが如し・いかでか安穩なるべき、

当世日本国の真言等の七宗並に浄土・禅宗等の諸学者等、弘法

・慈覚・智証等の法華経最第一の醍醐に法華第二・第三等の私の

水を入れたるを知らず仏説の如くならば・いかでか一切俱失の

大科を脱れん、大日経は法華経よ

り劣る事七重なり而るを弘法等・顛倒して大日経最第一と定め

て日本国に弘通せるは法華経一分の乳に大日経七分の水を入れ

たるなり水にも非ず乳にも非ず大日経にも非ず法華経にも非ず
而も法華経に似て大日経に似たり大覺世尊此の事を涅槃經に
記して云く「我が滅後に於て正法將に滅尽せんと欲す爾の時に
多く惡を行ずる比丘有らん、乃至牧牛女の如く乳を売るに多利を
貪らんと欲するを為ての故に二分の水を加う、乃至此の乳・水多
し、爾の時には是の経間浮提に於て当に広く流布すべし、是の時に
當に諸の惡比丘有て是の經を鈔・略し分て多分と作し能く正法
の色香美味を滅すべし、是の諸の惡人復是くの如き經典を讀誦
すと雖も如来の深密の要義を滅除せん、乃至前を鈔て後に著け後
を鈔て前に著け前後を中に著け中を前後に著けん當に知るべし
是くの如きの諸の惡比丘は是れ魔の伴侶なり」等云云。

今・日本國を案ずるに代始まりて已に久しく成りぬ旧き守護の

善神は定めて福も尽き寿も減じ威光勢力も衰えぬらん、仏法の
味をなめてこそ威光勢力も増長すべきに仏法の味は皆たがひぬ
齢はたけぬ争でか国の災を払い氏子をも守護すべき、其の上
謗法の国にて候を氏神なればとて大科をいましめずして守護し候
へば仏前の起請を毀る神なり、しかれども氏子なれば愛子の失
のやうに・すてずして守護し給いぬる程に法華經の行者をあだ
む国主人等を対治を加えずして守護する失に依りて梵釈等の
ためには八幡等は罰せられ給いぬるか此事は一大事なり秘すべし
秘すべし、有る經の中に仏・此の世界と他方の世界との梵釈・
日月・四天・竜神等を集めて我が正像末の持戒・破戒・無戒等
の弟子等を第六天の魔王・悪鬼神等が人王・人民等の身に入りて
悩乱せんを見乍ら聞き乍ら治罰せずして須臾もすこすならば必ず

梵釈等の使をして四天王に仰せつけて治罰を加うべし、若し氏神・治罰を加えずば梵釈・四天等も守護神に治罰を加うべし。梵釈又かくのごとし、梵釈等は必ず此の世界の梵釈・日月・四天等を治罰すべし、若し然らずんば三世の諸仏の出世に漏れ永く梵釈等の位を失いて無間・大城に沈むべしと釈迦・多宝・十方の諸仏の御前にして起請を書き置れたり。

今之を案ずるに日本小国の王となり神となり給うは小乗には三賢の菩薩・大乘には十信・法華には名字五品の菩薩なり、何なる氏神有りて無尽の功德を修すとも法華經の名字を聞かず一念三千の觀法を守護せずんば退位の菩薩と成りて永く無間・大城に沈み候べし、故に扶桑記に云く「又伝教大師・八幡大菩薩の奉為に神宮寺に於て、自ら法華經を講ず、乃ち聞き竟て大

神託宣たくせんすらく我法音を聞かずして久しく歳年さいねんを歴る幸い和尚わじょうに
値遇ちぐうして正教せいきょうを聞くことを得たり兼かねて我がために種種しゅじゅの功德くどくを
修しゅうす至誠ずいき隨喜なんす何ぞ徳を謝するに足らん、兼かねて我が所持しよじの法衣ほうえ有
りと即すなわち託宣たくせんの主・自ら宝殿みづか ほうでんを開いて手ら紫の袈裟けさ一つ紫の衣一
を捧ささげ和尚わじょうに奉上ゆえす大悲力の故に幸に納受のうじゅを垂れ給たまえと、是の時
に禰宜ねぎ・はふりとう・祝等各歎異いわして云く元来是かくのことの如きの奇事を見ず聞かざる
かな、此の大神施ほどこし給う所の法衣ほうえ今山王院さんのういんに在るなり」云云、今
謂いわく八幡はちまんは人王第十六代・応神天皇てんのうなり其の時は仏經ぶきよう無かりしか
ば此ここに袈裟衣けさ あ有るべからず、人王第三十代欽明天皇きんめいてんのうの治三十二年
に神と顕あらわれ給たまい其れより已来弘仁五年このかたこうにんまでは禰宜ねぎ・はふりとう・祝等次第しだいに
宝殿ほうでんを守護しゅごす、何の王の時・此の袈裟けさを納めおさけると意こころへし而しこうして
禰宜ねぎ等云く元来見ず聞かず等云云、此の大菩薩ほさついかにしてか此の

袈裟衣は持ち給いけるぞ不思議なり不思議なり。

又欽明より已来弘仁五年に至るまでは王は二十二代・仏法は二

百六十余年なり、其の間に三論・成実・法相・俱舍・華嚴・

律宗・禪宗等の六宗・七宗・日本国に渡りて八幡大菩薩の

御前にして經を講ずる人人・其の数を知らず、又法華經を讀誦す

る人も争でか無からん、又八幡大菩薩の御宝殿の傍には神宮寺と

号して法華經等の一切經を講ずる堂・大師より已前には是あり、

其の時定めて仏法を聴聞し給いぬらん何ぞ今始めて我法音を聞

かずして久しく年歳を歴る等と託宣し給ふべきや、幾くの人人か

法華經一切經を講じ給いけるに何ぞ此の御袈裟衣をば進らせ

給はざりけるやらん、当に知るべし伝教大師已前は法華經の

文字のみ読みけれども其の義はいまだ顕れざりけるか、去ぬる

えんりやく

延暦二十年十一月中旬の比・伝

教大師比叡山にして南都・

なんと

ななだいじ ろくしゅう

せきとく

ぶじょう

ほけきょう

こう

たまい

七大寺の六宗の碩徳十余人を奉請して法華経を講じ給いしに、

ひろよまずな

弘世・真綱等の二人の臣下此の法門を聴聞してなげいて云く

いちじょう

ごんたい

なげ

さんたい

みけん

ほうもん

ちようもん

いわ

「一乗の権滞を慨き三諦の未顕を悲しむ」又云く「長幼三有の

さいは

なおいま

りやっこう

てつ

あらた

そ

えんりやく

く

結を摧破し猶未だ歴劫の轍を改めず」等云云、其の後延暦二十

さいは

なおいま

りやっこう

てつ

あらた

そ

えんりやく

く

一年正月十九日に高雄寺に主上・行幸ならせ給いて六宗の碩徳

たかおでら

そ

えんりやく

く

あらた

そ

えんりやく

く

と伝教大師とを召し合はせられて宗の勝劣を聞し食ししに南都

でんぎようだいし

そ

えんりやく

く

あらた

そ

えんりやく

く

の十四人皆口を閉ぢて鼻のごとくす、後に重ねて怠状を捧げた

みな

そ

えんりやく

く

あらた

そ

えんりやく

く

り、其の状に云く「聖徳の弘化より以降た今に二百余年の間講ず

そ

えんりやく

く

あらた

そ

えんりやく

く

る所の経論其の数多し、彼れ此れ理を争い其の疑未だ解けず

きようろんそ

かずおお

そ

えんりやく

く

あらた

そ

えんりやく

く

而も比の最妙の円宗猶未だ闡揚せず」等云云、比れをもつて思

しか

えんりやく

く

あらた

そ

えんりやく

く

うに伝教大師已前には法華経の御心いまだ顕れざりけるか、

でんぎようだいし

いぜん

ほけきょう

そ

えんりやく

く

あらた

そ

えんりやく

く

はちまんだいぼさつ
八幡大菩薩の見ず聞かずと御託宣有りけるは指なり指なり 白あきらかな

り 白あきらかなり。

法華經ほけきよう第四に云く「我が滅度めつどの後に能く竊ひそかに一人の爲ためにも

法華經ほけきようを説かん、当まさに知るべし是この人は則すなわち如来によらいの使ないしなり乃至

如来則によらいすなわち衣を以て之これを覆おおい給たまうべし」等云云、当来とうらいの弥勒みろく仏は

法華經ほけきようを説き給たまうべきゆへに釈迦しゃか仏は大迦葉かしようそんじや尊者を御使おんつかいとして

衣たまを送り給ふ、又伝でんぎようだいし教大師は仏の御使おんつかいとして法華經ほけきようを説き給たまう

ゆへに八幡大菩薩はちまんだいぼさつを使として衣を送り給たまうか、又此の大菩薩ぼさつは

伝でんぎようだいし教大師いぜん已前には加水ほけきようの法華經ほけきようを服してをはしましけれども

先生せんしようの善根ぜんこんに依よつて大王だいおうと生れ給たまいぬ、其その善根ぜんこんの余慶よけい・神と

顕あらわれて此の国しゆこを守護たまいし給たまいけるほどに今は先生せんしようの福ふくの余慶よけいも

尽つきぬ、正法しやうほうの味も失せぬ謗法ほうほうの者等・国中じゆうまんに充滿じゆうまんして年久し

けれども日本国の衆生に久く仰がれてなじみせし大科あれども
捨てがたくをぼしめし老人の不幸の子を捨てざるが如くして天の
せめに合い給いぬるか、又此の袈裟は法華經第一と説かん人こ
そ・かけまいらせ給うべきに伝教大師の後は第一の座主・義真
和尚・法華最第一の人なればかけさせ給う事其の謂あり、第二
の座主円澄大師は伝教大師の御弟子なれども又弘法大師の弟子
なり・すこし謗法にいたり、此の袈裟の人には有らず、第三の
座主・円仁慈覚大師は名は伝教大師の御弟子なれども心は弘法
大師の弟子・大日經第一・法華經第二の人なり、此の袈裟は
一向にかけがたし、設いかけたりとも法華經の行者にはあらず、
其の上又当世の天台座主は一向・真言の座主なり、又当世の八幡
の別当は・或は園城寺の長吏・或は東寺の末流なり、此れ等は

遠くは釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵・近くは伝教大師の
讐敵なり、譬へば提婆達多が大覚世尊の御袈裟をかけたるがご
とし、又獵師が仏衣を被て師子の皮をはぎしがごとし、当世叡山
の座主は伝教大師の八幡大菩薩より給て候し御袈裟をかけて
法華經の所領を奪ひ取りて真言の領となせり、譬へば阿闍世王
の提婆達多を師とせしがごとし。

而るを大菩薩の此の袈裟をはぎかへし給わざるは第一の大科な
り、此の大菩薩は法華經の御座にして行者を守護すべき由の
起請をかきながら数年が間・法華經の大怨敵を治罰せざる事
不思議なる上、たまたま法華經の行者の出現せるを来りて守護
こそなさざらめ、我が前にして、国主等の怨する事・犬の猿をか
み蛇の蝦をのみ鷹の雉を師子王の兎を殺すがごとくするを一度

もいましめず、設たいいましむるやうなれども・いつわりをろかな
るゆへに梵釈ぼんしゃく・日月にちがつ・四天等してんのせめを八幡大菩薩はちまんだいぼさつかほり給たまいぬ
るにや、例せば欽明天皇きんめいてんのう・敏達天皇びんたつてんのう・用明天皇ようめいてんのう已上三代の大王だいおう・
物部大連もののべのおむらじ・守屋等もりやがすすめに依りて宣旨せんじを下して金銅の釈尊しゃくそんを
焼き奉り堂に火を放ち僧尼そうにをせめしかば天より火下て内裏くだりをや
く、其その上・日本国にほんこくの万民ばんみんとがなくて悪瘡あくそうをやみ死ぬること
大半たいはんに過ぎぬ、結句けっく三代の大王・二人の大臣だいじん・其の外多くの王子おうじ
・公卿等くぎよう・或あるは悪瘡あくそう・或あるは合戦にほろび給たまいしがごとし、
其の時そのとき・日本国にほんこくの百八十の神の栖給すみたまいいし宝殿ほうでん皆焼け失せぬ釈迦仏しゃかぶつ
に敵する者を守護しゅごし給たまいし大科だいかなり、又園城寺おんじょうじは叡山えいざん已前いぜんの寺な
れども智証大師ちしょうだいしの真言しんごんを伝えて今に長吏ちやうりとがうす叡山えいざんの末寺まつじたる
事うたがい疑しいなし、而しかるに山門さんもんの得分わかたる大乘だいじようの戒壇かいだんを奪かいだんい取りて

園城寺に立てて叡山に随わじと云云、譬へば小臣が大王に敵し子が親に不幸なるがごとし、かかる悪逆の寺を新羅大明神みだれがわしく守護するゆへに度度・山門に宝殿を焼る、此のごとし、今八幡大菩薩は法華經の大怨敵を守護して天火に焼かれ給いぬるか、例せば秦の始皇の先祖・襄王と申せし王・神となりて始皇等を守護し給いし程に秦の始皇大慢をなして三皇・五帝の墳典をやき三聖の孝經等を失いしかば沛公と申す人剣をもつて大蛇を切り死ぬ秦皇の氏神是なり、其の後秦の代ほどなくほろび候いぬ此れも又かくのごとし、安芸の国いつく島の大明神は平家の氏神なり平家を・をござらせし失に伊勢太神宮・八幡等に神うちに打ち失われて其の後平家ほどなくほろび候いぬ此れも又かくのごとし。

法華經ほけきようの第四よに云いく「仏滅度ほとけめつどの後のち能よく其その義ぎを解げせんは是これ
諸もろもろの天人てんにん・世間せけんの眼まなこなり」等云云、日蓮にちれんが法華經ほけきようの肝心かんじんたる題目だいもく
を日本国にほんこくに弘通ぐつうし候しよてんは諸天せけん・世間せけんの眼まなこにあらずや、眼まなこには五ごあ
り所謂いわゆる・肉眼にくげん・天眼てんげん・慧眼えげん法眼ほうげん・仏眼ぶつげんなり、此この五眼ほけきようは法華經ほけきようよ
り出生しゅつしようせさせ給たまう故ゆえに普賢經ふげんに云いく「此この方等經ほうとうは是これ諸仏しよぶつ
眼まなこなり諸仏しよぶつ是よつれに因よつて五眼ごを具ぐする事ことを得給たまう」等云云、此この
方等經ほうとうと申もうすは法華經ほけきようを申もうすなり、又此またの經きようもんに云いく「人天にんてんの福田ふくでん
・応供おうぐの中の最さいなり」等云云、此等これらの經文きようもんのごとくば
妙法蓮華經みようほうれんげきようは人天にんてんの眼まなこ・二乘にじよう・菩薩ぼさつの眼諸仏しよぶつの御眼ぎよげんなり、而しか
に法華經ほけきようの行者ぎようじやを怨あだむ人は人天にんてんの眼まなこをくじる者ものなり、其その人ひとを
罰しゆごしんせざる守護神しゆごしんは一切いっさいの人天にんてんの眼まなこをくじる者ものを結構けつこうし給たまう神たましいな
り、而しかるに弘法こうほう・慈覺じかく・智証ちしよう等は正まさしく書かを作りて法華經ほけきようを無明むみよう

の辺域へんいきにして明の分位に非あらず後に望れば戲論けろんと作る力者ちからに及およばず
履者ふしとりにとらずとかきつけて四百余年、日本国にほんこくの上一人より下
万民ばんみんにいたるまで法華經ほけきょうをあなづらせ一切衆生の眼いっさいしゅじょうをくじる者
を守護しゅごし給たまうはあに八幡大菩薩はちまんだいぼさつの結構けつこうにあらずや、去いぬる弘長こうちやう
と又い去ふんえいぬる文永八年九月の十二日に日蓮にちれん一分の失とがなくして南無
妙法蓮華經みやうほうれんげきやうと申もうす大科だいかに国主こくしゅのはからいとして八幡大菩薩はちまんだいぼさつの
御前おんまえにひきはらせて一国の謗法ぼうぼうの者どもにわらわせ給たまいしはあに
八幡大菩薩はちまんだいぼさつの大科だいかにあらずや、其そのいましめと・をぼしきは・た
だどしうちばかりなり、日本国にほんこくの賢王けんおうたりし上・第一だいいち・第二の御
神たましいなれば八幡はちまんに勝すぐれたる神はよもをはせじ、又偏頗へんげはよも有らじ
とは・をもへども一切經いっさいきやう並に法華經ほけきやうのをきてのごときんば・こ
の神だいかは大科たましいの神なり、日本にほん六十六箇国二つの島一万一千三十七の

寺寺の仏は皆・或は画像・或は木像・或は真言已前の寺もあり

・或は已後の寺もあり、此等の仏は皆法華經より出生せり、

法華經をもつて眼とすべし、所謂「此の方等經は是れ諸仏の眼

なり」等云云、妙樂云く「然も此の經は常住 仏性を以て咽喉

と為し一乗の妙行を以て眼目と為し再生敗種を以て心腑と為し

顯本遠寿を以て其の命と為す」等云云、而るを日本國の習い

真言師にもかぎらず諸宗一同に仏眼の印をもつて開眼し大日の

真言をもつて五智を具すと云云此等は法華經にして仏になれる

衆生を真言の權經にて供養すれば還つて仏を死し眼をくじり

壽命を断ち喉をさきなんどする人人なり、提婆が教主釈尊の

身より血を出し阿闍世王の彼の人を師として現罰に値いしにか

でか・をとり候べき、八幡大菩薩は応神天皇・小國の王なり

あじゃせ まかつたいこく だいおう
阿闍世王は摩竭大国の大王なり天と人と王と民との勝劣なり、
しか あじゃせ なおしゃかぶつ
而れども阿闍世王・猶釈迦仏に敵をなして悪瘡身に付き給いぬ、
はちまんだいぼさつ
八幡大菩薩いかでか其の科を脱るべき、去ぬる文永十一年に大
もうこ にほんこく
蒙古よりよせて日本国の兵を多くほろぼすのみならず八幡の宮殿
すでにやかれぬ、其の時何ぞ彼の国の兵を罰し給はざるや、まさ
だいおう
に知るべし彼の国の大王は此の国の神に勝れたる事あきらけし、
じゃおう かんど だいいち たましい はいこう
襄王と申せし神は漢土の第一の神なれども沛公が利劔に切られ
たまい
給いぬ。

こ
此れをもつてをもうべし道鏡法師・称徳天皇の心よせと成り
こくおう きよまろ はちまんだいぼさつ きしろう はちまん
て国王と成らんとせし時清丸・八幡大菩薩に祈請せし時八幡の御
たくせん いわ そ だいしょう
託宣に云く「夫れ神に大小好悪有り乃至彼は衆く我は寡し邪は
すなわまさ かこ おお すくな
強く正は弱し乃ち当に仏力の加護を仰て為めに皇緒を紹隆すべ
こうちよ しよりゆう

し」等云云、当に知るべし八幡大菩薩は正法を力として王法を
守護し給いけるなり、叡山・東寺等の真言の邪法をもつて権の
大夫殿を調伏せし程に権の大夫殿はかたせ給い隠岐の法皇はま
けさせ給いぬ還著於本人此れなり。

今又日本国・一万一千三十七の寺並に三千一百三十二社の神は
国家安穩のために・あがめられて候、而るに其の寺寺の別当等・
其の社の神主等はみなみな・あがむるところの本尊と神との御
心に相違せり、彼れ彼れの仏と神とは其の身異体なれども其の心
同心に法華經の守護神なり、別当と社主等は・或は真言師・或は
念仏者・或は禅僧・或は律僧なり皆一同に八幡等の御かたきな
り、謗法不孝の者を守護し給いて正法の者を・或は流罪・或は
死罪等に行なわするゆへに天のせめを被り給いぬるなり、我が

弟子等の内・謗法の余慶有る者の思いていわく此の御房は八幡をかたきとすと云云、これいまだ道理有りて法の成就せぬには本尊をせむるという事を存知せざる者の思いなり付法蔵經と申す經に大迦葉尊者の因縁を説いて云く「時に摩竭国に婆羅門有り尼俱律陀と名づく過去の世に於て久しく勝業を修し、多く財宝に饒かにして巨富無量なり摩竭王に比するに千倍勝れりと為す、財宝饒かなりと雖も子息有る事無し自ら念わく老朽して死の時將に至らんとす庫蔵の諸物委付する所無し、其の舎の側に於て樹林神有り彼の婆羅門子を求むるが為の故に即ち往て祈請す年歳を経歴すれども微応無し、時に尼俱律陀大に瞋忿を生じて樹神に語て曰く、我汝に事てより来已に年歳を経れども都て一の福応を垂るるを見ず今当に七日至心に汝に事うべし、若し復驗無

ければ必ず相焼しょうせん 剪せん、樹神聞き已ておわつ はなはだ 甚だ愁怖しゅうふを懷いだき四天王してんのう

に向つて具つぶさに斯この事を陳のぶ、是に於おいて四王往しおうて帝釈たいしゃくに白もうす・

たいしゃく えんぶだい

帝釈閻浮提の内を觀察するに・福德の人の彼の子と為なるに堪ゆ

る無し即ち梵王すなわ ほんのうに詣もうで広かみく上の事を宣のぶ、爾その時に梵王ほんのう・天眼てんげんを

以て觀見するに梵天ほんてんの當まさに命終みょうじゅうに臨のぞむ有り而しこうして之に告いわげて曰く

なんじも

汝若し神を降よろさば宜まさしく當まさに彼の閻浮提界の婆羅門ばらもんの家に生なず

べし、梵天ほんてん對こたえて曰く婆羅門ばらもんの法惡邪見じやけん多し我今其子と為なる事能なざ

るなり、梵王復ほんのう言またく彼の婆羅門ばらもん大威徳いとく有り閻浮提えんぶだいの人往えんぶだいて生なずる

に堪なゆる莫なんじし汝なんじ必かしこず彼かしこに生なぜば吾まもれ相護つゐりて終なんじに汝なんじをして邪見じやけん

に入ならしめざらん、梵天ほんてん曰いわく諾だく・敬うやまいして聖教しょうきょうを承うけん、是に於おいて

たいしゃく

帝釈そく・即樹神そくに向つて斯この如ごとき事を説く樹神かんき歡喜かんきして尋そて其その

家もうに詣もうで婆羅門ばらもんに語かたらく汝なんじ今復恨またうらみを我われに起おこす事ことなかれ卻しりぞけて後

七日^{まさ}当に卿が願を満すべし、七日に至^{いたつ}て已に婦身む事有^あるを覚^{おぼ}え
十月を満足^{まんぞく}して一男児を生めり乃至^{ないし}今の迦葉^{かしょう}是なり」云云、「時
に^に応じて尼俱律陀大に瞋^{しん}忿^{ふん}を生ず」等云云、常のごときんば氏神
に向いて大瞋^{しん}恚^にを生ぜん者は今生^{こんじやう}には身をほろぼし後世^{ごしやう}には
惡道^{あくどう}に墮^おつべし然^{しか}りと雖^{いえど}も尼俱律陀長者・氏神に向て大惡口大
瞋^{しん}恚^にを生じて大願を成就^{じやうじゆ}し賢子をまうけ給^{たま}いぬ、当^{まさ}に知るべし
瞋^{しん}恚^には善惡^{ぜんあく}に通ずる者なり。

今日^{いまに}蓮^{ちれん}は去^いぬる建長^{けんちやう}五年癸丑四月二十八日より今年弘安三年太

歲庚辰十二月にいたるまで二十八年が間又他事^{たじ}なし、只^{ただ}

妙法蓮華經の七字五字を日本^{にほん}國の一切衆生の口に入れんとはげ

む計^{ばか}りなり、此^これ即母^{そく}の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲^{じひ}なり

此^これ又時の當らざるにあらず已^{すで}に仏記^{ぶつぎ}の五五百歳に當れり、天台^{てんだい}

・伝でんぎょう教おんときの御時は時いまだ来らざりしかども一分いちぶんの機きある故ゆえに少
分流布るふせり、何いかに況いわんや今は已すでに時いたりぬ設たとひ機きなくして水すい火か
をなすともいかでか弘通くつうせざらむ、只ただ不輕ふぎょうのごとく大難だいなんには値あう
とも流布るふせん事うたがい疑うたがいなかるべきに真言しんこん・禪ねんぶつ・念仏ねんぶつ等の讒奏ざんそうに依より
て無智むちの国主等こくしゅ・留難るなんをなす此を対治たいじすべき氏神はちまんだい八幡大菩薩ぼさつ・
彼等かれらの大科だいかを治せざるゆへに日蓮にちれんの氏神かんぎようを諫かんぎよう曉きやうするは道理どうりに
背そむくべしや、尼に俱律陀くりだ長者ちやうじゃが樹神じゆじんをいさむるに・異ならず、
蘇そ悉しつちきよう地經いわに云く「本尊ほんそんを治罰ちばつする事鬼魅きみを治するが如ごとし」等云云、
文ふみの心は經文きやうもんのごとく所願しよがんを成じやうぜんがために数年が間・法を
修行しゆぎするに成就じやうじゆせざれば本尊ほんそんを・或あるはしほり・或あるは打ちなんど
せよととかれて候、相応そうおう和尚わじやうの不動明王ふどうみやうおうをしほりけるは此の
經文きやうもんを見たりけるか、此は他事たじにはにるべからず日本国にほんこくの一切いっさい

の善人は・或は戒を持ち・或は布施を行じ・或は父母等の孝養のために寺塔を建立し・或は成仏得道の為に妻子をやしなうべき財を止めて諸僧に供養をなし候に、諸僧謗法の者たるゆへに謀反の者を知ずしてやどしたるがごとく不孝の者に契をなせるがごとく今生には災難を招き後生も惡道に墮ち候べきを扶けんとする身なり而るを日本国の守護の善神等・彼等にくみして正法の敵となるゆへに此をせむるは經文のごとし道理に任せたり、我が弟子等が愚案にをもわく我が師は法華經を弘通し給うとてひろまらざる上・大難の来れるは眞言は國をほろぼす念仏は無間地獄・禪は天魔の所為・律僧は國賊との給うゆへなり、例せば道理有る問注に惡口のまじわれるがごとしと云云、日蓮我が弟子に反詰して云く汝若し爾らば我が問を答えよ一切の眞言師・一切

の念ねんぶつ仏者・一切いっさいの禪宗等ぜんしゅうに向て南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ給たまえと
勸進かんじんせば彼等かれらの云いわく我が弘法大師こうぼうだいしは法華經ほけきょうと釈迦しゃか仏ぶつとを戲論けろん無明むみょう
の辺域へんいき・力者りき・はき物ものとりおよに及およばずと・かかせ給たまいて候まい、物の用
にあわぬ法華經ほけきょうを讀誦どくじゆせんよりも其その口くちに我が小呪せうじゆを一反いっさいも見つ
べし一切いっさいの在家ざいけの者ものの云いわく善導ぜんどう和尚わじょうは法華經ほけきょうをば千中せんちゆう無一むいつ・法然ほうねん
上人しょうにんは捨閉閣しゃへいかく拋ほう・道どう綽しやく禪師ぜんは未有一みういち人得者にんとくしゃと定めたまさせ給たまへり
汝なんじがすすむる南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうは我が念仏ねんぶつの障さわりなり我等われら設たとい惡
をつくるともよも唱となえじ一切いっさいの禪宗ぜんしゅうの云いわく我が宗きようは教外げべつ別傳べつでんと
申もうして一切いっさい經きやうの外がいに伝でんへたる最上さいじやうの法門ほうもんなり一切いっさい經きやうは指さしのご
とし禪ぜんは月げつのごとし天台等てんだいの愚人ぐにんは指さしをまほつて月げつを亡うしないたり
法華經ほけきょうは指さしなり禪ぜんは月げつなり月げつを見て後あとは指さしは何なにのせんか有あるべき
なんど申もうす、かくのごとく申もうさん時ときはいかにとしてか南無なむ

妙法蓮華經の良藥をば彼れ等が口には入るべき仏は且らく

あこんきよう

と

たま

ぎようじゃ

ほけきよう

と

阿含經を説き給いて後・彼の行者を法華經へ入れんと・たばか

り給いしに一切の声聞等・只阿含經に著して法華經へ入らざり

たま

いっさい

しょうもん

ただあこんきよう

じゃく

ほけきよう

と

しをば・いかやうにか・たばからせ給いし、此をば仏説いて云く

「設ひ五逆罪は造るとも五逆の者をば供養すとも罪は仏の種とは

たと

ごぎやくざい

ごぎやく

くよう

たま

い

ぶつせつ

つみ

い

わ

と

なるとも彼れ等が善根は仏種とならじ」とこそ説かせ給しか、

しょうじよう

だいじよう

ぜんこん

ぶつしゆ

ぶつせつ

だいしよう

こと

ほけきよう

は

ほけきよう

を

小乗・大乘はかわれども同じく仏説なり大が小を破して小を

大となすと大を破して法華經に入ると大小は異なれども法華經

は

ほけきよう

は

ほけきよう

は

ほけきよう

は

ほけきよう

は

ほけきよう

は

へ入れんと思う 志は是一つなり、されば無量義經に大を破し

て云く未顕真実と法華經に云く「此の事は為て不可なり」等云云、

い

みけんしんじつ

ほけきよう

い

い

い

い

い

い

い

い

い

仏、自ら云く「我世に出でて華嚴・般若等を説きて法華經をとか

みづか

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

ずして入涅槃せば愛子に財を・をしみ病者に良藥をあたへずし

ねはん

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

ずして入涅槃せば愛子に財を・をしみ病者に良藥をあたへずし

ねはん

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

ずして入涅槃せば愛子に財を・をしみ病者に良藥をあたへずし

ねはん

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

ずして入涅槃せば愛子に財を・をしみ病者に良藥をあたへずし

ねはん

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

ずして入涅槃せば愛子に財を・をしみ病者に良藥をあたへずし

ねはん

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

て死にたるがごとし仏、自ら地獄に墮つべし」と云云、不可と申す
は地獄の名なり況や法華經の後・爾前の經に著して法華經へうつ
らざる者は大王に民の従がはざるがごとし親に子の見へざるがご
とし、設い法華經を破せざれども爾前の經經をほむるは法華經
をそしるに当たれり妙樂云く「若し昔を称歎せば豈に今を毀
るに非ずや」文、又云く「発心せんと欲すと雖も偏円を簡ばず誓
の境を解らざれば未來法を聞くとも何ぞ能く謗を免れん」等云云、
真言の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証等は設とい
法華經を大日經に相對して勝劣を論ぜずして大日經を弘通す
とも滅後に生まれたる三蔵・人師なれば謗法はよも免れ候はじ、
何に況や善無畏等の三三蔵は法華經は略説・大日經は広説と同
じて而かも法華經の行者を大日經えすかし入れ、弘法等の三

大師だいしは法華經ほけきやうの名をかきあげて戲論けろんなどかかれて候大科だいかを明あきら
めずして此この四百余年いっさいしじゅう一切衆生みなほうぼうを皆謗法みなぼうぼうの者となせり、例せば
大莊嚴だいそうごん仏の末の四比丘びくが六百万億那由なゆた他人みなむげんじこくの人を皆無間地獄だに墮だせ
ると、師子音王ししおう仏の末の勝意比丘しょういびくが無量無辺むりやうむへんの持戒じかいの比丘びく・
比丘尼びくにうばそくうばいを皆阿鼻あび大城だいじやうに導きしと、今の三大師だいしの
教化きやうけに随したがいて日本国にほんこく四十九億九万四千八百二十八人・或あるは云いわく
日本紀にほんに行基にんずうの人数いに云く男女なんよ四十五億八万九千六百五十九人云
云の一切衆生いっさいしじやう又四十九億等の人人ひとびと四百余年こころに死むげんして無間地獄じこくに
墮おちぬれば其その後他方世界たほうせかいよりは生だいちれて又死むげんして無間地獄じこくに墮おち
ぬ、かくのごとく墮おつる者は大地微塵だいちみじんよりも多こし此これ皆みな三大師だいしの
科とがぞかし、此これを日蓮にちれん此こに大おおに見みながらいつわりをろかにして
申もうさずば俱ともに墮だ地獄じこくの者となつて一分いちぶんの科とがなき身みが十方じゅうほうの大

あびこく 阿鼻獄を経めぐるべしいかでか身命しんみょうをすててよばわらざるべき
ねはんぎよう 涅槃經に云く「一切衆生異の苦を受くるは悉く是如来一人の苦
なり」等云云、日蓮云く一切衆生の同一苦は悉く是日蓮一人の
苦と申すべし。

へいぜいてんのう 平城天皇の御字に八幡の御託宣に云く「我は是れ日本の鎮守
はちまんだいぼさつ 八幡大菩薩なり百王を守護せん誓願あり」等云云、今云く人王
おき 八十一・二代隱岐の法皇・三・四・五の諸王已に破られ畢んぬ残
の二十余代・今捨て畢んぬ、已に此の願破るるがごとし、日蓮
りようけん 料簡して云く百王を守護せんというは正直の王・百人を守護
せんと言ひ給う、八幡の御誓願に云く「正直の人の頂を以て
すみか 栖と為し、諂曲の人の心を以て亭ず」等云云、夫れ月は清水に
影をやどす濁水にすむ事なし、王と申すは不妄語の人・右大將家

・権の大夫殿は不妄語の人正直の頂八幡大菩薩の栖む百皇の内
なり、正直に二あり一には世間の正直王と申すは天心地の三を
串くを王と名づく、天・人・地の三は横なりたつてんは縦なり、
王と申すは黄帝・中央の名なり、天の主・人の主・地の主を王と
申す、隠岐の法皇は名は国王・身は妄語の人なり横人なり、権の
大夫殿は名は臣下・身は大王・不妄語の人・八幡大菩薩の願い
給う頂きなり、二には出世の正直と申すは爾前・七宗等の経
論釈は妄語・法華経・天台宗は正直の経釈なり、本地は不
妄語の経の釈迦仏迹には不妄語の八幡大菩薩なり、八葉は八幡・
中台は教主釈尊なり、四月八日・寅の日に生まれ八十年を経て
二月十五日申の日に隠れさせ給う、豈に教主の日本国に生まれ
給うに有らずや、大隅の正八幡宮の石の文に云く「昔し靈鷲山

に在^あつて妙法華經を説き今正宮の中に在^あて大菩薩と示現^{ほさつ じげん}す」等云

云、法華經に云く「今此三界^{ほけきよう いわ}」等云云、又「常に靈鷲山^{りようじゅうせん}に在り」

等云云、遠くは三千大千世界の一切衆生は釈迦如来の子なり、

近くは日本國・四十九億九万四千八百二十八人は八幡大菩薩の子^{にほんこく はちまんたいほさつ}

なり、今日日本國の一切衆生は八幡をたのみ奉るやうにもてなし^{にほんこく いっさいしゅじよう はちまん たてまつ}

釈迦仏をすて奉るは影をうやまつて体をあなづり子に向いて親を^{しゃかぶつ たてまつ}

のるがごとし、本地は釈迦如来にして月氏國に出でて^{ほんち しゃかにょらい がつし い}

正直捨方便の法華經を説き給い、垂迹は日本國に生れては正直^{しょうじきしやほうべん ほけきよう と たまい すいじやく にほんこく しょうじき}

の頂^{いただき}きにすみ給う、諸の権化の人人の本地は法華經の一実相な^{たまた もろもろこんげ ひとびと ほんち ほけきよう じつそう}

れども垂迹の門は無量なり、所謂跋俱羅尊者は三世に不殺生戒^{すいじやく むりよう いわゆるはくらそんじゃ さんぜ ふさつしようかい}

を示し鶯崛摩羅は生生に殺生を示す、舍利弗は外道となり^{おうくつ まら せつしよう ほんぷ しゃりほつ げどう}

是くの如く門門不同なる事は本凡夫にて有りし時の初發得道の始^{かくのごと ふどう ほんぷ ほつとく}

を成じやうぶつ仏の後・化け他門に出いで給たまう時・我が得とくどう道の門を示すなり、

妙樂大師云く「若もし本に従したがて説またこかば亦是またこれ昔殺等の惡の中に

於おいて能よく出離しゅつりするが故なり是かくのゆえの故に迹中に亦また殺を以もつて利り他の法門ほうもん

と為なす」等云云、今八幡大菩薩は本地は月支がしの妄語もうごの法華經ほけきやうを

迹にほんこくに日本国にして正直しょうじきの二字となして賢人けんじんの頂いただききにやどらん

と云云、若もし爾しからば此の大菩薩は宝殿ほうでんをやきて天にのぼり給たまうと

も法華經ほけきやうの行者ぎやうじやにほんこく日本国に有あるならば其その所に栖すみ給たまうべし。

法華經ほけきやうの第五いゝに云く諸天しよてん昼夜に常に法の為ゆゑの故しかに而これも之えいを衛護まいも

す、經文きやうもんの如ごとくんば南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと申もうす人をば大梵天ほんでん・帝釈たいしやく

・日月にちがつ・四天等してん昼夜に守護しゆごすべしと見えたり、又第六の卷いゝに云く

「・或あるは己身こしんを説とき・或あるは他身とを説とき・或あるは己身こしんを示あるし・或あるは他ある

身あるを示あるし・或あるは己事こじを示あるし・或あるは他事たじを示あるす」文觀音かんのん尚さんじん三十三身

を現^{げん}じ妙音^{みょうおん}又三十四身を現^{げん}じ給^{たま}ふ教主^{きょうしゅ}釈尊^{しゃくそん}何ぞ八幡大菩薩^{はちまんたいぼさつ}と
現^{げん}じ給^{たま}はざらんや天台^{てんだい}云^{いわ}く「即是^{そくこ}れ形^{けい}を十界^{じゅうかい}に垂^しれて種^{しゅ}種の像^{じゆ}
を作^なす」等云云。天竺^{てんじく}国^{こく}をば月氏^{がつし}国^{こく}と申^{もう}すは仏^{ぶつ}の出現^{しゅつげん}し給^{たま}うべ
き名^ななり、扶桑^{ふそう}国^{こく}をば日本^{にほん}国^{こく}と申^{もう}すあに聖人^{しょうにん}出^でて給^{たま}わざらむ、
月^{つき}は西^{せい}より東^{とう}に向^{むか}へり月氏^{がつし}の仏^{ぶつ}法の東^{とう}へ流^{なが}るべき相^{さう}なり、日^ひは東^{とう}
より出^でづ日本^{にほん}の仏^{ぶつ}法の月氏^{がつし}へかへるべき瑞相^{ずいさう}なり、月^{つき}は光^{くわう}あきら
かならず在^{ざい}世^{せい}は但^{ただ}八年^{はつねん}なり、日^ひは光明^{くわうみょう}・月^{つき}に勝^{すぐ}れり五五百歳^{ごひゃくさい}の
長^{なが}き闇^{くら}を照^{てら}すべき瑞相^{ずいさう}なり、仏^{ぶつ}は法華^{ほけき}經^{きやう}謗^{ぼう}法^{ぽう}の者^{もの}を治^ちし給^{たま}はず
在^{ざい}世^{せい}には無^なきゆへに、末法^{まっぽう}には一乘^{いちじやう}の強敵^{きやうてき}充^{くわう}満^{てき}すべし不^ふ輕^{きやう}菩^ぼ薩^{さつ}
の利益^{りやく}此^これなり、

各^{かく}各^{かく}・我^{われ}が弟子^{でし}等^らはげませ給^{たま}へはげませ給^{たま}へ。

弘安^{こうあん}三年太歳庚辰十二月日

にちれん
日蓮 花押 かつう

◆七九 二乗作仏事 589P

にぜんとくどう 爾前得道の旨たる文、経に云く見諸菩薩等云云、又云く始見
わがみ 我身等、此等の文の如きは菩薩初地・初住に叶う事有ると見え
たるなり、故に見諸菩薩の文の下には而我等不預斯事と・又始見
の文の下には除先修習等云云、此れは爾前に二乗作仏無しと見
たる文なり。

問う顕露定教には二乗作仏を許すや顕露不定教には之を許すか
秘密には之を許すか爾前の円には二乗作仏を許すや別教には
之を許すか、答う所詮は重重の問答有りと雖も皆之を許さざるな
り、所詮は二乗界の作仏を許さずんば菩薩界の作仏も許さざるか
衆生無辺誓願度の願の關くるが故なり、釈は菩薩の得道と見た

る經文を消する許りなり、所詮華・方・般若の円の菩薩も初住に登らず又凡夫二乗は勿論なり化一切衆生・皆令入仏道の文の下にて此の事は意得可きなり。

問う円の菩薩に向つては二乗作仏を説くか、答う説かざるなり未會向人説如此事の釈に明かなり。

問う華嚴經の三無差別の文は十界互具の正証なりや、答う次の經に云く如來智慧の大藥王樹は唯二所を除きて生長することを得ず所謂聲聞と縁覺となり等云云二乗作仏を許さずと云う事分明なり、若し爾らば本文は十界互具と見えたと雖も實には二乗作仏無ければ十界互具を許さざるか、其の上爾前の經は法華經を以て定む可し既に除先修習等云云と云う華嚴は二乗作仏無しと云う事分明なり方等・般若も又以て此くの如し。

惣そうじて爾にぜん前の円こころうべに意得可いぜんき様・二有り、一には阿難結集あなんけつじゅうの

已いぜん前に仏は一音に必ず別円べつえん二教の義を含ませ一一の音に必ず四教しきよう

三教を含ませ給たまえるなり、故ゆえに純円じゆんえんの円は爾前にぜんきよう経には無きなり

故ゆえに円と云えども今の法華ほっけに対すれば別に撰せつすと云うなり、籤せんの

十に又一一の位に皆普賢行布みなふげんの二門有り故ゆえに知んぬ兼ねて円門かを

用もちいて別に撰せつすと釈しゃくするなり此の意にて爾前にぜんに得道無とくどうしと云うな

り、二には阿難結集あなんけつじゅうの時・多羅葉たらように注す一段は純別・一段は

純円じゆんえんに書けるなり方等ほうとう・般若はんにかも此ことくの如し、此の時にぜんは爾前にぜんの

純円じゆんえんに書ける処ところは粗法華ほほほっけに似たり、住中多明円融えんゆう之相等と釈しゃくす

るは此の意なり。

天台智者大師てんだいちしやだいしは此の道理どうりを得給たまいし故ゆえに他師たしの華嚴けこんなど惣そうじて

爾前にぜんの経を心得こころえしには・たがい給たまえるなり、此の二の法門ほうもんをば

いかん 如何として天台大師は心得給いしぞとさぐれば法華經の信解品等

を以て一一の文字別円の菩薩及び四教・三教なりけりとは心得

給いしなり、又此の智恵を得るの後にて彼等の經に向つて見る時

は一向に別・一向に円等と見えたる処あり、阿難結集の後のし

はざなりけりと見給えるなり、天台一宗の学者の中に此の道理を

得ざるは爾前の円と法華の円と始終同の義を思ふ故に一処のみの

円教の經を見て一卷・二卷等に純円の義を存ずる故に彼の經等

に於て往生成仏の義理を許す人人是れ多きなり、華嚴・方等・

般若・觀經等の本文に於て阿難・円教の卷を書くの日に

即身成仏云云即得往生等とあるを見て一生乃至順次生に往生

成仏を遂げんと思いたり、阿難結集已前の仏口より出す所の

説教にて意を案ずれば即身成仏即得往生の裏に歷劫修行・

おうじょう

永不往生の心含めり、句の三に云く撰論を引いて云く了義經

・依文判義等と云う意なり、爾前の經を文の如く判ぜば仏意に

乖く可しと云う事は是なり、記の三に云く法華已前は不了義なる

故と云えり此の心を釈せるなり、籤の十に云く「唯此の法華のみ

前教の意を説き今經の意を顯す」と釈の意は是なり。

抑他師と天台との意の殊なる様は如何と云うに他師は一一の

經經に向つて彼の經經の意を得たりと謂へり、天台大師は

法華經に仏四十余年の經經を説き給へる意をもつて諸經を

釈する故に阿難尊者の書きし所の諸經の本文にたがひたる様な

れども仏意に相叶いたるなり、且らく觀經の疏の如き經説には

見えざれども一字に於て四教を釈す、本文は一处は別教・一处

は円教・一处は通教に似たり、釈の四教に亘るは法華の意を以

て仏意ぶつゐを知りたもう故なり、阿難尊者あなんそんじやの結集けつじゅうする經にては一処いっしょ
は純別一処いっしょは純円じゅんえんに書き別円べつえんを一字に含する義をば法華ほっけにて書
きけり、法華ほっけにして爾前にぜんの經の意を知らしむるなり、若し爾もらば
いちだいしょうきよう
一代聖教はんぶくは反覆いえどすと雖も法華經ほけきよう無くんば一字も諸經しよの意を知る
べからざるなり、又法華經ほけきようを讀誦どくじゆする行者ぎやうじやも此の意を知らずん
ば法華經ほけきようを讀むにては有ある可べからず、爾前にぜんの經は深經じんきようなればと
云つて淺經せんきようの意をば顯あらわさず淺經せんきようなればと云つて又深義じんぎを含まざ
るにも非あらず、法華經ほけきようの意は一一もんじの文字みなにぜんは皆爾前あらわの意を顯ほけきようし法華經
の意をも顯あらわす故に一字を讀めば一切經いっさいきようを讀むなり一字を讀まざ
るは一切經いっさいきようを讀まざるなり、若し爾もらば法華經ほけきよう無き国しよきようには諸經
有りと雖も得道いえどは難なんかる可べし、滅後めつごに一切經いっさいきようを讀む可べき様は
けこんきよう
華嚴經ほけきようにも必ず法華經ほけきようを列ねて彼の經の意を顯あらわし觀經かんきようにも必ず

法華經ほけきょうを列はねて其そのの意いを顕あらわすべし諸經しよきょうも又また以もつて此このの如ごとし、
而しかに月支がつしの末すえの論師ろんし及および震旦しんたんの人師にんし此このの意いを弁わきままけず一經いつきょうを講こう
して各おの・我得ちやうかしきたりと謂おもい又超過ちやうかしき諸經しよきょうの謂おもいを成なせるは會かつて一經いつきょう
の意いを得えざるのみに非あらず謗法ほうぼうの罪つみに墮だするか。

問もんう天竺てんじくの論師ろんし震旦しんたんの人師にんしの中ちゆうに天台てんだいの如ごとく阿難結集あなんけつじゅう已前いぜんの
仏口ぶつくの諸經しよきょうを此このの如ごとく意得こころえたる論師ろんし・人師にんし之の有あるか、答こたう
無著菩薩むぢやくぼさつの撰論じやうろんには四意趣いしゆを以もつて諸經しよきょうを釈しゃくし、竜樹菩薩りゅうじゆぼさつの
大論だいろんには四悉檀ししつだんを以もつて一代いちだいを得えたり、此これ等らは粗ほ此このの意いを釈しゃくすと
は見えなれども天台てんだいの如ごとく分明ふんみやうには見えず、天親菩薩てんじんぼさつの法華論ほつけろん
も又また以もつて此このの如ごとく、震旦しんたんに於おいては天台てんだい以前いぜんの五百年ごひゃくねんの間かんには
一向いっこうに此このの義ぎ無なし、玄げんの三さんに云いく「天竺てんじくの大論だいろん尚なほ其そのの類たぐいに非あらず」
云云うんうん、籤せんの三さんに云いく「一家しやうじやの章疏しやうしよは理ふに附つし教きやうに憑より凡およそ立たつ

る所の義他人の其の所弘に随い偏に己が典を讃するに同じから
ず、若し法華を弘むるに偏に讃せば尚失なり況や復余をや」文、
何となれば既に開権顯実と云う何ぞ一向に権を毀る可きや、
華嚴經の心仏及衆生・是三無差別の文は華嚴の人師・此の文に
於て一心覺不覺の三義を立つるは、源と起信論の名目を借りて
此の文を釈するなり、南岳大師は妙法の二字を釈するに此の文
を借りて三法妙の義を存せり、天台智者大師は之を依用す此に
於て天台宗の人は華嚴・法華同等の義を存するか、又澄觀・
心仏及衆生の文に於て一心覺不覺の義を存するのみに非ず
性惡の義を存して云く、澄觀の釈に「彼の宗には此れを謂つて
実と為す此の宗の立義・理通ぜざる無し」等云云、此等の法門
許す可きや否や、答えて云く弘の一に云く「若し今家の諸の円文

の意なく無くんば彼の經の偈げの旨理むね實に消し難がたし「同じく五に云く「今
文を解げせずんば如何なんぞ心造一切三無差別を消解げせん」文、記の七
に云く忽ち都て未だ性惡しやうあくの名を聞かずと云えり、此等これらの文の
如ごとくんば天台てんだいの意を得ずんば彼の經の偈げの意・知り難がたきか、又
震旦しんたんの人師にんしの中には天台てんだいの外には性惡しやうあくの名目みょうもくあらざりけるか、
又法華經ほけきやうに非ずんば一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもん・談だんずべからざるか、天台てんだい
已後いごの華嚴けこんの末師な並びに真言宗しんこんしゅうの人性惡しやうあくを以て自宗じしゅうの依經えきやうの詮
と為なすは天竺てんじくより伝わりたりけるか祖師そしより伝わるか、又天台てんだいの
名目みょうもくを偷ぬすんんで自宗じしゅうの内証ないしやうと為なすと云へるか、能く能く之これを驗けんす
可べし。

問う性惡しやうあくの名目みょうもくは天台てんだい一家に限る可べし諸宗しよしゅうには之これ無し、
若し性惡しやうあくを立てずんば九界いんがの因果いかなを如何ぶっかいが仏界げんの上に現げんぜん、

答う義例ぎれいに云くいわ性惡しょうあく若斷等云云、問う円頓止觀えんどんしかんの証拠しょうこと

いちねんさんぜん

しやうこ

けこんきやう

しんぶつぎやうしゆじやう

さんむさべつ

一念三千の証拠に華嚴經の心仏及衆生是三無差別の文を引くは

えんどんしかんおよ いちねんさんぜん

彼の經に円頓止觀及び一念三千を説くというか、答えて云く

てんだいしゆう

えんどんしかんおよ

いちねんさんぜん

を説くというか、答えて云く

天台宗の人の中には爾前の円と法華の円と同の義を存す、問う

ぜんさんきやう

にぜん

ほつけ

そん

六十卷の中に前三教の文を引いて円の義を釈せるは文を借ると

こころえ

にぜん

ほつけ

しやく

を借らざと

心得、爾前の円の文を引いて法華の円の義を釈するをば借らずと

存ぜんや、若し爾らば三種の止觀の証文に爾前の諸經を引く中

えんどんしかん

しやうこ

けこん

ぼさつ

しやうじ

えんどん

しやく

を引く中

に円頓止觀の証拠に華嚴の菩薩於生死等の文を引けるをば、

みようらくしやく

いわ

かえ

を借て以て妙円を顕す」とは此の

妙楽釈して云く

「還つて教味を借て以て妙円を顕す」とは此の

「還つて教味を借て以て妙円を顕す」とは此の

「還つて教味を借て以て妙円を顕す」とは此の

「還つて教味を借て以て妙円を顕す」とは此の

「還つて教味を借て以て妙円を顕す」とは此の

文は諸經の円の文を借ると釈するに非ずや、若し爾らば心仏及

しやく

あら

も

しか

しんぶつぎやう

あら

あら

あら

衆生の文を一念三千の証拠に引く事は之を借れるにて有るべし、

しやく

いちねんさんぜん

しやうこ

これ

あら

あら

あら

答う当世の天台宗は華嚴宗の見を出でざる事を云うか、華嚴宗

とうせ

てんだいしゆう

けこんしゆう

い

い

い

い

い

の意は法華と華嚴とに於て同勝の二義を存ず、同は法華・華嚴の所詮の法門之同じとす、勝には二義あり、古の華嚴宗は教主と対菩薩衆等の勝の義を談ず、近代の華嚴宗は華嚴と法華とに於て同勝の二義有りと云云、其の勝に於て又二義あり、迹門は華嚴と同勝の二義あり華嚴の円と法華迹門の相待妙の円とは同なり彼の円も判☆・此の円も判☆の故なり、籤の二に云く「故に須らく二妙を以て三法を妙ならしむべし故に諸味の中に円融有りと雖も全く二妙無し」私志記に云く「昔の八の中の円は今の相待の円と同じ」と云へり是は同なり記の四に云く「法界を以て之を論ずれば華嚴に非ざる無し仏慧を以て之を論ずれば法華に非ざる無し」云云、又云く「応に知るべし華嚴の尽未来際は即ち此の経の常在靈山なり」云云、此等の釈は爾前の円と法華の

そうたいみょう

相待妙とを同ずる釈なり、迹門の絶待開会は永く爾前の円と異

なり、籤の十に云く「此の法華経は開権顕実・開迹顕本の此の

両意は永く余経に異なり」と云えり、記の四に云く「若し仏慧を

以て法華と為さば即」等と云云、此の釈は仏慧を明すは爾前・

法華に亘り開会は唯法華に限ると見えたり是は勝なり、爾前の無

得道なる事は分明なり其の故は二妙を以て一法に妙ならしむる

なり、既に爾前の円には絶待の一妙を闕く衆生も妙の仏と成る

べからざる故に籤の三に云く妙變為☆の釈是なり、華嚴の円變じ

て別と成ると云う意なり。

本門は相待・絶待の二妙俱に爾前に分無し又迹門にも之無し、

爾前迹門は異なれども二乗は見思を断じ菩薩は無明を断ずと

申すことは一往之を許して再往は之を許さず、本門寿量品の意

は爾前・迹門に於て一向に三乘俱に三惑を断ぜずと意得可きなり、此の道理を弁えざるの間・天台の学者は爾前・法華の一往同の釈を見て永異の釈を忘れ結句名は天台宗にて其の義分は華嚴宗に堕ちたり、華嚴宗に堕ちるが故に方等・般若の円に堕ちぬ、結句は善導等の釈の見を出でず、結句・後には謗法の法然に同じて師子身中の虫の自ら師子を食うが如し文、仁王經の下に「大王我が滅度の後未來世の中に四部の弟子・諸の小国の王・太子・王子乃ち是れ三宝を住持し護れる者・転た更に三宝を滅破すること師子身中の虫の自ら師子を食うが如し、外道には非ず多く我が仏法を壊りて大罪過を得ん」云云、籤の十に云く「始め住前より登住に至るこのかた全く是れ円の義・第二住より次の第七住に至る文相次第して又別の義に似たり、七住の中に於て又一多相即

自在じざいを弁べんず、次の行向地ぎやうこうじ又是これ次第しだい差別さべつの義ぎなり、又一また一の位いちのゐに
皆普賢みなふげん行布ぎふの二門にもん有り故ゆゑに知しんぬ兼かねて円門えんもんを用もちいて別べつに撰せんするこ
とを」

◆八〇

小乗しょうじょう 小仏要文しょうぶつようぶん

595P

華嚴けごん

阿含あこん

大日經だいにちぎよう

真言宗しんごんしゅう

觀經等かんきよう

淨土宗じょうどしゅう

方等ほうとう

深密經等じんみつ

法相宗ほうそうしゅう

小乗しょうじょう

楞伽經りやうがきよう

禪宗ぜんしゅう

般若はんにや

三論宗さんろんしゅう

無量義經むりやうぎきよう

法華經迹門十四品・本門藥王品已下の六品並びに

普賢・涅槃經等

応身

劣応身

勝応身

小仏

報身

華嚴經るさな仏

大日經等びるさな仏

並びに迹門涅槃經等の仏

阿逸・汝当に知るべし是の諸の大菩薩

序出二云云。

無數劫より・このかた仏の智慧を修習す、悉く是れ我が所化
なり大道心を發さしむ此等は是れ我が子なり是の世界に依止せ
り、玄の七に云く「六に本説法妙とは經に言く此等我所化・

りようほつだいどうしん　今皆住不退と我所化とは正く是れ説法して大
令發大道心・今皆住不退と我所化とは正く是れ説法して大
道心を發さしむるは小説に簡非するなり、此れ本時の説を指し
て迹説を簡非するなり迹説・多種なれども若し涅槃に依れ
ば」等云云、華嚴經の寂滅是なり始成正覺。

迹仏。増一阿含經の十に云く「仏・摩竭国に在し道樹の下にし

て爾時に世尊得道未だ久からず」浄名經に云く「始め仏樹

に坐して力て魔を降す」大集經に云く「如来成道始めて十六

年なり」大日經に云く「我昔道場に坐し四魔を降伏す」仁王

般若經に云く「大覺世尊先ず我が為に二十九年」無量義經に

云く「我先に道場菩提樹下に端坐する事六年乃至四十余年」

法華經の方便品に云く「我始め道場に坐し樹を觀じ亦經行し

三七日の中に於て是くの如き事を思惟す」籤の七に云く「大乘

の融通過ぎたること無し」華嚴經の初に云く「菩提道場に
始めて正覺を成ず、故に知んぬ大小識成皆近なり」壽量品
に云く「爾時に世尊諸の菩薩の三たび請じて止まざるを知る
しめして之に告げて言たまわく汝等諦かに聴け如来の秘密
神通の力を・一切世間の天人及び阿修羅は皆今の釈迦牟尼仏は
釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず道場に坐して
阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり、然るに善男子・我実に
成仏してより已来無量無辺百千万億那由佉劫なり」等云云、
文句の九に云く「仏・三世に於いて等く三身有り諸教の中に
於いて之を秘して伝えず・故に一切世間の天人・修羅は今の仏
は是に始まると謂えるなり、此の三身を得る故に近に執して遠
を疑う」壽量品に云く「諸の善男子・如来は諸の衆生の小

法をねがえる徳薄垢重とくはつくじゅうの者を見ては是この人の為ために我少くして出家しゅつけ

し阿耨多羅三藐三菩提あのかたらさんみやくさんぼだいを得たりと説く、然しかるに我実じやうぶつに成仏じやうぶつし

てより已来久遠このかたくおんなること斯かくの若もし」文句もんくの九に云く「一日約往」○

二現在約○三約修行しゆぎやう○四・果門しやくしに約せば近成こんじやうの小を聞ねがかんと樂ねがう

者は釈氏しやくしの宮を出いで始めて菩提ぼだいを得たりとし長大久遠くおんの道を聞

かん事を樂欲ゆえせず故に樂小と云う」此等これらの小心きようしんは今日きようじに始まる

に非あらず若もし先に大を樂ねがわば仏即すなわち始成しじやうを説かず始成しじやうを説くこと

は皆みな小法ねがを樂ねがう者の為ためのみ、又云く「諸もろもろの衆生しゆじやう・小法ねがを樂ねがう

者とは所見しよけんの機きなり」華嚴けこんに云く「大衆たいしゆう清淨しやうじやうなりと雖いえども其その

余ぎやうしやうの樂よ小法しやうほうの者は・或あるは疑悔ぎけを生じ長夜さうやに衰惱すいのうせん此これを

慙あわれむが故ゆえに黙もくす」偈げに云く「其その余おわの久く行ぜざるは智慧ちえ未だ

明了めいりやうならず識よに依よつて智よに依らず聞きき已おわつて憂悔うげを生じ彼將まさに

悪道あくどうに墮おちんとす此これを念おもうが故ゆえに説せかず」と、彼の經を案あず
るに声聞しょうもん・二乗にじよう無し但ただ不久行ふきうの者を指さして樂小ぎょうしょうぼう法ぽうの人と
為なすのみ、師いの云いく「樂小しょうじようは小乘しょうじようの人に非あらざるなり乃すなわち是これ
近説ねがを樂ねがう者を小なと為なすのみ」文句もんくの九くに云いく「德薄えんりようとは縁えんりよう了りよう
の二善功くゆうびれつ用微劣くゆうびれつなれば下の文に諸子しよ幼稚ようちと云いうなり垢重くじゆうとは
見思けんじ未いだ除いかざるなり」記きの九くに云いく「德薄とくはつくじゆう垢重くじゆうとは其その人
未いだ実教じつきようの二因有ふたにんらざる故ゆゑなり下の文に諸子しよ幼稚ようちと云いうは下
の医子いたしの譬たとえの文を指さす尚未なおいまだ円えんを聞きくに堪たえず況いんや遠えんを聞
かんをや、見思けんじ未除いとは且しばらたとえ譬たとえの中の幼稚ようちの言ごんを消くす定じやうめて
未いだ遠えんを知らず」玄げんの一いちに云いく「厚おつく善根ぜんこんを殖はえて此この頓説とんせつを
感かんず」文、籤せんの一いちに云いく「一往いちおうは総そうじて別べつ円えんを以もつて厚おつく為なす」
五百問論いに云いく「一經いつきようの中に本門ほんもんを以もつて主なと為なす」云云、又云いく

「一代教の中に未だ曾て遠を顕さず父母の寿は知らずんばあるべからず始めて此の中に於いて方に遠本を顕す、乃至但恐る才一国に当るも父母

の年を知らざれば失う所・小と謂うも辱むる所至つて大なり、若し父の寿の遠きを知らざれば復父統の邦に迷う徒に才能と謂うも全く人の子に非ず」文句の九に云く「菩薩に三種有り下方と他方と旧住となり」玄義の七に云く「若し迹因を執して本因と為さば斯れ迹を知らず亦本を識らざるなり天月を識らずして但池月を観るが如し○、弘迹顕本せば即ち本地の因妙を知る影を撥つて天を指すが如し云何ぞ盆に臨んで漢を仰がざる嗚呼聾駭なんすれぞ道を論ぜんや」又云く「若し迹果を執して本果と為す者は斯れ迹を知らず亦本を識らざるなり、本より迹

を垂るるは月の水に現げんずるが如ごとく迹を払はうて本を顯あらわすは影を
撥はらうて天を指すが如ごとし、当まさに始成しじようの果を撥のそけば皆みなこ是れ迹果なる
べく久成くじようの果を指すは是これ本果なり」又いわ云く「諸土しよは悉ことごとく迹土しやくど
なり一には今・仏の所栖しよせいの故ゆえに二には前後ぜんご修立しゅうりゆうの故ゆえに三には
中間ちゆうげん所しよ払ほつの故ゆえに若もし是これ本土ほんどは今・仏の所栖しよせいに非あらず、今・仏
の所栖しよせいは即すなわち迹土しやくどなり、若もし是これ本土ほんどは一土いっさい一切土しよくどにして前後ぜんご
修立しゅうりゆうなるべからず浅深せんじん不同ふどうなり○、迹しよくを執しよくして本なと為なす者は
此これ迹しよせいを知らず亦また本ほんを識しらざるなり、今迹しよせいを払はうて本ほんを指すと
きは本時しよせい所栖しよせいの四土しよどは是これ本國こくど土妙ちようなり」

藏因

さんぎ

三祇百劫菩薩

みだんけんじ

未断見思

通因

どうゆじんこうほさつ

動喩塵劫菩薩

けんじ

見思断

迹仏しやくぶつ

別因

むりようこうほさつ

無量劫菩薩

むみよう

十一品断無明

円因

四十一品断無明^{むみょう}

劣応

蔵

〔草座〕三十四心断結成道^{じょうどう}

勝応

通

〔天衣〕三十四心見思^{けんじ}・塵沙断の仏^{じんじゃ}

迹仏果^{ぶつ か}

果

報身^{ほうしん}

別

〔蓮華座〕十一品断無明の仏^{れんげ むみょう}

法身^{ほっしん}

円

〔虚空座〕四十二品断無明の仏^{こくう むみょう}

◆八一

日月の事^{にちがつ}

599P

誓耶后

麻利支天女^{まりしてん}

大日天^{だいにち}

乗輅車

九曜

毘誓耶后

七曜

大月天^{がってん}

二十八宿

乗鷲

十二宮

こんこうみょうきよう

金光明經に云く「日の天子乃以び月天是の經典を聞き精氣

さいしやうおうきよう

充実す」最勝王經に云く「日出でて光を放ち無垢炎清淨なり

むく しやうじよう

此の經王の力に由て流暉四天を遶る」仁王經に云く「日月度を

うしな だいしつきよう いわ にちがつ げん しほう みなこうかん にちげつど

失い」等、大集經に云く「日月明を現ぜず四方皆亢旱す是の如

ふぜんこうあくおう あくびく しやうほう きえ にんのうきよう いわ ひほう

不善業惡王・惡比丘我が正法を毀壞す」仁王經に云く「非法

非律にして比丘を繫縛すること獄囚の法の如くす」法華經に云く

こく いわ だいしつきよう いわ

「色力乃び智惠此等皆減少す」華嚴經に云く大集經に云く。

段食・法食・喜食・禪悅食。

三力、一切衆生力・法力・自身功德力。

いっさいしゆじよう

じしんくどく

戒光 清淨也

しやうじよう

日光 定光 定也

恵光 えこう

☆也

人天 にんてん

三学

しょうじょう

小乘

三学

だいじょう

大乘

三学

ごんだいじょう

権大乘

三学

じつだいじょう

実大乘

三学

じゅんえん

純円

三学

ほっしん

法身光

ほんにや

般若光

解脱光 げだつ

此天は初地・或は十廻向なり

じゅつしん

十信

じゅうじゅう

十住

十行

十廻向 えこう

十地 じゅうち

等

妙

しよじさんなく

初地三惑断

しよじゅうさんなく

初住三惑断

北辰

梵帝釈・日月・四天等

衆星

衣食

壽命

肉眼

天眼

一切の四天下の衆生の眼目

惠眼

法眼

仏眼

有に非ず地を離るが故に、空に非ず有を照すが故に有、辺に
非ずして中に処するが故に、而も空・空に処するが故に、而も有
・有を養うが故に、来らずして北に至るが故に、而も来りて南に

来るが故に、一ならず四州を照すが故に、異ならず一日なるが故に、断ならず常なるが故に、常ならず一処に住せざるが故に。記の三に云く部方等と雖も義は円極なる故に・故に今之を引く、

◆八二 和漢王代記 602p

伏羲

小昊

三皇

神農

☆☆

三墳・五典

黃帝

五帝

帝☆

堯王

男九人女一人

舜王

夏殷

第一文王

第二武王

周公旦

第三成王

第四昭王しやうわうの御宇ぎよう二十四年甲寅きのえとらに当る五色の光氣南北わたに亘る

大史たいし・蘇由之そゆうこれを占う四月八日は仏の御誕生なり

ちゆうげん

中間七十九年なり

ばくおう

第五穆王の五十二年壬申みずのえさるに当る二月十五日御入滅にゆうめつ 十二の虹

南北に亘る大史わたたいし扈多之これを占う

三十七有り・或あるは八

一儒教じゆきよう 五常ごじよう

文武等なり

周三教

二道教にとう 仙教いちだい「孔丘」がんかい「顔回」

三釈教しやつきよう 一代五十余年ろうし「老子」

始皇

儒教じゆきよう

秦 次生皇

三教

道教

しやつきよう
釈教

前漢 十四代

仏の滅後一千一十五年に当るなり

漢

又周の第四の昭王二十四年より後漢の第二光武

に至るいた一千一十五年に当るなり

後漢ごかん光武帝永平十年こうてい丁卯ひのとう

一千一十五年に当て摩騰迦竺法蘭の二人の

聖人しょうにん

四十二生經

しょうじようきよう小乗經じゅうじゅう

十住断結經けつきよう大乗經だいじようきようを

以て白馬はくばに負せて漢土かんどに渡すわた

魏

雙觀經そうかんきよう渡るわた

西晉

正法華經ほけきよう十卷わた渡る

法護三蔵まもさんそう亘す

妙法華經みようほけきよう渡る

七卷・或あるは八卷

羅什三蔵らじゅうさんそう亘

す

晉

後秦こうしん

三論宗さんろんしゅう渡る

阿弥陀經あみだわた亘る

華嚴經けこんきょう亘る

觀經かんきょう亘る

大涅槃經だいなはんきょう亘る

三時・四時・五時一 五時二 一音三 半滿四 三教

宋

四宗五

五宗六

六宗七

南三・北七なんざん ぼくひち「江南なり」の十師「江北なり」

曇鸞法師どんらん ぼつし浄土宗じょうどしゅうを立つ

禪宗ぜんしゅう渡る 達摩大師だいましなり

攝論じょうろん亘る 南北

齊

梁

ちろんわた
地論豆

南北

べつじいしゆ
別時意趣の法門出来す
ほうもんしゆつたい

末

南岳大師亦恵思禪師と云う
「観音の化身なり道宣の

感通伝に出ず」

始

ろっこん
にほん
たいしこれ
六根淨の人日本の淨宮太子是なり

てんだいだいし
天台大師の御師なり
おんし

陳

日本に伝にほんでんぎ教大師と生るうまれる

またちしや
亦智者と云い

てんだいだいし
天台大師

亦また智・と云いい

隋

また
亦徳安と云い

此の御時・南三・北七並びに前五百余年の人師・

三蔵・所立の十師の義を破し始めて五時・八教・

三觀・六即・十境・十乘を立て小釈迦と号す、進で

は天竺の論師にも超え退ては震旦の大師に勝るなり、

玄義の三に云く故に章安大師の云く「天竺の大論尚

其の類に非ず震旦の大師何ぞ劣しく語るに及ばん

此れ誇耀に非ず法相の然るのみ」又智証大師 授決集

也云く「天台世に出で仏意快く暢ぶ豈万教再び世間に

演るに非ずや」

笈多と崛多の両三蔵添品法華經を渡す

道 綽善導此の世に在り

華嚴宗

後漢の世自り唐の神武皇帝の開元十八年庚申に至る

唐^{とう}

六百六十四載に渡す所の經・律・論・五千四十八卷

訳者百七十六人なり妙樂は是の世の人なり

法相宗は玄奘三蔵西天自り之を渡す

真言宗は善無畏三蔵・金剛智三蔵之を渡す

法相宗 真言宗の二宗は天台之を見ず妙樂大師

之を見て天台宗に對当して勝劣を論ず又日本國の

傳教慈覺・智証之を諍う

宋

天台の玄義の十に南北の十師を破して云く「但聖意幽隱にして

教法 彌難し、前代の諸師・或は粗名匠に承け・或は思い

袖衿より出ず阡陌縦横なりと雖も孰か是なるを知ること

莫し、然るに義雙立せず理兩存すること無し若し深く所以有り

またしゆたら がつ 復修多羅と合する者は録して而て之を用ゆ文無く義無きは信受
すべからず」籤せんの十に云く「一として全く是なること無きを以
ての故に一一に難破す」玄の三に云く「輕慢止まざれば舌口中
に爛る」又云く「法華は衆經を總括す」籤の三に云く「已
法華已前華阿方般等の一切經今無量義經なり当涅槃經等の
法華已後の一切經なりの妙茲に於て固く迷えば舌爛れて止ま
ざるも猶華報と為す謗法の罪苦長劫に流る」南三北七に華嚴宗
の法蔵・澄觀・真言宗の弘法等は法華經よりも華嚴經を勝る
とするなり、又三論の嘉祥は法華經よりも般若經を勝るとす、
又法相の慈恩等は法華經よりも深密經を勝るとす、又真言宗
の善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等は法華經よりも
大日經を勝るとするなり、此等の宗宗の相違如何相違如何。

授決集に云く円珍智証大師

文は大經に出でたり人の之を会する無し、光・盲の前に在れ

ども他に於ては無用なり、仏分明に五味の喩を説き五時の教に

喩えたもう云云、訳ありてより来講者・路に溢るれども未だ

會て五味を談ずるの義を解せず己が胸臆に任せて趣爾嚙語す何ぞ

象に触る衆盲の者に異らんや、天台世に出で仏意快く暢ぶ豈に万

教再び世間に演るに非ずや、南北の講匠經論を釈する者・各教

時を立つれども百にして一も是なること無し只教部の前後頓漸

権実大小の☆妙・寛狹・進否に迷うに縁りてなり・大教の網を

張りて法界の海を亘し人天の魚を済て涅槃の岸に置く斯くの如く

するすら其の遺漏を恐る況や諸師の輩羅の一目なり何れの時か

其の鳥を得ん、若し万蔵を暗ずと雖も此の理趣を会せざれば年を

終るまで他の宝を計りて自ら半銭の分無く虚しく諍論を益し長水に水を添うのみ。

じゅけつしゅう

ほうそうしゅう

じおんだいし

いは

いわ

みじゆく

授決集

に

法相宗

の

慈恩大師

を破して

云く、

五性宗

に云く

未熟

法華論の前に
未熟の文也

と云うは、

応に不熟と云うべし、

○今謂く

汎く法華を講ず

るには

須く此の義を以て正と為すべし

若し爾らずんば

經を破し論

を破し罪五逆に過ぎたり

基公を除きて外は人の彼の不熟の義を伝

すべから

つみごぎやく

す

な

も

しか

は

は

は

は

は

るには須く此の義を以て正と為すべし若し爾らずんば經を破し論を破し罪五逆に過ぎたり基公を除きて外は人の彼の不熟の義を伝

うる無し、

○若し強て之を執せば公私十方の信施消し難し消し

難し若し消せずんば何ぞ三途を免れん爾を供養せん者は三惡道

に墮せん謗法の罪報は法華般若の諸大乘經に一切明かに説けり

智者披く可し、

○爾これを信受す可し無間を招く莫れ。

授決集

円

珍真

言の

諸宗

を徴して云う

しんこん

ぜんもん

けこん

さんろん

ゆいしき

りよく

じようく

の二論等、

○若し

も

法華・涅槃等の經に望むれば是れ摂引門なり文、又云く大底他
は多く三教在り円の旨至て少きのみ弘法大師の二教論に喩して
曰く今斯の經文に依るに仏五味を以て五藏に配当す、總持を
醍醐と稱し四味を四藏に譬う震旦の人師等諍つて醍醐を盗み各
自宗に名く。

小乗

六波羅經五藏

一 姐多覽 [乳]

[アナン]

經

二 毘那耶 [酪]

[ウハリ]

律

三 阿毘達磨 [生]

[カセンエン]

論

四 般若 [熟]

はら蜜藏

[文珠]

大乘

五 惣持 [醍醐]

だらに藏

[金剛藏]

一 姐多覽 [乳]

二毘那耶〔酪〕

三阿毘達磨〔生〕

弘こうぼうだいし法大師・此の經に

依よつて五藏を立つ

華

方

四般はん若にやはら蜜〔熟〕

般

法ほつ華け

涅槃ねはん

五だら尼藏〔醍醐〕

大日だいにちの三部經さんぶきよう

二教論いわに云く加しか以のみずならし釈教しゃつぎよう東夏とうげに漸ぜんし微み自より著よくに至り漢明を始

めと為なし周文を後と為なす、其その中間ちゆうげん翻伝する所みなこ皆是けんきようれ顯教なり

玄宗げんそう代宗の時・金智広智の日・密教みつぎよう鬱うつとして起り盛さかんに秘趣を

談だんず、新薬日に浅くして旧痾未だ除かず楞伽の如ごときに至っては法
仏ぶつ説法の文智度性身妙色なり句☆憶きょうおくに馳はせ而も文を会えして自宗じしゅうを
驅かり而も義を取る惜おしいかな古賢醍醐こけんたいごを嘗なめず
日本にほん

神代十二代

天神てんじん 七代

地神 五代

人代百王ひやくおう

第一神武天皇だいいち てんのう

第十四仲哀

第十五神功皇后しんこうこうこう

第十六応神天皇てんのう

第三十欽明天皇きんめいてんのう

之これを略す

八幡大神はちまんだいの父なり

八幡大菩薩はちまんだいぼさつの母なり

今の八幡大菩薩はちまんだいぼさつなり

略

歴記いに云く欽明天皇きんめいてんのうの治天下てんが十三年己申

歳冬十月一日百済国聖明王自りくだら せいめいおうよ仏像ぶつぞう經

等始めて日本国にほんこくに送る

第三十一 敏達天皇びんたつてんのう

厩戸王子おうじ 四天王寺を造る

第三十二 用明ようめい

聖德太子しょうとくたいしは用明ようめいの御子也

つ南岳大師なんがくだいしの後身なり救世觀音かんのんの垂迹すいじゃくなり

第三十三 崇峻すしゅん

第三十四 推胡

女帝

上宮太子守屋を切り四十九院を立

第三十五舒明

第三十六皇極

第三十七孝德

第三十八齐明

第三十九天智

第四十天武

第四十一持統

第四十二文武

第四十三元明

第四十四元正

女帝

女帝

俱舍宗
ぐしやしゅう

律宗
りっしゅう

ろくしゅう
六宗

じょうじつ
成実宗

ほうそうしゅう
法相宗

さんろんしゅう
三論宗

けこんしゅう
華嚴宗

またぜんしゅう
亦禪宗

なら
有り並びに一切経有り

第四十五聖武

しやうむてんのうとうだいじ
聖武天皇東大寺の大仏を造る

きんめいよ
欽明自り聖武に至るまで二百四十余年なり、

しんたんよ
震旦国自り鑒真和尚渡り律宗を亘す、次に

てんだいしゅう
天台宗の玄文止等を渡す、又東大寺の

しょうじょうかいだん
小乗戒壇を立つ

第四十六孝謙

しょうむ
聖武の女

第四十七淡路

廃帝

第四十八称徳

孝謙又即位也こうけん 又 即位 也

第四十九光仁

桓武の父なりかんむ 父 なり

欽明きんめい自り二百六十余年に及ぶ

第五十

桓武延暦三年に奈良の都自り長岡の京に遷り、延暦十三年長岡の京自り平の京に遷る、延暦二十五年御崩・去延暦四年叡山を立つ最澄なり延暦二十年叡山八講を始め南京の十人を請ず、延暦二十一年の正月十九日高雄に於て南京の十四人と最澄と宗論あり、同二十九年六宗の十四人謝表を桓武聖王に奉る、延暦二十三年入宋同二十四年御帰朝、此の時始めて伝教大師・天台宗を立て四十余年の文を以て六宗を破り始めて法華の実義之を顕し、欽明自り二百余年の邪義之を改む、又六宗の碩徳たる勤操・徳円・長耀等の十四人・桓武皇帝に謝表を奉りて

邪見を翻す。弘法大師こうぼうだいし空海くうかいは延暦二十三年御入
宋・大同元年御そうじょう帰朝きちよう、伝教大師でんきようだいしは山階寺やましなでらの行表ぎようひよう
僧正そうじようの御弟子おんでし・弘法大師こうぼうだいしは石淵いわぶちの勤操こんそう僧正そうじようの
御弟子おんでしなり。

第五十一平城へいぜい

第五十二嵯峨さが弘仁十三年六月四日こうにん伝でんぎよう教大師かうだいし御入滅にゆうめつ同十一日

「慈覚大師」戒壇かいだんを立つ。

第五十三淳和じゆんな

衆

秀句しゅうくに云く「法華經ほけきようを賛すと雖も還いえどつて法華ほっけの心を死ころす」文。

選沢集せんたくしゅうに云く法ほう然造捨ぜんとうれいさん閉閣いへいかく拋ほう、善導ぜんどう礼讚らいさんに云く「十即じゅう十生じゅうしやう
ひやくそくひやくしやう

・百即ひやく百生ひやくしやう」又云く「百の時に希まれに一二を得千とくせんの時に希まれに三

五を得^い」又云^いく「千中無^{せんちゅうむ}一^{いつ}」道^{どう}綽^{しやく}の安樂集^{あんらくしゅう}に云^いく^{大集月}藏經^{ざうきやう}を引^ひく「我が末法^{まっぽう}の時の中の億億^{いふいふ}の衆生^{しゆじやう}行^{ぎやう}を起^{おこ}し道^{どう}に臨^{りん}むも未^{いま}だ一人^{ひとり}の得^{とく}る者^{もの}有^あらず、当^{とう}今^{こん}末法^{まっぽう}は是^{こゝ}五濁^{ごじやく}の惡世^{あくせ}なり唯^{ただ}淨土^{じやうど}の一門^{いちもん}のみ有^ありて通入^{とふ}す可^べきの路^ろなり」惠心^{えしん}の往生要集^{おうじやうようしゅう}に云^いく「利智^{りち}精進^{しやうじん}の人は未^{いま}だ難^{がた}しと為^なさず予^こが如^{ごと}き頑魯^{がんろ}の者^{もの}豈^あ敢^{あえて}てせんや」

根本大師

傳教大師

山家

天台の後身なり

守護章^{しゆご}に「正像^{しやうざう}稍過^{しやうや}ぎ已^おつて末法^{まっぽう}太^はだ近^ききに有^あり法華^{ほつけ}一乘^{いちじやう}の機^き今^{いま}正^{まさ}に是^これ其^{その}の時^{とき}なり」又云^いく「一乘^{いちじやう}の家^いには都^すて用^{もち}いざれ小乘^{しやうじやう}・權大乘^{ごんだいじやう}四十年^{しじゅうねん}なり但^{ただ}し開^あし已^おつて助道^{しゆどう}に用^{もち}いたるを除^のく」

◆八三 一代五時図 文応元年三十九歳御作 612p

於総州

大論だいろんに云いく十九出家しゅっけ三十成道じょうどうと

権大乘こんだいじょう

戒

華嚴經けこんきょう

〔三七日〕

華嚴宗けこんしゅう

定

智儼ちこん

杜順とじゆん

法蔵ほうぞう

〔二七日〕

小乘しょうじょう

俱舍宗ぐしゃしゅう

慧

澄觀ちようかん

阿含あこん

〔十二年〕

成実宗じょうじつ

戒定慧かいじょうえ

律宗りっしゅう

戒定慧かいじょうえ

鑒真和尚がんじんわじょう

大集經だいしつきょう

玄奘 げんじょう

慈恩 じおん

方等 ほうとう

善導 ぜんどう

三十年

深密經 じんみつ

楞伽經 りょうがきょう

法相宗 ほうそうしゅう

禪宗 ぜんしゅう

戒定慧 かいじょうえ

權大乘 こんだいじょう

觀經 かんきょう

雙觀經 そうかんきょう

淨土宗 じょうどしゅう

阿彌陀經 あみだ

金剛頂經 こんごうちょうきょう

大日經 だいにちきょう

真言宗 しんごんしゅう

蘇悉地經 そしつちきょう

戒定慧 かいじょうえ

百論 だいばぼさつ 「提婆菩薩造」

ごんだいじょう 権大乘

中論 りゅうじゅぼさつ 「竜樹菩薩造」

はんにや 般若

十二門論

同

三論宗 さんろんしゅう

戒定慧 かいじょうえ

大論 だいろん

同

嘉祥寺 かじょう

きちぞうだいし 吉蔵大師

無量義經 むりょうぎきょう に云く「方便力を以て四十余年には未だ真実を顕さず、

又云く無量無辺不可思議阿僧祇劫を過れども終に無上菩提を成ず

ることを得ず所以は何ん菩提の大直道を知らざるが故に險逕を

行くに留難多きが故に」と、又云く「大直道を行くに留難無きが

ゆえ 故に」と。

ほけきょう 法華經「八箇年」

ほっけしゅう 法華宗

てんだいしゅう 天台宗

かいじょうえ 戒定慧

「世尊は法久しくして後かならず当に真実を説き給うべし、種種

の道を示すと雖も其れ實にはいへど仏乗ぶつじょうの爲なり、正直しやうじきに方便ほうべんを捨て

て但むじようどう無上道を説く、今・此の三界さんがいは皆是れ我が有なり其その中なかの

衆生しゅじやうは悉く是れ我が子なり而も今・此の処ところは諸もろもろの患難げんなん多し

ただわれひとり唯我一人のみ能く救護くごを爲す復また教詔きやうぢやくすと雖も而も信受しんじゆせず、

若し人信ぜずして此の経を毀謗きぼう

せば則ち一切世間の仏種ぶつしゆを断ぜん○其その人命終みやうじゆうして阿鼻獄あびごくに入

らん、○將まさに魔の仏なと作りて我が心を悩乱のうらんするに非あらずや舍利弗の卷、

妙法華經○皆是れ真實しんじつ明多宝証の文」

法に依よつて人に依よら

ざれ

涅槃經六に出ず

義に依よつて語ことばに

依よらざれ

ざれ

一日一夜

ふりようぎよう
不了義經に依らざれ

ねはんぎよう
涅槃經

てんだい
天台等

にゆうめつ
八十入滅

ろっこん
六根

りゆうじゆぼさつ
竜樹菩薩等

しえ
法四依

しよ
智に依つて識に依ら

りようぎよう
了義經に依つて

ごほん
五品

初依

しえ
人四依

第二依

しよ
初地已上

さんえ
第三依

しえ
第四依

とうかくぼさつ
等覺菩薩

てんじく
天竺 十四五六卷

じゅうじゅうびしやもんろん
十住 毘婆沙論に云く

りゅうじゅぼさつ らじゅうさんそう
竜樹 菩薩造羅 什三 蔵訳

なんぎようどう
難行道

たと
譬えば陸路を歩行せば苦なれども

ふたい
不退地

いぎようどう
易行道

すなわ
水道を船に乗れば則ち楽なるが如し

ぼさつ
十仏・百三十余菩薩並に阿弥陀仏等

どんらんほつし
曇鸞法師「齊世」 本三論宗の人なり浄土論註二巻を作る

どうしゆくぜん
道 綽禪師「唐世」 善導の師なり 安樂集二巻を作る

あんらくしゅう
安樂集に云く「大集月蔵經に云く我が末法の時の中の億億の

しゅじよう
衆生起行修道すとも未だ一人も得る者有らじ

とうこんまつぼう
当今末法は是れ五濁の悪世なり唯浄土の一門のみ有つて通入す

べき路なり」と

とう
唐世

善導 ぜんどう

玄義 げんぎ

一卷・序分義 じよぶんぎ

一卷・定善義 ていぜんぎ

一卷・散善義 さんぜんぎ

一卷・觀念 かんねん

法門 ほうもん

一卷・往生礼讚 おうじょうらいさん

一卷・般舟讚 はんじゆ

一卷・法事讚上下已 ほうじさんじょうげ

上九卷

隱岐院の御宇建仁年中今に五十余年なり

法然 ほうねん

源空 げんくう

選択集 せんちやくしゅう

一卷

未だ一人も得る者有らず千の中に一も無し

浄土三部經 じょうとさんぶきょう

を除くの外法華經等 ほけきょう 一切阿弥陀仏 いっさいあみだぶつ

を除く一切 いっさい

の仏・菩薩 ぼさつ

一切の神祇等 いっさいじんぎ

難行 なんぎょう

聖道 しょうどう

雜行 そうぎょう

天台法華宗等 てんだいほつけしゅう 八宗 はっしゅう

を捨閉し閣拋す しゃへいかくほうす

易行 いぎょう

浄土 じょうと

正行 しょうぎょう

阿弥陀仏は十即十生・百即百生 あみだぶつじゅつそくじゅつしゅうひやくそくひやくしゅう

六百三十七部二千八百八十三卷

捨閉閣拋しゃへいかくほう

雙觀經に云くそうかんきょう いわ「設い我仏を得んに十方の衆生至心に信樂じゅつほう しゅじょう しんぎよう

し我が国に生れんと欲し乃至十念して若し生ぜずんば正覺を取しやうかく

らじ唯五逆と誹謗正法とを除く」と、道綽の未有一人得者、善導ただごきやく ひほうしやうほう どうしゆく みういちにんとくしや ぜんどう

の千中無一・法然の捨閉閣拋・此等は豈謗法に非ずや、法華經第せんちゅうむいつ ほうねん しゃへいかくほう これら あにほうほう あら ほけきよう

二譬喩品に云くひゆほん いわ「若し人信ぜずして此の經を毀謗せば則ち一切も すなわ いっさい

世間の仏種を断ぜん・或は復顰蹙して而も疑惑を懷かん汝當にせけん ぶつしゆ だん ある またひんじゆく しか ぎわく いだ なんじまさ

此の人の罪報を説くを聴くべし若しは仏の在世若しは滅度の後にこ さいほう さいせも ゑつど

其れ斯の經典を誹謗すること有らん經を讀誦し書持すること有そ こ きやうてん ひほう しか けつこん いだ ざいほうなんじ

らん者を見て輕賤憎嫉して而も結恨を懷かん此の人の罪報汝今また せんぞうしつ しや けつこん いだ さいほうなんじ

復聴け其の人 命終して阿鼻獄に入らん一劫を具足して劫尽きなまた そ みやうじゆう あびごく いっこう くそく かつ

ば更生またうまれん是かくのくの如ごとく展てんでん転むしゅこして無いた数じごく劫よに至でらん地じごく獄よ従より出でては
當まさに畜ちく生しょうに墮おつべし」涅槃ねはん經ぎやう第十じゅうに云いく「問いう一闍いっせん提だいとは其その
義い云かん何い、仏い云わく純じゆん陀だ若もし比ひ丘く及および比ひ丘く尼に・優う婆ば塞そく・優う婆ば夷い有いつて
・惡あくの言ごんを發はつし正しょう法ほうを誹ひ謗ぼうし是この重じゆう業ごうを造つくりて永えいく改かい悔げせず心
に慚ざん愧き無なからん是かくのくの如ごとき等との人ひとを名なけて一闍いっせん提だいの道みちに趣しゆ向かうすと
為なす、若もし四し重じゆうを犯おかして五ご逆ぎやく罪ざいを作みずかずから定さだめて是かくのくの如ごとき重じゆう事じ
を犯おかすと知しつて而しかも心こころに初はつより怖ふい畏ざん慚き愧なく無なく肯あえて發はつ露ろせず彼かの
正しょう法ほうに於おいて永こく護ご惜しやく建こん立りの心こころ無なく毀き皆きやう輕せん賤せんして言か過く咎く多たから
ん、是かくのくの如ごとき等との人ひとも亦また一闍いっせん提だいの道みちに趣しゆ向かうすと名なく、若もし復また説せつ
いて仏ぶつ法ぽう衆しゆう無なしと云いわん是かくのくの如ごとき等との人ひとも亦また一闍いっせん提だいの道みちに趣しゆ向かう
すと名なく、唯ただ此かの如ごとき一闍いっせん提だいの輩やからを除そきて其その余ほに施とさば
一切いっさい讚さん歎たんすべし」と。

上品は地獄に墮つ

じょうほん

中品は餓鬼に墮つ

ちゅうほん

三果の聖人

しょうにん

下品は畜生に墮つ

げほん

辟支仏・菩薩父母等

ひやくしぶつ

ぼさつふぼ

十悪

じゅうあく

父母

ふぼ

一

殺生

せつしょう

二

偷盗

ちゅうとう

三

邪淫

じゃいん

下殺は螻蛄蚊 ☆

げせつ

中殺は凡夫人及び前

ぼんぷ

上殺は阿羅漢・

あらかん

四

妄語

もうご

五

綺語

きご

六

悪言

あくげん

七

両舌

殺生

せつしょう

八貪

九瞋

十癡

殺父

しふ

養

偷盗

ちゅうとう

二

殺母

しも

四重 しじゅう

上人 しょうにん

五逆 ごぎやく

凡夫 ぼんぷ

邪淫 じゃいん

三 殺阿羅漢 あらかん

木画像 もくえ

等

妄語 もうご

四 出仏身血 すいぶつしんけつ

五 破和合僧 はわごうそう

四

人已上凡夫僧 ぼんぷ

此等 これらは皆 みな一業引 いちごういん一生 いっしやうなり故 ゆえに一度 ひとたび悪道 あくどうに墮 だすれば還 かえつて二度

悪道 あくどうに墮 だせず、謗法 ほうぼうは一業引 いちごういん多生 たしやうなれば一度 ひとたび三宝 さんぼうを破 はすれば度 たび度 たび

悪道 あくどうに墮 だする是 これなり、伝教 でんぎやう大師 だいしの守護章 しゆごしやうに云 いく「不正義 せいぎの一切 いっさい

学人 しんじゆは信受 しんじゆすべからず所以 ゆえんは何 いん其 その師 しの墮 だする所 で弟子 でしも亦 また墮 おち

檀那も亦墮つ金口の明説何ぞ慎まざるべけんや慎まざるべけんや」と。

鎌倉の人人

第一弟子

〔長樂寺多念〕

隆観

〔南無房一切

第一

〔こさか〕

善慧房

〔当院落中

一切諸人

法然

第一聖光

〔筑紫九国一切諸人〕

一条覚明

今の道阿弥等

成覚

一念

法本

一念

已上弟子八十余人

乃至日本国一切念佛者並に檀那等、又一切の天台・真言等の

諸宗しよしゆうの人人ひとびと又また法然ほうねんが智分ちぶんを出いでず各各そ其の宗を習えども心は皆みな一同いっどうに念仏ねんぶつ者なり、法華經ほけきようを読よめども真言しんごんを行なずれども皆助業みなとなし念仏を以て正業と為なす謗法ほうぼうの失脱とがのるべからず。

◆八四 一代五時図 618P

竜樹菩薩造りゆうじゆぼさつぞうい

大論だいろんに云く十九出家淨飯王の太子たいし 三十成道じようどう悉達太子しつたたいし

権大乘こんだいじよう

六十卷

杜順法師とじゆんほふし
智儼法師ちこんほふし

華嚴經けこんきよう

華嚴宗けこんしゆう

八十卷

法蔵大師ほうそうだいし

三七日

澄觀法師ちようかんほふし

增一阿含經あこんきよう

世親菩薩せじんぼさつ

俱舍宗くしやしゆう

玄奘げんじよう

三蔵 さんぞう

小乗經 しょうじょうきょう

中阿含經 あこんきょう

阿含經 あこんきょう

長阿含經 あこんきょう

成実宗 じょうじつ

迦梨跋

摩

十二年

雜阿含經 あこんきょう

律宗 りっしゅう

道宣律師 どうせんりっし

二百五十

戒僧

小乘戒 しょうじょう

五百戒

尼

五戒 ごかい

男女 なんよ

男女 なんよ

玄奘三蔵 げんじょうさんそう

慈恩大師 じおんだいし

深密經 五卷

大集經 だいしっきよう

瑜伽論 ゆいが百卷

唯識論 ゆいしきろん

弥勒菩薩造 みろくぼさつ

世親菩薩造 せじんぼさつ

八斎戒

法相宗 ほうそうしゅう

雙卷經

觀經 かんきよう

曇鸞法師 どんらんほつし

淨土三部經 じょうどさんぶきよう

道どうしゆくぜん 綽せ 禪ぜん 師し

善ぜん 導どう 和わ 尚しょう

法ほう 然ねん 房ぼう

大だい 日にち 經きょう

七しち 卷くわん

善ぜん 無む 畏い 三さん 藏そう

權こん 大だい 乘じょう

金こん 剛こう 頂ちやう 經きやう

三さん 卷くわん

金こん 剛こう 智ち 三さん 藏そう

方ほう 等とう 部ぶ

蘇そ 悉しつ 地ち 經きやう

三さん 卷くわん

不ふ 空くう 三さん 藏そう

真しん 言こん 宗しゅう

阿あ 弥み 陀だ 經きやう

淨じやう 土とう 宗しゅう

慧けい 果か 和わ 尚しょう

弘法大師こうぼうだいし

慈覚大師じかくだいし

三十年

達摩大師だいまし

慧可えか

僧

智証大師ちしょうだいし

楞伽經りょうがきょう

四卷

禪宗ぜんしゅう

道信

十卷

求忍

百論

提婆菩薩造
だいばぼさつ

中論

竜樹菩薩造
りゅうじゅぼさつ

権大乘
こんだいじょう

慧能
えの

般若
はんによ

十二門論

同

三論宗
さんろんしゅう

興皇
こうこう

四十卷

大智度論
だいちどろん

同

嘉祥大師
かじょうだいし

無量義經
むりょうぎきょう

七十二歳

吉蔵 きちぞう

四十余年には未だ真実を顕さず、方便の力を以て四十余年に
は未だ真実を顕さず、無量無辺不可思議・阿僧祇劫を過れども
終に無上菩提を成ずることを得ず、所以は何ん菩提の大直道を
知らざるが故に險逕を行くは留難多きが故に、大直道を行く
は留難無きが故に。

実大乘 じつだいじょう

顕露宗 けんろしゅう

法華經 ほけきょう

最秘密宗 ひみつ

八箇年 はちかねん

仏立宗 ぶつりゅうしゅう

法華宗 ほっけしゅう

天台宗 てんだいしゅう

世尊は法久しくして後に要当に真実を説き給うべし正直に

ほうべん 方便を捨てて但無上道を説く種種の道を示すと雖も其れ實には
ぶつじょう 仏乗の爲なり、今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生
ことごとこ は悉く是れ吾が子なり而も今・此の処は諸の患難多し唯我れ
一人のみ能く救護を爲す復教詔すと雖も而も信受せず、若し
人信ぜずして此の経を毀謗せば則一切世間の仏種を断ぜん、
ある またひんしゆく ・或は復☆蹙して疑惑を懷かん汝当に此の人の罪報を説くこ
とを聴くべし若しは仏の在世若しは滅度の後其れ斯の如き
きようてん 經典を誹謗すること有らん経を讀誦し書持する有らん者を見
て輕賤憎嫉し而も結恨を懷かん此の人の罪報を汝今復聴け
きようせん 其の人 命終して阿鼻獄に入らん一劫を具足して劫尽きなば更
そ 生じ是の如く展転して無數劫に至らん此に於て死し已つて更に
かくのこと 蟒身を受けん其の形・長大にして五百由旬ならん、若し是の
もうしん

善男子・善女人・我が滅度の後に能く竊に一人の爲にも法華經

の乃至一句を説かん当に知るべし是の人は則・如来の使なり

如来の所遣として如来の事を行ずるなり、薬王若し悪人有つて

不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せ

ん其の罪尚輕し若人・一の悪言を以て在家・出家の法華經を

読誦する者を毀訾せば其の罪甚だ重し薬王今汝に告ぐ我が

所説の諸經而も此の經の中に於て法華最も第一なり我が所説

の經典無量千萬億にして已に説き今説き當に説かん而も其の

中に於て此の法華經最も爲難信難解なり若し法師に親近せば

速かに菩薩の道を得ん是の師に隨順して学せば恒沙の仏を見

上ることを得ん、爾の時に宝塔の中より大音声を出して歎め

て言わく善哉善哉釈迦牟尼世尊能く平等大慧教菩薩法仏所護念

の妙法華經を以て大衆の為に説き給う是の如し是の如し
釈迦牟尼世尊の所説の如きは皆是れ眞実なり・諸余の經典数
恒沙の如し此等を説くと雖も未だ難しと爲すに足らず若し須弥
を接つて他方無數の仏土に擲げ置かんも亦未だ難しと爲さず
若し仏の滅度に惡世の中に於て能く此の經を説かん是れ則ち
難しと爲す、諸の無智の人の惡口罵詈訾し及び刀杖を加うる
者有らん我等皆當に忍ぶべし惡世の中の比丘は邪智にして心
諂曲に未だ得ざるを爲れ得たりと謂い我慢の心充滿せん・或
は阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を行ずと謂いて
人間を輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法
を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん常に
大衆の中に在つて我等を毀らんと欲する故に國王・大臣・

婆羅門・居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて

是れ邪見の人外道の論議を説くと謂わん・濁劫惡世の中には

多く諸の恐怖有らん惡鬼其身に入つて我を罵詈し毀辱せん・

濁世の惡比丘は仏の方便隨宜所説の法を知らず惡口して☆蹙し

数数擯出せられん、大神力を現し広長舌を出して上梵世に

至らしむ諸仏も亦復是の如く広長舌を出し給う。

竜樹菩薩・

依報不依人

文殊・普賢・觀音・地藏・等

嘉祥・善導等なり

善無畏・弘法・慈覺・法蔵・

一日一夜

依義不依語

涅槃經

依智不依識

八十入滅

依了義經

不依不了義經

法華經
觀經等

大日經等
深密經等
華嚴經等
般若經等

◆八五 一代五時鷄図 623P

壽命三百年

羅什訳

百論 法雲自在王如来

觀自在王如来

千卷 仏滅後六七八

大論に云く十九出家三十成道

三十万卷 竜樹菩薩

第十一馬鳴菩薩の御弟子

付法蔵の第十三

大悲方便論 十万卷 猛

大心論

じゅうまん
十万卷

大無畏論

じゅうまん
十万卷

じつだいじょう
実大乘

ごんだいじょう
権大乘

けごんきよう
華嚴經

二七日
三七日

けごんしゅう
華嚴宗

しょうじんいちだい
立五教摂尽一代

とじゅんわじょう
杜順和尚

ちごんほつし
智儼法師

ほうぞうだいし
法蔵大師

だいし
香象大師

けんしゅほつし
賢首法師

けつきようほんもうきよう
結經 梵網經

だいじょうかいこれ
大乘戒之を出す

けごんわじょう
華嚴和尚

しょうじょう
小乘

經

定

十二年

阿含經 あこんきょう

長阿含 あこん
中阿含 あこん

俱舍論 ぐしゃろん

成実宗 じょうじつしゅう

增一阿含 あこん

律宗 りつしゅう

雜阿含 あこん

小乘 しょうじょう

戒之を出す これいだし

大乘 だいじょう

或說時不定 あるせつじふじょう

或云法華已前 あるほっけいぜん
或云法華已後 あるほっけいご

結經遺教經 けつきょうゆいきょう

弥勒菩薩說 みろくぼさつ

卷無著菩薩筆 むちやくぼさつ

或十六年 ある

深密經 じんみつ

一百

或八箇年 あるはちかねん

五卷

瑜伽論 ゆいが

方等部 ほうとうぶ

世親菩薩造 せじんぼさつ

權大乘 ごんたいじょう

唯識論 ゆいしきろん

三十頌

を撰しょうじん尽す

玄奘げんじょうさんぞう三蔵

慈恩じおんだいし大師

楞伽りょうがきよう經

禪宗ぜんしゅう

金剛こんこう般若はん經

・ 或あるは大円覺えんかく經

瓔珞ようらく經

達磨だるま大師だいし

結けつ經

・ 或あるは諸法無行しよほうむぎようきよう經

・ 或あるは首楞嚴しゅりょうこんきよう經

・ 或あるは云いわく一切いっさいきよう經

・ 或あるは

・ 或あるは

有相宗ゆうそう

三時さんじを立たてて一代いちだい

法相宗ほうそうしゅう

六經十一論

云くいわ教外別伝きょうげべつでん

竜樹造りゅうじゆ

不空造ふくう

善無畏三蔵ぜんむいさんそう

顕密二道を分ち五蔵を立て・或は十住心を立つけんみつにとう

蘇悉地經そしつちきよう〔三卷〕

金剛智三蔵・不空三蔵一行阿闍梨こんごうちさんそう ふくうさんそう あじやり

菩提心論ぼだいしんろん

一卷七枚

・或云ある

・或云ある

大日經だいにちきよう〔七卷〕

金剛頂經こんごうちようきよう〔三卷〕

真言宗しんごんしゅう

曇鸞法師 どんらんほつし

道綽禪師 どうしゆくぜん

善導和尚 ぜんどうわじょう

雙觀經 そうかんきょう

- 或は云く方等部 ある いわ ほうとうぶ
- 或は云く華嚴部 ある いわ けこん
- 或は云く般若部 ある いわ はんによぶ
- 或は云く法華部 ある いわ ほっけ
- 或は云く涅槃部 ある いわ ねはん
- 或は一代諸經の外 ある いちだいしよきょう

觀經 かんきょう

淨土宗 じょうどしゅう

阿彌陀經 あみだ

惠感禪師^{ぜせん}

小康法師^{ほっし}

照

三十年

・或^{ある}は云^{いわ}く二十二年

難行^{なんぎょう}

易行^{いぎょう}

聖道^{しょうどう}

浄土^{じょうど}

雜行^{ぞうぎょう}

正行^{しょうぎょう}

諸行^{しよぎょう}

念仏^{ねんぶつ}

法

造

・或あるは云いわく十四年

大品般若だいほんはんにや

光讚般若こうさんはんにや

金剛般若こんこうはんにや

天王問般若はんにや

摩訶般若まかはんにや

般若經はんにやきよう

仁王般若にんのうはんにや

〔結經〕けつきよう

・或あるは四論宗という

三論宗さんろんしゅう

・或あるは法性宗と云ほっしょうう

百論

竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ

中論

同

十二門論

同

大論だいろん

同

淨影

興皇こうこう

嘉祥寺の吉蔵かじょうきさう

・或あるは無相宗と云う

道朗

三時を立て一代いちだいを摂尽しやうじんす、・或ある

は二蔵を立て・或あるは三転法輪てんほうりんを立つ

華嚴三七日阿含十二年方等・般若

三十年已上四十二年なり

法界性論に四十二年

無量義經むりやうぎきやうに云いく方便力ほうべんりきを以ての故ゆゑに四十余年よんじゅうよねんには未だ真実しんじつを

顕あらわさず、又云いく無量無辺不可思議むりやうむへんふかしぎ・阿僧祇劫あそぎこうを過るも終ついに無上むじやう

菩提ぼだいを成じやうずるを得ず、所以ゆゑんは何ん菩提ぼだいの大直道じきどうを知らず險逕けんぎやう

を行いくに留難るなん多きが故ゆゑに、又云いく大直道じきどうを行いけば留難るなん無きが

故ゆゑに。

しよしゅうえびよう
諸宗 依憑宗

せそんほうくご
世尊法久後・要当説真実

ぶつりゅうしゅう
仙立宗

ある
廃也 ・ 或は前三教と云い

ある
・ 或は前四教前四味と云うなり、
・ 或は先の三教の円教

てんだいしゅう
天台宗

に摂尽するを云う。

ほつけしゅう
法華宗

しょうじきしやほうべん
正直捨方便・但説無上道

ほけきよう
法華經

ひみつ
秘密宗

はつきよう
四時・七教・五時・八教

あらわ
顕露彰灼宗

すいじしゅじゆ
雖示種種道・其実為仏乗

唯

いちぶつじよう
一仏乗

ふげん
普賢經

けつきよう
結經

えいざんかいだん
叡山戒壇

久黙此要。不務速説

しょうひまさぶつ
将非魔作仏・悩乱我心耶

けこんきよう
華嚴經・大日經・深密經・楞伽經・大品

はんによきよう
經・般若經等

無量義經
むりようぎぎょう

涅槃經等
ねはんぎぎょう

「我が所説しよせつの經典きようてんは無量千万億むりようせんまんにして已すでに説とき今説とき當まさに

説しかかん而そも其その中に於おいて此この法華經ほけぎょう最も為難信難解むづかしいなり、記

の六いっくに云いく「縦たとい經有しよきようつて諸經しよきようの王わうと云いうとも已いこんとう今當説さいい最為

第一だいいちと云いわず、兼但對帶其その義知んぬべし、玄の三さんに云いく「舌

口中くちゆうに爛ただる」、籤せんの三さんに云いく「已いこんとう今當いこんとうの妙此こに於おいて固まよいく迷まえ

舌爛ただれて止とどまざるは猶華報なおかほうと為なす謗法ほうぼうの罪苦長劫ざいくちやうこくに流ながる、又

云いく「諫かんぎよう曉きやう止とどまず」

法四依しえ第六卷
人四依しえ

結經けつぎょう

像法決疑經そうほうけつぎきよう

「一日一夜」

依法えほう不依人ふえにん

依義えぎ不依語ふえご

涅槃經ねはんぎきよう

仏智

八十御入滅 にゅうめつ
不依識 ふえしき

七十九・八十・八十一

八十二・百五・百二十

爾前の経経 にぜん きょうぎょう

法華経 ほけきょう

不了義経 ふりょうぎきょう

主上

依了義経不依 りょうぎきょう ふえ

修羅天 しゅら

天尊

二天

魔☆

天

世尊 せそん

毘紐 びちゅう

梵天 ぼんてん

主

大

第六天 だいりくてん

法王 ほうおう

国王 こくおう

菩薩等識 ぼさつ ち

依智 えち

帝たいしやく

釈天しゃくてん

天竺てんじく

人王

師し子しき頼よう王おう

天王

浄じょう飯ばん王

八は虐に違いす

震しん旦たん

三さん皇こう

五

帝たい釈しゃく尊そん

師

三王等

師し匠しょう

日本にほん国こく

武天皇
てんのう

七逆に違いす

神

涅槃疏云

章安釈

外道師

迦毘羅

一体の仏主師親と作る

三仙

☆楼僧伽

五逆に違いす

五逆に違いす

八親

外典師

尹喜

勒沙婆

親

六親

四聖

務成

☆老

呂望

周公旦

孔子

顔回

理性の子

結縁の子

今此三界・世尊

三界特尊
皆是我有

二十五有
其中衆生・

悉是吾子

文句の五に云く一切

衆生等しく仏性有しゅじょう　ぶつしょう

り仏性同じきがぶつしょう

故に等しく是れ子なゆえ　こ

り

而今此処・多諸患難こ　こ　しよげんなん

唯我一人能為救護ただわれひとりのういくこ

玄の六に云く本此の仏に従つて初めてい　わ

道心を発し亦此の仏に従つて不退の地に住すどうしん　おこ　また　ふたい

文句の六に云く「旧は西方の無量寿仏を以て長者に合す今はもんく　い　わ　さいほう　むりようじゅぶつ　ちようじゃ　が　つ

之を用いず、西方は仏・別に縁異り仏別なる故に隠顕の義成ぜずこれ　もち　さいほう　ゆえ　おんけん　むね　まなこ

縁異る故に子父の義成ぜず又此の經の首末全く此の旨無し眼をゆえ　しやな　じやくだつ　な　お　しゅまつ　むね　まなこ

閉し穿鑿せよ、舎那の著脱近く尚知らず弥陀は遠きに在り何ぞせんさく　しやな　じやくだつ　な　お　み　だ　なん

嘗て変換せん」云云、記の六に云く「西方等とは弥陀・釈迦の二かつて　い　わ　い　わ　み　だ　しやか

仏す既に殊ことなり豈あに弥陀みだをして珍玩ちんがんの服を隠かくさしめ乃すなわち釈迦しゃかをして

弊垢へいくの衣ちやくを著ちやくせ使つかめん状じやう、釈迦しゃか珍服ちんぷくの隠かくす可べき無なくく弥陀みだ唯ただ勝妙しょうみやう

の形かたちなるに当あたる、況いはんや宿昔むかしの縁別けんべつに化導けどう同じからざるをや、結縁けちえん

は生ことの如ごとく成就じやうじゆは養ことの如ごとく生養せいやうの縁異えんいれば父子ふし成なりぜず、珍弊途ちんべいみち

を分わかち著ちやく脱殊だつじゆに隔へだたる消経しょうきやう・事闕かけて調ちやうじゆく・熟そむの義乖ぎぐわいく当部たうぶの

文ぶん永えいく斯この旨むね無なし、舍那しゃな著ちやく脱等だつとうとは舍那しゃなの動どうぜずして

而しかも往まよくに迷まよう、弥陀みだの著ちやく弊へいは諸経しよきやうに文もん無なし、若もし平等びやうとう意趣いしゆ

を論ろんぜば彼此かれこれ奚いずくんぞ嘗かつてて自みづから矜ほこらん、縦たとい他たを我われが身みとするも還かえつ

て我われが化くわを成なりす我他われたの像さうを立たつれば乃すなわち他たの縁えんを助すけく人ひと之これを見みざ

れば化縁くわえん便すなわち乱みだる、故ゆえに知しんぬ夫その結縁けちえんとは並おうじんに応身おうじんに約やくするこ

とを我昔會かつて二万億等にんうんと云ことうが如ごとく、況いはんや十六王子じゅうろくおうじ始はじめ縦縦り今いまに

至いたつて機感きかん相成そうじやうし任運にんうんに分解ぶんかいす、是かくのの故ゆえに彼みだの弥陀みだを以もつて此この

変換と為す可からず」

種熟 東方有縁

主

第一阿☆仏

師

脱

親

大通の太子

種熟 西方有縁

主 師

親

沙弥

脱

親

種熟 娑婆世界

主 師

脱

親

記の九に云く「初・此の仏菩薩に従つて結縁し還た此の仏菩薩に

於て成熟す」、玄の六に云く「仏尚自ら分段に入つて仏事を施

作す有縁の者何ぞ来らざるを得ん譬えば百川の海に潮す応須が

如し縁に牽れて応生すること亦復是くの如し、又云く「本此の
仏に従つて初めて道心を発し亦此の仏に従つて不退地に住す」

劣応身釈迦如来
おうじんしゃかにようらい
本尊
ほんぞん

俱舎宗
ぐしゃしゅう
成実宗
じょうじつ
律宗
りつしゅう

盧舍那報身
るしゃなほうしん

華嚴宗の本尊
けこんしゅうほんぞん

勝應身に當る
しょうおうしん

法相宗の本尊
ほうそうしゅうほんぞん

勝應身に當る
しょうおうしん

三論宗の本尊
さんろんしゅうほんぞん

胎藏界
たいそう

真言宗の本尊
しんごんしゅうほんぞん

大日如來
だいにちにようらい
報身
ほうしん
金剛界
こんごう

天台は応身
てんだいおうじん

劣應
しょうおう
勝劣
しょうれつ

あみだぶつ
阿弥陀仏

じょうとしゅう
浄土宗の本尊

ぜんどう
善導等は報身

五百問論に云く「若し父の寿の遠きを知らず復父統の邦に迷わ
いたずらさいのう おも
ば徒に才能と謂うとも全く人の子に非ず、三皇已前は父を知らず
みなきんじゅう
人皆禽獸に同じ」

けこん
華嚴のるさな真言の大日等は皆此の仏の眷属たり

く おんじつじょうじつしゅう
久遠実成 実修実証の仏

てんだいしゅう ごほんぞん
天台宗の御本尊

しやかによらい
釈迦如来

おうじん
応身 有始有終

しじょう
始成の三身

ほうしん
報身 有始無終

ほっしん
法身 無始無終

しんこん
真言の大日等

くじよう さんじん
久成の三身

おうじん
応身

ほうしん
報身

むしむしゅう
無始無終

ほっしん
法身

けこんしゅう しんこんしゅう むしむしゅう さんじん
華嚴宗・真言宗の無始無終の三身を立つるは天台の名目を盗み

えきよう
取つて自の依経に入れしなり。

◆八六 釈迦一代五時繼図 633p

だいろん いわ
大論に云く十九出家・三十成道・八十入滅文、此の論は

りゅうじゅぼさつ じゅみよう
竜樹菩薩の造・寿命三百年・三十万偈の論師なり、付法蔵の第

ぶつめつ
十三仏滅後七百年の人なり。

せつしよ てんじくまかだこく じゃくめつどうじょう ぼだいじゅげ
説処は中天竺摩竭提国の寂滅道場菩提樹下・

七処八会

けりゅうじつぽうど
仮立実報土・別・円の二教を説く

三七日の説なり「三七日は法華の説二七日は

華嚴けごんの説」

華嚴經けごんきよう

兼なすと名く

權大乘ごんだいじようなり乳味にゅうみと名くなす頓大とんだいの機きの爲ために説く

頓教とんきようと名くなす「亦秘密教またひみつ有り亦不定教またふじよう有り」擬

宜なすと名く

結經けつきようは梵網經ぼんもうきようなり

馬鳴菩薩めみようぼさつ

起信論を造る

天竺てんじく

天親菩薩てんじんぼさつ

十地論じゅうちろんを造る

竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ

十住毘婆沙論じゅうじゅうびしやもんろんを造

る

華嚴宗祖師けごんしゅうそし

杜順和尚とじゆんわじよう

法蔵大師
ほうぞうだいし

漢土
かんど

智蔵法師
ちこんほつし

澄觀法師
ちようかんほつし

此の華嚴教けこんというは所謂いわゆる仏摩訶陀まかだこく国寂滅じやくめつ道場どうじよう菩提樹下ぼだいじゆげにして始

めて正覺しょうかくを成じたまいし時・七処八会しちこはくわいに於て法惠ほうえ・功德林くどく・

金剛幢こんこうどう・金剛藏こんこうざうの四菩薩しほさつに加して頓大とんだいの根性こんじようの為ために因陀羅網いんだら・

無障礙土むざうがいの相を現げんじ別円べつえんの両教りやうけう・住行向地しきやうこうじの功德くどく・法界唯心ほっかいゆいしんの理

を説とき給たまう所謂いわゆる華嚴經けこんきやうなり、此の經には四十一位しじゅういちゐを明いす謂いわく

十住じゅうじゆう・十行じゅうぎやう・十廻向じゅうくわう・十地じゅうち・仏果ぶつかなり、此の經には新古しんこの二訳

有り六十華嚴けこんは旧訳くやくなり八十華嚴けこんは新訳しんやくなり、梵網經ぼんもうきやうを以て

華嚴けこんの結經けつきやうと為なす、此の華嚴けこんは化儀けぎは頓部化法とんぶけほうは別円べつえんなり、

成道じやうどうの最初さいしよに此の教けうを説とき給たまう譬たとえば日出いでて先づ高山こうざんを照てらす

が如しごと厚殖こうじき善根ぜんこんは斯この頓説とんせつを感ず、頓説とんせつ本ほんと小せうの為ためにせず彼の初はつ分ぶんに於おいては永しやうく声聞もん無なし後分ごぶんには即すなわち有またり復またた坐ざに在いりと雖いえどもつんぽ聾ごつの如ごとくの如ごとし、經文きやうもんに云いく「即すなわち傍人ぼうにんを遣つかわして急いそに追おうてまさ將まさに還かへさんとす乃ない至し悶絶もんぜつして地ちに☆たおる」云云。

説処せつしよは波羅奈国はらな鹿野苑ろくやおん・同居土どうきよどの説

但さんぞう三藏教さんざうを説く・但なずと名なく

十二年じふにねん小乘しょうじやうを説く・酪味らくみと名なずく

阿含經あこんきやう
三乘さんじやうの根性こんじやうの為ために説く・漸教ぜんきやうと名なずく「亦秘密教またひみつ

有またふじやうり亦不定教またふじやう有あり」

誘引ゆういんと名なずく

結經けつきやうは遣教經せんきやうなり

俱舍宗くしやしゆう・成実宗じやうじつ・律宗りつしゆう

此の阿含あこんは是しやうじやう小乗教なり、仏・成道じやうどう五十七日を経て梵王ほんのうの請しやうに赴おもむき波羅奈国はらなの鹿野苑ろくやおんに於おいて陳如等ちんによの五人ごにんの為ために三藏教さんぞうの四諦しだいの法論ほふろんを説とき給たまう、謂おもく四阿含等あこんの小乗經しやうじやうきやうを説とくなり、増一ぞういつ阿含あこんには人天にんてんの因果いんがを明あかし、長阿含あこんには邪見じゃけんを破はし、中阿含あこんには真寂じんぎの深義あかを明あかし、雜阿含あこんには禪定ぜんじやうを明あかす、遺教經ゑいぎやうきやうを以もつて結經けつぎやうと為なす、化儀けぎは漸ぜんの部の初めけほう化法さんぞうは三藏教さんぞうなり、三乘さんじやうの根性こんじやうの為ために此の阿含教あこんを説とく經の次第しだいに依れば日の次に幽谷ゆうこくを照てらすが如ごとし、淺行ひんぎんを偏ひとえに明せば当分とうぶんに漸ぜんを解さんぞうる三藏本大さんぞうもとの為ならず座に在いりと雖も多いへど☆婆和ばわす、經に云いく「將まさに其その子を誘引ゆういんせんと欲ほつして方便ほうべんを説く密かに二人の形色しやうしき憔悴しやうすいせる威徳無いとくき者を遣つかわす」云云。

説処せつしよは欲色二界ちゆうげんの中間ちゆうげん大宝坊同居土の説なり

生蘇味 しょうそみ

蔵通・別円の四教を説く そうつう べつえん しきょう

十六年の説なり みいでら 三井寺の義説時不定なり せつじふじょう 山門の義権大乘 さんもん ごんだいじょう

対と名く なず

四教の機 しきょう き の為 ため に説く漸教と名く ぜんきょう なず 亦秘密教 またひみつ 有 あ り亦不 またふじょう 定教 じょう 有 あ り

弾訶と名く だんか なず

結経 けつきょう は瓔珞経 ようらく なり

方等部 ほうとうぶ

深密経 じんみつ 法相宗 ほうそうしゅう 玄奘三蔵慈恩大師 げんじょうさんそうじおんだいし

楞伽経 りょうがきょう 禅宗 ぜんしゅう 達磨 だるま

曇鸞法師 どんらんほっし

観経 かんきょう

道綽禅师 どうしゆくぜん

雙観経 そうかんきょう 浄土宗 じょうどしゅう

祖师 そうし

善導和尚 ぜんどうわじょう

阿弥陀经 あみだ

法然上人 ほうねんしょうにん

大日經 だいにちきよう

善無畏三藏 ぜんむいさんそう

金剛頂經 こんごうちようきよう

真言宗 しんごんしゅう

祖師 そし

金剛智三藏 こんごうちさんそう

蘇悉地經 そしつちきよう

不空三藏 ふくうさんそう

此の方等教は謂く鹿苑の後般若の前四教の機に對し処処に四教の

法を説いて唯だ二乗を彈呵し菩薩を稱揚す、所謂密嚴經・

厚嚴經・思益經・方等經・楞伽經・淨名經等なり、瓔珞經

を以て結經と為す、化儀は漸部の中・化法は四教なり、説教の

次第に依れば日の次ぎに平地を照すが如し影万水に臨み器の方円

を逐い波の動靜に随つて一仏土を示すに淨穢不同ならしめ一身を

示現するに巨細各異なり、一音の説法・類に随つて各解なり、

恐畏し歡喜し厭離し斷疑す神力不共の故に見に淨穢有り間に褒貶

有り嗅に胆葡と不胆葡と有り華に著身と不著身と有り淨名

ほうとう
方等の如し、きようもん 経文に云く「是を過ぎて已後、心相体信じて入出
はばか 難り無し」文。

なり

せつしよ 説処は鷺じゅうほう 峯山・白鷺池等の四処十六会・同居土の説

ごんだいじよう 権大乘なり

なす 帯と名く

じゆくそみ 熟蘇味と名く

みいでら 十四年の説なり「三井寺の義」三十年の説「山門さんもんの義」

はんによぶ 般若部

ぜん 漸と名く「亦秘密教有またひみつり亦不定教有またふじようり」

なす 淘汰と名く

けつきよう 結経は仁王経にんのうきようなり 已上四十二年なり

百論

中論

三論宗

祖師

嘉祥大師

十二門論

吉藏大師

此の大般若經は唐の玄奘三蔵の所訳是れ新訳なり、此の經は一

部六百卷・二百六十五品・六十億四十万字・一万

六百三十八紙なり、此の般若經は方等の後・法華の前四処十六

会の中に於て後三教の機^きの爲に広く諸部^{しよ}の般若を説く、所謂光讚

般若經・文殊問般若經・金剛般若經・能断金剛般若經・大品

般若經・小品般若經放光般若經・天王問般若經・大般若經

等なり、仁王般若經を以て結經と爲す、唯だ化儀は漸教の後

・化法は通別円なり、此の般若經の時も二乗の念処道品は皆

是れ摩訶衍と説いて亦身子・須菩提をして菩薩の爲に般若を轉教

せしむ。

玄義げんぎに云く「大人だいじんは其その光用こうようを蒙こもり嬰兒えいじは其その精明しやうめいを喪うしなう夜遊やうの者は伏匿ふくのかくし作務さむの者は興盛こうじやうす」故ゆえに文いに云く「但菩薩ぼさつの為ために其その實事じつじを説いて我が為ために此この真要しやうを説かず、三人俱ともに學まなすといえどにじやう雖も二乗にじやうは証しやうを取る具つづに大品等だいひんとうの如ごとし」經文きやうもんに云く「爾その時に窮子きやうじ即すなち教勅きやうしやくを受けて衆物しゆぶつを領知りやうちし乃至ないししか而も一いち☆を☆取けしゆするの意無なし」云云。

仏みずか・自よんじら四十余年しやうしよの諸經しよきやうを破はし給たまう事、無量義經むりやうぎきやう說法品せつぽうひんに云く「我先いに道場どうじやう菩提樹下ぼだいじゆげに端座たんざすること六年ろくにんにして阿耨多羅三藐三菩提あうたらかさんみやくさんぼだいを成じやうずることを得えたり仏眼ぶつげんを以もつて一切いっさいの諸法しよほうを觀みるに宣說せんぜつすべからず所以ゆえんは如何いかん諸もろの衆生しゆじやうの性欲しやうよく不同ふとうなることを知しれり性欲しやうよく不同ふとうなれば種種しゆじゆに法とを説しき種種しゆじゆに法とを説くことは方便ほうべん力を以もつてす四十余年しよんじやうには未いまだ眞實しんじつを顯あらわさず」云云、又

云く「文辞は一なりと雖も義は各異なり」云云、伝教大師の
無量義經の注釈に云く

「性欲不同なれば種種に法を説くとは是れ能被の教を挙ぐるな

り釈迦一代四十余年の所説の教略して四教及び八教あり所謂樹

王の華嚴・鹿苑の阿含・坊中の方等・鷲峯等の般若・演説一乘

・大小の菩薩の歴劫修行・小乗の三蔵教・

大乘の通教・大乘の別教・大乘の円教・頓教・漸教・

不定教・秘密教是くの如き等の前四味各各不同なり是の故に名け

て種種の説法と為す」云云、又云く「但隨他の五種性等門外の方便

・差別の權教・帶權の一乘を説いて未だ隨自一仏乘等・露地

の眞実・平等の直道・捨權の一乘を顯わさず是の故に説いて

方便力を以て四十余年未だ眞実を顯さずと言う」と云云、

無量義經に云く「若し衆生有つて是の經を聞くことを得ば則ち
為れ大利なり所以は如何若し能く修行すれば必ず疾く無上菩提
を成ずることを得ればなり、其れ衆生有つて聞くことを得ざる
者は当に知るべし是等は為れ大利を失えるなり、無量無辺
不可思議阿僧祇劫を過ぐれども終に無上菩提を成ずることを得ず
所以は如何菩提の大直道を知らざる故に險逕を行くに留難多き
が故に」云云、注釈に云く「疾く無上菩提を成ずることを得ずと
は未だ直道一乗の海路を解せず未だ純円六度の固船に乗らず
未だ実相方便の順風を得ず是の故に横道の三乗嶮路の步行留難
多き処・懃苦妄想夢裏の大河なり是の故に説いて疾く無上菩提
を成ずることを得ずと言うなり」云云、秀句の下に云く「法華經
を讚むと雖も還つて法華の心を死す」云云、無量義經に云く「次

ほうとう
に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説いて菩薩の歴劫修行
せんぜつ
を宣説せしかども」云云、伝教大師秀句の下巻に云く「謹し
むりようぎきよう
て無量義經を案ずるに云く方等十二部經とは法相宗所依の經な
まかはんにや
り摩訶般若とは三論宗の所依の經なり華嚴海空とは即ち華嚴宗
しよえ
の所依の經なり但歴劫修行を説いて未だ大直道を知らず」云云、
てんだいだいしげんぎ
天台大師玄義の五に云く「成道より以来四十余年未だ眞實を
あら
顕わさず法華に始めて眞實を顕わす」相伝に云く仏の年七十二歳
ほけきよう
にして法華經を説くと云云、慧心僧都の一乗要決の下に云く「仏
すで
既に説いて言く法華眞實なり前は未だ眞實を顕わさず何ぞ強ちに
ぶつきよう
仏教に背いて法華の怨嫉と為るや」云云、記の八に云く「略し
きようだい
て經題を挙げて玄に一部を収む故に仏欲以此妙法等と云うなり」
しやくせん
釈籤一に云く「次に經題を釈す初めには妙法の兩字は通じて

本・迹を詮^{せん}す蓮華^{れんげ}の両字は通じて本・迹を譬^{たと}う

説^{せつ}処^{しよ}は靈山^{りやうぜん}虚空^{こくう}の二処^{じつぽう}三會^{さんかい}実報^{じつぽう}土^どの説

実大乘^{じつだいじやう}

八箇^{はちかねん}年の説

又開會^{かいえ}の妙典^{みやうてん}とも純円^{じゆんえん}一実^{いちじつ}の説とも一円機^きの説とも

云う

法華經^{ほけきやう}

醍醐^{だいご}味^み

円教^{えんきやう}

頓^{とん}不定^{ふじやう}と秘密^{ひみつ}無し

結^{けつ}經^{きやう}は普賢^{ふげん}經

仏立^{ぶつり}宗^{しゆ}

法華^{ほつけしゆ}宗^{しゆ}

天台^{てんだい}宗^{しゆ}

一に靈山^{りやうぜん}會

序品^{じよほん}より法師品^{ほうしほん}に至^{いた}る十

品

二処三会の儀式

二に虚空会こくう

宝塔品ほうとうぼんより神力品じんりきぼんに至るいた十

一品

三に靈山会りょうぜん

嘱累品ぞくるいより勸発品かんほつぼんに至るいた

七品

本・迹の両門

序品じよぼんより十四品は迹門しやくもんなり

開権顕実かいこんけんじつと名なく

涌出品ゆじゅつぽんより十四品は本門ほんもんなり 開近顕遠かいこんけんのんと

名なく

此ほけきようの法華經ほけきようは第五時の教なり、無量義經むりようぎきようを開經なと為し觀普賢經かんふげんきようを

結經けつきようと為すな、化儀けぎは會漸歸頓えぜんきとん・會三歸一けほう・化法じゆんえんは純円じゆんえんなり、

般若はんにやの後はんにや・雙林そうりんの前もつぱ・純えんきら一の円機しんじつに對して眞實しんじつを説くなり、日

光あま普てらねく照どけいすに土圭そくえいしゆくの測影縮えんならず盈ふならざるが如ごとし低頭ていずこしゆ挙手

・皆みなぶつどう仏道じようなんじを成なず汝なんじは實じつに我が子・我われは實じつに汝なんじが父・唯ただ如來にようらいの

滅めつご後ごを以もつて之これを滅めつご度どす、此この第五ご時の教こは是これ日中じちゆうにして四時しじに

非あらず是だいご醍醐だいごにして四味あに非あらず是これ定じようにして不定じちゆうに非あらず是これ顯露あらわに

して秘密ひみつに非あらず三乘さんじよう・五乘ごうべん・七方便ほつかい・九法界えを會あひまひして一いちぶつじよう仏乘ぶつじように

入いれらしむ所以ゆえんに迹門しやくもんには二乘にじよう初住しよじゆうの位ゐに叶かなて無生忍むじやうにんを得う・

成仏じようぶつの記きを受うく八歳はちさいの竜女りゆうによは男子なんしに變成へんじして即身そくしんに無垢むくの

成道じようどうを唱となう、本門ほんもんには二世でしの弟子しし増道ぞうどう損生そんしやうの益えきを得え・凡およそ三周さんしゆう

四說ふかしぎ不可思議ふかなり方便品ほうべんに云いく「世尊せそんの法ほふ久くくして後か要やうず当まさに

真実しんじつを説せつくべし」又また云いく「未いまだ曾かつて説せつざる所以ゆえんは説せつ時じ未いまだ至いたらざ

るが故ゆゑなり今いま正まさしく是これ其そのの時ときなり決定けつじようして大乘だいじようを説せつかん」云

云い、又また云いく「乃ない至し一偈いちげに於おいても皆みな成な仏ぶつすること疑うたがい無なし十方じふぱう仏

土の中・唯一乗ただいちじょうの法のみ有つて二も無く亦三も無し仏の方便ほうべんの

説を除く」又云く「諸仏世しよぶつに出る唯此ただの一事のみ実なり余の二は

則ち真すなわに非あらず、普賢經ふげんの記に云く「故に正説せいせつに云く唯此ただの一事

のみ実にして余の二は則ち真すなわに非あらずと斯れに多義有り、一には

非頓非漸ひとんひぜんの妙法みょうほうを指して一事実と為し而頓而漸にとんにぜんを余二の権と

為す、二には三教の仮名を呼びて非真なと為し一円の実理を指して

一実いちじつと為す、三には四味を以て非真なと為し醍醐だいごを以て一実いちじつと為す」

と、方便品ほうべんに云く「終に小乗しょうじょうを以て衆生しゅじょうを済度さいどせず」云云、

又云く「若小乗しょうじょうを以て化すること乃至一人おひに於てもせば我則ちすなわ

慳貧けんどんに墮だせん此の事不可ふかと為す」又云く「正直しょうじきに方便ほうべんを捨てて

但た無上道むじょうどうを説く」と、玄の九に云く「廢三頭一とは此これ正まさしく

教はを廢はいす其その情はを破はすと雖いえども若し教を廢せざれば樹想かえ還つて生ず

教を執しゅうして惑を生ず是かくのゆえの故に教を廢はいす正直しょうじきに方便ほうべんを捨てて但ただ
無上道むじょうどうを説く十方じゅつぽう仏土の中唯ただだ一乘いちじょうの法のみ有り二も無く亦また三
も無し」云云、玄義げんぎの一に云く「華落けらくは権はいを廢するを譬たとえ蓮成れんじょう
は実を立するを譬たとう」文に云く「正直しょうじきに方便ほうべんを捨てて但ただ無上道
を説く」云云、伝でん教大師でんぎようだいしの顕戒論けんかいろんに云く「白牛びやくこを賜たまう朝あしたには三
車もちを用いず家業けごうを得る夕ゆうべには何なんぞ除糞じよふんを用いん」故に經に云く
「正直しょうじきに方便ほうべんを捨てて但ただ無上道むじょうどうを説く」と、方便品ほうべんに云く「我
が昔しよがんの所願しよがんの如ごとく今すで已まんぞくに満足す」云云。

玄義げんぎの十に云く「即すなわち方便ほうべんの一乘いちじょうを廢して唯ただ円実えんじつの一乘いちじょうな
り故ゆえに云いわく我本わほんと誓願せいがんするが如ごとき今まんぞく已まんぞくに満足す」方便品ほうべんに云く
「当来世とうらいせの惡人あくにん一乘いちじょうを説とき給たまうを聞いて迷惑めいわくして信受しんじゆせず法
を破はして惡道あくどうに墮だせん」と云云、又云く「法を聞き歡喜かんきし讚ほめて

乃至一言を發す則ち為れ已に一切三世の仏を供養するなり」
譬喩品に云く「今・此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生
は悉く是れ我が子なり而も今・此の処は諸の患難多し唯我一人
のみ能く救護を為す」云云、文句の六に云く「旧は西方の無量寿仏
を以て、以て長者に合す今之を用いず西方の仏・別に縁・異な
り仏・別なり故に隱顯の義・成ぜず縁異なるが故に子父の義・成
ぜず又此の經の首末全く此の旨無し閉眼穿鑿せよ」、疏記の六に
云く「弥陀・釈迦二仏既に殊なり況や宿昔の縁・別に化導同じか
らざるをや結縁は生の如く成熟は養の如し生養の縁異なるれば
父子成ぜず珍幣途を分ち著脱殊に隔たる消経事闕け調熟義
乖く当部の文・永く斯の旨無し」云云、又云く「往昔は大小の
兩縁俱に釈迦に在りとし今は尊特垢衣俱に弥陀に在りとせば更に

笑う可きことを成ず」云云、涅槃經の疏の一に云く「無救無護
無所宗 仰とは此れは無主の苦を釈す貧窮孤露・一旦遠離・無上
世尊とは此れは無親の苦を釈す設有疑惑・當復問誰とは此は無師
の苦を釈す」云云、涅槃經の四に云く「我又閻浮提の中に示現し
疫病劫起多く衆生有つて病に悩む所と為んに去つて醫藥を施し
然して後に為に微妙の法を説いて其をして無上菩提に安住せし
む」云云、涅槃經の一に云く「我等今より救護有ること無く宗 仰
する所無く貧窮孤露なり、一旦無上世尊に遠離したてまつらば
設い疑惑有りといえども當に復た誰にか問うべし」同一に云く「主
無く親無ければ家を亡し國を亡す」又云く「一体の仏を主師親
と作す」譬喩品に云く「一切衆生・皆是吾が子なり」云云、
壽量品に云く「我常に此の娑婆世界に在つて説法教化す亦余処

の百千万億那由佗阿僧祇の国に於ても衆生を導利す」云云、大論
に云く「十万恒河沙等の三千の国土を名けて一仏国土と為す
是の中に更に余仏無し実に一りの釈迦仏のみなり」云云、寿量品
に云く「我も亦為れ世の父諸の苦患を救う者なり」云云、宝塔品
に云く「能く来世に於て此の経を読み持たんは是れ眞の仏子なり」
云云、譬喩品に云く「若し人あつて信ぜずして此の経を毀謗せば
則ち一切世間の仏種を断ず其の人命終して阿鼻獄に入り一劫を
具足して劫尽きて更に生じ是くの如く展転して無數劫に至らん」
又云く「但大乘經典を受持することを樂つて乃至余経の一偈を
も受けざれ」妙楽大師の五百問論に云く「況や彼の華嚴は但福
を以て比す此の経の法を以て之を比するに同じからず、故に云く
乃至不受余経一偈と人之を思わず徒らに引く何んの益あらん」

げんぎ
玄義の五に云く「究竟の大乘は華嚴・大集・大品・法華・涅槃
に過ぐる無し」妙楽の釈籤の十に云く「請う有眼の者委悉に
これたずほつけぜんけこんとんごくおよなかれまさ
之を尋ねて法華は漸円・華嚴の頓極に及ばずと云うこと勿れ当に
知るべし法華は部に約するときは則ち尚華嚴・般若を破し教に約
するときは則ち尚別教の後心を破す」譬喩品に云く「初め仏の
所説を聞いて心中大いに驚疑す將に魔・仏と作つて我が心を
悩乱するに非ずや」宝塔品に云く「爾の時に宝塔の中より大音声
を出して歎めて言く善哉善哉釈迦牟尼世尊能く平等大慧教菩薩法
仏所護念の妙法蓮華經を以て大衆の為に説き給うことは是くの如
し是くの如し釈迦牟尼世尊所説の如きは皆是れ眞実なり」又云く
「釈迦牟尼仏・快く是の法華經を説き給え我是の經を聴かんが為
の故に而かも此に来至せり」と云云、又云く「大音声を以て

あまね ししゅう 普く四衆に告ぐ誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華經を説か
ん今正しく是れ時なり如来久しからずして当に涅槃に入り給うべ
し仏・此の妙法華經を以て付属して在ること有らしめんと欲す
法師品に云く「藥王若し人有つて何等の衆生か未來世に於て
當に作仏することを得べしと問わば応に示すべし、是の諸人等・
未來世に於て必ず作仏することを得んと何を以ての故に善男子・
善女人・法華經の乃至一句に於て受持し読誦せん」云云、宝塔品
に云く「諸余の經典数恒沙の如くならん、此等を説くと雖も
未だ難しと為るに足らず若し仏の滅後惡世の中に於て能く此の經
を説く是則ち難しと為すと」提婆品に云く「仏諸の比丘に告げ
給わく未來世の中に若し善男子善女人有つて妙法華經の提婆達多
品を聞いて淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は地獄・餓鬼・

ちくしょう

お

じゅつぼう

ぶつぜん

しよしょう

ところ

畜生に墮ちずして十方の仏前に生ぜん、所生の処には常に此

の経を聞き若し人天の中に生れば

も

にんてん

しやうみやう

の樂を受け若し仏前に在

ぶつぜん

らば蓮華より化生せん」又云く「当時の衆会皆竜女の忽然の間

れんげ

けしやう

いわ

とうじ

しやうえみなりゆうによ

こつねん

に變じて男子と成つて菩薩の行を具して即ち南方無垢世界に往き

ぼさつ

すなわ なんぼう むく

ゆ

宝蓮華に坐して等正覺を成じ三十二相・八十種好あつて普く

ほうれんげ

しやうかく

を成じ三十二相・八十種好あつて普く

しゆこつ

あまね

十方一切衆生の為に妙法を演説するを見る」又云く「爾の時

じゅつぼう いっさい しゆじやう

ため

みやうほう

えんぜつ

を見る」又云く「爾の時

いわ

そ

に娑婆世界の菩薩・声聞・天竜・八部・人と非人と皆遙かに彼

しやばせかい

ぼさつ

しやうもん

てんりゆう

はちぶ

人と非人と皆遙かに彼

みなはる

の竜女の成仏して普く時の会の人天の為に法を説くを見て心大

りゆうによ

じやうぶつ

あまね

の会の人天の為に法を説くを見て心大

ため

を見て心大

あいつたこ

いに歡喜し悉く遙かに敬礼す」分別功德品に云く「阿逸多是の

かんき

ことことはる

きやうらい

分別功德品に云く「阿逸多是の

いわ

阿逸多是の

善男子・善女人は我が為に復た塔寺を起て及び僧坊を作り四事を

ぜんなんし

ぜんによにん

ため

また

復た塔寺を起て及び僧坊を作り四事を

およ

そうほう

四事を

以て衆僧に供養することを須いず、所以は如何是の善男子・

しゆうそう

くよう

ことを須いず、

もち

ゆえん

いかに

ぜんなんし

善女人是の經典を受持し読誦する者は已に塔を起て僧坊を造立

ぜんによにんこ

きやうてん

じゆじ

どくじゆ

する者は已に塔を起て僧坊を造立

すで

たて

そうほう

を造立

し衆僧しゅうそうを供養くようすと為なす、
則すなわち為これ仏舎利しやりを以もて七宝しっぽうの塔たを起たてて

高広漸小にして梵天に至る」と云云、神力品に云く「仏滅度の後
に能く是の經を持たんを以ての故に諸仏皆歡喜す」云云、又云く
「我が滅度の後に於て応に斯の經を受持すべし是の人・仏道に
於て決定して疑有ること無けん」云云、藥王品に云く「能く
是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し一切衆生の
中に於て亦第一と為す」云云、普賢經に云く「煩惱を断ぜず五欲
を離れず三昧に入らざれども但誦持するが故に」云云、又云く
「其れ大乘方等經典を讀誦する有らば當に知るべし此の人は仏
の功德を具して諸惡永く滅して仏慧より生ずるなり」云云、一經
の始めの如是我聞を釈する文句の一に云く「如是とは所聞の法體
を拳ぐ」と則ち妙法蓮華經是なり。

一日一夜の説

ごんだいじよう
権大乘

ねはんぎよう
涅槃經

せつしよ ばつだいが
説処は跋提河の辺

じようじゅうしきよう
常住 四教を説く

だいごみ
同醍醐味

けつきよう そうほうけつきぎよう
結經は像法決疑經

ねはんぎよう
此の涅槃經は一日一夜の説三藏教・通教・別教・円教を明す、

また だいごみ なず
亦是醍醐味とも名く、釈尊拘尸那城・力士生地・阿利羅跋提河

しゃらそうじゅ
・沙羅雙樹の間に於て二月十五日の晨朝・面門より種種の光を

たま じゅうぽう たいしゅう
放ち給う十二由旬の内十方の大衆を集めて涅槃經を説き給う

すなわ ねはんぎようくやく
即ち三十六の涅槃經旧訳の四十の涅槃經なり、像法決疑經を以て

けつきよう な くんじゅうきよう
結經と為す、亦 ☆拾教と名け亦扶律顕常と云う、化儀は漸部・

けほう しきよう ほつけ なおみげ やから
化法は四教なり法華の時猶未解の輩有り更に後番五味を以て

よざん 余残の機を調 ちようじゆく 熟し給う、 ねはん 涅槃の時・ とき 四教の機同く・ ぶつしょう 仏性を見
しゅうしゅうとうそう る秋收冬蔵の如し、 ただ 唯四機有り俱に じようじゅう 常住を知る故に ほうけ 法華と合
だいごみ して同醍醐味と為すなり、 凡そ一往此くの如く こと 配立すと雖も いたど 万差
きえん の機縁に随つて したが 時節の ちようたんふどう 長短不同なり・ ある 或は けこん 華嚴の時長は ねはん 涅槃の
いた あこん 時に至る阿含・ ほうとう 方等・ はんによ 般若も亦爾なり云云、 ねはんきよう 涅槃經の六に「法に
よって 依て人に によ 依らざれ義に によ 依つて語に によ 依らざれ智に によ 依つて識に によ 依ら
りようききよう ざれ了義經に によ 依つて不了義經に によ 依らざれ」と云云、 又「亦 きたによらい 如来
ずいぎ 隨宜の方便所説の法の中に 執着を生ぜざる 是を 了義と名く 不了義 ならず 及びようぎ 及び
とは 經の中に 一切焼然なり 一切無常なり 一切皆苦なり 一切皆空 いたさいみな
いたさいむが なり一切無我なりと説くが如し 是を 不了義と名く 何を以ての故に ゆえ
かくのこと 是くの如きの義を了すること 能わざるを以ての故に 諸の衆生を もろもろしゅじよう
あびこく して阿鼻獄に墮せしむ」云云、 十七の卷に云く「如来は虚妄の言 によらい こもう

無しと雖も若し衆生の虚妄の説に因つて○「文、又云く「虚妄の法則ち是れ罪と為す是の罪を以ての故に地獄に墮す」云云。

一、小乗の戒を破する事

涅槃經の三の卷に云く「仏迦葉に告げ給わく能く正法を護持する因縁を以ての故に是の金剛身を成就することを得・迦葉我往昔に於て護法の因縁を以て今是の金剛身を成就することを得て常住にして壞せず、善男子正法を護持する者は五戒を受けず威儀を修せず応に刀剣・弓箭・鉾槊を持して持戒清淨の比丘を守護すべし」云云、同十七に云く「仏性を見るが故に大涅槃を得・是を菩薩の清淨の持戒にして世間の戒には非ずと名く」と云云、又云く

「是の經を受持して戒を毀る者は則ち是れ衆生の大悪知識なり

我が弟子に非ず是れ魔の眷属なり」云云、法師品に云く「若し
是の深経声聞の法を決了する是れ諸経の王なることを聞い
て」云云、安樂行品に云く「又声聞を求むる比丘・比丘尼・
優婆塞・優婆夷に親近せざれ亦問訊せざれ若しは坊中に於ても
若しは経行の処若しは講堂の中に在ても共に住止せざれ」云云、
伝教大師の顕戒論の中に云く「貧人の食は是れ輪王の毒なるが
如し、故に二乗の者の持戒精進は即ち菩薩の破戒懶惰なり故に
応に親近すべからず、来らば為に法を説け親使・利養・恭敬を
☆わざれ」と云云、秀句の下に云く「小乗の持戒は則ち菩薩の
煩惱なり」云云、宝塔品に云く「此の経は持ち難し若し暫くも持
つ者は我則ち歡喜す諸仏も亦然なり、是の如きの人は諸仏の歎め
給う所なり是則ち勇猛なり是則ち精進なり是を戒を持ち頭陀を

行ずる者と名く、なす則ち疾く無上の仙道を得と為す能く来世に於て

此の經を読み持たんは是真の仏子なり」云云、ぶつし竜樹菩薩の大論

に云く「自法愛染の故に他人の法を毀皆す持戒の行人と雖も地獄

の苦を脱れず」云云、まぬか涅槃經の十二に云く「仏迦葉に告げ給わく

若し菩薩有つて破戒の因縁を以て則ち能く人をしてすなわ大乘經典を

受持し愛樂せしむることを知つて又能く其れをしてきようかん經卷を讀誦

し通利し書寫しつうり広く人の為に説いて阿耨多羅三藐三菩提を退轉せ

ざらしめんと、是くの如き為の故に故さらに戒を破ることを得」

云云、あんねん安然の広釈に云く「能く法華經を説く是を持戒と名く律儀

を持すと雖も善法を損せざれば猶木石の衣鉢を帶持せるが如し」

云云、ぐけつ弘決の四に大論の十九を引いて云く「諸の比丘・仏に問い

たてまつる阿蘭若の比丘死しぬ今何の処にか生ずる・仏の言く

阿鼻獄あびごくに生なず諸もろもろの比丘びく大いに驚おどろく、坐ざ禪持戒ぜんじかいするに便すなわち爾しかるを
至いたすや仏答いえて言いわく多聞たもん・持戒じかい・禪未いまだ漏尽ろじんの法ほを得とず」云云、
傳でん教大師きょうだいし云いく「今いまより已い後ご声聞しょうもんの利益りやくを受けうけず菩薩ぼさつは二百五十
戒けいを捨すて畢おんぬ」云云、涅槃ねはん經ぎょうの四よに云いく「我わ涅槃ねはんの後のち・無量百
歳さいに四道しどうの聖人しょうにんも悉ことごとく復また涅槃ねはんせん正法しょうほう滅めつして後のち・像法そうほうの中に
於おて当まさに比丘びく有あべし貌かたち持律じりつに像にて少すこしく經ぎょうを讀誦どくじゆし飲食おんじきを貪嗜とんし
し其その身みを長養ちやうようし袈裟けさを服ふくすと雖いえども猶な獵師りやくしの如ごとく細こめに視みて徐ひそ
かに行いくこと猫ねずみの鼠うを伺うが如ごとし、常とに是この言ことを唱となう我羅漢らかんを
得とたりと、諸もろもろの病苦びんぐ多おほく糞穢ふんえに眠臥みんぷす・外ぐわいには賢善けんぜんを現あらし内うちには
貪嫉とんしつを懷いだく啞法あほうを受けうけたる婆羅門ばらもん等の如ごとし、實じつに沙門しゃもんに非あらずして
沙門しゃもんの像さうを現あらし邪見熾盛じゃけんしじようにして正法しょうほうを誹謗ひぼうし及および甚深秘密じんじんひみつの教きやう
を壞やぶり各自意おのづかに隨したがつて反さかつて經律きやうりつを説いわく」云云、同九どうきゅうに云いく

「善男子・一闍提有り羅漢の像を作し空処に住して方等
だいじょうきようてん ひほう もろもろほんぶ
大乘經典を誹謗す諸の凡夫人・見已つて皆眞の阿羅漢なり是れ
ほさつまかさつ おも
大菩薩摩訶薩なりと謂えり」

一、善導和尚自害の事

類聚伝に云く「導・此の身諸苦に逼迫せられて情偽反易し暫く
るいじゅでん いわ
も休息すること無し、乃ち所居の寺の前の柳樹に登つて西に向
きゆうそく
て願つて云く仏の威神驟以て我を摂し観音・勢至も亦来て我を
いわ いしんしばしば せつ かんおん せいし また
助け給え、此の心をして正念を失わざらしめ驚怖を起さず弥陀
たま
の法の中に於て以て退墮を生ぜざらんと願し畢つて其の樹の上
おい たいだ しょうねん せつ かんおん せいし また
に極り身を投じて自ら絶えぬ」
いた みずか

一、仏自害・断食・身根不具を禁ずる事

涅槃の七に云く「若し説いて言えること有らん常に一の脚を
ねはん いわ も

翹あげて寂も☆として言いわず淵ふちに投なじて火かに赴おもむき自みづから高こう巖がんより墜おち
嶮けん難なんを避さけず毒どくを服くし食しょくを断ことじ灰はい土どの上に臥ふし自みづから手足しほを縛しばつて
衆しゆ生じやうを殺ころせん、方さつ道たい・咒じゆ術じゆつ・旃せん陀だ羅らの子こ・無む根こん・二に根こん及および
不ふ定じやう根こん・身しん根こん不ふ具ぐならん、是かくの如ごとき等らの事こと・如に来らい悉ことごとく出しゆ家つして
道だうを為なすことを聴ゆるし給たまうといわば是これを魔ませ説せつと名なく」云云、涅槃ねはん經ぎやう
の六むに云いく「大だい乘じやうを学まなぶ者は肉にく眼げん有ありと雖いえども名なけて仏ぶつ眼げんと
為なす耳じ鼻び五ご根こんも例たとして亦また是かくの如ごとし」云云、像さう法ぼう決けつ疑ぎ經ぎやうに云いく
「諸もろの惡あく比ひ丘きう我われが意いを解げせず己おのが所しよ見けんを執しゆして十二じふに部ぶ經ぎやうを宣せん説ぜつし
文ぶんに随したがつて義ぎを取り決けつ定じやうの説せつと作なさん、当まさに知しるべし此この人は
三さん世ぜの諸しよ仏ぶつの怨あだなり速すみかに我われが法はふを滅めつせん」云云、涅槃ねはん經ぎやうの十四じふし
に云いく「如に来らい・世せ尊そんは方ほう便べん有あり無む常じやうを常じやうと説とき・常じやうを無む常じやうと
説とき・楽らくを説といて苦くと為なし・苦くを説といて楽らくと為なし不ふ淨じやうを淨じやうと説とき

・浄ふじようを不浄ふじようと説とき・我むを無我むがと説とき・無我むがを我むがと説とき・非衆生しゅじよう
に於おいて説といて衆生しゅじようと為なし・実しゅじようの衆生しゅじように於おいて非衆生しゅじようと説とき・非
物を物とと説とき・物を非物とと説とき・非実とを実とと説とき・実とを非実とと
説とき・非境とを境とと説とき・境とを非境とと説とき・非生とを生とと説とき・生とを
非生とと説とき・乃至ないしむみよう無明むみようを明とと説とき・明むみようを無明とと説とき・非色とを色とと
説とき・色とを非色とと説とき・非道とを道とと説とき・道とを非道とと説とく」云云。
父げつじようてんりんおうは月浄げつじよう・轉輪王鼓おんじよう・音声だ・陀羅尼に經の説な
り

浄土宗じようとしゆうの阿弥陀あみだ

誓願せいがんは執持しゅうち・名号みごう・往生おうじよう・極樂ごくらく
正覺しやうかくは十劫じゆくわく已來このかたなり

父は大通智勝仏なり

法華宗の阿弥陀

誓願は常楽の説是妙法蓮華經なり

正覺は三千塵点劫なり

薬王品に云く「若し女人有つて是の經典を聞いて説の如く修行

せば此に於て命終して即ち安樂世界阿弥陀仏大菩薩衆の圍繞せ

る住処に往き蓮華の中宝坐の上に生ず」云云、疏記の十に云く

「若し女人有つて等とは此の中只是の經を聞くことを得、説の

如く修行すと云う即ち浄土の因更に觀經等を指すことを須いざ

るなり、問う如何が修行する答う既に如説修行と云う即ち經に

依て行を立つ具さに分別功德品の中直ちに此の土を觀ずるに四土

具足するが如し故に此の仏身即三身なり」云云、「自在所欲生」

云云、方便品に云く「舍利弗・如来但一仏乘を以ての故に衆生

の爲に法を説く余乗の若しは二若しは三有ること無し」云云、
安樂行品に云く「無量の國中に於て乃至名字を聞くことを得
可からず」陀羅尼品に云く「汝等但能く法華の名を受持せし者を
擁護せんすら福量る可からず」釈籤の一に云く「名は即ち是体
・文字解脱なり」又云く「次に經題を釈す初めには妙法の兩字
は通じて本・迹を詮す蓮華の兩字は通じて本・迹を誓う」疏記の
一に云く「妙法の唱は唯だ正宗のみに非ず二十八品俱に妙法
と名くが故に、故に品品の内に咸く体等を具し句句の下に通じて
妙名を結す」云云、藥王品に云く「若し復人有つて七宝を以て
三千大千世界に満てて仏及び大菩薩・辟支仏・阿羅漢に供養せん
是の人の得る所の功德此の法華經の乃至一四句偈を受持する其の
福最も多きに如かず」又云く「能く是の經典を受持すること有

らん者も亦復またまた是くのごといっさいしゅじょうの如し一切衆生の中に於おいて亦またこ為だいれ第一いちなり」

又云いわく「此の経は能よく一切衆生を救う者なり此の経は能よく一切いっさい

衆生をして諸の苦悩を離れしむ此の経は能よく大いに一切衆生をいっさいしゅじょう

饒益じゅうやくして其の願を充満じゅうまんす」と勸發品に云く「若し復是の經典きやうてん

を受持じゅじする者を見て其の過惡を出さば若しは実・若しは不実にも

あれ此の人は現世げんせに白癩びやくらいの病を得ん、若し之を輕笑きやうしやうすること

有らん者は当まさに世世に牙齒疎げしすき欠け醜脣平鼻・手脚繚しゅうしんびやうび・しゅきやくりやうらい戻し眼目がんもく

角かくらい☆・身体臭穢しゅうえにして惡瘡☆血・水腹・短氣・諸の惡重病じゅうびやうある

べし、是の故かくのゆえに普賢若ふげんもし是の經典きやうてんを受持じゅじする者を見ては当まさに起

つて遠く迎むかえて当まさに仏を敬うやもうが如くすべし」涅槃經の十三に云いわく

「我爾その時に於おいて思惟しゆいし坐禪ざぜんし無量むりやう歳を経れども亦如来出世またによらいしゅつせの

大乘經の名有あることを聞かず」文句の五に云く「所以ゆえんは經に

いでたり人の語を信ずること勿れ」同三に云く「たとい百千種の師あつて一一の師・百千種の説を作すとも是れ權ならざるは無し、如来の所説有る尚復是れ權なり況や復人師をや、寧ろ權に非ざることを得んや前に出す所の如きは悉く皆權なり」

一、念仏者謗法罪を作る事 法然の選択に云く「道綽・綽・聖道・浄土の二門を立て聖道を捨てて正しく浄土に歸するの文、初めに聖道門と云うは之に就いて二有り、乃至之に准じて之を思うに応に密大及実大を存すべし、然れば則ち今真言・仏心・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論此等の家の意正しく此に在り、浄土宗の学者先ず須らく此の旨を知るべし、設い先ず聖道門を学するの人なりと雖も若し浄土門に於て其の志有らん者は須らく聖道を弃てて浄土に皈すべし、善導和尚・正雜

二行を立てそうぎよう雑行ざうぎようを捨ててしょうぎよう正行せいぎように皈きするの文、第一だいいちに読誦どくじゆ雑行ざうぎよう

と云うは上かみの觀經かんきよう等の往生おうじよう淨土じようどの經を除いいて已外いげ・大小乘だいしやうじよう・

顯密けんみつの諸經しよきように於おいて受持じゆじし読誦どくじゆするを悉ことごとくく読誦どくじゆ雑行ざうぎようと名なく、乃至ないし

・第三だいに礼拝らいはい雑行ざうぎようと云うは上かみの弥陀みだを礼拝らいはいするを除いいて已外いげ・

自余じよ一切いっさい諸余しよの仏菩薩ぼさつ等およ及び諸もろの世天せてん等に於おいて礼拝らいはいし恭敬きやうけいする

を悉ことごとくく礼拝らいはい雑行ざうぎようと名なけ、第四しやうに称名しょうみよう雑行ざうぎようとは上かみの弥陀みだの名号みようごう

を称しょうするを除いいて已外いげ自余じよ一切いっさいの仏菩薩ぼさつ等およ及び諸もろの世天せてん等の

名号みようごうを称しょうするを悉ことごとくく称名しょうみよう雑行ざうぎようと名なけ、第五ごに讚歎さんたん供養くやう雑行ざうぎよう

と云うは上かみの弥陀みだを除いいて已外いげ一切いっさい諸余しよの仏菩薩ぼさつ及び諸もろの世天せてん

等に於おいて讚歎さんたん供養くやうするを悉ことごとくく讚歎さんたん供養くやう雑行ざうぎようと名なく、乃至ないし、此

の文を見るにい彌い須いらくい雑いを捨いてい專いを修いすいべし、豈あに百ひやく即しよ

百生ひやくしやうの專修せんしゆの正行しょうぎようを捨いて堅けんく千中せんちゆう無む一の雜修ざうしゆ雑行ざうぎようを

執しゅせんや、又い云わく貞元じょうげん入蔵録にゅうそうろくの中に始め大般若經はんや六百卷より終

ほうじょうじゅうきよう

いた

に至るまで

顕密けんみつの大乗だいじょうきようす

經惣けいそうべて六百三十七部・

り法常住經ほうじょうじゅうきように至るまで顯密けんみつの大乗だいじょうきようす經惣けいそうべて六百三十七部・

二千八百八十三卷なり皆須みなすべらく読誦どくじゆだいじよう大乘だいじょうきようすの句くに撰せんすべし夫れ

すみや

速すみかに生死しやうじを離はなれんと欲ほつせば二種の勝しやうほう法ほうの中ちゆう且しばらく聖道門しやうどうもんを

速すみかに生死しやうじを離はなれんと欲ほつせば二種の勝しやうほう法ほうの中ちゆう且しばらく聖道門しやうどうもんを

さしお

閣さしいて選せんんで浄土門じやうどもんに入れ浄土門じやうどもんに入いらんと欲ほつせば正雜しやうぞう二行にぎやうの

閣さしいて選せんんで浄土門じやうどもんに入れ浄土門じやうどもんに入いらんと欲ほつせば正雜しやうぞう二行にぎやうの

中ちゆうに且しばらく諸しよの雜行ざぎやうを抛なげつて選せんんで正行しやうぎやうに皈きすべし」云云、

中ちゆうに且しばらく諸しよの雜行ざぎやうを抛なげつて選せんんで正行しやうぎやうに皈きすべし」云云、

大論だいろんに云いく「自法愛染あいぜんの故ゆえに他人たにんの法ほうを毀き皆し持戒じかいの行人いえどと雖いえども

大論だいろんに云いく「自法愛染あいぜんの故ゆえに他人たにんの法ほうを毀き皆し持戒じかいの行人いえどと雖いえども

地獄じごくの苦くるを脱まぬれず」云云、法華經ほけきやうに云いく「当来世とうらいせの惡人あくにんは仏ぶつの

地獄じごくの苦くるを脱まぬれず」云云、法華經ほけきやうに云いく「当来世とうらいせの惡人あくにんは仏ぶつの

一乘いちじやうを説とき給たまうを聞きいて迷惑めいわくして信受しんじゆせず法ほうを破はして惡道あくどうに

一乘いちじやうを説とき給たまうを聞きいて迷惑めいわくして信受しんじゆせず法ほうを破はして惡道あくどうに

墮だせん」又い云わく「法ほうを破はして信しんぜざるが故ゆえに三惡道さんあくどうに墜おちなん」

墮だせん」又い云わく「法ほうを破はして信しんぜざるが故ゆえに三惡道さんあくどうに墜おちなん」

雙觀經そうかんきやうに云いく「設たといわれほとけ我われ佛ぶつを得えるも十方じゆつぱうしゆじやう衆生しゆじやうの至心しんぎやうに信しん樂らくし

雙觀經そうかんきやうに云いく「設たといわれほとけ我われ佛ぶつを得えるも十方じゆつぱうしゆじやう衆生しゆじやうの至心しんぎやうに信しん樂らくし

て我が國こくに生なぜんと欲ほつして乃至ないし十念じゆんせんに若もし生なぜずんば正覺しやうかく

て我が國こくに生なぜんと欲ほつして乃至ないし十念じゆんせんに若もし生なぜずんば正覺しやうかく

を取らじ唯五逆と誹謗正法を除く」譬喩品に云く「若し人あつ

て信ぜずして此の経を毀謗するときは則ち一切世間の仏種を断ず

其人命終して阿鼻獄に入り一劫を具足して劫尽きて更に生ぜん

かくのごとて展転して無數劫に至らん」文句に云く「今経に小善

成仏を明かす此の縁因を取つて仏種と為す、若し小善成仏を

信ぜずんば則ち一切世間の仏種を断ずるなり」云云。

一、真言師謗法罪を作る事

秘蔵宝鑰の上に云く十住心とは、

一 異生羝羊心 凡夫惡人 二 愚童持齋心 凡夫

善人

三 嬰童無畏心 外道 四 唯蕚無我心 声聞

五 拔業因種心 緣覺 六 他緣大乘心 法相宗

七 覺心不生心

三論宗

八 如実一道心

法華宗

九 極無自性心

華嚴宗

十 秘密莊嚴心

真言宗

又云く「他縁以後は大乗の心なり大乗において前の二は菩薩乘

・後の二は仏乘なり此くの如きの乗乗は自乗には仏の名を得

れども後に望むれば戲論と作る」云云、又云く「人を謗じ法を謗ず

れば定めて阿鼻獄に堕ちて更に出ずる期無し、世人斯の義を知ら

ずして舌に任せて輒すく談じて深害を顧みず寧ろ日夜に十悪・

五逆を作るべしとも一言一語も人法を謗す可からず」云云、

大日經に云く「仏不思議の真言相道の法を説くに一切の声聞・

縁覺を共にせず亦普く一切衆生の為にするに非ず」法華經の二

に云く「汝等若し能く此の語を信受せば一切皆當に仏道を成ず
ることを得べし是の乗微妙にして清淨第一なり」云云、又云く
「此の法華經は是れ諸の如来第一の説・諸説の中に於て最も甚深
なり」又云く「此の法華經は諸仏如来の秘密の藏・諸經の中に
於て最も其の上に在り」六波羅蜜經に五藏五味を説く、私に云く
此の經は天台御入滅已後百余年に天竺より漢土に來れり爾れば
見ざる經の醍醐を盗むと書くは謬失なり弘法の二教論の下に
云く「喩して曰く今斯の經文に依らば仏五味を以て五藏に配當
し惣持を醍醐と稱し四味を四藏に譬え給えり、振旦の人師等醍醐
を諍い盗んで各自宗に名く若し斯の經を鑒みば則ち掩耳の智割割
を待たじ」云云、又云く「毘盧遮那經の疏に順ぜば阿字を釈す」
云云、私に云く毘盧遮那經疏供養法の卷は竜樹入滅已後八百年

の造疏じょなり、而しかるに菩提心論ぼだいしんろんに此の事を引き載のせたり故ゆえに知んぬ
菩提心論ぼだいしんろんは竜樹りゅうじゅの釈あらずに非るなり又云いわく「唯真言法ただしんごんの中にのみ
即身成仏そくしんじょうぶつするが故ゆえに是三摩地さんまじの法を説く諸教しよきやうの中に於おいて闕かいて
書せず」云云。

一、真言しんごんは別仏べつぶつの説あらずに非る事

だいにちきよう

だいにちによらい

大日經の一の卷の五仏は中央は大日如来と説く同五卷の五仏

は中央びるしやなは毘盧遮那びるしやなと説く第一だいいちの卷の五仏は中央は釈迦牟尼しやかむにぶつ仏と説

く、文句もんくの九に云く普賢觀ふげんは法華ほつけを結成す文に云く釈迦牟尼しやかむにぶつ仏を

毘盧遮那びるしやなと名くと、乃すなわち是れ異名いみやうなり別体なるに非あらざるなり、

安然あんねんの教時義きやうじぎに云く「真言宗しんごんしゅうの本地毘盧遮那ほんちびるしやなは即ち天台宗すなわ てんだいしゅうの

妙法蓮華經みやうほうれんげきやう・最深密処さいじんみつしよ同仏なり、智証大師ちしやうだいしの授決集じゆけつしゅうに云く

「真言しんごん・禪門ぜんもん・華嚴けこん・三論さんろん・唯識ゆいしき・律宗りつしゅう・成俱じやうぐの二論等は若し

法華・涅槃經等の經に望むれば是れ摂引の門なり」云云、金剛

ちようきよう

頂經

に云く

「婆伽梵釈迦牟尼如来・一切平等に善く通達する

いっさいびようどう

たま

ふどうによらい

ほうしよう

が故に一切方を平等に觀察して四方に坐し給う不動如来・宝生

ゆえ

いっさい

びようどう

しほう

たま

ふどうによらい

ほうしよう

如来・觀自在王如来不空成就如来」云云、大日經普通真言藏品

によらい

かんじざい

によらいふくうじようじゆによらい

云云、大日經普通真言藏品

だいにちきよう

しんこん

けんぞく

の四に云く「時に釈迦牟尼世尊宝処三昧に入つて自心及び眷属の

いわ

しゃかむにせそんほうしよさんまい

じしんおよ

けんぞく

真言を説き給う」文、大日經の第二に云く「我昔道場に坐して

しんこん

と

たま

だいにちきよう

いわ

どうじよう

四魔を降伏し大勤勇の声を以て衆生の怖畏を除く、是の時梵天

こうふく

しじよう

ふい

こ

ほんてん

等心喜共に称説す此れに由つて諸の世間号して大勤勇と名く我本

ふしよう

さと

こ

よ

もろもろせけん

なず

不生を覚る」云云、前唐院金剛頂經の疏に云く「成仏已来甚

ふしよう

ざんとういんこんこうちようきよう

頂經

の疏に云く

「成仏已来甚

くおん

いま

ぜんとういんこんこうちようきよう

頂經

の疏に云く

「成仏已来甚

大久遠なり未だ所經の劫数を説かざる所以は經に於て各傍正の義

くおん

いま

ぜんとういんこんこうちようきよう

頂經

の疏に云く

「成仏已来甚

有り故に彼の法華の久遠の成仏も亦是れ此の經の毘盧遮那仏と

ゆえ

ほつけ

くおん

じようぶつ

またこ

びるしやな

異解す可からず」云云、仏法伝来の次第に云く「大師智拳・印を

いげ

べ

云云、

ぶつぼう

しだい

いわ

だいしちけん

印を

結びて南方なんぼうに向かう面門めんもん俄かに開けて金色の毘盧遮那びるしゃなと成り即便すなわちち本体げんきに還歸す」云云、涅槃經ねはんぎょうの七の卷に仏迦葉かしように告げ給わく「我たまはつねはん般涅槃はんねはんして七百歳の後は是この摩波旬まはじゆん漸く当に我が正法しやうほうを壊乱えらんすべし、乃至ないし化して阿羅漢あらかんの身及び仏の色身しきしんと作らん魔王まおう此の有漏うろの形を以て無漏むろの身と作りて我が正法しやうほうを壊やぶらん」云云。

一、禪宗ぜんしゆう謗罪ぼうざいを作す事な

円覺經えんかくに云く「修多羅しゆたらの教は月を標さす指の如ごとし」文方便品ほうべんに云く「・或あるは修多羅しゆたらを説く衆生しゆじやうに随順ずいじゆんして説く大乘だいじやうに入るに為これ本なり」梵天王ぼんてん問仏もんぶつ決疑經けつぎきやうに云く「梵天ぼんてん・靈山りやうぜん会上かいじやうに至いたつて金色の沙羅華を以て仏に献たたまり仏群生の為に法を説き給たまえと請しやうす世尊せそん坐に登り華を拈ねんして衆に示して青蓮の目を瞬まばたきて天人てんにん百ひゃく萬まん悉ことごとく皆措おくこと罔なし独ひとり金色の頭陀破ずだは顔微笑がんびしやうす、世尊せそんの言いわく吾に

しょうほうげんそう 正法眼蔵・涅槃妙心・実相微妙の法門有り文字を立てず教外
べつでん 別伝・摩訶迦葉に付属す」云云、是は中天竺なり仏の御入滅は
てんじくくしなじょう 北天竺拘尸那城なり、涅槃經の一に云く「爾の時に閻浮提の中
びく 比丘・比丘尼一切皆集る唯尊者摩訶迦葉・阿難の二衆を除く」
どうぎょう 同經の三に云く「若し法宝を以て阿難及び諸の比丘に付属し
たま 給う久住することを得ず何を以ての故に一切声聞及大迦葉は
ことことまさ 悉く当に無常なるべし彼の老人の他の寄物を受くるが如し、
かくのゆえ 是の故に無上の仏法を以て諸の菩薩に付属すべし」云云、
そうほうけつぎょう 像法決疑經に云く「諸の悪比丘・或は禪を修すること有るも
きようろん 經論に依らず、自ら己見を逐うて非を以て是と為し是れ邪是れ
ぶんべつ 正を分別すること能わず、遍く道俗に向つて是くの如き言を作さ
よ 我能く是を知り我能く是を見ると、当に知るべし此の人は速か
よ 我能く是を知り我能く是を見ると、当に知るべし此の人は速か

に我が法を滅せん乃至地獄ないしじごくに入ること猶箭なおやを射るが如しごと」云云、

弘決ぐけつ一の下に云く「世人多く坐禪安心ざぜんあんしんを以て名けて発心ほっしんと為す、

此の人すべいま都て未だ所縁の境を識しらず所期の果無ければ全く上求無し

大悲だいひを識しらざれば全く下化無し、是かくのゆえの故に発心ほっしんは大悲だいひより起るおこな

り」云云、天台てんだいの止観しかんの五に云く「又一種いわの禪人他の根性こんじょうに達

せずして純もっぱら乳藥を教ゆ体心とうしん踏心・和融覺かくみやくも 覓若しは泯みん若しは了りよう

斯これ一轍てつの意なり障難しょうなん万途紛然ふんぜんとして識しらず纔ひそかに異相いそうを見て

即すなわち是これ道と判ずみずか自ら法器ほうきに非ず復他またに匠しょうたるをか闕もうはく盲跛もうはの師

徒とも二だらく俱に墮落こけつす瞽瞍はなはだの夜遊れんみん甚べだ憐愍べす可し」云云、

弘決ぐけつの一に云く「世人・教を蔑ないがしろにし理観あやまを尚ぶ者あやま ☆ れるかな

☆ れるかな」方便品ほうべんに云く「諸法実相しよほうじつそう・所謂諸法しよいしよほう・如是相によぜそう・

如是性によぜしやう・如是体によぜたい・如是力によぜりき乃至ないし・如是本末究竟等によぜほんまつくきやう」云云、妙樂大師みやうらくだいし

の金☆論に云く「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず

十界・十界は必ず身土なり」云云、

疏記の十に云く「直ちに此

の土を觀ずるに四土具足す故に此の仏身即ち三身なり」云云。

一、権実証拠の事

玄義の二に云く「則ち百法界・千如是有り束ねて五差と為す一

に惡・二に善・三に二乘・四に菩薩・五に仏なり、判じて二法と

為す前の四は是れ權法・後の一は是れ実法」云云、釈籤の二に

云く「九界を權と為し仏界を實と為す」云云、秀句の下に云く

「定性」と不定性は位の高下に依り成仏と不成仏は經の權實に

依る」文句の九に云く「漸頓の益は虚なり」云云、記の九に云く

「權を擧げて界を出るを名けて虚出と為す」云云、玄義の九に云く

「化他の因果は仏菩提を致すこと能わず是の故に取て並べ用いず

化^け他^たの権^{ごん}実^{じつ}も亦^{また}他^たをして極^{いた}に至^{いた}らしむること能^{あた}わ^ず亦^{また}取^とる^べる^から
ず」云云、止^{しかん}観^{かん}の三^{さん}に云^いく「権^{ごん}の権^{ごん}は実^{じつ}の権^{ごん}に非^{あら}ず実^{じつ}の権^{ごん}と成^なる
ことを得^え可^べし権^{ごん}の実^{じつ}は実^{じつ}の实^{じつ}に非^{あら}ず実^{じつ}の实^{じつ}と成^なることを得^えべ^うから
ず」云云。

一、権^{ごん}実^{じつ}分^{ぶん}別^{べつ}の事^{こと}

一に玄^{げん}義^ぎの一^{いつ}に云^いく「蓮^{れん}の爲^{ため}の故^{ゆえ}に華^け・実^{じつ}の爲^{ため}に権^{ごん}を施^ほすを
譬^{たと}う、権^{ごん}は即^{すなわ}ち是^これ苗^{めう}文^{ぶん}に云^いく種^{しゆ}種^{じゆ}の道^{だう}を示^しすと雖^{いえど}も其^それ実^{じつ}には
仏^{ぶつ}乗^{じよう}の爲^{ため}なり」云云、二に又^い云^わく「華^け敷^ふは権^{ごん}を開^{ひら}くを譬^{たと}う蓮^{れん}現^{げん}
は実^{じつ}を顕^{あら}すを譬^{たと}う権^{ごん}実^{じつ}共^{ども}に稻^いなり文^{ぶん}に云^いく方^{ほう}便^{べん}の門^{もん}を開^{ひら}いて真^{しん}実^{じつ}
の相^{さう}を示^しす」云云、三に又^い云^わく「華^け落^{らく}は権^{ごん}を廃^{はい}するを譬^{たと}う蓮^{れん}成^{じよう}
は実^{じつ}を立^たつるを譬^{たと}う実^{じつ}独^{ひとり}り真^{しん}米^{まい}なり文^{ぶん}に云^いく正^{しやう}直^{じき}に方^{ほう}便^{べん}を捨^すて
て但^{むじ}無^{じよう}上^{じやう}の道^{だう}を説^{とく}」云云、釈^{しやく}籤^{せん}の一^{いつ}に云^いく「開^{かい}廢^{はい}俱^ぐ時^じなり開^{ひら}

の時^す已^{はい}に廃^{はい}するが故なり」云云、又云く「開の時^{すなわ}即ち廃^{はい}す」又云く「既^すに実^しを識^しり已^{おわ}れば永^もく権^ちを用^{もち}いず」云云。

一、破三顯一の事

方便品^{ほうべん}に云く「一^{いち}仏乘^{ぶつじょう}に於^{おい}て分別^{ぶんべつ}して三^{さん}と説^{せつ}く」云云、玄義^{げんぎ}の九^{いく}に云く「廃三顯^{けんじつ}実^{じつ}」又云く「施權^{しけん}」方便品^{ほうべん}に云く「二^にも無^{なく}く亦^{また}三^{さん}も無^むし仏^{ぶつ}の方便説^{ほうべんせつ}を除^{のぞ}く」云云涅槃經^{ねはんぎよう}の二十三^{にじさん}に云く「實^{じつ}には三^{さん}乘^{じょう}無^むし顛倒心^{てんどうしん}の故^{ゆゑ}に三^{さん}乘^{じょう}有^ありと言^いう、一^{いち}実^{じつ}の道^{みち}は真^{しん}實^{じつ}にして虚^{きょ}ならず顛倒心^{てんどうしん}の故^{ゆゑ}に一^{いち}実^{じつ}無^むしと言^いう」云云、方便品^{ほうべん}に云く「尚^{なお}二^に乘^{じょう}無^むし何^{いか}に況^{いわん}や三^{さん}有^あらんや」云云。

一、入如来慧の事

法華經^{ほけきよう}に云く「是^この諸^{しよ}の衆生^{しゆじよう}世^よより已^{この}来^{かた}常^{じょう}に我^がが化^けを受^うく此^{この}の諸^{しよ}の衆生^{しゆじよう}始^{はじ}めて我^がが身^みを見^みて我^がが所説^{しよせつ}を聞^きいて即^{すなわ}ち皆^{みな}信^{しん}受^{じゆ}

して如来にょらいの慧えに入る先より修習しゅうしゅうして小乘しょうじょうを学まなぶ者を除く」云云、文句もんくの九くに云く「根利こんりにして徳厚とくこうく世世このかた已来いらい常に大化だいけを受け始めて我が身みを見て即ち華嚴けこんを稟うけて如来慧にょらいに入る菓熟このみして零おち易やすし」云云、釈籤しゃくせんの十じゅうに云く「当まさに知るべし法華ほっけは部に約するときは則ち華嚴すなわ・般若はんを破はす」云云。

一、余深法よじん中の事

嘱累品そくるいに云く「若し衆生しゅじょう有あて信受しんじゅせざらん者ものには当まさに如来にょらいの余よの深法じんぼうの中に於おいて示教利喜じきょうりきすべし」文句もんくの七しちに云く「示教利喜じきょうりき・示すは即ち示転すなわ・教きょうは即ち勧転かんでん・利喜りきは即ち証転すなわなり」、玄義げんぎの六むに云く「余おれとは方便ほうべんを帶たいするなり深ふかとは中道ちゅうどうを明あきすなり方便ほうべんを帶たいして中道ちゅうどうを明あきすは即ち別教べつきょうなり」云云、又云く「但ただ為ために実ひろを弘ひろむるに而しかも衆生しゅじょう信しんぜず須すらく実ための為ために権ごんを施ほどこすべし」釈籤しゃくせん

の六に云く「有深復余とは即ち別教の法なり入地を深と名け地
前を余と名く」云云、文句の十に云く「汝能く余深の法を以て
仏慧を助申せば即ち善巧に仏の恩を報ず」云云、疏記の十に云く
「以偏助円は則ち此の意なり此の経の上下・一切皆然なり人之を
見ずして三乗有りと謂うは謬れり」云云。

一、三種教相の事

玄義に「教相を三と為す一に根性の融不融の相・二に化導の
始終不始終の相・三に師弟の遠近不遠近の相」云云、釈籤の一
に云く「前の両意は迹門に約し後の一意は本門に約す」云云、
寂滅道場を以て元始と為す方便以下の五品の意なり。

第一、根性融「法華」不融「爾前」の相

華嚴・阿含・方等・般若・法華・各得道有り種熟脱を論ぜず、

しゃくせん

釈籤のいに云く「又今文の諸義しよは凡そおよ一の科皆先とがみなず四教しきように約

そみよう

して以て鹿妙を判ずるときは則ち前三すなわ ぜんさんを鹿そと為し後・一を妙と

な
そみよう

為す次に五味に約して以て鹿妙を判ずるときは則ち前四味すなわ ぜんしみを鹿そと

な
だいこ

為し醍醐だいこを妙と為す、全く上下じようげの文意もんいを推求すいぐせずして直ちに一語ご

ほつけ

を指して法華は華嚴けこんより劣れりと謂いえるは幾許いくばくの☆りぞや☆り

ぞや」云云。

けこん

華嚴は一鹿そ一妙

あこん

阿含は単鹿そ

ほうとう

方等ほうとうは三鹿そ一妙

はんにや

般若はんにやは二鹿そ一妙

ほつけ

法華は二妙有り

そうたいみよう

相待妙

そみよう

鹿妙を判ず

無妙

そうたいみよう

相待妙

そみよう

鹿妙を判ず

そうたいみよう

相待妙

そみよう

鹿妙を判ず

そうたいみよう

相待妙

そみよう

鹿妙を判ず

ぜったいみよう

絶待妙は

そ

鹿を開して妙あらを顕あらわす

しゃくせん

釈籤の十に云く「唯法華に至つて前教の意を説いて今教の意を

あら

顕わす」、玄義の二に云く「此の妙・彼の妙・妙の義殊なること

無し 約教 相待前 三を龜と為し後・一を妙と為す

やつきよう ぜんさん

そ

な

後・一を妙と為す

な

但方便を帶すると方便を帶

ほうべん

ほうべん

ほうべん

ほうべん

ほうべん

ほうべん

ほうべん

ほうべん

ほうべん

ほうべん

ほうべん

せざるを以て異と為すのみ」云云、

な

約部・相・前四味を龜と

為し醍醐を妙と為す

同十に云く「初

い

い

い

い

い

い

い

後の仏慧・円頓の義斎し」一往の釈、

ぶつて えんどん

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

始の如く今の如し二無く異無し」云云、弘決の五に云く「惑者未だ

なく

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

見ず尚華嚴を指す唯華嚴円頓の名を知つて彼の部の兼帶の説に味

なおけこん

ただけこん えんどん

けんたい

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

しよみ

し全く法華絶待の意を失う」云云、

ほつけ ぜったい

うしな

うしな

うしな

うしな

うしな

うしな

うしな

うしな

うしな

うしな

うしな

うしな

うしな

うしな

うしな

うしな

の中・円融有りと雖も全く二妙無し」

えんゆう

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

い

の中の円を判じて之を名けて妙と為す諸経に皆是くの如きの円

これ

な

しよきよう

しよきよう

しよきよう

しよきよう

しよきよう

しよきよう

しよきよう

しよきよう

しよきよう

しよきよう

しよきよう

しよきよう

しよきよう

しよきよう

の義有り何ぞ妙と称せざる故に復更に部に約し味に約して方に

ゆえ

また

また

また

また

また

また

また

また

また

また

また

また

今経の教も円部も円なることを顕わすべし、若し教に約せざれ

こんきよう

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

あら

すなわば則ち教の妙を知らず若し味に約せざれば則ち部の妙を知らず、
にぜん そうたいみよう ぜんさん 通別麁と為し後・一円を妙と為す」云
爾前の相待妙とは前三を蔵
云、法華の相待妙とは前四味華嚴・阿含・方等・般若を麁と為し醍醐を
ほつけ そうたいみよう ぜんしみ
妙と為す三千塵点大通を以て元始と為す。

第二、化導始・中間終・靈山の初住不始終の相 化城喻品の意なり
けどう ふしじゅう けじょうゆほん

しゅじゅくだつ

だいづう

ちゅうげんないしきよう

けじょうゆほん

種熟脱を論ず種は大通なり熟は中間乃至今日の四味なり脱は

今の法華なり玄の一に云く「異とは余教は当機益物にして如来
ほつけ いわ よきよう とうき によらい

施化の意を説かず此の経は仏の教を設け給う元始巧みに衆生の
せけ たま しゅじよう

為に頓・漸・不定・顕・密の種子を作す
とん ぜん ふじよう しゅし な

を明す」云云、釈籤の一に云く「漸及び不定に寄すと雖も余教
しやくせん いわ ぜんおよび じよう いえど よきよう

を以て種と為さず故に巧為と云う」止観の三に云く「若し初業に
な ゆえ ぎやうい しかん いわ も

常を知るを作さずんば三蔵の帰戒羯磨悉く成就せず」と、弘決
な さんそう かつまことごとじようじゆ ぐけつ

の三に云く「今日の声聞・禁戒を具することは良に久遠の初業に常を聞くに由る若し昔聞かずんば小尚具せず況や復大をや」云、弘決の三に云く「若し全く未だ會て大乘の常を聞かずんば既に小果無し誰か禁戒の具・不具を論ぜんや」云云、又云く「羯磨不成と言うは所謂久遠必ず大無んば則ち小乗の乗る法を成ぜざらしめん本無きを以ての故に諸行成ぜざること樹の根無ければ華果を成ぜざるが如し、時機未だ熟せずんば權に小の名を立つ汝等の行ずる所是れ菩薩の道、始めて記を得て方に大人と名くるに非ず」釈籤の一に云く「法譬二周得益の徒は往日結縁の輩に非ること莫し」云云。

五百塵点久遠を以て元始と為す寿量品の意なり

五百塵点靈山の間

第三に師弟の遠近不遠近の相

種熟脱を論ず

種は久遠熟は過去脱は近く世世番番の成道今日の法華な

り

玄義げんぎの一に云く「又衆經しゅうきように咸く云く道樹に師の実智始めて満じ

道樹たてを起て始めて権智ごんちを施す今の經は師の権実・道樹の前に在て

久久すでに已に満すと明かす、諸經しよきように明かす二乗にじようの弟子は実智じつちに入

ることを得ず亦権智またごんちを施すこと能わず、今の經に明かす弟子でしの入

実は甚はなはだだ久し、亦先またより解げして権を行ず、又衆經しゅうきようは尚道樹なおの

前の師と弟子でしとの近近ごんごんの権実を論ぜず況や復た遠遠いわんやまたをや、今の經

は道樹ごんじつの前の権実長遠ごんじつちようおんなることを明かす補処ふしよ世界せかいを数うるに知

らず況いわんやそや其の塵数じんじゆをや」經いわに云く「昔未いまだ曾かつて説とざる所今皆いまみなまさ當に

聞くことを得べしう慇懃おんこんに称讃しょうさんすること良まことに所以ゆえん有るなり、当まさに知るべし此の経は諸経しよきように異なることを「釈籤しゃくせんの一に云く「二乗猶小果に住す故に不入と云う豈あにに能く他を化せんや、故ゆえに権を施ほどこさず、次に今経こんきようを明あきらかす満願等の如き先に已すでに実に入る説法第一なり、故ゆえに先より解げして権を行ずることを「弘ぐの七に云く「過去に種を下すは現在げんざいに重ねて聞いて成熟じようじゆくの益を得、未だ曾て種を下さざるは現在げんざいに種を成じ未来みらいに方に益まさす故に三世さんぜの益皆法輪みなほうりんに因よる」と藥草喻品やくそうゆほんに云く「汝等なんじが所行しよぎようは是れ菩薩ぼさつの道なり漸漸ぜんぜんに修学しゅうがくして悉く当ことごとに成仏じようぶつすべし」云云、記の一に云く「一時いちじ・一説いちねん・一念いちねんの中・三世さんぜ・九世・種熟脱しゆじゆくだつの三あり」弟子品でしに云く「諸もろの比丘びく諦あきらかに聴け仏子所行ぶつししよぎようの道善みちよく方便ほうべんを学まなぶが故ゆえに思議しぎすることを得可うべからず衆の小法ねがを樂しこつて而して大智おそを畏るること

を知る、是の故に諸の菩薩・声聞・縁覺と作る無数の方便を以
て諸の衆生の類を化す」云云、又云く「内に菩薩の行を秘し外
に是れ声聞なることを現す小欲にして生死を厭えども実には
自ら仏土を淨む、衆に三毒有ることを示し又邪見の相を現ず我が
弟子是くの如く方便して衆生を度す」云云、方便品に云く「大乘
に入る為れ本なり」云云、分別功德品に云く「願わくば我未來に
於て長寿を以て衆生を度せん」云云、玄義の七に云く「但本極
の法身・微妙深遠なり仏若し説かずんば弥勒尚暗し何に況や下地
をや何に況や凡夫をや」云云、伝教大師の秀句の下に云く「浅
は易し深は難し釈迦の所判なり浅を去つて深に就くは丈夫の心
なり天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦に敷揚し
觀山の一家は天台に相承して法華宗を助けて日本に弘通す」云

云、又云く「つし謹みて法華經・法師品の偈を案ずるに云くいわ藥王今汝に告ぐ我か所説の諸經而も此の經の中に於て法華最も第一なりだいいち」
已上經文当に知るべし斯の法華經は諸經の中の最為第一なり」と、
しゃかせそん釈迦世尊宗を立つるの言は法華を極と為す金口の校量なり深く
しんじゅ信受す可きか。

◆八七 一代五時繼図 658p

だいろん大論に云くいわ百卷竜樹菩薩の造如来滅後七百年出世の人なり十九出家・三十成道・八十涅槃

ねはんぎよう涅槃經に云く八十入滅い阿含經亦此の説有り云云、

兼 説処は中天竺寂滅道場菩提樹下
ごんだいじよう権大乘

別教

六十卷

旧訳仏陀跋多

羅三蔵の訳

三七日

八十卷

新訳実叉難陀

三蔵の訳

華嚴經

円教

四十卷

乳味

結經は梵網經

他受用報身如来

旧訳の説

教主

毘盧遮那如来

新訳の説

所居の土は仮立実報土又は蓮華蔵世界と云う

愚法二乗經

一に小乗教

一切の小乗經

を撰す

空

華嚴宗五教を立つ

二に大乘始教

方等部の經を撰す

不空

三に大乘終教

般若・涅槃經を撰す

さんじょう

三乗の中の絶言の理を説く

四に頓教

一切經中の頓悟成仏の

とんきょう

いっさいきょう

とんごじょうぶつ

旨を撰す

むね
せつ

別教一乗

五に円教

華嚴・法華を撰す

えんきょう

ほっけ

せつ

馬鳴菩薩

起信論を造る

竜樹菩薩

十住毘婆沙論を造る

天親菩薩

十地論を造る

杜順和尚

終南山の住文殊の化身云云

天竺

てんじく

智儼法師 ちこん ほんし

唐土 もろこし

法蔵大師 ほうそう だいいし

至相寺の住

京兆涼山大華寺の住「又賢首 けんしゅ

大師 だいいしと云い又康蔵大師 だいいしと云う」

祖師 そし

澄観法師 ちようかん ほんし

「清涼 せいりよう 山大華寺の住又清涼 せいりよう

国師と云う」

審祥大和尚 しんじよう わじよう

「大安寺 だいいあんじの住新羅国 しらぎの人」

日本最初伝 にほん さいししよ

慈訓小僧都 そうず

明哲律師 りっし

日本 にほん

良弁僧正 りょうべん そうじよう

東大寺 とうだいじの本願 ほんがん

等定大僧都 そうず

道雄僧都 どうゆう そうず

海印寺の住

一向小乗 いつこうしょうじょう

波羅奈国・鹿野園 はらな ろくやおん

一に増一阿含 あこん

人天の因果を明す にんてん いんが

十二年説

二に中阿含 あこん

真寂の深義を明す じんぎ

阿含經 あこんきょう

酪味 らくみ

四阿含經 あこんきょう

三に雜阿含 あこん

諸の禪定を明す もろもろぜんじょう

但三蔵教 さんぞう

四に長阿含 あこん

諸の外道を破す もろもろげどう は

結經は遺教經 けつきょう ゆいきょうきょう

有部顯宗六百頌 うぶ

天竺の人なり てんじく

俱舍宗 くしやしゅう

俱舍論「三十卷・三乘法を明かす」 くしや さんじょう あきら

世親菩薩の せじんぼさつ

造によらいめつこ如来滅後九百年の人なり

新しんやく訳

經部密宗十万頌・天てんじんほさつ親菩薩の造てんじく天竺には婆藪畔豆と

云うなり

玄げんじょうさんそう奘三蔵

旧くやく訳

光ほつし法師

宝ほつし法師

唐もろこし土

神泰

円暉

祖そ師し

惠暉

道麟

善報

日本にほん

伝灯満位の勝貴「延暦廿五年法相宗に付ほうそうしゅう

す私ひそかに云いわく余抄に云う延暦十三年官付云云」

訶梨跋摩三蔵・天竺てんじくの人こゝ此こゝに師子鎧ししよろいと云う

成実宗じょうじつ

成実論十六卷「二十七賢聖けんせいの位を明す二百二品」

如来滅後九百年にょらいめつご

羅什三蔵らじゅうさんぞう

唐土もろこし

僧叡

智蔵・開善寺の僧ちぞう

祖そ師し

日本にほん

伝灯満位の賢融えんりやく延暦二十五年三論さんろん宗東大寺しゅうどうだいじ

僧に付す余抄に云くいわ延暦えんりやく十三年云云

律宗

如来成道にょらいじょうどう

五年の後律を説く、僧祇律これ之を説く、・或はある

十二年の後須提によつて戒律を制す四分律これ之を説く

一 曇無徳部

二 薩婆あるば多部

五部を明あきらかす

三 弥沙塞部

四 婆廬富羅部

五 迦葉かしょう遺部

五篇七聚を立つ

一には波羅夷

二には僧残

一には波羅夷篇

三には偷蘭遮

二には僧伽婆尸沙篇

四には波逸提

三には波逸提篇

五には波羅提提舍尼はらだい

四には波羅提提舍尼篇はらだい

六には突吉羅

五には突吉羅篇

七には惡說

☆多三藏さんぞう

天竺てんじく

仏滅後三百年ぶつめつごさん

祖師そし

道宣律師どうせんりつし

唐土もろこし

弟子鑒真和尚でし がんじんわじょう

日本にほん

鑒真和尚は唐土の人なり、東大寺戒壇院をとうだいじ

立てし人なり。

藏通・別円そうつう べつえん

十六年說時不定せつじふじょう

対

方等部ほうとうぶ

權大乘ごんだいじょう

生蘇味 しょうそみ

けつきよう

ようらく

結経は瓔珞経

解深密経 げじんみつ

又有相宗と云う ゆうそう

ほうそうしゅう

法相宗

瑜伽論百卷弥勒説無著筆 ゆいが みろく むちやく

唯識論 ゆいしきろん

有初 又

「惣じては一切経に依り別し いっさいきよう

有相教とも云う ゆうそう

ては六経十一部に依る」 よ

三時教を立つ さんじきよう

空昔 又無相 むそう

教とも云う

中今 又中道 ちゅうどう

教とも云う

弥勒菩薩 みろくぼさつ

如来滅後九百年に出づ にょらいめつご

祖そ
師し

天竺てんじく

唐土もろこし

無著むちやく菩薩ぼさつ

世親せじん菩薩ぼさつ

護法ごほう菩薩ぼさつ

戒賢かいけん論師ろんし

玄奘げんじょう三蔵さんそう

慈恩じおん大師だいし

智周ちしゅう法師ほっし

智鳳

義淵

空晴

摩訶まか陀だ国こくの大那爛陀寺の人

弟子でし四人

☆法師ほっし

尚法師ほっし

光法師ほっし

基法師ほっし

日本 にほん

真喜

善議 ぜんぎ

勤操 こんそう

觀經一卷 かんきょう

・良耶舎の訳

宋の代

雙觀經二卷 そうかんきょう

・康僧鎧の訳 よろい

魏の代

浄土宗 じょうどしゅう

阿弥陀經一卷 あみだ

鳩摩羅什の訳 くまらじゅう

後秦代 こうしん

浄土論一卷 じょうど
天親菩薩の造 菩提流支三蔵の訳 天竺の人なり てんじんぼさつ ぼだいゐるしさんそう てんじく

天竺 てんじく

菩提流支三蔵 ぼだいゐるしさんそう

曇鸞法師 どんらんほっし

難行・易行を立てて一切の なんぎよう いぎよう いっさい

経論を撰するなり きょうろん せつ

道綽禪師 どうしゆくぜん

聖道・浄土の二門を立てて しょうどう じょうど

一切の経論を撰するなり いっさい きょうろん せつ

祖師そし

唐土もろこし

善導和尚ぜんどうわじょう

正雜しょうぞう

の二行を立てて一切いっさい

經論きょうろん

を撰せんするなり

懷感禪師えかんぜん

群疑うたがい

論を造つて一代いちだいの

聖教しょうきょう

を判ずるなり

小乘法師ほっし

已上、五人唐土もろこしの人なり

日本にほん

法然上人ほうねんしょうにん

選せん集ちやく

「一卷」

「捨閉しゃへい

閣かく拋ほう

入開入飯にゅうかいにっぺん

禪宗ぜんしゅう

如來禪にょらいぜん

楞伽經りやうがきやう

・金剛般若經等こんごうはんにやきやう

に依る、又は教

禪とも云う

祖師そし禪ぜん

教外別伝きやうげべつでん

・不立文字云云ふりゅうもんじ

西天さいてんの二十八祖

別紙これあに之有り

祖そ師し

菩提ぼだい達磨だるま禪師ぜんぜん

天竺てんじくの人なり

惠ぜ可ん禪師

僧☆

東土とうど六祖

道信

弘忍

惠能

真言宗しんこんしゅう

胎藏界たいざう

七百余尊よそん

金剛界こんこう

五百余尊よそん

大日經だいにちきよう

〔六卷卅一品〕

善無畏三蔵ぜんむいさんそうの訳

〔開元かいげん四年中天竺てんじくの人なり

り

供養法くようの巻を加えて七卷なり、一卷・五品ごぼん

金剛頂經こんこうちようきよう

〔三卷・一品〕

金剛智三蔵こんこうちさんそうの訳

〔開元かいげん八年南天竺てんじくの人

なり」

蘇悉地經そしつちきよう

菩提心論ぼだいしんろん

「三卷卅四品」

善無畏三蔵ぜんむいさんそうの訳

「一卷七丁」

竜猛菩薩りゅうもうぼさつの造つく不空ふくうの訳・或あるは不空ふくうの造つく

大日如来だいにちによらい

金剛薩捶こんごう

竜猛菩薩りゅうもうぼさつ

天竺てんじく

竜智

已上天竺てんじくの人なり

善無畏三蔵ぜんむいさんそう

金剛智こんごうち

不空ふくう

唐土もろこし

恵果

弘法こうぼう

又空海くうかいと云う

祖師そし

の
結^{けつじゅう}
集

日本^{にほん}

範俊 義範 成尊 仁海 元杲 淳祐 聖宝 源仁^{げんじん} 真雅^{しんが}

一に俎多覽蔵
〔乳味経蔵〕
阿難^{あなん}

二に毘奈耶蔵
〔酪味律蔵〕
優婆利^{うぱり}

迦旃延 かせんねん

五藏

三に阿毘達磨藏 あびだるま「生蘇味論藏」 しょうそみ

四に般若波羅蜜多藏 はんにやはらみつ「熟蘇味文殊」 じゅくそみもんじゅ

華嚴・方等・般若・法華・涅槃經を撰するなり けごん ほうとう はんによ ほうけ ねはんぎよう

五に陀羅尼藏 だらにぞう「醍醐味・金剛藏」 だいごみ こんこう

大日經・金剛頂經・蘇悉地經を撰す だいにちきよう こんこうちようきよう そしつちきよう

弘法大師・義立 こうぼうだいし

一異生羝羊 ていよう

住心 ほんぶあくにん「凡夫惡人」

心 ほんぶぜんにん「凡夫善人」

二愚童持齋住 ぐどうじさい

十住心 じゅうじゅう

三嬰童無畏

住心 げどう「外道」

四唯蘊無我住ゆいおんむが

心「しょうもん声聞」

五拔業因種住ごういん

心「えんかく緣覺」

理趣般若經「はんにやきよう一卷」惣じて八部の般若有り 六他緣

だいじよう

大乘住心「ほうそうしゆう法相宗」

大品般若「だいほんほんにや四十卷」羅什三蔵の訳「くやく旧訳」

七覺心不生かくしんふしよう

住心「さんろんしゆう三論宗」

大般若經「はんにやきよう六百卷」玄奘三蔵の訳「しんやく新訳」 八

如実一道住心「ほつけしゆう法華宗」

般若部はんにやぶ通別円つうべつえん

九極無自性住むじせい

心「けこんしゆう華嚴宗」

帶

十秘密莊嚴住
ひみつそうこん

心「真言宗」
しんこんしゅう

権大乘
ごんだいじょう

十四年の説・或は三十年の説
ある

熟蘇味
じゆくそみ

結経は仁王経
けつきょう にんのうきょう

百論「二卷」提婆菩薩の造
だいばほさつ

中論「四卷」竜樹菩薩の造
りゅうじゅほさつ

十二門論「二卷」竜樹菩薩の造
りゅうじゅほさつ

大論を加えて四論宗とも云う。
だいろん

二蔵

一に声聞蔵
しょうもん

一に根本法論
こんぽん

二に菩薩蔵
ぼさつくそう

三転法論

二に枝末法論
しまつ

三論宗
さんろんしゅう

三に攝末歸本法論きほん

文殊もんじゆ

馬鳴めみよう

竜樹りゆうじゆ

天竺てんじく

提婆だいば

竜智

清弁しやうべん

智光ちこう

羅什らじゆう

道朗

法朗

吉蔵きちそう

「亦嘉祥大師と云う嘉祥寺の僧なり」
またかじようだいし

觀勒僧正かんろくそうじやう

百濟国の人なり
くだら

祖師そし

唐土もろこし

高麗国の人なり

日本

惠准

善議

勤操

妙法蓮華經

羅什三蔵の訳

正法華經

法護三蔵の訳

添品法華經

闍那笈多の訳

薩呌分陀梨法華

新訳

八箇年の説

実大乘

醍醐味

純円の説

結経は普賢經

曇無蜜多の訳

〔宋代〕

法華經

法華宗 ほっけしゅう

ぶつりゅうしゅう

仏立宗

てんだいしゅう

天台宗

えびよう

依憑宗

四教五時を立てて一代教を撰す しきよう いちだい

華嚴 けごん

寅時

阿含 あこん

卯時

一に三蔵教 さんぞう
諸部小乗 しよ しょうじょう
の実有の所説を撰す しよせつ

方等 ほうとう

辰時

般若 はんにや

巳時

午時

祖師そし

法華ほっけ

二に通教つうきよう

諸部の如幻即空の旨を撰すしよ だいじようなら むねをせつ

三に別教べつきよう

諸部の大乘並びに歴劫行の所説を撰すしよ だいじようなら りやつこう しよせつをせつ

四に円教えんきよう

諸部の大乘經の速疾頓成の所説を撰すしよ だいじようなら そくしつとんじよう しよせつをせつ

大覺世尊だいかくせそん

天竺てんじく

竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ

天台大師てんだいだいし

唐土もろこし

章安大師しょうあんだいし

妙樂大師みょうらくだいし

日本にほん

伝教大師でんきようだいし

一日一夜の説

涅槃經 ねはんぎょう

醍醐味 だいごみ

結經 けつきょう は 像法決疑經 そうほうけつぎきょう

師

涅槃宗の祖師 ねはんそうそし

流支師 るし

一 虎丘の岌法師 ほつし

法師 ほつし

南三

二 愛法師 ほつし

北七

四 護身の まも

法師 ほつし

三 法雲法師 ほううんほつし

〔光宅寺の僧なり〕 こうたく

五 耆闍

の法師 ほつし

二 菩提 ぼだい

一 北地

三 光統 こうず

六 北地の

もんく 文句の九に云く小をねが樂う者は小乗しょうじょうの人に非あらざるなり、乃すなわち是

近説ねがを樂う者を小と為すのみ文。

じよき 疏記の九に云く樂ぎよう小法とは久近を以て相望して小と為す文。

しゅうく 秀句の下に云くい仏滅度の後の六七百年のきよう經宗論宗 九百年の

中の法相の一宗はほつそう歴劫修行を説いて衆生を引攝いんしやうす是の故に

みけん 未顕真実なり云云。

でんぎ 傳教大師の依憑集に云く新來の真言家は則ち筆受の相承そうじやうを混

くとう 旧到の華嚴家は則ち影響えいぎやうの規模を隠し☆空の三論宗は彈呵だんかの

くつつち 屈耻を忘れて称心しょうしんの心酔しんすいを覆し、著有じやくちゆうの法相宗は僕陽ぼくやうの歸依きえを

非して青竜の判經はんぎやうを撥はつす云云。

しゅうく 秀句の下に云く誠いに願くは一乗いちじやうの君子くんし仏説ぶつせつに依憑えびやうして口伝くでんを

信しんずること莫なれ、仰あいで誠文を信じて偽会ぎえを信ずること莫なれ、

てんだいしよしゃく ほうけしゅう しょしゅう まさ むし しよでん むなしゅ
天台所釈の法華宗は諸宗に勝る寧ろ所伝を空うせんや、又云く
つし むりようぎきよう
謹みて無量義經を案ずるに云く次に方等十二部經・摩訶般若・
けこんかいこう ぼさつ りやつこうしゅぎよう せんぜつ
華嚴海空を説いて菩薩の歷劫修行を宣説す經文已上大唐の伝に云く
ほうとう ほうそうしゅう しょえ
方等十二部經とは法相宗の所依の經なり、摩訶般若とは三論宗
の所依の經なり、華嚴海空とは華嚴宗の所依の經なり俱に歷劫
しゅぎよう いま じきどう
修行を説いて未だ大直道を知らず文。
みょうらくだいし ぐけつ
妙樂大師の弘決の九に云く法華以前は猶是れ外道の弟子なり
文。

でんぎようだいし しゅご
伝教大師の守護章の上に云く妙法の外更に一句の經無し文。
ちしやうだいし じゅけつしゅう
智証大師授決集の上に云く經に大小無く理に偏円無からん
いっさい よ ぶっせつむよう
一切・人に依らば仏説無用ならん、若し然らずんば文に拠て伝う
べ おの こくおう まさ しゅう なか
可し己が父は国王に勝ると執すること莫れ、又他に劣ると謂うこ

と莫^{なか}れ、然^{しか}も家^し家の尊^{そん}勝^{しょう}・国^こ国の高^た貴^い大^{だい}小^{しょう}各^{ふん}分^{ざい}齊^{せい}有^{あり}、土^どを以^{もつ}

て金^{きん}と為^なせば家^し家に之^{これ}有^あり金^{きん}を以^{もつ}て金^{きん}と為^なせば有^う無^む処^こを異^{こと}にす、

久^く成^{じやう}の本^{ほん}・開^{かい}権^{けん}の妙^{めう}・法^ほ華^け独^{ひと}り妙^{めう}に独^{ひと}り勝^{まさ}る、強^しいて抑^{おさ}えて之^{これ}を

喪^{そう}し仏^{ぶつ}説^{せつ}を哽^{こう}塞^{そく}す如^に来^{らい}を咎^{とが}む合^あし伝^{でん}者^{しや}を非^ひすること莫^{なか}れ、又^{また}云^いく

国^{こく}国^{こく}とは五^ご味^み、家^け家^けとは四^し教^{きやう}八^{はつ}教^{きやう}なり文^{ぶん}。

天^{てん}台^{だい}の玄^{げん}義^ぎの十^{じゅう}に云^いく若^もし余^よ教^{きやう}を弘^{ひろ}むるには教^{きやう}相^{そう}を明^{あか}さざれ

ども義^ぎに於^{おい}て傷^{きず}むこと無^なし、法^ほ華^けを弘^{ひろ}むるには教^{きやう}相^{そう}を明^{あか}さざれ

ば文^{もん}義^ぎ闕^かくること有^あり、但^{ただ}聖^{せい}意^い幽^{ゆう}隱^{いん}にして教^{きやう}法^{ぽう}弥^い弥^い難^{がた}し前^{ぜん}代^{だい}の

諸^{しよ}師^し・或^{ある}は名^な匠^{じやう}に祖^そ承^{じやう}し・或^{ある}は思^しい袖^{しゆう} 衿^{きん}より出^でず阡^{せん} 陌^{はく}縦^{じゆう}横^{かう}な

りと雖^{いえど}も孰^{いず}れか是^{これ}なることを知^しること莫^なし、然^{しか}るに義^ぎ雙^{じやう}び立^たたず

理^{ふた}兩^{りやう}つながら存^{ぞん}する無^なし、若^もし深^{しん}く所^{しよ}以^{えん}有^{あり}て復^{また}修^{しゆ}多^た羅^らと合^がする

者^{しや}は録^{ろく}して之^{これ}を用^{もち}ゆ文^{ぶん}無^なく義^ぎ無^なきは信^{しん}受^{じゆ}す可^べからずと。

一、開会かいえの事

寿命品じゅりようぽんに云いわく諸もろもろの経方けいほうに依よつて好き薬草しきこうみみなことごとの色香美味しきこうみみなことごと皆悉みなことごとく

具足ぐそくするを求めて擣とう☆和合しわごうす文もん。

文句もんくの九くに云いわく経方けいほうとは即すなわち十二部経じふにぶけいなり薬草すなわは即すなわち教しよせんの所詮しよせん

の八万はちまんの法門ほうもんなり、香美味こうみみとは戒定慧かいじょうえなり、空観くうかんは擣つくが如ごとく

仮観けかんは☆うが如ごとく中観ちゅうかんは合がするが如ごとし文もん。

大経だいきやうに云いわく衆流海しゅうりゅうかいに入りて同一鹹味かんみゆえ故ゆゑに海味かいみと云いう文ぶん。 玄

の三さんに云いわく諸水しよすい・海かいに入いれば同一鹹味かんみなり、諸智しよち・如実智じつちに入いれ

ば本ほんの名字みょうじを失しすと文ぶん。

一、是諸経之王ししよけいのおうと云いう事

信解品しんげへんに云いわく並ならびに親族しんそく・国王こくおう・大臣だいじんを会えす。

文句もんくの六ろくに云いわく国王こくおうとは一切漸頓いっさいぜんとんの諸経しよきやうなり。

疏記じよきの六むに云く諸しよの小王わうわうを廢たして唯一たの王わうを立つ是かくのゆえの故ほに法華ほつを王中おうちゆうの王わうと名なく文ぶん。

一、法華ほつ已前いぜんの説せつを權けんと云う事

玄義げんぎの三さんに云く涅槃ねはんの聖しやうぎ行ぎやう品ひんに云く追いつて衆經しゆうぎやうを分別ぶんべつす故ゆえに具くに四種しやうしの四諦しだいを説せつくなり、徳王とくわう品ひんに追いつて衆經しゆうぎやうを混みす文ぶん。
釈籤しやくせんの三さんに云く涅槃ねはんに追いつて退たいなり劫かえつて更に前しよの諸味しよみを分別ぶんべつす、混みとは合会ごうかいなり法華ほつより已前いぜんの諸經しよぎやう皆混みなみす此この意いは則すなわち法華ほつの部ぶに順しゆんずるなり文ぶん。

弘くの三さんに云く彼の經けいの四教しきやう皆常住みなじやうじゆうを知る故ゆえに本意ほんいは円えんに在ありと文ぶん。
玄義げんぎの四しに云く法華ほつの意いを得る者ねはんは涅槃ねはんに於おいて次第しだいの五行ごぎやうを用もちいざるなり文ぶん。

一、常好坐禪ざぜんと云う事

安楽行品に云く亦師と同ずることを樂わす常に坐禪を好む文。
普賢經に云く専ら大乘を誦し三昧に入らず文、又云く其の
大乘經典を讀誦するもの有らば諸惡永く滅して仏惠より生ずる
なり文。

一、天台宗阿弥陀の事

弘決の二に云く諸經の讀する所多く弥陀に在り故に西方を以
て一准と為す文、私に云く此の釈・文殊説・文殊問の兩經に
依るなり、常坐三昧の下。

止觀の二に云く弥陀を唱うるは即ち是れ十方の仏を唱うる
功德と等し但専ら弥陀を以て法門の主と為す、要を擧げて之を
言わば步步・声声・念念・唯阿弥陀仏に在り文、私に云く此の釈
般舟三昧經に依るなり常行三昧の下口説☆の下。

又云く意に止観を論ぜば西方阿弥陀仏を念ず此れを去ること
じゅうまん ぶせつ

十万億仏刹と文、此の釈般舟三昧の經の文に依るなり常行
さんまい

三昧の下。

又云く陀羅尼咒を誦し三宝十仏を請じ摩訶祖持陀羅尼を思惟
いわ だらにじゅ じゅ さんぼう しょう まかそじだらに しゆい

せよ文、此の釈は方等陀羅尼經に依る半行半坐の三昧の下。
ほうとう だらに よ はんぎようはんざ さんまい

又云く三宝・七仏・釈尊・弥陀・三陀羅尼・二菩薩・聖衆
いわ さんぼう しゃくそん みだ だらに ぼさつ しょうしゅう

を礼せよ、此の釈は諸經に依る非行・非坐三昧の下。
しよきよう よ ひぎよう ひざさんまい

玄義の九に云く諸行は傍の実相を以て躰と爲し体行俱に麁な
げんぎ いわ しよきよう ぼう じっそう な たいぎようとも そ

り文、又云く諸經の方法に依る常行等の行は傍を以て体と
いわ しよきよう よ じようぎよう ぼう

爲す体行俱に麁なり文。
な たいぎようとも そ

已上四十余年の經釈
よんじゅうよねん きようしゃく

止観の二に云く別に一卷有り法華三昧と名く是れ天台大師の
しかん いわ ほん ぽっけさんまい なず こ てんだいだいし

著す所なり、世に流伝して行者之を宗ぶ、此れ則ち説☆を兼ね復別に論ぜざるなり文。

法華三昧に云く道場の中に於て好き高座を敷き法華經一部を安置し亦未だ必ず形像・舍利並に余の經典を安ずることを須いず唯法華經を置け文。

止觀の二に云く意の止觀とは普賢觀に云く専ら大乘を誦して三昧に入らず日夜六時に六根の罪を懺す、安樂行品に云く諸法に於て行ずる所無く亦不分別を行ぜざれ文。

法華經に云く乃至余經の一偈をも受けざれ文。

又云く復舍利を安ずることを須いず文。

一、天台念仏の事

止觀の六に云く見思の惑即ち是れ仏法界なりと覺して法身を

破せざるを念仏と名くと文。

止観二に云く意止観とは普賢觀に云く専ら大乘を誦し三昧に入らず日夜六時に六根の罪を懺す安樂行品に云く諸法に於て行ずる所無く亦不分別を行ぜざれ。

秀句の下に云く能化の竜女歴劫の行無し所化の衆生も亦歴劫無し文。

一、法華成仏の人数の事

二の卷舍利弗は華光如来・三の卷迦葉は光明如来・須菩提は名相如来・迦旃延は閻浮那提金光如来・目連は多摩羅跋旃檀香如来・四の卷富楼那は法明如来・陳如等の千二百は普明如来・阿難は山海慧自在通王仏羅☆羅は蹈七宝華如来・五の卷提婆達多は天王如来・摩訶波闍波堤比丘尼は一切衆生・喜見仏・

やしゆたらによ ぐそくせんまんこうそうによらい しゃからりゆうおう むすめ
耶輸陀羅女は具足千万光相如来・娑竭羅竜王の女の八歳の
りゆうによ によらい 正法華經 だいば いわ とうじ しゅうえみなりゆうによ

竜女は無照光如来の正法華經に云く当時の衆会皆竜女を見る

こつねん

忽然の間に變じて男子と成て菩薩の行を具して即ち南方無垢世界

ゆ ほうれんげ

に往き宝蓮華に坐して等正覺を成じ三十二相・八十種好普ねく

じゅつぽういつさいしゆじょう

十方一切衆生の為に妙法を演説す文。

いわ そ

又云く爾の時に娑婆世界の菩薩・声聞・天竜・八部・人と非

みなはる

人と皆遙かに彼の竜女の成仏して普ねく時の会の人天の為に法

りゆうによ

じょうぶつ

あま

にんてん

ため

を説くを見て心大いに歡喜して遙かに敬礼す文。

よんじゅうよねん

一、四十余年の諸の經論に女人を嫌う事

けこんきよう

華嚴經に云く女人は地獄の使なり能く仏の種子を断つ外面は

い わ

によん

よ

しゆし

菩薩に以て内心は夜叉の如しと文。

ぼさつ

ないしん

やしや

ごと

又云く一び女人を見れば能く眼の功德を失う縦い大蛇を見る

いわ

ひとた によん

よ

まなこ

くどく

うしな

たと

だいじや

と雖も女人を見る可からずと文。

銀色女経に云く三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも法界の

諸の女人は永く成仏の期無らんと文。

華嚴経に云く女人を見れば眼大地に墮落す何に況や犯すこと

一度せば三惡道に墮つ文。

十二仏名経に云く假使法界に遍する大悲の諸菩薩も彼の女人の

極業の障を降伏すること能わず文。

大論に云く女人を見ること一度なるすら永く輪廻の業を結ぶ、

何に況や犯すこと一度せば定んで無間獄に墮すと文。

往生礼讃に云く女人と及び根欠と二乗種とは生せず文。

大論に云く女人は惡の根本なり一たび犯せば五百生彼の

所生の処六趣の中に輪廻すと文。

けこんきよう
華嚴經に云く女人は大魔王能く一切の人を食す現在には纏縛と
ごしょう
作り後生は怨敵と為る文。

一、真言を用いざる事

でんぎようだいし
伝 教大師の依憑集の序に云く新来の真言家は則ち筆受の相承
を混す文。

あんねん

きようじぎ

いわ

てんだいしゆう

とう

けつぎ

いわ

安然の教時義の第二に云く問う天台宗の遣唐の決義に云く此

るしやなきよう

てんだい

おい

ほうとうぶ

しょう

彼の經

の中に四乗を説くを以ての故に云云、此の義云何ん答う彼の決義

いわ

じよ

ゆえ

いま

ひけん

いかん

彼の決義

けつぎ

に云く伝え聞く疏二十卷有り但未だ披見せず云云、此は是れ未だ

いわ

ごはん

いか

てんだい

ほうとう

こ

いま

しきよう

經意を知らざる誤判なり、何なれば天台第三時の方等教は四教

そうたい

きら

てんだい

ほうとう

だいにちきよう

おうぐ

おうぐ

は

相對して大を以て小を斥い円を以て偏を彈ず、今大日經は応供

しょうへんち

しゅじよう

したが

およ

はちぶ

と

は

は

は

正遍知・衆生の樂に随つて四乗の法及び八部法を説きたもう是

は一切智一味云云、若し爾らば法華と同じと謂う可し何に方等
弾斥の教に摂するや文。

広修維☆の唐決に云く問う大毘盧遮那一部七卷・薄伽梵・

如来加持広大金剛法界宮に住して一切の持金剛者の為に之を演説

す、大唐の中天竺三国の三蔵・輸婆迦羅・唐には言う善無畏と訳す、

今疑う如来の所説始め華嚴より終り涅槃に至るまで五時四教の

為に統攝せざる所無し、今・此の毘盧遮那經を以て何の部・何の

時・何の教にか之を摂せん又法華の前説とや為さん当に法華の後

説とや為さん此の義云何、答う謹みて經文を尋ぬるに方等部に

属す声聞・縁覚に被らしむるが故に不空罽索・大宝積・大集・

大方等・金光明・維摩・楞伽・思益等の經と同味なり、四教・

四仏

・四土を具す今毘盧遮那經法界宮に於て説くことを顯す、乃ち
是れ法身寂光土なり勝に従つて名を受くるなり前後説明す可し
云云。

一、法華と諸經との勝劣の事

法華經 第一

本門 第一

已今当第一なり、藥王今汝に告ぐ諸經の中に於て最も其の上に在り又云く
我が所説の諸經此の經の中に於て法華最第一なり云云

迹門 第二

涅槃經 第二
是經出世

無量義經 第三 「次に方等十二部經を説く」

華嚴經 第四

般若經 第五

蘇悉地經 第六 ざれば・或は復大般若經を転読すること七遍・或は一百遍せよ

大いにちきよう
大日経第七

いまぐつう
三国に未だ弘通せざる法門なり

ちんごこつか
一、鎮護国家の三部の事

ほけきよう
法華経

ふくうさんぞうだいいき
不空三蔵大曆に法華寺に之を置く

みつこんきよう
密厳経

とうだいいき
唐の大曆二年に護摩寺を改めて法華寺を立

ほけきよう
て中央に法華経

にんのうきよう
仁王経

きようじ
脇士に両部の大日なり

ほけきよう
法華経

すいこ
人王三十四代推古天王の御宇聖徳太子

じようみようきよう
浄名経

してんのう
四天王寺に之を置く摂津国・難波郡

しょうまん
勝鬘経

ぶつぽうさいしよ
仏法最初の寺なり

ほけきよう
法華経

かんむてんのう
人王五十代桓武天皇の御宇伝教大師

こんこうみようきよう
金光明経

ひえいざんえんりやくじしかん
比叡山延暦寺止観院に之を置かる

にんのうきよう
仁王経

とくどしや
年分得度者二人
一人は遮那業

一人は止観業

だいにちきよう
大日経

五十四代仁明天王の御宇

こんごうちきよう
金剛頂経

慈覚大師比叡山東塔の西惣持院に之を置

かる

そしつちきよう
蘇悉地経

御本尊は大日如来金蘇二疏十四卷之を安置

せらる

ひけきよう
一、悲華経の五百の大願等の事並びに示現等

だいいち
第一百一十三願に云く我來世穢惡土の中に於て當に作仏すること
すなわ じゅつぼうじようど ひんずい しゅじよう
を得べし則ち十方浄土の擯出の衆生を集めて我當に之を度すべ

しと文。

だいいち
第一百一十四願に云く我無始より來かた積集せる諸の大善根

いちぶん
一分我が身に留めず悉く衆生に施さんと文。

第一だいいち百十五願いに云く十法界ほっかいの諸もろの衆生しゅじょう無始むより来このかた造作そうさくする所の極重五無間等むげんの諸罪しよざい合あして我が一人ひとりの罪つみと為なす大地獄等だいじごくに入はいつて大悲代だいひつて苦くるしみを受けんと文。

悲華經ひけきやうに云く我が滅度めつどの後末法まつぼうの中に於おいて大明神だいまようじんと現げんじて広しゅじようく衆生しゅじようを度せんと文。

涅槃經ねはんぎやうの二ふたに云く爾その時に如来にょらい・棺かんの中より手を出でして阿難あなんを招まねき密ひそかに言いく汝なんじ悲泣ひなすること勿なれ我還かえつて復閻浮またえんぶに生なじて大明神だいまようじんと現げんじて広しゅじようく衆生しゅじようを度せんと文。

又また云いく汝なんじ等悲泣ひなすること莫なれ遂すなはに瞻部州せんぶしゅうに到いたつて衆生しゅじようを度せしんが為ための故ゆゑに大明神だいまようじんと示現じげんせんと文。

悲華經ひけきやうに云く第五百願いに我来世穢惡土らいせえあくどの中に於おいて大明神だいまようじんと現げんじて当まさに衆生しゅじようを度すべし文。

大隅正八幡しょうはちまんの石の銘に云いわく昔りょうじゅうせん靈鷲山あに在あつて妙法華經みょうほけきょうを説

く衆生しゅじょうを度せんが為ゆえの故ゆえに大菩薩ぼさつと示現じげんすと文。

行教ぎょうきょう和尚しやうの夢ゆめの記きに云いわく阿弥陀三尊あみださんそん

延暦二十三年甲申えんりやく きのえさる春、伝でん教大師ぎょうだいし渡海ぶかいの願がんを遂げんが為ために

筑前宇佐ちくぜんうさの神宮寺じんぐうじに向むつて自らみづか法華經ほけきょうを講こうず、即すなわち託宣たくせんして云いわく

我此わうせいの法音ほうおんを聞きかずして久ひさしく歳年さいねんを歴へたり幸わじょうに和尚ちぐうに値遇ちぐうして

正教せいきょうを聞きくことを得えて至誠しじきに隨喜なんす何なんぞ徳とくを謝あやまするに足たりらん

苟いやしくも我われが所持しよじの法衣ほうえ有あり即すなわち託宣たくせんの主斎さいでん殿でんを開ひらいて手てに紫むらの

袈裟けさ一いつを捧ささげて和尚わじょうに上ある、大悲力たいまつの故ゆえに幸ゆきに納受のうじゆを垂たれたまへ、

是この時禰宜ねぎ・祝等はふりとう各各これ之これを隨喜ずいきす元來か此こくの如ごときの奇事きじ見みず聞きか

ざるかなと、彼ほどこの施ほどこす所ほどこの法衣ほうえは山王院さんのういんに在あり文。

元慶元年丁酉十一月十三日がんねん こんだいぐうじ権大宮司ふじわら藤原実元さねもと女むすめ七歳しちさいにして

託宣たくせんして云いわく我にほんこく日本國をもを持ちて大明神だいまようじんと示現しげんす本こ躰しやくは是これれ釈迦しやく如来によういなり。

延喜二年四月二日二歲計ばかりの小兒しょうにに託宣たくせんして云いわく我むりようこうよ無量劫むりようこうよ自みづかり以來いらい度がたし難しゆじようき衆生きようけを教化みどす未度しゆじようの衆生ための爲あに此あの中に在あつて大菩薩ぼさつと示現しげんすと文。

一、北野の天神てんじん法華經ほけきように歸かへりして真言等しんごんを用もちいざる事

天神てんじんの託宣たくせんに云いわく吾えんしゆう円宗ほんもんの法門おひに於いまて未いだ心しんに飽あかず仍よつて遠忌追善おんきついぜんに當あたり須すべからく密壇みつだんを改あらためて法華八講ほっけを修しゆうすべきなり、所以ゆえんに曼陀羅供まんだらくを改あらためて法華八講ほっけを始め吉祥院きちじようの八講はっかうと号なづす是これなり、彼の院てんじんは北野天神ほくしんの御旧跡きゆうせきなり。

一、賀茂大明神だいまようじん法華ほっけを信しんずる事

一条院おんときの御時年代記これあに之有あり

恵心の僧都加茂社に七箇日参籠して出離生死の道は何れの經にか付く可きと祈誠有れば、示現して云く釈迦の説教は一乘にとどまり諸仏の成道は妙法に在り菩薩の六度は蓮華に在り二乗の作仏は此の經に在り文。

伝 教大師加茂大明神に参詣して法華經を講ず甲冑をぬいで自ら布施し給ひ畢んぬ。

文句の十に云く得聞是經不老不死とは此れ須らく觀解すべし不老は是れ樂・不死は是れ常・此の經を聞いて常樂の解を得文。

涅槃經の十三に云く是の諸の大乗方等經典は復無量の功德を成就すと雖も是の經に比せんと欲す喩と為ることを得ず百倍千

倍百千万億倍乃至算數譬喩も及ぶこと能わざる所なり、善男子譬えば牛より乳を出し乳より酪を出し酪より生蘇を出し生蘇より

熟蘇じゅくそを出し熟蘇じゅくそより醍醐だいごを出し醍醐だいご最上さいじょうなり、若し服もすること

有る者あは衆病しゅうびょう皆除みなく所有しやうの諸藥しやく悉ことごとく其の中そに入るが如ごとし、

善男子・仏も亦是またくの如し仏より十二部經しふししやうを出生しふつし十二部經しふつよ

り修多羅しゆたらを出し修多羅しゆたらより方等經ほうとうを出し方等ほうとうより般若波羅蜜はんにやはらみつを出

し般若波羅蜜はんにやはらみつより大涅槃ねはんを出す猶いまだ醍醐なのだいごの如ごとし、醍醐だいごと言うは

仏性ぶつしょうを喩たとう仏性ぶつしょうとは即すなわち是これ如来にょらいなり文。

一、金剛峯寺こんごう建立こんりゅう修業緣記しゆぎやうえんきに云いわく、吾われ入定にゅうじやうの間・知足天ちそくてんに

往ゆいて慈尊御前じそんおんまえに参仕さんしすること五十六億七千余歳じそんの後慈尊下生じそんの

時とき必ず随從ずいじゅうして吾わが旧跡きゅうせきを見る可べし此の峯・等閑とうかんにすること

勿なけれれと文。

一、弘決くけつに云いわく若もし衆生しゆじやう・生死しやうじを出いでず仏乘ぶつじやうを慕したわずと知らば

魔・是この人に於おいて猶なお親想おやおもいを生なずと文。

五百問論に云く大千界塵数の仏を殺すは其の罪尚輕し、此の經を毀謗すれば罪彼より多し永く地獄に入つて出期有ること無からん、読誦の者を毀眚する亦復是くの如し文。

一、広宣流布す可き法華の事

傳教大師の守護章に云く正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乘の機今正しく是れ其の時なり何を以て知ることを得ん安樂行品に云く末世法滅時と文。

秀句の下に云く代を語れば則ち像の終り末の初め地を尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原ぬれば則ち五濁の生鬭諍の時なり、經に云く如来の現在すら猶怨嫉多し況や滅度の後をや、此の言良に所以有るなり文。

道暹和尚の輔正記に云く法華の教興れば權教即ち廢す日出れ

ば星隠れ功なるを見て拙を知る文。

法華經の安樂行品に云く一切世間怨多くして信じ難し文。

薬王品に云く我滅度の後・後の五百歳の中・閻浮提に広宣流布

して断絶せしむること無けん文。

勧発品に云く我今神通力を以ての故に是の經を守護して如来

滅後閻浮提の内に於て広く流布せしめて断絶せざらしめんと文。

文句の一に云く但当時大利益を獲るのみに非ず後・五百歳遠く

妙道に沾わんと文。

一乗要決に云く日本一州・円機純一・朝野遠近・同く一乗に

歸し緇素貴賤悉く成仏を期す、安然の広釈に云く彼の天竺国に

は外道有つて仏道を信ぜず亦小乗有つて大乘を許さず、其の

大唐国には道法有つて仏法を許さず亦小乗有つて大乘を許さ

ず、我が日本国には皆大乘を信じて一人として成仏を願わざる
こと有ること無し、瑜伽論に云く東方に小国有つて唯大乘の機
のみ有り豈我が国に非ずや文。

一、不謗人法の事

安樂行品に云く人及び經典の過を説くことを樂わざれ亦諸余
の法師を輕慢せざれ文。

止觀の十に云く夫れ仏説に兩説あり一に撰・二に折・
安樂行の長短を称ぜざるが如き是れ撰の義なり、大經の刀杖
を執持し乃至首を斬る是れ折の義なり、与奪途を殊にすと雖も
俱に利益せしむ文。

弘決の十に云く夫れ仏法兩説等は大經の執持刀杖等は第三
に云く善男子正法を護持する者五戒を受けず威儀を修せず乃至

下の文は仙預國王等の文なり文。

文句の八に云く大經には偏に折伏を論じ一子地に住す何ぞ
曾て摂受無からん、此の經には偏に摂受を明せども頭七分に
破る折伏無きに非ず、各各一端を挙げて時に適うのみ文。

顯戒論の中に云く論じて曰く持品の上位は四行を用いず安樂の
下位は必ず四行を修す摩訶薩の言定んで上下に通ずと文。

文句の八に云く持品は八万の大士忍力成ずる者・此の土に弘經
す新得記の者は他土に弘經す安樂行の一品文。

疏記の八に云く持品は即ち是れ惡世の方軌・安樂行は即ち
是れ始行の方軌なり故に住忍辱地等と云う、安樂行品に云く
他人及び經典の過を説かざれ、他人の好惡長短を説かざれと文。

一、念仏の一切衆生の往生せざる事六道輪廻の事

善導ぜんどう和尚わじょうの玄義げんぎ分に云いわく問いうて曰いわく未審定散いぶかしじょうさんの二善出いでて

何いれの文ぶんにか在ある今既すでに教備そなわつて虚むしからず何いれの機きか受うくるこ

とを得える、答こたえて曰いわく解とけるに二義有ふたぎあり一ひとには謗法ほうぼうと無信むしん八難はなん

及および非人ひにんと此等これらは受うけざるなり斯これ乃すなわち朽林頑石きゅうりんがんせき生潤しょうじゆんの期有ある

可べからず此等これらの衆生しゆじやうは必じず受化じゆけの義無ぎなし、斯これを除のいて已外いげは

一い心に信しん樂ぎして求もとめて往生おうじやうを願がんずれば上かみ一形いっけいを尽つくし下しもも十念じゆん

を収おさむ仏ぶつの願力がんりきに乗のじて皆往みなかざると云いうこと莫なし文ぶん。

往生おうじやう礼讚らいさんに云いわく女人にょにんと及および根欠こんけつと二乗種にじやうとは生なぜずと文ぶん。

一、八難はなん処ところの事こと

弘決くけつの四よに云いわく北州おほしゅうと及および三惡さんあくに長寿天ちやうじゆと並ならびに世智弁聰せちべんしやうと

仏ぶつ前ぜん仏後ぶつごと・諸根不具しよこんふぐを加くう、是これを八難はなんと為なすと文ぶん。

善導ぜんどうの遺言ゆいごんに云いわく我われ・毎日阿弥陀經六十卷まいにちあみだ・念仏六万返ねんぶつ・懈怠けたい

無く三衣は身の皮の如く瓶鉢は両眼の如く諸の禁戒を持ち一戒をも犯さず未来の弟子も亦然り、設い念仏すと雖も戒を持たざる者は往生即ち得難し、譬えば小舟に大石を載せ大惡風に向つて去るが如し、設い本願の船有りと雖も破戒の大石重きが故に岸に就くこと万が一なり文。

観念法門經に云く酒肉五辛誓つて發願して手に捉らざれ口に喫らわざれ若し此の語に違せば即ち身口俱に惡瘡著かんと願せよ文。

法然上人の起請文に云く酒肉五辛を服して念仏を申さば予が門弟に非ずと文。

観念法門經に云く戒を持ちて西方弥陀を思念せよと文。

無量壽經に云く三心を具する者は必ず彼の國に生ずと文。

善導ぜんどうの釈いわに云く若し一心いっしんも少ければ即すなわち生ずることを得ずと明あきらかに知んぬ一少こは是れ更に不可ふかなることを、茲ここに因よつて極樂ごくらくに生はぜんと欲ほするの人は全く三心を具足ぐそくす可べきなり。

がつそうきよう

いわ

まっぼう

しゅじよう

月蔵經がつそうきように云く我が末法まつぼうの時の中の億億の衆生しゅじよう行を起し行を

しゅう

いま

とうこん

まつぼう

げん

こ

修すとも未だ一人も得る者有らず、当今は末法まつぼうなり現げんに是れ

こじよくあくせ

ただじようど

いちもん

べ

五濁惡世ごじよくあくせなり唯淨土ただじようどの一門いちもんのみ有つて通入べす可べきの路なり文。

ゆいきようきよう

いわ

じようかい

やす

あんち

じんみん

遺教經ゆいきようきように云く淨戒じようかいを持つ者は販賣貿易はんばいぎやくし田宅でんたくを安置あんちし人民じんみん

ぬ

びちくしよう

いっさい

しゅじきおよ

もろもろ

みな

奴婢ぬ畜生びちくしようを畜養ちくようすることを得ざれ一切いっさいの種植しゅじき及び諸もろもろの財宝ざいほう・皆みな

まさ

おんり

かきよう

さけ

ごと

そうもく

ざんぱつ

こんどくつち

当に遠離まさすること火坑おんりを避さけるが如ごとくすべし草木そうもくを斬伐ざんぱつし墾土こんどくつち掘地

することを得ざれ文。

ぜんどうわじよう

しよしゃく

かenneんほうもん

しゆにくごしん

えきよう

善導ぜんどう和尚わじようの所釈しよしゃくの觀念法門經かenneんほうもんの酒肉五辛しゆにくごしんを禁ずる事の依經えきようを

むりよう

よ

かんきよう

よ

いわば、無量壽經むりようじよう一に依り二卷十六觀經かんきよう二に依り一卷・四紙の

阿あ彌み陀だ經きやう三さんに依より一卷いっけん般はん舟じゆ三さん昧まい四しに依より十じゆ往わう生じやう經きやう五ごに依より一卷いっけん淨じやう土ど三さん昧まい經きやう六りくに依よる一卷いっけん

雙そう觀かん經きやうの下げに云いく無む智ちの人の中ちゆうにして此この經きやうを説とかざれ文ぶん。

一、觀かん經きやうと法ほ華け經きやうとの説せ時じ各かく別べつの事こと

善ぜん導どう和わ尚じやうの疏しよの四しに云いく仏ぶつ・彼かの經きやうを説ときたまいし時とき・処べつ別じ時じ

別べつ・教きやう別べつ對たい機き別べつ・利り益やく別べつなり又また彼かの經きやうを説ときたもう時ときは即すなち

觀かん經きやう・彌み陀だ經きやう等とうを説とき給たまう時ときに非あらず文ぶん。

阿あ彌み陀だ經きやうに云いく況いわんや三さん惡あく道どう無むし文ぶん、無さん三さん惡あくと説とくと雖いえども修し羅ら・

人にん天てん之これ有あり。

四し十八じふはち願がんの第だい一いっに云いく無さん三さん惡あく・設もし我われ佛ぶつを得えんに国くにに地じ獄ごく・餓が鬼き

・畜ちく生しやう有あらば正しやう覺かくを取とらじ。

第だい二にの願がんに云いく三さん惡あく道どうに更さらへず極ごく樂らくに設もし我われ佛ぶつを得えるも十じゆ方ぽうの無む量りやう

不可思議ふかしぎの諸三惡道しよさんあくどうには正覺しょうかくを取らじ文。

第三十五の願いわに云く聞名転女人 往生せざる事設もし我われ仏ほとけを得えんに十方じゅうぽうの無量むりよう

不可思議ふかしぎの諸仏しよぶつの世界せかいに其それ女人にょにん有あて我われが名号みょうごうを聞きいて歡喜かんき

信しん樂ぎして菩提心ぼだいしんを發おこして女身えんおを厭惡えんおせん壽じゅうじゅう終またの後復また女像にょざうと

為ならば正覺しょうかくを取らじ文。

一、黒衣こくい並びに平念珠地獄ねんじゆじごくに墮おつ可べき事

法鼓經ほつこきように云くいく黒衣こくいの謗法ぼうぼうなる必ず地獄じごくに墮だす文。

勢至經せいしきんに云くいく平形ひらがたの念珠ねんじゆを以もゆる者こは此これは是これ外道げどうの弟子でしな

り我われが弟子でしに非あらずぶつし仏子ぶつし我われが遺弟ゆいてい必ず円形えんじゆの念珠ねんじゆを用もちゆ可べし次第しだいを

超越ちょうだする者もうこは妄語つみの罪よに因よつて必ず地獄じごくに墮だせん文。

一、天台てんだいの念仏ねんぶつの事

一 大意たいい

一

常坐三昧さんまいもんじゅ一文殊説経文もんじゅ殊問經に依るよ

二 釈名

一 發大心

二

本尊は阿弥陀はんじゅさんまい
常行三昧一般舟三昧經に依るよ

三 躰相

二

修大行しゅうだいぎょう

四種三昧ししゅざんまい

三

本尊は別有
半行半坐三昧一ほうとう
方等經法華經に依るよ

止觀十章者しかん

四 摂法えつぽう

五略者

三

感大果

四

本尊は觀音
非行・非坐三昧一説經・説善・説惡・説無記

五 偏円へんえん

四

裂大網

右四種三昧ししゅざんまいの次ついででは先段に之これを注す

六 方便ほうべん

五

歸大処

七 正觀

八 果報かほう

九 起教ききょう

十 指歸

止觀しがんの七に云くいわ若し四種三昧修習ししゅざんまいしゅうしゅうの方便ほうべんは通じて上に説くが
如しごと、唯法華懺法ただほっけせんぼうのみ別して六時五悔げに約して重ねて方便ほうべんを作す
今五悔げに就ついて其その位相を明す文。

弘決ぐけつの七に云くいわ四種三昧は通じて二十五法を用いて通もちの方便ほうべんと
為すな、若し法華ほっけを行ずるには別して五悔げを加う余行よぎょうに通ぜず文。

第七の正修止觀せいしゅうしがんとは止の五に云くいわ前の六重は修多羅しゅたらに依よつて
以て妙解みょうげを開き今は妙解みょうげに依よつて以て正行しょうぎょうを立つ文。

十疑うたがいの第四に云くいわ釈迦大師一代の說法處處せっぽうしよしよの聖教しょうきょうに唯ただ
衆生しゅじょう心を專もっぱらにして偏ひとえに阿弥陀仏あみだぶつを念じて西方極樂世界さいほうごくらくせかいに生ぜん

ことを求めよと勧めたまえり文。

七 疑うたがいに云いわく又聞きこく西国の伝でんに云いわく三さんりの菩薩ぼさつ有り一いつを無む著ちやくと名なけ二にを世親せじんと名なけ三さんを獅子ししかく覺かくと名なく文ぶん。

八 疑うたがいに云いわく雜集論ざしつろんに云いわく若もし安樂國土あんらくこくどに生なぜんと願ねがわば即すなわち往生おうじようを得える等文どうぶん。

往生を得る等文。

一、天台御臨終の事てんだい りんじゅう

止觀しかんの一いつに云いわく安禪あんぜんとして化くわす位五品ごほんに居こす文ぶん。

弘決くけつの一いつに云いわく安禪あんぜんとして化くわす位五品ごほんに居こす等どうとは此これ臨終りんじゅう

の行位ぎやうゐを出いすなり、禪定ぜんじようを出いでずして端坐たんざして滅めつを取る故ゆゑに

安禪あんぜんとして化くわすと云いう文ぶん、又云いく法華ほつげと觀無量壽むりやうじゆの二部ふたへの經題きやうだい

を唱となえしむ文ぶん、又云いく香湯かうとうを索もとめて口くちを漱すすぎ竟おわつて十如じしよ・四不生ふしよ

・十法界ほっかい・四教しきやう・三觀さんかん・四悉しした・四諦しだい・十二緣じふにゑんを説とくくに一一いついつの法門ほうもん

・一切いっさいの法ほつを撰せんす、吾今さいこ最後さいごに觀かんを策はげまし玄げんを談だんず最後さいご善寂ぜんじやくなり

○跏趺かふして三宝さんぼうの名なを唱となえて三昧さんまいに入るいるが如ごとし即すなわち其その年十一
月二十四日ひつじ未ひつじの時・端坐たんざして滅めつに入りたもう文。

又い云わく大師だいし生存しんぐうに常に兜率とそつに生なりぜん事を願ねがう臨終りんじゅうに乃すなわち觀音かんのん
来迎らいごうすと云いう、当まさに知るべし物ものに軌のつとり機きに随したがい縁えんに順したがじて化くわを
設もうく一准いちじゆんなる可べからざることを文、又云いわく汝なんじ善根ぜんこんを種ううるに
懶ものうくして他の功德くどくを問めくらう盲めくらの乳にを問つまずい蹶つまずきたる者の路みちを訪たずうが
如ごとし実じつを告つげて何なんの益えきかあらん文。

選択集せんちやくしゅうの上に云いわく願ねがはくは西方さいほうの行者ぎやうじや各其その意樂いぎやうに随したがい・或ある
は法華ほっけを読誦どくじゆして以もつて往生おうじやうの業なと為なし、或あるは華嚴けごんを読誦どくじゆし以もつ
て往生おうじやうの業なと為なし・或あるは遮那しゃな教主きやうしゆ及および諸尊しよそんの法等ほふとうを受持じゆじ
読誦どくじゆして往生おうじやうの業なと為なし・或あるは般若はんにや・方等ほうとう及および涅槃ねはん經等ぎやうとうを
解げ説せつし書しよ写しやして以もつて往生おうじやうの業なと為なす是これ則すなわち淨土宗じやうとしじう

かんむりようじゅきよう

觀無量壽經の意なり文。

又云く問うて曰く爾前經の中何ぞ法華を撰するや、いわ にぜんきよう 答えて曰く

今言う所の撰とは権実偏円等の義を論ずるに非ず、ごんじつへんえん 読誦大乘の

言は普く前後の大乗諸經に通ず文。あまね ぜんご だいじようしよきよう

觀無量壽經に云く爾の時に王舎大城に一りの太子有す阿闍世

と名く、調達惡友の教に随順して父の王の頻婆沙羅を收執し

て幽閉して七重の室内に置く文。

法華經の序品に云く韋提希の子阿闍世王・若干百千の眷属と俱

なり文。

惠心の往生要集の上に云く夫れ往生極樂の教行は濁世

末代の目足なり道俗貴賤誰か帰せざらん、但顯密の教法其の文

一に非ず事理の業因其の行惟れ多し利智精進の人は未だ難と

な
為さず、予が如き頑魯の者・豈敢てせんや、是の故に念仏の一門
に依つて聊か経論の要文を集め之を披らき之を修するに覺り易
く行じ易し文。

恵心往生要集を破し二十三年已後に一乗要決を作る、一乗

要決の上に云く諸乗の権実は古来の諍なり俱に経論に拠つて

互に是非を執す、余寛弘丙午の歳冬十月病中に歎じて曰く仏法

に遇うと雖も未だ仏意を了せず若し終に手を空うせば後悔何ぞ

追ばん、爰に経論の文義賢哲の章疏・或は人をして尋ねしめ

・或は自ら思忖す、全く自宗他宗の偏党を捨てて専ら権智実智の

深奥を探るに遂に一乗は真実の理・五乗は方便の説なることを

得る者なり、既に今生の蒙を開く何ぞ夕死の恨を遺さん文。

一、念仏は末代に流布す可き事

雙觀經の下に云く当來の世に經道滅尽せんに我慈悲を以て

あいかん

哀愍して特に此の經を留めて止住すること百歳ならん、其れ

しゅじょう

衆生有つて斯の經に値う者は意の所願に随つて皆得度す可し文。

往生礼讃に云く万年に三宝滅して此の經住すること百年、

爾の時に聞いて一念もせば皆當に往生を得べし文。

慈恩大師の西方要決に云く末法万年に余經悉く滅して弥陀の

一經のみと文。

方便品に云く深く虚妄の法に著して堅く受けて捨つ可からず

是くの如き人度し難しと文。

堅惠菩薩の宝性論に云く過去謗法の障り不了義に執著すと

文。

方便品に云く若し余仏に遇わば此の法中に於て便ち決了する

文。

方便品に云く若し余仏に遇わば此の法中に於て便ち決了する

文。

方便品に云く若し余仏に遇わば此の法中に於て便ち決了する

文。

方便品に云く若し余仏に遇わば此の法中に於て便ち決了する

文。

方便品に云く若し余仏に遇わば此の法中に於て便ち決了する

文。

ことを得んと文。

玄の七に云くい南岳師なんがくの云くい初依よを余よ仏ぶつと名くな無明むみ未だう破やせず
之これを名けて余なと為なす、能くよ如来秘密にやらいひみつの蔵くらを知しつて深くさ円理えんりを覺さす
之これを名けてな仏と為なす文。

涅槃經疏ねはんぎょうじよ十一に云くい人正法ひとしようほうを得るが故ゆえに聖人しようにんと云うと文。
像法決疑經そうほうけつぎきやうに云くい常施菩薩じようせぼさつ・初成道しよじやうどうより乃ないし至涅槃ねはん其その中間ちゆうげんに
於おて如来にやらいの一句いっくの法ほふを説くを見ず、然しかるに諸もろの衆生しゆじやうは出沒しゆつぽつ・
説法度人せつぽう有りと見ると文。

二十五さんまい三昧さんまい・二十五有りやくじゆの略りやく頌いに曰くい四州しあくしゆ・四惡趣しあくしゆ・六欲なら並び
に梵世ふんせい・四禪しぜん・四無色しむしき・無想むさう・五那含なごん文。

一、漢土かんと・南北なんぼくの十師じし・天台大師てんだいだいしに歸伏きふくする事

国清百録こくせいひやくの第四だいしに云くい千年せんねんと復また五百ごひやくと復また實じつに今日けふに在あり南岳なんがくの

えいしょうてんだい 叡 聖天台の明哲昔は三業を住持し今は二尊に紹繼す豈止だ甘露

しんたん そそ を振旦に灑ぐのみならん亦当に法鼓を天竺に振うべし、生知妙悟

なり魏晉より以来典籍風謡実に関連無し云云、乃至禅衆一百余

僧と共に智者大師を請し奉る。 穎川の人なり、後則ち南荊州華容県に遷居す。

一、 伝 教 大 師 の 一 期 略 記 に 云 く

桓武天皇の御宇、延暦廿一年壬午正月十九日伝教大師最澄高尾寺に於て、六宗と諍い責め破り畢ぬ。 漢明の年

・ 教・ 震旦に被り礪島の代に訓本朝に及ぼす、聖徳の皇子は

りょうぜん 靈山の聖衆にして衡岳の後身なり経を西隣に請い道を東域に

ひろ 弘む、智者・禅師は亦共に靈山に侍し迹を台岳に降し同く法華

さんまい 三昧を悟り以て諸仏の妙旨を演ぶる者なり、竊に天台の玄疏を見

れば釈迦一代の教を惣括して悉く其の趣を顕わし処として通ぜ

ざることに無し独り諸宗に逾え殊に一道を示す、其の中の所説の

甚深の妙理・七箇の大寺・六宗の学匠昔未だ聞かざる所曾て
未だ見ざる所三論・法相の久年の諍い渙焉として氷の如く釈け昭
然として既に明かなり雲霧を披いて三光を見るが猶し、聖徳の
弘化より以降今に二百余年の間・講ずる所の經論其の数惟れ多
し彼此理を争つて其の疑未だ解けず、此の最妙の円宗猶未だ
闡揚せず、蓋し以れば此の間の群生未だ円味に応ぜざるか、伏し
て惟れば聖朝久しく如来の付囑を受け深く純円の機を結ぶ一妙
の義理始めて乃ち興顯す、六宗の学衆初めて至極を悟る、謂つ
べし此の界の含靈而今而後悉く妙円の船に載つて早く彼岸に
済ることを得と、如来の成道四十余年の後乃ち法華を説いて
悉く三乗の侶をして共に一乗の車に駕せしむるが猶し、善議等
慶躍の至りに堪えず敢て表を奉つて陳謝以て聞す云云。

秀句の下に云く当に知るべし已説の四時の經今説の無量義經・
とうせつ ねはんぎよう いしんいげ
当説の涅槃經は易信易解なることを随他意の故に、此の法華經は
もつともこれ なんしんなんげ
最も為れ難信難解なり随自意の故に、随自意の説は随他意に勝る、
ただ むりよう ずいたい
但し無量義を随他意と云うは未合の一辺を指す余部の随他意に同
じからざるなり文。

文句の八に云く已とは大品以上の漸頓の諸説なり今とは同一の
もんく いわ だいほん ぜんとん しよ
座席謂く無量義經なり当とは謂く涅槃なり、大品等の漸頓は皆
させきいわ むりようぎよう いわ ねはん だいほん ぜんとん みな
方便を帶すれば信を取ること易しと為す今無量義は一より無量を
ほうべん やす な むりよう
生ずれども無量未だ一に還らず是亦信じ易し、今の法華は法を論
むりよう いま かえ また やす ほつけ
ずれば一切の差別融通して一法に歸す人を論ずれば則ち師弟の本
いっさい さべつ ゆうずう すなわ してい
・迹俱に皆久遠なり、二門悉く昔と反すれば信じ難く解し難し、
とも みなくおん ここと ねはん かつ げ がた
鋒に當る難事をば法華已に説く涅槃は後に在れば則ち信ず可きこ
ほこ なん ほつけすで ねはん すなわ べ

と易し、秘要の蔵とは隠して説かざるを秘と為し一切を惣括する
を要と為す真如実相の包蘊せるを蔵と為す、
不可分布とは法妙にして信じ難し深智には授く可し無智は罪を
益す故に妄りに説く可らず、昔より已来未だ曾て顕説せずとは
三蔵の中に於ては二乗の作仏を説かず、亦師弟の本・迹を明かさ
ず、方等・般若には実相の蔵を説くと雖も亦未だ五乗の作仏を説
かず、亦未だ発迹顕本せず頓漸の諸経皆未だ融会せず故に名け
て秘と為す、此の経には具に昔秘する所の法を説く即ち是れ秘密
蔵を開するに亦即ち是れ秘密蔵なり、此くの如きの秘蔵は未だ
曾て顕説せず、如来在世猶多怨嫉といわば四十余年には即ち説く
ことを得ず今説かんと欲すと雖も而も五千尋いで即ち座を退く仏
世すら尚爾り、何に況や未来をや理化し難きに在り。

楞伽經に云く我得道の夜より涅槃の夜に至るまで一字をも説かず文。

止觀の五に云く是の故に二夜一字を説かずと文、又云く仏二法に因つて此くの如きの説を作したもう縁自法と及び本住の法を謂う、自法とは彼の如來の得る所我も亦之を得文、又云く文字を離るるとは仮名を離るるなり文。

法華に云く但仮の名字を以て衆生を引導したもう文。

玄義の五に云く惠能く惑を破し理を顯す理は惑を破すこと能わ
ず、理若し惑を破せば一切衆生・悉く理性を具す何が故ぞ破せ
ざる、若し此の惠を得れば則ち能く惑を破す故に智を用つて
乗体と為す文。

弘の五に云く何の密語に依つて此くの如き説を作したもう、仏

の言いわく二の密語みつごに依よる・謂いわく自証法・及および本住法ほんじゅうほうなり、然しかるに
一代いちだいの施化せけ・豈あに権智被物ごんちひもつの教無なからんや、但此ただの二に約いして未いまだ
曾かつて説有あらざる故ゆえに不説ふせつと云うのみ文。 籤せんの一いに云く三に
廢迹はいしやくとは後の如ごとく前の如ごとくし文を引く中・初しよぶつに諸仏しよぶつの下同みを引く
・為度いどの下正まさしく廢迹はいしやくを明あわす、廢おわし已おれば迹無ゆえし故みなに皆実みなと云
う、実ただこは只是ただこれ本権ただこは只是ただこれ迹若もし同異どういを并なぜば広ひろく第七の卷の
如ごとくし文、籤せんの一いに云く捨たは只ただだ是これ廢ゆえ・故ゆえに知しんぬ開ひらく廢はいは名異な
躰たい同どうなることを文。

止との六むに云いく和光どうくわん同塵どうじんは結縁けちえんの始め八相はつさう成道じやうどうは以もて其その終しゆうり
を論ろんずと文。

弘くわんの六むに云いく和光どうくわんの下した・身みを現げんずるを釈しやくするなり四住しじゆうの塵ちんに同
じ処しよしよ処しよに縁えんを結むすび浄土じやうどの因いんを作なし利物りもつの始めと為なす、衆生しじゆう機熟きじく

して八相成道じやうどうす身を見・法を聞き終ついに実益いたに至る文。

天照大神てんしょうだいじんの託宣たくせんに云く

往昔むかし勤修こんしゅうして仏道ぶつどうを成じ求願ぐがん円満えんまん遍照へんしょう尊そん・閻浮えんぶに在あつては王

位まもを護り衆生しゅじやうを度せんが為ために天照神てんしょう。

◆八九 三論宗御書 691P

三論宗さんろんしゅうの始めて日本にほんに渡りしは三十四代推古すいこの御宇みよしろしめ治す十年

壬戌みづのえいぬの十月・百濟くだらの僧・觀勒かんろく之これを渡す、日本記にほんきの太子たいしの伝を見

るに異義いぎ無し、但しただ三十七代との事は流布るふの始めなり、天台宗てんだいしゅう

・律宗りっしゅうの渡れる事は天平勝宝てんぴやうしやうほう六年きのえねおま甲午きのとひつじ二月十六日丁未・

乃至四月に京に入り東大寺とうだいじに入る天台止觀てんだいしかん等云云、諸伝しよ之に同じ、

人王第四十六代孝謙こうけん天皇てんのうの御宇ぎやうなり聖武しやうむは義謬あやまりなり書き直す

可べきか、戒壇かいだんは以て前に同じ、大日經だいにちきやうの日本にほんに渡れる事は弘法こうぼう

の遺告に云く「件の経王は大日本国高市郡久米道場の東塔の下

に在り」云云、此れ又元政天皇の御宇なり、法華經の渡り始め

し事は人王第三十四代推古の四年なり、太子・惠慈法師に謂つて

曰く「法華經の中に此の句落字」と云云、太子使を漢土に遣わし

已前の法華經・此の国に有るか、惟れ知んぬ欽明の御宇に渡る所

の經の中に法華經有るなり、但し自ら御不審有る大事は所謂

日本記に云く「欽明天皇十三年壬申冬十月十三日辛酉百濟国

聖明王始めて金銅釈迦像一軀を献ず」等云云、善光寺流記に云く

「阿弥陀並びに觀音・勢至・欽明天皇の御宇治天下十三年壬申

十月十三日辛酉・百濟国の明王・件の仏・菩薩・頂戴」と云云、

相違欲「已下欠」◆八九 十宗判名の事 692p

拙度宗

華嚴宗

迷經宗

俱舎宗 ぐしゃしゅう

半字宗

真言宗 しんごんしゅう

☆ 范宗

成実宗 じょうじつ

驢牛和合乳宗 ろごわごう

法華宗 ほっけしゅう

仏立宗 ぶつりゅうしゅう

律宗 りっしゅう

驢乳宗 ろにゅう

禪宗 ぜんしゅう

趙高宗 殺二世王 ちやうこう ころせにせおう

法相宗 ほうそうしゅう

逆路宗 ぎやくろ

浄土宗 じやうどしゅう

梟鳥宗 禽獸 きやうちやう はけい

不孝宗 ふこう

三論宗 さんろんしゅう

捨本附末宗

背上向下宗 そむ

◆ 九〇 五行御書 ごしよ

不殺生戒 ふさつしやうかい

肝臟

不飲酒戒 おんじゆ

不妄語戒 脾臟 もうご ひ

眼根 がんこん

舌根 ぜっこん

身根

金

木

白色

西方
さいほう

辛味

鼻根

不偷
ちゅうとう
盜戒

歳星

魂

青雲

春

青色

東方
とうほう

酢味

火

水

黒色

北方

☆味

耳根

不邪
ふじやいんかい
姪戒

☆惑星

神

赤雲

夏

赤色

南方
なんぽう

苦味

土

鎮星

意

黄雲

土用

黄色

中央

甘味

秋

冬

白雲

黒雲

魄

志

大白星

辰星

◆九一 浄土九品の事

695p

なんぎよういぎよう

しょうどうじようど

そうぎようしょうぎよう

しょうぎようねんぶつ

難行易行・

聖道浄土・

雑行正行・

諸行念仏、

ほうねんぼう

りようけん

しょうぎよう

ねんぶつ

そうたい

法然房の料簡は諸行と念仏と相對なり、

二義、一には勝劣・

しょうれつ

一には難易

なんい

廢立

はいりゆう

一に諸行を廢して

しょうぎよう

念仏に歸せんが為に

ねんぶつ

ため

而も諸行を説くなり

しか

しょうぎよう

助正

二に念仏を助成せんが為に

ねんぶつ

ため

しか

しょうぎよう

諸行を説

くなり

上品
じょうぼん

六念

天 施 戒 僧 法 仏

上品
じょうぼん
上生

三に念ねん仏ぶつ諸しよ行ぎやうの二門にもんに約やくして各三品かくさんひんを立たてんが為ために而しかも諸しよ行ぎやうを説とくくなり
若ぜん善導ぜんどうに依よらば初はつを以もつて正ただと為なすのみ
読誦どくじゆだいじやう大乘だいじやう

至誠心えこうほつがん深心しん廻向えこう發願心ほつがんなり
三種さんしゆの心しんを發おこして即すなわち往生おうじやうす
復また三種さんしゆの衆生しゆじやう有あり当まさに往生おうじやうを得うべし

一には慈心じしんにして殺さず諸しよの戒行かいぎやうを具ぐす

二には大乘だいじやう方等ほうとう經典きやうてんを讀誦どくじゆす

三には六念りくねんを修行しゆぎやうす
法然ほうねんの料簡りょうけんに云いく

・深密經じんみつ

華嚴經・方等經・般若經・法華經・涅槃經・大日經
楞嚴經等の一切の大乘經は読誦りようこんきよう いっさい だいじようきよう どくじゆ

大乘の一句に摂尽すだいじよう いっく しようじん

解第一義だいいち

上品中生じようほん

善く義趣を解し第一義に於て一法然の料簡に云く一ぎしゆ げ だいいち おい ほうねん りようけん いわ

華嚴の唯心・法界法相の唯識・三論の八けこん ゆいしん ほうかいほつそう ゆいしき さんろん

不・真言の五相成身天台の一念三千・皆解第一義のしんこん ごそうじようしんてんだい いちねんさんぜん みな だいいち

一句に摂尽すいっく しようじん

上品下生じようほん

法然の料簡一深信の因果に十界の因果を摂尽すほうねん りようけん いんが じゆっかい いんが しようじん

中品上生ちゆうほん

五戒・八戒乃至諸戒を摂尽すごかい ないししよ しようじん

四阿含經・俱舍・成實・律宗は此の二品に

摂尽す

中品 中品中生

八斎戒

儒教道教は此の一品に摂尽す

中品下生

孝養父母の行なり仁慈

外典三千余卷

下品上生

老子經

孝經

觀經

此くの如きの愚人多く衆惡を造るも十念せば往生

す

下品中生

・或は衆生有て五戒・八戒及び具足戒を毀

犯す、此くの如きの愚人は僧祇物を偷み現前僧
下品げほん

物を盗む不淨に法を説いて懺愧有ること無し

下品下生は五逆重罪の者なり而かも能く逆罪を除滅

するは余行に堪えざる所なり、唯念仏の力

のみ能く重罪を滅するに堪る有り、故に極惡最下の

人の為に而かも極善最上の説を説く等云云

下品下生 五逆罪の人・十念往生

撰択に云く「念仏三昧は重罪すら消滅す

何に況や輕罪をや余行は然らず・或は輕を滅し

て重を滅せざる有り、或は一を消して二を

消せざる有り」等云云

捨閉閣拋

法華經等の一切經 ほけきょう いっさいきょう

釈迦仏等の一切諸仏 しゃかぶつ いっさいしよぶつ

天台宗等の八宗・九宗の世天等 てんだいしゅう はっしゅう

浄土三部經・阿弥陀仏よりの外なり じょうどさんぶきょう あみだぶつ

安樂集に あんらくしゅう

未だ一人も得る者有らず唯浄土の一門のみ有て通入の路なる いま ただじょうど いちもん

べし

往生礼讃に云く おうじょうれいさん いわ

千中無一十即十生・百即百生 せんちゅうむいつじゅつそくじゅつしゅう ひやくそくひやくしゅう

長樂寺南無 ちようらくじなむ

一弟子 でし

隆寛 りゅうかん 多念 たねん

故嵯峨法皇の御師 さ が ほうこう おんし

建仁年中
後鳥羽院御宇

寺殿の御師
源空

法然房

顕真座主

八人の碩徳

一弟子
一弟子

法蓮

法本

覚明

嵯峨

聖心
成覚

法本

一念

善恵
聖光

小坂道観
故打宮入道修観

極楽

念阿弥陀仏
諸行往生

一条
道阿弥

頼顯僧上の御師

蘭城寺の長吏

公胤大弐僧上浄土決疑集三巻を造て法然房の

撰択集を破す、隨機の諸行皆往生を為すべし等云云

故宝地房法印証真の弟子ほうちほうほういん

上野清井者

定真ていしん 証者けんじや

彈撰だんせん 摺二卷を造る隨機きしよぎよう 諸行往生しようし

下輩げはい 下三品

值惡人あくにん

宗源法印そうげんほういん

隆真法印ほういん

証義者

俊鏤法印ほういん

楮生

大和やまと の莊

善人ぜんにん

小乗凡夫しょうじようほんぶ

中輩

三塔の總學頭さんぜん
三千人さんぜん の大衆たいしゅう

聖覺しょうかく

五人探題たんだい

中三品

貞雲

竜証

値小

華嚴宗 けこんしゅう

とがのをの

値大

明恵房 ぼう

摧邪輪三卷を造る隨機諸行往生 さいじやりん さんけんをさうる ぎしよぎようおうじよう

大乘凡夫 だいじよう ぼんぶ

深密經に依る じんみつ よ

上輩

法相宗 ほうそうしゅう

三時教をもて一代を摂尽し返て さんじきよう いちだい しようじん

深密經を以て法華經を下す じんみつ ほけきよう

三論宗 さんろんしゅう

二藏三時をもて一代を摂尽し返て いちだい しようじん

妙智經を以て法華經を下す みょうち ほけきよう

上三

華嚴宗 けこんしゅう

五教をもて一代を摂尽し返て いちだい しようじん

華嚴經を以て法華を下す けこんきよう ほっけ

大乘五宗 真言宗 だいじよう しんこんしゅう

五藏をもて一代を摂尽し返て いちだい しようじん

だい にちきょう
大日経等を以て法華經を下す

てんだいしゅう
天台宗
しきょう
四教五時をもて一代を撰尽す

あと
県の額を州に打ち牛跡を大海に入る

でんぎょうだいし
伝教大師・此の義を許すや不や

そ
夫れ三時の教は勝義の領解一部の間は義生の機宜猶三部
を闕く何ぞ一代を撰せん、華嚴

いわ
云く・三論云く真言等云云

(ここから一部2段組)

◆九二 御義口伝目録 70

1 P

南無妙法蓮華經

七〇八

卷上

序品七箇の大事

七

〇九

第一 如是我聞の事

第二 阿若・陳如の事

第三 阿闍世王の事

七一〇

第四 仏所護念の事

第五 下至阿鼻地獄の事

第六 導師何故の事

第七 天鼓自然鳴の事

方便品八箇の大事

七

一三

第一 方便品の事

第二 諸仏智慧甚深無量

第三 唯以一大事因縁の事

七二六

第四

五濁の事 ごじよく

七

第五

比丘・比丘尼 びく・びくに

譬喩品九箇の大事 ひゆほん だいじ

有懷増上慢 うばそ ぞうじょうまん

七二一

優婆塞我慢 うばそ がいまん

第一 譬喩品の事 だいいち ひゆほん

優婆夷不信の事 うばい ふしん

七二一 がっしょう

事

第二 即起合掌の事 がっしょう

七二八

七二二

第六

如我等無異如我昔 に が と う む い に よ が し や く

第三 身意泰然快得安穩 あん の ん

所願の事 しょうがん

七二〇

の事

七二二

第七

於諸菩薩中 しよ ぼ さ っ ちゅう

第四 得仏法分の事 ぶつぽう

正直捨方便の事 しょうじきしやほうべん

七二〇

七二三

第八

当来世悪人聞 とうらいせあくにん ぶん

第五 而自廻転の事 いちじく

仏説一乘迷惑 ぶつせついちじやうめいわく

七二三

不信受破法墮 ふしんじゆはふたうた

第六 一時俱作の事 いちじく

悪道の事 あくどう

七二三

第七 以譬喻得解の事

七二四

第八 唯一門の事

七二四

第九 今此三界等の事

七二四

信解品六箇の大事

七二五

第一 信解品の事

七二五

第二 捨父逃逝の事

七二六

第三 加復窮困の事

七二六

第四 心懷悔恨の事

七二六

の事

第五 無上宝聚不求自得

七二七

第六 世尊大恩の事

七二七

藥草喻品五箇の大事

七二八

第一 藥草喻品の事

七二八

第二 此の品述成段の

七二九

第三 雖一地所

生一雨所潤等の事

第四 破有法王出現世間

七二九

第五 我觀一切

普皆平等無有

彼此愛憎之心

我無貪著

亦無限礙の事

三二

第一 化城の事

第二 大通智勝仏の事

授記品四箇の大事 七三〇 七

第三 諸母涕泣の事

第一 授記の事 三〇 だいいち じゆき

第四 其祖轉輪聖王の事

第二 迦葉光明の事 七三〇 かしょうこうみょう

第五 十六王子の事 七三三 じゅうろくおうじ

第三 捨是身已の事 七三一 しゃぜしんい

第六 即滅化城の事 七三三 そくめつけじょう

第四 宿世因縁吾今當説 七三一 すくせいんねん とうせつ

第七 皆共至宝処の事 七三四 みな ほうしよ

化城喩品七箇の大事 七三一 けじょうゆほん だいじ 七

五百弟子品三箇の大事 七 だいいじ 七

三四

第一 だいいち

衣裏の事 えり

七三四

第二

醉酒而臥の事

七三四

第三

身心遍歡喜の事 しんしん かんき

七三五

人記品 にんきほん

二箇の大事 だいじ

七

三五

第一 だいいち

学無学の事 がくむがく

七三五

第二

山海慧自在通王仏 さんかいえじざいつうおうぶつ

七三五

の事

法師品 ほうしほん

十六箇の大事 だいじ

七

三六

第一 だいいち

法師の事 ほっし

第二

成就 じょうじゆ

大願愍

衆生 しゆじゆ

故生於

惡世 あくせ

広演此經

の事

第三

如來所遣行如來事 にょらいしよけん にょらい

七三六

の事

第四

与如來共宿の事 にょらい

七三六

第五

是法華經藏 ぜほけきやうそう

深固幽遠 じんこゆうゑん

無人能到の事 むにんのうとう

第六

七三七 聞法信受隨順不逆

の事

第七

七三七 衣座室の事

七三七

第八

欲捨諸懈怠當

聴此經の事

第九

七三七 不聞法華經去仏智

甚遠の事

第十

若説此經時

有人惡口罵

加刀杖瓦石

念仏故忍

の事

七三八

第十一

及清信士女供養

於法師の事

第十二

七三八 若人欲加惡

刀杖及瓦石

則遣變化人

為之作衛護

の事

第十三

七三八 若親近法師速得

菩薩道の事七三八

第十四

隨順是師學の事

七三八

第十五 師と學との事

七三九

第十六 得見恒沙仏の事

七三九

宝塔品廿箇の大事

七三九

第一 だいいち

宝塔の事 ほうとう

七三九

第二

有七宝の事 しっぽう

七三九

第三

四面皆出の事 しめんみな

七四〇

第四

出大音声の事 おんじょう

七四〇

第五 くうちゅう

見大宝塔住在 ほうとうじゅうざい

空中の事

七四〇

第六 ぶつこう

国名宝浄彼中有 ちゅうう

仙号日多宝の事 たほう

七四〇

第七

於十方国土有 じゅっぽうこくど

説・法華經 ほけきょう

事

第十

如却関鑰開大城 だいじょう

七四一

門の事

第八 じょうげ

南西北方四惟 七四一

第九

各齋宝華満掬の ほうげ

七四一

処我之塔廟 とつびょう
為聴是經故
涌現其前為
作証明讚
言善哉の事

第十一 攝諸大衆皆在

虚空の事 七四二

譬如大風

第十二 吹小樹枝の事 七四二

第十三 若有能持則持

第十四 此經難持の事 七四二

第十五 我則歡喜諸仏亦

然の事 七四二

第十六 讀持此經の事

第十七 是真仏子の事 七四三

第十八 是諸天人・世間

之眼の事 七四三

第十九 能須臾説の事

七四三

第二十 此經難持の事

七四三

提婆達多品八箇の大事

七四四

第二 提婆達多の事

七四四

第三 若不違我當為

宣説の事 七四四

第四 採菓汲水拾薪設

食の事 七四四

第五 情存妙法故身

心無懈倦の事 七四五

第六 我於海中唯常

宣説の事 七四五

第六 年始八歳の事

七四五

第七 言論未訖の事

七四六

第八 有一宝珠の事

七四七

勸持品十三箇の大事

七四七

第一 勸持の事

七四七

第二 不惜身命の事

七四七

第三 心不実故の事

七四八

第四 敬順仏意の事

七四八

第五 作師子吼の事

七四八

第六 如法修行の事

七四八

第七 有諸無智人の事

七四八

第八 惡世中比丘の事

七四九

第九 或有阿練若の

七四九

第十 自作此經典の事

七四九

第十一 為斯所輕言汝等

皆是仏の事七四九

第十二 惡鬼入其身の事

七四九

事

第十三 但惜無上道の事 たんしゃくむじょうどう

七四九

安樂行品五箇の大事 あんらくぎようぼん

七五〇

第一 安樂行品の事 だいいち

七五〇

第二 一切法空の事 いっさい

七五〇

第三 有所難問不以 しやうじやう

小乘法答等の事

七五〇

第四 無有怖畏加刀杖 ふい

等の事 七五〇

第五 有人来欲難問者 あるひと

諸天昼夜等の事 しよてん

七五〇

涌出品一箇の大事 ゆじゆつぽん

七五〇

第一 唱導之師の事 だいいち

七五一

卷下

寿量品廿七箇の大事 じゆりようぼん

七五二

第一

妙法蓮華經 みようほうれんげきやう

如来寿量品 にやらいじゆりようぼん

第十六の事

七五

第二

二 如来秘密神通之 にやらいひみつじんつう

力の事

七五二

我実成仏已来

無量无边等

第三の事七五三

第四

如来如実知見
三界之相無有
生死の事

第五

五三

若仏久住於世

薄徳之人不種

善根貧窮下賤

貪著五欲入

於憶想妄見網

中の事

七

第六

飲他毒藥藥發悶乱

宛轉于地の事七五四

第七

或失本心・或

不失者の事

第八

擣・和合与子令

服の事

第九

毒氣深入失本心

故の事

第十

是好良藥

今留在此汝

可取服勿憂不

差の事

七五五

七五五

第十一

自我得仏來の事

七五六

七五四

七五六

第十二 為度衆生故方便

現涅槃げんねはんの事七五六

第十三 常住此説法の

事 七五六

第十四 時・我及衆僧俱

出靈鷲山りようじゅうせんの事七五六

第十五 衆生見劫尽○而

衆見焼尽しょうじんの事

七五七

第十六 我亦為世父の事

七五七

第十七 放逸ほういつ著五欲墮だお於

惡道あくどう中の事七五八

第十八 行道ぎやうどう不行道ふぎやうどうの事

七五八

事

第十九 每自作さぜん是念ねんの事

七五八

第二十 得入とくにゅうむじやうどう無上道等の

七五九

第二十一 自我偈じかげの事

七五九

第二十二 自我偈じかげ始終しじゅうの事

七五九

第二十三 久遠くおんの事

七五九

第二十四 此の壽量品じゅりやうぼん

の所化しよけの

国土こくどと修行しゆぎやう

との事

七五

九

第廿五 建立御本尊等の

事

七六〇

第廿六

寿量品の

対告衆の事

七六〇

第廿七

無作三身の事

七六〇

分別功德品三箇の大事

七六〇

第一

其有衆生聞

仏寿命

長遠如是

乃至能生

一念信解所

得功德無有

限量の事

七六〇

第二

是則能信受如是

諸人等頂受此經典の事

七六一

第三 仏子住此地則是

仏受用の事七六一

隨喜品二箇の大事

七

六一

第一 妙法蓮華經隨喜

功德の事 七六一

第二

口氣無・穢

優鉢華之香

常從其口出

の事

第二

得大勢菩薩の事
たいせいぼさつ

七六二

七六四

威音王の事
いおん

第三

七六二

七六四

法師功德品四箇の大事
ほっしぐとく

第一

法師功德の事
ほっしぐとく

第四

凡有所見の事
ほんめしよけん

七六二

七六四

第二

六根清浄の事
ろっこんしやうじやう

第五

我深敬汝等
がじんきやうなんじ

第三

又如浄明鏡の
じやうみやうきやう

不敢輕慢
くえんきやうまん

事

七六三

所以者何
ゆえん

第四

是人持此経安住
じやうみやうきやう

等皆行菩薩
みな

希有地の事
けう

道当得作仏
どうたうとくさぶつ

常不輕品三十箇の大事
じやうふぎやうほん

第六

但行礼拝の事
らいはい

七六三

七六四

第一

常不輕の事
ふぎやう

第七

乃至遠見の事
ないし

七六三

七六四

第八 心不淨者の事 ふじよう

七六五

第九 言は無智比丘の むちびく

事 七六五

第十 聞其所説皆信伏 しよせつみなしんぶく

随從の事 ずいじゅう 七六五

第十一 於四衆中説法 しゅうちゅうせつぽう

心無所畏の事 こころな 七六五

第十二 常不輕菩薩豈異 ふぎよう ぼさつ あに

人乎則我身是の わがみこ

事

七六六

第十三 常不值仏不聞法 もんぼう

不見僧の事 つみ 七六六

第十四 畢是罪已復遇常 また

不輕菩薩の事 ふぎよう ぼさつ

七六六 によらいめつこ

第十五 於如來滅後等の

事 七六六

第十六 此品の時の不輕 ふぎよう

菩薩の体の事 ぼさつ

七六七

第十七 不輕菩薩の礼拝 ふぎよう ぼさつ らいはい

住処の事 じゅうしょ 六七

第十八 開示悟入礼拝 かいじこにゅう らいはい

住処の事 じゅうしょ 七六七

第十九 每自作是念の文 さぜん

礼拝住処の事 らいはい じゅうしょ

七六七

第二十

我本行菩薩道の

文礼拜住処の事

七六八

第廿一

生老病死礼拝

住処の事

第廿二

法性礼拝住処

の事

第廿三

無明礼拝住処の

事

七六八

第廿四

蓮華の二字礼拝

住処の事

七六八

第廿五

実報土礼拝住処

の事

七六九

第廿六

慈悲の二字礼拝

住処の事

七六九

第廿七

礼拝住処分真即

の事

七六九

第廿八

究竟即礼拝住処

の事

七六九

第廿九

法界礼拝住処の

事

七六九

第卅

礼拝住処忍辱地

の事

七七〇

神力品八箇の大事

七

七〇

第一

妙法蓮華經如来

神力の事

七七〇

第二

出広長舌の事

の事

七七〇

第三

十方世界衆宝樹下

師子座上の事七七

第四 満百千歳の事

七七

第五

地皆六種

震動其中

衆生

衆宝樹下の

事

仏道決定無

有疑の事

七七

嘱累品三箇の大事

七

七二

第一

従法座起の事

七七

如来是一切衆生

之大施主の事七七

第三

如世尊勅当具

奉行の事

七七

薬王品六箇の大事

七

七三

第一

不如受持此法華經

第六

娑婆是中有仏名

釈迦牟尼仏の事七七

第七

斯人行世間能滅

衆生闇の事

七七

第八

畢竟住一乘

○是人於

乃至ないし一四句偈くげの事

第六

若人もしひと有病とくもんぜきょう

七七三

第二 十喻じゅうゆの事

七七三

第三 離いっさい一切苦

一切病痛能

解一切生死

七七

三

第四 火不能烧水不能

七七三

第五 諸余怨敵皆悉

摧滅さいめつの事

七七四

の事

普門品ふもんほん五箇の大事

七

第三

七七五

八万四千七宝鉢

第二

七七四

肉髻にくけい白毫びやくこうの事

七七四

第一 妙音菩薩みょうおんぼさつの事

七四

妙音品みょうおん三箇の大事

七七四

七

得聞とくもん是經ぜきょう病びょう

即消滅そくしょうめつ

不老不死ふろうふしの事

七五

第一 だいいち

無尽意菩薩の事 むじんいぼさつ

第三

七七七 きしもじん

鬼子母神の事

第二

七七五 かんのん

観音妙の事

第四

七七八

受持法華 じゅじほっけ

第三

七七六 ねんねん

念念勿生疑の うたがい

名者福不可量の事 めいしやふくふかりよう

第五 皐諦女の事 こうだいによ

事

第四

七七六 二求兩願の事

第六

七七八

五番神呪の事 じんしゆ

事

第五

七七六

三十三身利益の さんじんりやく

七九 嚴王品三箇の大事 だいじ

七

陀

羅 だらにほん

尼品六箇の大事 だいじ

七

第一 だいいち

第一

七七九

妙莊嚴王の事 みょうそうこん

七七

第一 だいいち

七七七

陀羅尼の事 だらに

第二

七七九

浮木孔の事 うきき

第二

七七七

安爾曼爾の事 そ

第三

七七九

当品邪見即正の じゃけんそく

事

七七九

普賢品六箇の大事

七

八〇

第一

普賢菩薩の事

八三

第一無量義經徳行品第一

第二量の字の事

七八〇

七八四

第二

若法華經行

第三義の字の事

閻浮提の事

七八〇

七八四

第三

八万四千天女の

第四処の一字の事

事

七八〇

七八四

第四

是人命終為千

第五無量義処の事

仏授手の事

七八〇

七八四

第五

閻浮提内広令

第六無量義処の事

流布の事

七八一

七八五

第六

此人不久当詣

普賢經五箇の大事

道場の事

七八一

八五

無量義經六箇の大事

七

第一普賢經の事

七

欲の事 第二

七八五 不斷煩惱不離五
七八五

第三 六念の事
七八五
(2段組ここで終わり)

◆九三 御義口伝 708p

南無妙法蓮華經

御義口伝に云く南無とは梵語なり此には歸命と云う、人法之れ

有り人とは釈尊に歸命し奉るなり法とは法華經に歸命し奉るな

り又歸と云うは迹門不變真如の理に歸するなり命とは本門

隨緣真如の智に命くなり歸命とは南無妙法蓮華經是なり、釈に

云く隨緣不變・一念寂照と、又歸とは我等が色法なり命とは

我等が心法なり色心不二なるを一極と云うなり、釈に云く一極に

歸せしむ故に仏乗と云うと、又云く南無妙法蓮華經の南無とは

梵語・妙法蓮華經は漢語なり梵漢共時に南無妙法蓮華經と云う

なり、又云く梵語には薩達磨・芬陀梨伽・蘇多覽と云う此には

妙法蓮華經と云うなり、薩は妙なり、達磨は法なり、芬陀梨伽

は蓮華れんげなり蘇多覽そたらんは經きやうなり、九字くじは九尊くすんの仏ぶつ体たいなり九界くくわい即すなはち仏界ぶつかいの

表示ひょうしなり、妙めうとは法性ほつしやうなり法ほふとは無明むみやうなり無明むみやう法性ほつしやう一体いつたいなるを

妙めう法ほふと云いふなり

蓮華れんげとは因果いんがの二法にほふなり是こゝ又また因果いんが一体いつたいなり經きやうと

一切いっさい衆生しゆじやうの言語ごんご音声おんじやうを經きやうと云いふなり、

釈いに云いく声こゑ仏事ぶつじを為なす

之これを名なけて經きやうと為なすと、或あるは三世さんぜ常恒じやうこつなるを經きやうと云いふなり、

法界ほふかいは妙法めうほふなり法界ほふかいは蓮華れんげなり法界ほふかいは經きやうなり蓮華れんげとは八葉はちよう九尊くすん

の仏ぶつ体たいなり能よく能よく之これを思おもふ可べし已上いじやう。

伝でん云い序品じよほん七箇しちかんの大事だいじ

方便ほうべん品ひん八箇はつかんの大事だいじ

譬ひ喩ゆ品ほん九

信しん解げ品しんげ六箇りくかんの大事だいじ

葉やく草そう喩ゆ品ほん五箇ごかんの大事だいじ授記じゆき品しん四箇しつかんの

化城けじやう喩ゆ品ほん七箇しちかんの大事だいじ

五百ごひやく品ほん三箇さんかんの大事だいじ

人にん記き品ほん二

大事だいじ

化城けじやう喩ゆ品ほん七箇しちかんの大事だいじ

五百ごひやく品ほん三箇さんかんの大事だいじ

人にん記き品ほん二

化城けじやう喩ゆ品ほん七箇しちかんの大事だいじ

五百ごひやく品ほん三箇さんかんの大事だいじ

人にん記き品ほん二

化城けじやう喩ゆ品ほん七箇しちかんの大事だいじ

箇の大事 だいじ

法師品十六箇の大事 ほうしほん だいじ

宝塔品二十箇の大事 ほうとうほん だいじ

提婆品八 だいば

箇の大事 だいじ

勸持品十三箇の大事 かんじほん だいじ

安樂行品五箇の大事涌出品一 あんらくぎょうほん だいじ ゆじゅつほん

箇の大事 だいじ

壽量品二十七箇の大事分別功德品三箇の大事隨喜品二箇の じゅうりょうほん だいじ ぶんべつくとく だいじ ずいき

大事 だいじ

法師功德品四箇の大事不輕品三十箇の大事神力品八箇の大事 ほっしくとく だいじ ふぎよう だいじ じんりきほん だいじ

囑累品三箇の大事藥王品六箇の大事妙音品三箇の大事 そくるい だいじ やくおうほん だいじ みょうおん だいじ

普門品五箇の大事陀羅尼品六箇の大事嚴王品三箇の大事 ふもんほん だいじ だらにほん だいじ げん だいじ

普賢品六箇の大事無量義經六箇の大事普賢經五箇の大事 ふげん だいじ むりょうぎきょう だいじ ふげん だいじ

已上二百三十一箇条也此の外に別伝之有り具さに之を記し訖 べつでんこれあ つぶ これ しる

ぬ。

御義口伝卷上

序品七箇の大事

第一如是我聞の事 文句の一に云く如是とは所聞の法体を挙ぐ我聞とは能持の人なり記の一に云く故に始と末と一經を所聞の体と為す。

御義口伝に云く所聞の同は名字即なり法体とは南無妙法蓮華經なり能持とは能の字之を思う可し、次に記の一の故始末一經の釈は始とは序品なり末とは普賢品なり法体とは心と云う事なり法とは諸法なり語法の心と云う事なり諸法の心とは妙法蓮華經なり、伝教云く法華經を讚むると雖も還つて法華の心を死すと、死の字に心を留めて之を案ず可し不信の人は如是我聞の聞には非ず法華經の行者は如是の体を聞く人と

云う可きなり、爰を以て文句の一に云く「如是とは信順の辞なり信は則ち所聞の理会し順は則ち師資の道成ず」と、所詮日蓮等の類を以て如是我聞と云うべきなり云云。

第二阿若☆陳如の事 疏の一に云く・陳如は姓なり此には火器と翻ず婆羅門種なり其の先火に事こう此れに従て族に命く、火に二義有り照なり暎なり照は則ち聞生ぜず焼は則ち物生ぜず・此には不生を以て姓と為す。

御義口伝に云く火とは法性の智火なり、火の二義とは一の照は随縁真如の智なり一の焼は不變真如の理なり照焼の二字は本・迹二門なり、さて火の能作としては照焼の二徳を具うる南無妙法蓮華經なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは生死の闇を照し晴して涅槃の智火明了なり生死即涅槃と

開覚するを照則闇不生とは云うなり、煩惱の薪を焼いて菩提
の慧火現前するなり煩惱即菩提と開發するを焼別物不生とは
云うなり、爰を以て之を案ずるに陳如は我等・法華經の行者
の煩惱即菩提・生死即涅槃を顯したり云云。

第三阿闍世王の事 文句の一に云く阿闍世王とは未生怨と名く、
又云く大經に云く阿闍世世とは未生怨と名く又云く大經に
云く阿闍を不生と名く世とは怨と名く。

御義口伝に云く日本国の一切衆生は阿闍世王なり既に諸仏
の父を殺し法華經の母を害するなり、無量義經に云く諸仏の
國王と是の經の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生む、謗法
の人・今は母の胎内に処しながら法華の怨敵たり豈未生怨に
非ずや、其上・日本国当世は三類の強敵なり世者名怨の四字

に心を留めて之を案ず可し。

にちれん

日蓮等の類

此の重罪を脱

れたり謗法の

人人・法華經を信

じ釈尊に歸し奉らば何ぞ已前の殺父殺母の重罪滅せざらん

や、但し父母なりとも法華經不信の者ならば殺害す可きか、

其の故は權教の愛を成す母・方便眞実を明めざる父をば殺害

す可しと見えたり、仍て文句の二に云く「觀解は食愛の母・無明

の父・此れを害する故に逆と稱す逆即順なり非道を行じて仏道

に通達す」と、觀解とは末法・当今は題目の觀解なる可し子と

して父母を殺害するは逆なり、然りと雖も法華經不信の父母を

殺しては順となるなり爰を以て逆即是順と釈せり、今日蓮等

の類いは阿闍世王なり其の故は南無妙法蓮華經の劍を取つて

食愛・無明の父位を害して教主釈尊の如く仏身を感じ得するな

とんあい

むみよう

きようしゆしやくそん

ごと

ぶつしん

かんとく

り、貧愛とんないの母とは勸持品三類かんじほんさんるいの中第一だいいちの俗衆そくしゅうなり無明むみょうの父とは第二・第三の僧なり云云。

第四ぶつしよごねん仏所護念もんくの事 文句もんくの三に云く仏所護念ぶつしよごねんとは無量義処むりょうぎこは是れ

仏の証得しょうとくし給う所是かくのゆえの故に如来にょらいの護念ごねんし給う所なり、下の文

に仏自住ぶつじゆうだいじよう大乘だいじようと云えり開示かいじせんと欲ほすと雖も衆生の根鈍いんどしじようなれ

ば久しく斯この要を黙もくして務いそぎて速すみやかに説とき給たまわらず故に護念ゆえごねんと云

う記の三に云く昔未いまだ説ゆえかず故に之これを名けて護ごと為なす法に約なし

機きに約みなごねんして皆護念ゆえする故に乃至ないし機な仍いまお未おこだ発かくせず隠かくして説ゆえかず

故に護念ごねんと言う、乃至ないし末説ゆえを以ての故に護ごし未暢みちようを以ての故に

念ゆえず、久黙ごねんと言うは昔いまより今いたに至しるなり斯要等しようの意これ之を思これうて

知る可べし。

御義口伝おんぎくでんに云く此いの護念ごねんの体おに於ては本・迹二門首題ごの五字ごな

り、此の護念ごねんに於おいて七種の護念ごねん之れ有り一には時に約し二には機きに約し三には人に約し四には本・迹しんじんに約し五には色心しきしんに約し六には法体ほつたいに約し七には信心しんじんに約するなり云云、今日蓮等いまにちれんの類たぐいは護念ごねんの体を弘ひろむるなり、一に時に約するとは仏・法華經ほけきようを四十余年よんじゅうよねんの間未いまだ時いた至いたらざるが故ゆえに護念ごねんし給たまうなり、二に機きに約するとは破法不信はほうふしん故墜こつ於お三惡道さんあくどうの故ゆえに前四十余年よんじゅうよねんの間に未いまだ之これを説しやうかざるなり、三に人に約するとは舍利弗しやりほつに對して説しやうかんが為ななり、四に本・迹しきしんに約するとは護ごを以なて本と為なし念を以なて迹と為なす、五に色心しきしんに約するとは護ごを以なて色と為なし念を以なて心と為なす、六に法体ほつたいに約するとは法体ほつたいとは本有常住ほんぬじようじゆうなり一切衆生いっさいしじゆうの慈悲心じひ是これなり、七に信心しんじんに約するとは信心しんじんを以なて護念ごねんの本と為なすなり、所詮しよせん日蓮等にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと

とな たてまつ しかしなが ごねん
唱え奉るは 併 ら護念の体を開くなり、護とは仏見なり、念

とは仏知なり此の知見の二字本・迹兩門なり仏知を妙と云うな

り仏見を法と云うなり此の知見の体を修行するを蓮華と云う

なり、因果の体なり因果の言語は経なり 加之 法華經の行者

をば三世の諸仏護念し給うなり、普賢品に云く一者為諸仏護念

と護念とは妙法蓮華經なり諸仏の法華經の行者を護念したも

うは妙法蓮華經を護念したもうなり機法一同護念一体なり、

記の三の釈に約法約機・皆護念故と云うは此の意なり、又文句

の三に云く 「仏所護念とは前の地動瑞を決定するなり地動

は六番破惑を表するなり、妙法蓮華經を受持する者は六番

破惑疑い無きなり」神力品に云く「於我滅度後・応受持斯經

・是人於仏道決定無有疑」仏自住大乘とは是なり、又た一義

に仏の衆生を護念したもう事は護とは唯我一人能為救護・念とは每自作是念是なり、普賢品に至つて一者為諸仏護念と説くなり、日蓮は生年三十二より南無妙法蓮華經を護念するなり。

第五下至阿鼻地獄の事

御義口伝に云く十界皆成の文なり提婆が成仏・此の文にて分明なり、宝塔品の次に提婆が成仏を説く事は二箇の諫曉の分なり、提婆は此の文の時成仏せり此の至の字は白毫の行く事なり白毫の光明は南無妙法蓮華經なり、上至阿迦尼咤天は空諦・下至阿鼻地獄は仮諦・白毫の光は中道なり、之に依つて十界同時の成仏なり天王仏とは宝号を送るまでなり、去て依正二報の成仏の時は此の品の下至阿鼻地獄の文は依報の成仏を説き提婆達多の天王如来は正報の成仏を説く依報

しょうほう

みょうほう

じょうぶつ

いまにちれん

たぐ

しょうりょう

正報共に妙法の成仏なり、今日蓮等の類い聖靈を訪う時

ほけきよう

どくじゆ

なむ みょうほうれんげきよう

とな

たてまつ

だいもく

・法華經を讀誦し南無妙法蓮華經と唱え奉る時・題目の光

むげん

そくしんじようぶつ

えこう

こ

おこ

無間に至りて即身成仏せしむ、廻向の文此れより事起るなり、

ほつけふしん

だざいむげん

だいもく

こうしほつけ

法華不信の人は墮在無間なれども、題目の光を以て孝子法華の

ぎようじや

とむち

あに

べ

げし

行者として訪わんに豈此の義に替わる可しや、されば下至

あびじこく

だいば

じようぶつ

じようぶつ

せしめんが為なり

阿鼻地獄の文は仏・光を放ちて提婆を成仏せしめんが為なり

にちれんすいち

たてまつ

せしめんが為なり

と日蓮推知し奉るなり。

第六導師何故の事

じよ

いわ まことおもん

せつぽうにゆうじよう

して能く人

を導く既に導師と称す。

おんぎくでん

いわ

どうし

しゃくそん

おんこと

せつぽう

むりようぎきよう

御義口伝に云く此の導師は釈尊の御事なり、説法とは無量義經

にゆうじよう

むりようぎしよさんまい

しよせんどうし

・入定とは無量義処三昧に入りたもう事なり、所詮導師に

おい

どうし

どうしこ

あ

どうし

ほうねん

於て二あり惡の導師善の導師之れ有るなり、惡の導師とは法然

・弘法・慈覚・智証等なり善の導師とは天台・伝教等是なり、
末法に入つては今日蓮等の類いは善の導師なり、説法とは南無
妙法蓮華經・入定とは法華受持の決定心に入る事なり
のうどうおにん
能導於人の能の字に心を留めて之を案ず可し涌出品の唱導之師
と同じ事なり、所詮日本国の一切衆生を導かんが為に説法す
る人はなり云云。

第七天鼓自然鳴の事 疏に云く天鼓自然鳴は無間・自説を表する
なり。

御義口伝に云く此の文は此土・他土の瑞同じきことを頌して長
出せり、無間・自説とは釈迦如来、妙法蓮華經を無間・自説
し給うなり、今日蓮等の類いは無間・自説なり念仏・無間・禪
天魔・真言亡国・律国賊と喚ぶ事は無間・自説なり三類の強敵

来る事は此の故なり、天鼓とは南無妙法蓮華經なり自然とは
無障礙なり鳴とは唱うる所の音声なり、一義に一切衆生の
語言音声を自在に出すは無間・自説なり自説とは獄卒の罪人
を呵責する音・餓鬼飢饉の音声等・一切衆生の貪・瞋・癡の
三毒の念念等を自説とは云うなり此の音声の体とは南無
妙法蓮華經なり、本・迹兩門妙法蓮華經の五字は天鼓なり天
とは第一義天なり自説とは自受用の説法なり、記の三に云く
無間・自説を表するとは方便の初に三昧より起つて舍利弗に告
げ広く歎じ略して歎ず、此土他土言に寄せ言を絶す若は境若は
智此乃ち一經の根本五時の要津なり此の事輕からずと、此釈
に一經の根源五字の要津とは南無妙法蓮華經是なり云云。

ほうべん
方便品八箇の大事

第一方便品の事 文句の三に云く方とは秘なり便とは妙なり妙に

まさ

方に達するに即ち是真の秘なり、內衣裏の無価の珠を点ずるに

ちようじよう

王の頂上の唯一珠有ると二無く別無し、客作の人を指すに是

ちようじや

長者の子にして亦二無く別無し、此の如きの言は是秘是妙な

また

り、經の唯我知是相・十方仏亦然・止止不須説・我法妙難思

ごと

の如し故に秘を以て方を釈し妙を以て便を釈す正しく是れ今の

ゆえ

品の意なり故に方便品と言うなり記の三に云く第三に秘妙に約

しゃく

して釈するとは妙を以ての故に即なり円を以て即と為し三を不

な

即と為す故に更に不即に對して以て即を釈す。

ゆえ

御義口伝に云く此の釈の中に一珠とは衣裏珠・即頂上珠な

おんぎくでん

り、客作の人と長者の子と全く不同之無し、所詮謗法不信の

かくさ

人は体外の権にして法用能通の二種の方便なり爰を以て無二無

ふどうこれな

ここに

別に非るなり、今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱え奉るは是

秘妙方便にして体内なり故に妙法蓮華經と題して次に方便品

と云えり、妙樂の記の三の釈に本疏の即是真秘の即を以円為即

と消釈せり、即は円なれば法華經の別名なり即とは凡夫即極

・諸法実相の仏なり、円とは一念三千なり即と円と言は替れど

も妙の別名なり、一切衆生実相の仏なれば妙なり不思議なり

謗法の人今之を知らざる故に之を秘と云う、又云く法界三千を

秘妙とは云うなり秘とはきびしきなり三千羅列なり是より外に

不思議之無し、大謗法の人たりと云うとも妙法蓮華經を受持

し奉る所を妙法蓮華經方便品とは云うなり今末法に入つて

正しく日蓮等の類の事なり、妙法蓮華經の体内に爾前の人法

を入るを妙法蓮華經方便品とは云うなり、是を即身成仏とも

によぜほんまつくきよう
如是本末究竟等とも説く、又方便とは十界の事なり又は無明

なり妙法蓮華経は十界の頂上なり又は法性なり煩惱即

菩提・生死即涅槃是なり、以円為即とは一念三千なり妙と即と

は同じ物なり一字の一念三千と云う事は円と妙とを云うなり円

とは諸法実相なり、円とは釈に云く円を円融・円満に名くと

円融は迹門・円満は本門なり又は止観の二法なり又は我等が

色心の二法なり一字の一念三千とは慧心流の秘蔵なり、口は

一念なり員は三千なり一念三千とは不思議と云う事なり、此の

妙は前三教に未だ之を説かず故に秘と云うなり、故に知ぬ

南無妙法蓮華経は一心の方便なり妙法蓮華経は九識なり

十界は八識已下なり心を留めて之を案ず可し、方とは即十方

・十方は即十界なり便とは不思議と云う事なり云云。

第二諸しよぶつ仏ちえ智慧じんじん甚深むりよう無量ごちえ其智慧もん門の事もんく 文句もんくの三にに云いわく先くず実をを

歎たんじ次にに権をを歎たんず、実とはは諸しよぶつ仏の智慧ちえなり三種の化け他たの権ごんじつ実にに

非あらず故ゆえに諸しよぶつ仏と云いう自じぎ行ようの实をを顕あらわす故ゆえに智ちえ慧と言いう、此の智ちえ慧と

の体すなわ即ち一いっしん心の三の智なりなり、甚じん深じん

むりよう
無量とは即ち称歎の辞なり仏の実智の豎に如理の底に徹する
すなわ しょうたん
ことを明す故に甚深と言う、横に法界の辺を窮む故に無量と言
ゆえ じんじん
むりよう
う無量甚深にして豎に高く横に広し、譬えば根深ければ則ち
えだしげ みなもととお
条茂く源遠ければ則ち流長きが如し実智既に然り権智例して
しかり
爾り云云、其智慧門は即ち是れ権智を歎ずるなり蓋し是れ自行
ごちえもん すなわ こ こんち たん こ じぎよう
の道前の方便進趣の力有り故に名けて門と為す、門より入つて
ほうべん ゆえ
道中に到る道中を實と称し道前を権と謂うなり、難解難入とは
しょう
権を歎ずるの辞なり不謀にして了し無方の大用あり、七種の
たん ふもう
ほうべん しょうきたく
方便測度すること能わず十住に始めて解す十地を入と為す初
あた じゅうじゅう
と後とを挙ぐ中間の難示難悟は知る可し、而るに別して声聞
あ ちゅうげん なん なん べ し か しょうもん
・縁覚の所不能知を挙ぐることは執重きが故に別して之を破す
えんかく しょうふのうち あ ゆえ
るのみ、記の三に云く豎高横広とは中に於て法譬合あり此れ
い わ じゅうこうおうこう おい ほつび こ

を以て後を例す、今実を釈するに既に周く横豎を窮めたり下に
権を釈するに理深極なるべし、下に当に権を釈すべし予め其の
相を述す故に云云と註す、其智慧門とは其とは乃ち前の実果の
因智を指す若し智慧即門ならば門は是れ権なり若し智慧の門な
らば智即ち果なり、蓋し是等とは此の中に須く十地を以て道前
と為し妙覺を道中と為し証後を道後と為すべし、故に知んぬ
文の意は因の位に在りと。

御義口伝に云く此の本末の意分明なり、中に豎に高く横に広
しとは豎は本門なり横は迹門なり、根とは草木なり草木は上
へ登る此れは迹門の意なり、源とは本門なり源は水なり
水は下へくだる此れは本門の意なり、条茂とは迹門十四品な
り流長とは本門十四品なり智慧とは一心の三智なり門とは此の

智慧ちえに入る処ところの能入の門なり三智の体とは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきような

り門とは信心しんじんの事なり、爰ここをを以て第二の巻に以信得入と云う入

と門とは之これ同じきなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと

唱となえ奉たてまつるを智慧ちえとは云うなり、譬喩品ひゆほんに云く「唯有一門ゆいいういちもん」と門

に於おいて有門・空門・亦有やくうやくうもん亦空門・非有非空門あるなり、有門は

生なり空門は死なり亦有やくうやくうもん亦空門は生死しょうじいちねん一念なり非有非空門は生

に非あらず死に非あらず有門は題目だいもくの文字もんじなり空門は此この五字ごじに万法を

具足ぐそくして一方いっぽうにとどこうらざる義なり、亦有やくうやくうもん亦空門は五字ごじに

具足ぐそくする本・迹なり非有非空門は一部の意なり、此の内証ないしようは

法華ほっけいぜん已前にじようの二乗ちえの智慧およの及およばざる所なり、文句もんくの三いに云く「七

種ほうべんしきたくの方便ほうべんしきたく測度そくどすること能あたわず」と、今日蓮等いまにちれんの類たぐいは此この智慧ちえ

に得入とくにゆうするなり、仍よつて偈頌げじゆに除諸菩薩衆信力堅固者と云うは

われらぎようじゃ
我等行者の事を説くなり云云。

第三唯以一大事因縁の事 文句の四に云く一は即ち一実相なり五

に非ず三に非ず七に非ず九に非ず故に一と言うなり、其の性

広博にして五三七九より博し故に名けて大と為す、諸仏出世の

儀式なり故に名けて事と為す、衆生に此の機有つて仏を感じず

故に名けて因と為す、仏機を承けて而も応ず故に名けて縁とな

す、是を出世の本意と為す。

御義口伝に云く一とは法華経なり大とは華嚴なり事とは中間

の三昧なり、法華已前にも三諦あれども碎けたる珠は宝に

非ざるが如し云云、又云く一とは妙なり大とは法なり事とは蓮

なり因とは華なり縁とは経なり云云、又云く我等が頭は妙な

り喉は法なり胸は蓮なり胎は華なり足は経なり此の五尺の身

妙法蓮華經の五字なり、此の大事を釈迦如来四十余年の間隱密

したもうなり今經の時説き出したもう此の大事を説かんが

ために仏は出世したもう我等が一身の妙法五字なりと開仏知見

する時即身成仏するなり、開とは信心の異名なり信心を以て

妙法を唱え奉らば聴て開仏知見するなり、然る間信心を開く

時南無妙法蓮華經と示すを示仏知見と云うなり、示す時に

靈山淨土の住処と悟り即身成仏と悟るを悟仏知見と云うな

り、悟る当体・直至道場なるを入仏知見と云うなり、然る間

信心の開仏知見を以て正意とせり、入仏知見の入の字は迹門

の意は実相の理内に歸入するを入と云うなり本門の意は理即

本覺と入るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る

程の者は宝塔に入るなり云云、又云く開仏知見の仏とは九界

所具しよぐの仏界ぶつかいなり知見ちけんとは妙法みょうほうの二字止觀しかんの二字寂照じやくしやうの二徳しよぐ
生死しやうじの二法ふっしんなり色心因果しきしんいんがなり、所詮知見しよせんちけんとは妙法みょうほうなり九界所具しよぐ
の仏心ぶつしんを法華經ほけきやうの知見ちけんにて開く事なり、爰ここをを以て之これを思うに仏
とは九界しゅじやうの衆生の事なり、此の開覺かいかく顕れて今身こんじんより仏身ぶつしんに至るいた
まで持つや否いなやと示す処ところが妙法みょうほうを示す示仏知見じぶつちけんと云うなり、
師弟感応していかんのうして受け取る時如我等無異にやがとうむいと悟るを悟仏知見ごぶつちけんと云うな
り、悟つて見れば法界三千ほっかいさんぜんの己己こここの当体法華經とうたいほけきやうなり此の内証ないしやう
に入るを入仏知見にゆうぶつちけんと云うなり秘す可べし云云、又云く四仏知見しぶつちけんと
は八相なり開とは生の相なり入とは死の相なり中間ちゆうげんの示悟は
六相なり下天託胎等じぶつちけんは示仏知見しぶつちけんなり出家降魔成道じやうどうてんほうりん轉法輪等ちゆうりんは
悟仏知見ちけんなり、權教こんきやうの意は生死しやうじを遠離おんりする教なるが故ゆえに
四仏知見しぶつちけんに非あらざるなり、今經こんきやうの時生死しやうじの二法は一心いっしんの妙用みやうゆう

有無の二道は本覺の真徳と開覺するを四仏知見と云うなり、
四仏知見を以て三世の諸仏は一大事と思召し世に出現したも
うなり、此の開仏知見の法華經を法然は捨閉閣抛と云い弘法
大師は第三の劣戲論の法とののしれり、五仏道同の舌をきる者
に非ずや、慈覺大師・智証等は惡子に劍を与えて我が親の頭
をきらする者に非ずや云云、又云く一とは中諦・大とは空諦
・事とは仮諦なり此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無
妙法蓮華經是なり、此の五字日蓮出世の本懷なり之を名けて
事と為す、日本國の一切衆生の中に日蓮が弟子・檀那と成る
人は衆生有此機感仏故名為因の人なり、夫れが為に法華經の
極理を弘めたるは承機而応故名為縁に非ずや、因は下種なり縁
は三五の宿縁に歸するなり、事の一念三千は、日蓮が身に當

りての大事なり、一とは一念・大とは三千なり此の三千ときたるは事の因縁なり事とは衆生世間・因とは五陰世間・縁とは国土世間なり、国土世間の縁とは南閻浮提は妙法蓮華經を弘むべき本縁の国なり、經に云く「閻浮提内広令流布使不断絶」是なり云云。

第四五濁の事 文句の四に云く劫濁は別の体無し劫は是長時・

刹那是是短時なり、衆生濁は別の体無し見慢果報を攬る煩惱

濁は五鈍使を指て体と為し見濁は五利使を指て体と為し命濁は

連持色心を指して体と為す。

御義口伝に云く日蓮等の類いは此の五濁を離るるなり、我此土

安穩なれば劫濁に非ず実相無作の仏身なれば衆生濁に非ず・

煩惱即菩提・生死即涅槃の妙旨なれば煩惱濁に非ず・

五百塵点劫より無始本有の身なれば命濁に非ざるなり、
しょうじきしやほうべん たんせつむじょうどう ぎょうじや あらざ
正直捨方便・但説無上道の行者なれば見濁に非るなり、所詮
なむ みょうほうれんげきょう おこ こじやく にほんこく
南無妙法蓮華經を境として起る所の五濁なれば、日本国の
いっさいしゅじょうこじやく
一切衆生五濁の正意なり、されば文句四に云く「相とは四濁
増劇にして此の時に聚在せり瞋恚増劇にして刀兵起り貪欲増
劇にして飢餓起り愚癡増劇にして疾疫起り三災起るが故に煩惱
ますます
倍隆んに諸見転た熾んなり」經に如来現在猶多怨嫉・
きょうめつご
況滅度後と云う是なり、法華經不信の者を以て五濁障重の者
とす經に云く「以五濁惡世但樂著諸欲如是等衆生終不求
ぶつどう
仏道」云云、仏道とは法華經の別名なり天台云く「仏道とは別
して今經を指す」と。
こんきょう

第五比丘比丘尼有懷増上慢優婆塞我慢優婆夷不信の事 文句の

四に云く上慢じやうまんと我慢がまんと不信ふしんと四衆ししゆう通じて有り、但し出家ただ しゆつけの二衆は多く道を修しゆうし禅を得て謬あやまつて聖果おもと謂ひこえい偏じやうまんに上慢じやうまんを起す、在俗ざいそくは矜高きやうかうにして多く我慢がまんを起す女人にょにんは智浅ちせんくして多く邪僻じゃへきを生ずみずか自ら其の過を見ずとは三失心おほを覆う、疵きずを蔵かくし徳を揚あげて自ら省みずかること能あたわざるは是れ無慙むざんの人なり、若し自ら過を見れば是れ有羞うしゆうの僧なり記の四に云く疵きずを蔵かくす等とは三失しやくを釈しやくするなり疵きずを蔵かくし徳を揚あぐは上慢じやうまんを釈しやくす、自ら省みずかること能あたわざるは我慢がまんを釈しやくす、無慙むざんの人とは不信ふしんを釈しやくす、若し自ら過を見るは此の三失無いまし未だ果を証せずと雖いえども且しばらく有羞うしゆうと名なく。

御義口伝おんぎくでんに云く此本末ほんまつの釈しやくの意は五千の上慢じやうまんを釈しやくするなり委くわしくは本末ほんまつを見る可べきなり、比丘びく・比丘尼びくにの二人は出家しゆつけなり共

に増上慢ぞうじょうまんと名なく疵きずを蔵かくくし徳とくを揚あぐるを以もつて本ほんとせり、優婆塞うばそく

は男おとこなり我慢がまんを以もつて本ほんとせり優婆夷うばいは女人にょにんなり無慙むざんを以もつて本ほんと

せり、此この四衆ししゅうは今いま・日本にほん国こくに盛さかなり經きやうには其数そのかず有あ五千ごせんと

有あれども日本にほん国こくに四十九億九万四千八百廿八人しじゅうきゅういっぴやくうじゅうきゅうにやうまんと見えたり、

在世ざいせいには五千人ごせんにん・仏ぶつの座ざを立てり今末法いままつぽうにては日本にほん国こくの一切いっさい

衆生しゅじやう悉ことごとく日蓮にちれんが所座しよざを立てり、比丘びく比丘びく尼に増上慢ぞうじょうまんとは道隆どうりゅう

・良觀りやうかん等らうに非あらずや又鎌倉かまくら中の比丘びく尼に等らうに非あらずや、優婆塞うばそくとは

最明寺さいみやうじやう優婆夷うばいとは上下じやうげの女人にょにんに非あらずや敢あえてて我が過あやまちを知る可べから

ざるなり、今日蓮けふにちれん等の類たぐいを誹謗ひぼうして惡名あくみやうを立つ豈あに不自見みづか其過ご

の者ものに非あらずや大謗法たうぼうの罪人ざいにんなり法華ほつけの御座ござを立つ事こと疑うたがい無なき者もの

なり、然しかりと雖いえども日蓮にちれんに値あう事こと是併しかしながれいぶつにたい

礼仏而退らいぶつにたいは輕賤きやうせんの義ぎなり全しんく信解しんげの礼退らいたいに非あらざるなり此等これらの

衆は於戒有欠漏けつろの者なり、文句もんくの四に云く「於戒有欠漏けつろとは律
義失有あるをば欠と名け定共道共失有るをば漏もと名なく」と此の五
千じゅうまんの上慢じょうまんとは我等所具われらしよくの五住ごじゅうの煩惱ぼんのうなり、今法華經いまほけきょうに値あい
たる時たてまつ慢即法界じまんそくほっかいと開ひらきて礼仏らいぶつ而退にたいするを仏威徳いとく故去いとくと云うな
奉ほうる時慢即法界じまんそくほっかいと開ひらきて礼仏らいぶつ而退にたいするを仏威徳いとく故去いとくと云うな
り、仏わとは我等所具われらしよくの仏界ぶつがいなり威徳いとくとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうなり、
故去ことは而去不去ふげんの意いなり普賢品ふげんの作礼さらい而去にこ之これを思おもう可べきな
り、又云いわく五千の退座たいざと云う事・法華ほっけの意いは不退座ふたいなり其そのの故ゆえ
は諸法実相しよほうじつそうりやく略開三顯りやくかいさんけん一いつの開悟かいごなり、さて其そのの時ときは我慢がまん増上慢ぞうじょうまん
とは慢即法界そくほっかいと開ひらきて本有ほんぬの慢機まんきなり、其数有五千とは我等われらが
五住ごじゅうの煩惱ぼんのうなり若もし又五住ごじゅうの煩惱ぼんのう無なしと云うは法華ほっけの意いを失うしない
たり、五住ごじゅうの煩惱ぼんのう有あり乍なら本有常住ほんぬじょうじゅうぞと云う時其数有五千と
説だんなくくなり、断惑だんなくに取り合あわらず其そのの儘まま本有妙法ほんぬみょうほうの五住と見れば

不自見其過ごと云うなり、さて於戒有欠漏けつろとは小乘しょうじょう權教ごんぎょうの
対治衆病たいじしゅうびょうの戒法かいほうにては無きなり是名持戒じかいの妙法みょうほうなり故にゆえ
欠漏けつろの当体とうたい其の儘まま是名持戒じかいの体なり、然しかるに欠漏けつろを其の儘まま本有ほんぬ
と談だんずる故に護惜其瑕疵ごしゃくごけしとは説くなり、元より一乗いちじょうの妙戒みょうかいな
れば一塵含法界一念遍十方いちじん ほっかいいちねん じゅつぽうする故に是小智已出ちいしゅつと云うなり、
糟糠そうこうとは塵塵法ちりちり ほんがく・本覺ほんがくの三身さんじんなり故にすくなき福德とうたいの当体みょうかいも
本覺無作ほんがくむさの覺体かくたいなり、不堪受是法ふかんじゅぜほうとは略開しょうかいの諸法しよほう実相じつそうの法体ほつたいを
聞きて其の儘そ まま開悟かいごするなりさて身子しんし尊者そんじや鈍根どんこんのために分別ぶんべつ解説げせつ
したまえと請こうう広開こうかい三の法門ほうもんをば不堪受是法ふかんじゅぜほうと説く、さて法華ほつけ
の実義じつぎに歸りて見れば妙法みょうほうの法体ほつたいは更に能受所受みょうほうを忘るるな
り不思議ふしぎの妙法みょうほうなり、本法ほんぽうの重を悟りて見る故ゆえに此衆無枝葉ししゅうむしやう
と云うなり、かかる内証ないしやうは純一実相じつそう・実相外更無別法じつそうげきやうなれば

唯^ゆ有^{いう}諸^{しよ}貞^{じやう}実^{じつ}なり所^{しよ}詮^{せん}貞^じ実^{じつ}とは色^{しき}心^{しん}を妙^{みやう}法^{ほう}と開^{ひら}く事^{こと}なり、
今日^{けふ}蓮^{れん}等^{たう}の類^{るい}南^な無^む妙^{みやう}法^{ほう}蓮^{れん}華^げ經^{きやう}と唱^{とな}え奉^{たてまつ}る処^{ところ}を唯^ゆ有^{いう}諸^{しよ}貞^じ実^{じつ}と
説^{せつ}くなり、諸^{しよ}とは諸^{しよ}法^{ほう}実^{じつ}相^{さう}の仏^{ぶつ}なり諸^{しよ}は十^{じゆ}界^{かい}なり貞^じ実^{じつ}は十^{じゆ}界^{かい}
の色^{しき}心^{しん}を妙^{みやう}法^{ほう}と云^いうなり今^{こん}經^{きやう}に限^{かぎ}る故^{ゆゑ}に唯^{ただ}と云^いうなり、五^ご千^{せん}
の上^{じやう}慢^{まん}の外^{ほか}全^{ぜん}く法^{ほふ}華^げ經^{きやう}之^{これ}無^なし五^ご千^{せん}の慢^{まん}人^{にん}とは我^{われ}等^らが五^ご大^{だい}な
り五^{そく}大^{みやう}即^{ほう}妙^{れん}法^げ蓮^き華^{きやう}經^{なり}、五^ご千^{せん}の上^{じやう}慢^{まん}は元^{がん}品^{ぽん}の無^む明^{みやう}なり故^{ゆゑ}に
礼^{れい}仏^{ぶつ}而^に退^{たい}なり此^これは九^く識^{しき}八^{はつ}識^{しき}六^{りく}識^{しき}と下^{くだ}る分^{ぶん}なり流^る轉^{てん}門^{もん}の談^{だん}道^{だう}な
り、仏^{ぶつ}威^い德^{とく}故^こ去^きとは還^{げん}滅^{めつ}門^{もん}なり然^{しか}らば威^い德^{とく}とは南^な無^む妙^{みやう}法^{ほう}蓮^{れん}華^げ經^{きやう}
なり本^{まよ}迷^い本^{ぽん}悟^ごの全^{ぜん}体^{たい}なり能^よく能^よく之^{これ}を案^{あん}ず可^べし云^い云^い。
第六^{だい}如^に我^が等^{たう}無^む異^い如^に我^が昔^{しやく}所^{しよ}願^{がん}の事^{こと} 疏^{じよ}に云^いく因^{いん}を拏^あげて信^{しん}を勸^{すす}む
と。

御^{おん}義^ぎ口^く伝^{でん}に云^いく我^わとは釈^{しやく}尊^{そん}・我^が実^{じつ}成^{じやう}仏^{ぶつ}久^く遠^{でん}の仏^{ぶつ}なり此^この本^{ほん}門^{もん}

の釈尊しゃくそんは我等衆生の事なり、如我の我は十如是じよぜの末の七如是しよぜ

なり九界の衆生しゆじやうは始の三如是によぜなり我等衆生は親なり仏は子な

り父子一体にして本末究竟等ほんまつくきやうなり、此の我等を寿量品じゆりやうほんに無作むさ

の三身さんじんと説きたるなり、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱うとな

る者これ是なり、爰ここをを以て之これを思うに釈尊しゃくそんの惣別の二願とは我等われら

衆生しゆじやうの爲ために立てたもう処ところの願なり、此の故に南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう

と唱え奉りて日本国とな たてまつ にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうを我が成仏じやうぶつせしめんと云う所

の願併しかしながらら如我昔所願にやがしやくしやがんなり、終に引導ついして己身こしんと和合わごうするを

今者こんじやいまんそく已満足こころうべと意得可きなり、此の今者こんじやいまんそく已満足こころうべの已の字すでにと

読むなり何の処いすれを指して已すでにとは説けるや、凡およ所釈しよしやくの心は

諸法実相しよほうじつそうの文を指して已すでにとは云えり、爾しかりりと雖も当家いえどの立義りつきぎ

としては南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうを指して今者こんじやいまんそく已満足こころうべと説かれたりと

意得可きなり、されば此の如我等無異の文肝要なり、如我昔所願

は本因妙如我等無異は本果妙なり妙覺の釈尊は我等が血肉

なり因果の功德骨髓に非ずや、釈には拳因勸信と拳因は即ち本

果なり、今日蓮が唱うる所の南無妙法蓮華經は末法一万年の

衆生まで成仏せしむるなり、豈今者已満足に非ずや、已とは

建長五年四月廿八日に初めて唱え出す処の題目を指して已と

意得可きなり、妙法の大良藥を以て一切衆生の無明の大病

を治せん事疑い無きなり此れを思い遣る時んば満足なり満足

とは成仏と云う事なり、釈に云く「円は円融・円満に名け頓

は頓極頓足に名く」と之を思う可し云云。

第七於諸菩薩中正直捨方便の事 文句の四に云く於諸菩薩中の

下の三句は正しく実を顯すなり、五乗は是れ曲にして直に非ず

通別は偏傍へんぼうにして正あらに非いまず今皆彼の偏曲へんまを捨てて但正直しやうじきの一道を説くなり。

御義口伝おんぎくでんに云いく此この菩薩ぼさつとは九界の第九に居こしたる菩薩ぼさつなり又一切衆生いっさいしゆじやうを菩薩ぼさつと云いふなり今日蓮等の類いまにちれんなり、又諸天善神しよてんぜんじん等迄こも是これ菩薩ぼさつなり正直しやうじきとは煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即涅槃そくねはんなり、さて一道いどうとは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり今末法いままつぽうにして正直しやうじきの一道いどうを弘ひろむる者は日蓮等にちれんの類たぐいに非あらずや。

第八当来世惡人間仏説一乘迷惑不信受破法墮惡道の事

御義口伝おんぎくでんに云いく当来世とうらいせとは末法まつぽうなり惡人あくにんとは法然ほうねん・弘法こうぼう・慈覺じかく・智証等ちしやうなり、仏ぶつとは日蓮等にちれんの類たぐいなり一乘いちじやうとは妙法蓮華經みやうほうれんげきやうなり不信ふしんの故ゆえに三惡道さんあくどうに墮だす可べきなり。

譬喩品ひゆほん九箇だいいの大事だいじ

第一だいいちひゆほん譬喩品ひゆほんの事こと

文句もんくの五ごに云いく譬ひとは比況ひきやうなり喩たとえとは曉訓たうくんな

り大悲だいひ息ひやまず巧智こうちむへん無辺むへんなれば更に樹じを動かうごかして風ふうを訓しんえ扇せんを

挙あげて月げつを喩たとえすと。

御義おんぎ口伝くでんに云いく大悲だいひとは母ははの子こを思おもう慈悲じひの如ごとし今日蓮等けふにちれんの

慈悲じひなり、章しょう安あん云いく「彼のため為ために惡あくを除はらくは即是そくこれ彼の親おや」と、

巧智こうちとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり諸宗しよしゆう無得道とくどうの立義りつぎなり巧ぎやう於難おうなん

問答もんどうの意いなり更きやうとは在世ざいせに次ついでで滅後めつごの事ことと意得こころうべ可べきなり、樹

を動うごすとは煩惱ぼんのうなり風ふうを訓しんるとは即菩提そくぼだいなり扇あを挙あぐとは生死しやうじ

なり月げつを喩たとえすとは即涅槃そくねはんなり、今日蓮等けふにちれんの類たぐい南無なむ

妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる時とき大白牛車だいびやくこしやに乗のりじて直至道場じきしどうじやうするな

り、記いの五ごに云いく「樹じと扇せんと風ふうと月げつとは唯ただ円教えんきやうの理りなり」と

又云く「法説の実相は何ぞ隠れ何ぞ顕れんや長風息むこと靡く
空月常に懸れり」と此釈之を思う可し、隠とは死なり顕とは生
なり長風とは我等が息なり空月とは心月なり法華の生死とは
三世常恒にして隠顯之無し我等が息風とは吐く処の言語なり
是南無妙法蓮華經なり、一心法界の覺月常住にして懸れり
是を指して唯円教の理と釈せり円とは法界なり教とは三千羅
列なり理とは実相の一理なり云云。

第二即起合掌の事 文句の五に云く外義を敍するとは即起合掌
は身の領解と名く昔は権実二と為す掌の合わざるが如し、
今は権即実と解る二の掌の合するが如し、向仏とは昔は権
・仏因に非ず実・仏果に非ず今権即実と解して大円因を成ず因
は必ず果に趣く故に合掌向仏と言うと。

おんぎくでん いわ がつしよう ほけきよう いみよう
御義口伝に云く合掌とは法華經の異名なり向仏とは法華經に
あ たてまつ
値い奉ると云うなり合掌は色法なり向仏は心法なり、色心の
みようほう かいこ
二法を妙法と開悟するを歡喜踊躍と説くなり、合掌に於て又
たなごころ
二の意之れ有り合とは妙なり 掌 とは法なり、又云く合とは
みようほうれんげきよう たなごころ
妙法蓮華經なり 掌 とは廿八品なり、又云く合とは仏界なり
たなごころ

掌 とは九界なり九界は権・仏界は実なり、妙樂大師の云く

「九界を権と爲し仏界を實と爲す」と十界悉く合掌の二字に納

まッて森羅三千の諸法は合掌に非ざること莫きなり、惣じて

三種の法華の合掌之れ有り今の妙法蓮華經は三種の法華未分

なり、爾りと雖も先ず顯說法華を正意と爲すなり、之に依つて

伝教大師は於二仏乗とは根本法華の教なり○妙法の外更に

一句の余經無しと、向仏とは二文文皆金色の仏体と向い奉る事

がっしやう

なり合掌の二字に法界を尽したるなり、地獄 餓鬼の己己の

とうたいそ さんぜん そのまがっしやう

当体其の外三千の諸法其の儘合掌向仏なり而る間法界悉く

しやりほつ しやりほつ ほけきやう

舍利弗なり舍利弗とは法華經なり、舎とは空諦利とは仮諦弗と

ちゆうどう えんゆうさんたい みやうほう しやりほつ ほんごこ

は中道なり円融三諦の妙法なり舍利弗とは梵語此には身子と

しんし じゅっかい しきしん じゅっかい

云う身子とは十界の色心なり身とは十界の色法子とは十界

いまにちれん たぐ なむ みやうほうれんげきやう とな たてまつ

の心法なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は

悉く舍利弗なり、舍利弗は即釈迦如来・釈迦如来は即法華經・

ほけきやう そくわれら しきしん よつ しんし

法華經は即我等が色心の二法なり、仍て身子此の品の時間此

ほうせい りやうげ みやうじそくほうせい しよほう

法音と領解せり、聞とは名字即法音とは諸法の音なり諸法の音

とは妙法なり、爰を以て文句に釈する時長風息むこと靡しと

みやうほう ここを もんく しやく じちやう や な

長風とは法界の音声なり、此の音声を信解品に

ほっかい おんじやう おんじやう しんげ

以仏道声令一切聞と云えり一切とは法界の衆生の事なり此の

いぶつどうしやうれいいっさいもん いっさい ほっかい しじやう

以仏道声令一切聞と云えり一切とは法界の衆生の事なり此の

おんじょう　な　むみょうほうれんげきよう

音声とは南無妙法蓮華經なり。

第三云く身意泰然快得安穩の事　い　わ　しんにたいぜん　あんのん　文句の五に云く從仏は是れ身の

喜を結するなり聞法は此れ口の喜を結するなり断諸疑悔とは是れ

意の喜を結すと。

御義口伝に云く身意泰然とは煩惱即菩提・生死即涅槃なり、身

とは生死即涅槃なり意とは煩惱即菩提なり從仏とは日蓮に從う

類い等の事なり口の富とは南無妙法蓮華經なり意の喜とは

無明の惑障無き故なり、爰を以て之を思うに此の文は一心三觀

・一念三千我等が即身成仏なり方便の教は泰然に非ず安穩に

非ざるなり行於險逕多留難故の教なり。

第四得仏法分の事

御義口伝に云く仏法の分とは初住一分の中道を云うなり、

しやくもんしよじゅうほんもん
迹門 初住 本門 二住 已上と云う事は此の分の字より起るなり、
しよせん
所詮此の分の一字は一念三千の法門なり其の故は地獄は地相の
ないし
分で仏実を証し乃至二千の諸法己己の当体の分で仏果を証した
しんじつ
るなり真実の我等が即身成仏なり、今日連等の類南無
みょうほうれんげきよう
妙法蓮華經と叫うる分で仏果を証したるなり、分とは權教は
とくどう
無得道・法華經は成仏と分つと意御可きなり、又云く分とは
ほんもんじゅうりようほん
本門 寿量品の意なり己己本分の分なり、惣じて迹門 初住 分
きようそう
証と云うは教相なり真実は初住分証の処にて一經は極りた
るなり。

第五而自廻轉の事 記の五に云く・或は大論の如し經に而自廻轉
しんし
と云うは身子の得記を聞きて法性自然にして轉じ因果依正
じたことごと
自他悉く轉ずるを表すと。

御義口伝に云く草木成仏の証文に而自廻轉の文を出すなり
是れ一念三千の依正体一の成仏を説き極めたるなり、草木
成仏の証人とは日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを指
すなり、廻轉とは題目の五字なり自とは我等行者の事なり記
の五の釈能く能く之を思うべし云云。

第六一時俱作の事

御義口伝に云く一時とは末法の一時なり俱作とは南無
妙法蓮華經なり俱とは畢竟住一乘なり、今日蓮等の類い所作
には題目の五字なり余行を交えざるなり、又云く十界の語言
は一返の題目を俱作したり、是れ豈感応に非ずや。

第七以譬喩得解の事 止觀の五に云く智とは譬に因るに斯の意
徴し有り。

御義口伝に云く此の文を以て鏡像円融の三諦の事を伝うるなり、惣じて鏡像の譬とは自浮自影の鏡の事なり此の鏡とは一心の鏡なり、惣じて鏡に付て重重の相伝之有り所詮鏡の能徳とは万像を浮ぶるを本とせり妙法華華經の五字は万像を浮べて一法も残る物之れ無し、又云く鏡に於て五鏡之れ有り妙の鏡には法界の不思議を浮べ法の鏡には法界の体を浮べ蓮の鏡には法界の果を浮べ・華の鏡には法界の因を浮べ・經の鏡には万法の言語を浮べたり、又云く妙の鏡には華嚴を浮べ・法の鏡には阿含を浮べ・蓮の鏡には方等を浮べ・華の鏡には般若を浮べ・經の鏡には法華を浮ぶるなり、順逆次第して意得可きなり、我等衆生の五体五輪妙法蓮華經と浮び出でたる間宝塔品を以て鏡と習うなり、信謗の浮び様能く能く之を案ず可し自浮自影

の鏡とは南無妙法蓮華經是なり云云。

第八唯一門の事 文句の五に云く唯一門とは上の以種種法門

宣示於仏道に譬う、門に又二あり宅門と車門となり宅とは生死

なり門とは出ずる要路なり、此は方便教の詮なり車とは大乘

の法なり門とは円教の詮たりと。

御義口伝に云く一門とは法華經の信心なり車とは法華經なり牛

とは南無妙法蓮華經なり宅とは煩惱なり自身法性の大地を

生死・生死と転ぐり行くなり云云。

第九今此三界等の事 文句の五に云く次に今此三界より下・第二

に一行半は上の所見諸衆生為生老病死之所焼煮を頌して第二

の所見・火の譬を合す、唯我一人より下・第三に半偈は上の

仏見此已便作是念と頌し、驚入火宅を合するなりと。

御義口伝に云く此の文は一念三千の文なり一念三千の法門は
迹門には生陰二千の世間を明し本門には国土世間を明すなり、
又云く今此三界の文は国土世間なり其中衆生の文は五陰世間
なり而今此処多諸患難唯我一人の文は衆生世間なり、又云く
今此三界は法身如来なり其中衆生悉是吾子は報身如来なり
而今此処等は応身如来なり。

信解品六箇の大事

第一信解品の事 記の六に云く正法華には信樂品と名く其の義
通ずと雖も樂は解に及ばず今は領解を明かす何を以てか樂と云
わんや。

御義口伝に云く法華一部廿八品の題号の中に信解の題号此の品
に之れ有り、一念三千も信の一字より起り三世の諸仏の成道

も信の一字より起るなり、此の信の字元品の無明を切る利剣なり其の故は信は無疑曰信とて疑惑を断破する利剣なり解とは智慧の異名なり信は価の如く解は宝の如し三世の諸仏の智慧をかうは信の一字なり智慧とは南無妙法蓮華経なり、信は智慧の因にして名字即なり信の外に解無く解の外に信無し信の一字を以て妙覺の種子と定めたり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と信受領納する故に無上宝聚不求自得の大宝珠を得るなり信は智慧の種なり不信は墮獄の因なり、又云く信は不變真如の理なり其の故は信は知一切法皆是仏法と体達して実相の一理と信ずるなり解は随縁真如なり自受用智を云うなり、文句の九に云く疑い無きを信と曰い明了なるを解と曰うと、文句の六に云く中根の人譬喩を説くを聞きて、初めて疑惑を破して大乘

の見道に入る故に名けて信と為す進んで大乘の修道に入る
故に名けて解と為す、記の六に云く大を以て之に望むるに乃ち
両手を分ちて以て二道に属す疑を破するが故に信なり進んで
入るを解と名く、信は二道に通じ解は唯修に在り故に修道を
解と名くと云うと。

第二捨父逃逝の事 文句の六に云く、捨父逃逝とは大を退するを
捨と為し無明自ら覆うを逃と曰い生死に趣向するを逝と為す
と。

御義口伝に云く父に於て三之れ有り法華經・釈尊・日蓮是なり、
法華經は一切衆生の父なり此の父に背く故に流転の凡夫
となる、釈尊は一切衆生の父なり此の仏に背く故に備さに諸
道を輪ぐるなり、今日蓮は日本国の一切衆生の父なり、章安

大師だいしの云いわく「彼たが為ために悪あくを除すく即すなわち是これ彼かが親おやなり」と、退たい大だいのな大なは南な無む妙みょう法ほう蓮れん華げ經きやうなり無む明みょうとは疑ぎ惑わく謗ほう法ほうなり、自みら覆おほうとは法ほう然ぜん・弘こう法ぼう・慈じ覺かく・智ち証しょう・道どう隆りゅう・良りやう觀かん等らうの惡あく比ひ丘きう・謗ほう法ほうの失とがを恣ほしまいまに覆おほいかくすなり。

第三またぐうこん加復窮困の事 文句もんくの六むに云いわく、出要しゅえの術じゆつを得えざるを又窮しんじんと為なし、八苦はつこの火くわに焼やかるが故ゆゑに困こんと為なすと。

御義おんぎ口伝くでんに云いわく出要しゅえとは南な無む妙みょう法ほう蓮れん華げ經きやうなり術じゆつとは信心しんじんなり、今日けふ蓮れん等らうの類るいい窮困きうこんを免離めんりする事ことは法華ほけきやう經きやうを受持じゆじし奉たてまつるが故ゆゑなり、又また云いわく妙法みょうほうに値あい奉たてまつる時ときは八苦はつこの煩惱ぼんのうの火くわ自受用じじゆゆう報身ほうしんの智火ちくわと開覺かいかくするなり云云。

第四しんねけこん心懷悔恨の事 文句もんくの六むに云いわく悔くいを父ちちに約うらし恨みを子こに約うらすと、記きの六むに云いわく父ちちにも悔恨けこんあり、子こにも悔恨けこんありと。

おんぎくでん いわ にほんこく いっさいしゅじょう
御義口伝に云く日本国の一切衆生は子の如く日蓮は父の如し、
ほっけふしん とが よ むげん だいじょう お
法華不信の失に依つて無間・大城に堕ちて返つて日蓮を恨み
ん、又日蓮も声も惜まず法華を捨つ可からずと云うべきものを
りょうぜん
靈山にて悔ること之れ有る可きか、文句の六に云く「心懷悔恨
とは昔・勤に教詔せず訓うることを無くして逃逝せしむる
ことを致すことを悔い子の恩義を惟わずして我を疎んじ他に親
しむるを恨む」と。

第五無上宝聚不求自得の事

おんぎくでん いわ むじょう
御義口伝に云く無上に重重の子細あり、外道の法に対すれば
さんそう むじょう げどう うじょう
三蔵教は無上外道の法は有上なり又三蔵教は有上・通教は
むじょう つうきょう うじょう べっきょう むじょう
無上・通教は有上別教は無上・別教は有上・円教は無上、
にぜん うじょう ほっけ むじょう しやくもん うじょう
又爾前の円は有上・法華の円は無上・又迹門の円は有上・

本門の円は無上、又迹門十三品は有上方便品は無上・又本門
十三品は有上・一品二半は無上、又天台大師所弘の止観は無上
・玄文二部は有上なり、今日蓮等の類いの心は無上とは南無
妙法蓮華經・無上の中の極無上なり、此の妙法を指して無上
・宝聚と説き給うなり、宝聚とは三世の諸仏の万行万善の諸
波羅蜜の宝を聚めたる南無妙法蓮華經なり、此の無上宝聚を
辛勞も無く行功も無く一言に受取る信心なり不求自得とは是れ
なり、自の字は十界なり十界各各得るなり諸法実相是なり、
然る間・此の文・妙覺の釈尊・我等衆生の骨肉なり能く
能く之を案ず可し云云。

第六世尊大恩の事

御義口伝に云く世尊とは釈尊・大恩とは南無妙法蓮華經な

り、釈尊しゃくそんの大恩を報ぜんと思わば法華經を受持じゆじす可き者なり
是れ即ち釈尊すなわ しゃくそんの御恩を奉じ奉るなり、大恩を題目だいもくと云う事は
次下つぎしもに以稀有事いけうじと説く、希有けううの事とは題目だいもくなり、此の大恩の
妙法蓮華經みょうほうれんげきようを四十余年の間秘し給たまいて後八箇年はちかねんに大恩を開き
給うなり、文句もんくの一に云く「法王運ほうおうを啓ひらくく」と運とは大恩の
妙法蓮華經みょうほうれんげきようなり云云、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ
奉りて日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじようを助けんと思おもうは豈世尊あにせそんの大恩に
非ずや、章安大師しょうあんだいし十種の恩を挙げたりしなり第一だいいちには慈悲じひ逗物とうもつ
の恩・第二には最初下種さいしよげしゆの恩・第三には中間隨逐ちゆうげんずいちくの恩・第四
には隱徳示拙じせつの恩・第五には鹿苑施小ろくおんせしようの恩・第六には耻小慕大ちしよう
の恩・第七には領地家業あんのんの恩・第八には父子決定ふしけつじようの恩・第九
には快得安穩あんのんの恩・第十には還用利多げんゆうの恩なり此の十恩即すなわち

衣座室の三軌なりと云云、記の六に云く「宿萌稍割けて尚
未だ敷榮せず長遠の恩何に由りてか報ず可き」と、又云く「注
家は但物として施を天地に答えず子として生を父母に謝せず感
報斯に亡するを以てなり、と云えり」、輔正記の六に云く「物
は施を天地に答えずとは謂く物は天地に由て生ずと雖も而も
天地の沢を報ずと云わず子も亦之の如し」と、記の六に云く
「況や復只だ我をして報亡せしむるに縁る斯の恩報じ☆きをや」
と、輔正記に云く「只縁令我報亡とは意に云く只如来の声聞
をして等しく亡報の理を得せしむるに縁るなり理は謂く一大
涅槃なり」と。

御義口伝に云く此くの如く重重の所釈之れ有りと雖も所詮
南無妙法蓮華經の下種なり下種の故に如影随形し給うなり、

いまにちれん か 今日蓮も此くの如きなり妙法蓮華經を日本国 にほんこく の一切衆生等に
与え授くる さず 豈釈尊 あにしゃくそん の十恩に非ずや、十恩は即ち衣座室の三軌
なりとは第一・第二・第三は大慈為室の御恩なり第四・第五第
六第七は柔和忍辱衣の恩なり第八第九第十は諸法空為座の恩な
り、第六の耻小慕大の恩を記の六に云く「故に頓の後に於て便ち
小化を垂れ弾 だんしょう 斥淘汰し槌砧鍛鍊す」と。

薬草喩品五箇の大事 やくそうゆほん だいじ

第一薬草喩品の事 だいいちやくそうゆほん 記の七に云く無始の性徳は地の如く大乘の
心を発するは種の如し二乗の心を発するは草木の芽茎の如し今
初住に入るは同じく仏乗の芽茎等を成ずるが如しと。

御義口伝に云く法華の心を信ずるは種なり諸法実相の内証に
入れば仏果を成ずるなり、薬とは九界の衆生の心法なり其の故

は権教ごんきょうの心は毒草なり法華ほっけに値あいぬれば三毒さんどくの煩惱ぼんのうの心地を
三身果満さんじんかまんの種なりと開覺かいかくするを藥とは云うなり、今日蓮等いまにちれんの
類たぐい妙法みょうほうの藥を煩惱ぼんのうの草に受くるなり煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即
涅槃ねはんと覺さとらしむるを喩ゆとは云うなり、釈しやくに云く「喩ゆとは曉ぎやう訓
なり」と藥草喩やくそうゆとは我等われら行者ぎやうじやの事なり。

第二此の品述じふつじよう 成段じやうだんの事

御義口伝おんぎくでんに云く述じゆつとは迦葉かしょうなり成じやうとは釈尊しやくそんなり、述じゆつ 成じやうの二
字じは迦葉かしょう・釈尊しやくそん一致いちじする義なり、所詮述しよせんじゆつは所化しよけの領解りやうげ、成じやうは
仏いんの印加いんかなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと領りやうするは述じゆつ
なり日蓮にちれんが贊嘆さんたんするは成じやうなり我等われらが即身成仏そくしんじやうぶつを説しやくき極ごくめたる
品しんなり、述じゆつ 成じやう一致符契いちふけいするは述じゆつ 成じやう不二ふじの即身成仏そくしんじやうぶつなり此
の述じゆつ 成じやうは法界三千ほっかいさんぜんの皆成みなじやうぶつ仏道ぶつだうの述じゆつ 成じやうなり。

第三雖一地所生一雨所潤等の事

御義口伝に云く随縁不變の起る所の文なり、妙樂大師云く

「随縁不變の説は大教より出で木石無心の言は小宗より生ず」

と、此の大教とは一經の惣体に非ず此の雖一地所生等の十七

字を指すなり、一地所生一雨所潤は無差別譬・而諸草木各有差

別は有差別譬なり無差別譬の故に妙なり有差別譬の故に法なり

云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは有差を置

くなり廿八品は有差別なり、妙法の五字は無差別なり、一地

とは迹門の大地一雨とは本門の義天・一地とは從因至果・

一雨とは從果向因、末法に至つて從果向因の一雨を弘通するな

り一雨とは題目に余行を交えざるなり、序品の時は雨大法雨と

説き此の品の時は一雨所潤と説けり一雨所潤は序品の雨大法雨

を重ねて仏・説き給うなり、一地とは五字ごじの中の經の一字なり
いちう
一雨とは五字ごじの中の妙の一字なり法蓮華ほうれんげの三字は三千万法・中
にも草木そうもくなり三乗・五乗・七方便ほうべん・九法界ほっかいなり云云。

第四破有法王出現世間の事

御義口伝おんぎくでんに云く有とは謗法ぼうぼうの者なり破とは折伏しゃくふくなり法王ほうおうとは
法華經ほけきようの行者ぎやうじやなり世間せけんとは日本国にほんこくなり、又云く破は空・有は
仮・法王ほうおうは中道ちゆうどうなり、されば此の文をば釈迦しゃか如来にょらいの種子しゆしと伝
うるなり惣そうじて三世さんぜの諸仏しよぶつの出世しゆつせは此の文に依よるなり、有とは
三界さんがい廿五有なり破とは有執を破するなり法王ほうおうとは十界じゆっかいの衆生しゆじやう
の心法なり王とは心法を云うなり諸法実相しよほうじつそうと開くを破有法王ほうほうおうと
は云うなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉るは謗法ほうぼう
の有執を断じて釈迦しゃか法王ほうおうと成ると云う事なり、破有ほうゆうの二字を以

て釈迦如来の種子しやかにょらい しゅしとは云うなり、又云く有と云うは我等われらが煩惱ぼんのう生死しやうじなり此の煩惱生死ぼんのうしやうじを捨てて別に菩提涅槃ぼだいねはん有りと云うは権教ごんきやう権門の心なり、今經こんきやうの心は煩惱生死ぼんのうしやうじを其の儘そのまま置いて菩提ぼだい涅槃ねはんと開く所を破と云うなり、有とは煩惱ぼんのう・破とは南無なむ妙法蓮華經みやうほうれんげきやうなり有は所破しよはなり破は能破のうはなり能破のうは・所破しよは共にじつそう実相の一理なり、序品じよぼんの時は尽諸有結じんしやうけつと説き此の品には破有はう法王ほうおうと説き譬喻品ひゆぼんの時は皆是我有かいぜがうと宣べたり云云。

第五我觀一切・普皆平等・無有彼此・愛憎之心・我無貪著・
亦無限礙やくもげんぎの事おんぎくでん

御義口伝に云く此の六句の文は五識なり我觀一切・普皆平等と
は九識なり無有彼此ひしとは八識なり愛憎之心あいそうしんとは七識なり我無とんじやく
貪著とんじやくとは六識なり亦無限礙やくもげんぎとは五識なり我等衆生の觀法かんぼうの

大體なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は豈
がかんいっさい がいにかいびようどう
我觀一切・普皆平等の九識の修行に非ずや爾らば無有彼此に
あいそうしん とんじやく
非ずや愛憎之心に非ずや我無貪著に非ずや亦無限礙に非ずや。

授記品四箇の大事

第一授記の事

文句の七に云く授とは是れ与の義なりと。

御義口伝に云く記とは南無妙法蓮華經なり授とは日本国の
いっさいしゅじょう
一切衆生なり不信の者には授けざるなり又之を受けざるなり、
いまにちれん なむみょうほうれんげきよう
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經の記を受くるなり、又云く授記
とは法界の授記なり地獄の授記は惡因なれば惡業の授記を罪人
ほっかい じゅき じごく じゅき あくこう
に授くるなり余は之に准じて知る可きなり、生の記有れば必ず
さす じゅん べ あり
死す死の記あれば又生ず三世常恒の授記なり、所詮中根の四
さんぜじょうこう じゅき しよせん

大声聞しょうもんとは我等われらが生老病死しょうろうびょうしの四相なり、迦葉かしようは生の相・
迦旃延かせんねんは老の相・日連しつれんは病の相・須菩提しゅぼだいは死の相なり、法華ほっけに
来きつて生老病死しょうろうびょうしの四相を四大声聞しやうもんと顯あらわしたり是れ即ち八相はつさふ
作さ仏ぶつなり、諸法実相しよほうじつそうの振舞ふるまいなりと記きを授さずくるなり妙法みやうほうの授記じゆき
なるが故ゆえに法界ほっかいの授記じゆきなり、蓮華れんげの授記じゆきなるが故ゆえに法界ほっかい清淨じやうじやう
なり經きやうの授記じゆきなるが故ゆえに衆生しゆじやうの語言ごげん音声おんじやうは三世常恒さんぜじやうかうの授記じゆき
なり、唯一言ただに授記しるすべき南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり云云。

第二迦葉光明かしようこうみやうの事

御義口伝おんぎくでんに云いく光明こうみやうとは一切衆生いっさいしゆじやうの相好そうかうなり光くわうとは地獄じごくの
灯燃とうねん猛火みやうか此れ即ち本覺自受用すなわの智火ほんかくじじゆかうなり乃至ないし仏果ぶつか之れ同じ、
今日蓮等けふれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうの光明こうみやうを謗法ほうぼうの闇冥あんみやうの中に
指さし出です此れ即ち迦葉かしようの光明こうみやう如來にらいなり、迦葉かしようは頭陀ずだを本と

す頭陀は爰に抖☆と云うなり、今末法に入つて余行を抖☆して、もつばなむみょうほうれんげきようしゅう専ら南無妙法蓮華經と修するは此經難持行頭陀者是なり云云。

第三捨是身已の事

御義口伝に云く此の文段より捨不捨の起りなり転捨にして永捨に非ず転捨は本門なり永捨は迹門なり此の身を捨るは煩惱即菩提・生死即涅槃の旨に背くなり云云、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは捨是身已なり不惜身命の故なり云云、又云く此の身を捨すと読む時は法界に五大を捨すなり捨つる処の義に非ず、是の身を捨てて仏に成ると云うは権門の意なりかかる執情を捨つるを捨是身已と説くなり、此の文はいちねんさんぜん一念三千の法門なり捨是身已とは還歸本理・一念三千の意なり、妙樂大師の当知身土・一念三千・故成道時・称此本理・

いっしんいちねん　へんおほつかい　しゃく
一心一念・遍於法界と釈するは此の意なり云云。

第四宿世すくせいんねん因縁いんねん吾今わこん当説とうせつの事

おんぎくでん いわ すくせ いんねん 三千塵点の昔の事なり下根の
 御義口伝に云く宿世の因縁とは三千塵点の昔の事なり下根の
 ため すくせ いんねん 為に宿世の因縁を説かんと云う事なり、因縁とは因は種なり縁
 は昔に帰る義なりもとづく^くと訓ぜり、大通結縁の下種にもとづ
 くと云う事を因縁と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經
 と唱え奉るは過去^{かこ}の因にもとづきたり、爰を以て妙樂大師の
 云く「故に知んぬ末代^{まつだい}一時間^{いちじかん}くことを待て聞き已て信を生ず・
 事須く宿種なるべし」と、宿とは大通の往時なり絶とは下種の
 南無妙法蓮華經なり此の下種にもとづくを因縁と云うなり、
 本門の意は五百塵点の下種にもとづくべきなり真実妙法の因
 に縁くを成仏と云うなり。

化城喻品七箇の大事 けじょうゆほん だいじ

732P

第一化城の事 だいいちけじょう

御義口伝に云く化とは色法なり城とは心法なり、此の色心しきしんの二

法を無常むじょうと説くは権教ごんきょうの心なり法華經の意は無常むじょうを常住じょうじゅうと

説くなり化城即宝処けじょうそくほうしよなり、所詮今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經

と唱え奉る者は色心妙法しきしんみょうほうと開くを化城即宝処けじょうそくほうしよと云うなり、

十界皆化城・十界各各宝処じゅうかいみなけじょう じゅうかい ほうしよなり化城は九界なり宝処は仏界ぶつがいな

り、化城けじょうを去つて宝処ほうしよに至ると云うは五百由旬いほひやくじゆんの間なり此の五

百由旬ひやくじゆんとは見思・塵沙・無明けんじ じんじや むみょうなり、此の煩惱ぼんのうの五百由旬ひやくじゆんを

妙法みょうほうの五字ごじと開くを化城即宝処けじょうそくほうしよと云うなり、化城即宝処けじょうそくほうしよとは即

の一字は南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり念念ねんねんの化城念念けじょうねんねんの宝処ほうしよなり、我等われら

が色心しきしんの二法を無常むじょうと説くは権教ごんきょうなり常住じょうじゅうと説くは法華經ほけきやう

なり無常と執する執情を滅するを即滅化城と云うなり、化城は皮肉・宝処は骨なり色心の二法を妙法と開覚するをけじょうそくほうしよ
化城即宝処の実体と云うなり、実体とは無常常住・俱時相即
・随縁不變・一念寂照なり一念とは南無妙法蓮華經・無
うたがいわつしん いちねん
疑 曰信の一念なり即の一字心を留めて之を思う可し云云。

第二大通智勝仏の事

御義口伝に云く大通は心王なり智勝は心数なり大通は迹門
おんぎくでん いわ だいとう しんのう ちしやう しんず だいとう しやくもん
智勝は本門なり大通智勝は我等が一身なり、今日蓮等の類い
ちしやう ほんもん だいとうちしやう われら いまにちれん たぐ
南無妙法蓮華經と唱え奉る者は大通なり題目を唱うるは智勝
なむ みやうほうれんげきやう となたてまつ だいとう だいもく とな ちしやう
なり、法華經の行者の智は権宗の大智よりも百千万倍勝れ
ほけきやう ぎやうじや ごんしゆう だいち びやくせんまんばいすく
たる所を智勝と心得可きなり、大は色法通は心法なり我等が
しやうじ だいとう こころうべ だい いろぽう じんぽう われら
生死を大通と云うなり、此の生死の身心に振舞う起念を智勝と
しやうじ だいとう しょうじ しんしん ふるまい ちしやう

は云うなり、爰を以て之を思うに南無妙法蓮華經と唱え奉る
ぎようじや だいつうちしやう
行者は大通智勝仏なり十六王子とは我等が心数なり云云。
しもたいじゅう

第三諸母涕泣の事

御義口伝に云く諸母とは諸は十六人の母と云う事なり、実義に
おんぎくでん いわ しよも
は母とは元品の無明なり此の無明より起る惑障を諸母とも云
がんぼん むみよう おこ わくしやう しよも
うなり、流転の時は無明の母とつれて出で還滅の時は無明の母
るてん むみよう い げんめつ むみよう
を殺すなり、無明の母とは念仏・禪・真言等の人人なり而隨
むみよう なんぶつ しんこん ひとびと にずい
送之とは謗人を指すなり、然りと雖も終に法華經の広宣流布
そうし ぼうじん しか いえど つい ほけきやう こうせん ふ
あらわ 顕れて天下一同に法華經の行者と成る可きなり
てんが ほけきやう ぎようじや べ
「隨至道場還欲親近」是なり。
ずいしどうじやうげんよくしんこん これ

第四其祖轉輪聖王の事

御義口伝に云く本地身の仏とは此文を習うなり、祖とは法界の
おんぎくでん いわ ほんち このもん なら ほっかい

異名なり此これは方便品の相性体の三如是によぜを祖と云うなり、此の

三如是より外にによぜ転輪聖王てんりんじょうおう之れ無きなり転輪とは生住異滅しょうじゅういめつなり

聖王とは心法なり、此の三如是によぜは三世さんぜの諸仏しよぶつの父母ふぼなり、今日蓮

等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え奉る者となは三世さんぜの諸仏しよぶつの父母ふぼに

して其祖こそ転輪聖王てんりんじょうおうなり、金銀銅鉄きんぎんとは金は生・銀は白骨にし

て死なり銅は老の相・鉄は病なり此これ即ち開示悟入すなわの四仏知見かいじこにゅう

なり、三世常恒さんぜじょうこうに生死しやうじ・生死とめぐるを転輪聖王てんりんじょうおうと云うなり、

此の転輪聖王出現てんりんじょうおうしゆつげんの時の輪宝わねらとは我等が吐く所の言語音声ごんごおんじやう

なり此の音声おんじやうの輪宝わねらとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうなり爰ここをを以て

平等大慧びやうどうだいえとは云うなり。

第五十六王子の事

御義口伝おんぎくでんに云く十いとは十界じゅうかいなり六ろくとは六根ろっこんなり王わうとは心王しんのうな

り子とは心数なり此れ即ち実相の一理の大通の子なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は十六王子なり八方作仏とは我等が八苦の煩惱即菩提と開くなり云云。

第六即滅化城の事

御義口伝に云く我等が滅する当体は化城なり、此の滅を滅と見れば化城なり不滅の滅と知見するを宝処とは云うなり、是を寿量品にしては而実不滅度とは説くなり、滅と云う見を滅するを滅と云うなり三権即一実の法門之を思う可し、或は即滅化城とは謗法の寺塔を滅する事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は化城即宝処なり我等が居住の山谷曠野 皆皆常寂光の宝処なり云云。

第七皆共至宝処の事

御義口伝に云く皆とは十界なり共とは如我等無異なり至とは
極果の住処なり宝処とは靈山なり、日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者は一同に皆共至宝処なり、共の一字
は日蓮に共する時は宝処に至る可し不共ならば阿鼻大城に
墮つ可し云云。

五百弟子品三箇の大事

第一衣裏の事

御義口伝に云く此の品には無価の宝珠を衣裏に繋ぐる事を説く
なり、所詮日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一乘
・妙法の智宝を信受するなり信心を以て衣裏にかくと云うな
り。

第二醉酒而臥の事

御義口伝に云く酒とは無明なり無明は謗法なり臥とは謗法の家に生るる事なり、三千塵点の当初に悪縁の酒を呑みて五道六道に酔い廻りて今謗法の家に臥したり、酔とは不信なり覺とは信なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時無明の酒醒めたり、又云く酒に重重之れ有り權教は酒・法華經は醒めたり、本・迹相對する時迹門は酒なり始覺の故なり本門は醒めたり本覺の故なり、又本・迹二門は酒なり南無妙法蓮華經は醒めたり酒と醒むるとは相離れざるなり、酒は無明なり醒むるは法性なり法は酒なり妙は醒めたり妙法と唱うれば無明法性体一なり、止の一に云く無明塵勞即是菩提と。

第三身心遍歡喜の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く身とは生死即涅槃なり心とは煩惱即菩提なり、
へん じゅっかいどうじ かんき 遍とは十界同時なり歡喜とは法界同時の歡喜なり、此の歡喜
さんぜしよぶつ かんきおさ の内には三世諸仏の歡喜納まるなり、今日蓮等の類い南無
みようほうれんげきよう とな たてま 妙法蓮華經と唱え奉れば我則歡喜とて釈尊歡喜し給うなり、
かんき ぜんあく かんき 歡喜とは善惡共に歡喜なり十界同時なり深く之を思う可し云。
じゅっかいどうじ べ

にんきほん 人記品二箇の大事 だいじ

だいいちがくむがく 第一學無學の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く學とは無智なり無學とは有智なり、今日蓮等の
たぐ なむ みようほうれんげきよう とな 類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは學無學の人に如我等無異の
さす 記を授くるに非ずや、色法は無學なり心法は學なり又心法は無
あら 學なり色法は學なり學無學の人とは日本國の一切衆生なり、
がくむがく にほんこく いっさいしゆじよう

ちしゃぐしゃ
智者愚者をしなべて南無妙法蓮華經の記を説きて而強毒之するなり。

第二山海慧自在通王仏の事

御義口伝に云く山とは煩惱即菩提なり海とは生死即涅槃なり慧とは我等が吐く所の言語なり自在とは無障礙なり通王とは十界互具・百界千如・一念三千なり、又云く山とは迹門の意なり海とは本門の意なり慧とは妙法の五字なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は山海慧自在通王仏なり全く外に非ざるなり我等行者の外に阿難之れ無きなり、阿難とは歡喜なり一念三千の開覺なり云云。

法師品十六箇の大事

第一法師の事

御義口伝おんぎくでん いわに云く法しよほうとは諸法しよほうなり師しとは諸法しよほうが直ちに師しと成るな

り森羅三千しんらさんぜんの諸法しよほうが直ちに師しと成り弟子でしとなるべきなり、

今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱え奉る者とな たてまつは法師ほつしの中の大

法師ほつしなり、諸法実相しよほうじつそうの開覺かいかく顯れて見れば地獄じごくの灯燃猛火とうねんみょうかないし乃至

仏果ぶつかに至る迄いた悉く具足ことごとくそくして一念三千いちねんさんぜんの法師ほつしなり、又云く法とは

題目師だいもくとは日蓮等にちれんの類たぐいなり。

第二成就じようじゆ大願みんしゆじようこ愍衆生あくせ故生於惡世あくせ広演此經あくせの事

御義口伝おんぎくでん いわに云く大願ほつけぐつうとは法華弘通みんしゆじようこなり愍衆生あくせ故にほんこくとは日本国にほんこくの

一切衆生いっさいしゆじようなり生於惡世あくせの人にちれんとは日蓮等たぐの類たぐいなり広なとは南

閻浮提えんぶだいなり此經だいもくとは題目いまだにちれんなり、今日蓮等たぐの類ない南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう

と唱え奉る者とな たてまつなり。

第三如来所遣行如来事にやらいしよけん にやらいの事

御義口伝に云く法華の行者は如来の使に來れり、如来とは
釈迦如来事とは南無妙法蓮華經なり如来とは十界三千の
衆生の事なり今日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは
眞実の御使なり云云。

第四与如来共宿の事

御義口伝に云く法華の行者は男女共に如来なり煩惱即菩提・
生死即涅槃なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
者は与如来共宿の者なり、傳大士の釈に云く「朝朝仏と共に
起き夕々仏と共に臥し時時に成道し時時に顕本す」と云云。

第五是法華經藏深固幽遠無人能到の事

御義口伝に云く是法華經藏とは題目なり深固とは本門なり幽遠
とは迹門なり無人能到とは謗法なり、今日蓮等の類い南無

みょうほうれんげきょう とな たてまつ むにんのうとう
妙法蓮華經と唱え奉る者は無人能到の者に非ざるなり云云。

第六間法信受隨順不逆の事

おんぎくでん いわ みょうじそく
御義口伝に云く聞とは名字即なり法とは題目なり信受とは受持
なり隨順不逆とは本・迹二門に隨順するなり、今日蓮等の
類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者の事なり。

第七衣座室の事

おんぎくでん いわ えざしつ
御義口伝に云く衣座室とは法報応の三身なり空仮中の三諦
身口意の三業なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
者は此の三軌を一念に成就するなり、衣とは柔和忍辱の衣当
著忍辱鎧是なり座とは不惜身命の修行なれば空座に居する
なり室とは慈悲に住して弘むる故なり母の子を思うが如くな
り、豈一念に三軌を具足するに非ずや。

第八欲捨諸懈怠よくしゃよけたい 应当聽此經おうとうちようしきよう 之事 御義口伝おんぎくでん に云く諸の懈怠もろもろけたい とは

四十余年よんじゅうよねん の方便ほうべん の經教きやうきやう なり悉く皆懈怠ことごとみなけたい の經なり此經とは題目だいもく

なり、今日蓮等いまにちれん の類たぐ い南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう と唱え奉るとな たてまつ は是れ即ちすなわ

精進しやうじん なり应当聽おうとうちようしきよう 此經これ は是なり、応まさ に日蓮にちれん に此の經を聞くべし

と云えり云云。

第九不聞法華經もんぼう 去仏智はなはだ 甚遠はなはだ の事

御義口伝おんぎくでん に云く不聞いわ とは謗法ほうぼう なり成仏じやうぶつ の智を遠ざかるべきな

り、今日蓮等いまにちれん の類たぐ い南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう と唱え奉るとな たてまつ 者は仏智かいこ 開悟

の者にして成仏じやうぶつ の近き故なり。

第十若説此經時あるひとあつく 有人惡口罵加刀とうじやうがしやくねんぶつ 杖瓦石念仏故あつく 忍くしやう の事

御義口伝おんぎくでん に云く此經いわ とは題目だいもく なり惡口あつく とは口業くしやう なり加刀とうじやう 杖は

身業しんごう なり此の身口しんく の二業いごう は意業いごう より起るなり、今日蓮等いまにちれん の類たぐ い

なむみょうほうれんげきょう　とな　たてまつ　ぶつちよく
南無妙法蓮華經と唱え奉る者は仏勅を念ずるが故に応忍とは
云うなり。

第十一及清信士女供養於法師の事

おんぎくでん　いわ　しによ　なんよ　ほつし　にちれん　たぐ
御義口伝に云く士女とは男女なり法師とは日蓮等の類いなり清
信とは法華經に信心の者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經
とな　たてまつ　これ　こ　しよてんぜんじん　なんよ　あらわ　ほけきよう
と唱え奉る者は是なり云云、此れ諸天善神等男女と顕れて法華經
ぎようじや　くよう　べ　きようもん
の行者を供養す可しと云う經文なり。

第十二若人欲加惡刀杖及瓦石則遣變化人為之作衛護の事

おんぎくでん　いわ　へんか　たつのくちしゅこ　はちまんだいぼさつ　いまにちれん
御義口伝に云く變化人とは竜口守護の八幡大菩薩なり、今日蓮
たぐ　なむ　みょうほうれんげきよう　とな　たてまつ　しゅこ　べ
等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者を守護す可しと云う
きようもん
經文なり。

第十三若親近法師速得菩薩道の事

おんぎくでん いわ しんこん しんじゅ いみょう ほとし にちれん たぐ
御義口伝に云く親近とは信受の異名なり法師とは日蓮等の類い
なり菩薩とは仏果を得る下地なり、今日蓮等の類い南無
みょうほうれんげきよう とな たてまつ
妙法蓮華經と唱え奉る者の事なり。

第十四随順ずいじゆん是師学の事

おんぎくでん いわ にちれん たぐ
御義口伝に云く是師とは日蓮等の類いなり学とは南無
みょうほうれんげきよう ずいじゆん しんじゅ
妙法蓮華經なり随順とは信受なり云云。

第十五師と学との事

おんぎくでん いわ にちれん たぐ
御義口伝に云く日蓮等の類いの南無妙法蓮華經は学者の
いちねんさんぜん ほっかいさんぜん
一念三千なり師も学も共に法界三千の師学なり。

第十六得見恒沙ごうしゃ仏の事

おんぎくでん いわ けんほうとう ごうしゃ
御義口伝に云く見恒沙仏とは見宝塔と云う事なり、恒沙仏とは
たほう たほう ほっかい いちねんさんぜん かいご
多宝の事なり多宝の多とは法界なり宝とは一念三千の開悟なり

法界ほっかいを多宝たほう仏ぶつと見るを見恒沙ごうしゃ仏と云うなり、故ゆえに法師ほうし品の次つぎに
宝塔品ほうとうぼんは来るなり解行証げぎょうの法師ほうしの乗物ちやうぶつは宝塔ほうとうなり云云、今日蓮いまにちれん
等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは妙解妙行妙証みょうげの不思議ふしぎ
の解かい・不思議ふしぎの行ぎ・不思議ふしぎの証得しょうとくなり真実しんじつ一念三千いちねんさんぜんの開悟かいごな
り云云、此の恒沙ごうしゃと云うは悪を滅し善を生ずる河なり、恒沙ごうしゃ仏
とは一一文文みな皆金色の仏体なり見の字之これを思う可べし仏見ぶつけんと云う
事なり、随順ずいじゆんとは仏知見ぶつちけんなり得見とくけんの見の字と見宝塔けんほうとうの見とは
依正えしやうの二報なり得見恒沙ごうしゃの見は正報しょうほうなり見宝塔けんほうとうの見は依報えほう
り云云。

宝塔品ほうとうぼん廿箇だいじの大事

739p

第一だいいち宝塔ほうとうの事

文句もんくの八はちに云いく前す仏で已こに居すし今・仏・並またに座しかす当あ仏ふも亦然またなり

と。御義口伝に云く宝とは五陰なり塔とは和合なり五陰和合を
以て宝塔と云うなり、此の五陰和合とは妙法の五字なりと見
る是を見とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
唱え奉る者は見宝塔なり。

第二有七宝の事

御義口伝に云く七宝とは聞・信・戒・定・進・捨・慙なり、又
云く頭上の七穴なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉るは有七宝の行者なり云云。

第三四面皆出の事

文句の八に云く四面出香とは四諦の道風四徳の香を吹くなり
と。御義口伝に云く四面とは生老病死なり四相を以て我等が
一身の塔を莊嚴するなり、我等が生老病死に南無妙法蓮華經

とな たてまつ しかしなが
と唱え奉るは併ら四徳の香を吹くなり、南無とは樂波羅蜜・
みようほう はらみつ れんげ
妙法とは我波羅蜜・蓮華とは浄波羅蜜・經とは常波羅蜜なり。

第四出大音声の事

おんぎくでん いわ われらしゅじよう ちようせき
御義口伝に云く我等衆生の朝夕吐く所の言語なり、大音声
おんじよう
とは権教は小音声・法華經は大音声なり廿八品は小音声
ごんきよう おんじよう ほけきよう おんじよう おんじよう
だいもく おんじよう
題目は大音声なり、惣じて大音声とは大は法界なり法界の
しゅじよう ごんご みようほう おんじよう
衆生の言語を妙法の音声と沙汰するを大音声とは云うな
いまにちれん な む みようほう れんげきよう とな たてまつ おんじよう
り、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大音声なり、
いわ くらたい おんじよう けたい ちゅうどう
又云く大とは空諦・音声とは仮諦なり出とは中道なり云云。

第五見大宝塔住在空中の事

おんぎくでん いわ ほうつ
御義口伝に云く見大宝塔とは我等が一身なり住在空中とは
われらしゅじよう つい
我等衆生終に滅に歸する事なり、今日蓮等の類い南無

みょうほうれんげきょう とな たてまつ しんじん ところ じゅうざいくうちゅう
妙法蓮華經と唱え奉りて信心に住する処が住在空中なり
こくう
虚空会に住するなり。

第六国名宝浄彼中有仏号曰多宝の事

おんぎくでん いわ ほうじょうせかい われら たいない
御義口伝に云く宝浄世界とは我等が母の胎内なり、有仏とは
しよほうじつそつ こころを たほうぶつ
諸法実相の仏なり爰を以て多宝仏と云うなり、胎内とは煩惱を
ほんのう おでい しんによ われらしゅじょう
云うなり煩惱の淤泥の中に真如の仏あり我等衆生の事なり、
いまにちれん たぐ な む みょうほうれんげきょう とな たてまつ とうたいれんげ
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るを当体蓮華の仏と
云うなり云云。

第七於十方国土有説・法華經処我之塔 廟為聴是經故涌現其前為作証 明讃言善哉の事

おんぎくでん いわ じゅつぽう じゅつかい ほうけきょう われらしゅじょうるてん
御義口伝に云く十方とは十界なり法華經とは我等衆生流轉
いんねん よつ ごんご おんじょう ぜんざい ぜんあくふに
の十二因縁なり仍て言語の音声を指すなり善哉とは善惡不二

・邪正一如なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
ところ たほうゆげん
処を多宝涌現と云うなり。

第八南西北方四惟上下の事

おんぎくでん いわ しほう
御義口伝に云く四方四惟上下合して十方なり即ち十界なり、
じゅっかい しゅじょう
十界の衆生共に三毒の光之れ有り是を白毫と云うなり
いっしんちゅうどう ちえ
一心中道の智慧なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
たてまつ じゅっかいどうじ
奉るは十界同時の光指なり諸法実相の光明なるが故なり。

第九各齋宝華満掬の事

おんぎくでん いわ ほうげ
御義口伝に云く宝華とは合掌 一念三千の所表なり各とは十界
いちねんさんぜん こころうべ
なり満の一字を一念三千と心得可し、今日蓮等の類い南無
みょうほうれんげきょう とな たてまつ
妙法蓮華經と唱え奉るは仏に宝華を奉るなり宝華即宝珠なり
ほうしゅそくいちねんさんぜん がっしょう
宝珠即一念三千なり合掌以敬心欲聞具足道是なり云云。

第十如却けんやく関鑰だいじょう開大城門の事 補註の四に云く此の開塔見けんやく仏は蓋けだ

し所表有るなり、何となれば即ち開塔は即開そく権なり見けん仏は即そく

顕実なり是れ亦前を証し復將さに後を起さんとするのみ、如却けんじつ

関鑰とは却是除なり障除こり機動くことを表す謂く法身のけんやく大士き

惑を破し理を顕し道を増し生を損するなりと。

御義口伝に云く関鑰とは謗法なり無明なり開とは我等が成おんぎくでん仏い

なり大城門とは我等が色心の二法なり大城とは色法なり門とだいじょう

は口なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る時無明いまにちれん

の惑障却けて己心の釈迦・多宝住するなり、関鑰とは無明なわくしょう

り開とは法性なり鑰とは妙の一字なり天台の云く「秘密の奥蔵ほっしょう

を發らく之を称して妙と為す」と、妙の一字を以て鑰と心得可きひ

なり、此の經文は謗法不信の関鑰を却けて己心の仏を開くときようもん

云う事なり開^{これ}仏知見之を思う可^べし云云。

第十一 攝^{しよだい}諸大衆皆在^{みな}虛空^{こくう}の事

御義口伝に云く大衆とは聴衆^{ちようしゅう}なり皆在^{みな}虛空^{こくう}とは我等^{われら}が死^しの相なり、今日^{いまに}蓮等^{ちれん}の類^{たぐ}い南無妙法蓮華經^{なむみょうほうれんげきよう}と唱^{とな}え奉^{たてまつ}るは生死^{しやうじそく}即^{すなは}涅槃^{ねはん}と開覺^{かいかく}するを皆在^{みな}虛空^{こくう}と説^{せつ}くなり生死^{しやうじそく}即^{すなは}涅槃^{ねはん}と被^ひ攝^{しやう}するなり、大地^{だいち}は色法^{しきふ}なり虛空^{こくう}は心法^{しんふ}なり色心^{しきしん}不二^{ふに}と心得^{こころう}可^べきなり虛空^{こくう}とは寂光土^{じやくこうど}なり、又云く虛空^{こくう}とは蓮華^{れんげ}なり經^{きやう}とは大地^{だいち}なり妙法^{みやうほう}は天^{てん}なり虛空^{こくう}とは中^{ちゆう}なり一切衆生^{いっさいしゆじやう}の内菩薩蓮華^{ないぼさつれんげ}に座^ざするなり、此^これを妙法蓮華經^{みやうほうれんげきよう}と説^{せつ}かれたり、經^{きやう}に云く「若^わ在^{ざい}仏前^{ぶつぜん}蓮華化生^{れんげけしやう}」と。

第十二 譬^ひ如大風吹小樹枝^{たいふうすいしやうじゆえ}の事

御義口伝に云く此の偈頌^{げじゆ}の如^{ごと}清凉池^{しやうりやうち}と譬^ひ如大風^{たいふう}と燃大炬火^{ねんだいこ}と

は三身なり、其の中に譬如大風とは題目の五字なり吹小樹枝と
さんじん そ ひによたいふう だいもく ごじ すいしょうじゅえ
は折伏門なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは
しやくぶくもん いまにちれん たぐ なむみょうほうれんげきょう とな たてまつ
大風の吹くが如くなり。
たいふう ごと

第十三若有能持則持仏身の事

にやくうのうじ ぶつしん

御義口伝に云く法華經を持ち奉るとは我が身仏身と持つなり、
おんぎくでん いわ ほけきょう たも たてまつ ぶつしん
則の一字は生仏不二なり上の能持の持は凡夫なり持つ体は
みょうほう ごじ ぶつしん かみ のうじ ほんぶ
妙法の五字なり仏身を持つと云うは一一文皆金色仏体の故
ごじ ぶつしん みな
なり、さて仏身を持つとは我が身の外に仏無しと持つを云うな
ぶつしん ぶつしん
り、理即の凡夫と究竟即の仏と二無きなり即の字は即故初後不
りそく ほんぶ くきょうそく そく
二の故なり云云。

第十四此經難持の事

しきょうなんじ

御義口伝に云く此の法華經を持つ者は難に遇わんと心得て持つ
おんぎくでん いわ ほけきょう なん あ こころえ

なり、されば即為疾得無上仏道の成仏は今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る是なり云云。
みょうほうれんげきよう とな たてまつこれ

第十五我則歡喜諸仏亦然の事

御義口伝に云く我とは心王なり諸仏とは心数なり法華經を持ち
奉る時は心王心数同時に歡喜するなり、又云く我とは凡夫なり
諸仏とは三世諸仏なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と
唱えて歡喜する是なり云云。
おんぎくでん いわ しんのう しょぶつ しんず ほけきよう たも
たてまつ しんのう しんず どうじ かんき いわ ほんぶ
しょうぶつ さんぜ しょうぶつ いまにちれん たぐ なむ みょうほうれんげきよう
とな かんき これ

第十六読持此經の事

御義口伝に云く五種の修行の読誦と受持との二行なり、今日蓮
等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは読なり此の經を持つは
持なり此經とは題目の五字なり云云。
おんぎくでん いわ ごしゆ しゆぎよう どくじゆ じゆじ
たぐ なむ みょうほうれんげきよう とな たてまつ
だいもく ごじ

第十七是真仏子の事

おんぎくでん いわ ほけきよう ぎようじや
御義口伝に云く法華經の行者は真に釈迦法王の御子なり、然る
間王位を継ぐ可きなり悉是吾子の子と是真仏子の子と能く能く
こころえがつ べ いまにちれん たぐ なむ みようほうれんげきよう となたてまつ
心得合す可きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
者は釈迦法王の御子なり。

第十八是諸天人・世間之眼の事

おんぎくでん いわ せけん にほんこく まなこ ぶつちけん ほけきよう
御義口伝に云く世間とは日本国なり眼とは仏知見なり法華經
は諸天・世間の眼目なり、眼とは南無妙法蓮華經なり是諸天
人・世間之眼又云く是諸仏眼目云云、此の眼をくじる者は禪
・念仏・真言宗等なり眼等とは目を閉づるなり、今日蓮等の
類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは諸天・世間の眼に非ずや云
云。

第十九能須臾說の事

御義口伝に云く能の一字之を思う可し説とは南無妙法蓮華經なり、今日蓮等の類いは能須臾説の行者なり云云。

第二十此經難持の事

御義口伝に云く此の經文にて三学俱伝するなり、虚空不動戒・虚空不動定・虚空不動慧・三学俱に伝うるを名けて妙法と曰うと、戒とは色法なり定とは心法なり慧とは色心二法の振舞なり、俱の字は南無妙法蓮華經の一念三千なり伝とは末法万年を指すなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉り權教は無得道・法華經は真実と修行する是は戒なり防非止惡の義なり、持つ所の行者・決定無有疑の仏体と定む是は定なり、三世の諸仏の智慧を一返の題目に受持する是は慧なり、此の三学は皮肉骨・三身・三諦・三軌・三智等なり。

提婆達多品八箇の大事だいばだつただいじ

第一だいいち

提婆達多の事だいばだつた

文句もんくの八はちに云いく本地ほんちは清涼しょうりやうにして迹しに

天熱てんねつを示しす。

御義口伝おんぎくでんに云いく提婆だいばとは本地ほんちは文殊もんじゆなり、本地ほんち清涼しょうりやうと云いうな

り迹しには提婆だいばと云いうなり天熱てんねつを示しす是これなり、清涼しょうりやうは水みづなり

此これは生死しょうじそくねはん即涅槃じくねはんなり天熱てんねつは火かなり是こは煩惱ぼんのうそくぼだい即菩提じくぼだいなり、

今日蓮等けふれんたうの類るいい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるに煩惱ぼんのうそくぼだい即菩提じくぼだい・

生死しょうじそくねはん即涅槃じくねはんなり、提婆だいばは妙法蓮華經みょうほうれんげきやうの別名けつめいなり過去かこの時に

阿私仙人あしせんじんなり阿私仙人あしせんじんとは妙法みょうほうの異名いみやうなり阿あとは無むの義ぎなり

私無しむきの法ほうとは妙法みょうほうなり、文句もんくの八はちに云いく無私法むしひほうを以もつて衆生しゆじやう

に灑そそぐと云いえり阿私仙人あしせんじんとは法界三千ほっかいさんぜんの別名けつめいなり故ゆゑに私無しむきな

り一念三千いちねんさんぜん之これを思おもふ可べし云いふ。

第二 若不違我當為宣説の事

御義口伝おんぎくでん いわに云く妙法蓮華經みょうほうれんげきょうを宣説せんぜつする事を汝なんじは我たがに違ちがわずして宣説せんぜつすべしと云う事なり、若の字は汝なんじなり、天台てんだいの云く「法を受けて奉行ぶぎようす」と、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者は日蓮にちれんに違ちがわずして宣説せんぜつす可べきなり阿私仙人あしせんとは南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうなり云云。

第三採菓汲水拾薪設食の事

御義口伝おんぎくでん いわに云く採菓ちほうとは癡煩惱ちぼんのうなり汲水ちくすいとは貪煩惱ぼんのうなり拾薪たきぎとは瞋煩惱ぼんのうなり設食ぜんじきとは慢煩惱まんぼんのうなり、此の下に八種の給仕こし之れ有あり此の外そとに妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの伝受でんじう之れ無なきなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつるは即すなわち千歳給仕せんさいなり是これ即すなわち一念三千いちねんさんぜんなり貪とん・瞋じん・癡慢ちを対治たいじするなり。

第四 情存妙法故身心無懈倦の事 みょうほう こころな

御義口伝に云く身心の二字色心妙法と伝受するなり、日蓮等 おんぎくでん いわ しんしん にちれん
の類い南無妙法蓮華經と唱え奉りて即身成仏す身心無倦とは たぐ なむみょうほうれんげきょう とな たてまつ そくしんじょうぶつ しんしんむけん
いちねんさんぜん
一念三千なり云云。

第五 我於海中唯常宣說の事 かいちゅう せんぜつ

御義口伝に云く我とは文殊なり海とは生死の海なり唯とは唯有 おんぎくでん いわ もんじゅ しやうじ ただ ゆい
いちじょう
一乘法なり常とは常住此說法なり妙法蓮華經とは法界の じやうじゅう せつぽう みやうほうれんげきやう ほっかい
言語音声なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る ごんごおんじやう いまにちれん たぐ なむみやうほうれんげきやう とな たてまつ
是なり、生死の海即真如の大海なり我とは法界の智慧なり文殊 これ しやうじ そくしんによ たいかい ほっかい ちえ もんじゅ
なり云云。

第六 年始八歳の事

御義口伝に云く八歳とは八巻なり提婆は地獄界なり竜女は おんぎくでん いわ だいは じごく りゆうによ

ぶっかい
仏界なり然る間十界互具・百界千如・一念三千なり、又云く
八歳とは法華經八卷なり我等八苦の煩惱なり、惣じて法華經の
成仏は八歳なりと心得可し八苦即八卷なり八苦八卷即八歳の
竜女と顯るるなり一義に云く、八歳の事はたまをひらくと読
むなり、歳とは竜女の一心なり八とは三千なり三千とは法華
の八卷なり、仍つて八歳とは開仏知見の所表なり智慧利根より
能至菩提まで法華に歸入するなり、此の中に心念口演とは口業
なり志意和雅とは意業なり悉能受持深入禪定とは身業なり三
業即三徳なれば三諦法性なり、又云く心念とは一念なり口演
とは三千なり悉能受持とは竜女法華經受持の文なり、歳とは
如意宝珠なり妙法なり八とは色心を妙法と開くなり。

第七 言論未訖の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く此の文は無明即法性の明文なり、其の故は
ちしやくなん 智積難問の言未だ訖らざるに竜女三行半の偈を以て答うるな
べつきよう りゆうによ
り、難問の意は別教の意なり無明なり竜女の答は円教の意
ほっしろう りゆうによ
なり法性なり、智積は元品の無明なり竜女は法性の女人な
ちしやく がんぼん りゆうによ ほっしろう によん
り仍て無明に即する法性法性に即する無明なり、今日蓮等の
よつ むみよう そく ほっしろうほっしろう そく むみよう いまにちれん
類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは言論未訖なり、時とは上の
たぐ な むみようほうれんげきよう とな たてまつ かみ
事の末末の事の始なり時とは無明法性同時の時なり南無
むみようほうれんげきよう とな たてまつ
妙法蓮華経と唱え奉る時なり、智積菩薩を元品の無明と云う
ちしやくほさつ がんぼん むみよう
事は不信此女の不信の二字なり不信とは疑惑なり疑惑を根本
ふしん ふしん ざわく ざわく こんぼん
むみよう 無明と云うなり、竜女を法性と云う事は我闡大乘教の文な
りゆうによ りゆうによ
り竜女とは竜は父なり女は八歳の娘なり竜女の二字は父子
どうじ じようぶつ りゆうにおう これ すで りゆうにおう
同時の成仏なり、其の故は時竜王女の文是なり既に竜王の

むすめ

女と云う間竜王は父なり女とは八歳の子なり、されば女の

じようぶつ

成仏は此の品にあり父の竜の成仏は序品に之れ在り、有八

りゅうおう

竜王の文是なり、然りと雖も父子同時の成仏なり序品は一經

りゅうおう

の序なる故なり、又聞成菩提とは竜女が智積を責めたる言な

りされば唯我が成仏をば仏御存知あるべしとて又聞成菩提

ゆいぶつ

唯仏当証知と云えり苦の衆生とは別して女人の事なり、此の

じゅうじやう

三行半の偈は一念三千の法門なり遍照於十方とは十界なり、

こと

殊には此の八歳の竜女の成仏は帝王持經の先祖たり、人王の

てんのう

始は神武天皇なり神武天皇は地神五代の第五の鵜萱葺不合尊の

りゅうおう

御子なり此の葺不合尊は豊玉姫の子なり此の豊玉姫は沙竭羅

りゅうおう

竜王の女なり八歳の竜女の姉なり、然る間先祖法華經の行者

じんじんじんじん

なり甚深甚深云云、されば此の提婆の一品は一天の腰刀なり

だいは

無明煩惱の敵を切り生死愛着の繩を切る秘法なり、漢高三尺の
劍も一字の智劍に及ばざるなり妙の一字の智劍を以て生死煩惱
の繩を切るなり、提婆は火炎を顯し竜女は大蛇を示し文殊は
智劍を顯すなり仍つて不動明王の尊形と口伝せり、提婆は我等
が煩惱即菩提を顯すなり、竜女は生死即涅槃を顯すなり、文殊
をば此には妙徳と翻ずるなり煩惱生死具足して当品の能化な
り。

第八 有一宝珠の事 文句の八に云く一とは珠を献じて円解を得
ることを表すと。

御義口伝に云く一とは妙法蓮華經なり宝とは妙法の用なり珠
とは妙法の体なり、妙の故に心法なり法の故に色法なり色法
は珠なり心法は宝なり妙法とは色心不二なり、一念三千を所

表して竜女宝珠を奉るなり、釈に表得円解と云うは一念三千いちねんさんぜん

なり、竜女が手に持てる時は性得の宝珠なり仏受け取り給うたま

時は修得の宝珠なり、中に有るは修性不二なり、甚疾とははなはだ

頓極・頓速・頓証の法門なり即為疾得無上仏道なり、神力とじんりき

は神は心法なり力とは色法なり観我成仏とは舍利弗竜女がじやうぶつ

成仏と思うが僻事なり、我が成仏ぞと観ぜよと責めたるなり、じやうぶつ

観に六則観之れ有り爰元の観は名字即の観と心得可きなり、こころうべ

其の故は南無妙法蓮華經と聞ける処を一念坐道場成仏不虛ところ

也と云えり、變成男子とは竜女も本地南無妙法蓮華經なりりゆうにょ

其の意經文に分明なり。きやうもん

勸持品十三箇の大事かんじほん

747P

第一

勸持の事

御義口伝に云く勸とは化他持とは自行なり南無妙法蓮華經は
自行化他に亘るなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經を勧め
て持たしむるなり。

第二 不惜身命の事

御義口伝に云く身とは色法命とは心法なり事理の不惜身命
之れ有り、法華の行者田畠等を奪わるは理の不惜身命なり
命根を断たるを事の不惜身命と云うなり、今日蓮等の類い
南無妙法蓮華經と唱え奉る者は事理共に値うなり。

第三 心不実故の事

御義口伝に云く心不実故とは法華最第一の經文を第三と読み
最為其上の經文を最為其下と讀みて法華經の一念三千を華嚴
・大日等に之れ有りと法華の即身成仏を大日經に取り入る

は此等これらみなは皆・心不実ふじつ故なり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう
と唱となえ奉たてまつる者は心実なるべし云云。

第四 敬順ぶつゐ仏意の事

御義口伝おんぎくでんに云いく法華經ほけきように順ずるは敬順ぶつゐ仏意なり意とは南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきよう是なり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ
奉たてまつるは敬順ぶつゐ仏意の意なり。

第五 作師し子く吼くの事

御義口伝おんぎくでんに云いく師子吼ししくとは仏の説せつなり説法せつぽうとは法華別ほつしては
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、師しとは師匠ししやう授さづくる所の妙法子みょうほうしとは弟子でし
受くる所の妙法みょうほう吼ことは師弟共していに唱となうる所の音声おんじやうなり作とはお
こすと読よむなり、末法まっぽうにして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようを作なすなり。

第六 如法修行しゆぎやうの事

御義口伝おんぎくでんに云いく如法修行しゆぎやうの人とは天台てんだい・妙楽みょうらく・伝教でんぎやう等なり、
いまにちれんいまにちれんたぐの類なむい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは如法修行しゆぎやうなり云
云。

第七 有諸無智人しよむちの事

御義口伝おんぎくでんに云いく一文不通いちもんふつうの大俗おつくめりなり惡口罵詈ふんみ等分明めいようなり
日本にほん國の俗しよを諸しよと云うなり。

第八 惡世中比丘あくせの事

御義口伝おんぎくでんに云いく惡世中比丘あくせの惡世あくせとは末法まつぽうなり比丘びくとは謗法ほうほうた
る弘法こうぼう等これ是なり、法華ほっけの正智ごんきやうを捨てじやち權教けんきやうの邪智じやちを本とせり、
いまにちれんたぐ今日蓮等の類なむい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は正智ごんきやうの中の大
正智ごんきやうなり。

第九 或有阿練若あるの事

御義口伝に云く第三の比丘なり良觀等なり如上六通羅漢の人
と思うなり。

第十自作此經典の事

御義口伝に云く法華經を所作して読むと謗す可しと云う經文
なり。

第十一為斯所輕言汝等皆是仏の事

御義口伝に云く法華雜の行者を蔑づり生仏と云うべしと云う
經文なり、是は輕心を以て誇るなり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者を云う可きなり。

第十二惡鬼入其身の事

御義口伝に云く惡鬼とは法然・弘法等是なり入其身とは國王・
大臣・万民等の事なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と

とな たてまつ あだ
唱え奉るを怨むべしと云う事なり、鬼とは命を奪う者にして奪
くどく
功德者と云うなり、法華経は三世諸仏の命根なり此の経は
いっさいほさつ くどく おさ
一切菩薩の功德を納めたる御経なり。

第十三但信無上道の事

おんぎくでんいわ むじょうどう
御義口伝云く無上道とは南無妙法蓮華経是れなり、今日蓮等
たぐ な む みょうほうれんげきよう
の類い南無妙法蓮華経を惜しむ事は命根よりも惜しき事な
り、之に依って結ぶ処に仏自知我心と説かれたり法華経の
ぎようじゃ しんちゆう
行者の心中をば教主釈尊の御存知有る可きなり、仏とは
しやくそん わがこころ いまにちれん
釈尊我心とは今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者
なり。

安楽行品五箇の大事

第一 安楽行品の事

御義口伝に云く妙法蓮華經を安樂に行ぜむ事末法に於て
いまにちれん
今日蓮等の類いの修行は妙法蓮華經を修行するに難來るを
以て安樂と意得可きなり。

第二 一切法空の事

御義口伝に云く此下に於て十八空之有り十八空の体とは南無
妙法蓮華經是なり十八空は何れも妙法の事なり。

第三 有所難問不以小乘法答等の事

御義口伝に云く対治の時は權教を以て会通す可からず。
一切種智とは南無妙法蓮華經なり一切は万物なり種智は万物
の種なり妙法蓮華經是なり、又云く一切種智とは我等が一心
なり一心とは万法の惣体なり之を思う可し。

第四 無有怖畏加刀杖等の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く迹化の菩薩に刀杖の難之れ有る可からずと云
う 経文 なり、勸持品は末法法華の行者に及加刀杖者
さくさくけんひんずい 数数見擯出と此の品には之無し、彼は末法の折伏の修行此の
そつほうしやうじゆ 品は像法攝受の修行なるが故なり云云。

第五 有人来欲難問者諸天昼夜等の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く末法に於て法華を行ずる者をば諸天守護之有る
べ 可し常為法故の法とは南無妙法蓮華經是なり。

涌出品一箇の大事

第一 唱導之師の事

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く涌出の一品は悉く本化の菩薩の事なり、本化の
ぼさつ 菩薩の所作としては南無妙法蓮華經なり此れを唱と云うなり
にほんこく いっさいしゆじやう 導とは日本国の一切衆生を靈山浄土へ引導する事なり、末法

の導師どうしとは本化ほんげに限ると云うを師と云うなり、此の四大菩薩ぼさつの
事を釈しゃくする時、疏じよの九を受けて輔正記ふしやうきの九に云く「經に四導師どうし
有りとは今四徳を表す 上行じやうぎやうは我を表し無辺行むへんぎやうは常を表し
淨行じやうぎやうは淨を表し 安立行あんりゆうぎやうは樂を表す、有る時あには一人に此の
四義ぐを具す二死の表に出づるを 上行じやうぎやうと名け斷常だんじやうの際を踰こゆ
るを無辺行むへんぎやうと稱しょうし五住の垢累くるいを超ゆる故に 淨行じやうぎやうと名け道樹どうじゆに
して徳円ゆゑかなり故に 安立行あんりゆうぎやうと曰いうなり」と今日蓮等いまにちれんの類たぐい
南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は皆地涌みなじゆの流類るるいなり、又云く火
は物を焼くを以て行とし水は物を淨きよむるを以て行とし風は塵垢ちり
を払うを以て行とし大地だいちは草木そうもくを長ずるを以て行とするなり四
菩薩ぼさつの利益りやく是これなり、四菩薩ぼさつの行は不同ふどうなりと雖いえども、俱ともに
妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの修行しゆぎやうなり、此の四菩薩ぼさつは下方まさに住する故に釈ゆゑに

ほっしょうう えんでいげんそう

じゅうしよ

「法性之淵底玄宗之極地」と云えり、下方を以て住处とす下

方とは真理なり、輔正記に云く「下方とは生公の云く住して

理に在るなり」と云云、此の理の住处より顕れ出づるを事と

云うなり、又云く千草万木・地涌の菩薩に非ずと云う事なし、

されば地涌の菩薩を本化と云えり本とは過去久遠五百塵点より

の利益として無始無終の利益なり、此の菩薩は本法所持の人な

り本法とは南無妙法蓮華経なり、此の題目は必ず地涌の所持

の物にして迹化の菩薩の所持に非ず、此の本法の体より用を出

して止観と弘め一念三千と云う、惣じて大師人師の所釈も此

の妙法の用を弘め給うなり、此の本法を受持するは信の一字

なり、元品の無明を対治する利剣は信の一字なり無疑曰信の

釈之を思ふ可し云云。

御義口伝卷上 おんぎくでん

弘安元年 戊寅 こうあんがねんつちのえとら

正月一日

執筆 しつびつ 日興 にっこう

◆九五 御義口伝 おんぎくでん

卷下 日蓮所立自 にちれんしよりゆう

寿量品至開結二經 じゅりようぼん

752P

寿量品廿七箇の大事 じゅりようぼん だいじ

第一 だいいち

南無妙法蓮華經如來壽量品第十六の事 なむ みょうほうれんげきようによらいじゅりようぼん

文句の九に云く もんく いわ

如來とは によらい

十方三世の諸仏 じゅつぽうさんぜ

二仏三仏 しよぶつ

本仏迹仏 ほんぶつしやくぶつ

の通号なり別して

は本地三仏の別号なり、 ほんち

壽量とは じゅりよう

壽量とは じゅりよう

壽量とは じゅりよう

十方三世二仏三 じゅつぽうさんぜ

仏の諸仏 しよぶつ

の功德を くどく

詮量す故に ゆえ

壽量品と云うと。 じゅりようぼん

御義口伝に云く おんぎくでん

此の品の いわ

題目は日蓮が だいもく

身に当る にちれん

大事なり だいじ

神力品 じんりきぼん

の付属是なり、 ふそくこれ

如來とは によらい

釈尊惣じては しやくそんそう

十方三世の諸仏 じゅつぽうさんぜ

なり別 しよぶつ

しては本地無作の ほんちむさく

三身なり、 さんじん

今日蓮等の いまにちれん

類いの意は惣じては たぐ

は そう

にやらい いっさいしじゅう

にちれん でし だんな

如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子・檀那なり、され

むさ さんじん

まつぼう ほけきよう

ぎようじや

むさ さんじん

は無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号

なむ みようほうれんげきよう

じゆりようほん

だいじ

これ

を南無妙法蓮華經と云うなり、寿量品の事の三大事とは是な

そく

にやらい りそく

ほんぶ

こうべ

り、六即の配立の時は此の品の如来は理即の凡夫なり頭に

なむ みようほうれんげきよう

ちようだい

たてまつ

みようじそく

そのゆえ

南無妙法蓮華經を頂戴し奉る時名字即なり、其の故は始めて

だいもく

たてまつ

しゆきよう

かんぎようそく

聞く所の題目なるが故なり聞き奉りて修行するは觀行即なり

かんぎようそく

いちねんさんぜん

ほんそん

わくしよう

此の觀行即とは事の一念三千の本尊を觀ずるなり、さて惑障

そうじそく

けた

ぶんしんそく

を伏するを相似即と云うなり化他に出づるを分真即と云うなり

むさ

さんじん

くきよう

くきようそく

くきようそく

無作の三身の仏なりと究竟したるを究竟即の仏とは云うなり、

惣じて伏惑を以て寿量品の極とせず唯凡夫の当体・本有の儘

じゆりようほん

ただほんぶ

とうたい

ほんぬ まま

を此の品の極理と心得可きなり、無作の三身の所作は何物ぞと

こくり こころうべ

むさ

さんじん

しよさ

なにもの

云う時南無妙法蓮華經なり云云。

なむ みようほうれんげきよう

第二如來秘密神通之力によらいひみつじんつうの事

御義口伝おんぎくでんに云く無作三身むささんじんの依文いぶんなり、此の文ぶんに於て重重そうどうの相伝さうでんこれあり、神通じんつう之力りきとは我等衆生われらしゅじやうの作作さくさく發發はつはつと振る舞う處ところを神通じんつうと云うなり獄卒ごくそつの罪人ざいにんを苛責こさくする音こえも皆神通みなじんつう乃力なりりき生住異滅しやうじゆいめつの森羅三千しんらさんぜんの当体とうたい悉く神通じんつう之力りきの体たいなり、今日蓮等けふれんどうの類たぐの意いは即身成仏そくしんじやうぶつと開覺かいかくするを如來秘密神通によらいひみつじんつう之力りきとは云うなり、成仏じやうぶつするより外ほかの神通じんつうと秘密ひみつとは之これ無きなり、此の無作むさの三身さんじんをば一字いちじを以て得たり所謂信いわゆるの一字いちじなり、仍よつて經けいに云く「我等当信受仏語われらしんじゆぶつご」と信受しんじゆの二字ふたじに意を留む可きなり。

第三我実成仏已來無量無辺等がじつじやうぶついらいむりやうむへんの事会

御義口伝おんぎくでんに云く我実いわとは釈尊しゃくそんの久遠実成道くおんじつじやうなりと云う事を説かれたり、然しかりと雖いへども当品たうひんの意いは我われとは法界ほうかいの衆生しゅじやうなり十界じゆっかい

己こ己こを指して我と云うなり、実とは無作むさ三身さんじんの仏なりと定めた

り此これを實と云うなり成とは能成所成のうじょうしよじょうなり成は開く義なり

法界無作ほっかいむさの三身さんじんの仏なりと開きたり、仏とは此これを覺知かくちするを

云うなり已とは過去かこなり来とは未來みらいなり已來このかたの言の中に現在げんざいは

有あるなり、我實と成けたる仏にして已も来も無道なり無辺むへんなり、

百界千如ひゃつかいせんによ・一念三千いちねんさんぜんと説かれたり、百千の二字は百は百界千

は千如こなり此すなわれ即ち事いちねんさんぜんの一念三千なり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無なむ

妙法蓮華經みょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる者は壽量品じゆりようぽんの本主なり、惣そうじては迹化しゃつけ

の菩薩ぼさつ此の品に手をつけいろうべきに非あらざる者なり、彼は

迹しやくひよう表本裏こ・此これは本面迹裏しやくり・然しかりと雖いえども而しかも当品は末法まつぽうの

要法ようほうに非あらざるか其そのの故ゆえは此の品は在世ざいせの脱益だいてきなり題目だいもくの五字ごじ

計ばかり当今とうこんの下種げしゆなり、然しかれば在世ざいせは脱益滅後めつごは下種げしゆなり仍よつて

下種げしゅを以て末法まっぽうの詮なと為す云云。

第四如來如實知見三界之相無有生死しやうじの事

御義口伝おんぎくでんに云く如來にやらいとは三界さんがいの衆生しゆじやうなり此の衆生しゆじやうを壽量品じゆりやうぼん

の眼まなこ開けてみれば十界じゆっかい本有ほんぬと實ことの如く知見ちけんせり・三界之相さんがいと

は生老病死しやうろうびやうしなり本有ほんぬの生死しやうじとみれば無有生死しやうじなり生死無しやうじけれ

ば退出ただしやうじも無し唯生死無ただしやうじきに非あらざるなり、生死しやうじを見て厭離おんりするを

迷まよいと云い始覺しかくと云うなりさて本有ほんぬの生死しやうじと知見ちけんするを悟と

云い本覺ほんかくと云うなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ

奉たてまつる時本有ほんぬの生死しやうじ本有ほんぬの退出たいしゅと開覺かいかくするなり、又云く無むも有あも

生も死も若退ざいせも若出めつこも在世ことごとみなも滅後ほんぬじやうじゆうも悉ふるまいく皆本有ふるまい常住じやうじの振舞ふるまいな

り無なとは法界ほっかい同時どうじに妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの振舞ふるまいより外そとは無なきなり有あと

は地獄じごくは地獄じごくの有あの儘まま十界じゆっかい本有ほんぬの妙法みやうほうの全体ぜんたいなり、生とは

みょうほう

妙法の生なれば随縁なり死とは寿量の死なれば法界同時に責

如なり若退の故に滅後なり若出の故に在世なり、されば無死退

滅は空なり有生出在は仮なり如来如実は中道なり、無死退滅

は無作の報身なり有生出在は無作の応身なり如来如実は無作の

法身なり、此の三身は我が一身なり、一身即三身名為秘とは是な

り、三身即一身名為密も此の意なり、然らば無作の三身の当体

の蓮華の仏とは日蓮が弟子・檀那等なり南無妙法蓮華經の宝

号を持ち奉る故なり云云。

第五 若仏久住於世薄徳之人不種善根貧窮下賤貪著五欲入於憶

想妄見網中の事

御義口伝に云く此の經文は仏世に久住したまわば薄徳の人は

善根を殖ゆ可からず然る間妄見網中と説かれたり、所詮此の薄

徳とは在世ざいせいに漏れたる衆生しゅじょう今滅後めつご日本国にほんこくに生れたり、所謂いわゆる念仏ねんぶつ
・ 禪・真言等しんごんの謗法ほうぼうなり、不種善根ぜんこんとは善根ぜんこんは題目だいもくなり不種ふしゅ
は未だ持たざる者なり、憶想いさうとは捨閉閣しゃへい拋かく第三の劣等りやくとう此かくの
如きの憶想ごうごなり、妄とは權教ごんきやう妄語もうごの經教きやうきやうなり見は邪見じゃけんなり
法華最第一の一を第三と見るが邪見じゃけんなり、網中とは謗法ほうぼう不信ふしんの
家なり、今日蓮等にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱え奉る者とな たてまつはかか
る妄見の經網中の家を離れたる者なり云云。

第六 飲他毒藥藥發悶亂宛轉于地もんらんの事

御義口伝おんぎくでんに云く他いわとは念仏ねんぶつ・禪・真言しんごんの謗法ほうぼうの比丘びくなり、毒藥どくやく
とは權教ごんきやう方便ほうべんなり法華の良藥りやうやくに非ず故あらに悶亂もんらんするなり悶とは
いきたゆるなり、壽量品じゆりやうぽんの命なきが故ゆえに悶亂もんらんするなり宛轉えんてん于
地とは阿鼻地獄あびじこくへ入るなり云云。諸子飲毒の事は釈しよに云く「邪師じゃし

の法を信受するを名けて飲毒と為す」と、諸子とは謗法なり飲
毒とは弥陀大日等の権法なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經
と唱え奉るは毒を飲まざるなり。

第七・或矢本心・或不失者の事

御義口伝に云く本心を失うとは謗法なり本心とは下種なり不失
とは法華經の行者なり失とは本有る物を失う事なり、今日蓮
等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは本心を失わざるなり云
云」

第八擣☆符和合与子令服の事

御義口伝に云く此の經文は空仮中の三諦戒定慧の三学なり、
色香美味の良薬なり擣は空諦なり☆は仮諦なり和合は中道な
り与は投与なり子は法華の行者なり服すると云うは受持の義

なり、是これを此大良藥色香美味皆悉具足りようやくしきこうみみかいしつぐそくと説かれたり、皆悉かいしつの

二字万行方善・諸波羅蜜を具足まんぎようしよはらみつぐそくしたる大良藥りようやくたる南無

妙法蓮華經みようほうれんげきようなり、色香等とは一色一香・無非中道むひちゅうどうにして草木

成仏じようぶつなり、されば題目だいもくの五字ごじに一法として具足ぐそくせずと云う事

なし若もし服する者は速除苦惱くのうなり、されば妙法みようほうの大良藥りようやくを服

するは貪とん・瞋じん・癡ちの三毒さんどくの煩惱ぼんのうの病患を除くなり、法華ほっけの

行者ぎようじや南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる者は謗法ほうほうの供養くようを受けざるは

貪欲とんよくの病を除くなり、法華ほっけの行者ぎようじやは罵詈めりせらるれども忍辱にんにくを

行ずるは脹意ちやうぎの病を除くなり、法華經ほっけきようの行者ぎようじやは是人ぜにんのう於ぶつどう仏道

決定けつじよう無有疑むうぎと成仏じようぶつを知るは愚痴おろかの煩惱ぼんのうを治するなり、され

ば大良藥りようやくは末法まつぽうの成仏じようぶつの甘露かんろなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無

妙法蓮華經みようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつるは大良藥りようやくの本主なり。

第九毒氣深入矢本心故の事 どつけ ほんしん

御義口伝に云く毒氣深入とは権教謗法の執情深く入りたる者なり、之に依つて法華の大良薬を信受せざるなり服せしむると雖も吐き出だすは而謂不美とてむまからずと云う者なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは而謂不美の者に非ざるなり。

第十是好良薬今留在此汝可取服勿憂不差の事 ぜこうりようやくこんるざいしなんじ もつうふさい

御義口伝に云く是好良薬とは・或は經教・或は舍利なりさて末法にては南無妙法蓮華經なり、好とは三世諸仏の好み物は題目の五字なり、今留とは末法なり此とは一閻浮提の中には日本国なり、汝とは末法の一切衆生なり取は法華經を受持する時の儀式なり、服するとは唱え奉る事なり服するより無作の

さんじん
三身なり始成正覺の病患差るなり、今日蓮等の類い南無
みょうほうれんげきよう とな たてまつこれ
妙法蓮華經と唱え奉る是なり。

第十一 自我得仏來の事

おんぎくでん いわ いっくさんじん なら
御義口伝に云く一句三身の習いの文と云うなり、自とは九界な
り我とは仏界なり此の十界は本有無作の三身にして來る仏な
じゅつかい ほんぬ むさ さんじん
りと云えり、自も我も得たる仏來れり十界本有の明文なり、
じゅつかい ほんぬ
我は法身・仏は報身・來は応身なり此の三身・無始無終の古仏
ほうしん ほうしん おうじん さんじん むしむしゅう こぶつ
にして自得なり、無上宝聚不求自得之を思う可し、然らば即ち
じとく むじょうほうじゆ ふぐじとくこれ べ しか すなわ
顕本遠寿の説は永く諸教に絶えたり、今日蓮等の類い南無
けんぽんおんじゆ しょきよう いまにちれん たぐ なむ
みょうほうれんげきよう とな たてまつ ぎようじや
妙法蓮華經と唱え奉るは自我得仏來の行者なり云云。

第十二 為度衆生故方便現涅槃の事

おんぎくでん いわ ねはんぎよう ほけきよう
御義口伝に云く涅槃經は法華經より出でたりと云う經文なり、
きようもん

既すでに方便ほうべんと説せつかれたり云云。

第十三 常住じやうじゆう 此説法せつぽうの事

御義口伝おんぎくでんに云いく常住じやうじゆうとは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやの住処じゆうしよなり、此とは娑婆世界しゃばせかいなり山谷曠野せんごくこうやを指して此とは説き給たまう、説法せつぽうとは一切いっさい衆生しじゆうの語言ごげんの音声おんじゆうが本有ほんぬの自受用智じじゆうちの説法せつぽうなり、末法まつぽうに入いつて説法せつぽうとは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり今日蓮等いまにちれんの類たぐいの説法せつぽう是なり。

第十四 時・我及衆僧俱出 靈鷲山りやうじゆうせんの事

御義口伝おんぎくでんに云いく靈山りやうぜん一會儼然げんねん未散みさんの文なり、時とは感応末法かんのうまつぽうの時なり我とは釈尊しゃくそん及およとは菩薩ぼさつ聖衆しやうじゆうを衆僧しゆうそうと説かれたり俱ともとは十界じゅうがいなり靈鷲山りやうじゆうせんとは寂光土じやくこうどなり、時に我も及およも衆僧しゆうそうも俱ともに靈鷲山りやうじゆうせんに出いずるなり秘へす可べし秘へす可べし、本門事ほんもんじの一いち念三千の明文めいぶんなり御本尊ごほんそんは此の文を顯あらわし出だし給たまうなり、さ

れば俱とは不變真如の理なり出とは隨緣真如の智なり俱とは
一念なり出とは三千なり云云。

又云く時とは本時娑婆世界の時なり下は十界宛然の曼陀羅を
顯す文なり、其の故は時とは末法第五時の時なり、我とは釈尊
及は菩薩衆僧は二乘俱とは六道なり・出とは靈山淨土に列
出するなり靈山とは御本尊並びに日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者の住所を説くなり云云。

第十五 衆生見劫尽○而衆見焼尽の事

御義口伝に云く本門壽量の一念三千を頌する文なり、大火所
焼時とは実義には煩惱の大火なり、我此土安穩とは国土世間な
り、衆生所遊樂とは衆生世間なり、宝樹多華菓とは五陰世間
なり是れ即ち一念三千を分明に説かれたり、又云く上の件の

文は十界なり大火とは地獄界なり天鼓とは畜生なり人と天とは人天の二界なり、天と人と常に充滿するなり、雨曼陀羅華とは声聞界なり園林とは緣覺界なり菩薩界とは及の一字なり仏界とは散仏なり修羅と餓鬼界とは憂怖諸苦惱如是悉充滿の句に摂するなり、此等を是諸罪衆生と説かれたり、然りと雖も此の寿量品の説顯われては、則皆見我身とて一念三千なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。

第十六 我亦為世父の事

御義口伝に云く我とは釈尊一切衆生の父なり主師親に於て仏に約し經に約す、仏に約すとは迹門の仏の三徳は今此三界の文是なり、本門の仏の主師親の三徳は主の徳は我此土安穩の文なり師の徳は常説法教化の文なり親の徳は此の我亦為世父の文

是なり、妙樂大師は寿量品の文を知らざる者は不知恩の畜生
と釈し給えり経に約すれば、諸経中王は主の徳なり能救一切
衆生は師の徳なり又如大梵天王一切衆生之父の文は父の徳な
り、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は一切衆生
の父なり無間地獄の苦を救う故なり云云、涅槃經に云く「一切
衆生の異の苦を受くるは悉く是れ如来一人の苦」と云云、日蓮
が云く一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ日蓮一人の苦な
るべし。

第十七 放逸著五欲墮於惡道中の事

御義口伝に云く放逸とは謗法の名なり入阿鼻獄疑無き者な
り、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は此の經文
を免離せり云云。

第十八 行道不行道ぎようどうふぎようどうの事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ十界じゅっかいの衆生しゅじょうの事を説くなり行道ぎようどうは四聖ししやうふぎようどう
不行道ふぎようどうは六道ろくどうなり、又云くいわ行道ぎようどうは修羅しゆら・人天にんてん不行道ふぎようどうは三惡道さんあくどうなり、所詮しよせん末法まつぽうに入つては法華ほつけの行者ぎやうじやは行道ぎようどうなり謗法ほうぽうの者は不行道ふぎようどうなり、道みちとは法華ほけきやう經なり、天台てんだい云く「仏道ぶつどうとは別して今の經を指す」と、今日けふ蓮等れんどうの類たぐひい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつるは行道ぎようどうなり唱となえざるは不行道ふぎようどうなり云云。

第十九 每自作是念さぜんの事

御義口伝おんぎくでんに云くいわ毎まいとは三世さんぜなり自とは別しては釈尊しやくそん惣そうじては十界じゅっかいなり、是念むさほんぬとは無作本有なむみょうほうれんげきやうの南無妙法蓮華經いちねんの一念いちねんなり、作とは此の作は有作の作に非ずあらむさほんぬ無作本有なむみょうほうれんげきやうの作なり云云、広くじゅっかいほんぬ十界本有じゅっかいほんぬに約して云わば自とは万法こころ己己ごごの当体とうたいなり、是念と

は地獄じごくの呵責かしゃくの音其その外一切衆生の念念皆是れ自受用報身の
智ちなり是これを念とは云うなり、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經
と唱となえ奉たてまつる念は大慈悲じひの念なり云云。

第二十 得入無上道等の事

御義口伝おんぎくでんに云く無上道とは壽量品の無作むさの三身さんじんなり此の外に
成就じょうじゆぶっしんこ仏身之れ無し、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經と唱となえ
奉たてまつる者は成就じょうじゆぶっしんうたがい仏身疑無きなり云云。

第廿一 自我偈じがげの事

御義口伝おんぎくでんに云く自とは九界なり我とは仏身ぶっしんなり偈ことわりとはことわ
るなり本有ほんぬとことわりたる偈頌げじゆなり深く之これを案ず可べし、偈樣
とは南無妙法蓮華經なり云云。

第廿二 自我偈じがげ始終しじゆうの事

御義口伝に云く自とは始なり速成就仏身の身は終りなり始終
自身なり中の文字は受用なり、仍つて自我偈は自受用身なり
法界を自身と開き法界自受用身なれば自我偈に非ずと云う事な
し、自受用身とは一念三千なり、伝教云く「一念三千即
・自受用身・自受用身とは尊形を出でたる仏と・出尊形仏と
は無作の三身と云う事なり」云云、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者は是なり云云。

第廿三 久遠の事

御義口伝に云く此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたら
かさずつくるわずもとの儘と云う義なり、無作の三身なれば初
めて成ぜず是れ働かざるなり、卅二相・八十種好を具足せず
是れ繕わざるなり本有常住の仏なれば本の儘なり是を久遠と

云うなり、久遠くおんとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり実成無作じつじようむさと開けたるなり云云。

第廿四 此の寿量品の所化の国土と修行との事

御義口伝おんぎくでんに云く当品流布いわの国土こくどとは日本国にほんこくなり惣じては南閻浮提えんぶだいなり、所化しよけとは日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじようなり修行しゆぎようとは無疑うたがいわっしんしんじん曰信の信心しんじんの事なり、授与じゆよの人とは本化地涌ほんげじゆの菩薩ぼさつなり云云。

第廿五 建立御本尊等の事

御義口伝おんぎくでんに云く此の本尊ほんぞんの依文いぶんとは如来秘密神通にょらいひみつじんつう之力の文なり、戒定慧かいじようえの三字じちりようほんは寿量品の事の三大秘法ひほうこ是れなり、日蓮にちれん慥たしかに靈山りようぜんに於て面受口決おもてくちけつせしなり、本尊ほんぞんとは法華經ほけきようの行者ぎちりようの一身いつたうの当体とうたいなり云云

第廿六 寿量品の对告衆の事

おんぎくでん いわ きょうもん みろくぼさつ
御義口伝に云く経文は弥勒菩薩なり、然りと雖も滅後を本と
する故に日本国の一切衆生なり、中にも日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者はなり、弥勒とは末法法華の行者の
事なり、弥勒をば慈氏と云う法華の行者を指すなり、章安
大師云く「為彼除惡即是彼親」と是れ豈弥勒菩薩に非ずや云云
第廿七無作三身の事 種子尊形三摩耶御義口伝に云く尊形とは
十界本有の形像なり三摩耶とは十界所持の物なり種子とは信
の一字なり、所謂南無妙法蓮華經改めざるを云うなり三摩耶と
は合掌なり秘す可し秘す可し云云。

分別功德品三箇の大事

第一其有衆生聞仏壽命長遠如是乃至能生一念信解所得功德無
有限量の事

おんぎくでん いわ いちねんしんげ
御義口伝に云く一念信解の信の一字は一切智慧を受得する所の
因種なり、信の一字は名字即の位なり仍つて信の一字は最後品
の無明を切る利剣なり、信の一字は寿量品の理顕本を信ずる
なり解とは事顕本を解するなり此の事理の顕本を一念に信解す
るなり、一念とは無作本有の一念なり、此くの如く信解する人
の功德は限量有る事有る可からざるなり、信の処に解あり解
の処に信あり然りと雖も信を以て成仏を決定するなり、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者はなり云云。

第二是則能信受如是諸人等頂受此經典の事

おんぎくでん いわ ほけきよう こうべ いただき
御義口伝に云く法華経を頭に頂くと云う明文なり、如是諸人
等の文は広く一切衆生に亘るなり、然らば三世十方の諸仏は
妙法蓮華経を頂き受けて成仏し給う、仍つて上の寿量品

の題目を妙法蓮華經と題して次に如來と題したり秘す可し云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは此の故なり云云。

第三仏子住此地則是仏受用の事

御義口伝に云く此の文を自受用の明文と云えり、此地とは無作の三身の依地なり仏子とは法華の行者なり仏子は菩薩なり法華の行者は菩薩なり住とは信解の義なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は妙法の地に住するなり仏の受用の身なり深く之を案ず可し云云。

隨喜品二箇の大事

第一妙法蓮華經隨喜功德の事

御義口伝に云く隨とは事理に隨順するを云うなり喜とは自他

共に喜ぶ事なり、事とは五百塵点じんてんの事、頭本に随ずい順じゆんするなり、理とは理頭本に随したがうなり、所詮しよせん寿量品じゆりやうぼんの内証ないしやうに随ずい順じゆんするを随とは云うなり、然しかるに自他じた共に智慧ちえと慈悲じひと有あるを喜とは云うなり、所詮しよせん今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる時必ず無作むさ三身の仏に成るを喜とは云うなり、然しかる間随とは法に約し喜とは人に約するなり、人とは五百塵点じんてんの古仏こぶつたる釈尊しゃくそん法とはじゆりやうぼん寿量品なむみやうほうれんげきやうの南無妙法蓮華經なり、是に随したがい喜ぶを随喜ずいきとは云うなり、惣そうじて随とは信いみの異名いみやうなり云云、唯信心ただしんじんの事を隋と云うなりされば二卷には随ずい順じゆん此經非己智分ちふんと説かれたり云云。

第二口氣無しゆう☆優鉢華之香常徒其口出の事

御義口伝おんぎくでんに云く口氣いわとは題目だいもくなり、無☆稼むしゆうえとは弥陀みだ等の権教ごんきやうほうべんほうべんとくどうとくどう方便無得道の教まじを交えざるなり、優鉢華之香とは法華經ほけきやうなり、

まっぼう
末法の今は題目なり、方便品に如優量鉏華の事を一念三千と云
えり之を案ず可し、常とは三世常住なり其口とは法華の行者
の口なり出とは南無妙法蓮華經なり、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉るは 常従其口出なり云云。

法師功德品四箇の大事

第一法師功德の事

御義口伝に云く法師とは五種法師なり功德とは六根清淨の
果報なり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者
は六根清淨なり、されば妙法蓮華經の法の師と成つて大な
る徳有るなり、功は幸と云う事なり又は惡を滅するを功と
云い善を生ずるを徳と云うなり、功德とは即身成仏なり又
六根清淨なり、法華經の説文の如く修行するを六根清淨

と得意可きなり云云。

第二六根 清淨の事

おんぎくでん いわ まなこ
御義口伝に云く眼の功德とは法華不信の者は無間に墮在し信
ずる者は成仏なりと見るを以て眼の功德とするなり、法華經
を持ち奉る処に眼の八百の功德を得るなり、眼とは法華經
なり此の 大乘經典は諸仏の眼目と、今日蓮等の類い南無
妙法蓮華經と唱え奉る者は眼の功德を得るなり云云、耳・鼻
・舌・身・意又又此くの如きなり云云。

第三又如 淨明鏡の事

おんぎくでん いわ ほけきよう
御義口伝に云く法華經に鏡の譬を説く事此の明文なり、六根
清淨の人は瑠璃明鏡の如く三千世界を見ると云う經文なり、
今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は明鏡に万像を

浮ぶるが如く知見するなり、此の明鏡とは法華經なり別して
は宝塔品なり、又は我が一心の明鏡なり、所詮瑠璃と明鏡と
の二の譬を説かれたり身根清淨の下なり、色心不二なれば
何れも清淨の徳分なり淨とは不淨に對して淨と云うなり明と
は無明に對して明と説くなり、鏡とは一心なり淨は仮諦・明は
空諦・鏡は中道なり悉見諸色像の悉は十界なり、所詮沖明鏡
とは色心の二法、妙法蓮華經の体なり淨明鏡とは信心なり
云云、又三千大千世界を知見するとは三世間の事なり。

第四是人持此經安住希有地の事

御義口伝に云く是人とは日本国は一切衆生の中には法華の
行者なり希有地とは寿命品の事理の顕本を指すなり、是を又
分別品には「仏説希有法」と説かれたり別しては南無

妙法蓮華經なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る
者の希有の地とは末法弘通の明鏡たる本尊なり、惣じては此
の品の六根清淨の功德は十信相似即なり対告衆の常精進
菩薩は十信の第三信と云えり、然りと雖も末法に於ては法華經
の行者を指して常精進菩薩と心得可きなり此の經の持者は是
則精進の故なり。

常不輕品三十箇の大事

763P

第一常不輕の事

御義口伝に云く常の字は三世の不輕の事なり、不輕とは一切
衆生の内証所具の三因仏性を指すなり仏性とは法性なり
法性とは妙法蓮華經なり云云。

第二得大勢菩薩の事

御義口伝おんぎくでんに云く得とは応身おうじんなり大とは法身ほっしんなり勢とは報身ほうしんなり、又得とは仮諦けたいなり大とは中道ちゅうどうなり勢とは空諦くうたいなり円融えんゆうの三諦三身なり。

第三威音王いおんの事

御義口伝おんぎくでんに云く威とは色法なり音とは心法なり王とは色心不二を王と云うなり、末法まつぽうに入つて南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱え奉る是れ併いおんら威音王いおんなり云云、其の故そのゆえは音とは一切いっさい權教こんきようの題目だいもく等なり威とは首題ごじの五字ごじなり王とは法華ほっけの行者ぎようじゃなり云云、法華ほっけの題目だいもくは獅子ししの吼こゆるが如ごとく余經よきようは余獸よきようの音おとの如ごとくなり諸經しよきよう中王の故に王と云うなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐいい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱え奉る威音王いおんおうぶつなり云云。

第四凡有所見しよけんの事

おんぎくでん いまほんこく いっさいしゅじょう ほけきょう だいもく
御義口伝に云く今日本国の一切衆生を法華經の題目の機なり
ちけん
と知見するなり云云。

がじんきょう
第五我深敬汝等不敢輕慢 所以者何汝等皆行菩薩道當得作仏の事
おんぎくでん
御義口伝に云く此の廿四字と妙法の五字は替われども其の意
こ
は之れ同じ廿四字は略法華經なり。
ほけきょう

第六但行礼拝の事

おんぎくでん
御義口伝に云く礼拝とは合掌なり合掌とは法華經なり此れ即
いちねんさんぜん
ち一念三千なり、故に不專読誦經典但行礼拝と云うなり。
どくじゅききょうでん

第七乃至遠見の事

おんぎくでん
御義口伝に云く上の凡有所見の見は内証所具の仏性を見るな
かみ
り、此れは理なり遠見の見は四衆と云う間事なり仍つて上は心
ししゅう
法を見る今は色法を見る色法は本門の開悟四一開会なり、心法
ほんもん
かいこ

を見るは迹門しやくもんの意又四一開会なり、遠の一字は寿量品じゅうりょうぽんの久遠くおんなり故に故往礼拝といえり云云。

第八心不浄者の事ふじょう

御義口伝おんぎくでんに云く謗法ほうぼうの者は色心しきしん二法共に不浄ふじょうなり、先ず心法ふじょう不浄の文は今・此の心不浄者なり、又身不浄の文は譬喩品ひゆほんに「身常臭処垢穢不浄くえふじょう」と云えり、今日蓮等の類いまにちれん たぐいい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱え奉る者は色心しきしん共に清浄しょうじょうなり、身浄は法師功德品ほうししくどくに云く「若持法華經其身甚清浄ほけきやう」の文なり、心浄とは提婆品だいばに云く「浄心信敬じょうしん」と云云、浄とは法華經の信心しんじんなり不浄ふじょうとは謗法ほうぼうなり云云。

第九言は無智比丘むちびくの事

御義口伝おんぎくでんに云く此の文は法華經ほけきやうの明文めいぶんなり、上慢じょうまんの四衆不輕ししゅうふぎやう

菩薩ぼさつを無智むちの比丘びくと罵詈まろせり、凡有所見しよけんの菩薩ぼさつを無智むちと云う事は第六天だいろくてんの魔王まおうの所為まつぼうなり、末法まつぼうに入につて日蓮等にちれんの類たぐいい南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱なえ奉ほうる者は無智むちの比丘びくと謗わぜられん事經文きやうもんの明鏡めいきやうなり、無智むちを以もつて法華經ほけきやうの機きと定めたり。

第十間其所說皆信伏隨從の事

御義口伝おんぎくでんに云く聞みとは名字みょうじそく即すなはちなり所詮しよせんは而強毒にこうどくし之の題目だいもくなり、皆みなとは上慢じやうまんの四衆ししゆう等らなり信うたがいとは無疑いっしん曰いは信うたがいなり伏ほつとは法華ほけにきふく歸伏きふくするなり隨しゆとは心こころを法華經ほけきやうに移うつすなり從したがとは身みを此この經きやうに移うつすなり、所詮しよせん今日蓮等けふれんの類たぐいい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうと唱なえ奉ほうる行者ぎやうじやは末法まつぼうの不輕菩薩ふぎやうぼさつなり。

第十一於四衆中說法心無所畏の事

御義口伝おんぎくでんに云く四衆ししゆうとは日本國にほんこくの中うちの一切衆生いっさいしじやうなり說法せつぼうとは

なむ みょうほうれんげきよう
南無妙法蓮華經なり、心無所畏とは今日蓮等の類い南無
みょうほうれんげきよう
妙法蓮華經と呼ばわる所の折伏なり云云。

第十二常不輕菩薩豈異人乎則我身是の事

おんぎくでん
御義口伝に云く過去の不輕菩薩は今日の釈尊なり、釈尊は
じゅりようほん きようしゅ
寿命品の教主なり 寿命品の教主とは我等・法華經の行者
なり、さては我等が事なり今日蓮等の類いは不輕なり云云。

第十三常不值仏不聞法不見僧の事

おんぎくでん
御義口伝に云く此の文は不輕菩薩を輕賤するが故に三宝を拝見
せざる事二百億劫地獄に堕ちて大苦惱を受くと云えり、今末法
に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者を輕賤せ
ん事は彼に過ぎたり、彼は千劫此れは至無數劫なり末法の仏と
は凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、

仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり、深覺・円理名之為仏の故なり円理とは法華經なり云云。

第十四畢是罪已復遇常不輕菩薩の事

御義口伝に云く若し法華誹謗の失を改めて信伏随従する共浅く有りては無間に墮つ可きなり、先謗強きが故に依るなり千劫無間地獄に墮ちて後に出づる期有つて又日蓮に値う可きなり復遇日蓮なるべし。

第十五於如来滅後等の事

御義口伝に云く不輕菩薩の修行は此の如くなり仏の滅後に五種に妙法蓮華經を修行すべしと見えたり、正しくは故より下廿五字は末法日蓮等の類いの事なるべし、既に是の故にとおさえて於如来滅後と説かれたり流通の品なる故なり、惣じて

は流通るつうとは未来みらい当今の為なり、法華經ほけきよう一部いちおふは一往ざいせは在世ざいせの為なり再往さいおうは末法まつぽう当今の為なり、其そのの故ゆえは妙法蓮華經みようほうれんげきようの五字ごじは三世さんぜの諸仏しよぶつ共に許みらいめつこして未来滅後みらいめつこの者の為なり、品品の法門ほうもんは題目だいもくの用なり体の妙法末法の用たらば何ぞ用の品品別ならむや、此の法門秘ほうもんす可し秘ひす可し、天台てんだいの「綱維かういを提ていぐるに目として動かみようらくざること無きが如し」等と釈しやくする此の意なり、妙樂大師みようらくだいしは「略りやくして經題きやうだいを挙きよぐるに玄くわんに一部を収おさむ」と、此等こころえを心得こころえざる者は末法まつぽうの弘通くわうつうに足らざる者なり。

第十六此品の時の不輕菩薩の体の事

御義口伝おんぎくでんに云く不輕菩薩ふぎようぼさつとは十界じゆつかいの衆生しゆじやうなり、三世常住さんぜじやうじゆうの礼拝らいはいの行を立つるなり吐く所の語言ごんごは妙法みようほうの音声おんじやうなり、獄卒ごくそつが杖を取ざいつて罪人ざいにんを呵責かしやくするが体の礼拝らいはいなり敢えて輕慢きやうまんせざ

るなり、罪人・我を責め成すと思えば不輕菩薩を呵責するなり
（やくぶく） 折伏の行是なり。
（これ）

第十七 不輕菩薩の礼拝住処の事之に付て十四箇所の礼拝住処の
（ふぎようほさつ） 事之有り
（これあ）

御義口伝に云く礼拝の住処とは多宝塔中の礼拝なり、其の故
（おんぎくでん） は塔婆とは五大の所成なり五大とは地水火風空なり此れを多宝
（とうば） の塔とも云うなり、法界広しと雖も此の五大には過ぎざるなり
（ほっかい） 故に塔中の礼拝と相伝するなり秘す可し秘す可し云云。
（たっちゅう）

第十八 開示悟入礼拝住処の事

御義口伝に云く開示悟入の四仏知見を住処とするなり、然る
（おんぎくでん） 間方便品の此の文を礼拝の住処と云うなり此れは内に不輕の
（ほうべん） 解を懷くと釈せり、解とは正因仏性を具足すと釈するなり
（いだ）

かいぶつちけん　ぶつしょう
開仏知見とは此の仏性を開かしめんとて仏は出現し給うなり。

第十九每自作是念の文礼拝住処の事

おんぎくでん　さぜねん　じゅうしよ
御義口伝に云く毎の字は三世なり念とは一切衆生の仏性を念
じ給いしなり、仍つて速成就仏身と皆当作仏とは同じき事な
り仍つて此の一文を相伝せり、天台大師は「開三顯一」○
かいこんけんのん　そうでん　てんだいだいし　かいさんけんいつ
開近顯遠」と釈せり秘す可し秘す可し云云。

第二十我本行菩薩道の文礼拝住処の事

おんぎくでん　がほんぎようぼさつどう　じゅうしよ
御義口伝に云く我とは本因妙の時を指すなり、本行菩薩道の
ふぎようぼさつ　ほんにんみよう　ほんぎようぼさつどう
文は不輕菩薩なり此れを礼拝の住処と指すなり。

第廿一生老病死礼拝住処の事

おんぎくでん　しょうろうびようし　じゅうしよ
御義口伝に云く一切衆生生老病死を厭離せず無常遷滅の当体
いっさいしゅじようしょうろうびようし　おんり　むじよう　とうたい

に迷まように依よつて後世菩提ごしやうぼだいを覚知かくちせざるなり、此を示す時煩惱ぼんのう
即菩提生死即涅槃そくぼだいしやうじそくねはんと教しやううる当体とうたいを礼拝と云うなり、左右の両の
手を開く時は煩惱生死上慢不輕各別ぼんのうしやうじしやうまんふぎやうかくべつなり、礼拝する時兩の手
を合するは煩惱即菩提生死即涅槃ぼんのうそくぼだいしやうじそくねはんなり、上慢じやうまんの四衆ししやうの所具しよぐの
仏性ぶつしやうも不輕ふぎやう所具しよぐの仏性ぶつしやうも一種の妙法みやうほうなりと礼拝するなり云
云。

第廿二法性礼拝住処ほつしやうの事じゅうしよ

御義口伝おんぎくでんに云く不輕菩薩ふぎやうぼさつ法性真如ほつしやうしんによの三因さんいん仏性ぶつしやう南無なむ
妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの廿四字に足立あしだてて無明むみやうの上慢じやうまんの四衆ししやうを拜するは
蘊在衆生の仏性うんざいしゆじやうぶつしやうを礼拝するなり云云。

第廿三無明礼拝住処さんむの事じゅうしよ

御義口伝おんぎくでんに云く自他じたの隔意きやくいを立て彼は上慢じやうまんの四衆ししやう我われは不輕ふぎやうと

云う、不^ふ輕^{ぎやう}は善^{ぜん}人^{にん}上^{じやう}慢^{まん}は惡^{あく}人と善^{ぜん}惡^{あく}を立つるは無^む明^{めい}なり、此に立つて礼^れ拜^{はい}の行^{ぎやう}を成^{なり}す時^{とき}善^{ぜん}惡^{あく}不^ふ二^に・邪^{じゃ}正^{しやう}一^{いつ}如^にの南^{なん}無^む妙^{めう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^げ經^{きやう}と礼^れ拜^{はい}するなり云云。

第廿四蓮^{れん}華^げの二^に字^じ礼^れ拜^{はい}住^じ処^{しよ}の事

御^{おん}義^ぎ口^く伝^{でん}に云^いく蓮^{れん}華^げとは因^{いん}果^がの二^に法^{ぽう}なり、惡^{あく}因^{いん}あれば惡^{あく}果^がを感じ善^{ぜん}因^{いん}あれば善^{ぜん}果^がを感じず内^{ない}証^{しやう}には汝^{なんぢ}等^ら三^{さん}因^{いん}仏^{ぶつ}性^{しやう}の善^{ぜん}因^{いん}あり、事^{こと}に顯^{あらわ}す時^{とき}は善^{ぜん}果^がと成^{なり}つて皆^{みな}当^{たう}作^{さく}仏^{ぶつ}す可^べしと礼^れ拜^{はい}し給^{たま}うなり云云。

第廿五実^{じつ}報^{ぽう}土^ど礼^れ拜^{はい}住^じ処^{しよ}の事

御^{おん}義^ぎ口^く伝^{でん}に云^いく実^{じつ}報^{ぽう}土^どは豎^{たて}の時^{とき}は菩^ぼ薩^{さつ}の住^じ処^{しよ}なり、仍^{また}つて不^ふ輕^{ぎやう}菩^ぼ薩^{さつ}の住^じ処^{しよ}を实^{じつ}報^{ぽう}土^どと定^{さだ}めて此^{こゝ}にて礼^れ拜^{はい}行^{ぎやう}を立て給^{たま}う間^{かん}実^{じつ}報^{ぽう}土^どは礼^れ拜^{はい}の住^じ処^{しよ}なり云云。

第廿六慈悲じひの二字礼拝住処じゅうしょの事

御義口伝おんぎくでんに云く不輕ふぎよう礼拝の行は皆当みなさぶつ作仏さぶつと教うる故に慈悲じひなり、既に杖木瓦石を以て打擲すれども而強毒にこうどくし之するは慈悲じひより起れり、仏心ぶつしんとは大慈悲心じひ是なりと説かれたれば礼拝の住処じゅうしょは慈悲じひなり云云。

第廿七礼拝住処じゅうしょ分真即そくの事

御義口伝おんぎくでんに云く菩薩ぼさつは分真即そくの位と定むるなり、此の位に立つて理即りそくの凡夫ほんぶを礼拝するなり之に依つて理即りそくの凡夫ほんぶなる間・此の授記じゆきを受けずして無智むちの比丘びくと謗じたり云云。

第廿八究竟即礼拝住処じゅうしょの事

御義口伝おんぎくでんに云く凡有所見しよけんの見は仏知見ぶつちけんなり、仏知見ぶつちけんを以て上慢じやうまんの四衆ししゆを礼拝する間究竟即くきやうそくを礼拝の住処じゅうしょと定むるなり云云。

第廿九法界礼拝住处ほっかい じゅうしよの事

御義口伝おんぎくでんに云く法界ほっかいに立て礼拝するなり法界ほっかいとは広きに非ず狭きに非ず惣そうじて法しよほうとは諸法しよほうなり界きやうかいとは境界じこくなり、地獄界ないし乃至ぶっかい仏界ぶつ各各界のつとを法ふぎやうる間不輕菩薩ふぎやうぼさつは不輕菩薩ふぎやうぼさつの界ふぎやうぼさつに法ふぎやうり上慢じやうまんの四衆ししゅうは四衆ししゅうの界のつとに法のつとるなり、仍よつて法界ほっかいが法界ほっかいを礼拝するなり自他じた不二ふたの礼拝じなり、其そのの故ゆえは不輕菩薩ふぎやうぼさつの四衆ししゅうを礼拝すれば上慢じやうまんの四衆ししゅう所具しよぐの仏性ぶつしやう又不輕菩薩ふぎやうぼさつを礼拝するなり、鏡に向つて礼拝を成す時浮べる影又我を礼拝するなり云云。

第卅礼拝住处じゅうしよ忍辱地の事

御義口伝おんぎくでんに云く既に上慢じやうまんの四衆ししゅう罵詈瞋恚ししゅうを成して虚妄じゆきの授記じゆきと謗ふしやうずと云えども不生瞋恚ふしやうと説く間忍辱地じゅうしよに住して礼拝の行を立つるなり云云、初の一の住处じゅうしよは世流布るふの学者がくしや知れり後の十

三箇所は当世とうせの学者がくしゃ知らざる事なり云云。

已上十四箇条の礼

拝の住処じゅうしょなり云云。

神力品じんりきほん八箇の大事だいじ

第一妙法蓮華經如来神力の事だいいちみょうほうれんげきようによらいじんりき

もんく

文句の十に云く神は

不測に名け力は

幹用に名く不測は

即ち天然

の体深く幹用は則ち転変の力大なり、此の中・深法を付属せん

が為ために十種の大力を現げんず故に神力品じんりきほんと名くと。

御義口伝おんぎくでんに云く 此の妙法蓮華經は釈尊しゃくそんの妙法みょうほうには非あらざる

なり既すでに此の品の時上行菩薩じょうぎようぼさつに付属ふぞくし給たまう故なり、惣そうじて

妙法蓮華經みょうほうれんげきようを上行菩薩じょうぎようぼさつに付属ふぞくし給たまう事は宝塔品の時事起り・

寿量品じゅうりょうほんの時事あらわ顕れ・神力属累じんりきぞくるいの時事おわ竟るなり、如来によらいとは上かみの

寿量品じゅうりょうほんの如来によらいなり神力とは十種の神力なり所謂妙法蓮華經いわゆるみょうほうれんげきようの

五^ご字は神と力となり、神力とは上

じゅうりょうぼん

の寿量品の時の如来秘密神通之力の文と同じきなり、今日蓮

いまにちれん

等の類^{たぐ}い南無妙法蓮華經と唱え奉^{とな たてまつ}る所の題目^{だいもく}なり此の十種の

じんりき

ざいせめつこ

わた

しか

いえど

神力は在世滅後に亘るなり然りと雖も十種共に滅後に限ると

こころう

べ

心得可きなり、又云く妙法蓮華經如来と神との力の品と心得

いわ みようほうれんげきようによらい

めつこ

こころう

こころう

べ

可きなり云云、如来とは一切衆生なり寿量品の如し、仍^よつて

いらい いっさいしゅじよう

じゅうりょうぼん

こと

よ

こころう

べ

いらい

いっさいしゅじよう

じゅうりょうぼん

こと

よ

こころう

べ

釈にも如来とは上に釈し畢ぬと云えり此の神とは山王七社等な

いらい しゃく おわん

さん

のう

べ

むねこれ

り此の旨之を案ず可きなり云云。

べ

べ

第二出 広長舌の事

こうちようぜつ

御義口伝に云く広とは迹門・長とは本門・舌とは中道法性

おんぎくでん いわ

しゃくもん

ほんもん

ちゆうどうほつしよう

ちゆうどうほつしよう

なり十法界妙法の功德なれば広と云うなり豎に高ければ長と

ほっかいみようほう

くどく

云うなり・広とは三千重点より已来の妙法・長とは五百塵点

さんぜん

このかた

みようほう

長

は

は

じん

云うなり・広とは三千重点より已来の妙法・長とは五百塵点

さんぜん

このかた

みようほう

長

は

は

は

は

は

は

このかた みようほう
已來の妙法・同じく広長舌なり云云。

第三十方世界衆宝樹下師子座上の事

おんぎくでん いわ じゅつぽう
御義口伝に云く十方とは十界なり此の下に於て草木成仏
ぶんみよう
分明なり、師子とは師は師匠子は弟子なり座上とは寂光土な
り十界即本有の寂光たる国土なり云云。

第四滿百千歳の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く滿とは法界なり百は百界なり千は千如なり
いちねんさんぜん
一念三千を滿百千歳と説くなり云云、一時も一念も滿百千歳に
して十種の神力を現ずるなり十種の神力とは十界の神力なり、
じゅつかい
十界の各各の神力は一種の南無妙法蓮華經なり云云。

第五地皆六種震動其中衆生○衆宝樹下の事

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く地とは国土世間なり其中衆生とは衆生世間な

り衆宝樹下とは五陰世間なり一念三千分明なり云云。
しゅうほうじゆげ ごおんせけん いちねんさんぜんふんみょう

第六娑婆是有仏名釈迦牟尼仏の事 しやば ちゅうう

御義口伝に云く本化弘通の妙法蓮華經の大忍辱の力を以て
おんぎくでん いわほんげぐつう みょうほうれんげきよう にんにく
弘通するを娑婆と云うなり、忍辱は寂光土なり此の忍辱の心を
ぐつう しやば にんにく じやつこうど
釈迦牟尼仏と云えり娑婆とは堪忍世界と云うなり云云。
しやかむにぶつ かんんにんせかい

第七新人行世間能滅衆生闇の事 せけん

御義口伝に云く斯人とは上行菩薩なり世間とは大日本国なり
おんぎくでん いわじようぎようほさつ せけん にほんこく
衆生闇とは謗法の大重病なり、能滅の件は南無妙法蓮華經
しゅじよう ほうほう じゅうびよう なむ みょうほうれんげきよう
なり今日蓮等の類い是なり云云。
いまにちれん たぐ これ

第八畢竟住一乘○是人於仏道決定無有疑の事 ひっきよう いちじよう

御義口伝に云く畢竟とは広宣流布なり住一乘とは南無
おんぎくでん いわひっきよう こうせん ふ いちじよう なむ
妙法蓮華經の一法に住す可きなり是人とは名字即の凡夫なり
みょうほうれんげきよう べ 名字即 ほんぶ

ぶつどう 仏道とは究竟くきやうそく即なり 疑うたがいとは根本疑惑こんぽんぎわくの無明むみょうを指すなり、末法まつぽうとうこん 当今は此の経を受持じゅじする一行計いっけいりにして成仏じやうぶつす可しと定むるなり云云。

嘱累品三箇の大事ぞくるい だいじ

第一だいいち從法座起の事ほうざ

おんぎくでん 御義口伝に云く起とは塔中たつちゆうの座を起ちて塔外ほかの儀式なり三摩ふそくあの付嘱有るなり、三摩の付嘱とは身口意三業さんたいさんかん三諦三觀ふそくと付嘱し給う事なり云云。たま

第二にょらい如来是一切衆生いっさいしゆじやう之大施主せしゆの事

おんぎくでん 御義口伝に云く如来とは本法不思議ふしぎの如来なれば此の法華經ほけきやうの行者ぎやうじやを指す可きなり、大施主せしゆの施とは末法まつぽう当今とうこん流布ふの南無なむ妙法蓮華經主とは上行菩薩じやうぎやうぼさつの事と心得こころうべ可きなり、然しかりと雖いえども

当品は迹門しやくもん付嘱ふぞくの品なり上行菩薩じやうぎやうぼさつを首として付属ふぞくし給たまう間

上行菩薩じやうぎやうぼさつの御本意ごほんいと見たるなり云云。

第三如世尊せそん勅当具奉行ぶぎやうの事

御義口伝おんぎくでんに云く諸もろもろの菩薩等ぼさつの誓言せいごんの文なり、諸天善神しよてんぜんじん菩薩等ぼさつを

日蓮等にちれんの類たぐい諫かんぎ 曉きやうするは此の文に依よるなり云云。

薬王品六箇やくおうぼんの大事だいじ

773p

第一不如受持だいいち此法華經じゆじ乃至ほけきやうないし一四句偈くげの事

御義口伝おんぎくでんに云く法華經ほけきやうとは一經いつきやう廿八品なり一四句偈くげとは題目だいもく

の五字ごじと心得こころうべ可きなり云云。

第二十喻じゆうゆの事

御義口伝おんぎくでんに云く十喻じゆうゆとは十界じゆっかいなり、此の山の下に地獄界じごくを含

めり、川流江河せんるかうか餓鬼がき・畜生ちくしやうを撰せつせり・日月にちがつの下に修羅しゆらを収おさめ

たり帝たいしやく釈梵天はんとんは天界てんがいなり・凡夫人ぼんぷとは人間にんげんなり、声聞しょうもんとは四

向四果あらかんの阿羅漢えんかくなり・縁覺ひやくくしぶつとは辟支仏びやくしぶつ中と説はさつかれたり、菩薩ぼさつは

菩薩ぼさつ為第一これだいと云いえり仏界ぶつがいは如仏しよほう為諸法王しよほうと見えたり、此じの十界じゅっかい

を十喻じゅうゆと挙あげて教相きやうそうを分別ぶんべつしてさて妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの於いちぶつじやう一仏乘いちぶつじやう

より分別ぶんべつ説三さする時か此ことくの如あく挙げたり、仍よつて一念三千いちねんさんぜんの

法門ほうもんなり一念三千いちねんさんぜんは拔苦与樂はつこよらくなり。

第三離一切苦一切病痛能解一切生死之縛の事

御義口伝おんぎくでんに云いく法華ほつけの心ほんのうは煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即涅槃そくねはんなり離解りげの

二字にじは此このの説相せつそうに背そむくなり然しかるに離はなの字じをば明あきとよむなり、

本門ほんもん壽量じゆりやうの慧眼えげん開あけて見みれば本来本有ほんんぬの病痛苦惱くのおうなりと明あきら

めたり仍よつて自受用報身じじゆゆうほうしんの智慧ちえなり、解わけとは我等われらが生死しやうじは今始しやうじ

めたる生死しやうじに非あらず本来本有ほんんぬの生死しやうじなり、始覺しかくの思縛しばく解とくるなり

云云、離解りげの二字は南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうなり云云。

第四火不能燒水不能漂の事

御義口伝おんぎくでんに云く火とは阿鼻あびの炎なり水とは紅蓮ぐれんの氷なり、
いまにちれん
今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱え奉る者となは此かくの如ごとくな
るべし云云。

第五諸余怨敵皆悉摧滅の事

御義口伝おんぎくでんに云く怨敵おんてきとは念仏ねんぶつ・禪しん・真言等しんごんの謗法ほうほうの人ひとなり摧滅さいめつ
とは法華折伏ほっけしやくぶく・破権門理はこんもんりなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無
妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと唱え奉る是とななり云云。

第六若人有病得聞是經病即消滅不老不死の事

文句もんくの十に云く此こゝに觀解かんげを須もちゆべしと。

御義口伝おんぎくでんに云く若人にやくにんとは上仏果ぶつかけより下地獄げじごくの罪人ざいにんまで之これを

摂す可きなり、病とは三毒の煩惱仏・菩薩に於ても亦之れ有るなり、不老は釈尊不死は地涌の類たり、是は滅後当今の衆生の為に説かれたり、然らば病とは謗法なり、此の經を受持し奉る者は病即消滅疑無きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。

妙音品三箇の大事

第一妙音菩薩の事

御義口伝に云く妙音菩薩とは十界の衆生なり、妙とは不思議なり音とは一切衆生の吐く所の語言音声が妙法の音声なり三世常住の妙音なり、所用に随つて諸事を弁ずるは慈悲なり是を菩薩と云うなり、又云く妙音とは今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る事は末法当今の不思議の音声なり、

其の故は煩惱即菩提・生死即涅槃の妙音なり云云。

第二肉髻白毫の事

御義口伝に云く此の二の相好は孝順師長より起れり法華經を
持ち奉るを以て一切の孝養の最頂とせり、又云く此の白毫と
は父の姪なり肉髻とは母の姪なり赤白二・今經に來つて肉髻
白毫の二相と顯れたり、又云く肉髻は隨緣真如の智なり白毫
は不變真如の理なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉るは此等の相好を具足するなり、我等が生の始は赤色肉髻な
り死後の白骨は白毫相なり、生の始の赤色は隨緣真如の智死
後の白骨は不變真如の理なり秘す可し秘す可し云云。

第三八万四千七宝鉢の事

御義口伝に云く此の文は妙音菩薩雲雷音王仏に奉る所の供養

の鉢なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は八万いまにちれん たぐ なむみょうほうれんげきょう とな たてまつ はちまん
四千の鉢を三世の諸仏に供養し奉るなり、八万四千とは我等がさんぜ しよぶつ くよう たてまつ はちまん われら
八万四千の塵勞なり南無妙法蓮華經と唱え奉る処にて八万四はちまん じんろう なむみょうほうれんげきょう とな たてまつところ はちまん
千の法門と顯るるなり、法華經の文字は開結二經を合してはほうもん あらわ ほけきょう もんじ
八万四千なり、又云く八とは八苦なり四とは生老病死なり七宝はちまん いわ
とは頭上の七穴なり鉢とは智器なり妙法の智水を受持するをこころうべ みょうほう ちすい じゅじ
以て鉢とは心得可きなり云云。

普門品五箇の大事ふもんほん だいじ

775P

第一無尽意菩薩の事だいいちむじんい ぼさつ

御義口伝に云く無尽意とは円融の三諦なり、無とは空諦尽とはおんぎくでん いわ むじんい えんゆう さんたい くらたい
仮諦意とは中道なり、觀世音とは觀は空諦世は仮諦音は中道けたい ちゅうどう かんぜおん くらたい けたい ちゅうどう
なり、妙法蓮華經とは妙とは空諦法蓮華は仮諦經とは中道なみょうほうれんげきょう くらたいほうれんげ けたい ちゅうどう

り、三諦さんたい法性ほっしょうの妙理みょうりを三諦さんたいの觀世音かんぜおんと三諦さんたいの無尽意むじんいに對して
説とき給たまうなり、今日いまにちれん蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる者
は末法まつぽうの無尽意むじんいなり、所詮しよせん無とは我等われらが死の相なり尽とは我等われら
が生の相なり意とは我等われらが命根みょうこんなり、然しかる間・一切いっさいの法門ほうもん・
境智冥合等きやうちめいごうの法門意ほうもんいの一字ひとに之これを攝入しやうにゅうす此の意とは中道ちゆうどう
法性ほっしょうなり法性ほっしょうとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、仍よつて意の五字ごじな
り我等われらが胎内たいないの五位ごいの中には第五番の形なり、其そのの故ゆゑは第五番
の姿は五輪ごりんなり五輪ごりん即すなわち妙法みょうほう等の五字ごじなり、此の五字ごじ又意の
字ふなり仏意ぶつとは妙法みょうほうの五字ごじなり此の事別ことべつに之これ無し、仏の意と
は法華經ほけきようなり是これを寿量品じゆりやうほんにして是好良藥ぜこうりやうやくとて三世さんぜの諸仏しよぶつの好
もの良藥りやうやくと説とかれたり森羅三千しんらさんぜんの諸法しよほうは意の一字ひとには過すぎざ
るなり、此の仏の意を信しんずるを信心しんじんとは申もうすなりされば心は有

分別なり俱に妙法の全体なり云云。

第二観音妙の事

御義口伝に云く妙法の梵語は薩達摩と云うなり、薩とは妙と
翻ず此の薩の字は観音の種子なり仍て観音・法華眼目異名と
釈せり、今末法に入つて日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え
奉る事は観音の利益より天地雲泥せり、所詮観とは円觀なり世
とは不思議なり音とは仏機なり觀とは法界の異名なり既に円觀
なるが故なり、諸法実相の觀世音なれば地獄・餓鬼・畜生等
の界界を不思議世界と知見するなり、音とは諸法実相なれば
衆生として実相の仏に非ずと云う事なし、寿量品の時は
十界本有と説いて無作の三身なり、観音既に法華經を頂受せ
り然らば此の經受持の行者は觀世音の利益より勝れたり云云。

第三念念勿生疑ねんねん うたがいの事

御義口伝おんぎくでんに云いわく念念ねんねんとは一の念は六凡ししやうなり一の念は四聖ししやうなり六凡ししやうの利益りやくを施ほどこすなり疑心うたがいを生なずること勿なれ云云、又云く念念ねんねんとは前念後念ぜんねん ごねんなり、又云く妙法みやうほうを念うたずるに疑うたがいを生なず可べからず云云、又三世さんぜ常住じやうじゆうの念念ねんねんなり之これに依よつて上かみの文ぶんに是故ゆゑ衆生しゆじやう念ねんと、今日蓮等けふれんとうの類たぐい南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつりて念念ねんねん勿生疑もつ うたがいの信心しんじんに住す可べきなり煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即涅槃そくねはん疑うたがい有ある可べからざるなり云云。

第四二求兩願の事

御義口伝おんぎくでんに云いわく二求にぐとは求男求女ぐとくなり、求女ぐにとは世間せけんの果報かほう求男ぐととは出世しゆつせの果報かほう仍よくつて現世安穩げんせあんのんは求女ぐにの徳とくなり後生善処ごしやうぜんしよは求男ぐとの徳とくなり、求女ぐには竜女りゆうによが成仏じやうぶつ生死しやうじ即涅槃そくねはんを顯あらわすなり求男ぐとは

提婆だいばが成仏じょうぶつ煩惱ぼんのう即すく菩提ぼだいを顯あらわすなり我等われらが即身成仏そくしんじょうぶつを顯あらわすなり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつぎよう行者ぎやうは求男求女まんそくを満足まんぞくして父母ふぼの成仏じょうぶつ決定けつじようするなり云云。

第五三十三身利益の事さんじんりやく

御義口伝おんぎくでんに云いわく三十さんぜんとは三千ほうもんの法門さんじんなり、三身さんじんとは三諦さんたいの法門ほうもんなり云云、又云いわく卅三身さんじんとは十界じゅつかいに三身さんじんづつ具ぐすれば十界じゅつかいには三十さんじん・本の三身さんじんを加くわうれば卅三身さんじんなり、所詮しよせん三とは三業さんごふなり十とは十界じゅつかいなり三とは三毒さんどくなり身とは一切衆生いっさいしゆじようの身なり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者は卅三身さんじんの利益りやくなり云云。

陀羅尼品六箇の大事だらにほん

777P

第一陀羅尼の事だいいちだらに

御義口伝に云く陀羅尼とは南無妙法蓮華經なり、其の故は
陀羅尼は諸仏の密語なり題目の五字三世の諸仏の秘密の密語な
り、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは陀羅尼を弘通
するなり捨惡持善の故なり云云。

第二安爾曼爾の事

御義口伝に云く安爾とは止なり・曼爾とは觀なり、此の安爾・
曼爾より止觀の二法を釈し出せり、仍つて此の咒は藥王菩薩の
咒なり藥王菩薩は天台の本地なり、安爾は我等が心法なり妙な
り曼爾は我等が色法なり法なり色心妙法と呪する時は
即身成仏なり云云。

第三鬼子母神の事

御義口伝に云く鬼とは父なり子とは十羅刹女なり母とは

伽利帝母なり、逆次に次第する時は神とは九識なり母とは八識
へ出づる無明なり子とは七識六識なり鬼とは五識なり、流転門
の時は悪鬼なり還滅門の時は善鬼なり、仍つて十界互具・
百界・千如の一念三千を鬼子母神十羅刹女と云うなり、三宝
荒神とは十羅刹女の事なり所謂飢渴神貪欲神障碍神なり、今
法華經の行者は三毒即三徳と転ずる故に三宝荒神に非ざるな
り荒神とは法華不信の人なり法華經の行者の前にては守護神
なり云云。

第四受持法華名者福不可量の事

御義口伝に云く法華の名と云うは題目なり、者と云うは日本国
の一切衆生の中には法華經の行者なり、又云く者の字は男女
の中には別して女人を讃めたり女人を指して者と云うなり、

十羅刹女は別して女人を本とせり例せば竜女が度脱苦衆生と
て女人を苦の衆生と云うが如し藥王品の是經典者の者と同じ
事なり云云。

第五皐諦女の事

御義口伝に云く皐諦女は本地は文殊菩薩なり、山海何かなる処
にても法華經の行者を守護す可しと云う經文なり、九惡一善
とて皐諦女をば一善と定めたり、十惡の煩惱の時は偷盜に
皐諦女は当れり逆次に次第するなり云云。

第六五番神呪の事

御義口伝に云く五番神呪とは我等が一身なり、妙とは十羅刹女
なり法とは持国天王なり蓮とは增長天王なり華とは広目天王
なり經とは毘沙門天王なり、此の妙法の五字は五番神呪なり、

五番神呪は我等が一身なり、十羅刹女の呪は妙の一字を十九句に並べたり經文には寧上・我頭上の文是れなり、持国天は法の一字を九句に並べたり經文には四十二億と云えり、四とは生老病死・十とは十界・二とは迷悟なり、持国は依報の名なり法は十界なり、增長天は蓮の一字を十三句に並べたり經文には「亦皆隨喜」と云えり隨喜の言は仏界に約せり、広目天は華の一字を四十三句に並べたり經文には「於諸衆生多所饒益」と云えり、毘沙門天は經の一字を六句に並べたり經文には「持是經者」等の文是なり云云。

嚴王品三箇の大事

第一妙莊嚴王の事 文句の十に云く妙莊嚴とは妙法功德をもつて諸根を莊嚴するなりと。

御義口伝に云く妙とは妙法の功德なり、諸根とは六根なり此の妙法の功德を以て六根を莊嚴す可き名なり、所詮妙とは空諦なり莊嚴とは仮諦なり王とは中道なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は悉く妙莊嚴王なり云云。

第二浮木孔の事

御義口伝に云く孔とは小孔大孔の二之れ有り、小孔とは四十余年の經教なり大孔とは法華經の題目なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは大孔なり、一切衆生は一眼の龜なり梅檀の浮木とは法華經なり、生死の大海に南無妙法蓮華經の大孔ある浮木は法華經に之在り云云。

第三当品邪見即正の事

御義口伝に云く嚴王の邪見二人の教化に依り功德を得て邪を

あらた
改めて正とせり、止の一に辺邪皆中正と云う是なり、今・日本国
いっさいしゅじょう
の一切衆生は邪見にして嚴王なり、日蓮等の類い南無
みょうほうれんげきょう
妙法蓮華經と唱え奉る者は二人の如し終に畢竟住一乘して
じゃけん
邪見即正なる可し云云。

普賢品六箇の大事

第一普賢菩薩の事
だいいちふげんぼさつ
文句の十に云く勧発とは恋法の辞なりと。

おんぎくでん
御義口伝に云く勧発とは勧は化他・発は自行なり、普とは
しょうほうじつそうしゃくもん
諸法実相迹門の不变真如の理なり、賢とは智慧の義なり本門
ずいえんしんによ
の随縁真如の智なり、然る間経末に來つて本・迹二門を恋法
たま
し給えり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者
ふげんぼさつ
は普賢菩薩の守護なり云云。

第二若法華經行閻浮提の事

御義口伝に云く此の法華經を閻浮提に行ずることは普賢菩薩の
威神の力に依るなり、此の經の広宣流布することは普賢菩薩の
守護なるべきなり云云。

第三八万四千天女の事

御義口伝に云く八万四千の塵勞門なり、是れ即ち煩惱即菩提・
生死即涅槃なり七宝の冠とは頭上の七穴なり、今日蓮等の
類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者はなり云云。

第四是人命終為千仏授手の事

御義口伝に云く法華不信の人は命終の時地獄に墮在す可し、
經に云く「若人不信毀謗・此經即斷・一切世間・仏種其人命終
・入阿鼻獄」と、法華經の行者は命終して成仏す可し是人
命終為千仏授手の文是なり、千仏とは千如の法門なり謗法の

人は獄卒来迎し法華經の行者は千仏来迎し給うべし、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は千仏の来迎疑無き者なり云云。

第五閻浮提内広令流布の事

御義口伝に云く此の内の字は東西北の三方を嫌える文なり、広令流布とは法華經は南閻浮提計りに流布す可しと云う經文なり、此の内の字之を案ず可し、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は深く之を思う可きなり云云。

第六此人不久当詣道場の事

御義口伝に云く此人とは法華經の行者なり、法華經を持ち奉る処を当詣道場と云うなり此を去つて彼に行くには非ざるなり、道場とは十界の衆生の住处を云うなり、今日蓮等の

たぐ 類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者の住処は山谷曠野皆寂光土
なり此れを道場と云うなり、此因無易故云直至の釈之を思
べし、此の品の時最上第一の相伝あり、釈尊八箇年の法華經
を八字に留めて末代の衆生に譲り給うなり八字とは当起遠迎
当如敬仏の文なり、此の文までにて經は終るなり当の字は未
なり当起遠迎とは必ず仏の如くに法華經の行者を敬う可しと
云う經文なり、法師品には於此經卷敬視如仏と云えり、八年
の御說法の口開きは南無妙法蓮華經方便品の諸仏智慧終り
当起遠迎当如敬仏の八字なり、但此の八字を以て法華一部の要
路とせりされば文句の十に云く「当起遠迎当如敬仏よりは其の
信者の功德を結することを述べ」と、法華一部は信の一字を以
て本とせり云云。尋ねて云く今の法華經に於て序品には首めに

如の字を置き終りの普賢品には去の字を置く羅什三蔵の心地
何なる表事の法門ぞや、答て云く今の經の法体は実相と久遠と
の二義を以て正体と為すなり始の如の字は実相を表し終りの去
の字は久遠を表するなり、其の故は実相は理なり久遠は事なり
理は空の義なり空は如の義なり之に依て如をば理空に相配する
なり、釈に云く「如は不具に名く即ち空の義なり」と久遠は事
なり其の故は本門壽量の心は事円の三千を以て正意と為すな
り、去は久遠に当るなり去は開の義如は合の義なり開は分別の
心なり合は無分別の意なり、此の開合を生仏に配当する時は合
は仏界開は衆生なり、序品の始に如の字を顕したるは生仏不
二の義なり、迹門は不二の分なり不變真如なる故なり、此の
如是我聞の如をば不變真如の如と習うなり、空仮中の三諦には

如は空・是は中・我聞は仮諦・迹門は空を面と為す故に不二
の^{かみ}上の而こなり、然る間而二の義を顕す時・同聞衆を別に列ぬ
るなり、さて本門の終りの去は随縁真如にして而二の分なり仇
つて去の字を置くなり、作礼而去の去は随縁真如と約束するな
り、本門は而二の上の不二なり而二不二・常同常別・古今法爾
の釈之を思う可し、此の去の字は彼の五千起去の去と習うなり、
其の故は五千とは五住の煩惱と相伝する間五住の煩惱が己心の^{そのゆえ}
仏を礼して去ると云う義なり、如去の二字は生死の二法なり、
伝教云く「去は無来之如来無去之円去」等と云云。如の字は一切
法是心の義・去の字は心は一切法の義なり、一切法是心は迹門
の^{ふへんしんによ}不変真如なり心は一切法は本門の随縁真如なり、然る間・
法界を一心に縮むるは如の義なり法界に開くは去の義なり三諦^{ほっかい いっしん}

三観の口決相 承と意同じ云云。

一義に云く如は実なり去は相なり実^{しんのう}は心王相は心数^{しんず}なり、又諸法^{しよほう}は去なり実相^{じつそう}は如なり今經^{こんきよう}一部^{いちぶ}の始終諸法実相^{しじゅうしよほうじつそう}の四字に習うとは是^{これ}なり、釈に云く「今經^{こんきよう}は何を以て体と為るや諸法実相^{しよほうじつそう}を以て体と為す」と、今一重立ち入つて日蓮^{にちれん}が修行^{しゆぎよう}に配当せば如とは如說修行^{によせつしゆぎよう}の如なり・其^{その}の故^{ゆえ}は結要^{けつちよう}五字^{ごじ}の付属^{ふそく}を宣べ給う時・宝塔品^{ほうとうほん}に事起り声徹^{しやうてつ}下方^{げふ}し近令^{きんれい}有在^{いうざい}・遠令^{えんれい}有在^{いうざい}と云うて有在^{いうざい}の二字^{ふたご}を以て本化^{ほんげ}・迹化^{しゃくけ}の付属^{ふそく}を宣ぶるなり仍^よつて本門^{ほんもん}の密序^{みつぎ}と習うなり、さて二仏^{ふつ}・並座^{びやうざ}・分身^{ふんじん}の諸仏^{しよぶつ}集^{しゆ}まつて是^ぜ好良藥^{こうりやうやく}の妙法蓮華經^{みやうほうれんげきやう}を説き顯^{あらわ}し釈尊^{しゃくそん}十種^{じゆしゆ}の神力^{しんりき}を現^{げん}じて四句^{しご}に結び上行菩薩^{じやうぎやうぼさつ}に付属^{ふそく}し給う英^{たま}の付属^{ふそく}とは妙法^{みやうほう}の首題^{しゆだい}なり惣別^{そうべつ}の付属^{ふそく}塔中^{たうちゆう}塔外^{たけがい}之^{これ}を思^{おも}う可^べし、之^よに依^よつて涌出^{ゆじゆつ}

じゅりよう

あらわ じんりきぞくるい

おわ

みようほう

ごじ

寿命に事顕れ神力属累に事竟るなり、此の妙法等の五字を

まっぼう

びやくほうおんもつ

じようぎようぼざつ

しゅつせ

ごしゅ

しゅぎよう

末法・白法隱没の時上行菩薩・御出世有つて五種の修行の

まのあたこ

そ

じんりきほん

いわ

めつど

おうじゅじしきよう

べ

きようもん

中には四種を略して但受持の一行にして成仏す可しと經文に

まのあたこ

そ

じんりきほん

いわ

めつど

おうじゅじしきよう

べ

きようもん

親り之れ有り、夫れば神力品に云く「於我滅度後・応受持斯經

ぜにんのうぶつどう

けつじようむうぎ

云云此の文明白なり、仍つて此

の文をば仏の廻向の文と習うなり、然る問此の經を受持し奉る

しんじ

にやせつしゆぎよう

えこう

なら

・是人於仏道・決定無有疑」云云此の文明白なり、仍つて此

しんじ

にやせつしゆぎよう

えこう

なら

しんじ

みようほう

ごじ

じゅじ

たてまつ

の文をば仏の廻向の文と習うなり、然る問此の經を受持し奉る

しんじ

にやせつしゆぎよう

えこう

なら

しんじ

みようほう

ごじ

じゅじ

たてまつ

心地は如説修行の如なり此の如の心地に妙法等の五字を受持

たてまつ

なむみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

たちま

むみようほんのう

ごじ

じゅじ

ことごと

し奉り南無妙法蓮華經と唱え奉れば忽ち無明煩惱の病を悉く

みようかくごつか

はだえ

みか

あらわ

ゆえ

さて去の字を終りに

ゆえ

ゆえ

ゆえ

去つて妙覺極果の膚を瑩く事を顕す故にさて去の字を終りに

結ぶなり、仍つて上に受持仏語と説けり煩惱惡覺の魔王も

よ

じゅじ

ぶつご

と説けり煩惱惡覺の魔王も

ほんのうあつかく

まおう

まおう

まおう

諸法実相の光に照されて一心一念・遍於法界と觀達せらる、

しよほうじつそう

てら

いっしんいちねん

へんおほつかい

遍於法界と觀達せらる、

へんおほつかい

と觀達せらる、

と觀達せらる、

と觀達せらる、

然る間還つて己心の仏を礼す故に作礼而去とは説き給うなり、

しか

かえ

こしん

ゆえ

さらいにこ

と説き給うなり、

と説き給うなり、

と説き給うなり、

と説き給うなり、

かれがれさんぜん
彼彼三千互遍亦爾の釈之を思う可し秘す可し秘す可し唯受一人
の相承なり、口外す可からず然らば此の去の字は不去而去の
去と相伝するを以て至極と為すなり云云。

無量義經六箇の大事

第一無量義經德行品第一の事

御義口伝に云く無量義の三字を本・迹・觀心に配する事、初の
無の字は迹門なり其の故は理円を面とし不變真如の旨を談ず、
迹門は無常の摂属なり常住を談ぜず但し「是法住法位世間
相常住」と明かせども是れは理常住にして事常住に非ず
理常住の相を談ずるなり、空は無の義なり但し此の無は断無
の無に非ず相即の上の空なる処を無と云い空と云うなり、円
の上にて是を沙汰するなり、本門の事常住無作の三身に対し

て迹門しやくもんを無常むじょうと云うなり、守護章しゆごには有為うゐの報仏はうぶつは夢中の
権果ごんか無作むさの三身さんじんは覺前かくぜんの実仏じつぶつと云云、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無なむ
妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者は無作むさの三身さんじん覺前かくぜんの実仏じつぶつなり云云。

第二量の字の事

御義口伝おんぎくでんに云く量いわの字を本門ほんもんに配当する事は量とは權攝はかりおさむるの

義なり、本門ほんもんの心は無作むさ三身さんじんを談だんず此の無作むさ三身さんじんとは仏の上だんは

かりにて之これを云わず、森羅万法じじゆゆうしんを自受用身じたいけんの自体顯照しやうと談だんずる

故ゆゑに迹門しやくもんにして不變真如ふへんしんによの理円あきらを明とこかす処あらたを改めずして己おのが

当体無作とうたいむさ三身さんじんと沙汰さたするが本門事ほんもん円さんぜん三千の意なり、是これ即すなわち桜

梅桃李こころの己とうたいの当体あらたを改めずして無作むさ三身さんじんと開見かいけんすれば是これ

即すなわち量の義なり、今日蓮等いまにちれんの類たぐい南無妙法蓮華經みょうほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる

者は無作むさ三身さんじんの本主なり云云。

第三義の字の事

御義口伝おんぎくでんに云く義いわとは観心かんじんなり、其そのの故ゆえは文きようそうは教相義かんじんは観心かんじんなり所説しよせつの文字もんじを心地しんじに沙汰さたするを義と云うなり、就なかん中無量じくむりよう義は一法より無量の義むりようを出生しゅつしようすと談だんず、能生のうしようは義所生しよしようは無量なり是は無量義經むりようぎきようの能生所生のうしようしよしようなり、法華經ほけきようと無量義經むりようぎきようとを相對する能所そうたいに非あらざるなり無相むそう・不相名じっそう為実相じつそうの理より万法ばんぽうを開出かいしゅつすと云う、源みなもとが実相じつそうなる故ゆえに観心かんじんと云うなり、此かくの如ごとく無量義むりようの三字しやくもんを迹門ほんもん・本門ほんもん観心かんじんに配当する事は法華ほつけの妙法みようほう等の題みと今の無量義むりようの題と一体不二の序正そうじようなりと相承そうじようの心を相伝そうでんせむが為なり。

第四処の一字の事

御義口伝おんぎくでんに云く処いわの一字いっしは法華經ほけきようなり、三藏教さんそうと通教つうきようとは無

の字に摂せつし別教べつぎょうは量りやうの字に摂せつし円教えんぎょうは義ぎの字に摂せつするなり、
此この爾前にぜんの四教しきやうを所生しよしやうと定めさて序分じよぶんの此この經きやうを能生のうしやうと定め
たり、能生のうしやうを且しかく処しほらと云いひ所生しよしやうを無量義むりやうぎと定めたり、仍よつて
權教ごんきやうに相對そうたいして無量義むりやうぎ處ちを沙汰さたするなり云云。

第五無量義處の事

御義口伝おんぎくでんに云いく法華經ほけきやう八卷はふせんは處ちなり無量義經むりやうぎきやうは無量義むりやうぎなり、
無量義むりやうぎは三諦さんたい三觀さんくわん三身さんじん三乘さんじん三業さんぎやうなり法華經ほけきやうに於おち一仏乘いちぶつじやう分別說ぶんべつ
三さんと説とくいて法華ほつけの為ための序分じよぶんと成なるなり、爰こゝをを以もつて隔別きやくべつの三諦さんたい
は無得道とくだう円融えんゆうの三諦さんたいは得道とくだうと定とくむる故ゆゑに四十余年よんじゅうよねん・未顯真実みけんしんじつと
破はし給たまへり云云。

第六無量義處の事

御義口伝おんぎくでんに云いく無量義處むりやうぎちとは一念三千いちねんさんぜんなり、十界各各無量じゅうかい
に

義処たり、此の当体其の儘実相の一理より外は之れ無きを

しよほうじつそ

諸法実相と説かれたり、其の爲の序なる故に一念三千の序とし

むりよう

て無量義処と云うなり、処は一念無量義は三千なり、我等

しゅじようちようせき

衆生朝夕吐く所の言語も依正二法共に無量に義処りたり、

こ

此れを妙法蓮華経とは云うなり然る間法華の爲の序分開経な

り云云。

普賢経五箇の大事

第一普賢経の事 題号に云く仏説観普賢菩薩行法経と云云。

御義口伝に云く此の法華経は十界互具三千具足の法体なれば

さんぜんじゅつかいことごとふげん

三千十界悉く普賢なり、法界一法として漏るる義之れ無し

ゆえ ふげん

故に普賢なり、妙法の十界蓮華の十界なれば依正の二法

ことごとほけきよう

悉く法華経なりと結し納めたる経なれば此の普賢経を結経と

は云うなり、然らば十界を妙法蓮華經と結し合せたり云云。

第二不断煩惱不離五欲の事

御義口伝に云く此の文は煩惱即菩提・生死即涅槃を説かれたり、法華の行者は貪欲は貪欲のまま瞋恚は瞋恚のまま愚癡は愚癡のまま普賢菩薩の行法なりと心得可きなり云云。

第三六念の事

念仏 念法 念僧 念戒 念施 念天

御義口伝に云く念仏とは唯我一人の導師なり、念法とは滅後は題目の五字なり念僧とは末法にては凡夫僧なり、念戒とは是名持戒なり、念施とは一切衆生に題目を授与するなり、念天とは諸天昼夜常為法故而衛護之の意なり、末法当今の行者の上なり之を思う可きなり云云。

第四一切業障海皆從妄想生若欲懺悔者端坐思実相衆罪如霜露

慧日能消除の事 えにち

御義口伝に云く衆罪とは六根に於て業障降り下る事は霜露の
如し、然りと雖も慧日を以て能く消除すと云えり、慧日とは
末法当今日蓮所弘の南無妙法蓮華經なり、慧日とは仏に約し
法に約するなり、釈尊をば慧日大聖尊と申すなり法華經を
又如日天子能除諸闇と説かれたり、末法の導師を如日月光明
等と説かれたり。

第五正法治国不邪枉人民の事 しょうほう

御義口伝に云く末法の正法とは南無妙法蓮華經なり、此の
五字は一切衆生をたばらかさぬ秘法なり、正法を天下一同に
信仰せば此の国安穩ならむ、されば玄義に云く「若し此の法に
依れば即ち天下泰平」と、此の法とは法華經なり法華經を信仰

せばてんがあんぜん天下安全たらむ事うたがいあ疑有る可べからざるなり。

已上二百三十一箇条の大事だいじ

廿八品に一文ずつ充だいじの大事 合せて廿八箇条の大事だいじ秘べす可べし

云云

序品じよぼん

十界也じゅつかい 始覚しかく

於無漏実相むろじっそう 心已得通達とくずう

妙法みょうほう 不変ふへん 随縁ずいえん

此の文・我が心本より覚さとなりと始めて覚さとるを成仏じょうぶつと云うなり
所謂南無妙法蓮華經と始めて覚さとる題目だいもくなり。

方便品ほうべん

真諦しんたい

俗諦ぞくたい

是法住法位 ぜほうじゅうほうい 世間相常住 せけんじょうじゅう

迹門 しやくもん 本門 ほんもん

此の文衆生の心は本来仏なりと説くを常住と云うなり万法元より覺の体なり。

受持人 じゆじ 大白牛車 だいびやくこしや 譬喩品 ひゆほん

乘此宝乘 たいもく 凡夫即極 ほんぶ 直至道場 じきしどうじょう

題目 たいもく 極果ノ処也 ごくかうのこゝなり

此の文は自身の仏乗を悟つて自身の宮殿に入るなり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉るは自身の宮殿に入るなり。

信解品 しんげ

一念三千 いちねんさんぜん 無上宝珠 むじょうほうしゆ 不求自得 ふぐじとく

題目 たいもく

此の文は無始色心本是理性妙境・妙智なれば己心より外に実相を求む可からず所謂南無妙法蓮華經は不求自得なり。

薬草喻品 やくそうゆほん

三世題目一切衆生 さんぜ だいもく いっさいしゅじょう

又諸仏子 専心仏道 常行慈悲 自知作仏 しよぶつ じやうぶつ けんしん じやうじん じやうぎやう じやうひ じやうち じやうさぶつ
此の文は当来の成仏 顕然なり 所謂南無妙法蓮華経なり。

授記品 じゆき

十界実相仏 三世常住 煩惱即菩提・生死即涅槃 じゆつかいじつそう さんぜじやうじゆう ほんのうそく ぼだい しやうじそく ねはん

於諸仏所常修梵行 於無量劫奉持仏法 しよぶつしよじやうしゆうほんぎやうおむりやうこう ほうじぶつぽう

一切業障 いっさいごうしやう

此の文に常と云い 無量劫と云う 即ち本有所具の妙法なり 所謂 いむりやうこう すなわ ほんぬしよぐ みやうほう いわゆる
南無妙法蓮華経なり。

化城喻品 けじやうゆほん

三千塵点 さんぜん じんてん

観彼久遠 猶如今日 くおん ざいせ

在世 ざいせ

此の文は元初の一念一法界より外に更に六道四聖とて有る可からざるなり所謂南無妙法蓮華經は三世一念なり今日とは末法を指して今日と云うなり。

五百品

題目御本尊

心法色法

煩惱即菩提・

日本国一切衆生

貧人

見此珠

其心大歡喜

信心ノカタチ

此の文は始めて我心本来の仏なりと知るを即ち大歡喜と名く所謂南無妙法蓮華經は歡喜の中の大歡喜なり。

人記品

一部

安住於仏道

以求無上道

広略

要

此の文は本来相即の三身の妙理を初めて覺知するを求無上道とは云うなり所謂南無妙法蓮華經なり。

法師品 ほうしほん

寂光 じやくこう

当知如是人 たよぜに

自在所欲生 じざい

此の文は我等が一念の妄心の外に仏心無し九界の生死が真如なれば即ち自在なり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉る即ち自在なり。

宝塔品 ほうとうほん

受持也 じゅじ

則為疾得 しつとく

無上仏道 むじょうぶつどう

凡夫即極也 ぼんぷそく

此の文は持者即ち円頓の妙戒なれば等妙二覚一念開悟なれば疾得と云うなり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉るは疾得なり。

提婆品 だいば

忽然之間 こつねん

变成男子 さんなく

此の文の心は三惑の全体三諦と悟るを變と説くなり所謂南無妙法蓮華經と唱え奉るは三惑即三徳なり。

勸持品 かんじほん

色法心法

我不愛身命 がふあいしんみょう 但惜無上道 たしやくむじやうどう

此の文は色心幻化四大五陰元より惡習なり然るに本覺真如は じやうじゆう いわゆるなむみょうほううれんげきやう ごおん

常住なり所謂南無妙法蓮華經なり。 じやうじゆう 所謂南無妙法蓮華經なり。

安樂行品 あんらくぎやうほん

一切諸法空無所有無有常住亦無起滅 いっさいしよほう じやうじゆうやくむ

此の文は元より常住の妙法なる故に六道の生滅本来不生と じやうじゆう みやうほう ゆえ ろくどう しやうめつ ふしやう

談ず故に起滅無し所謂南無妙法蓮華經本来無起滅なり云云。 だん ゆえ いわゆるなむみょうほううれんげきやう

涌出品 ゆじゆつぽん

昼夜常精進 為求仏道故 しやうじん ぶつどう

此の文は一念に億劫の辛勞を尽せば本来無作の三身念念に起る いちねん いわゆるなむみょうほううれんげきやう しやうじん むさ さんじんねんねん おこ

なり所謂南無妙法蓮華經は精進行なり。

じゅりょうぼん
寿量品

によらいによじつちけんさんがい
如来如実知見三界之相無有生死

此の文は万法を無作の三身と見るを如実知見と云う無作の覺体
なれば何に依つて生死有りと云わんか。

ぶんべつくとく
分別功德品

いっしん
持此一心福 願求無上道

此の文は一切の万行万善但一心本覺の三身を顕さんが為なり、
ぜんあく
善惡一如なれば一心福とは云うなり所謂南無妙法蓮華經は
いっしん
一心福なり。

ずいきくとく
隨喜功德品

せんまん
言此經深妙 千万劫難遇

此の文は、一切即妙法なれば一心の源底を顕す事甚妙無外

なり所謂南無妙法蓮華經不思議なり。

法師功德品

静 散

入禪出禪者 聞香悉能知

不變死 隨緣生 十界

此の文は一心静なる時は入禪、一心散乱する時は出禪、静散即
本覺と知るを悉く知るとは云うなり所謂南無妙法蓮華經は入

禪出禪なり云云。

不輕品

応当一心広説此經世世値仏疾成仏道

此の文は法界皆本来三諦一心に具わる事を顕せば己心の念念・

仏に値う事を即ち世世値仏と云うなり所謂南無妙法蓮華經

是なり。
これ

神力品
じんりきほん

斷破元品無明
がんばんむみょう

是人於仏道
ぜにんのうぶつどう

決定無有疑
けつじやうむうぎ

十如是
じゆのぜ

此の文は十界各各本有本覺の十如是なれば地獄も仏界も一如なれば成仏決定するなり所謂南無妙法蓮華經の受持なり云云。
じゆつかい ほんぬほんがく じゆのぜ じこく ぶつかい

囑累品
じゆんるい

信如来知慧者当演說此法華經
にょらい しやかにょらい えんぜつ ほけきやう

此の文は釈迦如来の悟の如く一切衆生の悟と不同有ること無
しやかにょらい ちえ いっさいしゆじやう ふどうあ

し故に如来の智慧を信ずるは即ち妙法なり所謂南無
ゆえ にょらい ちえ すなわ みやうほう

妙法蓮華經の智慧なり云云。
みやうほうれんげきやう ちえ

藥王品
やくおうほん

是真精進しやうじん 是名真法供養如來くようによらい

此の文は色香中道しきこうちゆうどうの觀念懈かんねんおこたること無し是これを即すなわち真法供養如來くようによらいと名なくるなり所謂南無妙法蓮華經いわゆるなむみょうほうれんげきよう唯一乘いちじようの故ゆえに真法なり
世間せけんも出世しゅつせも純一じっそう実相なり云云。

妙音品みょうおん

久遠くおん 寂光土じやくこうど

身不動搖而入三昧さんまい

此の文は即すなわち久遠くおんを悟るを身不動搖と云うなり惑障わくしょうを尽つくくさずして寂光じやくこうに入るを三昧さんまいとは云うなり所謂南無妙法蓮華經いわゆるなむみょうほうれんげきようの三昧さんまいなり云云。

普門品ふもんぼん

福智

慈眼視衆生しゅじやう 福聚海無量むりやう

此の文は法界ほつかいの依正妙法えしやうみやうほうなる故ゆえに平等びやうどう一子の慈悲じひなり依正福えしやう智共むりやうに無量むりやうなり所謂南無妙法蓮華經福智の二法なり云云。

陀羅尼品だらにぼん

未來顯みらい

修行是經者しゅぎやうぜきやうしゃ 令得安穩あんのん

現在顯げんざい

此の文は五種妙行ごしゆを修すしゆれば悟の道に入いつて嶮路に入いらざるなり此これは安穩あんのんと云う事なり、所謂南無妙法蓮華經即安穩いわゆるなむみやうほうれんげきやうそくあんのんなり云云。

嚴王品

宿福深厚生値仏法しんこうしやうちぶつぽう

此の文は一句妙法に結縁すれば億劫にも失せずして大乘無価の宝珠を研き顕すを生値仏法と云うなり所謂南無妙法蓮華經の仏法なり。

勧発品

是人命終為千仏授手令不恐怖不墮惡趣

此の文は妙法を悟れば分段の身即常寂光と顕るを命終と云うなり千仏とは千如・御手とは千如・具足なり故に不墮惡趣なり所謂南無妙法蓮華經の御手なり。

已上品品別伝畢

一廿八品悉南無妙法蓮華經の事

疏の十に云く惣じて一經を結するに唯四のみ其の枢柄を撮つて之を授与すと。

御義口伝に云く一經とは本・迹二十八品なり唯四とは名用体

宗の四なり枢柄とは唯題目の五字なり授与とは上行菩薩に

授与するなり之とは妙法蓮華經なり云云、此の釈分明なり

今日蓮等の弘通の南無妙法蓮華經は体なり心なり廿八品は用

なり廿八品は助行なり題目は正行なり正行に助行を摂す

可きなり云云。

一 無量義經の事

御義口伝に云く妙法の序分・無量義經なれば十界悉く

妙法蓮華經の序分なり。

一 序品

御義口伝に云く如是我聞の四字を能く能く心得れば一經無量

の義は知られ易きなり十界互具三千具足の妙と聞くなり此の

所聞は妙法蓮華と聞く故に妙法の法界互具にして三千清淨

なり此の四字を以て一經の始終に亘るなり廿八品の文・句

句の義理我が身の上の法門と聞くを如是我聞とは云うなり、

其の聞物は南無妙法蓮華經なりされば皆成仏道と云うなり此

の皆成の二字は十界三千に亘る可きなり妙法の皆成なるが

故なり又仏とは我が一心なり是れ又十界三千の心心なり、道

とは能通に名くる故に十界の心心に通ずるなり此の時皆成

仏道と顕るるなり皆成仏道の法は南無妙法蓮華經なり。

一 方便品

御義口伝に云く此の品には十如是を説く此の十如是とは十界

なり此の方便とは十界三千なり。既に妙法蓮華經を頂く

故に十方仏土中唯一乘法なり妙法の方便蓮華の方便なれ

ば秘妙なりしょうじょう 清淨しやうじやう なり妙法みやうほう の五字ごじ は九識こうしん 方便ほうべん は八識い 已下いか なり
九識くしち は悟ご なり八識い 已下ま は迷まい なり、妙法蓮華經みやうほうれんげきやうほうべん 方便み 品ふ と題だい した
れば迷悟めいご 不二ふに なり森羅三千しんらさんぜん の諸法しよほう 此こ の妙法蓮華經みやうほうれんげきやうほうべん 方便ほう に非あら ず
と云こと う事こと 無な きなり品しん は義類ぎるい 同どう なり、義ぎ とは三千さんぜん なり類るい とは互たぐい
具ぐ なり同どう とは一念いちねん なり此こ の一念三千いちねんさんぜん を指さ して品しん と云こと うなり此こ の
一念三千いちねんさんぜん を三仏がてん 合が 点てん し給たま えり仍よ つて品しん 品しん に題だい せり南無なむ
妙法蓮華經みやうほうれんげきやう の信い の一念いちねん より三千具足さんぜんぐそく と聞きこ えたり云云。

一 譬喩品ひゆほん

御義口伝おんぎくでん に云い く此こ の品しん の大白牛車だいびやくこしや とは「無明癡惑むみょうちわく 本ほん 是し 法性ほつしやう」
の明闇みやうあん 一いつ 体たい の義ぎ なり、即すなわ ち三千具足さんぜんぐそく の一乘いちじやう をかかげたる車くるま な
れば明闇みやうあん 一いつ 体たい にして三千具足さんぜんぐそく の義ぎ を顯あらわ すなり、法界ほっかい に・満み し
たれども一法いちじやう なるを一乘いちじやう と云こと うなり、此こ の一乘いちじやう とは諸乘具足しよじやうぐそく

いちじょう
の一乗なり諸法具足の一法なり故に一の白牛なり又白牛は一
なりといえども無量の白牛なり一切衆生の体大白牛車なるが
故なり、然らば妙法の大白牛車に妙法の十界三千の衆生乗
じたり蓮華の大白牛車なれば十界三千の衆生も蓮華にして
しょうじよう
清浄なり南無妙法蓮華經の法体此くの如し。

信解品

おんぎくでん
御義口伝に云く此の信解は中根の四大声聞の領解に限るに
あら 妙法の信解なるが故に十界三千の信解なり、蓮華の信解
なるが故に十界三千の清浄の信解なり此の信解の体とは
なむみょうほうれんげきようこれ
南無妙法蓮華經是なり云云。

藥草喩品

おんぎくでん
御義口伝に云く妙法の藥草なれば十界三千の毒草・蓮華の藥

草なれば本来 清浄しやうじやうなり、清浄しやうじやうなれば仏なり此の仏の説法せつぽうと

なむみやうほうれんげきやう

は南無妙法蓮華經なり云云、されば此の品には種相体性の種

しゆるいじゆ

の字に種類種・相体種の二の開会かいえこ之れ有り、相對種そうたいとは三毒さんどく即

さんとく

しゆるいじゆ

三徳なり種類種とは始の種の字は十界三千じゆっかいさんぜんなり、類たぐいとは互具

なり下の種の字は南無妙法蓮華經なり種類種しゆるいじゆなり、十界三千じゆっかいさんぜん

そうもく

なむみやうほうれんげきやう

しゆるいじゆ

じゆっかいさんぜん

そうもく

ただなむみやうほうれんげきやう

の草木各各なれども只南無妙法蓮華經の一種なり、毒草の毒

そうもく

もなきなり 清浄しやうじやうの草木そうもくにして藥草なり云云。

しやうじやう

そうもく

授記品

授記品

御義口伝おんぎくでんに云く十界じゆっかい已已いの当体とうたいの言語ごんごは妙法蓮華みやうほうれんげの授記じゆきなれ

ば清浄しやうじやうの授記じゆきなり、清浄しやうじやうの授記じゆきなれば十界三千じゆっかいさんぜんの仏なり、

ここを

なむみやうほうれんげきやう

じゆき

じゆっかいさんぜん

爰を以て仏南無妙法蓮華經と授記するなり云云。

なむみやうほうれんげきやう

じゆき

じゆっかいさんぜん

じゆき

化城喻品

化城喻品

化城喻品

おんぎくでん いわ みようほう
御義口伝に云く妙法の化城なれば十界同時の無常なり、蓮華
の化城なれば十界三千の開落なり、常住無常俱に
みようほうれんげきよう ぜんたい
妙法蓮華經の全体なり、化城宝処は生死本有なり生死本有の
体とは南無妙法蓮華經なり、釈に云く「起は是れ法性の起滅
は是れ法性の滅」と。

五百品

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く此の品には五百弟子授記作仏すと現文に見えた
り、然りと雖も妙法の五百なれば十界三千皆五百の弟子なり、
れんげ でし
蓮華の弟子なれば又清浄なり、所詮十界三千南無
みようほうれんげきよう
妙法蓮華經の弟子に非ずと云う事なし此の經の授記是なり云
云。

人記品

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く此の品には学無学の聖者来つて成仏するなり、
すで みようほうちようだい 既に妙法頂戴の学無学なれば十界互具三千具足の学無学なり
みようほう がくむがく 妙法の学無学なるが故に不思議の十界に煩惱未だ尽くさざる
れんげ なり蓮華の学無学なれば十界三千清浄の開落なり、此の
がくむがく なにももの 学無学何物ぞや学とは法なり無学とは妙なり所謂南無
みようほうれんげきよう 妙法蓮華経なり云云。

法師品

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く妙法の法師なれば十界皆妙法受持の一句
いちげ ほつし 一偈の法師なり、蓮華の法師なれば十界三千清浄の法師な
じゅつかいしゅじよう り、十界衆生の色法は能持の人なり十界の心性は所持の法
よ しきしん なり、仍つて色心共に法師にして自行化他を顕すなり所謂南無
みようほうれんげきよう 妙法蓮華経の法師なるが故なり云云。

一 ほうとうほん
宝塔品

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く此の宝塔は宝浄世界より涌现するなり、其の
ほうじょうせかい
宝浄世界の仏とは事相の義をば且らく之を置く、証道観心の時
は母の胎内是なり故に父母は宝塔造作の番匠なり、宝塔とは
たいないこれ ゆえ ふほ ほうとうぞうさく ばんしょう
我等が五輪・五大なり然るに託胎の胎を宝浄世界と云う故に
しゅつたい ところ ゆげん
出胎する処を涌现と云うなり、凡そ衆生の涌现は地輪より
しゅつげん
出現するなり故に従地湧出と云うなり、妙法の宝浄世界なれ
じゅつかい しゅじょう たいない みなこ ほうじょうせかい
ば十界の衆生の胎内は皆是れ宝浄世界なり、蓮華の宝浄なれ
じゅつかい たいないことごと むく しょうじょう せかい みょうほう
ば十界の胎内悉く無垢清浄の世界なり、妙法の地輪なれば
じゅつかい わた れんげ しょうじょう
十界に亘るなり蓮華の地なれば清浄地なり、妙法の宝浄な
れば我等が身体は清浄の宝塔なり妙法蓮華の涌出なれば
われら しょうじょう ほうとう みょうほう れんげ ゆじゅつ
じゅつかい しゅつたい
十界の出胎の産門本来清浄の宝塔なり、法界の搭婆にして

ほっかいそくとうば みようほう

十法界即塔婆なり妙法の二仏なれば十界三千・皆境智の二仏

みようほう

なり、妙法的一座には三千の心性皆以て二尊の所座

みようほうれんげ

なり妙法蓮華二仏一座なれば不思議なり清浄なり、妙法蓮華

じゅっかい

の見なれば十界の衆生・三千の群類・皆自身の塔婆を見るな

じゅっかい

り、十界の不同なれども己が身を見るは三千具足の塔を見る

さんぜんぐそく

なり己の心を見るは三千具足の仏を見るなり、分身とは父母よ

ふんじん

り相續する分身の意なり、迷う時は流転の分身なり悟る時は

ふんじん

果中の分身なり、さて分身の起る処を習うには地獄を習うな

ほうとう

り、かかる宝塔も妙法蓮華經の五字より外は之れ無きなり

みようほうれんげきよう

妙法蓮華經を見れば宝塔即一切衆生一切衆生即南無

みようほうれんげきよう

妙法蓮華經の全体なり云云。

だいば

提婆品

おんぎくでん いわ 御義口伝に云く此の品には釈尊の本師・提婆達多の成仏と
もんじゆしり きやうけ りゆうによじやうぶつ 文殊師利・教化の竜女成仏とを説くなり、是れ又妙法蓮華經
だいばりゆうによ じゅつかいさんぜんみなちようだつりゆうによ の提婆竜女なれば十界三千皆調達竜女なり、法界の衆生
ちようだつ の逆の辺は調達なり法界の貪欲・瞋恚・愚癡の方は悉く竜女
ちようだつ しゅうとく つみ いっさいしゅうじよう なり、調達は修徳の逆罪・一切衆生は性徳の逆罪なり一切
しゅうじよう しゅうとく てんのうによらいちようだつ 衆生は性徳の天王如来調達は修徳の天王如来なり、竜女
しゅうとく りゆうによ いっさいしゅうじよう は修徳の竜女・一切衆生は性徳の竜女なり、所詮釈尊も
もんじゆ だいば りゆうによ 文殊も提婆も竜女も一つ種の妙法蓮華經の功能なれば本来
じようぶつ 成仏なり、仍つて南無妙法蓮華經と唱え奉る時は十界同時
じようぶつ に成仏するなり、是を妙法蓮華經の提婆達多と云うなり、
じゅつかいさんぜんりゆうによ 十界三千竜女なれば無垢世界に非ずと云う事なし、竜女が
じようぶつ 一身も本来成仏にして南無妙法蓮華經の当体なり云云。

勸持品 かんじほん

御義口伝に云く此の品の姨母・耶輸の記☆は十界同時の授記なり妙法の姨母・妙法の耶輸なる故なり、十界の衆生の心性は所持の経の体なり是れ即ち勸持の流通なり、心性所持の経を勸持して自行化他に趣くなり、姨母耶輸は女人の成仏なり二万の居士は男子の流通なり此の文・陰陽一体にして南無妙法蓮華経の当体なり云云。

安楽行品 あんらくぎょうほん

御義口伝に云く妙法の安楽行なれば十界三千悉く安楽行なり、自受用の当体なり身口意誓願悉く安楽行なり、蓮華の安楽行なれば三千十界清浄の修行なり、諸法実相なれば安楽行に非ざること莫し、本門の意は十界の色心本来本有と

して真実しんじつの安樂行あんらくぎょうなり、安樂行あんらくぎょうの体たいとは所謂いわゆる上行じょうぎょう所伝しよでんの
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう是なり云云、靈山淨土りやうぜんじょうどに安樂あんらくに行詣ぎやうけいす可べき
なり云云。

一 涌出品ゆじゅつぽん

御義口伝おんぎくでんに云いわく此この品しやくもんは迹門流通しやくもんるつうの後・本門開顯ほんもんの序分じよぶんなり、
故ゆえに先ほんちず本地無作むさくの三身さんじんを顯あらわさんが為ために釈尊しやくそん所具しよぐの菩薩ぼさつなる
が故ほんち本地本化ほんげの弟子でしを召めすなり、是これ又妙法みょうほうの從地じなれば
十界じゅっかいの大地だいちなり、妙法みょうほうの涌出ゆじゅつなれば十界じゅっかい皆涌出みなゆじゅつなり、十界じゅっかい
妙法みょうほうの菩薩ぼさつなれば皆饒みなにやうくうじやう益有情界じひじんじゅうの慈悲深重じじんじゅうの大士だいしなり、蓮華れんげ
の大地だいちなれば十界じゅっかいの大地だいちも十界じゅっかい涌出ゆじゅつの菩薩ぼさつも本来しやうじやう清淨しよじやうな
り、所詮悟道しよせんごどうに約する時は從地じゅっかいとは十界じゅっかいの衆生しゆじやうの大種だいしゆの所生しよじやう
なり、涌出ゆじゅつとは十界じゅっかいの衆生しゆじやうの出胎しゅつたいの相さうなり菩薩ぼさつとは十界じゅっかいの

しゅじょう 衆生の本有の慈悲なり、此の菩薩に本法の妙法蓮華經を付属
せんが為^{ため}に従地涌出^{じゆいだ}するなり、日蓮等の類^{たぐ}い南無妙法蓮華經
とな^{とな}と唱え奉る者は従地涌出^{じゆ}の菩薩なり外に求むること莫^なかれ云。
云。

一 寿命品

おんぎくでん 御義口伝に云く寿命品とは十界の衆生の本命なり、此の品
を本門と云う事は本に入る門と云う事なり、凡夫^{ほんぶ}の血肉^{けつにく}の色心^{しきしん}
を本有^{ほんぬ}と談^{だん}ずるが故^{ゆえ}に本門とは云うなり、此の重^{いた}に至らざるを
始覚^{しかく}と云い迹門^{しやくもん}と云うなり、是^{これ}を悟るを本覚^{ほんかく}と云い本門と云
うなり、所謂^{いわゆる}南無妙法蓮華經は一切衆生の本有^{ほんぬ}の在処なり
爰^{ここ}を以て經に我実成仏已来とは云うなり云云。

一 分別品

御義口伝に云く此の品は上の品の時本地無作の三身如来の寿を
聞く故に今品にして上の無作の三身を信解するなり、其の功徳
を分別するなり功徳とは十界己己の当体の三毒の煩惱を此の
品の時其の儘妙法の功徳なりと分別するなり、其の功徳とは
本有の南無妙法蓮華經是なり云云。

一 隨喜品

御義口伝に云く妙法の功徳を隨喜する事を説くなり、五十展轉
とは五とは妙法の五字なり十とは十界の衆生なり展轉とは
一念三千なり、教相の時は第五十人の隨喜の功徳を校量せ
り五十人とは一切衆生の事なり、妙法の五十人妙法蓮華經
を展轉するが故なり、所謂南無妙法蓮華經を展轉するなり云
云。

一 法師功德品 ほつしくとく

御義口伝に云く無作の三身も如来の寿も分別功德も随喜も我が
おんぎくでん いわ むさ さんじん によらい ぶんべつくとく ずいき
身の上の事なり、然らば父母所生の六根は清淨にして自在
みょうほう しか ふ ぼ ししょう ろっこん しやうじやう じざい
無碍なり妙法の六根なれば十界三千の六根皆清淨なり、
れんげしよぐ ろっこん じゅつかいさんぜん ろっこんみなしやうじやう
蓮華所具の六根なれば全く不淨に非ざるなり、此の六根にて
な む みやうほうれんげきやう けんかいかくち ほんぬ ろっこんしやうじやう
南無妙法蓮華經と見開覺知する時は本来本有の六根清淨な
り云云。

一 不輕品 ふぎよう

御義口伝に云く此の菩薩の礼拜の行とは一切衆生の事なり、
おんぎくでん いわ ぼさつ らいはい いっさいしゆじやう
自他一念の礼拜なり父母果縛の肉身を妙法蓮華經と礼拜する
じたいちねん らいはい ふ ぼ かばく みやうほうれんげきやう らいはい
なり、仏性も仏身も衆生の当体の色心なれば直ちに礼拜を行
ぶつしやう ぶつしん しゆじやう とうたい しきしん らいはい
ずるなり、仍って皆当作仏の四字は南無妙法蓮華經の種子に
よ みな さぶつ な む みやうほうれんげきやう しゆし

依るなり。

一 神力品

おんぎくでん じんりきほん
御義口伝に云く十種の神力を現じて上行菩薩に妙法蓮華經の
ごじ ふそく たま じんりき
五字を付属し給う此の神力とは十界三千の衆生の神力なり、
ほんぶ さんぜ しょうぶつ じんりき
凡夫は体の神力・三世の諸仏は用の神力なり神とは心法力とは
色法なり力は法神は妙なり妙法の神力なれば十界悉く神力な
り、蓮華の神力なれば十界清淨の神力なり、惣じて三世の
しょうぶつ じんりき ことごとく しゃくそんしゅつせ じんりき ほんい
諸仏の神力は此の品に尽くせり釈尊出世の神力の本意も此の
品の神力なり、所謂妙法蓮華經の神力なり十界皆成と談ず
るより外の諸仏の神力は之れ有る可からず、一切の法門神力に
あらずと云う事なし云云。

一 嘱累品

御義口伝に云く此の品には摩項付属を説きて此の妙法を滅後
に留め給うなり、是れ又妙法の付属なれば十界三千皆付属の
菩薩なり、又三摩する事は能化所具の三觀三身の御手を以て
所化の頭上に明珠を譲り与えたる心なり、凡そ頂上の明珠
は覺悟知見なり項上の明珠とは南無妙法蓮華經是なり云云。

一 藥王品

御義口伝に云く此の品は藥王菩薩の仏の滅後に於て法華を弘通
するなり、所詮焼身焼臂とは焼は照の義なり照は智慧の義なり
智能く煩惱の身生死の臂を焼くなり、天台大師も本地藥王菩薩
なり、能説に約する時は釈迦なり衆生の重病を消除する方
は藥王・藥師如来なり又利物の方にて藥王と云う自悟の方にて
は藥師と云う、此の藥王・藥師出世の時は天台大師なり藥王も

滅後めつごに弘通くつうし藥師やくし如来にょらいも像法そうぼう暫時ざんじの利益りやく有情うじょうなり、時ときを以て身み體たいを顯あらわし名なを以て義ぎを顯あらわす事ことを仏顯あらかし給たまうなり、藥王やくおう菩薩ぼさつは止觀しがんの一念いちねん三千さんぜんの法門ほうもんを弘ひろめ給たまう、其その一念いちねん三千さんぜんとは所謂いわゆる南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげき是こなり云云。

一 妙音品

御義口伝おんぎくでんに云いく此この菩薩ぼさつは法華弘通ほうつけくつうの菩薩ぼさつなり故ゆえに卅四身しゅうじしんを現げんじて十界互具じゅうかいごぐを顯あらわし給たまい利益りやく說法せっぽうするなり、是これ又妙法みょうほうの妙音みょうおんなれば十界じゅうかいの音声おんじょうは皆妙音みなみょうおんなり、又十界じゅうかい悉ことごとく卅四身しゅうじしんの所現しょうげんの妙音みょうおんなり、又蓮華れんげの妙音みょうおんなれば十界じゅうかい三千さんぜんの音声おんじょう皆無染清淨しやうじやうなり、されば慈覺大師じかくだいしをば妙音みょうおんの出世しゅつせと習ならうなり之こに依よつて唐決とうけつの時とき・引声いんじやう妙音みょうおんをば伝え給たまえり何故なにゆえ有ありてか法華ほっけを誹謗ひぼうして大日經等だいにちきやうに劣おとりたりと云いうや云云、所謂いわゆる法界ほっかい

の音声・南無妙法蓮華經の音声に非ずと云う事なし云云。

観音品

御義口伝に云く此の品は甚深の秘品なり息災延命の品なり当途王經と名く、されば此の品に就て職位法門を継ぐぞと習うなり、天台も三大部の外に観音玄という疏を作り章安大師は兩卷の疏を作り給えり能く能くの秘品なり、観音・法華・眼目異名と云いて観音即ち法華の体なり所謂南無妙法蓮華經の体なり云云。

陀羅尼品

御義口伝に云く此の品は二聖・二天王・十羅刹女・陀羅尼を説きて持經者を擁護し給うなり、所詮妙法・陀羅尼の眞言なれば十界の語言音声皆陀羅尼なり、されば伝教大師の云く

「妙法の真言は他経に説かず普賢常護は他経に説かず」陀羅尼
とは南無妙法蓮華經の用なり、此の五字の中には妙の一字よ
り陀羅尼を説き出すなり云云。

一 嚴王品

御義口伝に云く此の品は二子の教化に依つて父の妙莊嚴王
邪見を翻し正見に住して沙羅樹王仏と成るなり、沙羅樹王とは
梵語なり此には熾盛光と云う、一切衆生は皆是れ熾盛光より
出生したる一切衆生なり、此の故に十界衆生の父なり、
法華の心にては自受用智なり忽然火起焚燒舍宅とは是なり、
煩惱の一念の火起りて迷悟不二の舍宅を焼くなり邪見とは是なり、
此の邪見を邪見即正と照したる南無妙法蓮華經の智慧なり
所謂六凡は父なり四聖は子なり四聖は正見六凡は邪見故に

ろくどう しゅじょう みなこ
六道の衆生は皆是れ我が父母とは是なり云云。

勸発品

おんぎくでん いわ
御義口伝に云く此の品は再演法華なり本・迹二門の極理此の品
に至極するなり、慈覚大師云く十界の衆生は発心修行と
釈し給うは此の品の事なり、所詮此の品と序品とは生死の二法
なり序品は我等衆生の生なり此の品は一切衆生の死なり生死
一念なるを妙法蓮華經と云うなり品品に於て初の題号は生の
方・終の方は死の方なり、此の法華經は生死・生死と轉りたり、
生の故に始に如是我聞と置く如は生の義なり死の故に終りに
作礼而去と結したり、去は死の義なり作礼の言は生死の間に成
しと成す処の我等衆生の所作なり、此の所作とは妙法蓮華經
なり、礼とは不乱の義なり法界妙法なれば不乱なり、天台大師

の云く「体の字は礼に訓ず礼は法なり各々其の親を親とし各々
其の子を子とす出世の法体も亦復是の如し」と、体とは
妙法蓮華經の事なり先づ体玄義を釈するなり、体とは十界の
異体なり是を法華經の体とせり此等を作礼而去とは説かれた
り、法界の千草万木地獄・餓鬼等何の界も諸法実相の作礼に
非ずという事なし是れ即ち普賢菩薩なり、普とは法界・賢とは
作礼而去なり此れ即ち妙法蓮華經なり、爰を以て品品の初め
にも五字を題し終りにも五字を以て結し前後中間南無
妙法蓮華經の七字なり、末法弘通の要法唯此の一段に之れ有る
なり、此等の心を失うて要法に結ばずんば末法弘通の法には
不足の者なり剩え日蓮が本意を失う可し、日蓮が弟子・檀那別
の才覚無益なり、妙楽の釈に云く「子父の法を弘む世界の益

有り」と、子とは地涌じゆの菩薩ぼさつなり父とは釈尊しゃくそんなり世界せかいとは
日本にほんこくなり益じやうぶつとは成仏にちれんなり法にちれんとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、今又
以て此かの如ごとし父にちれんとは日蓮にちれんなり子にちれんとは日蓮にちれんが弟子でし・檀那だんななり
世界せかいとは日本にほんこくなり益じゆじじやうぶつとは受持じゆじ成仏じやうぶつなり法じやうぎやうしよでんとは上行じやうぎやうしよでん所伝じよでんの
題目だいもくなり

御義口伝卷下おんぎくでん

弘安元年こうあんがんねん 戊寅つちのえとら 正月一日

執筆しつぴつ 日興にっこう

御講聞書

◆九六 御講聞書目録

804p

已上九十ヶ条

九

一、妙法蓮華經序品第一の事

一、序品の事

八〇

八〇七

九

一、妙法みょうほう

八〇

一、品と云う事

八〇

八

九

一、蓮華れんげ

八〇

一、如是我聞にょぜがもんの事

八一

八

〇

一、本因・本果ほんいん・ほんがの事

八

一、如是この二字

八一

〇九

〇

一、爾前にぜん無得道とくどうの事

八〇

一、耆闍崛山ぎしゃくつせんの事

八一

一 五

一、与大比丘衆の事 八一
一、自証無上道大乘平等法

二 の事 八一五

一、爾時・世尊の事 八
一、我始坐道場 觀樹亦經行の

一三 事八一六

一、淨飯王摩耶夫人成仏 八
一、今・我喜無畏の事

しょうもん
証文の事八一三

一、方便品の事 八一
一、我聞是法音疑網皆已除の

三 事八一六

一、仏所成就第一希有難解之
一、以本願故說三乘法の事

ゆいぶつよぶつ
法唯仏与仏の事八一四 八一七

一、十如是の事 八一
一、有大長者の事 八一

八

一、多有田宅の事

八一

九

一、等一大車の事

八二

〇

一、其車高広の事

八二

〇

一、是朽故宅属于一人の事

一、薬草喻品の事

八二

八二〇

一、諸鬼神等揚声大叫の事

一、現世安穩・後生善処の事

八二一

一、乘此宝乘直至道場の事

一、皆悉到於一切智地の事

八二一

一、若人^{にやくにんふしん}不信毀謗^{きぼう}此經則断

一切世間・仏種^{ぶつしゅ}の事八二二

一、捨惡知識親近善友の事

八二三

一、無上宝聚不求自得の事

八二四

四

八二五

八二五

一、此の一切智地の四字八二

六

一、根莖枝葉の事

八二七

一、枯槁衆生の事

八二七

一、等雨法雨の事

八二七

一、如從飢国来忽遇大王・の

事八二八

一、大通智勝仏○不得成仏道

の事八二九

一、貧人見此珠其心大歡喜の

事八三〇

一、如甘露見灌の事

一

一、若有惡人以不善心等の事

八三二

一、如是如是の事

二

一、是真仏子住淳善地の事

八三二

一、非口所宣非心所測の事

八三三

一、不染世間法せけん如蓮華にょれんげざいすい在水ゆじゅつ從

地而涌出の事八三三

一、願みらい仏えんぜつ為未來演說令開解の

事八三四

一、譬如良医智慧聰達ひによりようい ちえの事

八三四

一、一念信解いちねん しんげの事 八三

五

一、見仏もんぼう聞法信受教誨しんじゅの事

八三五

一、若復有人またあるひと以七宝しっぽう滿是人所

得其福最多の事八三五

一、妙音菩薩みょうおんぼさつの事 八三

六

一、爾時無尽意菩薩むじんいぼさつの事八三

六

一、觀音妙智力かんのんみょうちの事 八三

六

一、自在じざい之業の事 八三

六

一、妙法蓮華經陀羅尼みょうほうれんげきょう だらにの事

八三六

一、六万八千人的事 八三

七

一、妙莊嚴王の事

八三

七

一、華嚴・大日觀經等の凡夫

の得道の事八三七

一、題目の五字を以て下種の

証文と為す可き事八三七

一、題目の五字末法に限りて持

つ可きの事八三八

一、天台云く是我弟子

応弘我法の事八三八

一、色心を心法と云う事八三

八

一、無作の応身我等凡夫也と

云う事八三八

一、諸河無鹹の事

八

一、妙樂大師の釈に末法之初

冥利不無の釈の事八三九

一、爾前經瓦礫国の事

九

一、無明惡酒の事

九

一、日蓮己証の事

○

一、釈尊しゃくそんの持言秘法ひほうの事八四

○

一、日蓮にちれん門家大事もんかだいじの事 八四

○

一、日蓮にちれんが弟子でし臆病おくびょうにては

叶かなう可べからざる事八四〇

一、妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの五字ごじを眼と

云う事

八四〇

一、法華經ほけきょうの行者ぎょうじやに水火すいかの

ぎょうじや

行者ぎょうじやの事

八四一

一、女人にょにんと妙しゃくそんと釈尊しゃくそんと一体の

事八四一

一、置不呵責かしやくの文の事 八四

二

一、異念なく無く靈山りょうぜん淨土じょうどへ参る

可べき事

八四二

一、不可失ふか本心ほんしんの事 八四

二

一、天台大師てんだいだいしを魔王まおう障礙しょうがいせし

事八四三

一、法華經ほけきょう極理ごくくりの事 八四

四

一、妙法蓮華經みょうほうれんげきょう五字ごじの蔵の事

八四四

一、我等衆生の成仏は打か

ためたる成仏と云う証文の

事八四五

一、爾前・法華の能くらべの

事八四五

一、授職の法体の事

五

一、末代議状の事

八四六

右日向記の目録は、現行板本の目録に脱せる「如是我聞の事」及び

「法華經の行者に水火の行者の事」の二条を加え、新曾本に明か

に「已上九十ヶ条」とあるに合せて、新たに作製せり。現行板本に八

五

一、本有止観と云う事

五

一、入末法四弘誓願の事

五

一、四弘誓願応報如理と云う

事八四六

一、本来の四弘の事

六

十八箇条とあるは誤なり、但し巻頭の「総」は新曾本にも数えず、故に本目録にも記載せず。なお同一箇条にして、別条に御講示ある場合、即ち「等雨法雨の事」「根茎枝葉の事」等は、新曾本も現行板本も、共に一条に数うるを以て、本目録も亦た其れに従えり。

已上四行の附記は全く日宗社本に依る、編者。

◆九七

御講聞書

807P

自二弘安元年三月十九日一連連御講至二同三年五月二十

八日一也仍テ記シレ之畢

日向 記之

凡そ法華經と申すは一切衆生・皆成仏道の要法なり、されば

大覺世尊は説時未至故と説かせ給いて説く可き時節を待たせ給い

き、例せば郭公の春をおくり鶏鳥の暁を待ちて鳴くが如くなり、

此れ即ち時を待つ故なり、されば涅槃經に云く以知時故名大法師

と説かれたり、今末法は南無妙法蓮華經の七字を弘めて利生
とくやく
得益あるべき時なり、されば此の題目には余事を交えば僻事なる
べし、此の妙法みょうほうの大曼荼羅まんだらを身に持ち心に念じ口に唱え奉るべ
き時なり、之に依つて一部二十八品の頂上ちやうじやうに南無妙法蓮華經
序品第一と題したり。
じよぼんだいいち

一妙法蓮華經序品第一の事玄旨伝に云く、一切經の惣要とは
みようほうれんげきようじよぼんだいいち
謂く妙法蓮華經の五字なり、又云く、一行一切行恒修二此三味
いわ
一文、云う所の三昧とは即ち法華の有相無相の二行なり、此の
どうり
道理を以て法華經を讀誦せん行者は即ち法具の一心三觀なり云
ほけきよう
云、此の釈に一切經と云うは近くは華嚴・阿含・方等・般若等
いっさいきよう
なり、遠くは大通仏より已來の諸經なり、本門の意は寿量品を
だいつう
除いて其の外ほかの一切經なり、惣要とは天には日月・地には大王
いっさいきよう
そ
ほか
いっさいきよう
そのよう
そうよう
にちがつ
だいおう

・人には神・眼目の如くなりたましい がんもく ごとと云う意を以つて釈せりしゃく、此れ
すなわすなわみようほうれんげきようの枝葉なりしよう、一行とは妙法の一行に一切行をみようほう いっさい
即ち妙法蓮華經のおさ納めたり、法具とは題目の五字に万法を具足すと云う・事なり、
然る間・三世十方の諸仏も上行菩薩等も・大梵天王・帝釈・
四王・十羅刹女・天照太神・八幡大菩薩・山王二十一社・其の
外・日本国中の小神・大神等・此の經の行者を守護すべしと・
法華經の第五卷に分明に説かれたり、影と・身と・音と・響と
の如し、法華經二十八品は影の如く響の如し、題目の五字は体
の如く音の如くなり、題目を唱え奉る音は十方世界にとずかず
と云う所なし、我等が小音なれども、題目の大音に入れて唱え
奉る間、一大三千界にいたらざる所なし、譬えば小音なれども貝
に入れて吹く時・遠く響くが如く、手の音は・わずかなれども

鼓を打つに遠く響くが如し、一念三千の大事の法門是なり、かかる目出度き御經にて渡らせ給えるを、謗る人何ぞ無間に墮在せざらんや、法然・弘法等の大悪知識是なり。

一妙法

の二字は一切衆生の色心の二法なり、一代説教

の中に法の字の上に妙の字を置きたる經は一經もなし、涅槃經

の題目にも大涅槃經と云いて大の字あれども妙の字なし、但し大

は只是れ妙と云えり然れども大と妙とは不同なり、同じ大なれど

も華嚴經の大方広華嚴經と云える題号の大と、涅槃經の大と

天地雲泥なり、華嚴經の大は無得道の大なり。涅槃經の大は法華

同醍醐味の大なり、然れども然涅槃經尚劣と云う時は法華經には

劣れり、此の事は涅槃經に分明に法華經に劣ると説かれたり、

涅槃經に云く如下法華中八千声聞得レ受二記べつ一成中大果舞

上如三秋收冬蔵更無二所作二云云此の文分明に我と法華經に
劣れりと説かせ給えり。

一蓮華

とは本因・本果なり、此の本因・本果と云うは

一念三千なり、

本有の因・本有の果なり、今始めたる因果に

非ざるなり、五百塵点の法門とは此の事を説かれたり、本因の因

と云うは下種の題目なり、本果の果とは成仏なり、因と云うは

信心領納の事なり、此の經を持ち奉る時を本因とす其の本因の

まま成仏なりと云うを本果とは云うなり、日蓮が弟子・檀那の

肝要は本果より本因を宗とするなり、本因なくしては本果有る

可からず、仍て本因とは慧の因にして名字即の位なり、本果は果

にして究竟即の位なり、究竟即とは九識本覺の異名なり、九識本

法の都とは法華の行者の住所なり、神力品に云く若しは山谷

こうや
曠野等と説けり即ち是れ道場と見えたり豈法華の行者の住所は

生処・得道・転法輪・入涅槃の諸仏の四処の道場に非ずや。一

本因・本果の事
法界悉く常住不滅の爲体を云うなり、

されば妙樂大師・此の事を釈する時・弘決に云く当七知身土

一念三千・故成道時称二此本理一身一念遍二於法界一云云、此

の积分明に本因・本果を釈したり、身と云うは一切衆生なり、

土と云うは此の一切衆生の住処なり一念とは此の衆生の念念

の作業なり、故成道時称二此本理一とは本因・本果の成道なり、

本理と本因・本果とは同じ事なり法界とは五大なり、所詮法華經

を持ち奉る行者は若在仏前蓮華化生なれば称此本理の成道な

り、本理に称うとは妙法蓮華經の本理に称うと云う事なり、

法華經の本理に叶うとは此の經を持ち奉るを云うなり、若有能持

則持ぶつしん仏身とは是これなり。

一爾にぜん前無得道の事

此の法門ほうもんは蓮華れんげの二字より起れり、

其の故そのゆえは蓮華れんげの二字を以て云うなり、三世さんぜの諸仏しよぶつの成道じやうどうを唱となう

るは蓮華れんげの二字より出いでたり、権教こんきやうに於おいて蓮華れんげの沙汰さた無もし若もし

ありと云うとも有名無実ゆうめいむじつの蓮華れんげなるべし、三世さんぜの諸仏しよぶつの本時の

下種げしゆを指して華と名け、此の下種げしゆの華によつて成仏じやうぶつの蓮を取る、

妙法蓮華みやうほうれんげすなわ即ち下種げしゆなり、下種げしゆ即ち南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり、華は本

因・蓮は本果なれば華の本国を不信ふしん謗法ほうぼうの人豈あに具足ぐそくせんや、經に

云いわく若人にやくにん不信毀謗きぼう此經則斷一切世間・仏種ぶつしゆ云云、此の蓮華れんげに迷まよい

う故ゆえに十界具足じゆつかいぐそく無し、十界具足じゆつかいぐそくせざれば一念三千跡形いちねんさんぜんあとかた無なきなり、

一切いっさいの法門ほうもんは蓮華れんげの二字より起れり、一代説教いちだいせつきやうに於おいて無得道とくどうと

云うも蓮華れんげの二字より起れり深く之これを案べず可べし。

一序品の事

此の事は、きようしゅしやくそん 教主釈尊・ほけきよう 法華經を説き給わんと

て先ずずいそう 瑞相の顯れたる事を云うなり、今末法に入つて南無

妙法蓮華經の顯われ給うべきずいそう 瑞相は彼には百千万倍勝るべきな

り、其の故は雨は竜の大小により蓮華は池の浅深に随つて其の

色不同なるが如くなるべし。

一品と云う事 品とは、釈に云く義類同と云えり、此の法華經

は三仏寄合たまひい給いて定判し給えり、三仏とは釈迦・多宝・分身

是なり、此の三仏・評定ひようじようしてのたまわく一切衆生・皆成仏道

は法華經に限りて有りと、皆是真實の証明・舌相梵天の誠証

・要當說真實の金言・此等を義類同して題したる品の字なり、

天竺には跋渠と云う此には品と云えり、釈迦・多宝・分身の三仏

の御口を以て指し合せ同音に定判し給える我等衆生の成仏な

り、譬たとえば鳥の卵の内より卵をつつく時・母又同じくつつきあくるに・同じき所をつつきあくるが如ごとし、是れ即すなわち念慮の感応かんのうする故なり、今法華經ほけきやうの成仏じやうぶつも此かくの如ごとくなり、三世諸仏さんぜしよぶつの同音にどうじ同時に定め給たまえる成仏じやうぶつなり、故に經に云く從仏ぶつ口生如從仏等云云。

一如是によげがもん我聞の事

仰いわに云く如と云うは衆生しゆじやうの如と仏の如と

一如にして無二如なり、然しかりと雖いえども九界と仏界ぶつがいと分れたるを是と云うなり、如は如を不具ふぐに名なく即すなわち空の義なりと釈しゃくして少しも・ことならざるを云うなり、所詮法華經の意は煩惱即菩提・生死即ねはん涅槃・生仏不二・迷悟めいご一体といえり、是これを如とは云うなり、されば如は実相じつそう・是は諸法しよほうなり、又如は心法・是は色法・如は寂・是は照なり、如は一念いちねん・是は三千さんぜんなり、今經の心は文文・句句・

いちねんさんぜん ほうもん
一念三千の法門なり、惣じて如是我聞の四字より外は今經の体

全く無きなり 如と妙とは同じ事・是とは法と又同じ事なり、

ほけきよう しゃくそん われら
法華經と釈尊と我等との三・全く不同無く・如我等無異なるを

如と云うなり、仏は悟り・凡夫は迷なりと云うを是とは云うな

り、我聞と云うは、我は阿難なり、聞とは耳の主と釈せり、聞と

は名字即なり、如是の二字は妙法なり、阿難を始めて靈山一会

の聴衆・同時に妙法蓮華經の五字を聴聞せり仍つて我も聞く

と云えり、されば相伝の点には如は是なりきと我れ聞くといえり、

所詮末法当今には南無妙法蓮華經を我も聞くと心得べきなり、

我は真如法性の我なり、天台大師は同聞衆と判ぜり同じ事を聞

く衆と云うなり、同とは妙法蓮華經なり、聞は即身成仏・

ほけきよう
法華經に限ると聞くなり云云。

一如こ是この二字

を約教やつきょうの下しもに釈しゃくする時・文句もんくの一に又一時いちじ

に四箭しせんを接して地に墮だせしめざるも未いまだ敢あえてて捷せつしと称なづせず、鈍驢どんろ

に策むちうつて跋はべつ☆を駢なる尚なほし一をも得いかず何いかなに況いわんやや四をや云云、記の一

に云いわく、大經だいきように云いわく迦葉菩薩問かしようぼさつうて云いわく云何いかなるかか智者ちしや・念念ねんねんの滅

を觀くわんずと、仏の言いわく譬たとえば四人皆射術みなを善ぜんし満まんつて一処いつしよに在ありて

・各一方いっぽうを射うるに念言ねんげんすらく・我等われらは四の箭や・俱ともに射うて俱ともに墮だせ

んと、復人また有ありて念ねんずらく・其その未いまだ墮だせざるに及およんで我われ能よく

一時いちじに手てを以もつて接取せつしゆせんというが如ごとし、仏の言いわく、捷疾鬼しやうしつきは復また

是この人ひとよりも速すみなり是かくのくことの如ごとく、飛行鬼ひぎようき・四天王してんのう・日月神にちがつ・

堅疾天けんしつてんは展轉てんでんして箭やよりも疾すみし、無常むじようは此これに過すぎたりと、此この

本末ほんまつの意いは他師たし・此この經きやうの如是によぜに付つて釈しやくを設しやくくと云いえども・更さらに

法蓮華ほうれんげの理りに深ふかく叶かなわざるなり、一二いちにだも義理ぎりを尽じんさざるなり

いわんやいんねん
況や因縁をや、何に況や約教・觀心の四をやと破し給えり、

しよせんほけきよう
所詮法華經は速疾頓成を以て本とす、我等衆生の無常のはやき

しようしつき
事は捷疾鬼よりもはやし、爰を以て出づる息は入る息を待たず、

によぜにぜんしよきよう
此の經の如是は爾前の諸經の如是に勝れて超八の如是なり、超

だいこによぜそくしつとんじよう
八醍醐の如是とは速疾頓成の故なり、妙樂大師云く若し超八の

によぜあら
如是に非ずんば、安ぞ此の經の所聞と為さんと云云。

ぎしゃくつせん
一耆闍崛山の事 仰に云く耆闍崛山とは靈鷲山なり、靈とは

さんぜしよぶつ
三世の諸仏の心法なり必ず此の山に仏法を留め給う、鷲とは鳥な

いだりん
り此の山の南に當つて詩だ戸陀林あり死人を捨つる所なり、鷲此

しかばね
の屍を取り食うて、此の山に住むなり、さて靈鷲山とは云う

しよせん
なり、所詮今の經の心は迷悟一体と談ず、靈と云うは法華經なり、

さんぜしよぶつ
三世の諸仏の心法にして悟なり、鷲と云う卵は畜生にして迷な

ちゆうどうそくほっしやう

り、迷悟不二と開く中道即法性の山なり、耆闍崛山中と云うは

めいご

さんたい

ちゆうどうだいいち

ないしやう

ほけきやう

迷悟不二・三諦一諦・中道第一義空の内証なり、されば法華經

にちれん

でし

だんな

を行ずる日蓮等が弟子・檀那の住所はいかなる山野なりとも

りやうじゅうせん

ぎやうじや

しやかによらい

あら

にほんこく

ぎしやくつせん

靈鷲山なり行者遠釈迦如来に非ずや、日本国は耆闍崛山・

にちれん

たぐい

しやかによらい

そう

いちじやう

なむみやうほうれんげきやう

日蓮等の類は釈迦如来なるべし、惣じて一乘南無妙法蓮華經

しゅぎやう

を修行せん所は・いかなる所なりとも常寂光の都・靈鷲山

じやうじやつこ

りやうじゅうせん

なるべし、此の耆闍崛山中とは煩惱の山なり、仏菩薩等は菩提の

ぎしやくつせん

ほんのう

ぼさつ

ぼだい

果なり・煩惱の山の中にして法華經を三世の諸仏説き給えり、

ほんのう

ほけきやう

さんぜ

しよぶつと

たま

諸仏は法性の依地・衆生は無明の依地なり、此の山を寿量品

しよぶつ

ほっしやう

えじ

しゅじやう

むみやう

えじ

じゆりやうほん

にしては本有の靈山と説かれたり、本有の靈山とは此の袈婆

ほんぬ

りやうぜん

ほんぬ

りやうぜん

しやば

世界なり、中にも日本国な

せかい

にほんこく

世界なり、中にも日本国な

り、法華經の本土妙・娑婆世界なり、本門壽量品の未曾有の
大曼荼羅建立の在所なり云云、瑜伽論に云く東方に小国有り、
其の中唯大乘の種姓のみ有り、大乘の種姓とは法華經なり
法華經を下種として成仏すべしと云う事なり、所謂南無
妙法蓮華經なり小国とは日本国なり云云。

一与大比丘衆の事

仰に云く文句の一に云く釈論に明す、

大とは亦是多と言ひ亦是勝と言ひ、遍く内外の經書を知る故に
多と言ひ、又数一万・二千に至る故に多と言ひ、今明さく大道
有るが故に・大用有るが故に・大知有るが故に・故に大と言ひ、
勝とは道勝れ・風勝れ・知勝る、故に勝と言ひ、多とは道多く・
用多く・知多し故に多と言ひ

う、又云く含容一心・一切心なり、故に多と名くるなり、記の一

に云く一心一切心いっしんいっさいと言うは心境俱ともに心にして各一切いっさいを撰せんす、一切いっさい三千さんぜんを出でざるが故なり、具つぶさしかんに止観しさんの第五の文の如ごとし、若もし円心いんしんに非あらざれば三千さんぜんを撰せんせず、故ゆえに三千惣別さんぜん威くうけちゅうく空仮中くうけちゅうなり、一文いちもん既すでに爾しかなり他は皆此みなこれに准みせよ、此の本末ほんまつの心は心境義しんじやうぎの一念三千いちねんさんぜんを釈しゃくするなり、止観しさんの第五の文とは夫一心具十法界しんぐほっかいな乃至ふかしぎ不可思議境ふかしぎの文を指すなり、心境義しんじやうぎの一念三千いちねんさんぜんとは此の与大比丘びく和わが大の字より釈しゃくし出だせり、大多勝の三字・三諦さんたい・三観さんかんなり、円頓行者えんどんぎやうじや起念きねんの当体とうたい・三諦三観さんたいさんかんにして大多勝なり、此の釈に惣えんどんぎやうじやと云うは一心いっしんの事なり、別とは三千さんぜんなり、一文とは大の一字なり、今末法いままっぽうに入つては法華經ほけきやうの行者ぎやうじや・日蓮等にちれんの類たぐい、正まさしく大多勝たふしやうの修行しゆぎやうなり、法華經ほけきやうの行者ぎやうじやは釈迦如来しやくかにやらいを始め奉りて悉ことごとく大人たいにんのため為に敬たてまつい奉るなり誠に以て大曼荼羅まんだらの同共びくの比丘衆びくなり、本門ほんもんの

事いちねんさんぜんの一念三千・南無妙法蓮華經・大多勝なむみょうほうれんげきょうの比丘衆びくなり、文文・

句句・六万九千三百八十四字の字ごとに大多勝なり、人法一体に

して即身成仏そくしんじょうぶつなり、されば釈いわに云く大は是れ空の義・多は是れ

仮の義・勝は是れ中の義と、一人の上にも大多勝の三義・分明ふんみょう

に具足ぐそくす、大とは迹門しやくもん ☆多とは本門ほんもん・勝とは題目だいもくなり、法華經

の本尊ほんぞんを大多勝の大曼荼羅まんだらと云うなり、是れ豈あに与大比丘衆びくに非ず

や、二界・八番の雜衆じやくしゆ悉く法華の會座の大曼荼羅まんだらなり、法華經の

行者ぎやうじやは二法の情を捨てて唯妙法ただみょうほうと信ずるを大というなり、此の

題目だいもくの一心いっしんに一切心いっさいを含容がんようするを多と云うなり、諸經しよきやう・諸人しよにんに

勝すぐれたるが故ゆえに勝と云うなり、一切心いっさいに法界ほっかいを尽す一心いっしんとは

法華經ほけきやうの信心しんじんなり、信心即一念三千しんじんそくいちねんさんぜんなり云云。

一爾時・世尊せそんの事

仰いに云く世尊せそんとは釈迦如来しやくかにらい・所詮世尊しよせんせそんと

は孝養こうようの人を云うなり、其そのの故ゆえは不孝ふこうの人をば世尊せそんとは云わず
きようしゆしやくそん
教主きょうしゅ釈尊しやくそんこそ世尊せそんの本にては御座おわしまし候そうらえ、父淨じようばん飯王はんわう・母摩耶まや
夫人ふじんを成道じようどうせしめ給たまうなり、されど今經こんきやうの座には父母ふぼ御座おわしまさざ
れば方便ほうべん土どへ法華經ほけきやうをば送らせ給たまうなり、彼土得聞これとは是なり、
但ただし法華經ほけきやうの心は十方じゆつぱう仏土中ちゆう・唯一ゆいういちじよう
夫人ふじん生たまじ給たまえり、仰利天そくに即じやくしたる寂光土じやくかうどなり、方便土ほうべんに即そくした
る寂光土じやくかうどなり、四土一念いちねん・皆常寂光みなじようじやくかうなれば、何れも法華經ほけきやうの
説せつ処しょなり、虚空会こくうの時の説ほつ・法華ほつに岩切利天いすれもるべきや寂光土じやくかうどの
説ほつ・法華ほつに遠方便土ほうべんもるべきや、何れも法華經ほけきやうの説所ほけきやうなれば同聞
衆しんずうの人数にんずうなり云云。

一淨じようばん飯王座耶夫人ふじんじやうぶつしやうもん成仏じやうぶつ証文しやうもんの事
仰いわに云いく方便品ほうべんに云いく

我始坐道場どうじやう・觀樹また亦經行またの文これ是なり、又壽量品じゆりやうほんに云いく、然

我^が実^{じつ}成^{じやうぶつ}仏^{いらい}已^{これ}來^きの文^{しゆしやくそん}是^{じやうどう}なり、教^{きやうしゆしやくそん}主^{じやうどう}釈^{じやうどう}尊^{じやうどう}の成^{じやうどう}道^{じやうどう}の時^{じやうばん}・淨^{じやうばん}飯^{じやうばん}王^{じやうばん}も

摩^ま耶^やも得^{とく}道^{どう}するなり、本^{もと}・迹^{あと}二^に門^{もん}の得^{とく}道^{どう}の文^{もん}是^{これ}なり云^い云^え、此^この文^{ぶん}

日^に蓮^{れん}が己^こ心^{しん}の大^{だい}事^じなり、我^わ始^しと我^わ実^{じつ}との文^{ぶん}能^よく能^よく之^{これ}を案^{あん}ず可^べし、

其^{その}の故^{ゆえ}は爾^に前^{ぜん}經^{きやう}の心^{しん}は父^ふ子^し各^{かく}別^{べつ}の談^{だん}道^{どう}なり、然^{しか}る開^{きやう}成^{じやうぶつ}仏^{ふつ}之^これ無^な

し、今^{いま}の經^{きやう}の時^{とき}・父^ふ子^しの天^{てん}性^{しやう}を定^{さだ}め父^ふ子^し一^{いつ}体^{たい}と談^{だん}ぜり・父^ふ母^ぼの

成^{じやうぶつ}仏^{ふつ}即^{すなわ}ち子^この成^{じやうぶつ}仏^{ふつ}なり、子^この成^{じやうぶつ}仏^{ふつ}・即^{すなわ}ち父^ふ母^ぼの成^{じやうぶつ}仏^{ふつ}なり、

釈^{しやくそん}尊^{そん}の我^が始^し坐^ざ道^{どう}場^{じやうじやう}の時^{とき}・淨^{じやうばん}飯^{はん}王^{わう}・摩^ま耶^や夫^ふ人^{じん}も同^{どう}時^じに成^{じやうどう}道^{どう}な

り、釈^{しやくそん}尊^{そん}の我^が実^{じつ}成^{じやうぶつ}仏^{ふつ}の時^{とき}・淨^{じやうばん}飯^{はん}王^{わう}・摩^ま耶^や夫^ふ人^{じん}同^{どう}時^じなり始^し本^{ほん}共^きに

同^{どう}時^じの成^{じやうどう}道^{どう}なり、此^この法^{ほう}門^{もん}は天^{てん}台^{だい}・伝^{でん}教^{きやう}等^{どう}を除^{のぞ}いて知^しる人^{ひと}・一

人^{ひと}も之^{これ}れ有^ある可^べからず、末^{まつ}法^{ぽう}に入^いつて日^に蓮^{れん}等^{どう}の類^{るい}・堅^{かた}く秘^ひす

可^べき法^{ほう}門^{もん}なり、譬^{たと}えば蓮^{れん}華^げの華^け果^かの相^{あい}離^{いは}せざるが如^{ごと}くなり、然^{しか}れ

ば法^ほ華^け經^{きやう}の行^{ぎやう}者^{じや}は男^{なん}女^よ悉^{ことごと}く世^せ尊^{そん}に非^{あら}ずや、藥^{やく}王^{おう}品^{ほん}に云^いく於^い一切^{いっさい}

しゅじょう

またこれだい

衆生中亦為第一文、

此れ即ち世尊の經文に非ずや、

是真仏子な

ほうおう

れば法王の子にして世尊第一に非ずや。

ほうべん

一方便品の事

妙法蓮華經の五字とは

名体宗用教の

五重玄義な

しかん

り、されば止觀に十章を釈せり此の十章即ち

すなわ

妙法蓮華經の能釈なり、夫れとは釈名は名玄義なり、体相摂法

の二は体玄義なり、偏円の一は教玄義なり、方便・正観・果報の

三は宗玄義なり、起教の一は用玄義なり、始の大意の章と終の

旨歸との二をば之を除く、此の意は止観一部の所詮は大意と旨歸

とに納れり無明即明の大意なる故なり、無明とも即明とも分別せ

ざるが旨歸なり、今妙法蓮華經の五重玄義を修行し奉れば・

煩惱即菩提・生死即涅槃の開悟を得るなり、大意と旨歸とは法華

の信心の事なるべし、以信得入・非己智分とは是なり、我等衆生

の色心の二法は妙法の二字なり無始色心・本是理性・妙境・

妙智と開覺するを大意と云うなり、大は色法の徳・意は心法の徳

なり大の字は形に訓ぜり、今日蓮等の類・南無妙法蓮華經と

とな 唱え奉る男女・貴賤・等の色心本有の妙境・妙智なり、父母果縛

の肉身の外に別に三十二相・八十種好の相好之れ無し即身成仏よくしんじょうぶつ

是なり、然る間・大の一字に法界を悉く収むるが故に法華經をこれしかほっかいことごとおさゆえほけきょう

だいじょう

大乘と云うなり、一切の仏・菩薩・聖衆・人畜・地獄等のだいじょういっさいほさつしやうしゅうじんちくじごく

しゅじょう

衆生・の智慧を具足し給うが故に・仏意と云うなり、大乘と云ちえぐそくたまゆえぶついでいじょう

うも同じ事なり是れ即ち妙法蓮華經の具徳なり、されば九界のこすなわみょうほうれんげきょう

衆生の意を以て仏の意とす、一切經の心を以て法華經の意とす、しゅじょういっさいきょうほけきょう

於一仏乗分別説三とは是なり、かかる目出度き法華經を謗じいちぶつじょうぶんべつこれほけきょうほうじ

たてまつ

奉る事・三世の諸仏の御舌を切るに非ずや、然るに此のさんぜしよぶつちえあらしか

みょうほうれんげきょう

妙法蓮華經の具徳をば仏の智慧にてもはかりがたく何に況やほさつちえいかにいわんや

菩薩の智力に及ぶ可けんや、之に依つて大聖塔中偶の相伝にぼさつよたうちゅうたまたまそうでん

云く、一家の本意は只一言を以て本と為す云云、此の一言とはいわほんいただな

寂照不二の一言なり・或は本末究竟等の一言とも云うなり、じやくしやうあるほんまつくきょう

寂照不二の一言なり・或は本末究竟等の一言とも云うなり、

寂照不二の一言なり・或は本末究竟等の一言とも云うなり、

寂照不二の一言なり・或は本末究竟等の一言とも云うなり、

寂照不二の一言なり・或は本末究竟等の一言とも云うなり、

寂照不二の一言なり・或は本末究竟等の一言とも云うなり、

寂照不二の一言なり・或は本末究竟等の一言とも云うなり、

眞実しんじつの義には南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうの一言なり、本とは凡夫ぼんぷなり、末

とは仏くきやうなり、究竟くきやうとは生仏一如いゝなり、生仏一如いゝの如の体は所謂いゝ

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう是なり云云。

一仏所成就ぶつしよじやうじゆだい第一希有難解之法けうなん唯仏与仏ゆいぶつ之事 仰に云く仏とは

釈尊しゃくそんの御事なり、成就じやうじゆとは法華經ほけきやうなり、第一は爾前にぜんの不第一だいいちに

対し・希有けうは爾前にぜんの不希有けうに對し・難解なん之法は爾前にぜんの不難解なんに對

したり、此の仏と申すは諸法実相しよほうじつそなれば十界じゆつかいの衆生しゆじやうを仏とは云

うなり、十界じゆつかいの衆生しゆじやうの語言音声ごげんおんじやうじやうじゆ成就ほけきやうにして法華經ほけきやうなり、三世さんぜ

の諸仏しよぶつの出世しゆつせの本懷ほんかいの妙法みやうほうにして、優曇華うどんげの妙文みやうもんなれば第一だいいち

希有けうなり、九界の智慧ちゑは及ばざれば難解なんの法なり、成就じやうじゆとは

我等衆生われらしゆじやうの煩惱ぼんのう即菩提しようじそく・生死しやうじそく涅槃ねはんの事なり、權教ごんきやうの意は終につい

不成仏じやうぶつなれば成就じやうじゆには非ず、迹門しやくもんには二乗にじやう成仏じやうぶつ顕れたり、

是れ即ち成就なり、是を仏所成就とは説かれたり、されば唯仏
とは釈迦・与仏とは多宝なり、多宝涌現なければ与仏とは云いが
たし、然りと雖も終には出現あるべき故に・与仏を多宝といふ
なり、所詮日蓮等の類いの心は・唯仏は釈尊・与仏は日蓮等の
類いの事なるべし、其の故は唯仏の唯を重ねて譬喩品には
唯我一人と説けり、与仏の二字を重ねて、方便品の末に至つて若
遇余仏と説けり、釈には深く円理を覚るは、之れを名けて仏と
為すと釈せり、是れ即ち与仏と云うは法華經の行者男女の事な
り、唯我一人の釈尊に与し上る仏なり、此の二仏寄り合いて、
乃能究尽する所の諸法実相の法体なり、されば十如是と云うは
十界なり、十界即十如是なり、十如是は即ち法華經の異名なり
云云。

一十如是ことばの事

仰いわに云く此このの十如是じゆのぜは法華經ほけきやうの眼目がんもく・

一切いっさい經きやうの惣要そうやうたり、

されば此このの十如是じゆのぜを開覺かいかくしぬれば語法ことばに

於おいて迷悟めいご無く、

実相じつそうに於おいて染淨せんじやう無し、之これに依よつて天台大師てんだいだいしは

止觀しかんの十章も此このの十如是じゆのぜはより釈出しやくしゅつせり、

然しかる間かん・十如是じゆのぜに過あやまたる

法門ほうもん更に以こて之これ無し、

爰こゝをを以をて和尚授わじやうけて云く十大章じふだいしやうは是これ全

く十如是じゆのぜ・若もし大意たいいを覺さとる

時とき・性じやう如是この意いを以をて下の玄如げんじゆの図ずを分別ぶんべつす可べし、十如是じゆのぜを十大

章なに習ならう事は性じやう如是によぜは大意たいい・和わ如是によぜは釈名しやくめい・体たい如是によぜは体相たいしやう・力りき

如是によぜは摂法えつぽう・作さく如是によぜは偏円へんえん・縁えん如是によぜは方使はうし・因いん如是によぜは正觀しやうくわん・果報かほう

如是によぜは果報かほう・本末究竟ほんまつきやう如是によぜは旨歸しきなり、此このの中に起教ききやうの章しやうは化他けた

利物りもつ果上化用くわじやうと云うなり云云。

一自証むじやう無上道むじやうだう大乘だいじやう平等法びやうどうの事

仰いわに云く末法まつぽう当今とうこんに於おいて

だいじょうびようどう

にちれん

たぐ

大乘平等の法を証せる事・日蓮等の類いに限れりされば此の

きようもん

きようしゅだいかくせそん

ほけきようごくり

しゅつせ

たまひ

経文は教主大覺世尊・法華經の極理を証して番番に出世し給い

とたま

て説き給うなり、所詮此の自証と云うは三十成道の時を指すな

そのゆえ

きようしゅしやくそん

しゅつけ

じようどう

しか

り、其の故は教主釈尊は十九出家・三十成道なり、然る間・

むじようどう

自証無上道等文、所詮此の品の

しよせん

心は十界皆成の旨を明せり、然れば自証と云うは十界を
諸法実相の一仏ぞと説かれたり、地獄も餓鬼も悉く無上大乗の
妙法を証得したるなり、自は十界を指したり、恣まに証す
と云う事なり、権教は不平等の經なり、法華經は平等法の經
なり、今日蓮等の類いは真實自証無上道・大乘平等法の行者
なり、所謂南無妙法蓮華經の大乗平等の広宣流布の時なり云
云。

一我始坐道場觀樹亦經行の事 仰に云く、此の文は教主
釈尊・三十成道の時を説き給えり、觀樹の樹と云うは十二因縁
の事なり、所詮十二因縁を觀じて經行すと説き給えり、十二因縁
は法界の異名なり又法華經の異名なり、其の故は樹木は枝葉華菓
あり是れ即ち生住異滅の四相なり、大覺世尊・十二因縁の流轉

を觀^{かん}じ・經行し給^{たま}えり、所詮^{しよせん}末法^{まつぽう}當今^{とうこん}も一切^{いっさい}衆生^{しゆじやう}・法華^{ほけきやう}經を
謗^{ぼう}じて流轉^{るてん}す可^べきを觀^{かん}じて日^に本國^{ほんこく}を日^に蓮經^{れんきやう}行^{にちれん}して南無^{なむ}
妙法^{みよほう}蓮華^{れんげきやう}經と弘通^{ぐつう}する・又^{また}又^{また}此^{かく}の如^{ごと}くなり、法華^{ほつけ}の行者^{ぎやうじや}は悉^{ことごと}
く道場^{どうじやう}に坐^{どうじやう}したる人なり云云。

一今・我喜無畏の事

仰^いに云^いく此の文は權教^{ごんきやう}を説^とき畢^とらせ

給^{たま}いて法華^{ほけきやう}經を説^{たま}かせ給^{たま}う時なれば喜^{かん}びておそれなしと觀^{たま}じ給^{たま}え

り、其^{その}の故^{ゆえ}は爾前^{にぜん}の間は一切^{いっさい}衆生^{しゆじやう}を畏^{おそ}れ給^{たま}えり、若^もし法華^{ほけきやう}經を

説^{むな}かずして空^{むな}しくやあらんずらんと思召^{おも}して畏^{おそ}れ深くありと云う

文なり、さて今は恐るべき事なく時節^{じせつ}・来^{おそ}つて説^{おそ}く間^{おそ}・畏^{おそ}れなし

と喜^{たま}び給^{たま}えり、今日^{いまにちれん}蓮等^{れんとう}の類^{たぐい}も是^{かく}の如^{ごと}く日蓮^{にちれん}も三十二までは

畏^{おそ}れありき、若^もしや此^{なむ}の南無^{なむ}妙法^{みよほう}蓮華^{れんげきやう}經を弘^{ひろ}めずして・あらん

ずらんと畏^{おそ}れありき、今は即^{すなわ}ち此^{なく}の恐^{すく}れ無^{すく}く既^{すで}に末法^{まつぽう}當今^{とうこん}・南無^{なむ}

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの七字を日本国にほんこくに弘ひろむる間恐れなし、終ついには一閻浮提えんぶだいに広宣流布こうせんるふせん事一定なるべし云云。

一我聞わうせいぎも是法音疑網かい皆已除いの事 仰いに云わうせいく法音なとは南無

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうなり、疑網ぎもとは最後品さいごの無明むみょうを云わうなり、此の經を

持たち奉たてれば悉ことごとく除くと説ことかれたり、此の文は舍利弗しゃりほつが三重むみょうの無明

・一時俱尽いちじくじんする事を領解りようげせり、今日日本国いまほんこくの一切衆生いっさいしゆじよう・法華經ほけきょうの

法音ほうせいを聞きくと云いえども未いまだ能よく信しんぜず豈疑網あにぎも皆已みなすに除くかんや、除

かざれば入阿鼻獄にゅうあびごくは疑うたがい無なきなり、疑うたがいの字は元品がんぽんの無明むみょうの事な

り此うたがいの疑うたがいを断つつを信しんとは云いうなり、釈いわに云うたがいく無うたがい疑うたがい曰い信しんと云いえ

り身子しんしは此うたがいの疑うたがい無なき故ゆえに華光げこう仏ぶつと成なれり、今日蓮等いまにちれんの類たぐいは

題目だいもくの法音ほうせいを信受しんじゆする故ゆえに疑網ぎも更またに無なし、如我等にやがとうむい無異むいとて釈迦しゃか同

等の仏ぶつにやすやすとならん事疑うたがい無なきなり、疑網ぎもと云いうは色心しきしんの

二法に有る惑障なり、疑は心法にあり・網は色法にあり、此の經を持ち奉り信ずれば色心の二法共に悉く除くと云う事なり、此の皆已の已の字は身子尊者・広開三顯一を指して已とは云うなり、今は領解の文段なり、身子・妙法実相の理を聴聞して心懷大歡喜せしなり、所詮舍利弗尊者程の智者・法華經へ来つて華光仏となり、疑網を断除せり、何に況んや末法当時の権人謗法の人人・此の經に値わずんば成仏あらんや云云。

一以本願故說三乘法の事

仰に云く此の經文は身子尊者・

成道の国・離垢世界にて三乗の法は惡世には非ず、然りと雖も身子本願の故に説くと云えり、其の本願と云うは身子菩薩の行を立てしに乞眼の婆羅門に眼を抉じられて、其の時・菩薩の行を退転したり、此の菩薩の行を百劫立てけるに、六十劫なして今四

十劫たらざりき、此の時・乞眼まなこに眼まなこを抉くじられて其の時・菩薩ぼさつ

の行を退して願じょうぶつ成じょうぶつ仏・日・開三乘法かいさんじょうほうの願かいさんじょうほうを立てたるなり、

上品浄土じょうぼんじょうど

・不須かいぜん開漸さんじょうなれば三乗さんじょうの法を説く事は更に以てあるま

じけれども以本願ほんがん故ゆえの故さんじょうにて三乗さんじょうの法を説くなり、此の行は禪

多羅仏たろぶつの所にして立つるなり、此の事は身子しんしが六住退ろくじうたいとて大なる

沙汰さたなり、重重ざいざいの義勢ぎせい之れ在り輒たやすく心得こころえ難がたきの事なり、・或は欲ある

怖地こふち前の意、・或は権者ある退ごんしや云云、所詮しよせんは六住退ろくじうたいとは六根ろくこん・六道ろくどうに

菩薩ぼさつの行を取られたりと云う事なり、之これを以て之これを思まっぼううに末法まつぼう

当今とうこん・法華經ほけきようを修行しゆぎようせんには、必ず身子しんしが退轉たいてんの如ごとくなるべし、

所詮しよせん身子しんしが眼まなこを取らるるは菩薩ぼさつの智慧ちえの行を取らるるなり、

今日蓮等いまにちれんの類たぐい・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようの眼まなこを持たもち奉たてまつるに謗法ほうほうの諸人しよにん

に障觀さわりせらるる・宝眼ほうがんを抉くり取らるるに非あらずや、所詮しよせん彼の乞眼きよくん

の婆羅門・眼を乞いしは身子が菩薩の行を退転せしめんが為に

乞いて踏みつぶして捨てたり、全く菩薩の供養の方を本として

眼をば乞わざりしなり、只だ退転せしめん為なり、身子は一念

菩薩の行を立てて・かかる事に値えり、向後は菩薩の行をば立つ

可からず二乗の行を立つ可しと云つて後悔せし故に成仏の日・

説三乘法するなり、所詮乞眼婆羅門の責を堪えざるが故なり、

法華經の行者・三類の強敵を堪忍して妙法の信心を捨つ可から

ざる見り信心を以て眼とせり云云。

一有大長者の事 仰に云く此の長者に於いて天台大師・三

の長者を釈し給えり、一には世間の長者・二には出世の長者

・三には觀心の長者是なり、此の中に出世觀心の長者を以て、

此の品の長者とせり、長者とは釈迦如来の事なり、觀心の長者

の時いつさいしゅじょうは一切衆生しよせんほけきようなり、所詮ぎようじや法華經なんよの行者ちようじやは男女ちようじや共に長者ちようじやなり、
文句もんくの五くわに委しやくしく釈しやくせり、末法まつぽうとうこん当ちようじや今の長者ちようじやと申もうすは日蓮等にちれんの
類たぐい・南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる者ちようじやなり、されば三ちようじやの長者ちようじやを
釈しやくする時もんく、文句もんく五いわに云いく、二いに位号いを探なするに三なと為なす、一なは世間せけん
の長者ちようじや・二しゅつせは出世ちようじやの長者ちようじや・三かんじんは觀心ちようじやの長者ちようじやなり、世ちようじやに十德ちようじやを
備そなう、一いには姓貴しゅつせ・二ちようじやには位高ちようじや・三かんじんには大富ちようじや・四ちようじやには威猛ちようじや・五ちようじやに
は智深なんぎ・六いには年耆しゅつせ・七かんじんには行淨ちようじや・八ちようじやには礼備らいび・九じようたんには上歎じようたん・
十しんによには下歸げきなり云云、又い云いく、出世しゅつせの長者ちようじやは、仏さんぜは三世しんによの真如しんによ
實際あらの中いより生いず、功成きこうり、道著きわまわれて、十号きわま極きわまり無いし、法財いっしん万
德いっしん、悉ことごとみなつぶさみたく皆具いっしんに満いせり、十力雄猛いっしんにして、魔いっしんを降いし外いを制いす、一心いっしん
の三智通達つうだつせずと云いうこと無いし、早く正覺しよくかくを成いじて、久遠くおんなる
こと斯かくの如ことし、三業智したに随したがつて、運動いして矢無いし、仏いの威儀いぎを

具して、心大なること海の如し、十方の種覺・共に称譽する所
なり、七種の方便・而も来つて依止す、是を出世の仏大長者と
名く、三に觀心とは、觀心の智実相より出で生じて仏家にあり、
種性真正なり、三惑起らず、未だ眞を發さずと縮も是れ如来の衣
を着れば、寂滅忍と称す、三諦に一切の功德を含藏す、正觀の
慧・愛見を降伏す、中道双べ照して権実並に明なり、久く善根
を積みて・能く此の觀を修す、此の觀七方便の上に出でたり、此
の觀・心性を觀ずるを上定と名くれば、即ち三業過無し、歷縁
対境するに成儀失無し、能く此くの如く觀ず、是れ深信解の相
諸仏皆歡喜して持法の者を歎美したもう、天竜・四部・恭敬
供養す、下の文に云く、仏子是の地に住すれば、即ち是れ仏受用
し給ひ、經行し及び坐臥し給わんと、既に此の人を称して仏と

な
為す、出田かんじん觀心の長者ちやうじやと名けざらんやと此の釈分ふんみよう明に觀心の
ちやうじや
長者に十徳を具足すと釈しゃくせり、所謂引証の文に、分別功德品の
くそく
則是じゆよう仏受用の文を引けり、經文にはきやうもん仏子住此地とあり、此の字
じゆよう
を是の字にうつせり、經行若坐臥ざがの若を及の字にかえたり、又
こ
法師品の文を引けり、所詮しよせん仏子とは法華經の行者ぎやうじやなり、此地と
しよせん
は実相じつそうの大地だいぢなり、經行若坐臥ざがとは法華經の行者ぎやうじやの四威儀いぎの
じつそう
所作しよさの振舞ふるまい、悉くことごと仏の振舞ふるまいなり、我等衆生の振舞ふるまいの当体とうたい、仏の
ふるまい
振舞ふるまいなり、此の当体とうたいのふるまいこそ長者ちやうじやなれ、仍よつて觀心かんじんの
ちやうじや
長者は我等凡夫われらほんぷなり、然るに末法まっぽう當今の法華經の行者ぎやうじやより外に、
われらほんぷ
觀心の長者ちやうじや無きなり、今日蓮等の類いまにちれんい南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきやうと唱え
ちやうじや
奉る者、無上宝緊むぎよく不求自得ちよくじやくの長者ちやうじやに非あらずや、既称しやうし此人為仏の六
むぎよく
字に心を留とどめて案ずべきなり云云。

一多有田宅の事

仰いに云く田宅とは、長者ちやうじゃの財宝なり、所詮しよせん

田と云うは命なり、宅とは身なり、文句もんくの五に田宅をば身命しんみようと

釈しゃくせり、田は米なり、米は命をつぐ、宅は身をやどす是は家なり、

身命しんみよう

の二を安穩あんのんにするより外に財宝は無きなり、法門ほうもんに約すれ

ば田は定・宅は慧なり、仍よつて定は田地でんちの如ごとし、慧は万法の如ごとし、

われらいっしん

でんち

我等一心の田地より諸法しよほうの万法は起れり、法華ほっけ一部方寸知るべし

と釈しゃくして八年の法華も一心いっしんが三千さんぜんと開きたるなり、所詮しよせん田は定な

れば妙の徳、宅は慧の徳なれば法の徳、又は本・迹同門なり、止観しかん

の二法なり、教主きやうしゆしやくそん釈尊本・迹両門の田宅を以つて一切衆生いっさいしゆじやうを

助け給たまえり、田宅は我等衆生われらしゆじやうの色心しきしんの二法なり、法華經ほけきやうに低い

奉りて、南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となえ

奉る時・煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即涅槃そくねはんと体達たいだつするなり、山扁多有田宅

の長者ちようじゃに非あらずや、多有おほくと云う心は心法に具足ぐそくする心数しんずなり、色法に具足ぐそくする所作しよさなり、然しからば多有田宅たたくの文は一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんなり、其そのの故ゆえは一念いちねんは定じやうなり、三千さんぜんは慧えなり、既すでに釈いわに云く、田宅たたくは別べつ譬ひなり、田たは能よく命いのちを養やしなう、禪定ぜんじやうの般若はんにやを資すけするに譬たとう、宅たくは身みを栖すます可べし、実境じつきやうの智ちの所託しよたくと為なるに誓ちかう云云、此この釈しやく分明ぶんめいなり、田宅たたくは身命しんみやうなり、身命しんみやうは即すなわち南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうなり、此この題目だいもくを持たち奉たてまつる者は宝多有田宅たたくの長者ちようじゃに非あらずや、今末法いままっぽうに入いつて日蓮等にちれんの類たぐひ・多有田宅たたくの本主ほんしゆとして如説修行によせつしゆぎやうの行者ぎやうじゃなり云云。

一 等一大車いっだうしやの事

仰いに云いく此この大車だうしやとは直至道場じきしどうじやうの

大白牛車だいびやくこしやにして其その疾はやきこと風の如ごとし、所詮しよせん南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうを

等一大車いっだうしやと云いふなり、等とと云いふは諸法実相しよほうじつそうなり、一いっとは唯有一乘ゆいいういちじやう

法なり、大とは大乗なり、車とは一念三千なり、仍って釈には

等の字を子等車等と釈せり、子等の等と如我等無異の等とは同な

り、車等の等は平等大慧の等なり、今日蓮等の類い・南無

妙法蓮華經と唱え奉る者は男女・貴賤共に無上宝聚・不求自得

の金言を持つ者なり、智者愚者をきらわず共に即身成仏なり云

云、疏の五に云く一に等子二に等車・子等しきを以ての故に則ち

心等し、一切衆生等しく仏性有るに譬う、仏性同じきが故に

等しく是れ子なり、第二に車等とは法等しきを以ての

故に仏法に非ざることを無し、一切法皆摩訶えんなるに誓う、摩訶

えん同じきが故に等しく是れ大車なり、而して各賜と言うは各々

本習に随う、四諦六度無量の諸法・各各旧習に於て眞実を開示す、

旧習同じからず故に各と言う、皆摩訶えんなり故に大車と言う云

云。

一其車高広の事

仰に云く此の車は南無妙法蓮華經なり、

すなわ われらしめじよう

即ち我等衆生の体なり、法華一部の総体なり、高広とは仏知見

なり、されば此の車を方便品の時は諸仏智慧と説き其の智慧を

じんじんむりよう

しょうたん

ほうべん

しょぶつ ちえ

と そ ちえ

ここ

甚深無量と称歎せり、歎の言には甚深無量とほめたり、爰には

其車と説いて高広とほめたり、されば文句の五に云く其車高広の

によらい

ちけん しんえん

たと

よこしま ほんかい

へんざい

あまね

下は如来の知見深遠なるに譬う、横に法界の辺際に周く・堅に

さんたい

しゅじよう

ゆえ

しよせん

によらい

いっさい

三諦の源底に徹す故に高広と言うなりと、所詮此の如来とは一切

しゅじよう

すで

しよほうじっそう

ちけん

しきしん

衆生の事なり既に諸法実相の仏なるが故なり、知見とは色心の

二法なり知は心法・見は色法なり、色心二法を高広と云えり、高

そく

こ

すなわ

なむ みようほうれんげきよう

広即本・迹二門なり此れ即ち南無妙法蓮華經なり云云。

一是朽故宅属干一人の事 仰に云く此の文をば文句の五に云く出

いわ

もんく

いわ

火の由^{よし}を明す文、此の宅とは三界^{さんがい}の火宅な

り、火と云うは煩惱ぼんのうの火なり、此の火と宅とをば属そく于一人として

しゃかいちぶつ

りやく

みだ

やくし

だいにち

しよぶつ

くご

あら

釈迦一仏の御利益なり、弥陀・薬師・大日等の諸仏の救護に非ず、

きようしゅしゃくそんいちぶつ

けどう

ただわれひとり

のういくご

これ

教主釈尊一仏の御化導なり、唯我一人・能為救護とは是なり、

そくう

かさ

だいば

いわ

此の属于一人の文を重ねて、五巻提婆品に説いて云く観二

さんぜんだいせんせかい

ないし

けし

ぼさつ

しんみよういつしよ

三千大千世界一乃至無レ有下如芥子許非是菩薩捨二身命一処上

しゅじよう

みようらくだいし

そくう

きようもん

しゃく

為二衆生一故文、妙樂大師・此の属于一人の經文を釈する時

いわ

ことごとちようじゃ

いっさいみなしか

いっさいしゅじよう

・記の五に云く、咸く長者に歸す・一一番・一切皆然なりと判

ぜり、既に咸歸長者と釈して、法界に有りとある一切衆生の受

くのう

しゃくそん

ちようじゃ

しゃく

いっしきいっこういっさい

くる苦惱をば、釈尊一人の長者に歸すと釈せり、一色一香一切

みなしか

ほっかい

ひけらくよう

ていたらく

みなむじよう

皆然なりとは、法界の千草万木・飛華落葉の為体、是れ皆無常

せんめつ

ぶつどう

そくう

りやく

いっさい

遷滅の質と見て仏道に歸するも、属于一人の利益なり、此

りやく

ほんげん

なむ みようほうれんげきよう

ないしろう

の利益の本源は南無妙法蓮華經の内証に引入れしめんが為な

り、所詮しよせん末法まっぽうに入いつて属そく于一人ひとりの利益りやくは日蓮にちれんが身みに当あたりたり、
日本にほん国こくの一切いっさい衆生しゆじやうの受うくる苦惱くのおうは、悉ことごとく日蓮にちれん一人ひとりが属そく于一人ひとりな
り、教主きやうしゆ釈尊しやくそんは唯我ただわれ一人ひとり・能為のうい救護くご、日蓮にちれんは一人ひとり能為のうい救護くごに云
云もんく、文句もんくの五いに云いく、是朽故宅そくわ属そく于一人ひとりの下しも、第二いちげに一偈いちげ有あり、
失火よしの由よしを明さす、三界さんがいは是れ仏この化応けおうの処ほ発心はつしん已来このかた誓しかたつて度脱どだつせ
んと願ゆえう、故そくに属そく于一人ひとりと云いうと、此この釈はつしんに発心このかた已来せいがんと誓願せいかん度脱どだつの
文あににちれん、豈あ日蓮にちれんの身みに非あらずや云云。

一諸鬼神等しよきじん揚声ようしやう大叫だいきやうの事

仰いに云いく諸鬼神等しよきじんと云いうは親類しんるい

部類等ぶるいを鬼神きじんと云いうなり、我等われら衆生死しゆじしたる時とき・妻子さいし・眷属けんそくあ

つまりて悲歎ひたんするを揚声ようしやう大叫だいきやうとは云いうなり、文句もんくの五いに云いく諸

鬼神等きじんの下しも・第四だいに一行半いっけうはんは被燒あの相さうを明さす、・或云あるいく親属しんそくを

鬼神きじんと為なし・哭泣こくきゆうを揚声ようしやうと為なすと。

いちじょう

一乗此宝棄直至道場の事

仰に云く此の経文は我等衆生

の煩惱即菩提・生死即涅槃を明せり、其の故は文句の五に云く、

此の因易ること無きが故に直至と云う、此の、釈の心は爾前の心

は煩惱を捨てて生死を厭うて別に菩提涅槃を求めたり、法華経の

意は煩惱即菩提・生死即涅槃と云えり、直と即とは同じ事なり、

所詮日蓮等の・類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者の、住处即

寂光土と心得可きなり、然れば此の実乗に乗じて、忽ちに妙覺

極果の位に至るを直至道場とは云うなり、直至と云う文の意は、

四十二位を爰にて極めたり、此の直の一字は、地獄即寂光・

餓鬼即寂光土なり、法華経の行者の住处、山谷曠野なりとも、

直至道場なり、道場とは究竟の寂光なり、仍って乗此宝乗の

上の乗は法華の行者、此の品の意にては中根の四大声聞なり、

そう いっさいしゅじょう

まっぽう

にちれん

たぐ

惣じて一切衆生の事なり、今末法に入つては日蓮等の類いなり、

だいびやくしや

みょうほうれんげきやう

しか

宝乗の乗の字は太白牛車の妙法蓮華経なり、然れば上の乗は能

しよじやう

れんげ

しやか

たほう

しよぶつ

乗・下の乗は所乗なり、宝乗は蓮華なり、釈迦・多宝等の諸仏

こ だいば

かき

も、此の宝乗に乘じ給えり、此れを提婆品に重ねて説く時・若在

ぶつぜんれんげしやう

こ

かき

仏前蓮華化生と云云、釈迦・多宝の二仏は我等が己心なり、此の

こしん

ほけきやう

あ たてま

じやうぶつ

あら

こしん

しやか

己心の法華経に値い奉つて成仏するを顕わさんとして釈迦・

たほう

びやうざ

じきしどうじやう

あら

たま

多宝・二仏・並座して乗此宝乗・直至道場を顕わし給えり、此

の乗とは車なり、車は蓮華なり、此の蓮華の上の妙法は、我等

れんげ

れんげ

みょうほう

われら

が生死の二法・二仏なり、直至の至は此れより彼へいたるの至る

しやうじ

じきし

こ

いた

には非ず住处即寂光と云うを至とは云うなり、此の宝乗の宝は

あら

じゅうしよそくじやつこう

すなわ

まっぽう

ようほう

七宝の大車なり、七宝即ち頭上の七穴・七穴即ち末法の要法・

しっぽう

しっぽうすなわ

すなわ

まっぽう

ようほう

南無妙法蓮華経是なり、此の題目の五字、我等衆生の為には、

なむみょうほうれんげきやうこれ

だいもく

ごじ

われらしゅじやう

ため

南無妙法蓮華経是なり、此の題目の五字、我等衆生の為には、

三途の河にては船となり、紅蓮地獄にては寒さをのぞき、焦熱

地獄にては涼風となり、死出の山にては達華となり、渴せる時は

水となり・飢えたる時は食となり・裸かなる時は衣となり、妻と

なり、子となり、眷属となり、家となり、無窮の応用を施して

一切衆生を利益し給うなり、直至道場とは是なり、仍って此の

身を取りも直さず寂光土に居るを直至道場とは云うなり、直の

字心を留めて之を案ず可し云云。

一若人不信毀謗此經則新一切世間・仏種の事 仰に云く此の

經文の意は小善成仏を信ぜずんば一切世間の仏種を断ずと云

う事なり、文句の五に云く、今經に小善成仏を明す、此れは

縁因を取つて仏種と為す、若し小善の成仏を信ぜずんば、即と

一切世間の仏種を断ずるなり文、爾前經の心は小善成仏を明さ

ざるなり、法華經の意は一・華・一香の小善も法華經に歸すれ
ば大善となる、縦い法界に充滿せる大善なりとも此の經に値わ
ずんば善根とはならず、譬えば諸河の水・大海に入りぬれば鹹の
味となる、入らざれば本の水なり、法界の善根も、法華經へ歸入
せざれば善根とはならざるなり、されば釈に云く、断一切仏種と
は淨名には煩惱を以て如来の種と為す、此れ境界性を取るな
り、此の釈の心は淨名經の心ならば我等衆生の一曰一夜に
作す所の罪業・八億四千の念慮を起す、余經の意は皆三途の業因
と説くなり、法華經の意は、此の業因・即ち仏ぞと明せり、され
ば煩惱を以て如来の種子とすと云うは此の義なり、此の
淨名經の文は、正しく文在爾前・義在法華の意なり、此の
境界性と云うは、末師釈する時、能生煩惱・名境界性と判

ぜり、我等衆生の眼耳等の六根に妄執を起すなり、是を

きようかいしよう

境界性と云うなり、権教の意は此の念慮を捨てよと説けり、

こんきよう

ほけきよう

法華經の心は、此の境界性の外に、三因仏性の種子なし、

きようかいしよう

さんいんぶつしよう

しゅし

こすなわさんじんえんまん

是れ則ち三身円満の仏果となるべき種性なりと説けり、此の種性

ぶつかけ

こんきよう

を、権教を信ずる人は之を知らず此の経を謗るが故に、凡夫即

これ

そし

ゆえ

ほんぶ

極の義をも知らず、故に一切世間の仏種を断ずるなり、されば

ゆえいつさいせけん

ぶつしゅ

ろくどう

しゅじよう

さんいんぶつしよう

ぐそく

ついに

さんじんえんまん

あらわ

六道の衆生も三因仏性を具足して、終に三身円満の尊容を顕す

しゅじよう

さんいんぶつしよう

ぐそく

ついに

さんじんえんまん

あらわ

可き所に、此の経を謗するが故に、六道の仏種をも断ずるなり、

ゆえ

ろくどう

ぶつしゅ

されば妙楽大師云く、此の経は遍く六道の仏種を開す、若し此

みようらくだいしいう

あまねくろくどう

ぶつしゅ

も

の経を謗するは、義・断に当るなりと、所詮日蓮が意は一切の言

ほう

あまねくろくどう

ぶつしゅ

いつさい

じゅつかい

は十界をさす、此の経を謗するは十界の仏種を断ずるなり、さ

じゅつかい

ほう

じゅつかい

ぶつしゅ

れば、誹謗の二字を大論に云く、口に謗るを誹と云い、心に背く

ひぼう

だいろん

い

そし

い

そむ

を謗と云うと、仍よつて色心三業に經へて、法華經を謗ほうじじ奉たてまつる人は
にゆうあびごくうたがい
入阿鼻獄い疑い無きなり、所謂弘法・慈覺・智証・善導・法然・
だるま
達磨等の大謗法の者なり、今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華經と
とな ためまつ あに しょうぶつ ぶつしゅ
唱え奉る、豈二世の諸仏の仏種を継ぐ者に非ずや云云。

一捨惡知識親近善友の事 仰いに云く惡知識とは在世ざいせにては

善星・瞿伽利・提婆等ぜんしゅう ぐきやり たいば是なり、善友とは迦葉・舍利弗・阿難・
ぜんしゅう ぐきやり たいば これ ぜんゆう かしよう しゃりほつ あなん

目連等もくれん是なり、末法まっぽう当今とうこんに於て惡智識あくちしきと云うは法然・弘法・慈覺
これ まっぽうとうこん おい あくちしき ほうねん こうぼう じかく

・智証等の權人謗法の人人ごんじん ほうぼう ひとびとなり、善智識ぜんちしきと申もうすは日蓮等の類たぐいの
ちしゅう ごんじん ほうぼう ひとびと ぜんちしき もう にちれん たぐい

事なり、惣そうじて知識ちしきに於て重重こ之れ有り、外護げごの知識・同行どうこうの
そう ちしき おい こ げご ちしき どうこう

知識・実相じつそうの知識ちしき是なり、所詮しよせん実相じつそうの知識ちしきとは所謂い南無
ちしき じつそう ちしき これ しよせん じつそう ちしき いわゆる なむ

妙法蓮華經是なり、知識ちしきとは形をしり、心をしるを云うなり、
みょうほうれんげきやうこれ ちしき ちしき ちしき

是れ即すなわち色心の二法なり、謗法ほうぼうの色心を捨しよてて法華經の妙境・
こ すなわ ちしきん ほうぼう ちしきん ほうぼう ちしきん ほうききやう

妙智みょうちの色心しきしんを顕あらわすべきなり、悪友あくゆうは謗法ほうぼうの人人ひとびとなり、善友ぜんゆうは日蓮にちれん

等の類たぐいなり。

一無上宝聚不求自得むじょうほうじゅふぐじとくの事 仰いに云く、此むじょうほうじゅの無上宝聚おに於て一

には釈尊しゃくそんの因行いんぎょう・果徳かとくの万行まんぎょう・万善ばんぜんの骨髓こつずいを宝聚ほうじゅと云うなり、

二には妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの事なり、不求ふぐとは中根しやうもんの四大声聞しやうもんは此かくの

如ごとき宝聚ほうじゅを任運自在にんうんじざいと得たり此実我子我実其父この故なり、総じて

は一切衆生いっさいしゆじやうの事なり、自得じとくと云うは自じは十界じゅうかいの事なり、此これは

自我得仏来じがとくぶつらいの自じと同じ事なり、得も又同じ事なり末法まつぽうに入つては

自得じとくとは日蓮等にちれんの類たぐいなり、自じとは法華經ほけきやうの行者ぎやうじや、得だいとは題目だいもく

なり、得の一字しには師弟していを含みたり、与ようると得るとの義ぎを含め

り、不求ふぐとは仏法ぶつぽうに入るには修行しゆぎやう・覚道かくどうの辛勞しんらうあり、釈迦如来しやくかにやらい

は往來娑婆しやば八千反の御辛勞ごしんらうにして求め給たまう功德くどくなり、さて今の

釈迦牟尼しゃかむにぶつ仏たまと成り給えり、法華經ほけきようの行者ぎようじやは求めずして此この功德くどくを受得じゅとくせり仍よつて自得じとくとは説いかれたり、此この自いちの字ねんは一念いちねんなり得えは三千さんぜんなり、又自さんぜんは三千・得いちねんは一念いちねんなり、又た自さんぜんは自いちねんなり得えは他たなり、総じて自得じとくの二字ふたごに法界ほっかいを尽くせり、所詮しよせん此この妙法蓮華經みようほうれんげきようを自いっしんより得えたり、自しやくそんとは釈尊しやくそんなり、釈尊しやくそんは即すなわち我いっしんが一心いっしんなり、一心いっしんの釈迦しゃかより受得じゅとくし奉たてまつる南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようなり、日蓮にちれんも生年なま三十二さんじふににして自得じとくし奉たてまつる題目だいもくなり云云。

一 藥草やくそう喻品ゆほんの事

仰いに云いく藥やくとは是ぜ好こう良藥りようやくの南無なむ

妙法蓮華經みようほうれんげきようなり、妙法みようほうを頂上ちやうじやうにいただきたる草くさなれば、藥やくに

非あらずと云いふ事ことなし、草くさは中根ちやうこんの聲聞しやうもんなれども、惣そうじては一切いっさい

衆生しゆじやうなり、譬たとえば土器どきに藥やくをかけたるが如ごとし、我等われら衆生しゆじやう・父母ふぼ

果縛かばくの肉身なむに南無妙法蓮華經なむみようほうれんげきようの藥やくをかけたり、煩惱ぼんのう即すなわち菩提ぼだい・

生死しやうじそく即涅槃ねはんは是これなり云云、此この分ぶんを教たとえうるを喩もつとは申もうすなり、

釈いわに云いく、喩たとえとは曉ぎやうくん訓くんなりと、提婆だいば・竜女りゆうにょの畜生ちくしやう・人間にんげんも、

天帝らかん・羅漢ほさつ・菩薩等こことも、悉ことごとく藥草やくそうの仏ぶつに非あらずと云いう事ことなし、末法まつぽう

當今とうこんの法華ほっけの行者ぎやうじやの日蓮等にちれんの類たぐい、藥草やくそうにして日本にほん國こくの一切いっさい

衆生しゆじやうの藥王やくおうなり云云。

一現世安穩げんせあんのん・後生善處ごしやうぜんしよの事こと 仰いに云いく所詮しよせん此この妙法蓮華經みやうほうれんげきやうを

聽聞ちやうもんし奉たてまつるを現世安穩げんせあんのんとも後生善處ごしやうぜんしよとも云いえり、既すでに上うへに聞き是こ

法已ほふと説とくけり聞きは名字みやうじそく即すなはち凡夫ぼんぷなり妙法みやうほうを聞き奉たてまつる所ところにて

即身成仏そくしんじやうぶつと聞きくなり、若にや有能持やくうのうじそく即持ぶっしん仏身ぶつしんとは是これなり、聞きく故ゆゑに

持たてまつち奉たてまつるの故ゆゑに三類さんるいの強敵かうてき來きる來きるを以もつて現世安穩げんせあんのんの記文きもん顯あらわれた

り、法華ほっけの行者ぎやうじやなる事こと疑うたがい無なきなり、法華ほっけの行者ぎやうじやはかかかる大難だいな

に値あうべしと見みえたり、大難だいなに値あうを以もつて後生善處ごしやうぜんしよの成仏じやうぶつは

決定せり是れ豈現世にして安穩なるに非ずや、後生善処は提婆

品に分明に説けり、所詮現世安穩とは法華經を信じ奉れば三途

八難の苦をはなれ善惡上下の人までも皆教主釈尊・同等の仏果

を得て自身本覺の如来なりと顕す、自身の当体・妙法蓮華經の

藥草なれば現世安穩なり、爰を開くを後生善処と云うなり、

妙法蓮華經と云うは妙法の藥草なり、所詮現世安穩は色法・

後生善処は心法なり、十界の色心・妙法と開覺するを現世安穩

・後生善処とは云うなり、所詮法華經を弘むるを以て現世安穩・

後生善処と申すなり云云。

一皆悉到於一切智地の事 仰に云く一切智地と云うは法華經な

り、譬えば三千大千世界の土地・草木・人畜等・皆大地に備りた

るが如くなり、八万法蔵・十二部經・悉く法華に歸入せしむるな

り、皆悉かいしつの二字をば善人ぜんにんも悪人あくにんも迷まよも悟いつさいしじゅうも一切衆生の悪業あくごうも
善業ぜんごうも其その外やくし薬師だいにち・大日みだなら・弥陀じぞう並びに地蔵かんのん・観音よこしまじゅつぼう・横じゅうかいに十方・
豎さんぜに三世有りとある諸仏しよぶつの具徳しよぼさつ・諸菩薩しよぼさつの行徳そう・惣じゅうかいじて十界の
衆生しじゅうの善惡ぜんあく・業作等を皆悉かいしつと説けり、是これを法華經ほけきように歸入きにゆうせしむ
るを一切智地いつさいちちの法華經ほけきようと申もうすなり、されば文句もんくの七に云いわく皆悉かいしつ到
於一切智地いつさいちちとは、地ちとは実相じつそうなり、究竟くきようして二に非あらず故ゆえに一と
名なくるなり、其その性こうはく広博こうはくなり、故ゆえに名けて切なと為なす、寂じやくにして
常照ゆえなり、故ゆえに名けて智なと為なす、無住むじうの本より一切いつさいの法ほを立たす、
故ゆえに名けて地ちと為なす、此これ円教えんきようの実説じつせつなり、凡おほそ所説しよせつ有あるは皆みな
衆生しじゅうをして此ちの智地ちちに到いたらしむ云云、此この釈しやくは一切智地いつさいちちの四字
を委くわしく判はんぜり、一いつをば究竟くきようと云いふ切きをば広博こうはくと釈しやくし智ちをば寂而じやくに
常照じやうしやうと云いふ地ちをば無住むじう之本ほんと判はんぜり、然しかるに凡ぼんぬ有所説しよせつは約教やくきようを

指し・皆令衆生は機縁を納るるなり、十界の衆生を指して切
と云い凡有所説を指して、究竟非二故名一也と云えり、一とは
三千大千世界・十方法界を云うなり、其の上に人畜等あるは地
なり、記の七に云く、切を衆に訓ずと文、仍って一切の二字に法界
を尽せりなり、諸法は切なり実相は一なり、所詮・法界実相の
妙体・照而常寂の一理にして十界三千・一法性に非ずと云
う事なし是を一と説くなり、さて三千の諸法の己己に本分なれば
切の義なり、然らば一は妙・切は法なり、妙法の二字・一切の
二字なり、無住之本は妙の徳・立一切法は法の徳なり、一切智地
とは南無妙法蓮華経是なり一切智地・即一念三千なり、今末法
に入って一切智地を弘通するは日蓮等の類い是なり、然るに一と
は一念なり切とは三千なり、一心より松よ桜よと起るは切なり、

是は心法に約する義なり、色法にては手足等は切なり、一身なる
一切なり、所詮色心の二法・一切智地にして南無妙法蓮華經
なり云云。

一此の一切智地の四字

に法華經一部八卷文・句句を収め

たり、此の一切智地とは三諦・一諦・非三非一なり、三智に約す

れば空智なり、さては三諦とは云い難し、然りと雖も三諦・一諦

の中の空智なり、されば三諦に於て三三九箇の三諦あり、先ず空

諦にて三諦を云う時は空諦と呼出だすが仮諦・空諦なるは空諦な

り・不二するは中道なり、三諦同じく此くの如く心得可きなり、

所詮此の一切智地をば九識法性と心得可きなり、九識法性をば、

迷悟不二・凡聖一如なれば空と云うなり、無分別智光を空と云う

なり、此の九識法性とは、いかなる所の法界を指すや、法界と

は十界じゅうかいなり、十界じゅうかい即諸法そくしよほうなり、此の語法ことばの当体とうたい・本有ほんぬの
妙法蓮華經みょうほうれんげきやうなり、此の重まよいに迷しゆじやうう衆生ための為いちぶつげんに、一仏現ぶんべつじて分別
説三いするは、九識本法の都ついでを立出いずるなり、さて終ついに本の九識に
引入そする、夫ほけきやうれを法華經とは云うなり、一切智地いっさいちちとは是これなり、
一切智地いっさいちちは我等衆生の心法われらしゆじやうなり心法すなわ即ち妙法みょうほうなり一切智地いっさいちちとは
是これなり云云。

一根莖枝葉の事こんきやうしやう

仰いに云く此の文をば釈いには信戒定慧かいじやうえと云

云、此の釈しやくの心は草木そうもくは此の根莖枝葉こんきやうしやうを以て増長そうちやうと云うなり、
仏法修行ぶつぽうしゆぎやうするも又斯かくの如ごとし、所詮しよせん我等衆生われらしゆじやう・法華經ほけきやうを信じ
奉たてまつるは根をつけたるが如ごとし、法華經の文ごの如く是名持戒じかいの戒体けたいを
本として、正直捨方便しやうじきしやほうべん・但説無上道たんせつむじやうどうの如ごとくなるは戒なり、法華經ほけきやう
の文相にまかせて、

法華三昧を修するは定なり、題目を唱え奉るは慧なり、所謂法界
悉く生住異滅するは信・己己本分は戒・三世不改なるは定なり、
各各の徳義を顕したるは慧なり、是れ即ち法界平等の根茎杖葉
なり、是れ即ち真如実相の振舞なり、所謂戒定慧の三学・
妙法蓮華経なり、此れを信ずるを根と云うなり、釈に云く三学俱
に伝うるを名けて妙法と曰うと云云。

一根茎枝葉の事

仰に云く此れは我等が一身なり、根とは心

法なり茎とは我等が頭より足に至るまでなり、枝とは手足なり、

葉とは毛なり、此の四を根茎枝葉と説けり、法界三千此の四を

具足せずと云う事なし、是れ即ち信戒定慧の体にして実相一理の

南無妙法蓮華経の体なり、法華不信の人は根茎杖葉ありて増長

あるべからず枯塙の衆生なるべし云云。

ここうしゅじょう
一枯塙衆生の事

仰に云く、いわけ法華經ほけきようを持ち奉る者は、たてまつ枯塙ここうの

しゅじょう

5

衆生に非ざるなり、

既に法華經の種子を受持し奉る

又

謗ほう法ほう不ふ信しん

酒の人は下種げしゅ

無き故に枯塙ゆえ ここう

の衆生 しゅじょう

なり、されば、
妙楽みょうらく

大師だいしの云いく、余教よきょうを以て種なと為さず文。

一等雨法ほうう雨の事

仰に云く等とは平等の事なり、善人・

悪人 あくにん

二乗 にじょう

● 聞提

正早・邪見等の者にも、

妙法 みょうほう

の雨を惜おしまず

びょうどう
平等

に

からすと云う事なり、されば法の雨を雨すと云う時は、

大覚世尊

ふ
ら
し
て

に成り

り給^{たま}えり、さて、

の雨ふりてとよむ時は、

本より実相平等の法雨

は、
常住本有

の雨なれば、今始めてふ

るべきに非ず、されば、

諸法実相

を、
譬^ひ喩^ゆ品の時は風月に譬^{たと}えた

り、
妙楽 みょうらく

だいし
大師は何ぞ隠

隠れ何ぞ顕れん

と釈せり、
実相の法雨は

とよむ時は、釈迦如来の平等の慈悲なり、さて、ひとしきとよ

む時は、平等大慧の妙法蓮華經なり、ひとしく法の雨をふらす

とは、能弘につけたり、ひとしき法の雨ふり、にりと読む時は、

所弘の法なり、所詮法と云うは、十界の語法なり、雨とは十界

の言語・音声の振舞なり、ふるとは自在にして地獄は洞燃猛火、

乃至仏界の上の所作音声を、等雨法雨とは説けり、此の等雨法雨

は法体の南無妙法蓮華經なり、今末法に入つて、日蓮等の類い

の弘通する題目は、等雨法雨の法体なり、此の法雨・地獄の衆生

・餓鬼・畜生等に至るまで同時にふりたる法雨なり、日本国の

一切衆生の為に付属し給う法雨は題目の五字なり、

所謂日蓮建立の御本尊・南無妙法蓮華經是なり云云、方便品に

は本末究竟等と云えり、譬喩品には等一大事と云えり、此の等の

字を重ねて説かれたり、・或は如我等無異と云えり、此の等の字
は宝塔品の如是如是と同じなり、所詮等とは南無妙法蓮華經な
り、法雨をふらすとは今身より仏身に至るまで打つや否やと云う
受持の言語なり云云。

一等雨法雨の事

仰に云く此の時は妙法実相の法雨は十界

三千・

下は地獄・

上は非想非非想まで横に十方・

豎に三世に

亘つて妙法の功德をふるを等とは云うなり、さてふるとは一切

衆生の

色心・

妙法蓮華經と三世常住

ふるなり云云、一義に

云く、此の妙法の雨は九識本法の法体なり、然るに一仏現前し

て説き出す所の妙法なれば、法の雨をふらすと云うなり、其の故

は、ふらすと云うは・上より下へふるを云うなり、」のつて

従果向因の義なり、仏に約すれば、第十の仏見より九界へふらす、

法ほつ体たいにては・ふる処ところも・ふらす処ところも、真しん如にょの一理なり識分にて
は八識へふり下りたるなり、然しからば今日蓮等の類たぐい南無なむ
妙法蓮華經を日本にほん国こくの一切衆生の頂上ちやうじやうにふらすを法の雨をふ
らすと云うなり云云。

一如けこく從飢国来忽遇大王膳だいおうの事 仰いわに云く此の文は中根の四大

声聞しょうもん・法華ほつに

来れる事、譬たとえばうえたる国より来りて大王だいおうのそ

なえに値あうが如ごとくの歡喜かんきなりと云えり、然しからば此の文の如ごとくなら

ば法華ほつ已前いぜんの人は餓鬼界がきの衆生しゅじやうなり、既すでに飢国来けこくと説だいけり、大王だいおう

膳だいいとは醍醐味ごみなり、中根しやうもんの聲聞ほつ・法華ほつに來つて一乘いちじやう醍醐だいいの法味ほうみ

を得て忽たちまちに法王ほうおうの位ゐに備そなりたり、忽たちまちの字には爾前にぜんの迂廻道の機きに對

して忽そくと云うなり、速疾頓そくしつとん成じやうの義ぎを忽そくと云うなり、仮令たと外用がいようの

八相とを唱となうる事は所化しよけをして仏道ぶつどうに進めんが為なり、所詮しよせん末法まつぽうに

入つては謗法の人人は餓鬼界の衆生なり、此の經に値い奉り・
南無妙法蓮華經に値い奉る事は併ら大王膳たり、忽遇の遇の字
肝要たり、釈に云く、成仏の難きには非ず、此の經に値うをか
たしとすと云えり、不輕品に云く復遇常不輕と云云、嚴王品に
云く生値仏法云云、大王の膳に値いたり、最も以て南無
妙法蓮華經を信受し奉る可きなり、此の經文の如くならば法華
より外の一切衆生はいかに高貴の人なりとも餓鬼道の衆生な
り、十羅刹女は餓鬼界の羅刹なれども法華經を受持し奉る故に
餓鬼に即する一念三千なり、法華へ来らずんば何れも餓鬼飢餓の
苦みなるべし、所詮必ず中根の声聞領解の言に我身を餓鬼に類
する事は餓鬼は法界に食ありと云えども食する事を得ざるなり、
諸法実相の一味の醍醐の妙法あれども終に開覺に能えざる間・

よんじゅうよねん
四十余年食にうえたり云云、一義に云く序品方便より諸法実相の
かんろあらわなむみょうほうれんげきよう
甘露顕れて南無妙法蓮華經あれども広略二重の譬説段まで悟ら
ざるは餓鬼の満満とある食事をくらわざるが如し、所詮日本国の
いっさいしゅじよう
一切衆生は餓鬼界の衆生なり、大王膳とは所謂南無
みょうほうれんげきようこれ
妙法蓮華經是なり、遇の字には人法を納めたり、のつて未に
によけしゅ
如飢須教食と云えり、うえたるとも大王のをしえを待ちて醍醐を
食するが如しと云えり、今南無妙法蓮華經有れども・今身より
ぶっしんいた
仏身に至るまでの受持をうけずんば成仏は之れ有るべからず、
教とは爾前無得道・法華成仏の事なり、此の教をうけずんば
ほけきようどくじゅ
法華經を讀誦すとも大王の位に登る事・之れ有る可からず醍醐は
だいもくごじ
題目の五字なり云云。

だいつうちしやうぶつ
一大通智勝仏十劫坐道場
どうじやうぶつぼう
仏法不現前不得成仏
げんぜんふとくじやうぶつ
道の事
仰に

いわ 云く此経文は一切衆生の本法流転を説かれたり、されば釈にも

るてん

しゅっせいぜん

出世以前と判ぜり、此は大通仏出世し給えども十小劫の間・

だいとう

しゅっせい

たま

いっきよう

一経も説給わずと云う経文なり、仍て仏法も現前せざる故に

たま

きようもん

きようもん

よつ

ぶつぽう

げんぜん

げんぜん

ゆえ

ふとくじようぶつ

不得成仏と云えり、されども釈を見るに出世以前と云う時は、

しゅっせいぜん

きようもん

此の経文は何なる事ぞ此は本法の重を説かれたり、一仏出世す

いちぶつしゅっせい

れば流転門となる、一仏も出世無き時は、本法不思議の体なり、

るてん

いちぶつ

しゅっせい

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

ふしぎ

迷悟もなく、生仏もなく、成仏もなく、不成仏もなきなり、仍つ

めいご

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

じようぶつ

て不得成仏道と云えり、抑も本法と申すは水があつくなり、

ふとくじようぶつ

ふとくじようぶつ

ふとくじようぶつ

ふとくじようぶつ

ふとくじようぶつ

ふとくじようぶつ

ふとくじようぶつ

ふとくじようぶつ

火がつめたくならば流転門なるべし、水はいつもつめたく、火は

るてん

るてん

るてん

るてん

るてん

るてん

るてん

るてん

いつもあつく、地獄は何も火焰・餓鬼はいつも飢渴・其の外・

じごく

じごく

ほのお

がき

けち

けち

けち

けち

万法己己の当位・当位の儘なるを本法の体と云うなり、此の重を

ここ

ここ

ここ

ここ

ここ

ここ

ここ

ここ

説き顕したる経文なり、此の本法の重は法華経なり、権教は

とあらわ

とあらわ

とあらわ

とあらわ

とあらわ

とあらわ

とあらわ

とあらわ

流転なり、此の流転の衆生を本法の重に引入せられんとての仏

の出世なり、其の本法と云うは此の經なり、所詮此の經文本法

とは大通智勝仏と云うは我等衆生の色心なり、十劫と云うは

十界なり、坐道場と云うは十界の住所其の儘道場なり、道場

なれば寂光土なり、法界寂光土にして、十界の衆生悉く

諸法実相の仏なれば一仏現すべきに非ず、迷の衆生無ければ説

く可き法も無し、仍って仏法不現前と云えり、不得成仏道とは

始覺本覺の成仏と云う事も無し、本法不思議の体にして万法

本有なり、之れに依つて釈には出世以前と判ぜり、然らば、其の

本法の体とは、所詮南無妙法蓮華經なり、此の本法の内証に

引入せんが為に、住は四十余年誘引し、終に第五時の本法を

説き給えり、今末法に入つて上行所伝の本法の南無妙法蓮華經

を弘ひろめ奉たてまつる、日蓮・世間にちれん せけんに出世しゅつせすと云えども、三十二歳までは、

此だいもくの題目なを唱となえ出さざるは、仏法ぶつぽう不現前げんぜんなり、此みょうほうれんげきようの妙法蓮華經

を弘ひろめて、終ついには本法ないしようの内証いんにゆうに引入いんにゆうするなり日蓮・豈大通にちれん あにだいつう

智勝ちしようぶつ仏あらに非なずや、日本にほんこくの一切衆生いっさいしゅじようこそ十劫坐道場どうじようとて十界じゅつかい

其そのままの儘・本法なの南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきよう いんにゆうへ引入いんにゆうするなり、所詮しよせんしんじん信心しんじんを出

だして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる可たてまつき者べなり云云。

一貧人ひんじん見此珠其心大歡喜かんきの事 仰いに云いわく此珠いちじようとは一乘無価いちじようの

宝珠ほうしゅなり、貧人ひんじんとは下根げこんの声聞しょうもんなり、惣そうじて一切衆生いっさいしゅじようなり、

所詮しよせん末法まつぽうに入まっつて此珠しよせんとは南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきようなり、貧人ひんじんとは

日本にほんこくの一切衆生いっさいしゅじようなり、此だいもくの題目なを唱となえ奉たてまつる者は心大歡喜かんきせり、

されば見宝塔けんほうとうと云う見たまと此珠たまとは同じ事しよせんなり所詮たま此珠たまとは我等われら

衆生しゅじようの一心いっしんなり、一念三千いちねんさんぜんなり此あの經たてまつに値あい奉たてまつる時いちねんさんぜん、一念三千

と開くを珠たまを見るとは云うなり、此の珠は広く一切衆生の心法いつさいしゆじょう

なり此の珠は体中にある財用なり、一心いつしんに三千具足の財を具足ぐそくせ

り、此の珠たまを方便品ほうべんにして諸法実相しよほうじつそうと説き、譬喩品ひゆほんにては

だいびやくごしや

大白牛車・三草二木・五百由旬ひやくゆじゆんの宝塔ほうとう、共に皆一珠みなの

みようほうれんげきよう

妙法蓮華經の宝珠なり、此の經文色心きようもんしきしんの実相じつそう歡喜かんきを説けり・見

たま

此珠の見は色法なり、其心大と云うは心法なり、色心共に歡喜かんきな

れば大歡喜かんきと云うなり、

所詮此珠しよせん たまと云うは我等衆生の心法なり、

よ いちねんさんぜん

仍つて一念三千の宝珠ほうしゆなり、所謂妙法蓮華經なり、今末代まつだいに入

つて此の珠たまを顯あらわす事は日蓮等にちれんの類たぐいなり

所謂未曾有の大曼荼羅いわゆるみそう まんだらこ

まさ

そ正しく一念三千の宝珠ほうしゆなれ、見の字は日本にほんの一切衆生いつさいしゆじょう、広

くは一間浮提えんぶだいの衆生しゆじょうなり、

然りと雖も其心大歡喜しか いえど かんきと云う時は、

にちれん

日蓮が弟子・檀那等の信者をさすなり、所詮煩惱即菩提・生死しよせんぼんのうそく ぼだい しょうじそく即

捏槃たいたつと体達たいだつする、其心大歡喜かんきなり、されば、我等衆生われらしゅじょう・五百塵点じんてん
の下種げしゅの珠たまを失うしないて、五道ろくどう・六道りんねに輪廻りんねし・貧人ひんじんとなる、近くは
三千塵点さんぜんじんてんの下種げしゅを捨てて備輪諸道しよせり、之れこに依よつて貧人ひんじんと成る、
今・此たまの珠しやくそんを釈尊あに値たてまつい奉りて見付け得て本の如ことく取り得たり、
此ゆえの故に心大歡喜かんきせり、末法まつぼう当今とうこんに於いて妙法蓮華經みょうほうれんげきの宝珠ほうしゅを
受持じゅじし奉りて、己心こしんを見るに、十界互具じゅつかいご・百界千如ひゃつかいせんによ・一念三千いちねんさんぜん
の宝珠ほうしゅを分明ふんみょうに具足ぐそくせり、是れ併しかしながまつぼうら末法の要法ようほうたる題目だいもくなり云
云。

一如甘露見灌かんろけんかんの事

仰いわに云く甘露かんろとは天上てんじょうの甘露かんろなり、さ

れば妙樂大師みょうらくだいし云く実相じつそう常住じょうじゅうは甘露かんろの如ごとし是れ不死この藥云云、

此しやくの釈しやくの心は諸法実相しよほうじつそうの法体ほつたいをば甘露かんろに譬たとえたり、甘露かんろは不死この

藥と云えり、所詮しよせん妙とは不死の藥なり、此の心は不死とは法界ほっかいを

指すなり、其そのの故は森羅三千の万法を不思議ふしぎと歎たんじたり、

生住異滅しょうじゅういめつの当位当位・三世常恒さんぜじょうこうなるを不死と云う、本法の徳と

して水はくだりつめたく火はのぼりあつし、此これを妙と云う、

此これ即すなわち不思議ふしぎなり、此の重を不死とは云うなり、甘露かんろと妙とは

同じ事なり、然しからば法界の儘ままに闇さしおいて妙法みょうほうなりと説くを本法と

も甘露かんろとも云えり、火は水にきゆる本法にして不死なり、十界じゅうかい

己こ己この当位当位の振舞ふるまい・常住じょうじゅう本有ほんぬなるを甘露かんろとも妙法みょうほうとも

不思議ふしぎとも本法とも止観しかんとも云えり、所詮末法しよせんまつぽうに入いつて甘露かんろとは

南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうなり、見灌けんかんとは受持じゆじの一行なり云云。

一若有惡人以不善心等ふぜんしんの事 仰いわに云く惡人あくにんとは在世ざいせにては

提婆瞿伽利等だいばくきやりなり、不善心ふぜんしんとは惡心あくしんを以て仏を罵詈めりし奉たてまつる事を説

くなり、滅後めつこには惡人あくにんとは弘法こうほう・慈覺じかく・智証ちしやう・善導ぜんどう・法然等ほうねん是これな

り、不善心ふぜんしんとは謗言ぼうげんなり此の謗言ぼうげんを書写しよしゃしたる十住心等じゅうじゅう
せんちやくしゅう
選択集せんたくしゅう等の謗法ぼうぼうの書どもなり、さて末法まつぼうに入いて善人ぜんにんとは日蓮等にちれん
の類たぐいなり善心ぜんしんとは法華弘通ほっけくつうの信心しんじんなり所謂南無妙法蓮華經いわゆるなむみょうほうれんげきやう
是なり云云。
これ

一如是如是にょぜこの事

仰いに云いく釈いに云いく法相ほつそうの是ごとに如こんじやうし根性こんじやうの

是にに如ほつそうするなり文、法相ほつそうの是にに如しよほうじつそうすとは諸法実相しよほうじつそうを重かさねて如是にょぜと

説しかかれたり、根性こんじやうの是にに如ほつかいすとは、九法界くくはうかいを説しかかれたり、然しかれ

ば機法きき共に釈迦如来しやくかにょらいの所説しよせつの如ごとく眞実しんじつなりと証しやうみやう明たまし給たまえり、始

の如是にょぜは教一開会かいえなり次の如是にょぜは人・一開会かいえなり、權教こんきやうの意ごは

諸法しよほうを妄法しやうほうときらいし隔きやくべつ別不融べつふじゆうの教おなり、根性こんじやうに於おいては性欲しやうよく

不同ふどうなれば種種しゆじゆに説法せつぼうし給たまえり、仍よつて人も成仏じやうぶつせず、今の經

の心しよほうじつそうは諸法実相しよほうじつそうの御經じゆつかいびやうどうなれば十界平等じゆつかいびやうどうに授さずくる所の妙法みやうほうなり、

根性は不同なれども同じく如是性の一性なり、所詮今末法に入

つての如法相是は塔中相承の本尊なり如根性は也と云うは

十界宛然の尊像なり法相は南無妙法蓮華經なり、根性は日本国

の一切衆生広くは一閻浮提の衆生なり云云。

一是真仏子住淳善地の事 仰に云く末法当今に於て釈迦如来

の真実の御子と云うは法華經の行者なり、其の故は上の文に能

於来世読持此經と説けり来世とは末法なり、読むと云うは法華經

の如説修行の行者なり、弘法・慈覚・智証・善導・法然等読み

て云く第三の劣・戲論の法・捨閉閣抛・理同事勝等と読むは謗法

にして三仏の御舌を切るに非ずや何に況や持たんをや、伝教

大師云く法華經を讃むると雖も還つて法華の心を死すとは是な

り、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る人は、読持此經

の人なり、豈あに是真ぜしん仏子ぶつしに非あらずや淳善地じゅんぜんちは寂光土じやくこうどに非あらずや、

是真ぜしん仏子ぶつしの子の字じは十界じゅっかいの衆生しゅじやうなり、所詮しよせん此の子の字はは法華經ほけきやう

の行者ぎやうじやに限る、悉しつぜ是吾子この子は孝不孝ふこうを分別ぶんべつせざる子なり、

我等われら皆似みな仏子ぶつしの子は中根しやうちんの声聞しやうもん仏子ぶつしに似たりと説かれたり、為

治狂子故くわんの子は、久遠くおんの下種げしゆを忘れたれば物にくるう子なり、

仍よつて釈尊しやくそんの御子みこにも物にくるう子もあり、不孝ふこうの子もあり、

孝養こうやうの子もあり、所謂いわゆる法華經ほけきやうの行者ぎやうじや眞実しんじつの釈尊しやくそんの御子みこなりと、

釈迦しやか・多宝たほう分身ふんじん三千三百萬億那由他さんさくさんびやくなんないうたの世界せかいに充滿じゆうまんせる諸仏しよぶつの

御前おんまえにして孝不孝ふこうの子を定めをき給たまえり、父の業をつぐを以て子

とせり、三世さんぜの諸仏しよぶつの業とは南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうこれ是なり、法師品ほうしほんに

行如來事にやらいと説けり云云、法華經ほけきやうは母なり釈尊しやくそんは父なり我等われら衆生しゅじやう

は子なり、無量義經むりやうぎきやうに云く諸仏しよぶつの國王こくおうと是の經の夫人ふじんと和合わがうして

共に是の菩薩の子を生子給う文、菩薩とは法華經の行者なり、法師品に云く在家・出家行菩薩道云云。

一非口所宣非心所測の事

仰に云く非口所宣は色法・非心

所測は心法なり、色心の二法を以て大海にして教化したる衆生を宣測するに非ずと云えり、末に至つては広導諸群生と説かれたり云云。

一不染世間法如蓮華在水從地而涌出の事

仰に云く、世間法

とは全く貪欲等に染せられず、譬えば蓮華の水の中より生ずれども淤泥にそまざるが如し、此の蓮華と云うは地涌の菩薩に譬えたり、地とは法性の大地なり所詮法華經の行者は蓮華の泥水に染まざるが如し、但だ唯一大事の南無妙法蓮華經を弘通するを本とせり、世間の法とは國王・大臣より所領を給わり官位を給う

とも夫には染せられず、謗法の供養を受けざるを以て不染世間法
とは云うなり、所詮蓮華は水をはなれて生長せず水とは南無
妙法蓮華経是なり、本化の菩薩は蓮華の如く過去久遠より已来
本法所持の菩薩なり蓮華在水とは是なり、所詮此の水とは我等
行者の信心なり、蓮華は本因・本果の妙法なり信心の水に
妙法蓮華は生長せり、地とは我等衆生の心地なり涌出とは広宣
流布の時一閻浮提の一切衆生法華経の行者となるべきを涌出と
は云うなり云云。

一願仏為未來演説令開解の事

仰に云く此の文は弥勒菩薩等

末法当今の為に我從久遠來教化是等衆の言を演説令開解せしめ

給えと請じ奉る経文なり、此の請文に於て寿量品は顕れたり

五百塵点の久遠の法門是なり、開解とは教主釈尊の御内証に

此の分を・をさえ給うを願くは開かしめ給え同じく一会の大衆
の疑をも解かしめ給えと請するなり、此の開解の語を寿量品
にして汝等当信解と誡め給えり、若し開解し給わずんば大衆皆
法華經に於て疑惑を生ず可しと見給えり、疑を生ぜば三惡道に
墮つべしと既に弥勒菩薩申されたり、此の時寿量品顯れずんば
即当墮惡道すべきなり寿量品の法門大切なるは是なり、さて此
の開解の開に於て二あり、迹門の意は諸法を實相の一理と會し
たり、さては諸法を實相と開きて見れば十界悉く妙法實相の一
理なりと開くを開仏智見と説けり、さて本門の意は十界本有と
開いて始覺のきづなを解きたり、此の重を開解と申されたり仍つ
て演説の二字は釈尊開解の兩字は大衆なり、此の演説とは
寿量品の久遠の事なり、終に釈尊寿量品を説かせ給いて一切

たいしゅう ぎわく
大衆の疑惑を破り給えり云云。

ひによりようい ちえ そうだつ
一譬如良医智慧聰達の事

いわ りようい きようしゆしやくそん ちえ
仰に云く良医とは教主釈尊智慧

はちまんほうそう

そうだつ

さんぜ

みようほう

とは八万法蔵十二部經なり聰達とは三世了達なり藥とは妙法の
りようやく

じゆりようほん

じゆっかいほんぬ

は此の藥師

とは一切衆生の事なり、智慧とは万法己己の自受用報身の振舞
いっさいしゆじよう

ちえ

ここ

じじゆゆうほうしん

ふるまい

なり聰達とは自在自在に振舞うを聰達とは云うなり、所詮末法
そうだつ

ふるまい

そうだつ

しよせんまつぽう

当今の爲の寿量品なれば法華經の行者の上の事なり、此の智慧
とうこん

じゆりようほん

ほけきよう

ぎようじや

ちえ

とは南無妙法蓮華經なり、聰達とは本有無作三身なりと云う事
なむみようほうれんげきよう

そうだつ

ほんぬむささんじん

いっさい

なり、元品の無明の大良藥は南無妙法蓮華經なり、智とは一切
がんぽん むみよう りようやく

なむみようほうれんげきよう

いっさい

衆生の力なり、慧とは一切衆生の言語音声なり、故に偈頌に
しゆじよう

いっさいしゆじよう

こんごおんじよう

ゆえ

げじゆ

云く我智力如是慧光照無量と云えり云云。
いわ によぜ むりよう

一一念信解の事 仰に云く此の經文は一念三千の宝珠を納め
いちねんしんげ いわ きようもん いちねんさんぜん ほうしゆ おさ

たる函なり此れは現在の四信の初の一念信解なり、さて滅後の
ごぼん 五品の初の十心具足初随喜品も一念三千の宝を積みたる函なり、
ほけきよう 法華經の骨髓・末法に於て法華經の行者の修行の相貌分明な
り、所詮信と随喜とは心同じなり随喜するは信心なり信心するは
ずいき 随喜なり一念三千

の法門は信心随喜の函に納りたり、又此の函とは所謂南無
みようほうれんげきようこれ 妙法蓮華經是なり又此の函は我等が一心なり此の一心は万法の
総体なり総体は題目の五字なり、一念三千と云うが如く一心三千
もあり釈に云く介爾も心有れば即ち
さんぜん 三千を具すと、又宝函とは我等が色心の二法なり。本・迹両門・
しょうじ 生死の二法・止觀の二法なり所詮信心の函に入れたる南無妙法
運華經の函なり云云。

一見もんぼうしんじゅ仏もんぼうしんじゅ聞もんぼうしんじゅ法もんぼうしんじゅ信もんぼうしんじゅ受もんぼうしんじゅ教もんぼうしんじゅ誨もんぼうしんじゅの事もんぼうしんじゅ 仰いに云いく此きの經き文もんは一念いちねん隨喜ずいきの人ひと

は五十ごじゅうの功徳くどくを備そなうべし、然しかる間見かん仏ぶつ聞もん法ぽうの功徳くどくを具足ぐそくせり、此

の五十ごじゅう展てん転てんの五十ごじゅう人の功徳くどくを隨喜ずいき功徳くどく品くどくには説せかれたり、仍よつて

世世ぜぜ・生生しんしんの間見かん仏ぶつ聞もん法ぽうの功徳くどくを備そなえたり、所詮しよせん末法まつぽうに入いつては

仏ぶつを見るみるとは壽量じゆりやうぼん品しやくそんの釈尊しやくそん・法ぽうを聞きくとは南無なむ妙法蓮華みょうぽうれんげきやう經きやうな

り、教誨きやうゑとは日蓮にちれん等の類たぐい教化きやうけする所の諸宗しよしゆう無得道むとくどうの教誡きやうけなり、

信受しんじゆするは法華ほけきやう經きやうの行者ぎやうじやなり、所詮しよせん・壽量じゆりやう開顯まなこの眼あなこの顯あらわれて

は、此この見けん仏ぶつは無作むさの三身さんじんなり、開法かいぽうは万法まんぽう己己ここの音声おんじやうなり、

信受しんじゆ教範きやうはんは本有ほんぬずい隨緣しんによ真如ふるまいの振舞ふるまいなり、是これ即すなわち色心しきしんの二法にぽうなり、

見聞けんもんとは色法しきぽうなり、信受しんじゆは信心しんじん領納りやうのうなれば心法しんぽうなり、所謂いわゆる色心しきしん

の二法にぽうに備そなえたる南無なむ妙法蓮華みょうぽうれんげきやう經きやう是こなり云云。

一若復またあるひと有人しつぽう以七宝しちぽう滿まん是人ひと所得しよとく其福最多きふちふたほの事こと 仰いに云いく此この

きょうもん

しつぼう

さんぜんだいせんせかい

ししゅう

くよう

経文は七宝を以て三千大千世界に満てて四聖を供養せんよりは

ほけきよう

いちげ

じゅじ

たてまつ

法華経の一偈を受持し奉らんにはをとれりと説かれたり、

てんだいだいし

しやうよう

ほけきよう

くどく

しやく

たま

天台大師は生養成栄の四の義を以て、法華経の功徳を釈し給え

り、所詮末法に入つては題目の五字即ち是なり、此の妙法蓮華経

しよせんまつぼう

だいもく

ごじすなわこれ

みやうほうれんげきやう

の五字は万法能生の父母なり、生養成栄も亦復是くの如きなり、

よつ

のうしやう

ふ

しやうよう

またかくのこと

よつ

仍て釈には法を以つて本と為すと釈せり、三世十方の諸仏は、

みやうほうれんげ

ふ

な

しやく

さんぜじゅつぼう

しよぶつ

妙法蓮華経を以て父母とし給えり、此の故に四聖を供養するよ

りも法華経を持つは勝れたり、七宝は世間の財宝なり、四聖は滅

ほけきよう

すぐ

しつぼう

せけん

くどく

いつとくやうふしつ

ししやう

に帰する仏・菩薩羅漢なり、さて妙法の功徳は一得永不失なれ

ば朽失せざる功徳なり、此の故に勝れたり云云。

くしつ

くどく

ゆえ

すぐ

ゆえ

ししやう

くよう

くよう

一妙音菩薩の事

みやうおんぼさつ

い

みやうおんぼさつ

じゅつかい

ごげん

仰に云く妙音菩薩とは、十界の語言

おんじやう

おんじやうことごと

じひ

ほさつ

こ

音声なり、此の音声悉く慈悲なり、菩薩とは是れなり。

おんじやう

おんじやうことごと

じひ

ほさつ

こ

一爾時無尽意菩薩の事

仰に云く此の菩薩は空仮中の三諦な

り、意の一字には一切の法門を摂得するなり意と云うは中道の

事なり無は空諦なり尽とは仮諦なり、所謂意と云うは南無

妙法蓮華経なり、一切諸経の意三世の諸仏の題目の五字なり

所詮法華の行者は信心を以て意とせり云云。

一観音妙智力の事

仰に云く妙とは不思議なり、智とは

随縁真如の智力なり、森羅三千の自受用智なり、観音は円観なり、

円観とは一念三千なり、観音とは法華の異名なり、観音と法華と

は眼目の異名と釈する間・法華経の異名なり、観とは円観・音は

仏機なり、仍つて観音の二字は人法一体なり、所謂一心三観・

一念三千是なり云云。

一自在之業の事

仰に云く此の自在之業とは自受用報身の智

力なり、森羅三千の諸法作業をさして云うなり、其の所作のまま

法華經の意は不思議の自在之業なりと説けり、此の自在之業の本

は南無妙法蓮華經是なり云云。

一妙法蓮華經陀羅尼の事 仰に云く妙法蓮華經陀羅尼とは

正直捨方便・但説無上道なり、五字は体なり陀羅尼は用なり

妙法の五字は我等が色心なり、陀羅尼は色心の作用なり、所詮

陀羅尼とは呪なり、妙法蓮華經を以て煩惱即菩提・生死即涅槃

と呪いたるなり、日蓮等の類い南無妙法蓮華經を受持するを以

て呪とは云うなり、若有能持即持仏身とまじないたるなり、釈に

云く陀羅尼とは諸仏の密号と判ぜり、所詮法華折伏・破権門理

の義遮惡持善の義なり云云。

一六万八千人の事 仰に云く六とは六根なり、万とは六根に

具とこわる処ところの煩惱ぼんのうなり八とは八苦ぼんのうの煩惱ぼんのうなり千とは八苦ぐそくに具足ぐそくする煩惱ぼんのうなり、是これ即すなわち法華經ほけきょうに値あい奉たてまつりて六万八千くどくの功德ほうもんの法門ほうもんと顯あらわるるなり、所詮しよせん日蓮等にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる外ほかに六万八千くどくの功德ほうもんの法門ほうもん之これ無なきなり云云。

一妙莊嚴王みょうそうこんの事

仰いに云いく邪見じゃけん即正てほんの手本てほんなり、所詮しよせん

森羅三千しんらさんぜんの万法まんぽう・妙みょうを以もつて莊嚴そうこんしたる王おうなり妙みょうとは称歎しょうたんの語ことばなり

莊嚴そうこんとは色法しきぽうなり王おうとは心法しんぽうなり諸法しよぽうの色心しきしんを不思議ふしぎとほめた

り、然しかれば、妙莊嚴王みょうそうこんの言こと・三千さんぜんの諸法しよぽう・三諦さんたい法性ほつしよの当位たうゐなり、

所詮しよせん日蓮等にちれんの類たぐい南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうを以もつて色心しきしんを莊嚴そうこんしたり、此この

莊嚴そうこんとは別べつしてかざり立てたるには非あらず当位たうゐ即妙そうこんの莊嚴そうこんなり、

煩惱ぼんのう即菩提ぼだい・生死しようじ即涅槃これ是これなり云云。

一華嚴けこん・大日觀經だいにちかんきょう等らの凡夫ぼんぷの得道とくどうの事
仰いに云いく彼等かれらの衆皆みな

各各其のそ經經きやうぎやうの得道とくどうに似たれども眞實しんじつには法華ほっけの得道とくどうなり、
所謂いわゆる三五下種げしゆの輩やからなり經いに云く始見しけん我身聞しよせつ我所説文みやうらくだいし、妙樂大師い
云く脱げんは現いに在りと雖も具いに本種あを騰ぐと云えり本種と云うは
南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうこれ是なり云云。

一題目だいもくの五字ごじを以て下種げしゆの証文しやうもんと為すべき事な 仰いに云く經

に云く教無量菩薩畢むりやうぼさつ責任いちじやう一乘文みやうらくだいし、妙樂大師いの云く余教よきやうを以て程

と為さず文な、無量の菩薩むりやうぼさつとは日本國にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうを菩薩ぼさつと開會かいえし

て題目だいもくを教えたり、畢竟ひつきやうとは題目だいもくの五字ごじに畢ひつきやう竟ひつきやうするなり住いちじやう一乘

とは乘此宝乘直至道場じきしどうじやうこれ是なり文げしゆ、下種とはたねを下すなり種子しゆし

とは成仏じやうぶつの種の事なり、上の經文かみきやうもんに教無量菩薩むりやうぼさつの教の一字は

下種げしゆの証文しやうもんなり教とは題目だいもくを授くる時の事なり、權教こんきやう無得道とくどう・

法華得道ほっけとくどうと教うるを下種げしゆとは云うなり、末法まつぽうに入つて此の經文きやうもん

を出ださん人は有る可からざるなり慥に塔中相承の秘文なり

下種の証文秘す可し云云。一題目の五字末法に限つて持つ可き

の事 仰に云く経に云く、悪世末法時能持是經者文、此の經

とは題目の五字なり、能の一字に心を留めて之れを案ずべし云云、

末代悪世・日本国の一切衆生に持てと云う経文なり云云。

一天台云く是我弟子広弘我法の事 仰に云く我が弟子とは

上行菩薩なり我が法とは南無妙法蓮華經なり、権教乃至始覺

等は隨他意なれば他の法なり、さて此の題目の五字は五百塵点よ

り已来、証得し給える法体なり故に我が法と釈せり、天台云く

此の妙法蓮華經は本地甚深の奥蔵なり、三世の如来の証得し

給える所とは是れなり。

一色心を心法と云う事

仰に云く玄の十に云く請を受けて

説く時ただこ只だ是れ教の意を説く教意は是れこ仏意なりぶつゐ仏意は即ち是れ
仏智なりいた仏智至つて深し是の故に三止四請す此かくの如ごときの艱難・
余經に比するに余經は則ち易し云云、此の釈の意分ふんみよう明なり教意
とぶつゐ仏意といづれ仏智とは何れも同じ事なり、教は二十八品なり意は題目
の五こじ字なり惣じてそう仏意とは法華經の異名なり、法華經を以て
一切經の心法とせり又題目の五字を以て一代説教・本・迹二門
の神とせり、經に云く妙法蓮華經如来寿量品是なり、此の題目
の五こじ字を以て三世の諸さんぜ仏の命根しよぶつとせりさて諸經の神たましい
法華經なりと云う証文は妙法蓮華經方便品と題したる是なり云
云。

一無作むさの応身我等凡夫也と云う事 仰に云く釈に云く凡夫も亦
三身の本を得たりと云云、此の本の字は応身の事なりされば

ほんちむさくほんかく
本地無作本覺の体は無作の応身を以て本とせり仍つて我等凡夫なり、
おうじん
応身は物に応う身なり其の上寿量品の題目を唱え出し奉る
しんじつ
は真実に応身如来の慈悲なり云云。

一諸河無鹹の事

仰に云く此無鹹の事をば諸教無得道に

たと
譬えたり大海のしをはゆきをば法華經の成仏得道に譬えたり、
しよきよう
又諸經に一念三千の法門無きは、諸河にうしをの味無きが如く
しにん
死人の如し、
ほけきよう
法華經に一念三千の法門

有るはうしをの大海にあるが如く生きたる人の如し、法華經を浅く信ずるはあわのうしをの如し、深く信ずるは、海水の如し、あわはきえやすし、海水は消えざるなり、如説修行最も以て大切なり、然りと雖も、諸經の大河の極深なるも、大海のあわのしをの味をば具足せず、權教の仏は法華經の理即の凡夫にはひやくせんまんばい百千万倍劣るなり云云。

一妙樂大師の釈に末法之初冥利不無の釈の事 仰に云く此の釈の心は末法に於て冥の利益迹化の衆あるべしと云う事なり、此の釈は藥王品の此經即為閻浮提人病之良藥 若人有病得聞是經病即消滅不老不死云云、此の經文の意を底に含めて釈せり、妙樂云く然るに後・五百は、且らく一往に従う、末法の初冥利無きにあらず、且く大教の流行す可き時に拠る、故に五百と云

う文、仍よつて本化ほんげの菩薩ぼさつは頭りやくしゃつけの利益迹化りやくは冥りやくの利益なるべし云云。

一 爾にぜんきようがりやく前經瓦礫けこく国の事

仰いに云く法華經ほけきようの第三いに云く、如從

飢国けこく来忽遇大王こつぐだいおう・と云云、六の卷いに云く我此土安穩しどあんのんてんにん天人常じゅうまん充滿

我淨土じようど不毀云云、此の兩品の文の意は權教ごんきようは悉ことごとがりやくく瓦礫けこくの旅の国

なり、あやまりて本国いと思いて都まよと思わん事迷まいの故なり、一往いちおう

四十二年住したる国なれば衆生しゅじよう・皆みな本国と思えり、本国は此の

法華經ほけきようなり、信解品しんげに云く遇向い本国と、三五いの下種げしゅの所を指して

本国とも淨土じようどとも大王だいおう・とも云うなり、下種げしゅの心地しんじすなわ即ち受持じゅじしんげ信解

の国なり云云。

一 無明むみよう惡酒むみようの事

仰いに云く無明むみようの惡酒むみように酔うと云う事は弘法こうぼう

・慈覺じかく・智証ちしいうほうねん法然等ひとびとの人人むみようなり、無明むみようの惡酒むみようと云う証文しょうもんは

勸持品かんじほんに云く、惡鬼あつき入其身これ是なり、惡鬼あつきと惡酒あつきとは同じ事なり

あつき 悪鬼の鬼は第六天の魔王の事なり悪酒とは無明なり無明即魔王
まおうそくむみよう にほんこく ほうぼう いっさいしゅじよう

魔王即無明なり、其身の身とは日本国の謗法の一切衆生なり、

入ると呑むとは同じ事なり、此の悪鬼入る人は阿鼻に入る、さて

ほけきよう ぎようじゃ にゆうぶつちけん とくにゆうむじようどう

法華經の行者は入仏知見道故と見えて仏道に入る得入無上道と

も説けり、相構え相構えて無明の悪酒を恐るべきなり云云。

にちれんこしよう いわ じゆりようぼん な む みようほうれんげきようこ

一日蓮已証の事 仰に云く寿量品の南無妙法蓮華經是れな

り、地涌千界の出現末代の当世の別付属の妙法蓮華經の五字を

えんぶだい いっさいしゅじよう たま ぶつちよく じようぎようぼさつ

一閻浮提の一切衆生に取次ぎ給うべき仏勅使の上行菩薩なり

云云、取次とは取るとは釈尊より上行菩薩の手へ取り給うさて

じようぎようぼさつ まっぼうとうこん しゅじよう たま これ

上行菩薩又末法当今の衆生に取次ぎ給えり是を取次ぐとは云う

なり、広くは末法万年

までの取次なり、是を無令断絶とは説かれたり、又結要の五字

とも申すなり云云、上行菩薩取次の秘法は所謂南無妙法蓮華經なり云云。

一 釈尊の持言秘法の事

仰に云く持言の秘法の經文とは

壽量品に云く、每自作是念の文是なり、毎の字は三世常住なり、是念の念とは、わすれ給わずして内証に具足し給えり故に持言なり、秘法とは南無妙法蓮華經是なり秘す可し秘す可し云云。

一日蓮門家の大事の事

仰に云く此の門家の大事は涌出品の

前三後三の釈なり、此の釈無くんば本化・迹化の不同・像法付属

・末法付属・迹門・本門等の起尽之れ有る可からず、既に止

善男子の止の一字は日蓮門家の大事なり秘す可し秘す可し、総じ

て止の一字は正しく日蓮門家の明鏡の中の明鏡なり口外も詮無

じようぎようぼさつ

し、上行菩薩等を除いては総じて余の菩薩をば悉く止の一字を以て成敗せり云云。

にちれん でし おくびよう

一日蓮が弟子臆病にては叶う可からざる事

仰に云く此の

もんどうたいろん

意は問答対論の時は爾前・迹門の釈尊をも用う可からざるな

こ おくびよう

り、此れは臆病にては釈尊を用いまじきかなんと思ふべき故な

しゃくそん

り、釈尊をさえ用う可からず何に況や其の以下の等覺の菩薩を

ほうほう ひとびと おい

やまして謗法の人人に於ておや、所謂南無妙法蓮華經の大音声

しよきよう しよしゅう

を出だして諸經・諸宗を対治すべし、巧於難問答其心無所畏

これ

とは是なり云云。

みようほうれんげきよう こじ まなこ

一妙法蓮華經の五字を眼と云う事 仰に云く法華第四に云く、

ぶつめつとこ

仏滅度後能解其義是諸天人・世間之眼と云云、此の經文の意は、

ほけきよう

にんてん

にじよう

ぼさつ

ぼさつ

仏の眼目なり

此の眼目を弘むるは

法華經は人天・二乗・菩薩・仏の眼目なり、此の眼目を弘むるは

にちれん 日蓮一人なり、此の眼まなこには五眼あり、所謂肉眼・天眼・慧眼・

ほうげん 法眼・仏眼なり、此の眼まなこをくじりて別に眼まなこを入れたる人あり、

いわゆるこうぼうだいしこれ 所謂弘法大師是なり、法華經の一念三千即身成仏諸仏の開眼を

とど 止めて、真言經しんごんにありと云えり、是れ豈法華經の眼まなこを抽くじれる人

あら に非ずや、又此の眼まなこをいとじふさぐ人あり所謂法然上人是れなり、

しゃへい 捨閉の閉の文字は、閉眼の義に非ずや、所詮能弘の人に約しては、

にちれん 日蓮等の類い世間之眼なり、所弘しよぐの法に随つえば、此の大乗經典だいじようきやうてん

こ は、是れ諸仏しよぶつの眼なり、所詮眼しよせんまなこの一字は一念三千の法門なり、

六万九千三百八十四字を此の眼の一字に納めたり、此の眼まなこの字

あら 顕あらわれて見れば煩惱即菩提・生死即涅槃なり、今末法に入つて、

まなこ 眼とは所謂未會有の大曼荼羅なり、此の御本尊より外には眼目がんもく

無きなり云云。

一法華經の行者に水火の行者の事 仰に云く総じて此の經を信
じ奉る人に水火の不同あり、其の故は火の如きの行者は多く水
の如き行者はまれなり、火の如しとは此の經のいわれをききて
火炎のもえ立つが如く貴く殊勝に思いて信ずれども・やがて消
失す、此れは当座は大信心と見えたれども其の信心の灯きゆる事
やすしさて水の如きの行者と申すは水は昼夜不退に流るるなり
少しもやむ事なし、其の如く法華經を信ずるを水の行者とは云
うなり云云。

一女人と妙と釈尊と一体の事 仰に云く女人は子を出生す、
此の出生の子又子を出生す此くの如く展転して無數の子を
出生せり、此の出生の子に善子もあり惡子もあり端嚴美麗の
子もあり・醜陋の子もあり長のひくき子もあり大なる子もあり・

男子もあり・女子もあり云云、所詮・妙の一字より万法は出生しゅっしょう

せり地獄じごくもあり・餓鬼がきもあり・乃至ないし仏界ぶつがいもあり・權教ごんきょうもあり・

じつきょう

實教じつきょうもあり・善もあり惡もあり・諸法しよほうを出生しゅっしょうせり云云、又

しゃかいちぶつ

おんみ

いっさい

ぼさつ

こととしゅっしょう

しゅっしょう

せり云云、又

釈迦一仏の御身より一切の仏・菩薩等悉く出生せり、阿弥陀・

やくし

だいにち

こととしやくそん

ばんすい

の一月より万水に浮ぶ所の万影なり、

薬師・大日等は悉く釈尊しゃくそんの一月より万水に浮ぶ所の万影なり、

しか

によにん

しゃくそん

然らば女人と妙と釈尊との三全く不同無きなり、

みょうらくだいし

妙楽大師の

云く妙即三千・三千即法云云、提婆品に云く有二一宝殊一価直二

いわ

そくさんぜん

さんぜんそく

云云、

だいば

いわ

提婆品に云く有二一宝殊一価直二

さんぜんだいせんせかい

これ

三千大千世界一是なり云云。

一置不呵責の文の事

かしゃく

仰に云く此の經文きやうもんに於ては日蓮等の

い

わ

此の經文きやうもんに於ては日蓮等の

お

い

にちれん

類のおそるべき文字一字之れ有り、若し此の文字を恐れざれば

たぐい

たぐい

おそるべき文字

もんじ

一字之れ有り、

も

若し此の文字を恐れざれば

もんじ

若し此の文字を恐れざれば

たと

とうざ

縦い当座は事なしとも未来無間の業たるべし、

みらいむげん

然らば無間地獄へ

しか

むげんじごく

へ

引き入る獄卒なるべし夫れは置の一字是なり云云、此の置の一字

こくそつ

引き入る獄卒なるべし

そ

夫れは置の一字是なり云云、

これ

此の置の一字

引き入る獄卒なるべし夫れは置の一字是なり云云、此の置の一字

は獄卒ごくそつなるべし謗法ほうぼう不信ふしんの失とがを見ながら聞きながら云わずして置
かんは必ず無間地獄むげんじごくへ墮在だざいす可べし、仍よつて置の一字・獄卒ごくそつ・阿防あぼう
羅刹らせつなるべし尤もつとも以て恐る可べきは置の一字なり云云、所詮しよせん此の
経文きやうもんの内に獄卒ごくそつの一字を恐るべきなり云云、此の獄卒ごくそつの一字を
深く之これを思おもう可べし、日蓮にちれんは此の字を恐る故ゆえに建長けんちやう五年より今
弘安年中こうあんまで在在所ざいざいしよ所にて申もうしはりしなり只偏ただひとえに此の獄卒ごくそつを脱まぬかれ
んが為ためなり、法華經ほけきやうには若人にやくにん不信ふしんとも生疑うたがい不信者ふしんとも説とき給たまえ
り、法華經ほけきやうの文文・句句をひらき涅槃經の文文・句句をひらきた
りとも置いていわずんば叶かなう可べからざるは此の置の一字より外に
獄卒ごくそつは無きなり云云。

一異念なく無りやうぜんじやうどく靈山淨土りやうぜんじやうどへ参る可べき事 仰いわに云く異念ふしんとは不信ふしんの事
なり若もし我が心なりとも不信ふしんの意しゆつたい出来たちまちしんじんせば忽たちまちに信心しんじんに住すべし、

所詮不信の心をば師となすべからず信心の心を師匠とすべし
浄心信敬に法華經を修行し奉るべきなり、されば能持二是經一
能説二此經一と説きて能の字を説かせ給えり靈山ここにあり四
土一念皆常寂光とは是なり云云。

一不可失本心の事 仰に云く此の本心と云うは法華經の信心の

事なり、失と申すは謗法の人にすかされて法華經を捨つる心の

出来するを云うなり、されば天台大師云く若し悪友に値え

ば則ち本心を失うと云云、此の釈に悪友とは謗法の人の事なり、

本心とは法華經なり、法華經を本心と云う意は諸法実相の御經な

れば十界の衆生の心法を法華經とは申すなり、而るに此の本心

を引きかえて迷妄の法に著するが故に本心を失うなり、此の本心

に於ては三五の下種の法門なり、若し善友に値う時んば失う所の

ほんしん たちまち
本心を忽に見得するなり、所謂迦葉・舍利弗等是なり、善友とは
しやかによらい あくゆう
釈迦如来・悪友とは第六天の魔王・外道・婆羅門是なり、所詮
まっぼう
末法に入つて本心とは日蓮弘通の南無妙法蓮華經是なり、悪友
ほうねん こうぼう
とは法然・弘法・慈覚・智証等是なり、若し此の題目の本心を失
おい
せんに於ては又三五塵点を経べきなり、但、如是展転至無數劫な
とが むみよう
るべし、失とは無明の酒に酔いたる事なり仍て本心を失うと云う
ごんきよう
なり、此の酔をさますとは権教を捨てしむるを云うなり云云。
てんだいだいし まおうしょうげ
一天台大師を魔王障礙せし事 仰に云く此の事は随分の秘蔵
そのゆえ てんだいだいし いっしんさんかん いちねんさんぜん かんぼう
なり、其の故は天台大師・一心三觀・一念三千の觀法を説き顯さ
たまい
んとし給いしかば父母左右の膝に住して悩まし奉り障礙し給いし
すなわ だいろうくてん まおう ふぼ
なり、是れ即ち第六天の魔王が父母の形を現じて障礙せしなり、
まい
終に魔王に障礙せられ給わずして摩訶止觀の法門起れり、何に況

いまにちれん ひろ なむ みようほうれんげきよう さんぜ しょぶつ じようどう
や今日蓮が弘むる南無妙法蓮華經は三世の諸仏の成道の師・

じゅつぽうさった

とくどう

ししよう

そ

しようぞう

ぶつぽう

にぜん

・

しやくもん

迹門なれば、

まおうじしん

障礙をなさずともなるべし、

今末法の

まっぽう

時は、

しよぐ

所弘の法は、

ほけきようほんもん

法華經本門の事の一念三千の南無妙法蓮華經

いちなんさんぜん

なむ みようほうれんげきよう

なり、

のうぐ どうし

能弘の導師は

ほんげじゆ

本化地涌の大菩薩にてましますべし、

然る間

まおうじしん

魔王自身下りて

しょうげ

障礙せずんば

かな

叶う可からざるなり、

仍つて

よしん

自身下

りたる事分

ふんみよう

明なり、

いわけるとりゆう

所謂道隆・

りようかんさいみようじ

良觀最明寺等

是なり、

然りと

いえど

しよてんぜんじん

雖も諸天善神等は

にちれん

日蓮に力を合せ

たま

給う故に

ゆえ

竜口までも

かちぬ、

其の外の大難をも

まめか

脱れたり、

今は

まおう

魔王も

こりて

や候うらん、

日蓮

しきよ

死去の後は

残党ども

軍を起すべきか、

故に

そ

夫れも

落居は

叶う可

からざるなり、

其の故は

そのゆえ

第六天の魔王の眷属

日本国に

四十九億九万

四千八百二十八人

なりしが

今は

日蓮に

降参したる

事多分なり、

經

・

に云くいわ惡鬼入其身とは是なり、此の合戰の起りも、所詮南無しよせん なむ
妙法蓮華經是なり、魔王に於て体の魔王・用の魔王あり、体のみようほうれんげきようこれ
魔王とは法性同共の魔王なり妙法の法是なり、用の魔王とはまおう ほつしやう
此れより出生する第六天の魔王なり、用の魔王は障礙をなす、しゅつしやう だいろうてん まおう
然れども体用同共の諸法実相の一理なり、唯一門の智慧の門にしか たいゆう しよほうじつそう
入り、無明法性一体なるべきなり云云、所謂摩訶止觀の大事のむみようほつしやう いわゆるまかしかん だいじ
法門是なり、法華經の一代説教に勝れたるは此の故なり、ほうもんこれ ほけきやう いちだいせつきやう
一念三千とは是なり、法華經第三に云く魔及魔民皆護仏法云云。いちねんさんぜん これ ほけきやう いわ
一法華經極理の事 仰に云く迹門には一乗作仏本門には久遠ほけきやう ごくり いわ しやくもん にじようさぶつほんもん くおん
実成此をさして極理と云うなり、但し是も未だ極理にたらず、じつじよう ただ いま ごくり
迹門にして極理の文は諸仏智慧甚深無量の文是れなり、其の故しやくもん しよぶつ ちえ じんじんむりやう こ
は此の文を受けて文句の三に云く豎に如理の底に徹し横に法界のもんく いわ

辺を窮むと釈せり、さて本門の極理と云うは如来秘密神通之力の
文是なり、所詮日蓮が意に云く法華經の極理とは南無
妙法蓮華經是なり、一切の功德法門・釈尊の因行果徳の二法
三世十方の諸仏の修因感果・法華經の文文・句句の功德を取
り聚めて此の南無妙法蓮華經と成し給えり、爰を以て釈に云く
惣じて一經を結するに唯だ四のみ、其の枢柄を撮つて之を授与
す云云、上行菩薩に授与し給う題目の外に法華經の極理は無き
なり云云。

一妙法蓮華經五字の蔵の事

仰に云く此の意は妙法の五字の

中には一念三千の宝珠あり五字を蔵と定む、天台大師玄義の一に
判ぜり、所謂此の妙法蓮華經は本地甚深の奥蔵なり云云、法華經
の第四に云く是れ法華經蔵と云云、妙華嚴法阿含蓮方等華般若經

涅槃、又云く妙涅槃法ねはん げんぱん般はん若蓮にや ほう方等とう華阿含經あこんきやう・華嚴けこん、已上妙法蓮華經みやうほうれんげきやう

の五ご字には十界じゅうかい三千の宝珠ほうしゆあり、三世さんぜの諸仏しよぶつは此の五ご字の藏ざうの

中より・或あるは華嚴けこんの宝を取り出だし・或あるは阿含あこん・方等ほうとう・般若はんやの宝

を取り出だし種種しゆじゆせつぽう說法たまたし給えり、加之しかのみならず・論師ろんし・人師にんし等の疏釈じよ

も悉く此の五ご字の中より取り出だして一切衆生いっさいしゆじやうに与え給えり、

此等これらは皆五みなご字の中より取り出だし給えども妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの袋をば

持ち給たまわず、所詮しよせん五字ごじは上行菩薩じやうぎやうぼさつの付属ふぞくにして更に迹化しゃくけの菩薩ぼさつ

・諸論師しよろんしいろはざる題目だいもくなり、仍よつて上行じやうぎやう所伝しよでんの南無なむ

妙法蓮華經みやうほうれんげきやうは藏ざうなり、金剛不壞こんごうふえの袋なり此の袋をそのまま

日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやうには与たまえ給えり、信心しんじんを以て此の財宝を受取

るべきなり、今末法まっぽうに入つては日蓮等にちれんの類たぐい受取る所の如意宝珠にょいほうじゆ

なり云云。一我等衆生の成仏じやうぶつは打かためたる成仏じやうぶつと云う証文しやうもん

の事 仰に云く經に云く無上宝聚不求自得の文是なり、我等凡夫
即極とはたと打かためたる成仏なり所謂不求自得する所の南無
妙法蓮華經なればなり云云。

一 爾前法華の能くらべの事 仰に云く爾前の經にして十惡・
五逆等の成仏の能なし、今法華經に十界皆成・分明なり、
爾前の經の無能と云う証文とは方便品に云く但似仮名字引導於
衆生の文是なり、さて法華經は能と云う証文は諸法実相の文
是なり、今末法に入つて第一の能たる南無妙法蓮華經是なり云
云。

一 授職の法体の事 仰に云く此の文は唯仏与仏の秘文なり輒く云
う可からざる法門なり、十界三千の諸法を一言を以て授職する
所の秘文なり、其の文とは神力品に云く皆於此經宣示顯説の文

是なり、此の五字即十界同時に授職する所の秘文なり十界己己

の当体・本有妙法蓮華經なりと授職したる秘文なり云云。

一末代讓 状の事 仰に云く末代とは末法五百年なり、讓 状と

は手繼の証文たる南無妙法蓮華經是なり此れを讓るに二義之れ

有り、一には跡をゆずり二には宝をゆずるなり、一に跡を讓ると

云うは釈迦如來の跡を法華經の行者にゆずり給えり、其の証文

に云く如我等無異の文是なり、次に財宝をゆずると云うは釈尊

の智慧戒徳を法華經の行者にゆずり給えり、其の証文に云く

無上宝聚不求自得の文是なりと云云、さて此の題目の五字は

讓 状なり云云。

一本有止觀と云う事 仰に云く本有の止觀と云うは大通を以て

習うなり、久遠実成道の仏と大通智勝仏と釈尊との三仏を次の

ごと ぶつぼう さんぼう なら
如く仏法僧の三宝と習うなり、此の故に大通は本有の止観なれば
すなわ さんぜ しょうぶつ
即ち三世の諸仏の師範と定めたり、仍つて大通仏を法と習う、此
の法は妙法蓮華經是なり、仍つて証文に云く大通智勝仏十劫坐
どうじょう
道場の文是なり十劫は即ち十界なり云云。

一入末法四弘誓願の事 仰に云く四弘誓願をば一文に口伝せ

り、其の一文とは所謂神力品に云く於我滅度後応受持斯經是人於

ぶつどう けつじょう むうぎ
仏道決定無有疑と云云、此の經文は法華經の序品より始めて四弘

せいがん ほうもん と
誓願の法門を説き終りてさて上行菩薩に妙法蓮華經を付属し

たま しょうほう
給う時・妙法の五字に四弘誓願を結びて結句に説かせ給えり

めつご まつぼう
滅後とは末法の始の五百年なり、衆生無辺誓願度と云うは是人

の人の字なり、誓願は地涌の本化の上行菩薩の誓願に入らん

こ すなわ ぶつどう どだつ ほんのうむへん ほんのうそく ぼだい
と此れ即ち仏道の二字度脱なり、煩惱無辺なれども煩惱即菩提・

生死しょうじ即すく涅槃ねはんと体達たいだつす、仏道ぶつどうに入いつては煩惱ぼんのう更さらになし受持じゆじ斯經しききやうの所
には法門ほうもん無む尽じん誓願せいがん知分ふんみよう明みなり無上むじやう菩提ぼだい誓願せいがん証しやうと云いうは是人ぜにんのう於お
ぶつどうけつじやうむうぎ
仏道決ぶつどうけつ定じやう無有むいう疑ぎと定めたる四弘誓願しぐせいがん分ふんみよう明みなり、教主きやうしゆ釈尊しやくそん・
末法まつぽうに入いつて四弘誓願しぐせいがんも此の文ぶんなり、上行菩薩じやうぎやうぼさつの四弘誓願しぐせいがんも此
の文ぶんなり深こく之これを思案しあんす可べし云云。

一四弘誓願しぐせいがん応おう如理じゆりと云いう事 仰いわに云いく衆生しゆじやう無む辺へん誓願せい度どは応身おうじん
なり、煩惱ぼんのう無む辺へん誓願せい斷だんは報身ほうしんなり、法門ほうもん無む尽じん誓願せい知ちは智法身ちほふしんなり、
無上むじやう菩提ぼだい誓願せい証しやうは理法身ほふしんなり、所詮しよせん誓願せいと云いうは題目だいもく弘通くわうつうの誓願せいがん
なり、釈いわに云いく彼かが為ために惡あくを除すくは即すなわち是これ彼かが親おやなりと是これなり
云云。

一 本来しゆらいの四弘しぐの事 仰いわに云いく諸法しよほうの当体とうたい本来しゆらい四弘しぐなり、
其そのの故ゆゑは衆生しゆじやうと云いうは法界ほふかいなり、所詮しよせん法界ほふかいに理智じち慈悲じひの三さんを

具足せり、ぐそく 応報法の三身諸法の自体なり、さんじんしよほう 無作の応身を以て

しゅじようむへんせいがんど

衆生無辺誓願度と云うなり、むさほうしん 無作の報身には智徳断徳の二徳を

備えたり、ほんのうむへんせいがん 煩惱無辺誓願断を以て本有の断徳とは定めたり、ほうもん 法門

むじんせいがん 無尽誓願知を以て本有のほんぬ

智徳とす、むじようぼだいせいがん 無上菩提誓願証を以て無作の法身と云うなり、しよせん 所詮

四弘誓願の中には衆生無辺誓願度を以て肝要とするなり、しゅじようむへんせいがん

今日蓮等の類いは南無妙法蓮華経を以て衆生を度する此より外いまにちれん

は所詮なきなり、しよせん 速成就仏身是なり云云、そくじようじゅうぶっしんこれ 所詮四弘誓願は

一念三千なり、いちねんさんぜん さて四弘の弘とは何物ぞ、なにももの 所謂上行所伝の南無

妙法蓮華経なり、みようほうれんげきよう 釈に云くいわ

四弘能所混すと云云、しぐのうじよみん 此の釈は止観に前三教を釈せり、しかんぜんさんきようしやく 能と云

うは如来なり所とは衆生なり能所各別するは権教の故なり、にょらいしゅじよう

法華經ほけきょうの心は能所のうじょ一体なり混みんすと云うは權教ごんきょうの心は機法きほう共に一
同なれば能所混のうじょみんすと云うなりあえて能所一同して成仏じょうぶつする所を
混みんすと云うには非あらざるなり、今末法まっぼうに入つて法華經ほけきょうの行者ぎやうじやは
四弘能所感応しかんのおうの即身成仏そくしんじょうぶつの四弘しぐなり云云。

御講聞書
終

駿河するがの国蒲原かんばらの庄・四十九院の供僧等謹んで申す。

寺務・二位律師嚴りっし譽ごんよの爲に日興並に日持・承賢・賢秀等・所学

の法華宗を以て外道げどう大邪教じゃきょうと称し往古の住坊並に田畠でんばたを奪い取

り寺内を追い出さしむる謂いわれ無き子細しさいの事。

右釈迦しゃかい一代教いちだいいの中には天台を以て宗匠と爲す、如来にょらい五十年の間

は法華を以て眞實しんじつと爲す、是れ則ち諸仏しよぶつの本懐ほんかいなり抑亦多宝たほうの

証誠しょうせいなり、上一人より下万民ばんみんに至るまで帰敬きけい年旧り渴仰かつごう日に新

なり。

而るに嚴譽ごんよの状に云く「四十九院の内日蓮にちれんが弟子等居住せしむ

るの由・其の聞え有り、彼の党類とうるい仏法ぶつぽうを学し乍ら外道げどうの教に同じ

正見せいけんを改めてあらた邪義じやぎの旨むねに住せしむ以ての外の次第しだいなり、大衆等たいしゅう
ひようじよう

評定ひようていせしめ寺内に住せしむべからざるの由の所に候なり」云云。

茲ここに因よつて日興等にっこう忽たちまちに年来の住坊を追い出され已すでに御祈きとう☆便

宜の学道を失う、法華ほっけの正義せいぎを以て外道げどうの邪教じやきようと称するは何のいづれ

経・何れの論文ろんぶんぞや、諸経多しと雖も未だ両眼りょうげんに触れず法華ほっけの

中に諸経しよきようを破るの文之有りと雖も諸経しよきようの裏に法華ほっけを破るの文全

く之無し、所詮已今当の三説を以て教法きようほうの方便ほうべんを破摧はさいするは更

に日蓮聖人にちれんしょうにんの莠言ゆうげんに非ず皆是みなれ釈尊しゃくそん出世しゅつせの金口きんくなり。

爰ここに真言しんごん及び諸宗しよしゅうの人師等にんし大小乗だいししやうじようの浅深せんしんを弁わきまえず権実教ごんじつの

雜乱そうらんを知らず、或は勝を以て劣と称し、或は権を以て実と号し

意樹いじゆに任せて砂草しゃそうを造る、仍よつて愚癡おろかの輩ともがら・短才たんさいの族やから・経經きようきよう

顯然せいせつの正説せいせつを伺うかがわず徒いたずらに師資相伝しそうでんの口決くけつを信じ秘密ひみつの法力はつりきを行

ずと雖も眞実しんじつの験証無し、
災難さいなん多し、是れ併しかしながぶつぼうら
仏法

天地之が為に妖孽ようげんを示し国土こくど之が為に

の邪正を糺さず僧侶の賢愚を撰ばざる故なり、夫れ仏法は王法
の尊崇に依つて威を増し王法は仏法の擁護に依つて長久す、
正法を学ぶの僧を以て外道と称せらるるの条理豈然る可けんや
外道か外道に非ざるか早く嚴譽律師と召し合わせられ真偽を糺さ
れんと欲す。

且去る文応年中・師匠日蓮聖人・仏法の廢れたるを見・未来
の災を鑒み諸經の文を勘え一卷の書を造ると号す、異国の來難
果して以て符合し畢んぬ未萌を知るを聖と謂つ可きか、大覺世尊
・靈山・虚空・二処・三会・二門・八年の間三重の秘法を説き窮
むと雖も仏滅後二千二百二十余年の間・月氏の迦葉・阿難・
竜樹・天親等の大論師・漢土の天台・妙楽・日本の伝教大師
等内には之を知ると雖も外に之を伝えず第三の秘法今に残す所な

り、是偏ひとえに末法鬪諍まっぽうとうじょうの始・他国来難たこくなんの刻・一閻浮提えんぶの中の大合
戦おこ起らんの時・国主此こくしゅの法を用いて兵乱ひょうらんに勝つ可きの秘術なり、
経文赫赫きやうもんたり所説明明たり、彼れと云い此れと云い国の為・世
の為・尤も尋ね聞し食さるべき者なり、仍よつて款状かんじやうを勒ろくして各
言上件ごんじやうくだんの如し。

承賢

賢秀

弘安元年三月 日
こうあんがねん

日持

日興 にっこう

◆九九

竜泉寺申状

弘安 こうあん 二年十月

五十八歳御代

作

849P

駿河 するが の国・富士下方滝泉寺の大衆 たいしゅう ・越後房 ぼう 日弁・下野房 ぼう 日秀

等謹んで弁言 べんごん す。

当寺院主代・平左近入道行智・条条の自科を塞ぎ遮らんが為
に不実の濫訴を致す謂れ無き事。

訴状に云く日秀・日弁・日蓮房の弟子と号し法華經より外の
余經・或は真言の行人は皆以て今世後世叶う可からざるの由・之
を申す云云取意。

此の条は日弁等の本師日蓮聖人・去る正嘉以来の大慧星大地
動等を觀見し一切經を勘えて云く當時・日本国の体たらく権小
に執著し実經を失没せるの故に当に前代未有の二難を起すべし
所謂自界叛逆難・他国侵逼難なり、仍て治国の故を思い兼日彼
の大災難を対治せらる可きの由、去る文応年中・一卷の書を上表
す立正安國論と号す勘え申す所皆以て符合す既に金口の未來記
に同じ宛も声と響との如し、外書に云く「未萌を知るは聖人な

り」内典ないてんに

云く「智人ちじんは起を知り蛇は自ら蛇を知る」云云、之を以て之を思

うに本師ほんしは豈聖人しょうにんなるかな巧匠きやうしやう内に在り国宝外に求む可から

ず、外書に云く「隣国りんこくに聖人しょうにん有るは敵国の憂うれいなり」云云、内經

に云く「国に聖人しょうにん有れば天必ず守護しゆごす」云云、外書に云く「世

必ず聖智の君有り而して復賢明の臣有り」云云、此の本文を見る

に聖人しょうにん・国に在るは

日本国にほんこくの大喜にして蒙古国もうこくの大憂ゆうなり諸竜しよを驅かり催もよおして敵舟を

海に沈め梵釈ぼんしやくに仰せ付けて蒙王を召し取るべし、君既に賢人けんじんに

在さば豈聖人しょうにんを用いずして徒に他国たこくの逼うれを憂えん。

抑大覺世尊だいかくせそん・遙はるかに末法鬪諍堅固の時を鑒かんがみ此ことくの如ごときの大難だいなん

を対治たいじす可たいじきの秘術を説き置かせらるるの經文明明たり、然り

と雖も如來にょらいの滅後めつご二千二百二十余年の間・身毒・尸那しな・扶桑等・
一閻浮提えんぶの内に未だ流布るふせず、随したがつて四依しえの大士内に鑒かんみて説
かず天台てんだい傳でんぎよう教而も演のべず時未だ至いたらざるの故なり、法華經ほけきように云
く「後の五百歳このごひゃくさいの中に

閻浮提えんぶに広宣流布こうせんるふす」云云、天台大師てんだいだいし云く「後・五百歳」妙樂みょうらく
云く「五五百歳」傳でんぎよう教大師だいいし云く「代を語れば則ち像の終り末の
初め地を尋ぬれば唐とうの東・羯かくの西・人を原ぬれば則すなはち五濁ごじよくの生・
鬬諍とじやうじやうの時」云云、東勝西負の明文めいぶんなり。

法主聖人しょうにん・時を知り国を知り法を知り機きを知り君の為臣の為
神の為仏の為災難さいなんを対治たいじせらる可きの由・勘かんえ

もう

申すと雖も御信用無きの上・剩さえ謗法人等の讒言に依つて

しょうにん

聖人・頭に疵を負い左手を打ち折らるる上・兩度まで遠流の責

きず

を蒙り門弟等・所所に射殺され切り殺され毒害・刃傷・禁獄・

こう

を蒙り門弟等・所所に射殺され切り殺され毒害・刃傷・禁獄・

もんでい

を蒙り門弟等・所所に射殺され切り殺され毒害・刃傷・禁獄・

るざい

流罪・打擲・擯出・罵詈等の大難勝げて計う可からず、茲に因つ

ひんずい

罵詈等の大難勝げて計う可からず、茲に因つ

かそ

茲に因つ

にほんこく

て大日本国・皆法華經の大怨敵と成り万民悉く一闡提の人と

みなほけきよう

大怨敵と成り万民悉く一闡提の人と

ばんみんことごとく

悉く一闡提の人と

いっせんたい

為るの故に天神・国を捨て地神・

てんじん

国を捨て地神・

所を辞し天下静ならざるの由・粗伝承するの間其の仁に非ずと雖

てんが

所を辞し天下静ならざるの由・粗伝承するの間其の仁に非ずと雖

も愚案を顧みず言上せしむる所なり、外經に云く「奸人朝に在

ぐあん

言上せしむる所なり、外經に云く「奸人朝に在

外經に云く「奸人朝に在

奸人朝に在

あした

れば賢者進まず」云云、内經に云く「法を壊る者を見て責めざる

けんじや

れば賢者進まず」云云、内經に云く「法を壊る者を見て責めざる

者は仏法の中の怨なり」云云。

ぶつぼう

者は仏法の中の怨なり」云云。

又風聞の如くんば高僧等を崛請して蒙古国を調伏す云云、其の

こうそ

高僧等を崛請して蒙古国を調伏す云云、其の

蒙古国を調伏す云云、其の

蒙古国を調伏す云云、其の

状を見聞するに去る元暦・承久の兩帝・叡山の座主・東寺・御

いぬ

去る元暦・承久の兩帝・叡山の座主・東寺・御

承久の兩帝・叡山の座主・東寺・御

叡山の座主・東寺・御

座主・東寺・御

東寺・御

東寺・御

室・七大寺・園城寺等・検校・長吏等の諸の真言師を請い向け内

裏の紫宸殿にして咒咀し奉る故源右將軍並に故平右虎牙の日記

なり、此の法を修するの仁は敬つて之を行えば必ず身を滅し強い

て之を持てば定めて主

を失うなり、然れば則ち安徳天皇は西海に沈没し叡山の明雲は流

矢に当り後鳥羽法皇は夷島に放ち捨てられ東寺・御室は自ら

高山に死し北嶺の座主は改易の恥辱に値う、現罰・眼に遮り後

賢之を畏る聖人山中の御悲みは是なり。

次ぎに阿弥陀経を以て例時の勤と為す可きの由の事、夫れ以

みれば花と月と水と火と時に依つて之を用ゆ必ずしも先例を追う

可からず、仏法又是くの如し時に随つて用捨す、其の上・汝等の

執する所の四枚の阿弥陀経は四十余年未顕真実の小経なり、一

えんぶ だいいち ちしや しやりほつそんじや
閻浮提第一の智者たる舍利弗尊者は多年の間・此の經を讀誦する

じようぶつ
も終に成仏を遂げ

ず然る後・彼の經を抛ち末に法華經に至つて華光如来と為る、

況や末代惡世の愚人・南無阿弥陀仏の題目計りを唱えて順次往

生を遂ぐ可しや、故に仏之を誡めて言く法華經に云く「正直に

方便を捨て但無上道を説く」と云云教主釈尊正しく阿弥陀經を

抛ちたまう云云又涅槃經に云く「如来は虚妄の言無しと雖も若し

衆生の虚妄の説に因るを知れば」と云云、正しく弥陀念仏を以

て虚妄と称する文なり、法華經に云く「但樂て大乘經典を受

持し乃至余經

の一偈げをも受けざれ」云云、妙樂大師みょうらくだいし云く「況や彼の華嚴けこん但以けこんて称比しせん此の經の法を以て之を化するに同じからず故に乃至ないし不受余經ふじゅよきよう一偈げと云う」云云、彼の華嚴經けこんきようは寂滅じやくめつ道場の説ほっかい・法界ほっかい唯心の法門ほうもんなり、上本は十三世界微塵品せかいみじんちゆうぼん中品は四十九万八千偈げ・下本は十万偈四十八品じゅうまんげ今現げんに一切經藏いっさいきようを觀みるに唯八十六十等の經なり、其の外ほうとうの方等はんにとう・般若だいにちきよう・大日經こんごうちようきよう・金剛頂經こんごうちようきよう等の諸しよの顯密けんみつ・大乘經だいじようきよう等を尚なお・法華經ほけきように對当し奉りて仏自らみずか・或あるは未顯真實みけんしんじつと云い・或あるは留難とどなん多きが故に・或あるは門を閉じよ・或あるは抛て等云云、何に況いわんや阿弥陀經あみだをや、唯大山と蟻岳ぎがくとの高下こうげ・師子王ししと狐兔こととの☆力すもうなり。

今日秀等專ら彼等かれら小經なげうを抛ち專ら法華經ほけきようを讀誦どくじゆし法界ほっかいに勸進

して南無妙法蓮華經と唱え奉る豈殊忠に非ずや、此等の子細御
ふしんのこ不審を相貽さば高僧等を召され是非を決せらる可きか、仏法の
ゆうれつのこ優劣を糺明致す事は月氏・漢土日本の先例なり、今明時に當つて
何ぞ三国の旧規に背かんや。

訴状に云く今月二十一日数多の人勢を催し弓箭を帶し院主分の
御坊内に打ち入り下野坊は乗馬相具し熱原の百姓・紀次郎男・
点札たてふだを立て作毛を薙り取り日秀の住房に取り入れ畢んぬ云云「取
意」。

此の条・跡形も無き虚誕なり日秀等は損亡せられし行者なり
不安堵あんどの上は誰の人か日秀等の点札たてふだを叙用せしむ可き將た又
☆弱おうにやくなる土民どみんの族やから・日秀等に雇い越されんや、然らば弓箭を
帯たいし悪行あくぎようを企くわだつるに於ては行智云く近隣の人人争つて弓箭を奪

い取り其の身に召し取ると云うが如き子細を申さざるや、矯飾きょうじきの至り宜しく賢察けんさつに足るべし。

日秀・日弁等は当寺代代の住侶じゅうろとして行法の薰修くんじゅうを積み
てんちようちぎゅう
天長地久の御祈☆を致すの処ところに行智は乍たちまちに当寺靈地の院主代
に補し寺家・三河房頼円並に少輔房・日禪・日秀・日弁等に行智
より仰せて、法華經ほけきょうに於ては不信用の法なり速に法華經ほけきょうの読誦どくじゆを
ていし いっこう
停止し一向に阿弥陀經あみだを読み念仏ねんぶつを申す可きの由の起請文きしょうぶんを書け
ばんど
ば安堵あんどす可きの旨下知せし

むるの間、頼円は下知げちに随したがつて起請きしょうを書いて安堵あんどせしむと雖も日
禅等は起請きしょうを書かざるに依つて所職の住坊を奪い取るの時・日禅
は即ち離散せしめ畢おわぬ、日秀・日弁は無頼むらいの身たるに依つて所
縁を相憑あいたのみ猶寺中に寄宿きしゆくせしむるの間・此の四箇年の程・日秀等
の所職の住坊を奪い取り嚴重の御祈きとう☆を打ち止むるの余り悪行あくぎよう
猶以て飽あき足らず為に法華經行者ほけきようぎようじゃの跡あとを削り謀案ぼうあんを構かまえて種しゅじゅ種
の不実ふじつを申し付くるの条・豈在世ざいせの調達ちようだつに非ずや。

凡そ行智の所行は法華三昧ほつげさんまいの供僧・和泉房蓮海ぼうを以て法華經ほけきようを
柿紙しぶかみに作り紺形を彫り堂舎しゅうじの修治しゅうじを為す、日弁に御書下ごしよを給い
構かまえ置く所の上葺うわぶき樽く一万・二千寸の内八千寸を之を私用せしむ、
下方の政所代まんどころに勸め去るすす四月御神事いぬの最中もなかに法華經信心ほけきようしんじんの行人
・四郎男にんじようを刃傷いぬせしめ去る八月いよいよ弥四郎坊男の頸を切らしむ、

日秀等に頸を刎ぬる事

を擬して此の中に書き入れ無智無才の盗人・兵部房静印より過料
を取り器量の仁と称して当寺の供僧に補せしめ、・或は寺内の百
姓等を催し・鶉狩・狸殺・狼落の鹿を取りて別当の坊に於て之を
食らい・或は毒物を仏前の池に入れ若干の魚類を殺し村里に出し
て之を売る、見聞の人・耳目を驚かさざるは莫し仏法破滅の基
悲んで余り有り。

此くの如き不善の悪行・日日相積るの間・日秀等愁歎の余り
依つて上聞を驚かさんと欲す、行智条条の自科を塞がんが為に
種種の秘計を廻らし近隣の輩を相語らい遮つて跡形も無き
不実を申し付け日秀等を損亡せしめんと擬するの条言語道断の
次第なり、冥に付け頸に付け戒めの御沙汰無からんや、所詮仏法

の権実沙汰ごんじつさたの真偽・淵底えんでい

を究きわめて御尋ね有り且は誠諦じょうたいの金言きんげんに任せ且は式条の明文めいぶんに准

し禁遏きんあつを加えられば守護しゆごの善神ぜんじんは変を消し擁護まもの諸天しよてんは咲を含ま

ん、然れば則ち不善惡行ぜんあくの院主代・行智かいえきを改易かいえきせられ將た又本主

此の重科のがを脱なんれ難からん何ぞ実相寺じつそうじに例如せん、誤あやまりまらざるの

道理どうりに任まかせて日秀・日弁等は安堵あんどの御成敗ごせいばいを蒙こうむむり堂舎しゆりを修理

せしめ天長地久御祈てんちようちきゆう☆の忠勤きとうを抽ぬきんでんと欲す、仍よつて状を勒ろくし

披陳言上件ごんじようの如し。

弘安二年十月 日

沙門 日秀日弁等上

◆一〇〇

百六箇抄

(血脈抄) 弘安三年

854P

与日興

五十九歳

具勝本種・正法の実義・本・迹

勝劣正伝、本因妙の教手本門

の大師・日蓮謹んで之を結要す・

万年救護写瓶の弟子日異に

之を授与す云云、脱種合して一百六箇之れ在り、

靈山浄土・多宝塔中・久遠実成・無上覚王・直授相承本・迹

勝劣の口決相伝譜、久遠名字より已来た本因・本果の主・本地

自受用報身の垂迹 上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮詮要す。

理の一念三千・一心三観本・迹

三世諸仏の出世成道の

脱益寿量じゅりょうの義理ぎりの三千さんぜんは釈迦諸仏しやくあしよぶつの仏

心と妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの理觀りくわんの

一心いっしんとに蘊在うんざいせる理なり。

大通だいっつう今日・法華本・迹

久遠名字本因妙くおんみょうじほんにんみょうを本と

して中間ちゅうげん・今日・下種げしゅする故ゆえに久成くじょうを本なと為し中

間・今日の本・迹ともを俱ともに迹と

為なる者なり。

応仏いちだい一代の本・迹

久遠下種くおんげしゅ・靈山得脱りょうぜんとくだつ・妙法みょうほう

値遇ちぐうの衆生しゅじょうを利せん為ために無作三身むささんじん・寂光淨土じやくこうじょうどよ従り三

眼三智ちけんをもつて九界ちけんを知見し迹

を垂れ権ほごを施ほごす後に説く妙經みょうきょうの故ゆえに今日の本

迹共に迹これと之これを得る者なり。

しやくもん
迹門しやくもん為理円いっちの一致いっちの本・迹

しょうはく
松しょうはく 柏風波・万声一如・

しよほうじつそう
諸法実相しよほうじつそうの理上かんじんの観心かんじんは応仏かんじんの域かんじんを引かえた

ゆえ
る故ゆえに本・迹とは別れども唯ただ

ほっそう
理の上ほっそうの法相ほっそうなれば本・迹理観みようほうの妙法みようほうと

あらわ
顕あらわす、迹化しやつけは付属ふそく無きが故ゆえに

これひろ
之これを弘ひろめず。

心法即身成仏の本・迹そくしんじょうぶつ

中間・今日も迹門は心法ちゅうげん　しやくもん

の成仏じょうぶつなれば華嚴・阿含・方等・般若・法華の安けこん　あこん　ほうとう　はんにや　ほっけ

樂行品に至るまで円理に同ずるいた

が故ゆえに迹は劣り本は勝る者なり。まさ

心法妙法蓮華經の本・迹みょうほうれんげきょう

山家云く一切諸法・従本いわ　いっさいしよほう

已来・不生不滅・性相凝然・釈迦このかた　ふしようふめつ　しやうそうぎやうねん　しゃか口を閉ぢて身

子言を絶す云云、方便品には理ほうべん

具の十界互具を説く本門に至つて顕じゅうかいごく　ほんもん　いた

本理上の法相なれば久遠ほんり　ほつそう　くおんに対し

て之これを見るに実相は久遠垂迹の本門じつそう　くおんすいじやく　ほんもん

なる故ゆえに色法に非るなり。あらざ

従困至果・中間今日の本・迹し　か　ちゅうげん

像法の修行は天台・伝教そうほう　しゆぎやう　てんだい　でんぎやう

弘通ぐつうの本・迹は中間ちゅうげん・今日の迹門しやくもんを因と

為なし本門修行ほんもんしゆぎようを果と為なるなり。

本果みようの妙法蓮華經ほうれんげきようの本・迹

今日の本果は從因至果しなれ

ば本の本果には劣るなり、寿量じゆりようの脱益・

在世一段ざいせの一品二半は舍利弗しやりほつ等

の声開の為の觀心かんじんなり、我等われらが為

には教相きようそうなり、情こころは迹劣本勝

なり、又滅後めつご・像法相似そうほうそうじ・觀行解了かんぎようげりようの

行益も以て是かくの如ごとし、南岳なんがく・

天台てんだい・伝教でんぎようの修行しゆぎようの如ごとく末法まつぽうに入いつ

て修行しゆぎようせば帶權たいこん隔歷きやくりやくの行と

成なつて我等われらが為ためには虚戲の行と成る可

きなり、日蓮にちれんは一向いっこう本・天台てんだいは

一向いっこう迹・能よく能よく之これを問とう可べし。

疏じよの九に云わく爾前にぜんみな皆虚にして実ならず迹門しやくもんは一虚一実いちじつ・

本門ほんもんは皆実不かいじつふこ虚云云、爾前にぜん二種の失とがの事・一には存行布故

仍未聞権とて迹門しやくもんの理の一念三千を隠せり、二には言始しじよう成

故尚未発迹とて本門ほんもんの久遠を隠せり迹門しやくもん方便品一念三千・

二乗作仏を説いて爾膳・二種の失とが一つ脱がれたり、本門ほんもんに

至りて迹門しやくもんの十界因果じゆつかいゐんがを打破

る是即ち本因・本果の法門なり、実の一念三千も顕れず

すなわ ほんいん・ほんが

ほうもん

いちねんさんぜん

あらわ

二乗作仏も定らず云云、

世間の罪に依つて悪道に墮ちん者は

あくどう おち

じゅつぼう

爪上の土・仏法に依つて悪道に墮ちん者は

ぶつぼう よ

あくどう お

じゅつぼう

如し、故は信心の根本は本勝迹劣余の信心は枝葉なり。

ごと

しんじん こんほん

しんじん しよう

余行に渡る法華経の本・迹

よぎよう

わた ほけきよう

しんじん

いちだい はちまん

しよほう

本因妙の下種を受けて説く所の教なるが故に一

ほんにんみよう

げしゆ

ゆえ

次第梯☆は名字の妙法を下種して熱脱せし

しだいていとう

みようじ

みようほう

げしゆ

部八巻乃至一代五時・

ないし いちだい

ごじ

在世観心法華経の本・迹

ざいせ かんじん ほけきよう

ほんもん

にちれん ため

きようそう

の迹門なり云云。

観心なり天台の本門なり、日蓮が為には教相

かんじん

てんだい

ほんもん

にちれん ため

きようそう

しやくもん

の迹門なり云云。

しやくもん

の迹門なり云云。

の迹門なり云云。

しやくもん

の迹門なり云云。

の迹門なり云云。

しやくもん

の迹門なり云云。

の迹門なり云云。

脱益みょうほうの妙法きょうほうの教主きょうしゅの本・迹

所説しよせつの正法しやうほうは本門ほんもん

なり能説きやうしゅしやくそんの教主きやうしゅしやくそん釈尊しやくもんは迹門しやくもんなり、法みづか自ひろら弘ひろまら

ず人・法ひろを弘ゆえむる故ひろに人

法ともに尊し。

脱益こんしさんがいの今きやうしゅ此きやうしゅ三界さんかいの教主きやうしゅ本・迹

天上てんじやう・天下てんが唯ゆい我が独尊どくそん

は迹身門じきりやうぼん・密表みく寿量品しうりやうぼんの今こんしさんがい此きやうしゅ三界さんかいは即そく本身

門なり。

脱益そうほう像法じこくぐきやう時剋じこく弘經またてんちの本・迹

天台てんだいの本・迹ともは俱ともに

日蓮にちれんが迹門しやくもんなり時剋じこく亦また天地ふどうの不同ふどう之在ふどうり・

脱益しやくもん迹門しやくもん修行しやくもんの本・迹

正法しやうほう一千年しやくぎやうの修行しやくぎやう

の徳そうほうより像法そうほう一日いちにちの徳すくは勝すくれたるなるべし。

脱益しやくもん迹門しやくもん自解しやくもん仏乘ぶつじやうしやくぎやう修行しやくぎやうの本・迹

熱益ねつぎは迹・脱益だつぎは本

なり之に就ついて之これを思惟しゆいす可べし。

脱の五大尊の本・迹

・文殊もんじゆ・弥勒みろく・薬王やくおうは迹なり。

他受用たじゆう応おう仏は本・普賢ふげん

脱の真俗二諦の本・迹

てんだいだいしぐつう
天台大師弘通の本・迹前

十四品は迹門しやくもんに約し後十四品は本門ほんもんに約す云云、

ぜほうじゅうほういせけん じようじゅう
是法住法位世間相常住

文。

前十四品悉く流通分の本・迹

によらい ないしやう じよほん
如来の内証は序品より

滅後正像末めつごしょうそうまつの為なり、薬王菩薩やくおうぼさつは像法そうほう

てんだいこれ
の主天台是なり、密表の

法師品ほうしほんに云くいわ今此三界文こんしさんがい。脱益理觀一致いっちの本・迹

脱益理觀一致いっちの本・迹 本・迹殊ことなりと雖いえども不思議ふしぎ一と

云うは今日乃至中間ないしちゅうげんの本・迹は本・迹と分別ぶんべつす

れども本因ほんにんみよう妙を下種げしゆとし

て説く所の本・迹なれば迹の本は本に非あらず云云。

脱益戒体の本・迹

爾前・迹門・熱益の戒躰を迹

とし脱益の戒躰を本と為るなり、

迹門の・或は爾前

大小の戒に勝れ本門の・或は

爾前・迹門の戒に勝るなり。

脱の迹化七面の本・迹

像法には理觀を本と用うるなり

故に天台は迹を本と為し本を迹と行ず

るなり。

脱の迹化本尊の本・迹

一部を本尊と定むるに前十四品

は迹・後十四品は本と云云、是は一部八

卷なり云云。

脱益守護神の本・迹

守護する所の法華は本・守番し

奉る処の神等は迹なり、本因妙の影を万水

に浮べたる事は治定と云云。

脱益山王さんのうの本・迹

久遠・中間くおん ちゅうげんに受くる処ところの法華ほっけ

は本・夫れそより守り来る所は垂迹すいじやくなり、下種げしゅは本

因妙なり云云。

脱迹じゅうらせつ十羅刹女じゅうらせつにょの本・迹

久遠くおん・中間ちゅうげん・今日の理事りしは本

ちゅうげん

だいづう

しゅつせ

ところ

すいじゃく

・中間ちゅうげん・大通だいづう・今日出世冥守しゅつせする処ところは垂迹すいじゃくなり

り、下種げしゅは前まへの如ごとし云云。

脱迹ふそく付属ふそくの本・迹

脱益しやつけふそくの迹化しやつけふそく付属ちゅうげんは中間だいづう・大通

を本とし今日初任の終を迹とするなり、受くる

正法しやうほうは本・持つ方は迹なり。

脱迹かいえ開会かいえの本・迹

大通だいづうの初はつを開ひらと云いい今日初任の

終りを会と云うなり、本は大通だいづう・迹は初任なり

り、初頭はつとうを開ひらと云いい終合しうがを会と云

う云云、案位も理上の案位なり。

脱益じやうぶつ成仏じやうぶつの本・迹

寿量品じゅうりやうぼんは本・応仏は迹なり、

無作むさ三身寂光土さんじんじやくこうどに任して三眼・三智をもつて九界

を知見す云云。ちけん

脱迹三種教相の本・迹きようそう

一二種は迹・無開会・一種はかいえ

本有の開会なり、一種は開顕・二種は不開会・ほんぬ かいえ

所従者属の教相なり云云。しよじゆう きようそう

脱の五味所従の本・迹しよじゆう

天台・伝教の五味は横豎ともてんだい だんぎよう おうじゆ

に所従なり、五味は本・修行の人は迹たしよじゆう しゆぎよう

り、在世以て此くの如し云云。ざいせ か こと

脱迹父子の本・迹ふし

応仏は本・迹仏は迹なり、子しやくぶつ

・父の法を弘むるに世界の益ありと云云。ひろう せかい

脱迹師弟の本・迹してい

義理共に上に同じ是れ我が弟子ぎり こ だてし

応に我が法を弘む可し弘む可し云云。まさ ひろう べ ひろう べ

脱益感応の本・迹かんのう

久遠の天月の影を中間・今日くおん てんげつ ちゆうげん

の脱益の水に移すなり、

衆生しゅじょう久遠くおんに仏ぶつの善巧ぜんきょうを

蒙こむるとは是これなり。

脱益寂じやくしやう 照の本・迹

理の上の寂じやくしやう 照は妙覺みやうかく・

ないしかんぎやう

乃至觀行等の解了げりやうなり、理即りそくの凡夫ほんぶは無躰有用の本・迹

なり。

脱益ずいえん随縁ふへん不変の本・迹

在世ざいせと像法そうほうと之同じ真如しんによの義理ぎり

なり、随縁ずいえんも不変ふへんも共に理の一段の本

迹なり。

脱益九法妙の本・迹

三法妙に各三法妙を具ぐすれば九

法妙なり、法中の心法妙より起おこる所の生仏

二妙なり本・迹知るべし。

脱益八相・八苦習合の本・迹

八相は本・八苦は迹・同躰の

権実ごんじつ是なり。

脱益灌頂等の本・迹

灌頂かんちやうとは至極しごくなり後世ごしやう・仏・

菩薩ぼさつの灌かん項ちようは法華經ほけきやうなり、迹門しやくもんの灌かん項ちようは方便ほうべん読よみ

誦じゆ・欲令よくりやう衆生しゆじやう開かい仏ぶつ知見ちけんなり、

本門ほんもんの港項じやうりやうは寿量品じゆりやうほんどくじゆ読誦よみ・然我実成がじつじやうぶつ仏ぶつ已来いらいなり。

脱益だつえき説所かいだん戒壇かいだん本・迹

靈山りやうぜんは本てんだい・天台てんだい山は迹くおん・久遠くおんと

末法まつぽうとは事行まつぽうの戒かい・事戒じかい・理戒りかい・今日けふと像法ぞうぽうと

は理かいたいの戒躰かいたいなり。

脱益だつえき三世さんぜ三仏さんぶつ利りの本ほん・迹しやくじやう 世世きやうしゆ番番ばんばんの教主きやうしゆは本ほん・所化しよけの

衆生しゆじやうは迹しやくじやうなり、世世このかた已来このかた常じやうに我が化けを

受け番番しゆつせに出世しゆつせし師しと俱ともに生なまず。

脱益だつえき証しやうみやう明たほうぶつ・多宝たほうぶつ仏塔ぶつたうの本ほん・迹しやくもん 妙法蓮華經みやうほうれんげきやう皆是かいぜしんじつ眞實しんじつは本ほん・

多宝たほうぶつ仏は迹しやくもん・迹門しやくもん八品はつひん乃至ないし本門ほんもん之これを指さ

すなり云云。

脱益序正流通るつうげんぶん現文の本・迹

きようもん経文しやくぎ釈義の如ごとく理の上の

しょうしゅうるつうじよぶん正宗流通序文なれども本は勝すぐれ迹は劣

るなり、然るに迹は本無今有なれ

ば久遠くおんの迹を脱として今日の本

を説くなり云云。

脱益しようつじゆしやくぶく摂受折伏の本・迹

天台てんだいは摂受しようつじゆを本とし折伏しやくぶくを

迹とす、其そのの故ゆえは像法そうほうは在世ざいせの熟益冥利じゆくやくみりうりの

故なり福智具足ぐそくの故と云えり。

脱益二妙の本・迹

相待妙そうたいみょうは迹・絶待妙ぜったいみょうは本・

妙法みょうほうの外に更に一句いっくの余經よきよう無し云云、独一どっかい法界ほっかいの故

に絶待ぜったいと名なくるの釈これ之を思おもう

可べし。

脱益十妙の本・迹

本果妙は本・九妙は迹なり在世ざいせ

と天台てんだいとは機上ききの理なり、仏は本因妙ほんにんみょうを本と

為しな所化しよけは本果妙を本と思えり。

脱益六重しよせつ所説の本・迹

迹殊ことなりと雖も不思議いえどふしぎ一と云云、理具の

本・迹なれば一部とも俱に迹の上の本

・迹なり。

脱益六即そくしよはん所判の本・迹

妙覺みようかくは本・余は迹なり。

十行を果と為すな十行を因とし十廻向えこうを果とし十

玄九いわに云く初の十住じゅうじゅうを因と為しな

廻向えこうを因とし十地じゅうちを果とし十地じゅうちを

因と為しな等覺とうかくを果とし等覺とうかくを因とし妙覺みようかくを果

と為すな云云。

脱益十不二門の本・迹

理の上の不變ふへんの不二にして事行

の不二門には非あらざるなり。

脱益じゅっかいしぐ十界互具の本・迹

理具じゅっかいしぐの十界互具にして事行の互

具つぶさには非あらざるなり、九界の理を仏界ぶつかいの

理に押し入るる方ならでは脱せざ

るなり。

脱益十二因縁四諦の本・迹

経に云く無明乃至老死云云、

苦集滅は迹なり道諦は本なり。脱益

三土の本・迹 報土は本・同居・

方便は迹なり。

妙楽云く雖脱在現 本・迹理上の一致なり心は 寿量品も文は現 量な

れども 上行 所伝の本 因 妙を唱え 顕して後は 只久遠の 教相 にて

成仏 肝要の観心には非ずと云云。 籤一に云く本中体等迹と殊ならず脱

益の 妙覚乃至 観行 相似等の 妙法蓮華経は理に即して事を含む、 然も

本・迹一致に非ず 破廢 立本云云。 玄七に云く権実は智に約し教に約す

化他不定の時施す所の 権実 八教 なり 両所殊ならず久遠の本・今日の

脱益と両所なり。 籤七に云く理 浅深無し故に不殊と曰う 本因・本果の理を今日 中間 にも

寿量 顕本の理に推し入れて 顕すと釈するなり。 籤七に云く経に約すれば是れ 本門と雖も既に是れ 今世迹中の本名本門と

為す故に知んぬ、今日正く迹中利益に當る、乃至本成已後俱に中間と
名く中間本を顯すに利益を得る者尚迹益を成ず況や復今日をや文。

意は久遠本巢の迹を中間・今日の本と為す、又久遠名字の妙法の影を
中間今日に垂迹する故に下種に対して脱益寿量を迹と得たる証拠に

釈する是なり。

疏の一に云く衆生久遠に仏の善巧を蒙る久遠下種靈山得脱。

籤十に云く故に知んぬ今日の逗会は昔の成熟の機に赴くことを靈山
下種・久遠得脱の益。記二に云く本時の自行は唯円と合す本時とは本

周妙の時なり。化他は不定亦八教有り中間今日・化導の儀式なり。

玄七に云く迹の本は本に非ず今日の本果妙の事なり。

本の迹は迹に非ず本因妙の事なり。本・迹殊なりと雖も不思議一なり

本因妙の外全く迹無きなり迹門は即ち顯本の後には本無今有の方便無

得道なりと中島の証俊何にと問われし時、俊範法印答えて云く不思議

一と、求めて云く其の義如何、答えて云く文在迹門義在本門云云と、会し

て云く迹門既に益無し本門益有り本・迹勝劣不思議一と云云。

妙樂云く権実は理なり本・迹は事なり天台云く本・迹を二經と為すと

云えり如來の本・迹は理上の法相なり日蓮の本・迹は事行の法相なり

以上・脱の上の本・迹勝劣口決畢んぬ事の一念三千・一心三觀

の本迹
釈迦三世の諸仏・声聞・緣覺・人天の

唱る方は迹なり、南無妙法蓮華經は本なり。

久遠元初直行の本迹

ば本門なり、本果妙は余行に渡る故に本の上の迹なり、久遠釈尊

の口唱を今日蓮直に唱うるなり。

久遠実成直体の本迹

本種子なり、名字童形の位、釈迦は迹なり

我本行菩薩道是なり、

日蓮が修行は久遠を移せり。

久遠本果成道の本迹

名字の妙法を持つ

ところ じきたい ほんもん
処は直躰の本門なり直に唱え奉る我等は迹なり。

くおんじじゅうほうしん ほんしやく
久遠自受用報身の本迹

男は本・女は迹・知

がた しょうれつ
り難き勝劣なり。能く能く伝流口決す可き者なり 上行 じょうぎようしよでん 所伝の

みようほう みようじほんぬ
妙法は名字本有の妙法蓮華経なれば事理俱勝の本なり

くじようほんもん ほんしやく
久成本門為事円の本迹

にちれん でし
日蓮並に弟子檀袖郡

等は迹なり。

そくしんじようぶつ ほんしやく
色法即身成仏の本迹

親の義なり父の義な

ゆじゅつほん いご
り、涌出品より已後・我等は色法の成仏なり不渡 ふど

よぎよう みようほう
余行の妙法は本・

われら
我等は迹なり。

みようほうれんげきよう ほんしやく
色法妙法蓮華経の本迹

みようじ だいほう
男子と成つて名字の大法

ここ
を聞き己己・物物・事事・本・迹を顕す者なり、

又今日の二十八品・品品の内の勝劣しょうれつ

は通号は本なり勝なり・別号は迹なり劣なり云云。

妙楽みょうらく疏記じょき九に云くいわ故に知んぬ迹ゆえの実は本に於ておい猶虚なおなり、籤十に

云く、今日は初成を以て元始と為しな

爾前にぜん・迹門しゃくもんは大通だいつうを以て元始と為しな 迹門しゃくもん 本門ほんもんは本因を以て

元始と為す本門なほんもん

此の釈は元始本・迹・遠おんこん近しやうれつ勝劣を判ずるなり、本果妙は然

がじつじやうぶついらいなおしやくもん
我実成仏已来猶迹門なり、迹の本は本に非あらざるなり、本因妙は

がほんぎやうぼさつどうしんじつ
我本行菩薩道真実の本門なり、本の迹は迹に非あらず云云、我が内証

じゆりやうほん
の寿量品は迹化も知らず云云、重位秘蔵ひそうの義なり本・迹と分別す

る上は勝劣しやうれつは治定なれども末代まつだいには知り難がたき故云云。

く
久遠おんじゆうかこういん従果向因の本迹ほんしやく

しやかぶつ
本果妙は釈迦仏・本因妙ほんにんみやう

じやうぎやうぼさつ
は上行菩薩・久遠くおんの妙法は果・今日の寿量品じゆりやうほんは花なるが故ゆえに

じゆうかこういん
従果向因の本・迹と云うなり。

みやうほうれんげきやう
本因妙法蓮華經の本迹ほんしやく

よぎやう
全く余行わかに分たざり

みやうほう
し妙法は本・唱となうる日蓮にちれんは迹なり、手本てほんには不輕菩薩ぼさつの二十四

これ
字是なり、又其その行儀ぎやうぎ是なり云云。

ふどよぎようほけきよう
不渡余行法華經の本迹 ほんしやく

ぎり
義理上に同じ・直達 じきたつの

ほつけほんもんとな
法華は本門・唱うる釈迦は迹なり、
今日蓮が修行は久遠名字 くおんみょうじの

ふるまい
振舞に芥爾計も違わざるなり。

げしゅほけきようきようしゅほんしやく
下種の法華經教主の本迹

じじゅゆうしんじようぎよう
自受用身は本・上行

にちれん
日蓮は迹なり、我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の

ほんにんみょう
本因妙の事なり、其の教主は某なり。

げしゅこんしさんがい
下種の今此三界の主の本迹 ほんしやく

くおん
久遠元始の天上・天下 てんじようてんが

ゆいがどくそん
・唯我独尊は日蓮是なり、久遠は本・今日は迹なり、三世常住 さんぜじようじゅう

にちれんみょうじりしよう
の日蓮は名字の利生なり。

げしゅかんじんほんしやく
下種得法觀心の本迹

くおんげしゅ
久遠下種の得法は本な

ちゅうげん
り、今日中間等の得法觀心は迹なり、
分別功德品の名字初随喜 ぶんべつくとくみょうじししよずいき

の文の如し云云。

下種げしゅ自解じげ仏乘ぶつじょうの本迹ほんしやく

名字みょうじの妙法みょうほうを上じょうぎ行ぎょう

所伝しよでんと聞き得る方かたは自解じげ仏乘ぶつじょうの本ほんなり、聞き得て後受持じゆじする我等われら

は迹しよでんなり、故ゆえに伝でん教ぎょうより日蓮にちれんは勝まさるなり云云。

末法まつぽう時刻じこくの弘通ぐつうの本迹ほんしやく

本因妙ほんにんみょうを本とし今日

寿量じゆりょうの脱益だつえきを迹とするなり、久遠くおんの釈尊しやくそんの修行しゆぎよう

と今日蓮いまにちれんの修行しゆぎようとは

芥子けし計たがも違ちがわざる勝劣しやうれつなり云云。

本門ほんもん修行しゆぎようの本迹ほんしやく

正像しやうぞう二千年にせんねんの修行しゆぎようは

迹門しやくもんなり、末法まつぽうの修行しゆぎようは本門ほんもんなり、又中間ちゆうげん今日の仏ぶつ

の修行しゆぎようより日蓮にちれんの修行しゆぎようは

勝まさる者ものなり。

本門ほんもん五大尊しやくもんの本迹ほんしやく

久遠くおん本果ほんくわの自受用じじゆう報身ほうしん

によらい 如来は本なり、上行等の四菩薩は迹なり。

にちれん 日蓮本門弘通の本迹

ほんにんみよう 本因妙は本なり

がほんぎようぼさつどう 我本行菩薩道は迹なり云云。

ほんげ 本化事行一致の本迹

こと 本・迹殊なりと雖も

ふしぎ 不思議一云云、本因妙の外に並に迹とて別して之無

ゆえ し故に一と釈する者なり、

しんじつ 真実の勝劣の手本の義なり云云。

みなるつう 後十四品皆流通の本迹

しゃくそん 本果妙の釈尊・本因妙

じようぎようぼさつ の上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利

しか 益の為なり、然る間・日蓮

しゆぎよう 修行の時は後の十四品皆滅後の流通分なり

げしゆ 下種戒体の本迹

にぜん 爾前・迹門の戒躰は権実

雑乱そうらん、本門ほんもんの戒躰かいたいは純一無雜だいかいの大戒なり。

勝劣しょうれつ天地水火尚かな及およばず

具つぶさに戒躰かいたい抄ごの如ごとし云云。

本化ほんげ七面ほんしやくの本迹ほんしやく

末法まつぽうには事行てんだいを本とし

在世ざいせと像法そうほうとには理觀てんだいを本とするなり、天台てんだいの本書は理の上の事

なれば一向迹門いっこうしやくもんの七決、我家の本書は事の上の本なり。

下種三種法華の本迹げしゅ ほんしやく

二種は迹なり一種は本な

り、迹門しやくもんは隱密法華おんみつ ほうけ・本門ほんもんは根本法華こんぽん ほうけ・迹本文底なむの南無

妙法蓮華經みょうほうれんげきやうは顯說法華けんせつ ほうけなり。

本化本尊ほんげ ほんぞんの本迹ほんしやく

七字しちじは本なり・余じゆつかいの十界

は迹なり、諸經しよきやう・諸宗中王しよしゆわうの本尊万物下種ほんぞんの種子無上げしゅ しゆしむじやう

の大曼陀羅だいまんだらなり。

下種守護神げしゅ しゆごしんの本迹ほんしやく

守護しゆごし奉る所たてまつの題目だいもくは本

・護まもる所の神明しんみやうは迹なり、諸仏救世者しよぶつ・現無量神げんむりやう

力云云。

下種山王神げしゅ さんのうの本迹ほんしやく
久遠くおんに受くる所の妙法みやうほうは

本・中間ちゆうげん・今日けふ・未来みらいまでも守り来る所の山王明さんのう

神そくは即迹そくなり。

げしゅじゅうらせつによ　ほんしやく
下種十羅刹女の本迹

ぎり　ただしんみょう
此の義理上に同じ唯神明

と十女を本・迹に対する時・十羅刹女は本・神明
しんみょう

は迹なり。

ほんもんふぞく　ほんしやく
本門付属の本迹

くおんみょうじ
久遠名字の時・受る所の

みょうほう　じょうぎょう
妙法は本・上行等は迹なり、

くおん　けつちようふぞく
久遠元初の結要付属は

にちれん　じゅりようふぞく
日蓮今日寿量の付属と

どうい
同意なり云云。

ほんもんかいえ　ほんしやく
本門開会の本迹

くおん　な
久遠の本会を本と為す、

じゅりよう　な
今日寿量の脱を迹と為るなり・

みょうらくい　い
妙楽云く始頭を開と云い

終合を会と云う文。

げしゅじょうぶつ　ほんしやく
下種成仏の本迹

ほんにんみょう　じじゅゆうしん
本因妙は本・自受用身

は迹・成じようぶつ仏がたは難あらきに非なんず此の経を持つこと難なんけれ

ばなり云云。

下種三種教相の本迹げしゅ きようそう ほんしやく

二種は迹門・一種はしやくもん

本門なり、本門の教相は教相の主君なり、二種はほんもん ほんもん きようそう きようそう しゅくん

二十八品・一種は題目なだいもく

り、題目は観心の上の教相なり。だいもく かんじん きようそう

五味主の中の主の本迹ほんしやく

日蓮が五味は横豎共ににちれん おうじゅ

五味の修行なり、五味は即本門・修行は即迹しゅぎよう そくほんもん しゅぎよう そく

門なり。

本種師弟不変の本迹していふへん ほんしやく

久遠実成の自受用身は本くおんじつじよう じじゅゆうしん

・上行菩薩は迹なり、三世常恒不変の約束なりじようぎよう ぼさつ さんぜじようこうふへん やくそく

本種父子常住の本迹ふしじようじゅう ほんしやく

義理上に同じ、久遠のぎり ぐおん

名字即の俗諦常住の父子は今日蓮が修行に殊みようじそく そくたいじようじゅう ふし いまにちれん しゅぎよう

ならず、世間相常住是なせけん じようじゅうこれ

り。

四土具足の本迹ぐそく ほんしやく

なり、四土即常寂光そくじようじゃつこう

・寂光即四土の浄土は唯本門じやつこうそく じようど ただほんもん

三土は迹・常寂光土は本じようじゃつこうど

弘經の道場なり。ぐきよう どうじよう

下種感応日月の本迹げしゆ かんのおにちがつ ほんしやく

下種の仏は天月・脱仏はげしゆ てんげつ

池月なり。天台云く不識天月但觀池月云云。てんだいいわ てんげつ

下種随縁不變の本迹げしゆ ずいえん ふへん ほんしやく

体用同時の眞実・眞如・たいゆうどうじ しんじつ しんによ

一口の首題なり、本有の迹・本有の一念三千是なほんぬ ほんぬ いちねんさんぜんこれ

り、随縁不變一念寂照のずいえん ふへん いちねんじゃくしよう

本・迹なり。

下種九法妙の本迹げしゆ このかた ほんしやく

久遠下種の妙法は本・くおんげしゆ みようほう

已来の九法は迹なり。

下種げしゅ人天にんてんの本迹ほんしやく

久遠くおん下種げしゅの妙法みょうほうは本な

り、已来このかたの人天にんてんは迹なり。

下種げしゅ八相・八苦習合実勝ほんしやくの本迹

脱の八相は迹・種の八

相は本・脱の八苦は迹・種の八苦は本

なり煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しやうじ即涅槃

獎・常在じやうざい此不滅ふめつと云えり。

下種げしゅさいご最後直授摩頂の本迹ほんしやく

久遠くおんいちねん一念元初の妙法みょうほうを受

け項むじょうく事は最極無上の灌頂かんちようなり法は本

人は迹なり。

下種げしゅぐつう弘通戒壇実勝の本迹ほんしやく

三箇ひほうこんりゆうの秘法建立の勝地は

富士山本門寺本堂なり。

(上行じようぎよう院は祖師堂云云弘通ぐつう)

所は総じて院号なるべし云云)

下種げしゅじやくしよう寂照・実事じつじ・体用無上たいゆうむじようの本迹ほんしやく

生仏一如の事の上の

本覚ほんかくの寂照じやくしようなり人は迹・仏は本なり

云云。

下種げしゅさんぜ三世・三仏実益ほんしやくの本迹

日蓮にちれんは下種げしゅの利益りやく・三世さんぜ

・九世・種熟脱しゅじゅくだつ・本有一念ほんぬいちねんの利益りやくなり、天台云いわく若しは破も若し

は立みな皆是ほつ法華の意の修行しゅぎようの利益りやくなり。

下種げしゅ証明・多宝たほう仏塔の本迹ほんしやく

本法の妙法蓮華經皆是みようほうれんげきようかいぜしんじつ真實は本なり、

久遠くおん実成・無始無終・

の本師ほんしは妙法みようほうなり、本有ほんぬ

実成じつじよう釈迦・多宝たほうは迹なり。

下種げしゅ序正流通るつう・文底ほんしやくの本迹

応てんだい仏と天台とは正宗しょうしゅう一

品二半を本門ほんもんと定め現文げんぶんの勝劣しょうれつ、報仏と

日蓮にちれんとは流通るつうを本と定む文

底の勝劣しょうれつなり。

下種げしゅ折摂二門の本迹ほんしやく

日蓮にちれんは折伏しゃくぶくを本とし

摂受しやうじゅを迹と定む法華折伏ほつげしやくぶく・破権門理はこんもんりとは是これなり。

下種げしゅ二妙実行の本迹ほんしやく

日蓮にちれんは脱の二妙を迹と

為し種なの二妙を本と定む、然しかるに相待は迹・絶待ぜつたい

は本云云。

下種げしゆ十妙実体の本迹ほんしやく

日蓮にちれんは本因妙ほんにんみょうを本と

為しな、余を迹と為すなり、是れ真実しんじつの本因・本果ほんいん・ほんがの

法門ほうもんなり。

下種げしゆ六重具膳の本迹ほんしやく

日蓮にちれんは脱の六重を迹と

為しな、種なの六重を本と為るなり云云。

下種げしゆ六即実去の本迹ほんしやく

日蓮にちれんは脱の六即そくを迹と

為し種なの三世一即さんぜそくの六即そく・案位の理即りそくは開会かいえの

妙覚みょうかく・開会かいえの理即りそくは本覺ほんかく

の極果ごつかを本と為るなり。

下種げしゆ十二因縁いんねんの本迹ほんしやく

日蓮にちれんは応仏しよせつ所説の十二

因縁いんねんを迹なと為し、久遠報仏くおんしよせつ所説の十二因縁いんねんを本

と定むるなり。

下種げしゅ十不二門の本迹ほんしやく

日蓮にちれんが十不二門は事上極

極じりの事理一鉢用の不二門なり。

下種げしゅ十界互具じゅつかいこくの本迹ほんしやく

唱となえ奉る妙法・仏界ぶつかいは本

・唱となうる我等九界われらは迹なり、妙覺みょうかくより理即りそくの凡

夫までなり、実の十界互具じゅつかいこく

の勝劣しょうれつとは是これなり。

下種境智俱実げしゅきょうちの本迹ほんしやく

脱だつの境智きょうちは迹・種の境智きょうち

は本なり、名字即みょうじそくの境智きょうちは境智俱きょうちともに本・觀行即くわんぎようそく

の境智きょうちは境智俱きょうちともに迹なり云云。

意は十界じゅつかいの仏性ぶつしょう只一口ただに呼よび顯あらわすなり、本因口唱くしやうの勝まさるる

南無妙法蓮華經なり、初心成仏抄の如きなり、弘一に云く理
造作に非ざる故に天真と曰い証智円明の故に独朗と云う云云、
久遠の理と今日の理と理に浩作無し、然れも久遠は事上の理なり
今日は理上の理なり故に知んぬ本因妙の理は勝れ今日日本果妙の
理は劣るなり是理の本・迹なり是の故に独朗と云うなり、又云く
独一法界の故に絶待と名く云云。

天台は唯大綱を存して綱目を事とせず此の釈の意は大綱は本・
綱目は迹なり、天台・伝教の修行は綱目・日蓮日興等の修行
は大綱なり云云・如来秘密神通之力意得可し是事理の如来の本
・迹なり、秘密の如来は理性の如来なり、我等なり、神通の如来
は世尊なり秘密は本地神通は垂迹なり、世世以来常受我化・
我本行菩薩道所成寿命今猶未盡復倍上数云云。

本・迹しょうれつ勝劣其理はなはだ甚遠なり、仏も若し説かずんば弥勒みろく尚暗なし何いかに

況いや下地わんやげをや何いかに況いや凡夫わんやほんぶをや、本仏ほんぶつ本化ほんげ乃能ないのう究尽くじん云云、妙樂みょうらく

云いく具騰ぐとう本種ほんしゅ 本勝迹劣ほんしょうれつ 故ゆえに但名おに於おて以もて本・迹しょうれつを分わかつ下種げしゅ

名字みょうじ妙法みょうほう事行じぎやうの勝劣しょうれつなる所を判はずるなり本・迹しょうれつは身みに約やくし位ゐ

に約やくす 久遠くおん名字みょうじ即そくの身みと位ゐとの判はなり本よ従より迹しを垂たれ迹しは本よ

に依よる迹しは究責きうさくに非あらず、玄げんの一いつに開示かいじ悟入ごにゅう是これ迹しの要いなりと雖いえども

若もし顕本けんぽんし已すなれば即すなち本要ほんようと成なるなり、籤せんの一いつに若もし迹中じちゅうの事理じり

乃ない至し権実こんじつ無なくんば何なんぞ能よく長寿ちやうじゆの本ほんを顕あらさん云云。

已上程の本・迹勝劣畢しょうれつおわんぬ

右此けちの血脈けちみやくは本・迹勝劣しょうれつ其の數すう一百六箇ひゃくろくかん之これを注しゅす數量しゆりやうに

就おて表事ひょうじ有あり之これを覚かく知ちすべし・釈迦しやくか諸仏しよぶつ出世しゅっせの本懷ほんかい・真実しんじつ

之これを記しし留とどむ。 眞実しんじつ・唯ただ為いた一大事いちだいじの秘密みつなり、然しかる間かん・万年まんねん救護くごの為ために

就なかならず中六人の清弟を定むる表事は先先に沙汰するが如し云云、但し

直授結要けつちようふそく付属は一人なり、白蓮阿闍梨日興を以て惣貫首と為して

日蓮にちれんが正義せいぎ悉く以て毛頭程も之れを残さず悉く付属せしめ畢んぬ、

上首じようしゆ己下並に末弟等異論無く尽未来際に至るまで予が存日の如く

日興嫡嫡付法の上人を以て惣貫首と仰ぐ可き者なり。

又五人並に己下の諸僧等日本乃至一閻闍浮捏の外・万国に之を

流布せしむと雖も日興嫡嫡相承の皐茶羅を以て本堂の正本尊と

為す可きなり所以は何ん在世滅後殊なりと雖も付属の儀式之同じ曹

えば四大六万の直弟の大昔属有りと維も上行儀棒を以て結要の大

導師と定むるが如し、今以つて是くの如し六人以下数輩の弟子有り

と維も日興を以て結要付属の大將と定むる者なり。

又弘長配流の日も文永流罪の時も其の外語処の大難の折節も

先陣をかけ日蓮に影の形に随うが如くせしなり誰か之を疑わんや、

又延山地頭発心の根元は日興教化の力用なり、遁世の事甲斐の国

三牧は日興衆志の故なり。

又御本尊書写の事・予が顕し奉るが如くなるべし、若し日蓮御

判と書か^{じょうぎよう}ずんは天稗地舐^{あんりゆうぎよう}もよも用^{もち}い給^{たま}わじ
国と浄^{じようぎよう}行・安立^{あんりゆうぎよう}行と毘沙門^{びしゃもん}との間^まには若惱乱^{のうらん}者・無^む辺^{へん}行^{ぎよう}と持^{もち}
有^{くよう}供養者・福過^{ふくかじゆうこう}十号^{じゅうごう}と之^{これ}を害^{がい}す可^べきなり、経中の明文^{めいぶん}等意^{とうい}に任^{まか}す
可^べきか。
又立つ浪・吹く風・万物に洗^{せん}いて本・迹^{しやく}を分け勝劣^{しょうれつ}を并^{べん}ず可^べき
なり。

法華本門宗血脈相承事

本因妙の行者日蓮

之を記す。

予が外用の師・伝教大師生歳四十二歳の御時・仏立寺天台山 仏隴寺の大

和尚に値い奉り義道を落居し生死一大事の秘法を決したもうの

日、大唐の貞元二十一年太歳乙酉五月三日・三大章疏を伝え各七

面七重の口決を以て治定し給えり、所謂玄義七面の決とは正釈

五重列名に約して決したもう。

一に依名判義の一面・名とは法の分位に於いて施設す・体とは

宰主を義と為す・宗とは所作の究竟なり、受持本因の所作に由つ

て口唱本果の究竟を得、用とは証体本因・本果の上の功能徳行

なり、教とは誠を義と為す誠とは本の為の迹為れば迹は即ち

有名無実無得道なるを真相の名題は本・迹同じければ本・迹一致

と思惟す可き事を大に誠んが為に三種の教相を起て種熟脱の論

不論を立つる者なり、經文解釋明白なり、此くの如く文・句

句の名・妙正の深義・本・迹勝劣の本意を顕し給う者なり、

然りと雖も天台傳教の御弘通は偏に理の上の法相・迹化付属・

像法の理位・觀行五品の教主なれば迹を表と為して衆を救い、

本を隠して裏に用る者なり甚深甚深秘す可し秘す可し。

二に仏意・機情・二意の一面、仏意は觀行・相似を本と為し機情

は理即・名字を本と為す、何れも体用を離れず体用は法華の心智

に依つて一代五時の次第淺深を開拓す、次に機情とは大通結縁の

衆の為に四味の調養を設け法華に來入す、本・迹二門乃至文

・句句此の二意を以て分別す可き者なり。

三に四重淺深の一面、名の四重有り・一には名体無常の義・爾前

の諸經・諸宗なり、二には体実名仮・迹門・始覺無常なり、

三には名体俱実・本門本覺常住なり、四には名体不思議是れ

觀心直達の南無妙法蓮華經なり、湛然の云く「雖脱在現・具騰

本種」云云次に体の四重とは一に三諦隔歷の体・爾前權教なり、

二に理性円融の体・迹門十四品なり、三に三千本有の体・本門

十四品なり、四に自性不思議の体・我が内証の寿量品事行の

一念三千なり、次に宗の四重とは一に因果異性の宗・方便權教

なり、二に因果同性の宗・是れ迹門なり、三に因果並常の宗

・即ち本門なり、四に因果一念の宗・文に云く「芥爾も心有れば

即ち三千を具す」と、是れ即ち末法純円・結要付属の妙法な

り云云、次に用の四重とは一に神通幻化の用・今經已前に明か

す所の仏・菩薩・出仮利生の事、二に普賢色身の用・即ち一身の

中に於て十界を具する事なり本・迹一代五時に亘る、三に無作

常住の用・証道八相有り無作自在の事なり、四に一心の化用・

或説己身等なり、次に教の四重とは一には但顯隔理の教・

権小なり、二には教即実理の教・迹門なり、三には自性会中の

教・応仏の本門なり、四には一心法界の教・寿量品の文の底の

法門・自受用報身如來の眞実の本門・久遠一念の南無

妙法蓮華經・雖脱在現具騰本種の勝劣是なり。

第四に八重淺深の一面なり、名の八重とは一に名体永別の名・二

に名体不離の名・三に従体流出の名・四に名体具足の名・五に

本分常住の名・六に果海妙性の名・七に無相不思議の名・八に

自性己己の名・乃至教知る可し云云、文に任せて思惟す可きなり。

第五に還住当文の一面、四八の浅深を以て本・迹勝劣を知る可し。

第六に但入己心の一面、始め大法東漸より第十の判教に至るまで文の生起を闇おき一向に心理の勝劣に入れて正意を成ず可し、謂く大法とは即ち行者の己心の異名なり云云、釈の意は文義の広博を離れて首題の理を專にすと釈し給うなり。

第七に出離生死の一面、心は一代応仏の寿量品を迹と為し内証の寿量品を本と為し釈尊久遠名字即の身と位とに約して南無妙法蓮華經と唱え奉る是を出離生死の一面と名く、本・迹約身約位の釈・之を思う可き者なり已上。玄文畢る。

文句の七面の決とは、一に依名の一面・其の義上の如し、二に感応の一面・三時弘經に亘る可し、爾前・迹門の正像二千年

くきよう 弘經の感応より本門末法弘通の感応は眞実眞実勝るなり、三に
しきよう 四教の一面・四に五時の一面・五に本・迹の一面・六に体用の一
面・七に入己心の一面・悉く皆其の心前に同じ、智威大師の伝に
げんぎ 是は玄義・文句の兩部には爾前・迹門に各三十重の浅深を以て口
たま 決し給えり、具には伝教大師七面決の如し。

まかしかん 又摩訶止観一部には十重顕観を立てて是を通じ給えり、一は待教
にぜん 立観・爾前・本・迹の三教を破して不思議実理の妙法蓮華經の
とん 観を立つ、文に云く円頓者初縁実相と云云、迹門を理具の
ほっけ 一念三千と云う脱益の法華は本・迹共に迹なり、本門を事行の
いちねんさんぜん 一念三千と云う下種の法華は独一の本門なり、是を不思議実理の
げしゆ 妙観と申すなり、二に廃教立観・心は権教並に迹執を捨て
もう 妙観と申すなり、二に廃教立観・心は権教並に迹執を捨て
ほんもん 本門首題の理を取つて事行に用いよとなり、三に開教顕観文に云

いっさいしよほう

ぶつぼう

ぶつぼう

く一切諸法・本是仏法三諦の理を具するを名けて仏法と為す云何

んぞ教を除かん云云文意は觀行理觀の一念三千を開して名字事行

いちねんさんぜん

いちねんさんぜん

みょうじ

の一念三千を顯す、大師の深意・釈尊の慈悲・上行所伝の秘

これ

きようそう

ほつけ

かんじん

ほつけ

曲・是なり、四に会教顯觀・教相の法華を捨てて觀心の法華を

これ

ふしぎ

きようそう

ほつけ

かんじん

ほつけ

信ぜよと、五に住不思議顯觀・文に云く理は造作に非ず故に天真

い

えんみよう

どくろう

そうさく

てんしん

と曰う・証智円明なるが故に独朗と云う云云、釈の意は口唱首

そうさく

どくろう

くおんみようじ

題の理に造作無し、今日熟脱の本・迹二門を迹と為し久遠名字の

ほんもん

しんじんこうじよう

ただよねんなく

なむみようほうれんげきよう

本門を本と為す、信心強盛にして唯余念無く南無妙法蓮華經と

ほんもん

しんじんこうじよう

ただよねんなく

なむみようほうれんげきよう

なず

唱え奉れば凡身即仏身なり、是を天真独朗の即身成仏と名く。

ぜんだい

そくぶつしん

てんしんどくろう

そくしんじようぶつ

なず

問うて曰く前代に此の法門を知れる人之有りや、答えて曰く之有り、

ぜんだい

ほうもん

これあ

これあ

求めて云く誰人ぞや、示して云く釈尊是なり、尋ねて云く仏を除

だれびと

しやくそんこれ

しやくそんこれ

てんだい

き奉つて余に之を知れる人師論師有りや、答えて曰く天台の云く

にんしろんし

てんだい

「天親てんじん 竜樹りゅうじゆ ・ 内鑒ないがん 冷然れいねん ・ 外適時宜げちやくぎぎ」と、今日南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうは
 南岳なんがく ・ 天台てんだい ・ 妙樂みょうらく ・ 伝教でんぎやう の内鑒冷然ないがんれいねん ・ 外適時宜げちやくぎぎ なり、内鑒冷然ないがんれいねん
 ・ 外適時宜げちやくぎぎ の修行しゆぎやう の日は本・迹いっち 一致いっち なり、有智無智うちむち を嫌きら わず円頓えんみん
 者初縁実相じつそう の理り は造作そうさく に非そ ざる故ゆゑ に天真てんしん と曰い う ・ 証智えんみ 円明みん の故ゆゑ に

独朗どくろうと曰うと云つて理位觀行に趣おもむかしめ利益りやくを為し末法まつぽうの時を待
つ者なり、故に天台てんだい云く「但當時大利益りやくを獲るのみに非ず後・五百
歳遠く妙道みょうどうに霑うるおう」と云云、天台てんだい・章安しょうあん・妙樂みょうらく・伝教でんぎょう等の大
聖は内証ないしょうは本・迹勝劣しょうれつ・外用は本・迹一致いっちなり、其の故は教相きょうそう
も觀心くわんじんも相似觀行解了きやうげの人師にんし・時機じき亦像法そうほうなり、付属ふぞくは即妄授余人そくもうじゆよにん
・御身おんみも亦迹化しゃっけの衆・觀音かんのん・妙音みょうおん・文殊もんじゆ・藥王やくおう等の化身けしんなり、今
末法まつぽうは本化ほんげの薩さつ☆・上行じやうぎやう等の出世しゅつせの境・本門ほんもん流宣りゅうせんの時尅こくなり、
何ぞ理觀を用いて事行を修せざらんや、予が所存しよぞんは内証ないしょう・外用共
に本・迹勝劣しょうれつなり、若し本・迹一致いっちと修行しゆぎやうせば本門ほんもんの付属ふぞくを失う
物怪むあやしなり。

本・迹ふどうの不同ふどうは処処しよしよに之を書す、然りしかと雖も宿習拙つたなき者本・迹に
迷倒めいとうせんか若し本・迹勝劣しょうれつを知らずんば未來みらいの惡道最も不便ふびんなり

宿業を恥はじじず還うらつて予を恨む可きか、我が弟子等の中にも天台てんだいでんぎ傳教

の解了の理觀を出でず、本・迹に就いちおうしやうれつさいおういつちて一往勝劣再往一致の謬義を

存じたして自他を迷惑まいせしめんの条・宿習の然らしむる所か、閻浮提

第一だいの秘事ひじ為りと雖も万年救護まんねんまもの為に之を記しるし留とどる者なり、我が

未来みらいに於て予が仏法を破ぶつぽうらん為に一切衆生の元品いっさいしじゅうがんぽんの大石・大六天

の魔王まおう・師子身中の蝗蟲ししと成いなむしつて名を日蓮にちれんに仮かりて本・迹いっ一致と云

う邪義じやぎを申し出して多の衆生しゅじやうを当に惡道に引くべし、若し道心どうしん有

らん者は彼等かれらの邪師じやしを捨てて宜く予が正義せいぎに随うべし、正義せいぎとは本

・迹しょうれつ勝劣じんみつの深秘具騰本種の実理なり、日蓮にちれん一期の大事だいじなれば弟子でし

等にも朝あしたな夕あしたなに教え亦一期の所造等しよそうごうごう悉く此の義なり、然りと

雖も迹執いえどしやくしゅうを出でず・・或あるは輕見惑ある・或あるは蔑思惑ある・或あるは癡じんじや塵沙惑ある・或ある

迷まい無明惑まい、故に日蓮にちれんが立義りつぎを用いざるか、予が教相きやうそう・觀心かんじんは理即りそく・

名字・愚惡愚見の爲なり。

にちれん みようじそく

日蓮は名字即の位・弟子檀那は理即の位なり、上行 所伝 結要

ふそく ぎようぎ

付属の行儀は教觀判乘・皆名字即・五味の主の修行なり、故に

きようそう

教相の次第要用に依る可し唯大綱を存する時は余は綱目を事とせ

ぎようそう しだい よ ただたいこう そん

ず彼は綱目・此れは大綱・彼は綱目の教相の主・此れは大綱首題

の主・恐くは日蓮の行儀には天台伝

教も及ばず、何に況や他師の

ぎようぎ

行儀に於てをや、唯在世八箇年の儀式を移して滅後末法の行儀と為

す、然りと雖も仏は熟脱の教主某は下種の法主なり、彼の一品二

半は舍利弗等の爲には觀心たり、我等・凡夫の爲には教相たり、

りそく しやりほつ かんじん われら ほんぶ きようそう

理即・短妄の凡夫の爲の觀心は余行に渡らざる南無妙法蓮華經

これ

是なり、是くの如く深義を知らざる僻人・出来して予が立義は

きようそう はずれ かくのこう じんぎ りつき

教相辺外と思う可き者なり、此等は皆宿業の拙き修因感果の至極

みな つたなしゅういんかんか

教相辺外と思う可き者なり、此等は皆宿業の拙き修因感果の至極

せるなるべし、彼の天台大師には三千人の弟子ありて章安一人朗然なり、伝教大師は三千人の衆徒を置く義真已後は其れ無きが如し、今以て此くの如し数輩の弟子有りと雖も疑心無く正義を伝うる者は希にして一二の小石の如し秘す可きの法門なり。

第六に住教顕観七に住教非観八に覆教顕観九に住教用観十に住観用教此の五重は上の五重の如し思惟す可し。

問うて云く本・迹雖殊不思議一・本・迹の教に於て別して不思議の観理を顕わす故にと云云、機情に約すれば本・迹に於て久近の異有る可し、是れ一往の浅義なり、内証に約して之を論ずれば勝劣有る可からず再往の深義は不思議一なり云云如何が意を得可けんや、答えて云く住教顕観は煩惱即菩提・住教非観は法性寂然・覆教顕観は名字判教・住教用観は不思議一・住観用教は以顕妙円と申す

だいじこれ
大事是なり、教観不思議・天然本性の処に独一法界の妙観を立つ

ふしぎ
是を不思議の本・迹勝劣と云う亦絶対不思議の内証・不可得・言

どうだん
語道断の勝劣は天台・妙楽・伝教の残す所我が家の秘密観心

じきたつ
直達の勝劣なり、迹と云う名ありといえども有名無実・本無今有

しゃくもん
の迹門なり、実に不思議の妙法は唯寿量品に限る故に不思議一

しゃくもん
と釈するなり、迹門の妙法蓮華經の題号は本門に似ると雖も義

てんち
理・天地を隔つ成仏亦水火の不同なり、久遠名字の妙法蓮華經

くちぎがき
の朽木書なる故を顕さんが為に一と釈するなり末学疑網を残すこ

なか
と勿れ、日蓮・靈山会上・多宝塔中に於て親たり釈尊より直授し

ひほう
奉る秘法なり、甚深甚深秘す可し秘す可し伝う可し伝う可し。

まかしかん
摩訶止観七面口決とは依名判義・附文元意・寂照一相・

きようぎようしやう
教行証・六九二識・絶諸思慮・出離生死の一面已上、一切

諸法・従本已来・不生不滅・性相凝然・釈迦閉口・身子絶言
云云、是は迹門天台・止觀の内証なり、本門日蓮の止觀は釈迦
は口を開き文殊は言語す迹門不思議・不可説・本門不思議
可説の証拠の釈是なり、亦三大部に於て一同十異・四同六異
之有り、伝教仏立寺より之を口決す、一同とは名同なり、十
異とは名同義異・所依異・觀心異・傍正異・用教異・對機異・
顯本理異・修行異・相承異・元旨異・四同とは名同・義同・
所依・同所・顯同なり、六異とは釈異・大綱綱目異・本末異・
觀心異・教内外觀異・自行化他異・是なり、今要を以て之を言
わば迹本觀心同名異義なり始終・本末共に修行も覺道も時機
も感応も皆勝劣なり。

此の下・二十四番勝劣なり、彼の本門は我が迹門・彼の勝は此

の劣彼の深義は予が浅義・彼の深理は此の浅理・彼が極位は此の浅位・彼の極果は此の初心・彼の観心は此の教相・彼の台星の国に出生す・此れは日天の国に出世す・彼は薬王・此れは上行・彼は解了の機を利す・此れは愚悪の機を益す・彼の弘通は台星所居の高嶺なり・此の弘経は日王・能住の高峰なり・彼は上機に教え・此れは下機を訓ず・彼は一部を以て本尊と為し・此れは七字を本尊と為す・彼は相對開会を表と為し・此れは絶対開会を表と為す・彼は熟脱此れは下種・彼は衆機の為に円頓者初縁実相と示し・此れは万機の為に南無妙法蓮華經と勧む・彼は悪口怨嫉・此れは遠島流罪・彼は一部を讀誦すと雖も二字を讀まざること之在り・此れは文文句句・悉く之を讀む・彼は正直の妙法の名を替えて一心三觀と名く・有の儘の大法に非ざれば

帶権の法に似たり此れは信謗ひし彼此・決定けつじよう成菩提ぼだい・南無なむ
妙法蓮華經みようほうれんげきやうと唱えかく、彼は諸宗しよしゆうの謬義みようぎを粗書おほき顯あらわすと雖も未
だ言說まねせず此れは身命しんみやうを惜おしまず他師たしの邪義じやぎを糺ただし三類さんるいの強敵かうてきを
招まねく・彼は安樂普賢あんらくふげんの説相せつそうに依り此れは勸持不輕かんじふぎやうの行相ちを用ゆ・
彼は一部に勝劣しやうれつを立て・此れは一部を迹と伝う・彼は応仏のい
きをひかう・此れは寿量品じゆりやうぼんの文底もちを用ゆ・彼は応仏昇進の
自受用報身じじゆゆうほうしんの一念三千一心三觀いちねんさんぜんいつしんさんかん・此れは久遠元初くおんの自受用報身じじゆゆうほうしん
無作本有むさほんぬの妙法みようほうを直に唱う。
此れ等の深意しやつけは迹化しやつけの衆・普賢ふげん・文殊もんじゆ・觀音かんのん・藥王等やくおうの大菩薩ほさつに
も付属ふぞくせざる所の大事だいじなれば知らざる所の秘法ひほうなり況や凡師ほんしに於
てをや。

若し末法まつぽうに於て本・迹一致いっちと修行しゆぎやうし所化等に教ゆる者ならば我が

身も五逆罪ごぎやくざいを造らずして無間むげんに墮だち其れに随從ずいじゅうせんともがらも

阿鼻あびに沈しづまん事こと疑うたがい無なき者ものなり、此この書しよ一見ひとびとの人人ふげんは理ふげん普もんじゅ賢もんじゅ智もんじゅ文もんじゅ殊もんじゅ

一言いっぴんの薩さつ☆生死しやうじ絶断かくごの際きわ・定光じやうくわう覚悟かくごの大菩薩だいぼさつなり、伝でん教きやう云いく

「文殊もんじゅの利剣りけんは六輪りくりんに通とほじ十二じふにの生類しやうるいを切断きつせんす、一刀いっぴやうを下くだして

妙法みやうほう 万方ばんぱうに勅しやくするに自然しぜんに由よお三諦さんぢを出だす見聞けんもん覚知かくちに明あきなり」

此この一言いっぴんの三際さんがいを示しすに一言いっぴんに如ごとかず、若しし未達みだつの者ものも一頌いっしゆを開ひらく

に題だい目もく三般さんぱん三諦さんぢ同どうじく通知つうちせざること無なし、生仏みずか自みづから一現いっげんなる是こゝを

一言いっぴんの妙旨むね一教いっけうの玄義げんぎと謂いう云云いんいん、天台てんだいの云いく「一言いっぴん三諦さんぢ・刹那しやくな

成道じやうどう・半偈はんげ成道じやうどう」と云云いんいん、伝でん教きやうの云いく「仏界ぶつがいの智ちは九界くがいを境きやうと

為なし九界くがいの智ちは仏界ぶつがいを境きやうと為なす境智きやうち互たがひに冥薰みやうくんして凡聖ほんせい常恒じやうこうなる

是こゝを刹那しやくな成道じやうどうと謂いう、三徳さんとく即すく三徳さんとくと解とくれば諸悪しよあく☆に真善しんぜんなる是こゝ

を半偈はんげ成道じやうどうと名なく」今いま会釈えしやくして云いく諸仏しよぶつ菩薩ぼさつの定光じやうくわう三昧さんまいも凡聖ほんせい一

如の証道刹那半偈の成道も我が家の勝劣修行の南無
妙法蓮華經の一言に摂し尽す者なり、此の血脈を列ぬる事は末代
浅学の者の予が仮字の消息を蔑如し天台の漢字の止観を見て眼目
を迷わし心意を驚動し・或は仮字を漢字と成し、或は止観明静
・前代未聞の见到耽り本・迹一致の思を成す、我が内証の寿量品
を知らずして止観に同じ但自見の僻見を本として予が立義を破失し
て悪道に墮つ可き故に天台三大章疏の奥伝に属す、天台伝教等
の秘し給える正義・生死一大事の秘伝を書き顕し奉る事は且は恐れ
有り且は憚り有り、広宣流布の日公亭に於て応に之を披覽し奉るべ
し、会通を加える事は且は広宣流布の爲且は末代浅学の爲なり又
天台伝教の釈等も予が真実の本懐に非ざるか、未来嬰兒の弟子等
彼を本懐かと思うべきものか。

いぬ ぶんえい めんきよ
去る文永の免許の日・爾前・迹門の謗法を対治し本門の正義を立
て被れば不日に豊歳ならむと申せしかば聞く人毎

に舌を振り耳を塞ぐ、其の時方一人も無く唯我と日蓮与我日興計

りなり。

問うて云くじゅうりょうぼん寿量品文底の大事と云う秘法如何、答えて云く唯密

の正法なりしょうぼう秘す可し秘す可し一代いちだい応仏のいきをひかえたる方は

理の上の法相なれば一部共に理の一念いちねんさんぜん三千迹の上の本門ほんもん寿量ぞ

と得意せしむる事を脱益の文の上と申すなり、文の底とは久遠くおん

実成の名字の妙法みょうぼうを余行にわたさず直達じきたつの正觀事行の一念いちねんさんぜん三千

の南無妙法蓮華經是なり、権実こんじつは理にほん今日本・迹理なり本・迹は事くおん久遠

本・迹事なり、亦権実こんじつは約智約教やつきょう一代いちだい應仏本・迹本・迹は約身約位みょうじ名字

身久遠くおん本・迹亦云く雖脱在現具騰本種といへり、釈尊しゃくそん久遠名字即の

位の御身の修行しゅぎょうを末法今時・日蓮にちれんが名字即の身に移せり理は

造作そうさくに非ず故に天真てんしんと曰い証智円明えんみょうの故に独朗どくろうと云うの行儀ぎょうぎ

本門立行の血脈ほんもん けちみやく之を注す秘す可し秘す可し。

又日文字もんじの口伝くでん・産湯うぶゆの口決くけつ・二箇だいいしは兩大師むねの玄旨むねにあつ、本尊ほんぞん七

箇くでんの口伝くでんは七面の決けつに之を表す教化きやうけくきやう弘經くつうの七箇くつうの伝でんは弘通くつう者の大要

なり、又此こゝの血脈けちみやく並へいに本尊ほんぞんの大事だいじは日蓮にちれん嫡嫡ちやくちやく座主ざす伝法でんぽうの書・

塔中相承たつちゆう そうじやうの稟承ぼんじやう唯授ただ一人ひとりの血脈けちみやくなり、相構あいかまええ相構そうかまええ秘す可し

秘す可し伝う可し、法華本門宗血脈相承ほつけほんもん けちみやく そうじやう畢はぬ。

弘安五こうあん太歳壬午十月十一日

日蓮 在御判

日興之を記すにっこうこれしる

878

御名みな乗りの事、始めは是生・実名は蓮長と申し奉るもう たてまつ後には日蓮にちれん

と御名みな乗り有る御事は悲母梅菊女おんこと ひもの童女の御名なり平の畠山殿わらの御名なり平の畠山殿法号妙蓮禅尼の

おんものがたり

御物語り御座す事には、我に不思議の御夢想あり、清澄寺に通きよすみでら

もう

夜申したりし時汝が志真に神妙なり一閻浮提第一の宝を与ええんぶだい だいいち

んと思うなり、東条片海に三国の太夫と云う者あり是を夫と定これ

めよと云云、其の歳の春・三月廿四日の夜なり正に今も覚え侍るおぼ はべ

なり。

我父母に後れ奉りて已後詮方なく遊女の如くなりし時御身の父ふ ぼ たてまつ いご たわれめ ごと おんみ

に嫁がり、或夜の靈夢に日く叡山の頂に腰をかけて近江の湖ある いわ えいざん いただき

水を以て手を洗うて富士の山より日輪の出でたもうを懐き奉るとにちりん い いた たてまつ

思おもうて打ち驚おどろいて後・月水留とどると夢物ものがたり 語もりを申し侍はべれば、父の
太夫我ふしぎも不思議ふしぎなる御夢想こくうを蒙ぼさつむるなり、虚空蔵菩薩ぼさつ貌吉きき児を
御肩たまに立て給たまう、此の少人ためは我が為ためには 上行じようぎよう 菩提薩ぼだい☆なり日の
下の人の為ためには生財摩訶薩まかさつ・なり、亦一切有情またいっさいうじようの為ためには行く末
三世常恒さんぜじようこうの大導師どうしなり、是これを汝なんじに与えんとしたもうと見て後
御事懷妊おんことかいにんの由よしを聞かたくと語かたり相あいたりき、さてこそ御事おんことは聖人しようにんな
れ。

又產生またまるべき夜の夢に富士山の頂いただきに登のぼつて十方じゆつぽうを見るに
明あなる事たなごころ 掌てのひらの内を見るが如ごとし三世明白さんぜなり、梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・四
大天王等しやてんの諸天しよてん悉ことごとく来下らいげして本地ほんち自受用報身じじゆゆうほうしん如來にょらいの垂迹すいじやく・
上行菩薩じようぎようぼさつの御身おんみを凡夫地ぼんぷに謙下けんげし給たまう御誕生みだ生は唯今ただなり、
無熱池むねつちの主阿那婆達多竜だつたりゆうおう 王八くどく・功德水くどくを応まさに汲み來るべきなり、

まに 産湯に浴し奉るべしと諸天に告げ給えり、仍て竜神王即時
に青蓮華を一本荷い来れり、其の蓮より清水を出して御身を浴
し進らせ侍りけり、其の余れる水をば四天下に灑ぐに其の潤いを
受くる人畜・草木・国土世間・悉く金色の光明を放ち四方の
草木花発らき菓成る。

男女座を並べて有れども煩惱無く淤泥の中より出れども塵泥に
染まず、譬えば蓮華の泥より出でて泥に染まざるが如し、人天・
竜畜・共に白き蓮を各手に捧げて日に向つて今此三界・皆是我有
・其中衆生・悉是吾子・唯我一人・能為救護と唱え奉ると見て
驚けば則聖人出生し給えり、每自作是念・以何令衆生・
得入無上道・速成就仏身と苦我・き給う。

我少し寐みし様なりし時・梵帝等の諸天一同・音に唱えて言く

よきかなよきかな
善哉善哉・善日童子・末法教主釈迦仏と三度唱えて作礼して

いたたま 去し給うと寤に見聞きしなりと慥に語り給いしを聞き食しさて

それがし 是某は日蓮なりとの給いしなり。

しょうにんかき 聖人重ねて曰う様は日蓮が弟子檀那等・悲母の物語りと思う

すなわ べからず即ち金言なり其の故は予が修行は兼ねて母の霊夢にあ

にちれん りけり・日蓮は富士山自然の番号なり、富士は郡名なり実名を

だいびやくれんげさん ば大日蓮華山と云うなり、我中道を修行する故に是くの如く国

にほん をば日本と云い神をば日神と申し仏の童名をば日種太子と申し予

すなわ が童名をば善日・仮名は是生・実名は即ち日蓮なり。

くおんげしゆ 久遠下種の南無妙法蓮華經の守護神は我国に天下り始めし国

は出雲なり、出雲に日の御崎と云う所あり、天照太神始めて天下

たま ゆえ り給う故に日の御崎と申すなり。

我が釈尊・法華經を説き顯し給いしより已來十羅刹女と号す、

十羅刹と天照太神と釈尊と日蓮とは一体の異名本地垂迹の

利益廣大なり、日神と月神とを合して文字を訓ずれば十なり、

十羅刹と申すは諸神を一体に束ね合せたる深義なり、日蓮の日は

即日神・昼なり蓮は即月神・夜なり、月は水を縁とす蓮は水より

生ずる故なり、又是生とは日の下の人を生むと書けり。

日蓮は天上・天下の一切衆生の主君なり父母なり師匠なり、

今久遠下種の寿命品に云く「今此三界・皆是我有主君の義なり其中

衆生悉是吾子父母の義なり而今此処・多諸患難国土草木唯我一人能為

救護師匠の義なり」と云えり、三世常恒に日蓮は今此三界の主なり、

日蓮は大恩以事希有・憐愍教化利益・我等無量億劫誰能報者なる

べし。

も 若し日蓮にちれんが現在げんざいの弟子でし並びに未来みらいの弟子等でしの中に日文字もんじを名乗なをり
の 上の字もんじに置おかずんば自然じねんの法罰こおむを蒙かぶると知るべし、予いが一期いちごの
く 功德くどくは日文字もんじに留とどめ置おくと御説法せつぽうありし儘まま・日興謹にっこうつつしんで之これを記しるし
奉たてまつる。

しょうにん 聖人の言いわく此その相承そうじょうは日蓮にちれん嫡嫡ちやくちやく一人の口決ぐけつ・唯授ただ一人の秘
伝でんなり神妙神妙しんめうしんめうとのたまいて留とどめ畢おわんぬ。

◆一〇三 善無畏三蔵抄ぜんむいさんぞう

ぶんえい 文永七年 四十九歳御作 881P

ぼう 与義浄房 浄顕房 於鎌倉かまくら

ほけきよう 法華経は一代聖教の肝心かんじん八万法蔵はちまんほうぞうの依りどころなり、
だい にちきよう 大日経・華嚴経・般若経・深密経等の諸の顕密の諸経は震旦しんたん
が がつし 月氏・竜宮天上十方世界の国土の諸仏の説教恒沙塵数な
りゆうぐうてんじようじゅつぽうせかいこくどしよぶつせつきようこうしやじんじゆ

り、大海を硯の水とし三千大千世界の草木を筆としても書き尽し

がたき経経の中をも・或は此れを見・或は計り推するに法華経

は最第一におはします、而るを印度等の宗日域の間に仏意を窺は

ざる論師・人師多くして・或は大日経は法華経に勝れたり、

・或る人人は法華経は大日経に劣れるのみならず華嚴経にも

及ばず、・或る人人は法華経は涅槃経・般若経・深密経等には

劣る、・或る人人は辺辺あり互に勝劣ある故に、・或る人の云く

機に随つて勝劣あり時機に叶へば勝れ叶はざれば劣る、・或る

人の云く有門より得道すべき機あれば空門をそしり有門をほむ余

も是を以て知るべしなんと申す、其の時の人人の中に此の法門を

申しやぶる人なければおろかなる国王等深く是を信ぜさせ給ひ

田畠等を寄進して徒党あまたになりぬ、其の義久く旧ぬれば只

しょうほう

正法なんめりと打ち思つて疑ふ事もなく過ぎ行く程に末世に

かれら

ろんし

にんし

ちえ

しゅつたい

かれら

持つところ

彼等が論師・人師より智慧賢き人出来して、

ろんし

にんし

りつぎ

ある

しよえ

きようぎよう

に相違するやう

の論師・人師の立義一一に・或は所依の経経に相違するやう

ある

いちだいしよきよう

しまつせんじん

わきまえ

ゆえ

もつぱ

きようもん

・或は一代聖教の始末浅深等を并へざる故に専ら経文を以て

ある

いちだいしよきよう

しまつせんじん

わきまえ

ゆえ

もつぱ

きようもん

責め申す時、各各宗の元祖の邪義扶け難き故に陳し方を失ひ、

ある

うたがい

ろんし

にんし

きようろん

しようもん

証文ありぬらん我

・或は疑つて云く論師・人師定めて経論に証文ありぬらん我

ある

うたがい

ろんし

にんし

きようろん

しようもん

証文ありぬらん我

が智及ばざれば扶けがたし、・或は疑つて云く我が師は上古の

けんてつ

およ

たす

ある

うたがい

いわ

我が師は上古の

賢哲なり今・我等は末代の愚人なりなんと思ふ故に有徳高人をか

けんてつ

われら

まつだい

ぐにん

ある

うたがい

いわ

我が師は上古の

たらひえて怨のみなすなり。

あだ

ある

うたがい

いわ

ろんし

にんし

きようろん

しようもん

証文ありぬらん我

しかりといへども予自他の偏党をなげすて論師・人師の料簡

さしお

もつぱ

きようもん

ある

しよえ

きようぎよう

に相違するやう

を聞いて専ら経文によるに法華経は勝れて第一におはすと意得

はべ

もんぱ

きようもん

ある

しよえ

きようぎよう

に相違するやう

て侍るなり、法華経に勝れておはする御経ありと申す人出来候

はべ

もんぱ

きようもん

ある

しよえ

きようぎよう

に相違するやう

我が師は上古の

証文ありぬらん我

はば思食べし、此れは相似の經文を見たがえて申すか又人の

ひそか きようもん

私に我と經文をつくりて事を仏説によせて候か、智慧おろかな

わきまえ

る者弁へずして仏説と号するななんとと思食すべし、慧能が壇經

ぜんどう

かんねんほうもん

てんじくしんたんにほんこく

ひそか

と

善導が觀念法門經天竺震旦日本国に私に經を説きをける邪師其の

かずおお

そ

ひそか

きようもん

数多し、其の外私に經文を作り經文に私の言を加へななんとせる

ひとびとこ

しか

いえど

ぐしゃ

これ

まなこ

は

た

と

え

人人是れ多し、然りと雖も愚者は是を真と思うなり、譬えば天に

にちがつ

日月にすぎたる星有りななんと申せば眼無き者はさもやななんと思

ごと

じようこ

けんてつなんじ

まつだい

ぐにん

もう

はんが如し、我が師は上古の賢哲汝は末代の愚人ななんと申す事

おろか

をば愚なる者はさもやと思うなり、此の不審は今に始りたるに

ちんずい

ほうし

こそう

はべ

あらず陳隋の代に智・法師と申せし小僧一人侍りき後には二代の

てんし

おんし

てんだいちしゃだいし

たてまつ

天子の御師・天台智者大師と号し奉る、此の人始いやしかりし時

かんど

但漢土五百余年の三蔵・人師を破るのみならず月氏・一千年の

さんそう

にんし

やぶ

がっし

但漢土五百余年の三蔵・人師を破るのみならず月氏・一千年の

かんど

但漢土五百余年の三蔵・人師を破るのみならず月氏・一千年の

但漢土五百余年の三蔵・人師を破るのみならず月氏・一千年の

論師ろんしをも破やせしかば南北なんぼくの智人等ちじん・雲うんの如ごとく起り東西とうせいの賢哲等けんてつ星せいの如ごとく列つらなりて雨あめの如ごとく難なんを下くだし風かぜの如ごとく此この義ぎを破やりしかども終ついに論師ろんし・人師にんしの偏邪へんじやの義ぎを破やして天台てんだい一宗いっしゅうの正義せいぎを立てにき、日域にちいきの桓武かんむの御宇ぎように最澄さいちようと申もうす小僧侍こそうはべりき後のちには伝でん教大師ぎやうだいしと号ごうし奉たてまつる、欽明きんめい已来このかたの二百余年もろもろにんしの諸しよの人師しよの諸宗しよしゅうを破やりしかは始しよにんは諸人しよにんいかりをなせしかども後のちには一同おんどうに御弟子おんでしとなりにき、此等これらの人人ひとびとの難なんに我等われらが元祖がんそは四依しえの論師ろんし上古じやうこの賢哲けんてつなり汝なんじは像末ぼんぶぐにんの凡夫愚人ぼんぶぐにんなりとこそ難なんじ侍はべりしか、正像末しやうそうまつには依よるべからず実經じつきやうの文ぶんに依よるべきぞ人ひとには依よるべからず専もっぱら道理どうりに依よるべきか、外道げどう仏ぶつを難なんじて云いく「汝なんじは成劫じやうこくの末住劫まつじやうこくの始はじの愚人ぐにんなり我等われらが本師ほんしは先代せんだいの智者ちしや二天三仙にてんさんせん是これなり」なんと申まをせしかども終ついに九十五種きゅうじゆうしゆの外道げどうとこそ捨すててられしか。

にちれんはつしゅう

かんが

ほうそうしゅう

けこんしゅう

さんろんしゅう

ごんきよう

日蓮八宗を勘へたるに法相宗・華嚴宗・三論宗等は権經に

依つて・或は実經に同じ・或は実經を下せり、是れ論師・人師

ある じつきよう

ある じつきよう

くだ

こ

ろんし

にんし

あやま

より誤りぬと見えぬ、俱舎・成実は子細ある上律宗なんどは

ぐしゃ じようじつ

しさい

りつしゅう

しようじようさいか

ろんしごんだいじよう

じつだいじようきよう

小乗 最下の宗なり、人師より論師権大乘より 実大乘經なれ

にんし

しんこんしゅう

だいにちきよう

いま

けこんきよう

およ

いか

いわんや

ねはん

ば真言宗・大日經等は未だ華嚴經等に及ばず何に況や涅槃・

ほけきよう

法華經等に及ぶべしや、而るに善無畏三蔵は華嚴・法華・

だいにちきよう

大日經等の勝劣を判ずる時・理同事勝の謬 釈を作りしより

しょうれつ

りどうじしよう

みようしやく

釈を作りしより

このかた

ある

ほけきよう

已来・或はおごりをなして法華經は

華嚴經けこんきょうにも劣りなん何いかに況いわんや真言經しんごんに及ぶべしや、・或あるは云いわく印

・真言しんごんのなき事は法華經ほけきょうに諍あらそふべからず、・或あるは云いわく天台宗てんだいしゅうの

祖師そし多く真言宗しんごんしゅうを勝まさると云いい世間の思しいも真言宗しんごんしゅう勝すぐれたるなん

めりと思おもへり、日蓮にちれん此の事を計はかるに人多く迷まよふ事なれば委細いさいに

かんがへたるなり、粗余ほほよそ処こに注しせり見るべし又志こころざしあらん人人ひとびと

は存生ぞんしょうの時習ならい伝つたふべし人の多くおもふにはおそるべからず、

又時節じせつの久近きうきんにも依よるべからず専もっぱら經文きやうもんと道理どうりとに依よるべし、

浄土宗じやうとしゆは曇鸞どんらん道どう綽しやく善導ぜんどうより誤あやまり多くして多くの人人ひとびとを邪見じゃけんに入い

れけるを日本にほんの法然ほうねん是これをうけ取とつて人ごとに念仏ねんぶつを信しんぜしむるの

みならず天下てんかの諸宗しよしゅうを皆失みなはんとするを叡山えいざん三千さんぜんの大衆たいしゅう南都なんと

興福寺こうふく東大寺とうだいじの八宗はっしゅうより是これをせく故ゆえに代代こくおうの國王ちよくせん勅宣くだを下くだし

將軍家しやうぐんより御教書みきやうしよをなしてせけどもとどまらず、弥弥いよいよ繁昌はんじやうして

返つて主上・上皇・万民等ばんみんにいたるまで皆信状みなせり。

而しかに日蓮にちれんは安房あわの国・東条片海の石中の賤民とうじょうが子なり威徳いとく

なく有徳うとくのものにあらず、なににつけてか南都北嶺なんとほくりょうのとどめが

たき天子てんしの虎牙の制止せいしに叶はざる念仏ねんぶつをふせぐべきとは思へども

経文きやうもんを亀鏡きつきやうと定め天台てんだい・伝教でんぎやうの指南しなんを手ににぎりて建長五年けんちやう

より今年文永七年ぶんえいに至るまで十七年が間是これを責めたるに日本国にほんこくの

念仏ねんぶつ大體留たいりうり了ぬ眼前がんぜんに是これ見えたり、又口にすてぬ人人ひとびとはあれ

ども心計こころりは念仏ねんぶつは生死しょうじをはなるる道にはあらざりけると思ふ、

禅宗ぜんしゅう以て是かくの如し一を以て万を知れ真言等しんごんの諸宗しよしゅうの誤りあやまをだ

に留めとどん事手ににぎりておぼゆるなり、況や当世とうせの高僧真言師等こうそうしんごんし

は其その智牛馬ぎぎうばにもおとり螢火けいかの光にもしかず只死ただせるものの手に

弓箭きゆうせんをゆひつけねごとするものに物をとふが如ごとし、手に印を結

び口に眞言は誦すれども其の心中には義理を弁うる事なし、
結句慢心は山の如く高く欲心は海よりも深し、是は皆自ら經論
の勝劣に迷ふより事起り祖師の誤りをたださざるによるなり、
所詮智者は八万法蔵をも習ふべし十二部經をも学すべし、末代
濁惡世の愚人は念仏等の難行・易行等をば抛つて一向に法華經
の題目を南無妙法蓮華經と唱え給うべし、日輪東方の空に出で
させ給へば南浮の空皆明かなり大光を備へ給へる故なり、螢火は
未だ国土を照さず宝珠は懷中に持ぬれば万物皆ふらさずと云う
事なし、瓦石は財をふらさず念仏等は法華經の題目に対すれば
瓦石と宝珠と螢火と日光との如し。

我等が昧き眼を以て螢火の光を得て物の色を弁ふべしや、
旁凡夫の叶いがたき法は念仏・眞言等の小乗權教なり、又

我が師釈迦如来は一代聖教乃至八万法蔵の説者なり、此の娑婆

無仏の世の最先に出でさせ給いて一切衆生の眼目を開き給ふ

御仏なり、東西十方の諸仏・菩薩も皆此の仏の教なるべし、譬え

ば皇帝已前は人父をしらずして畜生の如し、堯王已前は四季を

弁へず牛馬の癡なるに同じかりき、仏世に出でさせ給はざりし

には比丘・比丘尼の二衆もなく只男女二人にて候いき、今比丘・

比丘尼の眞言師等大日如来を御本尊と定めて釈迦如来を下し念仏

者等が阿弥陀仏を一向に持つて釈迦如来を抛てたるも教主釈尊

の比丘・比丘尼なり元祖が誤を伝え来るなるべし。

此の釈迦如来は三の故ましまして他仏にかはらせ給ひて

娑婆世界の一切衆生の有縁の仏となり給ふ、一には此の

娑婆世界の一切衆生の世尊にて・おはします、阿弥陀仏は此の

だいおう

国の大王にはあらず釈迦仏は譬えば我が国の主上のごとし先ず此

だいおう

の国の大王を敬つて後に他国の王をば敬ふべし、天照太神・

しょうはちまんぐう

正八幡宮等は我が国の本主なり迹化の後神と顕れさせ給ふ、此

あらわ

たま

の神にそむく人・此の国の主となるべからず、されば天照太神

てんしょうだいじん

たてまつ

ないじどころ

はちまんだいぼさつ

をば鏡にうつし奉りて内侍所と号す、八幡大菩薩に勅使有つて物

もう

申しあはさせ給いき、大覚世尊は我等が尊主なり先づ御本尊と定

たまひ

だいかくせそん

われら

ごほんそん

むべし、二には釈迦如来は娑婆世界の一切衆生の父母なり、先

しやかによらい

しやばせかい

いっさいしゆじよう

ふ

づ我が父母を孝し後に他人の父母には及ぼすべし、例せば周の武

ふ

ぼ

たにん

ふ

ぼ

王は父の形を木像に造つて車にのせて戦の大將と定めて天感を

こおむ いんのちゆう

しゅんおう

まなこ

めくら

蒙り殷の紂王をうつ、舜王は父の眼の盲たるをなげきて涙を

こおむ いんのちゆう

しゅんおう

まなこ

めくら

ながし手をもつてのごひしかば本のごとく眼あきにけり、此の

かくのこと

われらしゆじよう

まなこ

かいぶつちけん

たまひ

仏も又是くの如く我等衆生の眼をば開仏知見とは開き給いし

か、いまだ他たづつ仏は開き給たまはず、三には此の仏は娑婆世界しゃばせかいの一切いっさい衆生しゅじょうの本師ほんしなり、此の仏は賢劫第九人壽にんじゅう百歳てんじくじようばんの時中天竺淨飯だいう大王の御子十九にして出家しゅつけし三十にして成道じようどうし五十余年が間・一代いちだい聖教しょうきょうを説とき八十にして御入滅にゅうめつ舍利しゃりを留とどめて一切衆生いっさいしゅじょうを正像末しょうぞうまつに救たまひ給ふ、阿弥陀如来藥師・仏大日等は他土の仏にして此の世界せかいの世尊せそんにてはまします、此の娑婆世界しゃばせかいは十方世界じゅつぼうせかいの中の最下さいかの処ところ譬たとえば此の国土こくどの中の獄門ごくもんの如し、十方世界じゅつぼうせかいの中の十悪じゅうあく・五逆誹謗正法ごぎやくひぼうしょうぼうの重罪逆罪じゅうざいの者を諸仏如来擯出しよぶつにやらいひんずいし給たまいしを釈迦如来此の土にあつめ給ふ、三悪並びに無間・大城たいじように墮おちて其の苦をつぐのひて人中にんちゆうてんじよう天上てんじようには生れたれども其の罪その余残よざんありてややもすれば正法しょうぼうを謗ぼうじ智者ちしやを罵り罪ののしつみつくりやし、例せば身子しんしは阿羅漢あらかんなれども瞋恚しんにのけしきあり、畢陵ひちりようは見思けんじ

を断だんぜしかども慢まん心の形みゆ、難なん陀は姪いん欲よくを断だんじても女にょ人に交かる
心こころあり、煩ぼん悩のうを断だんじたれども余よ残ざんあり何いかに況ばや凡ぼん夫ぶにをいてをや、
されば釈しや迦か如にょらい來みの御み名なをば能のう忍にんと名なけて此この土ちに入り給たまうに一切いっさい
衆しゆ生じようの誹ひ謗ぼうをとがめずよく忍しのび給たまふ故ゆゑなり、此これ等らの秘ひ術じゆつは他た仏ぶつ
のかけ給たまへるところなり、阿あ弥み陀だ仏ぶつ等らの諸しよ仏ぶつ・世せ尊そん悲ひ願がんをおこさ
せ給たまいて心こころにははぢをおぼしめして還かえつて此この界かいにかよひ四し十じ八はち
願がん十二じふに大だい願がんなんどは起たさせ給たまふなるべし、觀かん世ぜ音おん等らの他た土ちの菩ぼ薩さつ
も亦また復か是くのことごとの如ごとし、仏ぶつには常じよう平へい等とうの時ときは一い切っさい諸しよ仏ぶつは差さ別べつなけれ
ども常じよう差さ別べつの時ときは各かくに十じゆ方つぱう世界せかいに土ちをしめて有う縁えん無む縁えんを分わち
給たまふ、大だい通つう智ち勝しやう仏ぶつの十じゆ六ろく王おう子じ十じゆ方つぱうに土ちをしめて一いに我われが弟で子し
を救たひ給たまふ、其その中ちゆうに釈しや迦か如にょらい來みは此この土ちに当たり給たまふ我われ等ら衆しゆ生じようも又
生しやを娑しや婆ば世せ界かいに受うけぬ、いかにも釈しや迦か如にょらい來みの教きやう化けをばはなるべか

らずしか而りといへども人皆是みなこれを知らず委くわしく尋ねあきらめば唯我一人ただわれひとり能のう為救護いくごと申もうして釈迦しゃか如来にょらいの御手みてを離るべからず、而しかれば此の土つちの一切衆生いっさいしゅじょう・生死しやうじを厭いとひ御本尊ごほんぞんを崇あがめめんとおぼしめさば必ず先しやくそんず釈尊もくえを木画もくえの像あらに顕あらわして御本尊ごほんぞんと定めさせ給たまいて其その後力ごこうりきおはしまさば弥陀等みだの他仏たぶつにも及ぶべし。

然しかるを当世とうせ聖行しやうぎやうなき此の土このつちの人人ひとびとの仏ぶつをつくりかかせ給たまうに先たぶつず他仏たぶつをさきとするは其その仏ごほんいの御本意ごほんいにも釈迦しゃか如来にょらいの御本意ごほんいにも叶かふべからざる上世間せけんの礼儀れいぎにもはづれて候されば優填大王だいうおうの赤梅檀せんだいまだ他仏たぶつをば・きざませ給たまはず、千塔王せんたつおうの画像しやうがも釈迦しゃか如来にょらいなり、而しかるを諸大乗しよだいじやうぎやう経きやうぎやうによる人人ひとびと・我が所依しよえの経きやうぎやう経きやうぎやうをしよきやう諸経しよきやうに勝すぐれたりと思ふ故ゆえに教主きやうしゅ釈尊しやくそんをば次つぎさまにし給たまふ、一切いっさいの真言師しんごんしは大日だいにちきやう経しよきやうは諸経しよきやうに勝すぐれたりと思ふ故ゆえに此の経このきやうに詮しゆんとす

る大日如来を我等が有縁の仏と思ひ念仏者等は観経等を信ずる
故に阿弥陀仏を娑婆有縁の仏と思ふ、当世はことに善導・法然等
が邪義を正義と思ひて浄土の三部経を指南とする故に十造る寺は
八九は阿弥陀仏を本尊とす、在家・出家一家十家百家千家にいた
るまで持仏堂の仏は阿弥陀なり、其の外木画の像一家に千仏万仏
まします大旨は阿弥陀仏なり、而るに当世の智者とおぼしき人々
是を見てわざはひとは思はずして我が意に相叶ふ故に只称美讃歎
の心のみあり、只一向惡人にして因果の道理をも弁へず一仏をも
持たざる者は還つて失なきへんもありぬべし、我等が父母世尊は
主師親の三徳を備えて一切の仏に擯出せられたる我等を唯我一人
能為救護とはげませ給ふ、其の恩大海よりも深し其の恩大地より
も厚し其の恩虚空よりも広し、二つの眼をぬいて仏前に空の星の

数備ふとも身の皮を剥いで百千万天井にはるとも涙を闕伽の水と
して千万億劫仏前に花を備ふとも身の肉血を無量劫仏前に山の
如く積み大海の如く湛ふとも此の仏の一分の御恩を報じ尽しがた
し。

而るを当世の僻見の学者等設ひ八万法蔵を極め十二部經を

諳んじ大小の戒品を堅く持ち給ふ智者なりとも此の道理に背か

ば惡道を免るべからずと思食すべし、例せば善無畏三蔵は

真言宗の元祖烏菴奈国の大王・仏種王の太子なり、教主釈尊

は十九にして出家し給いき此の三蔵は十三にして位を捨て月氏七

十箇国九万里を歩き回りて諸經諸論諸宗を習ひ伝へ北天竺金粟

王の塔の下にして天に仰ぎ祈請を致し給えるに虚空の中に大日

如来を中央として胎藏界の曼荼羅顕れさせ給ふ、慈悲の余り此の

しょうほう

ひろ

おぼしめ

かんど

げんそうこうてい

ひほう

正法を辺土に弘めんと思食して漢土に入り給ひ玄宗皇帝に秘法

たてまつかんばつ

たまひ

を授け奉り旱魃の時雨の祈をし給いしかば三日が内に天より雨ふ

さんそう

よそん

しゅしそんぎよう

まや

りしなり、此の三蔵は千二百余尊の種子尊形三摩耶一事もくも

とうせ

とうじ

いっさい

しんこんしゅう

一人も

此の

御弟子に

非る

りなし、当世の東寺等の一切の真言宗一人も此の御弟子に非る

しか

さんそういちじ

とんし

あまた

ごくそつ

鉄繩

はなし、而るに此の三蔵一時に頓死ありき数多の獄卒来つて鉄繩

か

えんまおうきゅう

いた

だいいち

ふしん

い

七すぢ懸けたてまつり閻魔王宮に至る此の事第一の不審なり、い

つみ

あ

こんじよう

じゅうあく

有

かなる罪あつて此の責に値い給ひけるやらん、今生は十悪は有

ごぎやくざい

かこ

たず

たいこく

た

給ふ

りもやすらん五逆罪は造らず過去を尋ぬれば大国の王となり給ふ

かんが

じゅうぜんかい

たも

ぶつだ

たま

いづれ

何の

事を勘うるに十善戒を堅く持ち五百の仏陀に仕へ給ふなり何の

つみ

そ

しゅつけ

たまひ

えんぶだいいち

の

罪

か

あらん、其の上十三にして位を捨て出家し給いき閻浮第一の

ぼだいしん

かこ

げんざい

けいちよう

つみ

その

上月氏

が

し

菩提心なるべし、過去・現在の軽重の罪も滅すらん其の上月氏

るふ

きようろんしよしゅう

なら

きわ

たまひ

い

何の

罪

か

に流布する所の経論諸宗を習い極め給いしなり何の罪か消えざ

らん、又真言密教は他に異なる法なるべし一印一真言なれども

手に結び口に誦すれば三世の重罪も滅せずと云うことなし、

無量俱低劫の間作る所の衆の罪障も此の曼荼羅を見れば一時に

皆消滅すところそ申し候へ、況や此の三蔵は千二百余尊の印・

真言を諳に浮べ即身成仏の観道鏡に懸り両部灌頂の御時大日

覚王となり給いき、如何にして閻魔の責に豫り給いけるやらん、

日蓮は顕密二道の中に勝れさせ給いて我等易易と生死を離るべき

教に入らんと思ひ候いて真言の秘教をあらあら習ひ此の事を尋ね

勘うるに一人として答をする人なし、此の人悪道を免れずば当世

の一切の真言並びに一印一真言の道俗三悪道の罪を免るべきや。

日蓮此の事を委く勘うるに二つの失有つて閻魔王の責に予り

給へり、一つには大日経は法華経に劣るのみに非ず涅槃経・

けこんきよう 華嚴經・般若經等にも及ばざる經にて候を法華經に勝れたりと

する謗法の失なり、二つには大日如来は釈尊の分身なり而るを

大日如来は教主釈尊に勝れたりと思ひし僻見なり、此の謗法

の罪は無量劫の間・千二百余尊の法を行ずとも惡道を免るべから

ず、此の三藏此の失免れ難き故に諸尊の印・真言を作せども叶は

ざりしかば法華經第二譬喻品の今此三界・皆是我有其中衆生

悉是吾子而今此処・多諸患難唯我一人能為救護の文を唱へて鉄

の繩を免れさせ給いき、而るに善無畏已後の真言師等は大日經

は一切經に勝るるのみに非ず法華經に超過せり、・或は法華經

は華嚴經にも劣るなんと申す人もあり此等は人は異なれども其の

謗法の罪は同じきか、又善無畏三藏法華經と大日經と大事とす

べしと深理をば同ぜさせ給いしかども印と真言とは法華經は

だいにちきよう

大日経に劣りけるとおぼせし僻見計りなり、

びやつけんばか

其の已後の真言師

だいい

等は大事の理をも法華経は劣れりと思へり、

おと

印・真言は又申すに

もう

および謗法の罪遥にかさみたり、

つみはるか

閻魔の責にて墮獄の苦を延ぶべ

の

しとも見えず直に阿鼻の炎をや招くらん、

あび

まね

だいにちきよう

一念三千の深理なし此の理は法華経に限るべし、

いちねんさんぜん

じんり

ほけきよう

たまい

善無畏三蔵

てんだいだいし

ほけきよう

じんり

い

ほけきよう

ぜんむいさんぞう

天台大師の法華経の深理を読み出でさせ給いしを盗み取つて

だいにちきよう

ほけきよう

そうこん

ほけきよう

だいにちきよう

ほけきよう

しんこん

真言

を彼の経の得分と思へり、

いんけい

ほけきよう

じんり

ほけきよう

だいにちきよう

しんこん

真言

大日経に入れ法華経の莊嚴として説かれて候大日経の印・真言

を彼の経の得分と思へり、

いんけい

ほけきよう

じんり

ほけきよう

だいにちきよう

しんこん

真言

を彼の経の得分と思へり、理も同じと申すは僻見なり真言・

印契を得分と思ふも邪見なり、

いんけい

ほけきよう

じんり

ほけきよう

だいにちきよう

しんこん

真言

るべし而るを我が財と思ふ故に多くの失出で来る、此の譬を

似て諸経を解るべし劣る経に説く法門は勝れたる経の得分と成

るべきなり。

しきよう

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

るべきなり。

しきよう

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

るべきなり。

しきよう

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

るべきなり。

しきよう

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

るべきなり。

しきよう

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

しんこん

而しかるを日蓮にちれんは安房あわの国・東条とうじょうの郷清澄山きよさやまの住人ぢゆうじんなり、幼少ようしょうの

時ときより虚空蔵菩薩こくわうざうぼさつに願ねがを立てて云いく日本第一にほんだいいちの智者ちしやとなし給たまへと

云云こくわう、虚空蔵菩薩ぼさつ眼前がんぜんに高僧こうそうとならせ給たまいて明星めいせいの如ごとくなる智慧ちえ

の宝珠ほうしゆを授けさせ給たまいき、其そのしるしにや日本国にほんこくの八宗はつしゅう並びに

禅宗ぜんしゅう・念仏宗等ねんぶつしゅうの大綱粗伺たいこうほひ侍りぬ、殊ことには建長五年けんちようの比よ

り今文永七年こんぶんえいに至るまで此いたの十六七年の間禅宗ぜんしゅうと念仏宗ねんぶつしゅうとを難なん

ずる故ゆえに禅宗ぜんしゅう・念仏宗ねんぶつしゅうの学者蜂がくしやの如ごとく起り雲うんの如ごとく集る、是これを

つむる事一言二言すには過ぎず結句けっくは天台てんだい・真言等しんごんの学者自宗がくしやじしゅうの

廃立はいりゅうを習ならひ失うしないて我が心こころと他宗たしゅうに同じ在家ざいけの信しんをなせる事なれ

ば彼の邪見じゃけんの宗しゅうを扶たすけんが為ために天台てんだい・真言しんごんは念仏宗ねんぶつしゅう・禅宗ぜんしゅうに等

しと料簡りょうけんしなして日蓮にちれんを破はするなり、此これは日蓮にちれんを破はする様ような

れども我てんだいと天台しんごん・真言等うしなを失うしなふ者なるべし能よく能よく恥はずべき事な

り。

此しよきようしよの諸經しよしゆう諸論しよしゆう諸宗しよしゆうの失とがを弁わきまうる事は虚空蔵菩薩こくうぼさつの御利生りしやう本師ほんし

道善どうぜん御房ごぼうの御恩ごおんなるべし。龜魚じんりんすら恩を報ずる事あり何いかに況や

人倫じんりんをや、此の恩を報ぜんが為ために清澄山せいじやうざんに於おいて仏法ぶつぽうを弘ひろめ道善どうぜん

御房ごぼうを導たてまつき奉らんと欲ほす、而しかるに此の人愚癡ぐちにおはする上念仏ねんぶつ者

なり三惡道さんあくどうを免まぬらるべしとも見えず、而しかも又日蓮にちれんが教訓きやうくんを用ふべ

き人にあらず、然しかれども文永元年ぶんえいがんねん十一月十四日西条華房ほうの僧坊そうぼうに

して見参けんさんに入りし時・彼の人の云いわく我智慧ちえなければ請用しやうようの望も

なし、年老ねんらういていらへなければ念仏ねんぶつの名僧なむねうをも立てず世間せけんに弘ひろま

る事なれば唯南無阿弥陀仏ただなむあみだぶつと申もうす計はかりなり、又我が心より起おここ

ざれども事の縁有あみだぶつつて阿弥陀仏あみだぶつを五体まで作り奉たてまつこる是れ又過去かこの

宿習しゆくじゆうなるべし、此の科とがに依よつて地獄じごくに墮おつべきや等云云、爾時そのとき

に日蓮意にちれんに念はく別して中違たがひまいらする事無ことなけれども東条とうじょう

左衛門入道さえもん にゅうどう

蓮智が事に依よつて此の十余年の間は見奉らず但ただし中

不和ふわなるが如ごとし、穩便おんびんの義を存じおだやかに申す事こそ礼儀なれ

とは思ひしかども生死界しやうじの習ならひ老少不定ふじようなり又二度見参なんの事難か

るべし、此の人の兄道義房ぼう義尚此の人に向つて無間地獄むげんじごくに墮おつべ

き人と申もうして有りしが臨終りんじゆう思もうう様にもましまさざりけるやらん、

此の人も又しかるべしと哀れに思ひし故ゆえに思ひ切つて強強あながちもうに申し

たりき、阿弥陀仏あみだぶつを五体作り給たまへるは五度無間地獄むげんじごくに墮おち給たまふべ

し其そのの故は正直捨方便しょうじきしやほうべんの法華經ほけきように釈迦如来しゃかにょらいは我等われらが親父

阿弥陀仏あみだぶつは伯父と説かせ給たまふ、我が伯父をば五体まで作り供養くようせ

させ給たまいて親父をば一体も造り給たまはざりけるは豈不孝あにふこうの人に非あらず

や、中中山人海人やまかつ あまなどが東西をしらず一善いちぜんをも修しゅうせざる者は

かえ 還つて罪^{つみ}浅^あき者^{もの}なるべし、当世^{とうせ}の道心^{どうしん}者^{しや}が後世^{ごしやう}を願ふとも法華^{ほけき}經^{きやう}

・釈迦^{しやか}仏^{ぶつ}をば打ち捨て阿弥陀^{あみだ}仏^{ぶつ}念^{ねん}仏^{ぶつ}なんどを念念^{ねんねん}に捨て申^{もう}さざる

はいかがあるべかるらん、打ち見る処^{ところ}は善人^{ぜんにん}とは見えなれども

親^{おや}を捨てて他人^{たにん}につく失免^{とがまぬら}るべしとは見えず、一向^{いっかう}惡人^{あくにん}はいまだ

仏^{ぶつ}法^{ぽう}に帰せず釈迦^{しやか}仏^{ぶつ}を捨て奉^{たてまつ}る失^{あやま}も見えず縁有^{えんあ}つて信^{しん}ず

る辺^へもや有らんずらん、善導^{ぜんどう}・法然^{ぽうねん}並びに当世^{とうせ}の学者^{がくしや}等^らが邪義^{じゃぎ}に

就^ついて阿弥陀^{あみだ}仏^{ぶつ}を本尊^{ほんそん}として一向^{いっかう}に念^{ねん}仏^{ぶつ}を申^{もう}す人人^{ひとびと}は多生^{たうしやう}曠劫^{くわうきやう}を

ふるとも此^この邪見^{じゃけん}を翻^{ひるがえり}へして釈迦^{しやか}仏^{ぶつ}・法華^{ほけき}經^{きやう}に歸すべしとは

見えず、されば雙林^{そうりん}最後^{さいご}の涅槃^{ねはん}經^{ぎやう}に十惡^{じゅうあく}・五逆^{ごぎやく}よりも過^すぎてお

そろしき者^{もの}を出ださせ給^{たま}ふに謗法^{ぼうぽう}闡提^{せんたい}と申^{もう}して二百五十戒^{にひゃくごじふかい}を持^もち

三衣^{さんい}一鉢^{いちぱつ}を身に纏^ちへる智者^{ちしや}共^{ども}の中にこそ有^あるべしと見え侍^{はべ}れとこ

まごまと申^{もう}して候^{こう}いしかば此^この人^{ひと}もこころえずげに思^{おも}いて・おは

しき、傍座の人人もこころえずげにをもはれしかども其の後承り
しに法華經を持たるの由承りしかば此の人邪見を翻し給ふ
か善人に成り給いぬと悦び思ひ候処に又此の釈迦仏を造らせ
給う事申す計りなし、当座には強なる様に有りしかども法華經の
文のままに説き候いしかばかうおれさせ給へり、忠言耳に逆らい
良薬口に苦しと申す事は是なり。

今既に日蓮・師の恩を報ず定めて仏神・納受し給はんか、各各
此の由を道善房に申し聞かせ給ふべし、仮令強言なれども人をた
すくれば実語・☆語なるべし、設ひ・☆語なれども人を損ずるは
妄語・強言なり、当世・学匠等の法門は☆語・実語と人人は
思食したれども皆強言妄語なり、仏の本意たる法華經に背く故な
るべし、日蓮が念仏申す者は無間地獄に墮つべし禪宗・真言宗

も又あやまり謬の宗なりなんと申し候は強言ごうげんとは思食おほしめすとも実語じつご・語ことば
なるべし、例せば此の道善御房の法華經を迎へ釈迦しゃかぶつ仏を造らせ
給たまう事は日蓮にちれんが強言ごうげんより起る、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうも亦復また
かくのごとく是くの如し、当世とうせ此の十余年いぜん已前は一向念仏いっこうねんぶつ者にて候いしが十人
が一二人は一向いっこうに南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱へ二三人は兩方まさになり、
又一向念仏いっこうねんぶつ申す人も疑うたがいをなす故に心中しんちゅうに法華經ほけきょうを信じ又
釈迦しゃかぶつ仏を書き造り奉る、是れ亦日蓮またにちれんが強言ごうげんより起る、譬たとえば梅檀せんだ
は伊蘭いらんより生じ蓮華れんげは泥より出でたり而るに念仏ねんぶつは無間地獄むげんじごくに
墮おつると申せば当世牛馬とうせぎゅうばの如くなる智者ちしやどもが日蓮にちれんが法門ほうもんを仮染かりそめ
にも毀そしるは糞犬やせいぬが師子王ししをほへ癡猿こざるが帝釈たいしゃくを笑ふに似たり。

ぶんえい
文永七年

にちれん
日蓮
かおう
花押

義浄房ぎじやうぼう

浄顕房じやうけんぼう

◆一〇四

佐渡御勘気抄さどごかんき

文永八年十月ぶんえい

五十歳御作

891P

与円浄房ぼう

於佐渡さど

九月十二日に御勘気を蒙て今年十月十日佐渡の国へまかり候な

り、本より学文し候し事は仏教をきはめて仏になり恩ある人を

も・たすけんと思ふ、仏になる道は必ず身命をすつるほどの事

ありてこそ仏にはなり候らめと・をしはからる、既に経文のご

とく悪口・罵詈・刀杖・瓦礫・数数見擯出と説かれて・かかる

めに値い候こそ法華経をよむにて候らめと、いよいよ信心もおこ

り後生もたのもしく候、死して候はば必ず各各をもたすけたてま

つるべし、天竺に師子尊者と申せし人は檀弥羅王に頸をはねられ

提婆菩薩は外道につきころさる、漢土に竺の道生と申せし人は
蘇山と申す所へながさる、法道三蔵は面にかなを・やかれて江南
と申す所へながされき、是れ皆法華經のとく仏法のゆへなり、
日蓮は日本国・東夷・東条・安房の国・海辺の旃陀羅が子なり、
いたづらに・くちん身を法華經の御故に捨てまいらせん事あに石
に金を・かふるにあらずや、各各なげかせ給うべからず、道善の
御房にも・かう申しきかせまいらせ給うべし、領家の尼御前へも
御ふみと存じ候へども先かかる身のふみなれば・なつかしやと・
おぼさざるらんと申しぬると便宜あらば各各御物語り申させ
給い候へ。

十月 日

日蓮花押

◆一〇五 義浄房御書

892p

御法門ほうもんの事委くわしく承そうらはり候おわい畢おわんぬ、法華經ほけきょうの功德くどくと申もうすは
唯ゆい仏ぶつ与よ仏ぶつの境界きょうがい・十方じゅっぼう分身ふんじんの智恵ちゑも及およぶか及およばざるかの内証ないしょう
なり、されば天台大師てんだいだいしも妙みよの一字いちじをば妙みよとは妙みよは不可思議ふかしぎと名なく
と釈しゃくし給たまいて候あなるぞ前さき前さき御存知ごぞんじの如ごとし、然しかれども此この經きやうに於おいて
重重しゅじやうの修行しゆぎやう分ぶんれたり天台てんだい・妙樂みよらく・伝でん教等ぎやうとう計ばかりしらせ給たまう法門ほうもん
なり、就なかんずく中でんく伝でん教大師ぎやうだいし・天台てんだいの後身ごうしんにて渡わたらせ給たまへども人ひとの
不審ふしんを晴はさんと思おもし食くしけん大唐だいとうへ決けつをつかはし給たまふ事多おほし、
されば今經こんきやうの所詮しよせんは十界互具じゅつかいごぐ・百界千如ひゃつかいせんによ・一念三千いちねんさんぜんと云いふ事こ
そゆゆしき大事だいじにては候あなれ、此この法門ほうもんは摩訶止觀まかしかんと申もうす文ぶんにし
るされて候あ、次じに壽量品じゆりやうほんの法門ほうもんは日蓮にちれんが身みに取とつてたのみある
ことぞかし、天台てんだい・伝でん教等ぎやうとうも粗ほしらせ給たまへども言ことに出いして宣のべべ
給たまはず竜樹りゅうじゆ・天親てんじん等とうも亦是またかくの如ごとし、壽量品じゆりやうほんの自我偈じがげに云いく

「一心いっしんに仏を見たてまつらんと欲みづかして自ら身命しんみょうを惜おしします」云

云、日蓮にちれんが己心こしんの仏界ぶつがいを此の文ぶんに依よつて顕けんはすなり、其そのの故ゆえは

じゆりようぼん じゆりようぼん 一念三千いちねんさんぜんの三大秘法ひほうを成就じやうじゆせる事・此の經文きやうもんな

寿量品の事の

り秘へす可べし秘へす可べし、叡山えいざんの大師だいし・渡唐ととうして此の文の点を相伝そうでんし

たま ところ 給う処たまなり、一とは一道しやうじやう清浄しやうじやうの義心ぎしんとは諸法しよほうなり、されば

てんだいだいし 天台大師心の字しやくを釈いして云く「二月三星・心果しやうじやう清浄しやうじやう」云云、

日蓮にちれん云く一とは妙なり心とは法なり欲とは蓮なり見とは華なり仏

とは経なり、此の五字ごじを弘通くつうせんには不自惜おししんみやうこれ身命いっしん是なり、一心

に仏を見る心を一いっしんにして仏を見る一心いっしんを見れば仏なり、無作むさの

三身さんじんの仏果ぶつがを成就じやうじゆせん事は恐おそくは天台・伝教でんきやうにも越りへ竜樹りゆうじゆ・

迦葉かしやうにも勝すぐれたり、相構さうかうへ相構さうかうへて心の師しとはなるとも心を師と

すべからずと仏は記しるし給たまひしなり、法華經ほけきやうの御為ために身をも捨て命

をも惜しまざれと強情に申せしは是なり、南無妙法蓮華經。
なむみょうほうれんげきよう

文永十年五月二十八日

日蓮花押

義浄房御返事

◆一〇六 清澄寺大衆中

建治二年正月 五十五歳御作 893p

新春の慶賀自他幸甚幸甚、去年来らず如何定めて子細有らんか、
抑参詣を企て候わば伊勢公の御房に十住心論・秘蔵宝鑰二教
論等の真言の疏を借用候へ、是くの如きは真言師蜂起の故に之を
申す、又止観の第一第二御隨身候へ東春輔正記などや候らん、
円智房の御弟子に観智房の持ちて候なる宗要集かしたび候へ、
そのみならずふみの候由も人人申し候いしなり早々に返すべき

のよし申させ給へ、今年は殊に仏法の邪正たださるべき年か淨願
の御房義城房等には申し給うべし、日蓮が度度殺害せられんとし
並びに二度まで流罪せられ頸を刎られんとせし事は別に世間の失
に候はず、生身の虚空蔵菩薩より大智慧を給わりし事ありき、
日本第一の智者となし給へと申せし事を不便とや思し食しけん明
星の如くなる大宝珠を給いて右の袖にうけとり候いし故に
一切經を見候いしかば八宗並びに一切經の勝劣粗是を知り
ぬ、其の上真言宗は法華經を失う宗なり、是は大事なり先ず序分
に禪宗と念仏宗の僻見を責めて見んと思ふ、其の故は月氏・
漢土の仏法の邪正は且らく之を置く日本国の法華經の正義を失う
て一人もなく人の惡道に墮つる事は真言宗が影の身に随うがご
とく山山・寺寺ごとに法華宗に真言宗をあひそひて如法の

法華經に十八道をそへ懺法に阿弥陀經を加へ天台宗の學者の
灌頂をして真言宗を正とし法華經を傍とせし程に、真言經と
申すは爾前權教の内の華嚴・般若にも劣れるを慈覺・弘法これ
に迷惑して・或は法華經に同じ・或は勝れたりなんと申して、仏
を開眼するにも仏眼大日の印・真言をもつて開眼供養するゆへに
日本国の木画の諸像皆無魂無眼の者となりぬ、結句は天魔入り替
つて檀那をほろぼす佛像となりぬ王法の尽きんとするこれなり、
此の惡真言かまくらに來りて又日本國をほろぼさんとす。

其の上禪宗・淨土宗などと申すは又いうばかりなき僻見

の者なり、此れを申さば必ず日蓮が命と成るべしと存知せしかど

も虚空藏菩薩の御恩をほうぜんがために建長五年四月二十八日

安房の國・東条の郷清澄寺道善の房持仏堂の南面にして淨円房

と申す者並びに少少の大衆に・これを申しはじめて其の後二十
余年が間退転なく申す、・或は所を追ひ出され・或は流罪等、昔
は聞く不輕菩薩の杖・木等を今は見る日蓮が刀剣に当る事を、
日本国の有智・無智上下万人の云く日蓮法師は古の論師・人師
大師先徳にすぐるべからずと、日蓮この不審をはらさんがために
正嘉文永の大地震大長星を見て勘えて云く我が朝に二つの大難
あるべし所謂自界叛逆難・他国侵逼難なり、自界は鎌倉に権の
大夫殿御子孫どううち出来すべし、他国侵逼難は四方よりある
べし、其の中に西よりつよくせむべし、是れ偏に仏法が一国挙り
て邪なるゆへに梵天帝釈の他国に仰せつけてせめらるるなるべ
し。

日蓮をだに用いぬ程ならば将門・純友・貞任・利仁・田村のや

うなる將軍しょうぐん百千万人ばんにんありとも叶ふべからず、これまことならず
ば真言しんこんと念仏ねんぶつ等の僻見びやくけんをば信むずべしと申しひろめ候いき、就中なかなんずく
清澄山たいしゅうの大衆にちれんは日蓮ふほを父母さんぼうにも三宝さんぼうにもをもひをとさせ給たまはば
今生こんじょうには貧窮びんぐの乞者こしやうとならせ給ひ後生ごしやうには無間地獄むげんじごくに墮おちさせ
給たまうべし故・いかなとなれば東条左衛門景信とうじょうさえもんかげのぶが悪人あくにんとして清澄
のかいしし等をかりとり房房ぼうぼうの法師等ほっしを念仏者ねんぶつの所従しよじゅうにし・な
んとせしに日蓮敵にちれんをなして領家のかたうどとなり清澄・二間ふたまの二
箇とうじょうの寺東条が方まさにつくならば日蓮にちれん・法華經ほけきやうをすてんと、せいじ
やうの起請きしやうをかいいて日蓮にちれんが御本尊ごほんぞんの手にゆいつけていのりて一年
が内に両寺りやうじは東条が手をはなれ候いしなり、此の事は虚空蔵こくう
菩薩ぼさつもいかでかすてさせ給たまうべき、大衆たいしゅうも日蓮にちれんを心へずに・を
もはれん人人ひとびとは天にすてられ・たてまつらざるべしや、かう申せ

ば愚癡ぐちの者は我われをのろうと申もうすべし後生ごしょうに無間地獄むげんじごくに墮おちんが不便ふびんなれば申もうすなり。

領家の尼にょにんごぜんは女人ぐちなり愚癡ぐちなれば人人ひとびとのいひをどせば・さ

こそとましまし候こうらめ、されども恩おんをしらぬ人となりて後生ごしょうに

悪道あくどうに墮おちさせ給たまはん事こそ不便ふびんに候こうへども又一またつには日蓮にちれんが

父母ふぼ等に恩おんをかほらせたる人なれば・いかにしても後生ごしょうをたすけ

たてまつらんと・こそいのり候こうへ、法華經ほけきょうと申もうす御經べちは別の事べつも

候こうはず我われは過去かこ五百塵点ごひやくじんてん劫ごうより先の仏ぶつなり、又また舍利弗しゃりほつ等は未来みらいに

仏ぶつになるべしと、これを信しんぜざらん者は無間地獄むげんじごくに墮おつべし、我

のみかう申もうすにはあらず多宝たほう仏ぶつも証しょう明みょうし十方じゅうぽうの諸しよ仏ぶつも舌したをい

だしてかう候こう、地涌じゆ千界せんがい・文殊もんじゆ・觀音かんのん・梵天ぼんてん・帝釈たいしやく・日月にちがつ・

四天してん・十羅刹じゅうらせつ・法華經ほけきょうの行者ぎやうじやを守護しゆごし給たまはんと説とくかれたり、さ

れば仏になる道は別のやうなし過去かこの事未来みらいの事を申しあてて候
がまことの法華經ほけきようにては候なり。

日蓮にちれんはいまだ・つくしを見ずえぞしらず、一切いっさいきよう經をもつて
勘かんへて候へば・すでに値あいぬ、もし・しからは各各ふちおん不知恩の人な
れば無間地獄むげんじごくに墮おち給たまうべしと申し候はたがひ候べきか、今はよ
し後をござらんぜよ日本国にほんこくは当時とうじのゆき対馬つしまのやうになり候そうらはんず
るなり、其そのときのとき安房あわの国にむこが寄せて責め候そうらはん時・日蓮房にちれんぼうの
申せし事の合あうたりと申もうすは偏執へんしゆうの法師等ほつしが口すくめて無間むげん
地獄じごくに墮おちん事不便ふびんなり不便ふびんなり。

正月十一日

にちれんかおう
日蓮花押

あわ
安房の国清澄寺大衆中
きよすみであたいしゆうちゆう

このふみはさど殿と・すけあさり御房ごぼうと虚空蔵こくうの御前おんまえにして

たいしゅう

大衆ごとに・よみきかせ給へ。^{たま}

◆一〇七

聖密房御書^{ほうごしよ}

建治三年 五十六歳御作

896P

だいにちきよう

大日経をば善無畏・不空・金剛智等の義に云く「大日経の理

ほけきよう

と法華経の理とは同じ事なり但印と真言とが法華経は劣なり」と

立てたり、良

☆和尙・広修・維

☆なんど申す人は大日経は

ほけきよう

にほん けこんきよう ほけきよう ねはんきよう 日本にほん 弘法大師云く「法華経は猶華嚴経等に劣れりまして

大日経には及ぶべからず」等云云、又云く「法華経は釈迦の説

だいにちきよう

・大日経は大日如来の説・教主既にことなり・又釈迦如来は

だいにちきよう

大日如来の御使として顕教をとき給うこれは密教の初門なる

べし」・或は云く「法華経の肝心たる寿量品の仏は顕教の中に

ある

べし」・或は云く「法華経の肝心たる寿量品の仏は顕教の中に

ある

べし」・或は云く「法華経の肝心たる寿量品の仏は顕教の中に

しては仏なれども密教みつぎょうに対すれば具縛ぐばくの凡夫ぼんぶなり」と云云。

にちれんかんが

日蓮にちれん勘かんえて云く大日だい にちきよう経きやうは新しん訳やくの經きやう唐とうの玄宗げんそう皇帝こうていの御時おんとき開元かいげん四

てんじく

善無畏ぜんむい三蔵さんそうもて来る、

年に天竺てんじくの善無畏ぜんむい三蔵さんそうもて来る、

法華ほけきやう經きやうは旧く訳やくの經きやう・後秦こうしんの御宇ぎやう

らじゅうさんそう

に羅什らじゅう三蔵さんそうもて来る其その中間ちゅうげん三百余年さんひゃくねんなり、

法華ほけきやう經きやう亘わたつて後百余年ごひゃくねん

年へを経て天台てんだい智者ちしや大師だいし・教門きやうもんには五時しき四教しきやうを立てて上五百余年じやうごひゃくねん

がくしや

きやうそう

の学者がくしやの教相きやうそうをやぶり觀門かんもんには一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんをさとりて始め

てんだいだいし いぜん

さんろんしきやう

いご

て法華ほけきやう經きやうの理りを得たり、天台てんだい大師だいし已前いぜんの三論さんろん宗しゅう・已後いごの法相ほうそう宗しゅう

には八界はくがいを立て十界じゅうがいを論ぜず一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんをば立つべきやう

なし、華嚴けこん宗しゅうは天台てんだい・已前いぜんには南北なんぼくの諸師しよし華嚴けこん經きやうは法華ほけきやう經きやうに勝すぐれ

たりとは申しけれども華嚴けこん宗しゅうの名なは候こうはず、唐とうの代だいに高宗こうそうの後きさき

・則そくてん天皇后てんこうこうと申もうす人おんときの御時ほうそう・法蔵ほうざう法師ほふし・澄ちやう觀かんなんど申もうす人かんもん・

華嚴けこん宗しゅうの名なを立てたり、此この宗しゅうは教相きやうそうに五教ごきやうを立て觀門かんもんには十

けこんしきやう

華嚴けこん宗しゅうの名なを立てたり、此この宗しゅうは教相きやうそうに五教ごきやうを立て觀門かんもんには十

玄・六相^{もつ}な^{ほうもん}んと申^{もつ}す法門^{ほうもん}なり、をびただしきやうに・みへたりし

かども澄^{ちようかん}觀^{てんだい}は天台^{てんだい}をはするやうにてなを天台^{てんだい}の一念三千^{いちねんさんぜん}の法門^{ほうもん}

をかりとりて我が經^{しんによく}の心^{えし}如^{えし}工画師^{こうがし}の文^{ぶん}の心^{しん}とす、これは華嚴宗^{けこんしゅう}は

天台^{てんだい}に落ちたりというべきか又一念三千^{いちねんさんぜん}の法門^{ほうもん}を盗^{たう}みとりたりと

い^{ちねんさんぜん}うべきか、澄^{ちようかん}觀^{じかい}は持戒^{じがい}の人^{ひと}・大小^{だいしょう}の戒^{がい}を一塵^{いちじん}をもやぶらざれ

ども一念三千^{いちねんさんぜん}の法門^{ほうもん}をば・ぬすみとれり・よくよく口伝^{くでん}あるべ

し、真言宗^{しんごんしゅう}の名^なは天竺^{てんじく}にあり・やいなや大なる不審^{ふしん}なるべし、

但真言經^{しんごん}にてありけるを善無畏^{ぜんむい}等の宗^{しゅう}の名^なを漢土^{かんと}にして付^つけたり

けるか・よくよくしるべし、就^{なかんずく}中善無畏^{ちゅうぜんむい}等^ら・法華經^{ほけきやう}と大日經^{だいにちきやう}と

の勝劣^{しょうれつ}をはんずるに理同事勝^{りどうじしやう}の釈^{しやく}をばつくりて一念三千^{いちねんさんぜん}の理^りは

法華經^{ほけきやう}・大日經^{だいにちきやう}これ同じ^{おと}なんどいへども印^{しんごん}と真言^{しんごん}とが法華經^{ほけきやう}に

は無^{じそ}ければ事法^{じそ}は大日經^{だいにちきやう}に劣^{おと}れり、事相^{じそ}かけぬれば事理^{じり}俱密^{くみつ}も

なしと存ぜり、今・日本国及び諸宗の学者等並びにことに用ゆ
べからざる天台宗共にこの義をゆるせり例せば諸宗の人人をば
そねめども一同に弥陀の名をとへて自宗の本尊をすてたるがご
とし天台宗の人人は一同に真言宗に落ちた
る者なり。

日蓮・理のゆくところを不審して云く善無畏三蔵の法華經と

大日經とを理は同じく事は勝れたりと立つるは天台大師の始め

て立て給へる一念三千の理を今大日經にとり入れて同じと自由

に判ずる条ゆるさるべしや、例せば先に人丸がほのぼのと・あか

しのうらの・あさぎりに・しまかくれゆく・ふねをしぞをもう・

とよめるを、紀のしくばう源のしたかうなんとが判じて云く「此

の歌はうたの父・うたの母」等云云、今の人・我うたよめりと

申もうして・ほのぼのとないし乃至船をしぞをもうと一字をもたがへず・よ
みて我が才は人丸にをとらずと申もうすをば人もちこれを用ゆべしや、や
まかつ海人あまなんどは用ゆる事もありなん、天台大師の始めて立て
給たまへる一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんは仏の父・仏の母なるべし、百年・已い後の
善無畏三蔵ぜんむいさんそうがこの法門ほうもんをぬすみとりて大日経だいにちぎようと法華経ほけきようとは理同りどう
なるべし、理同りどうと申もうすは一念三千いちねんさんぜんなりとかけるをば智慧ちえかしこき
人は用ゆべしや、事勝じしょうと申もうすは印・真言しんごんなしなんど申もうすは天竺てんじくの
大日経だいにちぎよう・法華経ほけきようの勝劣しょうれつか漢土かんどの法華経ほけきよう・大日経だいにちぎようの勝劣しょうれつか、
不空三蔵ふくうさんそうの法華経ほけきようの儀軌ぎぎには法華経ほけきように印・真言しんごんをそへて訳せり、
仁王経にんのうきようにも羅什らじゅうの訳には印・真言しんごんなし不空ふくうの訳の仁王経にんのうきようには印
・真言しんごんこれあり、此等これらの天竺てんじくの経経ききようには無量の事あれども月氏がつし
・漢土かんど・国を・へだてて・とをく・ことごとく・もちて来がたけ

れば經を略するなるべし、法華經には印・真言なければども二乗にじよう作仏さぶつ・劫国名号こうこくみょうごう・久遠実成くおんじつじようと申もうすきぼの事あり、大日經等だいにちぎようには印・真言しんごんはあれども二乗作仏にじようさぶつ・久遠実成くおんじつじようこれなし、二乗作仏にじようさぶつと印・真言しんごんとを並ぶるに天地の勝劣てんちしょうれつなり、四十余年よんじゅうよねんの經經きようぎようには二乗は敗種はいしゆの人と一字・二字ならず無量無辺むりようむへんの經經きようぎように嫌きらはれ、法華經には・これを破はして二乗作仏にじようさぶつを宣のべべたり、いづれの經經きようぎようにか印・真言しんごんを嫌きらうことばあるや、その言なければ又大日經だいにちぎようにも其その名を嫌きらはず但印・真言しんごんをとけり、印と申もうすは手の用なり手仏にならずは手の印・仏になるべしや、真言しんごんと申もうすは口の用なり口仏にならずば口の真言しんごん・仏になるべしや、二乗にじようの三業ほけきようは法華經ほけきように値あいたてまつらずは無量劫むりようこつ・千二百余尊よそんの印・真言しんごんを行すくずとも仏になるべからず、勝すぐれたる二乗作仏にじようさぶつの事法をばとか

ずと申もうして劣おとれる印・真言しんごんをとける事法すくをば勝もうれたりと申もうすは理
によれば盗人ぬすびとなり事によれば劣謂勝見れついしょうけんの外道げどうなり、此この失とがにより
て閻魔えんまの責めをばかほりし人なり、後にてんだいだいしいかへして天台大師を
仰あおいで法華ほっけにうつりて惡道あくどうをば脱まぬかれしなり。

くおんじつじょう
久遠実成くおんじつじょうなんどは大日經だいにちきようにはをもひもよらず、久遠実成くおんじつじょうは

いっさい
一切いっさいの仙ほんちの本地たと・譬たいへば大海たいかいは久遠実成くおんじつじょう・魚鳥よそんは千二百余尊よそんな

くおんじつじょう
り、久遠実成くおんじつじょうなくば千二百余尊よそんはうきくさの根なきがごとし夜

つゆ
の露つゆの日輪にちりんの出でざる程なるべし、天台宗てんだいしゅうの人人ひとびとこの事をわきまえ弁わへ

しんごんし
ずして真言師しんごんしにたばらかされたり、真言師しんごんしは又自宗じしゅうの誤あやまりをしら

あくどう
ず・いたづらに惡道あくどうの邪念じゃぎをつみをく、空海和尚くうかいわじょうは此この理わきまえを弁わへ

けこんしゅう
ざる上華嚴宗けこんしゅうのすでにやぶられし邪義じゃぎを借りととりて法華經ほけきようは猶なお

けこんきよう
華嚴經けこんきようにをとれりと僻見びやくけんせり、龜毛きもうの長短ちやうたん・兎角とかくの有無うむ・龜の

甲には毛なしなんぞ長短ちやうたんをあらそい兎の頭こうべには角なし・なんの有無うむを論ぜん、理同りどうと申す人いまだ閻魔えんまのせめを脱まぬれず、大日經だいにちぎやうに劣る華嚴經けこんぎやうに猶劣なおると申す人・謗法ほうぼうを脱のがるべしや、人は・かはれども其その謗法ほうぼうの義同じかるべし、弘法こうぼうの第一だいいちの御弟子おんでしかきのもときの僧正そうじやう・紺青鬼こんじやうきとなりし・これをもつてしるべし、空海くうかい悔改くわいかいなくば惡道あくどう疑うたがひうべしとも・をばへず其その流をうけたる人人ひとびと又いかん。

問うて云わく法師ほうし一人・此の惡言あくげんをはく如何いかん、答えて云く日蓮にちれんは此の人人ひとびとを難なんずるにはあらず但不審ふしんする計ばかりなり、いかりをばせば・さでをはしませ、外道げどうの法門ほうもんは一千年・八百年・五天にはびこりて輪王りんおうより万民ばんみんかうべをかたぶけたりしかども九十五種きゆうじゆうごしゆ共に仏にやぶられたりき、撰論師じやろんしが邪義じゃぎ・百余年なりしもやぶ

れき、南北の三百余年の邪見もやぶれき、日本・二百六十余年の六宗の義もやぶれき、其の上此の事は伝教大師の・或書の中に

やぶられて候を申すなり、日本国は大乘に五宗あり法相・三論

・華嚴・真言・天台、小乗に三宗あり俱舎・成実・律宗なり、

真言・華嚴・三論・法相は大乘よりいでありといへども・くわ

しく論ずれば皆小乗なり、宗と申すは戒・定・慧の三学を備へ

たる物なり、其の中に定・慧をさてをきぬ、戒をもて大・小のば

うじをうちわかつものなり、東寺の真言・法相・三論・華嚴等は

戒壇なきゆへに東大寺に入りて小乗律宗の乳驢・臭糞の戒を

持つ、戒を用つて論ぜば此等の宗は小乗の宗なるべし、比叡山

には天台宗・真言宗の二宗・伝教大師習いつたへ給いたりし

かども天台円頓の円定・円慧・円戒の戒壇立つべきよし申させ

給たまいしゆへに天台宗てんだいしゅうに対しては真言宗しんこんしゅうの名あるべからずと・を
ぼして天台法華宗てんだいほっけしゅうの止観しかん・真言しんこんとあそばして公家くげへまいらせ給たまい
き、伝でん教ぎょうより慈覚じかくたまはらせ給たまいし誓戒じがいの文には天台法華宗てんだいほっけしゅうの
止観しかん・真言しんこんと正まさくのせられて真言宗しんこんしゅうの名をけづられたり、天台
法華宗ほっけしゅうは仏立宗ぶつりゅうしゅうと申もうして仏より立てられて候、真言宗しんこんしゅうの真言しんこん
は当分とうぶんの宗ろんし・論師にんし・人師にんし始めて宗の名をたてたり、而しかるを事を
大日如来だいにちにやらい・弥勒菩薩みろくぼさつ等によせたるなり、仏御存知ごぞんじの御意みこころは但
法華經ほけきょう一宗なるべし小乗しょうじょうには二宗十八宗二十宗候へども但
所詮しよせんの理は無常むじょうの一理なり、法相宗ほうそうしゅうは唯心有境ゆいしん・大乘宗だいじょう・無量むりょう
の宗ありとも所詮しよせんは唯心有境ゆいしんとだにいはば但一宗なり三論宗さんろんしゅうは
唯心無境ゆいしん・無量の宗ありとも所詮しよせん・唯心無境ゆいしんならば但一宗なり、
此れは大乗だいじょうの空・有いちぶんの一分か、華嚴宗けこんしゅう・真言宗しんこんしゅうあがらば但中たんちゅう

・くだらば大乘だいじょうの空・有なるべし、經文きょうもんの説相せつそうは猶華嚴なほけごん・般若はんやにも及およばず但ただしよき人とおぼしき人人ひとびとの多く信じたるあいだ、下女を王のあいするにいたり、大日經等だいにちきようは下女のごとし理は但中たんちゅうにすぎず、論師ろんし・人師にんしは王のごとし人のあいするによて・いばうがあるなるべし、上の問答等もんどうは当時は世すえになりて人の智淺まんしんく慢心まんしん高きゆへに用ゆる事はなくとも、聖人しょうにん・賢人けんじんなんども出いでたらん時は子細しさいもやあらんずらん、不便ふびんにをもひまいらすれば目安に注せり、御ひまにはならはせ給たまうべし。

これは大事だいじの法門ほうもんなり、こくうざう菩薩ぼさつにまいりてつねによりみ奉らせ給たまうべし。

聖密房ほうに之これを遣つかわす

にちれんかおう
日蓮花押

◆一〇八 華果成就御書けかじょうじゆごしよ

弘安元年四月

五十七歳御作

900P

与浄顕房・義浄房 於身延

其その後ごなのに事こともうちたへ申し承もつわらず候うけたま、さては建治の比・故

どうぜんぼうしようにん

道善房聖人のために二札かきつかはし奉たてまつり候を嵩が森にてよま

たまひ

せ給たまひいて候よし悦よろこび入つて候、たとへば根ふかきときんば枝葉しやうか

みなもと

れず、源みなもとに水あれば流かはかず、火はたきぎ・かくればたへぬ、

そうもく

草木は大地だいちなくして生長する事あるべからず、日蓮にちれん・法華經ほけきやうの

ぎやうじや

行者となつて善惡ぜんあくにつけて日蓮房にちれんぼう・日蓮房にちれんぼうとうたはるる此の

ごおん

御恩ごおんしながら故師匠道善房ししやうどうぜんぼうの故ゆえにあらずや、日蓮にちれんは草木そうもくの如ごとく

ししやう

師匠ししやうは大地だいちの如ごとし、彼の地涌じゆの菩薩ぼさつの上首じやうしゆ四人にてまします、

じやうぎやうないし

一名いっめい上行じやうぎやう乃至四名あんりゆうぎやう安立行あんりゆうぎやう菩薩ぼさつ云云、末法まっぽうには上行じやうぎやう・出世しゆつせし

たま

給たまはば安立行あんりゆうぎやう菩薩ぼさつも出現しゆつげんせさせ給たまうべきか、さればいねは

はなみじょうじゅ

華果成就すれども必ず米の精・大地にをさまる、故にひつちお

ひいでて二度華果成就するなり、日蓮が法華經を弘むる功德は

必ず道善房の身に歸すべしあらうとたうと、よき弟子をもつと

きんば師弟・仏果にいたり・あしき弟子をたくはひぬれば師弟・

地獄にをつといへり、師弟相違せばなに事も成べからず委くは又

又申すべく候、常にかたりあわせて出離生死して同心に靈山

浄土にてうなづきかたり給へ、經に云く「衆に三毒有ることを示

し又邪見の相を現ず我が弟子是くの如く方便して衆生

度す」云云 前前申す如く御心得あるべく候、穴賢 穴賢

弘安元年戊寅卯月 日

日蓮花押

浄顯房

義浄房

◆一〇九 別当御房御返事

9 0 1 P

聖密房のふみに・くはしく・かきて候よりあいて・きかせ給い候へ、なに事も二間清澄の事をば聖密房に申しあわせさせ給うべく候か、世間のりをしりたる物に候へばかう申すに候、これへの所当なんどの事は・ゆめゆめをもはず候、いくらほどの事に候べき、但なばかりにてこそ候はめ、又わせいつをの事をそれ入つて候、いくほどなき事に御心ぐるしく候らんと・かへりてなげき入

つて候へども・我が恩をば・しりたりけりと・しらせまつらんだ

めに候、大名を計るものは小耻にはぢずと申もうして、南無なむ

妙法蓮華經の七字を

にほんこく

しんたんこま

にひろめ震旦高麗までも及ぶべきよ

しの大願をはらみて其その願の満すべきしるしにや、大蒙古国だいもうこくの

ちようじよう

牒状

しきりにありて此の国の人ごとの大なる歎なげきとみへ候、

にちれん

日蓮又先きより・この事をかんがへたり閻浮第一えんぶだいいちの高名なり、先

きよりにくみぬるゆへにままこのかうみやうのやうに専心とは

もち

用い候はねども終ついに身のなげき極まり候時は辺執へんしゆうのものどもも

一定とかへぬとみへて候、これほどの大事だいじをはらみて候ものの少

事をあながちに申もうし候べきか、但ただし当時とうじ・日蓮心にちれんざす事は生処な

にほんこく

り日本国よりも大切にをもひ候、例せば漢王の沛郡を・をもくを

ばしめししがごとし・かれ生処なるゆへなり、聖智あつちが跡の主とな

るをもつてしろしめせ、日本^{にほんこく}の山寺の主ともなるべし、日蓮^{にちれん}は
閻浮^{えんぶ}第一^{だいいち}の法華^{ほけ}經^{きやう}の行者^{ぎやうじや}なり・天^{てん}のあたへ給^{たま}うべきことわりな
るべし。

米一斗・六升あはの米二升・やき米はふくろへ・そのみなら
ず人人^{ひとびと}の御心^{おんこころ}ざし申しつくしがたく候、これは・いたみをもひ候、
これより後は心ぐるしく・をぼしめすべからず候、よく人人^{ひとびと}にし
めすべからず候、よく人人^{ひとびと}にもつたへさせ給^{たま}い候へ。

乃時

別当御房御返事^{べつとうごぼうごへんじ}

◆一一〇 寂日房御書^{ぼくじつぼうごしょ} 弘安二年九月 五十八歳御作 902P

与寂日房日家^{ぼくじつぼうにちけ} 於身延

是まで御をとかたじけなく候、夫^それ人身^{じんしん}をうくる事はまれなる

なり、已すでにまれなる人身じんしんをうけたり又あひがたきは仏法ぶつぽう・是も又
あへり、同じ仏法ぶつぽうの中にも法華經ほけきょうの題目だいもくにあひたてまつる結句けっく
題目だいもくの行者ぎょうじやとなれり、まことにまことに過去かこ十萬億じゅうまん(じゅうま
んおく)の諸仏しよぶつを供養くようする者なり。

日蓮にちれんは日本第一にほんだいいちの法華經ほけきょうの行者ぎょうじやなり・すでに勸持品かんじほんの二十行
の偈げの文は日本國にほんこくの中には日蓮にちれん一人よめり、八十萬億那由他なゆたの
菩薩ぼさつは口には宣たれども修行しゆぎやうしたる人・一人もなし、かかる
不思議ふしぎの日蓮にちれんをうみ出だせし父母ふぼは日本國にほんこくの一切衆生いつさいしゆじやうの中には
大果報かほうの人なり、父母ふぼとなり其その子となるも必ず宿習しゆくじゅうなり、
若し日蓮にちれんが法華經ほけきょう・釈迦しゃか如來にょらいの御使おんつかいならば父母ふぼあに其そのの故ゆえな
らんや、例せば妙莊嚴王みょうそうこん・淨徳夫人じやうとくふじん・淨蔵じやうざう・淨眼じやうがんの如ごとし、釈迦しゃか
・多宝たほうの二仏にちれん・日蓮にちれんが父母ふぼと變じ給たまうか、然しからずんば八十萬億じゅうまんの

菩薩ぼさつの生れかわり給たまうか、又上行菩薩等の四菩薩ぼさつの中の垂迹すいじゃくか

不思議ふしぎに覚え候おぼ、一切いっさいの物にわたりて名の大切なるなり、さてこ

そ天台大師・五重玄義てんだいだいし ごじゅうげんぎの初めに名玄義げんぎと釈しゃくし給たまへり。

日蓮にちれんとなる事自解仏乗じげぶつじようとも云いいつべし、かやうに申せば利口

げに聞えたれども道理どうりのさすところさもやあらん、經いわに云く

「日月にちがつ こうみようの光明よの能く諸の幽冥もろもろゆうみようを除くが如く斯ごとの人・世間せけんに行じ

て能く衆生しゅじようの闇を滅す」と此の文の心よくよく案じさせ給たまへ、

斯人行世間の五の文字しにんぎようせけん もんじは上行菩薩じようぎようぼさつ・末法の始の五百年まつぽう しゅつげんに出現し

て南無妙法蓮華經の五字なむ みようほうれんげきよう ごじの光明こうみようをさしして無明煩惱むみようぼんのうの闇をてら

すべしと云う事なり、日蓮にちれんは此の上行菩薩じようぎようぼさつの御使おんつかいとして日本にほん国

の一切衆生いっさいしゅじように法華經ほけきようをうけたもてと勧めすすめしは是これなり、此の山に

してもをこたらず候なり、今の經文きようもんの次下つぎしもに説いわいて云く「我が

滅度の後に於て応に此の經を受持すべし是の人・仏道に於て
決定して疑い有ること無けん」と云云、かかる者の弟子・檀那
とならん人人は宿縁ふかしと申うて日蓮と同じく法華經を弘む
べきなり、法華經の行者といはれぬる事はや不祥なりまぬかれ
がたき身なり、彼のはんいちやうりやうまさすみといはれたる者
は名を・をしむ故にはぢを思ふ故に・ついに臆したることはな
し、同じはずなれども今生のはぢは・もののかずならず・ただ
後生のはぢこそ大切なれ、獄卒・だつえば懸衣翁が三途河のはた
にて・いしうをはがん時を思食して法華經の道場へまいり給う
べし、法華經は後生のはぢをかくす衣なり、經に云く「裸者の衣
を得たるが如し」云云。

此の御本尊こそ冥途のいしやうなれ・よくよく信じ給うべし、

をとこのはだへをかくさざる女あるべしや・子のさむさをあわれ
まざるをやあるべしや、釈迦しゃかぶつ・法華經ほけきょうはめやとの如ごとくましまし
候ぞ、日蓮にちれんをたすけ給たまう事・今生こんじょうの恥はじをかくし給たまう人なり後生ごしょう
は又日蓮御身にちれんおんみのはぢをかくし申もうすべし、昨日は人の上・今日は我
が身の上なり、花さけばこのみなり・よめのしうとめになる事候
ぞ、信心しんじんをこたらずして南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと唱となえ給たまうべし、度度たびたび
の御音信おとずれ申もうしつくしがたく候ぞ、此の事寂日房ぼふくわしくかたり
給たまへ。

九月十六日

にちれんかおう
日蓮花押

◆一一一

あまごぜんごへんじ
新尼御前御返事

ぶんえい
文永十二年二月

五十四歳御作

904P

あまのり一ふくろ送り給ひ畢おわんぬ、又大尼御前あまごぜんよりあまのり

畏かしこまり入つて候、此の所をば身延の嶽たけと申もうす駿河の国は南にあ

たりたり彼の国の浮島うきしまがはらの海ぎはより此の甲斐かいの国・波木井はきり

の郷・身延の嶺みねへは百余里に及ぶ、余の道・千里せんりよりもわづらはし、

富士河と申もうす日本第一にほんだいいちのはやき河・北より南へ流れたり、此の河

は東西は高山こうざんなり谷深く左右さうは大石にして高き屏風を立て並べた

るがごとくなり、河の水は筒の中に強兵がっぴやうが矢を射出したるがご

とし、此の河の左右さうの岸をつたい・或あるは河を渡りわた・或時あるは河はや

く石多ければ舟破われて微塵みじんとなる、かかる所をすぎゆきて身延の

嶺もうと申もうす大山あり、東は天子てんしの嶺・南は鷹取たかとりの嶺・西は七面の嶺

・北は身延の嶺なり、高き屏風を四ついたてたるがごとし、峯に

上つてみれば草木森そうもく森たり谷に下つてたづぬれば大石連連たり、

大狼の音・山に充満し☆猴のなき谷にひびき鹿のつまをこうる音

あはれしく蟬のひびきかまびすし、春の花は夏にさき秋の葉は

冬になる、たまたま見るものはやまかつがたき木をひろうすがた

よりより時時とぶらう人は昔なれし同朋なり、彼の商山の四皓が世を

脱れし心ち竹林の七賢が跡を隠せし山もかくやありけむ、峯に上

つて・わかめやをいたると見候へば・さにてはなくして・わらび

のみ並び立ちたり、谷に下つてあまのりや・をいたると尋ねれば、

あやまりてや・みるらん・せりのみしげり・ふしたり、古郷の事

はるかに思いわすれて候いつるに今・此のあまのりを見候いてよ

しなき心をもひいでて・うくつらし、かたうみいちはこみなと

の磯のほとりにて昔見しあまのりなり、色形あぢわひもかはらず、

など我が父母かはらせ給いけんと・かたちがへなる・うらめしさ

・なみだをさへがたし。

此^これは・さて・とどめ候いぬ、但大尼御前^{あまごぜん}の御本尊^{ごほんぞん}の御事^{おんこと}おほ
せつかはされて・おもひわづらひて候、其^{その}の故^{ゆえ}は此^この御本尊^{ごほんぞん}は
天竺^{てんじく}より漢土^{かんと}へ渡^{わた}り候いし・あまたの三蔵^{さんそう}漢土^{かんと}より月氏^{がっし}へ入り候
いし人人^{ひとびと}の中にもしるしをかせ給^{たま}はず、西域^{さいいき}慈恩^{じおん}伝^{でん}燈錄^{とうろく}等の書^{しよ}
どもを開^{ひら}き見候へば五天竺^{てんじく}の諸国^{しよこく}の寺寺^{じじ}の本尊^{ほんぞん}皆^{みな}しるし尽^つして渡^{わた}
す、又漢土^{かんと}より日本^{にほん}に渡^{わた}る聖人^{しょうにん}日域^{にちいき}より漢土^{かんと}へ入^いる賢者^{けんじや}等のし
るされて候、寺寺^{じじ}の御本尊^{ごほんぞん}皆^{みな}かんがへ尽^つし日本^{にほん}国^{こく}最初^{さいしよ}の寺・
元興寺^{がんこじ}・四天王寺^{してんのう}等の無量^{むりよう}の寺寺^{じじ}の日記^{にっき}、日本^{にほん}紀^きと申^{もう}すふみより
始めて多くの日記^{にっき}にのこりなく註^{しゆ}して候へば其^{その}の寺寺^{じじ}の御本尊^{ごほんぞん}又
かくれなし、其^{その}の中に此^この本尊^{ほんぞん}はあへてまします。

人疑^{うたがい}つて云^{いわ}く経論^{きやうろん}になきかなければこそそこばくの賢者^{けんじや}等

たてまつ

は画像にかき奉り木像にもつくりたてまつらざるめと云云、

しか きようもん 経文は眼前なり御不審の人人は経文の有無をこそ尋ぬ

べけれ、前代ぜんだいにつくりかかぬを難なんぜんと・をもうは僻案びやくあんなり、

例せば釈迦しゃか仏は悲母孝養のために☆利天とうりてんに隠れさせ給たまいたりしを

ば一閻浮提えんぶだいの一切いっさいの諸人しよにんしる事なし、但目蓮尊者そんじゃ一人此れをしれ

り此れ又仏の御力おんちからなりと云云、仏法は眼前がんぜんなれども機きなければ

顕あらわれず時たいかいいたらざればひろまらざる事・法爾ほうにの道理どうりなり、例せば

大海うしおの潮うしおの時に随したがつて増減そうげんし上天の月の上下じやうげにみちかくるがご

とし。

今・此の御本尊ごほんそんは教主釈尊きやうしゆしやくそん・五百塵点劫ごひやくじんでんこより心中しんちゆうにをさめ

させ給たまいて世しゆくもんに出現しゆつげんせさせ給たまいても四十余年よんじゆうよねん・其その後又法華經ほけきやう

の中にも迹門しやくもんはせずぎて宝塔品ほうとうほんより事をこりて寿量品じゆりやうほんに説とき

あらわ じんりきほん ぞくろい さらわ
顕し神力品・属累に事極りて候いしが、金色世界の文殊師・

とし た とした
利兜史多天宮の弥勒菩薩・補陀落山の觀世音・日月・浄明・徳仏

おんでし やくおうぼさつ
の御弟子の薬王菩薩等の諸大士・我も我もと望み給いしかども叶

は ず、是等 是等は智慧いみじく才学ある人人とは・ひびけども・いま

ほけきよう
だ法華經を学する日あさし学も始なり、末代の大難忍びがたかる

べし、我五百塵点劫より大地の底にかくしをきたる真の弟子あり

こ
・此れにゆづるべしとて、上行菩薩等を涌出品に召し出させ

たまひ
給いて、法華經の本門の肝心たる妙法蓮華經の五字をゆづらせ

たまひ
給いて、あなかしこ・あなかしこ・我が滅度の後・正法一千年

そうほう
・像法一千年に弘通すべからず、末法の始に謗法の法師一閻浮提

じゅうまん
に充滿して諸天いかりをなし彗星は一天にわたらせ大地は大波

のごとくをどらむ、大旱魃・大火・大水・大風・大疫病・大

飢饉・大兵乱等の無量の大災難並びをこり、一閻浮提の人人・

ききん ひょうらん

むりよう

さいなんなら

えんぶだい

ひとびと

各各・甲冑をきて

きゆうじよう

弓杖を手ににぎらむ時、諸仏・諸菩薩・

しよぶつ しよぼさつ

しよだいぜんじん

おんちから

およ

たま

しよにんみな

むげん

諸大善神等の御力の及ばせ給わざらん時、諸人皆死して無間

じごく

おち

地獄に墮ること雨のごとくしげからん時・此の五字の大曼荼羅を

ごじ

まんだら

身に帯し

たい

心に存せば諸王は国を扶け

しよ

ばんみん

なん

のがれん、乃至

ないし

後生の大火炎を脱るべしと伝記しをかせ給いぬ、而るに日蓮

ごしよう

たいかえん

のが

しる

たま

しる

しる

しる

しる

しる

しる

しる

しる

しる

上行菩薩

じようぎようぼさつ

にはあらねども

ほ兼て

かね

これをしる

は彼の菩薩の御

ぼさつ

計らいかと存じて此の二十余年が間

こ

此れを申す、此の法門弘通

ほうもんくつう

せ

んには如来現在猶多怨嫉・

にょらいげんざいゆたおんしつ

きようめつどこ

いっさいせけん

たおんなんしん

もう

て第一のかたきは国主並びに郡郷等の地頭・

こくしゆなら

ぐんこう

じとう

領家・

ばんみん

万民等なり、

此れ又第二・第三の僧侶が・

そつりよ

うつたへについて

行者を・或は

ある

悪口し・或は罵詈し・或は刀杖等云云。

あつく

ある

めり

ある

とうじよう

云云。

而^{しか}るを安房^{あわ}の国・東条^{とうじょう}の郷は辺国なれども日本^{にほん}国^{こく}の中心のご
とし、其^{その}の故^{ゆえ}は天照太神^{てんしょうだいじん}・跡^{あと}を垂^たれ給^{たま}へり、昔^{いにし}は伊勢^せの国^{くに}に跡^{あと}
を垂^たれさせ給^{たま}いてこそありしかども、国王^{こくおう}は八幡^{はちまん}・加茂^{かも}等を
御^ご帰^き依^え深^{ふか}くありて天照太神^{てんしょうだいじん}の御^ご帰^き依^え浅^あかりしかば、太神^{おおみかみ}・瞋^{いか}り
おぼせし時^{とき}・源右将軍^{げんしゅうぐん}と申^{まう}せし人^{ひと}・御^ご起^き請^{しやう}文^{ぶん}をもつてあをかの小
大夫^{おお}に仰^{おほ}せつけて頂戴^{ちやうだい}し・伊勢^{いせ}の外宮^{ぐわい}にしのびをさめしかば
太神^{おおみかみ}の御^ご心^{こころ}に叶^{たま}はせ給^{たま}いけるかの故^{ゆえ}に日本^{にほん}を手ににぎる将軍^{しやうぐん}と
なり給^{たま}いぬ、此^この人^{ひと}東条^{とうじょう}の郡^{ぐん}を天照太神^{てんしょうだいじん}の御^ご栖^{すみ}と定めさせ
給^{たま}う、されば此^この太神^{おおみかみ}は伊勢^{いせ}の国^{くに}にはをはしまさず安房^{あわ}の国^{くに}・
東条^{とうじょう}の郡^{ぐん}にすませ給^{たま}うか、例えば八幡大菩薩^{はちまんだいぼさつ}は昔^{いにし}は西府^{せいふ}にをは
せしかども、中比^{なかひ}は山城^{やましろ}の国^{くに}男山^{おとやま}に移^{うつ}り給^{たま}い、今は相州鎌倉鶴^{そうしゅうかまくら}
が岡^がに栖^すみ給^{たま}うこれも・かくのごとし。

にちれん えんぶだい
日蓮は一閻浮提の内日本国安房の国・東条の郡に始めて此の

しょうほう ぐつう

正法を弘通し始めたり、随つて地頭敵となる彼の者すでに半分

ほろびて今半分あり、領家はいつわりをろかにて・或時は信じ

ある

・或時はやぶる不定なりしが日蓮御勘氣を蒙りし時すでに法華經

たまひ

をすて給いき、日蓮先よりけさんのついでごとに難信難解と申せ

にちれん

しはこれなり、日蓮が重恩の人なれば扶けたてまつらんために

ごほんそん

此の御本尊をわたし奉るならば十羅刹定めて偏頗の法師と・をば

きようもん

しめされなん、又経文のごとく不信の人に・わたしまいらせず

にちれん へんげ

ば日蓮偏頗はなけれども尼御前我が身のとがをば・しらせ給はず

たま

してうらみさせ給はんずらん、此の由をば委細に助阿闍梨の文

あまごぜん

にかきて候ぞ召して尼御前の見参に入れさせ給うべく候。

おんこと

御事にをいては御一味なるやうなれども御信心は色あらわれて

いちみ

しんじん

候、さどの国と申し此の国と申し度度の御志ありてたゆむけ
しきはみへさせ給はねば御本尊は・わたしまいらせて候なり、そ
れも終にはいかんがとをそれ思う事・薄氷をふみ太刀に向うがご
とし、くはしくは又又申すべく候、そののみならずかまくらにも
御勘氣の時・千が九百九十九人は堕ちて候人人も・いまは世間や
わらぎ候かのゆへにくゆる人人も候と申すげに候へども此れはそ
れには似るべくもなくいかにもふびんには思いまいらせ候へども
骨に肉をば・かへぬ事にて候へば法華經に相違せさせ給い候はん
事を叶うまじき由いつまでも申し候べく候、
恐恐謹言。

二月十六日

日蓮花押

新尼御前御返事

大尼御前御返事

908P

ごくそつえんま王の長は十丁ばかり面はすをさし眼まなこは日月にちがつの
ごとく齒はまんぐわのねのやうにくぶしは大石だいしのごとく大地は舟
を海にうかべたるやうに・うごき・声はらいのごとく・はたはた
となりわたらむには・よも南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやうとは・をほせ候はじ、
日蓮にちれんが弟子でしにも・をはせず・よくよく・内をしたためて・をほせ
をかほり候そうらはん、なづきをわりみをせめて・いのりてみ候そうらはん、
たださきの・いのりと・をぼしめせ、これより後は・のちの事を
よくよく御かため候へ、恐恐きようきよう。

九月二十日

日蓮にちれん在御判

大尼御前御返事あまごぜんごへんじ

◆一一三 種種御振舞御書しゆじゆ ふるまいごしよ

建長二年五十五歳御作けんちやう

与光日房ぼう

於身延

909p

い 去ぬる文永五年後の正月十八日・西戎・大蒙古国より日本国

を・をそうべきよし牒状をわたす、日蓮が去ぬる文応元年太歳申

に勘えたりし立正安国論今すこしもたがわず符合しぬ、此の書

は白樂天が樂府にも越へ仏の未來記にもをとらず末代の不思議な

に事かこれにすぎん、賢王・聖主の御世ならば日本第一の権状に

もをこなわれ現身に大師号も・あるべし定めて御たづねありてい

くさの僉義をもいゐあわせ調伏なんども申しつけられぬらんと

・をもひしに其の義なかりしかば其の年の末十月に十一通の状を

かきて・かたがたへをどろかし申す、国に賢人なんども・あるな

らば不思議なる事かな・これはひとへにただ事にはあらず、

天照太神・正八幡宮の此の僧について日本国のたすかるべき事

を御計らいのあるかと・をもわるべきに・さはなくて・或は使を

悪口あつくし・或あるはあざむき・或あるはとりも入れず・或あるは返事もなし・或あるは返事をなせども上もへも申もうさずこれひとへにただ事にはあらず、
設たいに日蓮にちれんが身の事なりとも国主こくしゅとなりまつり事をなさん人人ひとびとは取
りつぎ申もうしたらんには政道の法ぞかし、いわうや・この事は上の
御大事だいじいできらむのみならず各各の身にあたりて・をほいなるな
げき出来しゅつたいすべき事ぞかし、而しかるを用うる事こそなくとも悪口あつくま
ではあまりなり、此これひとへに日本国にほんこくの上下万人じやうげばんにん・一人もなく
法華經ほけきやうの強敵ごうてきとなりてとしひさしくなりぬれば大禍のつもり大
鬼神きじんの各各の身に入る上もへ蒙古国もうこの牒状ちやうじやうに正念しやうねんをぬかれてく
るうなり、例せば段の紂王ひかん・比干ひかんといゐし者いさめをなせしかば
用もちいずして胸をほり周の文武王にほろぼされぬ、呉王は伍子ごしよ
がいさめを用もちいず自害じがいをせさせしかば越王勾踐こつせんの手にかかる、こ

れもかれがごとくなるべきかと・いよいよ・ふびんに・をぼへて
名をもしまず命をもすてて強盛（こつじょう）に申しはりしかば風・大なれ
ば波・大なり竜・大なれば雨たけきやうに・いよいよ・あだを

なし・ますますにくみて御評定に僉議あり、頸をはぬべきか
鎌倉を・をわるべきか弟子・檀那等をば所領あらん者は所領を
召して頸を切れ・或はろうにてせめ・あるいは遠流すべし等云
云。

日蓮悦んで云く本より存知の旨なり、雪山童子は半偈のために
身をなげ常啼菩薩は身をうり善財童子は火に入り樂法梵士は皮
をはぐ薬王菩薩は皆をやく不輕菩薩は杖木をかうむり師子尊者
は頭をはねられ提婆菩薩は外道にころさる、此等はいかなりけ
る時ぞやと勘うれば天台大師は「時に適うのみ」とかかれ章安
大師は「取捨宜きを得て一向にすべからず」とするされ、法華經
は一法なれども機にしたがひ時によりて其の行万差なるべし、仏
記して云く「我が滅後・正像二千年すぎて末法の始に此の

ほけきよう 法華經の肝心題目の五字計りを弘めんもの出来すべし、其の時
あくおう あくびく 悪王・悪比丘等・大地微塵より多くして・或大乘・或は小乗
等をもつて・きそはんほどに、此の題目の行者にせめられて
ざいけ だんな 在家の檀那等をかたらひて・或はのり・或はうち・或はろうに入
ある しりよう れ・或は所領を召し・或は流罪・或は頸をはぬべし、などいふ
たいてん とも退転なく・ひろむるほどならば・あだをなすものは国主は・
ごくしゅ
どし打ちをはじめ餓鬼のごとく身をくらひ後には他国よりせめら
たこく
るべし、これひとへに梵天・帝釈・日月・四天等の法華經の敵
ほんてん たいしゃく にちがつ してん ほけきよう
なる国を他国より責めさせ給うなるべし」とかれて侯ぞ、各各
たこく
・我が弟子とならん人人は一人もをくしをもはるべからず、を
ひとびと
やを・をもひ・めこを・をもひ所領をかへりみることに・なかれ、
しりよう
むりよう 無量劫より・このかた・をやこのため所領のために命すてたる
しりよう

事は大地微塵だいちみじんよりも・をほし、法華經ほけきようのゆへには・いまだ一度も

すてず、法華經ほけきようをばそこばく行ぜしかども・かかる事出来しゅつたいせし

かば退転たいてんしてやみにき、譬たとえばゆをわかして水に入れ火を切るに

とげざるがごとし、各各思おもい切り給たまへ此の身を法華經ほけきようにかうるは

石に金をかへ糞に米をかうるなり。

仏滅後ぶつめつ・二千二百二十余年が間・迦葉かしよう・阿難あなん等・馬鳴めみよう・竜樹りゆうじゆ

等・南岳なんがく・天台等てんだい・妙楽みょうらく・伝教等でんぎようだにも・いまだひろめ給たまわぬ

法華經ほけきようの肝心かんじん・諸仏しよぶつの眼目がんもくたる妙法蓮華經みようほうれんげきようの五字ごじ・末法まつぽうの始はじに

一閻浮提えんぶだいにひろまらせ給たまうべき瑞相ずいそうに日蓮にちれんさきがけしたり、わた

うども二陣三陣つづきて迦葉かしよう・阿難あなんにも勝ぐれ天台てんだい・伝教でんぎようにも

こへよかし、わづかの小島のぬしらがをどさんを・をぢては

閻魔王えんまおうのせめをばいかながすべき、仏おんつかいの御使と・なのりながら

・をくせんは無下の人人なりと申しふくめぬ、さりし程に念仏者ねんぶつ

・持斎じさい・真言師等しんごんし・自身の智は及ばず訴状も叶かなわざれば上郎・尼

ごぜんたちに・とりつきて種種しゅじゅにかまへ申す、故最明寺入道殿さいみょうじにゅうどう

・極楽寺入道殿ごくらくにゅうどうを無間地獄に堕ちたりと申し建長寺・寿福寺・

極楽寺・長楽寺・大仏寺等をやきはらへと申し道隆上人ごくらくちようらくじだいぶつ・

良観上人等を頸をはねよと申す、御評定になにとなくとも日蓮りようかんしょうにん

が罪禍つみまぬかれがたし、但し上件の事・一定申すかと召し出た

づねらるべしとて召し出だされぬ、奉行人の云く上のをほせ・か

くのごとしと申せしかば・上件の事・一言もたがはず申す、但し

最明寺殿・極楽寺殿を地獄じごくという事は・そらごとなり、此の法門ほうもん

は最明寺殿・極楽寺穀・御存生の時より申せし事なり。

詮せんずるところ、上件の事どもは此の国を・をもひて申す事なれ

ば世を安穩あんのんにたもとんと・をぼさば彼の法師ほっしばらを召し合せて・

きこしめせ、さなくして彼等かれらにかわりて理不尽りふじんに失とがに行わるるは

どならば国に後悔こうかいあるべし、日蓮にちれん・御勘氣ごかんきをかほらば仏おんつかいの御使

を用いぬになるべし、梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく・日月にちがつ・四天してんの御とがめあり

て遠流おんる・死罪しざいの後・百日・一年・三年・七年が内に自界叛逆じかいほんぎやくなん難と

て此の御一門いちもんどううちはじめるべし、其その後は他国侵逼たこくしんびつ難とて

四方しほうより・ことには西方さいほうよりせめられさせ給うべし、其そのの時後悔こうかい

あるべしと平左衛門尉さえもんに申し付けしかども太攻入道たこうどうのくるひし

やうに・すこしもはばかり事なく物にくるう。

去文永八年太歳庚申辛ぶんえい 未九月十二日・御勘氣ごかんきをかはる、其そのの時

の御勘氣ごかんきのやうも常ならず法にすぎてみゆ、了行りょうこうが謀反を・を

こし大夫たゆうの律師りっしが世をみださんと・せしを・めしとられしにもこ

えたり、平左衛門尉・大将として数百人の兵者つわものにどうまろきせて

ゑぼうしかけてまなこ眼をいからし声をあらうす、大体・事の心を

案ずるに太政入道にゅうどうの世をとりながら国をやぶらんとせしににた

り、ただ事ともみへず、日蓮にちれんこれを見てをもうやう日ごろ月ごろ

・をもひまうけたりつる事はこれなり、さいわひなるかな法華經ほけきよう

のために身をすてん事よ、くさきかうべをはなたれば沙いさこに金こがねを

かへ石たまに珠をあきなへるがごとし、さて平左衛門尉さへものじようが一いちの郎從ろうじゆう

・少輔房しょうぼうと申もうす者はしりよりて日蓮にちれんが懷かいいちゆう中ちゆうせる法華經ほけきようの第五の

巻を取り出しておもてを三度さいなみて・さんざんとうちちら

す、又九巻ほけきようの法華經つわものを兵者ども打ちちらして・あるいは足にふみ

・あるいは身にまとひ・あるいはいたじき・たたみ等・家の二三

間にちらさぬ所にちれんもなし、日蓮にちれん・大高声を放ちて申もうすあらをもしろ

さえもののじょう

にほんこく

や平左衛門尉が・ものにくるうを見よ、とのばら但今・日本国の
柱をたをすと・よばはりしかば上下万人あわてて見えし、日蓮こ

じょうげばんにん

にちれん

そ御勘氣をかほれば・をくして見ゆべかりしに・さはなくして・

ごかんき

これはひがことなりとや・をもひけん、兵者どものいろこそ・へ

つわもの

んじて見へしか、十日並びに十二日の間・真言宗の失・禅宗・

なら

しんこんしゅう

とが

ぜんしゅう

念仏等・良観が雨ふらさぬ事・具さに平左衛門尉に・いぬきか

ねんぶつ

りょうかん

つぶ

さえもののじょう

せてありしに・或はどつとわらひ・或はいかりなんと・せし事ど

ある

ある

もはしげければ・しるさず、せんずるところは六月十八日より七

りょうかん

にちれん

月四日まで良観が雨のいのりして日蓮に支へられてふらしかね

・汗をながし・なんだのみ下して雨ふらざりし上・逆風ひまなく

くだ

てありし事・三度まで・つかひをつかわして一丈のほりを・こへ

ぬもの十丈・二十丈のほりを・こうべきか、いづみしきぶいろこ

のみの身にして八斎戒にせいせるうたをよみて雨をふらし、能因法師が破戒の身として・うたをよみて天雨を下らせしに、いかに二百五十戒の人人・百千人あつまりて七日二七日せめさせ給うに雨の下らざる上に大風は吹き候ぞ、これをもつて存ぜさせ給へ各の往生は叶うまじきぞとせめられて良観がなきし事・人人につきて通せし事・二に申せしかば、平左衛門尉等かたうどし・かなへずして・つまりふしし事どもはしげければかず。

さては十二日の夜・武蔵守殿のあづかりにて夜半に及び頸を切らんがために鎌倉をいでしに・わかみやこうぢにうちいでて四方に兵のうちつつみて・ありしかども、日蓮云く各各さわがせ給うなべちの事はなし、八幡大菩薩に最後に申すべき事ありとて馬よりさしをりて高声に申すやう、いかに八幡大菩薩はまことの神か

和氣清丸きよまるが頸を刎られんとせし時は長一丈の月と頸あわれさせ

給たまい、伝でん教大師ぎょうだいしの法華經ほけきょうをかうぜさせ給たまいし時はむらさきの

袈裟けさを御布施みふせにさづけさせ給たまいき、今日蓮けふのふたばは日本第一にほんだいいちの法華經ほけきょうの

行者ぎやうじやなり其その上・身みに一分いちぶんのあやまちなし、日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゆじやう

の法華經ほけきょうを謗ぼうじて無間むげん・大城だいじやうにおつべきを・たすけんがために

申もうす法門ほうもんなり、又大蒙古国だいもうここくより・この国をせむるならば天照てんしやう

太神おおみかみ・正八幡しょうはちまんとても安穩あんのんにおはすべきか、其その上・釈迦しゃか仏ぶつ・

法華經ほけきょうを説とき給たまいしかば多宝仏たぼうぶつ・十方じゆつぱうの諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつあつまりて

日と日と月と月と星と星と鏡と鏡とをならべたるがごとくなりし

時むりやう、無量しよてんの諸天なら並びに天竺てんじく・漢土かんと・日本国等にほんこくの善神ぜんじん・聖人しやうにんあつ

まりたりし時、各各ほけきやう・法華經ぎやうじやの行者ぎやうじやにをろかなるまじき由せいじやうの

誓狀せいじやうまいらせよと・せめられしかば一一せいじやうに御誓狀ぎせいじやうを立てられし

ぞかし、さるにては日蓮にちれんが申もうすまでもなし・いそぎいそぎこそ
誓状せいじょうの宿願をとげさせ給たまうべきに・いかに此この処ところには・をちあ
わせ給たまはぬぞと・たかだかと申もうす、さて最後さいごには日蓮にちれん・今夜・頸
切られて靈山りょうぜん淨土へ・まいりてあらん時はまづ天照太神てんしょうだいじん・
正八幡しょうはちまんこそ起請きしょうを用いぬかみにて侯そうらいけれとさしきりて教主きょうしゅ
釈尊しゃくそんに申もうし上げ候そうらはんずるぞいたしと・おぼさば・いそぎいそ
ぎ御計ごけいらいあるべしとて又馬うまにのりぬ。

ゆいのはまに・うちいでて御りやうのまへに・いたりて又い云わく
しばし・とのばら・これにつぐべき人ありとて、中務三郎
左衛門尉さえもんと申もうす者のもとへ熊王と申もうす童子どうじを・つかわしたりしか
ば・いそぎいでぬ、今夜頸切られへ・まかるなり、この数年が間
・願ねがいつる事これなり、此この娑婆世界しゃばせかいにして・きじとなりし時は

・ たかにつかまれ・ねずみとなりし時は・ねこにくらわれき、
・ 或^{ある}はめこのかたきに身を失^{うしな}いし事・大地微塵^{だいちみじん}より多し、法華經^{ほけきよう}
の御^おためには一度^{ひとたび}だも失^{うしな}うことなし、されば日蓮貧道^{にちれんひんどう}の身と生れ
て父母^{ふぼ}の孝養^{こうよう}・心にとらず国の恩を報^{こた}すべき力なし、今度^{このたび}頸^くを
法華經^{ほけきよう}に奉^{たてまつ}りて其^その功德^{くどく}を父母^{ふぼ}に回向^{えこう}せん其^そのあまりは弟子^{でし}・
檀那^{だんな}等^らにはぶくべしと申せし事これなりと申せしかば、左衛門尉^{さえもんのじよう}
・ 兄弟^{きょうだい}四人・馬の口にとりつきて・こしこへたつの口にゆきぬ、
此^こにてぞ有^あらんずらんと・をもうところに案^{あん}にたがはず兵士ども
うちまはり・さわぎしかば、左衛門尉^{さえもんのじよう}申^{もう}すやう只^{ただ}今^{いま}なりとなく、
日蓮^{にちれんもう}申^{もう}すやう不^ふかくのとのばらかな・これほどの悦^{よろこ}びをば・わら
へかし、いかに・やくそくをば・たがへらるるぞと申せし時、江
のしまのかたより月のごとく・ひかりたる物まりのやうにて辰巳

のかたより戌亥いぬいのかたへ・ひかりわたる、十二日の夜のあけぐれ
人の面も・みへざりしが物のひかり月よのやうにて人人ひとびとの面もみ
なみゆ、太刀取目くらみ・たふれ臥ふし兵共おぢ怖れ・けうさめて
一町計ばかりはせのき、或あるは馬より・をりて・かしこまり・或あるは馬
の上にて・うづくまれるもあり、日蓮にちれんもう申すやう・いかにとのばら
・かかる大根ある召人にはとをのくぞ近く打ちよれや打ちよれや
と・たかだかと・よばわれども・いそぎよる人もなし、さてよあ
けば・いかにいかに頸切べくはいそぎ切るべし夜明けなばみぐる
しかりなんと・すすめしかども・とかくのへんじもなし。

はるか計ばかりありて云いわくさがみのえちと申もうすところへ入らせ給たまへ
と申もうす、此これは道知る者なし・さきうちすべしと申せどもうつ人
もなかりしかば・さてやすらうほどに・或あるによらい如来の云いわく・それこそ

その道にて候へそうらと申せしかば道にまかせてゆく、午の時計ばかりにえ
ちと申すところへ・ゆきつきたりしかば本間六郎左衛門さえもんがいへに
入りぬ、さけとりよせて・もののふどもに・のませてありしかば
各かへるとて・かうべをうなたれ手をあさへて申すもうやう、このほ
どは・いかなる人にてや・をはすらん・我等われらがたのみて候・
阿弥陀仏あみだぶつをそしらせ給うと・うけ給われたまば・にくみまいらせて
候そうらいつるに・まのあたりをがみまいらせ候そうらいつる事どもを見て
候へそうらば・たうとさに・としごろ申もうしつる念仏ねんぶつはすて候そうらいぬとて・
ひうちぶくろよりすずとりいだして・すつる者あり、今は念仏ねんぶつ
申もうさじと・せいじやうをたつる者もあり、六郎左衛門さえもんが郎従等ろうじゆう
・番をばうけとりぬ、さえもんのじようも・かへりぬ。

其その日の戌の時計ばかりにかまくらより上の御使おんつかいとてたてぶみを

もちて来ぬ、頸切れという・かさねたる御使おんつかいかと・もののふどもは・をもひてありし程に六郎左衛門さえもんが代官右馬のじようと申もうす者・立ぶみもちて・はしり来りひざま・つひて申もうす、今夜にて侯べし・あらあさましやと存じて侯そうらいつるに・かかる御悦よろこびの御ふみ来りて侯、武蔵守むさしの殿は今日・卯の時にあたみの御ゆへ御出いで候へば・いそぎ・あやなき事もやと・まづこれへはしりまいりて侯そうらうもうと申す、かまくらより御つかいは二時にはしりて侯、今夜の内にあたみの御ゆへ・はしりまいるべしとて・まかりいでぬ、追状いわに云く此の人はとがなき人なり今しばらくありてゆ・るさせ給たまうべし・あやまちしては後悔こうかいあるべしと云云。

其その夜は十三日・兵士ども数十人・坊の辺り並ならびに大庭になみゐて侯そうらいき、九月十二百の夜なれば月・大おおに・はれてありしに夜

中に大庭に立ち出でて月に向ひ奉りてこ自我偈少々よみ奉り
諸宗の勝劣・法華經の文あらあら申して抑今の月天は法華經
の御座に列りまします名月天子ぞかし、宝塔品にして仏勅をう
け給い囑累品にして仏に頂をなでられまいらせ「世尊の勅の
如く当に具に奉行すべし」と誓状をたてし天ぞかし、仏前の譬
は日蓮なくば虚くてこそをはすべけれ、今かかる事出来せばい
そぎ悦びをなして法華經の行者にも・かはり仏勅をも・はたし
て誓言のしるしをばとげさせ給うべし、いかに今しるしのなきは
不思議に候ものかな、何なる事も国になくしては鎌倉へもかへら
んとも思はず、しるしこそなくとも・うれしがをにて澄渡らせ
給うはいかに、大集經には「日月明を現ぜず」ととかれ、仁王經
には「日月度を失う」とかかれ、最勝王經には「三十三天各隕

恨を生ず」とこそ見え侍るに・いかに月天いかに月天とせめしか
ば、其のしるしにや天より明星の如くなる大星下りて前の梅の木
の杖に・かかりてありしかば・もののふども皆えんより・とびを
り・或は大庭にひれふし・或は家のうしろへにげぬ、やがて即ち
天かきくもりて大風吹き来りて江の島のなるとて空のひびく芋大
なるつつみを打つがごとし。

夜明れば十四日卯の時に十郎入道と申すもの来りて云く・昨
日の夜の戌の時計りにかうどのに大なるさわぎあり、陰陽師を召
して御うらなひ候へば申せしは大に国みだれ候べし・此の御房
御勘気のゆへなり、いそぎいそぎ召しかえさずんば世の中いかが
候べかるらんと申せば、ゆりさせ給へ候と申す人もあり、又百日
の把に軍あるべしと申しつれば・それを待つべしとも申す、依智

にして二十余日・其の間鎌倉に・或は火をつくる事・七八度・
・或は人をころす事ひまなし、讒言の者共の云く日蓮が弟子共の
火をつくるなりと、さも・あるらんとて日蓮が弟子等を鎌倉に置
くべからずとて二百六十余人しるさる、皆遠島へ遺すべしろうに
ある弟子共をば頸をはねらるべしと聞ふ、さる程に火をつくる等
は持齋念佛者が計事なり其の余はしげければかかず。

同十月十日に依智を立つて同十月二十八日に佐渡の国へ著ぬ、
十一月一日に六郎左衛門が家のうしろ塚原と申す山野の中に洛陽
の蓮台野のやうに死人を捨つる所に一間四面なる堂の仏もなし、
上はいたまあはず四壁はあばらに雪ふりりて消ゆる事なし、かか
る所にしきがは打ちしき養うちきて夜をあかし日をくらす、夜は
ゆきあられいなずま
雪雹雷電ひまなし昼は日の光もささせ給はず心細かるべきすま

あり、彼の李陵りりょうが胡国ここくに入りて巖窟がんくつに・せめられし法道三蔵ほうどうさんそうの

きそうこうてい

徽宗皇帝きそうこうていに・せめられて面おもてにかなやきをさされて江南にはなたれ

ただ

しも只今とおぼゆ、あらうれしや檀王だんおうは阿私仙人あしせんじんに・せめられて

ほけきよう

法華經ほけきようの功德くどくを得給たまいき、不輕菩薩ぶきやうぼさつは上慢じやうまんの比丘びく等の杖じやうにあた

いちじよう

りて一乗いちじようの行者ぎやうじやといはれ給たまふ、今日蓮けふは末法まっぽうに生れて

みようほうれんげきよう

妙法蓮華經めうほうれんげきようの五字ごじを弘ひろめて・かかるせめにあへり、仏滅度後ぶつめつとご・

二千二百余年が間・恐らくは天台智者大師てんだいちしやだいしも一切世間いっさいせけん・多怨難信たおんなんしん

きようもん

の經文きやうもんをば行たまじ給たまはず数数見擯出さくさくけんひんずいの明文めいぶんは但日蓮にちれん一人なり、

いっくいちげ

一句一偈いちくいちげ・我皆与授記みなじゆきは我なり阿耨多羅三藐三菩提あのくたらさんみやくさんぼだいは疑うたがいいな

さがみのかみ

し、相模守殿さがみのかみこそ善知識ぜんちしきよ平左衛門さえもんこそ提婆達多だいばだつたよ念仏者ねんぶつは

くぎやりそんじや

瞿伽利尊者くぎやりそんじや・持斎等じさいは善星比丘ぜんしやうびくなり、在世ざいせは今いまにあり今は在世ざいせ

ほけきよう

なり、法華經ほけきようの肝心かんじんは諸法実相しよほうじつそうと・とかれて本末究竟等ほんまつくきやうとのべら

れて侯そうらは是これなり、摩訶止觀まかしかん第五ごに云いく「行解ぎやうげ既すでに勤つとめぬれば三障さんしやう

・四魔ふんぜん・紛然きそとして競おこい起おこる」文、又云いく「猪の金山しゅうるを摺すり衆流しゅうる

の海うみに入り薪たきぎの火かを熾さかんにし風の求羅ぐらを益やくすが如ごときのみ」等云云、

釈しゃくの心こころは法華經ほけきやうを教しやくのごとく機きに叶かなひ時に叶かなうて解行げぎやうすれば七つ

の大事だいじ出来しゅつす、其その中に天子魔てんじまとて第六天だいろくてんの魔王まおう・或あるは国主こくしゅ

・或あるは父母ふぼ・或あるは妻子さいし・或あるは檀那だんな・或あるは惡人あくにん等らについて・或あるは

随したがつて法華經ほけきやうの行ぎやうをさえ・或あるは達たつしてさうべき事ことなり、何いづれれの經

をも行ぎやうぜよ仏法ぶつぽうを行ぎやうずるには分ぶん分に随したがつて留難るなんあるべし、其その中

に法華經ほけきやうを行ぎやうずるには強盛かうじやうにさうべし、法華經ほけきやうを・をしへの

如ごとく時機じきに當あたつて行ぎやうずるには殊ことに難なんあるべし、故ゆゑに弘決くけつの八はちに

云いく「若もし衆生しゆじやう・生死しやうじを出いでず仏乘ぶつじやうを慕したわずと知しれば魔ま・是この

人ひとに於おいて猶親なほの想なを生なす」等云云、釈しゃくの心こころは人じん・善根ぜんこんを修しゆすれど

も念仏・真言・禪・律等の行をなして法華經を行ぜざれば魔王親
のおもひをなして人間につきて其の人をもてなし供養す世間の人
に実の僧と思はせんが為なり、例せば国主のたとむ僧をば諸人
供養するが如し、されば国主等のかたきにするは既に正法を行
ずるにてあるなり、釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の
善知識なれ、今の世間を見るに人をよくなすものはかたうどより
も強敵が人をば・よくなしけるなり、眼前に見えたり此の鎌倉の
御一門の御繁昌は義盛と隠岐法皇まします争か日本の主
となり給うべき、されば此の人人は此の御一門の御ためには第一
のかたうどなり、日蓮が仏にならん第一のかたうどは景信・法師
には良観・道隆・道阿弥陀仏と平左衛門尉・守殿ましますん
ば争か法華經の行者とはなるべきと悦ぶ。

かくて・すぐす程に庭には雪つもりて・人もかよはず堂にはあ
らき風より外は・をとづるものなし、まなこ眼には止観・法華をさ
らし口には南無妙法蓮華經と唱へ夜は月星に向ひ奉りて諸宗の
いもく違目と法華經の深義を談ずる程に年もかへりぬ、いづくも人の心
のはかなさは佐渡の国の持斎・念仏者の唯阿弥陀仏・生喻房・印
性房・慈道房等の数百人より合いてせんぎ僉議すと承る、聞ふる
阿弥陀仏の大怨敵・一切衆生の悪知識の日蓮房・此の国になが
されたり・なにとなくとも此の国へ流されたる人の始終いけらる
る事なし、た設ひいけらるるとも・かへる事なし、又打ちころした
りとも御とがめなし、塚原と云う所に只一人ありいかにがうなり
とも力つよくとも人なき処なれば集りていころ・せかしと云う
ものもありけり、又なにとなくとも頸を切らるべかりけるが守殿

の御台所みだいどころの御懷妊かいにんなれば・しばらくきられず終ついには一定ときく、

又云く六郎いわ左衛門尉さえものじよう殿に申もうしてきらずんば・はからうべしと云

う、多くの義の中に・これについて守護所しゅごしょに数百人集りぬ、六郎

左衛門尉さえものじよう云く上より殺しまうすまじき副狀下りてあなづるべき流

人にはあらず、あやまちあるならば重連しげつらが大なる失とがなるべし、そ

れよりは只法門ただほうもんにてせめよかしと云いければ念仏者等ねんぶつ・・或は

浄土じようどの三部經さんぶきよう・・或は止觀しかん・・或は真言等ある しんごんを小法師等ほっしが頸にかけ

させ・或はわきにはさませて正月十六日にあつまる、佐渡さどの国の

みならず越後・越中・出羽・奥州おうしゅう・信濃等の国国より集れる

法師等ほっしなれば塚原の堂の大庭・山野に数百人・六郎左衛門尉さえものじよう・

兄弟きょうだい一家さならぬもの百姓ひやくせいの入道等にゅうどうかずをしらず集りたり、

念仏者ねんぶつは口口に悪口あくくをなし真言師しんごんしは面面に色を失ひ天台宗うしないてんだいしゅうぞ勝

つべきよしを・ののしる、在家ざいけの者どもは聞きこふる阿弥陀あみだぶつ仏のかた
きよと・ののしり・さわぎ・ひびく事・震動しんどう雷電らいでんの如ごとし、日蓮にちれんは
暫しばらく・さはがせて後・各各しつもらせ給たまへ・法門ほうもんの御為ためにこそ
御渡わたりあるらめ悪口あくぐち等よしなしと申せしかば・六郎左衛門さえもんを始め
諸人しよにん然しかるべしとて悪口あくぐちせし念仏ねんぶつ者をば・そくびをつきいだし
ぬ、さて止観しかん・真言しんごん・念仏ねんぶつの法門ほうもん一いっにかれが申もうす様を・でつし
あげて承しょう伏ふくせさせては・ちやうとはつめつめ・一言二言にはす
ぎず、鎌倉かまくらの真言師しんごんし・禅宗ぜんしゅう・念仏ねんぶつ者・天台てんだいの者よりも・はかな
きものどもなれば只思ただひやらせ給たまへ、利剣りけんをもて・うりをきり
大風たいふうの草をなびかすが如ごとし、仏法ぶつぽうのおろかなる・のみならず・或ある
は自語相違じごそういし・或あるは経をわすれて論と云ひ釈をわすれて論と云
ふ、善導ぜんどうが柳より落ち弘法大師こうぼうだいしの三鈷さんこを投なたる大日如来だいにちによらいと現げんじた

る等をば・或は妄語・或は物にくるへる処を一一にせめたるに、
・或は悪口し・或は口を閉ぢ・或は色を失ひ・或は念仏ひが事な
りけりと云うものもあり、・或は当座に袈裟・平念珠をすてて
念仏申すまじきよし誓状を立つる者もあり。

皆人立ち帰る程に六郎左衛門尉も立ち帰る一家の者も返る、

日蓮不思議一云はんと思ひて六郎左衛門尉を大庭よりよび返して

云くいつか鎌倉へのぼり給うべき、かれ答えて云く下人共に農せ

させて七月の比と云云、日蓮云く弓箭とる者は・を・をやけの

御大事にあひて所領をも給わり供をこそ田畠つくるとは申せ、

只今いくさのあらんずるに急ぎうちのぼり高名して所知を給らぬ

か、さすがに和殿原はさがみの国には名ある侍ぞかし、田舎にて

田つくり・いくさに・はづれたらんは恥なるべしと申せしかば・

いかにや思いけめあはててもものもいはず、念仏者・持齋・在家の者どもも・なにと云う事ぞやと恠しむ。

さて皆歸りしかば去年の十一月より勘えたる開目抄と申す文二巻造りたり、頸切るるならば日蓮が不思議とどめんと思ひて勘えたり、此の文の心は日蓮によりて日本国の有無はあるべし、譬へば宅に柱なければ・たもたず人に魂なければ死人なり、日蓮は日本の人の魂なり平左衛門既に日本の柱をたをしぬ、只今世乱れてそれともなく・ゆめの如くに妄語出来して此の御一門どうちして後には他国よりせめらるべし、例せば立正安国論に委しきが如し、かやうに書き付けて中務三郎左衛門尉が使にとらせぬ、つきたる弟子等もあらぎかなと思へども力及ばざりげにてある程に、二月の十八日に島に船つく、鎌倉に軍あり京にもあり・その

やう申す計りなし、六郎左衛門尉・其の夜にはやふねをもつて

いちもんあいぐ

一門相具してわたる日蓮にたな心を合せて・たすけさせ給へ、

いぬ

去る正月十六日の御言いかによと此程疑い申しつるに・いくほ

どなく三十日が内にあひ候いぬ、又蒙古国も一定渡り候いなん、

ねんぶつ

念仏・無間地獄も一定にてぞ候はんずらん永く念仏申し候まじと

申せしかば、いかに云うとも相模守殿等の用ひ給はざらんには

にほんこく

日本国の人用うまじ用ゐずば国必ず亡ぶべし、日蓮は幼若の者な

れども法華経を弘むれば釈迦仏の御使ぞかし、わづかの

てんしょうだいじん

天照太神・正八幡などと申すは此の国には重けれども梵釈

にちがつ

・日月・四天に対すれば小神ぞかし、されども此の神人などを

あやまちぬれば只の人を殺せるには七人半なんと申すぞかし、太

にゆうどう

政入道・隠岐法皇等のほろび給いしは是なり、此れはそれには

にるべくもなしきょうしゅしやくそん教主釈尊おんつかいの御使なれば天照太神てんしやうだいじん・正八幡宮しやうはちまんぐう

こうべ

も頭をかたづけ手を合せて地に伏し給うべき事なり、法華經ほけきやうの

ぎやうじや

行者をば梵釈ぼんしやく・左右さうに侍り月月はんべ・前後ぜんごを照し給ふ、かかる日蓮にちれん

もち

を用いぬるともあしくうやまはば国亡ぶべし、何に況や数百人いかに

うたがい

にくませ二度まで流しぬ、此の国の亡びん事疑いなかるべけれ

しばら

ども且く禁をなして国をたすけ給へと日蓮がひかうればこそ今ま

あんのん

では安穩あんのんにありつれども・はうに過ぐれば罰あたりぬるなり、又

だいもうこく

此の度も用ひずば大蒙古国より打手を向けて日本国ほろぼさるべ

さえものじよう

し、ただ平左衛門尉が好むわざわひなり、和殿原とても此の島と

あんのん

ても安穩あんのんなるまじきなりと申せしかば、あさましげにて立帰りぬ、

ざいけ

さて在家の者ども申しけるは・此の御房は神通の人にてまします

もん
ごぼう
じんつう

か・あらおそろし・おそろし、今は念仏者をも・やしなひ持齋を

じさい

も供養すまじ、念仏者・良観が弟子の持斎等が云く此の御房は謀叛の内に入りたりけるか、さて且くありて世間しつまる。

又念仏者集りて僉議す、かうてあらんには我等かつえしぬべし

・いかにもして此の法師を失はばや、既に国の者も大体つきぬ・

いかんがせん、念仏者の長者の唯阿弥陀仏・持斎の長者の性論

房・良観が弟子の道観等・鎌倉に走り登りて武蔵守殿に申す、

此の御房・島に侯ものならば堂塔一字も侯べからず僧一人も侯ま

じ、阿弥陀仏をば・或は火に入れ・或は河にながす、夜もひるも

高き山に登りて日月に向つて大音声を放つて上を呪咀し奉る、

其の音声・一國に聞ふと申す、武蔵前司殿・是をきき上へ申す

までも・あるまじ、先ず國中のもの日蓮房につくならば・或は國

をおひ・或はろうに入れよと私の下知を下す、又下文下るかく

の如く三度其の間の事申さざるに心をもて計りぬべし、・或は
其の前をとをれりと云うて・ろうに入れ・或は其の御房に物をま
いらせけりと云うて国をおひ・或は妻子をとる、かくの如くして
上へ此の由を申されければ案に相違して去る文永十一年二月十四
日の御赦免の状・同三月八日に島につきぬ、念仏者等・僉議して
云く此れ程の阿弥陀仏の御敵・善導和尚・法然上人をのるほど
の者が・たまたま御勘気を蒙りて此の島に放されたるを御赦免あ
るとていけて帰さんは心うき事なりと云うて、やうやうの支度あ
りしかども何なる事にや有りけん、思はざるに順風吹き来りて島
をば・たちしかばあはいあしければ百日・五十日にもわたらず、
順風には三日なる所を須臾の間に渡りぬ、越後のこう・信濃の善
光寺の念仏者・持斎・真言等は雲集して僉議す、島の法師原は

今まで・いけてかへすは人かつたいなり、一我^{われら}等はいかにも
生身^{しょうしん}の阿弥陀^{あみだぶつ}仏^{おんまへ}の御前^{つわもの}をば・とをすまじと僉^{せん}議^ぎせしかども、又
越後のこ^つうより兵者^{つわもの}ども・あまた日蓮^{にちれん}にそひて善光寺をとをりし
かば力

および、三月十三日に島を立ちて同三月二十六日に鎌倉へ打ち入りぬ。

同四月八日平左衛門尉に見参しぬ、さきには・にるべくもなく

威儀を和らげて・ただしくする上・・或る入道は念仏をとふ・

・或る俗は真言をとふ・・或る人は禅をとふ・平左衛門尉は爾前

得道の有無をとふ・一一に経文を引いて申しぬ、平の左衛門尉

は上の御使の様にて大蒙古国はいつか渡り候べきと申す、日蓮

答えて云く今年は一定なりそれにとつては日蓮已前より勘へ申す

をば御用ひなし、譬えば病の起りを知らざる人の病を治せば弥よ

病は倍增すべし、真言師だにも調伏するならば弥よ此の国軍に

まくべし・穴賢穴賢、真言師・総じて当世の法師等をもつて御

祈り有るべからず・各各は仏法をしらせ給うておわさばこそ申す

ともしらせ給はめ、又何なる不思議にやあるらん他事には・こと
にして日蓮が申す事は御用いなし、後に思い合せさせ奉らんが
ために申す隠岐法皇は天子なり権大夫殿は民ぞかし、子の親をあだ
まんをば天照太神うけ給いなんや、所従が主君を敵とせんをば
正八幡は御用いあるべしや、いかなりければ公家はまけ給いけ
るぞ、此れは偏に只事にはあらず弘法大師の邪義・慈覚大師・
智証大師の僻見をまことと思ひて叡山・東寺・園城寺の人人の
鎌倉をあだみ給いしかば還著於本人とて其の失還つて公家はまけ
給いぬ、武家は其の事知らずして調伏も行はざればかちぬ今又
かくの如くなるべし、ゑぞは死生不知のもの安藤五郎は因果の
道理を弁えて堂塔多く造りし善人なり、いかにとして頸をば・ゑ
ぞに・とられぬるぞ、是をもつて思うに此の御房たちだに御祈あ

らば入道穀・事にあひ給いぬと覚え候、あなかしこ・あなかしこ・さ・いはざりけると・おほせ候なと・したたかに申し付け候いぬ。

さてかへりききしかば同四月十日より阿弥陀堂法印に仰付られて雨の御いのりあり、此の法印は東寺第一の智人・をむろ等の御師・弘法大師・慈覚大師・智証大師の・真言の秘法を鏡にかけ天台・華嚴等の諸宗を・みな胸にうかべたり、それに随いて十日よりの祈雨に十一日に大雨下りて風ふかず雨しつかにて一日一夜ふりしかば・守殿御感のあまりに金三十両むまやうやうの御ひきで物ありと・きこふ、鎌倉中の上下・万人・手をたたき口をすくめてわらうやうは日蓮ひが法門申して・すでに頸をきられんとせしが・とかうしてゆりたらば・さではなくして念仏・禅をそし

るのみならず、真言しんごんの密教みつぎょうなどをも・そしるゆへに・かかる

法のしるしめでたしと・のしりしかば、日蓮にちれんが弟子等でしけうさめ

て・これは御あら義と申せし程に・日蓮にちれんが申すやうはしばしまて

弘法大師こうぼうだいしの悪義あくぎまことにて国の御いのりとなるべくば隠岐法皇おきほうこうこ

そ・いくさにかち給たまはめ、をむろ最愛の児せいたかも頸をきられ

ざるらん、弘法こうぼうの法華經ほけきょうを華嚴經けこんきょうにとれりとかける状は十住じゅうじゅう

心論しんろんと申す文もんにあり、寿量品じゅうりょうほんの釈迦しゃか仏ぶつをば凡夫ほんぶなりとするされ

たしる文は秘藏宝鑰ひそうほうやくに候、天台大師てんだいだいしをぬす人とかける状は二教論

にあり、一乘法華經いちじょうほうけきょうをとける仏ぶつをば真言師しんごんしのはきものとりにも

及およばずとかける状は正覚房しょうかくぼうが舍利講しゃりこうの式しきにあり、かかる僻事ひがことを

申す人もうの弟子でし・阿弥陀堂あみだだうの法印ほういんが日蓮にちれんにかつならば竜王りゅうおうは

法華經ほけきょうのかたきなり、梵釈ぼんしゃく・四王しおうに・せめられなん子細しさいぞあら

んずらんと申せば、弟子^{でし}どものいはく・いかなる子細^{しさい}のあるべきぞとをこつきし程に、日蓮^{にちれん}古く善無畏^{ぜんむい}も不空^{ふくう}も雨のいのりに雨はふりたりしかども大風^{たいふう}吹きてありけるとみゆ、弘法^{こうぼう}は三七日すぎて雨をふらしたり、此等^{これら}は雨ふらさぬがごとし、三七・二十一日にふらぬ雨やあるべき設^たいふりたりとも・なんの不思議^{ふしぎ}かあるべき、天台^{てんだい}のごとく千観^{せんくわん}なんのごとく一座^{いざ}なんど・こそたうとけれ、此^これは一定^{いじやう}やうあるべしと・いゝもあはせず大風^{たいふう}吹来る、大小^{だいしょう}の舎宅^{しゃたく}・堂塔^{どうとう}・古木^{こもく}・御所^{ごしよ}等を・或^{ある}は天に吹きのぼせ・或^{ある}は地に吹き入れ、そらには大なる光り物とび地には棟梁^{とうりやう}みだれたり、人人^{ひとびと}をも・ふきころし牛馬^{ぎうば}を・をくたふれぬ、悪風^{あくふう}なれども秋は時なれば・なをゆるすかたもあり此^これは夏四月なり、其^その上・日本^{にほん}国にはふかず但関東^{かんとう}・八箇国なり八箇国にも武蔵^{むさし}・相模^{さがみ}

りょうこく

りょうこく

そうしゅう

そうしゅう

の兩國なり兩國の中には相州につよくふく、相州にも・かま
くら・かまくらにも御所・若宮・建長寺・極樂寺等につよくふけ
り、ただ事ともみへず・ひとへにこのいのりの・ゆへにやと・お
ぼへて・わらひ口すくめせし人人も・けうさめてありし上・我が
弟子どももあら不思議やと舌をふるう。

本よりごせし事なれば三度・国をいさめんにもちゐずば国を
さるべしと、されば同五月十二日にかまくらを・いでて此の山に
入る、同十月に大蒙古国よせて壱岐・対馬の二箇国を打ち取らる
るのみならず、太宰府もやぶられて少弐入道・大友等ききにげ
ににげ其の外の兵者ども其の事ともなく大体打たれぬ、又今度よ
せくるならば・いかにも此の国よはよはと見ゆるなり、仁王経
には「聖人去る時は七難必ず起る」等云云、最勝王経に云く

しょうにん

ひちなん

おこ

さいしょうおうきよう

いわ

「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に乃至他方の怨賊来りて国人喪乱に遇わん」等云云、仏説まことならば此の国に一定悪人のあるを国主たつとませ給いて善人をあだませ給うにや、大集経に云く「日月明を現ぜず四方皆亢旱す是くの如く不善業の悪王・悪比丘我が正法を毀壞せん」云云、仁王経に云く「諸の悪比丘多く名利を求め国王・太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁・破国の因縁を説く、其の王別えずして此の語を信聴せん是を破仏法・破国の因縁と為す等云云、法華経に云く「濁世の悪比丘」等云云、経文まことならば此の国に一軍悪比丘のあるなり、夫れ宝山には曲林をきる大海には死骸をとどめず、仏法の大海二乗の宝山には五逆の瓦礫・四重の濁水をば入るれども誹謗の死骸と一闍提の曲林をば・をさめざるなり、されば仏法

を習わ^{なら}ん人・後世^{ごしやう}をねがはん人は法華^{ほつけ}誹謗^{ひぼう}をおそるべし。

皆人^{みな}をぼするやうは・いかでか弘法^{こうぼう}・慈覺^{じかく}等をそしる人を用う

べきと、他人^{たにん}は・さてをきぬ安房^{あわ}の国の東西^{ひとびと}の人人^{ひとびと}は此の事を信

ずべき事なり、眼前^{がんぜん}の現証^{げんしやう}ありいのもりの円頓房^{えんどんぼう}・清澄^{せいじやう}の西堯^{さいぎやう}

房^{ぼう}・道義房^{だうぎぼう}かたうみの実智房^{じつちぼう}等は年とかりし僧ぞかし、此等^{これら}の

臨終^{りんじゆう}はいかんがありけんと尋ぬ^{たず}べし、これらはさてをきぬ、円

智房^{ちぼう}は清澄の大堂にして三箇年^{さんかんねん}が間・一字三礼^{いちじさんらい}の法華經^{ほふけきやう}を我とか

きたてまつりて十卷^{じゅうくわん}を誼^{そら}に・をぼへ、五十年が間・一日一夜に二

部づつよまれしぞかし、かれをば哲人は仏になるべしと云云、

日蓮^{にちれん}こそ念仏^{ねんぶつ}者よりも道義房^{だうぎぼう}と円智房^{えんちぼう}とは無間地獄^{むげんじごく}の底にをつべ

しと申^{もう}したりしが此の人人^{ひとびと}の御臨終^{りんじゆう}はよく候いけるか・いかに、

日蓮^{にちれん}なくば此の人人^{ひとびと}をば仏になりぬらんとこそおぼすべけれ、こ

れをもつて・しろしめせ弘法・慈覚等はあさましき事どもはあれども弟子ども隠せしかば公家にもしらせ給はず未の代は・いよいよあをぐなり、あらはす人なくば未来永劫までも・さであるべし、拘留外道は八百年ありて水となり、迦毘羅外道は一千年すぎてこそ其の失はあらわれしか。
夫れ人身をうくる事は五戒の力による、五戒を持てる者をば二十五の善神これをまほる上同生同名と申して二つの天生れしより・このかた左右のかたに守護するゆへに失なくて鬼神あだむことなし、しかるに此の国の無量の諸人なげきを・なすのみならず、ゆきつしまの両国の人・皆事にあひぬ太宰府又申すばかりなし、此の国はいかなるとがのあるやらん・しらまほしき事なり、一人・二人こそ矢も・あるらめ・そこばくの人人いかん、これひと

へに法華經をさぐる弘法・慈覺・智証等の末の台空白師・善導・
法然が末の弟子等・達磨等の人人の末の者ども国中に充滿せり、
故に梵釈・四天等の法華經の座の誓状のごとく頭破作七分の失
にあてらるるなり。

疑つて云く法華經の行者をあだむ者は頭破作七分ととかれて

侯に・日蓮房をそしれども頭もわれぬは日蓮房は法華經の行者

にはあらざるかと申すは道理なりと・をばへ侯はいかん、答えて

云く日蓮を法華經の行者にてなしと申さば法華經をなげすてよ

とかける法然等・無明の辺域としるせる弘法大師・理同事勝と宣

たる善無畏・意覺等が法華經の行者にてあるべきか、又頭破作

七分と申す事はいかなる事ぞ刀をもてきるやうにわるとしれる

か、經文には如阿梨樹枝とこそとかれたれ、人の頭に七滴あり

七鬼神きじんありて一滴食へば頭こうべをいたむ三滴を食へば寿絶えんとす
七滴みな皆食えば死するなり、今の世の人人ひとびとは皆頭阿梨樹ありじゆの枝のごと
くに・われたれども悪業あくごうふかくして・しらざるなり、例せばてを
おいたる人の・或あるは酒にゑい・或あるはねいりぬれば・をぼえざるが
如ごとし、又頭破作七分と申もうすは・或あるは心破作七分とも申もうして頂いただきの
皮の底にある骨のひびたふるなり、死ぬる時は・わるる事もあり、
今の世の人人ひとびとは去ぬる正嘉しょうかの大地震だいじしん・文永ぶんえいの大彗星すいせいに皆頭みなこうべわれ
て候そなり、其の頭こうべのわれし時ぜひせひやみ・五臓の損ぜし時あ
かき腹をやみしなり、これは法華經ほけきやうの行者ぎやうじやをそしりしゆへにあ
たりし罰とはしらずや。

されば鹿は味ある故ゆえに人に殺され亀は油ある故ゆえに命を害せらる
女人にょにんはみめ形よければ嫉ねたむ者多し、国を治る者は他国たこくの恐れあり

財有る者は命危し法華經を持つ者は必ず成仏し候、故に第六天

の魔王と申す三界の主此の經を持つ人をば強に嫉み候なり、此の

魔王疫病の神の目にも見えずして人に付き候やうに古酒に人の

酔い候如く国主父母・妻子に付きて法華經の行者を嫉むべしと

見えて候、少しも違わざるは当時の世にて候、日蓮は南無

妙法蓮華經と唱うる故に二十余年所を追はれ二度まで御勘氣を

蒙り最後には此の山にこもる、此の山の体たらくは西は七面の山

・東は天子のたけ北は身延の山・南は鷹取の山・四つの山高きこ

と天に付き・さがしきこと飛鳥もとびがたし、中に四つの河あり

所謂・富士河・早河・大白河・身延河なり、其の中に一町ばかり

間の侯に庵室を結びて候、昼は日を見ず夜は月を拝せず冬は雪

深く夏は草茂り問う人希なれば道をふみわくることかたし、殊に

今年はは雪深くして人問うことなし命を期として法華經計りをたの
み奉り候たてまつに御音信おとづれありがたく候、しらず釈迦しゃかぶつ仏の御使おんつかいか過去かこの
父母ふぼの御使おんつかいかと申もうすばかりなく候、南無妙法蓮華經・南無
妙法蓮華經。
みようほうれんげきよう

◆一一四 光日房御書ほうごしよ

926p

去る文永八年太歳辛いぬ ぶんえい 未九月のころより御勘氣ごかんきをかほりて北国
の海中佐渡の嶋にはなたれたりしかば、なにとなく相州鎌倉そうしゅうかまくらに

住しには生国なれば安房あわの国はこひしかりしかども我が国ながら
も人の心もいかにとやむつびにくくありしかば、常にはかよう事
もなくしてすぎしに御勘氣ごかんきの身となりて死罪しざいとなるべかりしが、
しばらく国の外にはなたれし上はをぼろげならではかまくらへは
かへるべからず、かへらずば又父母ふぼのはかを見る身となりがたし

とをもひつづけしかば、いまさらとびたつばかりくやしくてなど
かかかる身とならざりし時・日にも月にも海もわたり山をもこえ
て父母ふぼのはかをもみ師匠ししょうのありやうをもとひをとづれざりけんと
なげかしくて、彼の蘇武そぶが胡国ここくに入りて十九年かりの南へとびけ
るをうらやみ、仲丸が日本国にほんこくの朝使として・もろこしにわたりて
ありしがかへされずしてとしを経へしかば月の東に出いでたるをみ
て、我が国みかさの山にも此の月は出いでさせ給たまいて故里の人ただも只
今月に向いてながむらんと心をすましてけり、此これもかくをもひ
やりし時・我が国より・或人あるのびんにつけて衣をたびたりし時・
彼の蘇武そぶがかりのあし此これは現げんに衣ありにるべくもなく・心なぐ
さみて候にちれんしに、日蓮にちれんはさせる失とがあるべしとはをもはねども此の国
のならひ念仏ねんぶつ者と禪宗ぜんしゅうと律宗りつしゅうと真言宗しんこんしゅうにすかされぬるゆへに

ほけきよう

法華經をば上にはたうとむよしをふるまい心には入らざるゆへ

に、日蓮にちれんが法華經ほけきようを・

いみじきよし申せば威音王仏いおんおうぶつの末まつの末法まっぽうに

ふぎようほさつ

不輕菩薩をにくみしごとく上かみいちにん一人より下万人ばんにんにいたるまで名をも

・きかじ・まして形をみる事はをもひよらず、さればたとひ失とがな

くともかくなさるる上はゆるしがたし、まして・いわうや日本にほんこく国

の人の父母ふぼよりもをもく日月にちがつよりもたかくたのみたまへる念仏ねんぶつを

無間の業むげんと申しもう禪宗ぜんしゅうは天魔てんまの所為しよゐ・真言しんごんは亡国ぼうこくの邪法じゃほう念仏ねんぶつ者・

禪宗ぜんしゅう・律僧等りつそうが寺をばやきはらひ念仏ねんぶつ者どもが頸をはねらるべ

しと申もうす上、故最明寺極樂寺さいみょうじごくらくの兩入道にゅうどう殿を阿鼻地獄あびじごくに墮おち給たまひい

たりと申もうすほどの大禍ある身なり、此これ程ほどの大事だいじを上下万人じょうげばんにんに

申もうしつけられぬる上は設たとひそらごとなりとも此の世にはうかびが

たし、いかにいわうやこれはみな朝夕ちようせきに申もうし昼夜に談ぜしうへ

さえものじょう

ぶぎょう

もう

平左衛門尉等の数百人の奉行人に申しきかせいかにとがに行わる
とも申しやむまじきよし・したたかにいゐきかせぬ、されば大海

たいかい

のそこのちびきの石はうかぶとも天よりふる雨は地にをちずとも

にちれん

日蓮はかまくらへは還るべからず、但し法華經のまことにおはし

かえ

ただ

ほけきょう

にちがつ

たま

まし日月我をすて給はずばかり入りて又父母のはかをもみるへ

ほんてん

たいしやく

にちがつ

してん

んもありなんと心づよくをもひて梵天・帝釈・日月・四天はい

たま

かになり給いぬるやらん、天照太神・正八幡宮は此の国にをは

てんしょうだいじん

しょうはちまんぐう

ぶつぜん

きしょう

ほけきょう

ぎようじゃ

たま

せぬか、仏前の御起請はむなしくて法華經の行者をばすて給う

ぶつぜん

かな

にちれん

か、もし此の事叶わずば日蓮が身のなにともならん事はをしから

げん

きようしゆしやくそん

たほうによらい

じゅつぼう

しよぶつ

ほうぜん

ず、各各現に教主釈尊と多宝如来と十方の諸仏の御宝前にし

せいじょう

たま

いまにちれん

しゆこ

たま

て誓状を立て給いしが今日蓮を守護せずして捨て給うならば

しょうじきしやほうべん

ほけきょう

もうこ

たま

じゅつぼうさんぜ

しよぶつ

正直捨方便の法華經に大妄語を加へ給へるか、十方三世の諸仏

をたばらかし奉たてまれる御失とがは提婆達多だいばだつたが大妄語もうごにもこへ瞿伽利尊者くぎやりそんじゃ
が虚誑罪こおうざいにもまされたり設たひ大梵天ぼんてんとして色界しっかいの頂いただきに居こし千眼
天てんといはれて須弥しゆみの頂いただきにおはすとも日蓮にちれんをすて給たまうならば阿鼻
の炎えんにはたきぎとなり無間むげん・大城だいじょうにはいづるごおはせじ、此の
罪つみをそろしとおぼさばいそぎいそぎ国土こくどにしるしをいだし給たまえ、
本国ほんこくへかへし給たまへと高き山おんじょうにのぼりて大音声おんじょうをはなちてさけび
しかば、九月の十二日に御勘氣ごかんき十一月に謀反にほんこくのもの・いできたり、
かへる年の二月十一日に日本国にほんこくのかためたるべき大將たいしやうどもよしな
く打ちころされぬ、天のせめという事あらはなり、此これにやをど
ろかれけん弟子でしどもゆるされぬ。

而しかれどもいまだゆりざりしかば・いよいよ強盛じやうじやうに天に申せし
かば頭こづかの白からすき鳥からすとび来りぬ、彼の燕うづらのたむ太子たいしの馬鳥からすのれい

日藏上人の山がらす・かしらもしろく・なりにけり、我がかへるべき時やきぬらんとながめし此れなりと申しもあへず、文永十一年二月十四日の御赦免状同三月八日に佐渡の国につきぬ同十三日に国を立ちてまうらというつにをりて十四日はかのつにとどまり、同じき十五日に越後の寺どまりのつにつくべきが大風にはなたれさいわひにふつかぢをすぎてかしはざきにつきて、次の日はこうにつき中十二をへて三月二十六日に鎌倉へ入りぬ、同じき四月八日に平左衛門尉に見参す、本よりごせし事なれば日本国のほろびんを助けんがために三度いさめに御用いなくば山林にまじわるべきよし存ぜしゆへに同五月十二日に鎌倉をいでぬ。

但し本国にいたりて今一度父母のはかをもみると・をもへどもにしきをきて故郷へはかへれといふ事は内外のをきてなり、させ

る面目めんもくもなくして

本国へいたりなば不孝ふこうの者にてやあらんずら

ん、これほどのかたかりし事だにもやぶれてかまくらへかへり入

る身なれば又にしきをきるへんもやあらんずらん、其そのときの時父母ふぼの

はかをもみよかしとふかくおもうゆへにいまに生国へはいたらね

どもさすがこひしくて吹く風立つくもまでも東のかたと申せば庵

をいでて身にふれ庭に立ちてみるなり、かかる事なれば故郷の人

は設たといい心よせにおもはぬ物なれども我が国の人といへばなつかし

くてはんべるところに此の御ふみを給びて心もあらずして・いそ

ぎいそぎひらきてみ候へばをとしの六月の八日にいや四郎にを

くれてとかかれたり、御ふみもひらかざりつるまではうれしくて

ありつるが、今・此のことばをよみてこそなにしかくいそぎひ

らきけんうらしまが子のはこなれやあけてくやしきものかな、我

が国の事はうくつらくあたりし人のすへまでもをろかならずをも
う

にことさら此の人は形も常の人にはすぎてみへうちをもひたるけ
しきもかたくなにもなしと見えしかども、さすが法華經ほけきようのみぎな
ればしらぬ人ひとびとあまたありしかば言もかけずありしに、經はてさ
せ給たまいて皆人みなも立ちかへる、此の人ひとも立ちかへりしが使を入れて
申せしは安房あわの国のあまつと申もうすところの者にて候が、をさなく
より御心おんこころざしをもひまいらせて候上母にて候人もをろかならず
申もうしなれなれしき申もうし事にて候へども・ひそかに申もうすべき事の
候、さきざきまひりて次第しだいになれまいらせてこそ申もうし入るべきに
候へどもゆみやとる人に・みやづかひてひま候はぬ上事きうにな
り候いぬる上はをそれをかへりみず申もうすところまときこえしか

ば、なにとなく生国の人なる上そのあたりの事ははばかりに
あらずとて入れたてまつりてこまごまとこしかたゆくすへかたり
てのちには世間無常なりいと申す事をしらず、其の上武士に身
をまかせたる身なり又ちかく申しかけられて候事のがれがたし、
さるにては後生こそをそろしく候へたすけさせ給へときこへしか
ば経文をひいて申しきかず、彼のなげき申せしは父はさてをき
候いぬ、やもめにて候は・わをさしおきて前に立ち候はん事こそ
不孝に・をばへ候へ、もしやの事候ならば御弟子に申しつたへて
たび候へとねんごろにあつらへ候いしが、そのたびは事ゆへなく
候へけれども後にむなしくなる事のできたりて候いけるにや、
人間に生をうけたる人上下につけてうれへなき人はなけれども時
にあたり人人にしたがひてなげきしなじななり、譬へば病のなら

ひは何の病も重^{しげ}くなりぬれば是にすぎたる病なしとをもうがごとし、主のわかれをやのわかれ夫妻のわかれ・いづれか・

おろかなるべきなれども主は又他の主もありぬべし、夫妻は又かはりぬれば心をやすむる事もありなん、をやこのわかれこそ月日のへだつるままにいいよなげきふかかりぬべくみへ候へ、をやこのわかれにもをやはゆきて子はとどまるは同じ無常^{むじょう}なれどもことはりにもや、をひたるは・わはとどまりてわきき子のさきにたつなさけなき事なれば神も仏もうらめしや、いかなればをやに子をかへさせ給^{たま}いてさきにはたてさせ給^{たま}はず・とどめをかせ給^{たま}いてなげかせ給^{たま}うらんと心うし、心なき畜生^{ちくしやう}すら子のわかれしのでびがたし、竹林精舎^{しやうじや こんちやう}の金鳥^{こんちやう}はかひこのために身をやき鹿野苑^{ろくやおん}の鹿は胎内^{たいない}の子を・をしみて王の前にまいれり、いかにいわうや心

あらん人にをいてをや、されば王陵が母は子のためになつきをくだき、神堯皇帝こうていの後は胎内たないの太子たいしの御ために腹をやぶらせ給いきたまひ、此等これらを・をもひつづけさせ給はんには火にも入り頭こつべをもわりて我が子の形をみるべきならばをしからずとこそおぼすらめと・おもひやられてなみだもとどまらず。

又御消息しょうそくに云く人をもころしたりし者なればいかやうなところにか生れて候らんをほせをかほり候そうらはんと云云、夫れ針そは水にしずむ雨は空にとどまらず、蟻あり子を殺せる者は地獄じごくに入り死にかばねを切れる者は悪道あくどうをまぬかれず、何いかに況や人身じんしんをうけたる者をころせる人をや、但し大石も海にうかぶ船の力なり大火だいかも・きゆる事水の用にあらずや、小罪しょうざいなれども懺悔ざんげせざれば悪道あくどうをまぬがれず、大逆なれども懺悔ざんげすれば罪つみきへぬ、所謂いわゆるる粟をつみ

たりし比丘ひくは五百生ひやくしやうが間牛となる、・をつみし者は三惡道さんあくどうに

墮おちにき、羅摩王らま・拔提王ばつだい・毘樓真王びる・那な☆沙王さ・迦帝王かてい・

毘舍びしゃ☆王ぎやう・月光王がっこう・光明王こうみやう・日光王にくわう・愛王持多人王等はちまんの八万余

人の諸王しよは皆父みなを殺して位につく、善知識ぜんちしきにあはざれば罪つみきへず

して阿鼻地獄あびじごくに入りはにき、波羅奈城はらなに惡人あくにんあり其その名をば阿逸多あいつた

という母をあひせしゆへに父を殺し妻とせり、父が師あらかんの阿羅漢あらかんあ

りて教訓きやうくんせしかば阿らかむを殺す、母又他の夫にとつぎしかば

又母をも殺しつ、具つぶささんぎやくざに三逆罪をつくりしかば隣里の人うとみしか

ば、一身たもちがたくして祇しよ・精舍しやうじやにゆいて出家をもとめしに

諸僧許しよそうゆるさざりしかば惡心強盛あくしんかうじやうにして多くの僧坊そうぼうをやきぬ、然しかれ

ども釈尊しやくそんに値あい奉りて出家をゆるし給たまつにき、北天竺てんじくに城あり細

石となづく彼の城に王あり竜印という、父を殺してありしかども

後に此れをおそれて彼の国をすてて仏にまいりたりしかば仏懺悔

を許し給いき、阿闍世王はひとりとなり三毒熾盛なり十惡ひまな

し、其の上父をころし母を害せんとし提婆達多を師として無量の

仏弟子を殺しぬ、惡逆のつもりに二月十五日仏の御入滅の日に

あたりて無間地獄の先相に七処に惡瘡出生して玉体しづかなら

ず、大火の身をやくがごとく熱湯をくみかくるがごとくなりしに

六大臣まいりて六師外道を召されて惡瘡を治すべきやう申しき、

今の日本国の人人の禪師・律師・念仏者・真言師等を善知識とた

のみて蒙古国を調伏し後生をたすからんとをもうがごとし、

其の上提婆達多は阿闍世王の本師なり、外道の六万蔵仏法の八万

蔵をそらにして世間出世のあきらかなる事日月と明鏡とに向う

がごとし、今の世の天台宗の碩学の顯密二道を胸にうかべ

いっさいきよう
一切経をそらんぜしがごとし、此れ等の人人諸の大臣阿闍世王

を教訓せしかば仏に帰依し奉る事なかりし程に摩竭堤に天変

たびたび
度度かさなり地天しきりなる上大風・大旱ばつ飢饉疫癘ひまなき

上他国よりせめられて・すでにかうとみえしに悪瘡すら身に出し

しかば国土一時にほろびぬとみえし程に俄に仏前にまいり懺悔し

て罪きえしなり。

これらはさてをき候いぬ人のをやは悪人なれども子善人なれば

をやの罪ゆるす事あり、又子悪人なれども親善人なれば子の罪ゆ

るさるる事あり、されば故弥四郎殿は設い悪人なりともうめる

母釈迦仏の御宝前にして昼夜なげきとぶらはば争か彼人うかばざ

るべき、いかにいわうや彼の人は法華経を信じたりしかば・をや

をみちびく身とぞなられて候らん、法華経を信ずる人はかまへて

かまへて法華經のかたきを・をそれさせ給へ、念仏者と持齋と
ほけきよう しんこんし いっさい なむ みようほうれんげきよう
真言師と一切南無妙法蓮華經と申さざらん者をば・いかに
ほけきよう
法華經をよむとも法華經のかたきとしろしめすべし、かたきをし
ほけきよう
らねばかたきにたばらかされ候ぞ、あはれあはれけさんに入りて
もう
くわしく申し候はばや、又これよりそれへわたり候三位房佐度公
ほう
等にたびごとにこのふみをよませてきこしめすべし、又この御文
おんふみ
をば明慧房にあづけさせ給うべし、なにとなく我が智慧はたらぬ
みようえほう
者が・或はをこづき・或は此文をさいかくとしてそしり候なり、
ある ある このもん
・或はよも此の御房は弘法大師にはまさらじよも慈覚大師にはこ
ある ごほう こうほうだいし
へじなんど人くらべをし候ぞかし、かく申す人をばものしらぬ者
もう
と・をばすべし。

建治二年太歳丙子三月 日

にちれんかおう
日蓮花押

甲州南部波木井の郷山中 はきり

◆一一五

光日上人御返事 しょうにんごへんじ

弘安四年八月 六十歳御作 こうあん

932P

法華經二の巻に云く「其の人 命終 して阿鼻獄に入らん」云云、
ほけきょう いわ そ みようじゆう あびごく

阿鼻地獄と申すは天竺の言唐土日本には無間と申す無間はひまな
あびじごく もう てんじく もろこしにほん むげん もう むげん

しとかけり、一百三十六の地獄の中に一百三十五はひま候、十二
じごく

時の中にあつけれども又すずしき事もありたへがたけれども又ゆ
むげんじごく もう

るくなる時もあり、此の無間地獄と申すは十二時に一時かた時も
ゆえ むげんじごく もう いちじ

大苦ならざる事はなし故に無間地獄と申す、此の地獄は此の我等
むげんじごく もう じごく われら

が居て候大地の底二万由旬をすぎて最下の処なり、此れ世間の
だいち ゆじゆん さいか ところ こ せけん

法にもかるき物は上に重き物は下にあり、大地の上には水あり地
だいち

よりも水かるし、水の上には火あり水よりも火かるし、火の上に

風あり火よりも風かるし、風の上に空あり風よりも空かるし、人をも此の四大を以て造れり悪人は風と火と先ず去り地と水と留まる故に人死して後重きは地獄へ墮つる相なり、善人は地と水と先ず去り風火留る重き物は去りぬ軽き物は留まる故に輕し人天へ生まるる相なり、地獄の相重きが中の重きは無間地獄の相なり、彼の無間地獄は縦横二万由旬なり八方は八万由旬なり、彼の地獄に墮つる人人は一人の身大にして八万由旬なり多人も又此の如し、身のやはらかなる事綿の如し火のこわき事は大風の焼亡の如し鉄の火の如し、詮を取つて申さば我が身より火の出ずる事十三あり、二の火あり足より出でて頂をとる・又二の火あり頂より出でて足をとほる又二の火あり背より入りて胸より出ず又二の火あり胸より入りて背へ出ず・又二の火あり左の脇より入

りて右の脇へ出ず又二の火あり右の脇より入りて左の脇へ出ず亦
一の火あり首より下に向いて雲の山を巻くが如くして下る、此
の地獄の罪人の身は枯れたる草を焼くが如し東西南北に走れども
逃去所なし、他の苦は且らく之を置く大火の一苦なり此の大地獄
の大苦を仏委しく説き給うならば我等衆生聞いて皆死すべし
故に仏委しくは説き給う事なしと見えて候。

今・日本国の四十五億八万九千六百五十八人の人人は皆此の
地獄へ堕ちさせ給うべし、されども一人として墮つべしとはおぼ
さず、例せば此の弘安四年五月以前には日本の上下万人・一人も
蒙古の責めにあふべしとおぼさざりしを日本国に只日蓮一人
計りかかる事此の国に出来すべしとしる、其の時・日本国の四
十五億八万九千六百五十八人の一切衆生一人もなく他国に責め

られさせ給たまいて、其の大苦は譬たとへばほうろくと申もうす釜に水を入れ
てざつこと申もうす小魚をあまた入れて枯かられたるしば木をたかむが
如ごとくなるべしと申せば、あらおそろしいまいまし・打ちはれ所を
追へ流せ殺せ信ぜん人人ひとびとをば田はたをとれ財を奪へ所領しよりようをめせ
と申せしかども、此の五月よりは大蒙古の責めに値あいてあきれ
迷まよふ程にさもやと思う人人ひとびとも・あるやらん、にがにがしうして
せめたくはなけれども有ある事なればあたりたりあたりたり、日蓮にちれん
が申せし事はあたりたりばけ物のもの申もうす様にこそ候めれ。
去いぬる承久じようきゆうの合戦に隠岐おきの法皇ほうこうの御前おんまえにして京の二位殿にいどのなど
と申せし何もしらぬ女房等にようぼうの集りて王を勸め奉り戦すを起たてまつして
義時よしときに責められあはて給たまいしが如ごとし、今今御覽ごらんぜよ法華經ほけきよう誹謗ひぼうの
科とがと云いひ日蓮にちれんをいやしみし罰むちと申し経と仏と僧との三宝誹謗さんぼうひぼうの

大科だいかによつて現生げんせいには此この国こくに修羅道しゅらどうを移うつし後生ごしょうには無間地獄むげんじごくへ
行き給たまうべし、此これ又偏ひとえに弘法こうぼう・慈覚じかく・智証ちしょう等の三大師だいいしの法華經ほけきょう
誹謗ひぼうの科とがと達磨善導律僧等だるまぜんどうりっそうの一乗誹謗いちじょうひぼうの科とがと此これ等の人人ひとびとを
結構けつこうせさせ給たまう国主こくしゅの科とがと、国こくを思おもひ生处しのを忍しのびて兼かねて勘かんへ告つげ
示しすを用もちいずして還かえつて怨あだをなす大科だいか、先例せんれいを思おもへば呉王夫差いんのちゆうの
伍子胥ごししよが諫もんを用もちいずして越王こうせん・勾踐こうせんにほろぼされ、殷いんの紂王ちゆうが
比干ひかんが言ことをあなづりて周しゅうの武王ぶかうに責とがめられしが如ごとし。

而しかるに光日尼御前あまごぜんはいかなる宿習しゆくじゆうにて法華經ほけきょうをば御信用ごしんようあり
けるぞ、又故弥いよいよ四郎殿しろうでんが信しんじて候すすしかば子の勸めすすか此この功德くどく空
しからざれば子こと俱ともに靈山淨土りやうぜんじやうどへ参まゐり合せ給たまわん事こと疑うたがいいなか
るべし、烏竜おりゆうと云いいし者ものは法華經ほけきょうを謗ぼうじて地獄じごくに墮おちたりしかど
も其その子こに遺竜いりゆうと云いいし者もの・法華經ほけきょうを書かきて供養くようせしかば親仏しんぶつに

成りぬ、又妙莊嚴王は悪王なりしかども御子の淨蔵・淨眼に

みちび しゅらじゅおうぶつ

導かれて娑羅樹王仏と成らせ給う、其の故は子の肉は母の肉母の

たま そのゆえ

骨は子の骨なり、松榮れば柏悦ぶ芝かるれば蘭なく情無き草木す

そうもく

ら友の喜び友の歎き一つなり、何に況や親と子との契り胎内に

なげ

いか

ちぎ

たいない

宿して九月を経て生み落し数年まで養ひき、彼になはれ彼にと

むか

へ

かしこ

かしこ

ぶらはれんと思ひしに彼をとぶらふうらめしき、彼如何があらん

いかん

と思うところぐるしき・いかにせん・いかにせん、子と思う

こんちよう

金鳥は火の中に入りనికి、子を思ひし貧女は恒河に沈みき、彼

ひんによ

こうが

の金鳥は今の弥勒菩薩なり彼の河に沈みし女人は大梵天王と生

こんちよう

みろくぼさつ

によにん

だいほんてんのう

まれ給えり、何に況や今の光日上人は子を思ふあまりに法華經

たま

いか

しょうにん

ほけきよう

の行者と成り給ふ、母と子と俱に靈山淨土へ参り給うべし、

ぎようじや

たま

とも

りようぜんじようと

たま

其の時御対面いかにうれしかるべきいかにうれしかるべき、

そのとき

たいめん

きようきよう
恐れ。

八月八日

にちれんかおう
日蓮花押

光日上人御返事
しょうにんごへんじ

◆一一六 光日尼御返事
ごへんじ

934P

なきなをながさせ給うにや、三つのつなは今生に切れぬ五つ
のさわりは・すでにはれぬらむ、心の月くもりなく身のあかきへ
はてぬ、即身の仏なりたうとしたうとし、くはしく申すべく候へ
ども・あまりふみを・をくかき候ときにかきたりて候ぞ 恐れ
きんげん
謹言。

九月十九日

にちれん
日蓮在御判

光日尼ごぜん御返事
ごへんじ

◆一一七 四恩抄 弘長二年正月十六日 四十一歳御作
こうじやう

与工藤左近尉吉隆 於伊豆伊東

そもそも

抑此るぜいの流罪るぜいの身になりて候につけて二つの大事だいじあり、一には

よろこ

大なる悦よろこびあり其そのの故ゆえは此このの世界せかいをば娑婆しゃばと名なく娑婆しゃばと申もうすは忍

もう

ゆえ

のうにん

と申もうす事ことなり故ゆえに仏ぶつをば能忍のうにんと名なけたてまつる、此このの娑婆世界しゃばせかいの

しゅみせん

にちがつ

内に百億ひゃくおくの須弥山しゅみせん百億ひゃくおくの日月にちがつ百億ひゃくおくの四州ししゅうあり、其そのの中の中央ちゅうおうの

しゅみせん

にちがつ

須弥山しゅみせん・日月にちがつ四州ししゅうに仏ぶつは世よに出いでまします、此このの日本国にほんこくは其そのの仏

い

うしとら

の世よに出いでまします国くによりは丑寅うしとらの角かくにあたりたる小島こしまなり、此

しゃばせかい

ほか

じゅつぼう

こくと

みなじょうと

の娑婆世界しゃばせかいより外ほかの十方じゅつぼうの国土こくとは皆浄土みなじょうとにて候まうへば人ひとの心こころもや

けんせい

にくむ

こくと

じゅつぼう

じょうと

はらかに賢聖けんせいをのり悪にくむむ事ことも候まうはず、此このの国土こくとは十方じゅつぼうの浄土じょうとにすてはてられて候まう・十悪じゅうあく・五逆ごぎやく・誹謗ひぼう賢聖けんせい・不孝ふこう父母ふぼ・不敬ふけい

しゃもん

とが

しゅじょう

さんあくどう

お

むりょうこう

へ

かえ

此この沙門等しゃもんの科とがの衆生しゅじょうが三惡道さんあくどうに墮おちて無量劫むりょうこうを経て還かえつて此この

世界に生れて候が、先生の悪業の習氣失せずしてややもすれば

十悪・五逆を作り賢聖をのり父母に孝せず沙門をも敬はず候な

り、故に釈迦如来世に出でましませしかば、或は毒藥を食に雜て

奉り・或は刀杖・悪象・師子・悪牛・悪狗等の方便を以て害し

奉らんとし・或は女人を犯すと云い・或は卑賤の者・或は殺生

の者と云い・或は行き合い奉る時は面を覆うて眼に見奉らじ

とし・或は戸を閉じ窓を塞ぎ・或は国王・大臣の諸人に向つ

ては邪見の者なり高き人を罵者なんと申せしなり、大集經

涅槃經等に見えたり、させる矢も仏にはおはしまさざりしかども

只此の国のくせかたわとして悪業の衆生が生れ集りて候上、

第六天の魔王が此の国の衆生を他の浄土へ出さじとたばかりを

成してかく事にふれてひがめる事をなすなり、此のたばかりも

詮^{せん}する所は仏に法華經を説かせまいらせじ料と見えて候、其^{その}の故^{ゆえ}は魔王^{まおう}の習として三惡道の業を作る者^{つく}をば悦^{よろこ}び三善道の業を作る者^{つく}をばなげく、又三善道の業を作る者^{つく}をばいたうなげかず三乗^{さんじょう}とならんとする者をばいたうなげく、又三乘^{さんじょう}となる者をばいたうなげかず仏となる業をなす者をば強^{あながち}になげき事にふれて障^{さわり}をなす、法華經^{ほけきょう}は一文一句なれども耳にふるる者は既^{すで}に仏になるべきと思ひて、いたう第六天^{だいろくてん}の魔王^{まおう}もなげき思^{ゆえ}う故^{こう}に方便^{ほうべん}をまはして留難^{るなん}をなし經を信ずる心をすてしめんとたばかる、而^{しか}るに仏の在世^{ざいせ}の時は濁世^{じよくせ}なりといへども五濁^{ごじよく}と始たりし上^{おんちから}仏の御力^{ちくじょう}をも恐れ人の貪^{とん}・瞋^{じん}・癡^ち・邪見^{じゃけん}も強盛^{かうじょう}ならざりし時だにも竹杖^{ちくじょう}外道^{げどう}は神通第一^{じんつうだいいち}の目連尊者^{もくれんそんじや}を殺し、阿闍世王^{あじゃせ}は惡象^{あくぞう}を放て三界^{さんがい}の独尊^{どくそん}を・をどし奉^{たてまつ}り、提婆達多^{だいばだつた}は証果^{しょうか}の阿羅漢^{あらかん}・蓮華比丘尼^{れんげびく}を害し、

くぎやりそんじや 瞿伽利尊ちえ 第一だいいち の舍利弗しゃりほつ に悪名あくみょう を立てき、何いか に況や世
ようやごじよく 漸さかん く五濁の盛になりて候をや、況や世末代まつだい に入りて法華經ほけきょう をかり
そめにも信しん ぜん者の人にそねみねたまれん事はおびただしかるべ
きか、故ゆえ に法華經ほけきょう に云く「如来にょらい の現在げんざい にすら猶なお 怨嫉おんしつ 多し況や滅度めつど
の後をや」と云云、始に此の文を見候いし時はさしもやと思ひ候
いしに今こそ仏の御言みことば は違はざりけるものかなと殊こと に身に當つて
思ひ知れて候へ。

日蓮にちれん は身に戒行かいぎよう なく心に三毒さんどく を離れざれども此の御經を若も し
や我も信を取り人にも縁を結ばしむるかと思つて随分ずいぶん 世間の事お
だやかならんと思いき、世末になりて候へば妻子さいし を帶たい して候比丘びく
も人の歸依きえ をうけ魚鳥を服する僧もさてこそ候か、日蓮にちれん はさせる
さいし 妻子をも帶せず魚鳥をも服せず只法華經ただほけきょう を弘ひろ めんとする失とが により

て妻子さいしを帶せずして犯僧ほんそうの名四海しかいに満ち螻蟻ろうぎをも殺さざれども

あくみよういつてん

はびこ

悪名あくみ一天いつてんに弥はれり、恐おそくは在世ざいせに釈尊しゃくそんを諸もろの外道げどうが毀そしり奉たてまつ

しに似にたり、是これ偏ひとえに法華經ほけきようを信しんずることの余人よりも少すくし

きようもん

ごと

ゆえ

あつきそ

經文きやうもんの如ごとく信しんをもむけたる故ゆえに惡鬼あくき其その身みに入いつてそねみをな

すかと・をばえ候こへば是これ程ひせんの卑賤ひせん・無智むち・無戒むかいの者ものの二千余年ふたにせんねん

いぜん

已い前に説せつかれて候ほけきよう法華經ほけきようの文ぶんにのせられて留難るなんに値あうべしと仏ぶつ

記ししをかれまいらせて候事こうじのうれしさ申もうし尽つくし難かたく候こう、此この身み

に学文がくぶんつかまつりし事ことやうやく二十四五年じふにせうごねんにまかりなるなり、

ほけきよう

法華經ほけきようを殊ことに信しんじまいらせ候こういし事は・わづかに此この六七年ろくねんより

このかたなり、又また信しんじて候こういしかども懈怠けたいの身みたる上あ・或あるは学文がくぶん

と云いひ・或あるは世間せけんの事ことにさえられて一日いちにちにわづかに一卷いっかん・一品いっぴん

だいもく

題目計だいもくなり、去年こぞの五月ごがつ十二日じふににちより今年こんねん正月むつき十六日じふろくにちに至いたるまで二

百四十余日の程は昼夜十二時に法華經を修行し奉ると存じ候、
其の故は法華經の故にかかる身となりて候へば行住坐臥に法華經
を読み行ずるにてこそ候へ、人間に生を受けて是れ程の悦びは
何事か候べき。

凡夫の習い我とはげみて菩提心を發して後生を願うといへども
自ら思ひ出し十二時の間に一時・二時こそははげみ候へ、是は思
ひ出さぬにも御經をよみ読まざるにも法華經を行ずるにて候か、
無量劫の間・六道・四生を輪回し候いけるには・或は謀叛をおこ
し強盜夜打等の罪にてこそ国主より禁をも蒙り流罪・死罪にも行
はれ候らめ、是は法華經を弘むるかと思う心の強盛なりしに
依つて惡業の衆生に讒言せられて・かかる身になりて候へば定
て後生の勤にはなりなんと覚え候、是れ程の心ならぬ昼夜十二時

の法華經ほけきようの持經者じきようは末代まつだいには有がたくこそ候らめ、又止事なくめでたき事侍りはべ無量劫むりようこつの間六道ろくどうに回り候けるには多くの国主こくしゅに生れ値あひ奉りて・或あるは寵愛だいいんの大臣かんぱく・関白等ともなり候けん、若もし爾しからば国を給り財宝官祿の恩を蒙こうむけるか法華經流布ほけきようるふの国主こくしゅに値あひ奉り其の国にて法華經の御名を聞いて修行しゆぎようし是を行じて讒言ざんげんを蒙こむり流罪に行われまいらせて候国主には未だ値あいまいらせ候はぬか、法華經ほけきように云く「是この法華經は無量の國中むりように於て乃至名字おいをないしもみようじ聞くことを得うべからず何いかに況いわんや見ることを得て受持じゆじし誦誦どくじゆせんをや」と云云、されば此の讒言ざんげんの人・国主こくしゅこそ我が身には恩深き人にはをわしまし候らめ。

佛法ぶつぽうを習ならう身には必ず四恩を報すべきに候か、四恩とは心地しんじ觀經かんきように云く一には一切衆生の恩、一切衆生なくば衆生無辺しゆじようむへん

誓願度の願を發し難し、又惡人無くして菩薩に留難をなさずば。
いかでか功德をば增長せしめ候べき、二には父母の恩、六道に
生を受くるに必ず父母あり、其の中に・或は殺盜・惡律儀・謗法
の家に生れぬれば我と其の科を犯さざれども其の業を成就す、
然るに今生の父母は我を生みて法華經を信ずる身となせり、
梵天・帝釈・四大天王・轉輪聖王の家に生まれて三界・四天を
ゆづられて人天・四衆に恭敬せられんよりも恩重きは今の某
が父母なるか、三には国王の恩、天の三光に身をあたため地の
五穀に神を養ふこと皆是れ国王の恩なり、其の上今度・法華經を
信じ今度生死を離るべき国主に値い奉れり、争か少分の怨に依つ
ておろかに思ひ奉るべきや、四には三宝の恩、釈迦如来無量劫の
間菩薩の行を立て給いし時一切の福德を集めて六十四分と成して

功德を身に得給へり、其の一分をば我が身に用ひ給ふ、今六十三分をば此の世界に留め置きて五濁雜亂の時非法の盛ならん時・
謗法の者・国に充滿せん時、無量の守護の善神も法味をなめずして威光勢力減ぜん時、日月光りを失ひ天竜雨をくださず地神地味を減ぜん時、草木根莖枝葉華菓藥等の七味も失せん時、
十善の国王も貪・瞋・癡をまし父母・六親に考せずしたしからざらん時、我が弟子無智・無戒にして髪ばかりを剃りて守護神にも捨てられて活命のはかりごとならん比丘・比丘尼の命のささへとせんと誓ひ給へり、又果地の三分の功德二分をば我が身に用ひ給ひ、仏の壽命百二十まで世にましますべかりしが八十にして入滅し、残る所の四十年の壽命を留め置きて我等に与へ給ふ恩をば四大海の水を硯の水とし一切の草木を焼て墨となして一切

のけだものの毛を筆とし十方世界の大地を紙と定めて注し置く
いかで
とも争か仏の恩を報じ奉るべき、法の恩を申さば法は諸仏の師な
しょうぶつ
り諸仏の貴き事は法に依る、されば仏恩を報ぜんと思はん人は法
よ
の恩を報ずべし、次に僧の恩をいはば仏宝法宝は必ず僧によりて
ぶつぽうほうほう
住す、譬えば薪なければ火無く大地無ければ草木生ずべからず、
たと
たきぎ
仏法有りといへども僧有りて習伝へずんば正法・像法・二千年
ぶつぽう
過ぎて末法へも伝はるべからず、故に大集經に云く五箇の五百
まっほう
歳の後に無智・無戒なる沙門を失ありと云つて是を悩すは此の
むち
むかい
しゃもん
とが
ぶつぽう
人、仏法の大燈明を滅せんと思えと説かれたり、然れば僧の恩を
がた
さんほう
報じ難し、されば三宝の恩を報じ給うべし、古の聖人は雪山
どうじじょうたいほさつやくおう
童子常啼菩薩藥王太子普明王等此等は皆我が身を鬼のうちかひ
ふみょう
これら
みな
となし身の血髓をうり臂をたき頭を捨て給いき、然るに末代の
ひじ
こうべ
たまい
しか
まつだい

凡夫三宝の恩を蒙りて三宝の恩を報ぜず、いかにしてか仏道を
成ぜん、然るに心地観經梵網經等には佛法を學し円頓の戒を受
けん人は必ず四恩を報ずべしと見えたり、某は愚癡の凡夫血肉
の身なり三惑一分も断ぜず只法華經の故に罵詈毀謗せられて
刀杖を加えられ流罪せられたるを以て大聖の臂を焼き髓をくだ
き頭をはねられたるになぞらへんと思ふ、是れ一つの悦びなり。
第二に大なる歎きと申すは、法華經第四に云く「若し惡人有つ
て不善の心を以て一劫の中に於て現に仏前に於て常に仏を毀罵せ
ん其の罪尚輕し、若し人・一つの惡言を以て在家・出家の法華經
を讀誦する者を毀訾せん其の罪甚だ重し」等と云云、此等の
經文を見るに信心を起し身より汗を流し兩眼より涙を流すこと
雨の如し我、一人・此の國に生れて多くの人をして一生の業を造

らしむることを歎く、彼の不輕菩薩を打擲せし人現身に改悔の
心を起せしだにも猶罪消え難くして千劫阿鼻地獄に堕ちぬ、今・
我に怨を結べる輩は未だ一分も悔る心もおこさず、是体の人の
受くる業報を大集経に説いて云く「若し人あつて千万億の仏の
所にして仏身より血を出さん意に於て如何・此の人の罪をうる事
寧ろ多しとせんや否や、大梵王言さく若し人口一仏の身より血を
出さん無間の罪尚多し、無量にして算をおきても数をしらず阿鼻
大地獄の中に堕ちん、何に況や万億の仏身より血を出さん者を見
んをや、終によく広く彼の人の罪業果報を説く事ある事なからん
但し如来をば除き奉る、仏の言はく大梵王若し我が為に髪をそり
袈裟をかけ片時も禁戒をうけず欠犯をうけん者をなやましのり杖
をもつて打ちなんどする事有らば罪をうる事彼よりは多し」と。

弘長二年 壬戌 正月十六日

日蓮花押

工藤左近尉殿

◆ 一一八 法華經題目抄 根本大師門人 日蓮撰

文永三年一月六日四十五歳御作 940P

南無妙法蓮華經

問うて云く法華經の意もしらず只南無妙法蓮華經と計り五

七字に限りて一日一遍一月乃至一年十年一期生の間に只一遍なん

ど唱えても輕重の惡に引かれずして四惡趣におもむかずついに

不退の位にいたるべしや、答えて云くしかるべきなり、問うて

云く火火といえども手にとらざればやけず水水といえども口にの

まざれば水のほしさもやまず、只南無妙法蓮華經と題目計りを

唱うとも義趣をまぬかれん事いがあるべかるらん、答えて云く

獅子ししの筋を琴の絃いととして一度奏ひとたびすれば余の絃いとこと悉くきれ梅子うめのみのすき
声をきけば口につたまりうるをう世間せけんの不思議ふしぎすら是かくのことの如し況や
法華經ほけきようの不思議ふしぎをや小乗しょうじようの四諦したいの名計なばかりをさやづる鸚鵡おうむなを天
に生なまず三歸計さんかりを持つ人・大魚なんの難なんをまぬかる何いかに況や法華經ほけきようの
題目だいもくは八万はちまん聖教しょうきようの肝心かんじん一切諸仏いっさいしよぶつの眼目がんもくなり汝等なんじ此これを唱となえて
四惡趣しあくしゅをはなるべからずと疑うたがうか、正直捨方便しょうじきしゃほうべんの法華經ほけきようには
「信を以もつて入いることを得え」と云いい雙林最後そうりんさいごの涅槃經ねはんぎようには「是この
菩提ぼだいの因いんは復無量またむりようなりと雖いえども若もし信心しんじんを説すなわけば即すち已すでに摂しょうじん尽じんす」
等云云

夫それ仏道ぶつどうに入いる根本こんぽんは信をもて本となす五十二位の中には
十信じゅうしんの位には信心しんじん初めなりたとひさとしんじんりなければしんじんども信心しんじんあらん
者は鈍根どんこんも正見せいけんの者なりたとひさとしんじんりあるとも信心しんじんなき者は誹謗ひぼう

闡提せんだいの者なり善星ぜんしょう比丘びくは二百五十戒たもを持ち四禪定ぜんじょうを得十二部經じふにぶきやうを諳そらにせし者・提婆達多だいばだつたは六万八万はちまんの宝蔵ほうぞうをおぼへ十八變じふはちへんを現げんぜしかども此等これらは有解無信げなの者今に阿鼻大城あびだいじやうにありと聞く、迦葉かしやう舍利弗等しやりほつは無解有信むげうしんの者なり仏に授記じゆきを蒙りて華光如来げかうよりい・光明こうみやう如来よりいといはれき・仏説ぶつせついて云く「疑うたがいいを生じて信ぜざらん者は即ち当まさに惡道あくどうに墮おつべし」等云云、此等これらは有解無信げなの者を説とき給たまう、而しかに今の代に世間せけんの学者がくしやの云く只信心計りただしんじんばかにて解する心なく南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となうる計りばかにて争いかでか惡信をまぬかるべき等云云、此の人人ひとびとは經文きやうもんの如ごとくならば阿鼻大城あびだいじやうまぬかれがたし、さればさせる解りさとなくとも南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱となうるならば惡道あくどうまぬかるべし譬たとえば蓮華れんげは日に随したがつて回る蓮に心なし芭蕉ばしやうは雷いかずちによりて増長そうちやうす此の草に耳なし、我等われらは蓮華れんげと芭蕉ばしやうの如ごとく

ほけきょう　だいもく　にちりん　いかずち
法華經の題目は日輪と雷との如し、犀の生角を身に帶して水に
入りぬれば水五尺身に近ずかず栴檀の一葉開きぬれば四十由旬の
伊蘭を變ず我等が悪業は伊蘭と水との如く法華經の題目は犀の
生角と栴檀の一葉の如し、金剛は堅固にして一切の物に破られず
されども羊の角と龜の甲に破らる尼俱類樹は大鳥にも枝おれざれ
どもかのまつげに巢くうせうれう鳥にやぶらる、我等が悪業は
金剛の如く尼俱類樹の如し法華經の題目は羊の角のごとくせうれ
う鳥の如し琥珀は塵をとり磁石は鉄をすう我等が悪業は塵と
くろがね
鉄の如く法華經の題目は琥珀と磁石の如し。

かくをもひて常に南無妙法蓮華經と唱うべし、法華經の第一
の巻に云く「無量無數劫にも是の法を聞かんこと亦難し」第五の
巻に云く「是の法華經は無量の國中に於て乃至名字を聞くことも

得可^べからず」等云云法華經の御名を聞く事はをぼろげにもありが
たき事なり、されば須仙多仏多宝仏は世にいでさせ給^{たま}いたりしか
ども法華經の御名^{みな}をだびも説き給^{たま}わす釈迦如来は法華經のために
世にいでさせ給^{たま}いたりしかども四十二年が間は名をひしてかたり
いださせ給^{たま}わす仏の御年七十二と申せし時はじめて妙法蓮華經
となえいでさせ給^{たま}いたりき、しかりといえども摩訶^ま訶^か尸^し那^な日本^{にほん}の
辺国の者は御名^{みな}をもきかざりき一千余年すぎて三百五十余年に
及び^{およ}てこそ☆に御名^{みな}計^{ばか}りをば聞きたりしか、さればこの經に
値^あいたてまつる事をば三千年に一度華^{さんぜん}さく優曇華^{ひとつび}・無量無辺劫^{うとんげ}に
ひとたび^{ひとたびあ}一度値^あうなる一眼の龜にもたとへたり、大地^{だいち}の上に針を立てて
大梵天王宮より芥子^{けし}をなぐるに針のさきに芥子^{けし}の・つらぬかれた
るよりも法華經の題目^{だいもく}に値^あう事はかたし、この須弥山^{しゅみせん}に針を立て

て・かの須弥山しゅみせんより大風たいふうのつよく吹く日・いとをわたさんに・い

たりてはりの穴に・いとのさきの・いりたらんよりも法華經ほけきょうの

題目だいもくに値あい奉る事かたし、さればこの經の題目だいもくを・となえさせ

給たまはんにはをぼしめすべし、生盲いきめくらの始めて眼まなこをあきて父母等ふぼを

・みんよりも・うれしく・強き・かたきに・とられたる者の・ゆ

るされて妻子さいしを見るよりも・めずらしと・をぼすべし。

問うて云く題目計りだいもくばかを唱となうる証文しょうもんこれありや、答えて云く

妙法蓮華經みょうほうれんげきょうの第八いわに云く「法華の名を受持じゅじせん者・福量はかる可べか

らず」正法華經ほけきょうに云く「若し以の經を聞いて名号みょうごうを宣持せんぢでは特

量可べからず」添品法華經てんぽんほけきょうに云く「法華の名を受持じゅじせん者・福量はかる

可べからず」等云云、此等これらの文は題目計りだいもくばかを唱となうる福齒計るべから

ずとみへぬ、一部・八卷・二十八品を受持読誦じゅじどくじゆし隨喜護持等ずいきごじする

は広なり、方便品・寿量品を受持し乃至護持するは略なり、但

一四句偈乃至題目計りを唱えとなうる者を護持するは要なり、

こうりやくよう

広略要の中には題目は要の内なり。問うて云く妙法蓮華經の

五字にはいくばくかの功德をおさめたるや、答えて云く大海は

衆流を納めたり大地は有情非情を持てり如意宝珠は万財を雨ふら

し梵王は山界を領す妙法蓮華經の五字また是の如し一切の九界

の衆生並に仏界を納む、十界を納むれば亦十界の依報の国土

を収む、先ず妙法蓮華經の五字に一切の法を納むる事をいはば

經の一字は諸經の中の王なり一切の諸經を納む、仏世に出でさ

せ給いて五十余年の間八万聖教を説きをかせ給いき、仏は

人壽・百歳の時・壬申の歳・二月十五日の夜半に御入滅あ

り、其の後四月八日より七月十五日に至るまで一夏九旬の間・一

千人の阿羅漢・結集堂にあつまりて一切經をかきをかせ給たまい
き、其その後正法一千年の間は五天竺てんじくに一切經ひろまらせ給たまいし
かども震旦国しんたんには渡わたらず、像法そうほうに入いって一十五年と申せしに後漢
の孝明皇帝・永平十年丁卯歲・仏教始めて渡わたつて唐とうの玄宗皇帝
・開元十八年庚午の歲に至いたるまで渡わたれる訳者やくしゃ・一百七十六人・
持たち来る經・律・論一千七十六部・五千四十八卷・四百八十帙・
是れ皆法華經の經の一字の眷属けんぞくの修多羅しゆたらなり。

先みず妙法蓮華經の以前いぜん・四十余年の間の經の中に大方けこん華嚴經きんぎようと申もうす經きようまします。竜宮城りゆうぐうじようには三本あり上本は十三世界せかい

微塵數じんじゆの品・中本は四十九万八千八百偈げ・下本は十万偈じゆうまんげ四十八

品・此の三本の外に震旦しんたん・日本にほんには僅わずかに八十卷・六十卷等あり、

阿含あこん・小乘經しょうじようきよう・方等ほうとう・般若はんによの諸大乘經等しよだいじようきよう、大日經だいにちきようは梵本ぼんほんに

は阿ばらことば詞きやの五字計りを三千五百の偈げをもつてむすべり、
況や余の諸尊しよそんの種子しゆし・尊形そんぎよう三摩耶まや・其その数をしらず、而しかるに
漢土かんどには但わずかに六卷七卷なり、涅槃經ねはんぎようには雙林最後の説・
漢土かんどには但四十卷是も梵本ぼんほん之れ多し、此等これらの諸經しよきようは皆釈迦如来みなしやくかによらい
の所説しよせつの法華經の眷属けんそくの修多羅しゆたらなり、この外過去かこの七仏・千仏・
遠遠劫おんのんこうの諸仏しよぶつの所説しよせつ・現在げんざい十万の諸仏しよぶつの説經皆法華經の經の一
字の眷属けんそくなり、されば藥王品に仏・宿王華菩薩ほさつに対して云く
「譬たとえば一切いっさいの川流江河せんるこうかの諸水しよすいの中に海こ為れ第一だいいちなるが如く
衆山しゅうざんの中に須弥山しゆみせんこ為れ第一だいいち・衆星しゅうせいの中に月天子がつてんし最も為れ第一だいいち」
等云云、妙樂大師みょうらくだいしの釈いわに云く「已今當説とうせつ最為第一さいいだいいち」等云云、以
の經の一字の中に十方じゆっほう法界ほっかいの一切經いっさいきよう納めたり、譬たとえば如意宝珠にょいほうじゆ
の一切いっさいの財おさを納め虚空こくうの万象ばんざうを含めるが如し、經の一字は一代いちだいに

まさ ゆえ みようほうれんげ はちまんほうぞう ちょうか
勝る故に妙法蓮華の四字も又八万宝蔵に超過するなり、妙とは

ほけきよう いわ ほうべん しんじつ しょうあんだいし
法華經に云く「方便の門を開いて真実の相を示す」、章安大師

の釈に云く「秘密の奥蔵を発く之を称して妙と為す」、妙樂大師

・此の文を受けて云く「発とは開なり」等云云、妙と申す事は

開と云う事なり世間に財を積める蔵に鑰なければ開くことかたし

開かざれば蔵の内の財を見ず、華嚴經は仏説き給いたりしかども

經を開く鑰をば仏・彼の經に説き給わず、阿含・方等・般若・

觀經等の四十余年も仏説き給いたりしかども彼の經經の意を

ば開き給わず、門を閉じて・をかせ給いたりしかば人・彼の

經經をささる者一人もなかりき、たとひ・さとれりとをもひし

も僻見にてありしなり、而るに仏・法華經を説かせ給いて諸經

の蔵を開かせ給いき、此の時に四十余年の九界の衆生始めて

しよきよう

諸經の藏の内の財をば見しりたりなり譬えば大地の上に人畜・

そうもく

にちがつ

まなこ

じんちく

そうもく

草木等あれども日月の光なければ眼ある人も人畜・草木の色彩

にちがつ

たまひ

をしらず、日月出で給いてこそ始めてこれをば知る事なれ、爾前

しよきよう

こと

ほけきよう

にちがつ

こと

の諸經は長夜の闇の如く法華經の本・迹二門は日月の如し、

もろもろぼさつ

にじよう

みようもく

ほんぶ

もうもく

せんだい

いきめくら

諸の菩薩の二目ある二乗の眇目なる凡夫の盲目なる闡提の生盲

にぜん

きようぎよう

なる共に爾前の經經にてはいろかたちをばわきまえずありし程

ほけきよう

しやくもん

たまひ

ほさつ

りようげん

に、法華經の時・迹門の月輪始めて出で給いし時・菩薩の兩眼

にじよう

みようもく

ほんぶ

もうもく

いきめくら

先にさとり二乗の眇目次にさとり凡夫の盲目次に開き生盲の

いっせんだいみらい

まなこ

ことえ

一闡提未来に眼の開くべき縁を結ぶ是れ偏に妙の一字の得なり。

しやくもん

迹門十四品の一妙・本門十四品の一妙合わせて二妙、迹門の

ほんもん

しやくもん

ほんもん

しやくもん

十妙合わせて二十妙、迹門の三十妙・本門の三十妙合わせて六

しやくもん

ほんもん

かんじん

十妙、迹門の四十妙・本門の四十妙・觀心の四十妙合せて百二

十重の妙なり六万九千三百八十四字一一の字の下に一の妙あり総
じて六万九千三百八十四の妙あり、妙とは天竺には薩と云い漢土
には妙と云う妙とは具の義なり具とは円満の義なり、法華經の一
一の文字・一字一字に余の六万九千三百八十四字を納めたり、
譬えば大海の一タイの水に一切の河の水を納め一の如意宝珠の
芥子計りなるが一切の如意宝珠の財を雨らすが如し、譬えば
秋冬枯れたる草木の春夏の日に値うて枝葉・華菓・出来するが
如し、爾前の秋冬の草木の如くなる九界の衆生・法華經の妙の
一字の春夏の日輪にあひたてまつりて菩提心の華さき成仏往生
の菓なる、竜樹菩薩の大論に云く「譬えば大薬師の能く毒を以
つて薬と為すが如し」云云、此の文は大論に法華經の妙の徳を
釈する文なり、妙楽大師の釈に云く「治し難きを能く治す所以

に妙と称す^{しょう}」等云云、総じて、成仏^{じょうぶつ}往生^{おうじょう}のなりがたき者・四人

あり第一^{だいいち}には決定^{けつじょう}性の二乗^{にじょう}・第二^{だいに}には一闍提人^{いつせんたい}・第三^{だいに}には空心

の者・第四^{よっし}には謗法^{ほうぼう}の者なり、此等^{これら}を法華經^{ほけきょう}にをいて仏になさせ

給^{たま}う故^{ゆえ}に法華經^{ほけきょう}は妙と云うなり。

提婆達多^{だいばだつた}は斛飯王^{こくはんのう}の第一^{だいいち}の太子^{たいし}・淨飯王^{じょうばん}にはをひ・阿難尊者^{あなんそんじゃ}

がこのかみ・教主^{きょうしゅ}釈尊^{しやくそん}にはいとこに当る・南閻浮提^{えんぶだい}にかろかざ

る・人なり須陀比丘^{ぶく}を師として出家^{しゅつげ}し阿難尊者^{あなんそんじゃ}に十八變^{はつぱん}をならひ

外道^{げどう}の六万蔵^{ろくまんざう}・仏の八万蔵^{はちまんざう}を胸にうかべ五法^{ごぽう}を行じて殆ど^{ほとん}仏より

も尊きけしきなり、兩頭^{りやうとう}をたてて破僧罪^{はそうざい}を犯さんために象頭山^{しやうとうざん}に

戒壇^{かいだん}を築き仏弟子^{ぶつでし}を招き取り、阿闍世太子^{あせんたいし}をかたらいて云く我^{われ}は

仏を殺して新仏^{しんぶつ}となるべし太子^{たいし}は父の王を殺して新王^{しんわう}となり

給^{たま}へ、阿闍世太子^{あせんたいし}・すでに父の王を殺せしかば提婆達多^{だいばだつた}は又^{また}仏を

うかがい大石をもちて仏の御身より血をいだし阿羅漢たる華色

比丘尼を打ちころし五逆の内三逆をつぶさにつくる、其の上

☆伽梨尊者を弟子とし阿闍世王を檀那とたのみ五天竺・十六の

たいこく 大国・五百の中国等の一逆・二逆・三逆等をつくれる者は皆

提婆が一类にあらざる事これなし、譬えば大海の諸河をあつめ大

山の草木をあつめたるがごとし、智慧の者は舍利弗にあつまり・

神通の者は目連にしたがひ・悪人は提婆に・かたらいしなり、さ

れば厚さ十六万八千由旬・其の下に金剛の風輪ある大地すでにわ

れて生身に無間・大城に堕ちにき、第一の弟子く伽梨も又生身

に地獄に入る施遮婆羅門女も・おちにき・波瑠璃王もをちぬ

善星比丘もおちぬ、又此等の人人の生身に堕ちしをば五天竺・

十六の大国・五百の中国・十千の小国の人人も皆これをみる、

六欲・四戰中丁無爭梵字音釈・第六天の魔王も閻魔法王等も皆御だいろくてん まおう えんまほうおう みな

覽ありき、三千大千他界・十方法界の衆生も皆開きしなり、ささんぜん じゅつぽうほっかい しゅじょう みな

れば大地微塵劫はすぐとも無間・大城を出づべからず、劫石はだいちみじん むげん だいじょう

ひすらぐとも阿鼻大城の苦は・つきじとこそ思い合いたりしに、あびだいじょう

法華經の提婆品にして教主釈尊の昔の師・天王如来と記し給うほけきょう だいば きょうしゅしやくそん てんのうによらい しる たま

事こそ不思議にをぼゆれ、爾前の經經・実ならば法華經は大ふしぎ にぜん きょうぎょう ほけきょう

妄語・法華經実ならば爾前の諸經は大虚誑罪なり、提婆が三逆もうご ほけきょう にぜん しよきょう こおうざい だいば

を具に犯して其の外無量の重罪を作りし天王如来となる、況やおか そ むりょう じゅうざい てんのうによらい

二逆・一逆等の諸の悪人の得道疑いなき事譬えば大地をかへすそ むく もろもろあくにん とくどうたがい たと だいち

に草木等のかへるがごとく堅石をわる者・☆草をわるが如し、そうもく かたきいし なんそう ごと

故に此の經をば妙と云ふ。ゆえ

女人をば内外典に是をそしり三皇・五帝の三墳・五典に諂曲のによん ないげてん これ さんこう・ごてい さんぶん てんこく

者と定む、されば災は三女より起ると云へり国の亡び人の損ずる
みなもと によにん

源は女人を本とす、内典の中には初成道の大法たる華嚴經に

は「女人は地獄の使なり能く仏の種子を断つ外面は菩薩に似て

ないしん やしや 内心は夜叉の如し」と云い、雙林最後の大涅槃經には「一切の江河

必ず回曲有り一切の女人必ず諂曲有り」と、又云く「所有三千界

の男子の諸の煩惱・合集して一人の女人の業障と為る」等云云、

大華嚴經の文に「能く仏の種子を断つ」と説かれて侯は女人は仏

になるべき種子をいれり、譬えば大旱魃の時・虚空の中に大雲を

こり大雨を大地に下すに・かれたるが如くなる無量無辺の草木・

花さき菓なる、然りと雖もいれる種はをひずして結句・雨しげ

ければ・くちうするが如し、仏は大雲の如く・説教は大雨の

如く・かれたるが如くなる草木を一切衆生に譬えたり、仏教の

雨に潤いうるお五戒・十善・禪定等の功德を修するは・花さき菓このみな

るが如しごと、一雨・ふれどもいりたる種のをひずかへりて・くちう

するは女人の仏教にあひて生死しょうじを・はなれずして・かへりて

仏法を失ひ惡道に墮つるに譬ふべし、是を「能く仏の種子を断つ」

とは申すなり、涅槃經の文に一切の江河のまがれるが如く女人も

又まがれりと説かれたるは、水はやわらかなる物なれば石山なん

どの・こわき物にさへちれて水のさき・ひるむゆへに・あれへ・

これへ行くなり、女人も亦是くの如く女人の心をば水に譬えたり、

心よわくして水の如くなり、道理と思ふ事も男のこわき心に値い

ぬればせかれて・よしなき方へをもむく、又水に急がくに・とど

まらざるが如し、女人は不信を体とするゆへに只今さあるべしと

見る事も又しばらくあれば・あらぬさまになるなり、仏と申すは

しょうじき
正直を本とす故に・まがれる女人は仏になるべからず五障三従
もう
と申して五つのさはり三つしたがふ事あり、されば銀色女経に
さんぜ
は「三世の諸仏の眼は大地に落つとも女人は仏になるべから
まいろん
ず」、と説かれ大論には「清風は・とると云えども女人の心はと
りがたし」と云へり。

か
此くの如く諸経に嫌はれたりし女人を文殊師利菩薩の妙の一

と
字を説き給いしかば忽に仏にりき、あまりに不審なりし故に

ほうじょうせかい
宝浄世界の多宝仏の第一の弟子智積菩薩、釈迦如来の御弟子の

ちえ
智慧第一舍利弗尊者、四十余年の大小乗経の経文をもつて

りゆうによ
竜女の仏になるまじき由を難ぜしかども終に叶はず仏にたりに

しよじょうどう
き、初成道の「能く仏の種子を断つ」雙林最後の「一切の江河

えこく
必ず回曲有り」の文も破れぬ、銀色女経・並に大論の亀鏡も

むな 空しくなりぬ智積・舍利弗は舌を巻きて口を閉ぢ人天大会は歡喜

せしあまりに 掌 を合せたりき、是れ偏に妙の一字の徳たり、

此の南閻浮提の内に二千五百の河あり一一に皆まがれり、南

閻浮提の女人の心のまがれるが如し、但し娑婆耶と申す河あり繩

を引きはえたるが如くして直に西海に入る、法華經を信ずる女人

亦復是の如く直に西方淨土へ入るべし此れ妙の一字の徳なり、妙

とは蘇生の義なり蘇生と申すは蘇る義なり、譬えば黃鵠の子・死

せるに鵠の母・子案となければ死せる子・還つて活り、鳩鳥・水

に入れば魚蚌悉く死す犀の角これに・ふるれば死せる者皆よみが

える如く爾前の經經にて仏種をいりて死せる二乗・闍提・女人

等・妙の一字を持ちぬれば・いれる仏種も還つて生ずるが如し、

天台云く「闍提は心有り猶作仏すべし二乗は智を威す心生ず可か

らず法華能く治す復稱して妙と為す」と、妙樂云く「但大と云い

て妙と名づけざるは一には有心は治し易く無心は治し治し難きを

能く治す所以に妙と稱す」等云云、此等の文の心は大方広仏

華嚴經・大集經・大品經・大涅槃等は題目に大の字のみありて

妙の字なし、但生る者を治して死せる者をば治せず、法華經は死

せる者をも治するが故に妙と云ふ釈なり、されば諸經にしては

仏になる者も仏になるべからず其の故は法華は仏になりがたき

著すら尚仏になりぬ、なりやすき者は云ふにや及ぶと云う道理立

ちぬれば法華經をとかれて後は諸經にをもむく一人も・あるべ

からず。

而るに正像二千年過ぎて末法に入つて当世の衆生の・成仏

往生のとげがたき事は・在世の二乘闡提等にも・百千万億倍す

きたる・衆生しゅじょうの觀經かんきょう等の四十余年よんじゅうよねんの經經きょうきょうによりて生死しやうじをはな

れんと思うは・はかなし・はかなし・女人にょにんは在世ざいせ・正像末總しやうざうまつじ

て一切いっさいの諸仏しよぶつの一切經いっさいきょうの中に法華經ほけきやうを・はなれて・仏になるべ

からず、靈山りやうぜんの聽衆ちやうしゅう道場どうじやう開悟かいごたる天台智者大師てんだいちしやだいし・定めて云いわく

「諸經しよきやうは但男しるに記して女に記せず今經は皆記す」等云云。釈迦しやか

如来・多宝仏たほうぶつ・十方諸仏じゅうつぱうしよぶつの御前おんまえにして摩訶提國王舍城まかだいこくしやじやうの良・鷲

の山もうと申す所にて八箇年はちかねんの間・説き給たまひいし法華經ほけきやうを智者大師ちしやだいしまの

あたり聞こしめしりるに我五十余年いちだいいしやうきやうの一代聖教とを説きとをく事は

皆衆生利益みなしゅじやうりやくのためなり、但ただし其その中に四十二年きやうじふにねんの經經きょうきょうには

女人にょにん・仏になるべからずと説ときたまひしなり、今法華經ほけきやうにして

女人にょにん・仏に成ると・とくと・なのらせ給たまひいしを仏滅後ぶつめつ・一千五百

余年に當って鷲の山より東北とうほく・十方八千里じゅうつぱうせんりの山海をへだてて

摩訶尸那と申す国あり震旦国是なり、此の国に仏の御使に出で

させ給ひ天台智者大師となのりて女人は法華経を・はなれて仏に

なるべかるずと定めさせ給いぬ。

尸那国より三千里をへだてて東方に国あり日本国となづけたり、

天台大師・御入滅・二百余年と申せしに此の国に生れて伝教

大師となのらせ給いて秀句と申す書を造り給いしに「能化・所化

俱に歴劫無し妙法経の力にて即身に成仏す」と竜女が成仏

を定め置き給いたり、而るに当世の女人は即身成仏こそ・かた

からめ往生極楽は法華を憑まば疑いなし、譬えば江河の大海

に入るよりもたやすく雨の空より落つるよりもはやくあるべき事

なり、而るに日本国の一切の女人は南無妙法蓮華経とは唱へず

して女人の往生成仏をとげざる雙観・観経等によりて弥陀の

みょうごう

じゅうまん

みょうごう

名号を一日に六万遍・十万遍などとなうるは、仏の名号な

れば巧たくみなるには似たれども女人にょにん不成じょうぶつ仏・不往生おうじょうの經によれるが

故ゆえにいたずらに他の財を数えたる女人にょにんなり、これひとえに悪知識あくちしき

にたぼらかされたるなり、されば日本にほんこく國の一切の女人にょにんの御かたき

は虎狼こうろうよりも山賊さんそく・海賊かいそくよりも父母ふぼの敵・とわり等よりも法華經ほけきょう

をばをしえずして念仏ねんぶつを・をしゆるこそ一切いっさいの女人にょにんのかたきな

れ。

南無なむ妙法蓮華經みょうほうれんげきょうと一日に六万・十万・千万等じゅうまん せんまん となも唱えて後に暇

あらば時時よりより阿弥陀等あみだの諸仏しよぶつの名号みょうごうをも口ずさみ・なるやうに

申し給たまはんこそ法華經ほけきょうを信ずる女人にょにんにては・あるべきに当世とうせの

女人にょにんは一期いちごの間・弥陀みだの名号みょうごうをば・しきりに・となへ念仏ねんぶつの

仏事ぶつじをば・ひまなくをこなひ法華經ほけきょうをばつやつや唱へず供養くようせず

・或はわづかに法華經ほけきょうを持經者じきように・よますれども念仏者ねんぶつをば
父母ふぼ・兄弟きょうだいなんどのやうに・をもひなし持經者じきようをば所從眷屬しよじゅうけんぞくよ
りもかろくをもへり、かくして・しかも法華經ほけきょうを信ずる由よしを・な
るなり、抑そもそもも淨徳夫人じやうとくふじんは二人の太子たいしの出家しゅつけを許ゆるして法華經ほけきょうを
ひろめさせ竜女りゅうによは「我闡大乘教がせんだいじやう・度脱苦衆生どだつしゅじやう」とこそ誓ひし
が全く他經計りたきやうばかを行じ・て比の經を行ぜじとは誓はず、今の女人にょにん
は偏ひとえに他經たきやうを行じて法華經ほけきやうを行ずる方をしらず、とくとく心を・
ひるがへすべし・心を・ひるがへすべし、南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう・
南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう

日蓮 花押

文永三年五月六日清澄寺きよすみでらに於おいて末の時書し畢おわんぬ。

◆一一九 富木殿御消息ときどのしやうそく 文永六年六月ぶんえい

四十八歳御作

949p

大師講だいしの事今月明性房ぼうにて候が此月はさしあい候又余人の申せ
んと候人候はば申もうさせ給たまえと候、貴辺きへんより仰を蒙こむり候へ、御指合
にて候はば他処へ申もうすべく候、恐々。

六月七日

日蓮花押にちれんかおう

土木殿

◆一二〇 富木殿御返事とぎどのごへんじ

9 4 9 P

白米しらよね一ほかひ本斗六升たしかに給候、ときれうも候はざりつる
に悦よろこび入り候、何事なにことも見参にて申もうすべく候。

乃時

花押かおう

富木殿とぎどの

真間・釈迦仏御供養逐状

文永七年九月 四十九歳御作

950P

しゃかぶつ

釈迦仏御造立の御事、無始曠劫よりいまだ顕れましまさぬ己心

いちねんさんぜん

の一念三千の仏造り顕しますか、はせまいりてをがみまいら

せ候わばや、「欲令衆生開仏知見乃至然我実成仏已来」は是な

ただ

り、但し仏の御開眼の御事はいそぎいそぎ伊よ房をもてはたしま

いらせさせ給い候へ、法華經一部御仏の御六根によみ入れまいら

しょうしん

せて生身の教主釈尊になしまいらせてかへりて迎い入れまい

たま

らせさせ給へ、自身並に子にあらずばいかながと存じ候、御所領

あじやり

の堂の事等は大進の阿闍梨がききて候、かへすがへすをがみ結縁

けちえん

しまいらせ候べし、いつぞや大黒を供養して候いし其後より世間

たいかい

なげかずしておはするか、此度は大海のしほの満つるがごとく月

の満ずるが如く福きたり命ながく後生は靈山とおぼしめせ。

九月二十六日

にちれんかおう
日蓮花押

進上 しんじょう 富木殿御返事 ときどのごへんじ

◆一二二 土木殿御返事 ごへんじ

文永八年九月 ぶんえい 五十歳御作 ごへんじ 於相模依智 さがみえち

950P

上のせめさせ給うにこそ法華經を信じたる色もあらわれ侯へ、
月はかけてみち・しをはひてみつる事疑なし此れも罰あり必ず
徳あるべし・なにしにか・なげかん。

此の十二日酉の時・御勘気・武蔵守殿御あづかりにて十三日丑
の時にかくくらをいでて佐土の国へながされ侯が、たうじはほん
雀のえちと申すところにあちの六郎左衛門尉殿の代官・右馬太

郎と申す者あづかりて侯が、いま四五日はあるべげに侯、御嘆き

はさる事に候へども・これには一定と本よりごして候へば・なげ
かず候、いままで頸の切れぬこそ本意なく候へ、法華經の御ゆへ
に過去に頸を・うしないたらば・かかる少身のみにて候べきか、
又数数見擯出ととかれて度度失にあたりて重罪をけしてこそ仏
にもなり候はんずれば我と苦行をいたす事は心ゆへ
なり。

九月十四日

日蓮花押

土木殿御返事

◆一二三 寺泊御書

文永八年十月 五十歳御作

951P

与富木常忍 於越後寺泊

鷺目一結給び了ぬ、心ざしあらん諸人は一処にあつまりて御

聴聞あるべし。

今月十月なり十日相州愛京郡依智の郷を起つて武蔵の国久目河の宿に付き十二日を経て越後の国寺泊の津に付きぬ、此れより大海を亘つて佐渡の国に至らんと欲するに順風定まらず其の期を知らず、道の間の事心も及ぶこと莫く又筆にも及ばず但暗に推し度る可し、又本より存知の上なれば始めて嘆く可きに非ざれば之を止む。

法華經の第四に云く「而も此の經は如来の現在すら猶怨嫉多し況んや滅度の後をや」第五の卷に云く「一切世間怨多くして信じ難し」、涅槃經の三十八に云く「爾の時に一切の外道の衆咸く是の言を作さく○大王今は唯一の大悪人有り瞿曇沙門なり○一切の世間の悪人利養の為の故に其の所に往き集り而も眷属と為つて

善を修しゅうすること能あたわず呪術力の故に迦葉及び舍利弗・目☆蓮等を

調じょうぶく伏す」云云、此の涅槃經の文は一切の外道我が本師たる二天

三仙の所説しよせつの經典を仏陀に毀られて出す所の惡言なり、法華經

の文は仏を怨あだと為なす經文には非あらず、天台の意に云く「一切の

声聞・緣覺並に近こんじよう成を樂ねがう菩薩」等云云、聞かんと欲せず信ぜ

んと欲せず其その機に當らざるは言を出して謗そしること莫なきも皆怨嫉

の者と定め了おわんぬ、在世を以て滅後を推めつこすに一切諸宗の學者等

は皆外道の如みなげどうし、彼等が云う一大惡人とは日蓮にちれんに當れり、一切の

惡人あくにん之に集まるとは日蓮が弟子等でし是なり、彼の外道は先仏の

説教流傳の後之を謬あやまつて後・仏を怨あだと為せり、今諸宗の學者等

も亦復是くまたかくのの如ごとし、所詮しよせん仏教に依よつて邪見じゃけんを起す目の転ずる者

大山転ずと欲おもう、今八宗・十宗等多門の故に諍じようろん論を至いたす、

涅槃經の第十八に 贖命 重宝と申す法門あり、天台大師の料簡

に云く命とは法華經なり重宝とは涅槃經に説く所の前三教なり、

但し涅槃經に説く所の円教は如何、此の法華經に説く所の仏性

常住を重ねて之を説いて歸本せしめ涅槃經の円常を以て

法華經に摂す、涅槃經の得分は但前三教に限る、天台の玄義の

三に云く「涅槃は贖命の重宝なり重ねて掌を抵つのみ」文、籤の

三に云く「今家の引意は大經の部を指して以て重宝と為す」等

云云、天台大師の四念処と申す文に法華經の「雖示種種道」の文

を引いて先ず四味を又重宝と定め了んぬ、若し爾らば法華經の

先後の諸經は法華經の爲の重宝なり、世間の學者の想に云く

此れは天台一宗の義なり諸宗は之を用いず等云云、日蓮之を案

じて云く八宗・十宗等は皆仏滅後より之を起し論師・人師之を

立つ滅後の宗を以て現在の経を計る可からず天台の所判は
いっさいきようかな
一切経に叶うに依つて一宗に属して之を弃つ可からず、諸宗の
学者等自師の誤りを執する故に・或は事を機に寄せ・或は前師に
譲り・或は賢王を語らい結句最後には悪心強盛にして鬭諍を起
し失無き者を之を損うて楽と為す、諸宗の中に真言宗殊に僻案
を至す善無畏・金剛智等の想に云く一念三千は天台の極理一代の
肝心なり顕密二道の詮たる可きの心地の三千は且く之を置く、此
の外印と真言とは仏教の最要等云云、其の後真言師等事を此の
義に寄せて印・真言無き経経をば之を下すこと外道の法の
如し、・或る義に云く大日経は釈迦如来の外の説なりと、・或る
義に云く教主釈尊第一の説なりと、・或る義には釈尊と現じ
て顕経を説き大日と現じて密経を説くと、道理を得ずして無尽

の僻見びやっけんこれ之を起す、譬たとえば乳の色を弁わえざる者種種しゅじゅの邪推なを作せども本色に当らざるが如ごとく又象の譬たとえの如ごとし、今汝等なんじ知る可べしだいにちきようにちきようは法華經ほけきよういぜん已前けこんきようならば華嚴經等の如ごとく已後いごならば涅槃等ねはんの如ごとし。

又天竺てんじくの法華經ほけきようには印・真言しんこん有れども訳者之を略して羅什らじゅうは妙法經みようほうと名づけ、印・真言しんこんを加えて善無畏ぜんむいは大日經だいにちきようと名づくる

か、譬たとえば正法華添品法華しょうほう・法華三昧てんぽんほつけ・薩云分陀利等ほつけさんまいの如ごとし、

仏の滅後めつごてんじく天竺てんじくに於いて此の詮を得たるは竜樹菩薩りゅうじゅぼさつ、漢土かんどに於い

て始めて之これを得たるは天台智者大師てんだいちしやだいしなり、真言宗しんこんしゅうの善無畏等ぜんむい・

華嚴宗けこんしゅうの澄觀等ちようかん・三論宗さんろんしゅうの嘉祥等かじよう・法相宗ほうそうしゅうの慈恩等じおん・名は

自宗じしゅうに依れども其その心は天台宗てんだいしゅうに落ちたり其その門弟等もんてい・此の事

を知らず如何なんぞ謗法ほうほうの失とがを免れんや、・或人ある・日蓮にちれんを難なんじて

云く機を知らずして☆議を立て難に値うと、・或る人云く勸持品の如きは深位の菩薩の義なり安樂行品に違すと、・或る人云く我も此の義を存すれども言わずと云云、・或る人云く唯教門計りなりと、具に我之を存すと雖も卞和は足を切られ清丸は穢丸と云う名を給うて死罪に及ばんと欲す時の人之を咲う、然りと雖も其の人未だ善き名を流さず汝等が邪難も亦爾る可し。勸持品に云く「諸の無智の人有つて悪口罵詈訕」等云云日蓮此の経文に当れり汝等何ぞ此の経文に入らざる、「及び刀杖を加うる者」等云云、日蓮は此の経文を読み汝等何ぞ此の経文を読まざる「常に大衆の中に在つて我等が過を毀らんと欲す」等云云、「国王・大臣婆羅門・居士に向つて」等云云、「悪口し翬蹙し数数擯出せられん」数数とは度度なり日蓮擯出衆度

るぜい
流罪は二度なり、法華經は三世の説法の儀式なり、過去の不輕品

は今の勸持品今の勸持品は過去の不輕品なり、今の勸持品は未来

は不輕品為る可し、其の時は日蓮は即ち不輕菩薩為る可し、一部

八卷・二十八品天竺の御經は一由旬に布くと承わる定めて数品

有る可し、いま漢土・日本の二十八品は略の中の要なり、正宗

は之を置く流通に至つて宝塔品の三箇の勅宣は靈山虚空の

大衆に被らしむ、勸持品の二万・八万・八十万億等の大菩薩の

御誓言は日蓮が浅智には及ばず但し「恐怖惡世中」の經文は末法

の始を指すなり、此の「恐怖惡世中」の次下の安樂行品等に云く

「於末世」等云云、同本異訳の正法華經に云く「然後末世」又云く

「然後來末世」、添品法華經に云く「恐怖惡世中」等云云、時に

當り當世三類の敵人は之れ有るに但八十万億・那由他の諸菩薩は

一人も見えたまわず乾^ひたる湖の満たず月の虧^かけて満ちざるが如^{ごと}し
水清めば月を浮かべ木を植うれば鳥棲^すむ、日蓮^{にちれん}は八十万億那由他
の諸^{もろもろ}の菩薩の代官として之^{これ}を申^{もう}す彼の諸^{もろもろ}の菩薩の加被^{かび}を請^{こう}う者な
り。

此^{にゅうどう}の入道佐渡の国へ御共為^なす可^べきの由^{これ}之^{もう}を申^しす然^かる可^べき用途
と云^いいかたがた煩^{わづらい}有^あるの故^{ゆえ}に之^{これ}を還^{かへ}す、御志^{こころざし}し始めて申^{もう}す
に及^{およ}ばず候^{ひとびと}人人に是^{かくの}くの如^{ごと}く申^{もう}させ給^{たま}え、但^{ただ}し圀^{らい}僧^{そう}等のみ心に
懸^かり候^{ひとびと}便宜^{べんぎ}の時早^{これ}早^{これ}之^{これ}を聴^きかす可^べし、穴^{あな}賢^{かしこ}穴^{あな}賢^{かしこ}。

十月二十二日 酉^{とり}の時

日蓮^{にちれん}花押^{かおう}

◆ 一二四

ときにゆうどう ごへんじ
富木入道殿御返事

ぶんえい
文永八年十一月五十歳御作

さど
於佐渡塚原

955p

此比は十一月の下旬なれば相州鎌倉に候し時の思には四節の

転変は万国・皆同じかるべしと存候し処に此北国佐渡の国に下

著侯て後二月は寒風頻に吹て霜雪更に降ざる時はあれども日の光

をば見ることなし、八寒を現身に感ず、人の心は禽獸に同じく

主師親を知らず何に況や仏法の邪正・師の善悪は思もよらざるを

や、此等は且く之を置く。

去十月十日に付られ候し入道・寺泊より還し候し時法門を書

き遣わし候き推量候らむ、已に眼前なり仏滅後・二千二百余年に

月氏・漢土・日本・一閻浮提の内に天親・竜樹・内鑑冷然・

外適時宜云云、天台・伝教は粗釈し給へども之を弘め残せる

いちだいじ ひほう
一大事の秘法を此国に初めて之を弘む日蓮豈其の人に非ずや。

すで あらわ
前相已に顕れぬ去正嘉の大地震前代未聞の大瑞なり神世十二人王

ぶつめつ
九十代と仏滅後・二千二百余年未曾有の大瑞なり神力品に云く正

めつど
滅度の後に於て能く是の經を持つが故に諸仏皆歡喜して無量の

じんりき
神力を現ず」等云云、「如来・一切所有之法」云云、但此の大法弘ま

にぜん しゃくもん きようぎよう いちぶん
り給ならば爾前・迹門の經教は一分も益なかるべし、伝教

だいし いわ
大師云く「日出て星隠る」云云、遵式の記に云く「末法の初西

てら
を照す」等云云、法已に顕れぬ、前和先代に超過せり日蓮粗之を

かんが
勘うるに是時の然らしむる故なり經に云く「四導師有り一を

じようぎよう なず
上行と名く」云云又云く「惡世末法時能持是經者」又云く「若

しゆみ たほう
接須弥擲置他方」云云。

きへん
又貴辺に申付し高經の要文智論の要文五帖一処に取り集め被る

可く候、其外ろんしゃく論釈の要文散在あるべからず候、

こそう

又小僧達談義あるべしと仰らるべく候るざい流罪の事痛く歎せ給ふべか

たま

らず、勸持品かんじほんに云く不輕品ふぎように云く、命限り有り

惜む可からず遂に願う可きは仏国也云云。

にちれん かおう
日蓮 花押

ぶんえい
文永八年十一月二十三日

ときにゆうどう
富木入道殿御返事

こそう
小僧達少少還えし候此国為 体在所の有様御問い有る可く候
ひったん
筆端に載せ難く候。

◆ 一二五 佐渡御書

ぶんえい
文永九年三月五十一歳御作 与弟子檀那

956p

このもん
此文は富木殿のかた三郎左衛門殿大蔵たうのつじ十郎入道
あまこぜん
殿等さじきの尼御前一一に見させ給べき人人の御中へな
ひとびと
り、京鎌倉に軍に死る人人を書付けたび候へ、外典抄文句
ほんまつ かんもん せんじ
のこ玄の四の本末勘文宣旨等これへの人人もちてわたらせ

たま
給へ。

世間せけんに人の恐るる者は火炎の中と刀剣とうけんの影と此身の死するとな

るべし牛馬ぎゅうば猶身なほを惜むおし況や人身じんしんをや瀬人なほ猶命なほを惜むおし何に況や杜人いか

をや、仏説ぶつせつて云く「七宝しちぼうを以て三千大千世界さんぜんだいせんせかいに布き満るとも手の

小指こさきを以て仏経ぶつぎょうに供養くようせんには如しかず」取意せつせん、雪山童子せっせんどうじの身をな

げし樂法ぎやうぼう梵志ぼんじが身の皮をはぎし身命しんみょうに過あやまたる惜おしき者のなければ

是これを布施ふせとして仏法ぶつぼうを習へば必仏しんみょうとなる身命しんみょうを捨る人・他の宝

を仏法ぶつぼうに惜おしべしや、又財宝ざいぼうを仏法ぶつぼうにおしまん物まさる身命しんみょうを捨

べきや、世間せけんの法にも重恩じゅうおんをば命を捨て報ずるなるべし又主君しゅくん

の為ために命を捨る人はすくなきやうなれども其数多し男子なんしははぢに

命をすて女人にょにんは男の為ために命をすつ、魚は命を惜おしむ故ゆえに池にすむに

池の浅き事を嘆きて池の底に穴をほりてすむしかれどもゑにばか

されて釣^つをのむ鳥は木にすむ木のひきき事をおじて木の上枝にすむしかれどもゑにばかされて網にかかる、人も又是^{かくの}くの如^{ごと}し世間^{せけん}の浅き事には身命^{しんみょう}を失へども大事^{だいじ}の仏法^{ぶつぽう}などには捨る事難^{がた}し故^{ゆえ}に仏になる人もなかるべし。

仏法^{ぶつぽう}は摂受^{しょうじゅ}・折伏^{しゃくぶく}時によるべし譬^{たとえ}ば世間の文武二道^{にどう}の如^{ごと}し

されば昔の大聖は時によりて法を行ず・雪山童子^{せつせんどうじ}・薩^{さつ}☆王子^{たみこ}は身

を布施^{ふせ}とせば法を教へん菩薩^{ぼさつ}の行となるべしと責しかば身をす

つ、肉をほしがらざる時身を捨^べつ可きや紙なからん世には身の皮

を紙とし筆なからん時は骨を筆とすべし、破戒^{はかい}・無戒^{むかい}を毀^{そし}り持戒^{じかい}

・正法^{しょうぽう}を用ん用には諸戒^{しよ}を堅く持べし儒教^{じゆきやう}・道教^{たうきやう}を以て釈教^{しゃつきやう}

を制止^{せいし}せん日には道安法師^{だうあんほふし}・慧遠法師^{ゑいゑんほふし}・法道三蔵等^{ほうどうさんそう}の如^{ごと}く王と論

じて命を軽うすべし、釈教^{しゃつきやう}の中に小乘^{しょうじやう}・大乘^{だいじやう}・権經^{こんきやう}・実經^{じつきやう}

・雜そうらん乱みょうじゆして明が珠りやくと瓦礫ごろと牛驢わきまの二乳を弁わへざる時は天台大師・
傳でん教ぎょう大師等の如ごとく大小だいしやう・確實けんみつ・顯密ごうじやうを強盛ぶんべつに分別ぶんべつすべし、
畜生ちくしやうの心は弱きをおどし強きをおそる当世とうせの学者等がくしやは畜生ちくしやうの
如ごとし智者ちしやの弱きをあなづり王法の邪ゆしんをおそる諛臣もうと申もうすは是これなり
強敵かうてきを伏くつして始はて力士あくおうをしる、惡王しやうほうの正法やぶを破やぶるに邪法じやほうの僧等
が方人かうとんをなして智者ちしやを失しはん時は師子王ししの如ごとくなる心をもてる者
必ず仏ぶつになるべし例せば日蓮にちれんが如ごとし、これおごれるにはあらず
正法しやうほうを惜おしむ心の強盛かうじやうなるべしおごれる者は必ず強敵かうてきに値あておそ
る心しゅつたい出來するなり例せば・修羅しゆらのおごり帝釈たいしやくに・せめられて
無熱池むねつちの蓮れんの中に小身こみと成なて隠かくれしが如ごとし正法しやうほうは一字いっく・一句いっくな
れども時機じきに叶かないぬれば必ず得道とくどうなるべし千經せんきやう・万論ばんろんを習学しゆがくす
れども時機じきに相違さういすれば叶かなう可べからず。

宝治の合戦すでに二十六年今年二月十一日十七日又合戦あり

外道・悪人は如来の正法を破りがたし仏弟子等・必ず仏法を

破るべし師子身中の虫の獅子を食等云云、大果報の人をば他の敵

やぶりがたし親しみより破るべし、薬師経に云く「自界叛逆難」

と是なり、仁王経に云く「聖人去る時七難必ず起らん」云云、

金光明経に云く「三十三天各瞋恨を生ずるは其の国王悪を縦

にし治せざるに由る」等云云、日蓮は聖人にあらざれども法華経

を説の如く受持すれば聖人の如し又世間の作法兼て知るによて

注し置くことは是違う可らず現世に云をく言の違はざらんをもて

後生の疑をなすべからず、日蓮は此関東の御一門の棟梁なり

・日月なり・亀鏡なり・眼目なり・日蓮捨て去る時・七難必ず

起るべしと去年九月十二日御勘気を蒙りし時大音声を放てよば

はりし事これなるべし ☆ に六十日乃至百五十日に此事起るかは

は華報なるべし実果の成ぜん時いかなげかはしからんずらん、

世間の愚者の思に云く日蓮智者ならば何ぞ王難に値哉なんと申す

日蓮来ての存知なり父母を打子あり阿闍世王なり仏・阿羅漢を殺

し血を出す者あり提婆達多是なり六臣これをほめく伽利等これを

悦ぶ、日蓮当世には此御一門の父位なり仏阿羅漢の如し然を流罪

し主従共に悦びぬるあはれに無慙なる者なり誘法の法師等が自ら

禍の既に頼るるを欺きしがなくなるを一旦は悦ぶなるべし後には

彼等が欺き目迎が一門に劣るべからず、例せば泰衡がせうとを討

九郎判官を討て悦しが如し既に一門を亡す大鬼の此国に入なるべ

し法華經に云く「悪鬼入其身」と是なり。

日蓮も又かくせめらるるも先業なきにあらず不輕品に云く「其

つみひつち
罪畢已」等云云、不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈打ちやくせられしも先業の所感なるべし何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ施陀羅が家より出たり心こそすこし法華經を信じたる様なれども身は人身に似て畜身なり魚鳥を混丸して赤白二滯とせり其中に識神をやどす濁水に月のうつれるが如し糞囊に金をつつめるなるべし、心は法華經を信ずる故に梵天・帝釈をも猶恐しと思はず身は畜生の身なり色心不相応の故に愚者のあなづる道理なり心も又身に対すればこそ月金にもたとふれ、又過去の謗法を案ずるに誰かする勝意比丘が魂にもや大天が神にもや不輕輕毀の流類なるか失心の余残なるか五千上慢の眷属なるか大通第三の余流にもやあるらん宿業はかりがたし鉄は炎打てば剣となる賢聖は罵詈して試みるなるべし、我今度の御勘氣は世間の

とがいちぶん ひとえ せんごう じゅうざい こんじょう こそう さんあく まぬか
失一分もなし偏に先業の重罪を今生に消して後生の三悪を脱れ

んずるなるべし、般泥垣經に云く「当来の世仮りに袈裟を被て
はつないおんきよう いわ とうらい か けさ

我が法の中に於て出家学道し懶惰懈怠にして此等の方等契經を
おい しゅつけ らんだけたい これら ほうとう

誹謗すること有らん当に知るべし此等は皆是今日の諸の異道の
ひほう まさ これら みな もろもろ

輩なり」等云云、此經文を見ん者自身をはづべし今・我等が
やから きようもん じしん われら

出家して袈裟をかけ懶惰懈怠なるは是仏在世の六師外道が弟子な
しゅつけ けさ らんだけたい さいせ げどう でし

りと仏記し給へり、法然が一類大日が一類念仏宗・禅宗と号し
しる たま ほうなん いちるいだい ねんぶつしゅう ぜんしゅう

て法華經に捨閉閣抛の四字を副へて制止を加て權教の弥陀
ほけきよう しゃへいかくほう そ せいし ごんきよう みだ

称名計りを取立教外別伝して法華經を月をさす指只文字をかぞ
しょうみようばか きようげべつてん ほけきよう ただもんじ

ふるなんと笑ふ者は六師が末流の仏教の中に出来せるなるべ
まつりゅう ぶつきよう しゅつたい

し、うれへなるかなや涅槃經に仏光明を放て地の下一百三十六
ねはんきよう こうみよう ほけきよう じゆりようほん

地獄を照し給うに罪人・一人もなかるべし法華經の寿量品にし
じごく てら たま ざいにん ひとりもなかるべし ほけきよう じゆりようほん

て皆成仏みなじょうぶつせる故なり但し一闍提人ただ いっせんたいと申て謗法ほうぼうの者計り地獄守じごくにとど留とどられたりき彼等かれらがうみげて今の世の日本国にほんこくの一切衆生いっさいしゅじょうとなれるなり。

にちれん 日蓮も過去かこの種子しゅし已すでに謗法ほうぼうの者なれば今生こんじょうに念佛者ねんぶつにて数年が間ほけきよう・法華經ぎようじやの行者みういちにんとくしやせんちゅうむいつを見ては未有一人得者千中無一等と笑しなり今謗法ほうぼうの酔さめて見れば酒に酔る者父位を打て悦しが酔さめて後歎ごたうしが如ごとし欺ごけども甲斐かいなし此罪消つみがたし、何いかに況や過去かこの謗法ほうぼうの心中しんちゅうにそみけんをや經文きようもんを見候そうらへば烏の黒きも鷺の白きも先業せんごうのつよくそみけるなるべし外道げどうは知らずして自然じねんと云いい今せんごうの人は謗法ほうぼうを顕あらわし扶たすけんとすれば我身わがみに謗法ほうぼうなき由よしをもながちに陳答ちんとうして法華經ほけきようの門を閉よと法然ほうねんが書けるをとかくあらかひなんどす念佛者ねんぶつはさてをきぬ天台てんだい・真言等しんごんの人人ひとびと彼が方人かとうとをあながち

にするなり、今年正月十六日十七日に佐渡の国の念仏者等数百人
印性房と申すは念仏者の棟梁なり日蓮が許に來て云く法然上人
は法華經を抛よとかかせ給には非ず一切衆生に念仏を申させ
給いて候此の大功徳に御往生疑なしと書付て候を山僧等の流
されたる並に寺法師等・善哉善哉とほめ候をいかがこれを破し給
と申しき鎌倉の念仏者よりもはるかにはかなく候ぞ無慙とも申す
計りなし。

いよいよ日蓮が先生今生先日の謗法おそろしかかりける者の
弟子と成けんかかる国に生れけんいかなるべしとも覺えず、
般泥垣經に云く「善男子過去に無量の諸罪・種種の惡業を作ら
んに是の諸の罪報・或は輕易せられ・或は形状醜陋衣服足ら
ず飲食☆疎・財を求めて利あらず貧賤の家及び邪見の家に生れ

・或は王難に遇う」等云云、又云く「及び余の種種の人間の苦報
現世に軽く受くるは斯れ護法の功德力に由る故なり」等云云、此
経文は日蓮が身なくば殆ど仏の妄語となりぬべし、一には・或
被輕易二には・或形状醜陋三には衣服不足四には飲食☆疎五に
は求財不利・六には生貧賤家・七には及邪見家・八には・或遭王
難等云云、此八句は只日蓮が身に感ぜり、高山に登る者は必ず下
り我人を輕しめば還て我身人に輕易せられん形状端嚴をそしれ
ば醜陋の報いを得人の衣服飲食をうばへば必ず餓鬼となる持戒
尊貴を笑へば貧賤の家に生ず正法の家をそしれば邪見の家に生
ず善戒を笑へば国土の民となり王難に遇ふ是は常の因果の定れる
法なり、日蓮は此因果にはあらず法華經の行者を過去に輕易せ
し故に法華經は月と月とを並べ星と星とをつらね華山に華山をか

さね玉と玉をつらねたるが如くなる御経を・或は上げ・或は
下て嘲弄せし故に此八種の大難に値るなり、此八種は尽未来際が
間・一づつこそ現ずべかりしを日蓮つよく法華経の敵を責るによ
て一時に聚り起せるなり譬ば民の郷郡などにあるにはいかな
る利銭を地頭等におほせたれどもいたくせめず年年にのべゆく其
所を出る時に競起が如し斯れ護法の功德力に由る故なり等はな
り、法華経には「諸の無智の人有り悪口罵詈等し刀杖瓦石を加
うる乃至国王・大臣・婆羅門・居士に向つて乃至数数摸出せられ
ん」等云云、獄卒が罪人を責ずば地獄を出る者かたかりなん当世
の王臣なくば日蓮が過去謗法の重罪消し難し日蓮は過去の不軽
の如く当世の人人は彼の輕毀の四衆の如し人は替れども因は一
なり、父母を殺せる人異なれども同じ無間地獄におついかねれば

ふぎよう

不輕の因を行じて日蓮にちれん一人釈迦しゃかぶつ仏とならざるべき又彼諸人しよにんは跋陀ぼつだ

婆羅門ばらもん

等と云はれざらんや但千劫せんごうあびじく阿鼻地獄あびじくにて責られん事こそ不

快にはおぼゆれ是これをいかんとすべき、彼輕毀きようきの衆は始は謗ほうぜしか

ども後には信しん伏ぶく随ずい從じゅうせりき罪つみ多た分ぶんは滅めつして少せう分ぶん有あしが父ふ母ぼ千せん人にん

殺ころしたる程の大苦たいくをうく当世とうせの諸人しよにんは翻ひるがえりす心こころなし譬ひ喩ゆ品ぽんの

如ごとく無む数しう劫こつをや経けいんごうずらん三五さんごの塵点じんてんをやおくらんずらん。

これはさてをきぬ日蓮にちれんを信しんずるやうなりし者どもが日蓮にちれんがかく

なれば疑うたがいを・をこして法華經ほけきようをすつるのみならずかへりて日蓮にちれん

を教訓きようくんして我賢がけんしと思はん僻人びやくにん等が念ねん仏ぶつ者ぶつよりも久くく阿鼻地獄あびじく

にあらん事ふ不ふ便びんとも申もうす計ばかりなし、修羅しゆらが仏ぶつは十八界じふはちがい我がは十九界じゅうくがい

と云いひ外道げどうが云いく仏ぶつは一いつ究竟道くきやうどう我がは九十五究竟道くきやうどうと云いいしが如ごとく

日蓮御房にちれんごぼうは師匠ししやうにておはせども余あにこはし我等われらはやはらかに

法華經を弘むべしと云んは螢火が日月をわらひ蟻塚が華山を下し
井江が河海をあなづり烏鵲が鸞鳳をわらふなるべしわらふなるべ
し。

南無妙法蓮華經

文永九年太歲 壬申 三月二十日

日蓮

花押

日蓮弟子・檀那等御中

佐渡の国は紙侯はぬ上面面に申せば煩あり一人ももるれば
恨ありぬべし此文を心ざしあらん人人は寄合て「御覧じ料簡
侯て心なぐさませ給へ、世間にまさる欺きだにも出来すれ
ば劣る欺きは物ならず当時の軍に死する人人実不実は置く幾
か悲しかるらん、いざはの入道さかべの入道いかなりぬ

らんかはのべ山城得行寺殿等の事いかにと書付て給べし、
外典書の貞観政要すべて外典の物語八宗の相伝等此等が
なくしては消息もかかれ候はぬにかまへてかまへて給候べ
し。

◆一二六

富木殿御返事

文永^{ぶんえい}6年4月51歳御作 於佐渡一の谷 962P

御返事

日蓮^{にちれん}が臨終^{りんじゅう}一分も疑^{うたが}無く頭^{こうべ}を刎^はねらるる時は殊^{こと}に喜悅^{きえつ}
有^あるべし、大賊^{ぞく}に値^あうて大毒^{だいどく}を宝珠^{ほうしゅ}に易^かゆと思^{おも}う可^べきか。

驚目員^{がもく}数の如^{ごと}く給^{たま}ひ候^{まう}い畢^{おわ}んぬ御志^{ごし}申^{こころざし}し送り難^{かた}く候^{まう}、法門^{ほうもん}

の事先度^{さへもん}四条三郎左衛門尉殿^{しやうじ}に書持^{しよじ}せしむ其^その書能^よく能^よく御覽^{ごらん}

有^ある可^べし、粗經文^{ほぼきやうもん}を勘^{かん}え見るに日蓮^{にちれん}・法華經^{ほけきやう}の行者^{ぎやうじや}為^なる事疑^{うたがい}

無きか但し今に天の加護を蒙らざるは一には諸天善神此の悪国を
去る故か、二には善神法味を味わざる故に威光勢力無きか、三
には大悪鬼三類の心中に入り梵天・帝釈も力及ばざるか等、二
の証文道理追て進せしむ可く候、但生涯本より思い切て候今に
翻返ること無く共の上又遺恨無し諸の悪人は又善知識なり、
摂受・折伏の二義仏説に依る、敢て私曲に非ず万事靈山浄土
を期す、恐恐謹言。

卯月十日

土木殿

日蓮 花押

文永十年七月 五十二歳御作ぶんえい

963P

鷺目二貫給侯がもくい畢そんぬ、太田殿と其れと二人の御心喜び侯、

伊与房は機量物いよぼうにて侯ぞ今年留め候きい畢おわんぬ、御勘氣ごかんきゆりぬ事・

御欺ごき侯べからず侯、当世・日本国子細とうせ之れ有る可あき由べ之これを存ぞず

定めて勘文かんもんの如ごとく侯べきか、設たい日蓮死生不定ふじような為いりと雖えも

妙法蓮華經の五字みようほうれんげきの流布ごじは疑うたがい無なき者か伝でんぎ教大師ようだいしは御本意ごほんいの

円宗えんしゅうを日本にほんに弘ひろめんとす、

但ただし定慧ていゑは存生ぞんしょうに之これを弘ひろめ円・或あるは死後しごに之これを顕あらわす事法な為なる

故ゆゑに一重大難だいな之れ有あるか、仏滅後ぶつめつ・二千二百二十余年今に

寿命品じゅうりようぽんの仏と肝要かんようの五字ごじとは流布るふせず、当時果報とうじかほうを論ろんずれば恐

らくは伝教でんぎよう・天台てんだいにも超こえ竜樹りゅうじゆ・天親てんじんにも勝すぐれたるか、文理ぶんり

無くないんば大慢だいまん豈あに之に過あやんや、章安大師たうあん・天台てんだいを褒ほめて云いく「天竺てんじく

大論だいろん尚なお其その類たぐいに非あらず震旦しんたんの人師にんし何なんぞ勞わづらしく語かるに及およばん此これ

誇耀こやうに非あらず法相ほつそうの然しからしむるのみ」等云云、日蓮にちれん又復また是かくの如ごとし

竜樹りゆうじゆ・天親てんじん等尚なお其その類たぐいに非あらず等云云、此これ誇耀こやうに非あらず法相ほつそうの

然しからしむるのみ、故ゆゑに天台大師てんだいだいし日蓮にちれんを指しして云いく「後ごの五百歳ひやくさい遠えん

く妙道みょうどうに結むすわん」等云云、伝でん教大師きやうだいし当世とうせいを恋こいて云いく「末法まつぽう太た

はだ近きんきに有あり」等云云、幸さいいなるかな我が身み「数数さくさく見けん擯ひん出ずい」の

文ぶんに當あたること悦よろこばしいかな悦よろこばしいかな、諸人しよにんの御返事ごへんじに之これを

申もうす故ゆゑに委細いさい、恐きよう恐きよう。

七月六日

にちれんかおう

日蓮花押

土木殿御返事
ごへんじ

◆ 一二八

ときどのごしよ
富木殿御書ぶんえい
文永十一年五十三歳御作

9 6 4 P

けかち申すばかりなし米一合もうらずがししぬべし、此の
御房たちも・みなかへして但一人侯べし、このよしを御房
たちにもかたりさせ給へ。

十二日さかわ十三日たけのした十四日くるまがへし十五日を・
をみや十六日なんぶ、十七日このところ・いまださだまらずとい
えども、たいしはこの山中・心中に叶いて侯へば・しばらくは
侯はんずらむ、結句は一人になりて日本国に流浪すべきみにて侯、
又たちとどまるみならば・けさんに入り侯べし、

きようきようきんげん
恐恐謹言。

十七日

にちれん
日蓮 在御判

ときどの

◆ 一一九 土木殿御返事ごへんじ

964P

仕候しこうなり。

褒美ほうびに非ず、実に器量きりょう者なり。来年正月大進阿闍梨と越中に之

を遣つかし去るべく候、白小袖一つ給ひ候ひ畢おわんぬ、今年日本にほん国一同

に飢渴の上、佐渡さどの国には七月七日已下いかそら天より忽ちに石灰虫と

申もうす虫と雨等にて一時いちじに稲穀損し。其の上疫病えきび処しよに遍満へんまんし、

方方死難かたがたなんなん脱れ難なんきか、事事紙上に尽し難なんく候、恐恐きようきよう謹言きんげん。

十一月三日 日蓮にちれん在御判

◆ 一三〇 法華ほつけ行者逢難ぎやなん事

文永ぶんえい十一年正月 五十三歳御作与富木常忍ときじょうにん

965P

河野辺殿等中

やまとあじやりごぼうおんちゆう

大和阿闍梨御房御中

いっさい

一切我弟子等中

さえもんのじよう

三郎左衛門尉殿

きんじよう

謹上

にちれん
日蓮

ときどの
富木殿

追て申す、もう竜樹・天親りゆうじゆ てんじんは共に千部の論師ろんしなり、但ごんだいじよう権大乘を

申のべて法華經ほけきようをば心に存して口に吐きたまわず此に口、天台・伝教てんだい でんぎよう

は之これを宣のべべて本門ほんもんの本尊ほんぞんと四菩薩ほさつと戒壇かいだんと南無妙法蓮華經なむ みようほうれんげきようの

五字ごじと之これを残したもう、所詮しよせん一には仏・授与じゆよしたまわざるが故ゆえに、

二には時機じき未熟の故なり、今既すでに時来れり四菩薩出現ほさつししゆつげんしたまわ

んか日蓮にちれん此の事先これず之を知りぬ、西王母せいおうぼの先相せんそうには青鳥せいちよう・客人

の来相にはかんじやくこれ☆鵲はなつ是なり、各各・我が弟子でしたらん者は深く此の

由よしを存ぜよたといしんみよう設たい身命しんみよに及ぶとも退転たいてんすること莫なかれ。

富木・三郎左衛門の尉・河野辺・大和阿闍梨等・殿原・御房達ごぼう

各各互たがいに読聞けまいらせさせ給たまえ、かかる濁世じよくせには互たがいにつねに・

いるあわせてひまもなく後世ごしようねがわせ給たまい候そうらへ。

法華經ほけきようの第四いわに云く「如来にょらいの現在げんざいすら猶なお怨嫉おんしつ多し況や滅度めつとの後

をや」等云云、同第五いわに云く「一切世間いっさいせけん怨多あだおほくして信がたじ難がたし」等

云云、涅槃經ねはんぎようの三十八いわに云く「爾その時に外道げどうに無量むりようの人有り○心

瞋しん恚にを生ず」等云云、又云く「爾その時に多く無量むりようの外道げどう有り和合わごう

して共に摩伽陀あじやせの王・阿闍世あじやせの前に往ゆきぬ○今は唯一ただ大惡人あくにん有り

瞿曇沙門くどんしゃもんなり王未いまだ檢校けんぎようせず我等われらは甚おだ畏おそる、一切世間いっさいせけんの惡人あくにん

利養りようの為ゆえの故そに其の所に往集けんそくして眷属なと為ないる乃至迦葉かしよう・舍利弗しゃりほつ・

もっけんれん

目☆連

によらいげんざいゆたおんしつ

等云云如来現在猶多怨嫉の心是なり、得一大徳天台智者

だいとくてんだいちしや

だいし
のし

大師を罵りして曰く「智公汝は是れ誰が弟子ぞ三寸に足らざる

ちこうなんじ

でし
さんずん

舌根を以て覆面舌の所説の教時を謗ず、又云く「豈是れ

ぜっこん

ふめんぜつ
しよせつ

ほう

いわ

あにこ

てんきよう

の
あら

人に不ずや」等云云、南都・七大寺の高徳等・護命僧都・景信

なんと
こうとく

ごみようそうず

かげのぶ

りっし

律師等三百余人・伝

でんぎようだいし

ののし

いわ

「西夏に鬼弁婆羅門

ばらもん

有り東土に巧言を吐く禿頭沙門あり此れ乃ち物類冥

とうと
ぎようげん

とくずしやもん

こ

すなわもつるいみようしやう

召して

せけん
おおわく

世間を誑惑す」等云云、秀句に云く「浅きは易く深きは難しとは

しゅうく
いわ

「浅きは易く深きは難しとは

やす
がた

釈迦の所判なり浅きを去つて深きに就くは丈夫の心なり、

しゃか
しよはん

天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の

てんだいだいし
しゃか

しんじゆん

ほつけしゆう

しんたん
ふよう

えいざん

一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」云云。

てんだい
そうじよう

ほつけしゆう

にほん

くつう

云云。

そ
ざいせ

夫れ在世と滅後と正像二千年の間に法華經の行者・唯三人有

めつこ
しやうぞう

ほけきよう

ぎようじゃ

ただ

り所謂仏と天台・伝教となり、真言宗の善無畏・不空等・

いわゆる

てんだい

でんぎよう

真言宗の善無畏・不空等・

しんごんしゆう

ぜんむい

ふくう

不空等・

けこんしゅう 華嚴宗の杜順・智儼等・三論・法相等の人師等は実經の文を
え 会して権の義に順ぜしむる人人なり、竜樹・天親等の論師は内
かんが に鑒みて外に發せざる論師なり、經の如く宣伝すること正法の
しえ 四依も天台・伝教には如かず、而るに仏記の如くんば末法に入
ほけきよう つて法華經の行者有る可し其の時の大難・在世に超過せんと云
くおう 云、仏に九横の大難有り所謂孫陀利の謗と金鏑と馬麦と琉璃の釈
こつじきくうはつ を殺すと乞食空鉢と旃遮女の誘と調達が山を謗すと寒風に衣を
もと 索むるとなり、其の上一切外道の讒奏上に引くが如し記文の
てんだい 如くんば天台・伝教も仏記に及ばず。

これ 之を以て之を案ずるに末法の始に仏説の如く行者世に出現せ
しか んか、而るに文永十年十二月七日・武蔵の前司殿より佐土の国へ
いわ 下す状に云く自判之在り。

佐渡さどの国の流人の僧日蓮にちれん弟子等でしを引率いんそつし悪行あくぎょうを巧むたくらの由そ其の

聞え有りしよぎよう所行くわだの企てはなはだ甚だ以て奇怪きかいなり今より以後いご・彼僧に相

随したがわわん輩やからに於ては炳誠おひを加えしむ可べし、猶なお以て違犯いはんせしめば

交名ちゆうしんを注進ちゆうしんせらる可べきの由の所に候なり、何て執達しつたつくだん件の如ごとし。

文永十年十二月七日

沙門しゃもん觀惠かんえ

上たてまつる

依智六郎えち左衛門尉等云云。

此の状いわに云く悪行あくぎょうを巧むたくら等云云、外道げどうが云く瞿曇くどんは悪人あくにんなり

等云云、又九横くおうの難なん一一に之在り、所謂琉璃殺釈いわゆるるりさつしやくと乞食こつじきくう鉢はつと

寒風索衣さくいとは仏世ちようかに超過だいにんせる大難だいなんなり、恐くは天台てんだい・伝教でんぎようも

未だ此の難なんに値あいたまわず当まさに知るべし三人に日蓮にちれんを入れ四人と

為して法華經ほけきようの行者ぎようじや・末法まつぽうに有るか、喜よろこばしい哉かなきようめつとこ況滅度後きもんの記文

に当れり悲い哉かな国中の諸人阿鼻獄に入らんこと茂しげきを厭いとうて之これを

子細しさいに記さず心を以て之これを推すいせよ。

文永十一年甲戌きのえいぬ正月十四日日蓮花押

一切いっさいの諸人しよにん之を見聞けんもんし志こころざし有らん人人は互ひとびとに之たがいこれを語ことばれ。

◆一三一 富木殿御返事ときどのごへんじ 文永十二年五十四歳御作 968P

富木殿御返事

日蓮にちれん

帷かたびら一領給ひ候い畢おわんぬ、夫それ仏弟子ぶつでしの中・比丘びく一人はんべり、

飢饉ききんの世に仏おんときの御時事ごんじかけて候そうらいければ比丘袈裟びくけさをうて其そのあた

いを仏たてまつに奉る、仏其その由来ゆらいを問たい給まいいければ・しかじかとありの

ままに申もうしけり、仏云いわく「袈裟けさはこれ三世さんぜの諸仏しよぶつ・解脱げだつの法衣ほうえな

り、このあたひをば我報わうじがたし」と辞退ししまししかば此この

比丘びくもう申もうすは「この袈裟けさあたひをば・いかんがせん」と申もうしければ、

仏の云く「汝悲母有りや不^{いな}や」答えて云く「有り」仏云く「此^いの袈裟^{けさ}をば汝母^{なんじ}に供養^{くよう}すべし」此の比丘・仏に云く「仏は此^これ^{さん}が^{がい}三界^{さんがい}の中第一^{だいいち}の特尊^{いつさいしゅじよう}なり一切衆生の眼目^{がんもく}にてをはす、設^{たと}い^い十^{じゅ}方^{ぽう}世界^{せかい}を覆^{おお}う衣^いなりとも大地^{だいち}にしく袈裟^{けさ}なりとも能^よく報^{ほう}じ給^{たま}うべし、我が位^{むち}は無智^{むち}なる事牛のごとし羊よりもはかなしいかでか袈裟^{けさ}の信施^{しんせ}をほうぜん」と云云、仏返して告^{いわ}げて云く「汝^{なんじ}が身をば誰か生^{なんじ}みしぞや汝が母これを生^{なんじ}む此の袈裟^{けさ}の恩報^{おんほう}じぬべし」等云云、此^これは又^{よわい}齡^{れい}九旬^{きゅうじゆん}にいたれる悲母^{ひも}の愛子^{あいし}に・これをまいらせ^{たま}さ給^{たま}える我^{りようげん}と兩眼^{りやうげん}を誕^{しんみよう}り身命^{しんみよう}を尽^{ことごと}くせり、我が子の身として此^{かたびら}のか帷^{かたびら}の恩^{おん}かたしと・をばして・つかわせるか日蓮^{にちれん}又^{また}はうじがたし、しかれども又返^{かたびら}すべきにあらず此の帷^{かたびら}をきて日天^{にってん}の御前^{おんまえ}にして此の子細^{しさい}を申^{もう}し上げば定めて釈梵^{しやくぼん}諸天^{しよてん}しろしめすべ

し、帷かたばらは一なれども十方じゅうぽうの諸天しよてん此これをしり給たまうべし、露つゆを大海たいかいによせ土どを大地だいちに加くるがごとし生生しんじに失うせじ世世せせにくちざらむかし、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

二月五日

日蓮花押かおう

◆一三二 富木殿御書ときどのごしよ

建治元年五十四歳御作がんねん

969P

与富木常忍ときじょうにん

妙法蓮華經みょうほうれんげきようの第二だいじに云いく「若もし人信しんぜずして此この經きやうを毀謗きぼうし

經きやうを讀誦どくじゆし書持しよじすること有あらん者しやを見て輕賤きやうせん憎嫉そうしつして結恨けつこんを

懷いだかん其人ごにん命終みんしやうして阿鼻獄あびごくに入いらん乃至ないし是かくの如ごとく展轉てんでんして

無數劫むしゆこに至いたらん」第七だいしちに云いく「千劫阿鼻獄せんこに於おいてす」第三だいさんに云いく

「三千塵点さんぜんじんてん」第六だいりくに云いく「五百塵点劫ごひやくじんてんこ」等云云い、涅槃經ねはんきやうに云いく「惡象あくぞう

の為ために殺ころされては三惡さんあくに至いたらず惡友あくゆうの為ために殺ころされては必ず三惡さんあく

いた
至る「等云云、賢慧菩薩の法性論に云く「愚にして正法を信

ぜず邪見及び☆慢なるは過去の謗法の障りなり不了義に勒着し

て供養恭敬に著し唯邪法を見て善知識に遠離して謗法者の

小乗の法に樂著する是の如き等の衆生に親近して大乘を信

ぜず故に諸仏の法を謗ず、智者は怨家・蛇・火毒・因陀羅・霹靂

・刀杖諸の惡獸・虎狼・師子等を畏るべからず、彼は但能く命

を断じて人をして畏るべき阿鼻獄に入らしむること能わず、畏る

べきは深法を謗ずると及び謗法の知識となり決定して人をして

畏るべき阿鼻獄に入らしむ、惡知識に近づきて惡心にして仏の血

を出だし及び父母を殺害し諸の聖人の命を断じ和合僧を破壊し

及び諸の善根を断ずると雖も念を正法に繋ぐるを以て能く彼の

処を解脱せん、若し復余人有つて甚深の法を誹謗せば彼の

無量劫にも解脱を得べからず、若し人衆生をして是の如きの法を覚信せしめば彼は是我が父母亦是れ善知識なり、彼の人は是智者なり如来の滅後に邪見顛倒を廻して正道に入らしむるを以ての故に三宝清淨の信・菩提功德の業なり」等云云、竜樹菩薩の菩提資糧論に云く「五無間の業を説きたもう乃至許し未解の深法に於て執着を起せるは○彼の前の五無間等の罪緊に之を比するに百分にしても及ばず」云云。

未れ賢人は安きに居て危きを欺き佞人は危きに居て安きを欺く大火は小水を畏怖し大樹は小鳥に値いて枝を折らる智人は恐怖すべし大乘を謗する故に、天親菩薩は舌を切らんと云い馬鳴菩薩は頭を刎ねんと願ひ吉蔵大師は身を肉橋と為し玄奥三蔵は此れを靈地に占ひ不空三蔵は疑いを天竺に決し伝教大師は此れを

異域に求む皆上に挙ぐる所は經論を守護する故か。

今・日本国の八宗並びに浄土・禪宗等の四衆上主上・上皇よ

り下臣下万民に至るまで皆一人も無く弘法・慈覚・智証の三大師

の末孫・檀越なり、円仁・慈覚大師云く「故に彼と異り」円珍・

智証大師云く「華嚴・法華を大日經に望むれば戲論と為す」

空海弘法大師云く「後に望むれば戲論と為す」等と云云、此の三

大師の意は法華經は已・今・当の譜經の中の第一なり然りと雖も

大日經に相對すれば戲論の法なり等云云、此の義心有らん人信

を取る可きや不や。

今・日本国の諸人・惡象・惡馬・惡牛・惡狗・毒蛇・惡刺・

懸岸・險崖・暴水・惡人・惡国・惡城・惡舍・惡妻・惡子・惡

所従等よりも此に超過し以て恐怖すべきこと百千万億倍なれば

持戒・邪見の高僧等なり、問うて云く上に挙ぐる所の三大師を
謗法と疑うか叡山第二の円澄寂光大師・別当光定大師・安慧
大楽大師・慧亮和尚・安然和尚・浄観僧都・檀那僧・正・慧心
先徳・此等の数百人、弘法の御弟子実慧・真済・真雅等の数百人
並びに八宗・十宗等の大師先徳・日と日と・月と月と・星と星
と・並びに出でたるが如し、既に四百余年を経歴するに此等の
人人・一人として此の義を疑わず汝何なる智を以て之を難ず
や云云。

此等の意を以て之を案ずるに我が門家は夜は眠りを断ち昼は暇
を止めて之を案ぜよ一生空しく過して万歳悔ゆること勿れ、
恐恐謹言。

八月二十三日

にちれんかおう
日蓮花押

ときどの
富木殿

がもくひとゆい
鷺目一結給ひ候畢んぬ、
おわ
志 有らん諸人は一処に踏集して御
ちようもんあ
聴聞有るべきか。

◆一三三 御衣並単衣御書

建治元年

五十四歳御作

971P

なら
御衣の布並びに御単衣給ひ候い畢んぬ鮮白比丘尼と申せし人
たまい
は生れさせ給いて御衣をたてまつりたりけり、生長するほどに
しだい
次第にこの衣大になりけり、後に尼とならせ給いければ法衣とな
ほけきよう
りにけり、ついに法華經の座にして記☆をさづかる一切衆生
きけんによらい
喜見如来これなり、又法華經を説く人は柔和忍辱衣と申して必ず
ほけきよう
衣あるべし、物たねと申すもの一なれども植えぬれば多くとなり
もう
竜は小水を多雨となし人は小火を大火となす、衣かたびらは一な
だいか

れども法華經にまいらせ給いぬれば法華經の文字は六万九千三百
八十四字・一字は一仏なり、此の仏は再生敗種を心符とし
顕本遠寿を其の寿とし常住 仏性を咽喉とし一乗妙行を眼目
とせる仏なり、応化非真仏と申して三十二相・八十種好の仏より
も法華經の文字こそ真の仏にては・わたらせ給いて仏在世に仏を
信ぜし人は仏にならざる人もあり、仏の滅後に法華經を信ずる人
は無一不成仏如来の金言なり、この衣をつくりてかたびらをき
そえて法華經をよみて候わば日蓮は無戒の比丘なり法華經は
正直の金言なり、毒蛇の珠をはき伊蘭の梅檀をいだすがごとし、
恐恐 謹言。

九月二十八日御返事日蓮 花押

◆ 一三四

観心本尊得意抄 かんじんほんぞんといししょう

建治元年十一月 五十四歳御作 がんねん

972P

鷺目一貫文厚綿の白小袖一つ筆十管墨五丁給ひ畢んぬ。がもく

身延山は知食如く冬は嵐はげしくふり積む雪は消えず極寒の

ところ

処にて候間昼夜の行法もはだうすにては堪え難く辛苦にて候に

此の小袖を著ては思い有る可からず候なり、商那和修は付法蔵の

第三の聖人なり、此の因位を仏説いて云く「乃往過去に病の比丘

に衣を与うる故に生生世世に不思議自在の衣を得たり」、今の御

小袖は彼に似たり此の功德は日蓮は之を知る可からず併ながら

釈迦仏に任せ奉り畢んぬ。しゃかぶつ まか たてまつおわ

抑も今の御状に云く教信の御房 観心本尊抄の未得等の文字 いわ ごほう かんじんのほんぞんししょう もんじ

に付て迹門をよまじと疑心の候なる事不相伝の僻見にて候 しやくもん うたがい そうでん びやつけん

か、去る文永年中に此の書の相伝は整足して貴辺に奉り候しが、其の通りを以て御教訓有る可く候、所詮・在在処処に迹門を捨てよと書きて候事は今・我等が読む所の迹門にては候はず、叡山天台宗の過時の迹を破し候なり、設い天台・伝教の如く法のままありとも今末法に至ては去年の暦の如し何に況や慈覚自り已来大小・権実に迷いて大謗法に同じきをや、然る間像法の時の利益も之無し増して末法に於けるをや。

一 北方の能化難じて云く爾前の経をば未顕真実と捨て乍ら安国論には爾前の経を引き文証とする事自語相違と不審の事前前申せし如し、総じて一代聖教を大に分つて二と為す一には大綱二には綱目なり、初の大綱とは成仏得道の教なり、成仏の教とは法華経なり、次に綱目とは法華已前の諸経なり、彼の

諸經等は不成仏の教なり、成仏得道の文言之を説くと雖も但
名字のみ有て其の実義は法華に之有り、伝教大師の決権実論に
云く「権智の所作は唯名のみ有て実義有ること無し」云云、但し
権教に於ても成仏得道の外は説相空しかる可からず法華の為の
網目なるが故に、所詮成仏の大綱を法華に之を説き其の余の網
目は衆典に之を明す、法華の為の網目なるが故に法華の証文に
之を引き用ゆ可きなり、其の上法華經にて実義有る可きを爾前の
經にして名字計りのしる事全く法華の為なり、然る間尤も法華
の証文となるべし。

問う法華を大綱とする証如何、答う天台は当に知るべし此の經
は唯如來說教の大綱を論じて網目を委細にせざるなりと、問う
爾前を網目とする証如何、答う妙樂の云く「皮膚毛綵衆典に出

在せり」云云、問う成仏じょうぶつは法華ほっけに限ると云う証如何いかにん、答う經に
云く「唯一乘ただいちじょうの法のみ有て二も無く亦また三も無し」文問う爾前にぜんは
法華ほっけの為との証如何いかにん答う經に云く「種種しゅじゅの道を示すと雖もいえど 仏乘ぶつじょう
の為なり」委細いさい申し度たく候と雖も心地違例いえど しんじして候程に省略せしめ
候、恐恐きょうきょう謹言きんげん。

十一月二十三日

日蓮花押にちれんかおう

富木殿御返事ときどのごへんじ

帥殿そつどのの物語ものがたりりしは下総しもふさに目連樹もくれんと云う木の候よし申し候し、

其その木きの根ねをほりて十兩ばかり兩方の切目きりめには焼金やきがねを宛てて紙に
あつくつつみて風ひかぬ様にこしらへて大夫次郎たゆうが便宜びんぎに給たまひ候
べきよし御伝えあるべく候。

◆ 一三五

しょうにん ちさんぜじ
聖人知三世事

建治元年 がんねん 五十四歳御作 与富木常忍 ときじょうにん

974P

しょうにん とう 聖人と申すは委細に三世を知るを聖人と云う、儒家の

さんこう・ごていなら

三皇・五帝並びに三聖は仏説在を知つて過・末を知らず外道は

かこはちまん

みらいはちまん

いちぶん

しょうにん

しょうじょう

にじょう

過去八万・未来八万を知る一分の聖人なり、小乗の二乗は

かこ

みらい

いんが

げどう

すぐ

しょうにん

しょうじょう

しょうじょう

過去・未来の因果を知る外道に勝れたる聖人なり、小乗の

ぼさつ

かこ

ぼさつ

つうきよう

ぼさつ

かこ

どうゆじんこう

きようりやく

菩薩は過去三僧祇菩薩、通教の菩薩は過去に動踰塵劫を經歷

せり、

べつきよう

ぼさつ

は一一の位の中に多俱低劫の過去を知る、

法華經のの迹門は過去の三千塵点劫を演説す一代超過是なり、

ほけきよう

しゃくもん

かこ

さんぜんじんてんこう

えんぜつ

いちだいちようかこれ

本門は五百塵点劫・過去遠遠劫をも之を演説し又未来無數劫の事

ほんもん

ごひやくじんでんこう

かこおんのんこう

これ

えんぜつ

みらいむしゅこう

をも宣伝し、之に依つて之を案ずるに委く過未を知るは聖人の

せんてん

よ

これ

くわし

しょうにん

本なり、教主釈尊既に近くは去つて後三月の涅槃之を知り遠く

きようしゅしゃくそんすで

ごさん

これ

これ

は後・五百歳・広宣布疑こうせんるふうたがいい無き者か、若し爾もれば近きを以て遠きを推し現おげんを以て当を知る如是相によぜそうないしほんまつつきよう乃至本末究竟等これ是なり。

後・五百歳には誰人だれびとを以て法華經の行者ほけきようと之を知る可べきや予

は未いまだ我が智慧ちえを信ぜず然しかりと雖も自他の返逆いえど・伝道之ほんぎやくを以て

我が智こを信ほけきようず敢ぎようじゃて他人たにんの為ために非あらず又我が弟子等でし之これを存知にちれんせよ日蓮

は是これ法華經ほけきようの行者ぎようじゃなり不輕ふぎようの跡あとを紹しょうけい繼しうけいするの故ゆえに輕毀きようきする人

は頭こうべ七分に破・信こうべずる者は福を安あんみよう明あきらに積いまん、問いうて云なんく何なんぞ

汝なんじを毀そしる人頭こうべ破そし七分無いきや、答いえて云いく古昔しやうにんの聖人しやうにんは仏しやうにんを除そし

いて已外いげ之これを毀そしる人・頭破こうべ但一人・二人いなり今日蓮いまにちれんを毀みな皆みなする事

は非一人・二人べかに限にほんる可べからず日本一國・一同いに同じく破やぶるな

り、所謂正嘉いの大地震い・文永ぶんえいの長星ばんみんは誰いたか故これぞ日蓮にちれんは一閻浮提えんぶだい

第一だいいちの聖人しやうにんなり、上一人かみいちにんより下万民ばんみんに至いたるまで之これを輕毀きようきして

とうじょう 刀杖を加え流罪に処するが故に梵と釈と日月・四天と隣国に
おほ 仰せ付けて之を逼責するなり、大集経に云く・仁王経に云く・
ねはんぎよう 涅槃經に云く・法華經に云く・設い万祈を作すとも日蓮を用いず
これ 之を見よ此れ偏に日蓮が貴尊なるに非ず法華經の御力の殊勝な
るに依るなり、身を挙げれば慢ずと想い身を下せば經を頗る松高
ければ藤長く源深ければ流れ遠し、幸なるかな楽しいかな穢土に
おい 於て喜樂を受くるは但日蓮一人なる而已。

◆一三六 富木尼御前御返事

建治二年 五十五歳御作

975p

がもく 鷲目一貫並びにつつひとつ給い候い了んぬ・やのはしる事は弓
のちから・くものゆくことはりうのちから、をとこ

おんちから

のしわざはめのちからなり、いまときどののこれへ御わたりある
事尼ごぜんの御力なり、けぶりをみれば火をみるあめをみれば
りうをみる、をとこをみればめをみる、今ときどのにけさんつか
まつれば尼ごぜんをみたてまつると・をぼう、ときどのの御物が
たり候はこのは・わのなげきのなかにりんずうのよくをはせしと
尼がよくあたりかんびやうせし事のうれしさ・いつのよにわする
べしともをばえずと・よろこばれ候なり、なによりも・をぼつか
なき事は御所勞なり、かまえてさもと三年はじめのごとくに・き
うじせさせ給へ、病なき人も無常まぬかれがたし但しとしのはて
にはあらず、法華經の行者なり非業の死にはあるべからずよも
業病にては候はじ、設い業病なりとも法華經の御力たのもし、

あじゃせ

ほけきよう

たとい

ほけきよう

おんちから

ちんしん

阿闍世王は法華經を持ちて四十年の命をのべ陳臣は十五年の命を

のべたり、尼^{ほけきやう}ごぜん又法華經^{ぎやうじや}の行者^{しんじん}なり御信心^{しんじん}月のまさるがごとく・しをのみつがごとし、いかでか病も失せ寿ものびざるべきと強盛にをぼしめし身を持し心に物をなげかざれ、なげき出^{いで}来る時はゆきつしまの事・だざひふの事・かま^{ひと}くらの人人^{ひと}の天の樂・のごとにありしが、当時^{とうじ}つくしへむかへばとどまる・めこゆくを
とこ、はなるときはかわをはぐがごとく

かをと・かをとをとりあわせ目と目とをあわせてなげきしが、次第^{しだい}にはなれてゆいのはま・いなぶらこしごえさかわはこねさか一日・二日すぐるほどに、あゆみあゆみ・とをさかる・あゆみをかわも山もへだて雲もへだつれば・うちそうものはなみだなり・ともなうものはなげきなり、いかにかなしかるらむ・かくなげか
んほどに・もうこのつわものせめきたらば山か海もいけとりか・

ふねの内か・かうらいかにて・うきめにあはん、これ・ひとへに
とが にほんこく 失もなくして日本国の一切衆生の父母となる法華經の行者日蓮を
ある ある ゆへもなく・或はのり・或は打ち・或はこうじをわたし、ものに
くるいしが十羅刹のせめをかほりてなれる事なり、又又これより
せんまん 百千万億倍たへがたき事どもいで来るべし、不思議を目の前に御
らんあるぞかし、我れ等は仏に疑 うたがい いなしと・をぼせば・なにの
なげきか有るべき、きさきになりても・なにかせん天に生れても
・ようしなし、竜女 りゅうによ があとをつぎ摩訶波舍波提比丘尼のれちに
つらなるべし、あらうれし・あらうれし、南無妙法蓮華經・
なむ なむ 妙法蓮華經と唱 とな えさせ給へ、
きようきようきんげん 恐恐謹言。

三月二十七日日蓮 にちれん 花押尼ごせんへ かおう

◆一三七 忘持經事

建治二年 五十五歲御作

与富木常忍

976p

忘^{たま}れ給^{たま}う所の御持經^{じきよう}追^して修^{しゅう}行者^{ぎやう}に持^もたせ之^{これ}を遣^{つか}わす。

魯^ろの哀公^{あいこう}云^いく人^{ひと}好^{すなわ}く忘^わる者^{もの}有^あり移^{うつ}宅^{たく}に乃^{すなわ}ち其^{その}妻^{つま}を忘^われたり云^い

云^い、孔子^{こうし}云^いく又^{また}好^{すなわ}く忘^わるること此^これより甚^{はなはだ}しき者^{もの}有^あり桀^{けつ}紂^{ちゆう}の

君^{きみ}は乃^{すなわ}ち其^{その}身^みを忘^われたり等^{そう}云^い、夫^それ桀^{はんとく}特^{とく}尊^{そん}者^{じゃ}は名^なを忘^わる此^これ

閻^{えん}浮^ぶ第一^{だいいち}の好^{すなわ}く忘^わる者^{もの}なり今^{いま}常^{じょう}忍^{にん}上人^{じやうにん}は持^{じき}經^{よう}を忘^わる日^に本^{ほん}第一^{だいいち}

の好^{すなわ}く忘^わるるの仁^にか、大^{だい}通^{つう}結^け縁^{えん}の輩^{やから}は衣^え珠^{じゆ}を忘^われ三^{さん}千^{ぜん}塵^{ちん}劫^{けつ}を

經^へて貧^{ひん}路^ろに踟^{ちちゆう}☆^し久^く遠^{おん}下^げ種^{しゆ}の人^{ひと}は良^り葉^{よう}を忘^われ五^ご百^{ひゃく}塵^{ちん}点^{てん}を送^{おく}りて

三^{さん}途^との嶮^{けん}地^じに顛^{てん}倒^{とう}せり、今^{いま}真^{しん}言^{ごん}宗^{しゆう}・念^{ねん}仏^{ぶつ}宗^{しゆう}・禪^{ぜん}宗^{しゆう}・律^{りつ}宗^{しゆう}等^{とう}の

学^{がく}者^{しや}等^{とう}は仏^{ぶつ}陀^だの本^{ほん}意^いを忘^わ失^{しつ}し未^み来^{らい}無^む数^{しゆ}劫^{けつ}を經^き歴^{りやく}して阿^あ鼻^びの火^か坑^{きやう}

に沈^{ちん}淪^{りん}せん、此^これより第一^{だいいち}の好^{すなわ}く忘^わるる者^{もの}あり所^い謂^わ今^{いま}の世^よの

てんだいしゅう がくしゃ 天台宗の学者等と持経者等との日蓮を誹謗し念仏者等を扶助する是れなり、親に背いて敵に付き刀を持ちて自を破る此等は且く之を置く。

夫れ常啼菩薩は東に向つて般若を求め善財童子は南に向いて華嚴を得る雪山の小児は半偈に身を投げ樂法梵志は一偈に皮を剥ぐ、此等は皆上聖大人なり其の迹を☆うるに地・住に居し其の本を尋ぬれば等妙なるのみ・身は八熱に入つて火坑三昧を得・心は八寒に入つて清涼三昧を証し身心共に苦無し、譬えは矢を放つて虚空を射・石を握つて水に投ずるが如し。

今常忍貴辺は末代の愚者にして見思未断の凡夫なり、身は俗に非ず道に非ず禿居士心は善に非ず惡に非ず羝羊のみ、然りと雖も一人の悲母・堂に有り朝に出で主君に詣で夕に入て私宅に

返り営む所は悲母の爲め存する所は孝心のみ、而るに去月下旬の
比・生死の理を示さんが爲に黄泉の道に趣く此に貴辺と歎いて
言く齡既に九旬に及び子を留めて親の去ること次第たりと雖も
倩事の心を案ずるに去つて後來る可からず何れの月日をか期せん
二母国に無し今より後誰をか拝す可き、離別忍び難きの間・舍利
を頸に懸け足に任せて大道に出で下州より甲州に至る其の中間
往復千里に及ぶ国・皆飢饉し山野に盜賊充滿し宿宿糧米乏少
なり我身羸弱・所従亡きが若く牛馬合期せず峨峨たる大山重重
として漫漫たる大河多多なり高山に登れば頭を天に☆ち幽谷へ
下れば足雲を踏む鳥に非れば渡り難く鹿に非れば越え難し眼眩き
足冷ゆ、羅什三蔵の葱嶺・役の優婆塞の大峰も只今なりと云云、
然る後深洞に尋ね入りて一菴室を見る法華読誦の音・青天に響

いちじょう

き一乗談義の言山中に聞ゆ、案内を触れて室に入り教主釈尊

ほうぜん

の御宝前に母の骨を安置し五躰を地に投げ合掌して両眼を開き

あんち

がっしょう

りょうげん

尊容を拝し歡喜身に余り心の苦み忽ち息む、我が頭は父母の頭

たちまや

こうべ

ふぼ

こうべ

・我が足は父母の足・我が十指は父母の十指・我が口は父母の口

ふぼ

ふぼ

ふぼ

なり、譬えば種子と菓子と身と影との如し教主釈尊の成道は

こと

きょうしゅしやくそん

じょうどう

浄飯・摩耶の得道・吉占師子・青提女・目☆尊者は同時の

じょうばん

まや

とくどう

きっせんし

しょうだいによ

もっけんそんじゃ

どうじ

成仏なり、是の如く観ずる時・無始の業障忽ちに消え心性の

じょうぶつ

かくのこと

むし

ごうしやうたちま

しんしよ

しんしよ

妙蓮忽ちに開き給うか然して後に随分仏事を為し事故無く還り

みょうれんたちま

たま

しか

ずいぶんぶつじ

な

なく

かえ

給う云云、恐恐謹言。

たま

きょうきやうきんげん

富木入道殿

にぎみりどう

◆一三八 富木殿御返事

ときどのごへんじ

建治二年十万五十五歳御作

978p

鷺目一結天台大師の御宝前を莊嚴し候い了んぬ、経に云く

がもくひとゆいてんだいだいし

ほうぜん

そうこん

そうら

おわ

いわ

「法華最第一なり」と、又云く「能く是の經典を受持すること

有らん者も亦復是の如し一切衆生の中に於て亦これ第一なり」

と、又云く「其の福復彼れに過ぐ」妙樂云く「若し悩乱する者

は頭七分に破れ供養すること有らん者は福十号に過ぐ」伝教

大師も「讃者は福を安明に積み謗者は罪を無間に開く」等云云、

記の十に云く「方便の極位に居る菩薩猶尚第五十人に及ばず」等

云云、華嚴經の法慧功德林大日經の金剛薩捶等尚法華經の博地

に及ばず何に況や其の宗の元祖等法蔵善無畏等に於てをや、是れ

は且く之を置く、尼ごぜんの御所勞の御事我身一身の上とをもひ

候へば昼夜に天に申し候なり、此の尼ごぜんは法華經の行者を

やしなう事灯に油をそへ木の根に土をかさぬるがごとし、願くは

日月天共の命にかわり給へと申し候なり、又をもいわする事も

やと・いよ房ぼうに申しつけて供そ、たのもしと・をぼしめせ、
きょうきよう
恐恐。

十一月二十九日

日蓮花押

富木殿御返事
ときどのごへんじ

◆一三九 道場神守護事
どうじょう しゅご

建治二年十二月

五十五歳御作

979p

驚目がもく五貫文たしか慥に送り給ひ候おわんい了ぬ、且つ知食しろしめすが如ごとく此の所は
里中を離れたる深山みやまなり衣食いしょく乏少の間どつきよう読経の声こゑ続き難かたく談義の
勤つとめ廃しつ可べし、此の託宣たくせんは十羅刹じゅうらせつの御計ごけいにて檀那だんなの功こうを致いたさし
むるか、止観しかんの第八はちに云いく「帝釈堂たいしやくの小鬼敬やうい避くるが如ごとし
道場どうじょうの神大なれば妄みだりに侵しん☆すること無し、又城の主た剛ければ
守る者も強し城の主・剛たければ守る者忙る、心は是これ身の主なり

同名同生の天こよ是れ能く人を守護しゅごす心固ければ則ち強し身の神な尚お
爾しかなり況や道場どうじょうの神をや」弘決くけつの第八いわに云く「常に人を護まもると
雖も必ず心の固きに仮かりて神の守り則ち強し」又云く「身の兩肩
の神な尚お常に人を護まもる況や道場どうじょうの神をや」云云、人所生しよしよの時より
二神守護しゅごす所謂いわゆる同生天同名天是を俱生神くしやうしんと云う華嚴經の文なり、
文句もんくの四に云く「賊南無仏そくなむと称しょうして尚天頭なうてんずを得たり況や賢者けんじや称せ
ば十方じゅうつぱうの尊神あえて敢て当らざらんや但精進しやうじんせよ懈怠けたいすること勿なかれ」
等云云、釈しゃくの意は月氏天がっしを崇あがめめて仏もちを用いざる国あり而しかに寺を
造つくり第六天だいろくてんの魔王まおうを主とす頭こうべは金を以てす大賊ぞく年来之これを盗まん
として得ず有時・仏前ぶつぜんに詣もつで物を盗んで法を聴く、仏説ほとけといいて
云く南無なむとは驚覺きやうかくの義也盗人之を聞いて南無なむ仏しやうと称しょうして天頭てんずを
得たり、之これを糾明きうめいする処ところ盗人上ぬすびとの如く之これを申す一國・皆天みなを捨

てて仏に歸せり云云、彼を以て之を推するに設い科有る者も三寶
を信ぜば大難を脱れんか、而るに今示し給える託宣の状は兼て
之を知る之を案ずるに難を卻て福の来る先兆ならんのみ、
妙法蓮華經の妙の一字は竜樹菩薩の大論に釈して云く「能く毒
を変じて藥と為す」と云云、天台大師の云く「今經に記を得る
即ち毒を変じて藥と為すなり」と云云、災来るとも變じて幸と
為らん何に況や十羅刹之を兼るをや、薪火を熾にし風・求羅を
益すとは是なり、言は紙上に尽し難し心を以て之を量れ、
謹言。 十二月十三日

御返事

日蓮 花押

◆一四〇 常忍抄 建治三年十月 五十六歳御作

980p

御文粗拝見仕り候い了んぬ。

御状に云く常忍の云く記の九に云く「権を稟けて界を出づるを
 名れて虚出と為す」云云、了性房云く全く以て其の釈無し云云、
 記の九に云く（寿量品の疏）「無有虚出より昔虚為実故に至るまでは（為の字）去声 権を
 稟けて界を出づるを名けて虚出と為す 三乗は皆三界を出でずと
 云うこと無し 人天は三途を出でんが為ならずと云うこと無し並に
 名けて虚と為す」云云、文句の九に云く「虚より出でて而も実に
 入らざる者有ること無し、故に知んぬ昔の虚は（去）声実の為の故なり」
 と云云、（じゅりようぼん）寿量品に云く「諸の善男子・如来諸の衆生 小法を楽（ねが）う
 とくは（とくは）つくじゆう 徳薄垢重の者を見て乃至以諸衆生乃至未會暫廢」云云、此の經の
 文を承けて、天台・妙楽は釈せしなり、此の經文は初成道の
（けこん）華嚴の別円より乃至法華經の迹門十四品を・或は（ある）小法と云い・
 或は徳薄垢重・或は虚出等と説ける經文なり、若し然らば

けごんきよう 華嚴經の華嚴宗・深密經の法相宗・般若經の三論宗・大日經
しんごんしゅう 眞言宗・觀經の淨土宗・楞伽經の禪宗等の諸經の諸宗
えきよう 依經の如く其の經を讀誦すとも三界を出でず三途を出でざる者
いかに 何に況や・或は彼を實と稱し・或は勝ぐる等云云、此の人
にんてん 人天に向つて唾を吐き地を☆んで忿を為す者か。

ほうもん 此の法門に於て如来滅後・月氏・一千五百余年・付法藏の二十
りゅうじゆ 四人・竜樹・天親等知つて未だ此れを顯さず、漢土一千余年の
いま 余人も未だ之を知らず但天台・妙樂等粗之を演ぶ、然りと雖も
いま 未だ其の實義を顯さざるか、伝教大師以て是くのこと
ほほこれ 粗之を勘うるに法華經の此の文を重ねて涅槃經に演べて云く
もし 若し三法に於て異の想を修する者は当に知るべし是の輩は
しょうじよう 清淨の三歸則ち依処無く所有の禁戒皆具足せず終に声聞・

縁覚・菩薩の果を証することを得ず」等云云、此の經文は

まさしく法華經の壽量品を顯說せるなり壽量品は木に譬え爾前・

迹門をば影に譬うる文なり、經文に又之有り、五時・八教・

當分・跨節・大小の益は影の如し本門の法門は木の如し云云、

又壽量品已前の在世の益は闇中の木の影なり過去に壽量品を聞

きし者の事なり等云云、又不信は謗法に非ずと申す事、又云く

不信の者地獄に墮ちずとの事、五の卷に云く「疑を生じて信ぜ

ざらん者は則ち當に惡道に墮つべし」云云。

総じて御心へ候へ法華經と爾前と引き向えて勝劣・淺深を伴

ずるに當分跨節の事に三つの様有り日蓮が法門は第三の法門な

り、世間に粗夢の如く一二をば申せども第三をば申さず候、第三

の法門は天台・妙樂・伝教も粗之を示せども未だ事了えず所詮

まっぼう 末法の今に譲り与えしなり、五百歳は是なり、但し此の法門の

御論談は余は承らず候彼は広学多聞の者なりはばかりはばかり

みたみたと候いしかば此の方のまけなんども申しつけられなば・

いかんがし候べき、但し彼の法師等が彼の釈を知り候はぬはさて

をき候いぬ、六十巻になしなんと申すは天のせめなり謗法の科の

法華經の御使に値うて顕れ候なり、又此の沙汰の事を定めてゆ

へありて出来せり・かしまの大田次郎兵衛大進房又本院主もい

かにとや申すぞよくよくきかせ給い候へ、此れ等は經文に子細

ある事なり、法華經の行者をば第六天の魔王の必ず障うべきに

て候、十境の中の魔境此れなり魔の習いは善を障えて悪を造らし

むるをば悦ぶ事に候、強いて悪を造らざる者をば力及ばずして善

を造らしむ又二乗の行をなす物をば・あながちに怨をなして善を

すすむるなり、又菩薩ぼさつの行をなす物をば遮さへぎつて二乗にじようの行をすすむ
是後じゆんえんに純円じゅうえんの行を一向いっこうになす者をば兼別等に墮だすなり止観しかんの八
等を御らむあるべし。又彼が云いわく止観しかんの行者ぎようじゃは持戒じかい等云云、
文句もんくの九には初二三の行者ぎようじゃの持戒じかいをば此これをせいす経文きやうもん又
分明ぶんみようなり、止観しかんに相違そういの事は妙楽みやうらくの問答もんどう之有これあり記の九を見る
べし、初随記に二有り利根りこんの行者ぎようじゃは持戒じかいを兼ねたり鈍根どんこんは持戒じかい
之これを制止せいしす、又正像末しょうぞうまつの不同ふどうもあり攝受しやうじゆしやくぶく折伏せつぷくの異あり伝教でんぎやう
大師だいしの市の虎の事思しい合あわすべし。

此これより後は下総しもふさにては御法門候ほうもんべからず了性思念りやうしやうしゆんをつめつる
上たにんは他人たにんと御論候ごろんわばかりてあさくなりなん、彼の了性りやうしやうと思念しゆん
とは年来としころ・日蓮にちれんをそしるとうけ給たまわる、彼等かれら程ちやうどの蚊虻もんもうの者が日蓮にちれん
程ししの師子王ししを聞きかず見みずしてうはのそらにそしる程ちやうどのをこじんな

り、天台法華宗の者ならば我は南無妙法蓮華經と唱えて念仏な
てんだいほうけしゅう
んど申す者をばあれはさる事なんと申すだにもきくわいなるべき
もう
に其の義なき上・偶申す人をそしる・でう・あらふしぎふし
そ
ぎ、大進房が事さきざきかきつかわして候やうにつよづよとかき
ほう
上申させ給い候へ、大進房には十羅刹のつかせ給いて引きかへし
もう
せさせ給うと・をばへ候ぞ、又魔王の使者なんどがつきて候いけ
たま
るが・はなれて候と・をばへ候ぞ、悪鬼入其身はよも・そら事に
あつき
ては候はじ、事事重く候へども、此の使いそぎ候へばよるかきて
しげ
候ぞ、きようきようきんげん 恐恐 謹言。

十月一日

にちれんかおう
日蓮花押

◆一四一 始間 仏乘義

ぶつじょう
建治四年二月 五十七歳御作

与富木常忍

ときじょうにん
982p

せいふ
青鳧七結下州より甲州に送らる其の御志悲母の第三年に相当る
あいあた

こうよう
御孝養なり、問う止観明静前代未聞の心如何、答う円頓止観なり、
えんどんしかん

えんどんしかん
問う円頓止観の意何ん、答う法華三昧の異名なり、問う法華三昧
ほつけさんまい

いかん
の心如何、答う夫れ末代の凡夫法華経を修行する意に二有り一
まつだい ほんぶ ほけきよう しゅぎよう

じゅるいしゅ
には就類種の开会二には相對種の开会なり、問う此の名は何より
かいえ そうたい かいえ

ほけきよう
出るや、答う法華経第三葉草喩品に云く「種相体性の四字なり
やくそうゆほん いわ

じゅるいしゅ
其の四字の中に第一の種の一字に二あり、一には就類種二には
だいいち

そうたい
相對種なり」其の就類種とは釈に云く「凡そ心有る者は是れ正因
およ こころあ しょういん

したがつ
の種なり随つて一句を聞くは是れ了因の種なり低頭挙手は是れ
いっく こ りよういん ていずこしゅ

えんいん
縁因の種なり」等云云、其の相對種とは煩惱と業と苦との三道
そうたい ほんのう

そうたい
其の当体を押えて法身と般若と解脱と称する是なり、其の中に
ほっしん はんによ げだつ しょう これ

じゅるいしゅ
就類種の一法は宗は法華経に有りと雖も少分又爾前の経経にも
ほけきよう いえど にぜん きようぎよう

通ず、妙楽云く「別經は唯就類の種有つて而も相對無し」と云

云、此の釈の別教と云うは本の別教には非ず爾前の円・或は

他師の円なり、又法華經の迹門の中・供養舍利已下二十余行の

法門も大体就類種の開会なり、問う其の相對種の心如何、答う

止觀に云く「云何なるか聞円法なる生死即法身・煩惱即般若・結

業即解脱なりと聞くなり三の名有りと雖も而も三の体無し是れ一

体なりと雖も而も三の名を立つ是の三即ち一相にして其れ実に異

有ること無し、法身究竟すれば般若も解脱も亦究竟な般若清淨

なれば余亦清淨なり解脱自在なれば余亦自在なり一切の法を聞

くこと亦是の如し皆仏法を具して減少する所無し是を聞円と

名く」等云云、此の釈は即ち相對種の手法なり其の意如何、答う

生死とは我等が苦果の依身なり所謂五陰・十二入・十八界なり

煩悩ぼんのうとは見思けんじ・塵沙ちんしゃ・無明むみょうの三惑さんかくなり結業けつごふとは五逆ごぎやく・十惡じゅうあく・
四重等しじゅうとうなり、法身ほっしんとは法身ほっしん如來にょらい・般若はんにやとは報身ほうしん如來にょらい・解脫げだつとは
応身おうじん如來にょらいなり我等われら衆生しゅじょう無始曠劫むしこうくわくより已來このかた此の三道さんだうを具足ぐそくし今
法華經ほけきやうに値あつて三道さんだう即三德そくさんとくとなるなり。

難なんじて云いわく火より水出いでず石より草生いぜず惡因い・惡果いを感じ善

因いん善報ぜんぽうを生おこずるは仏教ぶつぎやうの定さだめる習しなり而しかるに我等われら其の根本こんぽんを

尋たずね究きうむれば父母ふぼの精血しやく・赤白しやくぱく二に☆和合わがくわして一身いしんと為なる惡の

根本こんぽん不淨ふじやうの源みなもとなり、設たい大海たいかいを傾かたけて之これを洗せんうとも清淨しやうじやうなる

可べからず又また此これ苦果くかの依身いしんは其その根本こんぽんを探たづねれば貧ひん・瞋しん・癡ちの

三毒さんどくより出いでずるなり、此この煩悩ぼんのう苦果くかの二道にだうに依よつて業ごふを構かう此この

業道ごふだう即すなわち是これ結縛けつぱくの法はふなり、譬たとえば籠かこに入れる鳥とりの如ごとし如何なんぞ此

の三道さんだうを以もつて三仏さんぶつ因いんと稱しょうするや、譬たとえば糞ふんを集あつめて栴檀せんだんを造つくれど

も終に香しからざるが如し、答う汝が難大いに道理なり我此の

事を弁えず但し付法蔵の第十三天台大師の高祖・竜樹菩薩・

妙法の妙の一字を釈して譬えば大薬師の能く毒を以て薬と為す

が如し等云云、毒と云うは何物ぞ我等が煩惱・業・苦の三道なり

薬とは何物ぞ法身・般若・解脱なり、能く毒を以て薬と為すとは

何物ぞ三道を変じて三徳と為すのみ、天台云く妙は不可思議と名

づく等云云、又云く一心乃至不可思議境界意此に在り等云云、

即身成仏と申すは此れ是なり、近代の華嚴・真言等・此の義を

盗み取りて我が物と為す大偷盗天下の盗人はなり。

問うて云く凡夫の位も此の秘法の心を知るべきや、答う私の答

は詮無し竜樹菩薩の大論に云く九十三なり「今漏尽の阿羅漢還つ

て作仏すと云うは唯仏のみ能く知ろしめす、論議とは正しく其の

- 2417 -

事を論ず可し測り知ること能わす是の故に戲論すべからず若し仏
を求め得る時乃ち能く了知す余人は信ずべく而も未だ知るべから
ず」等云云、此の釈は爾前の別教の十一品の断・無明円教の四
十一品の断・無明の大菩薩普賢・文殊等も未だ法華經の意を知ら
ず何に況や蔵通二教の三乗をや何に況や末代の凡夫をやと云う
論文なり、之を以て案ずるに法華經の唯仏与仏・乃能究尽とは
爾前の灰身滅智の二乗の煩惱・業・苦の三道を押えて法身・般若
・解脱と説くに二乗還つて作仏す菩薩・凡夫も亦是くの如しと
釈するなり、故に天台の云く二乗根敗す之を名けて毒と為す
今經に記を得る即ち是れ毒を變じて藥と為す、論に云く余經は
秘密に非ず法華は是れ秘密なり等云云、妙樂云く論に云くとは
大論なりと云云、問う是くの如し之を聞いて何の益有るや、答え

て云く始めて法華經を聞くなり、妙樂云く若し三道即是れ三徳
と信ぜば尚能く二死の河を渡る況や三界をやと云云、末代の凡夫
此の法門を聞かば唯我一人のみ成仏するに非ず父母も又
即身成仏せん此れ第一の孝養なり病身為るの故に委細ならず又
又申す可し。

建治四年太歳 戊寅 二月二十八日

日蓮花押

富木殿

◆一四二 可延定業書

弘安二年五十八歳御作与富木常忍妻

985 p

夫れ病に二あり一には軽病二には重病・重病すら善医に

値う急に対治すれば命猶存す何に況や軽病をや、業にこあり一に

は定業二には不定業、定業すら能く能く懺悔すれば必ず消滅す

何にかに況や不定業をや、法華經第七に云く「此の經は則為閻浮提の

人の病の良藥なり」等云云、此の經文は法華經の文なり、一代

の聖教は皆如来の金言・無量劫より已来不妄語の言なり、

就中此の法華經は仏の正直捨方便と申して眞実が中の眞実な

り、多宝・証明を加え諸仏・舌相を添え給ういかでか・むなし

かるべき、其の上最第一の秘事はんべり此の經文は後・五百歳

・二千五百余年の時女人の病あらんと・とかれて侯文なり、

阿闍世王は御年五十の二月十五日に大惡瘡・身に出来せり、大

医耆婆が力も及ばず三月七日必ず死して無間・大城に墮つべか

りき、五十余年が間の大樂一時に滅して一生の大苦・三七日にあ

つまれり、定業限りありしかども仏・法華經をかさねて演説して

涅槃經となづけて大王にあたい給いしかば身の病・忽に平愈し心

の重罪じゅうざいも一時いちじに露つゆと消えにき、仏滅後・一千五百余年・陳臣ちんしんと

申もうす人ありき命知命にありと申もうして五十年に定まりて候そうらいしが

天台大師てんだいだいしに伴いて十五年の命を宣のべて六十五までをはしき、其その

上不ふぎよう輕菩薩ぼさつは更増きようぞう壽命じゅみようととかれて法華經ほけきようを行じて定業をのべ

給たまいき、彼等かれらは皆男子みななり女人にょにんにはあらざれども法華經ほけきようを行じて

寿をのぶ、又陳臣ちんしんは後・五百歳にもあたらず冬の稻米とうまい・夏の菊花

のごとし、当時とうじの女人にょにんの法華經ほけきようを行じて定業を転ずることは秋の

稻米冬とうまいの菊花誰か・をどろくべき。

されば日蓮悲母にちれんひもをいのりて侯しかば現身げんしんに病をいやすのみなら

ず四箇年じゅみようの壽命じゅみようをのべたり、今女人にょにんの御身おんみとして病を身にうけ

させ給たまう・心みに法華經ほけきようの信心しんじんを立てて御らむあるべし、しかも

善医ぜんいあり中務三郎左衛門尉殿は法華經ほけきようの行者ぎようじやなり、命もうと申もうす物

は一身だいいち第一の珍宝ちんぼうなり一日なりとも・これを延るならば千万両せんまんの

金にもすぎたり、法華經ほけきょうの一代いちだいの聖教しょうきょうに超過ちようかしていみじきと

申もうすは寿量品じゅうりょうぽんのゆへそかし、闍浮第一だいいちの太子たいしなれども短命たんめいなれ

ば草よりもかろし、日輪にちりんのごとくなる智者ちしやなれども天死わかににあれば

生犬いきぬに劣る、早く心ざしの財をかさねていそぎいそぎ御対治たいじあ

るべし、此れこよりも申もうすべけれども人は申もうすによて吉事もあり又

我が志こころざしのうすきかと・をもう者もあり人の心しりがたき上先

先に少々かかる事候、此の人は人の申せばすこそ心へずげに思う

人なり、なかなか申もうすはあしかりぬべし、但なかうどもなく・ひ

らなさけに又心もなくうちたのませ給たまえ、去年こぞの十月これに來り

て候いしが御所勞の事をよくよくなげき申せしなり、当事だいじ大事の

なければ・をどろかせ給たまわぬにや、明年正月二月のころをひは必

ずをこるべしと申せしかば・これにも・なげきは入つて候。

ときどの

富木殿も此の尼ごぜんをこそ杖柱とも恃たるになんど申して候

ずいぶん

いしなり随分にわび候いしぞ・きわめて・まけじたましの人にて

そうら

我がかたの事をば大事と申す人なり、かへすがへす身の財をだに

だいじ

・をしませ給わば此の病治がたかるべし、一日の命は三千界の財

たま

にもすぎて候なり先ず御志をみみへさせ給うべし、法華經の

いこうぎし

第七の巻に三千大千世界の財を供養するよりも手の一指を焼きて

さんぜん

仏・法華經に供養せよと・とかれて候はこれなり、命は三千にも

ほけきよう

すぎて候・而も齡もいまだ・たけさせ給はず、而して法華經に

しか

あわせ給いぬ一日もいきてをはせば功德つもるべし、あらをしの

たま

命や・をしの命や、御姓名並びに御年を我とかかせ給いて・わざ

なら

と・つかわせ大日月天に申しあぐべし、いよどのもあながちにな

げき^{そうら}候へば日月^{にちがつ}天に自我^{じがけ}偈^ごをあて候^{そうら}はんずるなり、
にちれん^{にちれん}かおう^{かおう}日蓮^{にちれん}花押^{かおう} 尼^ごこぜん^{ぜん}御返^{ごへん}事^じ 恐^き恐^{よく}恐^き。
○

◆一四三 富城殿御返事ごへんじ

987p

あまごぜん じゅみょうちようおん
尼御前御寿命 長遠の由・天に申し候ぞ其の故御物語り候

へ。

ふだんほけきよう
不断法華経来年三月の料の分錢三貫文米二斗送り給ひ畢おわん

ぬ。

十一月二十五日

にちれん
日蓮 在御判

富城殿御返事ごへんじ

◆一四四 四菩薩造立抄 ほさつ 弘安二年五月 こうあん 五十八歳御作 987

白小袖一薄墨染衣一・同色の袈裟一帖・鷲目一貫文給ひ候、今
に始めざる御志言を以て宣のべべがたし何いづれれの日を期してか対たいめん面を

と
遂げ 心中しんちゅうの朦朧もうろうを申し披ひらや。

一御状いわに云く本門ほんもん久成きゅうじやうの教主きやうしゅ釈尊しゃくそんを造り奉り脇士たてまつきやうじには久成くじやう

地涌じゆの四菩薩ほさつを造立たてまつし奉るべしと兼かねて聴聞ちやうもん仕り候いき、然しかれば

ちやうもん

聴聞ちやうもんの如ごとくんば何いずれの時かと云云、夫それ仏世ぶつぜを去らせ給たまいて二千

余年よふに成りぬ、其その間・月氏がつし・漢土かんど・日本国にほんこく一閻浮提えんぶだいの内に仏法ぶつぽう

の流布るふする事・僧そうは稲麻とうまのごとく法ほふは竹葦ちくいの如ごとし、然しかるにいま

本門ほんもんの教主きやうしゅ釈尊しゃくそん・並ほんげに本化ほんげの菩薩ほさつを造り奉りたる寺たてまつは一処いっしょも無

し三朝さんしやうの間に未だ聞いまかず、日本国にほんこくに数万よろずの寺じやうぐうを建立こんりゆうせし人

も本門ほんもんの教主きやうしゅ脇士きやうしゅを造るべき事を知らず上宮じやうぐう太子たいし仏法ぶつぽう最初さいしよの寺

と号してんして四天王寺してんのうを造立あみだぶつせしかども阿弥陀仏あみだぶつを本尊ほんそんとして脇士きやうじ

は観音等かんのん・四天王してんのうを造り副そえたり、伝でんぎやう教大師だいいし・延暦寺えんりやくじを立て

給たまうに中堂ちやうどうには東方とうほうの鷲王がおうの相貌そうみやうを造りて本尊ほんそんとして久成くじやう

給たまうに中堂ちやうどうには東方とうほうの鷲王がおうの相貌そうみやうを造りて本尊ほんそんとして久成くじやう

きようしゅ 教主・脇士をば 建立し給はず、南京七大寺の中にも此の事を

いまだ聞かず田舎の寺寺以て爾なり、かたがた不審なりし間・

ほけきよう 法華經の文を拝見し奉りしかば其の旨顯然なり、末法・鬭諍

けんご 堅固の時にいたらずんば造るべからざる旨分明なり、正像に

しゅつせ 出世せし論師・人師の造らざりしは仏の禁を重んずる故なり、

しやうほう 若し正法・像法の中に久成の教主釈尊並びに脇士を造るなら

にちりんい ば夜中に日輪出で日中に月輪の出でたるが如くなるべし、末法に

じやうぎやうぼさつ 入つて始めの五百年に上行菩薩の出でさせ給いて造り給うべき

しやうほう 故に正法・像法の四依の論師・人師は言にも出させ給はず、

てんじん 竜樹・天親こそ知らせ給いたりしかども口より外へ出させ給は

てんだいちしやだいし ず、天台智者大師も知らせ給いたりしかども迹化の菩薩の一分な

おおいだ れば一端は仰せ出させ給いたりしかども其の実義をば宣べ出させ

給はず、但ねぎめの枕に時鳥の一言を聞きしが如くにして夢の
さめて止ぬるやうに弘め給い候ぬ、夫れより已外の人師はまして
一言をも仰せ出し給う事なし、此等の論師・人師は靈山にして
迹化の衆は末法に入らざらん正像二千年の論師・人師は本門
久成の教主釈尊並に久成の脇土地涌上行等の四菩薩を影ほど
も申出すべからずと御禁ありし故ぞかし。

今末法に入れば尤も仏の金言の如くんば造るべき時なれば本仏
本脇土造り奉るべき時なり、當時は其の時に相当れば地涌の菩薩
やがて出でさせ給はんずらん、先ず其れ程に四菩薩を建立し
奉るべし尤も今は然るべき時なりと云云、されば天台大師は
後の五百歳遠く妙道に沾わんとしたひ、伝教大師は正像
稍過ぎ已て末法太だ近きに有り法華一乗の機今正に是れ其の時

なりと恋いさせ給う、日蓮は世間には日本第一の貧しき者なれど
も仏法を以て論ずれば一閻浮提第一の富る者なり、是れ時の然らしむる故なりと思へば喜び身にあまり感涙押へ難く教主釈尊の御恩報じ奉り難し、恐らくは付法蔵の人人も日蓮には果報は劣らせ給いたり天台智者大師・伝教大師等も及び給うべからず最も四菩薩を建立すべき時なり云云、問うて云く四菩薩を造立すべき証文之れ有りや、答えて云く涌出品に云く「四の導師有り一をば上行と名け二をば無辺行と名け三をば淨行と名け四をば安立行と名く」等云云、問うて云く後・五百歳に限るといへる経文之れ有りや、答えて云く藥王品に云く「我が滅度の後・後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布して断絶せしむること無けん」等云云。

一御狀に云く大田方の人人・一向に迹門に得道あるべからず
と申され候由・其の聞え候とは以ての外の謬なり、御得意候
へ本・迹二門の浅深・勝劣・与奪・傍正は時と機とに依るべし、
一代聖教を弘むべき時に三あり機もつて爾なり、仏滅後・
正法の始の五百年は一向・小乗後の五百年は権大乘像法一千
年は法華經の迹門等なり、末法の始には一向に本門なり一向に
本門の時なればとて迹門を捨つべきにあらず、法華經一部に
於て前の十四品を捨つべき經文之れ無し本・迹の所判は一代
聖教を三重に配当する時・爾前・迹門は正法・像法・或は
末法は本門の弘まらせ給うべき時なり、今の時は正には本門傍に
は迹門なり、迹門無得道と云つて迹門を捨てて一向本門に心
を入れさせ給う人人はいまだ日蓮が本意の法門を習はせ給はざる

にこそ以ての外ほかの僻見びやくけんなり、私ならざる法門ほうもんを僻案びやくあんせん人は
偏ひとえに天魔波旬てんまはじゆんの其その身に入り替りて人をして自身じしんともに無間むげん・
大城だいじやうに墮おつべきにて候つたなしつたなし、此この法門ほうもんは年来貴辺きへん
に申し含めたる様に人人ひとびとにも披露ひろうあるべき者なり総じて日蓮にちれんが
弟子と云つて法華經ほけきやうを修行しゆぎやうせん人人ひとびとは日蓮にちれんが如ごとくにし候へ、さ
だにも候はば釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゆつぱうの分身ふんじん・十羅刹じゅうらせつも御守り候べし、
其れさへ尚人人なおひとびとの御心中しんちゆうは量りがたし。

一日行房死去ぼうしきよの事不便ふびんに候、是にて法華經ほけきやうの文讀み進まいらせて
南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやうと唱まいへ進まいらせ願ねがふは日行しやかを釈迦しゃか・多宝たほう・十方じゆつぱうの
諸仏しよぶつ靈山りやうぜんへ迎へ取らせ給たまへと申し上げ候いぬ、身の所労しやうらういまだ
きらきらしからず候間省略しりやうせしめ候、又又またまた申もうす可べく候、
恐きやう恐きやう

謹言きんげん。

弘安二年五月十七日

にちれんかおう
日蓮花押

◆一四五 富木殿女房尼御前御書

ときどの にようぼうあまごせんごしよ

弘安二年十一月 五十八歳御作

990p

いよ房ぼうは学生になりて候ぞつねに法門ほうもんきかせ給たまへ。

はるかに見まいらせ候はねばをぼつがなく候、たうじとてもた
のしき事は候はねどもむかしはことにわびしく候いし時よりやし
なはれまいらせて候へばことにをんをもくをもいまいらせ候、そ
れについては・いのちはつるかめのごとくさいはいは月のまさり
しをのみつがごとくところそ法華經ほけきょうにはいのりまいらせ候へ、さて
はえち後房ぼうしもつけ房ぼうと申もうす僧をいよどのにつけて候ぞ、しばら
くふびんにあたらせ給たまへとき殿には申もうさせ給たまへ。

十一月二十五日

にちれんかおう
日蓮花押 富城殿女房尼御前
にようぼうあまごせん

◆一四六

諸經しよきやうと法華經ほけきやうと難易なんいの事

弘安三年五月こうあん

五十九歳御作

991p

問いうて云いく法華經ほけきやうの第四法師品ほうしほんに云いく難信難解なんしんなんげと云云いいかなる
事ぞや、答いえて云いく此この經きやうは仏說ほとき給たまいて後あと二千余年にまかりな
り候が、月氏がつしに一千二百余年かんど漢土かんどに二百余年へを経て後に日本国にほんこくに渡わた
りて・すでに七百余年ふつめつなり、仏滅後りゆうじゆに此この法華經ほけきやうの此この句くを讀よみ
たる人た但三人いなり、所謂い月氏がには竜樹菩薩りゆうじゆぼさつの大論だいろんに云いく「譬たとえ
ば大藥師やくしの能よく毒どくを以もつて藥なと為なすが如ごとし」等云云こ、此これは竜樹りゆうじゆ
菩薩ぼさつの難信難解なんしんなんげの四字しを讀よみ給たまいしなり、漢土かんどには天台智者大師てんだいちしやだいし
と申まをせし人ひと讀よんで云いく「已今當說いこんとう最もつとも為なれ難信難解なんしんなんげ」と云云、
日本国にほんこくには伝でん教大師きやうだいし讀よんで云いく「已說いせつの四時しよじの經きやう今說こんせつの

むりようききょうとうせつ ねはんぎよう いしんいげ ずいたい ゆえ ほうききよう
無量義經当説の涅槃經は易信易解なり随他意の故に此の法華經は
もつともこれ なんしんなんげ ずいじい ゆえ
最も為れ難信難解なり随自意の故に」等云云、問うて云く其の意
いかに 如何、答て云く易信易解は随他意の故に難信難解は随自意の故な
り云云、弘法大師並びに日本国東寺の門人をもわく法華經は
けんきよう 顯教の内の難信難解にて密教に相對すれば易信易解なり云云、
じかく 慈覺・智証並びに門家思うよう法華經と大日經は俱に難信難解
なり但し大日經と法華經と相對せば法華經は難信難解・大日經
は最も為れ難信難解なり云云、此の二義は日本一同なり、日蓮讀
んで云く外道の經は易信易解・小乗經は難信難解・小乗經は
易信易解大日經等は難信難解大日經等は易信易解般若經は
難信難解なり・般若と・華嚴と・華嚴と涅槃と・涅槃と法華と・
迹門と本門と・重重的の難易あり。

問うて云く此の義を知つて何の詮か有る答えて云く生死の長夜
を照す大燈・元品の無明を切る利剣は此の法門に過ぎざるか
随他意とは真言宗・華嚴宗等は随他意の易信易解なり仏九界の
衆生の意樂に随つて説く所の經經を随他意という譬えば賢父
が愚子に随うが如し、仏・仏界に随つて説く所の經を隨自意と
いう、譬へば聖父が愚子を随えたるが如きなり、日蓮此の義に
付て大日經・華嚴經・涅槃經等を勘え見候に皆隨他意の經經
なり、問うて云く其の隨他意の証拠如何、答えて云く勝鬘經に
云く「非法を聞くこと無き衆生には人天の善根を以て之を
成熟す声聞を求むる者には声聞乗を授け緣覺を求むる者に
は、緣覺乗を授け大乘を求むる者には授くるに大乘を以てす」
と云云、易信易解の心是なり、華嚴・大日・般若・涅槃等又

かくのごとく是くの如し「爾の時に世尊・藥王菩薩に因せて八万の大士に告げたまわく藥王汝是の大衆の中の無量の諸天・竜王・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩羅伽・人と非人と及び比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の声聞を求むる者・辟支仏を求むる者・仏道を求むる者を見るや、是くのごとくとうるいことごとくぶつぜん妙法華經の一偈・一句を聞いて一念も随喜する者には我皆記を与え授く当に阿○菩提を得べし」文、諸經の如くんば人は五戒・天は十善・梵は慈悲喜捨・魔王には一無遮・比丘の二百五十・比丘尼の五百戒・声聞の四諦・縁覺の十二因縁・菩薩の六度・譬へば水の器の方円に随い象の敵に随つて力を出すのごとし、法華經は爾らず八部・四衆皆一同に法華經を演説す、譬へば定木の曲りを削り師子王の剛弱を嫌わずして大力を出すのごとし。

此の明鏡を以て一切経を見聞するに大日の三部・浄土の三部
等隠れ無し、而るを・いかにやしけん弘法・慈覚・智証の御義を
本としける程に此の義すでに隠没して日本国四百余年なり、珠を
もつて石にかへ梅檀を凡木にうれり、仏法やうやく顛倒しければ
世間も又濁乱せり、仏法は体のごとし世間はかげのごとし体曲
れば影ななめなり、幸なるは我が一門仏意に随つて自然に薩般若
海に流入す、世間の学者の若きは随他意を信じて苦海に沈まんこ
となり、委細に旨又又申す可く候、恐恐。

五月廿六日

日蓮

花押

◆一四七 富城入道殿御返事

弘安四年十月 六十歳御作

993p

与富木胤継 於身延

今月十四日の御札同じき十七日到来、又去ぬる後の七月十五日
の御消息同じて二十比到来せり、其の外度度の貴札を賜うと
雖も老病為るの上又不食氣に候間未だ返報を奉らず候条其の恐れ
少からず候、何よりも去ぬる後の七月御状の内に云く鎮西には
大風吹き候て浦浦・島島に破損の船充滿の間乃至京都には思円
上人・又云く理豈然らんや等云云、此の事別して此の一門の
大事なり総じて日本国の凶事なり仍つて病を忍んで一端是れを
申し候はん

、是偏に日蓮を失わんと為て無かろう事を造り出さん事兼て知る、

其の故は日本国の真言宗等の七宗・八宗の人人の大科今に始め
ざる事なり然りと雖も且く一を挙げて万を知らしめ奉らん、
去ぬる承久年中に隠岐の法皇義時を失わしめんが為に調伏を
山の座主・東寺・御室・七寺・園城に仰せ付けられ、仍つて同
じき三年の五月十五日

鎌倉殿の御代官・伊賀太郎判官光末を六波羅に於て失わしめ畢ん
ぬ、然る間同じき十九日二十日鎌倉中に騒ぎて同じき二十一日・
山道・海道・北陸道の三道より十九万騎の兵者を指し登す、同じ
き六月十三日其の夜の戌亥の時より青天俄に陰りて震動雷電して
武士共首の上に鳴り懸り鳴り懸りし上・車軸の如き雨は篠を立つ
るが如し、爰に

十九万騎の兵者等・遠き道は登りたり兵乱に米は尽きぬ馬は疲

れたり在家の人は皆隠れ失せぬ胃は雨に打たれて縣の如し、
武士共・宇治勢多に打ち寄せて見ければ常には三丁四丁の河なれ
ども既に六丁・七丁・十丁に及ぶ、然る間・一丈・二丈の大石は
枯葉の如く浮び五丈・六丈の大木流れ塞がること間無し、昔利綱
・高綱等が渡せし時には
似る可くも無し武士之を見て皆臆してこそ見えたりしが、然りと
雖も今日を過さば皆・心を翻し堕ちぬ可し去る故に馬筏を作り
て之を渡す処・或は百騎・或は千万騎・此くの如く皆我も我
もと度ると雖も・或は一丁・或は二丁三丁

わた 渡る様なりと雖も彼の岸に付く者は一人も無し、然る間・緋綴・

あかおとし

赤綴等の甲其の外弓・箭・兵・杖・白星の冑等の河中に流れ浮

ぶ事は猶長月神無月の紅葉の吉野・立田の河に浮ぶが如くなり、

こゝに愛に叡山・東寺・七寺・園城寺等の高僧等之を聞くことを得て

真言の秘法・大法の験とこそ悦び給いける、内裏の紫宸殿には

しんこん

山の座主・東寺・御室・五壇・十五壇の法を弥盛んに行われけ

れば法皇の御叡感極り無く玉の巖を地に付け大法師等の御足を

御手にて摩給いしかば大臣・公卿等は庭の上へ走り落ち五体を地

みて

に付け高僧等を敬い奉る。

又宇治勢田にむかへたる公卿・殿上人は冑を震い挙げて大

音声おんじょうを放つて云く義時・所従の毛人等慥に承われ昔より今に

至るまで王法に敵を作し奉る者は何者か安穩なるや、いた 狗犬くけんが師子しし

を吼^ほえて其^その腹破^われざること無く修羅^{しゅら}が日月^{にちがつ}を射^うるに其^その箭還^{かえ}つ
て其^その眼^{まなこ}に中^{あた}らざること無し遠^たき例^{れい}は且^{しば}く之^{これ}を置^おく、近^きくは我
が朝^{あさ}に代始^{もつ}まつて人王^{にんおう}八十余代の間・大山^{おほやま}の皇子^{みこ}・大石^{おおいし}の小丸^{こまる}を
始^{もつ}と為^なて二十余人王法^{にんおうほふ}に敵^かを為^なし奉^{たてま}れども一人として素懷^{そかい}を遂^とげ
たる者^{もの}なし皆頸^{みな}を獄門^{ごくもん}に懸^かけられ骸^{かばね}を山野^{さんや}に曝^{さら}す関東^{かんとう}の武士^{ぶし}等
・或^{ある}は源平^{げんへい}・或^{ある}は高家等先祖相伝^{こうけどうぜんそうでん}の君^{きみ}を捨^すて奉^{たてま}り伊豆^{いず}の国^{くに}の
民^{たみ}為^なる義時^{よしとき}が下知^{げち}に随^{したが}う故^{ゆえ}にかかる災難^{さいなん}は出来^{しゅつ}するなり、王法^{おうほふ}
に背^{そむ}き奉^{たてま}り民^{たみ}の下知^{げち}に随^{したが}う者^{もの}は師子王^{ししおう}が野狐^{やこ}に乗^のせられて
東西南北^{とうざいなんぼく}に馳走^{ちそう}するが如^{ごと}し今生^{こんじょう}の恥^{はじ}之^こを何如^{いか}、急^{いそ}ぎ急^{いそ}ぎ胃^いを
脱^{ゆづ}ぎ弓弦^{きうげん}をはづして参参^{さんさん}と招^{まね}きける程^{ほど}に、何^{いか}に有^ありけん申酉^{しんう}の時^{とき}
にも成^なりしかば関東^{かんとう}の武士^{ぶし}等^ら・河^かを馳^はせ渡^{わた}り勝^かちかかりて責^せめし
間京方^{かんきやうかた}の武者共^{むしゃども}一人も無く山林^{さんりん}に逃^にげ隠^{かく}るるの間、四^よつの王^{おう}をば

四つの島へ放ちまいらせ又高僧・御師・御房達は・或は住房を追
われ・或は恥辱に値い給いて今に六十年の間いまだ・そのはぢを
すすがずとこそ見え候に、今亦彼の僧侶の御弟子達御祈☆承はら
れて候げに候あひだいつもの事なれば秋風に纒の水に敵船・賊
船なんどの破損仕りて候を大將軍生取たりなんと申し祈り成就
の由を申し候げに候なり、又蒙古の大王の頸の参りて候かと問い
給うべし、其の外はいかに申し候とも御返事あるべからず御存知
のためにあらあら申し候なり。